THE CENTRAL REVIEW

中央公論

四百號記念號

(秋季大附錄號)

第三十六年第十號　第四百號


染めたと見えぬ
生れ付の黒髪と同色に染る
志らが赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
⊠タッタ二十分で染る。
⊠自然の髪の色艶に染る。
⊠襟枕に汚染の惧なく。
⊠洗ふて剝げず永く保ち。
⊠用法至極手輕便利也。
發賣元 大阪 東京
丹平商會
全國化粧品店及び薬店にあり

名著傑作大提供

◇至誠堂出版創業拾貳周

大正名

◉四六版總クロース製◉體裁極美製◉
◉冊數各冊四百頁以上五百頁內外◉

番號	著者	書名
1	和田垣博士	兎糞錄
2	大町桂月	人の運
3	杉村楚人冠	へちまのかは
4	村上浪六	罵倒錄
5	和田垣博士	吐雲錄
6	村上浪六	四十七士(上)
7	村上浪六	四十七士(下)
8	幸田露伴	洗心錄
9	竹越三叉	三叉文存
10	前田慧雲	活修養
11	加藤咄堂	人の心
12	大内青巒	破木杓
13	長谷川如是閑	搦手から
14	森鷗外	妄人妄語
15	前田慧雲	樂しい人生

著者特賣書目

著者	特賣書目	價	特價	郵税
友田宜剛	口語文 大正新書翰	三・五〇円	二・一〇円	一二
友田宜剛	中等教育 作文自習寶鑑	三・五〇	二・一〇	一二
友田宜剛	小學校に於ける綴方との解決	一・八〇	一・三〇	一二
友田宜剛	口語文 實用新辭典	三・五〇	二・〇〇	一二
瀬川博士	最新 育兒のをしへ	一・二〇	〇・七〇	〇八
瀬川博士	最新 小兒病手當法	一・二〇	〇・九〇	〇八
大正九年 大正十年	自由日記	各一・〇〇	〇・三〇	一〇
佐久間信恭	英語研究 二十講	一・〇〇	〇・八〇	〇八
中川克一	山陽外史	一・〇〇	〇・八〇	一〇
同	山陽外史(特)	一・二〇	一・〇〇	一〇

著者特賣書目

著者	特賣書目	定價	特價	税
竹中信以	ポケット 孝經講話	〇・六〇円	〇・五〇円	〇四
大内青巒	處世の道	三・五〇	二・〇〇	一八
德川達孝	國民道德訓	二・〇〇	一・五〇	一〇
カーネギー 山崎[illegible]譯	勤儉の教訓	一・二〇	〇・九〇	〇八
蘆川忠雄	珍談 交際と應對	一・六〇	一・三〇	〇八
蘆川忠雄	實典交際 なかれ	〇・六〇	〇・五〇	〇四
蘆川忠雄	斯くあれ	〇・六〇	〇・五〇	〇四
蘆川忠雄	奮鬪の本領	一・二〇	〇・[illegible]〇	〇八
蘆川忠雄	談話術の修養	一・八〇	一・五〇	一二
蘆川忠雄	時 出世の經辯	一・二〇	〇・九〇	〇八
蘆川忠雄	克己座右銘	〇・六〇	〇・五〇	〇四
蘆川忠雄	母子教養 父の書面	一・六〇	一・三〇	〇八
蘆川忠雄	修養座右錄	一・〇〇	〇・八〇	〇八
加藤咄堂	修養小品	三・五〇	二・〇〇	一〇
ヘッケル著 井部登一郎譯	戰線に立ちて	一・二〇	一・〇〇	〇八
度邊霞亭	萩江	一・五〇	一・二〇	〇八
度邊霞亭	黒水晶(前篇)	一・二〇	一・〇〇	〇八
度邊霞亭	春の海	一・五〇	一・二〇	〇八
菊池幽芳	毒草 お品の巻	二・五〇	二・〇〇	一〇
菊池幽芳	毒草 疑獄の巻	二・五〇	二・〇〇	一〇
菊池幽芳	毒草 お山の巻	二・五〇	二・〇〇	一〇
柳川春葉	二人靜(前・後)	二・五〇 小(後)二・〇〇	二・〇〇	一〇
柳川春葉	[illegible](前中後)	各二・二〇	各(後)一・八〇	一二
柳川春葉	女一代	〇・九〇	〇・七〇	〇六
佐藤紅綠	[illegible]の家(前後)	各二・二〇	各一・七〇	一〇
佐藤紅綠	孔雀草(前後)	各二・二〇	各一・八〇	一〇
大町桂月	桂月文選	二・〇〇	一・七〇	〇八
大町桂月	文藻三百題	一・〇〇	〇・八〇	〇八
大町桂月	少年文學 日本人の弓矢	〇・八〇	〇・六〇	〇六

名著傑作大提供

年記念短期特賣 九月十日より十月十日まで ◇

著文庫

◎定價各貳圓五拾錢◎ 特價各冊貳圓也（郵税各冊金拾錢也）

16 幸田露伴 悅樂
17 加藤咄堂 旅から旅
18 菊池幽芳 幽芳集
19 村上浪六 放言〱
20 和田垣博士 西遊スケッチ
21 柳川春葉 うき世（一）
22 夏目漱石 金剛草
23 柳川春葉 うきよ（二）
24 井上圓了 迷信と宗教
25 柳川春葉 うきよ（三）
26 杉村楚人冠 弱者の爲に
27 村井知至 聲
28 大町桂月 杖の跡
29 大庭柯公 世界を家として
30 大町桂月 小生の手紙
31 高島平三郎 婦人の爲に

浪六先生著

著者	特賣書目	定價	特價	一冊郵税
浪六先生	川正德（前・後）	前 二・〇〇 後 一・六〇	前 一・七〇 後 一・四〇	一〇 〇八
浪六先生	大正五人男	二・〇〇	一・七〇	一〇
浪六先生	天眼通（前中後）	各 二・〇〇	各 一・七〇	各 一〇
浪六先生	出放題	二・〇〇	一・七〇	一〇
浪六先生	無遠慮（前）	二・〇〇	一・七〇	一〇
浪六先生	裸體の人間	二・五〇	二・〇〇	一〇
浪六先生	我が五十年	二・八〇	二・〇	一二
浪六先生	裏と表（前中後）	前中 二・〇〇 後 一・六〇	各 一・七〇 一・四〇	各 一〇 〇八
浪六先生	浪雲	一・五〇	一・一〇	一〇
浪六先生	雪達摩	一・五〇	一・一〇	一〇
浪六先生	日露戰下	〇・八〇	〇・五五	〇六
三上小穀	外遊十二年	一・三〇	〇・八〇	〇八
福本日南	大勢史眼	一・三〇	〇・八〇	一二
松内冷洋	世界大戰史	一・〇〇	〇・八〇	〇八
熊田葦城	日本史蹟 大阪陣 夏冬二冊	各 二・三〇	各 一・八〇	各 一二
森田小六郎	ヤンキー	一・六〇	一・三〇	〇八
原穗村	蒲生氏郷	〇・八〇	〇・五〇	〇六

注意

＝全國各書店に於て同一特價にて販賣致居候。品切の書店＝へは至急取寄せ方御下命被下度願上候。＝賣切と同時に其儘絶版のものも有之候へば御注文は極め＝て迅速に願上候＝締切翌日より斷然定價に復し申候に付御注意被下度候＝

◙期間頗る短し品切刻々に續出す◙

◙時は今！躊躇せず速に購求せよ◙

東京本石町

至誠堂

振替東京一七四四番

ハヴロック・エリス原著　矢口達氏譯編

（定價貳圓七拾錢　送料拾七錢）

（最新刊）

性的心理大觀　上卷

有名なるハヴロック・エリスの原著で性慾學の權威であることは知らぬ人は無からう。性は人生に横はる一大事實で性の問題は人生の中心問題である。之をいかに理解すべきかを知らぬ中は眞に、人生を愛重するものとは云へない。本書は氏の三千頁の大著を上下二卷に縮譯したもので性問題に關する一切の問題を極めて嚴肅な科學的見地から說述して絕大な知識と教訓とを與へる――（讀賣新聞）――

上卷目次

◎第一編性的顚倒◎第二編性的衝動の解剖◎第三編戀愛と苦痛◎第四編婦人の性慾衝動◎第五編人類の性的淘汰

（下卷――九月上旬發行の豫定）

田中王堂氏著　**徹底個人主義**

評論壇の權威王堂先生の名著にして實に思想家の炬火たるべきもの思想高遠文辭高邁最近思想界の歸趨と大勢とを知らんとする人士は本書に來れ

定價壹圓七拾錢　送料十七錢

杉森孝次郎氏著　**新社會の原則**

本書は新思想界の權威たる著者が多年の研究と表現の總粋なり著者の偉大なる知識と哲學と思想とは諸種の問題を解決して永遠に本質的光明を放つ

定價參圓參拾錢　送料拾七錢

與謝野晶子夫人著　**人間禮拜**

與謝野夫人の思想多々益々淨化して已ます各人の内にある人間性の尊嚴と全能とに對する極度の讃美禮拜これ實に本書を一貫せる夫人最近の主張也

定價貳圓六拾錢　送料拾七錢

西宮藤朝氏著　**思想問題大觀**

最近思想界に渦巻きたる無政府主義等各種の主義學說を頗る明瞭に解説したるものにして本書を繙けばあらゆる思想問題の要領を知るを得

定價貳圓八拾錢　送料拾七錢

東京市麴町區飯田町壹の貳　株式會社　天佑社　（振替東京一〇一二八番　電話九段長一一七三番）



（創作）

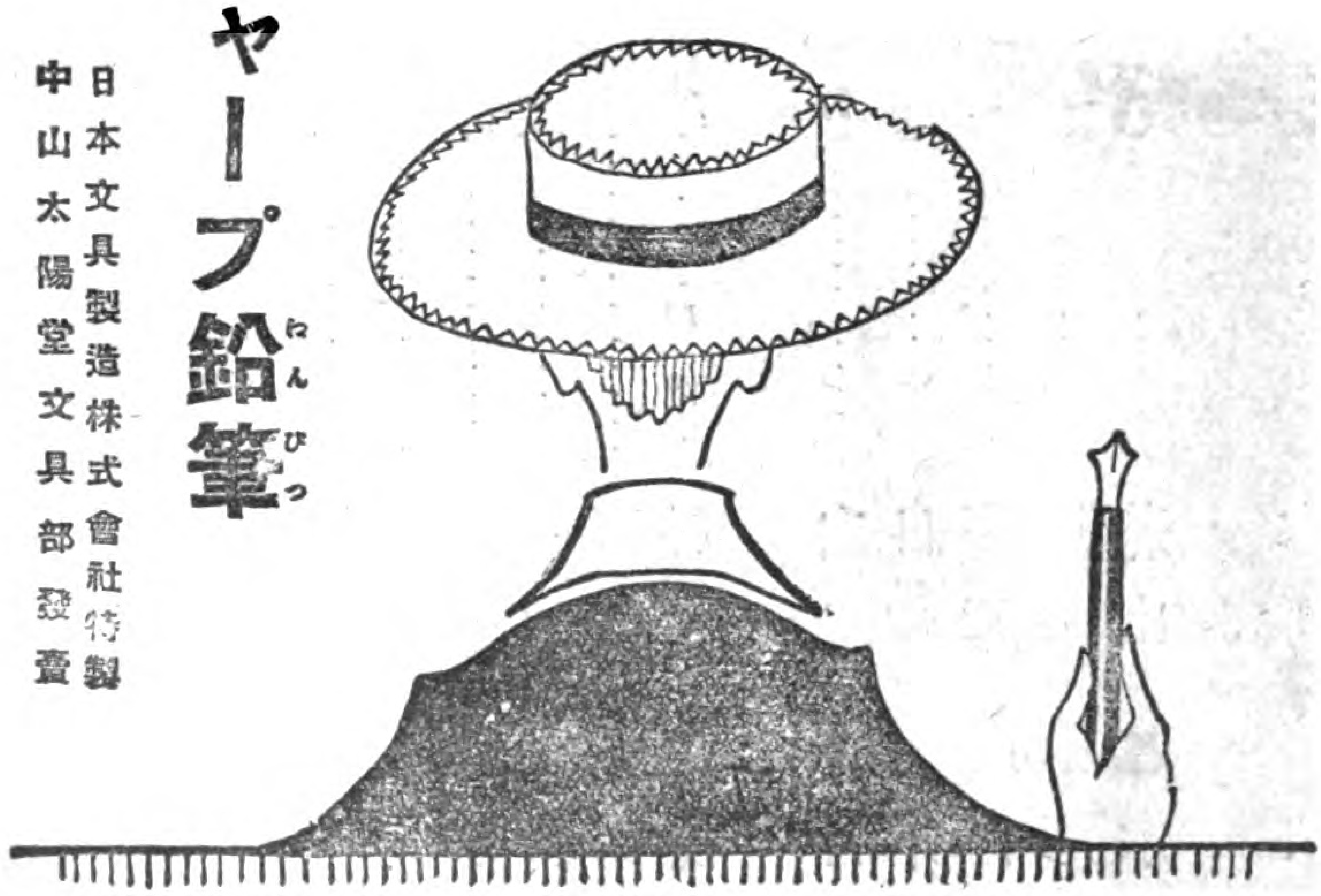
プ　　　筆

愈々

プラトンの天下になりました現代を支配する活動家は近來皆プラトン萬年筆の愛用者です

新發賣の万年鉛筆

プラトンシャープ鉛筆



日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣



サンエス

サンエス

サンエス

サンエス

サンエス萬年筆

サンエス

サンエス

サンエス

サンエス



東京　細沼株式會社　大阪

出張所・福岡・名古屋・金澤・札幌

大正十年

中央公論

九月一日發行

四百號記念號

第卅六年第十號

通卷第四百號

東宮殿下を迎ふ

我が親愛なる　皇太子殿下は、約半歳の御見學を了へ、海陸の御旅程に恙なく、こゝに無事御歸朝あらせ給ふ。慶賀此上もない次第である。

御出發の當時には、或は不逞鮮人の妄擧を想像し、或は猶太人の陰謀を危惧するものもあつたが、之等は何れも杞憂に屬し、今や我々は腹の底から何のわだかまりもなく歡迎し奉ることが出來る。殊に　殿下の聰明輕快なる御行動が、其の到る處毎に宮廷と民衆との敬愛を博し、歐洲の人々をして一層我が　皇室と我が國そのものとに對する親しみを深うせしめ給ひたるは、我等の感激して措く能はざる所である。

併し　殿下の這次の御旅行に依つて、　殿下御自身の、而して我が皇室の、從つてまた實に我が帝國の得たる又得べき最大の獲物は、之に由つて　殿下の敬すべく又愛すべき御人格が中外に宣明せらるゝの好機を得たこと、又御見聞を擴め給ふに連れて御人格の向上發展を大に促進するの端緒を作り給うたことでなければならぬ。海外に於ける　殿下の活き〳〵した一擧一動が、彼地に在ては無論の事だが、內地に在る我々をしてまた如何ばかり喜ばしめたか判らない。私かに拜察するに、　殿下も亦人らしき自由闊達の御生活に多大の興味と感激とを覺へ給うたことであらう。斯くして若し今後我が　皇室と我々臣民との間に、名ばかりでない眞の人格的關係が開拓せらるゝこととならば、どれ程國家の福であるか分らない。

君臣の情誼の敦き國ほど、兎角其情誼の由來を神秘的に說きたがる。併し君臣の情誼は畢竟其起源に於ても其發達に於ても人格的關係に依てのみ說明さる可きものではあるまいか。忠誠の念厚き者は、其尊崇するものを神秘的に觀て僅に其熱情を滿足するとはある。が、尊崇の對象を神秘の雲の中にとざして、以て之に盲目的服從を强ゆるは、既に其事自身に於て君臣の情誼を傷るものである。我が日本に於て君臣の情誼の格別に敦厚

なるは固より一朝一夕の事ではない。而して其由來に關する唯一の合理的說明は、歷代の天子の英明仁慈にましませる御人格に歸すべく、從つて將來と雖も、 皇室の聰明を拓き臣民に對する自然の人情を培ふことが、眞に萬世一系の國體を奉重する所以と謂はなければならぬ。

斯の如きは獨り吾人の一家言たるのみならず、すべての國民の輿望であることは、日々の新聞紙上の記事等に徵しても明である。氣の早い者は早く旣に宮內省の改革をさへ唱へて居る。否、改革を要求せらるゝまでもなく自ら大に改めんとしつゝあると說くものもある。遮莫、此際吾人の秘かに懸念に堪へざるは、一部固陋の階級より來ることあるべき無用の牽制である。人情の自然の發露を抑へることが、少くとも之を人目の前に蔽ふことが、 尊嚴を維持する所以だと考へてゐるものは、今も仍ほ尠くないとの事も聞く。從來の例に徵して萬更訛傳でもあるまい。が、斯かる思想の聊でも御歸朝後の 殿下の御身邊に浸ふことは同胞臣民の斷じて冀ふ所ではない。

懸念すべきことは單に之ればかりではない。 殿下の御身邊に從來築かれたりし障壁の撤せられたるに乘じ、輕佻浮薄なる徒輩が無思慮の盲動に依て 皇室に對する節度を失することなきやの點、また大に警戒するを必要とする。狃れると親しむとは、其形を同うして大に其實質を異にする。折角の改革の意思を中途にして挫折せしむるものは、實に贔負の引き倒しなることを常とする。 殿下に依りて新に我が 皇室に輸入せられんとする清新の空氣は、實に我々國民の永く望んで容易に得る能はざりし至寶である。我々は誠意誠心を以て之を愛撫し其開發を翼け奉らねばならぬ。斷じて之を乖ぶことを許さない。

要するに今次の御旅行は、 殿下の御生涯に於て確に一大轉機を爲し給ふものであらう。願くは 殿下の益益其の御聰明を拓き、其の好み給ふ途に從つて自由なる發達を遂げ給はんことを。

中央公論



第卅六年第十號
四百號記念號
第四百號

産業民主主義への次の一歩

早稲田大學講師　林癸未夫

一　自由と秩序の闘爭

一つの見方――それはマルクスの取つたやうな純經濟的な歴史觀よりはもつと廣い、又ダーウヰンが示したやうな純生物學的な自然觀よりはずつと限られた、哲學的考察の立場からのみ社會進化の理法を繹ねるならば、畢竟それは自由を欲する一團と秩序を欲する一團との闘爭から生れ出づる新しい社會道德の樹立に外ならないと私は思ふ。只此意味に於てのみ歴史は繰返すといふ諺を私は眞理とする。

自由と秩序。それはいつも弱者と强者、被治者と治者、貧者と富者、奴隷と主人、青年と老人とを識別する鮮明な旗

據ではないか。旣に得た者はそれを護らんがために秩序を必要とし、新に得んとする者はこれを捕へんがために自由を欲求する。現狀に滿足する者は秩序を利とし、將來に憧憬する者は自由を貴ぶ。貧しき者、虐げらるゝ者、惱める者は秩序を桎梏と考ふるが故に動もすれば秩序を破壞せんとし、富める者、支配せる者、驕れる者は自由を亂妄と看做すが故に屢々自由を束縛しやうとする。悲しむべき矛盾は貧しい者が富んだ時に貧しい者を惠まず、虐げられた者が支配者となつた後に逆ふ者を宥さゞることである。勝ちたる者は其勝を失はざらんがために急いで新しい規矩を設け、敗れたる者は其の地位に甘せざるが故に忽ち準繩を斷たうとする。奪はんとする者は與へられることを好まず、與へんとする者は奪はれることを欲しない。之が永久易らぬ人性である。秩序と自由の鬪爭は深く人性に根ざしたる此感情の表現に外ならない。之が人類不斷の實相である。歷史は卽ち其記錄である。文化は卽ち其產物である。而して現代世界各國の最大不安たる社會改造運動は卽ち其結果である。

更にこれを人性本來の要求に遡つて考へるならば、人は如何なる場合に於ても自我の擴充を求めて息まないものである。自我擴充の目的は時としては精神的であり、時としては物質的である。又其手段は時としては消極的であり、時としては積極的である。死さへも屢々自我擴充の手段として選ばれることがある。ロミオとジユリエツトの如きもそれであり、伯夷叔齊の如きもそれであり、楠正成の如きも亦それである。人對人の鬪爭は畢竟自我を擴充せんとする兩勢力の衝突に外ならない。グループ對グループの鬪爭も亦同樣である。所謂社會道德は勝者が敗者にデイクテートする所の平和條約が、限られたる時間內に於て習慣づけられたものと見るべきである。卽ち私はマルクス式の經濟的歷史觀を超越した一種の階級爭鬪說を取るものである。

斯ういふ私の見方からすれば、現代の社會問題は結局現社會の組織、制度、習慣の存續を以て自我擴充に便利とする一團と、これを改造又は破壞するを以て自我擴充に便利とする一團との衝突である。これは生か死かの鬪爭である。これを勢の趣くまゝに放任する結果は、一方の悲痛なる勝利か、或は双方の慘憺たる潰滅の外には何物も有り得ないであらう。

二　產業民主主義

現代の識者が――政治、學術、資本、勞働、其他有らゆる方面の識者が――要ひて息まざるものは、如何にせば上記の如き階級鬪爭の結果たる渾沌と潰滅とから、世界人類を救濟することが出來るかといふことである。所謂社會改造に關する諸學說と諸計畫は玆に胚胎してゐる。

現代の社會改造運動は必ずしも勞働者のためにする勞働者の運動とのみ見てはならない。社會全體のためにする各方面の識者の努力である。

彼等が用ゆる所の手段は凡そ二つある。一は宣傳であつて、他は實行である。而して戰後に於ける歐米の社會運動を仔細に觀察した者は、其宣傳的方面の中心的題目が「產業の社會化」であつて、實行的方面の中心的政策が「勞資の協調」であることを知つたであらう。私が玆に謂ふ所の產業の社會化とは、一切の產業の經營を個人營利の目的から切離して、國家或は經濟的自治團體の手に委ねやうとするものであつて、之は疑ひもなく社會主義の思想に基いてゐる。又私の所謂勞資協調とは產業經營上或程度及範圍に於ける發言權を勞働者に賦與して、從來の傭主專制政治に替へやうとするものであつて、之は產業的立憲制度とも名くべきものである。自由に憧憬する思想は產業私有といふ多年の因襲から擺脫して、資本主義からの完全な解放を求めやうとし、秩序を尊重する思想は產業私有の形態を維持しつゝ、勞資協調の上に階級間の反噬を濟はうとする。共に產業經營方法の革新である。勿論社會問題は必ずしも全部產業問題ではない。併しながら少くとも現時の社會問題は大部分產業問題を樞軸として旋轉してゐる。從つて社會改造を念とする者の主力は產業問題に集注されてゐる。言ひ換へれば資本と勞働との關係を如何に處理すべきかといふ一事に其焦點を置いてゐる。即ち產業の社會化と勞資の協調とが社會改造運動の中心たる所以である。若し此二つを一つの言葉に纒めるならばそれは「產業民主主義」でなくてはならない。

產業民主主義といふ語は餘り强い意味にばかり考へられてはならない。それは必ずしも革命的でないばかりでなく、

極めて微温的な改革に對してすら與へられる名である。米國に於ては一工場の温情主義的施設に對してすら屢々此名が與へられることすらある。併しながらそれが如何なる意味、形式、程度であつたとしても、傭主の從來のオートクラシーに對する被傭者の割込は矢張被傭者としての地位の向上でなくて何であらう。それは丁度如何に選擧權が制限されてゐても、立憲制度が國民參政權の獲得に相違ないと同樣である。獨逸では男女の選擧權は全然同等である。英吉利は三十歳以上の女子のみに選擧權を與へる。佛蘭西は未だ全然女子に選擧權を與へてゐない。併し乍ら是等の三國はそれ〲に政治的民主主義の國民と呼ぶに何等譲る所はない。米國の勞働者に許される產業上の發言權は英獨の勞働者に比べて遙に低級である。況んや過激派治下の勞働者との比較に於てをやである。併しながら彼等は倶に或程度の產業民主主義をエンジョーイしつゝあると言ふにすこしも妨げないのである。吾が日本の勞働者の或者も亦然うだと言へる。

產業民主主義を既存の道德的標準に照らして其價値を論ずるは閑人の事業である。吾等は只それは社會進步の一過程として、必然的に現代に横溢し來つた勢であることを知れば足りる。吾が日本の如きも此勢の圈外に立つことは最早絕對に不可能であることを、何人も先づ覺悟してかゝらねばならぬ。好んでも好まなくても吾等は產業民主主義を遵奉すべく運命づけられてゐる。併しながら私はそれが單に勢であり運命であることを指摘しただけで息む譯には行かない。私は本論に於て、吾が日本國民として產業民主主義といふ指針に從うて踏みださうとしてゐる次の第一步の落ちる境地を玆に豫想して見たいと思ふ。それには日本よりも十步或は百步も前に進んでゐる歐米諸國の辿つた跡をトレースするといふことが最も便利な、そして確實な方法である。一部の論者は動もすれば日本の特殊の國情民族に倚賴して、歐米以外の新機軸を此國に打建てることが出來るものゝやうに考へたがる傾向がある。併し若し彼等にして少しく英獨米諸國に於ける勞働運動の歷史を省察するならば、是等三國と日本との間の差異は唯量的であつて質的でない。從つて日本特殊の國情民俗に倚賴することに依つて、玆に別個の解決策を見出し得べきものとする考への[illegible]望に過ぎないことを悟るであらう。私は固より歐米の先蹤に追隨することを以て能事了れりとするものでは決してない。日本の特殊の事情を常に顧慮して、施設の正鵠を逸せない心懸けは甚だ肝要である。併しながら之は日本の次の一步が、其根本の實

義及境地に於て、必然的に歐米先進國の足跡を辿る外はないといふ私の確信とすこしも矛盾するものでない。之は別に辯明するまでもないであらう。

産業民主主義には長い道程がある。露國の勞農政治はそれがプログラム通り故障なく進捗するものとするならば、最も進歩した形の産業民主主義の實現と言へるかも知れない。併し事實は吾等の既に知る如く、プロレタリアットの名に於て一部のインテリゲンチャの獨裁政治が行はれつゝあるのではあるまいかと疑ふ餘地が多分に在る。新獨逸の産業政策と勞働政策の内には、急進論者からは餘りに微溫的な、保守論者からは餘りに偏理的な、併しともかく露西亞以外には最も進んだ形の産業民主主義の新基礎がすえられてゐる。英吉利の勞働組合運動は全國的團體交渉權の確實な把握から産業管理權の分擔に進まうとして、苦しい奮闘を續け、且つ歩一歩其占領地域を擴めつゝある。米國では資本的勢力の壓迫や、歐洲移民の混化や、ニグロに對する國民的反感といふが如き幾多のハンディキャップを附せられてゐるために、勞働組合運動は十分其驥足を伸ばすことは出來ないながらも、工場委員會といふが如き低級な、併しながら將來ある産業民主主義の一萌芽が生れてゐる。

斯ういふ風に前後して進みつゝある歐米諸國の後を追うて進まうとする日本の産業民主主義の次の第一歩は、大體に於て米國のそれに近い境地に踏み入るものと想像して大過なからうと私は信ずる。其理由は、米國現時の産業界に於ける資本と勞働との關係、從つて之に臨む政府や公衆の態度は、比較的最も吾日本のそれに近似してゐるからである。從つて米國に於ける産業民主主義の現勢を會得することは、他の諸國のそれを會得するよりも、遙に吾等に示唆する所が多いと言へよう。

三　勞働心理の省察

今日の勞働爭議は産業革命と機械的生産と中央集權的な工業經營法との自然な且避くべからざる結果である。大都會の宏壯な事務所に坐して、遠隔な鑛山工場の操業を監督してゐる現代の所謂工業家は、現場の支配者と其被傭者との間

にストライキの勃發を見ずには解決の見込のないやうな嫌忌すべき關係が結ばれる迄は大抵これに氣づかずにゐる。若くは其事實を輕視してゐる。更に資本家の立場から之を見るならば、彼等の多數は事業其物には何等の愛情をも興味をも持たないで、唯利谷の多寡にのみ關心してゐるのである。其結果は勢ひ營利に直接關係ある技術的方面（テクニカル・アスペクト）にのみ注意を拂つて、人間的方面（ヒューマン・アスペクト）を閑却する弊に陷り易い。技師は屢々人間の取扱方を理解せぬといふ非難を加へられる。併し根本的な過誤は技師其人の上に在るのではなくて、技師を利用する現代の資本主義的の工業經營法其者に存するのである。資本家が技師に求むる所は專ら作業能率を極度に高むることである。作業は要するに機械と人間との共働作用に外ならない。技師は此二者を引括めて一つの作業單位として考へるべく習慣づけられてゐる。而して最易な方法を以て、最少の運動を以て、且最低の費用を以て最多の生產を行ふことにのみ鋭意する結果は、動もすれば彼等をして人と機械との間に存する重要な差異、並に人の精神の働きと體の働きとの間に存する作業能率上の著しい相違を觀過せしむる場合が多かつた。勞働者の作業心理に就ては隨分いろ〳〵な研究が發表されてゐる。併し彼等は多くの論者がいふ如く、傭主や支配人とは全く異つた特別な心理の持主であらうか。言ふ迄もなく技師は職工よりも勝れた頭腦と智識を持つてゐる。職工自身の考案よりも技師のそれを以てする方が、肉體的には少ない勞力を以て、質に於ても量に於ても多い生產を爲すことが出來る場合の多いことは疑ふやうもない。併しながら同時に最少の勞力を以て最大の生產を爲さうとする技師の精密な設計が、理論的に正確であるに拘はらず、實行に於て容易に實現し難いことは屢々經驗された事實である。却て職工個人に工夫と創意とを用ゐる餘地を殘した不完全な設計が案外良好な結果を擧げる場合も少くないのである。原則として人は自己の考案を施すことの出來る仕事又其結果に對して責任を負はなければならないやうな仕事に從事する場合に限つて、喜んで困難な勤勞に當り、より多くの精力を費しながら却て疲勞を感ずることが少いのが常である。今日の產業民主 義運動は、之を大きく社會的に取扱へば經濟組織の根本問題であるが、之を小さく一工場として取扱へば作業能率に及ぼす心理的影響といふ問題である。

　現代の複雜な機械的生產の爲にする勞働は、無趣味にして單調であるが故に苦痛であり、工夫と器用とを必要とする

場合にね業である。肉體的に容易である時に却て厭はれ、精神的に困難である時に却て歡ばれる。此故に職工の仕事を樂業にする手段は、彼等の苦心を要する部分を成るべく多くするといふことである。而してそれは同時に又彼等の肉體の疲勞をも輕減するの結果を作ふ。所謂科學的管理法の缺點は四肢運動の生理的節約のみに留意し、心理的作用の影響を閑却した所に在つた。技師が能率増進のためにする全努力も作業其者を樂む職工の心理を無視した計畫を以てしては畢竟徒勞である。勞働者は其手足を用ゐると同時に其頭腦を用ゐることを許されなければならない。産業民主主義は單なる勞働者の利權獲得運動とのみ見てはならない。これは同時に資本家自身の立場から見た一個の生産問題として考慮さるべきものである。

四　團體交渉權

凡そ勞働運動は勞働者の不滿足なる意志の表現である。彼等の不滿足を其對象に依つて分つと次の三つとすることが出來る。

第一は雇傭條件に對する不滿である。生産から生ずる價値の公平な分配に預つてゐないといふ感じ、云ひかへれば資本家や傭主からエキスプロイトされてゐるといふ一般的の信念から起る不滿である。殊に戰時中物價の迅速なる騰貴と資本收入の激増とは、生活費の増加率以上に賃金の増加を贏ち得た勞働者にすら、痛切に此不滿を感ぜしめた。彼等もより多くを得た。併し資本家や傭主や技師支配人は更により多くを得たといふ事實は、彼等の嫉妬と不平とを誘發するに十分であつた。況や生活費の騰貴に伴ふだけの收入を得なかつた者に於てをやである。

第二は産業の經營方法に對する不滿である。工場内の作業は概ね單調で無趣味である。現時の産業は實際の業態に適切な智識を有しない人々に依つて遠方から指揮經營されてゐるものが甚だ多い。是等の經營者は勞働者の眞の智識、能力、感情を理解しない。而して直接に事業の管理に當つてゐる人々は、勞働者の要求する所に同情を缺き或は之を採擇する權能を有しない。かういふ事情から來る不滿は近時産業組織が大を爲すに伴れて益々深くなつて行くのである。

第三は自己の社會的地位に對する不滿である。近年の大工業組織は有らゆる種類の勞働者に取つて一つの桎梏である。勞働者としての境遇から脱け出て、技師、支配人、傭主又は資本家の地位に擡頭する機會は極めて乏しくなつた。そして日に倍々乏しくなりつゝある。彼等は終生浮む瀬のない無産階級である。而して現在の社會制度、經濟組織に激變のない限りは、子々孫々此境遇から超脱することが困難である。かういふ自覺が一層彼等の不滿を深刻ならしめてゐるのである。

米國の勞働者が上記の不滿を癒す方法として、目下最も腐心焦慮してゐるのは團體交渉權の獲得である。「團體交渉（コレクチーヴ・バーゲニング）とは被傭者の組織されたる團體と、一個の傭主又は傭主の團體とが、常に適當なる權限を有する代表者を通じて交渉する手段に依り、雇傭條件を決定する樣式（モード）なり。」とは市俄古大學の一天才ホキシーの下した定義である。所謂被傭者の組織したる團體が勞働組合を指すことは、彼の説明に依つて明白である。コンモンス教授の如きも矢張同樣の見解を取つてゐる。然るにコレクチーヴ、バーゲニングといふ言葉の創始者たるウェッブ氏夫妻は、團體交渉は勞働組合よりも遙に廣い産業上の分野を占むるものであると説いてゐる。いづれにしても團體交渉は勞働組合に依らないでは、到底十分な作用を遂げることの出來ないものであることは疑ひない。

團體交渉の結果として成立つた協定は團體協約（コレクチーヴ・アグリーメント）と呼ばれる。若し此場合に勞働團體の代表者が團體員全部から適法の委任を受けてゐるならば、其協約は法律上の契約で有るけれども、これは實行困難であるがために、今日普通に行はれる團體協約は法律上の契約ではなくて、道徳的の約束に過ぎない。從つて協約の當事者がこれに違背して相手方に損害を蒙らせても、其賠償を請求する譯には行かない。唯同盟罷業或は工場閉鎖等の手段に訴へて、兩者の經濟的實力に依り理否を決する外はないのである。背後から實力に依つて支持されない團體交渉權は、印形を押してない證文も同樣である。

米國の勞働者は英獨のそれに比べては、尚遙に微弱な其組合組織を以てすら、團體交渉の作用に依つて、賃金時間其他の雇傭條件の改善に相當長い努力を續けて來た。併しながら其効果は地理的にも産業的にも比較的狹い範圍に限られ

てゐた。大多數の傭主は主義として之を認むる事を欲しなかつたからである。併しながら戰時の必要と、戰爭目的の遂行に協力せんとする勞働團體の誠意とは、先づ合衆國政府をして之を認めざるを得ざらしめた。ウヰルソンとゴムパースとの間には此點に關して十分なる諒解があつたと推測すべき理由がある。從つて造船所、軍需品工場其他政府の管理の下に在つた諸事業所の傭主等も不承無承ながら亦之を認めざるを得なかつた。而して賃金時間其他の就業狀態に關する團體交渉の手段は、同盟罷業を根絶する譯には行かなかつたものゝ、大體に於て克く產業界の平和を維持して、戰時の異常なる生產の急に應ずることが出來たのであつた。

併しながら休戰條約の成立と共に諸產業に對する政府の管理は漸時廢止された。戰時中勞働爭議調停の目的を以て設置された全國戰時勞働局や造船勞働調整局も亦同時に廢止された。而して戰後經濟界の不況と物價の騰貴とは產業界の鬪爭をして戰前以上に廣く且深刻ならしめたのである。勿論之に對しては何人をも非難する譯には行かない。戰爭が尚數箇年も續いたならば、戰時中產業上の平和を維持するために政府に依つて試みられた施設は今少しく根柢の深いものになつてゐたかも知れない。併し何人と雖此施設を徹底させる方便として戰爭の永續を希望する者のない以上、吾等は唯平和の恐怖が戰爭の恐怖程に人心を緊張せしめて、勞働と資本とを道理ある妥協に導く力のないことを歎ぜなければならない。

戰後に於ける米國の勞働團體が鋭意精進して一日も休まざるものは、戰時に於ての如く平和の時に於ても團體交渉を隨所に實施することとである。戰時の變態は政府並に其權力の下に在つた傭主等をして此要求に順應せしめたけれども、それは固より一時の現象に過ぎなかつた。軍國の總司令官たるウヰルソンに依つて與へられたものは、產業界の覇王ゲーリーに依つて奪ひ去られたのである。一九一九年秋のスチールーストライキの慘憺たる敗北は畢竟此事實を裏書したものに外ならない。彼等が敗れたのは彼等の力と準備とが足りなかつた爲である。必ずしも彼等の目的や作戰が誤つてゐた爲ではない。彼等は尚不斷の努力を續けてゐる。併しながら強大なる米國の資本主義は彼等の前に巍然たる金城鐵壁である。今や彼等は支持の爭奪に忙がしい。克く其牙營に迫るの日は蓋し尚近い將來ではあるまい。

五　工場委員會

米國の勞働組合が團體交渉權を得やうとして、奮鬪してゐる最中に、思ひもかけず傭主側から勞働者（組合員たると否とを問はず）に與へられたるものは別個の雇傭條件の協議機關であつた。普通工場委員會として知られてゐるもの即ち之である。

工場委員會は日本の一部の論客や、勞働運動指導者に依つて誤信されてゐるやうに、團體交渉の機關たり得べきものではない。兩者の區別は程度の上に在るのではなくして、其本質の上に在るのである。併し今は此問題に深入りすべき場合でない。

傭主から與へられた米國の工場委員會には「產業民主主義」といふ立派な折紙が添へてあつた。從來傭主のみの意志に依つて、勝手に左右されてゐた雇傭條件の變更に就て、或程度及範圍まで被傭者の意見を徵して事を決めやうとする工場委員會制度の趣旨は、廣い意味に於ての產業民主主義の一表現であることは疑ひない。私は先づ其の沿革、組織、作用に就て述べやう。

（一）沿革

米國の工場委員會は米國參戰以後に初めて產業界の一新現象として世間の注意を惹くに至つたのであるが、併しそれは主義に於て必ずしも嶄新なものではない。中世に於ける親方と弟子とに依つて經營されてゐた小工業は實質に於て一種の產業民主主義であつたといへる。ブレンタノーは其著『工業勞働者問題』の中に、十三世紀の獨逸の織物業者組合の役員は、四人の中二人を職工から選んで、傭主と組合規約を協定した事實を記してゐる。斯ういふ中世の習慣を破壞したものは、產業革命後の大軌模な機械的生產の發達である。此故に今日の工場委員會は一旦失はれた民主主義の恢復であると言つても必ずしも過言ではない。

近い例を引けば一九〇七年にヒラデルヒヤのネルソン・バルブ會社が上下兩院から成る議會に倣つた工場委員會を設

けた事があつたが永續はしなかつた。次に一九一一年シカゴのハルト・シヤフナー・エンド・マルクス裁縫工場は勞働組合代表者五名、職長五名から成る「トレード・ボード」と稱する雇傭條件の協議機關を造つた。之は今日益々發達して米國に於ける團體協約の成功した一模範とされてゐる。一九一三年にはインヂヤナのフオート・ウエーンなるパツカード洋琴會社、一九一四年にはクリーヴランドのプリンツ・ビーダーマン會社、一九一五年には同市のホワイト・モーター會社が引續き工場委員會制度を設けて、今尙繼續してゐる。尙同年には財豪ロツクフエラーの經營に係るコロラドー・フユーエル・エンド・アイロン會社が數萬の職工に之を實施して、初めて大工場に本制度採用の端を拓いた。爾後米國參戰に至る迄每年大抵二三の新採用者を見たが、參戰以後は急に增加してニユージヤーシーのスタンダード石油會社、シンシナチのプロクター・エンド・ガムブル石鹼會社其他著名の工場にして本制度を實施するものが續出して漸く世の視聽を惹くに至つた。

丁度此際戰時軍需品急造の必要に應ずるため臨時政府に設けられた諸機關は、産業上の平和を維持する手段として、一方には勞働組合に對して團體交涉の主義を認容すると同時に、他方には組合の勢力外に在る諸工場に對し工場委員會制度の適用を鼓吹した。即ち一九一八年春合衆國燃料管理局は其の監督工場中に九箇の工場委員會を設置せしめ、合衆國鐵道管理局は、勞働爭議はすべて被傭者の代表者を通じて調停さるべき旨を約定した。殊に同年七月戰時勞働爭議調停の目的を以て設置せられた全國戰時勞働局と造船勞働調整局とは極力工場委員會制度の設立に盡力したので諸所の製鐵工場、金屬工場、造船工場其他多數の諸事業所に普及するに至つた。其結果政府の管理以外に立つてゐる諸工場中にも本制度の效果を認め、自家の工場にも適用するを利益と考へたものが續出して、戰爭終熄後にもインターナショナル・ハーベスター農具製造會社、ウエスチングハウス電氣會社、ベツレヘム造船所等の如き有數の大工場を初め、本制度を採用した工場は頗る多い。併し同時に戰時中設置されたもので、戰後に廢止されたものも亦尠くはない。ナショナル・インダストリアル・コンフエレンス・ボードの調査報告に依ると、一九一九年八月現在の該制度施行工場は二百二十五で、其適用を受けてゐる被傭者は約五十萬である。之を地方別にするとコネクチカト、オハイオ、イリノイス、ペンシルバ

ユヤ等が最も多く、之を事業別にすると機械工場、造船工場、製鐵工場等が最も多い。又之を設置の原因に依つて區別すると、政府諸機關の命令又は勸告に依るものが百二十、傭主の發意に依るものが百五で、被傭者自身の要求に基くものは絶無であるのが注意に値する。」

（二）組織

先づ工場委員會の要素として認むべき條件は、(1)それが被傭者に依つて選擧され且被傭者の爲に働く代表者に依つて組織されなければならぬ事、(2)其代表者が傭主に依つて被傭者の代表者として承認され、彼等と共に雇傭條件其他の事項を協議する事、(3)其組織が常設的である事である。此三條件を具備してゐるものでなければ工場委員會とは言へない。

代表者の選擧資格に就ては大部分は何等の制限を設けてゐないが、少數のものは勤續期間（一箇月乃至一箇年）を以て之を制限してゐる。

被選擧資格には大抵三つの制限を設けてゐる。第一は米國市民でなければならぬ事、第二は一定の年齢（多くは二十一歳）に達してゐる事、第三は一定期間（二箇月乃至五箇年）勤續した事である。

代表者の任期は多くは一箇年であるが、短きは半箇年長きは二箇年である。

（三）會議

會議は被傭者代表者のみを以て開くものと、傭主代表者の參加するものと二種類ある。又決議の方法は多くは出席者の多數決であるが、往々滿場一致を要求してゐるのもあり、又傭主被傭者双方の代表者の會合する場合は各別の決議が一致しなければ可決されない事になつてゐるのもある。

委員會の決議が當然傭主に對し拘束力を有することに規定されてゐるものは殆どない。事實に於ては討議攻究の間に傭主と委員會とが意見の一致を見る場合が多いけれども、若し最後迄一致しなかつた時には、之を州法に依る公設の和解仲裁機關の議に附するものと、工場又は會社の最高幹部の決定に委ねるものと何等の定めも設けないものとの三種類あ

る。

（四）權能

委員會が如何なる事項に就いて討議する權能を與へられてゐるかといふことは最も主要な點である。米國現存の委員會の大多數は時間賃金等の雇傭條件に對し發言することを許されてゐる。雇傭條件に觸るゝことを許されない委員會は勞働問題としての研究價値はないと言つて可い。其他の附議事項としては幸福増進施設（住宅、購買組合、病院、保險、教育、米國化（アメリカニゼーション）の如き）作業場改善方法（インダストリアル、ベターメント）（負傷者應急救濟、休憩室、食堂の如き）就業狀態（安全第一、工場衞生、時間外勤務の如き）勞働者供給（徒弟養生、職長選擧、職工任免の如き）等種々なる方面に亘つてゐる

以上は米國工場委員會の内容に就ての概略の說明である。之に就て最も注意して置かなければならぬことは、第一に工場委員會は悉く傭主から與へられたもので、被傭者の求めて得たものでないといふ事、第二に工場委員會は其名の示す如く、一工場内に限られた組織であつて、他工場との間に何等聯絡のない孤立的の機關であるといふ事、第三に工場委員會は全然勞働組合と無關係無交渉な地位に立つてゐるといふ事之である。殊に第三の點は米國の工場委員會を英國の聯合産業協議會（ジョイント、インダストリアル、カウンシル）や獨逸の工場協議會（ベトリーブスラート）と比較考量する場合に極めて重要な相違であることを記憶して置かなければならない。

六　工場委員會と勞働組合

工場委員會は勞働組合員のみを雇傭する工場即ち所謂閉鎖工場（クローズドショップ）に於ても組織し得られないではない。唯此場合に委員は組合本部の指揮の下に或は其の方針に悖らない範圍内で動くとになるのである。現に英國に於ける工場委員（ワークスコンミテー）と稱するのは多くはそれである。唯米國に於ては大多數の傭主は勞働組合に反對してゐる。一九一九年の秋大統領ウヰルソンに依つて召集されたる第一回の産業會議は、團體を組織して、傭主と交渉すべき代表者（被傭者たると否とを問はず）を隨意に選ぶべき權利を勞働者に許すや否やの點で終に破裂した。同會議に出席した傭主等は全國の傭主を代表するものと

看做されてゐた。彼等の演說には諒解に苦しむやうな言葉が屢々用ゐられたけれども、彼等の眞意は疑ふべくもなかつた。彼等は必ずしも個人的交渉に執着して飽く迄も團體交渉を排斥せんとするものではないけれども、彼等は團體協約の條項を決定するの權利を自家の手に維持せんことを强硬に主張したのである。彼等の要求は形式でなくて實質であつた。彼等は被傭者が選出する代表者が傭主側に取つて不利な人間でない場合に限つて被傭者の團體組織を認めやうとした。之に反して勞働組合側は團結と、代表者選出とに絕對の自由を要求したのであつた。斯くの如くにして傭主等は勞働組合の勢力の下に在る被傭者代表者とは交渉することを拒んだけれども、何等かの方法で被傭者代表者と協議する方法を設くることが、產業上の平和を維持するがために得策であることだけは分つた。玆に米國式工場委員會の存在の意義と理由とがあるのである。

米國の工場委員會が右の如き事情の下に生れて、前述の如き組織のものである限り、勞働組合が之に好感を有しないのは怪むに足らない。米國勞働聯合會長ゴンパースの發表した意見は其代表的のものと見て可い。彼は曰く、

「勞働運動は全體として所謂工場委員會制度として知らるゝものに反對するものである。何となれば該制度は主義に於て根本的に謬つてゐるからである。該制度は如何なる意味に於ても勞働者の眞の利益を增すものではない。それは單に勞働組合に反對する傭主の計畫の一部に過ぎない。又事實該制度は總べて傭主の利己的の產物である。」

彼は次に組合の立場を擁護する爲に斯う言つてゐる。

「勞働組合こそ眞に被傭者の利益を代表すべき唯一の機關である。勞働組合に依つてのみ被傭者は自己の判斷と必要以外の他の勢力から免かれる事が出來る。且又勞働組合は一工場內にも其代表機關を設けて、傭主と職工との協同的關係に十二分な機會を提供することの出來るものである。組合代表者に由つて增進すべき傭主被傭者間の好關係は無限である。勞働組合運動は畢竟斯くの如き好關係を增進するに適當なる代表制度の提唱に外ならない。而して此の好關係は組合以外の他の機關を以て之に代へんとするが如き計畫の存する間は、實現すること不可能である。」

七　進歩的なる資本家の見解

米國財界の一巨人たるジョン・ロックフェラーの經營に係るコロラドー・フユエール・エンド・アイロン會社は米國大企業家中率先工場委員會の制度を採用したが、それは主として同社の一重役たるロックフェラーの子息、通常ロックフェラー・ジユニオルとして知られてゐる人の主張に依つたものである。同氏は一九一六年一月の『アトランチック・マンスリー』に長文の意見書を發表した。私は其中の數節を茲に引用する。

「資本は勞働なしに動くことは出來ぬ。勞働は資本なしに進むことは出來ぬ。此兩者が協働してこそ富は造られ、生産は遂げられる。此協働作用の發達に由つて最大なる社會奉仕が成されるのである……」

「既に勞働と資本とが協働者であるとするならば、産業の果實は兩者共同の産物であるが故に、兩者の間に公平に分配されなければならぬ。然らば公平なる分配とは何か。其答は簡單でない。分配は決して絕對に公平であり得ない。今日それが公平であつても、明日事情が變れば公平でなくなる。唯確かな一事は分配が利己心と短見とに依つて行はるゝ程、其不公平の度が大きいといふことである。富の生産に加はる因子（フワクター）は常に變化して息まざるが故に、富の公平なる分配問題に最後の解決を與へる時期は來ないかも知れない。併しより公平なる分配に近づくためにより完全なる方法を見出さんとする努力は常に熱心に且間斷なく行はれなくてはならない。」

「此被傭者が自由に且公平に待遇されなければならぬといふ事は、コロラドー・フユーエル・エンド・アイロン會社の多年の希望でもあり目的でもあつた。此目的を達するためには、日常の作業から起る小紛議を迅速に且公平に處理すべき有効な方法と、被傭者に經濟的の負擔を與へることなしに其權利を保護し、其要求や希望を忌憚なく發表せしむるやうな機關が無くてはならぬといふことが明白になつた。唯問題は如何にすれば被傭者の生活を改善し、同時に株主と被傭者とを眞實な協働者として結付けることに依つて、双方の利益を均しく增進せしむることが出來るかといふ點に在つた」

「一九一四年十二月のストライキが止んで常態に復するや否や、吾社は豫ねて考慮の中に在つた一計畫の實行に着手し

た。それは各採鑛場の勞働者をして無記名投票に依り其代表者を選擧せしめ、會社の幹部と會合して相互の利害に關係ある事項を討議し、公平にして友誼的なる關係を維持するに有効なる方法を考案せしむるといふ事であつた。……」

右のやうなロックフェラーの思想と順序とを經て出來上つたのが同社の所謂「產業的立憲制度」即ち工場委員會の一タイプであつた。爾後ロックフェラーは絶えず言論文章に依つて此主義の宣傳に努めてゐる。

私は昨夏米國滯在中、現に工場委員會制度を實施せる重な工場約百を選んで、其會則及成績の報告を求めた。私は今手許に在る是等の印刷物の中から、該制度に對する傭主の趣旨又は期待と認むべき辭句を二三拔出して見やう。

「過去は知らず將來に於て、工業從業員を支配すべき最良の方法は、從業員を支配する法則に對し、從業員各自の思慮ある贊否を明示せしむべき有効なる機關を設置するの外あるべからず。此の如き方法に依りてのみ從業員は共同の目的に對し最善の力を竭し且其能力を間斷なく向上せしむることを得べし」（デニスン紙器製造會社）

「當社の被傭者及幹部は工場委員會制度の實施に依り、相互の諒解並に信頼に對し確實にして永續的なる基礎を設けんことを期す。此目的に依り被傭者及幹部は双方同數の代表者を選出會合せしめ、就業狀態、健康、安全、勞働時間、賃金、慰安、教育其他双方の利害に關係ある一般事項に就き考慮せしめんとす。」（インターナショナル・ハーベスター會社）

「(1)傭主被傭者間に於ける意見交換の有効なる手段として、(2)被傭者をして雇傭、勞働並に生活條件に關し發言權を有せしむるために、(3)傭主被傭者の協働及信頼の方針を持續するために、(4)作業組織、生產能率並に生活の安寧に關する傭主被傭者共同の利益を增進するがために、傭主被傭者代表者の聯合協議會を組織す。」（スタンダード石油會社）

此種の例を擧げれば尚ほ無數に在る。私は之だけで工場委員會制度に對する資本家の所見を伺ふに十分であると信ずる。

八　第二回產業會議

米國に於ける產業民主主義の一表現としての工場委員會に對する傭主側の期待と勞働組合側の批評とは既に之を述べ

た。私は次に第三者の立場に在る識者の説を聽かなければならない。

第一回の産業會議が傭主被傭者間の團體交渉權の認否に關する見解の相違に依つて失敗に終ると間もなく、ウヰルソンは更に第二回の産業會議を召集した。今回は傭主被傭者の代表者は省いて、議員は主に政治家、官吏、學者、記者等から選まれた。而して其主たる任務は勞資關係を調節して産業界の平和を維持すべき最良の方法を發見することであつた。同會議は一九一九年十二月一日に初つて、其決議報告は一九二〇年三月六日に中央政府から議員全部の名を以て發表せられた。其要旨は畢竟産業民主主義の推贊に外ならない。私は同報告中から重要な數節を左に拔萃しよう。

「産業上の紛爭を防止救濟する最も賢明なる方法は、傭主被傭者双方の最善の思慮と經驗とを相互に發表諒解するにある。」

「本會議を指導したる思想は、傭主被傭者間の正當なる關係は、其關係を適當なる組織の下に置くことによつて最も好く增進する事が出來るといふことであつた。所謂適當なる組織は先づ一工場の內に設けられなくてはならない。其目的は共通の利害を有するものを結付けて紛爭の範圍を狹くし、傭主と被傭者との組織的協同作用に依つて、人對人としての關係から生ずる利益を享受せしめんとするに在る。（此種の關係は工業が小規模であつた時代には傭主被傭者間に存してゐたのであつた。）斯くの如き組織は傭主被傭者共通の利益を處理するがため双方を協働せしむるが如き內容のものでなくてはならない。それは原料に對して有する智識と同程度の智識を被傭者に對しても有してゐなければならない工場經營者の責任を確認すると同時に、其工場の操業方法、並に經營方針に對する智識を要求する被傭者の權利と義務とを確認する制度でなくてはならない。被傭者は其作業に對して創造的の興味を感じ得るがためには、傭主との協同的努力に俟たなければならぬといふことを理解するを要する。」

「本會議は産業平和の新基礎は、既に當國に於て普及しつゝある傭主被傭者關係の民主的組織を一層發達せしむる外にないと感ずるものである。」

「被傭者の傭主或は作業に對する關係上、自己の利害に影響ある事項は、何事に依らず責任ある相談に與ることの出來

るやうな、意志表示の手段を設けられなくてはならない。」

「傭主と被傭者との間に利害の衝突の現存せる事實を否定するは全然無益である。併しながら兩者の利害を一致せしむるために畫策すべき範圍も亦決して狹くはない。衝突の範圍を局限するがために現に存する利害を如何に一致せしむべきやは政治家の任務である。被傭者代表制度は生產、賃金若くは就業條件に對する被傭者の利益を擁護するがために必要である。然らずんばそれは產業の人的要素（ヒューマン・エレメント）に對する傭主の利益を擁護するがために必要である。」

「被傭者代議制度は單に被傭者の不平を癒す手段とのみ考へられてはならない。それは亦生產に關する問題に對し傭主と協働する機關でなくては成功することは難い。」

「代表者は被傭者の絕對的自由の下に選出されなくてはならない。………一切の被傭者は工場委員會に關聯してどんな言動を爲さうとも、それに依つて傭主から差別的待遇を與へられるやうなことは絕對にないといふ確信を有つてゐなければならない。」

「被傭者代議制度は必ずしも產業平和に達する自働的道程ではない。如何なる傭主も工場委員會の制度を適用することに依つてのみ、直に調和と生產の增進とを贏ち得るものと想像してはならない。該制度を單に「物好き」から又は萬能藥として採用するならば、必ずや其結果は失敗である。該制度は眞摯なる期待と隔意なき協議と共通利益の設定とに依つて、相互の福利を增進すべき一箇の手段に過ぎないのである。傭主被傭者間の正當なる關係の發達及持續は單純な組織だけの問題ではない。賢明にして理解ある運用が總べてに必要である。」

米國の學者若くは識者と呼ばるゝ人にして、勞資協調論又は工場委員會推賛論を公にした人は頗る多い。併し其要旨は總べて前記の第二回產業會議の報告に盡きてゐる。私は之を以て米國現代の勞働爭議に對し第三者の地位に在る有識階級の意見の綜合と見て差支ないと思ふ。

九　プラム・プラン

傭主側の期待が如何に大であるにせよ、識者側の推賛が如何に熱心であるにせよ、米國に於ける産業民主主義の効果は今尚ほ極めて低級であることを認めない譯には行かない。其最も重なる原因は勞働組合の反對よりも寧ろ民主的制度をエンジョーイする筈の一般勞働者が之に對して感謝せざるのみか、却て冷淡な態度を示しつゝあるといふことである。勿論民主的制度を敷いた傭主側の動機は、勞働組合が猜察するが如く不純ではないかも知れない。否大多數の傭主は之に依つて被傭者に、前代の傭主が絶對にすることを肯ぜなかつた特權の割讓を敢へてしたものと眞面目に考へてゐるのである。併しながら勞働者は單に其意見を表白する機會を與へられただけでは滿足しない。彼等は其意見が只傭主の參考材料として役立つだけでは滿足しない。彼等は自ら「決定」せんことを欲するのである、少くも「決定」に參與せんことを欲するのである。斯ういふ彼等の感情を具體化して、米國産業界に投出された骰子はプラム・プランであつた。

辯護士プラムは米國鐵道從業員四大組合の法律顧問である。彼は戰時中政府の管理の下に在つた全國の諸鐵道を、元の私營に復歸しないで左の寸方に依り之を國營とするの新案を提唱した。

(一)全國の鐵道は合衆國政府之を買收して國營とす。

(二)鐵道は左の十五名より成る重役會に於て之を管理す。

大統領により任命せらるゝ者　五名

鐵道職員中より選擧せらるゝ者　五名

鐵道勞働者中より選擧せらるゝ者　五名

(三)營業利益は之を折半して、一部は政府の收入とし一部は職員及勞働者に給與す。但職員に對する給與額は勞働者のそれよりも多くす。

(四)營業利益が總收入の一割を超過する場合には、運賃は自働的に低下せしむ。

(五)鐵道は全國劃一の主義に基き、各地方に分設せる管理局をして之を操業せしむ。

(六)鐵道の新設延長は之に依りて利益を享受すべき地方の負擔に於て之を行ふ。

（七）賃金其他雇傭條件を協議決定するため中央に一機關を設け、職員及勞働者同數の代表者を以て之を組織す。若し紛議を生じたる時は重役會最後の決定權を有す。

之がプラム案の骨子である、本案は一九一九年八月民主黨領袖の一人たるシムス氏に依つて議會に紹介されたので、米國産業界言論界は一大ショックを受けた。由來米國勞働組合運動の特色は其非社會主義的な所にあつた。近年歐洲の勞働團體が次第に赤化的傾向を帶び來り、或は産業の社會化を主張し、或はプロレタリアットの國際的團結に參加し、純一な經濟的運動から政治的運動に躍進して階級戰爭を誘致せんとする勢ひ制し難きものあるに拘はらず、獨り米國勞働團體の主力は在來の保守的立場を維持して、雇傭條件の改善以上何等の目的をも有たなかつた。現代の社會組織を呪咀したり資本主義の撤廢を主張したりすることは彼等の最も心して回避した所であつた。彼等は勞働者の團結權を高唱し、團體交渉權を強要し、同盟罷業の自由を擁護する者に於ては何國の勞働者にも讓らなかつたが、それは何處迄も現存の國家、社會、經濟、産業の組織を是認した上の運動であつた。彼等は如何なる意味に於ても革命的な要素を有たなかつた。而して鐵道從業員の組合とても固より其例に漏れなかつた。否其四大組合の如きは最も穩健な勞働團體として敬重されてゐたのである。

然るに鐵道の公有と勞働者の經營參加權の確保を主義とするプラム案が、四大組合の熱心なる寧ろ威嚇的なる新旗幟として突如米國の政治及産業界に出現したことは正に米國勞働運動史上の驚異すべき新事實であつた。之が爲に輿論の沸騰を見たことは固より怪しむに足らぬ。

米國の政治及産業界の現狀が斯くの如き革命的な急進案を容れる餘地のないことは言ふ迄もない。本案が吾々に與へる興味の中心は本案の實行の可能性の問題ではなくて、本案に對する一般勞働者の態度である。四大組合如何に有力なりと雖も其總會員は約五十萬で、全國の鐵道從業者總數の四分の一を占めるに過ぎない。約百五十萬の鐵道從業者は米國勞働聯合會（アメリカン、フェデレーション、オブ、レーバー）に屬してゐるが、同會長は米國勞働運動の最右翼を代表するゴムパースに依つて統率されてゐる。從つて同會が本案を支持しない以上は、本案は一般勞働者の贊同を得たものとは言はれない。併しながら約四百萬の同會員が

首領ゴムパースに信頼し、多年の主義綱領を尊重するの意志を失はない間は、同會がプラム案に左袒しやうとは何人にも想像し難い所であつた。

然るに一九二〇年六月モントリオールで開催された米國勞働聯合會の年次總會は、會長ゴムパースの最も熱烈な反對論にも拘はらず、八千三百票に對する二萬九千票の多數で鐵道國有案を可決したのであつた。鐵道從業者は無論擧つて之を支持した。そして最も有力に之を聲援したものは坑夫であつた。

私は其翌月クリーブランドなる鐵道機關手組合の本部に會長ストーンを訪ねた。同組合は僅々八萬人の會員を以て約三千萬弗の基金を擁し、銀行保險等を經營して、米國に於ける最も有力なる勞働團體であると同時に、プラム案宣傳の策源地である。私はストーンの大きな手を握ると同時に斯う聞いた。

「貴下はどんな方法でプラム案を實行しやうとするのか。」

「教育！」

彼は言下に斯う答へた。彼は言論文章を以てする宣傳に依つて國民を教育し、國論を改造して徐に理想の實現を期してゐるのである。

十　禍なるかな聽いて視ざる者よ

私は日本の産業民主主義への次の一歩を示唆する方便として、米國の現狀を概觀した。日本に於ける急進的な一部の思想家や勞働運動の指導者は私のかういふ態度を冷笑しつゝ、首を轉じて太西洋の彼岸を指しながら「ルビコンは彼方だ。」と叫ぶかも知れない。禍なるかな、聽いて視ざる者よ、希くは其眼を開いて、脚下と周圍とを見よ。英國の主要な勞働組合の獲得した全國的の團體交渉權は欣羨すべきものであらう。新獨逸の徹底的な普通選擧や工場協議會は勞働王國の建設を豫示するものであらう。更に勞農治下のプロレタリアットの獨裁政治は勞働者最後の榮冠と解するも差支ないかも知れない、併しながら是等三國の勞働者が。此の如き特權(プリビレーヂ)を樂しむことに依つて得た實質上の獲物が何であつたか

を思へ。言ひ換へればそれが專門階級の文化生活に影響しつゝある効果が眞にどんな程度にあるかを思へ。それは戰前の普通の狀態に在つたとしても、必ずしも多く羨むべきものではなかつた。況んや戰後疲弊し切つた現今に於てをやである。これに比べるならば、產業經營上の特權を與へられること尙頗る低級な米國勞働者の生活程度は遥に優良である。特權其者が直に人を幸福に導くのではない。其特權を活用して實果あらしむべき原動力を伴ふに至つてこそ而めてそれは人生に裨益するのである。戰後に於て歐洲諸國の產業民主々義は一大躍進を遂げたに相違ない。併しそれは過去一世紀間の百折不撓の奮鬪と、數へ切れぬ犧牲とに依つて贏ち得た所のものである。而して其現下の實効は空虛なる特權と賤缺した生活に過ぎないではないか。彼等が過去に於てした執拗なる戰ひと、悲慘な犧牲とを拂ふことなしに、否拂ふとしても拂ひ得る準備すら有つことなしに、直に彼等の獲得した特權に均霑しやうといふ願望は餘りに僭越で且無謀ではあるまいか。而して此僭越と無謀とから必然結果する苦痛を最も滿喫する者は、日本の勞働者でなくてはならない。眞に日本の勞働者のために鬪る人々は傷心焦慮して、此僭越と無謀とから遠からなければならぬ。吾等は徒に十歩百歩の外を望んではならない。次の一歩、只それ次の一歩を續けて行くことに依つてのみ、吾等は千里の道をも踏破することが出來るのである。

現代の經濟思想より神戸勞働爭議を批判す

法學博士 堀江歸一

勞働爭議の陽性と陰性

世間に資本家と勞働者と云ふ二箇の階級が對立し、双方の階級の協力で、富を生産して置きながら、各自の力で其富の分配を爭ひ、力の强い者が其弱い者を壓倒して、より多くの分量を奪取しようとする狀態であつたならば、兩者階級の間に爭議の起ることは、當然であつて、其起るや、好景氣の時であると、不景氣の時であるとの別を問はないのである。然し爭議の性質から云ふと、其起る時の好景氣時代であると、不景氣時代であるとに依つて、其間に大なる相違の存することを免かれない。即ち前者は陽性であり、後者は陰性である。歐洲戰時數年間を通じて、我國の經濟社會が繁榮を極めて居つた時にも、勞働爭議は隨分全國到る所に起つた。當時爭議を起した勞働者は何を目的としたかと云へば、何れも賃銀の上進であつた。時に勞働時間の短縮を要求することもあつたが、實は勞働時間を短縮して、正常の時間の外に、勞働する時間に對しては、歩增の賃銀を得ようと云ふ趣向であつて、時間の短縮と云ふことも、賃銀上進の計畫に外ならなかつた。斯る要求に接して、事業主たり、資本家たる者は如何なる態度に出たかと云へば、商工業好景氣の眞最中で、盛に利益を舉げてゐるのであるから、勞働者の要求を容れるに吝でなく、颯々と之に應じるであらうし、又此要求を拒絶されたとした所で、勞働者は必ずしも一の工場に執着して居ることを要しない、自分の要求するだけの賃銀を支拂い得る他の工場に就て、職を求める方針を取るのである。隨つて好景氣時代の勞働爭議は誠に陽氣であり、實に淡泊であり、解決が容易であると共に、後腹を痛める處も比較的少ないのである。

之に反して不景氣時代に起る爭議に於ては、勞働者は總に罷業に訴へて、従來の地位を維持して行かうとか、是れまで支給された賃銀を給與して貰ふとか云ふような消極一天張りの手段に出るのであつて、假令爭議に成効したとした所で、餘り有

利なる結果を收めることを期待し難いばかりではなく、事業主の方で斯る爭議の頻發を煩はしいと考へ、又は爭議に伴う要求を容れて、事業經營の費用を增すことを不利益であるとしたならば、一擧に事業の規模を縮小し、罷業を踏して、爭議を企てつゝある勞働者の全部を解雇する手段に出るかも知れず、而して此場合に解雇された勞働者は不景氣の餘波を受けて、如何なる場所にも職業を見出すことが出來ず、路頭に迷ふの結果と爲るかも知れない。隨つて不景氣時代に起る勞働爭議は陰性であり、其結果に於て、社會上の不安を醸さゞれば已まないのである。斯の如き次第であるから、商工業の不景氣時代に、勞働爭議の起ることは已むを得ない勢であるとしても、國家としては社會の平和を維持する見地から、此時代に爭議の起ることを回避するに就て、國家の有する力の總てを捧げなければならぬ譯である。我國の政府に勞働問題に對して、是れだけの用意があつたであらうかどうか、私の第一に掲げて問題とする所である。

勞働問題に不用意なる原內閣

大正九年四月我國の經濟社會は恐慌に襲はれ爾來商工業は勿論農業まで、不景氣のドン底に沈淪するに至つた。此恐慌は或は突然に起つたものゝように考へる向もあるか知れないが、實は年來人爲的に經濟社會に好景氣を煽揚した反動として、起つたものであつて、私共の如きは、恐慌、之に續く不景氣の醸す結果の虞る可きことに就て、屢々世間に警告を與へたのである。原內閣にして經世上に一隻眼を具へて居るならば、第一には經濟的反動を緩和する策を施したであらうし、第二には愈々反動の起るものとして、之に處する道を工風した譯である。然も第一の點の如きは、原內閣の意を注がない所であつて、寧ろ反動の襲來する勢を甚だしからしめた跡すらある。而して第二の點に於ては如何であつたであらうか。

恐慌の襲來、之に續く不景氣の爲めに、諸事業が沈衰したならば、其影響は如何なる形態で、勞働者の生活に現はれて來るかと云へば、其一は失業であり、他の一は賃銀減額に外ならぬ。是等二ツの影響は勞働者に取つて、天災同樣であつて、何とも出來ないものであるかと云へば、私は決してさうは考へない。失業の如きは、政府で中央地方相協力して、救濟の計畫を樹てたならば、或る程度まで其禍害の及ぶ所を抑制するに難くない。現に此點に就ては、諸外國の行つた事例の昭々たるものがあるのに、我國の政府は此問題に對しては、何等解決の道を講ぜずして、今日に及んだ。即ち幾ら不景氣の反動として、失業が起り、失業者が生じても、全然自由放任を主義として、顧みた

つた。自由放任も事にこそ依れ、彼の如き不景氣に際して、起つて來た失業者を見殺にするが如きは、慘酷の甚だしきものであつて、原内閣の如きは、何としても民衆を友とする政治を施すものではない。不景氣に臨んで、勞働者の賃銀の低落しようとする場合に、國家が之に對抗して、賃銀を引上げようとすることは、遽に望む可からざる所であつて、縱に最低賃銀公定制度の下に、賃銀の低落に對して、或る限度を設ける位が國家として爲す所の關の山であらう。但し賃銀の下落する場合に、之に伴つて諸物價が低落したならば、勞働者としては、又殊に繼續して就業して居る勞働者としては、生活上に大した苦痛を訴へない筈である。而して經濟上に於ける自然の働きから云へば不景氣と共に、一般物價は低落し、賃銀の低落に對して、或る調節を保ち、又失業者が在來の貯蓄金に依賴して、衣食しようとする場合に、其生活を或る程度まで、安易ならしめる道理である。然るに原内閣の經濟政策は如何であつたらうか。不景氣時代に、當然低落す可き物價の趨勢に對して、樣々の干涉を施し、不景氣の狀態に於て、物價を高からしめて已まないのである。是れでは不景氣を理由として、事業主が一部の勞働者を解傭しようとか、又は同じ理由に依つて、賃銀を引下げようとかする場合に於て、勞働者が今後の生活の困難であることに想到して、斯る事業主の處置に反對する、殊に强硬なる態度を持して、反對するのが當然であつて、此反對が昨今關西地方に於て、極端なる勞働爭議の形で發現し來つたのである。斯く考へたならば、昨今の勞働爭議に對しては、政府の經濟政策に誤謬のあつたことの結果として、生じ來つたものであると云ふ事實を認めなければならぬ。斯る間違いだらけの經濟政策を實行したことに就て、當面の責任者である高橋是清氏の如きが、何か新聞紙上に於て、勞働爭議はドウのコウのと愚にも付かぬ言を弄んで居るのは、厚顏の甚だしきものであつて、吾人の唾棄せざるを得ざる所である。

政府は爭議に處する第一步を誤る

即ち政府は平生經濟政策の立て方を誤まつて居つたことの結果として、勞資兩者の關係を險惡にし、起らないでも濟む可き爭議を起させた趣の存することを免かれない次第であるが、愈々關西諸地方に爭議の續出した際に、政府は如何なる方針を取つたであらうか、又其取つた方針に何の誤りもなかつたであらうか。大坂電燈會社や、藤永田造船所の爭議に於ても、警察官の干涉は或る程度まで行はれ、治安警察法第十七條は罷業者なり、勞働運動者なりに、適用されたようであつたが、是れは我國勞

働爭議に於ける常套事であつて、敢て異とするに足らない。而して神戸に爭議が飛火して、或は川崎造船所に、或は三菱造船所に其れ〳〵爭議の起つた場合に、政府は如何なる態度を示したであらうか。歷代の內務大臣中、勞働問題の何ものたるやを理解せざることに就て、第一人者でありと目される、床次內相は新聞紙を通じて、政府は勞資兩者の爭に對し、中立の態度を取るものであることを聲明したのである。勞資の爭議が神戸に於て、行はれたものゝやうに、劇烈に爲り、又大規模にも爲つた場合に、事業主と勞働者とを勝手に爭はせて、政府は袖手傍觀の態度を取り、之を以つて中立公平であるとするが如き、果して當を得たものとす可きであらうか、私は政府の無能怠慢を責めざるを得ないのである。

或は政府は何處までも其標榜した所謂中立公平の態度を今度の勞働爭議に臨んで、徹底させたならば、事の善惡は別として、一個の見識を貫いたものと認められないものでもない。然しながら資本主義的色彩の極めて濃厚である原內閣に之を望むのは甚だ無理であつて、事實に於ては、政府の勞働爭議に向つて、手を下した所は決して公平のものでもなければ、中立のものでもなく、官憲の力を藉りて、勞働運動を壓迫した跡の掩ふ可からざるものがあるのである。其一は軍隊を行使したことであり、其二は警察權を利用したことであり、其三は治安警察法を運用したことである。軍隊を國の攻防以外、名分の立たない事に用ゆるのは軍の士氣を墮落させるものであつて、吾人の最も戒心しなければならぬ點である。現に西比利に駐屯して居る我國陸軍の軍紀は如何なる、狀態に居るであらうか。士官の內にも、兵卒の內にも、續々軍紀違反者を生じて、紀綱の紊亂を示して已まないことの如き、要するに出征其ものゝ目的が將卒の間に判然理解されない結果であつて、私が將來の爲めに憂へる所である。固より社會の治安を維持する必要から云つて、警察力の不足した場合に、軍隊の力を以つてすることを是認しなければならぬ場合は、多々あるであらう。神戸市なり、兵庫縣なりの警察力で、若干名の警察官が治安維持の任に當り得るものであるか、詳細の數は私の知らない所であるが、川崎なり、三菱なり造船所の職工は萬を重ねる多數であつて、隨つて是等の職工が若しも結束して、罷業から暴行に移つたならば、警察力を以つてしては、之を如何ともするを得ない。此點を慮つて、罷業に對抗して、軍隊の派遣を必要とするに至るものと辯解されるかも知れない。現に川崎造船所には政府の註文に從つて、製造中の軍器がある。罷業職工の爲めに、此大切なる軍器が傷けられたならば、國家に取つて由々しき大事と爲るから、軍隊の

派遣を必要としたと云ふ辯解が行はれて居るのである。然し此辯解を肯定するには、勞働運動が餘程激昂し、沸騰し來つて、何時爆發するかも知れない極端な點まで、推詰めて居つたことを論證しなければならぬ。政府に果して是れだけの證據があるかどうか。私の得た情報に據れば、今度の爭議に於て、勞働者は堂々たる態度を取り、實際の運動に於て、充分の節制を示したと云ふことである。其れは勞働運動である以上は、示威的言動を示したであらう、又資本主義を敵とすることをも聲明したであらう。彼等の行動が是れだけに止まつて居る以上は、何人としても彼等が直接行動に出るものとは考へられない。其れを斯くと考へて、慌て騒いで軍隊を派遣した政府當局者こそ、水鳥の羽撃きに驚かされた平家の公達と同じ慌て者と云はざるを得ない。

軍隊を派遣して、少しも危險性の伴はない勞働運動に對抗させると云ふことは、啻に政府の不見識を表明するばかりでなく、他に種々の流弊を及ぼしたのである。第一政府は資本家の利益を擁護する爲めに、輕々しく軍隊を動かして、憚らないと云ふ觀念を一般公衆、勞働者並に軍隊自身に與へたこと、第二政府が社會の安寧を保維すると云ふのは、要するに資本家の利益を保護すると云ふのに外ならないこと、第三勞資相爭つてゐる場合に、政府が軍隊を動かしたならば、勞働者は自然勞働運動の自由を掣肘される爲めに、兩者の對抗上、資本家に有利なる結果を生ずることの三點の如き、其重なるものである。現に今度の爭議に於ける經過に徴しても、軍隊が勞働運動の自由を束縛し、勞働者に一種の威壓を加へるやうに爲つてから、勞働者の結束が鞏固に爲り、其運動が活潑に爲つたのは、爭う可からざる事實であつて、軍隊に依つて、資本家を擁護し、一方に勞働運動を壓倒しようとした處置がドノ位勞働者を刺戟したか、測り知る可からざる譯である。而して斯る刺戟に依つて、勞働者の運動が活潑に爲ると、政府は警察官を派出し、其多數に任せて、勞働者を包圍し、警戒線を突破したと云ふ一事を捉へて、勞働者を殺傷したと云ふに至つては、我國官憲の勞働運動を苦しめること、至れり、盡せりとす可きである。

勞働問題の解決は事業經營の第一義なり

川崎や、三菱造船所は戰爭中非常に事業の繁昌を極め、高い賃銀や、臨時手當を給與することを看板にして、多數の職工を全國到る所から募集したのである。戰爭後諸種の事業は反動影響を蒙り、戰前に比較して、利益の減少したことは、論を俟たない。造船業の如きも亦打撃を受けたものゝ一ツであるに相

違ないが、川崎造船所の如きは、最近の株主總會に於て、二割の配當金を株主に頒つ位の利益金を擧げて居る。戰時特別に多くの利益金の擧げられた當時に比較すれば、減少したと云ふものゝ、二割の配當金は一般から見て、高率と認められる。然らば一方に斯く株主には世間並み以上の配當金を與へて置きながら、勞働者の待遇を改善することには、少しも意を拂はぬ、物價騰貴の結果として、賃銀の實價は減少し、勞働者の方から、其塡補を要求し來つた場合に、之を拒絶して顧みない、否不景氣の爲めに、事業の上に生じた利益金の減少を塡補する爲めに、可憐なる職工勞働者を馘首するは勿論、減給の嚴命を下すのである。不景氣に臨んで事業が沈衰し、利益金が減少すると云ふのは、果して一種の不可抗力に基くものであらうか。私は必ずしもさうは考へない、事業の經營者が活眼能く經濟社會の變動する機運を洞察して、之に處したならば、不景氣の打擊の如きは、之を回避することが出來た道理であるのに、我國の事業家の無謀なる、好景氣の際には殆ど天井知らずに事業を擴張して、其爲めに反動時代に非常な痛手を蒙り、此痛手を治癒する方便として、馘首減給其他の手段に依つて、勞働者を壓倒し、痛手を蒙るに至つた自家の責任は何等負はないのである。世間に果して此位不公平な、又不公正な事があるであらうか。不景氣以來會社の重役中、自家の經營方針に誤まりがあつた爲めに、斯く事業を反動的趨勢の渦中に陷らしめたことに就て、責任を感じ、重役の職を退くとか、又は少なくとも賞與金でも辭する者があつたかと云へば、斯る類は頓と見受けられず、定款に規定してある通り、利益金に對して百分の幾らと云ふ割合の賞與金は必ず自家の嚢裡に入れる、而して此利益金を大ならしめるには、何でも營業費を節約しなければならぬと云ふ譯で、賃銀を減じたり、勞働者の一部を解雇する、詰り經濟社會の變動に伴う損失は全部勞働者に於て、之を負うことゝ爲るのである。漸く覺醒しかゝつた勞働者が此横暴なる事業主の態度に無關心で居ることが出來るであらうか。彼等が之に對抗して、爭議を起すのは、當然であつて、斯くして起された爭議の全責任は事業家に於て、之を負はなければならぬ。何故に、我國の事業家は勞働問題の研究に潜心して、事業經營の方針を其正しきに就かしめないのであらうか、私の心許なく感ずる所である。

英吉利、佛蘭西、露西亞等の農業に於ては從來Absenteeism とか、或は Absentee Landlordism とか云ふような言葉が農事經營法の一形態を代表するものとして、實際に用ひられて居つた。如何なる經營法が此名に當るかと云へば、詰り地主は土地の所在する場所に居住し、土地の管理に就て、親しく配慮したり、

注意するのではない。地主は勝手に都會に住居を定めて、一年の大半を此所に送る。土地は全く管理人任せにして、管理人が適當と認めた小作條件で小作人に貸渡し、小作人から徵收した小作料は都會に遊び暮して居る地主に送られると云ふ次第に爲る。是れでは地主自ら土地の所在する場所に居住し、土地の管理經營なり、又は小作條件の改定なりなどに就て、自ら意を勞する場合に比較して、土地の生産力を害するやうな結果を生ずる「アブセンチヰズム」の行はるゝ場所に限つて、土地の荒廢、農業の衰微を來すと云ふことが一般に認められるのである。而して私は此厭ふ可き農業經營の方式が我國の工業經營にも行はれて居つて、其爲めに勞働問題の解決が非常に紛糾し來ることの弊害を擧げざるを得ないのである。

今度の勞働爭議に於て、川崎造船所なり、三菱造船所なりの重役は眞實重役として、爭議を解決する全責任を荷つたであらうか。私は此點に於て多く遺憾とする點を見出すばかりでなく、我國の工業界にも「アブセンチヰズム」の憎む可き、忌む可き傾向の行はれて居ることを嘆ずるのである。即ち爭議の當初、三菱造船所の職工は總代を選んで造船所の所有者である岩崎某氏を訪問し、陳情しようとした三菱造船所は表面上株式會社には相違ないが實質に於ては、岩崎家の所有物に外ならない。然らば職工が岩崎家の主人に就て、何處までも事情を明にし、所志を果さうとするのは、當然であつて、岩崎氏たるもの、又是等の職工を引見し、若しも彼等の要求が道理に外れて居り、何としても造船所に於て採用することの出來ないものであれば、其事情を説明して彼等の諒解を求む可き譯である。然るに岩崎某氏は何を恐れてか、又何を耻ぢてか、斯る職工の代表者に面會することを回避し、遂に警察官をして職工を追拂はしたばかりでなく、自働車に乘る所を追縋られて車内から足袋跣しで逃出したと云ふことである。何たる醜態であらうか、我國隨一の富豪も誠に面目を潰した次第であるが、斯の如きは要するに「アブセンチヰズム」の餘弊を語るものに外ならない。岩崎家の專ら出資した事業でありながら、岩崎家の主人は事業の經營に與り知らない、其經營を擔當して居るのは、岩崎家恩顧の番頭であるとすれば、彼等が動もすれば主家の爲めに、出來るだけ多くの利益金を擧げようとする曲違つた忠義心と、此利益金の配分に與らうとする利己心との二ツから、平常職工勞働者を虐遇して、費用を節約するに勉めるのは勿論一旦爭議が起つた後に於ても、主人方の思惑をかねて、斷乎たる處置を以つて、其解決に當り得られないことゝ爲るのである。現に三菱造船所が彼の位の大會社でありながら、職工に對する待遇は甚だ薄く、爲め

に今度の爭議の如きをも剌戟したと云ふ一事に徴しても、彼等番頭共の勞働問題に對する理解の如何に乏しいかを語るであらうし、又岩崎某氏の勞働者を逃げ廻つたことの如きも、畢竟資本家でありながら、自ら資本を運用する術を知らず、番頭共に左右されて居ることを示すものであり、何としても「アブセンチイズム」の餘弊の歴然たることを認めざるを得ないのである。

兩三箇月前足尾銅山に勞働爭議の起つた際、罷業者たる坑夫は何名か上京して、銅山の事實上の所有者である古河家の主人に面會を求めた所、城鼠社狐に類する古河鑛業會社の社員連は共間を遮つて、何としても主人と坑夫とを會見させなかつた。住友家の諸事業に起つた爭議に於て罷業者が主人に面會しようとしたかどうか知らないが、面會を求めた所で、到底目的を達しなかつたらうと思はれる。さうすると是等の大家では恰も昔の封建時代に於ける殿樣のやうな人を家長に戴いて、番頭政治を行つて居るものに外ならない。私は古河市兵衞なり岩崎彌太郎なりが如何なる人物であつたかを知らないが、兎に角今日彼れだけに伸びる大事業の素地を築いた人であつて見れば、必ず相當の識見もあれば、膽略もあつたに違ひない、隨つて是等の人の生前に今日の如き勞働爭議に遭遇したならば、隨分自分一箇の度胸に任せて、思ひ切つた解決法を取り、世間をアツト云はせたかも知れない。然るに乳母日傘で育つた彼等の子弟には到底斯る活潑な事は行へず、又本來利祿を目的として集つた番頭共にも勞働爭議と爲つては、平生の金儲け仕事とは全く趣きが違つて、何とも手の下しようがない、相顧みて茫然として居る爲めに、神戸の爭議などは、解決が遷延するものとも考へられる。今度の爭議は結局解決するであらうが、兎に角我國著名の富豪が極めて簡單な勞働爭議に會して、何とも手の出しようを失ひ、主人を逃げ隱れさせて、一時を彌縫させると云ふ有樣であつては、今後爭議の劇烈に爲つて來た場合に、斯る富豪の家運は何と爲るであらうか、私は富豪自ら主宰す可き秋は今日に於て正に到來したものと考へざるを得ない。從來彼等は家運の長久を謀る爲めには、或は家憲を制定して、主人の財産處分權を掣肘するとか、事業を株式會社の經營に引直して、責任を有限にするとか、種々の策略を講じて、今日に至つたが、是等の方法は今日に爲つて見れば、家を維持する點に於て、幾何の資する所があるであらうか、其れよりも勞働問題の何ものたるやを理解し、之に對して適切の解決を下すのが家運維持の捷徑であると思はれる。富豪、資産家殊に親しく工業經營の衝に當つて居る人々の考の此所に及ばないのは、吾人の奇怪に堪ゆる所で

る。

勞働者は何を要求するか

今日の勞働者は何を事業主に要求して居るであらうか。以前の勞働運動に於て、勞働者が事業主に對して爲す所の要求は賃に賃金の引上とか、又は引下沮止とか云ふことを以つて、中心點としたのであつた。隨つて之に對する解決は簡單であると共に、折衷妥協の餘地もあつたのである。次いで、我國に於て工場法が制定され、漠然たるものではあれど、勞働時間の制限に關する制限の如何に重んず可きものであるかと云ふことが勞働者の頭腦に這入り、外國に於ける時間短縮の運動にも刺戟され、第一回勞働會議の前後から、八時間勞働制に關する要求が勞働運動の目標と爲つた。然し其間に於て、勞働者の内には、時間の短縮を喜ばないものもあり、又短縮された時間以上に、勞働に從つて、殘業に對する賃銀を貪らうとする者もあつて、狡猾なる事業主に乘ず可きの隙を與へたのである。然しながら、我國に於て勞働運動の進展する勢は頗る急であつて、今度の關西に於ける爭議に徴すると、勞働者の事業主に對して要求する所は著しく其趣を更めたことが見受けられた。

固より川崎造船所の爭議にしろ、三菱造船所の爭議にしろ、將た又其以前に大阪に於て行はれた爭議にしろ、賃銀の問題もあれば、解傭手當金の問題もあつた。然しながら勞働者の要求は決して斯る有形的のものばかりに止まらず、是等以外に或は團體交渉權の確認とか、或は工場委員會制度の採用とか云ふことが掲げられた。私は之を以て我國勞働運動に於ける一大進歩とするに躊躇しない。何故勞働者は團體交渉權を要求するに至つたであらうか。是れは要するに關西地方に於て、近年勞働組合が組織され、幾多の妨害に對抗して、次第に基礎の堅固を致すことゝ爲つた結果に外ならない。所謂個人交渉の下に於て、事業主が一個の勞働者と相對して、勞働條件を交渉する場合には、事業主の大なる勢力は必ず勞働者を壓迫し、事業主自身に有利で、勞働者に不利である條件の成立するを免かれない。斯くて勞働者は勞働組合の成立した曉には、團體交渉權を要求するが當然であつて、一方に勞働組合は團體的意志の統一を謀るの結果、團體所屬者一般の利害が團體の力で發揮されることとなるのである。勞働時間の長短、賃銀の增減等勞働條件中の重要なるものが團體交渉に依つて、決定されるに至つたならば、勞働者は團體の力に依賴して賃銀の上進を謀つたり賃銀の低落を防いだりするのは勿論、勞働時間の短縮された狀態の下に於て各自の所得の減少しない工風もするであらうし、又昨今のやう

に、不景氣の打撃として、一部の勞働者が解雇される場合には勞働組合の方では、寧ろ勞働時間を短縮して、以前と同數の勞働者を雇續いて貰ひ、斯くて失業者の發生を防ぐこともあらう。即ち團體交渉權の確認は勞働組合の發達を促す點に於て、勞働者に職業上の地歩を鞏固にする點に於て、勞資兩者の交渉を簡單にし、確實にする點に於て、資する所の多きことは論を俟たない。

我國の事業主が概して團體交渉權の確認に躊躇する、寧ろ或る手段を講じて、之を破らうとするのは要するに彼等の間に反勞働組合思想の熾烈なるものがあり、勞働組合を盛にするような團體交渉權は頭から、之を禁物とする結果に外ならぬ。而して斯く事業主の間に、反勞働組合思想の存在するのは、即ち政府の偏狹なる勞働政策の反映したものである。現在の我國に於ける如く、既に勞働者の團結があり、此團結は立憲國民として吾人が憲法に於て保障された結社を自由とする權利に據るものであり、而して事業主の持つて居る資本結合の權利と相對するものであるとしたならば、國家は何處までも勞働組合の組織なり、行動なりは之を自由にし、一方に組合の組織や、行動を妨碍する法制は總て之を廢止しなければならぬ。然るに我國に於ては、勞働組合は法制上公認されて居らない、隨つて事業主の內には、勞働者中勞働組合に加入して居る者には脫退することを求め、之に應じない者は直に解雇したり、又機會を求めて解雇したりする。一方に勞働者に職業を與へる場合にも、組合と關係のないことを條件とする。是等は事業主が權威を揮つて、勞働組合を壓迫するものであつて、斯る壓迫に堪へつゝ、勞働組合が團體交渉權を請求するまでに、勞働運動の歩を進めたことは、偉大なる事實であつて、將來勞働者が團結の力を通じて、何處まで、各自の地位を向上させ得るかと云ふことの一斑も窺ひ知られるのである。

工場委員會の型式

既に勞働組合が團體交渉權を持つような程度まで、發達したならば、勞働者は單に事業主に勞働力だけ貸し、之に對して一定額の賃銀を受取ると云ふだけの狀態に居つて、滿足す可きものではない。從來の產業組織は資本主義發展の結果として、資本家專制の甚だしきを極めて居つた。專制君主が臣下に對して、生殺與奪の權利を持つて居つたと同じく、事業主も亦事業の經營に於ては、一個の專制君主であつて、如何なる時期に臨んで、如何なる程度まで、勞働者の賃銀を削減しようが、如何なる程度に於て、一部の勞働者を解雇しようが、其解雇の時に臨んで、

幾何の手當金を與へようが、事業主の一存で決定す可き所であり、何人も之に干渉容喙することを許されず、勞働者の如きは、全く事業主の胸三寸に自家の運命を託したのである。法治國の今日に於ては、如何なる重罪犯人であつても、公判に附せられて罪科の裁斷を受け、辯護士をして自己の立場を辯護させ、如何なる理由で、自分は斯る刑罰を課せられるものであるかを諒解するを得るのである。然るに勞働者は何故自分が馘首されて、職業を失ふものであるかの理を知らない、自分の關係しつゝある仕事は自分を馘首しなければならぬまでに窮迫して居るかを知らない、總て暗黒裡に於て、自分一身の運命は自分にも判らずして、決定されてしまうことゝ爲るのである。勞働者が一個の奴隷たる境遇に安んずるものとしたならば、斯る状態で無事に時勢は推移することであらう。然し勞働者は教育上の影響から、四圍の感化から、將た又外國の刺戟から、永く斯う云ふ状態で、無關心で居ることを許されない。眞の自由人として、經濟的自由を享受する爲めに、自己の運命に自己の意志で、之を決定することを希望して已まないことゝなつて工場委員會の制度が主張され、提案され、續いて實行される域に達したのである。

工場委員會なるものは、一言にして之を云へば、勞資双方の代表者を選擧して、彼等を一堂に會合し、產業に關する諸問題を討議させ、決定させる機關である。委員會の種類には工場全科委員會とか、工場分科委員會とか、是等よりも餘程範圍を廣くした產業協議會とか云ふやうなものに區別されるが、工場委員會が勞働問題の解決に幾何の効果を齎らすかは、委員會組織の方法、其有する權限、勞働組合に對して持つ關係の如何に依つて、定まるのである。工場委員會は飽くまでも公正に、又勞資兩者を對等の地歩に置いて、組織しなければならぬ。斯く組織された委員會は工場經營に更に大きく云へば、工業經營に關係する大小の問題を審議する權限を持ち、啻に諮問機關であるに止まらず、執行機關を持つて居らなければならぬ。而して勞働組合との關係を云へば、勞働組合を以つて、工場委員會の基礎とし、勞働組合が工場委員選出の母體に充てられることを必要とするのである。

是等の點から考へると、我國の鐵道省が諸外國の實例を參酌したと稱して、近年に作り上げた現業委員會の如きは、以上私の擧げた工場委員會制度の項目から批評したならば、誠に似て非なるものとせざるを得ない。鐵道省の現業委員會では何を議するかと云へば、斯業經營の全局から見れば、些細なる問題であつて、斯る問題であれば、孰れに轉んだとした所で、勞働者の利益を獲得するに足らないばかりでなく、委員會に純然たる

諮問機關であつて、執行機關でないとしたならば、其實際上に於ける價値の小なるや、知る可きのみである。殊に私が現業委員會制度に就て、當局者の意見に對して、異議を挾まざるを得ない一事は當局者が現業委員會と勞働組合との關係を無視し、更に兩者を分離させようとする點である。私は考へる、一個の勞働者が其僚友から選擧されて、工場委員と爲つた場合に、如何にして自家の强味を保ち、資本家側の委員に相對抗して、下らないようにするかと云へば、自家の背後に控へた、而して自己を委員に選擧して與れた勞働組合に依賴するからである。委員一個の發言は即ち勞働組合の決議に基く聲であつて、無下に之を排斥したならば、或は勞働組合をして自己の主張を實行する爲めに、起つに至らしめるかも知れないと云ふ此一事が委員の言論に千鈞の重あるを得せしめるのである。然るに我國では工場委員會が出來たならば、勞働者の利害は此委員會で充分に保護されるから、最早や勞働組合の如きは、不用である隨つて官憲の力で、之を排斥しても、苦しくないと云ふ、斯の如き考の下に、骨拔き同樣の工場委員會を設立した所で、果して何の用を爲すであらうか、愚も亦甚だしと云はざるを得ないのである。

鐵道省が現業委員會を組織する以前から、鐵道關係の職工の間には、大日本機關車乘務員組合なる團結があつて、相當の活動をして居つたのであるのに、鐵道省は之を嫌たがり、現業委員會があれば、斯る自治團體は無用であると云ふ理由で、之に壓迫を加へて、離散の已むを得ざるに至らしめたのは、政府として短見の甚だしいものであつた。

工場委員會制度は多くの人々に依つて、必要とされて居る。英國などでは勞働組合が反對して居るのに、日本では勞働組合の方から、爭議の一要件として、之を要求して居り、流石に頑冥なる三菱造船所の當局者も工場委員會制度は實行の覺悟で、調査中であると言明した位である。然し此制度に就ては、既に政府が古風なる、而して幼稚なる委員會制度の標本を示して居る以上は、狡猾なる民間事業主は模範を之に求めようとする一方に、勞働者の方はモツト意義ある委員會制度の實行を希望して居るものとすれば、兩者の意見には自ら徑庭があつて、再度の爭を釀すこととなるか、測り知る可からざる譯である。政府の勞働問題に無理解である結果として、多くの機會に於て、却つて問題を紛糾させる趣のあるのは、吾人の政府の爲めに取らざる所である。

政府に對すに希望

政府が毎に勞働問題に無理解の態度を表白し、實際の爭

對して、傍觀者の地位に立ち、其解決に力を致さない、否、致すを得ない事實を目撃して、一部の世人は勞働問題に對する政府の職能を見限つたようである。私は現內相床次と云ふ人の無能であり、無識であり、優柔であり、不決斷であることを見て斯人を見限り果てた人物と考へて居るが、然し私は本來パーラメンタリズム即ち議會政策の信者であつて、今日に於ても尙ほ立法の力を通じて、勞働問題を解決し、我國の社會組織を堅實にすることを希望して已まない。隨つて政府が今日以上にモツト〳〵勞働立法の制定に力を致して勞働問題の解決に資することを當面の急務と考へる。即ち

第一、政府は速に勞働組合法を制定して、勞働組合を公認し、斯くて其健全なる發達を策ること、

第二、不景氣時代には、勞働組合の失業給與金支出額が膨脹して、組合の財政に壓迫を加へる恐れがあるから、政府は組合に補助金を與へ、組合と協力して、失業問題を解決すること、

第三、一般の勞働者に利害關係の深い勞働立法例へば國民保險法、養老年金法、最低賃銀法の如きものを制定すると同時に、工場法全部に亙る修正を施して、勞働條件の改善に資すること、

第四、治安警察法第十七條を廢止して、勞働組合の行動に對する檢束を解くこと、

第五、社會政策の意義を今日以上に廣く解釋し、資本主義の跋扈に大なる制限を加へること、

の諸點の如き、政府として急施を要する所である。以上の如き改革は多くの文明國に於ては、着々行はれて居つて、今日に於ては、毫も異とするに足らない。然も我國に於ては何時になつたらば、斯る社會的改良が行はれるであらうか。我國現在の政治が著しく金權政治の色彩を帶びて居ることは爭ふ可からざる事實であつて、如何なる政黨が政權を掌握したとした所で、其政黨が富豪から政黨資金を醵出されて、維持されつゝあるものである以上は、富豪や、有產者階級に對して、思ひ切つた檢束を加へて、社會を改造するが如きは、及びも付かないことであらう。斯くて愚圖々々に時の推移しつゝある間に、勞働者階級が議會政策に斷念し切つたならば、如何なる結果を生ずるであらうか、私の憂慮に堪へない所である。思ふに關西地方に今回の如き爭議が起り、生產の機關が停廢して、數旬の久しきに及んだことに對しては、如何に頑冥なる政府と雖も、勞働問題解決の緒を誤まることの如何に怖るべき結果を生ずるものであるかを具體的に會得したことであらう。勞働運動は劍や、銃の力で、抑へることの出來ないものであつて、之を抑へるのは道理

の力あるのみである。現に今度の爭議に於て、政府は軍隊を派遣したり、警察官を增派して、極度の干涉を勞働運動に加へさせたり、勞働運動の指導者を片端しから拘留し、續いて起訴した所で、少しも爭議解決の曙光を仰ぐに至らない一事を見ても私の以上の立言は動かす可からざるものであると認められる。

故に私は勞働爭議に對しては、政府は平常から之を豫防する施設を講ず可きものであり、爭議其ものゝ起つた際に、一方に偏倚した處置を施すことを以つて、絕對に不可なりとする。唯爭議其ものが永引いて、一國重要の生産業を停廢させ職工勞働者の所得の缺乏する關係から、地方の商工業にも打擊を及ぼし、爭議の續く間、勞資双方の感情が段々險惡に陷つて、何としても調和することの出來ない狀態と爲るが如き危險は勉めて之を回避しなければならぬ。此點から考へて、私は政府に向つて、

第六、速に仲裁々判の機關を設け、勞資の爭議は總て此機關に於て決定すること

の必要を力說するものである。

仲裁々判の機關は固より公平に組織されなければならず、勞働者の利害を代表する者を審判官の一員とするが如きは、絕對必要の條件である。而して斯る機關が常設された曉に於ては、國家は法律を以つて、勞資双方が勞働上の問題に就て、爭を構へた場合には、必ず其決定を仲裁々判に仰がせる、決して私に鬪爭的手段に訴へて、之を解決しようとしてはならぬ、而して一旦事件を仲裁々判の審議に付した以上は審議の進行中に於ては、勞資双方共に平生通り仕事を繼續しなければならないのは勿論であり、又裁判所の審査が終了して、或る期間効力を有する決定が下されたならば、其期間勞資双方は此決定に依つて示された所を新なる勞働條件として、仕事を繼續することゝする。

斯の如くして勞資の爭議の起ることを避け、又其起つた場合に、仕事の停廢を惹起さずして、之を繼續させて行かう、而して其間に公平なる決定が下されて、爭議發生前の狀態に産業を引戻すと云ふのが仲裁制度の眼目である。我國に幾度大規模の勞働爭議が起つて、世間を騷げて、當事者に苦しませることの少なからざる今日、爭議其ものに對する根本的政策の一定して居らないのは、誠に、我國の恥である。

今度の關西地方に於ける爭議に際して、政府は既に多數の勞働運動者を檢擧したようである。治安警察法第十七條の規定があり、誘惑煽動すら罰される以上は、罷業の際、甲乙が談話を交へて居つたのでも、見方に依つては、誘惑煽動をやつて居るものと見られるかも知れず、警察官の頭の働き方一つで幾人の人でも、之を檢擧するに難しとしないのである。誠に物騷

話であつて、勞働運動者は恐怖時代の政治に支配されると異ならない。爭議解決後、多數の運動者が珠數繋ぎ同樣の姿で、裁判に付せられることであらうが、斯る手段を講ずる政府の目的とする所は那邊に存するのであらうか。政府の目的とする所は、第一治安警察法を利用して爭議を未然に防ぐなり、未然に防げなかつたならば、責めて其及ぶ所を狹くすること、第二今後勞働運動を試みやうとする者を掣肘しようとすることとの二點に外ならないと思はれる。然らば是等の目的は充分に之を達するを得たかと云へば、私の知つて居る限りでは、一度も其例を存しない。治安警察法は何時も罷業の勃發した後に適用されるのであつて、之を未然に防ぐ効果はなく、單に首謀者に刑罰を課するだけの力あるに過ぎない。然らば勞働運動者なり、罷業の首謀者なりは、刑罰を恐れて、罷業を行はないかと云へば、彼等が罷業を計畫するのは、要するに事業主の横暴に堪へ切れない場合であつて、寧ろ自分の一身は犧牲に供して、多數の爲めに盡さうと云ふ殉道的見地に基くのであるから、刑罰の如きは殆ど之を眼中に置かないことゝ爲り、而して一旦禁錮刑を受けて、出獄すると、其人の思想は益劇烈にも爲るし、又殉道者たる點に於て、多數の尊敬を收め、推しも推されもせぬ一個の勞働運動者に爲り了せる。刑罰を以つて、勞働運動を抑制するが如きは、痴人の夢に異ならないであらう。

事業主に何を望む可きか

事業主や、資本家などの集まつた席上に於て、私共の常に耳にする所は我國の勞働者は權利ばかり主張して、義務の何ものたるかを知らぬとか、彼等は小成に安んじて、向上心に乏しいとかといふやうなことであるが、然らば事業主自身は勞働者に斯る攻撃を加へることの出來るほど、果して充分の資格を具備して居ると稱され得るであらうか。私の瞥觀した所では我國の事業主の間には、一種のタイプがある。即ち金權を萬能力と心得、此權力さへ揮つたならば、他に何等恐る可きものはないと考へ、利慾を求めるに汲々たる一事であつて、昨今彼等が勞働問題に手を燒いて居るが如き、要するに斯る極端なる思想の齎し來つた結果に外ならぬ。私は日本の事業主に向つては、社會の一員として、自家の行動をして社會の利害に調和させる一事を念とすること、資本主義を萬能とし、資本的生産制度の全盛を誇つた時代は既に過ぎ去つた。事業主も新時代の思想に順應して行かなければならぬことを勸告して已まない。

私は今度關西方面に、又其前關東方面に起つた勞働爭議の實驗から判斷して、我國産業界に一種の「アブセンチーズム」の

行はれることを以つて、勞資の關係を毒するの甚だしきことを認める。如何に巨額の財産を擁する者であらうが、又事業創立者の子孫であつて、血縁上其事業と離る可からざる關係を持つて居る者であらうが、事業經營の才幹に缺けて居る人物が社長の要職を僣するが如きは、誤まれるの甚だしきものであつて、斯く勞資の關係の紛糾し來つた今日に於ては、大工業を經營する會社の幹部は勞働者を向ふに廻して、折衝するだけの器量のあり、又新思想を理解する人でなければならぬ。三菱川崎兩造船所の如く、金儲けの術策に長じた俗才子輩を重役にして、如何なる結果を齎したであらうか、今回の爭議は明に之を語つて、餘蘊なしとす可きである。

勞働者の爲す可き所

勞働者が今後に於て爲す可き所の随一は團結を鞏固にすることに外ならぬ。勞働者が從來種々の不便困難と戰ひながら、之に打勝つて、團結を組織したればこそ、團體交渉權を獲得するを得るに至つた。團結があつたればこそ、川崎三菱の如き、巨大なる事業主と相對立し、官憲の事業主に偏倚した干渉を斥けつゝ、要求の一部分を貫徹するを得るのである。唯私が今日の勞働組合に對して、甚だ物足らなく感じるのは、鬪爭中に於ける生活を保障する資金に不足して居る一事である。勞働爭議が起り、勞働者が罷業を決行したならば、罷業者の生活を保障するに足りる惠與金が組合の方から給與されなければならず、是れが給與され、一方に爭議の惹起された目的が理解されるので罷業者は曠日彌久、事業主に對抗して、内に各自の結束を鞏固にし、外に事業主の屈服し來る時を待つを得るのである。然るに我國の勞働組合には爭議の際に用ひられ可き資金が備へられて居らない、時に備へられて居つたとしても、其金額の大なるを期し得られない。随つて神戸に於ける爭議の實例で見ると、爭議が始まると、罷業者の方では或は世間殊に他の勞働團體から物質上の援助を仰いだり、行商隊を組織して、自活の道を講じたりしたが、是れ位の事で、賃銀の喪失から來る生活難を凌ぎ得られる譯のものでない。爭議が永く續けば續くだけ生活に窮乏を訴へる、事業主は勞働者の弱點の此處に在ることを見透して、罷業者の切崩に掛かるのである。是れでは爭議の永引くに随つて、罷業者の旗色が悪く爲り、其陣營の亂れ出すに至ることも、亦已むを得ない次第であらう。

然らば從來勞働者は斯る鬪爭資金を備へるだけの餘裕がなかつたであらうか。我國勞働者の生活が概して窮乏の狀態に居ことは、一般の認める所であるが、其れにしても歐洲戰時

ける數年間の如きは、勞働者の所得を豐にし、彼等の生活を賑はしたことは、論を俟たない。殊に鐵工業に從事する勞働者が多く此種の惠に浴したことは、爭ふ可からざる事實である。

私は世間の道學者先生の如く、我國の勞働者に貯蓄心の乏しいことを責めない。肉體を苦しめる勞働に服する者が美食を欲し、美酒を好むのは、免がれ難き生理上の欲求であつて、彼等が右手に多くの所得を收めれば、左手に之を多くの消費に投ずるのは、人情の然らしめる所である。人間を一個の勤儉貯蓄を遂行する機械の如くに見て、賃銀が增加したならば、增加したと同じ割合に於て、貯蓄せよ、勞働者に快樂は禁物である、奢侈は不徳であると云ふやうな非人道的議論を弄するは、私共の斷じて取らざる所である。私は好景氣時代に、勞働者が懷に金の這入るに任せて、之を費消した行爲を咎めない。唯此際に鞏固なる組合が彼等の間に組織されて居り、勞働者の所得の增加する如く、之に對する組合の醵金も增加したならば、好景氣の續くと共に、組合の所有する資金は自ら豐富と爲るのである。而して好景氣の時代が經過して、反動期に臨んだ際、勞働組合は斯く豐富に爲つた資金を以つて、或は組合員中の失業者に惠與金を支給して、生活の安定を謀ることゝする、更に進んで今回の如き爭議が起つて、多數の罷業者が續出したならば、罷業者に爭議惠與金を支給する、斯の如くして罷業者は有力なる後援を得て、事業主に對峙して、敢て下らざるを得るのである。

同志が約を結んで、罷業をする、何の爲めにするかと云へば同志全體の社會的地位を向上し、勞働上の條件を改善する爲めである。此際には總ての人々が同樣に犧牲を拂ひ、苦痛を荷つて、前途に横はる目的を達するに就て、猛進しなければならぬ。其場合に一部の勞働者が中途に節を賣つて、事業主側に屈從する。斯くて罷業者の態度が攪亂されるやうに爲つたならば、折角の勞働運動も全滅に爲るのである。斯る違反者に對して、罷業遂行者が不快の感情を懷き、其感情が激つて、腕力沙汰と爲るやうなことは我國に於て屢々見る所である。同志を賣つて、自分の一時の慾望を充す、天下に此位憎む可き所業はないであらう。然し私は我國に於て勞働組合の下に罷業者の罷業中に於ける生活を保障する施設の缺けてゐる場合には、斯る賣節者を憎むよりも、先づ彼等を憐まざるを得ないのである。我國には治安警察法第十七條の規定の嚴酷なるものがあつて、罷業當時罷業者が各自の結束を鞏固にする爲めに、他の勞働者の所業に干渉すると、直に刑事上の制裁が加へられる。誘惑煽動の如き手段すら、處罰されるのであつて、此規定の存する以上は、我國では同盟罷業に際して、罷業者の間に結束を保たせることは

非常に困難となる。是れは英國に於ても、勞働運動を自由にするか、其れとも之を檢束するとか云ふ點から一時非常に問題とされて居り、或る時には罷業者が同じく罷業を盟約した者の內で、違背する虞れのあるような者に對しては、其行動を監視する爲に、追跡したり、住居の近傍を彷徨したりすることすら、違法と認められたが、其後所謂平和的監視（Peaceful picketing）だけは宜しいと云ふことに爲り、大に勞働運動を自由にした次第であつて、是れは大勢上、動かし難い所であらう。

勞働者の教育機關

其れにしても我國に於ける勞働運動の經過を考へると、其發展の急なることには、唯驚くの外はない。二三年前まで、勞働運動者の爭つて居る所は團結權の公認であり、勞働組合の公認であつた。然るに今日に於ては、團體交涉權の請求となり、續いて工場委員會制度の提唱と爲つた。工場委員會制度を押詰めて行けば、結局經營權の一部分を勞働者の團體に分擔させることに爲る。私は工場委員會制度を實行する以上は、此位徹底した形態に於てしなければならぬと信ずる。斯くて資本主義が潤色され、其働きが制限され、產業專制の時代から、產業民主の時代に移り、唯外形を裝つた勞資協調と云ふものでなく、眞に勞資の融合した、狀態が現出するに至るのである。諸工場の經營權を分擔せしめられた勞働團體の代表者は如何にして其責任を盡す可きものであるかと云へば、私は教育の力に依るの外はないと考へる。

教育機關は我國に於て進歩したと稱される。國民教育は全國に普及した。然し今日の、狀態では、高等專門の教育は有產者階級に獨占されて居つて、無產者階級の之に近づくことを許さない。以前は如何なる學校にも苦學生があつて、他人の家に寄食したり、篤志者に僅小の學資を仰いだりして、更に高等教育を受けることが出來たが、段々時勢が進んでから、斯る途は塞がれることゝ爲つた。職工の子弟は如何に俊才であつても、高等の工業教育を受けて、技師と爲ることは困難であり、勞働者が法政の知識を學習して、勞働運動の指導者と爲り、進んでは國家の立法事業に參與するに至ることも望み少なしとせざるを得ない。然るに時勢は如何であるかと云へば普通選擧の實行されるのは、目睫の間に居り、工場委員會制度も亦工業の經營權を勞働者に分擔させると云ふ形で、實行されるものであるとしたならば、吾人は何としても此際勞働者教育を閑却するを得ない。知識に對する欲求に於て、我國の勞働者が一般に熱烈になつて來たことは、明白の事實であつて眞面目に研究す

か、講演を聽聞するとか云ふ點に於ては、其熱心の程度は遙に有產者階級を凌駕しはしないであらうかと思ふ。

英國では勞働組合の本支部其ものが立派な敎育機關である上に、倫敦、バーミンガム、マンチエスター、グラスゴー等勞働者の蝟集する大都會には、勞働組合聯合會其他の團體が主催者となつて、一回限り又は連續した講義を開くし、勞働運動に從事する靑年で、將來に有望なる者は組合の費用で、オツクスフオード大學のラスキン、コーレツヂに遊學させる仕組すら設けられて居る。同コーレツヂは千八百九十九年の創立であつて、公共事業や、社會事業に從事する男女勞働者を敎育することを目的とし、現在の學長であるエツチ、サンダーソン、フアーニス氏の如き、同校獨特の敎育を開拓して、充分の成績を舉げて居ると稱される。私は今日直に之を我國に移植することを希望するものではない。然し乍ら我國で敎育令が改正され、敎育制度が革新され、官公私立の大學が全國に數多く設立され專門學校は續々昇格して、大學に爲つたとした所で、是等の大學は何れも有產者階級の子弟を收容して、現代の支配階級に必要なる敎育を授ける機關に過ぎない、其學費の不廉なる點に於て、晝間の授業を主とするの點に於て、系統的準備敎育の履修を必須の條件とする點に於て、甚く無產者の子弟を排斥して、彼等の近づくことを許さないのである。斯の如く勞働者から何時までも知識を收得する機會を奪つて、無智の民として置くことは、有產者階級の希望する所であるかも知れず、又斯の如くにして、勞働者を取扱ひに容易なる機械にしようとする次第であるかも測り難いが、勞働者の智識慾なり、向上熱なりは、今や抑へんとして、抑へ可からざるものであり、更に四圍の事情は彼等を驅つて、事業經營權の分配を要求せしめざれば已まないことゝな爲つて居る。然らば此際吾人は勞働者を理解して、彼等の要求する所に遮ぎからしめるのと、彼等を誘導して、次第に彼等の要求するところに近づかしめるのと、孰れが自然であるか、又孰れが正義に適つて居るかと云へば、其前者でなくて、後者であることは論を待たない。而して經營權を分擔せしめようとする勞働者には勞働者自身の利害よりは、寧ろ社會公衆の利害から考へて、相當の敎育を授け、又智識の程度を高くして、經營權の分擔者として、誤まる所なからしめることを期しなければならぬ。此一事は特に私が勞働者敎育の重んず可き理由として、舉げんと欲する點である。

地上に建設せらる可き神の國

慶大教授　高橋誠一郎

一

宗教的信仰を以て日常の生活から本質的に懸け離れたものと看做すに慣れた今の時代に在つては、初期の基督教が來世に於ける光明幸福の神音であつたと等しく、又た現世に於ける社會救濟の福音であつた事實を了解することが困難であるかも知れぬ。偉大なる基督の革命に對し、其路を開いて、之を可能ならしめたものは、急激なる私有財産制度の發達から發生した社會的病患に惱めるイスラエルの民が、古の族宗生活と集合財産の制度に復歸せんとする純眞にして熾烈なる意向と強固にして本能的なる必要とであつた。斯くて來世安穩と現世濟度の兩福音は相並んで傳へられた。基督教が燎原の勢を以て當時の人心を征服し得たことは全く是れに依るものである。既にイスラエルの豫言者等は熱狂的に社會の公正を要求し、而して若し此の世界にして正しからざるか、若しくは正しきものたらしむることが出來得ないとしたならば、寧ろ之れを破壞するに如かずと絶叫して居つた。而して基督教の創始者等は又熱烈なる祈願に由つて世界の終末を斷定した。「世界の終末」はペンチイに從へば、一般に想像せらるゝが如く、地球の終末に非ずして、現存社會制度のそれである。而して彼れ等の祈願は成就した。洵に絶望的の教理ほど偉大なる效果を生ぜしめ得るものはない

基督及び其の直接の弟子等は富者階級に對して戰慄す可き叱責と威嚇の聲を發してゐる。「汝等貧しき者は幸福なり、神の國は即ち汝等の所有なり」と示さるると同時に、「汝等富める者は禍難なる哉、既に安樂を受くればなり」と説かれてゐる。使徒ヤコブの聲は恐らく今も猶ほ物凄じく富者の耳朶を打つでゐらう。曰く「富める者よ、汝等既に來らんとする禍害を思ひて哭き叫ぶ可し、汝等の財は朽ち、汝等の衣服は蠹食ひ、汝等の金銀は銹腐れり、此の銹、證を爲して汝等を攻め、且つ火の如く汝等の肉を蝕はん、汝等此の末の日に至りて猶ほ財を貯ふ

ことを爲せり。視よ、汝が其の田を穫らせし雇人に與へざりし値は叫び、其の刈りし者の叫ぶ聲は既に萬軍の主の耳に入れり。汝等は地に在りて奢り縱み、屠らるゝ日に在りて猶ほ其の心を悅ばせり。汝等は正しき者を罪に定め、且つ之れを殺せり、彼れ汝等を拒がざりき」と。

初期の基督教會は使徒等の共産主義的傳示を遵奉した。「使徒行傳」は言う「其の時、此の言を聞きいれし者はバプテスマを受けたり。此の日弟子に加はれる者凡そ三千人、彼れ等は常に使徒等の教訓を受け交接を爲し、パンを擘くことと祈禱とを務む。是に於て敬畏、人々の心に生ず、又た使徒等に託りて許多の奇跡と休徵行はれたり。信者は皆な一所に會りて、諸物を共にし、産業と其の所有を鬻りて各人の用に從ひ之れを分け與へぬ」と。又た曰く、「信者は皆な心を一にし、意を一にして、誰れ一人、其の所有を已が物と云ふことなく、凡て之れを共に有てり。使徒等大なる力を以て主イエスの甦りし事を證し、彼れ等皆な大なる恩惠を蒙れり。其の中に一人も窮乏者なかりき。蓋し地所或ひは家を有てる者はそを鬻りて、其の鬻りし所の價を携ち來り、使徒等の足下に置く、之れを各人の用に從ひて分け與へしが故なり。レビの族にてクロに生れしヨセフは使徒等に呼ばれてバルナバと稱る、之れを譯けば勸慰の子、此の人田疇ありけるが、そを鬻りて其の金を携ち來り、使徒等の足下に置けり」と。

斯くの如き基督教的共産主義は一方に於ては凡ゆる信徒に對して命ぜられた同胞的愛情の一現であつた。神の父たることを認めたる者は、又た人の兄弟たることを認めなければならなかつた。人間が總て同等の者として共同の生活を享け、共同に財貨を所有す可きものであるならば、彼等は財貨と等しく觀念をも亦共有しなければならぬ、然らざれば彼等を結合す可き紐が存し得ない。共同の觀念が彼れ等の間に行はれ得るが爲めには、彼れ等は個人的見解の上に高く立つ至高の權威、行爲の嚮導原理を承認しなければならぬ。殊に彼れ等は理想の嚮導に託り私利に對する一切の誘惑から防護せられなければならぬ。財富をして彼れ等の上に根城を取得せしむ可きものでないとしたならば、彼れ等は富貴に對する無關心の態度を養はれなければならぬ。斯くの如きものが基督の福音の有する社會的方面であつた。そは人々が娑婆世界を征服するの力を獲得し得るが爲めに、之れを蔑視せずして、而も之れを厭離す可きことを彼れ等に教ふるものであつた。基督教は恰も人間の本性に於ける求心力に強く訴へて、其の自然の遠心的傾向に對抗せんと期たものである。斯くて基督教的共産主義は又た他方に於て富の所有に作

へる精神的危險を惹起することゝなるに至したものであると稱し得る。是等の理由から使徒時代に試みられた特殊の共産主義は永く基督教的社會の理想的形態として仰望せられた。而して基督教團の常識は之れを實際に復活せしめんとするの提言を抗拒したに拘らず、單純なる富の所有權其の者は基督教徒に對して其の享樂の倫理的權利を賦與するものでないと云ふことは廣く認められて居つた。

二

希臘及び羅馬に在つて國家の法制を以て規定せられた所のものは、猶太民族の間に於ては神の法律を以て強制せられた。神エホバは猶太の民が彼れに順服するを條件として、彼れ等に保護を與ふ可き契約を爲した。猶太の民が神法に服從する正常なる動機は、此の神的立法者の約諾に對する信念と其の刑罰に對する恐怖とであつた。基督教は是れからして成文神法の思想を傳承した。一切の基督教徒は誠實に之れを承認するに由つてイスラエルに對する神約に均霑するヿが出來る。基督教會は又た神法の支配を認むるに由つて本質的に國家と其の法律とから離れて統治せらるゝ共同團體として成立するのである。

基督教は猶太國の權威をも、羅馬帝國のそれをも等しく拒否して其力を人々の心意の上に逞ばした。基督教は人の世には國家の法律よりも更に高い法律の支配が存し、政治的社會の秩序よりも更に高き秩序の存在するヿを教へて、吾人は人よりも寧ろ神に從ふ可きものであることを說いた。基督教は社會的病患を救治するが爲めに熱烈に正義と平等とを說いた希伯來の豫言者と、國家的拘束を脫離して個人的生活の完成を企圖したストア哲學に由つて一層强化せられたる精神的雰圍氣の裡に生れ出でたものである。基督教は人間本來の平等を教へ、共同團體若しくは國家の界域を越えて、一切の階級と種族とを抱擁せる同胞主義を說いた。統治權は劍を佩びて、神の意志を施行す可く、彼れによつて任命せられたる者に屬するものと解釋せられた。

古代の國家は死を以て其の教祖と其の教徒とを迫害した。初期の基督教徒は市民生活を廢棄した。斯くて國家と教會、人法と神法との對立は愈々益々强固と爲つた。基督教團は其の初期に在つては一切の現世的統治と沒交涉なる態度を取つた。現世的組織から隔離した彼れ等は直接に國家を敵視し、若しくは俗法の支配を改修して、之を神法と一致せしめんヿを企つる事はなかつたのであるが、而も其の企圖する所は政治的組織及び政治的利害以外に存して居つたのである。原始基督教徒の見解に據れば、一般人間社會は一時サタンの支配に陷れる罪惡世界

である。急速なる破壊は其の頭上に臨みつゝあるのである。固より教會の方舟の中に收容せられたる神聖たる小團體と斯くの如き世界に伍することとの出來ぬものである。斯くて希臘及び羅馬の基督前の文明に於ける一切の社會的操守、最も高尚にして且つ光輝あるものであつた愛國心と市民的義務の觀念とは基督教の影響に由つて世界的仁愛主義に展開し、若しくは教會の上に集中せらるゝの傾向を示した。ターツルヤヌス曰く「吾人は唯一の國家、即ち世界を認むる」と。オオリジエニーズ曰く「吾人は吾人が神の言葉に託つて打ち建てられた祖國を有するを知る」と。

而して又た初期の基督教は貧民の宗教であつた。其の周圍に聚め得たる信徒は多く貧窮なる職人、卑賤なる苦役者及び奴隷であつた、富商及び地主の階級は殆んど皆な異教の信者であつた。洵に第四世紀に至つても猶ほコンスタンチノープルの法會議に列なれる僧正は農夫、織匠、革匠等の如きものであつたと稱せられてゐる。後年、ルイ十四世の宮廷に在つて、ボスウエの言へるが如く「教會は其の初めに於ては單に貧民のみの爲に打ち建てられたものである、而して彼れ等は聖典が「神の國」と呼んだ多幸なる都市に於ける眞の市民である」。

而して基督教がコンスタンチヌス大帝の下に西紀三百二十四年、羅馬帝國の國教と爲つた時、宗教的の團體なる教會は既に其の特有なる精神的存在を意識し、自己を以て單純なる國家制度と看做さなかつた。社會の全宗教生活は縱し全然國家の管理と勢力とから脱却することを得ないとしても、尙ほ本質的に之より獨立せるものであると言ふ思想が行はれた。後世に至つては、羅馬の僧正シルヴエスターの祈禱によつて其の癩病を癒治し得たるコンスタンチヌス大帝が其の洗禮から四日目に至つて、俗界の支配の持續が靈界の支配の自由を束縛す可きを怖れ、舊都羅馬を棄て新都君府に遷ることを決意し、同法王及び其の後繼者に伊太利亞及び羅馬西帝國内の諸邦に對する主權を讓渡したと傳ふる、謂ゆる「コンスタンチヌスの贈與」なる虚構の物語すら行はれた。基督は「カイゼルの物はカイゼルに歸し又た神の物は神に歸す可し」と敎へてゐる。然らば「何れがカイゼルの物であり、何れが神の物であるか」。

聖アムブローシウスはヴアレンチニヤヌス三世に對し激越なる語調を以て、帝權と雖も侵入することの出來ない境界のあることを主張してゐる。皇帝は貢付を徴することが出來る。彼れは寺院の土地を徴することが出來る。而も神の殿堂を徴することは出來ない。「宮殿は皇帝に屬し、寺院は僧侶に屬する」。「神的なるものは皇帝の權力に服することがない」。然しながら彼れは敢て

暴力を以て皇帝の命令に反抗せんとするものではなかつた。信徒の祈願は實に彼れが防禦の唯一の武器であつた。然しながら教會が皇帝より獨立せる法王を戴き、羅馬を以て其の主都と爲すに至つた時、古羅馬の世界的帝國に關する觀念が精神的形態を取て次第に復活した。殊に舊約全書に訴ると愈々多きに至て教會と俗界との權力爭鬪を激甚ならしむ可き好個の武器は供給せられた。新約全書に現れた基督及び使徒の政治的無關心と謙卑とは洵に舊約の律法及び豫言者に看出さるゝ攻撃的語調に比する時は頗る軟弱なる武器であつた。舊約全書に對する依據と、是れから生ずる教會の主張に對する有利なる結果とは、又た歐洲に於ける俗界の權威が一個の皇帝から多數の國王に移つた事に由つて助勢せられた。多數の國王は舊約全書中に出現する所であるが、イムペラトール、アウグスタス若しくはカイゼルと稱するが如き權威者は全然此所に其の姿を顯すことがないのである。而して舊約全書中に於ける國王は又た神託によつて非議せらるゝを得る所のものである。

三

プラートンの共和國は國家に非ずして教會であると稱せられた。而して天國に於ける斯くの如き都市の理想は常に基督教的世界の空に翱翔し來つたものであつて、終に聖アウグスチヌスの「神の都」に於て實現せられたのである。而して恰もプラトーンの「共和國」が希臘に於ける國體の頽廢に刺激せられて成たが如く、アウグスチヌスの「神の都」は羅馬帝國の凌辱衰落によつて暗示せられたものである。彼は其の時代の羅馬に對し、宛もプラトーンが希臘に於ける其の時流に對して有したと同一の關係に立つものである。然しながら是れ等兩者間には多大なる相違の存するを認めざるを得ない。De Civitate Dei. は羅馬帝國の破壞が異教の腐敗に由るものであつて、基督教の隆興に基けるものでないことを主張する辯難的論文である。彼れは毫もプラトーンが希臘の社會に就いて有せるが如き同情を古羅馬の生活に對して有するものではない、而して又た毫も其の廢墟から興起す可き教會的王國の思想を有するものでない。彼れはプラトーンの有したるが如く、現世に於ける別異なる一國家を想像するの力なく、又た自家の神學以外に何物をも諒解することが出來なかつた。

基督教會は人々の日常の行動に基督の教理を適用するを以て任務と爲せる機關であつた。ボロニアの僧グレーシアヌスの教令集は宛もジュスチニアヌス一世の法典編纂が俗界の法制に對すると等しき關係を教界の法制に對して有するものである。

に前者のデクレタムは明かに後者のコデックスの模倣である。教會の法規は他の社會的活動と等しく人間の經濟行爲をも律せんとした。數世紀に亘た研究と努力の結果を凝縮した教會法中には加特力教的經濟理論とも稱す可きものが含まれてゐる。固より茲に謂ゆる「經濟理論」とは經濟的現象の間に通ずる因果關係の說明に非ずして、經濟的方面に於ける人間行爲の理想的指導原理を意味するものであることは言ふまでもない。ボロニアに於けるジユスチニアヌス法典研究の復活と共に「赤髯」バロバロツサ）の綽名を以て知られた神聖羅馬皇帝フレデリカス一世の奬勵の下に法律學者は帝國對法王關係の理論に有力なる貢獻を爲すに至つた。君主の專制的立法權は羅馬國法の基礎である。「普遍的理性は權利原則の根源である。然も君主の意志は法を作る」。此の原則を力說するは即ち法王司法權の擴張に對して通過し得ざる限界を設くるものである。そは「君主の法令は教會の法令に優先するものに非ずして、之れに準據するものである」と說いたグレーシアヌスの原則と全然矛盾するものである。斯くて又た經濟原理の方面に就いても、「公正の價格」（價値及び價格は財に對して投入せられたる費用若しくは勞働及び盡力の高さに依つて決定せられなければならぬ。然しながら這般の價格は事實上經濟生活に於て生ずる價格と同樣なる可きものに非ずして、公正の觀念に適合するものでなければならぬと做すの見解から發するものであつて、此の價格を呼んでジユスタム・プレチユームと云ふ）に關する基督教の教義が實質に關する羅馬法學說（眞の價値以上に賣り、眞の價値以下に買ふは賣買當事者の巧智に由る其の自然的權利なりとして之れを許容するはパウラスを始めとして羅馬法學者の通說であつた。）に對する意識的反抗であつた。又た基督教會の徵利禁止は一面に於て羅馬法が明かに利得を目的として貸付を行ふことを許容し、元本と等しく利子の支拂をも强制するの手續を規定せるに對する反抗であつた。

アクイノーの聖トーマスは彼の時代の齎せる物を總括し、且つ之れに修飾を施した。而して彼れは熟練なる技能と老熟なる見解とを以て之れを行つた。トーマスの功績は包括的基督教世界觀の完成であつた。此の偉大なる妥協和解の人は、自然法及び教會法をして、貧と富、有產と無產、農と商、不動產と動產とに分たれた現實當面の社會的要求と或る程度まで調和せしめんことを企てた。而して彼れは基督教政並びに其の一切の施設を以て來世に對して人々を用意せしむるが爲めに神に依つて創設せられたる手段であると考へた。現在の世界は眞の幸福に到達す可きの場所に非ずして、之れに對する訓練を得るの地と看

做された。トレルチの言の如く、地上に建設せられたユートピアの思想は決して中世的のものではない。そは全く人本主義的のものであり、「文藝復興」の時代に發するものである。

四

中世の思想家は曾つて完全なる現世的社會を求むることがなかつた。而して彼れ等の多數は娑婆世界から隱遁した。然るに中世末から近世に亘つて古基督教最後の歸結たる出世間的精神生活に對する隱遁は既に青春的に向上せんとする人心を惹くことがなくなつた。オイケンの言葉を借りて云ふならば、人知は遂に其の生活の重心が現世に移され、而して來世は全然色褪するまでに次第に強く此の現實世界に引かれつゝあるを感ずるのであつた。曾つて貧困は富よりも高く思料せられて來た。殊にアツシイチイの聖フランチエスコの如きは、眞の基督教徒は須らく原始基督教の本來に復し、「山上の垂訓」の精神に歸る可きものである。彼れ等は自巳拒否の生活を送り、現世的諸物に對して毫も拘束せらるゝことなく、貧困を抱き、慈善を行ひ、而して勤務と勞働と乞食とから其の生計を得可きものであると説いた。實に彼れがパウペルタス・エヴアンヂエリカの教義は非妥協的にして出世間的なるものであつた。然るに第十四世紀に至つてフイレンツエの大僧正、聖アントニノは「貧困は善事でない、其れ自體に於てそは惡であり、而して單に偶發的に一定の善に導くるものと思料せられ得るものである」とさへ主張した。

羅馬加特力教は經濟生活を醱解せしむることに於て著大なる影響を有して居つた。僧院は宗教的基礎の上に建設せられ、宗教的動機に依つて鼓動せしめられた產業的共同主義の儀範を與へた。都市に於ては商工業は整然たる市民生活を維持するが爲めに協力す可く誘導せられた、而して金錢上の行爲に關する基督教的正否の原則は宗教的制裁の下に克く勵行せられた。然しながら人間行爲の一切に理想的嚮導原理を與へて、凡ゆる生活上の訓練を施さんことを企圖した教界の權威は、漸次其の任務を遂行するの力なきと同時に、又た不適當なるものと爲つた。而して第十六世紀に至つて、それは終に致命的の打擊を蒙つた。宗教改革に際して廣大なる歐洲の地域は法王に對する忠順を棄て、而して基督教的倫理が經濟生活の能動的中心に於て勵行せられたる其の權威を拒否した。市府の有司に對して宗教的勢力を作用せしむる舊來の方法は最早効果なきものと爲つた。洵に第十五世紀に於ける教會の廢頽墮落の事實を知る者は、人間生活の各部局に亘つて之れを道德化するの勢力として羅馬法

王を認めるとは殆んどパラドックスたるの觀があつた。然しながら法王の權威が一度び排除せられたる時、商業的精神の進前に對して有效なる反對論を提唱し、若しくは適切なる矯正策を提起し得るに足る勢力の存在を視ざることと爲つた。

カール・マルクスは其の「資本論」中に於て、新教は本質的にブルジョワの宗教であると稱してゐる。而して英米に於ける其學徒は更らに這般の論を推し進めて經濟的自由主義は新教の宗教的個人主義の直系を傳へて生じたものであり、經濟學上に於ける自由放任主義を産んだ自然的自由の學說は新教の良心自由の原則から引き出されたものであると稱してゐる。洵に「資本の歷史及び私益の至上權」即ち其の近代的の體樣に於ける商業は宗教改革の時代と時を同くして始まつたものである。ルーテル及びカルヴアンは敎會及び國家の兩者に在つて徹底せる個人主義の路を開いた。而も彼れ等の孰れと雖も、意識的に之を一つの理想として自己の眼前に置いたものではない。吾人はルーテルによつて指導せられた獨逸の宗教改革を以て同國に於ける富者階級の利益の爲めに行はれたものであると做すの說に贊することは出來ない。先づ第一は彼れの心を支配したものは、不死の靈魂の幸福と基督教的眞理の救濟とであつた。然しながら彼れは結局貧民の救濟を敎會の手から奪つた。敎會の財産は俗用に供せられて、資本の蓄積は鼓舞せられた。殊に貧困者に對して施捨の流れ出でた源泉は破壞せられて、窮民の扶助は全然敎會の職責の一部を形成することなきに至つた。農民戰爭に際して、「基督教的自由と同胞主義の時代は來た、而して一の階級は他のものゝ如く富有なる可きものである」と叫ばれた時、彼れは宗敎の名に於ては、農民階級の蜂起を非難した。彼れは小農民の蜂起を以て強ち不正のものと考へなかつたに拘らず、劍を執る者は劍によつて滅びざる可らずと做して之れに向つて忍從を說いた。而して一揆の擴大するに及んで、彼れは假借なく農民を屠殺す可きことを諸君主に勸めた。

ハインドマンの如き人に言はせれば、敎會は其の收入の半ばを貧民救濟の爲めに費すものであつた。然るに「何時たりと雖も直ちに敎會から救助を受けることを過たなかつた貧民、常に僧院に於て食を得、雨露を凌ぐことを得た旅人、僧堂尼院に赴いて敎育を受けた庶民の子女は同時に旅行と宿所と學校とを奪み去られた。自然に國王及び貴族に對抗して人民に味方した此の有力なる僧正領地は今や貴族及び中層階級の手中に於ける壓迫の手段と化した。法外の高地代や高利子は爾後、非難せらるることなくして、却つて是認せられた。而して新教 宗教改革は多數英國民の窮迫增加の直接原因と爲つた」と稱してゐる。

然しながらルーテルは貧民の救濟を教會の手から奪つたまゝに拋棄して毫も之を顧みない者ではなかつた。即ち一千五百二十年、大窮乏の獨逸を襲ふや、ルーテルは各市をして其の貧民を扶助するが爲めに義捐す可きを說き、必要ある場合には近隣都市の援助を受く可く、而して異鄕の乞食又たは浮浪者は之れを寛恕す可らずと說いた。一千五百二十三年、彼れはライスニツヒの共同基金に關する制規を命じて下の如き原則を樹立した。貧民救助は教會と何等の關係なき俗界の權限內に屬する。何人も乞食することを許さる可きでない、勞作するに適する貧民は之れを强制して勞作せしむ可きものである、勞作に不適當なる者は援助せられる、物資の不足に由つて其の業務を行ふ能はざる職人は貸付に依つて援助せらる可きものである。最後に若し此の基金を形成する元本が枯渇するか又たは不十分と爲つた時は、其の組合員は自己の間に不足額を蒐集す可きものであると。斯くて俗界と靈界とは截然區別せられた。感覺と精神との混亂は飽くまで廢除せられた。

文藝復興と宗教改革とは等しく娑婆生活に關する中世的思想に對する叛起であつた。兩者は等しく人間が健全なる享樂を目的として現世的生活上の事項に出精し努力するを是認し激勵する健全なる現世的哲理を獎勵した。ルーテル等の宗教改革家もエラスマス及びウルリツヒ・フオン・フツテンの如き典型的人本主義者と共に富に對する貪慾心に反對し、飽くことを知らざる營利慾と放縱なる奢侈的生活とを激しく攻擊した。「宗教改革の曉星」と稱せられたジョン・ウイツクリツフは夙に其の時代に於ける手工ギルドの橫暴を罵つて、平等の使徒として立つた。加之ならず、宗教改革家が正直なる勞働に高き名譽を與へて之れを釋放するに資すること大なりし事實を忘れてはならぬ。而してカウツマンの說くが如く、古典研究に由つて復活した異教的精神と新大陸に於ける貴金屬の發見其の他に由つて誘起せしめられた貪婪心とは之れと時を同うして生じた人心の宗教的釋放と結合して、近世的富の基礎を形成する經濟的資源の著大なる發達を導いたのである。而も進步と貧困との嫌惡す可き對比は又た茲に其の根柢を有してゐた。

五

而して宗教的及び道德的混亂漸次大ならんとしつゝある間に、物質的秩序を維持するに資せる强大なる近世的國家は形成せられたのである。人間生活は爰に便宜上分割せられ得ることと爲つた。「國家統治の眞始源、範圍及び終局」を論じて、之れが系統的構成的理論を表明したジョン・ロツクは國家に取つて

沒交渉なる事項として、宗教制度及び教規を取り扱つた。然るに他方に於て個人的宗教を振興せしむるに鋭意なりしジョン・ウエスリの如き人物は多く政治問題に關與することがなかつた。而して「國富論」の出版は又た經濟學史に於ける大界標である。アダム・スミスの時代に於ては、國民若しくは個人に取つて其の物質的繁榮に資す可き諸條件は、便宜上宗教若しくは政治學の孰れと雖も、之れに參加するの必要を有せざる別個の部門に於て研究せらるゝことが出來た。「國富論」は政治的基礎を離れて、純乎たる經濟的見地から立論し、國力と直接交渉なくして國富を取り扱ひ、自由無障なる私富の追求は克く國富の增加を齎す可きことを主張せるものである。

斯くて自由放任の主張に基いた個人主義の經濟學說は一代を風靡した。久しく財力及び能力の自由無障なる發動を阻止し來つた舊時代の煩雜なる干渉制度は爰に崩潰し去つて、各個人は皆た自己及び自己の所有物に對して絕對無限の君主たる權利を有し、智ある者、力ある者、富ある者は何れも皆な新制度を謳歌しつゝあつた。然しながら斯くの如く經濟上に於ける個人的自由の制度は決して多數人民をして其の幸福を確保せしむるものではなかつた。而して此の「大規模產業組織の混沌時代」に於ける社會的動搖及び勞働不安の狀態に對して舊經濟學は殆んど何等の寄與を爲してゐない。

是に於て乎、新なる論者は既に抛棄せられたる中世的制度に對する浪漫的反動に救濟を求めた。彼れ等は時代の技術的產業的進步と其の大規模生產並びに分勞を承認する一方に於て、現在の社會的秩序の根本觀念及び制度の或る者に反對し、而して經濟學者が宛も究竟、不可疑のものとして一定の社會制度を想定するを非難した。彼れ等は單なる幻想に憧憬した者ではない。彼れ等は主として倫理的基礎から出發するものではない。而して此の點に於て彼れ等の計畫は過去に於けるサー・トーマス・モーア、マーブリー、モーレルリー、ゴツドウイン、バベフ等のそれと相違する。彼れ等の計畫は經濟的見地に立つものである。而して彼れ等の批判は產業革命及び佛蘭西革命の苦惱から發生したものである。一言にして言へば、彼れ等の所論は非資本主義的であつた。彼れ等は掃蕩的經濟改革を鼓吹する。彼れ等とは卽ち社會主義者である。

第十九世紀前半の社會主義者はサン・シモン、カベー其の他の多數の如き明確に基督教に反對の論者さへ、一般に信ぜられてゐる所よりも遙かに以上に之れが影響を受けてゐた。熱烈にして神秘なるサン・シモンは明かに其の最後の著 La Nouveau Christianisme. に於て基督教の改革を企圖した。純正なる基

督教理に從へば、貧困階級は其の窮乏に忍從す可きものである。然るにサン・シモンは之れに反して享樂と其の欲望の滿足を熱望することを彼れ等に教へた。彼れは是れによつて基督教を更らに廣く更らに精確に解釋するものと思惟した。サン・シモンは法王に寄語して曰く「貌下の先驅等は既に十分に基督教の神學を完成し且つ宣傳した。今や其の教理の適用を念とするは貌下の義務である。眞の基督教は啻だに天國に於てのみならず、地上にかても亦た人々を幸福ならしむ可きものである。貌下の任務をして神的道義の根本原理に從つて人間種族を組織するに存せしめよ。貌下は信徒をして貧民は神の寵愛する子女たることを想起せしむるに其の行動を限定す可きに非ずして、最大多數階級の精神的及び物質的狀態を急速に改善するが爲めに大膽に且つ猛烈に武斷的教會の凡ゆる力と手段とを使用しなければならぬ」と。

然るに其の合理的宗教の理想に熱中したロバアト・オーエンは、僧侶の不和に於て除去し得ざる障害に遭遇した。彼は凡ゆる現在の宗教は虚僞であり、不德であり、敗壞的であり、又た自然の法則に反するものであると考へた。彼れに從へば、是れ等の宗教の容望である最も明白なる證據は之れを模範として建設せられた凡ゆる社會の不幸なる狀態に於て看出される。彼れがニュー・ラナークの內地殖民地に於ては、加特力、教友派再洗禮派、アングリカン、プレスビテリアン及びメソヂストの各教派は皆些も傳道の意志なくして、相共に生活してゐる。彼れはニュー・ハーモニーなる其の亞米利加の殖民地を創立するに當つても同一の原則によつて導かれてゐる。然しながらニツチは、オーエンの事業を通じて此の英國の博愛主義者が、合理主義的若しくは功利主義的學說に比して基督教の教理に感化せらるゝこと、如何に大なりしかを認めることは極めて容易であると稱してゐる。

カベーも亦同一の影響を免れることが出來なかつた。彼れが Voyage en Icarie. の思想は第十六、七世紀の「無何有鄕」篇、基督教の社會的教理及び初期の教父の諸作から直接間接に得て來たものである。洵にカベーはイカリアの神秘境に於けるカリスダル卿の不可思議なる旅行記に對する其の序文に於て、基督教と共産主義とは畢竟するに同義の名詞に過ぎないと主張してゐる。共産主義の夢は長くカベーの心胸を支配した、而して彼れは之れを現實世界に實せしめんとして其の生涯の十有六個年を苦い經驗の裡に費した。

六

イカリアの共產的社會は第十九世紀前半に於ける社會主義運動の遺物として看做さる可きものである。一千八百四十八年以後に於て新しい社會主義が舊い社會主義に代つた。然しながら共產主義的計畫の上に社會を組織せんとするの提案主張の歴史から全然離れて、勞働及び分配平等の原則を認め且つ之れに從つて行動して來た無數の團體があつた。古くはエッセンズ、再浸禮教徒、ダンカース、モレーヴイアンズ(一名Unitas Fratrum又たはユーナイテツト・ブレズレン)、諧和院及びチヤルス・ノルドフが其の Communistic Societies of the United States に掲げた六個の團體は或ひは制慾主義から、又たは無慾主義から若しくは現世との交渉を極微ならしめんとするの欲求から常に共產主義的組織を採用するの傾向を有して居つた。其の中でも經濟的見地から觀て殊に興味ある者は亞米利加に存するものであると稱せられてゐる。

ペンシルベニアなるエコノミーのラツピスト一名、ハアモニストの植民地はヴユルテムベルヒのイプチンゲンに生れたゲオルグ・ラツプによつて一千八百〇五年二月十五日に創設せられたものである。初は結婚を奬勵し、然らざるまでも之を阻示することはなかつたのであるが、一千八百〇七年に深刻なる宗教的熱情が彼れ等の間に漲つて獨身生活に移つて行つた。ノルドツフが彼れ等を訪ねて、「性交を取締るが爲めに如何なる監督を行ふや」と問へる時、其の受けたる答は「何等の監督をも行はない。そは何の效果もないであらう。若し人民を監督しなければならぬとしたならば、寧ろ之れを拋棄した方がいゝ。我れ等は常に我れ等の宗教的確信と祈禱及び共督教的精神の下に依賴して來た」と云ふに在つた。一千八百二十四年に彼れ等が第二回の轉住を行ふに際してロバート・オーエンは其の舊地を購入したのであつた。一千八百七十四年には其の人口は一百十人であつたと誌されてゐる。

オハイオ州なるヅオアのセパレーチストの共產團體は等しく南獨ヴユルテンベルヒに發生したもので、ヨセフ・ボイメラーが選ばれて指導者と爲り一千八百十七年十二月一日に最初の丸木小屋を建築し、一千八百十九年の始めに指導者等は協議の後、財貨と努力の共同團體を樹立せざる可からざることを議決した。而して全團體の討議を經て、四月十五日に、財貨共有の協定は調印せられた。其の當時に於ては總數二百二十五人であつたが、一千八百七十四年には三百名に增加し、其の財產は一百萬弗以上に達してゐる。彼れ等は結婚及び家族制度を維持してゐる。

震教徒の團體は亞米利加大陸に現存せる共產的社會の內で最

も古いものである。彼れ等自身は The United Society of Believers in Christ's Second Appearing. と稱してゐる。彼れ等は基督の再現は一千七百七十年其の開祖のマザア・アンリー・を通じて起り、其の聖典を奉ずる者の間に持續してゐると信ずる。震教徒は七州に散在する十八の團體を有してゐる、然し是れ等團體の各個は更らに數個の「家族」に分たれてゐる、而して各「家族」は事實の上に於て一切の金錢上及び財產上の目的に對し、別個の共同團體であるが故に、實際には五十八の團體が存在する譯である。是れ等五十八の家族は總數二千四百十五の人員と約十萬エーカーに達する土地を所有してゐる。其の內の本山であり、又た最も榮えてゐるものは「マウント・レバノーン」であつて、一千七百八十七年アン・リーの死後三年に紐育コロンビア・カウンチーに設立せられたものである。彼れ等は口頭の懺悔と獨身と財貨の共有を實行し、節慾と無抵抗と如何なる現世的統治にも干與せざるの教理を奉じてゐる。

獨の「靈感派」(Walre Inspiration's Gemeinden)はアイオワ州デーヴンポートの西七十四哩に於て共產團體を組織してゐる。アマナの共產團體と稱せらるゝもの是れである。同團體は七十四年に一千五百の人員を有し、約二萬五千エーカーの土地を所有し、七個の小都邑を形成して生活し、農業及び各種の工業を行ひ頗る繁榮を來してゐる。其の根據の基督教的宗教であることは言ふまでもない。彼れ等は敬虔教徒(Pietists)であつて、其の教主はノルドフの訪問した當時は婦人であつた。彼の女は神の直接の感應によつて物語るものと相信せられてゐる。是に於て乎、インスピレーショニストと稱するのである。彼れ等は一千八百四十二年に獨乙より渡來し、初めバッファローに移住し其の植民地を「神助の石」Eben-Ezer と稱し、頗る繁榮に赴いたのであるが、土地の不足を感じ、五十五年にアイオワの地に移つたのである。

オーナイダ及びウオリングフオドの共產團體は米國に發したもので、其の人員は殆んど全部米國人である。其の創設者はジョン・ハンフリー・ノイズで、彼れは素と共產主義者ではなかつたのであるが、漸次之れに傾き、一千八百三十五年の交に、彼れがヴアモント州プットニーに起したパアフエクショニストの團體を共產主義的生活に誘つたのである。次いで四十七年から八年に亘つて紐育州マデイソン・カウンチーにオナイダ共產團體を創立し、更らに其の信徒は四十九年に紐育のブルツクリンに小團體を形成し、次いで五十年コンネチカットのウオリングフオドに他の團體起る等種々なる計畫があつたが、何れもオナイダを以て中心とし、纔かにウオリングフオドのみを除いて、

他は何れも共の共同の中心たるオナイダに合併して了つた。七十四年二月には二百八十三人（オナイダ及びウイローブレース二百三十八人、ウオリングフオド四十五人）の人員を有し複雜なる一夫多妻及び一妻多夫の結合せる制度を實行してゐる。彼等は結婚制度を有せざるものに非ずして、寧ろ彼れ等の間に在ては「複雜なる結婚が單純なるものに代つたのである」と稱してゐる。然し此の制度は一千八百七十九年に抛棄せられ、翌八十年に同團體は株式會社と變形し、ノイズは八十六年四月十三日にナイヤガラの瀑布で死んだ。

ミゾーリー州のシエルビー・カンチーなるベスエルの共同團體は普魯西亞人カイル博士によつて一千八百四十四年に創立せられたものであつて、オレゴン州ポートランドの二十九哩南に存するオーロラは其の分派である。カイルは更らに大規模の共産的社會を太平洋岸に建設し得可しとの希望を以て、五十五年の初め總數八十人を以て出發し、翌年六月にオーロラの開發に從事したのである。七十四年には兩者を合して總員六百名、家族制度を維持してゐる。

是れ等共同團體の大多數は孰れも幸福であつて、彼れ等は總て其の團員から有效にして而も過勞に陷ることなき勞働給付を受けてゐる。然しながら、エドウイン・キヤンナンは曾つて是れ等の團體に說き及んで、其の人口は主として若き人々が更らに華やかなる外界の刺激に牽かるゝが爲めに概して減少の傾向あることを語つてゐる。

七

現代的形態に於ける多數の社會主義者は唯物論の信者であつた。カール・マルクスは言ふ「余に取つての理想は單に人間の心意に變じたる物質に過ぎない」と。而して彼れの學徒は率直に告白して曰く「知覺せらるゝ現實の實在が吾人の理想である、社會民主主義の理想は唯物主義的である」と。彼れ等の理想は現實以外の那邊にも存在するものでない。彼れ等に取つては宗教は歷史的發達の結果である。異教は奴隸經濟の宗教であつた。加特力教は隸民制度の宗教であつた、而して新教は資本主義の宗教であつた。軈がて來る可き人本主義の時代には集合生産及び協同經濟の宗教が行はれなければならぬ。一切の形態に於ける基督教は過去と現在の世界に屬するものであつて、普遍的解放を齎す可き將來の世界に屬せざるものと認められた。社會化せられたる將來の世界に在つては社會的效用が個人的信條に代ると等しく、無神論的人本主義が基督　的　惠に代る可きである。吾人自身の心意若しくは精神が唯一至高の存在である。

「自覺的勞働、若しくは社會的勞働の計畫せられたる組織は待ち設けられたる新代の救時世主の名である。吾人が濟度の希望は宗教的理想に非ずして、唯物主義の巨大なる基石の上に安んじてゐる」。

斯くて社會主義が次第に物質的と爲り、次第に非基督教的と爲るの傾向あるに伴れて、基督教會其の者の内にも自省が甦らなければならなかつた。教會は彼れの基督教を裏切りはしなかつたか。天上の任務を默想しつゝある間に、等しく其の使命の一部を形成して居つた地上の任務を忘却しはしなかつたか。斯くて第十九世紀の中葉に至つて、純乎なる基督教的形態を備へた社會的教理及び福音書の教旨を眞先に標示した社會思想家の諸派が成立した。基督教社會主義は是れである。彼れ等の第一の目的は社會主義の異端たることを立證せんとするに在つた。

「曾つて受難の表標であつた十字架は今や隷屬の表標と爲つた」――大膽なる社會主義運動の選手は斯く激しく基督教の信仰に對して罵聲を放つた。基督は最早人民の眞友として迎へられなくなつた。是に於て乎、新しい社會主義的信仰の追求から人間の精神を取戻さうとすることが教會に取つての所願と爲つた。教會の發憤を喚起したものは、人民――教會其の者の人民が「非基督」の赤旗の下に集りつゝあるを見るの恐怖であつた。

「社會主義は吾人の確認する神的權威を拒否し、而して吾人の否定する人間の絕對的獨立を肯定するものである。それは所有の欲情である。然るに吾人の教理は廢棄の上に基礎を置いてゐる。社會主義は佛蘭西革命の論理的結果である。從て我れ等の間には共通なる何物も存しない」。社會主義者に從へば、勞働階級は實に其の上に現世的教會が建設せられたければならぬ巖である。然るに基督教社會主義者に取つては、社會の安寧及び幸福を確保せんとしたならば、それは須らく聖ペテロの巖の上に基礎を置かなければならぬ。彼れ等の意見に據れば、眞の救世主は基督を措いて復た覓め得ざるものである、勞働者階級の解放は彼れ等自身の力のみに依つて行はれ得るものでない。

凡そ如何なる聖人君子と雖も、未だ曾つて具足圓滿の境涯に得達し得たる者なく、又た永刧、得達し得可きものに非ざるが如く、如何なる國家社會と雖も、盡未來際、永く完全善美の狀態に到達するの期にないかも知れぬ。然しながら若し道徳が個人に理想を呈示することを許すとしたならば、理想的國家論が人民に對し、政府に對し、社會的理想を提唱するを不可なりと做すの理由何處に在る。ジエムス・ボーナーの言へるが如く、カール・マルクスの大著が經濟的推究の一大奇觀として、又た現代社會制度の害惡に對する巧妙なる說明として葬り去られる時が來ても、政治的社會的改革の理想としての社會主義は猶ほ依然として昔に變らざる情熱を喚起し續けるかも知れぬ。然しながら、サン・シモンが其の死の床に於て宣言せるが如く、宗教なくんば理想に對する熱誠は存することを得ない。而してカウフマンは一社會主義者によつて基督教の創始者が「不死の理想主義者」と稱せられたことを記してゐる。(一九二一年八月十七日)

「生命」の經濟と「死」の經濟

法學博士　森本厚吉

(一)刻下の經濟問題

經濟界は革新されなければならぬ。而して其前提として、今日看過されて居る、「生命の經濟」に世人の注意を喚起す必要を認めるのである。不景氣を挽回して經濟界の革新を圖るには、先づ生産費を低減する事が必要で、其第一手段として、勞働賃銀の低廉を主張する論者が甚だ多い。中外商業新報で實業界諸名士の生産費低減問題に關する意見を求めたものを見るに、殆ど異口同音に勞働賃銀の低廉を以て生産費低減問題の根本條件として算へて居るようである。けれども私は其れに賛意を表することが出來ない。勿論生産費の低減と云ふとは、産業の發達、殊に外國貿易の發達を計るために必要であり、又賃銀の低廉が直接生産費に影響を有するのは當時のことであるが、若し其の程度の宜しきを得ない時は勞働者は生活費に不足を生じ、仕事に熟練を積むの餘地少く、家族共稼ぎの必要を生じたり、病氣に罹り易くなつたり元氣が衰へたり、一般に精神的にも肉體的にも健康を保持することが出來なくなる。その結果として低廉な賃銀は、勞働能率の低下を意味して、即て、産業界の不振を起すに至るものである。

我國の勞働賃銀は、從來非法に廉價であつた。漸く歐洲戰爭の頃から其率をあげ戰前に比して二倍乃至三倍となり、勞働者も稍々人間らしい生活を送り、次第に能率を高くし得る資格を具へるようになつた。それでも今日米國では、普通の勞働者でさへ一日拾圓内外の賃銀を得て居るのに我國の賃銀は、僅に二圓内外に過ぎないのであるから、何も賃銀が高いと云つて騷ぎ立する必要はないのである。只、以前が餘りに安過ぎた爲に賃銀低落問題が内襲的に惹き起されたるに過ぎない。

今日は從來のように安い勞働（チープレーバー）を特色として世界的競爭場裏に立つことは不可能になつた。若し再び賃銀を以前のように引き下げそれだけ生産費を低下せしめんと企つるのが、一見資本家

にとつて、甚だ有利なるように見ゆるが、實は、其の反對の結果を生ずるのである。適度に高い賃銀は勞働能力の大を意味し、引いて經濟界の振興となり、資本家もそれによつて利益を享くるようになるのである。蓋し時勢は著しく進歩して、今日では勞働は商品と同一視すべきものではないと、資本家も勞働者も、歐米の勞働者も日本の勞働者も凡て同等の生活權を有する同じ人間であることが、世界的に認められて居るのである。云ふまでもなく、今日我勞働者の能率は彼の勞働者に比して、劣つて居るけれども、現在我國に於けるが如き勞働條件の下で、勞働者に餘り多くを望むのは無理な註文である。眞に能率の比較を正確に行はんとするならば、彼我勞働者を一定期間同一の條件で働かしためになすべきである。故に刻下の問題は出來る限り高き賃銀を惜氣なく拂つて、勞働能率を高め得る素養を作り、實際經濟活動を、盛にして以て經濟界を根底から革新することである。今日此の不景氣に際したのを好機會として、我國民は根本的に産業界の振興を計るべく、經濟界の革新を促すことが最も大切なことである。

(二)現代勞働者の運命

資本主義の盛な今日の經濟界では、勞働者と貧乏人とは殆んど同意味であつて、無產階級者なる多數の勞働者には、先天的貧乏に生れて貧乏に死する不幸な運命を有して居る。昔から云つて居るやうに、貧乏を生むものは貧乏であつて、貧乏は常に循環的に起るものである。ハリー博士の名著「貧乏とその惡性なる循環」(J. B. Herry: Poverty and its Vicious Circles)に於て、今日の社會を自然の儘に放任して置くならば、貧乏は絶えず次の如き循環によりて同じ運命を繰り返すものであると云ふ事を頗る興味深く論じ居る。

一、貧乏→不完全なる住居→不健康→失職→貧乏→不完全なる住居→……

一、貧乏→不完全な食養→營養不良→賃銀低下し貧乏不完全な食養→……

一、貧乏→不完全な教育→無能→貧乏→不完全な教育→……

一、貧乏→飲酒→能率減少→位置を失ふこと→貧乏→飲酒→……

一、貧乏→信用の低減→借金→高き利子→貧乏→信用低減→……

一、貧乏→無思慮→大家族→貧乏→無思慮→……

一、貧乏→少量購買→貧乏→少量購買→……

ローントリは更に違つた方面から勞働者は一生涯に於て、

も大切なる時期に三度貧乏線以下に降る運命を、先天的に有してることを說いて居る。卽ち、其の第一期は生長に最も大切な幼年時代で、自分が十歲前後になつた頃には、續々と出產があつて大家族となり、一家は貧困に苦む。第二期は最も盛に活動すべき壯年時代で、三十五歲前後になると今度は自分の子供が澤山に生れて、自分等の經濟力が阻害されて收入が不充分になる。第三期は平安なる晩年を樂しむべき老年時代で、子供等は成人し結婚して家を去り、自分は高齡の爲に健康が衰へ、失職して收入を失ひ、終に貧乏の內に苦みつゝ此の世を去らねばならぬのである。

かくの如く循環や、囚はれた運命を破つて新しい合理的運命を開拓し、彼等の經濟的地位を向上し得る條件は多々あるが、其の內最も重要なるものゝ一つとして考ふ可きは、賃銀の高が少くとも、「生活賃銀（リビングウエーヂス）」でなければならぬと云ふことである。然るに、戰時好景氣の時に漸く賃銀が高くなつて「生活賃銀」と認むべきものに近付いたものを再び人爲的に、引き下げを行はんとするが如きは、經濟の根本を誤るもので、折角經濟界革新の時機が到來したにもかゝはらず、其の機をとらへずして更に不能率の舊時代に後戾りせんとするのと同樣である。現代資本主義が如何に勢力を逞しくしつゝあるとは云へ、第三者の立場から公平に考へる時に、今日となつては資本家の報酬は不當に高くして勞働者の賃銀は不法に低いと云はねばならぬ。生產費の低減に必要なる事は決して賃銀低廉のみを算ふべきでなく、それ以上に生產能率を大にすると、或は不當なる資本家の報酬を減少すること等に依て其の目的を達する事を充分に研究しなければならぬ。

（三）經濟界革新の根本的條件

賃銀の低廉とか、利子の低廉とか云ふものを、經濟發達の根本條件として數へるのは決して當を得たものではない。然して景氣の恢復或は經濟發達、ひいて經濟界革新の根本的條件として注意すべき三事項を此處に舉げることが出來る。

第一は自然的條件である、卽ち自然の地勢、地質、地形、氣候等の關係によつて根本的に經濟發達に影響を有する。

第二は個人的條件である。卽ち人類各自の知識、性質、健康、才能等の如何によつて經濟界に及ぼす根本的の影響である。

第三は社界的條件である。卽ち個人の組織して居る一定の社會組織の如何が經濟發達に基本的に影響を有するのである。

第一の自然的條件は勿論偉大なる勢力を有してるものである

が、之とても人智、開發によつて或程度までは人が自由に利用し得るものである。けれども一定の度を越えると到底其の時代の人力の及ばないものであるから、今此處に問題とすることを避ける。それで今、經濟發達の根本條件として、特に注意を喚起せむとするのは、個人的及び社會的條件である。而して此兩者の基本論としては、人そのものの數量及び素質如何に就いて考へなければならぬ。即ち人口の質と量との問題が經濟發達の基本條件であつて、其の宜しきを得たる時に經濟界の革新を來し得るのである。若し此の問題を適當に解決するのでなかつたならば、其の他の枝葉問題に何程努力しても効果を收めることが出來ない。幸に今日、社會は進歩して此の基本論に研究を進める必要を一般に認めるようになつた。故に此處に從來等閑に附せられて居る、生と死の經濟に關する主なる事項を論述するであらう。

(四)生の經濟

人口に關する經濟問題の中で、頗る重要なものでありながら、案外、社會の注意を引いて居ないものが二つある。一は生の經濟で、二は死の經濟である。生の經濟と云ふのは、出産の目的を達するために最少の勞力で最大の効果を收めることである。換言すれば、生れたものは皆其の壽命と力量を最高限度に發揮して、人生の浪費を最少限度に減少することである。然るに、之を事實に就いて見るに生の浪費が實に多いことに驚かざるを得ない。今少しく統計に表はれたる事實の一例を揭げん。

我國の出産率の多いことは周知の事である。戰前に於て、例へば一九一一年に我出産率(死産を除く)は人口千に就き三四・一であつたのに、西洋諸强國では北甚だ少く、英は二四・、佛は二一・、獨は二九・、伊に三二・、であつた。而も我國の出産率は年々増加して居る、即ち明治七年から十六年頃は人口千に就き二五であつたのが次第に増加して二十七年から卅一年になると三〇になり、卅二年から四拾一年頃は三一、四拾二年から四拾四年には三四と云ふ具合に殆ど規則正しく出産率は増加して來たのである。加之、此當時歐洲諸强國では、我國の正反對で年々出産率は減少して、いづれも佛國が率先して示した事實を繰り返し始めたのである。如斯事實のみを基礎として考へ、軍國主義者は極端に其の野心を煽らせたのも無理ない次第である。曰く、大和民族の人口膨脹力は世界無比であるから將來益々戰鬪力も大になり、覇を天下に爭ふことも決して不可能ではないと。

然し、私共は其の當時からかゝる議論に反對して居つた。如何となれば、生産率の大であると云ふ事實だけでは、人口の質相を判斷すべきものでないのみならず、我國でも民衆の精神發

態が進歩すると生産率も自然に減ずるであらうと信じたからである。果せるかな明治四十四年の生産率三四・一、は最高限度であつて、其の後、次第に少しづつ減少して、其の翌年から大正四年までは三三臺になり、大正五年は三二・九、六年は三二・七、七年は三二・二、になつた。かくして我國も漸く他の文明國と同一の經路を辿るようになつたのである。かかる出産率減少の事實だけならば一部論者のように、我國の將來を悲觀する必要はないのみならず、却て慶賀すべき事である。今日の如く物資の缺乏を來してる時に、我國民を改造して、眞に實力に生きるものとするには、生産率減少は先づ人口の良質のものを多く得んが爲に必要なる當然の結果である。

何れの國でも、文化の進むに從つて生の經濟に注意するようになるから、現代の經濟組織が根本的に改造されざる限りは、自然に出産減少の現象を起すに至るものである。如何となれば文明の進むに從つて、精神病者や花柳病者が多くなること、或は壯年者が少くなること、或は飲酒が盛んなる等の理由により、生理的に出産を減ずるのであると主張する論者もあるが、其れ以上に有力な原因と考ふるのは、文化の進むに從つて、個人の繁殖意志が減少することである。元來繁殖と云ふことは、性慾と子供を愛する念慮が主に働いて起る結果であるが、今日の如く、經濟上の壓迫が強くなると到底多數の子女を充分に養育し行くことが出來なくなり、子供の粗製濫造は親の爲にも、又子の爲にも多くの不幸を生ぜしむるに至ることを、個人が自覺するようになる。其の結果、慾を制し、早婚を慎み、自發的に産兒に制限を行ふものが多くなり、引いて一般の出産率が減少するのである。更にブレンタノ教授の説によると、文明が進むと、性慾（Geschlechtstrieb）及び、子供を愛する念（Kinderliebe）以上に高等なる他の慾望を滿足させる設備が出來て、繁殖意志は減少するものであると論じてる。また女子自身及び家人が、姙娠、出産、保育等の苦痛を嫌ふ念が強くなり、又生殖慾を抑制したり或は避姙を行ふようになるのであるが、之等の事實は、現在の經濟事情を根底より改造しない内は止むを得ないことで、寧ろ、思慮深き人が當然行ふべきことゝ認めねばならぬ。

(五)不經濟なる人口增加

經濟上の見地から考へるに、産兒が悉く、立派に成人して、自己の能力を充分に發揮し得るならば、多産は喜ぶべき現象であるが、其れは現在では不可能であることは既に述べた通りである。現在の經濟界では出産率が高くして過度に增加し行く人

口を滿足に支へ行くことは出來ないことになつて居る。自然と人口との調和は既に破られて居る今日の事であるから、出產率が不當に多い時には、種々の理由で死亡率も亦、多くなると云ふ事實が明に統計に示されて居る、即ち澤山に生れるが澤山に死ぬのであるから、結局骨折り損の草臥儲けに終るのである。此處に人生の浪費として、不經濟極まる人口增加が起るのである。

元來、生理的原則として、生物の神經組織の複雜になる程度と繁殖能力との間には一定の關係を有してるのである。神經系が發達して、生物が高等になればなる程、子孫の繁殖力は弱くなる。例へば、魚類の出產數は一ケ年約六十萬であるが、兩棲類に進むと、四百に減じ、更に爬虫類は十七、鳥類は五、哺乳動物は三になり、哺乳動物中でも高等なる猿類になると一以下に減ずるのである。如斯現象の起る原因は主として、親の保護の有無如何によつて起るのである。即ち親の知識が發達しない爲に到底充分に子供を保護し得ないものは、多數に出產して、其の內の一小部分だけを生き殘らしめるのである。しかし、知識が發達すると親の子に對する保護が充分に行き渡るから、產んだものは、其の大部分は成長せしめ得るが故に、出產の數は少くとも差支はないのである。如斯にして、出產の少い事は、動物の高等なることを意味するのであるから、同じ意味で、人類も知識が增進すれば、出產の數を少くしても、繁殖の目的を達せられるから多產の必要はなくなるのである。

出產の大なるは、人口の大を意味する場合に於ては、喜ぶべきものであるが單に出產數の大小は人口の自然的增減に關する原因の一半に過ぎないことを記憶せねばならぬ。何程出產が數多くとも、死亡、之に伴ふて大であつたならば、何の効もない。之に反し、出產は比較的小であつても、死亡も同樣小であるならば、人口は健全に增加するものである。此處に於て死の現象を出來るだけ、經濟的に行ふ必要があるのである。

（六）死の經濟

死の經濟は、自然の死を最大にして、夭死や其の他不自然の死を最小にすることである。さて我國の事實を見るに出產が多いと同じように死亡率が甚だ高く、殊に乳兒及び五才未滿の死亡率が頗る高いのである。故に折角苦しんでやつと、生れた子供も壽命を全うし得ないで、其の大多數は一年未滿即ちまだ人間味の愛らしさが充分に發現されない內に死んで終ふ。然らざれば五才未滿の可愛らしい、盛りの時に、此の世から奪ひ去られるのである。かゝる事實は徒に人口の減少を招致するのみなら

ず、父母其の他のものが、それによつて受くる、精神的及物質的打撃は實に莫大なものであるから、之程不經濟な浪費はないのである。今進むで統計に現はれた事實を尋ねよう。

我人口に對する死亡は、明治七年乃至十六年頃は、約十八であつたが、其の後の十ケ年には、約二十一に增加し、次の十ケ年には二〇・五、に減じ、次の十ケ年に更に增加し二一となり、次の大正三年乃至七年には二一・七、に增加して居る。若し其れ大正七年だけの事實を探るならば二六・七、の驚くべき高率を示して居るが、之は流行性感冒の流行したのが一原因であらう。之を要するに我國の死亡率は大體に於て年々增加する悲しむべき傾向を有して居るのである。

次に年齢別に就いて一考ふるに、五歳未滿のものは死亡總數の三割六分の大多數を占め、五乃至十歳は約四分、十乃至十五歳は人生中最も死亡の少い時で僅に二分であるが、それから更に增加して、四分以上に進み行くのである。如斯、死亡の大部分は五歳未滿に屬るのであるが、殊に近年憂ふべき事實は乳兒（一歳未滿）の死亡率は年々增加する傾向を有し、大正七年には非常に多くなり、出產百に付、一八・九の高率である。即ち生れた赤子の約二割のものは一歳未滿で死んで仕舞ふのであることを思へば、此處に人生の悲しむべき浪費があることに想到するのであらう。かかる事實を目前に有してるが故に、寧ろ始めから出產を制限した方が利益である事は云ふまでもない事である。

大正七年に我國の死亡數は、人口一萬に付き、二百六十八であるが、其の死亡原因の最多數を占めて居るのは、肺炎及氣管支肺炎の三六・九で、之れに肺結核の一七・八、と氣管支炎の一一・七、其の他呼吸器病に屬する流行性感冒二一・五、實布垤利亞及格魯布〇・七、百日咳一・〇、其の他六・〇を合算すると八六・六の多きに達して居る。此の割合は死亡者百人の内で三二人が呼吸器病で死ぬ事になる。故に人の壽命を全うせしめないで、殘酷に人口淘汰を行ふは、病魔殊に肺病である。若し之を預防して、人類の病死を或る程度まで防ぐことが出來たならば、社會の生產能力は增加し、幸福の增進は大になるであらう。しかも、之等の事は決して不可能のことではないから將來死の經濟が一層社會の注意を引くようになつた場合は人生を一層經濟的に營んで經濟發達の原動力を盛にして經濟界の革新を起すことが出來るのである。故に私は死の經濟とそい共となつて居る、生の經濟と云ふ問題が今後充分に研究されむことを識者に訴へざるを得ないのである。

(七)平和の殺人

何と云つても最も大切なものは人の生命である。生命の經濟程大切なものがないのに、之に不注意であるが爲に病氣以外にも莫大なる生命の浪費が行はれてることは實に驚くべきである。經濟の本源である生命に、著しい浪費が行はれて居るのに經費節減とか生活費減少とか、勤儉、貯蓄等の如き枝葉の問題に熱中するものが、今尚少くないのは思はざるの甚だしきことである、戰爭は終局を告げて、平和が恢復し、極力生産創造に努力せねばならぬ時に、今尚戰時と同樣に恣しく生命を奪取する、平和の殺人が行はれて居ることに大いに世人の注意を引かねばならぬ。

近着のサーヴエー誌にヘルドマンは次の樣な事實を擧げて居る。「戰爭の目的は、殺人及び破壞であり、平和の目的は創造及保存である。然るに、平和の職業は戰爭よりも一層多くの殺人と破壞を行つてる。米國が十九ケ月間戰ふた間に殺された兵士は五萬百五十人であつたが、其の間に米國で平和の職業に從事して殺された人は十二萬六千人であつた。尚同期間中に戰場で負傷した兵士は二十萬人であつたのに、平和の職業に從事して負傷したものは二百萬に達して居る。

千九百十年に米國に四十萬臺の自動車があつた。千九百二十年には夫れが九百五十萬臺に增加して、人口十一人每に一臺の割合になつて居る。而して千九百十年に自動車で殺された人の數は十萬の人口に對して、二人の割であつたものが、千九百二十年には約十二人に增加して居る。ポートランド市だけで、千九百十七年に、交通機關の障害が二千二百あつたのが、千九百二十年には、一萬三拾八になつて居る。然るに研究の結果によると、之等の災害の約八割は充分に豫防し得るものであることを說明して居る。卽ち其の四分の一は危險なる機械に適當なる防禦設備をすることとであり、その四分の三は勞働者を教育することである。而して其の教育は小學時代より適當に始めなければならない。」

更に異つた方面から、生命の經濟に如何に愚かな浪費が行はれて居るかに就いて、前の大統領タフトを會長として居る、延命協會で發表した事實を擧ぐれば、次の如きである。「米國では每年豫防し得る病氣の爲めに死ぬるものが、約六十萬人もある。又平均每日少くも三百萬人の病人があるが、其半數は不必要な病氣に罹つて居る。そしてそれらの病氣や不自然な死亡の爲めに費やす一ケ年の損失高は三十億圓以上である。若し國民が現在知られて居る科學上の知識を、自己の生命に適

ならば、平均十五ケ年づゝ生命を延ばす事が出來る。猶戰時に行つた體格檢査の結果によると、二十一才乃至三十一才のもので、軍人に不適當な體格を有するものが、三分の一以上あつた。そして其内不具者を除くと、約六割は豫防し得る原因で不健康となつて居る。』

恐るべきは人類の知識の足らないが爲めに、生產の主體である人の生命が甚だしく不經濟に使用されて、其能力が減じ、壽命を短縮して居る事である。

(八)人の命數

生命の經濟の目的は、要するに一つは生命を出來る丈延長する事と、二は一生涯の生產能力を最大にする事である。然るに時は絕對的の支配權を人類に對して有して居るから、如何なる階級の人でも、年と共に極く公平に考へて、一步一步と死に近づいて居るのである。故に統計的に命數卽ち將來生活を續け得る年數を定める事が出來る。我國に於て研究した結果によると、各年齡人口の將來生存すべき豫定年數を、完全平均命數と稱し、次の如き數が示されて居る。

二十才の男は四十一年、　女は四十二年
三十才の男は三十四年、　女は三十六年
四十才の男は二十七年、　女は二十九年
五十才の男は二十年、　女は二十二年
六十才の男は十三年、　女は十五年
七十才の男は八年、　女は九年

等である。勿論特別の場合はあるが、總體的に考へると、如何なる人でも同一運命に支配されて、以上示した一定の時期が到達すれば死なゝければならないのである。

然かも以上の命數は、常に生存を續け得る丈けのものであるが、若し國民の活動すべき所謂生產年齡を、十五才乃至六十才とし、六十才を人生の限度として計算したる、有限平均命數は次の如く短かいものである。卽ち男女は同年數であつて、二十歲のものは三十三年、三十歲のものは二十六年、四十歲のものは十八年、五十歲のものは九年、五十五歲のものは五年、六十歲のものに零年、等の餘命より持つて居ないのである。

昨年死亡した、オツクスフオード大學醫科敎授オスラー博士が、曾てジョンス　ホプキンス大學で發表した有名な研究の結果によると、人は五十歲にして幾分有用の度を減じ(less useful)六十歲にして無用に(useless)なるとの事である。實は私自身この講演を聞いて其當時から大いに生命の經濟に就いて研究の

必要を感じて居た。其翌日の米國各地大都會の新聞電報欄に、其講演の大要が記載されたのであつたが、氣の早い米人のうちで自分がすでに、不要の人たるべき年齢に達したのを悲觀して、自殺したものが數名あつたといふ事は、一つの悲劇で今でも米人の一つ話しになつてゐる。勿論除外例は尠くないのである。殊に歐米に於ては、六七歳以上にして尙有益なる激務に從事して居る人の數多いのは、周知の事實であるが、概論的に觀察を下すと、オスラー說は已むを得たい人の命數を學術的に述べて居るのである。けれどもこれは現在の事實から推算したもので、固定した不變性のものではない。今後生命の經濟が、諸方面から充分に研究されて、國民が覺醒し、心的及物的健康を充分に改善する事が出來たならば、一方に於て命數を延長する事と、他方に於てその生產能力を增大する事によつて、今日の經濟界に革新を來す事が出來るに至るであらう。經濟發達に必要なる問題が今日色々と論ぜられてゐるが、多くは第二次的の枝葉問題であつて、第一次的の根本問題は、生命其のもの丶經濟的消費を全うする生命經濟論でなければならぬ、

(一九)現代の常識二つ

以上論述した生命に關する事實を、注意して考究すると、少くも二つの事が現代の常識となつて居る筈である。

第一、產兒制限である。生命經濟論の主張となるべきは、人口と自然の調和を計る事である。これが爲めには、自己の經濟能力と、產兒數との間に經濟的調和を見出さねばならぬ。幸今日產兒制限論は社會の注意を促して居つて、今となつては、突飛な議論として嘲笑に附する、識者は甚だ少くなつた。「生めよ殖えよ」といつて盛に人口の數の多きを理想として居たのは、舊時代の人口論であつたが、今日では、人口の數よりも、質に重きをおく事が時代の常識となつたのである。

勿論良質の子供を得る事が、保證されて居るのであるならば、大いに生むべし殖やすべしであるが、現今の經濟組織は、それを、許さない。故に個人及び社會の幸福を計り、子女の爲め又親の爲め、利益を計らんとするものは、當然自發的に產兒制限を行ふべき義務を有して居る。而して、現在の我が經濟事情に適應する理想兒の數に就いては、勿論確定する事は出來ないのであるが、嘗て獨逸に行はれて居つた三兒制度（ドライ、キンダー、システム）がわが中流以下の家族にとつて、理想とすべきものではあるまいかと思ふ。

若しそれ國民各自が、產兒數を自己の能力に適合する程度に制限し得るまでに、向上した場合には、親の保護が子供に充分

行き屆く結果として、前述した乳兒死亡、死產、五歲未滿者死亡、及一般死亡率に多大の影響を及し、又營養不良其他生理的に起る病氣も次第に減少して、生命の浪費が省かれるといふ事は、當然の結果である。かくの如くにして始めて生命の經濟が合理的に行はれ、經濟界の革新を促がすやうになる。

第二の現代常識として考ふべきは、生活の改造である。生命經濟論の根本條件たるべき事は、從來の不合理な生活を改造して、人生の能率增進を期する事である。何等科學的基礎を有せず、只習慣の惰性によつて用ゐられて居る我國獨特の食物、衣服、住宅、社交、等による生活に於ては、經濟的に生命を保全するには餘りに多くの故障があつて、到底各人天與の個性を開發し能力を發揮し得る事は出來ない。その結果は社會經濟の無能率に陷るのである。故に宜しく日進月步の科學研究の結果を、日常生活に適應して、能率的生活を、物質的にも精神的にも營み得るやうにするのが、すべての經濟問題の根本義である。これ等當然の順序を經ないで、不自然な變則手段で、經濟發達を望むのは無理な注文で、何時までたつても經濟界の革新を來す事は出來ない。

要するに刻下の大問題である不景氣を恢復して、經濟發達を來たすに必要なる事は色々あるが、それ等の基本となるべき

は、人口の大多數を占めて居る、プロレタリア階級の生產能力を大にする事である。これが爲めには先づ彼等の經濟的自由を束縛して居る、貧乏生活から彼等を開放して、貧乏によつて起る有害なる循環系を破る事である。而して今日產兒の合理的制限と、生活の合理的改造とは少くもその有力なるものとして數ふべきである。

（八月十三日）

世界の現狀に對する人種的觀察

文學博士　三宅雪嶺

□

人種の種は兩種と解すべく、兩種とも種であるとして、同語を使用するに過ぎぬ。種を以つて爭ふのは、上古よりの事であつても、激しい土地と激しくない土地とがあり、東洋で近年まで餘り注意を惹かず、歐米でも近世に入つて廣く世界に交通するまで、かゝる事あるを想はなんだ。印度でも、埃及でも、競爭があり、階級が之で始まつたと考へられるが、今日の意味合ひで爭つたかは疑はしい。何處でも見馴れぬ容貌を不思議がつても、異人とするだけで、特別に排斥すべきものとせぬ。それが漸く競爭の姿になり、いよいよ激しくならうとするのは、畢り地球の面積の限局せられて居るのを知り、廣く土地を占めて置かねばならぬものとするに出る。明かに意識しての事でなけれど、自づと其處へ落着く。

而して人種の競爭が如何に決するかと云ふに、或る程度まで植物と同じく、氣候に支配せられ、土地に支配せられる。植物は熱帶溫帶寒帶等それぞれ分れるが、同一の土地でも、或る時間養分を吸ひ上げた後、生長が惡く、他の土地の方が後によくなつたりする。人類に於いても、熱帶に適するのがあり、溫帶に適するのがあり、互に位置を換へては双方に不利益がある。且つ同じ土地で繁榮を遂げた後、永く繁榮を續け難く、何等か別に發展の途を得ない以上、漸次衰微するに終る。

□

如何なる人種が最も優るかは、容易に云ふべきでなく、時と處とにて違ふを免かれぬ。大臣に適するものが必ず商人に適するもの、商人に適する者が必ず大臣に適するものと云へぬ。藩時代殿樣型といふのがあり、餘り智慧が有つてはならず、力の強いのも不似合とされて居つた。太平の世に腕の利くのが戰亂に役に立たず、槍先の功名ある者、太平の世に用ひ樣が無いやうな事、世間に普通である。之と同じく熱帶で能く堪へ忍ぶを得る蠻人は、溫帶で其長所を發揮する事が出來ず、溫帶

の種族の爲めに征服せられ、虐待せられる。解剖しても、腦髓少く、劣つたるを證明せられるが、熱帶の炎天に耐へるが爲め頭蓋骨を厚くするので、何とも仕方が無い。黄人や白人や、黒人より智慧があるのは、頭蓋骨を厚くする必要ないからであり、それだ熱帶に住居するに適せぬ。」多數の中に氣候及び土地を換へて能く耐へるのもあるけれど、今でも熱帶で安樂に住むのは、大部分黒人に屬する。白人が熱帶を領有して居つても、其所で永住し繁殖するのは甚だ難い。温帶は黄人赤人に適し、黄赤は温帶相當として可く、白人は氷河又は寒帶同樣の境遇で彼の如き皮膚になつたのであり、南に移る程黄赤色を帶び、中に黒色を帶ぶるのがある。

□

變化は久しい期間に遂げられ、人種の區別は少くとも數萬年間に於て成つたのであつても、それでさへ皮膚の色が早く變つて終ふ。唯、元へ還れば色を舊に復するの恰も色の白いものが暑中に海水浴で黒くなり、幾月も經ずして色が剝るに似て居る。何にしても白人は久しい間、寒い土地に居つたに相違ない。黒人は熱帶（地軸の傾斜で今の熱帶と違へば、熱帶同樣の熱き地帶）に椰子の實、芭蕉の實等、寢て居ても食物を得られる状態であり、常に雪と闘はねばならぬ白人に比べて、幸福の境遇と云はねばならぬ。黄人や赤人や、之れ程でなくても、甚だしく寒さに苦しむ事なく、幾らか安樂の身たるを失はぬ。最も苦しんだのは白人であつて、黒い色が次第に剝げ、白くなるまで寒い土地に在り、有ゆる困難を經たらう。始め力ある者が良い土地を占め、之に容れられぬ者が他に移り、最も虐められた譯であるが、後より顧れば、憎まれつ子世に憚られ、虐められた子が幅を利かす事になる。黒人は幾萬年か熱帶で寢て暮らし、黄人や赤人や、幾らか働き、白人は困難で過し、困難で身體を鍛へ、智慧を磨き、そろ／＼押出して怠け者を叱り着ける順序になつて居る。

□

白人が北から南へ押出したのは隨分古くからであり、歴史が幽かに一萬年前に始まつたとし、巴比倫埃及等に現はれて居つたらしい。然し白人で目醒しく力を伸ばし、今日に及んで居るのは地中海沿岸であり、中にも希臘及び羅馬として最も顯はれて居る。此沿岸は多く羅典族とする所であつて、歐洲の歴史の大部分は其手に成つて居る。希臘半島、伊太利半島は、文明に與かる事多く、其瓦解後でも絶えず相應の力を表はし、佛國の如き、文明の中心地と見られた事あり、西班牙及び葡萄牙亦嘗に近世史を開始するに與つて力がある。悉く羅典族の名の下に概括すべきでなく、いろ／＼混合し、西班牙は亞刺比亞人さ

へ加はつて居るが、羅典が多くの比例を占めて居ると云はねばならぬ。近世史の始まる頃、羅典族關係の國々が最も多く力を伸ばし、世界異教徒の土地を羅馬法王の命令で、西班牙及び葡萄牙に兩分され、東は思ふ樣に行かなんだが、米洲の大部分は其管轄に歸し、十九世紀の初めに及んで居る。植民地が獨立して分離したと云ふものの、民族は矢張り羅典的分子が無い。

□

羅典族のものがそれ程勢力を伸ばしたのに、今日何の勢であるかと云ふに、日耳曼族に對抗するに苦しみ、殊にアングロ・サクソンの世界に横行するを傍觀するを餘儀なくされて居る。羅典族の國々は今日繁華でないと云へず、都會は賑かであり、歐米での遊び場所になつて居る。藝術では何と云つても特色を具へ、繪畫の本場となつて居る。佛國伊國へ各地から留學生が赴くのみでなく、西班牙でも侮る譯に行かず、特殊の光を窺す所、他で企て及ばぬのがある。而して美的生活に憬れ、國力の如何を慮らぬかと云ふに、一旦世界戰役の勃發するや、佛國が始めから終りまで驚くべき力を發揮した。佛人は進むに疾く、退くに疾く勇氣あつて忍耐が足らぬと云はれたが、四年半の久しき、後は後ほど力強くなつて居る。英米の助力で克つたと云ふが、佛が戰はねば、英米で何と焦つても、獨逸と陸上で戰ひ得べくもない。佛人が愛國心を以つて奮ひ健鬪する所、羅典の名を値する。伊國は之に比べて弱く、獨逸軍に襲はれて殆ど致命的大敗を招いたが、それでも財政困難を以て能く大規模の動員を續け、屢々進擊を敢てし、後に敗れながら尚ほ屈せず、出來る丈け防禦するに努めた。羅典族の國々は昔よりも衰へたと云へず、それで衰 て居ると見らるのは、或る文明に適し、それ以上に發展し難く成つて居るに由る。若し彼の國々が一時繁榮を極めなんだなら、今尚は發展の機運を見るであらうが、何としても一度到るべき所に到り、下り阪にならずとも、維持に專らにならねばならぬ。佛國が人口增加せぬやうになつた事、其停止期に達したのを示す。尚ほ文明の質を良くし得るにせよ、新に發展を望み難く、他の羅典國は尚ほ更らである。約二十年前佛國外相職を勤めたアノトオが羅典族恢復運動を始めたが、いよ／＼其必要を增しながら、效果を擧はずに居らぬ。

□

羅馬の盛んなる時代、地中海沿岸の諸族が何事をも爲し、日耳曼族に蕃族の別名と聞えたが、此蕃族が後に力を伸はし、羅典族と到る處に競爭し、若し直ちに之に勝たぬならば、世界に發展するの途を求め、中にもアングロ・サクソンが簡要なる土地を悉く領有し終つた。大陸に於ける日耳曼族は土地の爲めか、何

か羅典化し、海國なる英國のやうな譯に行かぬ。英國は大陸諸國の仲間入りしがたく、思ふやうに伸けなんだだけ、廣く世界各地に手を伸ばし、太陽が領土内に沒する事ないやうになつた。始め豫期した事でなくても、之れ亦禍が福になつてゐる。米國獨立は英の大失敗であり、大打撃であつても、アングロ・サクソンの發展に於いて變りが無い。羅典民族は夙に米洲に根據を作り、北米が多くアングロ・サクソンに歸しても、南米は羅典の領有に係り、それで南米の發展が北米と較べものにならぬ。アングロ・サクソンの力を藉らねば、南米も富源を開拓し難からうと解釋される。何故に北米が頻りに發展し、南米がさう行かぬか。氣候の關係もあれど、發展の止まつた民族が移つた所もある。西班牙及び葡萄牙は内政に於いて英國に及ばず、外へ出ても一時の安樂に耽つて終ふ。コルテスやピサロや勇氣を以つて奨進する所、目醒しい働きであるが、目醒しい丈けで永續きせぬ。地中海沿岸の住居者よりも北海沿岸の住居者の方、困難を經て居る丈け、永く懸つて力を伸ばし、遂に世界で最も重要の位置を占めるに到つた。

□

今は英米の時代、即ちアングロ・サクソンの時代と成つて居る。所でアングロ・サクソンが力を伸ばす頃、存在を知らなんだスラヴ族が、漸く力を伸ばし初めた。スレーヴと云ふ奴隷の名に迄なつてゐた民族が、北歐より北亞細亞に擴まり、ナポレオン一世が遠からず歐洲の哥薩克に蹂躙される日があらうと云ふに到る。スラヴ族が何の運命であるか、幾度び人の豫想を裏切つたか知れぬ。兵力で世界を征服するであらうと思はれた事があり、彼の如く平和を好む民族が無いと云はれた事があり、忍耐力を賞讃さられるかと思へば、懶惰で仕方が無いと云はれるのを聞く。今は他國に類例を見ぬ政治の狀態であり、共産主義を實行して居るかと思へば、近頃レーニンが意見を變へたとの報道がある。意見を變へて何うなるか。何にせよ露國が帝制でも共和制でも、何でも他を脅かす所がある。恐れる方が間違つてゐるけれども、何かにつけて恐れを抱かしめる所がある。

□

スラヴは白人中最も遅れて押出したものであつて、アングロ・サクソンよりも力を伸ばすか何うか疑ひ免かれぬ。スラヴが取つて代らねばアングロ・サクソンの世界となり、此種族は比較的最も排他的であり、そのいよ／＼勢力を恣にするの曉、他の民族が甚だしく壓迫を蒙るを免かれぬ。有色人を壓迫するのみでなけれど、今日のところ他の白人に觸れず、主として有色人の上で排斥を敢てする。地球に漸く狭きを感じ、白人は早くも此

定に[illegible]、[illegible]し、[illegible]入つても自由に[illegible]ばならぬやうにしようとして居る。有色人もさま〲であつて、印度の如き、何れに入れるか區々になつて居るが、有色人は白人の二三倍にも積り得られる。それが狹い土地に追ひ込まれては、地球に生存することを許されぬに異ならぬ。米洲印度人が白人に接觸して漸次減少し、保存を企てられるが如く、有色人も漸次減少せねばならぬであらうか。此處に假然疑問を提出し來つたのは、黑人マーカス・ガーヴエーである。彼は黑人民族を以つて阿弗利加共和國を造らうと企てゝ居り、明言して曰ふ。黑人が白人に隨はねばならぬ理由が何處に在るか、文明は黑人が造り出したのである、世界戰役でも、黑人が居らねば、聯合軍が勝てなんだのでないかと。實に黑人で戰時公債の募集に應ずる事四億圓に達し、尚ほガーヴエーの邊[illegible]に種[illegible]の機關を具へ、黑人のみを株主とする汽船會社をも備へて居る。之が[illegible]程の[illegible]きを爲すか、今の所斷言は覺束なく思はれるが、ガーヴエーの如き者が出づるとは、之れ迄何人も思ひ及ばなんだのであり、黑人は智慧が足らぬと定まつて居つたのを、物の美事に智慧の豐かなのを證明して居る、年に三十二[illegible]位にも發達せば、何處まで進むか知り難い。但黑人に[illegible]得り、[illegible]も亦幾らか危ぶまれぬでない。

黑人[illegible]最も劣等と信じられて居つた種族から、か[illegible]の[illegible]まるのを見れば、他の種族から何の[illegible]が起きるか、人智の[illegible]り難い所に屬する。今は白人ばかり有り、中にもアングロ・サクソンが最も優勢、世界を支配するやうでも、熱帶地方に何程住んで居るか。只經營りして居る丈けで自ら住むのが甚だ稀でないか。黑人に阿弗利加を明渡す事なくても、事實上其大部分を黑人に任かすやうになりはせぬか。且つ土耳古人は歐洲の領土で喪へたけれども、阿亞細亞から亞弗利加へ掛けて勢力を張つて居り、黑人と共同し易い。亞剌比亞からゴビの沙漠へ出掛け、今日全く豫想せぬやうな運動を初める者が無いか。白人が最も力を占めつゝ屢々黃禍を唱へるのは、一概に、爲めにする所あつての事と云へぬ。全く其の恐れないでなく、只、日本が支那と戰つて勝つたとて、之を唱へるが如き、見當違ひも甚だしからう。事は現はれた處よりも現はれぬ處に起るものと考へねばならぬ。急に起るべくも無いが、今日人が全く豫想せぬやうな人種的變動の起くべき可能性無いと斷定する事は出來ぬ。[illegible]り人種は人類と類人猿と違ふほどのものでなく、等しく人間と見ねばならず、外形で差別し、取扱ひを異にすれば、何處迄で無理が出來るに極つて居る。正義人道は無理の上に立たぬ。無理をす

れば無理の反動がある。世界で最も力有るものは、將來に禍を貽さぬやうに努めるの義務がある。

工場勞働に起因する職業病・工業毒を說いて其賠償法に及ぶ

福島尚純

一

人々に最も大切なものは生命である。こは唯人間ばかりではない。凡ての生物は其の生命を愛惜する、しかし人間が生命を重要視するのは人としての意義を完ふせんが爲めである、人間らしく生活し其痕跡を宇宙に殘し社會に何物かを寄與せんが爲であらう、然し吾人の生活も心身の健康に俟て始めて光輝を發し生存の意義を遂げ得る。健康が不十分ではよりよき働きは望めぬ、理想的生活からの意味でなく單に生きると云ふ事からでも、今日の如き富の分配の狀態では——有產階級の人々には多少病身であつた處が、生活自己には問題であるまいが、——無產階級者にして勞働によつて自ら食ひ、又た妻子を扶養する人々に取つては體力が甚だ必要條件であり、健康如何が直接の生活問題である、天地の大法則は生產及び所得は物質たる勞働と相伴ふものである、勞働によつて享くる處の者が全く天與の財貨である、各人幸不幸なく平等の生活を望むならば、人々は各個の厚生の爲めに其の存在する負擔を完全に盡さんと欲したならば健康が第一に必要條件である、戰後革命の獨逸に召集された獨逸國民憲法制定會議にて決議され、聯邦委員會の協贊を經て公布された社會化法に就て、一瞥したならば、勞働に就て大勢の向ふ處を窺ふことが出來よう、この社會化法は僅かに五條からなり後に殆んど其儘憲法に取入れられた第一條が茲に直接に關係

がある其の第一條を福田博士の譯文を借りて掲げる。

第一條　凡ての獨逸人は其個人的自由を妨げられざる限りに於て、全體の厚生が要する如くに、其の精神的並に肉體的力を活用す可き道德的義務を有す、

勞働力は最高の經濟財として、國の特別なる保護の下に立つ、凡ての獨逸人は經濟的勞働によつて、其生計を營む可能を與へらる可きものとす。勞働機會が紹介し得られざるときは、其の必要なる生計を保證す。詳細の規定は特別なる國の法律によりて定む、

右の內容は申す迄もなく、一、勞働義務、二、勞働保護、三、勞働權、四、無職者の生存保障の四つであるが、斯くの如く各人精神的なり肉體的なりに全體の厚生の爲めに勞働を義務づけられ、又た勞働權を認めて生存の最高經濟財とされた、之は獨逸に於ての話であるが此の精神は何處の國に於ても瀰漫して居る、今日資產なきものは之に類して勞働の權利を認められろ爲めに所々に爭議が起る、實際に於て勞働權が充分に認められたとしても各人仕事の能率に據りて所得の等級をつけるとすれば、充分の所得を得るには直接健康が關係する、勞働に關する規定完備せぬ時代に於て、例へば現下我國に於ても仕事の工程能率出來榮によりて賃金の支給を受くるに等差あるは勿論である、徒に仕事の利得と云ふ物質的問題からでなく、健康は人生の最大幸福源なるは說明を要せぬ、茲に問題は工業、職業としての勞働が人々の健康上に如何なる影響を及ぼして居るかといふ事である、他の財寶を以てするも贖ひ得ざる生命が工業勞働によりて惡影響されることが多くは人目に就くこと少なく、體力の減退と消耗、犧牲を拂つて居るのに十分に氣付かず、輕々に看過されて居ると思惟される、私は茲に之に關して概要を總論的に記述させてもらひたい、そして此のことが多少なりともこのことに關係した人々の注意を喚起する事になれば私の目的は達せられたものである。

二

職業としての勞働は其の種類が何んであらうとも、其人の健康に、何等かの影響を及ぼす、勞働が肉體的たるも又た精神的たる力の活用に待つものでも同樣である、經濟的勞働の及ぼす影響には例へば其の健康を增進的の關係を呈するものと障碍的に作用するものとあるべき事も自明である。しかし概して云へば、障碍的に働くものが其の數と量とに於て勝つて居る、斯く障碍的に働くものが多數なるは、今日の工業發達に歸する、工業主義の發達は人間生活に時間の餘裕を與へた、單に生活に必

要なるものを作製する外に生きることに缺ぐべからざるものよりも發達を致へた、其は益々職業の種類を雜多にする、一方から云へば分業的ならしめる、往時の如く單に食物と衣服と家屋を得る爲めのみの勞働でない、斯くて勞働は一面に分業的に單純化され、他面に複雜化された結果は身心の勞働が平均的ならす肉體に於ても精神に於ても或は其の一々に於ても偏頗に働かせらるるに至つた、ことに肉體の勞働に於て偏側體位にありて過度の勞役を强制されるものが多數を占めるに至つた、適度の運動は發育を致すものたるは勿論である、其で一程度迄では勞働する部分は然らざる部に比してよりよき發育を遂げる、其は全體から觀れば不平均な不具的の發育である、平衡を破つた一部的過重偏頗の勞働は健康を害すること顯著であり異常を呈し易く、殊に其の部分が先づ疾病を醸すこと往々である。

作業時の體位及び姿勢の影響として强迫位に於ての、偏側體位を採つての操業は疲勞の來ること速かである、のみならず之を持續すれば永久の障碍を胎す、例へば植字工、裁縫師、煙草卷工、煉瓦積工の手指の痙攣、鍛工の脊椎側彎後屈、製靴工の靴工胸、礦夫の眼球震盪症、硝工吹工の頰壁弛緩、葉卷煙草職工の齒の變化等の如き凡て偏側體位に由る過勞の結果を語るものである、所謂工業浮腫なるものは連續的の立業に從事するものに見る下肢靜脈血行障碍であり、車夫其他脚力によつて勞働す下肢に主として見る靜脈瘤も其の結果に外ならぬ。力士の耳の變化も亦これに類して起る畸形に屬する。

健康の增進と保持とに適度の運動が必要欠ぐべからざることは勿論自明である。職工に於ても亦一定度の練習を積んで仕事に熟し、工程能率を高め、仕事の出來榮が良くなる、又た之と共に障碍に對しての一定度迄抵抗力を高めるものである、がしかし、勞働は其の度を過ぐれば疲勞を招き、過勞に陷り、作業能力を衰廢し、自然に生産高に甚大なる影響を致招するのである、又た運動の過度は肉筋運動にありても神經衰弱を來すものなることは常時等閑視してならぬ事である。

精神的に好まざる勞働は特に倦怠と疲勞とによつて惡影響を呈すること著しい。ミュンスタベルグは其作業論として筋勞働の經濟、注意力と疲勞との關係、酒精其他の作業力に對する影響及び勞働條件の心的條件の心的條件への須應等につきて精細なる研究を遂げた、例へば煉瓦積職工の勞作及び用具につき詳細に心理學的並に生理學的研究をした後、煉瓦を置く場所の高さ、壁の高さ、職工の每回運搬すべき煉瓦數、鏝の形狀、漆喰の使用法、煉瓦の運搬法などを職工の心理的氣力に適應する樣に改めた結果、作業力は著しく增加して、之迄百名の職工を

要した作業を僅かに三十名に一ヶ勞なく終らしめた、斯くの如く心理的狀態如何は能率に顯著の影響を呈するものである、日本の工場に於て果して從業者の心理的狀態に迄で立ち入つて注意を拂ふ工業主が何人あるであらうか。

所謂運動家なる者い內には外觀的に筋骨隆々如何にも逞しく、まことに立派であるが病氣にもろい人がある、柔道家とか、ボートマンとかは外觀甚だ健康相な人が呼吸器病に犯され或は其他の疾患になやみ、あの丈夫相の人が死んだかと意外の感に打たれることがあらう、全身的調和を得た、別けて體育を目的とした運動、勞働に於ても過激若くは過度は健康を害するの運動る、內部には已に老衰と等しき變化を招いて居る、運動の爲めの弊害はこゝにあるのである、體育運動に於て既に然り、偏倚性の運動にたづさわるものでは特別に過勞を强へられる部の內部に、先づ變化を起す、其は第一に血管の變化である、運動に必要なのは血液である、血液を充分に供給する爲めに血管の發育は顯著である、此が一程度の後には過勞によつて血管壁の變化として硬化が起る、凡て人々を老衰死に到らしむるものは血管の硬化が第一因と做さるゝ、此の死を致すべき變化が偏重に使用される部分の血管に第一に强く起る、例へば鍛冶職工、記者、の如きには右利なれば先づ右に、左利なれば左に强く起る、斯くの如き變化を保つものは體質の虛弱性にかゝつた場合にも先づ起されるのである、例へば氣管支炎にかゝつたとすれば、其の主として働作する手足にまづ麻痺が起始する如きである、要するに刺戟に多く曝された側の筋群を犯すものである、鉛毒は前膊の運動神經筋纖維を犯すと同時に、先づ其部の結果虛弱により血管硬化を招き抵抗の薄弱となつた部分を特に冒すのである。

三

工業に從事する勞働者は他の職業、特に野外の勞作に就くものに比べて其の健康障碍されることの甚大なるは統計上明かである。ウヰリアム、オーグルの統計に徴するに職業別による死亡率は野外勞働者最も低く、工業の勞働者は著しく高い、其の死亡率は前者に二倍半乃至三倍して居る。

工業の種類に由つて健康を害することの著しきと、然らざるものあるも自明の事である、木石材或は金屬の研磨、硝子業、紡績織物業或は皮革製造業などの如く塵埃を多く發生する業類、化學工業の如き有害氣體を生ずる業に從事するものは一段に健康を害されること多く、其の命數を短縮するのである。

工業の種類の異なるに從つて罹病の率も異ふ、特に[illegible]から發表された處では紡績毛斯綸、木綿、絹、麻の織物業、印刷業、

セメント業に病者が最も多いのである。

復業者に見る職工の病氣の種類も亦色々である。各種疾病中最も多いのは多數の統計に於て消化器病なるを示し、呼吸器病、全身病、殊に結核、外傷等が之に亞ぐ、友人石原修君の調査では主に織物紡績る未成年女子を傭使する木綿紡績、生糸、織物、「モスリン」、毛織、煙草、印刷工場に於ける疾患は各業を通じて胃腸病が尤も多く、眼病（トラホーム及結膜炎）呼吸器及全身病等が之に亞ぎ、結核は印刷、モスリン紡績職工に、呼吸器病は紡績、印刷、煙草、織物職工に多く、又外傷は毛織、紡績、煙草、職工に著しく多數なるを示して居る。

工業衛生の觀察には經濟統計が重要の補助を與へ、職業の健康に及ぼす影響には精密綿密なる疾病統計、死亡統計、治療日數等の諸統計を攻究するは肝要のことである、私は然るに少しの統計をも表示せなかつた、其は甚だ不完全なやりかたであるが、記述の目的が單に概念を與ふるのにあると、又た一つには本編の記述が甚だ單日の間にある爲め私の十分の用意が出來ぬからである。實は本誌記者に向つて本記事の事を話した時は最早や原稿〆切に間のない時のことであつたからして、舊い統計は手許にあるが私の心に行くだけの充分な且つ近き年月の統計を持合せて居らぬためである、私はこゝに大に謝罪して、寄

想を乞ふ次第であります。

統計的觀察の必要なるは自明の事であるが本來職業は多く個人の任意選擇に因るものである、從て、火工、木工、鑄物工左官、鍛冶工等其他比較的體力を劇しく使用する營業には素質の强健なるものが自然に集り、輕易業には素質劣つた弱いものが撰ぶ、靴工、縫工、煙草工、植字工等の多くは前から弱い素質のものが就職する、斯く職業選擇の初頭にありて已に自然淘汰の現象が顯はれる、從つて輕易業に却て疾病死亡が多い事實が現出されることがある。若し此の自然の約束を顧みずに單に數字のみに據りて原因的說明を下さんとすれば眞相を誤るものである、又た職業によりては或器官を障碍するも故死に到らぬものもあり、死亡統計のみに依る危害の大小を判定されぬ、更に職工は永く一つの職業にとゞまらず時々原職を變更するものが多い、故に中立の職業が必ずしも彼等の永く就業した仕事でない、從つて統計上の觀察には統計事項及び方法を綿密に規定しあつめた精確なる材料を基礎とし制定しなければならぬ、又た彼我の統計を比較調査し得る必要上から世界共通の統計調製記入が決議されて居る、

四

各個人の體質如何は曝露される環境因子に對して影響を蒙るか、然らざるかの決定的意義を持つて居る、同一條件の許に就業しても全部が同樣に罹患するのではない、其一部は疾患を免かれ、他の一部分に漸く時を經て、例へば一年後に始めて障碍に對して反應を顯はし、其他のものは已に短日月の後に多少の相違こそあれ反應を呈するが如くである、この顯著なる事實の關係に就ての眞相は吾人の未だ十分に闡明し得ざる處に屬するが特別に虛弱なものとか、後天性に種々の誘因によりて弱らせられた個體、卽ち遺傳的素質、重患、不良の生活狀態及其結果、過度の不攝生など抵抗力を弱めた人々は、健康に滿ちみちた人々よりも、總じて疾患にかゝり易きものなるは特に論ずる要を見ぬ、さりながら大凡同等の健康程度の人々にあつても同種同等の程度にある刺戟に對する反應に頗る相異がある。

元來各人の有する抵抗力は諸種の條件によりて左右せられる、人種に依り、年齡性別により相違がある、個人に就ては前段記した如く天賦であり或は生活狀態によりて得られ。筋骨神經、並五官の發育程度によりて著しく異なるが、人々の意思勢力強弱に關係を示し、適度の練習鍛治は筋骨肥大となる外に作業能力が加はり抵抗を高める、然し過度の勞働偏側勞働に於ける障碍あり抵抗の降下を來すは已に記した如くである。

更に記すべきは抵抗力が全身的であり、或は或るきまた臟器に限つて存在することである。臟器の發育程度に抵抗力が異なることを記したが、これは各種臟器の機能遂行力が多大意義を有することである、血液形成、心臟及血管の作用、皮膚及腎臟の働き、纖毛上皮運動及び神經系其他の働き如何に關することである。

五

口腔殊に齒齦及齒牙の狀態に就て重視するの要がある、近時世間に於て口腔攝生の宣傳運動が盛んになつた、其半面に於て不滿足の點なきにしもあらざるが、大體に於て甚だ慶賀すべき現象である、蓋し口腔が生體の全身上に影響する處尠少ならざるを了解されたからの運動であらう、工業衞生學の方面に於ても一般に口腔攝生が等閑に附せられたと同樣に甚だしく顧みられなかつた、しかしながら口腔に關する研究に從事する吾人を以てすれば口腔は工業衞生にも亦頗る重要なる關係を示すものと主張せざるを得ぬ、口腔は工業毒に犯され易く、時として初期に於て、病の未だ重からざるに先ちて症候を呈する、卽ち中毒症の表示として現はれることもあるが故に、之を氣付いた場合

先づ速に發生を加へ、適法の處置に依り、從業者の健康を恢復し若しくは生命を取留得るの興味あるものである。

工業毒の口腔に及ぼす惡影響を受くるの途は(一)、口腔粘膜及齒上に直接の作用によりて來り(二)或は一旦體内に吸收されたるのち唾液粘液腺より分泌排泄された毒素によりて罹患し、(三)最後は兩者の合併作用に由來する、健康な口腔齒牙齒齦は職業的障碍に對して一つの保護を與へるが、他面に口腔及齒は職業の遂行中に種々の障碍るを蒙る者である、不幸にして職工の多數に内には衞生觀念の不十分なる爲め、或はたとへ教養ありとするも疲勞倦怠からして攝生を保ち得ざる爲めに障碍される、特に本人の不養生、榮養不十分、飲酒によりて强められ、又職業毒に因る特殊 貧血榮養障碍は齒と口腔粘膜 不良の影響を醸し、更に全身的の緊調が合併して全身の障碍を高調すると共に口腔を罹患せしめ、相互に因果的關係によりて一層健康上に不良を誘致する、口腔の健康は特に毒性物或は傳染性物を以て作業する場合に重要なる關係を有するものである、故に口腔に於ける工業的疾患の一々を記する事は困難かつ又本旨でないが、口腔衞生に就て就業者を親しく衞生上の注意に就て教示し、且時々診査を行ひ、疾病を發見せば、法によつて治療し、衞生上の設備を完全にして各々が容易に施行し得る樣にすべく、特に新しき就業者は口腔檢査を嚴重にすべきものなる[illegible]なるを[illegible]にして置く、

六

精神の緊張力の如何が作業上の能率に大影響を及ぼすことは勿論である、過度の勞働によつて緊張力は減退弛緩を致すは云ふ迄もない、其の當然の結果は作程の能率があがらず、其用[illegible]が不良なるは愚かの事、其上に恐るべきものがある、即ち危險に對する注意が不充分となり、これを怠るが故に危害の防止に安全を欠いで、自己は勿論工場全體に及ぼす危害を招致する虞れがある、若し吾々が疲勞問題を研究したならば、研究する程一層工業及社會衞生上の中心點たるの念を深くするのであらう。

懈怠の徴候が多くの場合疲勞の前提であり、或は其自己を表示する症候であるが、此の身心の緊張と災害の關係に就ては往時から知られた事實である、しかも之を重要視せしめた因が今も尚持續する樣思はる、嘗て獨逸保險局の發表した處に由ると午前中の後の三時間の災害は前の三時間に於ける之れに二倍し、午後六時迄の内後の三時は日中の最高率を示して居る、此の災害と同樣に所謂職業的疾患の發病因も亦疲勞傳染期間の終末に近

く蒙るものである、即ち疲勞困憊した時分に病原に侵せらるゝこと多數なりとなすべきである、勿論工業疾病に限らず一般の疾患に就ても同じ關係に立つ、若し疲勞と發病との關係を統計として擧げ得るならば明かであるが、疾病は外傷と異つて發病時を判然と表示されぬ、特別に疲勞時に疾病因を得ることの精明確なるは有毒物、傳染物を處理する職業である、張力の弛緩は危險豫防々止の觀念が薄らぎ、甚しきに至つては殆んど無頓着にさへなるからである、

七

精神の緊張力の減退、過度の勞働による疲勞が災害の大原因たると共に疾患の誘因だと云つた、過度の注意力と張力使用法には其結果として疲勞があり神經衰弱貧血等を來すのはポツダム附近の織物工場男女工に就ての調査によりて知られる、日本の工場にありても内部を實際にさらけだしたならば、斯くの如きは甚だしいものがあると云ふべきである、

職業過勞の間に起る塵埃、殊に有毒物を不知不識の間體内攝取によりて身體の抵抗力の異常減退を來したものは一層疾病に犯され易いものである、マツテイ氏は或傳染病に感染やすき動物に有毒瓦斯、例へば一酸化炭素、炭酸瓦斯、硫化水素などを呼吸せしめた後には其動物は一層傳染病に對する抵抗力の減退を來し遂に死に至るを實驗によつて示した、更に感染し難い若くは之に感染しない動物でも有毒瓦斯を吸入させて後には其の天然的抵抗力を失つて感染する、勿論此の狀態は吸入の時間、吸入した瓦斯量等に關係することを明にした、慢性中毒、酒中毒にかゝつたものが傳染病に犯され易く、又た豫後が不良である、同様に重病後、腐敗瓦斯、塵埃の吸入、營養不良者に傳染病罹患率の大なるのを見るもマツテイの實驗の眞なるを語るものである。

塵埃の吸入と肺結核との關係に就ての實驗の一例を示すものは、チエサ、ビアンチの仕事である、「セメント」、トーマス鐵滓、磨砂、石炭、眞珠母等の細粉を別々に「モルモツト」、の或數に區別して吸入せしめた後に結核菌を注射或は吸入させたるに、對照動物、即ち何等の前處置せぬ健康な、塵埃を呼吸せぬものよりも容易に結核にかゝり、且つ早く斃死することを示して居る。

茲にあげたマツテイ及びチエサ、ビアンチ氏の實驗は甚だ單純な事であるが、職業者の健康保障と其の賠償に關する問題には頗る重要なる意味を有するものたるを否むことは出來ぬ、私が後段職業毒に關して述べんとする所に緊要の關係を有して居る。

八

職業病又は工業病とは從業中に、其の仕事なり、或は使用材料の障碍特に工業毒に直接起因する疾病の謂である、更に特殊の職業に限つて起る特殊の疾病は狹義の意味にて正しき職業病である、例へば黄燐々寸の製造製工に於ける燐中毒、鉛含有物使用者に於ける鉛毒症、水銀の使用者に於ける同中毒の如く、又た有產階級者が富の誇を誇る裝用品たる眞珠の磨工に見る特異なるエングリッシュ病の如きである。

工業毒とは即ち化學的物品であつて、工業若くは職業に從事する間に人體内に多くは知らず識らずに侵入し、其量多からざるも已に障碍を惹き起すものである、今日諸種の工業、職業に於て頗る此の毒素の害を蒙るもの多く、寔意外の所に意外の中毒を見るものなるを否定されぬ。

此等の工業毒が人體内に進入する途に色々ある。

一、口腔、消化器系を經て侵入する、この經口的進入するものは固形のもの或は露滴狀をなしたものである。

二、呼吸器へ經て肺内に入るもの、即ち口腔鼻及び肺から入つて人體を害するものは瓦斯塵埃として若くは露滴狀をなした液體の形としてである。

三、皮膚面から侵入するものがある、健康なる若くは多少とも損傷された皮膚から體内に進入する、此の經皮的侵害をなすものは固形の毒素或は、エーテル性液體の毒である。

職業による化學品の中毒は多くの場合に、寧、殆んど凡ての場合に慢性症として現はれる、そして就業中何時となく體内に攝取された爲めである、其の反應の發現は個人的に必ずしも一定せぬ、已に短時にして發病し、或は持續的の毒物吸收によりて漸く現はれることがある、又た職業が已に他に轉業してから時をへて見られるものが少くない。

工業毒に對する個人の感受性も亦、一般工業の障碍と共に甚しき相異を見るのである、人々によりて同じ毒に對しても抵抗力に著しく甲乙がある、のみならず、同一人にあつても或毒素には抵抗力强きに不拘、或種の工業毒には頗る犯され易いと云ふ樣な事がある、天然的或は後天的に得た抵抗力も諸種の事項に據つて弱らせらるゝ、諸種の疾病、過度の不攝生、榮養の缺乏、色々のエクセツセに由り、幼年者及女子には一般に弱く且つ罹患の率が大である、これは前段已に說明したのと同じである。

人體は體内に侵入した化學的物質に對して、之を無害ならしめるに努力する、此の能力は身體が健康であり、各職器が健全

に喚起する程往々刺戟作用を強く發揮する、毒物は腺、殊に腎臟肝臟若くは汗腺から又た口腔唾液腺、胃腸の分泌腺から排泄せられる。一酸化炭素、炭酸、芳香列の揮發性物質は肺臟から除去される、斯くの如く毒物を體外に排泄驅逐せんとする、しかし其間に全身的の症候を呈し又局部的に、殊に毒の排泄につとめた部の障碍が起り、疾病に陷るものである、既に健康を害されたものは、曾て有せる免疫力をも失墜して、次に來る同じ毒物には容易に犯され、或は其他の爲害物に容易に傷く、殊に傳染病に罹りやすく、其際抵抗力弱く、生命を脅かされる、前段述べたマッテイの動物實驗に於けることがこゝに當嵌まる。

九

前記の狹義の特殊の職業的疾患の外に色々廣義の所謂職業的疾病がある。即ち工業若くは鑛坑内に於て頻發する諸多の疾病をも之に屬せしむる、職業勞働に據り其健康を害し抵抗力の減退により罹患率を高める、工場から退いた後、一定の時日を既に經過してから發病するものがある、結核の如きは發興多き職業者に於て、特に抵抗力充分ならざる幼年工女工に著しく頻々である、これ慢性中毒或は中性刺戟を蒙り抵抗力減退の結果である、工場の衛生設備不完不行屆に因した病氣は等しく職業病と目做される、職業疾病は業務に因つた外傷災害と同様に取扱ふのが至當である、但し匕首を胸に突立てられるも、毒藥を杯に注がれて斃れるも其の死にかわりはない。寧ソロソロ毒殺される方が苦痛の度が強く、忍びがたいではないか、獨逸では從來保險局は是等の疾病を矢張り保險の範圍外に置いた、之に對して醫師側の反對となり特にエル、レヰン氏の如きは慢性中毒症は保險法の下に律せらる可きものなりと主張した、余輩は之に賛同を惜まぬものであるが、私をして言はしむれば尙徹底したものとは云へぬ、我が現行工業法に於ても勿論疾病にかゝつた云々の事項あるが其の施行適用が甚だ不十分であり、若くは明かに職業的中毒なるを推論し、診斷し得る場合に於ても請求がなければ其の儘經過される狀態にありはせぬか、衛生智識に乏しく、殊に疾病其ものの原因等に就ては全く無智とも云ふべき職工が給助を請求主張するを待つのは人道に缺ぐる處である。

長き年月の間、持續して廉價に己の勞力を捧げ、有害作用を蒙り何物を以ても償ひ能はぬ體力を減退し、別けて有毒物、傳染、強光高熱、塵埃、激甚なる騷喧震盪の下に勞役した結果疾病に罹患し易く驅致されたものは、當然其の損耗に對して適當の

賠償を受くべきものである。

戰前の獨逸帝國保險局は十二指腸病を炭鑛夫にありては炭鑛病と見做し、該病蟲の驅除に克く使用される綿馬越幾斯(エキス)のため不明の不幸を見ることある場合には之を災害と同一に取扱つた、又たチブス患者ありて其發病の因が坑內作業にありと認めたる場合にも同樣に取扱つた、

十

工業に因る災害及び疾病を豫防し減少するに必要なる要求の一は從働者の張力をして一定度を越へて使用せぬ事である、目下文化的工業の趨勢は時間を短縮し、其の缺を補ふには休養によつて蓄積したる張力を以てせんとするのである、這の時間問題は單に保健及び之に關聯した結果の爲めばかりでなく、其他に色々の理由あり要求あるは云ふ迄もないが、之に就ては茲に論及するの場合でない。

操業時間の延長に因る過勞の半面を語るものは女工の體格一般に不良にして契約年の長引くに從つて益々劣弱の度を加へ、又女工の過半數が就業後僅か三乃至六ヶ月にして疾病の爲め退職すとの石原技師の調査である、徹夜業は殊に衞生上風紀上甚だ有害であり、他方には工業經濟上よりするも徹夜業は機械の破損を招き易く、其の保存期限を短縮し生產品の價値を低下する、寧ろ之を廢するを以て營業上有利なりと云ひ、工場衞生發表の際日比谷氏の公にした所見の如きは此の邊の意味を克く說明するものである。

斯るが故に從業者と資本家とは相互適當なる了解の下に就業時間を協定し、時間の短縮の缺は張力の緊張によりて補ひ、時間の餘裕を利して工人は品性の向上を計るべきである。

十一

善い法度と正しい制限とは、正しい人から見れば鎖で無くて鎧である、多少厄介ではあるが、一身の力となり又衞りとなるものである、生物一般を通じて自由と制限とを抽象して考察すればいつも制限の方が貴い地位に在る、世間に群をなして自由を論じ、宛もそれが非常に貴いものであるかの如くに主張するも、貴い考へで擇まれた自由と制限とにして始めて貴い、卑しい考へで擇まれた自由は卑しい、而して自由でなく放縱に落ちる、勞働力の最も尊重すべき最高の經濟財たるを主張せんとする人々は貴い意味に於ても自分の勞力を自分の手に損傷せざる樣にせねばならぬ。

身體の抵抗力を減弱し、早老を招くものは酒である、酒精に

就て詳述するのは問題外である、酒客が抵抗力低く、作業の能率あがらざるは勿論、其腦内には確な注意力なく自制力が缺けて居る、責任ある業務に就しむるは甚だ危險である、作業に對耐久力なく、自己の危險のみならず、彼のあやまりは延ひて全般に及ぼすが如き職務には絶對的に就職を禁ぜなければならぬ、自由と放埒とを誤つて酒色にふけるべからずである。

經濟的勞働に於ても已に過勞の害を説いた、ことに夜業は衛生上甚だ悪影響を來し、夜業者の體重減少の割合を見て寒心した、職業上からの睡眠の不足ばかりでなく、卑い意味からの、不攝生からの夜ふかしと同一である、自家保健上愼むべきである。

斯く已れも攝生を重んじ、體力の緊張を謀り、其の蓄積した張力を捧げて業務に勉勵して、始めて適當なる要求と主張とを許容されるものではあるまいか、從業者の一般に對しての希望である、

十二

各人其の職を求むるに當りて、其の撰擇は全く自由である、しかし自己の才能に相應した職に就き、自然的に淘汰が行はれる、是は結構であるが醫學的に云はしむれば人々によつて體質異なり、體質の相違によつて職業の適不適がある、而して自分一個、殊に適當なる能力ある醫者の判斷に待たざるべからざるものありと、前段掲げた獨逸の新紹介法に於ける紹介すべき勞働の種類は其の草案には「各人の才能に相應する」と明記してあつたが、是を削つたのは否認の意味でなく自明なりと認めたからであると謂ふ。

工場なり、鑛山あり、何處にありても新き就職者を得たならば、充分なる醫學的診査を遂げなければならぬ 工場法施行細則に其の規則はあるであらうが、實行されて居らぬ、全く顧慮されて居らぬと云つてよい場合がある、不景氣の時代には首切るに遠慮がないが、自分の必要に應じては其の體格、人物如何は問題でなく、何んでも彼でも要球の手段を弄して殆んど誘拐と其の結果とである、體格檢査どころではない。

身體諸部の診査時に特に口腔齒牙の調査に付するを許さぬ、口腔の健全を望み、若し不良齒を有せば是を治療したのちに始めて職につかしむべきである、口腔が殊に工業病に對して重要なる關係を示すは已に述べたが、更に鼻息閉し口呼吸を營むものは著しく犯され易い、鼻呼吸者にありては細菌を吸入するも其の九六%は鼻腔と氣管との途上に抑留され、肺の氣胞に達するものは唯僅かなるはパウルの云ふ如くである、若し鼻呼

またげられ口呼吸を營むものでは殆んど全部の細菌は直接氣管及び肺に達する、これは單に細菌に就てであるが、細菌を含有する塵埃や瓦斯や色々の爲害物が同時に働くことを此の場合に忘れてはならぬ。

就職の當初ばかりでなく、其後適當なる工場醫をして時に診査せしめ、各自に攝生法を授け衞生思想の涵養に努めて、罹患率を減ずべきものである、

十三

醫學的智識のかけた勞働者には、實際其が職業による障碍であり、中毒の結果なるものをも自分で判定できぬが爲め、其儘退職する、何等の要求をも提出せず泣ねいりの狀態で其きりにたるもの甚だ多數なりと私は推測する、醫學者でも眞面目に考へなければ其が職業のためなるを見逃かすものがある、尙又實際に今日智識に於ては判定出來ぬものもあらう、大に研究を要する次第である。

目下本邦に見る勞働爭鬪に於ける從業者側の主張中には衞生上の施設要求等も二三現はれぬでもない、がしかし其の多くのものは住宅とか便所とか、それに類した事の要求に止まる、其も必要にして當然の要求であらうが、私を以て見れば更に就業所場內に於ける十分なる衞生上の設備を求めなければならぬ、重大な健康の保護に思を致さぬのは、未だ／＼其の以前に先決問題の殘存するものあるからであらうが、又一面には健康上の知見の不十分に基くこととなしともせぬ、人格の解放も其健康が十分でなければ或は無意義に終り、少くとも其の意義を完ふせぬは歎ずべきである、私は推測する、今日の爭鬪の問題をなす事項が凡そ解決された曉には必ずや健康上の問題が論爭の中心點になるべしと。

從業者側にありても勞銀の過多を必ずしも要求することなく、資本家をして衞生上の設備に可及的多くの費を投ぜしむべきである、資本家たると從業者たるとを問はず、その健康問題に十分の顧慮が望ましい。一國民の健康如何は唯、一私人の問題でなく國家の榮枯に關する大問題であり更に人道問題である、今日吾人の知る範圍では衞生上の設備は甚だ輕視された狀態にある、例へば炭坑夫をなやます十二指腸蟲病の如きが豫防の一法としては坑內の溫度を二十二度以下に保てば足る、之れ同蟲蟲卵の發育を抑止し得るからである、此の目的には坑內の通氣を充分にすることで事足るものを現在は實行されぬ、人命を重じ健康を貴ぶならば疾に世間に知られた設備を完ふすべきである、就業者も亦大に是を要求せなければならぬ。

此の相互の利益に歸する分かり切つたことを克く理解して保健上の設備改良に十分の意を拂つて貰ひたい、もし資本家にしてこれを怠つたならば後段の述べる様な非難を受けなければならぬ。

十四

開明の今日に於て存在する苦惱と罪惡の大部分はたゞ此の分り切つたことが分らぬ人々の間から發生する、斯る人々は生産と所得とは勤勉なる勞働と相伴ふものなる、天地の大法則たるを忘れ、如何にもして此の人生の大法を誤ひ若くは隱すべきの道を求めんとし、自ら耕さずして食し、自ら識らずして濟やうと企てゝ居る者である、以上は半世紀以前にラスキンの講演の一節に見出すものであるが、文化の理想生活を欲する現今に於ても吾人の周圍に全然ラスキンの言が痛切に適合するものあるを恐るゝ者である、ラスキンを待たずとも知る、他の勤勞を我が物として其の結果をのみ納めんと謀るものは暴君にあらざれは盜賊である、勞働者の勞作によつて不當の利得を私するものは、其は盜みである、元來サキソン語のステーリング(Stealing)は他人の勞力に對する相當の報酬を奪つて、それを己がポケツトに入れることである。

資本家にたゞに經濟的勞働に從事するものゝ多數が其の勞働を奪はれ、所謂盜みを受けるばかりではない、前段說いた如くに諸種の職業に於て健康を阻害され、馴致した不健康によつて生命を短縮されつゝあるのである、然り人々は奪はれ且つ一歩一歩に死の淵へと押込められつゝあるのである、殊に或種の職業毒に曝されるものは如何にしても其の害を免かれる手段は殆んどないのである、啻に從業者は己ばかりでなく其の子孫をも損はれるのである。吾人は鉛工業に其好適例を見出す、婦人は特に鉛毒に犯され易いものであるが、プールネヴイユは鉛中毒と子孫の退行變質との關係を立證し、フロンキアも亦同一の事實を舉げた、鉛工業に從事する婦人に不姙娠、流產、早產、死產、若くは産れても痙攣する様な小兒である、授乳中の婦人は其の乳分泌の減退、終には枯渇を來す、男子の鉛中毒も同様の障礙がある、其の妻女は姙娠中多く流產、早產し、或は生兒を生むも其の大部分は初年に死し、三年以上生育せるものは甚だ稀れなるをパウルは指示して居る、

以上敍述した處は必ずしも私を待つて始めて記せられた新しき事實ではなく、寧陳腐の事件に屬すると云ふが早い、其れ丈け確實な事實である、今若し過分の利得をむさぼつて安逸に耽る資本家ありとし、其の人が今日の如く從業者の衞生狀態に

みず、其の健康を重せず、傷害を蒙らせつゝ、己れの張れる網にかゝれるものは殺害して、手當を施さざるの狀に放任するならば、勞働者は切盜强盜を蒙り、加之、毒を盛られつゝあるものである、他面に於て雇傭主は强盜と殺傷との累加した罪を負はなければならぬ、如何にしても此の責任を忌避する事は出來ぬ、その罪と云ふのは勿論形の上に現はれた所でいふものに非らずして、眞の責任觀念に基いてである。

私の記述は固より限りある私の智識に基いて、加之卒急のことであるから不完全の點があらう、又た絕對に誤りなしとも云はぬ、しかし私の云ふ所は誇大の言ではなく、全く冷靜にして分別ある主張である、且つ必然到達すべき結論である、終に臨み吾人は更に經濟的勞働と疾患との關係は、之を世人が詳細に觀察して解した上に、始めて之を救ふの法則生るゝものなるを附言せなければならぬ。

（十、八、十九日稿）

日本人の生存權

杉森孝次郎

不幸にしてわが國には、いまなほ、沒批判的排他主義者と、沒批判的卑他主義者とが多い。世界に於ける日本、人類に於ける日本人の、客觀的、本質的價値に開眼して、日本の對世界策と、世界の對日本策とを研究し、決定する努力が足りない。日本を、帝國主義者だと評する說がある。しかし、開國以來、露日戰までの日本は、民族的生存の確立に忙殺された。他民族の自治獨立を侵害する、餘力と餘意はなかつた。淸日戰も、露日戰も、日本の自衞戰であつた。結果に於いては、多少の發展であり、成長であつたが、動機に於いては、最低限の民族的自己保存の努力であつた。消極的必要戰であつた。膨脹戰ではなかつた。開國の動機そのものも、消極的、受動的必要であつて、積極的、能動的必要ではなかつた。日本人は、帝國主義の信者たるの資格を、平均程度には所有してゐるかも知れないが、その實力と機會とは、露日戰までの日本人には欠乏してゐた。

露日戰後、日本人は、帝國主義者には成りえなかつたが、國際主義者にも成りえなかつた。いさゝか[illegible]した。[illegible]

に、日本が、その北門を當時の發展的帝國主義の露に窺はれ、つゞいて、ペリの來訪に接したのは、一八〇六年の、イェナの敗辱にも比すべき性質の事件であつた。對露戰勝までの日本は、一八七〇年に於ける、對佛戰勝までの獨逸に、心術、行事、ふたつながら似てゐる。民族的自覺の勃興だ。侵略本位でなく、獨立本位だ。擴張よりも充實であつた。道德的調子が高かつたのだ。對露戰勝後の日本は、對佛戰勝後の獨逸に、やゝ似てゐる。意滿ち、好傲る小成態があつたのだ。內の充實を怠りながら、外への擴張に腐心する輕浮、迷妄も長じた。獨逸は、一九一八年の秋に、直接の大反省を强制されたが、日本は、敗獨の績に鑑みて、急に非軍國主義、デモクラシイを、一部の識者と、青年の大部分とを通ほして、唱へだした。しかし、刺戟が間接なだけに、また理性の本質的要求に淵源してゐないだけに、敗獨後の日本の內發、不安、改進、充實の努力と成績は、頗る淺薄、狹小、不徹底だ。

そもそも、國家生活、國民生活は、近代に發達した一傾向だ。その傾向の一極は人であり、他極は、各人格的個性間の協力だ。現代に於ける立國の理想的原則は、この兩極を、同時に十分に肯定するにある。そして、その向內的、求心的、各人本位的一極が、その兩極中の支配極だ。原動力だ。鬱積的歸着的價値だ。對露戰勝後の日本は、この新自覺に猛入すべきであつたのだ。然るに、事實は、人を、社會をも見ずに、幕末に於ける廢藩立國の良心と聰明を、その形式に從つて、ひとへに脈守し、固執した。朝鮮、支那、西伯利等の隣境民族と、本質的、人間的に協力して、政治的、經濟的一大自治區を形成すべき時代的、世界的眞必要が、成熟し來たれるにかゝはらず、日本は、良帝國の、歷史的妥當價以上の價値を、國民道德、國民教育、國民法、國民執政の基礎に準備し、それらの上に創造する意思をも、努力をも生じなかつた。いまなほさうだ。日本に亡國の兆ありとすれば、その無意思、無努力だ。日本に興國の兆が足りないとすれば、その意思、努力の不足だ。日本に興國の可能ありとすれば、その意思、努力を十分に旺盛にする可能だ。

日本人は、開國の際に廢藩立國した。もしも日本人が、世界的、亞細亞的、極東的、及び日本自身的、綜合必要の實內容と、眞意識とに於いて、東亞的、または比較上全亞的一新社會要部を創造する努力を怠るならば、日本人は、自治無資格民たる告白を、天下に實示するのだ。一社會內に於いて、自治力なき、またはすくなき個人と衆團とは、自治力ある、または多き個人と衆團との、自治力の延長を必招する。史上に於ける[illegible]的、統治的民族と、敗亡的、隷屬的民族との間には、しば

自治力の有無強弱が、その共在事實として發見される。各人は、隨つてまた各民族も、他人や、他民族の、自治力の延長を必招するやうな、無自治、薄自治であつては、道德的に恥ぢだ。實際的に損だ。結局、自他の不幸だ。全體の發達と、各部の發達とは、異名同實だからだ。國際政治の上に於いて、自治力強き民族と、その民族の住地とは、常に爭鬪の雜囊だ。自治力厚き諸國民が、近きは自衛及び發展の動機をもつて、遠きは發展及び自衛の動機をもつて、眞空を滿たす周圍の非固形體の如くに、爭ひ寄る。合衆國にとつての中、南米、日本にとつての東亞は、その一、二例だ。

一民族が、他民族の自治力の延長を否定する結果が、第三國民の自治力の延長を、代招するに過ぎない場合がある。そして、その結果の結果は、自治力ある二國民の險惡なる接爭に移る場合がある。英國の政治家が、愛蘭の獨立は、可能的敵國が、英國の門脇に巣を食ふ危險を意味することを懼れるのも、この事理の不完全なる一適例だ。合衆國が、中米併合の意欲を增大し來たれる裏面にも、メキシコが、敵國陰謀の策源地となる可能に對する危懼が多少潛んでゐる。大戰中の、獨墺、獨露の關係が、英米の神經に與へた刺戟は、解放政策の運動でなく、保守主義、帝國主義の助勢であつた。亞細亞諸民族のうちで、自治力の健在を證示する民族は、最近の現實について觀れば、日本民族のほかにはない。日本に近接する幾多の亞細亞民族は、不獨立でなければ半獨立だ。支那がその半獨立の代表だ。その支那も、結果としての、現象としての半獨立であつて、本質として、內質としては、不獨立に近いやうに疑はれる。日本が頑張つてゐなかつたら、またゐなくなつたら、支那は、南亞諸民族の運命を、わが身の上にも見たのではないか。見るのではないか。轉じては、支那が白人の覇權內に落ちた時、日本の獨立は、將棋に於ける王單獨の苦戰に近い狀態に移る。

地上の陸の面積は、およそ五千七百餘萬平方マイルだ。その上に生存する人の數が、ほゞ十六億だ。その全數のうちの、九億ほどは亞細亞人だ。われらは、一點の嫉妬心も、憎惡心もない、純眞な、平和的心情に於いて、いはゆる白人の優能を賞美する。そして、人類のために、その優能の發揮としての文化的功績にむかつて感謝する。しかし、白人以外の諸民族にむかつては、自治、責任、創造の三德をば崇高き人類として、再生し來たる意思、努力の發生を希望する。自治は、責任の先要件であり、自治及び責任は、創造の先要件だ。國際的に、人種的に、社會的に、創造の意思と能力の大なる個人ほど、國民ほど、隨つてまた民族ほど、生存權を餘計に有するのだ。創造とは、道

德價値、文化價値、經濟價値の新作だ。比較的高度の幸運安富力ある眞、善、美の生産ほど、一層十分なる創造だ。その生産者ほど、生存權が高いのだ。積極的に、直接に、人類社會を利福する眞、善、美を豊大に創造しえないまでも、社會に於ける分勞、その分勞を方法とする協力に有能な個人であり、衆團であれば、隨つてまた民族であれば、生存權の水平線上に立つ。

現今、及び殊に今後に於いて、社會は、單一なる人類社會として存する。その全人類的社會に於いて、分勞しうる力、いひかへれば協力しうる力の有無大小が、一人、一國、一民族の生存權の有無大小だ。分勞の自覺は、もしくは道德的內容は、自治だ。協力の自覺は、もしくは道德的內容は、責任だ。自治力、責任力の有無大小が、創造力の有無大小に次際して、民族の生存權の有無大小だ。

自治力、責任力、創造力低き人及び人々は、それらの力の高い人及び人々の生存に併合される。前者の生存權は、後者の生存權の一內容を形成する。前者は、後者との關係に於いて、比較的 物格價値に屬し、後者は、人格價値を、前者を支配する形に於いて主張する。亞細亞諸民族は、概ね、歐米人との對比に於いては、その支配下に生存する。殆んど、人格價値に從屬する物格價値の觀を呈する。亞細亞諸民族も、人類である故に、これは差別でない。人類の過程は、恐らく區示だ。同じ出身でありながら、境遇、自助の殊差によつて、本質價値上に、非常なほど顯著なる優劣を代現する。歐米人と、亞細亞人との共存關係は、車上の人と、その車を曳く人との對照だ。誇りと恥ちの共存だ。人はすべて車上に坐すべく、車は、自働車の如く、機械力によつて進轉すべきだ。亞細亞諸民族の解放は、亞細亞諸民族自身の、人類社會に對する自治力、責任力、創造力の準備されると共に實現される。その解放は、同時に歐米人の利福だ。なぜかといふに、歐米人も、亞細亞人も、今では、一社會の成員だ。社會は、意義に於いては、一人だ。その各成員としての唯一人だ。一人の各一部が健康であることは、その各他部のためにも必要だ。亞細亞人の成長は、歐米人に對する亞細亞人自身の責任でもあるのだ。

百年前に、露の帝國主義の觸手は、遠くアメリカの太平洋岸に伸びた。アメリカは、モンロー說を發明して、この觸手を打ち退かせた。露の觸手は、亞細亞の太平洋岸に方向かへをした。支那侵略の白人史は、こゝに開始された。昨今、戰後、日の出の勢ひの米は、その經濟的、政治的觸手を、みづから亞細亞の太平洋岸に雄揮し始めた。その心理的背景は、意識的、半的、無意識的勢力の混成だらう。力の自覺に刺衝されての

の使用は、その本質的傾向の一だらう。市場擴張の本國的必要もあらう。對日作戰の興味もあらう。露の共産主義を、對岸亞細亞に攻撃する目的も、次第に明覺されて來るかも知れん。米、英の生命とする資本主義の防衛を、東亞にも確立する用意が、米、英としては、無くては無邪氣すぎる。支那の人口と、天然資源とは、及び地域とは、これを友とし、これをわが用に立つやうにすると否とによつて、他の一國の生存力は、甚大の强弱別を生ずる。早晩、米露間の競爭も、共産制の後の新經濟組織確立の路を一方の勢力として、發展するかも知れん。米歐間の競爭も始まるかも知れん。いづれにしても、國際無政府の爭覇時代が續く間は、近攻遠略が、力ある國民の對外策だ。異日、政治的權利、經濟的權利の、國際的整理が問題とされる時運が到達しても、交換條件を、出來るだけ多大に獲得して置くことが肝要だ。近所にも、遠方にも、發展しうる餘地と機會と可能を發見され、創設される限り、發展して置くことが、後日のためと打算されるのだ。しかし、この狀態は、永續しては人類の損失であると同時に、不幸だ。

世界は、最近の將來に於いて、大體に於いて、三、四分される必要がある。西半球は、合衆國が先導者となつて、國際的一大自治區に組成されべきだ。合衆國と、中、南米、及び英領加奈陀との間にさへも、現在以上の協力を組織するのだ。それは、兩米大陸住民の、眞正の利福の保護、增進の手段として必要だ。ただ、この場合に、合衆國が先導者となるとはいうても、それは、いはゆる帝國の組織方に從うのではない。いはゆる帝國の組織方に於いては、中樞に一征服民族が蹲踞し、その周圍に、被征服民族が附屬する。身分と自由が、その中樞民族に高く厚く分配され、その附屬民族には低く薄く分配される。各人格的個性の本質的眞價をば、社會的待遇の決定標準としないのだ。こゝにその組織の主要病弊がある。國際的大自治區の新設は、純粹に、人格的の價値を目標とする。合衆國内の、友聯組織の原則を、擴充するのだ。大範圍に適用するのだ。

歐洲は合して一大自治區を形成すべきだ。そして、アフリカがこれに屬すべきだ。これは、對米協力單位としても、對米競爭單位としても、歐洲の必要策だ。友聯主義の徹底は、歐阿自治區の組織に於いても、勿論、最必要の一條件だ。

支那、西伯利、日本、及び多少の南洋地方が加はつて、こゝに、大亞米利加、大歐羅巴と協力すべき一大單位としての、いはば大亞細亞が新興される。人格主義、個性主義、文化主義の徹底は、この場合にも、生命だ。各人の個性の眞價が單位だ。友聯的組織だ。

人類に、近代に於いて、多少の遲速を異にして、封建主義を脫ぎ棄てゝ、國民主義の新衣を裝した。國民主義の美酒も、今や漸くにしてその殘滓をまでもすゝられんとして來た。國際的大自治區を創作し、その大規模の自治と責任と創造とに、すなはち分勞と協力と生産とに移り進むでなければ、人類の醉ひは、さめる危險に瀕した。われらは、道義ある醉ひの不斷永久の創造者であるべきだ。國際大自治區の産出をほかにして、人類の理想主義の、最近の將來に於ける活路は絕無だ。

日本人の生存權とても、他の民族人の生存權と、絕對的に同一原則の支配下に立つ。先づ支那、西伯利、南亞諸民族と、人格的個性の眞價を本質とする友人的協力を立派に實現しうる資格を、自己及び自國の觀念と實行の上に準備すべきだ。觀念は、道德と、信仰と、常識と、學說だ。實行は習慣と制度だ。その準備の目的としての、歐、米、その他の改正國際自治區との、同じくまた人格的個性の眞價を共調とする友人的協力を、立派に實現しうる資格を、自己及び自國の觀念と實行の上に、同時に準備すべきだ。

近代國家の進歩は、階級本位から人民本位に移り、更に社會本位に移るにある。階級本位の國家の精神は封建制だ。人民本位の國家の精神は立憲代議制だ。社會本位の國家の精神は、國際聯盟または國際組合だ。國境の撤廢問題として力說したのだ。われらの祖先は曾て建國した。われらの祖先は曾てまた廢藩置縣した。創建と、改撰とは、われらの血にも傳はつてをる筈だ。時代相當の創建と、改撰とを、われらは、この際に新試すべきではないか。世界各國の元龜天正時代、維新時代に際會してだ。

征服國家から國際社會まで

——太平洋會議を背景として——

大山郁夫

一

アメリカの新大統領によつて提議せられた所謂太平洋會議は、全世界を通じて、喧びすしき物議の種となつてゐる。そして、それに關してこれまでに放たれた批評は、さまざまの見地から出て來ては居るが、しかし要するに、どれも皆豫期せられた種類のものばかりのやうに見られる。殊に、どういふ種類の人々がそれに就いてどういふ種類のことを言うて居るか、といふやうなことまでが、大抵は皆、筋書通りに運んで居るのである。これは、一方から見れば、いかにも退屈なことであるに相違ないが、しかしまた、見樣に依つては、それだから興味があるのだともいへるのである。

太平洋會議に關してこれまでに現はれた一般の評判を概括すれば、それは大體に於て、冷評、酷評、及び好評の三部類から成立つて居るものだといへる。もつとも、かういふことは、かういふ性質の國際會議のすべてに附き物になつて居るものであつて、決して今更のやうに珍らしがるべき筋合のものではない。しかのみならず。太平洋會議にでも、またはその他の如何なる國際會議にでも附帶する一般の評判を、右に掲げたやうな三部類に大別して考察するといつたやうな遣り方の上には、何かの特別の意義なり價値なりがありさうにも見えないと言はゞ言へなくもないかも知れない。しかしながら、私が次に試みようとして居る通りに、該會議に關して行はれて居る一般の評判をとほして會議そのものゝ本質を眺めようとするやうな企ても、たしかに一種の見方として許されるべきものであると思ふが、我々がそれをしようといふ段になると、この一般の評判を先づ右の通りに分類してかゝることは、我々に取つては少くとも非常に便利なものなのである。その理由は今茲で細說するま

でもなく、私がこれから段々と筆を進めて居る間に、自然と明瞭になつて來ることであらうと思ふ。

二

で、右に掲げて置いた第一の冷評から始めることにするが、太平洋會議に向つて皮肉な冷評を浴びせかけて居るものは、主として社會主義的思想及び軍國主義的思想の立場からそれを見て居る人々である。この二つの思想の流れが、『東と西とへ』といつた風に、全然反對の方向を指して居るものであることは、いふまでもあるまい。それにも拘らず、これらの兩方の立場から同一の會議に對して行つて居る觀察が、結局同一の論斷に到着して居るのは、當然のことだといへばそれまでだが、しかし、それは非常に興味の深い現象だともいへるのである。

社會主義的思想の立場から太平洋會議を批評するものは、いふまでもなく、反資本主義的見地からそれをするのである。今日に於て『文明國』と呼ばれる國々に於ては、殆んど例外なく、その政權が主として資本階級の支配の下に來てゐるのである。このことは、特に社會主義的思想の立場からの觀察を須つまでもなく、社會科學的見地から批判しても、矢張りさういへるのである。そしてこの意味に於て、現代の『文明國』を『資本國家』と呼ぶのは、決して不當なことではない。

ところが、資本主義は、それをその自然の傾向に放任しておけば、結局は侵略的帝國主義におもむく必然性を持つてゐるものである。これは、過去から現在までの世界の歷史に於て、既に充分に證明濟みになつてゐることである。そして其原因はといはゞ、資本主義そのものの本質の裡に內在して居るのである。卽ち、資本主義――殊に近代式資本主義――は、主として大規模生産の原則の上に於ける企業の形式によつて現はれるものである所から、それは必然的に、國外に於ける市場や原料品産地やの獲得とか保障とかを求める衝動に驅られるやうになる傾向を持つて居るものである。それからまた、一國の産業が大なる發達を遂げた結果として、多量の資本が蓄積せられて、そしてそれが最早國內に於ては『有利』に用ひることが出來ないものとの見極めを附けられるやうになつた場合に於ては、資本階級は自國の政治家達を促して、國外へ投資する手段を取らしめたり、未開國若くは半開國を金融的に征服するために、自國の勢力範圍を四方八方に擴張することに努力せしめたりするやうになるのである。かういふことは、すべて皆、最近世の歷史の上に於て、多くの『文明國』に依つて、反復的に實行されて來たものであつて、そして、その指導原理となつたものが、

所謂帝國主義的政策であつたとは、改めていふまでもないことである。畢竟するに、近代國家に於ける帝國主義的政策は近代國家に於ける資本主義の支配から必然的に湧いて出た產物だといふべきものである。

かういふ風に、資本主義といふものは、他に何等の妨碍物のない場合には、必らず侵略的帝國主義に向ふ性質を持つて居るものである。それだのに、この資本主義の支配の下に置かれてゐる多くの『文明國』の政府の代表者たちが寄合ひをして、國際間の永久平和を保護するためとあつて、さしづめ軍備制限の取り決めを相談しようといふのである。そして、これが動機となつて、太平洋會議がハーディング大統領によつて提唱せられ、各國の政府によつて、『誠意』を以て『歡迎』せられたといふのである。かういふこととの間に或る矛盾もしくは僞善の影を認めることは、誰れに取つても、幾らかでも困難なことであらうか？

尙ほまた、かうした矛盾は、單に推測の範圍內に屬することであるばかりではなく、既に幾分表面に現はれて來て居ることでもある。それは太平洋會議がまだ開催せられて居ない今日に於て、既に相當の程度に於て表面に現はれて居るのである。なる程、重寳な口の持主たる各『文明國』の政治家たちは、この席に於ても、その昔の宮廷中心時代から持ち越して來た『外交上の辭令』を振り蒔くことを忘れなかつた。彼等は敢て揚したやうに、『我々は誠心を以てこの會議の趣旨に共鳴する』といつたやうなことをいつた。ロイド・ジョージも、さういつた。ブリアンもさういつた。ジオリティの愛想も、同樣に快よく聞かれた。原首相の挨拶も、同樣に調子がよかつた。けれども、彼等の口がそのやうに甘い言葉を發音して居た間に、彼等の心は互に相手の腹の探り合ひをしては居なかつたであらうか？彼等は、軍備制限の提議の聲を聞いて、『まづ安心した』と思ふ前に、それに無限の不安を感じなかつたであらうか？彼等の各々は、自國の軍備はこれ〳〵の程度に制限が出來るといふことを研究するよりも、寧ろそれはこれ〳〵の程度以下には制限が出來ないといふ口實を探求することに苦心してゐないであらうか？ 是等の二つの態度は、形式論理の上から見れば、結局同じところに落着くものゝやうに見えるが、しかし、その實際上の効果に於て非常に異がつた結論に導くものであることは、知れ切つたことである。ところが、各國の政治家たちが當面の問題に關して取つて居る態度が、前者ではなくて後者であることは、毎朝の日刊新聞の外電欄を賑はして居る各種の報道から綜合しても、容易に認知し得られることではないか？

だが、かうした矛盾は、單に各國の政府の指導者たちの言動の上に現はれて居るばかりではなく、各國民の該會議を迎へる態度の上にも、同樣に可なり顯著に現はれて居るのである。それは名さへ太平洋會議と呼ばれて居て、世界の三大海軍國を中心とする軍備制限をその主題としようといふ會議である。しかもそれを包んで居る雰圍氣は、平和的氣分に充ちてゐるよりは、むしろ軍國主義的氣分に充ちてゐるやうに見えるのである。まづ第一に、それに參加しようといふ各國は、自國の軍備制限を相手の國々に於けるその制限の程度に繋がらしめようとして、互に奇妙な『譲り合ひ』をしてゐるのであるが、かういふことの裏面には、各國内に於ける軍閥の跳梁してゐる影が動いて居るのが、鮮やかに認められるのである。しかし、そこに動いて居るのは單に各國に於ける軍閥の影ばかりではなくて、尙それ以外にも、各國に於ける商工業者――殊に軍需品の供給者とか、船舶の製造業者とか、貿易商とか、金融業者とかいつたやうなものも、矢張り太平洋會議の裏面を忙しく立廻つて居るのである。そして此際、國際間に於ける相互的讒言の交換が、かういふ手合に依つて頻繁に惹起されて居るとが、決して少くはないのである。しかもそれが、殊に日本とアメリカとの間に於て最も甚だしく行はれてゐることは、周知の事實である。アメリカの方で太平洋問題だの極東問題だのを軍備制限問題に附帶させて討議しようといへば、日本の方では、さうさせてはならないといふ。アメリカの方で、支那の門戶開放をアメリカ一流の意味に解釋しようとすれば、日本の方ではそれに對して、まづアメリカのモンロー主義を撤退させようと主張する。アメリカの方で、日本が過去に於て支那やシベリアに仕向けた行爲を攻擊すれば、日本の方でも默つては居ないで、アメリカがアジア人に向つて人種的差別を行つて居ることを指摘する。かういふ譯で、現在これらの兩國の間に行はれて居る言葉の一齊射擊の交換は、平和的と名づけられること以外のすべてのものに見えるが、どこを突ツついても、平和的と呼ぶことの出來る何ものもが認められないのである。

太平洋會議の前景氣の中には、こんな陰鬱な氣分が漂うて居るのである。それは縱し多少は、今日の世界各國の民衆の間に動いて居る平和を求める機運に刺激せられて產まれ出ようとしてゐるものだとしても、その動機の大部分が、それに參加しようとして居る若干の資本國家の一時的便宜の顧慮から出て來て居るものであるといふ事實を打消すに足る何物もが、そこに存在して居ないのである。で、社會主義的思想の立場からそれを觀察する人々は、殊にこの點を強調する。そして彼等は、こんな僞

善的假面の下に隱るゝ會議からは、眞の國際的平和に貢獻する何物もが產まれて來よう筈がないと主張するのである。

三

軍國主義的思想の立場から太洋會議を觀察する人々は、全然反對の方向からそれに向つてゐるのであるが、しかし彼等もまた、前に一言した通りに、社會主義的思想の立場からそれを觀察する人々と、全然同一の結論に到着するのである。彼等は、國家萬能主義の信者であるばかりでなく、同時にまた、英雄主義の崇拜者でもある。原始社會に於ける武力讚美の舊き傳統は、彼等の間に於て、最も『完全』な形式で維持せられて居るのである。『國家は力だ』といつたトライチュケの警句は、彼等の信條の基礎となつてゐるものである。もつとも、國家萬能主義に反對する人々も、『國家は力だ』といふことを認めないどころではない、それを認めればこそ、彼等はその濫用を防がうといふ目的から、或はアナーキストのやうに、それを全然撤廢せよと叫んだり、或はギルド・ソーシアリストのやうに、それを根本的に制限せよと要求したりするのである。ところが、力の讚美である軍國主義者らは、國家は力であるが故に、萬人はその前に拜跪すべきものだと高唱するのである。

かういふ信條の上に立つ彼等は、同時に武力の絕對性を信じて居るのである。彼等は、他の如何なるものも武力を制限し得べきものではなく、武力を制限し得るものは唯武力ばかりだと考へて居るのである。無論彼等は、大なる武力が小なる武力を制限し得るものだといふことを考へて居るが、それは理論上、『武力を制限し得るものは唯武力ばかりだ』といふのと、同じ根據から出て居るものである。

しかし、『大なる武力が小なる武力を制限し得るものだ』といつたやうな形式で表現せられる彼等の前提は、武力はそれ自身の內部からの力に依つて外部へ向つて增大する自然的傾向を持つて居るものだといふ結論に導くのである。それが自然だ、と彼等は考へる。そして、この自然に從ふのが更に自然だ、とも彼等は考へる。それ故に彼等は、自國の武力を增大する必要を民衆に承認せしめるために、樣々の口實を求めることに腐心する。しかも彼等は、さうした口實を作る材料には、事を缺かないのである。殊に國家の地域の上に於ける一定の限界と、その人口の無限の增殖との間に現はれて居る表面上の矛盾は、甚だ尤もらしく聞える口實の根據を、彼等に供給するのである。それ故に、曾てドイツの軍國主義がパン・ジャーマニズムを目指して居た通りに、また曾てロシアの軍國主義がパン・スラヴィズ

ふを目指して居た通りに、今日の日本の軍國主義に、いはゆる大アジア主義を目指して居るのである。

軍國主義者らが武力の自發的增大性を信ずるのは、いふ迄もなく武力はそれ自身を增大することによつて益々强くなるものだ、といふ信念から發してゐるのである。いかにも、武力はそれ自身を增大することによつて益々强くなるものだといふのは、自明の眞理であるやうに見えないではない。が、仔細に考へると、それはたゞ半面の眞理であるだけのものである。その他の半面は、武力がそれ自身を極度に增大した時は、それはやがて、それ自身の內部からの分裂に依つて自壞するものだ、といふことである。ところが不思議にも、軍國主義者らは、この一事に對しては、驚くべき程度に於て盲目なのである。それは現今に於てさうであるばかりでなく、昔からさうであり來つたのである。否、さういふよりは、寧ろ昔からずつとさうであり來つたのに、現今の軍國主義者らがまだそれに目ざめないのが不思議だといふ方が、一層適切な表現であらう。アレキサンダー大王が打建てた大帝國も、ローマの諸帝王が築き上げた大政治組織も、結局その終極の破滅を免れなかつたといつたやうな西洋歷史上の悲劇も、近世に至るまでの帝王志願者らを啓發することが出來なかつたし、秦の始皇が起した阿房宮の樓閣も楚人の一炬に脆くも烏有に歸したといつたやうな東洋史上の悲事も、現今の軍國主義者らの野心を消すことが出來ないでゐるのである。かういふことを顧みて居ると、我々は、人間の行動の上に及ぼす宿命の力の偉大さを考へさせられない譯にはゆかない。歷史家や政治學者らの中には、世界征服の夢想はナポレオンに至つて打切りになつたと說くものがあるが、しかし、コルシカの發見以後の歷史は、それがまだ決してさうなつてゐないことを我々に敎へる。カイザーがドイツ文化を世界の上に光被させようといつた樣な、たわいもない想像に驅られて居たのは、つい先年までの事ながら、今では最早古典的の史實と思はれるやうになつた。が、今尙ほそれと同樣の妄想を多少の程度に於て眼の前にちらつかせて居る手合が、つい我々の鼻先にもうろついて居ないとは、誰れが保證し得よう！

兎も角、各國の軍國主義者らは、社會主義者らとはまた異つた立場から、太平洋會議に對して同樣の冷評を送つて居る。それは我々が、各新聞紙上に屢ば載せられるところの、軍閥及び軍閥の謳歌者らの筋から出た――若しくは時としては、さういふ筋から出たらしい――意見なり記事なりに依つて、餘りに明瞭に推知することが出來るのである。彼等の或るものは、

制限會議といふ『名は美なりと雖も』――彼等は實際さう言つて居る、――それは畢竟空談に終ることであらう、といつたやうなことを好んでいふ。彼等は一方に於て、軍備制限會議の『名は美なりと雖も』などと言ひながら、他方に於ては、その効果の空虚であるべきことを豫言して居るところを見ると、彼等が『惡』の勝利を信じて居るものであることは、たしかである。それは明らかに、一種のマキアヴェリズムである。そしてかういふところから見ると、彼等の『唯武主義』――もしかうした表現が許るされるならば――は、明らかに『惡』の崇拜に根ざして居るものである。我々が我々の着眼點をこの一事の上に置くとき、我々は直ちに、彼等の行動の多くの動機を明瞭に知ることが出來るのみならず、それと同時に我々は、人間が人間としての生活を始めかけてからこのかたの長き人類の歴史の重心點の少くとも一つを突きとめたと考へる誘惑をさへ感じるのである。

また軍國主義者らが、國際的平和の可能性を高調するすべての思想を冷笑する習慣を持つて居るのは、彼等の『惡』の崇拜から來て居ると同時に、彼等のセンティメンタリズムに對する侮蔑からも來て居るのである。センティメンタリズムから離れる必要を感じて居るものは、決して彼等だけに限つたことではない。殊に國家現象なり社會現象なりを正當に批判しようとしてゐる人々に取つては、その用意が最も必要なことでもあり、また、彼等の多くはそれ故に、この必要を切實に意識しても居る。してみれば、軍國主義者らのセンティメンタリズムを賤む態度は、態度それ自身としては、決して間違つて居るものだとは言へない。けれども彼等に於て間違つて居る點は、彼等が、『惡』の崇拜や武力の讃美やもまた、一種のセンティメンタリズム――しかも原始的の姿のまゝのそれ――を出でないものであるといふ一事に心附かないでゐることである。

四

冷評の積極化したものが、惡評である。冷評と惡評との相異は、其性質にあるのでなくて、その程度にあるのだ、と私は思ふ。が、それにも拘らず、これらの二つのものを區別するのは、多少の程度に於て、實際的意義のあることである。そしてそれは、私の今の場合についてもまた言へることなのである。といふのは、冷評は主として、觀察の對照物に對して直接の利害を全然持たない――若しくはそれを僅かしか持たない――ことを意識してゐるものが、傍觀者としての態度を以て、若しくはさうした態度を裝うて、觀察の對照物に向つて投げ掛けるもの

である。ところが、惡評は主として、觀察の對照物に對して直接の利害相當の程度に於て持つて居ることを意識して居るものが、渦中の人としての態度を以て、若しくはさうした態度を裝うて、觀察の對照物に向つて放つものなのである。もとより通常の談話に於ては、右の二つの言葉が始終混同されて居ることは事實であるが、しかし我々は、兩者の間に右の通りの區別を設けることも出來るし、またそれを設けるのが便利だとも思ふ場合があるのである。そして、私の今の場合が、恰度それに當つてゐるのである。

それで、太平洋會議に關する右の意味に於ける惡評は、一體どういふ方面から起つてゐて、そしてどういふ表現を取つて居るかといへば、それはまづ第一に、國際聯盟の熱心なる支持者たちの間の或る人々から出て來てゐるのである。彼等は、國際聯盟がもと／＼アメリカの前大統領の提唱によつて成立した事實を回想して、その當のアメリカが内政上の理由のためにそれに參加しなかつたことを不滿に感じて居るばかりでなく、同國がその大統領の更迭と共に、國際聯盟を無視したやうな太平洋會議を開かうといひ出したことを憤つて居るのである。該會議に於ける討議の中心題目たる軍備制限に關する條項は、國際聯盟の規約の中にもある。たゞそれがまだ何等のまとまつた効果を擧げることが出來ないで居るのは、當然それに參加すべき筈であつたアメリカがそれに參加しなかつたからである。この一事だけでも、國際聯盟の熱心なる支持者たちの不平まじりの失望を招くには充分であつた。ところが、まだその上に、太平洋會議は、ハーディング新大統領の日頃からの主張である國家聯合の前提だともいはれて居る。國際聯盟から故意に遠退いたアメリカも、さすがに孤獨の淋しさを感じだして來たところから、彼の國家聯合の言葉が産まれ出たものだとしても、さうなることは初めから判り切つて居た筈だのに、今更そんな事に出るのは、餘りに我儘な仕打である。ハーディンク及び彼の所屬の共和黨員等は、國際聯盟はアメリカの主權を侵害するといふので、極力それに反對して來たのであるが、それは要するに、一片の口實にすぎないものである。諸國家の聯盟に於ては、各參加國がその主權――主權といふものが、國家に關する新學説の主張者ら（たとへばデュギーの如き）が言つて居るやうに假空のものなのではなくて、舊來の國家學説に於て説明せられて來たやうに實在のものだと假定して――を多少の程度に於て制限しなければならないのである。否單にそればかりではなく、或る國家がかういふ聯盟の外に立つて居る場合に於ても、この國家がその主權を縱に行て、内外に對し、勝手な振舞をする

いつたやうなことは、今日に於ては、最早許されないことになつて來て居る。それ故に、國際聯盟に參加して居る各國家は、たとへ『自限』(self-determination) の形式に於てにもせよ、——尤も『自限』といふのは、唯『法律上の擬制』(legal fiction) でさういふだけの話であつて、實は各參加國が內外からの必要に迫られて、餘議なく聯盟の規約で縛られるのであるが、——各自の主權の上に多少の制限を加へて居るのである。しかるに、アメリカだけが、——しかも、自國內では各州の『州權』(state sovereignty) によつてその主權の上に樣々の制限を受けて居るアメリカ——日本の移民問題に關して、聯邦政府がキャリフォーニアの州權の發動に對して如何に無力であつたかを考へてみるがいゝ——だけが、それが出來ないと言ひ張るのは、初めから國際聯盟を無視する氣でゐるからである。しかのみならず、ハーディングが主唱して居る國家聯合にしたところで、それに參加しようといふ國家が、其の聯合の規約に從つて、各自の主權を或る點で制限するのでなければ、それは畢竟無意味なものに終つてしまふであらう。してみると、若しその國家聯合を多少の程度に於いて意味のあるものとしようとするには、それは、その形式に於いては兎に角、その實質に於いては、國際聯盟とさして異がはないものになる筈でなければならないのである。——

國際聯盟の支持者達の仲間の或る人々は、大體、上に述べたやうな論據から、太平洋會議に對して或る程度に於ける不平を鳴らして居るのである。それからまた、ふだんは大して國際聯盟に熱心でなかたつものまでが、この際アメリカの『專橫』を罵倒することに依つて刹那の快感を滿足させやうといふ動機から、國際聯盟の假面の下に、同じ論據から太平洋會議に惡評を向けてゐるものも中々多くあることは事實である。殊に我國に於てこの種の感情論が盛に行はれたことは、該會議の提議が始めて發表された頃の諸新聞紙を見れば、直ちに判ることである。太平洋會議にかこつけて日本の惡口を言ふ新聞紙がアメリカに多いやうに見られる通りに、同じ太平洋會議をとほしてアメリカをこきおろす新聞紙が、日本にも可なり多いのである。ジャーナリズムの弊害が世界中に於て最も露骨に現はれて居るのがアメリカだといふのが定評であるが、しかし、日本もこの點に於ては、アメリカの足跡を追ひつゝ進んでゐないとは、決して言ひ得られないのである。

しかしながら、太平洋會議を中心として、日本の新聞紙の或るものとアメリカの新聞紙の或るものゝが、互に猛烈に相手の

惡口を叩き合つて居るのは、直接にはジャーナリズムの筆舌の形式で現はれて居るが、しかしながら、それはその根本に於ては、或る他の方面に行はれてゐる意見なり、感情なり、策略なりを反映してゐるものなのである。かういふ意見なり、感情なり、策略なりは、太平洋の兩岸に於ける軍閥とか、軍國主義者若しくは帝國主義者とか、各種の商工業者——殊に軍需品や船舶やの製造業者、或る種目の商品の製造業者及び貿易業者、金融業者等——とかのサークルから出たものであるとは、公然の秘密ともいふべき程度に於て周知せられて居る事實である。私自身は今の所、アメリカの諸新聞紙を自由に閱覽する便宜を持つてゐないから、その側の方の事を記述することは差控えるが、しかし日本の新聞紙の側を見れば、太平洋會議の主題である軍備制限に關しては素より、それに附帶するものと見做されて居る山東問題とか、ヤップ島問題とか、その他の支那及びシベリア關係の諸問題とかに關して、そこに現はれて來る意見が、如何に一般民衆のそれと懸け離れて居るかを發見することは、極めて容易なことである。もつとも、一般民衆といつたところで、彼等の間には、自ら意見を作らないで、全然他人の意見に追隨することを能事として居るものが、その大部分を占めて居ることはいふまでもないが、同時に彼等の間に在つても、各個の問題について獨自の意見を懷いてゐるものも、決して少くはないのである。かういふのは、いはゆる目ざめたる民衆の部類に屬するものであるが、これらの目ざめたる民衆の部類が、近來ずん／＼と殖えて來たことは、隱れもない事實である。そして、若しこれらの目ざめたる民衆の意見がもつと自由に諸新聞紙に割り込んで行くことが出來たら、獨自の意見を持たない部類の民衆も、各個の問題に關して、自分達のために或る意見を採用する上に於て、もつと廣い、そしてもつと自由な選擇の範圍を持ち得ることになる譯であるが、不幸にして、さういふことは、現在の我國に於ては、殆んど全然と云つていゝ程に缺けて居るのである。この點に關しては、或る種の雜誌が、目ざめたる民衆の意見、若しくは彼等が心で感じて居たがら口で言ひ表はすことが出來ないで居る思想感情を反映する役目を、多少の程度に於て務めて居るが、しかし、かういふ種類の雜誌が讀まれるのは、比較的狹き範圍に限局せられて居るのだから、少くともその直接の影響は、新聞紙のそれに比しては遙かに及びもつかないものになつて居るのである。

かういふ譯であるから、我國のジャーナリズムに於ては、他のすべての一層發達したる資本國のそれに於てと同樣に、各種の問題に關してもさうであるが、殊に對外問題に關してと、

段になると何といつても、軍閥及び資本階級の意見なり、策略なり、感情なりが、最も好都合に代表せられて居るのである。この點に關聯して、私達が特に注意しない譯にゆかなかつたことは、曾て對支問題やシベリア出兵問題に附帶して、手きびしく『軍閥外交』を攻擊し、そしてその侵略主義的行動を彈劾して居た或る新聞紙が、太平洋會議の提議が發表せられると、直ぐに打つて變はつて、まさか軍閥の提灯持ちをこそしなかつたまでも、日本の軍閥は曾て侵略主義の夢想を懷いたことがないといつたやうな、辯護論を揭げて居たことである。かういつた輕々しい豹變的態度は具眼者には、いかにも醜怪に見えるものであることは、いふまでもない。もつとも、かういふのは、極端な一例であるにしても、多少の程度に於てそれに似寄つたことは、我國のジヤーナリズムに於いて、普遍的に見得られるのである。かうして、我々の當面の問題に關しては、軍閥や資本階級から出た意見ばかりが、我が國のジヤーナリズムをとほして、また獨自の意見を組み立てることを知らない部分の民衆の上に押し附けられて居るのである。たま〳〵、純粹にその他の方面から出た意見が彼等の耳に達する虞れがある場合には、軍閥や資本家やの代辯者らが、一齊に口を揃へて、その醜惡な、混濁した壓倒的雜音を以て、さうした意見に向つて、『非愛國』呼ばゝりをするのである。彼等の僞愛國心が、如何に我國民中の純良な分子の言論の自由を妨げてゐるかは、測り知るべからざるものがある。かうした彼等の間からも、太平洋會議に對する惡評や、それをとほして外國——殊にアメリカに向つて投げ掛けた評惡——それは、これらの兩國の間では、賣り言葉に買ひ言葉の關係になつてゐるものであるが——が流れ出て、そして、それが日本國民の聲として外國に傳はるのである。かういふことをするのが、おそらく彼等がなし得る唯一の『愛國』的行爲であるらしい。

第三に擧げた好評は、アメリカに於ける黨派的關係から、ハーディング大統領の提議を歡迎したり、また自國が主人公となつてかうした重大に見える國際會議を開かうとしてゐることに國民的誇り（ナショナル・プライド）を感じたりして居るアメリカ人の間から出て居るとは無論の話であるが、しかしその外になほ、世界を通じて數多く存してゐる理想家、乃至、空想家の群れから出て來るものもあるのは、人々が熟知してゐる通りである。かういふ理想家、乃至、空想家たちの多くは、平和とか、正義とか、人道とかの名のつくものに對してならば、その實質を檢べる前に、まづその名に醉うて歎喜する性癖を持つて居るものである。曾て

國際聯盟が、彼等によつて感激を以て迎へられた。今度の太平洋會議も、矢張りさうであつた。かうした人達のアイディアリズムは、『地には平和、人には恩寵あれ！』といつたやうな、好意そのものの結晶ではあるが、しかし、それが世界政治の局面の上に於ける現實の事件及び思潮の流れを決定する要素となつて働きかけるためには、それは餘りに空疎であるを免れない。だから、私はそれに就いては、これ以上のことを語らないことにする。

四

かういふ風に、太平洋會議に對する一般の評判をひとわたり眺めわたした後に、私達が痛切に感ずることは、それが冷評である場合も、惡評である場合も、但しは又好評である場合も、最初に掲げた通りの社會主義的思想の立場からのそれを除いては、いづれも皆、大部分は感情に依つて支配せられて居るものであるといふ事實が、餘りに顯著に目立つて居ることである。が、かういふことは、現實の社會生活に於ては、到底免かれられないことである。殊に現實政治の局面に於ては、理知的打算よりも、寧ろ感情が大勢を動かす場合が一層多いことは、政治現象の科學的研究者たちに依つても、充分に認識されて居ることである、たゞ政治現象の科學的研究たちに取つて大切なことは、自分達までが感情の渦中に卷き込まれない要心をすることである。彼等はどこまでもその科學的研究者としての立場を守り、その科學的研究者としての態度を維持して、眞理の探求に對する熱情といふ感情以外の一切の感情には全然超越して、何物にも囚はれざる心境に於て、その觀察の對照物を凝視しなければならないのは、無論のことである。そして彼等が或る種の感情を取扱ふ場合に於ては、彼等は單にそれを一つの客觀的事象として研究するだけでいゝのである。若し彼等がそこから一歩でも踏み越えて、自分達自身の心意がまづその感情に影響せられるやうなことがあつては、彼等の研究の結果は、必然的にそれがために色彩づけられることになり、從つてそれが眞理の再現と見做すべきものにならないに決まつて居る。

かういふことは、理論上判り切つたことであるけれども、その實際上の適用の段になると、それは常に眼界から失はれがちになるのである。殊に社會科學の場合に於ては、その研究の對照物の性質上、自然科學の場合に於てよりも、研究者が觀察の對照物に囚はれてその觀察の正鵠を誤まる危險が、遙かに多いのである。私が今取扱つてゐる太平洋會議問題に關してだつて、矢張さうである。我々が、此問題に關して某々知名の學者

の名を以て發表せられてゐる論文などに於て、研究的態度よりは寧ろ志士的氣分がヨリ多分に現はれて居るのを發見する時などには、我々は殊に強くかういふ感じに打たれた譯にはゆかないのである。もとより學者も人間である以上は、彼が時として志士的氣分に襲はれるのは、彼に取つて決して不名譽なことではない。たゞもし、彼が志士的氣分で組み立てた意見を、自己の學者としての權威で公衆に押し附けようと試みるやうな態度を取るならば、それは明らかに矛盾だといはなければならない。例の某々博士たちが『憤起』して、――新聞紙の社會面などには、彼等の行動に關して、こんな言葉がよく使つてある、――時局に對する彼等の意見を集團的に發表などする場合には、彼等はかうした矛盾を平氣で――といふよりは寧ろ得意になつて――行つて居るのではなからうか？　私にはどうもさうだとしか思はれないが、それは私の僻見から來たことであらうか？

現に今私は、全然純客觀の立場から、太平洋會議の本質を、社會科學的に究明しようとして居るのである。そしてその準備的手段として、私はまづ、該會議に關する樣々の批評を概觀しておいた。これらの批評の大部分は、前に言つたとほりに、樣々の感情によつて激發せられたものである。が、しかし、我々がかうした樣々の感情を純客觀の立場から眺めて觀察し、それから得た結論をその發現であるところの、右の樣々の批評に結びつけ考へるとき、我々は少くとも、該會議の本質を知るための重要なるヒントを得るのである。それと同時に、さういふ道筋から該會議の本質を知つた後、再び振返つて右の樣々の批評の方へ向き直つてみると、我々はこれらの批評の成立の過程とか、その本質とかを、一層明瞭に理解することが出來るやうになると思ふのである。

かういふ過程によつて私が太平洋會議の本質を社會科學的立場から考察した結果を、次に簡單に記述しようと思ふ。

五

我々が既に太平洋會議に對する各種の批評の概觀に於て見たとほりに、これらの批評は、最後に揭げた理想家若しくは空想家たちのそれを除いては、殆んど皆、國家を中心として是非の判斷を下して居るのである。それは、現代に於けるすべての國際會議が、現代の國家的制度と離るべからざる關係を持つてゐるからである。この點からして、問題の太平洋會議の本質を闡明しようとするには、まづこの目的のために必要な範圍内に於てゞも、國家制度の本質に關する社會科學的見解を知つておく

必要があるのである。

過去に於て久しく行はれて居た國家の神秘的解釋や、第十八世紀のヨーロッパの政治思想界を風靡した自然法學の契約的國家觀や、第十九世紀のドイツを初めとして、其他の諸國の學界にも大影響を與へ、その餘波を我國の官學にも及ぼしたヘーゲル派の理想主義的國家學說などは、去世紀の終り頃から今世紀の初めにかけて勃興した社會科學的國家學說のために根本的に打破られ、最早全くその權威を失墜するやうになつた。從つて今日に於ては、主權の絕對性とか、國家の本然の道德性とか、國家は家族の擴大したものだと言つたやうなことに關するドグマとかは、それらのものよりも一つ前に行はれた君權神授說などゝ一樣に、最早科學的價値のないものとして取扱はれるやうになつて來てゐるのである。そして、今尙ほさうしたものを後生大事に守つて居るものは、ドンキホーテ式の懷古派的學者か、もしくは枯尾花を幽靈に見誤るやうな錯覺者かでなければならなくなつたのである。

では今日の社會科學的見地からの國家觀はどういふものであるかといへば、それは、國家の標識を例の月並流の領土、人民、及び權力の三要素に求めることだけに滿足しないで、そこから更に一歩を進めて、それを一定の地域内に於ける經濟上の搾取群と被搾取群との並立の關係に求めるのである。この關係は、原始國家に於ける征服被征服の關係の延長に外ならないものであるから、從つて現代國家の成り立ちを知らうとすると、どうしても原始國家の起源に溯らなければならないのである。

原始國家の起源を、征服被征服關係から說明した學者の著名なるものとしては、まづ指をグンプローヴィッツに屈するのが至當だと思ふが、しかしこの點に於て彼の追隨者と目すべきラッツェンホーファーやオッペンハーマーなども同說を祖述し、殊に後者は主として經濟問題關係の方面から、それを實證的に說明して居るのである。また國家を一つの制度と見てその進化の法則を闡明する上に於て相當の卓見を示して居るエドワード・ジェンクスの研究の如きも、この問題に關しては、矢張り同樣の結論に到達してゐるのである。

今これらの諸學者の所說を綜合して、その結果を出來得る限り簡單に再現すれば、つまりかういふことにならう。——すなはち、まづ初めに、上古、幾多の遊牧群が尙ほ水草を追うて各處に轉々移住して居た時代に當つて、そのうちの最も優强なる種族が他の諸種族を統一して征服群を組織したが、かういふ遊牧種族は、その生活の必要上、體力は鍛練せられてゐるし、各種の風土には慣らされて居るし、その上、組織といふものを學ん

で居たところから、征服群を構成するには、最も恰好の集團であつた。かうした征服群が、それより前から一定の土地に居着いて農業を營んで比較的平穩な、そして比較的富裕な生活をしてゐた諸部落へ雪崩れ込んで、大抵の場合に於ては、容易に征服事業を遂げたものであつた。そして勝利者たるこの征服群は、被征服群たる在來の土着民を農奴の地位に突き落として、彼等をして自群の衣食住のために物資や勞働を提供せしめたものであつた。かうした征服被征服の關係から、一定の地域内に於て優強群と劣弱群との關係（大抵の場合に於て、前者は後者よりも、遙かに少い人數から成立つて居た）が發生した。そして、この優強群と劣弱群との關係は、いふまでもなく經濟上の搾取と被搾取との關係であり、從つてそれは、命令と服從との關係でもあつた。かうした諸關係が發生したとき、そこに國家が發生したのである。

かういふところから見れば、經濟上の搾取被搾取の關係は、國家の發生と同時に發生したものである。現代の諸國家の生活に於て、地主と小作人との關係とか、資本家と勞働者との關係とかの上に最も著るしく表はれてゐる經濟上の搾取被搾取の關係は、それ故に、原始國家に於ける征服者群と、被征服群であつた農奴との關係の延長だと見ることが出來るのである。

六

現代諸國家の機構は極めて複雜なものになつて來てゐるから、そこでは右の關係が、容易に認められないが、しかし、我々がその表面に冠ぶさつて居る幾多の外層を撤し去つてその内面を洞察するとき、我々はその底に於て、征服被征服の關係が依然として光つて居るのを見ることが出來るのである。エドワード・ジェンクスが正當に指摘して居る通りに、現代の諸國家が公共の安寧及び秩序のためにといふ觸れ込みの下に於いて行使して居る國家權力は、畢竟するに、原始國家の征服の進化した形式であるにすぎないのである。司法權及び行政權といへども、決してこの範疇を出でゝ居るものではない。殊に租税の賦課徴收などに至つては、物品で納附すると貨幣で納附するとの差異こそあれ、それは原始國家に於ける經濟的搾取の痕跡を最も完全な形式で維持して居るものと見ることができるのである。

かうした諸點に附帶して、我々が國家權力の進化の過程を辿るときは、我々は極めて興味の多い觀察を行ふことが出來るのであるが、今はさうして居る時間を持たないから、それを省略することにする。たゞ、原始國家に於て主として農奴を抑壓す

るために用ひられて居た權力が、近代國家に於て資本階級がその優越なる經濟力に依つて政權の最後の管理者となつてからこのかた、主として勞働階級を抑壓する目的のために用ひられるに至つたことを、興味ある觀察の一要點として、筆の序に書き留めておく。それから、もう一つ。――それは矢張り資本階級が政治上の優越地位を占めるやうになつた近代國家に於てのことである。そこでは、過去から持越しの代議制度が異常の發達を遂げて、その結果、議會がその複雜な機構及び手續に依つて資本階級の經濟的搾取を合理化し道德化する道具となつて來たことである。この點に關しても、私はこれだけのことを暗示して置くだけで滿足しなければならぬ。

我々は、常に表面に現はれてゐるにすぎない諸般の事象によつて欺かれがちのものである。で、我々は、現代國家内に住んでゐながら、却て現代國家の其底に横はる根本事實に對して盲目でありがちなものである。が、もし我々より後の時代に於て、資本主義が全然撤癈せられたる新社會が出現するものとすれば、さうした未來社會の人々が、其時は最早過去の時代に屬するものとなつて居るであらうところの國家といふ制度を眺めるときには、それが原始時代の征服國家であると、其次の時代の封建國家であると、但しは我々の時代の資本國家であるとを問はず、凡そ國家といふ概念の上には、[illegible]、消え去つて居て、たゞ征服といふ事實だけがそこに殘つて居るのを認めることであらう。

七

若し現代國家の對内的權力の行使すら原始國家の征服の延長だとするならば、現代國家の對外關係に於ける不斷の力の表示は、猶更さうだといはなければならないものである。否、さういつたゞけでは、まだ不充分なのであつて、寧ろそれは、殆ど原始國家の征服その儘の姿で居るものだといふのが、一層適切であるやうに思はれるのである。それは兎も角、現代國家はその對外關係の方面に於て、戰爭の場合には素より原始國家の征服に伴つた殺戮そのまゝのことを、唯それに幾千倍幾萬倍もの輪をかけた大規模で實行するのであるが、平時の外交關係に於ても、その所謂樽俎折衝の蔭に、赤裸々な力の表示を潜ませておくことを忘れないのである。『誰を外交の當局者にしても、どうせ國力相應の仕事しか出來るものでない』といつたやうなことは、我々が新聞紙上で屢々散見する文句であるが、それは全く、現在の國家組織が繼續する限りは、たしかに眞理の一面に觸れて居る表現である。

かういふ風に、國家が征服を以てその存立の根本義としてゐるものである以上は、世界平和の保進とか、軍備制限の國際的取決めとを主題として討議しようといふ太平洋會議をめぐる雰圍氣の中に、多分の軍國主義的氣分が漂うてゐるのは、別に不思議でも何でもないことである。

しかしながら、お互に征服を以て終始して居る筈の諸國家が寄合つて、軍備制限の相談をしようなどいひだしたのは、一體どうした譯であるか？　この疑問に答へることは、さして困難なことではない、と私は考へる。まづ第一に、世界大戰の結果として、少くともヨーロッパ諸國に於ては、戰勝國も戰敗國と同様に、極度に疲弊して居て、今後幾年間は、到底再戰する勇氣を持つて居さうにもない。彼等が當面の急として要求して居るものは、戰勝の歡びでなくて、國力の休養である。國力の休養は、若干の政治家たちの意中に於ては、再戰の準備を意味するものかも知れないが、それにしても、今後尚ほ幾年間も國力を休養しての上でなければ、彼等は再戰の野心を起さないであらう。

それに、多くの資本國の政治家たちが、その意中で永久平和の考へなどをせゝら笑つて居るにしても、世界に於ける幾億の民衆が、世界大戰といふ空前の慘劇が漸く終局を告げた今日に於ては、過去に於て曾て示されたことのなかつた程度の熱心さを以て、平和を希求し、軍備の負擔を免れようと焦燥つてゐるのである。この事實が、各國の政治家達の心をして、軍備制限の國際的取決めの相談に向はしめたことに、たとへ極めて僅かなりとも貢獻しなかつたとはいへないのである。我々はこれまでの所では、我々の問題の暗い方面ばかりを眺めてゐたが、こゝへ來て始めて或る希望の閃光を望み得た氣持がするのである。しかし、この閃光が白日の光となるのを見るまでには、我々は、再び暗黑の谷に踏み入つて、まだ〱永くそこを歩みつづけなければならないのである。

八

何といつても、國家組織が現在の形式のまゝで續く限りは、諸國家間の平時に於ける交際に於ても、恰度戰爭の場合に於けると同様に、大なる征服力を握つて居る國家ほど幅が利くのである。そして現今の世界政局上に於て、最大の征服力を握つて居る國家といへば、それは、世界大戰中に漁夫の利を得て成金國となつたアメリカである。曾ては武力が富を支配する時代があつたが、今では富が武力を支配する様になつて來た。今日に於ては、若し武力が征服力だとすれば、富は征服力の征服力で

ある。で、世界政治の局面に於ては、嚮きに軍國主義の淵叢であつたドイツが破滅して、今は拜金宗の本山であるアメリカが榮えて居る。恰度、それと時を同じうして、日本に於ても、軍人の集團と資本家の集團とが、その社會上の地位を顚倒し始めたのである。

世界大戰のお蔭で一躍して成金國となつたアメリカは、その富によつて急にその武力をも増大した。かくてアメリカは、如何なる點から見ても、現今では世界隨一の征服國家（武力的にも經濟的にも）となつたのである。アメリカが世界の政局の上を大手を振つて通れるやうになつたのは、單にヨーロッパに於ける聯合側諸國に對する大なる債權國となつたためばかりではない。それは、アメリカが自國の内政上の都合次第で國際間の政局を或る點まで動かすことが出來るやうになつたのと、同一の原因から出て來てゐるものでなければならない。

世界平和の促進とか、軍備制限とかいふ名目の下に開かれようとする國際會議までが、大なる征服力を握つてゐる國家が提唱したのでなければ、他の諸國家がそれに耳を傾けようともしないといふのは、何といふ矛盾であらう！　しかし、かうした矛盾も、國家組織が現在のまゝで續く限りは、いつまで經つても除き去ることが出來ないであらう。それに、太平洋會議は、その名の通りに、太平洋問題をも取扱ひ、更に極東問題の解決をも附けようとして居るのである。して見れば、かういふ會議はその地理上の關係から、さうした問題に對して最も深い利害關係のある支那とか日本とかから提議すべき筈のものだつたともいへないでないが、さうも行かなかつたところに、アメリカの抑へることが出來ない程の誇りがあるのである。大資本國であり大征服國であるアメリカは、現在の社會制度及び國家組織に惠まれて、戰はざる勝利者として打つて出でようとしてゐるのである。そしてこの國が、太平洋會議の提議に成功して、他の諸國家からの代表者たちをその首府に集めようとしてゐる誇りは、てつきり、原始時代の征服國家の戰爭に於ける獲物と勝利との欣びにも比すべきものである。

アメリカが新たに獲得した偉大なる征服力は、將來に於ては極東――殊に支那の方面に向けらるべき自然的傾向のあることは、一般に認められて居ることである。もつとも、この征服力は、第一段に於ては、武力的征服の形式を取つて現はれるのではなく、經濟的征服の形式を取つて現はれるに違ひない。換言すれば、今後アメリカは、その偉大なる征服力を以て、支那を金融的及び商業的にエキスプロイットすることに努力する

らう。武力に依る征服が最早時代後れのものであることは、どこの國よりも、アメリカが、殊によくそれを知つて居る筈である。しかし、アメリカが支那に對する經濟的征服を盛にやり出す段になると、そこでは、アメリカの利害が、矢張り年來そこで活躍して居た他の征服國家の一つである日本の利害と衝突することを免れないであらう。それと共に、太平洋上に於ける兩國の競爭も、今後ますく激甚となるべき危險がある。今度の太平洋會議を中心として、しかもその開會前から、これらの兩國の間に或る暗闘の濃い影が横はつて居るのは、かうしたところから出て來るのである。この點からまたアメリカは、日英同盟の繼續を嫌つてゐるのである。ところが、イギリスは、アメリカとも結びつきたいが、日本とも離れたくない理由を持つてゐる。かういふ宿命的な三角關係を中心としても、太平洋會議に於ては、裏面及び表面に於ける樣々の活劇が演ぜられることであらう。が、かうした諸點を細論するのは、私の今の目的の範圍内にあることではない。

九

原始時代の征服國家から、現代の資本國家に至るまで、人類は隨分と長い旅をして來た。しかし現代の資本國家に於ても、昔のまゝの征服が、今尚ほ依然としてその存在の基礎として殘つてゐる。從つて國際關係もまた、今尚ほ依然として無限の不安に包まれて居る。そして理論上既に成立つて居る筈であるところの國際社會は、實際に於ては、いつまで經つてもやつて來さうにもないのである。かういふことを考へて居ると、人類の前途は絶望に充ちてあるかのやうにさへ思へるのである

かういふ風に、人類の前途に全然絶望するのも、決して理由のない見方だとはいへない。しかしながら、現在の暗黒の裡に於ても、我々は將來の希望の世界に導く手段を遂に探ぐり求めることが出來ないであらうか？　我々は一部のアイディアリストらのやうに、現實の生活を離れたところに理想を求めてそれに近寄らうと努力するやうな無駄骨折りをしようとは思はない。我々は、若しそこに將來の新社會に導く手段があるものとせば、それを現實の生活の裡に求めようと努力して居るのである。けれども、我々がそれを求めようとする努力は、既に幾分でも酬ひられたであらうか？　私はそれが既に幾分でも酬ひられたか否かを知らない。しかしながら、我々はそれが幾分かづゝ酬ひられつゝあることを感じる。それは飽くまでも『感じ』であつて、決して『確信』といふべきものではない。けれども、どちらを向いても不安ばかりに圍まれてゐる我々には

この『感じ』すら、時に取つて甚だ貴いものになるのである。

私はなぜさういふか？　それにはかういふ根據がある。——私はまづ第一に、從來社會組織の研究に比較して非常に後くれて居た國家組織の研究が、近來に於て相當の進歩を示しかけて來たことを擧げる。否、この方面に於て新原野が開拓せられたのは、今から少し以前に於て、社會學的國學觀なり、社會學的法律學なりが段々とモノになりかけてからのことであるが、しかしそれが近年來になつてから、著るしく各方面からの注意をそれ自身の上に集めかけて來たことが、何となく賴母しく思はれるのである。我々は、社會組織の研究から、今日の社會組織の基礎になつてゐる資本主義が現代生活の各部面を硬化する素因となつて居るものであることを學んだ通りに、國家組織の研究からは更に、今日の國家組織のうちに內在する征服國家主義が民衆の新生活への進轉を妨害する障碍物となつてゐるものであるものであることを知つた。この二つのものを除き去らなければ、民衆生活は畢竟、硬化か破滅かの二つの一つに陷るより外はあるまい。しかも、この二つのものを除き去るといふことは、或る意味に於て、征服者を征服するといふことでなければならぬ。そしてそれは、最後に於て民衆の手に依つて實現されるより外に道のないものである。しかもそれは、舊來の奴隷的民衆の手に依つてゞはなく、新時代の目ざめたる民衆の手に依つてゞなくてはならぬ。換言すれば、それは、支配階級に欺かれた民衆の手に依つてゞはなく、支配階級の手の內を見透かしたる民衆の手に依つてゞなくてはならぬ。

しかし目ざめたる民衆は？——私はまだ彼等の數が充分に多くなつてゐるか否かを知らない。だが私は、世界を通じての民衆を見渡すとき、彼等の目ざめて段々に普遍的になりつゝある趨勢を感じない譯にはゆかない。若しさうでないとすると、世界大戰は極めて無意味に戰はれたものといはなければならぬ。私はそんなことがあらうとは信じない。大戰後に於て、幾億の民衆が平和に對する熱望を起こしかけたのは、その目ざめの第一歩である。それで若し彼等が、その平和を實現するために、或る意味での戰を戰はなければならないことを自覺するやうになつたら、その目ざめが本當の目ざめになるだらう。尤も、まさか幾億の民衆が一時に目ざめて來るといふやうなことはありよう筈はない。がしかし、その相當の部分でもが本當に目ざめたら、民衆の新生活への希望は、それだけづゝ確實になる筈である。私は世界の民衆がだん〳〵にその方向へ動きつゝあることを感じる。で、結局私は、民衆生活の前途の希望への手蔓に探り當てたとの『確信』を持たないが、さういふ『感じ』を

てゐる譯である。

太平洋會議に於ける各參加國の政府の代表者たちは、依然として各國の支配階級の立場から言動するであらう。しかし民衆はそれに構はずに、民衆自身の道を歩みつゞければ、それでいいのである。若し『嘘から出た眞』といふ格で、彼等の僞善の假面の下に隱れたる『平和』のための會議から本當の平和が產まれるやうなことがあつたら、それもいゝ。しかし、若しさうは行かないで、會議が何の收穫もなしに終つたら、それは寧ろ當然の成行だといふべきであらう。太平洋會議に於ける各國の政府の代表者たちは、時に或は世界の民衆の間に動きつゝある平和要求の機運に迎合することもあらう。しかしそれは恰度、專制國家が愛民主義的仁政を行つたり、資本國家が社會政策的施設を行つたりするのと同樣に、眞に民衆の幸福を思ふことから出るよりは、寧ろ支配階級自身の便宜を尺度とすることから出るものである。また支配階級は、如何なる場合にでも、或は群衆心理を利用することに依つて、或はまた言葉の魔術を使ふことに依つて、民衆をして支配階級の利害を民衆自身の利害だと思はせるやうな秘術を知つてゐるのである。少くとも、過去に於てはさうであつた。が、民衆自身のためからいへば、將來に於てはさうであつてならないのである。民衆は、かういふところにも、警戒する必要があるのである。

要するに、民衆は民衆自身の道を歩むべきである。眞の平和は、支配階級の僞善から產まれるものでもなければ、アイディアリストらの夢想から產まれるものでもなく、それは全く、その生活上の本然の必要から平和を希求する民衆の意思が民衆自身の行動によつて具體化せられる時に產まれるものである。そして、さういふ平和の支配するところでなければ、眞の意味に於ける國際社會が成立つ筈がないのである。

プロレタリアの專制的傾向に對する
インテリゲンツィアの僞らざる感想

人的要素の普認と勞働概念の擴充

早大教授　杉森孝次郎

勞働運動の道　的存在理由は、勞働者の人格に對する社會的認識の缺乏だ。勞働者は人だ。技術家、科學者、組織者と同樣に人だ。人間共通の本質的必要を、勞働者は、他の社會的分勞に從事する人々と相わかつ。然るに、その必要に對する社會的認識評價を、生産分勞者のうちで、勞働者だけが特に不十分に受けてをるところに、勞働運動の發達する合理的餘地があるのだ。勞働運動の發達因は、社會の無德だ。それと連關した不德だ。認識の缺乏は、同情の不能ともなり、愛己の不全ともなる。現代における勞働者以外の社會が、勞働者に對する同情の吝嗇と、自己に對する愛情の過賞とは、その一例だ。

人間共通の本質的必要に多い。道德的人格的自己尊貴はこの第一件だ。正しき意味に於いての誇りは、人間共通の本質的必要中の本質的必要だ。技術、民族の傳統も、いはゆる特殊扱ひされる一部國民の傳統も、その道德的存在理由を、誇りの保證に有する。社會の各人が必要とする富であるのに、その富の生産に必要不可缺な一位置を占むる勞働者が、人間通有の道德的自尊心を、その社會から非認されてゐるとは、教育、文化、個性の進步につれて、勞働者が怒りを發する道理だ。勞働者の專制的傾

向は、或る大いなる部分まではこの怒りだ。

人間共通の本質的必要のうちには、健康もある。教育もある。獨身者にも當てはまる意義に於いての家庭もある。興樂もある。その他、なほ澤山にある。現代の勞働者は、これらのいづれをも、社會から公認されてゐない。能力と機會の自由及び自然の競爭にまかせて、能力薄く、機會乏しき人々は、いや應なしに貧乏籤を引いて勞働者となり、そして、人間共通の本質的必要を最も割わるく滿足させる制度習慣は、原始的社會狀態だ。勞働者が罪悪人、不良民の別名または一部名であるならば問題は別だが、社會の積極的必要を滿たす一大分勞であるとするならば、勞働をば、落伍者の避難處の如くに取り扱ふ制度、習慣、思想はあやまりだ。綜合的社會理想の見地からして、社會に於ける生産者の位置、生産の一分勞者としての勞働者の位置を、社會は積極的に確立すべきであるのだ。勞働は、人間界の薄倖者が、自衞の最後の手段として、運命の强制下に、自發的に引き受けて與れるから、勞働者に對する社會の待遇などをわざ〱設定するには及ばない、と呑氣に、利己的に、考へて濟まされた時代は、すでに過去に屬した。今及び今後の社會は、健康、教育、家庭、興樂の如きは、大工の鑿、漁夫の網、畫家の刷毛のやうに、職業的、專門的、すなはち分勞的必要ではなく、人間的必要である事を確認して、その必要を滿たす手段に於いて、十分に各當人と協力すべきだ。その代表的方法の一として、勞働者の時間、收入、立法及び執政參與權等の制度的施設も要求される。

社會は勞働を社會的一分勞として明知し、勞働者を人間的一實在として正信すべきだ。その知信にもとづいて勞働及び勞働者を善遇すべきだ。これは社會の責務だ。他面に於いて、勞働者自身は、勞働の概念の充實擴張を、最先要事の一に算ふべきだ。經濟的生産に於ける一分勞としての意義に、勞働を限定するならば、それにも及ばないが、勞働專制を、生産界、産業界、或ひは政治、教育、文化の全野にわたつてまでも實現したく思ふ人々は、勞働概念の擴充を先決條件とすべきだ。いはゆる筋肉勞働なしでは、いかに、完全に科學者と、技術家と、組織者すなはち經營者と、それから物的要件としての原料、機械、工場が揃うても、富の生産は不可能だ。現代の資本家が、資本家同盟を大成することによつて、勞働者に應戰せんと意氣込んでも、現代の資本家は、たとひ科學、技術、組織、及び物的生産要件をば意にまかせうるとしても、肝腎の一要件たる筋肉勞働を自給する力がない。そも〱みづから筋勞する意思がない。然るに、勞働者の方では、筋肉勞働、技術、科學、組織、及び原料、機械、工場のすべてを、勞働組合の發達を待つて、自給する意思

と希望と確信を持つてをる。資本家が、無暗には威張れない現實的最大弱點がこゝにあるのだ。勞働者が、必勝を期する理想兒の態度で惡戰苦鬪を繰返す内心の强みもこゝにあるのだ。せめて一ケ年の罷業に耐ふる資財をだに蓄積せば、國内の資本主義をば、是非を言はさずに窒息致死させることが出來ると、英國の昨今の勞働者が打算して決意を固うしてをるのも、驚くに足りない、當然起こりさうな意思行動だ。

けれども、勞働者は、筋肉勞働を供給しないといふ消極的手段に依賴して、資本主義を困厄させても、それは一部、一時の便策としての、少なる價値を有するに過ぎない。勞働者の志はもつと積極的であり、社會的でなくてはならん。すなはち勞働者は、科學者をも、技術家をも、經濟者をも、生産勞働者内の分勞者であると、十分なる意義に於いて知信すべきだ。學者、藝術家、立法者、行政者、その他の文化的生産に從事する人々をも、同じく勞働者の一形、一態、一種、一類として、その存在理由と、發達理由とを、綜合的社會理想の見地から十分に肯定し、主張すべきだ。勞働專制は、超勞働的目的と手段とを具備するを待つて、始めて成功の可能と、道德的社會的必要とを着ける。およそ、全體的必要の意識に立脚して、部分的存在、發達を主張することが、階級鬪爭の場合に於いても、民族競爭の場合に於いても、理想的絶對的必要事だ。綜合的社會理想の確立が、現代における國民生活不安の救助策である如くに、經濟生活不安の救除策だ。

社會は、頭數に於いては多勢だが、意義に於いては一人だといふ現實的及び理想的事理を、經濟的生産者も、文化的生産者も、またそのおの〳〵の消費者も、徹底的に理解すべきだ。自己一身の本質的目的を達成するために必要な手段を、他人と協力することによつて始めて可能にする場合が實に多い。その協力が社會だ。各人は、隨つていはゆる勞働者も、生産者としての自己の都合や、便益のみを考ふべきでない。消費者としての自己を反省しなくてはいかん。消費者としての自己を、十分に徹底し、待遇するためには、分勞の發達が最も望ましい。專門、職業が微細に分裂進化して、その窮極するところを知らぬやうな勢ひが歡迎される。各人が、病氣怪我の可能を有する限り、各人は醫藥治療の學と術の無限發達を要求すべきだ。各人が觀劇娛樂の本質的要求を有する限り、藝術家の集中的修養が希望される。勞働者は人だ、消費者としての人は、各人を通じてほゞ同一だ。消費者としての自己に着眼しなくては、社會問題は解決の緒に就かない。各人が、消費者としての自己を愛惜尊護する念に滿ちて來て、始めて自己以外の分勞者に對する愛惜尊護の念

湧く。消費者としての自己に目醒めて、始めて生産者としての他人に對する敬愛心は生ずる。消費者としての自己は、經濟的價値及び文化的價値の消費者だ。生産者としての他人も、經濟的價値及び文化的價値の生産者だ。人類が、今日程度に發達した以上は、經濟的價値の生産と消費は、勿論それ自身に或る程度の目的價値を有する事實だが、全體的及び主要的目的價値をば、文化的價値の生産及び消費の手段準備たるところに有する。發達の順序からいへば、文化は經濟の延長だらうが、價値の主從からいへば、經濟は文化の外廓だ。經濟的生産及び消費に、文化的目的を成るべく完全に實現する用意がいる。經濟と文化とが、二元的に區別されると思ふのは妄想だ。文化的生活の一要件、一特質、一成素が經濟的生活にほかならない。文化的生活を目的とする經濟的生活、これが人間といふ動物の當然態だ。文化的目的を達するための一大必要條件とあれば、經濟的生活の意義と價値と權威とは、實に重大尊貴ではないか。

經濟的價値の生産者と、文化的價値の生産者との間に、また經濟的價値の生産者内の勞働、科學、技術、組織の四當事者の間に、分勞を方法とする協力の意識が、智識的及び道德的に發達する餘地と必要が絶大だ。分勞の自覺は自治だ。協力の自覺は責任だ。自治と責任の組織が、理想的社會の形式でなくてはならん。社會機能の各部の無自治と、その各部間の無責任とが、それだのに、現狀だ。

階級鬪爭のキャスチング・ボート

林 癸未夫

一

それは屡々我等を惱す問題である。そも〳〵「プロレタリアト」とは何であるか。何人にも口にされながら、何人にも正確に其意義を言ひ表すことの出來ない言葉は澤山ある。「プロレタリアト」の如きもたしかに其一つと言へやう。プラトーは「正

義」といふ語の眞義を模索するために十冊の書物を書いたが、竟に最後の答案に達しなかつた。若し「プロレタリアト」の語義を闡明するために二冊の書物を公にする篤志家があつたとしても、我等は今日より以上に此語について說明する所が多いとは保證されない。

一字一字に餘り周到な注意を拂つてゐては「ましよく」に迷はない學者連中は、「プロレタリアト」は「社會の最下級に屬する人々」と、「財産を全く所持しない者」とか、「賃金によつて生活を支へる者」とかいふやうな簡單な說明で片を附けたがる。も少し面倒を厭はぬ親切な學者たちは、正面から此語を定義するよりも、寧ろ此語のカテゴリーに入らぬ種類の人間を一つ一つ社會から摘み出して、後に殘つた者が「プロレタリアト」だ說明してくれる。先づ最初に摘み出されるのが不勞所得者即ち地代や利子や安樂な生活をしてゐる地主や金持である。その次に摘み出されるのが、貴族や官僚の如き世襲的及臨時的の特權階級である。その又次に摘み出されるのが、不勞所得者や特權階級の扈從者であつて、しかも彼等のボスの既得權の存續に由つてのみ自らが現在の地位、境遇並に生活標準を維持することの出來る人たちである。例へば會社の高級の技師支配人や、保守黨に屬する代議士や、陸海軍の將校や、貴族の家令家扶等がそれである。その又次に摘み出されるのが、大學教授、醫師、辯護士等の如き高級精神勞働者である。

こゝらあたり迄は誰にも異論がない。が、今一つ次になつて、官公署及會社銀行の下級俸給者、自作農夫、小賣商人、新聞雜誌記者等は何うかといふ問題になると事少しく面倒である。利口な學者は成るべく筆數を儉約するために、「半プロレタリアト」といふ名目の下に一纏に彼等を片附けてしまふ。これも妙案でないこともない。『ボルセビズムの理論』の著者ポストフートの如きがそれである。所が生眞面目な多產主義のコールのやうな學者はこんなことでは承知しない。プロレタリアトとブールジョアとの鬪爭は、如上の何方つかずの連中の向背に依つて著しい影響を受ける。「若し筋肉勞働者（マニユーアルローカー）が精神勞働者（ブレーンワーカー）の大部分を味方に附けることが出來るならば、彼等は殆ど抵抗なしに資本主義を崩落せしめることが出來るのみならず、それよりも遙に勝れた、能率の高い社會及產業組織を以て資本主義に置換へることが容易に出來るであらう。」とコールは言つてゐる。そしの此事業に參加する筋肉勞働者と精神勞働者の總體を「擴大せられたる意味のプロレタリアト」と名づけてゐる。して見ると擴大されざる固有のプロレタリアトは「筋肉勞働者」だといふことになる。彼は其著『產業上の渾沌と秩序』の第十二章

頭に「プロレタリアト即ワーキング・クラス」と明言してゐる。然らば「ワーキング・クラスとは何ぞや」といふことになると、之亦簡單に手を附けられない厄介な問題となる。

元來「プロレタリアトの獨裁政治（ヂクテーターシップ）」といふ言葉の創始者たるマルクス自身がプロレタリアトといふ語の意義に就て別に註釋は加へなかつた。彼の時代に於ては「賃金取得者」とか「勞働者」とかいふ言葉を以て之に置き換へても別に不都合はなかつたのである。併し近年のやうに、小學教員や、巡査や、銀行會社員や、看護婦や、商店手代や、官廳の書記や、科學研究所の技術員等迄が團體を組織して勞働組合の聯合會に加盟し、坑夫や、仲仕や、機械職工や、汽車の機關手や、電車の運轉手等と一緒になつて階級鬪爭に從事することを辭せない態度を示して來てからは、「プロレタリアト」は最早「賃金取得者」や「勞働者」の別名とのみ考へてゐる譯には行かなくなつた。苟くも資本主義を敵視し、社會主義の實現に助力する一切の人々は悉くこれ「プロレタリアト」であると解釋しなければ、鳥渡納りが附きさうもないやうに思はれて來た。

二

一八七五年、獨逸の社會民主黨の結黨式に於て中外に宣明された「ゴータ綱領」なるものが、甚だ不徹底なマルクス主義とラッサル主義の折衷であつたとは今更說くまでもない。當時英國に在つたマルクスは此ていたらくに業を煮やして早速一書を友人に飛して悶々の情を遣つた。其中の一句に、「資本主義的社會から共産主義的社會へ移り變る間に、革命的轉遷の時代がある。之は政治上の過渡期を爲す者のであつて、必ずプロレタリアトの革命的な獨裁政治を以てしなければならない者である。」と言つた。マルクス主義の忠實な遵奉者を以て任じてゐるレニンは、理想通りのプロレタリアト獨裁政治を十一月革命後の露西亞に於て實行した。然らば彼は如何なる種類の人間をプロレタリアトと看做して、之に獨裁權を授けたか。これはソビエット議員の選擧權及び被選擧權を與へられた者と然らざる者とに依つて區別する外はない。先づ新勞農露國の憲法に依つて選擧及被選擧權を與へられた者は、男女、國籍、宗教の如何を問はず

（一）年齡滿十八歲以上の者

（二）生産的にして且社會に有用なる勞働に依り自己の生活資を得つゝある者

（三）右の者を幇助するために家庭内の勞務に從事する者

（四）陸海軍の兵士

（五）上記の資格を有するも勞働能力を喪失したる者

之である。次に選擧及被選擧權とも與へられない者は

（一）收益の目的を以て他人の勞務を使用する者
（二）自勞働せずして資本の利子又は財産に依り生活する者
（三）私商人及仲買人
（四）僧侶
（五）舊皇族及舊政府の警察官吏
（六）法律上心神喪失者と認められたる者

等がそれである。然らば卽ちレニンに依つて承認されたプロレタリアトなる者は、全國民中から先づ右に揭げた選擧無資格者を引去り、更に其殘部から右の選擧資格を具備するに至らない者（主として十八歲未滿の年少者）を差引いた殘部を意味することになるのである。

此數千萬のプロレタリアトは如何にして其獨裁權を執行するかと言へば、それは時々ソビエット議員の選擧に投票するといふことだけである。しかも此眞正なるべき選擧は實際に於て僅か六十萬の共産黨員に依つて擅に操縱されてゐることは今日周知の事實である。然らば此橫暴なる共産黨は如何なる人々によつて組織されてゐるかといふと

勞働者	七〇、〇〇〇
共産黨役員	三六、〇〇〇
勞働組合役員	一二、〇〇〇
陸海軍將校士卒	一六二、〇〇〇
官公吏	三一八、〇〇〇
店舗使用人	六、〇〇〇
計	六〇四、〇〇〇

である。卽ち純粹の勞働者は組合役員を合せて、全黨員の約七分の一を占めるに過ぎない。他は大部分精神勞働者若くは智識階級に屬する連中である。

併しながら此六十萬の共産黨員も實は唯全露ソビエット議員を選出するための便利に供せらるゝ集團に過ぎない。全露ソビエット議會は名義上勞農露國の主權を掌握してゐる。併し實際露國の最高政策を支配しつゝある者は此全露ソビエットでもなく、又更に其中から選任される全露中央執行委員でもなくして、此中央執行委員會から形式上任命されることになつてゐる內閣議長レニン、陸軍兼運輸大臣トロツキー外五六名の巨頭であることは、何人も疑はない明白な事實となつてゐる。數千萬のプロレタリアトの獨裁政治は畢竟するにレニン外數名の獨裁政治に外ならない。然らば此數名の前身は果して何であらうか。

レニン（內閣議長）　　著述家

トロツキー(陸軍兼運輸大臣)　同
ルナチャルスキー(教育大臣)　文學者
カメネフ(モスコウソビエット議長)　新聞記者
ジノビエフ(第三インターナショナル會長)同
クリスチンスキー(大藏大臣)　法律家

疑ひもなく彼等は總てインテリゲンチャである。頭腦の人であつて腕力の人でない。舌と筆の人であつて鎚や鶴嘴の人でない。社會最下層の人でもなければ、賃金勞働者でもない。只それ理智と熱情に導かるゝ革命運動家である。數千萬の露國のプロレタリアトは是等の數名に獨裁權を一任して、陰慘や闕缺な灰色の生活を營んでゐる。レニン其他數名のインテリゲンチャは數千萬のプロレタリアトの名に於て、怖るべき獨裁政治を行うてゐるのである。

三

カール・カウツキーはマルクス主義の正統祖述者として現代の第一人者である。然るに不思議にも彼は勞農露國がプロレタリアトの獨裁政治を實施する手段として、議員の選擧資格に制限を附したといふ理由の下にボルセビズムに反對してゐる。彼の見る所に依ればプロレタリアトの獨裁政治とは現在の露國の如く選擧被選擧權を下層階級に限局するの謂ではなくして、全國民の一般選擧を基礎とするプロレタリアトの自然的多數決の政治を意味するのである。彼はゴータ綱領に對するマルクスの批評中に謂ふ所の「プロレタリアトの獨裁政治」といふ言葉も矢張さうであつたと主張する。それはマルクスが純然たる勞働階級の政府である」と言ひ、「それは勞働の自由が獲得せらるべき政治的樣式である」と言つて推讚した一八七一年の巴里コムミユーンが無制限の一般選擧から成立つてゐた事實に準據するものである。カウツキーは社會主義實施の手段としては、プロレタリアトの獨裁政治よりもデモクラシーを尊重するのである。而して眞のデモクラシーは資本主義專制の下に實現し難いと同じやうに、プロレタリアト專制の下にも實現し難いとする。彼は昨年公にした『プロレタリアト專制論』の中で斯う言つてゐる。プロレタリアト解放の手段としての社會主義は、デモクラシーを除いては思考し得べからざるものであるゝデモクラシーは社會のあらゆる種類の人々は均しく賦與せらるゝ政治的平等、即ち一般選擧の上にのみ樹立せらるゝ。同時にデモクラシーは少數派に對する多數派の支配である。從つてマルクスの所謂プロレタリアトの獨裁政治は、プロレタリアトが社會の最大多數を占めるといふ理由から、眞のデモクラシーの上に必

然的に實現する所のものである。これマルクスが共産黨宣言中に「總て過去の運動は少數者の利益のためにする少數者の運動であつた。然るにプロレタリアトの運動は多數者の利益のためにする大多數者の獨立した運動である」と說いた所以であると。

言ふまでもなくカウツキーは暴力を以てする革命にも無論反對する。彼は階級鬪爭は武力に依らない平和的手段、即ち議會(パーラメンタリズム)主義、同盟罷業、示威運動、言論等の方法を以てせなければならぬ、と主張してゐる。

かういふカウツキーの主張に從つてプロレタリアトが、資本主義に對し必勝を期するが爲には、智力が最も大切な武器となることは自然の結果である。彼はかう言つてゐる。「智識階級の援助なくしては、又其反抗を受けては、社會主義的生產は實行し得べからざるものである。若し人民の多數がプロレタリアト黨に信賴しないか、或は隔離してゐるならば、智識階級の多數も亦同樣の態度に出るであらう。此場合には優勝者たるプロレタリヤ黨は人民の他の部分に比し智力上の優越を有たないのみか、其敵手にも劣ることになるであらう、」と。

四

正統マルクス主義の實行的組織者中の最大なる一人と、理論的組織者中の最大なる一人との間に、「プロレタリアト獨裁政治」に對し上述の如き氷炭相容れざる見解の相違があることは實に不思議な事態であると言はなければならぬ。レニンのボルセビズムが各國の社會主義者中に多數の反抗者を有すると同じく、カウツキーの非ボルセビズム論も亦多くの非難者を有してゐる。併し私は今之を對質吟味しやうとする者ではない。只我等が此際附記して置きたいことは、レニンの實行に於ても、カウツキーの理論に於ても、結局プロレタリアトの社會改造運動は、事實彼等を指導する地位に在るインテリゲンチヤの活動に外ならぬといふ一事である。今日の複雜したる機械的産業組織が、優秀なる專門的智識に據らないでは運用の出來ないものであることは、誰よりも勞農政府が最も良く經驗した所である。併しそれは獨り技術のみではない。行政事務に於ても全く同樣である。教育は必ずしも優秀な才能を造出すものではない。それは唯天賦の才能を役立てる手引となるのみである。現代の社會制度の缺陷や、經濟組織の不條理を指摘して、之を矯正すべき理法を提唱した者はプロレタリアトではなくて、インテリゲンチヤであつた。インテリゲンチヤの考察と思索と宣傳との力に依つてプロレタリアトは始めて自ら求むべきものを覺ることが

出來たのである。インテリゲンチヤの彼等に對する熱誠と同情とがなかつたならばプロレタリヤは永久浮む瀬のない奈落に沈淪してゐる外はなかつたかも知れない。又將來もインテリゲンチヤの指導と幇助なしには、彼等は到底其智慮に長けたる敵に抗爭することは出來ないであらう。併しながら總てのインテリゲンチヤがプロレタリヤの味方であるわけでは決してない。彼等の一部、時と場所とに依つては其大部分が資本家の味方であり、特權階級の屬從者である。インテリゲンチヤの多數を味方とする階級は强く、然らざる階級は弱い。何となればインテリゲンチヤは社會活動の原動力ともいふべき智能の供給者であるからである。從つてプロレタリアが勝たんことを欲するならば、イリテリゲンチヤを尊重することを忘れてはならない。

之を要するに階級鬪爭の勝敗はインテリゲンチヤの向背に依つて定まる。彼等は正にキヤスチング・ボートの所持者である。——嗚呼併しながら、竟に勝利の當事者ではあり得ない。

無産階級專制に對するインテリゲンチヤの感想

法學博士　堀　江　歸　一

專制と云ふことは、如何なる形態に於て、又如何なる階級に依つて、行はれたとした所で、決して稱揚す可きものでない。無産者階級に對しては、今日相當に世間の同情が集まつて居る。是れは要するに從來何れの國にしても、政治の行はれる形式は有産者階級專制であつて、無産者は常に有産者の壓迫を蒙つて居つたからである。即ち無産者は政治上の自由を持たなかつた。産業上に於ても束縛された、人事生活の點に於ても、種々の制限を蒙つた。是れでは人道を重んずる人々が無産者階級に同情し、彼等を自由の天地に解放することに就て、努力するに至ることも、亦敢て異とするに足りないであらう。然し有産者

の利害から考へれば、自分の都合で無產者に壓迫を加へることは、便利であるに相違ない、恰も昔し奴隷勞働の行はれて居つた時代に、奴隷勞働を使役した階級の方では、此勞働制度を便利としたのと同じであらう。然し人間には人間性の沒し難きものがある。人と人と相對して居る場合に、幾ら我慾の強い、又利己心の劇しい人であつても、常に他人の意思を蹂躙して、自分に慾を縱にして居つては、心中決して快としない。時には双方の歩み寄りて、圓滿なる關係を結ばうとするに相違ない。是れが一度び奴隷勞働の廢止が叫ばれると、何れの國も此人道的要求に服する、一旦有產者階級に對する非難が高まれば、直に無產者階級の利益を尊重するに至る機密の伏在する所以と考へられる。

有產階級の專制は永い間多くの文明國に於て、行はれて居つた。斯くて人の自由は束縛され、人をして他の人に、一の階級をして他の階級に隷屬させる狀態を生じ來つた。自由を重んじ、獨立を貴ぶ思想の強く爲り、又事實に於て無產階級が數に於て增加し、且つ團結の風を生じるように爲ると、斯る專制は次第に破壞され、先づ政治上に「デモクラシー」が行はれると共に、產業上に於ても亦「デモクラシー」の主義を徹底的に行はなければならぬことゝ爲つた。

普通選擧制度の下に、無產階級の人々が政治上に擡頭し來つたのは、何れの國にしても、近年の事實であるが、其勢は頗る確乎たるものである。勞働黨、社會黨又は社會民政黨と云ふような名稱を冠した政黨は次第に各國の政界に於て有力のものと爲り、他の諸黨派間に於ける均衡を左右して、立法上の大勢を制するのは勿論、政權を掌握するに至つた。然し經濟上に於ては、資本主義が牢乎として行はれ、如何に政治上に無產階級が擡頭し來つても、資本主義の城壁ばかりは、陷落するものでないと云ふことが一般に考へられて居つた。

然しながら歐洲戰爭に正に此信念を裏切つた。獨逸にしても、露西亞にしても、政治組織の壞敗すると共に、經濟組織も動搖し、無產階級專制の狀態が強く出現し來つたのである。由來革命は極端なる一點から、極端なる他の點に趣かうとするものであつて、其過渡期に於ける混亂は何としても容易であるとは云へず、一歩を誤まれば、收拾し得ざる破綻を生ずることを免かれない。殊に無產階級の專制は必ず從來行はれた有產階級專制に對する復仇の意味で行はれる爲めに、益々其爲す所の極端に失することを避け難いであらう。

無產階級專制の下に於ては、必ず私有財產の廢止、個人所得の沒收、強制勞働の勵行を必要とするであらう。人が一個の

益の爲めに勤勞するのでなく、社會奉仕の念を以つて勤勞に勵む、社會に命じられた仕事であれば、如何なるものであつても之に服從する。老若男女が盡く分に適した勤勞を致すと云ふことは、社會組織の表面から考へれば、如何にも立派であつて間然する所なきもの丶ようであつても、利益を以つて勤勞を刺戟して居り、所有慾に促されて、仕事に從つて居つた從來の社會から、一足飛に斯る立て方の違つた社會に移ることは、果して人類全體の幸福を以つて、許され可きものであるか、大なる疑の存するものなきを得ない。千九百十九年三月モスコウに於て開かれた萬國共産主義者大會の發した宣言書の末節に「用殺された特權又は財産權を認めず、一に饑饉に苦んで居る民衆の必要から出發する無産者專制であつて、始めて現時の危機に襲はれる時期を短縮し得る。此目的を達する爲めに、吾人は總ての資料や發力を團員に付し、勞働に對する一般的義務の制を布き、産業的訓練を總ての人に與へ、斯くて兩三年の間に、戰爭中に蒙つた損傷を癒し、未曾有の程度に人道を發揮しなければならぬ」とある。果して此能書の通りに行はれたかどうか、右の宣言が出てから、二年半を經過した露西亞の現狀を見たならば、思半ばに過ぐるであらう。

近來日本で少しばかり勞働者が爭議を起したり、又世間に勞働者に同情するような議論でもあると、或る資本家の如きは、早くも日本に無産者專制の時代でも來たように考へ、何とかして今の内に勞働運動を根絶させなければならぬように思ふようである。笑ふ可き、又憫れむ可き者は實に是等の輩である、日本では漸く年來壓迫されて居つた無産者階級が天の慈雨を得て、其萠芽を地上に露して來た位の狀態に過ぎない。之を恐れるが如きは、資本家の心膽豆よりも小なりとす可きである。彼等にして斯くまでに無産階級の團體的行動を恐れるならば、朝鮮、支那、阿非利加砂漠と剛を逐つて、此種の行動の見られない所に移住し、結局資本を懷いて、身を太洋に投じるより外に、處する所を見出し得ないこと丶爲るであらう。

私は固より有産階級の專制を不可なりとする如く、無産階級の專制をも不可なりとする。唯從來國家の法制又は制度の上で殊更に兩階級の間に鑿たれた溝渠を深くするようなものを廢止し、一方に兩階級を團體的に對立させ、社會の公心を以つて、世間の均衡を維持することを必要と考へる。唯今日まで我國に行はれたように、殊更に無産階級を壓迫するような政治を行ひ、又此階級を抑制するような制度を設けて置くことは、將來に於て革擬的機運の到來することを促すものであ　て、無産階級の專制が他國に行はれて、社會の秩序を壞敗したことの如き

も、實に斯る關係に基いた事情少なしとしないのである。此一事は吾人の飽くまでも銘記しなければならぬ點である。

人間本來の愛と精神の爲めに

小川未明

インテリゲンチヤと云ふ階級が知識を賣物にして居る階級であるならば、固よりさう云ふ階級の成立する筈がない。總ての人間が、本當に人間的な思想と感情の上に立つ者であつたならば、其生活の實質に於て何等プロレタリアートと撰ぶ所がないであらう。今日只學問を賣物にし、知識を賣物にして生活するばかりでなく、それに依つて地位を得たり、虚名を博したりして居る階級もある。併しそれは資本制度の缺陷から生れた階級であることは云ふ迄もない。早い話が、馬鹿であらうが、それほどの天分がなからうが、只金があると云ふ丈けで相當の教育を受け、學位なるものを得られる。彼等は教授として、或は講師として、學校に教鞭を執り、青年を指導する。又或者は知識其物を一の權威として、無識の人々に臨んで敢てこれを指導しやうとする。併し彼等にどれ丈けの人間的感情があり、奥深い思想があるかは疑問である。創造に於てこそ其人の權威も認めるけれど、何等の創造の力もなく、たゞ識つて居ると云ふ丈けで其人間の偉い筈がない。また本當に創造力のある人であり、眞に人間的感情を有して居る人であつたなら、自己の創造をしない學問を受け賣りすることに對して自ら恥ぢなければならない。そして此等こそは生産勞働者に對して一層恥ぢなければならない筈である。

私は本當の意味の藝術家を、本當の意味の宗教家を、また本當の意味の科學者を尊重する。何故ならば其人達の生活はすべて人類的であり、人間愛を離れて居ないからである。そしてまた自己犧牲の精神を以つて眞善美のために奉仕せんとするからである。併し今日のインテリゲンチヤなる者の多くは果してどうであらうか。彼等はたゞ哲學が出來ると云ふ事、多く專門の

書物を讀んで居ると云ふ事丈けで、而も其生活はブルジョアの生活をして居る。言ひ換へれば彼等の生活は實感からではなく、眞理の追求からではなく、たゞ學問を享樂し、知識を趣味として取扱つて居る生活に過ぎない。私は知識と云ふものが果して金持の專有であるべきかを思ふ。今の時代に於て斯うした知識階級の存在すると云ふことは、知識と云ふものが一般の人間の共有でなくして、特殊の金のある人間にのみ收得せられるものである事を語るに外ならない。若し此社會制度が何時か改善せられたならば、大學は金持ちの息子の遊び場でなくなり、知識は彼等階級の獨專とはならないであらう。私は斯うした所謂インテリゲンチヤには何等の同情もない。彼等は血と汗を流して生産に從事して居る、本當に人間らしい勞働者に對して彼れ是れ云ふ權利はない。併し玆に人生のために一身を捧げて居る科學者、若しくは思想家のやうな人々を指してインテリゲンチヤと云ふならば、私はそれらのインテリゲンチヤの精神は卽ち同じやうにプロレタリアートの精神であると云ひ得る。無産者とは金のない破落戸を云ふのではない、多くの人間が無産者であるべき筈である。自己主義の上に立脚せず、自己を社會のために奉仕して相互扶助に依つて生きて行く、そこに人間本來の愛を感じ、美徳を感ずる。之れ卽ち無産者の精神であり、感情である。蒼空の下は總て我郷土であると云ふ哲學、生を同じうする四海の人間は總て我同胞だと云ふ思想、之れを措いて無産者の生活の面目はない筈である。斯うして見ると忠實に働く勞働者も、眞理と愛のために一身を捧げて居る科學者も、藝術家も、其間に倫理思想として、哲學として何等異なる所がないのである。

近來無産者の勢力が頓に加はり、搾取階級に對する反抗の氣勢を揚げて來たことは事實である。併し、幾年、幾百年の長い間只金がないと云ふ事のために、土地がないと云ふ事のために、如何に彼等が階級的壓迫を加へられて來たか分らない。現在に於ても猶ほ名もなき、富もなき善良な民衆は、金があり、地位ある人間に對して如何に甚だしき優劣ある待遇を受けて居る事であらう。ゴルキーがレーニンを評した言葉の中に、他の事は何うでも、兎に角幾百年間地の底に埋れて居た無産者を、地の表に立たせたと云ふ事丈けでも彼の偉業であると云つたが、此一句はよく考へて見ると涙ぐまれる言葉である。譬へるに言葉なく、また知識もなく、多年權力と壓制の下に呻めいて來た此階級が、そして本當に此人間らしい階級が、太陽の下に出たと云ふ事がそれ丈けでも感激に價する事ではないか。私はプロレタリアートの横暴を云ふ前に、先づ彼等の上に臨んだ各階級の横

要を云はなければならない。

文化的精神を除いては人生を圓滿に解決する道はない。今までの藝術や宗教の力では人生を救ふに足らずして、露西亞でああした革命を見たのは止むを得ない事であつた。私は先々月婦人公論に載つた「アンドレーフの晩年」を讀んで、一面に於て民衆に同情と愛のあつた藝術家があんな悲慘な最後を遂げた事を思ひ、如何に暴力に依る革命の恐ろしいかを知つた。それにつけても文化的精神の所有者を以て任ずるインテリゲンチヤは、宜しく自覺して人生を此熱火の苦しみの中から救はねばならない。

群衆運動と其統率者

文學博士　三宅雪嶺

□

多數の平民が力を得るのに、二つの意義がある。一つは君主又は少數貴族が力を失ひ、平民が新に統率者を求むるのであり、一つは平民が漸次力を增し、君主又は少數貴族に接近し、或は之に代るに至るのである。君主又は少數貴族が相當の位置を占めるのは、多數平民の統率者たる事が最も與つて居り、統率者たるの力を失ふと共に、多數平民が別に統率者を求めようとし、未だ適當の統率者を得ぬ間、群衆心理で勝手なことを爲すに傾く。君主貴族は世襲なのが多く、自ら特別の能力無く、何を以つて平民を統率するかを疑はれるが、能力の足らぬ所、制度習慣等で補ひ、兎も角も平民が從ふ事になつて居り、謂はゞ平民の統率者として存在し、之を除いて特別の力あるとせぬ。何の事情でも、平民の統率者たる間、其の秩序を維持するが、永い間に勢を變じ、統率者たるに堪へぬやうになり、其處で平民が從はうとして從ふべきもの無く、自分で勝手な事をするの外ない。

□

一人又は若干人、數の少い間は左右を憚り、遠慮勝ちになり、勝手を働くのは自ら分らぬが爲めであつて、常識を具へる限り、

愼しむべき事を忘れぬ。座長とか議長とかになれば、欠伸したり居眠りしたりせず、人の言ふ事を注意して聽く。一般出席者は之と違ひ、欠伸したり居眠りしたり、動もすれば喧嘩もする。群衆として、責任を群衆で分つので、自ら責任を感ずる事輕く、暇に飽かせて惡戯をするのである。統率者は智慧の足らぬので下手な事をし、侮られまいと威張つたりするが、少くとも服裝を整へ、體面を失ふまいと心掛け、外面丈けでも行儀の良い所がある。常人が行儀良いのでなく、人の注目する所となり、行儀を崩す事が出來ぬ。列席する者は多く衣飾を問はないで、不様な事を爲し、所謂、向ふとなつて大聲を舉げ、憚る所が無い。舊來の政府を仆すとか、舊來の團體を崩すとか云ふのは、一時多數が勝手な事を爲し、始末に行かぬ事がある。如何なる惡政府も無政府に優るといふのもそれからの事であり、果して惡政府が無政府に優るか、無政府より惡い事あるでないかと疑はれるが、多數を恃み勝手な事を爲しては、何とも收りが濟かず、幾らか取締らねばならぬと云ふやうになる。群衆に於いても、强ち銘銘勝手に働きたいのではなく、統率者が無く、各自勝手にせねばならぬのであつて、適當の統率者があれば、喜んで之に從はうとする。只適當の統率者を得ねば從ひやうが無く、好んで勝手な事をすると見える。

□統率者無き多數が勝手な振舞ひするのは避くべからざる事であり、殊に前統率者が惡い事をして居つては、之と同樣な事を爲しても差支へないやうに考へる。革命で恐怖時代が惹き起すのは其の爲めであつて、やがて鐵腕を振ふ統率者を迎へるやうになる。それまで出來る丈け勝手を働かうとする。統率者も力を振はうとするのであり、群衆も力を振はうとするのであるけれど、群衆は責任を離れる丈け多く勝手な事を爲さうとし、爲さうとして出來ぬので、止まるを餘儀なくされる。モツブが勝手な事を爲すのは、適當の統率者を得ぬ間の事、之を得ると同時に收りが着く。而して同時に統率者が能く治むるといふものゝ、已れの所爲でなく、群衆自らの心に因る所が多い。初め群衆各自力を以て任じ、銘々天狗で爭ふものの、爭ふた揚句、疲れ果てゝ、何とか早く纏めて吳れる者に任さうとし、遂に之を統率者とするに至る。新に統率者の出來るまで運動は、各自の力の試驗であつて、自づと優劣が極まらうとし、直に服從せぬならば、面倒で喧嘩を熄めてしまふ。吾も吾もと立ち騷ぐ間に、恐怖時代類似の事がある。

□資本家に對する勞働者も、双方の代表者で諒解が出來れば事

が濟むけれども、時として資本家が警察又は軍隊を藉りて壓迫し、時として勞働者が資本家を脅し、一切の實權を握るに至り、それまでに至らなくても、多數勞働者が相集り、多數の力で思はぬ事を爲すに及び、一個人として極めて溫順でも、多數の間で人一倍騷ぎ出す事がある。少しく勢力を得るや、調子に乘つて何でも爲し得るかに考へ、傍若無人、第三者の反感を買ひ、成功すべき時に失敗する事がある。

□

群衆運動は往々當てがつかぬ。何でも勢力が他に移る時、幾らか壓迫を見るのが普通になつて居り、壓迫が强ければ强い程、反對が激しい。ペンヂユラムは左から下だれば必ず右へ上る。舊統率者が權を失ふや、新統率者が之を代る筈であつて、其れまで到らぬ間、群衆で統率者の役を勤めねばならず、劣等なる統率者より劣等なる事を爲したりする。統率者なき群衆は憎むべくもあり、憐れむべくもあると云ふのは、其邊の事を指す。モップを憎んだり憐んだりするのはそれからの事であるが、强ち群衆として統率者に迫るのでなく、群衆自ら品性及び智能の程度を高め、統率者も大差無きに到る事がある。社會の進步發達　云ふのは、多く之を意味する。若干の人を天才とし、其天才はいよ〱進んで、いよ〱進みが遲く、非の天才が何程勉强しても、八段迄で終り、正目風鈴、六月になり、四月になるのは、僅かの間の事である。敎育が盛んになつても、ニユトン、ダルヰンが矢鱈に出るといふ譯でないが、之に似て少しく劣るのが澤山ある。昔英雄豪傑と云ふて飛び抜けた者になつて居り、實に常人は之と比較にならなんだが、近來餘り英雄豪傑を見ぬのは、一般の程度が高まり、特別に若干人を英雄と崇めぬやうになつた所がある。議會を開き、多數で事を決すると云ふのも、多數の知識程度が高まり、强ち少數者に委さず、各自出來る丈けの事を爲さうとするのである。

□

然し今尙ほ程度の低い社會があり、甚だしく低いのもある。品性及び智力の程度が著るしく高まれば、統率者なくても自づと事が進行するけれど、それ程まで程度が高まらぬ間、群衆心理の奇異な光景を見ぬと限らぬ。あの人が何うして左ういふ事をするのかと不思議がる事がある。其の人に逢つて見れば、能く判斷し、少しも過まる所なけれど、多數と共にする間、我知らず奇妙な事を演じ、愉快としたりする。勝手な事をするよりも、統率者で十分に取締る方が可いにしても、動もすれば[illegible]專制幹部專制に終らうとすること、政友會が正に其[illegible]る。斯くて政黨の實あるや否やが疑はれる。

□

今の日本の勞働者は、統率者無くても可いと思ふか。統率者を得ると共に盲從しようとするか。同盟罷業の爲し樣でも、今少しく程度の高まるを望まねばならぬ。經驗の淺いので仕方ないと云はゞ云へ、調子が好ければ調子に乘り過ぎ、調子が惡ければ失望して屈從する。一時の成功失敗で喜んだり悲しんだりするやうでは、事は難しい。勞働者の中で我こそはと思ふ人々は、調子に乘つて浮つ調子にならず、此處で學ぶべき所、辛抱すべき所と思ひ、氣を着けねばならぬ。何でも自分勝手で一時を愉快にし、それで事が成り立つては、世間が餘り易しく、易しい中から立派な事の出來よう筈が無い。群衆は統率者と同等の品性智力を備ふるものが多くなるまで適當の統率者を求むべきであり、之を得ぬ間、不始末の事あるを免れぬ。統率者を求めるか、否らざれば自らの地位を高め、統率者を不必要とするに到るか。孰れかを選ぶべきである。

和製のプロレタリアート何事を爲さん

生方敏郎

專制は、いづれにしても、厭ふべき事だ。昔から、貧乏人の專制と云ふ事を、あまり聞かない。專制と云へば、必ず、王樣とか、貴族とか、金持とか、兎に角、一つの勢力を持つた者のやる事にきまつてゐた。無產階級の專制と云ふ事は、近頃になつて聞く言葉であつて、おそらく、昔は無かつた事だらうと思ふ。

後家さんなど、時に、大いに家庭に於いて、專制である事がある。家庭の暴君になる事がある。親類の人々の忠告も聞かない。忠義な番頭の諫めも用ひない。そして勝手な事をやる。家作の店賃を、無茶な上げ方をしてみたり、亡夫の石塔を、無闇と、大きく建てゝ見たり、娘の衣裳を身分不相應に飾らせてみたり、唯々、虛榮心と我儘の暴れるまゝにまかせて、手のつけ

られない場合がある。それも、一種の專制であらう。弱者にも此の通り、專制はある。

我儘息子が專制で、父母兄弟を困らせる場合もある。勝手な處で無錢飲食をして來て、茶屋からは勘定を持つて來る。お袋は臍くりを出さねばならぬ。事が大きくなると、親父はいやでも、支拂せねばならぬ。それが嵩じると、しまひには、親父の印形を持ち出したり、または、僞造したりして、家倉を抵當に入れるやう。さまぐ\〜無茶な事をやる。

また、女房の專制と云ふのもある。俗に云ふ嬶天下だ。何にでも我を通し、近所の手前も、親類への義理も思はず、恥を知らないのだから、やりたいと思ふ事は何でもやる。それで夫から責められゝば、死んでしまふと云つて、脅かす。

この通り、馬鹿者にも、專制と云ふ事がある。然しながら、私は、歴史あつて以來、未だ曾て、貧乏人の專制と云ふ事を聞かない。

ロシヤでは、今、プロレタリアートが、專制を極めてゐると云ふ噂である。表面から見ると、そんな形になつてゐる。目下、天下を切り廻はしてゐる人々は、盡く無産階級の者である。それ故、一寸考へると、無産階級の專制のやうに思はれる。況んや、それを希望してゐる無産階級の人々の目には、さういふ風に映じるであらう。又それを怖れてゐる資本家階級の人々の目にも、矢張、さう云ふ風に映じるであらう。然し私はさうは思はない。

萬一、世間の傳へる様に、ロシヤに於いて、智識、無産階級の人々が、天下を勝手に切り廻してゐるとすれば、それは無産階級の中での、亂暴者のやつてゐる事だ。そして、それは、決して長く續くものではない。ロシヤの貧乏人の多くが、盡く、目下、幸福でゐる譯ではあるまい、善良にして、無智なる多くの貧乏人は場合に依ると、以前よりも、もつと苦んでゐるかも知れない。

我國に於いて、貧乏な智識階級、少くとも貧乏を標榜する智識階級、例へば、よく勞働運動のお先棒を振る様な連中、及び貧乏な勞働者などは、政治的同盟を形作り、又は、經濟的に同盟して、有産階級を倒し、現在の儘の社會組織を顚覆することを夢想する場合があるかも知れない。または、そこ迄考へずに火事見物でもするやうなつもりで、新聞記者などが、面白半分に、さう云ふ事を夢想しないとも限らない。または、そんな時に飛び出して、虚名を得やうと云ふ、卑劣漢があるかも知れない。

然し、現在の狀態を觀して見ても、矢張、專制を行ひ得る

極める者は同じ人々である。例へば、神戸あたりに大きな工場を持つて、多くの勞働者の膏血を絞つてゐる現在の資本家達は、その時になれば、豹變して社會主義者の親玉になり、子分を唆して、勝手な眞似をするに違ひない。決して、彼等橫暴な資本家達が、やみ〳〵と勞働者に、虐げられて、甘ずる筈がない。官憲に賄賂を使ひ、勞働者を酷使して、巨利を博するに汲々たる連中は、またそれ丈、精力的でもあり、奸智にも長けてゐる。世の中が變つたからとて、決して困る連中ではない。彼等は早速、レーニンの秘書官を買收してしまひ、また、その時はその樣に甘い汁を吸ふに決つてゐる。如何に、プロレタリアートの世の中になつたとて、人の心が改まらねば、矢張、日本などでは疑獄事件ばかり續く事であらう。一般人民にとつては、德川時代も明治も大正も、プロレタアート側も、その幸福の度合に於ては、あまり多く違ひはないのだ。

現在、自働車に乘り廻して勞働運動をやる樣な、貧乏を標榜して生活してゐる連中が、萬一、時めく樣になつたらば、どうであらう。目下、氣焔萬丈の彼等も、必ず、おとなしくなつて、神信心でも初めるだらう。世の中はどう變つても、何時迄も、貧乏そのものに噛り付いて、不平を以つて、終始したいと云ふ馬鹿者はあるまい。現在日本の社會主義者など、金力を以つて、變節させやうとすれば、この位容易い事はあるまい。然しながら、不幸にして、不平な無産階級を役者にして、幸福なる變節をさせてくれる樣な、深切な富豪は、絕對に無さ相だ。

プロレタリアートの專制といふ事は、右言ふ通り、私は決して無いものと信じる。若し、日本にプロレタリアートが勢力を得る樣な事が、假りに有るとしても、日本のレーニンは、香の高い葉卷が銜へたかつたり、羽二重の勞働服が纏へてみたかつたり——勿論、あつらへだ。あつらへではなくつて、何で世の中に羽二重の勞働服だの、鹽瀨お召の筒袍なんかゞ有るものか——自動車を走らせて刑事をまいてみたかつたり、緞子の坐布團を敷いてみたかつたり、丸善新着の勞働問題經濟問題の洋書で、書齋を飾りたかつたり、時々は新聞に自分らの寫眞を載せて貰ひ、ゴシツプを書いて貰はぬと心淋しく成るやうな種類のレーニンである。日本のトロツキーも亦た日本のレーニンと似たり寄つたりで、金も欲しいし——何、少しでいゝのだけれど——貴族趣味があつて、學者らしく見て貰ひたいトロツキーである。少しばかり著書の印稅の這入るのを樂しんでゐるトロツキーである。彼等の喧嘩對手としては、頭の無い刑事や安月給のお廻りさんが、丁度お格好な對手である。この樣なレーニンと

トロツキーとを持つ日本に、假りにプロレタリアートの專制を許すとも、果して、何事を仕出かすであらうか？　全く、骨我通家の喜劇の材料を遺す位が、恐らく關の山であらう。たゞし、仲間喧嘩をするといふ一事にかけては、西洋の革命家並みである。即ち日本のレーニン、トロツキーも、仲間喧嘩にかけては一人前である。ケレンスキー若し天下の權を握れば、これを討伐しやうとするレーニンは日本に幾人もゐる。友愛會でも何會でもその內幕を探るなら、親分子分兄弟分の爭鬪史の材料は、恐らく東京市大疑獄豫審調書ほどに、豐富であらう。日本のレーニンやトロツキー諸君は、何れもお人好しで、學者で、貧乏で、貴族的で、神經質で、嫉妬深く、その上、お喋りで、子分のおだてに乘り易い。專制などいふ怖ろしい事は、全く以て、柄に無い。

だが、ロシヤの樣に、兎も角も、プロレタリアートが全權を握つた時代に、一番悲慘なのは、智識階級であらう。多くの學者や藝術家は、皆ひどい目に合つてゐる。何となれば、インテリゲンチヤは、自らプロレタリアートの指導者の如く己惚れてゐるけれども、プロレタリアートの眼から見れば、インテリゲンチヤの貴族的趣味貴族的氣質貴族的道德と相容るゝ可きいはれがない。智識階級に平等と自由との爲めに、プロレタリアートに同情して、その運動を援助、或ひは指導したりはしたけれども、プロレタリアートの方では、自分等の[illegible]きである。自分等の利益問題が先きである。自分等が勢力を得る樣に、直接智慧を貸してくれたインテリゲンチュアに對してこそ、好感を持つであらうけれど、智識階級全體に對して、何も、兄弟分扱ひする謂れがない。矢張、知識階級を以て、貴族の片割れか若くは、資本家の庶子位に目做すであらう。ロシヤに於いて、革命以來、多くの學者や、藝術家の或る者は悲境に陷り、或る者はさつぱり振はなくなつたのを見ても分る。

然しながら、我國にさう云ふ時代の來る心配はないし、またロシヤの現狀の如きは、實際、來るべくして來た結果であるが、それにしても、今の情態で永く續くものではない。プロレタリアートの、專制國に於いては、そのプロレタリアートの中から、貴族も出れば、商工階級も出る、乞食も出れば、泥棒も出る。そして、悲しい哉、また、以前と似たり寄つたりの、元の木阿彌となるに極つてゐる。如何せん、社會を組織するものは人間である以上、矢張、人間のやる丈の事しか出來ぬ。

私は矢張、金權階級の專制を最を怖れてゐる。何と云つても、金の威光は偉いものだ。金錢の全く無い社會を作るたどと云ふのは、空想だ。面白いには違ひないが、さうはならない。

貨幣は無くなつても、私有財産制度は續く。有產階級が、無產階級に對して、暴威を振ふ事は、將來も永く續くだらう。その暴力を、いくらかでも和げる事は人々の道德的感情に待つより外はない。人間が良くなると云ふ事が、救濟の鍵である。制度や、法律や、仕組みなどに依つて、人間の幸福を一寸でも進めやうと思ふなら、それは實に馬鹿げた空想だ。若し、今の儘に資本階級が暴威を振ふならば、人類は益々悲慘に陷り、無產階級は自暴自棄になつて、他人を傷け、合せて自分を亡す樣になるのだらう。私が無產階級に對して怖れる處は、その自暴自棄と、無責任と、懶惰と、無智と、輕擧妄動等である。そして、彼等の無智が、野心ある勞働運動屋に煽動されて、その食ひ物になる事を、私は甚だ氣の毒に思ふ。

内から開展する人道的な魂に依頼して

千葉龜雄

人間心理に意識と省察をめぐまれたことは、人間生活に採つて果してあつくめぐまれたものとしてばかり祝福さるべきであらうか。必らずしもそうとばかりは考へられない。とり分け、それが過度に神經をすり減らされた文明人にとつては、どれほどが祝福であり、どれほどが禍であつたかの分界は一寸測量されない。

十九世紀以後の文化は、より多く科學の文化であり、メカニズムの文化に傾むく。科學とメカニズムの特色は、より細密に宇宙と實在を分化して行くことに興味を持つのである。ところが人間心理の意識は自他の差別を知覺することから出立するのであるが、無限の分化を特色とするこの科學文明は、又た人間心理の自他の意識を、或は合理的な筋道から分派さして、病理的な沿線にまで引摺つて行くことを免かれなかつた。

それを事實の上からいつて、極度に纖細にされ、敏司にされた意識と省察から、偉大なあの個人主義が確立され、自我の權威が合理的生活の上に創造されたことは、何と云つても人間成立

の歴史の上の最大な記錄と見て差支へない。けれどもあまりに自我の凝視にばかり偏向を傾けて、廣い人類の世界との交渉を忘れて了つた刹那に、ここに怖るべきエゴ・マニヤが生れた。エゴ・マニヤが近代病であることは、必ずしもマクス・ノルドウを俟つて始めて知る譯のものでないが、エゴ・マニヤに伴なふ傾向は卽ち近代的憂愁である。人道主義を藝術の上から宣傳する西班牙のブラスコ・イバネスが、「僧院の蔭」の中で、「近代的憂愁（メランコリー）は自然から課せられた、西歐頽廢派の暴威に對する所罰である」と云つたのは、どこまで眞理であるかは別としても、一度この分類病にとりつかれた十九世紀以後の人類は、丁度、爪を噛む病癖を持つ子供が、爪の根を噛み切つて血を出してなほ止まない樣に、自己といふものを無窮に堀下げて行つて、到底どんな地下道によつても接觸することが出來ぬほどに、孤獨の城壁を立派に築き上げて了つた。そして其の孤獨の自覺が生む憂愁を完全に觀味することによつて、自己の自由を完全に占有し得たことを始めて感得するものであつた。

階級の精神を、最も敏感に反應するものは、卽ちこの近代的た自我思想の極端な發達から起つて來たものでなければならない。何故かなれば分類と分化は卽ち差別の思想である。すべての社會の現象を、際限なく分類して行く場合に、そこに現はれるものは際限のない階級の精神でなければならない。けれでもそうして發見された無窮の階級は、決して病的幻想に假現した空虚の影ではなくて、或る點までは不幸にして今まで發見されなかつたところの、あらゆる人類の禍と悲しみの根原であつたのである。だから單にそれだけでは確かに一大發見である。けれどもこゝにも又ついて廻つて來る、病的傾向は、單に本當の階級的であるものだけを認めるに止まらずに、どんなものにでも凡ての階級的な意義を附け加へて、自己興奮を試みることである。そして自己興奮が慢性になることに於いていつとなく意識の混亂が來る。つひには意外に、自分の敵でも何でも無い、或は却つて良友であつたかも知れないものに對してすら、無殘な敵意と反抗を以て立向ふほどの、救はれない自己脅迫症に陷ゐる。階級精神の認識の苛烈な時代に、かうした多數の犧牲者を生みつゝあることも、社會燥病者にとつて、深く考察せねばならぬ現象である。

本當に社會の一現象を考察しやうとするものは、あらゆる景氣のよい宣傳や誇張から離れて、つぎつぎに生れて來る階級上の新造語に對して、氣長い觀照と檢討をしなければならない。それはとり分け現代のやうな社會文化の混亂の時代にあつては最も必要な條件と考へらるべきものである。プロレタリヤとい

であるか。ブルジョアとは何であるか。インテリゲンチヤとは何であるか。どれが取換へられなれない本質であつてどれが流通性を持つ屬性であるか、プロレタリヤとは永久に或る人生に銘刻された運命であるか。どんな或る階級が專權を占めるにせよ專權そのことは果して人間文化の理想を示して居るものであるか。或はAと云ひ、Bと云ひ、互に敵視する一階級の名が、又た內容が、限界が、隨分茫漠たるものであり、それをつきつめて考へて見る時に、夥しい廓大視の外には、案外それに正當に考へられるほどの內容を持つものではない場合が無いか。或はそれが目指された本質が乏しくて、屬性にすることとの出來ない範圍にまで、無窮に、無秩序に廣く考へられた名目を持つて居るものではないか。等、と、

たとへば其一つを取上げて見る。プロレタリアの專權とは一體何であるか。プロレタリアは多くの場合廣い意味の無產階級と云ふ譯語を持つて居る。無產階級と云へば、それの對照は勢ひ有產階級であり、金權であり、有閑階級でなければならない。そこで漸やく其意義がわかつて來たやうな氣がする。つまり無產階級が有產階級に對する場合の接觸は斯う言ふ事である。有產階級——即ち金權の存在性そのものが、大抵搾取階級であり、どう考へても合理的に承認されないところの、私有財產の所有主で非勞働利益の奪略者であることが如實である上からして、——たとへば搾取階級に數十萬倍する、無產階級のいはれのない生活の苦痛が存在せぬにしても——猶ほ此の存立の理由のない有產階級の專權は根本的に撲滅され、破壞されねばならないものだ。ましてや數十萬倍の無產階級が、みな宿命の上からも、合理性からも、何等のいはれのない生活の苦痛を、日一日ごとに酷烈に享けて居るのであるから、そうした不合理な財產制度と財產人が、世界の面から一日も早く惜みなく取拂はれねばならぬことはあまりに自明の理だ。この意味で合理性は全性無產階級の側にある。此世に生れて單に人生を享樂することが出來ない許りでない、人間一箇の生存權さへもやみ〳〵と奪略されて、いくら働らいても働らいても、味のある麵麭一つさへ喰へないと云ふ生活はある筈はない。創造主は、それほど慘酷に人生を試練に上せてはないのである。

ところが之れほど自明な理窟が彼の金權　流には到底解らないのだ、或は薄わかり位ゐに此現前の事實を承認して居ながらも、何かと自己承認の理由を考へ出して、普遍であるべき生活の享樂權の讓り渡しを拒まうとする。いや、そうなれば解らないのと同じことだが——其處には又た都合よい宗教といふものがある。不平を言ふ奴には一々宿命說で頭をたゝきつけやうと

する。倫理の說教家といふものがあつて、淸貧とか簡易生活とかの福音を說いて、一方で平氣に濁富なり、豪奢生活なりの御蔭を蒙むらうとして居る。政府と云ふものがあつて、法律の上からこの不權衡を承認しやうとする。これでは何處まで行つても無産階級は助からない。それならばこの均衡を破る手段をどうするか。どうしても暴力に訴へて解決する外はないと云ふのか……一寸待つて呉れ玉へ、そこになると自分の考へは違つて來る。

つまり或る人々の考へは、世界の他の部面は凡て文明と文化の光輝に照されて居る。ものが皆な其分に應じて存立して居る。唯だ永久に明るい太陽の日蔭になつて居り、又たなつて居るべきものが無權階級だから、平和な手段ではどうする事も出來ぬと結論するのであるが、自分はそうは考へない。それは人間文化の生命を、あまりに氣が短かく眺めるか、乃至は丘淺次郎博士の進化論的悲觀のやうに、人間進化の能力を、全く飛躍も機能もないものとして、据置きの儘に考へやうとする科學的客觀から來る誤まりではないか。つまり結論から云へば、私は現代の世界を以て、未だ文化の黎明だと見るものである。地球が生れぬ前に何千萬年の空虛があつた。たとへ進化學が何と云つた處が、生れてから十萬年二十萬年の壽命が何であらう。そこから考へれば科學も未だ幼稚である、文明も未だ弱年である。紀元二千年が何であるか、三千年が何であるか。埃及の文明、東洋の文明、希臘、羅馬の文明、そして西歐の文明と考へて來る時に、何時アビシニヤの黑人の面に、又は西印度の土人の眉に、新文明の曙光が宿される可能性が無いと誰れが斷言されよう。それほど將來の文化は永遠性を宿して居るのだ。

歐洲大戰が起つた時に、或る異人はいはゆる西歐文明の悲調の存外淺はかなるものであることに驚ろき、且つ嘲笑した。なるほど我も人も世界文化の中心と誇つた英米佛伊獨墺が、今頃血みどろになつて全半球を擧げての混鬪などは、兒戲とも何とも全く以て笑止の外はない。けれども笑ふ勿れ、考へて來れば之れは皆な世界文化が黎明である爲である。

けれども何かと云へば暴力を權威とするプロリタリエエトは、決して歐洲大戰の兒戲であることを指笑する資格はない。眞實の文化はいかなる場合にも暴力の存在を必要としない、何となれば文化の目的とするところは、あらゆる倣りと偏見と憎みとを否定することだからである。暴力を以て正義を取戾すと云ふのは、その言葉自らが矛盾して居る。暴力の結果がどんなに利用された處で、それは失はれた平和が取かへせるものではない。バアトランド・ラツセルが、階級戰爭の效果を批評して、

お互の統一も共同の敵から勝利を獲た共日からもう破れて了つて、また新らしい社會革命がお互同志の中から起つて來ないと誰か云へる。世界中どこを探しても、世界的平和が憎惡から鑄出されると云ふやうな都合のよい錬金術はどこにも見當らない。一度階級戰爭の教義で直接行動をするやうに仕向けられた人には、そこに憎惡の性癖を植ゑ付けられる。そして古い敵が消えた場合に、直ぐたえず本能的に新らしい敵を探し廻るだらうと云つたことは、多少考へるべき餘地のないものだらうか。

が、何と云つても此文化世界の黎明に於いて、一番文化の光りに透徹しない無知者は、凡ての權力者の保有者である。それは政權を持つ階級である、金權を持つ階級である。京阪では福が逃げ出すと云つて光線を招ばない家屋の構造をして居るのだそうだが、彼等權力の所有者は、新らしい思想が、自分等の必死にすがりついて居る古い權力を撥無するものであることを知つて居るから、つとめて新らしい、人間らしい思想を思索の中に入れまいと拒む。けれどもそれは殼の中に固着したさゞえのやうなもので、一網すれば直ぐ解體して了ふ情け無い權力だ。だから人類が知識の上で凡てに自覺して、文化の光華が立てられ、自由の權威が尊重されることになつたら、そんな無知な權力の所有者共などは、苦も無く存在の影を失してしまふものである。又た失して了はねばならぬ。無產階級の人々は事々しく群集の力を擔ぎ出すが、正宗の刀で猫を斬るには當らない。そんな微力な、價値のないものの爲に、男一匹たりとものの人生と血を犧牲にするとは、あまりに高價な取引ではあるまいか。然るにこの當然な、容易な事が未だ出來ないのは、國民が個性の本然と、合理性に目ざめることの遲いことを語るものでなくて何であらう。所が暴力と合理性の差違を見やうとするならば、何も遠くを探し廻るには及ばない。我々の現前に毎日出て來る我國の勞働運動が現にその好適例を示して居るではないか。夫が上べから見た團集力のやうに考へられるものは、實は團集力ではない、團集が共通に持つ合理性の正義力なのである。單に烏合の團集の集合力ならば、資本家は警察に頼んでもそれに對抗される。唯だ彼等の主張する正義が、無知極まる資本家にも何とも楯のつきやうのない合理的なものである爲に、朝に一城、夕に一壘と、なし崩しに陷落されつゝある譯なのである。何と云つても個性と合理性の力である。正義を主張しやうとする人は何人も團體などの力を借らずに、個人と云ふ眞裸になつて來い、それで個々が立派なものでなければ本當の文化の世界は開けない。

自分は甞に分類病の傾向を指摘した。實在を分類して自他の交渉を知覺することは、細かいほど好いに相違はない。何故か

たれば、自他の差別をより細かく分裂さすることによつて、より精密に自他の本質を知ることが出來るからである。唯だ誤まつた自我主義者は、その差別によつて益す自己を分離するのに對して、私はこの差別相をよりよく知ることによつて、その差別を極微にまで取除く機緣とし、それによつて最終の人類的統一を計らうとする處に根本の差違がある。何となれば本當の自己の自由を尊重するものは、又た他人の自由を尊重し敬虔することを忘れるものではない。そこに人類の文化的榮濟が起る。ラッセルが西歐社會主義者の或る宣言を評して、彼等が自己の自由と生の享受に對する搾取者階級を絕滅しやうとすることは差支ない。けれども西歐の社會主義者が獲やうとするその利得は、西歐が共同で亞細亞と亞非利加を搾取しつゝあるその利得であるから、云ひ換へて見れば彼自身も亦たその專權と搾取の大組織の一部分なのだと指摘したのをどう解釋したものか。

だから世界文化の光輝を力調するものから見れば、我等が怨敵として平和の鬪ひを宣告すべきものは、決して無產階級が目の仇にして居る金權階級ばかりではない。それは國民の自由と權利を無視する政權者であり、又た人類の自由と享生をふみにじる軍國主義、帝國主義者でもなければならない。凡ては一つの輪に貫かれた箇々の環である。一つを許して一つをゆるさぬと云へる性質のものではない。凡てに人類と人類との結合の爲に絕滅すべきものでなければならない。すでに自由と平等の世界の置きかへであり、その解放の精神の發現である限り、唯だ一つの階級の專權を許すわけはない。尤も一階級の專權と云ふことは、其の言葉が已に意義をなさぬもので、一階級にぬがて無階級ではあるけれども、或は五六種の中の一階級と云ふことであらうか――それは何にしても專權その言葉は本當の文化の世界には意味のない言葉である。もし假りにプロレタリアの專權と言ふ語彙がありとすれば、それはプロレタリアの金權階級に對する生存の要求と反抗の聲と形が最も現はに出て居ると言ふ程度の表現であらう。プロレタリアの其の反抗は、其內容がプロレタリヤ階級の此世に存在することを不合理として、其地位の改造を望むものである限り、そしてそれが早晚達成される合理性なものである以上は、それは又た當然剎那的な性質を帶びた階級で、彼等の希求が達せられた曉には、プロレタリヤそのものは名稱の上からも、本質の上からも、當然消滅すべきものである、そんな性質なものが、當來にも將來にも何の權利を以て強制を專らにすることが出來やう。文化の理想の世界では凡ての人に平等な自由があり、平等な生の享受がある。何人も唯だ正當な生存權を主張し得るだけだ。

無産階級や、勞働者階級がこれまでいはれのない壓制と暴虐の下に忍從して居たことは事實である。我等がどんな苦痛の下にも虐げられた他の人類と共に、これ等の階級の自由な解放につとめると共に、あらゆる非合理な特權階級を破滅することは我等に投けられた義務だ。けれども猶ほ單に限られた一二の階級に、それ以上、平等以上に特種な生存權を要求されることは忍ばれない。もしその要求の實據が自分等の生活が、他人の爲の犧牲であり、それだけ他人以上の苦痛を持つ性質のものだからと云ふならば、我等は先づ平等の人類の名の下に、そうした苦痛を負ふやうな階級を全く取除けることを考へやうではないか。たとへば自分達の費消しない生産の爲に、人生の大半を苦痛の中にすりへらして、尚も創造の喜びを持ち得ない勞働者階級などと云ふものを存在させない爲に。われ〳〵がトルストイの高調した汎勞働を力唱するのも其一つである。

また我等の理想文化の生活は、出來るだけ少ない犧牲によつて、達成するとを考へると共に、凡てを強制によらずに合理性によつて、内から開展する人道的な魂に依賴しやうとする。或ひはそれを夢のやうなユウトピヤだと云はう。けれども未だ實現されてない理想であることから云へば、社會主義の社會改造だつて、どうなるかわからない目先のつかない一つのユウトピヤではないか。少なくとも我等はそれを獸類本能の爭鬪性に依賴せずに、人間心理のもつ文化の開展に依賴するところに、より多くの妥當性がある事を信ずる。

その所謂文化の機關は何であるか。ウエルスもラッセルも唯一に教育に力點を置いて居る。教育――現代の資本主義的教育でない――改造された文化的教育はもとより第一だ。けれども現代の日本に於ては、そうした機運を促がす所の新聞雜誌の自啓を望むことが何よりも緊急事だ。

勞働運動の傍觀者として

赤木桁平

いはゆる勞資の葛藤に於いて、勞働者側さへ凱歌を擧げると、直ちに完全な社會改造が出來上るかの如くお太鼓を敲いてゐた新聞紙の中にも、最近に至つては、勞働運動が漸く惡化し始めたとか、漸く左傾し始めたとかいふものが現れて來た。現に、神戸市に勃發した三菱、川崎兩工場の勞働爭議が、果して如何なる方向に對つて展開しつつあつたかといふことを看過しないものにとつては、いはゆる勞資の葛藤も、今日に於いては、既に我々の考へ得る正しい爭議の限界から五歩も十歩も外に踏み出してゐることを認めざるをえまい。

數日前、神戸市に在住する友人に逢つた時、彼は云つた。

『近頃の神戸はたまらない。まるで革命でも起つたやうな騷ぎだ。散歩にでも出ると、到るところに騎馬巡査がゐる。職工團體がゐる。物に脅へたやうな市民の群れがゐる。朝晩配達される新聞紙の記事を見ると、世界は階級戰爭で充滿してゐて、いつバスチールの獄が破壞されるかも知れんと云はんばかりの書き振りだ』

彼は又云つた。

『僕等は一二年前まで成金諸君の橫暴と野卑とに對して眉を顰めて來たが、やつとのことで彼等が閉息すると、今度は勞働者諸君の狂噪なる行進曲と、激越なる進軍喇叭とで惱まされなければならない。全體此先きはどうなるのかと思ふと、僕のやうに社會と沒交涉なものでも、一種の不安を感じないわけにゆかない』

かう云つた彼は、實際心細さうな顏をしてゐた。自己にのみ許された世界を守つて慎ましく生活してゐる善良な一市民も、さすがに彼の身邊を容赦もなく吹き捲くる烈風に對しては晏如たりえないらしい。併し、かういふ不安に脅されてゐるものは、獨り自分の友人ばかりではない。口に出して云ふか云はないかの相違はあるが、今日眼のあたりに親しく勞働爭議の實際を觀てゐるものは、大底此種の危惧に襲はれんものはあるまいと思ふ。

今日の資本家が如何に剛慾であるか、如何に分らずやの集團であるか、それは勞働者乃至勞働運動指導者等の雄辯な宣傳を待つまでもなく分り切つた事實である。今日の產業組織に至大な缺陷が存するといふことも、恐らくは否みえないであらう。今日の資本家に對して餘りに非力である勞働者等が、自己の所得の擴大と、自己の地位の向上とを計らうとするのも止むをえまい。此意味に於いて、自分は必ずしも勞働運動の意義を否定しやうとは思はぬ。併し、その本然の性質からして、勞働運動

はあくまで資本家に對して行はれるものであり、資本家の資本主義に對する抗議として行はれるものでけなればならない。若し、勞働者の勞働運動、此範圍を脱して、その標的を一般の社會又は國家の方向に轉換するやうなことがあると、それは最早云ふところの勞働運動ではなく、勞働運動の假面を被つた社會革命運動である。

今日の勞働運動の成行を見ると、勞働者は自己の勁敵なる資本家を倒すために、兩者の抗爭に對して何等の關係をも持たない第三者の社會的生活を脅すことに依つて、自己の目的を達しようとする傾向がある。勞働者が單に資本家に對抗するためには、彼等は彼等に許された武器の多くを持つてゐる筈である。同盟罷業もよからう、サボタージュもよからう、これらの武器に依つて彼等が直接に資本家にぶつつかつて行くならば、我々は不祥なる爭議の結果が、出來るだけ正しい結果に向つて落付くことを祈りながら傍觀してゐてもいい。併し、實際に於ける彼等の作戰は、これらの武器を使用して資本家の鐵壁に當らうとする範圍の内に留まつてゐない。

今日頻々として行はれる勞働者の示威行列は果して何を意味するか。幾萬の群衆が矯激なる勞働歌と、無氣味な淺黄服と、物々しい旗挿物とを以て市民の街衢を練り廻ることは果して何を意味するか。

露骨に云ふと、勞働者の作戰は、一般市民を脅すことに依つて彼等の注意を喚起し、彼等の聲に依つて自己の正面の敵なる資本家の門を開かせようとするのである。いはゞ、勞働者の作戰は、お人好しの一般市民を彈丸とし、胸壁として、資本家の牙營に迫らうとするものだと云つてもいい。直接に資本家の牙營に迫つて撃退せられた勞働者が、今までの歩向を一轉して一般市民の方に策戰の眼を向ける時、狡猾なる資本家等は、自己に降りかかつた責任を他に轉嫁した積りで空嘯いてゐる。これに依つて受ける一般市民の迷惑と損害とは計り知られない。況んや騎馬巡査が飛び出し、軍隊が出動するに至つては、そのために喜ぶゝのは勞資の何れかであつて、罪なき第三者は、只管恐怖と不安とに顫へる外はないのである。

一二年前に初めて勞働爭議が起つた頃には、その主張も比較的穩當であつたし、その運動方法も決して過激であるとは云へなかつた。それが何時となく惡化の傾向を帶びて來た。殊に、最近大阪市に起つた住友、藤永田の兩爭議に於いては、その主張も、その運動方法も俄に左傾して、全く『騒擾』とも云つて

いい態様を呈した。それが兎に角曲りなりに解決が着くと、今度は神戸市に於いて三菱、川崎の兩爭議が起つた。しかも此等議に於いては、勞働者側が所謂工場管理の如き極端なる主張を以て資本家側に對抗しようとするに至つた。その結果は軍隊の出動となり、勞働者と警察官との衝突となつた。――今日までの經過から云ふと、我國の勞働運動は日を趁うて社會革命の色彩を濃厚にしてゆく形跡があると云つてもいい。かうなつて來ると、勞働爭議は最早資本家と勞働者との間の問題ではない。勞働者と國家との間の問題である。

我國の勞働運動の如きも、矢張勞働者自身の自覺と發奮とによつて起つたものではない。その指導者は自ら勞働者の中に飛び込んで行つたインテリゲンチアであるから、今日の勞働運動に掌る勞働者等が、正當に自己の干與する勞働運動の意義を理解し、その勞働運動の今將に踏み込まうとしてゐる世界が果して如何なるものであるかを承知してゐるかどうかは怪しい。動もすると、彼等は階級闘爭を口にし産業革命を口にする。併し、これらの言葉の背後には果して如何なる思想が双を磨いでゐるかに對しても、又彼等は、恐らく無關心であるかも知れない。彼等は唯だ自己のイゴイスチックな要求を貫徹するために逆せ上つてゐる。彼等は盲目である。彼等は只管突進しようとする。その向うには斷崖があらうが、絕壁があらうが、それは彼等の顧るところでない。あらゆる群衆運動は、如何に過激であらうと、それが理路によつて導かれてゐる間はまだいい。併し、それが一度び衝動に依つて導かれるやうになると、その結果は破滅にまで進まなければ止まない。彼自身が破滅するか、彼自身及び彼の敵が共に破滅するか、何れにしても、そこには恐ろしい深淵が口を開いて待つてゐる。

勞働者が自己の生活を確立するために、正しい要求を提げ、正しい方法に依つて奮闘することは是認せざるをえない。併し彼等が自己の生活を確立するためには、自己以外のものの生活を脅してもいいといふ道理はない。我々の理解する社會的正義は、獨り勞働者をして飢餓に泣かしめることを許さないとともに、獨り勞働者をして專制權を握らしめることをも許さない。すべてのものが幸福であるためには、獨り勞働者のみが貧乏であることを忌むとともに、獨り勞働者のみが號令者の地位に立つことをも忌む。ある一つの定限された階級のみが特に過大なる生存權を享有することは不合理であり、人間生活の共通的理想に背反する點に於いては、その定限された階級が、假令資本家であらうと、假令勞働者であらうと、その害毒に至つては全

く等しい。從つて、自分は資本家の專制を惡むこと敢えて勞働者に劣らないが、資本家によつて明け渡された城郭に勞働者が入れ代つて立籠ることも御免を蒙りたいと云ふ外はない。

資本家の專制がどんなものであるかといふことは、今日の米國を見ると大低想像することが出來る。それと同樣に、勞働者の專制がどんなものであるかといふことは、今日の勞農露西亞を觀ると略ぼ見當が付く。若し、我々が何れかの專制に屈從しなければならない羽目に陷つたとすれば、自分は露西亞の暴虐と悲慘とを選ぶよりも、寧ろ米國の俗惡と醜汚とを選ぶであらう。ある種の教養と氣質とを有するものにとつては、米國及び米國人の骨髓にまで滲み込んでゐる猶太的特質は堪へがたいものであるに相違ないが、そこには尙ほより高き文化と理想とを培ふべき餘地が皆無ではない。そこには又靜かなる心と、虔ましき魂とを收容し得る休息の雰圍氣が皆無ではない。傷きたる靈魂と肉體とを容赦もなく泥濘の中に引摺り廻すやうな勞農露西亞の專制は、我々にとつては唯だ戰慄あるのみである。

今日の勞農露西亞が、全權をプロレタリアトの手に收め、主權の發動を純然たる專制の形式に執つてゐることは云ふまでもない。その結果が如何に慘憺たるものであるかは、假令過激派の同情者でも否定しえないであらう。正義と自由との名に依つて多くの罪惡が遂行せられた點から云ふと、過激派露西亞は到底佛蘭西革命の比ではあるまい。ロマノフ王朝の歷史は、極端なる貴族の專制が遂に適歸すべき地點を教へたが、ロマノフ王朝に代つた過激派露西亞の歷史は、極端な民主思想が遂に到達すべき境地を示した。此二つの貴重なる結論を引き出すためには、我々は一億五千萬の無辜なる露西亞の民衆が生きながら實驗の熔鑛爐の中に投げ込まれたことを忘れてはならない。此貴重なる實驗の結果を眼前にしながら、猶ほ且つ同一の道に民衆を押し遣らんとするものがあれば、それは民衆の敵である。いはゆる勞働運動指導者等の景氣よき煽動の前に立つて熱血の湧き立つのを覺える勞働者等には、果してこれだけの反省と顧慮とがあるだらうか。

共同生活の樣式が如何に改められようと、すべての民衆が不幸であるのに、唯一部の民衆のみが幸福であるといふことはありえない。農民も、學者も、商人も、官吏も、藝術家も不幸であるのに、唯だ獨り勞働者のみが幸福であるといふやうな社會は想像しえられない。今日の露西亞はどうであるか。そこには殆んど總てのものが不幸である。彼等は食ふものなく、着るも

のもない。この慘狀の中にあつて、國家の主權を掌握してゐる勞働者等は果して幸福であると感じてゐるだらうか。勞働者等が幸福であるためには、勞働者以外のものが幸福でなければならない。併し、唯一者に依つて成される專制は、唯一者以外のものを不幸にすることによつて、唯一者自身をも不幸にする虞れはないだらうか。革命は總てのものを酷遇する。革命は少數者の手にあることのために純潔を保つてゐた眞理を一變して虛僞とする。勞働者の手に依つて成された革命のみが、獨り此鐵則の適用から免れえようとは思はれない。

社會主義者は揚言して吾々に強課されてゐる生活樣式の間に存する矛盾を撤することが此等の理想であるといふ。佛蘭西のサンヂカリストは、資本主義が勞働者を壓迫するために用ゐる最も有力な武器は國家であるとさへ云ふ。我々と雖も、我々の社會がより高き文化を創造し、より平安なる狀態に於いて自由と平和とを樂しむためには、決して滿足なものであるとは思はない。すべての民衆が各々衣食に飽き、各々藝術を樂しみ、各各愛によつて接觸するためには、さらによりよき世界を想像する。併し、我々の冷かなる理性は、果して絕對に民衆に強課された生活樣式の間に存する矛盾なき世界の存在を認め得るであらうか。猶ほ又、國家を解體した境地に商人に都合よき世界が出來上ると考へられるであらうか。多くの宗敎的、政治的理想は、今日までに多くの夢想を描き出した。併し、それらの夢想は、白日の映射の下に曝された時一として幻滅しなかつたものはない。夢想は人類の想念をより高い世界にまで昂揚する。併し、現實は彼等の足が矢張地上に立つてゐることを敎へなければ止まない。

今日呼號される社會改造の原理が都合よく適用されて、假に生產と分配との釣合ひのとれた世界なるものが出來上つたとする。さうすると、貧困と缺乏とは影を收め、物質的には、一人の飢餓に泣くものもなく、一人の缺乏を訴へるものもないユートピアが現出するかも知れない。併し憚りなく自分の想像を述べると、さうしたユートピアなるものは、恐らく怠惰と無氣力とに充ちた退屈至極な世界であらう。金持のノラクラ息子の如く、アフリカの野蠻人の如く、食ふに困らない人間には、たゞ衝動の生活のみがあつて衝動の上に挺んずるより高い生活はありえない。殊に、人間性の奧深く潛んでゐる『惡』の根元が芟り除られない限りは、怠惰と無氣力とは相應じて人間を罪の深淵に陷れ、そこには間斷なき鬪爭と、反目と、憎惡との場面が展開されるやうなことはないか。複雜なる人間生活の規矩を單な

る物質によつて計量しようとするものと我々との間には、かなりの距離があることを痛感せざるをえない。

神戸市に起つた最近の勞働運動の指揮者の一人たる賀川豐彦氏は、往訪の記者に語つて、今度の勞働爭議で全職工が明かに階級意識を自覺したと云ひ、十二日に發表された爭議團の宣言書には、吾々は益々社會改良の戰志を強めたとも云つてゐる。併し、彼等はよもや勞働者の悲慘と貧乏とを救ふために資本家の息の根をとめ、現在の社會組織を顚覆し、進んで私有財產制度の障壁を取り除くまで戰志を持續すると云ふわけでもあるまい。

勞働者が自己の利益のみに着目して資本家との對抗戰に沒頭するやうになると、一般民衆の生活は常にそれによつて脅かされなければならない。生產機關が停止すると、その影響を最も強く受けるものは資本家であるといふよりも、寧ろ一般民衆である場合の方が多い。勿論、資本家も不利益な影響を受けるには相違ないが、それは未だ彼等の生活を脅しはしない。產業の破滅によつて蒙る一般民衆の損害は、直接に生活上の問題となつて來る。一般民衆が生活上の脅威を受けるやうになると、勞働者自身と雖も其影響の外に立つことは出來まい。此意味に於いて、勞働者の非常識なる作戰は、結局彼等の刄を以て彼等自身を誡ることになりはしないか。

如何に最負眼に見ても、今日の勞働運動は、それが民衆相互の憎惡を挑發する點に於いて、社會の統制力を脅威する點に於いて、尙ほ又、一般民衆に反逆的衝動を與へる點に於いて、極めて憂ふべき狀態にあることを疑ひ得る餘地はない。從つて、今後と雖も資本家の頑冥なる對抗と、官憲の無謀なる干涉とが此上に加へられたならば、此憂ふべき狀態は愈々險惡の度を增してゆくであらう。

今度の神戶市の勞働爭議に於いて、勞働者側が工場管理を宣言すると、此宣言によつて泡を食つた有吉縣知事は、遽に軍隊の出動を策して秩序の維持を試みた。如何に事情が急迫してゐたとは云へ、此軍隊の出動ほど愚拙にして危險なるものはない。幸ひに勞働者側の自重によつて事なきをえたが、若し一步を誤ると、そこには到底收拾しがたいやうな混亂狀態が湧き上つたかも知れない。多數の地方官中比較的聰明を以て稱せられる有吉知事にして猶ほ此間の機微を察し得なかつたとすれば、凡々たる今日の地方官等に此種の重大問題を委せることは非常に不安心ではあるまいか。

我々の軍隊は、我々の國家と國民とが救ふべからざる危險に曝された時に於いてのみ、我々の國家と國民との名に於いて其活動を期待することが出來る。今後どうなつてゆくかは分らないが、どれだけ平調を失してゐるにしても、今日の勞働運動はまだ軍隊の力を待たなければならないほど有力なものでない。工場管理の主張の如きは不穩當ではあるが、此不穩當な主張を支持する勞働者の過激なる手段を防止するためには、他に多くの方法があるではないか。我々の軍隊と、我々の軍隊の同胞たる勞働者とを暴力によつて對峙せしめるやうな狀況の下に置くことは、我々の軍隊の使命と職能を辱めることであり、我々の軍隊に對して怖るべき罪惡を加へることである。殊に人類を突如として災厄の中に陥れた社會革命のすべてが、如何なる經過を以て發展したかといふことを考へると、軍隊の出動などといふことは、決して輕卒に行はれるべきものではない。シベリアに送つた無名の師は召還すれば事濟みだが、勞働者に向つて拔かれた軍隊のサーベルは、まかり間違へば時代と民衆とを鮮血を以て彩らなければ止まないかも知れぬ。

（一〇、八、一三稿）

趣味の低下を悲む

上司小劍

プロレタリアトとか、インテリゲンチヤとかいふやうなものゝいろ〱對立した社會を忌はしく思ふ。インテリゲンチヤといふのは、少し明瞭を缺いてゐて、其の範圍も境界もハツキリしてゐないが、プロレタリアトは、既に儼然として、八方を睥睨してゐる。支那春秋戰國時代の秦といふやうな位置に彼等はある。やがて六國を滅し、天下は秦の天下となつたやうに、彼等の天下となつて、博浪沙の一擊はまた彼等の上に加へられるかも知れない。

私の夢想する世の中は、プロレタリアトもなければ、インテリゲンチヤもなく、無論資本家もなければ、富豪もない世の中

である。總べての人が皆プロレタリアトで、インテリゲンチャで、資本家で富豪（勿論現在の資本家や富豪共のまゝのものではない）でありたい世の中である。ほんたうに平和な幸福な世の中である。身體の達者な人が總べて皆働けば、一日三時間か四時間の勞働で、實生活に要する物資が有り餘るほど得られるといふことに、私は疑念を挿まない。朝起きて顏を洗ふといふこと、或は夕方に入浴するといふこと、同じやうに、萬人が皆一日三時間ぐらゐの勞働を必ず人手に委ねないで、自ら手を下してやるといふやうになれば、——即ち洗面や入浴はどんな惰け者でも必ず自らやる、病人か嬰兒でない限り、他人に自分の顏や身體を洗つてもらふことがないといふやうに——勞働も苦痛でなくて、快樂になることは、洗面や入浴が一種の快樂であるのと同じであらう。多少の好き嫌ひはあるにしても、甚だしく洗面や入浴を嫌ふものがないやうに、さうひどく勞働を厭ふものはなくなるにきまつてゐる。さうして大部分の人々は洗面や入浴を喜ぶやうに、勞働を喜ぶに至るは必然であらう。今日のやうに勞働が苦痛になつてゐて、——實際また苦痛で嫌惡すべき勞働もある。しかしそれ等は將來科學の進歩と機械の發明とによつて、悉皆除き去られ、勞働と言へば藥品や機械の番をしてゐるくらゐのものだといふまでに到達しなければならぬ。これは決してユウトピアを說くのでなく、たとへば今日既に工事に着手してゐる東京市の大下水が成就すれば、糞尿汲取りといふ厭ふべき勞働がなくなるのであつて、これに似た傾向は方々に其の實例を見られる。——要するに私は、總べての人が皆働いて、其のうちで藝術の才分のあるものは藝術に向ふし、學問の好きなものは深い學問に志ざすし、其の他いろ〳〵の分業は其の人々の天禀に應じてやることにし、實生活に要する物資の供給に就いては萬人が皆勞働し、欲しいと思ふもの、必要なだけのものは、何時でも手に入れ、他人の幸福を自分の幸福とし、他人の苦痛を自分の苦痛とする、純正な相互扶助の生活をして、專制とか壓迫とかいふやうな文字を、いづれの方面からも、辭書から拔き去りたいのである。

以上は私の理想である。現在のやうに人間の心が險惡に、且つさもしくなつた時代にあつては、空想とし夢想として、笑はれるか知れないが、しかし私は人類がこの地球上に生息し得る間には、いつしかさうした美しい時代に到達するものだと信じてゐる。

それはそれとして、今日の現狀で、所謂プロレタリアトの專制的傾向に對するインテリゲンチャの感想といふやうなものを述べてみるならば、一番に堪へ得られないのは、趣味の低下と

いふことである。近所の蓄音機の源氏節、浪花節、八木節が、私の書齋へまで響いて來て、毎日毎夜惱まされるだけでも、實に辟易する。それがキイ〳〵聲の、音波の粗いものだから、殊にたまらない。さういふ時私は森の上の方の或る上流の家の側へ行つて、ヴイクトロラの十六號が發するカルウソオやマツコルマツクの獨唱のレコードの響きに耳を澄ます。

折角高く進んだ趣味をば、わざ〳〵低く引きおろして、それを民衆化だと喜ぶのは愚の至りだ。八木節をカルウソオに引き上げるといふことによつて、民衆化をやつて貰ひたい。立派なテノオルを卑俗な俚謠に引き下げてはいけない。下品なものを跋扈させ、上品なものを追ひまくつて、それで勝ち誇つた顏をするのは、人類の幸福でない。汽車や電車の階級を廢することはもとより贊成だが、一二等を廢して三等ばかりにするといふのなら反對だ。三等を廢し、二等を廢し、總べて一等にするといふ風の無階級にやつて貰ひたい。さうして現在の三等賃金或は無賃で、現在の一等客が享くる安樂を總べての乘客に與へてこそ、ほんたうの進歩だ、ほんたうの民衆化だ。民衆といふ字の上には、必ず俗惡卑近低級といふ字が附いてゐるやうに思つてはならぬ。

人間が若し今日のやうな了簡のまゝでやつて行くならば、いつの世にも必ず誰れかゞ誰れかの專制を受けなければならぬ。プロレタリアトの專制は、貴族富豪のそれよりも更らに厭やな下品なものかも知れない。安蓄音機の八木節が、其の前觸れをしてゐるやうな氣がする。八木節はおそろしい。

——八月二十二日——

直譯的態度を排す

永井柳太郎

プロレタリアの階級專制に對するインテリゲンツイアの態度を話せと云ふ事であるが、我國に於てはインテリゲンツイア

一

大部分がプロレタリア其物である。元來露西亜ではインテリゲンツイアと云ふ事が、學者とか、文學者とか、藝術家とか、教育家とか、新聞雜誌記者とか、醫者とか、中等社會を組織する教養ある人々を意味したのであるが、今日歐米諸國ではもつと廣義に解して「インテレクチュアルクラス」即ち智識階級と同じに使用して居る。所で、我國の智識階級と云ふ者を見ると、大部分は中等社會を組織して居る人々には違ひないが、經濟上の地位は勞働者と多く異なつて居ない。即ち彼等の多くは勤勞所得に生きて居るので財産と稱し得べきものは殆んど無く、生活の不安定なる事は筋肉勞働者と同じである。だから我國のインテリゲンツイアの大部分は事實に於てプロレタリア其物に屬する。否、我國のみでなく何處の國でも自由競爭のまゝに放任されたる經濟社會は、自然に有産階級と無産階級との二大階級に分裂して、中等階級とも云ふべきものがなくなつて行く傾向がある。

(二)

露西亜でも十九世紀の中頃まで、智識階級と云へば大部分は貴族、及び良家の子弟であつた。譬へば無政府主義の父母とも云ふべきバクーニンや、クロポトキンにしても、無抵抗主義の主唱者たるトルストイにしても、又西歐文化主義の宣傳者たりしヘルツエンにしても皆貴族の出身である。文壇を見ても亦其通りで、プーシキンは其容貌にも現れた通り、多少ネグロの血を交へて居たけれども、露西亜の古い貴族であつた。ツルゲーネフの父は軍人であつたのみならず、大地主で多數の農奴を使用して居た。ゴーゴルも貴族ではないが貧民の兒でもなかつた。ドストエフスキーも亦貧乏ではあつたが貴族の出身である。千八百二十五年十二月ニコラス一世の即位に際して勃發したる有名なる十二月黨の革命の如きも、其指導者は殆んど總て貴族及び良家の子弟であつた。斯くの如く十九世紀の前半に於ける露西亜の智識階級は、多く貴族及び良家の人々より成立したのであるが、十九世紀の後半から所謂智識階級の内容が著しく變化して貴族よりは寧ろ貧民の子弟が増えた。

さうした變化の起つたのは主として資本主義經濟の發達に伴ひ、資本家階級が貴族階級以上に有力なものとなつて富の分配が益々不平均となり、國民生活の根柢が變化したためと、クリミヤ戰爭の結果科學が勃興し、自由思想が普及して、多數の青年が爭ふて大學教育を受くるに至つた爲とであるらしい。モスコー大學の如きは從來貴族及び官吏の子弟が大部分を占めたものであるが、千九百年には貴族及び官吏の子弟は學生總數の四

對九分九厘に減じ、千九百九年に至りて更にそれが三割七分五厘に落ちた。之れに反して百姓や町人の子弟が著しく増加したのであるが、而も其大多數は貧乏であつた。露西亞の大學生が如何に貧乏であるかと云ふ事はグレゴール・アレキシンスキーの「近代露西亞」を見ても分る。彼は斯う云つて居る。

余は世界に於て露西亞の學生以上に貧乏なる學生あるを想像する能はぬ。彼等の學資は平均毎月五十志にも達しない。彼等の中には困窮と饑餓とに堪へずして自殺する者さへ少からずと聞くが、斯くの如き狀態に在る露西亞の學生が社會黨の議論に誘惑せらるゝを拒　能はざるは當然と云ふべきである。

即ち露西亞の大學生の多數はインテレクチユアルプロレタリア、——智識的無產者である。此結果今や露西亞の智識階級は如何なる他の國々の智識階級よりも資本主義に敵意を有し、如何なる　の國々の智識階級よりも無產者に共鳴するのであるが、併し何れの國でも資本主義の弊害が極端に現はれて、智識階級が無產者と同じやうに生活の安定を失ふた所では、多少の程度に於て露西亞に於て見ると同じ傾向の現はるゝ事を避ける事は出來まい。

(三)

我國のインテリゲンツイアは其大部分がプロレタリアに屬する事に於て露國のそれに似た所がある。而して其多數が、今やプロレタリアに屬する他の人々と同じやうに生活の安定を失ひ今や各個人の生存權の確立を目的とする何等かの運動の必要を感ずるに至たと云ふ事は頗る注意すべき事實である。併し同じプロレタリアに屬するとしても、智識階級に屬する者は他の智識階級に屬せさ　人々と如何なる程度まで共運動を共にし得べきかは疑問であると思ふ。顧みると明治維新は主として時勢に明かなる藩主と最下級の足輕との事業であつた。中間の教養ある武士の大部分は尊王倒幕の大義は說たけれども、其大義の實現を目的とする運動には多く參加しては居なかつた。今日プロレタリアに屬する人々が生活の安定を得んとして諸種の運動を起すを見ても、矢張り其　動の中心勢力となるものは最下級の勞働者であつて、智識階級の人々は多くは唯議論をするに過ぎぬ。が、併し之れを最下級の勞働者の本能のまゝの突進に放任して置くことは、勞働者自身にとつても、又社會全體にとつても、時に不幸なる結果を齎す危險がある。有產階級對無產階級の生存競爭をさうした悲劇に陷らしめぬやう、自己の有する總ての智識を提げて、社會改造の有ゆる分野に立つて自ら率先して奮鬪する所に智識階級の本分があると思ふ。

露西亞の智識階級の勞働者に對する態度は決して賢明ではなかつた。モーリス・ベーリングは「露西亞人」と云ふ本の中で極めて適切に露西亞の智識階級が勞働者の心理の觀察を誤まり、指導者の任務を果さゞりし事を批評して居る。其批評に依ると、露西亞の智識階級が露西亞の社會的危機に處して社會奉仕の義務を全うする事の出來なかつた重大なる原因は次の二つに歸するやうだ。

第一に、彼等は只西歐の著書を直譯し、其思想を丸呑みにして、それが露西亞の社會の現實なる要求に適するや否やと云ふ事を考へなかつた。彼等は露西亞の社會には露西亞の社會固有の信念あり、思想あり、生活あり、而してそれは露西亞の社會に獨創的のものである事を知らなかつた。彼等は西歐より輸入したる警句を以て、一時間に合せの無神論を以て、受け賣りの社會主義を以て、獨斷的の唯物論を以て、生噛みの哲學論を以て、新奇の議論を競ひ多數の小冊子を人民に振り撒いたが、恁んな態度は毫も勞働者の生活を安んじ得なかつたのみならず、其思想は益ゝ空理空論に走り、愈ゝ實生活を離れ、反つて彼等と人民との間に横はる溝渠をして愈々大ならしめた。

第二に、彼等は口にデモクラシイを唱へても、心は依然として貴族的で、勞働者や、其他の人民に臨む態度は恰も賢者の愚者に臨むが如きものがあつた。彼等は資本家が勞働者の膏血を壓搾して其慾情を充すの資を得るの悖德を罵つたけれども、彼等自身は勞働者の指導に名を藉つて自己の浮身を窶す事が少くなかつた。彼等は營々として勞働者と共に苦役し、又孜々として勞働者を助けて戰ふよりは、街頭に立つて只「民衆の爲に」を叫び、又「公共の爲めに」と大言壯語する事を樂みとした。斯くして露西亞のインテリゲンツイアは智育過重、德育不足の弊に陷り、自ら放恣亂行の中に其信用を失墜した。

ベーリングは以上の事實を以て露西亞のインテリゲンツイアが、露西亞の改革運動の中心勢力として果すべき任務を果し得なかつた主要なる原因であると云つて居るが、此露西亞のインテリゲンツイアに對する非難は今日の我國に於けるインテリゲンツイアに對し、或程度まで其儘適用する事が出來るやうに思はれる。我國のインテリゲンツイアも亦露西亞のそれと同じ過に陷りつゝあるのではあるまいか。

（四）

我國のプロレタリアの大多數は資本主義に敵意を有する事は間違ないが、如何にして資本主義を倒すべきか、資本主義の倒れた時之れに代ふるに何を以てすべきかと云ふ事に就いて明確

なる意識を持つて居らぬ。プロレタリアの階級專制を叫ぶ聲も聞えるが、同時に又階級專制とは正反對にデモクラシイに共鳴する人も多い。同じ改造論者の中にも社會主義を理想とする者と、社會主義を否認する者とがあることも爭はれない。又社會主義を唱へる人々の間にも、國家社會主義とギルド社會主義との優劣に迷ふて居る者も少くない。否、斯う云ふ事を考るのは寧ろ少數で、斯う云ふ事の比較研究をする豫備智識さへ持たないで只五里霧中に迷ふて居る者が最も多數であらう。此思想界の混沌たる時に際し、プロレタリアの眞に行くべき道を示し、全社會の人々が共に兄弟姉妹として同じ生活の保障を得、同じ向上の自由を得、又同じく享樂の機會を得て、共に生き得る新社會の建設を考案し、其實現に協力する事に於て智識階級の大なる使命がある。

此頃何々主義と云ふ事が頻りに唱へられるけれども、主義に絕對的のものはない。民本主義と云ひ、社會主義と云ひ、ボルシエビズムと云ひ、サンヂカリズムと云ふが、私は其孰れも絕對の眞理であるとは思はない。絕對の眞理でない證據には現に其孰れの一つの主義も今日の社會を支配して居ない。苟も絕對の眞理なら世に行はれぬ道理はない。併し總ての主義は夫れぐ社會生活の基礎となるべき或程度の眞理を含んで居る。が、それと同時に總ての主義は又夫れぐ現實の社會生活に適用して、果して人類の幸福を意味するや否や疑はしむるべき或程度の缺陷を持つて居る。現在に於て總ての主義から、總ての人が眞理と承認し得る者を取り出し、夫れを出來る丈け現在の國家生活に實現せしめて行く事に於て、社會進化の最も安全にして又最も幸福なる道程が横はるのではないかとも考へる。

かうした思想の迷宮より吾等を眞の生命の泉に導き出してくれることが智識階級の責任だ。然し今の處我國の智識階級にさうした責任の自覺と、理解と、親切と、勇氣とがない。彼等の多くは無責任で、無理解で、不親切で、且つ卑怯である。

覺え書き

本間久雄

知識階級といふ言葉ほど曖昧なものはない。資産階級と無産階級といふ二階級は、その利害關係において、その生活樣式において截然と區別され又相互に明確な對照をなしてゐるが、知識階級はその何れに對しても、明確な對照をなしてゐない。知識階級は無論資産階級にも又無産勞働階級にも屬してゐない。しかし又、その何れにも屬し得るといふ極めて不得要領な、曖昧な、日和見的な、中間階級である。

現代の社會運動は、資産階級に對する無産階級の挑戰を以てその根底とした一種の階級戰爭である。この階級戰爭において知識階級は果してどういふ立場にあるであらうか。

知識階級は、他の資産階級、勞働階級の持たない知識を持つてゐるが爲に、資産階級からも勞働階級からも相當に重ぜられ調法がられる。而し又同時に何其からも侮蔑され、排斥される。

資産階級が知識階級を重んじ、調法がるのは、自己の持たない知識を持つてゐる、知識階級を利用しようとするからである。知識階級の擁護によつて、自己階級の地位を安全にしようとするからである。又、資産階級が、知識階級を侮蔑するのは、知識階級が餘りに容易に與し易く、且つ知識階級が、資産階級の持つてゐる資産に熱々としてゐる、物欲しさうな有樣が餘りに見えすくからである。

無産勞働階級が知識階級を重んずるのは、資産階級のそれと同じ理由からであるが、これを侮蔑し時として排斥するのは知識階級の多くが、案外にも無産勞働階級からは、當然敵視の對照となつてゐる資産階級に阿諂し追從してゐる樣が見えすくからである。資産階級の知識階級侮蔑には憐憫が伴ひ、無産勞働階級のそれには明かに敵意と憎惡とが伴つてゐる。

現代の知識階級は、かくして、一方からは憐憫を以て、一方からは敵意を以て遇されてゐるといふ不可思議な不徹底な狀態にある。

○

資産階級と無産勞働者階級との階級戰爭において、後者が勝つた場合には、上の理由から、後者は、眞正面から知識階級に敵意を向けて來る。そしてあらゆる方面で日頃抱いてゐる憎惡を具體化しようと努める。そのよい例は最近のロシヤ革命その他の無産勞働階級勝利の實例に照しても明かである。

知識階級が無産勞働階級から憎惡と敵意とを受けるのには、繰り返して云ふが實際無理のない理由がある。

知識階級の人は、極めてその少數を除けば、思想において、感情において、全然ブルジョア階級の人である。彼等の望んでゐる生活の樣式はブルジョア階級の人のそれである。彼等は常にブルジョアに阿諂し、追隨し、その鼻息を窺ひ、その習得した知識を貨物にして、ブルジョアの走狗となり、たゞ〳〵ブルジヨアの歡心を買ふことに沒頭してゐる。それが現在の知識階級の實際の狀態である。

ブルジョアに對して明かに敵意を示してゐるプロレタリアが、その思想において感情において全然ブルジョア的な知識階級の大多數に憎惡と敵意とを持つのは寧ろ當然過ぎる自然の徑路である。

この點において知識階級がプロレタリアから排斥され、虐待されるのは、知識階級自らが招いだ必然の結果である。

しかし一方から云へばプロレタリアの運動は知識階級の點火と指導とによつて始めてその十全の意味を實現する。

知識階級の指導に待たないプロレタリアの運動は恐らくモッブの騷擾に類するものに終りはしまいか。近代におけるプロレタリアの運動の最も大なる收獲であるロシア革命の如きも、その指導者の第一人は、知識階級のレーニンであるといふ事實に徵してもこのことは明かであらう。

知識階級はプロレタリア運動の破壞的方面においてもその建設的方面においてもなくてかなはぬものである。假りにプロレタリアの運動を人間の身體に譬へれば、知識階級はその頭腦である。頭腦なき、たゞの手足の働きでは、決して文化的活動は出來ない。

だから、始めには、知識階級を排斥し、虐待したロシアのプタリアの運動にしても最近では、曾つて排斥し、虐待した知識階級の力を借りようとしてゐると傳へられる。實際勞農政府のさま〳〵の文化施設などを見ても、このことは極めて明かなことである。

○

しかし、これは知識階級のすべてについて云ひ得ることではない。前にも云つた通り、知識階級の大部分は、その思想にお、

て感情において全然ブルジョア階級に屬してゐる。かういふ大部分の知識階級者がプロレタリアの運動に取つて、邪魔にこそなれ、何等爲すなきものであるとは改めて云ふまでもない。プロレタリアの運動の點火者となり、指導者となる知識階級者は實に極めてその少數である。蓋し、この少數者は事實において明かに又、一種のプロレタリアである。そしてこの少數者あるがためにこそ、知識階級は現代の階級鬪爭において、重要な役目を演じつゝあるとも云ひ得る。

現代におけるプロレタリアのさま〴〵の運動の文化的價値を否定しない限りにおいて、現代の知識階級には有用のものと無用のものとが截然と分けられる。

ブルジョア的思想感情乃至氣分に生きる知識階級者は、プロレタリア運動の文化的價値を否定しないものからは、明かに無用な階級である。(尤もその文化的價値を否定するものから云へば、これは問題外である。)その反對にプロレタリヤの思想感情乃至氣分を持つてゐる知識階級者は明かに有用な、といふよりは、なくてかなはぬ最も必要な階級である。

わが國現代の知識階級者は今岐路に立つてゐる。以上の意味において無用の階級たることに甘んずるか、進んで有用の階級となるか、更に言葉を換えて云へばブルジョアとなるかプロレタリアとなるか――、この岐路に立つてゐる。

そしてその何れを採るべきかは、個々の知識階級者が個々において選ぶべき問題であること云ふまでもない。

愼重に熟慮すべき大問題

湯原元一

何んでも人の利害に訴へて、その欲望を滿足してやらうとさへすれば、その議論は必ず相當の味方を得て、勢力がつくものである。これは相手の教育の有無に拘はらず、容易く徹底するからである。昔民權運動の初まつた頃の國民一般の知識といつ

たら、とてもお話にならぬほど低いものであつた。民權論を説いて聽かせる人の學問でも、實に怪しいもので、今から考へば抱腹すべき珍談も少くはなかつた。ルーソウの民約論や、ミル、スペンサーなどの政治論だか、哲學論だかわからない抽象的の議論を一知半解して、向ふ見ずに突貫したのである。演説などでも行きつまると、オムレツ氏曰くだの、ビフテーキ氏曰くなどいつて、胡麻化してすんだものであつた。それでも民權運動は謂ゆる燎原の火の勢を以て國民の心を燃え立たして、遂に立憲政體の成立とまで漕ぎつけたのである。而してその主なる原因は言ふまでもなく、民權といふ大事な物を取つて、之を人民に與へてやらうといふ福音を宣傳したからである。

今日の勞働運動もこの當年の民權運動に似た所がある。職工などは概して無學である。勞働問題の眞意など正當に理解してゐるものは幾らもなからう。のみならずその中には今日の運動も餘り善くないことを自ら感じてゐるものもあらう。吾々のやうな傍觀者でさへ半ば同情をし、半ば反情してゐた位であるから、當の相手の資本家などは、さぞ無禮とも、小癪とも思つてゐるに相違あるまい。

併しこの感じは、社會の變動には必ず伴ふて起るものである。穢多が新平民になつた時は勿論、百姓風情のものが生意氣に民權論を唱へた時も、十分憤慨してゐた人も多かつた。處が何時の間にやらこの百姓が遂に天下を取つてしまつたのである。それで以て考へて見ると、今こそ職工身分でありながら、勝手なことをいふのを以ての外な事と思つてゐる人でも、こゝ數年の後には、已むを得ずその人格を認めて、相當の待遇をするに相違ない。

然らばこの勞働運動は、彼の民權運動のやうに、甘くその目的を達するであらうかといへば、それは當分容易く答へられない疑問である。尤もこの目的の意味の如何によつては、之を達すること必しも不可能ではない。例へば勞働組合法の成立位は早晩之を見ることが出來て、而して勞働條件なども餘程改善されるであらう。併し產業の管理權までも勞働者の手に收めるやうな事は、とても出來ない相談である。その理由は第一に勞働運動は勞働者だけの運動であつて、民權運動のやうに一般國民に關係あるものではないからである。如何に工業が盛んになつても職工の數は高の知れたものである。それで彼等のストライキでもサボタージュでも、その利目はたゞ資本家に對してあるだけで、一般國民には直接には何んの影響も與へない。のみならず一般國民は之が爲に迷惑をこそ感じても、少しも利益する所はない。たゞ平生から資本家の横暴を憎んで居るものなどが、そ

の心の裡でもつとやれ〳〵と思ふ位のことである。根が勞働者自身だけの利害問題であるから、其の外間に與へる影響の案外に少いのが當然である。

東京の電車のストライキでも、英國の鑛山のストライキでも、結局は鎭定してしまふといふのは、一般市民や、國民の後援がないからである。特に英國などでは國民の思想がなか〳〵進歩してゐる。それでいざとなると、ロイド・ジョウジ氏が例の奥の手を出して、この思慮ある國民に訴へるのである。するとジョウジ氏には平生感服してゐないものでも、道理は道理として賛成するから、大概の事は國家の迷惑にならんですむのである。話は少し脫線するが、吾々は平常この英國の國民の態度を羨んでゐる。こんな國民を有つてゐる國では、政治は餘程やり易いであらうと思ふ。訴へれば之に對して正當な判斷を與へてくれる國民があれば、政治家はたゞその所信を眞直ぐに行ひさへすればそれでよい。日本のやうに政治家が思想問題の解釋までして廻はらねばならないやうな處では、こんな正當な判斷を國民の方から期待することは出來ない。日本で政治の是非を輿論に訴へると稱する場合などを見ると、事實は多く自分の黨派に訴へるか、若くは官憲などに訴へるのである。中には餘程血迷へるものもあつて、最も慎まなければならない筋に向つてさへこの訴を敢てするものさへある。併しかうなるのは、元は吾吾が確かりしないからで、吾々は國民として甚だ以て恥ぢ入らねばならないことである。

それで、若し國民一般の思想が進歩してゐさへすれば、勞働運動などで、國家が根本から動搖するやうなことはない筈である。元來、資本家と勞働者とをはつきり區別し得ることは、少數極端な場合に於てのみなし得ることであつて、その他の普通の場合では、同時に資本家でもあり勞働者でもあることが多い。プロレタリアートなどいつても、案外に贅澤な生活をしてゐるものもある。であるから勞働者は皆無產階級だといふ前提の下に議論をすると、飛んだ誤つた結論に達することがある。現にこの一兩年は謂ゆる洋服細民に對して、仕事着の職工が大意張りに意張つたこともある。かういふ事情を考へて見ると、日本國內の貧乏人は悉くこの勞働運動に共鳴するものとも思へない。況して今日の工業は種々の缺點はあつても、ともかくこれで以て我が國の現狀が維持されてゐて、若しこれが衰へると、一般國民は忽ち非常な迷惑もし、又損害も受けるに極つてゐる。それで行く處まで行くと、我が國民でもたゞ勞働者にのみ共鳴はしない。資本家を警戒することはあつても資本その物までも呪ふやうなことはしまいと思ふ。事業は個人の所有であつても、そ

の存在の必要を感じて、且之を支持してゐるものは社會、卽ち一般國民である。この道理を考へて見ると、勞働運動も、それがこの事業までも破壞するといふ程度に達すると、そこには必らず國民が一齊に起つて、之を阻止することになるであらうと思ふ。

それで勞働運動も餘り圖に乘ると、國民の反感を招いて、遂に虻も取らず、蜂も取らないといふ馬鹿氣た始末になつてしまふ。資本勞力は何時までも互に提携すべきものといへば、陳腐の意見と笑ふ人もあらうが、陳腐でも何んでも眞理は何時でも眞理である。資本勞力は孰れが主たり、從たるべきかゞ問題でなくして、兩者は如何にして調和が出來るかゞ問題でなければならない。尤も調和には溫情主義もあり、權利主義もあれど、そんなことは今玆で論ずる限りではない。

要するに勞働運動は勞働者對資本家の問題であつて、直接には一般國民とは關係がない。その關係が生ずるのは、その破綻によつて一般國民の生活が幾分脅かされる場合である。それであるからこの運動は前に述べた民權運動のやうな一般的に大なる影響を國民に與へるものでないといはねばならぬ。然るに案外にも世間でも、又政府でもこの運動の成行を氣にするのは、これはこの運動に一種の思想問題が伴ふてゐるからである。西洋の例に考へて見ても、勞働者は大概社會主義者である。勞働者の希望を最もよく滿足さするものは、この社會主義であることは言ふまでもない。それでこの運動が一般化せられる場合がありとすれば、それは勞働運動としてゞはなく、社會主義の運動としてゞある。隨つて、今日の勞働運動もこの主義を標榜して立たない間は主義の鬪でない、たゞ一人の收入の問題に過ぎない。それが國民一般に關係を有つ問題になることは先づなからうと思ふ。

併し又翻つて考へると、幾回となく繰返される大小のストライキによつて受くる産業上の損害は、實に多大なものであるばかりでなく、之が爲に益々階級憎惡の念を強めて、將來に向つて社會主義の禍根を培養してゐる。それにも拘はらず何時も勞働者側の敗北でその終局を見るので、當局者も稍々樂觀してゐるやうであるが、實はこの樂觀ほど間違つてゐるものはない。勞働運動は常然に勞働者の敗北に終はるべきものである。……恰も內亂が謀反人の敗北で終はるやうに……然らずして萬一勞働者が勝利を得たとすれば彼等の望蜀の念は今日の産業狀態を根底から破壞しなければ已まないのである。……恰も謀反人が政府を乘取るやうに……況して事實に於ては謂ゆる敗北が敗北でないのである。十の希望が十までは充たされないでも、必ず幾分かは充たされてゐる。又卽座には充たされなくても、他日一

つて充たされてゐる。それで今日までも勞働運動は大體に於ては決して失敗してゐるのではない。之が爲に刑餘の人になつたものもあれども、その人は恰も國事犯人でもあるかのやうに、却つてその仲間からばかりでなく、世間からも寧ろ同情されてゐる。この場合のみは法律の制裁も制裁として效力を餘り見せてゐないのである。そこでこの運動をこのまゝに打棄て置くといふことは、國家の爲に非常な不利益である。勞働運動として見れば、大したこともあるまいが、油斷をするとそれが社會主義の運動に變化する。而してから變化さするには最も便宜が多い。私有財産の制度に嫌焉たる社會主義は、勞働者などに取つては、一種の福音である。高遠なる理想を抜きにして、直ちに吾は「汝を資本の壓迫から救はん爲に來れり」といはゞ、何人か之に反對を試みることを敢てしようぞ。勞働運動の恐るべきは、實にこの一點にあるのである。それでこの運動を國家の大事に至らしめまいと思へば、一般の國政に就いて餘程深い考慮を廻らさねばならぬと思ふ。今日のやうに直ぐ後から鴉にほちくられるやうな楯平が種蒔式の彌縫的政策ではいけないと思ふ。

プロレタリアートの專制的傾向に對する知識階級の感想

法學博士　吉野作造

ある工場での最近の出來事としてかういふ話を聞いた。勞働者が彼等と重役との間に立つて直接に自分達を支配する學校出の職工長とか工場長とかいふ連中の偏頗な處置と傲慢な態度とに長い間反感を有つて居つた。夫でも彼等の御機嫌を取らねば直ちに自分の利害に關係して來るので、表立つて鬱憤を霽らす事が出來ない、所へ局外から勞働者の爲めに盡くすといふ所謂

指導者が入つて來ていろ〳〵な事を教はる。其中に勞働運動は須らく勞働者自身の運動たるべく、なまなか知識階級などを頼りとしない方がいゝといふやうな事があつた。其中に段々新聞や雜誌などを見ると、勞働運動上の一要則として知識階級排斥といふ事がある。而して彼等は平素少しばかりの學問を鼻に掛けて威張り散らす職工長乃至工場長を面憎しと思つて居つた所から、排斥すべき知識階級とは是等を云ふのだと即斷して、大いに共鳴した。それから遠慮會釋なく衝突が起る。夫が原因でストライキもやる。ストライキをやるについては又局外者の助力が要るので、いろ〳〵の人に相談する。其處につけ入つて又いろ〳〵の人が入り込む。斯くして彼等の相談を受くる指導者にいろ〳〵の分子が混り、其處から自ら指導者各自の間に衝突が起る。そして一方が他方を排斥せんが爲めに、又知識階級の排斥といふ言葉で、勞働者から離間せんとするの策を講じた。初め勞働者は策士の思ふ通りに動かなかつた。知識階級といふ概念がまるで違つて居つたからである。けれども段々知識階級の意味が分つて來るに從つて、策士の陰謀の通り所謂指導者は排斥さるゝやうになつた。今では藥が利き過ぎて、さういふ陰謀を講じた者までが排斥され掛けて居る。蓋し勞働者は知識階級の排斥といふ事が勞働運動に取つて非常に大事だと云ふ事だけを教はつた。何ういふ譯で何ういふ種類の人を排斥すべきかといふ事を内面的に考へるといふ段まで至つて居ない。だから之が知識階級だと云へば何でも彼でも排斥する。勞働者と知識階級との關係は此處では未だ眞劍に考へられてない。

されぱと云つて、勞働者の頭の今日の程度は皆こんなものだと思ふなら誤りである。友愛會の理事松岡君のやうな秀れた人物も出て居る。今春の足尾の罷業には麻生君其他の非常な助力もあつたやうだが、活動の主たる方針計劃は凡て勞働者自身の創意に出たものであるとて、後で麻生君から坑夫自身の手に成つたいろ〳〵の書類を見せられて一驚を喫した。今日の勞働者に之れ丈けの組織的能力ありとは吾々も全く考へなかつた。之れには當の麻生君すら驚いて居つた。勞働者の知識が低いの、彼等に産業管理の能力が無いのと、高を括つて居る中に、勞働者はどん〳〵進歩して行く。何時までも子供だと思つて居る中に、親父の方がどん〳〵時勢に遲れて行くと云ふ形だ。神戸で星島君の調べた所によると、ストライキが起つてから二月の雜誌書籍の賣行きがバツタリ杜絶したので、大部分の購讀が勞働者によつてなされて居つた事が想像される、との事だ。

かういふ時代になれば知識階級は排斥されるまでもなく、

働運動指導者の地位を去るのは當然かも知れない。勞働運動と知識階級とが本來如何にあるべきかの問題は暫く別として、斯くの如き標語の唱へられる一面には、勞働者の智的發展といふ新形勢を反映して居る事だけは疑を容れない。

官憲は今尚ほ勞働階級の發達に盲目で、彼等は全く自ら動くの意志も能力も無いものと觀て、從つてストライキなどをやるのは二三矯激者流の煽動によると觀て居る。其結果は資本家の正當なる利益を破り、國家産業の振興を遮げ、又勞働者自身を無用に悲慘な境遇に陷れるとさへ放言して居る。とんでもない謬見だ。よしんば勞働運動が二三者の煽動によるとしても、其事自身は決して悪い事でもなければ、又勞働者の要求に無關係だと即斷すべきものでもない。知見の開けざる者は自ら要求すべきものを意識しない。意識しないからとて之を放任して行くのは、親切なる態度と云ふ事は出來ない。子供は自らの發達の爲めに何を要求すべきかを知らないが、親切な兩親は其要求を洞察して、或は食はせ或は着せる。時として子供は其世話を喜ばない事もあらう。それにも拘らず親切な世話を續ける事によつて、結局子供は立派な發達を遂げ、やがて一本立ちで行けるやうになる。知識階級の勞働運動の初期の使命は將に斯くの如きものである。勞働者の發達が社會の爲めに必要である以上、第三者たる先覺者が本人の意識せざるに先立つて勞働者の要求を洞察し、殊に彼等の中に少しでも開發せられた者があれば、或る場合には之と提携して階級全體の當に要求すべきものを代つて獲得してやるのは、決して餘計な事ではなく、又固より不都合の事ではない。吾々は此點に於いて今日の勞働運動に於ける所謂知識階級の指導を、社會に對する犠牲的奉仕の貴い一例として、大いに尊敬の意を表せんとするものである。刑罰を以つて之に臨むべしとする官憲の態度の蒙昧野蠻なる、沙汰の限りと云はざるを得ない。但し之は勞働運動に於ける知識階級の地位を抽象的に論じたまでの話で、現實の指導者の行動が正しいか正しくないかの具體的判斷は自ら別問題である。

勞働運動の少くとも初期に於いて、知識階級の直接指導の必要なるは前述べた通りである。けれども勞働運動は要するに勞働者の運動であつて、彼等が獨立に行動し得るに至つた以上、知識階級は其上永く從來の地位に執着して居るべきものではない。勞働者の事は現實の勞働に從事して居る者でなければ分らない。知識階級が何時までも執着して居る事は、時として勞働者の眞の要求に非ざるものを彼等に强制するの結果を伴ふ事がある

る。併し實際の問題として何時が見切り時であるかは容易に分らないのみならず、勞働者の智識の程度は又時に非常に不揃ひだから、見切時であるやうでもあり、ないやうでもある。實際如何なる態度を取るべきかの判斷は、なか／＼困難だ。其處から知識階級排斥などといふ餘り香しくない問題も起る。かゝる形に於いて知識階級の引退を見るのは面白くはないが、又致方も無い。要するに知識階級は初め勞働運動を直接に指導するの使命を帶びつつ、又適當な時に於いて局外に去るの覺悟を有つて居なければならないと思ふ。

然し乍ら知識階級は全然勞働運動に無用とされるのではない。勞働運動は勞働者の運動であるけれども、自分の利害に直接關係のある問題については、兎角判斷が一方に偏し易いので、階級的利害を社會全體の進歩の上に如何に調節すべきかは、寧ろ局外者の公平なる判斷に待つを必要とする事がある。此點に於いて勞働階級が如何に發達をしても、彼等が階級的利益の伸張と共に、又社會全體の發達に貢獻するの責任を果さんとするには、何うしても知識階級の批判を待つの必要があり、知識階級また勞働者をして常に正しき道を歩ましむる爲めに不即不離の關係を取つて、間接の援助を提供するの責任がある。

斯く考へて見れば縱令知識階級排斥といふ形で引退を餘儀なくされても、彼等が勞働者の意思を怒つて完全な絶縁を宣言するには及ばない。此點に於いて初め勞働運動の先頭に立つて奮戰しながら、後不即不離の濶達自在の態度を取つて居つた神戸の賀川君の立場は甚だ尊敬に値するものと云はなければならない。

かうした知識階級對勞働運動の關係は、友愛會の發達の歷史の上にも明白に表はれて居ると思ふ。友愛會は初め鈴木君等の所謂知識階級の非常な斡旋の下に出來上つた。あの時代に勞働者自身の自發的團結を見る事は望まれなかつた。否、そればかりではない。折角出來上つた團體の成長のためには、資本家階級の巨頭澁澤子爵を初め添田博士等の物質的並に精神的援助をも必要とした。勞働運動が資本家の擁護の下に出來たといふ事は、一見甚だ奇怪のやうであるが、之が莫かりせば友愛會は今日の大を成し得なかつた。友愛會が結局日本の勞働運動史上如何なる地位を占むべきかは、人によつて自ら觀る所を異にするだらうが、兎に角之れが日本に於ける勞働運動の勃興を促したとすれば、澁澤子爵等の功勞も亦看過す事は出來ない。殊に[illegible]等は普通の資本家に見るやうな利己的動機からやつたので

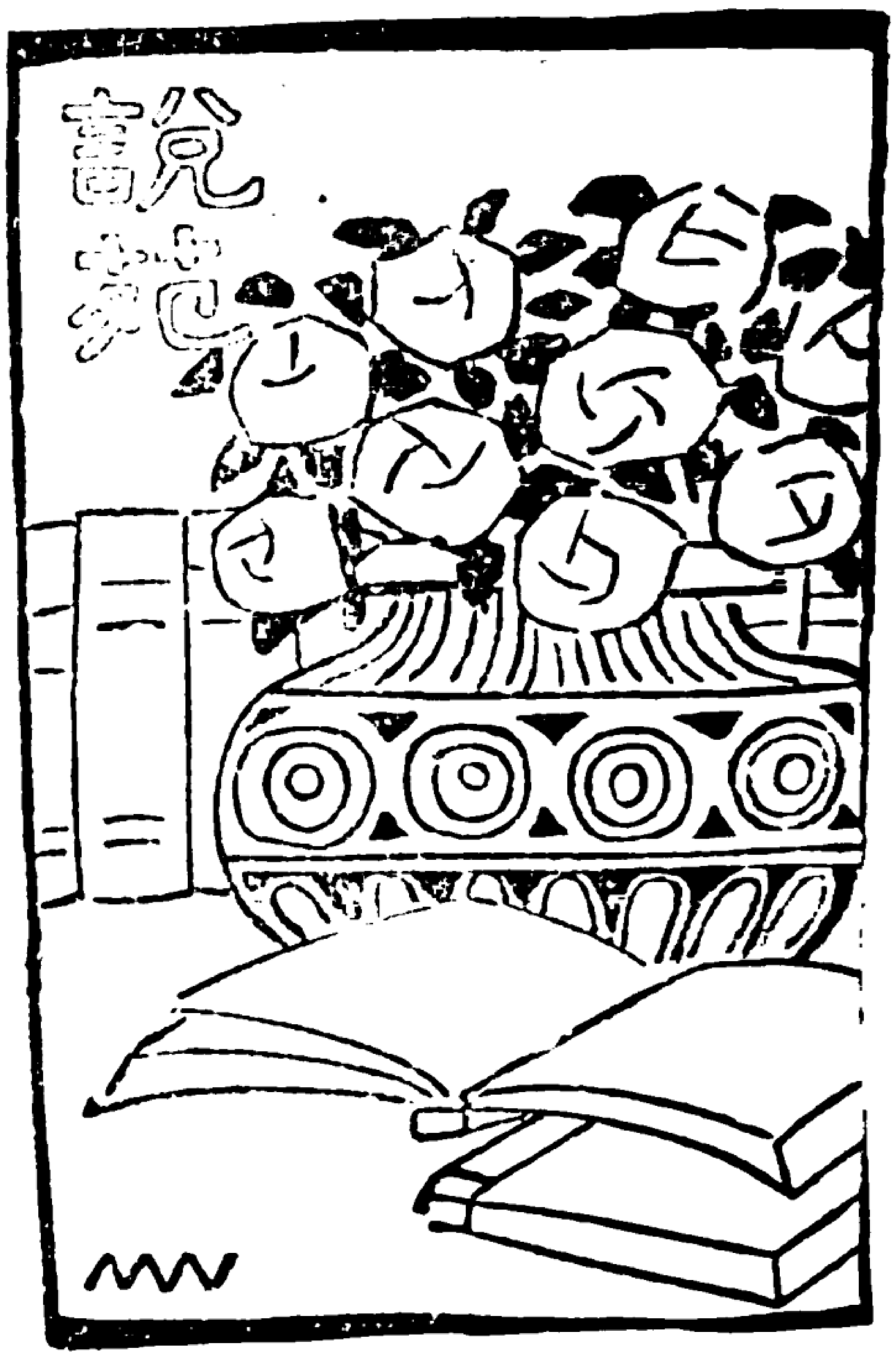
く、日本にも勞働運動の勃興は免るべからずと觀て、今より之を適當に指導する事は、國家に對する責任だといふ趣意に出でたのである。指導の方法宜しきを得たか否かは別問題として、子爵等は誠意を以つて隨分鈴木君の運動を助けたのである。其結果として勞働運動は今日の發達を見たのだから、今や友愛會は澁澤子爵以下を惜し氣も無く捨てゝ終つたが、思ふに子爵等は之を以つて友愛會の忘恩を恨んでは居るまい。

友愛會も創立草々の間は、俺の方へは自働車へ乘つて來るやうな名士が出席したと云つて喜んで居つたといふ有樣であつた。それが段々知見を開いて、後には資本家の援助によるの故を以つて鈴木君を攻撃する聲さへ聞ゆるやうになつた。鈴木君としては誠に苦しい立場であつたらうが、併し此處までに至つたのは即ち勞働運動の、君等の力によつて非常に發達を遂げた證據である。今日でも尚ほ鈴木君に對する非難が、かゝる歷史に基いて發せらるゝを聞くが、併し君が結局此難關を、子爵等の恩顧に背き勞働運動に殉ずる事によつて切拔けたのは、兎に角贊賞に値する事と云はねばならぬ。

鈴木君をして右の如き處決を爲さしめ、友愛會をして資本家の保護から解放し、適當の時期に其當然の進路を取らしむるに與つて力あつたものは、麻生、棚橋、松岡諸君が、幹部として鈴木君の羽翼となつた事であらう。是等の人々の間に何ういふ關係が實際に織り成されたか分らないが、只大勢を局外から觀ると、友愛會は是等の有能なる指導者の下に着々獨立の運動として發達した。否、十年雌伏の狀態から脫出して素晴らしき急激な進步を遂げたと云つて可い。さうして昨今は詳細なる研究と他年の實驗に基いて着々組織を改め、是等の指導者は自ら謙遜つて實權の地位を勞働者に讓らんとして居る。かゝる進行の一犧牲として棚橋君の脫退といふ不祥事を見たけれども、大體に於いて友愛會の今後の陣立ては、我等が前に述べたやうな、本來然かあるべき關係に落着いて行くものと思はれる。此點に於いても友愛會は、他の多くの點に於けると同じやうに、我國勞働團體の一摸範を成すものであらう。又斯くあらん事を吾々も希望する。

邊土雜記

相馬御風



どこへ行つて見ても、田舍の人達は不思議に閑談を好む點に於て一致してゐる。せつぱつまつてゐると稱せられる今の時代に於ても、田舍の人達は不思議に昔ながらに閑談を愛好してゐる。しかも、田舍の人達の閑談を好む好みかたは、都會人達のそれと異つた甚だ熱心な好みかたである。彼等にとりては、閑談は社交であり、樂しみであり、而してそれは善い意味に於ての修養でもある。まだ地方生活者の大多數が文字に導かれた知識や思想や表現やを讀むことを好まない日本の現狀にあつては、彼等の生活に於ける閑談の價値は意外に重大であると云ふまでもないが、さうでないまでも都會人の無駄話と田舍人の閑談とは、斷じて同一視すべきものではないやうに思はれる。

○

都會人の眼からは、邊土に住む人達は概して寡言のやうに見られてゐるが、事實はむしろ之れに反してゐる。都會人的な所謂饒舌者と云ふやうなたぐひの者は、邊土居住者のうちには極めて稀であるけれども、談話を好む性情は田舍の人達には總じて都會人よりも濃厚である。都會に住む人達だとて無論談話を好む。お互に取り交はす言葉の數に於ては、むしろ都會人の方が田舍人に比べてどれほど多いか知れない。しかし、都會人の談話に對する興味は、田舍人のそれに比べて遙かに稀薄であるか、淡泊であるやうに思はれる。そして都會人の會話には用談が多いが、田舍人には用談よりも謂ふところの閑談が多い。

農村や漁村に住んだ人は、そこに土着する多くの人達が、何等かの機會をつくつては常に閑談を樂しみたがる傾向の著しいものであることを、おそらく何人も認めずには居られなかつたであらう。概して都會人はまことによくしやべるが、田舍人はまことによく語る。都會人の無駄話と田舍人の閑談との相異は、實にこのしやべると語るとの相異であるやうにおもはれる。

○

私もこの邊土に住むことになつてからは、やはりかうした田舍人の閑談を何よりの樂しみとするやうになつた。そしてわけて私がこの田舍人の話ずきと云ふことに感謝しないで居られぬことは、此の數年私のやつて來た良寛和尚についての研究が何よりも多くさうした田舍の人々の閑談に負うてゐることである。

もしここに良寛和尚について知らうと思ふ人があつて、和尚と最も縁故の深かつた越後の西蒲原郡や三島郡の農村巡りをするやうなことがあるならば、その人は必ずそれらの村々に於て、あまりに多くの人々が熱心に「良寛さま」を主題とした閑談の相手となるのに驚かずには居られないであらう。

良寛和尚の人格の表現であるところの藝術によつて、私の心が如何にありがたいおかげを蒙むつたかは云ふまでもない。しかしそれと同時に私は和尚示寂後百年の今日なほ目涙ぐまんばかりの感激を以て、和尚その人の人格と生活について好んで語りつづけることをやめないでゐるあの地方の人々との會話から受けたところの心のたまものゝ貴さを、永久におろそかに思つてはならないのである。

或時は雪の日の爐邊に於て、或時は時雨ふる野路を歩きながら、或時は薄暗い僧堂の一隅で、或時は山村のきたならしい駄菓子屋の店先で、或時は小學校の應接室で、或時は眞夏の烈日に照らされながら田の畔で、或時は目の前に佐渡の山の見える漁師町の旅舍の一室で、或時は古びた大きな豪家の廣間で、或時はふさ〳〵と實つた稲田の中を通ずる平らな道を走る人力車の上で、私は此の數年の間にいかに多くの人々の口から、その人々の所謂「良寛さま」についての感激のこもつた話を聽いたことであらう。それを私に話してくれた人々のうちには、自分の姓名すらも書くことの出來ないやうな無學な年よりな農夫もあつた、地主さまもあつた、人力車の車夫もあつた、銅色の皮膚をした漁師もあつた、宿屋の主人もあつた、小學校の教師もあつた、坊さんもあつた、敏腕な事業家もあつた、豪家の主人もあつた、相當の教育を受けた中年者もあり青年もあり、料理屋の給仕女もあり、駄菓子屋のかみさんもあり、農家の作男も

あり、ろくに目も見えなくなつた婆さんもあり、耳の全く聞えない老爺もあつた。しかも、それらのさまざまな階級の、さまざまな種類の人々のいづれもが、いかにもうれしさうに、眞實をこめて同一の主題について知つてゐる限りを話してくれたのであつた。

これは誠に貴い事實である。良寛和尚その人の墨蹟の多くが大切に保存されてゐたり、書物の上にその人のことが記し殘されてゐたりする以上に貴い事實である。良寛和尚に對する私の讃仰はこの貴い事實によつてどれほど高められたかわからない。

田舍人の閑談には輕々しく聞き流すことの出來ない貴い何ものかが多分に含まれてゐるのである。

○

邊土に住む人々の間には、今日でもなほ昔ながらの口碑や傳說が、最も好ましい話柄の一種として取扱はれてゐる。芝居を見たり、淨瑠璃や浪花節や講談を聞いたり、或は書物を讀んだりすることの機會を持たない大多數の邊土居住者にとりては、自分達の住んでゐる鄉土を舞臺とした昔ながらの口碑・傳說を語り合ふことが、今なほ彼等の藝術的欲求を充たす最も重要な方法とされてゐるのである。傳說と、寺の說教と、民謠と、此の三つを除いた彼等の生活を想像することは、あまりに生氣な事である。

○

傳說と民謠との關係も面白い。民謠から生れた傳說もある。傳說から生れた民謠もある。傳說と民謠とが絡み合つて、ロマンスの味はひをいよいよ豐かならしめる。お夏淸十郞の物語と「向ふ通るは淸十郞ぢやないか笠がよう似た……」と云ふ唄とを切り離してはならない如く、邊土に傳はる傳說と民謠のうちには兩々離すべからざるものが甚だ多い。尤も中にはその二者の一が忘れられてしまつた爲めに、味ひを失つた民謠も傳說も少なくはない。

つひ先頃私は安來節について書かれた伊原靑々園氏の文章を早稻田文學誌上で讀んで、その中に『イノック・アーデン』に似たやうな哀話の主人公が自分の切なる心の訴へを安來節に作つてうたつたと云ふ事が書いてあつたのにひどく心を惹かれた。なるほど今日私たちが何げなく聽いてゐる民謠のうちにも、その初めはさまざまな悲劇的な人物の切なる叫びや訴へとしてうたはれたものもかなり多くあるのであらう。そんな事を考へて見ると、民謠の作者如何と云ふやうな問題もまことに味はひの深い題目となつて來るやうな氣がする。

多くの場合忘却の底に葬られてしまつてゐる民謡の作者——その存在すらも多くの人によつて考へられないで居るそれら多くの無名詩人、それを私は時々さま〴〵に想像して見たい氣にもなる。

『舟は出て行く鴎はかへる波は磯打つ日はくれる』

『磯の松葉を手でかきよせて主が來るかと焚いて待つ』

『泣いてくれるなまだ年や若い雲の行方にはてがない』

『さらばと云ふまにはや森のかげかすかに見ゆるは宵の笠』

『船底の夢はやぶれて鳴く濱千鳥寒いぢやないかえ波の上』

『今宵一夜け緞子の枕あすは出舟の浪まくら』

これらは私たちの地方で最も多くうたはれる追分節の唄であるが、一體これらの唄を最初作り出した人はどんな人であつたらう、そしてどんな機會にどんな心もちで詠んだものだらうと云ふような事を考へて見ると、そこには果てしもなくさま〴〵な想像が浮ぶのである。

民謡に於ける音樂と詩とは、民衆生活そのものゝ内から生れ出たものであると云つても、それにはやはりそれ相應の天才者の力の加はつてゐることは云ふまでもない。ゆかしいのはそれら無名の音樂家や詩人の功蹟である。

○

民謡の中にはまた男や女の名前の詠み込まれてゐるのが少なくない。しかもそれらの詩的人物の多くも、いつとなしに其の閲歴などを忘られてしまつて、ただ其の名だけを唄の中に留めてゐるに過ぎない。民謡の作者について考へると共に、私はかうした民謡中に名のみを留めた男女の生活についても、時々さま〴〵な想像を寄せずには居られない。

例へば越後の民謡中に最も著しく其の名を留めてゐる「おけさ」と呼ばれる女の如きは、特に私達の注意を惹く其の種の人物の一人である。

『そこなおけさにいたこと云はれ、ねまりねまらず待ち明かす』など云ふやうに、その名は越後の代表的な方言と共に都でうたはれる唄の中にまで取り入れられてゐる。越後には特にその女の名を以てした「おけさ節」と云ふ特殊の唄の節さへある。

『おけさそれ〳〵差し櫛おちるよ、おちてすたりよと手にとらぬ』

これは「おけさ節」でうたはれる唄の中でも、最も代表的な唄であるが、この唄だけで想像して見ても、おけさと呼ばれた人物のいかにあでやかな女性であつたかがわかる。

『おけさそれ〳〵差し櫛おちるよ、落ちてすたりよと手にとら

ぬ一

いかにもおほやうな、いかにもあでやかな一個の女性の道行くさまが、目に見えるやうである。

『おけさ見よとて菰で目をついた、菰も菰だよ生よし、晒手拭ふわりとかふり、寺の大門ちよこちよこ來れば、寺の和尙はそれ見るよりも、こらえがられぬ、られないけれども和尙の身なら、呼ぶにや呼ばれず手にや招かれず、土手の櫻でちよいと見たばかり』

おけさの美しさには寺の和尙でさへもぢつとして見ては居られなかつたと見える。おけさと云ふ女のあでやかな姿は、こんな風にいつの時代にか越後の或地方でいたるところの若い男たちの心を魅惑して居たのであらう。

しかし、これほど名高い女であつたに拘らず、おけさの生きてゐたのがいつ頃のことであり、何處の何人の娘であり、どんな風な生涯を送つた女であつたかについては、何の記録もないらしく、たゞ僅に一つの極め傳奇的な口碑がそれについて語られてゐるのみである。その傳説によると、おけさは新潟の娼婦であつた。しかも、それは本當の人間でなくて、怪猫の化身であつた。それを知らずに多くの男はおけさの美貌に魅せられて、人知れず彼女の餌食になつた。しかし、さすがに有情の性はあつたものと見えて、此の妖女にも唯一人愛情を寄せた男があつた。その男は遠い國から此の港にやつて來た千石船の船頭であつた。

或る夜のことであつた。その夜も船に歸らずに女の部屋に眠つてゐた其の船頭が、眞夜中にふと目を覺まして見ると、自分の傍に寢てゐた女がいつの間にか起き出て、次の間に下げたままになつて居た膳の上の殘肴を貪り食つてゐるのが行燈の光に朦朧として照らし出された。しかも、その女の形相を見ると、頭から上は怖ろしい猫と變じて、皿の上の魚の骨までもものすごい音を立てて嚙み碎かうとしてゐるのであつた。これを見ると、永い年月怒風怒濤と鬪ひつづけて來て肚胸の据つて居た流石の船頭も、思はず驚きの叫びを發せずには居られなかつた。大破綻がつひに來た。其の夜は女の泣き訴ふるままに、斷じて其の事は口外せぬと云ふ固い誓を立て、男は夜明けを待つて船へと戻つたが、絶えず彼の心を脅やかしてゐた怖ろしい記憶に堪へかねて、彼はつひに二三の部下に前夜の出來事の一端を打ち明けずには居られなかつた。しかし、彼の此の破約が、同時に彼の身の破滅であつた。

彼等の船は、見る間に捲き起つた狂瀾怒濤の底に呑まれ、船頭の肉體は黑雲に包まれて空中に捲き上げられ、怪猫の鋭い爪

と齒とで八つ裂きにされた果てに逆まく潮浪の中へと投げ落されてしまつた。

そして、その日から永い年月新潟の花とうたはれてゐたおけさの姿が、永久に此の色の湊から消え去つてしまつた。

おけさと云ふ女性の身の上について今日まで私の聞き得たところは、ただ此の傳說一つに過ぎない。けれども、これが眞に越後の民謠で名高いおけさと云ふ女の身の上であつたかどうかは知るよしもない。ただ併し次の如き一篇の俗謠が、此の疑問に對する或る暗示を與へてゐるやうに思はれる。

『おけさ正直ならそばにも置こが、おけさ猫の性でそばきらひ』

おけさと猫との關係は、此の唄が或る他の一面を暗示してゐる。前に述べたやうな傳說が此の唄を生んだか、かう云ふ唄が前にあつてそれが人々のさまざまな空想の種となつてこのやうな傳說を生んだか――かうした疑問について考へることは、民謠や傳說の發生を考へる上に、隨分參考となることだと思ふ。

越後の刈羽地方でうたはれてゐる手毬歌にこんなのがあるさうである。

『越後刈羽の大工町、大工町では庄屋さん、庄屋の娘がおたのとて、おたのあとしり十六で、孫さがあとしり九つで、いかに我が子でなけれども、布團でからまき帶でしめ、重櫃へ入れて錠下し、息がこもりて死んだもの、如何して御上に知れたやら、二十二日のその朝げ、おたのに來いとの御札紙。

おたのが牢屋に行くときは、下には本縮緬の長襦袢、上には白無垢着重ねて、前の一本橋渡る時、泣き〳〵淚の袖しぼる、うしろを見れば蓮華花、先きを見やれば火の車、西や西方彌陀如來。

おかまおしろが雲のかげ、雲ほど邪見でなけれども、我見邪見で拜まれた〳〵』

今一つこんなのもあるさうである。

『大きい榎の木の下で、町場長者の小娘ぢやないかね、下に白無垢、あひ着にや緋無垢、上に斜子の小袖を召して、ふなり〳〵と藥師の詣り、藥師坊樣がおかよに惚れて、おかよよう來た與れたいものは、櫛に簪化粧の道具、まだもやりたい長崎髢、入れて結はしてあとから見れば、髱が三尺島田が五尺、はねた元結が一丈二尺、おせん出て見れ、お萬出て見れ、ちよいと百ついた』

かう云つたやうな唄はどの地方にも一つや二つはあるものであるが、いづれもその技巧に於てすぐれてゐるところから見ると、どの地方にも古來かうした天才を持つた作者があつたにち

おひたい。しかも、どの地方へ行つてたづねて見ても、今日これらの隱れた詩人の姓名さへ知ることが出來ないのである。

しかし、私たちには寧ろ其の事實が面白く感じられる。徒らに名のみ殘つて、作品が滅びたと同樣になつてゐる多くの人々よりも、名は滅びてもその作品のみがいつまでも生命を失はないでゐるやうな、隱れた天才者の多くを私たちは遙かにゆかしく思ふのである。

○

更に今一つ越後柏崎地方でうたはれてゐる民謠に、

『越後鯨波玉屋の椿、枝は白かね葉はこがね』

と云ふのがある。そしてこの唄にも一つの味はひの深い傳說が絡んでゐる。唄と話といづれが先に出來たものか今日では知るよしもないが、いかにもよく唄と話とが結び付いてゐる。

今は海水浴地として名高い越後の鯨波村に昔玉屋といふ長者が住んでゐた。玉屋は海產物などを商ふ家であつた。主人の名を德兵衞と云つた。德兵衞は勤勉家であつた。朝早くから夜遲くまで身を粉にして懸命に働いた。其の働きは無ではなかつた。豪者よ長者よと謳はれ土藏は幾戶前も裕かげに建てられた。花のやうな女房も迎へた。玉のやうな子も出來た。しかし、かうした何不足ない德兵衞にも只一つの心配があつた。それは金銀の置場所をどうしようかと云ふ心配であつた。土藏と云つても下男下女が出入りする。泥棒が來らぬとも限らない。折角これまで骨折つて溜めた金銀を……と思へば德兵衞の夜の眠りは安きを得なかつた。彼は日となく夜となくその事ばかりに心をいためた。そして苦しい思案の末に彼はたうとう屈強な隱し場所を見出した。それは屋敷の裏の竹藪であつた。竹藪には一本の椿があつた。或暗い晩、彼は人知れず其の椿の根元に穴を堀つて澤山の金銀をその中に埋めた。

しかし、さうした後と雖、德兵衞の心は依然として不安であつた。さまざまな形をした暗雲が絕えず彼の心を惱ませた。その心の惱みは、つひに彼をして俗に云ふ氣の病ひに罹らせた。そして病苦に堪へられなくなつた彼は、或日下男を連れて松之山溫泉へ湯治にと出かけることになつた。さすがにその堀の間靜な自然とそこから湧き出る溫かな藥の泉とは、日に日に彼の心を爽やかにした。

と、そこへ行つてから半月ほどを經た或日のことであつた。德兵衞は例の如く快く湯壺に入つてゐると、同じ湯の中で誰か知らこんな唄をうたふものがあつた。

『越後鯨波玉屋の椿、枝は白金葉はこがね』

うたつてゐる人は何氣なくうたつてゐたらしかつたが、それ

を聞いた德兵衛の心は俄かにまた騷ぎ出した。早速彼は湯から出て、下男を呼んで其の唄の意味をたづねたが、下男は何も知らなかつた。たゞそれは玉屋の榮華を賞めそやした唄であらうと答へた。しかし、德兵衛の不安は急にまた募り出した。しかもそれは以前より一層意地惡いものであつた。德兵衛はもう居ても起つてもゐられなかつた。そして彼はなだめとめる下男の言葉を耳にもかけずに、眼の色を變へて即日歸途についた。

　鯨波の自宅に着いて駕籠を出た德兵衛は何もかも忘れて夢中になつて屋敷裏の竹藪へと驅け込んはだ。はたせるかな彼が金銀を埋めた場所の目標となつてゐた椿は、唄の文句そのままに枝は銀に、葉は黃金に、燦然として輝いてゐた。德兵衛はその場に氣絕した。

　家人の介抱によつて德兵衛は一旦息を吹きかへしたものゝ、つひに此の世の人ではなかつた。しかし、彼はあくまでも金銀の秘密を深く胸に藏して苦しみ續けたが、つひに死の自覺と共に一切を妻に打明けた。けれども、妻が探し出して見た椿はあたりまへの椿であつた。そして其の根元に埋めたと云ふ金銀はいかに深く堀つても出て來なかつた。堀れば堀るほど堆くなるものは土と砂と石ころとだけであつた。

　以上は大體に於て『傳說之越後』と題した書物に收められた文章に據つたのであるが、此の書の著者は最後に左の一節を書き添へてゐるのである。

『玉屋の椿は勿論、屋敷も跡方もなく殘るは斷崖にゆるがやうな浪の音ばかりであつた』

と。

　私は此の話を越後の傳說中での最も好ましい話の一つに數へてゐる。

○

　都會の生活には過去に對する執着が稀薄である。強めて云へばそこでは過去はたゞ過去である。しかし、田園の生活には過去に對する愛着が甚だ濃厚である。謂ふところの意味は、田園の生活が常に過去の歷史に支配されてゐると云ふよりも、むしろ田園生活者にとりては過去は常に彼等の味はひの世界として存在してゐると云ふにある。

　ぢつと同じ鄕土に定住してゐる者にとりては、(しかく運命づけられ若しくはしかくあることを欲するものにとりては)そこにつゞけられて來た過去の生活と云ふものが強い愛着を誘はずには措かない。悠久な自然、變化のない環境のうちに生活する人々にとりては、彼等みづからの過去の生活の追懷と未來の生の信賴となしに生きることは、堪へがたく寂しいことなのであ

る。

『静寂は前後左右から彼を包んだ、太陽は静かに静かに平穏な碧空の中を移つて行き、雲は穏かに其面を漂ひ去る。其の漂ひ動く故も知らず、又その漂ひ行く所も知らず、唯もう夢の如く雲は動く。世界の他の場所ではこれと時を同じくして、生活の熱鬧があり、慌忙があり、爭闘がある。しかし、ここでは、丁度沼に生えた草の上を水が滑つて行くやうに、生活は何の音もなく滑つて行く』

から或る詩人が叙したやうに、ぢつとして眺める逸士の生活はあまりに單調である。あまりに靜寂である。そして時としては『永劫の森の心から、不死の水胸から、同じ聲が響いて來る、吾汝等と關はる所なしと』

と同じ詩人が歌つたやうに、そこでは自然の偉大があまりに冷たく人間をつき離すやうにさへ感じられる。

しかし、前にも云つた如く、それはただ冷やかに眺める者にとりてのみである。自然は單に眺める者に對しては、同じくただ眺めかへすだけである。自然の本當の愛は、こちらからも眞に愛を以て働きかける者にでなければ注がれない。自然の恩惠は廣大無邊であると云はれる。しかし、それを眞に感ずることの出來る者は、こちらから先づ眞實の愛を以て働きかける者でなければならぬ。

『此の靜寂無活動裡に、何たる力、何たる健康の存する事ぞ。窓の下には强健な野牛蒡が厚い草の中から匍ひ出てゐる。その上に獨活草があの汁液の多い莖を伸してゐる。更にそれより高く處女涙草が其の淡紅色の卷莖を伸ばしてゐる。見渡す限りの野にはライ麥が絹を伸べたやうに光つてゐるし、燕麥は既にもう穗を出してゐる。あらゆる木のあらゆる葉、あらゆる莖のあらゆる草葉がひろがれるだけひろがり、はびこれるだけはびこつてゐる』

しかし、かうした力、かうした健康も、眞にみづから自然界の生命を愛する者にでなければ本當に深く感じられないやうに思はれる。たとへ一本の小草でも、眞にそれを愛し育てる苦勞を知るものにして、初めて自然が與へる眞の歡びを味はふことが出來るのだと思ふ。

かうした自然の生命に對する眞實の愛から、土を耕しつつ生きる者の眞實の勤勞が生れる。また勤勞に伴ふ本當の歡びが生れる。そして逸士に生活する人々は此の歡びなしには生きることが出來ない。傳説をよろこぶ心は彼等に郷土に對する愛着を起させる。自然界の生命を愛撫する彼等の心は、彼等をして土に親しましめる。そして彼等が有する民謡は、その土を耕

彼等の勤勞を快いものとする。如何に時勢が變らうとも、おそらくかうした根本的要素なしには邊土の生活は不可能であらう。

○

樹木の生長するのを注意して見てゐると、若木のうちは兎角枝ぶりがととのはないで、眺めるにも一向趣のないものであるが、一年たち二年たちして年數を重ねるにしたがひ、いつの間にかそれぞれ趣のある姿態を形造つてゆくものである。

趣味の上から庭木を育てるにしても、木の若いうちはどんなに苦心して手入れをして見ても、落ち着いた姿態を見ることが出來ないが、木が育つにつれてたいした手入れをしないでも、いつしか木それぞれみづからがそれぞれ趣のある姿態を形造つてゆくものである。雨に打たれ、雪に壓され、風に揉まれて、さまざまに形をくづしくづしゝてゐるうちに、おのづから樹木の落着きのある姿態が形造られてゆく。中心に健康な力さへあれば、樹木はかまはずに置いても立派に趣のある姿態を形造つてゆくものである。

盆栽にしても、決して人間の手で無暗といぢり廻はした木に上等なものゝある筈がない。内部に健康な力を持つた木が、さんざんに雨や、風や、雪に揉まれた揚句に、いつとなく自己の健康力で整へた自然の姿態が、最も愛すべき木の姿態である。上等な盆栽は、かう云ふ姿態を備へた木でなければならぬ。

若木のうちに見て、此の木はどうなるだらうかと氣づかはれるやうな木でも、内部の健康さへ失なはなければ、いつの間にか立派に落ちつきのある、亂れず狂はない、そして何とも云へない趣あり、味はひある姿態を形造つてゆく。

○

ぢつと大きな山を眺めてゐると、いつとなしに、またわけもなしに心が、どつしりと落ちついて來る。山の與へる安定感は、まことに貴い。「山は靜かにして性をやしなふ」と芭蕉も云つてゐる。

或時こんな事を考へたことがあつた。「山の安定感はくづれると云ふことが極限まで達したものゝ形の與へる安らかさの感じである。くづれ落ちる限りくづれ落ちた果てにもうこれでくづれるところがない。この上少しでもどうかなつてゐれば、缺けたりくづれたりするのだらうけれども、少なくとも今の瞬間さう云つた不安な部分が少しもない――さうした安定の感じである。」と。

しかし、そんなことはどうでもよろしい。兎に角山を眺めるといふことは、私達にとりては一種の修養であるやうに思はれる。依然として山に對すると云つたやうな氣持は、古聖の誰彼

も讃美してゐるが、私達もどうかしてさう云つたやうなどつしりした心が得たいものだと時々しみじみ思ふのである。

○

山間の僻地に住んでゐる人達には、何かにつけて他人の力を借りてゐては埒のあかぬことが多い。自分がやらなければ到底出來ないやうな事が多い。文明の恩澤を蒙りたくても、蒙ることの出來ないことが多い。つひ近頃も、私は二三の人と一緒に、酒屋へ三里油屋へ二里と云つたやうな山間の村々を廻つて歩いたのであるが、その時もつくづく『なるほどかう云ふところに住んでゐる人達は人が拵くなるわけだ』と云ふやうなことを話し合つたのであつた。

○

今の子どもたちが巧妙に拵へられたおもちやの飛行機を玩具店から買つて來て弄びよろこんでゐるのを見るにつけても、粗末な紙鳶一つを得るのにすら自分の有りつけたの智慧と根氣と手數とを費さなくてはならなかつた私たちの少年時代のことを、つくづく思ひかへさずには居られない。

しかし、今でも山間の僻地に住む子どもたちは依然としてそれをやつてゐる。先づ親たちにせがんで辛うじて貰ひ得た一枚の紙に、墨で大きな字をぶざまに書く。それから山へ行つて竹を切つて來て、庖丁か鉈で骨をこしらへる、苧屑を貰ひ溜めこ細い繩を綯ふ。そんな風にしていざこれで大丈夫と云ふまでには幾日も幾日もの勞苦を費すのである。

だが、得るあとから飽いては次から次へと新しらい玩具をあさり求めつつある都會の子供たちと、彼等自らの幾日も幾日もの無器用な勞苦のはてに漸くにして得た粗末な紙鳶さへも大切にして幾日も幾日も樂み弄んでゐるやうな邊土の子供たちと、どちらが眞に少年の歡びを感じてゐるだらうか。私はよくそんなことをも考へて見る。

○

越後の農村の人々は田へ出て働く時には、きたない仕事着を着て出るやうにしてゐるが、越中は全く反對で、就中越中の婦女子は田へ出るのを晴れの場所へ出ると心得てでも居るものかわざわざ立派な着物を着飾つて出るのを習はしとしてゐる。中には一日に二度までも着更へするのを若い娘達の風習としてゐる地方さへあると云ふことである。

田植時とか田草取りの季節などに越中を旅行する人々は、誰でも田に出て働いてゐる女達の服裝のあまりに美しいのに驚くであらう。汚れの見えない紺絣の着物、眞紅の蹴出し、派手な友禪モスリンの帶、赤い色の目立つ巾廣な襷、紐の色の鮮やかな形

の優美な菅笠——それが越中の娘達の十中八九までが田で働く時の服裝である。私はそれを見る度に、嘗て京都の市中でよく見うけた大原女や白河あたりから出る花賣女の服裝を聯想する。これとそれとは凡ての點であまりによく似てゐるからである。

この事について私はこんな事を考て見たことがあつた。「越中の女達の田に出て働く場合の風俗と大原女や白河女の京へ出る時の風俗との似てゐるのは、歴史的意味のあることなのかも知れない。何よりも萬葉集が證據だてゝ居るやうに、あの時代に既に越中は非常に開けてゐた。しかも、大伴家持のやうな代表的な都の貴族を始めとして多數のみやび男たちが此の國に來て住んでゐた。今日なほ私達の見る事が出來る越中の女達の田に出て働く折のみやびな風俗も、或はその時代に於てそれらの都の貴族たちによつて奬勵されたのがそのまゝ傳へられたのかも知れない。」

越中の農婦たちのかうしたみやびな風俗に比べると、越後の女たちの田に出て働く有樣はあまりに見すぼらしい。殊に早春やうやく雪の消えたばかりの頃に、水のまだ痛いほど冷たい田に出て働いてゐる越後女たちが眞黒な綿ネルの裂片か綿子(わたこ)と稱する一種獨特のものを頭から顏に卷きつけ、身には雑巾のやうに麻糸で綴くつたごわ／＼する筒袖の着物を着、太い藁繩でその裾を高々とからげ、男子と同じめくら縞の股引を穿いてゐる容子などを見ると、むしろそれはすさまじいと云つたやうな感じをさへ與へるのである。

しかしまた一方に、私は秋の收穫時に越後の西蒲原地方で見た農村の男子たちの特殊の勇壯な風俗の快い印象をどうしても忘れることは出來ない。そこでは男たちの多くは馬に跨つて田へ出る。しかも彼等は不思議にその季節になると、彼等の乘馬迄を雄々しく見せる樣な一種獨特の裝物を身に纏ふのである。それはよくたしかめたわけではないが、多くは帆木綿のやうな厚い堅い織物で拵へた昔の陣羽織のやうな格好をした一種の上衣である。一寸見ると幅の廣い帆木綿のやうなものに頭を通すだけの穴をあけて、そこから頭を突き出し、腰のあたりを繩で締めてゐるに過ぎないものゝやうに見える。しかし、その原始的な鎧のやうにさへ見える服裝をした體格のいい農夫達が、馬上に高く背を伸して黄金色に實つた稻田の中を、鈴の音高らかに驅けてゐる有樣は、何とも云ひやうなく爽快な感じを與へるのである。越中の農婦たちの容子は私に萬葉集の時代を想はせ、京の大原女を聯想させるが、越後の農夫のさうした容子は何とはなしに大陸的と云つたやうな雄大な感じを與へる。

野に働く農民の風俗だけについて見ても、その土地々々のさ

まざまな特色が顯はれる。そしてそれらの特色の蔭にあるさまさまな文化的意義をも察すれば察しられるであらう。

○

たしか島崎藤村氏であつたと記憶するが、嘗て芭蕉の『行脚掟』中にある「夕を思ひ旦を思ふべし」と云ふ一句をひどく貴とがつてゐた人があつた。なるほどさう云はれて讀み返して見ると、汲みつくせない含蓄味のある一句である。「夕を思ひ旦を思ふべし」――私もその後妙に此の一句を口ずさむ機會が多くなつたやうな氣がする。

『たとひ嶮岨の境たりとも所勞の念を起すべからず起らば中途より歸るべし』

も忘れがたい語である。

○

山登りをしてひどく疲れる人は、多く坂道を急ぐ人である。山歩きに慣れた人ほど、坂道をのぼる速力が遲い。坂道をのぼるのは苦しい。しかし、いかに苦しいからと云つて、一刻も早く苦しい坂道をのぼり切つてしまはうとあせると、苦しみはいよいよ烈しくなるばかりで、却て中途でへこたれてしまふやうな結果に了つてしまふ。よし辛うじて登り了せたとしても、その疲勞は容易に恢復しない爲めに、その先が覺束ない。

險路を歩行しようと思ふ者には、何よりも急いだりあせつたりすることが禁物である、殊に坂道にかゝつた場合にさうである。「坂道をのぼる時は散歩のつもりでゐればいい」から或る一人の登山に經驗のある人が私に教へてくれた。「坂道をのぼる時には名石か石斧の二つや三つを拾つて見せるぐらゐのつもりでゆるゆる歩いてごらんなさい」から他の一人が教へてくれた。いづれも今日では私の山歩きの金言となつてゐる。

○

近頃私の得た良寛和尚の遺墨數點中に、これまで見たことのないこんな詩を書いたのがあつた。

『題ニうきやかりこほしに一』

と云ふ題があるが、その書き方から既に思ひ切つたものである。「うきやかりこほし」と云ふのは「おきあがり小法師」の訛りである。

『任人投分任人笑、更一物當心地、寄語人生如似君、能游世間有何事。』

二句目に「無」の字が一字脱してゐるやうに思はれる。面白い詩である。

更に今一つ尺牘でこんなのがあつた。宛名の切り取られてゐるのは遺憾であるが、文意はうれしい。

先日茲庵へ御來臨被遊候日より又風をひきかへし漸一兩日以來快氣仕候未長髮にてとぢこもり居候法華經書寫仕候呈上致候病中故何の筆力も無く御免可被下候候

二月十一日　良寛

この手紙だけで見ても、良寛と云ふ人は決して俗說に云ふやうに無造作に字を書いてゐた人でないことがわかる。

○

近來良寛和尚の遺墨の僞物の激增したのには驚くの外はない。私のところへ送つて來るもの丶うちでも、十中七まではまざまざしい僞物である。何處の何人が書くのか知れぬが、良寛和尚のやうな人の遺墨の僞筆までしなくてはゐられぬと云ふのは、あまりにあさましい氣がする。中には殆んど良寛和尚の眞蹟などを見たこともなささうに思はれる人の書いたらしいものすらある。さうかと思ふと、さう云ふあまりに明白な僞物を、「どうだ、俺のは類のない名品だらう」などゝ得意になつて珍重してゐる、所謂趣味家もある。僞物でもいいからせめて書そのものの藝術的價値のあるものを搜したらばよさゝうに思はれるが、さう云ふ人達に限つてどう云ふものか無暗と非藝術的に奇態な書風のものをよろこぶ傾向がある。

いつも云ふことであるが、良寛和尚と云ふ人は、奇態などゝ云ふところの少しもなかつた人らしい。又良寛和尚の書には奇態などゝ云ふ要素は寸毫もない。戯れに詠んだ歌一首書くにも、極めて謹嚴な氣持で書いてゐる。良寛和尚の藝術を愛する人は、まづそこに眼をつけるのが本當だと思ふ。

良寛和尚の書の僞物は昔もあつた。しかし、昔の僞物は誰か自分の興味から和尚の書を倣つて書いた反古が、たま〳〵今日まで殘つてゐてそれが明るみへ持ち出されたものが少なくないらしい。ところが、近頃出來る僞物は、全部他人に賣る爲めの僞物である。てんで問題にも何にもならない代物ばかりである。

○

良寛和尚の好んで揮毫した俗謠にこんなのがある。

「みやまおろしの小笹の霰、あなたへさらり、こなたへさらり、さらり〳〵、さら〳〵とした心こそよけれ。
けはしき山のつゞらをり、あなたへくるり、こなたへくるり、くるり〳〵、くる〳〵とした心はおもしろや。
去年の竹とよ、今年の竹とよ、しとろもとろで節が揃はぬ、さてとよ、ふしがそろひまうさぬ。」

これは秀松軒編、元祿十六年版「松の葉」琉球組にあるものだと云ふことであるが、いかにも良寛和尚の氣に入りさうな唄である。和尚自身もこれに倣つて次のやうな一首の旋頭歌をよん

でゐる。

『山篠に霰たばしる音はさらさら。さらりさらりさらさらと
せし心こそよけれ』

右の他にも良寛和尚の墨蹟中には、俗謡を書いたものが少なからずある。その中には和尚みづからの作もあらうし、當時の流行唄もあるのであらうが、私には判然とそれを區別することが出來ない。ただそれら多くの唄の中で一つ、和尚の自作であるか否かを別として、いかにもその人にふさはしいと思つたのは左の一つであつた。

『鮎は瀬につく、鳥は木にとまる、人はなさけの下に住む』

まことに身にしみる文句である。

○

今は丁度此地方の于蘭盆で（此地方の于蘭盆は八月である）毎晩の樣に盆踊りの唄聲と太鼓の音とが遠くからきこえて來る。

踊りの唄こよひも遠くきこゆなり月かげ見んと窓にゐよれば

嘗てこんな歌をよんだことがあるが、まつたく夜更けの月をながめながら窓にもたれて遠くから響いて來る盆踊の歌聲に耳傾けてゐるのは、たまらなく氣持のいい事である。しかもそれは浮いた快さではなくて、しつとりと落ちついた快さである。さびしい快さと云はうか、快いさびしさと云はうか、何とはなしに涙ぐましい靜かな歡ばしさである。

踊見にわれも行かばやひさかたの月の光にてらされながら

時にはこんな氣持になつて、ふら〳〵と家を出ることもある。

『ヨホイヨホイホイ、踊らしよ爲めに、派手な浴衣を染め置いた。
ヨホイヨホイホイ、見て來たか富山の町を二階造りの白壁を。
ヨホイヨホイホイ、夜が更けたさうな、天の河原が西ひがし。

此の土地の盆踊りは歌も節も囃子も踊りも凡て極めて單純であるが、その單純が却てうれしい。

○

田舍の于蘭盆はまことにしめやかである。家々には精靈棚を飾り、夜は至るところの墓地に小さな提灯がともる。墓參りは夕方の涼しい風が吹きはじめ、あたりの草むらで虫が啼きはじめ時刻に於てする。夜更けると盆踊りが立つ。（此の地方では踊の始まることを「踊りが立つ」と云ふ）

○

田舍の于蘭盆は亡き人々を追懷するのにふさはしいやうに營まれる。わけて私には一昨年の于蘭盆の日に死んだ愛兒のこと

が、昨年の盂蘭盆に於けると同じく今年もしきりにおもひ出される。裏庭一めんに植ゑた向日葵の黄色い大きな花が今を盛りと咲いてゐるのを見るにつけても、ムッチリ肥つてゐた愛兒の亡骸を此の花の中に埋めるやうにして棺に納めた時のことや、その時見た吾が子の顔のあまりの尊さに思はず合掌して拜んだことなどが、涙を誘ひつつ思ひ出される。

その前年の同じ月に永い間の患ひの果てに眠るが如く此世を去つた老父のあの病中の神秘的な擧動や言語も、私には今なほあまりに鮮やかにおもひ出される。四年前と同じく私の心は今もなほ依然として私の父の生と死とを思うて悲しみ痛み、私の父の超越的存在を拜んで隨喜し讚嘆する。

○

どこでもすることであるが、盂蘭盆の精靈棚に茄子に棒を四本さしてこしらへた牛と、胡瓜を同樣に細工した馬とを飾るのは、野趣に富んだならはしである。いつの世に誰が案出したことがかほどまでに一般的な慣例となつたものか——そんなことを思つて見るだけでも興味がある。

切籠燈籠も亦ゆかしいものである。昔の幽靈の繪にはよく添物になつてゐるが、私にはそんな聯想は少しも起らないで、却て涼しいしめやかな好い感じを與へる。岐阜提灯も無論好ましい。しかし、中へ電燈を入れたのでは味はひが薄い。提灯にはやはり蠟燭がふさはしい光を與へる。

○

芭蕉も讚嘆したが、日本海岸で仰ぐ銀河のあざやかさは格別である。

『荒海や北に横たふ天の川』

芭蕉の此の一句は身したしく秋の日本海岸を訪れた者でなければ、切にその眞味を感ずることが出來ないであらう。

『夜が更けたさうな、天の川原が西ひがし』

と盆踊りの唄にもうたはれてゐるほど、日本海岸で見る銀河はあざやかである。眞黑に澄んだ深い夜の空を橫斷して、雲の如く烟の如く銀沙の流れる如くに默々として橫はつてゐる其雄大な神秘的な眺めは、夜の更けると共にいよいよ其の崇嚴味を增す。

久方の天の川原は夜をふかみいよよさやかに見えにけるかも

ひさかたの天の川原のはてにして黒くいくつかならぶ山々

まづいながら私にも銀河を詠んだ歌が幾つもある。

盂蘭盆會が終る頃から、日に日に浪の音の地に響く感じが秋らしくなつて行く。銀河もそれにつれて悽味を加へてゆくのである。

秋の幻滅

佐々木指月

□

宅悦が、しきりにお岩を口説いてゐる。
お岩の手の甲に強ばつた筋が出てゐる。
お白粉をつけた青いその手は、あたしの目に、づきんとした。
これはしたり宅悦どの、若い時には小唄の一つもうたつたもの、と、お岩がどなりだす。あたしは、げつそりした。
『あら！　榮ちやん』と。ほそい聲がして、誰かが、あたしのわきへきてすはつた。
見ると、それはあたしの義理のいとこにあたる、公園藝者のお梅ちやんがまんまるい顏をあたしに向けてゐる。
なるほど、あたしは榮ちやんにちがひはない。あたしのをさな名は、たしかにその榮ちやんだつた。だが、いままでは、榮ちやんとよばれると、あたし自身が幻滅のなかに置かれるやうな氣がする。
『なんだつて、今時分、こんなところへきたんだい？』と、きくと、
『でも、今日は、くさくさして、うちにゐるのもいやだから』
といふ。

□

山臺で、三味線をひいてゐる男が、すだれの横から、あたしたちを見て笑ふ。
のみならず、いまゝで、お岩を口説いてゐた宅悦が、ちは目をつかつてこちらを見る。お梅藝者は、指であたしをつついて、
『いやだよ、あの宅悦は、あたいたちを見てゐるよ。あら！　笑つてるよ』といふ。
『さうだらう。ことにおまへは變つてるからねエ。藝者のくせに七三に髪を分けて、どうしても同じものとしか見えないか

と、あたしは答へた。
『うそよ！　兄さんこそ判じものだわ、あたまの毛が長くつて、ちゞれてて、へんな洋服を着てて』といふ。
氣がついて見ると、小屋中の人はみんなあたしたちを見てゐる。三階の兵隊さんも、下の椅子場の守りツ子も、みんなあたしたちを見てゐる。
あたしは、なんだか、氣がひけた。

□

『ちよいと御覧よ！』と、お梅ちゃんがいふ。『あの、お岩は、おくびをしてゐるわ。あらいやだ、醉ツぱらつてるわ』と、いふ。
見ると、なる程、お岩は、少し醉ツぱらつてゐる。
『舞臺へでるのに、朝酒をひつかけてきたんだらう』と、いふと、
『ほんとに、お座がさめつちまうわねエ』と、お梅ツ子がいふ。
お岩は、刀をふりまはす。宅悦はにげまはる。宅悦が柱をまはつて逃げるところを、切りつけたお岩の一刀が、柱にさゝる。だがそれが、どうしたことか、なかなかさゝらない。よく見ると柱のうしろに釘が出てゐて、それに刀をひつかけやうとするのだけれども、醉つぱらひのお岩さんは、手もとがくるつてゐるものだから、思つたやうにはゆかない。逃げた宅悦が、もどつて來て手傳ふといふさはぎだ。
くろん坊が、金槌をもつてでてきて、刀を柱へうちつける。
お岩は、そのくろん坊に、ぶつぶつ小言を云つてゐたが、やがて、そこへすはりこんで、
くやしいわいなあ！と、いつた。
何がくやしいのだか、さつぱりわからない。

□

お梅藝者はおなかをかゝへてしまつた。
棧敷のてすりのかげで、ぎゆうぎゆういつてゐる。たかなか笑ひがとまらない。
だ、舞臺では、それどころの騷ぎではない。お岩は悲歎にくれてゐる。あんまり身をもがくものだから、髮が落ちさうになつて、それを兩手でおさへて首をふつてゐる。
こちらは、お梅ツ子。やつと起きあがつてきて、帶のあひだから懷中鏡をだして、鼻のあたまへお白粉をつけ直す。そんなに高くもない鼻だが、それでも顏のなかでは一番高いと見えて、そこのお白粉は、はげやすい、小さい、ぱツふで、しきりにそ

ことをくすぐつてゐる。

舞臺では、宅悦が、一きは聲をはり上げて、心をしづめてとつくりと、鏡を御覧なさりませエなあ、と、いふ。

□

あれツ！　と、お岩はびつくりした。

とたんに、ぱたんと木がはひつて、舞臺の床へ照り反す、明りはすこし暗くなる。お岩は鏡を押しのけた。宅悦は、なほもそれをさしつける。

四谷怪談のうちでも、この髮梳場は一番いゝのだが、ことにこの鏡を見るところが、この幕での山だ。

役者はたとへ、朝酒でもひつかけて、舞臺へでも出やうといふ、なまけものでもかまはない。あたしは、三代目菊五郎が殘したといふその型を、見やうと思つて身を入れた。

『ちよいと、もの凄いのねエ』と、お梅藝者は、もうつり込まれてゐる。

手には、まだ、懷中鏡をしまはずにゐる。

さうしてその鏡を、かへしたり、またふせたりして、お岩のしぐさを眞似てゐる。

不思議なことをする藝者だと思つた。

この、お梅ツ子は、要領のわるいといつて、今どき珍らしいほどにてゐるほど素人ツくさい藝者だが、これでも幾分か、藝人の根藝人氣分をもつてゐると見える。

舞臺のお岩は、だんだんと鏡に見入る。肩息になつて來て、こりや、わしの顏かへ、どうしやうぞへなあ、と、泣き落ちた。

ひよいと、お梅ツ子を見ると、お梅ツ子は、まだ、懷中鏡をにらんでゐる。あたしは、あきれて、

「そりや、おまへの顏だよ」と、いつた。

□

狂言は、いよいよ髮梳の場となる。

お岩は、その怖ろしい顏のうつる鏡に向つて、

神も驚くこの姿、と、わめき散らす。

神も驚くなんて、いふことだけは大きいが、誰も驚いてゐる樣子はない。驚いてゐるのは宅悦一人だ。

可愛さうに、宅悦は、がたがたふるへて驚いてゐる。

お岩は、鐵漿をつけ了つて、今度は髮を梳きはじめた。

宅悦は、赤ん坊をあやす。

これは、お岩の赤ん坊だが、さつきからの騷ぎに、まだ、一

度も目などはさまさない。
ほんとに、いい赤ん坊だ。
藁がまるめて、それに着ものがきせてある。
おゝ、よう見てやつて、と、お岩が、宅悦にたのむ。
宅悦は、お岩と顔を合せるたびに、膽をつぶして、その赤ん坊を抛りだす。
なんぼ、藁の赤ん坊でも、あゝ、抛りだされては泣くだらう。

□

お岩の髪はだんだんぬける。
蚊やりの火が、ぱつと燃えて、入相の鐘がごおんと鳴る。
萬事、型の如く行つたが、こまつたことには、蚊やりの火が消えない。
『火があぶないわ』と、お梅ちやんは、心配してゐる。
くろん坊が出て來て、やつとそれを消しとめた。
風音が、どろんどろんとはひる。
お岩はひよろひよろと立ちあがつた。
髪の毛をぱつとうしろへふりかぶると、まあなんと云ふ顏だらう？
額は大きく禿げてゐる。片方の目はとび出してゐる。
まるで、芋ばたけの蛸入道が、藁灰をかぶつたやうだ。
よくもあんな、みにくい顏を、考へ出したものだと思ふと、をかしくなる。
『お梅ちやん、どうしたい、氣味がわるいかい？』と、きくと
『あたいはじめてわかつたわ』と、いふ。
『なにが』ときくと、
『あの、とびだした方の目は、からすのたまよ』と、いふ。
お岩は、また、例のしやがれ聲で、かなりだした。
やはか、おめおめ添はしやうか、と、その聲は、全くの地聲だつた。

□

出てゆかうとあせるお岩。とめだてする宅悦が、屏風をとつて遮ぎると、お岩は、ぬけ髪を手につかんだまゝ、通らうともだえる。宅悦は、蹟づいてひざををり、
お岩さまの、ぬけ毛からしたゝる血汐、と、さけぶ。
なるほど見ると、屏風には、赤い繪の具がぬつてある。
いくら、お岩が、うらめしいかしれないがぬけ毛から、血がたれるとは、よつぽど、ふとい毛だと見える。
お岩は、黒い、おはぐろの、歯がみを、左右にかみしめなが

ら
　一念、通さで、おくべきか、と、大見えをきる。
　舞臺は、ぱつとくらくなる。風音のどろどろは、打ち込みがますますはげしくなつて來て、とても風とは思へない。鐵材をのせた馬車が、橋の上を通るやうにきこえる。
　すると、舞臺の上手から、一本の竹の棒が出てきて、藥の赤ん坊を、ひつかけて、ひつぱつてゐる。
『ありや何んだいお梅ちやん？』と、きくと、
『鼠よ』と、云ふ。
　だうれで、竹のあたまに、なにか灰色のものがまいてある。
　あら！　鼠が、鼠が、と、宅悦が見つけだす。
　鼠が赤ん坊を、ひいてゆくといふことは、これが、初みゝだがと、あきれてゐるうちに、お岩は、出かけた格子戸を、ぴつたりとしめきつて、飛んで座敷へもどり、そのあとを追ひかけてさつき自分が、柱へ切り込んで置いた刀へ、その咽をひつかけた。
　お岩は、だらりと幽靈のやうなかたちにぶらさがつた。
　あの刀をしつかりと、釘でうちつけて置かなければならないわけが、これでわかる。
　あれ！　お岩さまが、あれ！　お岩さまがと、宅悦は、悲鳴をあげて逃げだした。
　をりしも花道から、歸つて來た、民谷伊右衛門。宅悦と、その七三でぴつたり出逢ふ。
『どうだい、もう出やうぢやないか？』と、あたしは、わきのお梅ッ子にきいた。
『出てもいいわ』と、何だか人まかせな返事である。

□

　あたしたちは下足札と、履き物をとりかへて、お梅藝者は吾妻下駄、あたしは靴で、劇場の外へ出た。
　まだ日が高いにもなんにも、丁度、まつぴる間で、八月なかばのおてんとさまが、もろにあたしたちを、往來のまんなかへ照しだす。往來の人は、あたしたちを、穴のあくほど見てゐる。
　あたしは、全く、まぶしかつた。
『これからどこへ行かう？』と、お梅ッ子にきくと、
『どこへでもいくわ』と、いふ。
　丁度、その時、あたしたちは、へうたん池の、前へ出る賑かな、活動小屋の通りへ出て來た。こゝは人目がまだはげしい。あたしは顏が蜂の巣にでもなるやうな氣がした。見ると、歌劇の看板がかゝつてゐる。

『お梅ちやん、おまへ、歌劇を見たことがあるかい？』と、きくと、
『ないわ』と、いふ。
『では、見ようか？』
『えゝ』と、相談はまとまつて、二人は、なんとか館と云ふ、歌劇芝居の、切符口へ立つた。
實は、四谷怪談でも見て、晩夏の妖怪氣分を味はうつもりだつたのが、どつこいさうは行かなかつた。
子供のときに一度見た、その心もちは、もう持てなかつた。目の前の事實から來る幻滅ばかりが目についた。
まして、今日は、出ツくはした相手がわるい。これは、妖怪氣分には縁の遠すぎる女だから。

□

歌劇芝居のなかへはひると驚いた。
第一小屋が小さいのに人が一ぱいつまつてゐるから、その空氣といつたらない。
『暑いのねエ』と、お梅藝者は、最初から文句を云ふ。
あたしたちは、椅子場のうしろの、揚床の上に立つて人のあたまのうしろから、舞臺を見た。
人々は、みんなして、お梅ツ子を見てゐる。序にあたしも見られた。
『こゝにゐる人たちは、みんな田舍ぺいねえ』と、お梅ちやんは云ひだした。
『しツ、』と、あたしは、小聲で云つたが、なる程ここの客種は、また揃ひも揃つて、地方から出て來たやうな人が多い。
舞臺には、西洋料理屋で、使ふやうな、ていぶるが二脚、白木綿が、なさけなささうにかけてある。
一寸、模様紙でも、切りぬいて、はりつけたら、どうにかなるものを、あんまり智慧がなさすぎると思ふと、また、どうやら、この歌劇も、幻滅に見えさうだ。
舞臺の下手に立つてゐる、小娘の服を着たりぼんの女優が、おゝでんまるくの一本松が、と、うたひだした。
あたしは、ほつと、息をした。
『どうしたの？』と、お梅ちやんが、笑ひながらきく。
『いや、どうもしないがね、あれは讃美歌のやうだから、こころぼそくなつちまつた』と、あたしはこたへた。

□

あの松は、おまへをも、ぼくをもよく知つてゐるはずだ、と

てえぶるにもたれてゐる角刈あたまの青年がいふ。

この俳優は、一寸した茶色の服を着てゐるが、はいてる靴がふるつてゐる。底の三分もあらうとい安ものだ。

臺詞の様子で察しると、これはどこかの皇子に扮してゐるのだが、いくら當世の皇子でも、安月給取のやうないでたちは、少し恐れ入つた。

すると、その皇子がまた、こんなことをいふ。

永遠に、若い命の花が咲く……ぼくたちのなかはいつまでつゞくか？

次の瞬間のことは、神様でなければ、御存知ありませんわ、と、これは、その、小娘の臺詞だ。

糊のきかない、しはくちやの服を着てゐる小娘にしては、いふことが、はいからすぎる。

『お梅ちやん、おまへ、今、あの女優が何を云つたかわかるまい？』と、きくと、

『わかるわよ、次の瞬間のことは、神様でなければ御存知ないつて云つたわよ』と、これもなかなかはいからだ。

あたしは、お梅ツ子の顔を見る。

『いやな兄さん。あたいだつて、七軒町の學校にゐたわよ』と
いふ。

舞臺では、角刈皇子が、また、こんなことをいつてゐる。

るびいの指輪だの、眞珠の首飾だの、だいやの腕輪だの、なんでも買つてやらう、と、大分お金があるらしい。

小娘は、巴里へ行けると、飛びあがつてよろこんで、衣裳をきかへに入る。

おけすとらでは、何んだか音をたてゝゐる。

背景には、どこの、歐羅巴の、漁村の景かしらないが、丘に家に、海。泥繪の具が、べつとりと塗つてある。

ところへ出て來たのが、これは、はいでるべるひとかの博士だ。西洋の湯に行くときの上着をきてゐる。

皇子の荷物が、柳行李。さすがのあたしもあいた口がふさがらない。

「見てゐられないわ」と、お梅藝者がいふ。

こゝは、御婦人席ぢやありませんからどうぞあちらへ、と、えぷろんの女がいふ。

あれは、帝劇の女優だらう？　と、立つてゐる人がいふ。

あたしたちは、とうとう逃げだした。

□

また、往來へ、出て來たあたしたちは、今度こそは、行きど

ころにまごついた。
　ともかくも、このお梅藝者は、どつか遠くへ行きたいといふ。
あたしは、おなかがすいて來た。
『何か、たべやうか？』と、きくと、
『ああ、たべてもいゝわ』と、いふ。
『なにがたべたい？』ときくと、
『なんでもいいわ』とまた人まかせな返事をする。
　あたしたちは、まつすぐに、おすし横丁を通りぬけて、廣小路へ出て、電車の線路を横切つて、漸く、少し、淺草氣分のうすらいだ向ふ側の人となつた。
　空氣と云ふものは妙なもので、ここまでくると、ここの空氣が、お梅ツ子を、藝者とは見せたくする。しかしあたしは念のために、三つの誓ひを、立てさした。
　一に、洋食店の女給を、あら！　ねいさんといはぬ事。二に女給が何かはこんで來たときに、すみませんといはぬ事。三に女給があたしの世話をするときに、あたいがするわよといはぬ事。これを封じた。
『あたい、云はないわよオ』と、お梅藝者は承知した。
　そこで、あたしたちは、あめりかんかふえといふ、西洋料理店へはいつた。

□

　中庭の植込の下には、ほそ長いたゝき池が、流れのやうに出來てゐる。その水は、飛び石の間をながれて、なかに金魚が泳いでゐる。
　あたしたちは、梧桐の、一葉散りそめたのに向つて、席を取つた。電氣扇は、お梅藝者の縮緬の袖を吹く。もう秋だ。
　ごてぬりの女給さんが大勢ゐて、なかの一人が、恐ろしく遠くから、あたしたちに挨拶をする。
『何もさう、敬して遠ざけなくつてもいいから、もつとこつちへお出でよ』と、その白いえぷろんを近よせた。
　お梅ちやんは、笑つてゐる。あたしは、まづすうぷをあつらへた。
　ぶれつど、えんど、ばたあ、これはあつらへないと持つて來ないから、あつらへるのだが、女給さんは二度きゝ直した。
　つぎに、びいふすちうすぱにしをあつらへた。女給は、白いたすきと、赤い帶とを背中に見せて、あつらへを通しに行つた。
　見ると、令孃藝者は不安さうな顏をしてゐる。
『どうしたい、お梅ちやん』と、きくと、
『どうもしないわよ』と、いふ。

『でも何だか顔色がわるいぢやないか！』と云ふと、
『實は、あたい西洋料理のたべ方をしらないの』と、どうやら泣きさうな顔になる。

□

女給さんは、ふおくに、ないふに、すぷんに、ぷれつどに、それから、ばたあを、先づさきに持つて來た。

あたしは、紙のなぷきんをひろげて、それを、白いぱんつの膝に置いた。お梅ちやんは、それで、すぷんや、ないふや、ふおくを、ふいてしまつた。

『そんなことをするとお里がわかるよ』と、云つてきかすと、お梅ツ子は、ちやんと膝の上に手を置いて、ぷれつどをながめてゐる。わんわんが、おあづけをされてゐるやうなかたちだ。

女給さんが、すうぷを持つて來て、二人の前へ別々に置いて行つた。

すみません、と、云ふところだが、令嬢藝者はすましてゐる。

あたしは、すぷんを、取り上げて、向ふ匙に、すうぷをしやくつて、音をたてずにすゝつた。

お梅ちやんは、やゝしばらくながめてゐたが、やがて、あたしの眞似をはじめる。向ふ匙には氣がついたが、お口元の風味きには、一向に氣がつかない。

すると、そこへ、びいふすちうすばにしがはこばれた。

肉がかたければ、お梅ちやんが、ないふできるのに骨がをれるだらうと思つて、この柔かい、すちうをあつらへたのだが、あぶら身と、その肉とを切りはなすことが出來ないで、こまつてゐる。

あたしは、そのないふと、ふおくを取り上げて、おつかさんが、子供に肉を、きりこまざいてやるやうに、お皿の上で、そのあぶら身と、赤い肉とを切り分けてやつた。

『あたいがするわよ』と、お梅藝者は、二度くり返した。これを若し、女給の前で云つたとすれば、禁斷を犯したその罰として、この、らんちは、全部、お梅ちやんが、支拂はなければならないところだ。

さうだの、うちでは、なにがよからうかと迷つたが、まかろに、おう、ぐれえてんを、あつらへた。

令嬢藝者は、ちいずの臭ひに、一寸、すぷんを取りかねたが、一と口たべたら、お氣に召して、お皿だけをあとに殘した。

もうおなかも一ぱいだといふので、でざあとはぬきにして、あつらへた冷たい珈琲の來るあひだを、あたしは煙草のけ…

にした。
『あたい、もう我慢が出來ないわ、一本頂戴よ』と、お梅ちやんがいふ。
その細い指は、もう、あたしが置き捨てた煙草の箱にかゝつてゐた。
すこしはなれて、長椅子に腰かけてゐた。三四人の女給さんが、お梅蘇者をのぞき込む。とうとう、ばけの皮があらはれかなつた。

□

冷たい珈琲が、はこばれた。
『…………』と、お梅ちやんは、口のうちで云つた。
それは、女給にはきこえなかつたが、卷煙草の灰を拂ふ手つきがどうも、うますぎる。令嬢とは、とても見えない、女給さんは、すまして行つてしまう。
『兄さん一人で來たんだと、隨分もてるでしやうねエ』と、お梅ツ子は、あたしに、へんな同情をする。
『あゝもてるとも、だが今日は、さつぱり駄目よ』と、あたしは肩で息をした。
お梅ツ子は、笑ひもしずにあたしの顔を見てゐたが、
『兄さん、あなた、うちに、お留守番ができて？』と、つかぬことをきく。
『あゝ、できたよ』と、あたしは何氣なく返事した。
『では、遠くへ、いけるはねえ』といふ。
『あゝ、どこへでもゆけるよ』と、あたしはこたへた。
こつぷの下へ、ていぷすを置いて、あたしは帳臺の方へ立つた。お梅ちやんは外へでる。
ていぷすを置いて出るのに、女給はなんとも云はない。なる程、今日はもてないと、思つて往來へ出てくると、
『あなた、ひどいわ』と、お梅ツ子がいふ。
『なぜ？』と、きくと、
『でも廿錢の御祝儀は、ひどいわ。あたいきまりがわるかつたわ』といふ。
『ではいくらやつたらいいんだい？』と、きくと。
『この界隈ならば、せめて一圓はやるものよ』といふ。
あたしはまた、幻滅を感じた。

□

上總一の宮は雨だつた。
大原はどしやぶりだつた。

客車の青い腰掛にもたれながら、あたしはぼんやりと、沿線の晩夏の景色をながめてゐた。

お梅藝者は、きた懐中鏡を出して、顔のつくろいをはじめた。乘り合ひの客ももう今では、それを見もしない。

女だてらの巻煙草、七三に割りつけた女優巻に、ぬき衣紋、絹張傘を膝の間へだらしなくはさんだところは、どうしても、まともには見ることの出來ない姿だ。

向ふ側にかけてゐる人たちは、みんな目をふせてゐる。

あたしは、はじめは閉口したが、しまひには、どうせそのつれだもの、何と思はれたつてかまやしないと觀念をしてしまつた。

だが、大原からは、客車のなかもがらりとすいて、浪花の停車場をすぎる頃から、雨も小ぶりになつて、外房州の海が、まぢかに見えはじめた。

小雨のなかの海を通して、すぐ思ひ出すものは、あの、それあれだ。船が一艘。煙をはいて、かすかに走つてゐる。

あたしは、おや指のさきで、一粒の涙を目のなかへかへしてやつた。

さうしてまた海をながめた。

小さい、とんねるをたくさんぬけて、小さい急な山の間を迂回して、汽車は、勝浦驛へ着いた。

あたしたちは、改札口から、雨にぬれて、停車場の前に出來てる、板づくりの休憩所へ駈け込んだ。

□

外は、また、どしやぶりだ。

雨あしが、とたんの屋根をたゝいてわたる音をきいて、令孃藝者は面白さうに笑つてゐる。

『天ぷらを揚げてるやうな音だわねえ』と云ふ。

あたしは二の句がつげなかつた。

汽車から降りた人たちは、みんなこゝへ集まつた。

この町にも自動車がある。町が小さいから自動車も小さい。

その小さい自動車へ、人々はぎつしりつまつて、赤くなりながら、雨のなかを走りだした。

それが二三臺、くたくたと往來の石に蹴つまづきながら行つてしまうと、この休憩所も、からあきになつて、雨もどうやら小止みになつた。

えゝ、お泊りさまで御座りまするか、手前は勝浦館でござりまするが、と、云つて來た男がある。印絆纏の襟地には、旅館勝浦館と染めぬいてある。

『その勝浦館と云ふのは、海に一番近いかい？』と、きくと、

へい手前どもは、海にごくお近うござりまする、と、いふ。

『それぢや、おまへのところへ行かう』と、かう云つた。

男は、人力をさがしに行つた。あたしは、煙草を吸ひはじめた。お梅ちやんは、燐寸を袂のなかにしまう。

雨は、また、ばらばらと降つて來た。

□

お梅藝者の車をさきに、あたしの車は、勝浦のせまい町筋をよたよたと走つて、町の中途から左へ曲つて、そこの坂をだらだらとあがつた。

勝浦館は石の垣をめぐらして、松の若樹を前の廣庭に植ゑて、新築の、輕い感じの、一寸した旅館だつた。

唐破風の車寄へ、お梅藝者の車がつくと、

いらつしやいまし、と、印絆纏の番頭が中腰になつて、どんなお客が出て來るかと、車の幌の開くのを待つてゐる。

幌がひらくと、なかからは、紙人形が歩いて出た。番頭が目を、ぱつちりやつてゐるところへ、あたしの車がついた。幌がひらく、とごむ人形があるいて出た。

紙人形は下駄をぬぎ、ごむ人形は靴をぬいで、玄關へ上つてそこにあつた椅子の上へ、しばらく並んで腰をかけた。

一二週間、御滞在でいらつしやいますか、それとも一兩日のお泊りで御座いますか？と番頭がきく、

お梅ちやんは、あたしの顏をのぞいてゐる。

『雨が降つたら泊ります。雨がやんだら歸ります』と、あたしは答へた。

お梅ちやんは、ただにこにこと笑つてゐる。

□

やがて、女中に案内されて、あたしたちは、二階の部屋へやつて來た。廣い部屋は、緣の欄干をへだてて、海に向つて明いてゐた。

あの、御夕飯を差し上げませうか？と、女中がいふ。

海の空氣は、もうほの青く暮れかゝつてゐる。時間を見ると夕飯の時刻は既に來てゐた。

『ともかくも、御飯は出して下さい。それからあの終列車は何時でしやうか？』と、きくと、

七時が最終で御座います、と、女中がいふ。

お梅ちやんは、また、にこにこと笑つてゐる。

して見ると、御飯をたべれば、もうそろそろ歸り仕度をしな

ければならない。この雨では海岸へ出て見ることも出來ないし。今日は、わざわざ東京から勝浦館のタ飯をたべに來たやうなものだ。それにしても雨が止んでくれゝばいゝがと思ひながら、あたしは、空の雲ゆきを眺めた。

女中は、何か、お梅ちやんと相談してゐたが、下へ卸りて行つた。

□

『榮ちやんあなた、本當に歸るつもり?』と、お梅ッ子がいふ。

『あゝ、歸らないと、伯母さんにわるいから』と、あたしはこたへた。

『だつて、七時の汽車は遲いのよ。兩國へは十二時でないとつかないのよ、うちへ歸れば一時よ。あたいのうちはせまいからあなたの泊るところがなくつてよ。一時過ぎには電車はないしそれに東京はどしやぶりだつたつて。』と、お梅ッ子は、どうやら泊つてゆきたいらしい。

『ぢやあ、泊ることにしやうか?』と、あたしがいふと、

『あしたも一日、大雨だつたつて、あさつては、汽車が不通だつたつてねエ』と、令孃藝者は、何日でもとまるつもりでゐる。

女中が、素麺を運んで來たのを見ると、そ[illegible]お椀にこして、ばかに小さい、鯽の黒いかたまりを見てゐた[illegible]、うつるお椀はまた小さい。あたしは、からだを二つに結んで、その前にすはらなければならなかつた。

女中が、お給仕をしやうとすると、お梅藝者が、

『あたしがしますから』と、いつた。あたいがするわよ、とはよく云はなかつた。

では、おまかせ申します。と、女中は行つてしまつた。

二人の間には、ちやぶ臺がある。大きな瀬戸の火鉢には、鐵瓶がかゝつてゐて、お湯がちんちんたぎつてゐる。

あたしは、それを右にして、お梅ちやんはそれを左に、互に別々たお膳を前に、海を見ながら御飯をたべることになつた。おさしみに、あはびの吸ひものに、燒肴。口とりは、いり鳥、お給仕役は、お梅藝者。

一寸、お安くないやうに見えもしやうが、このくらゐ、お安いことは外にはない。なぜならば、今日の入用は、みんなお梅ちやんのお小遣ひから出る。新來の家の令孃藝者は、また違つたものである。

御座敷を棒にふり、新歸朝の詩人をつれて、秋の隣の勝浦の雨を見にくるなぞと云ふしやれは、ほかの藝者風情には、眞似

の出來ることではない。

女中は、お膳を引きに來た。

今日は、お泊りになさいますか、いかゞなさいますか？　と、きく。

『泊ります』と、あたしは答へた。

女中の脊の角が、ちよいと上つた。お梅ちやんは、相變らずにこにこしてゐる。

□

お湯におはいりなさいまし、と、いひながら、番頭が、宿帳をつけにきた。

あたしは、だまつて、自分の名刺を、お梅ツ子に渡したが、お梅ツ子は、それへあたしの鉛筆で何やら書き添えて、番頭にやつた。

お湯におはいりなさいまし、と、番頭は、またくり返して、こかゝら海へ行く道なぞをあたしたちに教へた。

番頭が、指さす町の藥屋根の間にまざつた瓦屋根。ところどころの倉の白壁には、もう日暮れの藍が、かなり濃く染つてゐる。雨はぴつたりやんだ。

あの柳の見えるところから右へお曲りになると、海岸へ出ます、と、語る番頭は、くれかかる緣に、かたくすはつてゐる。

左に見える三ツつの崎。右に見える一つの崎。勝浦灣には白浪がさはいでゐる。ところ晴れした空からは、もう、星が一つ見える。むつくりと立ち上つた山は暗らい。

『それでは、浴衣を借りて、暮れないうちに海岸を一とまはりしやうぢやないか？』と、あたしがいひだすと、

さうなさいまし、お浴衣は、まだ參つてをりませんか？　と番頭は立つて行つた。

『同、むめ、と、書いたわよ』と、お梅ちやんが、ぽつとなる。

『どうも、それより外にしかたがあるまい』と、あたしは笑つた。

□

棒縞の浴衣の裾は短かい。旅館の下駄は、あたしの指には痛かつた。

お梅ちやんは、女中の單衣と帶を借りて、これも旅館の下駄をはいて出た。

勝浦のせまい町を、あたしたちは並んで歩く。

おたがひに、チヽチン、知れぬが花よ、世間の人に、と、そこらから踊り地をひく三味線がきこえてくる。

『なんだか、花道の出をひかれてゐるやうねエ』と、お梅ツ子が、ばかに、いきなことを云ひだす。

『こゝいらに、料理屋でもあるのだらう』と、いふと、

『あれは、稽古三味線よ。踊りのお師匠さんでもあるんでしやう』と、お梅ツ子も、やつぱり耳は持つてゐる。

すると向ふから、極彩色の女の子が、ぽつくりをはいて來た。

お梅ツ子と、ぴつたり顔を見合はせると、急にからだをくねらして、くづれるやうに馳けて行つた。

『やりきれないねエ、あゝ氣取られては』と、お梅ツ子がいふ。

『土地の半玉だらう？』と、云ふと、

『さうよ』といふ。

すると、また向ふから、湯上りと見えて、濡れ手拭を持つた女が二人。やつぱり髪を女優巻にして、細い帯を胸にしめて、おはしよりをひくくとつて、二人とも肩と肩とをくつつけて、あたしたちをよけるやうにして、道の片側を歩いてくる。

どうも、素人のやうではない。通りすがりに、あたしが、ちよいとふりかへると、向ふでもふり返つて、あたしをぢろりと見た。

『あれは何だらう』と、きくと、

『ことによつたら東京あたりの、歌劇の女優かも知れないわ』とこれは少し、お梅藝者の見當がはづれたやうに思つた。

勝浦のみじかい町のたそがれは、案外に華やかだつた。

しだれ柳を目じるしに、右へ曲つて、あたしたちは海岸へ出た。

□

たそがれの渚には、人も少ない。

濱邊の沙は、あたしの足のうらにくづれた。

浪のうねりが、黒い沙を洗つてゆくと、あたしはすぐに沖を思ふ。

沖には、あたしの愛がある。眞ツさをに暮れてゆく海の光をながめてゐると、今にも一つの都が、おぼろげに、あたしの目に見えてくるやうな氣がする。

お梅藝者が、波に、單衣の裾をぬらされたのにおどろいて、あはてゝ逃げるさまを、あたしは、ものゝ影のやうにながめてゐた。

十二三をかしらに、五つぐらゐな、男の子や、女の子が、五六人、なみうちぎはにつたはつて歩いてゆく。あたしは、その可愛らしい足跡を惜みながら、そのあとについて歩いた。

波が來ると、小さい足跡は、沙に消えた。波がひくと、またその小さい足跡は沙の上に印された。失はれたものがまた現れて、あたしをその愛の沖へ導いてゐるやうにも見えてくる。

ふり返るとお梅ちやんは、やつぱりだまつて下を向いて、あたしの殘した足跡を踏んでくる。

『お梅ちやん、くたびれたかい』と、きくと、

『いいえ、兄さん』と、その聲が、よせてくる波の音にまぎれてしまつた。

倒れる波の音は高い。沖の一つの岩に寄る波は白い。海のこちらが暗いから、海の向ふは朝だらう。こうして磯をめぐつても、沖へはどうせ出られない。

子供たちは、一たいどこまでゆくつもりだらう。

□

磯ばたの、葦簀ッ張の茶屋の灯はしめつて、人はもうそこいらにはゐなかつた。

あたしたちは、沙だらけの足を波で洗つて、たくしあげてゐた裾をおろして、また町へと歸つて來た。

勝浦の、町の家並は、夏の別れの夜をふかしてゐる。見世には靑く電氣がともつて、柱はみないかしいで見える。まつすぐなもの、きちんとしたものは、一つもなかつた。みんな、雨にくち、風にもまれて年月を、佇みつくしたものばかりのやうに見えた。

あたしたちは、そのなかを、また並んで歩いたが、このまゝ旅館へ歸るのも惜しいやうな氣がして、知らない町を、知らない方へとまがつて行つた。

藁ぶき屋根の小料理屋の、なかにはお白粉の女がゐた。紅脂(べに)をさした小女(こをんな)は、戸のかげにかくれてゐて、恐ろしいものでものぞくやうに、暗い通りをのぞいてゐた。

大漁亭といふ、小さい寄席(よせ)があつたから、あたしたちは、そこへはひつた。

まだ、夜るも早いと見えて、寄席のなかはすいてゐる。なけといはれて、うかつに鳴けよか、ほとゝぎす、と、枕をふつた浪花節も、ここできけば、おもしろい。

あたしたちは、一ときり聞いて、また外へでゝ、來た道を歸つてきた。

勝浦の町は、なかば、眠りについてゐた。

客はくらい。

あたしたちは、旅館の前まで歸つて來たが、旅館はまだ雨戸をたてない。

二階から見ると、部屋々々の、障子にみんなしまつてゐるが、なかに明りがついてゐるから、もの丶影は、なかから障子にうつてゐる。

あたしたちの、さだめた部屋の障子には、蚊帳のかけがうつすらとさしてゐた。

二人は顔を見合せた。

□

雨のおとに目をさますと、浪の音は枕に近い。

戸のすきまからさしてくる。青い光にうかされて、雨戸を明けると、海には月がかゝつてゐた。

今、降つた雨は、もう向ふの山の、白雲となつてゐる。

岬は黒い、町の灯はねむさうだ。白い波が崩れるたびに、その音が曉(あかつき)の町の屋根をつたはつて、この旅館のうしろの山に、こだまする。

波の音は、裏の山からもひびく。

空氣は、しつとりと冷たい。

旅館では、もう起きたと見えて、下の戸を繰る音がしだした。

あたしは、縁の欄干に腰をかけて、煙草をすつてゐた。

お梅ちやんも起きてきて、

『なにをしてゐるの』と。いふ。

その聲は、ひくかつたが、あたりが、しんとしてゐるから、部屋々々の障子をわたる。

『しづかに！まだみんな寢てゐるよ。』

『…………』

『きものを着かへな！ 朝の海を、見に行かうぢやないか？』

□

薔薇色の朝の雲は、小さい町の、屋根の向ふを染めてゐた。

お梅藝者は、今朝はだまつて歩いてゐる、

『どうしたい、お梅ちやん、夕べは寢られたかい？』と、きくと

『えゝ』と、いふ。

『うそだらう？ あたいはね、寢るところがかはると、もうちつとも寢られないの。それにおまへがすぐそこに石のやうになつて寢てゐるんだもの、氣づまりで、目があきあきとしちまつたよ』と、はなすと、

『いけすかない兄さん』と、いふ。

あたしは、ちよつと、拍子がぬけた。

『おまへは、部屋へはひつてから、あたいがなにいつても、返事をしなかつたねェ』と、きくと、
『いけすかない』と、またいふ。
あたしは、だまつた。
しかし、お梅ちやんのこころもちは、あたしにはよくわかる。
可愛さうに、お梅ちやんは、小さいこころにつまづきながら歩いてゐる。
あたしは、それを、どうにもしてやりやうはなかつた。
あたしは、全く、だまつてしまつた。
あたしたちは、だまつて朝の海へ來た。
朝の海の空氣は、あたしの肌には、なんとなく、ひいやりとしすぎた。

□

お梅ちやんの腰卷の、青と赤の模樣が、ぬれた沙にうつる。
あたしはそこに上げてあつた、舟のへりに腰をかけて、もり地曳の網を曳きまはる小舟のかげをながめてゐた。
夕べの子供は、また來てゐる。そのなかには、荷車のなかで見知り越しの、可愛い女の子もゐた。
あたしを見て笑つてゐる。この子供たちにしあはせだと思ふと、波はまた一とうねり。あたしの足にくづれかゝる。
お梅ちやんは、朝の地曳の綱を引くとて、あつまつてゐる娘たちや、若者の、樂しげにさゞめいてゐるさまを、ぼんやり立つてながめてゐる。
荒布ひく、土地の女の一と群れは、あたしの目に、ちがつた世界の繪と見える。
日の光りはさして來た。
見てゐるうちに海は濃い藍を增す。
沖もうつくしい。
人々の遊ぶさまもうつくしい。
今、こちらに向き直つて、あるいてくる、お梅藝者もうつくしい。
『もう歸るか?』といふと、
『あたいはまだ歸らないわ』と、云つてまた向ふをむく。
私は笑つた。
令孃藝者とは、だれがつけたか知らないが、いい名をつけたものだと思つた。

□

日の出には、晴れた天氣が、また降り出して、今日も一日、雨となりさうだ。

朝飯をたべてしまつたあたしたちは、また降りこめられて、ぼんやりとしてゐる。

お梅ちやんは、ちやぶ臺に肘をついて、だまつてゐる。

あたしは、疊に、あふのけになつて、天井をながめる。

廊下を歩く人の足音がきこえて來たが、あたしたちの部屋のわきを通るときには、その人がこつそりとあるく。緣側へ出ると、敷居の上に、あたしの足が出てゐたので、その人は、あたしたちに聲をかけた。

お早うございます、と、これは、番頭さんだつた。あたしは起き直つて、

『はい、お早う』と、いつた。

えゝ、たん、まき、と、云ふ方の名宛で、東京から電報が來てをりますが、若しや、奥さんのお名前では御座いますまいか？

あたしと、お梅ちやんは、顏を見合せた。

『たん、まき？　それは違ひます』と、あたしはこたへた。

失禮致しました。と、番頭は歸つてゆく。

たん、まき？　船の帆のやうな名だ。勝浦には緣のある名だと思ふと、をかしくなる。

お梅ちやんを見ると、今朝からまだ默つたまゝで、額にたれる前髪の毛を唇に吸ひつけながら、すつかり幻滅を味つてゐる。

□

『お梅ちやん』と、よぶと、

『はあ』と、いふ。

『おまへ、幻滅ツていふことを知つてるかい？』と、きくと、

『知らないわ』と、いふ。

『何んの事だか教へやうか？』と、いふと、

『えゝ』と、いふ。

『幻滅と云ふのはねえ』と、いふと。

『…………』

さて、このお梅藝者に、幻滅といふ言葉の意味を、どう、ひらたく說明しやうかと、一寸、あたしは考へた。

『幻滅と云ふのはねえ』

『…………』

『げつそりして、御座が醒めツちまうことだよ』

『さう』と、お梅ちやんの返事は、さつぱりお話にならない。

ところへ女中が新しくお茶を入れて來て、

今日は、お歸りで御座いますか？　と、きく

『えゝ、歸ります』と　あたしが答へると、

『から降ッちやあ』と、お梅ちやんがいふ。

『とも角も書付をよこして下さい』と、あたしがいふと、女中は笑ひ顔になつて、

いえ、お立ちになるときで宜しう御座います、と、いふ。

『それぢやあ、この人を、かたに置いて、あたしは、さきへ歸るかなあ』と、いふと、

さうなされば、どんなに、こちらが徳かしれません、と、この女中は、なかなか話せる。名まへをきくと、

うら、と、いふ。

『へえ！　勝浦の、おうらさんか？　子孫の代まで覺えて置かう』と、あたしは笑つた。

お梅ちやんは、信玄袋を出して、なにかを、ふところ紙に包んでゐたが、

『これは帳場へ、これはあなたへ、これは番頭さんゑ、これはお風呂番へ』と、その紙包を、そこの敷居の上へならべて、

『あの、お勘定は、雨が晴れたら、よこして頂戴な』と、いつた。

かしこまりました。これはどうも恐れ入ります、と、女中は丁寧に、おじぎをして、それを持つて下へ行つた。

『兄さん』と、お梅ちやんがいふ。

『なだい？』と、あたしは答へた。

『あたいもうこの商賣の足を洗ふわ』と、その、まんまるい顔を、さみしく、あげてゐる。

あたしは外の雨を見た。

勝浦の海の向ふに、烟が見える。

船の烟が。

ロシヤ全土をボルシェヴィキの天下たらしめた諸原因の歴史的考察

小野俊一

先月出た本誌の定期増刊號に自分は「ロシヤの都市とロシヤの田園」なる題のもとに、とりとめもない、彼の國に對する自分の感想を書きつけたのであつたが、本篇は即ち其の續稿の一つである。實を言へば自分がはじめて本誌から執筆の依頼を受けたのはまう可成りあの號の締切日に差し迫つた頃であり、然かも生憎と其の時の自分には手離す事の出來ぬ公私の用務が相當に重複してをつたので、時間に乏しかつた自分は止むを得ず數日間に亘つて切れ／＼の時間を利用し、最後のよるなぞは朝まで一晩を書きづめに書いて、兎も角もあんなものとし、尻切れトンボの誠に不本意極まるものではあつたが、約束の責ふさげとして其のまゝ出して置いた次第なのであつて其の埋め合せとし、自分はいま本號以下に於て前篇の言ひ足らぬところを多少補ひ度いとも思ひ、また其處で說き起した遠い過去の問題を承けて更らに、現在に近い他の諸問題に轉じてゆき度いとも思ふ。

但し談しにまるで秩序統一のない點はロシヤの國情歴史其れ自身の無秩序無統一によるのだと察して容赦し給はむ事を豫め希つて置く。

プガチョフの亂

自分は前稿に於て、聊かロシヤ國民中の主なる革命的分子であつた有識階級、彼の國での所謂「インテリゲンツイア」なるものの起原に就て述べた。其の時も既に記したるが如く、たとひ心に智と靈感とに覺醒してをつたとは云へ、また胸に堅い革命の志を藏してをつたと云へ、元來、貴族階級の生れであり地主、富豪階級の出であつた其れ等インテリゲンツイアの人々は決して／＼最初から劍や爆弾を頭に考へ、破壞的手段を選ぶの意を持つてをつたわけではない。

然らば國民の大多數を占めて居つた被勞役階級の農民はどうかと云へば、容貌こそ誠に粗暴なれ、たとへば手馴されたる熊の子の如く、極めて從順、愛す可き性質のものだつたのである。大抵の場合、彼れ等は無慈悲に打ち叩かれてもなほ尻尾を振り

年ら主人の憐みを乞ふ飼犬の如くであつた。實際、ロシヤの歴史を通覽してみる時、農民等が上に立つ有識階級の革命的分子から入智慧され煽動さるゝ事なく、自ら起つて何等かの運動をおこし、騷擾を企てたと云ふ記錄は極めて近年に到る迄、殆ど見ることが出來ないのである。或る貴族は自分等の農奴を博奕に賭けて勝負をたのしんだ、然し賭けられた農奴は特別な不滿も感ぜず、唯々として負けた舊主人から勝つた新しい主人の邑に移住して行つた。或る地主は獵犬と農奴とを交換する樣なこともあつた、然し犬とかへられても農奴は大して不平にも思はず譲りやられた方へ引きとられて行つた。また悪辣な地主の領内に於ては百姓の處女らが正式に嫁入らむが爲め領主からの許可を得やうとすれば、必ず一度は領主自身の慰みものにせられた後でなければならず、長い歳月の間に終ひには其れが習慣となつて、結婚前豫め領主によつて女とせらるゝ事を農民等は却つて、たくてかなはぬ一生の名譽なるかの如く心得るに到つた地方さへあるときいた。……彼等は自分等の運命に對し殆ど本能的とも稱す可きあきらめを持つてゐたのである。

エカテリナ二世の時、『プガチョフの亂』と稱しオレンブルグなどの市を中心として可成りの廣さに亘る騷擾が起つた。(材を其の時の史實にとつてプシュキンが「大尉の娘(カピタンスカヤ、ドーチ)」といふ小説を書き、本邦でもたしか大庭柯公氏だかの譯がある。)其の際多數の農奴が其の渦中に加はり、地主の家を燒き、官軍に歯向ひ、村を掠め都市を圍んだのであつたが、然し此の時の反亂の動機や原因には、其の後約一世紀頃からのロシヤの於ける革命騷ぎに見られる樣な「階級打破」とか「土地」とか「自由」とか云ふ樣な要素は(少くも表面にあらはれては)認められなかつた、何故かと云へば其の頃のロシヤにはまだ判然と後年の所謂「インテリゲンツイア」なる階級が形成されて居らず、誰れも農民の眼をあけ、耳をひらかうと試みたものがなかつたからである。其の時の騷亂は支那などに古くからよくある「〇〇の賊」とでも稱す可きものである。さうして、叛軍の幹部となつた少數の人間を除き殘りの多數は、決してツアールと云ふものに對して反抗したわけでさへもなかつたのだ。エカテリナ二世といふ女は其の夫のピョトル三世を殺害して自ら帝位に即いた(後篇參照)其の間際につけ込んで、プガチョフなる何處の馬の骨ともわからぬ男がシベリアの荒野から出て來て、ロシヤでは其れ以前にも度々例のある自稱皇帝(サモズヴァーネツ)となり(殺されたと云ふ國王(ゴスダリ)は實はまだ殺されたのではなく「これ此通り此處に生きて御座つしやるのぢや」と云つた)實際さうであるとすれば大反逆人である可きところのエカテリーナ女帝に弓をひき、そし

て何もわけのわからぬ、然し皇帝（ツァーリ）に對しての忠勤の念は厚い農民共が有邪無耶を其れに附和し雷同して騷ぎまわつたに過ぎない。それであるから一旦元兇が捕はれて殺されたとなると彼れ等はまるで「そんな騷きなどが一體ほんとにあつたのか」と思はれる樣にケロリカンとしてまた元の靜けさに還つた。自由思想を抱いて結局官僚の爲めに殺された彼の詩聖プシュキンの筆にも流石に「お上み」を遠慮した痕跡が諸處方々に認められて現に此の「大尉の娘」などになると、少なからす遠慮の度が過ぎ半獸的なるエカテリーナを恰ゝ菩薩の如き淑女の姿に寫し出し……などし寧ろ其の余りに御用詩人的色彩強きことを憾まねはならぬ次第なのであるが、然し其の物語りで判斷してもなほ、表面上、無頼不逞漢の元兇なるかの如く記してある此のプガチョフなる謀叛人も決して只單に惡い方ばかりの人間ではなかつた樣に思はれる。プシュキンの小說で讀んでも、一と度び雪が暴れ初めたと見るまに馬車を走らせて行く旅人の馬も車も人をも忽ちの中に埋め凍らせて終ふ樣 吹雪の狂ふ大原野の中からトボトボと歩いて現れ出て來た男であるから、素より深い學問などはあらう筈がない。斯の樣に魁偉粗暴であり、また慘忍性をも備へて云はゞまづパルチザンの頭目とも稱す可き人物だつたのであらう。然し其の荒れ土の中から生れて出た樣な男の胸にもやはり天意に悖る統治者の橫行を憤り、人道に叛する支配階級の橫暴を惡むの念が勃々と沸いて禁じ得られず、其の時恰かも起つたエカテリーナの夫殺しに堪忍袋の緒を引つ切らして、終ひに反旗を翻したのではあるまいかと云ふ疑ひを果して誰れが能く否定し得るものであらうぞ!! 「時さへ來たなら已れも天晴れ一方の國王である」などゝと將來を夢みる利己的の動機も勿論持つてゐたには相違ない。然し誰れが、彼の素性が賤しく（一說にドン、コザックの出だといふ）其の「無敎育」だつたと云ふ理由のみを以て、彼れが、自分の周圍に塗炭の苦みに陷つてをる同胞に對して抱いた心根の深淺を斷じ、或ひはまた自らの生れ出たる國土に對する彼れの愛情を論ずることが出來るか!! 後に、ロマノフ家監視のもとに書かれた其の際の歷史などか少しも信ずるに足らぬといふ事は言ふまでもない。もし其の時、運命の神の投げたサイコロの轉がり方が一寸ばかり變つてゐたら、或ひは此のプガチョフなるものの子孫かロシヤ歷代の帝位に即いてゐたかも知れない。支那で〇朱とか□□帝などと崇め奉られた樣な人物に實際此のプガチョフ以上に素性の怪しい人間が幾人あるか。最近には袁世凱の樣な例もある。さうして一旦、天下を取りさへすれば不遇や素性などは誰のさきから消り出す事、決して難しい細工ではな

い。支那などと云はず我々の日本に於ても現に豐太閤の如きは社會の最下級から出て終ひに天下を取り、「殿下」といふ稱號までつけられた人間であつたが歷史に其の素性を少しも隱し立てゝをらぬところが我々にも却つて氣持よく感ぜられる、之は僅か二代にして德川の爲めに滅された爲めだからでもあらう。之に反し、將軍とまで行かず單に平ら大名としてだけでも、相當に長い間家系の續いた場合にあつては、何時の間にか箔をつけて家の素性をごまかしたことも必ず多かつたにちがひない。話しが少々岐路に入つてしまつたが　エカテリーナ女帝の世に起つたプガチョフの亂に關聯して自分がいま玆に力說して置き度いと思ふことは、要するところ、「今次の革命前まで、現存してをつた世界の諸帝王國の君主の中で最も專制的に絕大な統治權を握り、且つまた最も莫大なる私有財產をも持つて居つたロシヤのロマノフ家の皇帝なるものも、もしロシヤの國民といふものに對する關係の上から、我々が冷靜に考へて見、其の功罪を混和し煎じ詰めて見る時には殆ど其の「神聖的」價値の大半を失つてしまひ、我々には、プガチョフの亂に際し、勝利が彼れら「賊軍」の方に歸してエカテリナ女帝が殺され、其の時限でロマノフ朝なるものが潰れてゐたとしても、ロシヤの國民なるもの、及びロシヤといふ國家なるものは、決してあれ以上に不幸にして悲慘な運命を辿らねかつたであらうとまで考へられる」といふ事である。自分は既に此の稿の前稿に於て、ロシヤのロマノフ家なる「皇室」といふものは、云はゞまづ日本に於ける德川將軍家及び其の所謂御親藩なるものに較ぶ可きものである(一〇六頁)と述べて置いたが、同じく約三百年に亘る德川の治世にも顧みて可成の惡政の跡がこゝかしこに認められるとは云へ、實は其れをロシヤのロマノフ家に較べるといふ事は多少氣の毒に堪へぬ次第なのである。其れ程までにロマノフ朝の治世なるものは少くもピヨトル一世の歿後からは實に暴政惡政の連續だつたのである。然し其れ等の事情をはつきりと頭の中に入れ樣とする爲めには、我々は少しく徹底的にロシヤ民族たるものゝ起源及び沿革を考察し、其の起源及び沿革を有するロシヤ國民の立場からして特にロマノフ王家なるものゝ由來と本體とを吟味して見なければならぬ。

ロシヤ民族の起原及びロシヤ建國の上代史

今から約一千百年の昔、第九世紀のはじめ頃までは、今日ロシヤ國民の主體をなして居るスラヴ民族なるものは別にまだ「國」と名付け得る程の社會的組織をつくる事なく、只、各自に少さな部落々々を形成する幾多の小種族に分れて、今日のヨーロッパロシヤの各地に散らばつて居たのであつた。其れ等の小種族間には殊に何等

の統一がなかつたばかりでなく、彼れ等の間にはいつも互ひに爭鬪の斷える暇がなかつた。然るに其の頃、ロシヤよりも北の方のスカンヂナヴィア、卽ち今日の瑞典、諾威、丁抹、に當る地方にはゲルマニの一族である所の彼のノルマン族が住んでをつたのであるが此の種族は天性慓悍丁度南北朝後、我が國に起つた倭寇か、亞細亞大陸の襲ふた樣に、彼れ等特有の輕舸に乘じ、千里の波濤をものともせず北はバルト海の沿岸、西はイギリス、フランスの岸、また南は遠く地中海沿岸の諸國にまで海賊的の遠征を試みてゐたのであつた、之等のノルマン人は只單に到る所に劫掠を恣にしたばかりではなく、また其れ等出掛けさきの諸國に土着し其國在來の種族と同化もして、其れ等各國の歷史に重要なる影響を與へたのであつて我々が今、論ずるロシヤの如きも卽ち彼れ等と大なる交渉を持つてゐた國の一例なのである。

丁度九世紀の半頃、其時もスラヴの諸部族間に內訌が起り國內の諸所に騷亂があつたのであるが、其の中の一方の部族から半ば自分等の應援旁々上記ノルマン人中、ルス族の酋長であつたリユーリツクなるものに「我等の全國土は廣大且つ富裕なれども只其の內に秩序なし、希はくは移り來つて我等の上に君臨し給へ」と要請して彼れリユーリツリを其の二人の兄弟及び部下と共に引つぱつて來たのである。卽ちロシヤ語にての所謂「ヴリヤーギ」(Variagi)が之である。リユーリツク各地に轉戰して終ひに國內を平定し、紀元八百六十二年、都をノヴゴロドに定め市を貫くヴオルホフ河の左岸に城砦を築きノヴゴロド太公としてはじめてロシヤ建國の源をひらいたか治世十七年の後(近親オレグ攝政のもとに)其の繼嗣イーゴルが(自立して君臨したるは九一二乃至九四五年)都を南方キエフに遷すに及んでは國內は旣に殆ど統一されてゐた。キエフの太公國といふのが卽ち之れ之である。

之れを要するに、今日、ロシヤ國民の主體となつて居る大露西亞人なるものは、元來、以前からあの土地に土着して居つた各種のスラヴ族、及び其の間に介在してやはり其の當時からヨーロツパに住んでゐた廣義に於ける各種のモンゴル族(例へば今日まで續いてをるフィン族の如き其の一例)の中に、上記のノルマン族なるヴアリヤーギが加はつて行き、其れ等各種族の血か相混和し同化して出來たものと考へてよい。其の後十三世紀の初葉から十五世紀の後葉迄で殆ど二百五十年に亘り彼の元の支配を受けるに及んで、其上に亞細亞蒙古種の血が更らにまた注入されたわけなのである。其れであるからリユーリツク以來、ロシヤ民族の上に君臨した人間は、嚴密な意味から云へ

は外來のよそものであつたのであるが、之れは然し、(余り適當な比較ではないかも知れぬが)、例へば我が國に於ける元來の意味での「大和民族」卽ち天孫民族と其れ以前から國内の各地方に土着して居つた出雲族、蝦夷、土蜘蛛、熊襲、薩摩隼人……其他の異種族との關係の樣なもので、初めのうちこそ討伐とか殺戮とか云ふ樣な血腥い爭鬪が之等の異種族間に繰り返へし行はれてゐたれ其の中次第に、一方からの威壓、他方からの歸順、互ひの混和、親睦といふ事になつて來て、終ひには其の全てのものがも早や切り離して個々別々に考慮し得られぬ程に融合同化してしまつたのであつた。但し我が國の歷史によつて考へて見ると、國が小さかつたにも拘らず、國内全部の異種族がさう云ふ樣にすつかり同化し切つてしまひ、今日我々が用ゆる如き第二次的の意味に於ける大和民族の出現を見るまでには可成りに長い歲月を要したものゝ樣である。――神武大帝か、彼の長髓彥なる者を誅して大和の橿原の地に皇居を定め給ふたのが皇紀元年であつて、日本武尊の東征せられたのは其れより七百七十年後のことである、其の時、都から大して離れてもをらぬ今の靜岡縣あたりにまだ皇威に歸順せぬ不逞の輩がウヨ〱してゐたのである。仲哀天皇、神功皇后の時(八百六十一年頃)筑紫の熊襲併びに遠く三韓までの御親征があつたけれども海を距てゝ居る朝鮮の方は其の後も動もすると貳を出し離り勝ちで千二百二年に任那か新羅の爲めに滅されては日本府も終ひに亡びてしまひ、また國内の方でも蝦夷等は屢々叛いて其の都度、討伐の軍を差し向ける必要があつた。紀古佐美が征夷大將軍となつて陸奥を征し、其の時、多賀城に會した東海、東山、阪東、諸國の歩騎五萬余にしてなほ結局賊軍の爲めに敗戰のうき目を受けたのは桓武天皇の御治世第八年(紀元千四百四十九年)の五月でありまた其の後を承けて同じく征夷大將軍となつ彼の坂上田村麿が再三、東征したのは其れより約十數年後の千四百六十年代であり源頼義が陸奥卽ち今の東北地方で蝦夷の大酋長だつた安倍貞任等一味の亂を平げた所謂前九年の役に到つては實に紀元千七百二十二年、(六百六十年晩れの西曆で數へてさへも既に第十一世紀の半過ぎ)であつた。一旦、融和し同化し終へた後には其の代りに極めて大なる團結力を生ずるといふことが事實ではあらうけれども、現に尙あのアイヌ民族なども、其の數が二萬に過ぎず北海道の片隅に追ひられてしまつてをる今日でこそ、自分の方から内地人に同化し樣として却つて「天然紀念物保存」などいふ心配までかけてゐる樣なものゝ、上古に於ける其の同化といふ事は決してしかく御手やはらかなものではなかつたのだ。太古は人の心も極めて悠長であつたから「時の推移」に其れ

に反比して小さく、假りに中世に於ける時間の半分であつたとして、舞台がまだ「蝦夷が島」に移らず此の日本の本島で行はれた所の前九年の役までに、なほ八百年以上の時がかつてゝゐる。之れには必ず種々な原因かある事であり、また勿論其の時の異民族の組み合はせにもよるのであらうが、一般に我々アジア人は西の方の人間達に比べて遙かに「意地つ張り」が強いのでないかとも思はれる。兎に角、此の事實から考へても(「今は時勢が異ふ」などと云ふ人があるかも知れないが)我々は今日朝鮮に對して當局者の取つて居る態度方法の是非如何は別問題とし、たとひ其の同化作用が理想的に行はれたとしても決して十年や二十年の短日月で、あの朝鮮半島から所謂「不逞鮮人」なるものが影を消さうなどゝ期待するわけには行くまい。況んや直接に彼れ等と接觸して居る我々の代表者等に、毫末も「小兒に對する大人」の如き大國民たるの風がなく眞面目に、ムキになつてわけのわからぬ小兒と毆合つて居る樣な現狀を以てするに於てをやである。

本論に立ち歸つて、キエフ太公イーゴル以後のロシヤを見るに、古來其の國土に在住してをつたスラヴ及びモンゴル系の諸種族と外來者なるノルマン系のヴアリヤーギとの間の融合同化作用は極めて短日月の間に完成せられたものゝ樣である。其の主なる原因の一つは、外からの侵入者であり而して征服階級となつたノルマン人が、同じ時代に彼れ等が侵入して行つたイギリス、フランス、イタリア等の外の國土に於ても現はれた樣に、此處でも遺憾なく其の新しい環境に對する強い順應性を發揮して、瞬く間に自已固有の風俗習慣の大部分を廢棄し身自ら其新國土、傳來の慣習を體承したと同時に、また彼れ等か自ら統治者の地位に立つたにも拘らず、其の感情の上に於ても、政治上に於ても、自分等の祖國なるものと何等の連絡を取らなかつた事に因る。之れは後年、名儀のみは依然リユーリツクの後裔であつても實は全然純粹なるドイツ系であつた其の後のロマノフ王家が其の故國である所のドイツを代表してロシヤ國民の上に君臨し事毎に前者の利益の爲めに計るところあつたのと較べて實によき對照をなして居る。苟も「自己の種族のみの利益擁護」といふ自覺のあるところ、其所に「其の種族」の範圍以外に亙つて同化といふ現象の見る可らざることは、實に、賢者を待たずして明かな事ではないか。

ロシヤに入つたノルマン人は、其れが彼れ等の自然其のまゝの心理から來たのであるか、或ひはまた永遠なる將來に向つて冷靜に利害得失を考へた意識的の打算によつたのであるかは知らないが、兎に角、「自分の種族ばかりの利益擁護」といふ樣な

ケチ〳〵した態度をオクビにも見せず、彼れ等は却つて、自分等自身を、其の國土の上に住つてをつたスラヴ……其の他の民族の大衆の中に同化せしめ、其處に自己といふものをまう一度大きく生れ變らせる事により更らにより雄大なる將來の飛躍を期さうとしたのであつた。其れであるから他の種族のものも、一つにはスラヴ民族の從順性によつた事勿論であるが、いつも喜んで彼れ等と其の行を共にし、力を協せて彼れ等全てに共通なる「國」威の發揚に努めたのである。彼れ等は其の變境の蠻族等と戰つて次第に其の領域を擴張して行つたが、冒險的遠征を好むノルマンの血は、之れだけではなほ未だあきたらず、彼れ等をしてドニイエプル其の他の河流に依り南下して黑海に出で屢々東ローマ帝國の領内を侵略せしめたものであつた。之がリユーリツクのノヴゴロドに奠都した時以來僅か百五十年も經たぬ十世紀末葉のことである。

イーゴルの子供はスヴイヤトスラヴといはれたが其のまた子供があの有名な「赤い お 日 樣」(クラスノエ、ソルヌイシユコ)と呼ばれた聖ウラヂーミル太公である。ロシヤ人は(まう此の頃から我々はスラヴだとかノルマンだとか……と區別して考へる必要がない)はじめの間は遠慮もなく東ローマ帝國を侵略に出かけたのであつたが、其の後之と有利なる通商條約を結んで和睦し、また其の方の傭兵英語での所謂 "Varangians" となつてサラセン人の襲來を防ぎ屢々偉功を立てたのであつた。其れらの自然的結果として東ローマ帝國の文化が次第に國内にはいつ來、また其れと同時に基督教も傳へ廣められた。キリルと呼ぶ布教僧が來朝して聖書飜譯の爲め、はじめてギリシヤ文字を土臺としてスラヴ文字(所謂「キリル文字」)を案出したことなども實にロシヤ國民にとつては重大なる事變の一つである。今日のロシヤ文字は後にピヨトル帝が此のキリル文字に改竄を加へてより簡單にしたものに過ぎぬ。紀元九百五十七年にはイーゴル大公の沒後一時(九四五——九五七年)女帝として立つてゐた其の皇后が親しくコンスタチノーポルに赴いて洗禮を受け基督教徒となり、名もギリシヤ流に改めてオルガと稱したが、其れより三十一年後の紀元九百八十八年に到り、孫のウラヂーミル太公(九八〇——一〇一五)自ら受洗して、東ローマ帝バシリウスの妹アンナを娶り都に歸つて後ギリシヤ正教を國教と定め一般國民をも自分の例にならはしめた。ラヴヂーミルの子供がヤロスラヴであるが其の治世(一〇一九乃至一〇五四年)中には基督教が益々盛んとなり、聖書の飜譯も完成し、人々はみな既に其の名を、今日我々がきく如き、イヴアン、パーヴエル、ピヨートル。ミハイル、或ひはマリヤ、アンナ等のギリシヤ名に改めてヴラヂー

ミル太公以來、東ローマの名工達を招聘して市々に建立した處のヴイザンチン式の寺院に詣でた。一〇三七――一〇四九年ヤロスラヴによつてコンスタチノーボルの聖ソフイイの堂を手本として首府キエフに建立された同じ名の寺院、また一〇四五―一〇五二年ノヴゴロドに建てられた同じ名の堂宇の如きは何れも、未だロシヤ味を加へられなかつた頃の純ヴイザンチン建築として今日までもロシヤに殘つてをるものである。

ヤロスラヴ太公は努めて國內國外の商業貿易をも獎勵し、幾多の新しき市を創立し（例へば今のモスクヴアの北、ヴオルガの岸にあるヤロスラヴル、またドルパツトにあるユーリエフの如き）ギリシヤ語の翻譯を行ひ、多くの教會を建て、其處ではまた禮拜以外、貴人、庶民の別なく子弟に初步教育をも授けしめ讀み書き算術等を殆ど强制的に敎へさせた。またロシヤ從來の制度慣習を基とし、其れに多少のヴイザンチンの法典を加味して所謂「ルスカヤ、プラヴダ（Russkaya Pravda）」なるロシヤ最初の法典を編纂し個人の生命及び財産に對する保證を與へたのも此の時であつて國民が「ヤロスラヴ賢帝（ムードルイ）」なる讃稱を捧げたのも誠に道理である。之を要するに其の當時のロシヤは年代こそ異なれ我が國の奈良朝時代と幾分趣を同じくしてをる所があつた。卽ちキエフは奈良に比す可く、東ローマ帝國は隋に比す可く、ギリシヤ正敎は之を佛法に較ぶ可く、聖ソフイアの堂は之を東大寺法隆寺と解す可く、而してヤロスラヴ賢帝は恐らく聖德太子の役を勤められたものと考へてよからう。顧みて篤と其の當時のロシヤの狀態を觀察して見ると、建國の時を去る事、何分にも日のまだ淺い時であつたから、到るところ、あらゆる方面に多くの缺陷は殘されて居つたが、然し其れ等の缺陷は、もし借すに時日を以てさへすれば、日ならずして必ず除去し改善せらる可きものである事を誰れも殆ど疑ふ必要がなく、將來偉大なる國家として發達するのに、殆ど申し分ない素質と體裁とを具へてゐたものゝ樣に思はれる。北は內海バルト海から、南は黑海、カスピ海に到り、國內を網の目の如く流れ貫いてをる多くの河川を運輸の通路とし、主として物々交換による可成りに大きな貿易が行はれてゐた、ロシヤの方からは毛皮、革、臘、蜜、小麥、其れから奴隷（後篇參照）等を出し、そして今日のドイツやスカンヂナヴイア諸國からは（バルト海及び西ドヴイナ河を通して）武器、羅紗、麻、鹽、銀、及び鮮魚が持つて來られ、ギリシヤからは絹、葡萄酒、果實、及び金を、ドナウ河地方のボルガリア人からは銀、馬匹等が輸入されまたハザールイ、ペチエニイエーギ、ボーロフツイ等の中央アジヤのステップを流浪せる蠻族さては今のウラル地方ヴオルガの支流カマ

邊にゐたボルガリヤ人種、或ひは南のアラビヤ人等からは寶石や、金銀細工品、各種の香料、薬味、また牛、馬、羊等が供給されてゐた。斯く國外との貿易が盛んになるに從つて國は次第に富んで行き、輸入せられた金銀によつてはじめて貨幣といふものゝ出來たのも此の時であつたが、然し國内にはまだ尚武の氣が滿ち〱てをつた爲め、少しばかりでも國が富めば普通は必ずすぐと頭を出す彼の成金風の如きも、此國では暫し吹く事を遠慮してゐた樣であつた。國内及び國外商業の通路たる大河のところ〱には自然の勢ひとして、物資集散の中心となる大きな都會が發生し繁榮するのを見た。「ロシヤ全國の都市の母」と云ふ名を與へらた。キエフをはじめとしチヨルニーゴフ、スモレンスク、ノヴゴロド、プスコフ、ヴィッテブスク、ポロツク、またすこし後れて、ニジユヌイ、ノヴゴロド及ヴラヂーミルの如きはみな其れである。(今日のモスクヴアの如きは其の時分はまだ一つの名もない村の樣なものに過ぎなかつた。)此れらの市々には自然多數の人間が集まつて其の地方に於ける商業及び政治の中心地になつたのであつたが、貨物と同じく、やはり國外から新たに入つて來たキリスト教もキエフを出發點とし、河を溯つて次第に北の方に傳はつて行き、はじめの間こそ外の都市ではキエフの如くに容易には市民が改宗を喜ばず多少の騷動などもあつたものゝ、其のうち次第に、遙かに原始的であつた、從來の偶像崇拜教を壓服して國民の間に廣まつて行つた。大きな市には教會の數が立ちならび鐘の音が、朝夕、空に鳴り響いてきかれた。さうして前にも述べた樣に其の頃の教會はまた、丁度或る時代に於ける日本の寺子屋と同じ樣にロシヤの國民にとつて唯一の教育機關でもあつたのだ。はじめは國王からの強制的嚴命で、貴族も平民もいや〱自分等の子弟を其處に送つて讀み書き算術を習はさせられた。讀ましたものは主として聖書に關する物語りや解釋等でまたみんなに祈禱の歌などをうたはせもした。最初はギリシヤ語からスラヴ語への飜譯ばかりであつたが後には段々とロシヤ人自身の筆になるものも出て來た。其の頃は勿論まだ印刷の術がなかつたのであるから其れ等の書物はみなそれからそれへと人の手によつて念入れに羊皮紙や厚紙の上に寫されて行つたのであるが其の「寫本」することは一つには來世に對する大なる功德として、身分の上下にかゝはらず其の頃の人々が喜んで從事した仕事であつた。

平和の教へである所のクリスト教、併びに其れに附隨してはじめられたところの、かう云つた樣な「國民教育」がノルマンの血を承けていやが上にも殺伐であつた其の頃のロシヤ人の心に多大の和らぎを與へたと云ふことは疑ひのない事實である。イ

ーゴル、スヴイヤトスラフの二代乍ら續いて、キエフ太公は何れも蠻族との戰ひに悲慘な死に方をしたのであつたが、改宗した聖ヴラヂーミル、賢ヤロスラヴ、は二人乍ら兎に角、寢臺の上に横はつて安らかに世を去つた。また以前の如く人間を殺して神への犧牲にする樣な蠻風はなくなつた。また聖ヴラヂーミル自身も其の前半生には極端に行つた多妻主義の如きもキリスト教に歸依する人間の數の多くなるに反比して次第に世の中から排斥されて行き（少くも表向きには）國王をはじめとして多くのものが一夫一婦制を守る樣になつた。

然し乍ら、斯く云つたからと云つて、彼れ等は決してそれで非戰論者などになつたわけではない。キリスト教を取り入れたとは云ふものゝ其れは主としてギリシヤ正教の外部にあらはれた寺院、服裝儀式風習……等の莊嚴なる空氣が貧弱なる神社を建てゝ「お稻荷樣」的の神を拜んでゐるよりも彼れ等の氣に入つた爲めに過ぎなかつたので、後年英米のクエーカーや又はトルストイ一派の人々が感じた樣な、戰爭を罪惡視する考へなどはまだ夢にも此の當時のロシヤ人には起り樣がなかつた。また、假りにそんな考へを抱くものがあつたものとしても、其の當時は、そんな淺言を云つてゐるわけに行かなかつたのだ、何故なれば、彼れ等の國に隣りして住んでゐた蠻族達（殊に其のうちでもポーロフツイと稱する蒙古トルコ系の種族などは）少しでも隙さへあれば忽ち大擧して攻め寄せきたる可く常に弓　張り鏃を研いて待ちかまへてゐたのであるから。

然し乍らロシヤ人の方でも決して手を束ねて之れ等蠻族等の來襲を待つてゐたわけではなく、さらぬだに彼れ等の好戰的なる血は彼等をして不斷に髀肉の嘆を感ぜしめずに置かなかつたので彼れ等は常に邊境の蠻族共（今は偶像崇拜者として從來とはちがふ新しい意味に於ても彼れ等の敵となつた異種族達）を威服し征服して、彼れ等のキリスト教王國の版圖を擴大すると同時にまた奴隸となす可き捕虜と貢をとり立てることを努めたのであつた。其の頃のロシヤの版圖は北はバルト海沿岸より今日のフインランド境、東はヴオルガの上流よりカマの流域にかゝり、南に下り高架索の一部に食ひ入つてカスピ海、黑海、西はガリシアの一部を含んで北上しバルト海に出る、殆んど今日の歐露の大半を占める大いさのものであつた。

茲に我等の最も注目す可き事は、其の當時（即ち九世紀以後十世紀、十一世紀……）のロシヤが我々が近年知つてゐたあのロシヤ帝國とはまるで似もつかぬ樣な一つの立憲國だつたと云ふことである。

筆者は道草を食ふ事の余りに長くなるを恐れぬわけではない

が、後にロマノフ朝支配下に陷つたロシヤを論ずる際のコントラストとしても、また其の後の革命運動、更らに進んでは赤化せるロシヤの現狀を、ロシヤの國民てふものの見地に立つて考へ且つ理解し樣とする爲めには、是非ともロシヤに於ける上代史（殊に其の中の初期、卽ちヴアリヤーギの招致よりはじまつて、元の來寇に到る間）の事情を相當に述べて置く必要があるのであつて、之を知らずしては、例へば、「何故に我が國其の他英米、佛、などの强國が多大なる軍事的援助を與へたにも關らずオムスクのコルチヤク政府は壞滅したか？」といふ樣な事もよくはわからず、さうして之を知つてから考へて見れば、「何故多くの欠陷あるにも拘らず、ボルシエヴイキの政府は覆る事なく旣に四ケ年近くも其の存在を續けてゐるのであらうか？」といふ樣な疑問も大體解し得ることとの樣に、少くも此の筆者自身には思はれるのである。

ヤロスラヴ太公時代のロシヤにあつては、上に述べた國の全版圖が（只今日のミンスク附近の地が彼れの異母弟によつて治められ「ポロツク公國」として別に獨立して居つた事を除けば）唯だ一人の國王たるキエフ太公によつて完全に統一され、國王は萬機を總攬し、且つ全軍隊の統帥權を握つてをつた次第であつたが、然し國內に存在する市、町、村、或ひは其れ等の集合體であるところの郡、縣とも稱す可きものは、何れも各自に一個の自治團體を形づくつて、直接間接に國の政治に參與したのであつた、此の人民の參政機官を「ヴエツチエ」（"Vetche"）と稱したが、之れはスラヴの古語でたしか「論議する」の意である。苟も自由市民たるものは何人でもみな平等の其の論議に與かる事が出來たのであるから住民の數の多い……大きな都市には大なるヴエツチエがあり、町には町、村には村でまた各々己れの大いさに準じた自分のヴエツチエがあつた。其の制度に關する詳しいことは後段に至つて述べるつもりであるが。此の自治制度はロシヤにまだリユーリツク以下のノルマン人がはいつて來なかつた時代から存在してゐたのであつて、一說によれば彼のリユーリツクを招くに至つたのも、實は決して內訌に加はつた一方のスラヴ族が、自分の身方たらしめむが爲めの自己的動機によつたのではなく、「余りに、自分等の國には內輪喧嘩が續き過ぎる」といふので各地のヴエツエチが論議した結果、「もし、何處からか、外國の强い豪族をつれて來て其れに國中を治めてもらつたら、もと〳〵外國の人間で、誰れとも緣もゆかりもないわけなのだから、却つて少しの依怙贔負もなく、みんなを至るく公平に治めて呉れやしまいか」といふ罪のない「名案」に一同贊成し、早速、一番大きな都會だつたノヴゴロド市のヴエツ

チエの議長から使者を出して、其の頃勇猛な方で最も頼もしいと思はれたノルマン族ルスの族長に前に書いた手紙の様な意を傳へたのであるとも云ふ。(註一)

さてリユーリツクがやつて來て、期に叛かず國内を統一したばかりでなく其の死後もまた、オレグ、イーゴル、スヴイヤトスラヴの如き好戰將軍が國の統治者として立つたので、漸次に其の領域をも擴げて、ヴラヂーミル、ヤロスラヴの代には既に一大國家を形成するに至つたのであつたが、然し全國を唯一人のキエフ太公のみの支配下におくと云ふ制度には多少不都合な點がないでもなかつた――一人の太公が死ぬ毎にいつも其の子供達の間に王位の繼承に關して、見るも淺ましい爭鬪が起り、骨肉の兄弟が互ひに血を流し合つた。例へば四代目のキエフ太公スヴイヤトスラヴ(九五七――九七二年)が死んだ時には其の相續爭ひたる戰亂が九ケ年に及んだ後、はじめてヴラヂーミル太公の卽位を見たのであつて、最初、長兄ヤロボルクと次兄のオレグと互ひに戰を交へ、遂ひに戰に勝つて次兄を殺したる長兄がキエフを取りたる事を知るや其の時、ヴゴロドにあつたウラヂーミルは一時北方に走つて其處で新手のヴアリヤーギを召集し再びロシヤに引き返へしてキエフに攻め入る途中ポロツクの市を占領し、領主ログヴオルダを殺し、力づくを以て、既に長兄の許嫁であつた公女ログニイエダを妻とした。之によつて出來た家系が既に書いた様に今日のミンスク附近の地を占めたポロツク公國であつて、之は其後も決してキエフ太公國の支配下に入らず別に離れて獨立國をなした。此の時の史實に材をとつて作つたのがシイエロフの書いた彼の「ログニイエダ」といふオペラである。ウラヂーミルの軍がキエフの市に近づいた時キエフには丁度新たに入つて來たキリスト敎に歸依したものと從來の多神教を信じたものとが二派をなして互ひに暗鬪を續けてゐたのだつたが、長兄ヤロボルクは内々キリスト敎徒側に好意を示して他の黨派の惡しみを受けて居ると知つたので、其れに乘じてウラジーミルは多神教派なる事を標榜して其の派のものを煽動し遂ひにヤロボルクの近侍者間に叛逆者を出さしめて之を殺しキエフを取つた。之だけでもわかる様に、後には生れ變つた様に善良な人間となり「聖ヴラヂーミル」などゝまで云はれたヴラヂーミルも其の前半生は極めて獸性の人間だつたのである。然らばいつ、如何にして其の一大轉機が彼れの心に來たのかと云ふと、或る日、ヤトヴイギなる蠻族を征して、戰ひの首尾がよかつた時、彼れが戰勝の御禮として主神たる雷神(ペルーン)の前に人身御供(ひとみ)をなさむとしたのに、人定めの鬮にキリスト信徒だつた一人のヴァリャーグの息子に當つた。けれども其のヴァリャー

グは主命を背んぜず、衆人の前で大聲を擧げて云つた「あんな神は神様ぢやない、材木だ！　今日はあつても、あしたは腐つちまう、飲み食ひも出來なけれあ口きくことも出來やしない。人間の手で材木から造つたんだから。ほんとの神樣は唯一人しきやない、あのギリシヤ人達が拜み仕へてゐる神樣が其れなんだ。あの神樣は天も地もお造りになつた。星も月も太陽もそれからおれ達人間をもお造りになつた。そして人間達を地の上に生かして下さつたんだ、けれども此の神さん達は一體何を造つたことがあるか？　神樣自身が人間に造られたんぢあないか、おれはこんな鬼共に大事なむすこをやるわけにあ行かない……もしあいつ等がほんとに神樣なんと云ふのなら自分等の中の誰か一人をよこして欲しいと云ふおれのむすこを攫つて行けばよいぢやないか何もあなた方が餘計な御心配をなさるにも當りますまい。」

勿論此のヴァリャーグと其のむすことは其の場ですぐと殺されてしまつた。然し此のヴァリャーグが死んでもむすこを雷神の犧牲とすることを承知しなかつたことと、其れが衆人の前で多神教の偶像を嘲侮した言葉とは一般の國民にも、またヴラヂーミル自身の心にも深い印象を與へぬわけに行かなかつた。そこでヴラヂーミルは、考へて見ると成程如何にも貧弱であり、根柢が淺いところの從來の多神教を棄て、何か外の宗旨を取り入れ樣と決心したのだつた。

此の噂が世人の間に傳はるや否や、其れをきいたまわりの國々ギリシヤ、ドイツ、カマ河地方のボルガリア族……其の他からは各々使者をよこして「誠に結構な御志で御座る、就ては折角御改宗に相成るのならば是非とも拙者共の年來信じてをる有難い御宗旨に……」と何れも手前味噌　あらむ限りを並べてすゝめて來たのであるが、其れ等の使者のはなしをきいた後、更らに近侍の者共や市民達とも相談し、兎に角、一度實地を見分させた上、比較してみる必要があると云ふので、人を選んで其れ等の諸國に於ける祭禮儀式の模樣を視察させにやつたのであつた。宗教と云ふものが、其の實際の「宗教」といふ意味以外にまた國交上重大なる基礎的要素となることを何處の國でもよく承知して居つたから祭壇を飾り、香の煙をゆるがせ、讃經の聲を澄ませて各々、自分の國にやつて來た觀察者の心を恍惚たらしめ、眼に隨喜の涙を流れしめやうと努めた事勿論である。然し乍ら其れ等の使者が歸つて來て、報告したいろ／＼のことを考へ合はせた上、ヴラヂーミル達は再び相談の結果其の中からキリスト教を選ぶ事に決めた、何は兎もあれ、其れは彼れ等に今迄の多神教ではまるで譯のわからなかつた然かも各人の心

に取つては實に大問題であつた「來世」といふことに就て滿足な解決を與へてくれることが出來た。當時の年代記（レトピス）が語る所によればギリシア人から「最後の審判」の繪を見せられて其の說明をきいた時、流石に勇猛なヴラヂーミル太公も其の恐ろしさに驚き且つ慄えたと云ふことである。コンスタンチノーポル卽ちツアリグラードに於けるギリシヤ正教の祭典はロシヤからの使者等に非常な印象を與へたのだつた。彼れ等は歸つて來て報告した「私共はあとで自分が考へてみてもよくはわかりませんでした、天の上に昇つてゐたのだつたか、それともやはり地の上にゐたのか？　然し此の地の上にはとてもあの樣な景色は見られませぬ、其の美しさ、神々しさといつたら、とても言葉では申されませぬ、只一つ確かに知つて居ることは、神樣がほんとに我々人間のところに下りておいでになるので、そして其の時のお祭りの儀式も、とても外の國のなどは較べることも出來ませぬ。私共は今でもまだ其の時の美しさを忘れることが出來ず、丁度一度甘いものを口にしたことのある人間がまた苦いものを嫌がる樣に、私共も、御報告致す爲めに一旦歸つては參りましたが此のまゝ此の地に留まらうとは決して思つて居りませぬ。」そこでヴラヂーミルも「おれのばあさんのオルガは恐ろしく利巧な人間だつたか、成程もしギリシヤの奴等の制度が悪いものだつたら、あの賢い女が、其れにかぶれる道理がないわい」と云つて愈々キリスト教に改宗と決めたのであつたが、流石に稀代の豪傑だけあつて其のプローセスたるやまた極めて奇拔なものであつた。彼れはギリシヤに對して戰端を開き今のクリムにあるギリシヤ領の市街コルスーンまで攻め込んで行つて、其市を占領し、さて書をギリシヤ卽ち東ローマ皇帝ヴァツシリイ（西の方の流儀で云へばバルシ或ひはバシリウス）及びコンスタンチン（兄弟二人同時に帝位についてゐた）に贈つて云ふ樣、「我が正妻として、貴殿等の令妹アンナの君を拙者に下し給へ、然し萬一御不同意とあらば拙者は直ちにコンスタンチノーポルを攻め陷し申す可し」とやつた。二人の東ローマ帝からは驚いて「いや／＼決して異存などは之なく、但し貴殿御改宗の上ならでは少々……」との返事に、「然らば、折角の御好意に免じて、拙者も熟考の上、斷然改宗と決心致し候に付き、儀式、僧侶……其の他の御用意は貴殿の方にて萬事御遺漏なき樣……」と云ふ樣な虫のよい條件を云ひ送つて敵領である其のコルスーンの市で警護の武士諸共に盛大なる受洗式を擧げ、其の後ギリシヤ教會で皇妹アンナとの結婚式を擧げて自分の都に凱旋して歸つたのが九八八年だつたのである。キエフの市民等はみな喜んで自分等も直ちに太公等の例にならつて改宗し、從來あつた

神教の偶像は公に之れに罵言嘲弄を加へた上、みなメチヤクチヤに破壞して其の何等の權威もないものである事を一般の國民に示したが、然し北の方の市々では中々さう直ぐに改宗が行はれたわけでなく、中には武力に訴へて反抗した場所などもあつた（例へばノヴゴロド）。

洗禮を受けるに當つてまで非常な詭計を弄したヴラヂーミルではあつたが、愈々改宗したとなると、まるで人間が生れ變つた樣に變つて來た。其の頃書かれた年代記（レトピス）の言葉によつても、「彼れは極めて柔和なる敬神家となつて、其の死に至る迄、自己の全力をロシヤの國土の改善と人民の福祉との爲めのみに捧げた。彼れは其の當時屢々ロシヤに襲來したる蠻族ペチェニィエギをして一度びも國土を汚さしめず、幾多の草賊を威服し平定し、キリストの敎へを廣めて各地に市を建て寺を立てた。彼れは事毎に僧正の意見を叩き、たま僧侶等に命じてロシヤの子弟達に讀み書きを授けしめた。市民の爲めにもまた近侍の爲めにも盛んなる宴を催して倶に樂しみ、また貧しきものにはいつも多大の布施を行つた……云々」ロシヤ敎會が彼れの名を聖者の數に加へ、人民が彼れに親しみ眤んで「赤いお日樣」なる名を以て呼んだのも決していはれのない事ではなかつた。（茲で「赤い」といふのは「赤い（クラスナヤ）乙女（デヴィツァ）」などゝ云ふ如く「美しい」と云ふ意味である。）

はなしが一層深く橫道にはいるが、ロシヤの古い民謠で今日迄も傳はつてゐるものに二つの種類がある。一つはキリスト敎の傳來以前、まだロシヤ人が多神敎徒として眼に見え耳に聽える自然力の發現を其のまゝ偶像にかたどり神として拜してゐた時代からの多くの唄（ペイスニ）で今日でも地方でいろ／＼の年中行事に當り（例へば雪が解けて愈々春が來た時とか、或ひは秋の刈入れがすんだ時とかに……）丁度日本の盆踊りと云つた樣に百姓の老若男女共が集つて行ふ遊戯（イグライ）に際してうたはれるもの、また、まう一つは「ブィリーナ」と云ひ十世紀の末葉頃からはじまつたものでいろ／＼の勇士（ボガトィリ）の武勇譚を述べた歌を、「グスリヤル」と云つて大抵は丁度日本の琵琶法師そのまゝの盲人が、グースリと云ふ樂器を奏で乍ら語つたものである。十六世紀イヨアン暴帝の頃までの戰國のロシヤには、宴の席に必ず此のグスリヤルが附きものであつた。此のブィリーナとかまた其の時々に書き殘された年代記（レトピス）と云ふ樣なものを、もし眞に其の時代時代に於ける民心の反映であると考へ得るならば、此のヴラヂーミル太公は實に數世紀の長きに亘つてロシヤの人民が、智、仁勇、兼ね備はつた理想的の名君であるとして崇仰して居つた人物である。何故なれば彼れ等が書いたレトピス及び彼れ等がき

くことを好んだ所謂「ヴラヂーミル詞」のブィリーナの中には半ば神秘的なる多くの勇士らにとり囲まれ、英雄中の英雄として此の「赤いお日様」のヴラヂーミルが到る處に活躍して居るのであるから。

さて斯くの如くにして、其のはじめ、王位に即き、國を統一するに當つて兄殺しの重罪までを敢てしたヴラヂーミル自身は後に、兎に角、己が前半生の罪滅ぼしをして死んで行つたわけであつたが、彼れがあの世へ旅立つや否や、あとへ殘つた其のむすこ達はまた再び、おやぢの若かつた昔にかへつて血の雨をふらした。勿論兄弟であるとは云へ、腹はみな異つてゐたのであらうけれども。長子のスヴィヤトポルクは父の死後直ちに「かうなれば、ロシヤは勿論おれのものである」とばかりにいちはやく首都キエフに腰を据ゑたのであつたが、五人の弟の中からもし萬一競爭者が現れては事面倒と先づ取敢ず手近に居つたバリス、グレブ及びスヴィャトスラヴの三人だけを殺した。其の中はじめの二人の弟はおやぢ晩年の感化があつた爲めだか少しも長兄に抵抗せずして殺されたと云ふので教會は彼れ等二人の名を聖者の數に加へ、そして當時のロシヤの社會は「兄弟思ひ」及び「柔和さ」の模範として長く二人の徳を讃め稱へたのであるが其れに反し殺害者たる兄きには「酗惡（オカヤンヌイ）」なる冠詞が歴史上永久に附せられた、（此の細のこととの様であるけれども兎に角かう云ふ社會的制裁の現れて來たといふことなども、昔しのノルマン族の社會には見られぬ現象で、之は全く、彼れ等が家族的の温かみあるスラヴ民族と混じて新社會をつくり、其の上に平和的なる宗教が加はつて來た結果である。）

四番目の弟ヤロスラヴは其の際運よくノヴゴロドにゐて殺されずにすんだのであつたが、長兄の亂行を耳にするやヴァリャーキ及びノヴゴロドの市民より成る軍隊を統率し河を南下してキエフに向ひ、兄きの軍と戰つた。其の時兄きのスヴィャトポルクの方には援軍として「ボレスラヴ勇王（フラーブルイ）」なるポーランドの王が隣國から兵をひきゐて馳せ加はつてゐたのであつたが、然し幸にして之れ等を敗走せしめ、キエフに入つて王位についた。之れがおやぢヴラヂーミルの死後足かけ五年目の一〇一九年である。「醜惡」と綽名されたる兄きは其の後何處かへ流されたまゝ其の地で死んだのだ。然し相續事件は決して之だけで方が付いたわけではなく、ヤロスラヴが王位に即いたと知るや否や、今度は北方チョルニーゴフの方に行つてゐた末弟のムスチスラヴなる男が「さううまくはやらせぬぞよ」とまた〳〵戰争をおつぱじめて來て、其の爲めにロシヤは一時、ドニエプルの流れを境とした西南（キエフ朝）及び東北（チョルニーゴフ朝）の二王國

に分裂し、ムスチスラヴの死するに及んではじめてキエフの支配下に再び統一されたのであつた。之れかヴラヂーミルの死後實に二十年目(一〇三四年)であつた。

「賢帝」なる讃稱を人民から附けられたヤロスラヴの治世に就ては既に前に記したから今は何も書かぬ、要するにおやぢ聖ヴラヂーミルをまう少しきやしやにし上品にした様な人間であつたと思へばよい。彼れは一〇五四年にやはり五人の男の子を殘して死んだのであるが、其の死ぬ前に、昔し自分自身の嘗めた苦い經驗に鑑みても、死後の國位繼承の事が心配でたまらず、あれか是かと考へた末終ひに自ら次ぎの様な相續戰爭の豫防策を案出して其れを遺言の中に述べたのであつた。卽ち彼れは一とたび自分の統一したキエフ王國を豫め子供の間に分割して與へたのであつて、此の時を限りとして兎も角もリューリック以來一つに團結して强固なる一大帝國を形づくり乍ら、其の實質に於ては極めて自由なる民主的の國家であつた「此等實質的事情は後段に詳しい」上代のロシヤは遂ひに永久に滅亡して、玆に所謂封建時代のロシヤが始まつたのである。臨終の枕邊に五人の子供を呼び集めて、彼れは懇ろに、自分死後の心得を言ひきかせたのであるが此のヤロスラヴの遺言たるや、實に其の後の封建制に際して諸侯の相互關係を定むる重要な根柢ともなり、また不幸にして多くの慘劇の原因ともなつたものなのである。人の世はまことに矛盾が多い、優しい誠心から出た愛が、却つて惡魔の「惡しみ」を生む事もある。

「さてお前達! わしも愈々此の世を去らねばならぬ、お互ひに仲よく暮して行きなさい、何故かと云つて、お前達はみんな親身の兄弟なんだ。一人の父親から生れ、また一人の母親から生れたのだ。もしお前達がお互ひに愛し合つて行くならは、神様も必ずいつもお前達の身方をして下さる。全ての外敵を退けて下さつて、お前達は平安に暮して行くことが出來る。けれども、もし之と反對に、お前達が互に憎み合ひ、仲たがひをして爭ふならば、必ずお前等自身が滅亡してしまうばかりでなく、お前等の御先祖達が實に並み〳〵ならぬ難儀をして造り上げられた此の國をも忽ち破滅させてしまう。だからお前達は是非とも仲よくして暮して行け! お互ひによく外のものゝ言ふことをきゝわけて。自分の首府であるキエフの市は此のわしの代りとして、わしの長男である、またお前等みんなの大兄さんである、イズヤスラヴに委ねて行く(外の弟達に向ひ)お前等は今迄で此のわしの言ふことをきいたと同じ様に、大兄さんの言ふ事には從はなければならぬ。之から後は大兄さんが萬事わしの代りとなるのだから。」と云つて二男のスヴィャトスラヴにはチョルーニ

ゴフセーヴェルスキイ區及びリャザン、ムーロマの兩區域を、三男のフセヴオロットにはペレヤスラヴ區域を四男のイーゴルにはウラヂーミル、ヴォルィンスクの區域をまた五男のヴャチェスラヴにはスモレルスクの區域を各々頒ち與へ長男のイズヤスラヴはキエフの屬するドニエープル區域の外にまたノヴゴロドの區域をももらつた。

ヤロスラヴは子供等に彼れ等が決して他のものゝ領土を奪ふ様なことのない様に嚴命し、そして長男に向つて「もしそれでも萬一、誰がゞ外の兄弟に對して不埒を行ふ様なことのあつた場合には、お前はいつも其の虐められたものを助けねばならぬぞ」と言ひ足した。

既に記した如く。其れ以前のロシヤの慣習は所謂總領制度であつてキエフの太公に假りにA.B.C.D.E.なる五人の男子があつたとし、其の太公が死んだ場合、最も年長なるAのみ父の後を繼ぎキエフの太公となつて全國に君臨し、B以下の兄弟等は、只單に日本流に云へば「□□の探題」とか「○○の守」とか乃至は「關東管領」。「鎭守府將軍」と云つた樣な格でキエフ太公から派遣せられ、地方の統治者となり得たに過ぎない。だから、(殊に多くの場合、兄弟の腹が異つた樣な關係もあつて、)代のかはり目毎に、殆どいつも大騷動が起つた。此の弊害を除かむが爲めにヤロスラヴ賢帝の案出した法則は、國全體を若干數の區域（"Volosti"）に分割し、其の中の一つ或ひは二つ以上組合はせたもの）を一番望ましい場所から段々と不重要なところへ大體年長の順に從つてすべての子供等各自に分ち與へるのであつて、最も年長者である長男がキエフ及びノヴゴロドの如き最も重要な部分を承繼し依然キエフ太公として「其の宗親たる地位」（ロシヤの原語でも、"Otza miesto" 即ち「父の位置で」と云ひ全然日本語と同じ意味をあらはす）を保つ可き事以外、其の他の點に於てはみな何れも一種の獨立公國となり、分離して、存在することゝしたのであつた。然し乍ら此の方則の最も著しい特徴でもあり、また大なる欠陥ともなつた點は、案出者たるヤロスラヴ太公が、古來スラヴ民族の間に傳承され來つた氏族制度（後出）を其のまゝ國家にも應用し、餘りに其の家族主義乃至家長主義とも云ふ可きものに拘泥し過ぎたる爲め、既に斯くの如く國土を分割して子供等すべてに各自の封土（"Udiel"）を分ち與へ乍らもなほロシヤの全土[illegible]を「リユーリツク」を祖先とする一大家族」の共有的所領であるとなし、其の一大家族或ひは寧しろ階級（ロシヤ語の所謂 "Knyajeskii Rod" 假りに「王族」と譯す）に屬する個々の諸公は、其の時各自の占めてをる「スタルシンストヴオ」に從つて甲、乙、或びは丙、丁、……の封

土を領有し其處の君主となるのであるが、其の領有權統治權たるや決して永久的のものではなく、宗親たるキエフの太公をはじめとし、たとひ如何なる君公と雖も其の封土を直接自分の子孫に傳へることは出來ぬと規定したことであつた。

言葉を換へていへば、リューリックに其の源を發した王族といふものゝ全體を一つのものと見て、其の內部に含まれたる個々の系統とか家族とか云ふものは之れを特に重視しなかつたのである。そしてキエフの太公國を筆頭とし、國土の優秀さの順序によつて配別されたロシヤ內の諸公國は、其の都度、全王族內に於ける所謂「年長順」("Starshinstvo")といふ事のみを絕對的の標準として諸公の間に振り當てやうとしたのである。ヤロスラヴ太公は、自分の兄弟六人の中、五人までが王位繼承爭ひの爲めに生命を落して、結局最後に殘つた唯一人の人間であつたから、外に氣兼する必要もなく自分の子供だけに全國を分け與へたこと既に記した通りである。さうして五人の子供「A.」「B.」「C.」「D.」「E.」の中、長男の「A」なるイズヤスラヴは父の死後全王族中一番の年長者として最も良き「甲」なる領地(卽ちキエフ太公國)を相續し、また「B」は「乙」領を「C」は「丙」を「D」は「丁」を「E」は「戊」をと、二男以下各々其の年の順に從つて次第に幾分づゝか段の落ちる領土をもらつたのであつたが、然し其の時定められた法則に從へば、「A」の死後キエフ太公の位を繼ぐものはの長兄「A」の子なる(a)には非ずして其の長弟たる「B」であり、同時に「B」の舊領「乙」には「C」が轉じ、「C」の舊領「丙」には「D」が轉じまた「D」のあとへは「E」がはいつて……大小全ての君公が一段づゝよい方の領地へ順々送りに國がへをす可き筈なのであつた。五人の兄弟が悉く死に絕えたところではじめて其れ等の子供達(卽ち何れもヤロスラヴの孫に當り、互ひに從兄弟の關係にある人間)の中から再び年長の順序によつてキエフ太公を出すわけとなるのだが、其れでは候補者の數が余りに多くなる事を慮れたのだらう、茲にまた、もう一つ七面倒な但し書きが附いてゐて、自分の順當が廻つて來るまで生きて居らず、一度もキエフ太公の位に卽く事なくして死んだ封侯の子孫は、王族は王族であつても、其の後はもう「年長順」の仲間から除かれロシヤの地を領有するの權利がないといふのである。此の掟に觸れて位を落され、權利を剝られた封侯達を其の當時「イズゴイ」("Izgoi")と稱し、一番まつさきに口惜しくも此「イズゴイ」となり下つたのは實際はヤロスラヴの總領息子ながら父に先立つて死んだヴラヂーミルの遺子ロスチスラであつた。國の一隅に小さな所領をお情け的にあてがはれてゐたのであつたが、元來ならば己れが當然、全露國に君臨す可き身であ

ることを思ひ浮べては、其の心中ぞ平かならむ。とても其の小天地に悠々自適するだけの悟りはひらけず、兵を集めてキエフ太公に向ひ、反逆を謀つた。幸ひに此の亂は、ロスチスラヴ自身がギリシヤ人の爲めに毒殺されたので大した面倒もなく直ちにをさまつたが、之れを手始めとして、前後二十五年に亘るイズヤスラヴのキエフ太公時代が既に、兄弟及び甥共の間に起つた王位爭奪戰の連續であつた。ヤロスラヴ賢帝の遺訓たるや其の赤心から國の前途を思つた志、また子供に對する深い愛は誠に讃稱す可きであるが、然し彼れが實際に案出した規定其のものはロシヤに不斷の内亂を起し、全國力を著しく衰微せしめ其の結果遂ひに彼の元朝の爲めに屈服の憂き目を見るに至つた主なる禍因となつたのである。「賢帝（ムードルイ）」と稱された彼れも流石に臨終間際には理性や判斷力が鈍つてゐた爲めでもあらう、彼れは豫め充分に人間心理の弱點を洞察し考慮する事が出來なかつた。勿論平和の時代であつたならば談しがまた別だつたであらうが、其の頃のロシヤといへば四方八方只、戰爭することのみを本職としてゐる様な幾多の蠻族に圍繞せられてゐたので、もし其れ等蠻族の爲めに國土を侵略せられ、人民を隷屬せしめらる事を望まぬならば、いやでも應でも常に武を練り陣容を整へて置かねばならぬ戰國の世であつた。蠻族に對する自己防衛の

必要上から何れの公國もみな武備を整へて、只其の足らぬことのみを虞れた。「武」と云ふ字は元來、「たゝかひを止めさせる」と云ふ意味だときくが、然し武備を充實させた上で、いつまでも天下が無事泰平であれば、却つて實の持ち腐れの様に感ずるのが人間心理の弱點であり、ともすれば武力を濫用して、故らに亂を醸す様になる。また同じく侵略をはじめる場合に當つては、誰れでも成る可く、勞少くして效果の多きを望む道理であり、首尾よく獲物を贏ち得た場合にも骨が硬く肉の餘り美味ならぬ蠻土を征服せむよりはなる可く、はじめから肉の柔かな同内の部分をと云ふ事になつて、封建の時代には主として内亂ばかりが起ることになる。まかり間違へば、國外の力を借りて來て、自分等の同胞を斃す事さへもやり兼ねない。之れが、逆賊の悪名を甘受し乍らも、朝鮮征伐などを初め様とはせず、ひたすらに京都ばかりを征かけた足利尊氏の心であり、また恐らく、ローマ法王に支倉六右衛門などを遣した獨眼龍政宗の心でもあつたらう、南蠻國だけが目的であつたなどゝ云ふけれどもどうも少々に疑はしい。さて封建時代にはいつてからのロシヤは如何と見るに、最初のキエフ太公イズヤスラヴ自身は一代の間に二度まで弟達の爲めに首都のキエフから追はれて國外に逃れてゐる、二度目の時には弟「B」のスヴイヤトスラヴが據を破

つてキエフ太公の位を奪ひ、其の死後はじめて歸つて來て三度目の復位をやつたのであつたが、結局自分の甥のオレグ及びバリスとの戰ひで討死した。オレグは其の一時不正式にキエフ太公となつた二番目の弟「B」の子供であり、またバリスは三番目の弟「D」の子供であつたが、共に其のおやぢか正式にキエフ太公となり得ぬうちに他界して自分等は例の「イズゴイ」となり下つたのに、「A」及び「C」なる叔父は二人乍ら薄情にも少しも領土を分け與へてくれなかつたので、憤慨して、蠻族ボーロフツイ」と結び共々に兵を擧げたのであつた。此のボーロフツイ(Polovzy)共のたてゝゐた國を支那流には「花剌子模(ホラズム)」と書き「メルヴ」「ブハーラ」「キヴア」「サマルカンド」等の都があつた)と稱するトルコ系の蠻族は、其の頃、カスピ海の沿岸から中央亞細亞にかけての大草原(ステツピ)の上に流浪的生活を送つてゐた極めて好戰的なる遊牧民族で、其れより早い時代にも度々ロシヤに侵入して來たのであつたが、ロシヤが封建時代にはいつてからは或ひは諸公の聯合軍に對し、或ひは內亂の一方に加擔して、益々頻繁に其の領土を侵しまたロシヤの方からも屢々討伐に出かける必要があつた。彼の名高い「クニャーズ・イーゴル」(Igor)といふオペラは其の當時書かれ、また盛んにうたはれた史譚民謠(バイリーナ)の一つである「イーゴル軍の歌」から其の材を取つたもので、此處でも譚の主人公たるイーゴル公(十二世紀後半、ノヴゴロド、セーヴエルスキイ市に君臨してセーヴエルスキ區域を治めてゐた君主だ)は此のボーロフツイとの戰ひに出征して戰ひ利あらず、其のむすこと共に敵軍に捕へられたのであるが、捕虜となつてゐる間に其のむすこと、ボロヴエツキイ汗の娘とが戀に陷り遂ひに許されて故國に歸るといふ樣な筋書きである。

封建制度下のロシヤに於て彼の「長年順(スタルシンストヴオ)」なる規定は殆ど我が國に於ける「三種の神器」の程度にまでも人々から重要視され神聖視されてゐたのではあつたが、然し、リューリックに源を發する王族の流れも年と共に增加して行き、また既に記したる二三の例に依つても察せらるゝ如く、彼の「イズゴイ」の制度たるや實際には殆ど資格の相等しかつた王族の間にも一朝にして非常識なる差別不公平を引き起す場合が多かつたので、其れが却つて內亂誘發の動機となり、諸公等がもう其の「年長順」なるものを度外視し、「勝たばこれ官軍、敗くればこれ賊」と云ふ樣な氣持ちになつて、自分の封土から其れよりも上等な外の封土へ、或ひはまた最高の位であつたキエフ太公の位置をねらつて攻め込むことさへ頻繁であつた。要するに、其の結果は、誰れでも內心では祖先からの遺訓である「スタルシンストヴオ」の規定を

現したのであるが、現在は王となると、其れに内々牽制され乍ら、たゞ名目に「強いもの勝ち」主義を發揮し、そしてまた實際にも世は強い者勝ちの形勢に落ち付く場合の方が多かつた。南側に據つて北側の方が榮えたのと同じ様な理由からである。自分はいま茲に其の當時の混亂せるロシヤの史實を一々記述するの煩はしさは避けるがヤロスラヴ死後約二百年間に内亂と名付け得可き内亂の勃發する事大小八十三回、異種族よりの來襲を受けたる事四十六回、國外に討伐軍を送りたる事前記ポーロフツイに對してのみにても實に十八回、而してキエフ太公國併びに他の公國の君位繼承戰に參與したる諸公の數が前後合せて二百九十三人に上ると云つたゞけで大體其一斑を知り得るであらう。たとひ其間にロシヤの仁德帝とも稱す可き一代の名君「ヴラヂーミル、モノマツハ」がキエフ太公の位に卽いで、全國土を統一し、外には強く外敵を征して大いに國威を發揚し、内には仁政を敷いて全國民憧憬の的となつたとは云へ、其は只僅かなる一時に過ぎず(在位一一一三―一一二五年)不幸にして彼れの一とたび沒するや世は再び刈菰と亂れて殆ど之れを收拾す可き方策もなかつた。後段に到つて判明するが如く、我々が此の日本に於て建國以來一貫して戴いてをる様な光輝ある皇室(卽ち國民全ての宗親であり、さうして歷代國民に仁政のみを垂れ給ふ……申し分のない皇室)に、多少なりとも比較する事が出來やうかと思はれる樣な皇室は、ロシヤに於ては此の時限り其の跡を斷つた。眞に「王道」とも稱す可きものはロシヤにありては此の十二世紀中葉に於けるヴラヂーミル、モノマツハを最後の王として全然其の影を沒し、其の後起つて君公の位に卽いたものは、或ひは其れがたとひ相當に、立派なる君主であつた場合にしても、單に一地方的の主權者だつたに過ぎず(例へば北方スズダル地方に君臨したる聖アレクサンドル、ニイエヴスキイ公、南ロシヤに於けるダニエル、ガリツキイ公の如き)、また、たとひ全國を統一し、外敵を破り、國の面目を新たにした君主であつた場合、(例へばイヨアン三世の如き、また所謂ピヨトル「大帝」の如き)にしても、對國民的の立場から見れば既に其れ等はみな「王者」と稱するよりも寧ろ「覇者」と稱す可き本質のものであつて、云はゞロシヤに於ける北條氏足利氏である。さうして其れ等歷代の主權者の間には、兎に角國に對して勳功の方が多かつた」と考へる北條泰時、時賴、時宗に比す可き少數の「名君」を除いて、我等は其處に餘りに多く北條高時、或ひは足利義滿、義政……如き執政者の續出した事を憾まねばならぬ次第であるのだ。

既に十二世紀の末葉に當つてはキエフの市の衰頽が實に著しい

ものであつた。ロシヤ全國の首都として、また新しき文化、及び商業の中心地として曾ては其の壯觀人目を驚かしめたる美はしき市もいまは次第に衰へて行きうらぶれて行つた。絶え間もなく起つた公位爭奪の戰ひ、加ふるに屢々行はれたるポーロフツイの侵掠に苦んで、キエフの市及び其れを中心としてひろがれるドニエプル領の住民等には各自に移り住む可き新しき場所を索めては棲み慣れた土地を去つて行くものが多かつた。其の大半は西の方、カルパツトの山々を望んで移り行つたのであつたがまた他のものはヴオルガの中流及上流を溯つて、今日のヴイヤツトカ或ひはペルミ(ウラル)地方或ひは其れより更らに北の方までも涯もなく續いて居る「森林(ポリエシエ)」の中にはいつて行つた。之れ等カルパツトの山の中、或ひはヴオルガに沿ふた森の中に住んでをれば、もう流石のポーロフツイも襲ふては來ず、また諸公等の喧嘩の飛沫を食ふ心配もなかつた。御大名方にはこんな邊鄙な土地ははじめから問題ではなく、只何よりも、政權の中心だつたキエフが大切だつたのであるから。然し乍ら其れから間もない十三世紀のはじめになると、其の大事な中心だつたキエフは益々凋落し其の代りとして、其れ以前邊鄙であつた地方に三つの新しい國家的生活の中心が現はれ、其れを圍つて次第に多くの人民が集まつて來た。其三つの中心とは即ち、「ノヴゴロド」「ヴラヂーミル」及び「ガリツチ」の三市である。第一のノヴゴロドは誰れも知る如く今はペトログラードから汽車で南に六時間ばかり行つたところ、イルメンの湖から丁度ヴオルホフ河が流れ出たばかりの兩岸に跨つてゐる人口二萬六千ばかりの小都會にすぎぬが、此まちは既に述べた如く、ロシヤにまだリユーリツクなどの來なかつた頃から存在してゐたので、之れが十二世紀の後半キエフが衰へる頃から其れに反比して次第に重大な意味を持つ樣になつて來、殊に彼の「ヴエツチエ」なる民主政治の制度を特別に發達せしめ、同じ名を以て呼ばれた一つの獨立共和國の首府となつて、其の全盛を極めた十三、四世紀に當つては北は白海、東は遠くウラルにまで其の領土を擴げ、西ヨーロツパ諸國とも大々的に商賣をして、世人からは恰も人間の如く「ノヴゴロド大殿樣」と呼ばるゝに到つたのだ。また第二のヴラヂーミルは此の十三世紀の初めになつて、モスクヴアの東方、ヴオルガの一支流の岸に新しく出來たまちで其れを中心として北部ロシヤに於ける諸公國の統一が完成されロストヴオ、スズダル太公國の首府となつた。第三のガリツチは三つの中で(ロシヤの歴史には)一番意味が少なくドナウ河に平行して黒海に注ぐドニエストル河の上流、今日の所謂ガリツイアに出來たので、之れは間もなく異種族の手に移つたのではあるが、此處には

また王族にもあらず、さらばまた人民階級にもあらざる「貴族階級」による政治の發達を見た。之れ等三つの互ひに相異つた政治的原動力――「ヴイエチエ」、「王族」併びに「貴族階級」――は以前キエフ太公時代にあつては共に確たる平衡を保つ事なく、互ひに抑制し、然かも同時に遠慮し乍ら其の存在を續けて來たのであつたが、今や各々一つ宛の異なつた地方に於て其の中の一つの力が他の二つの力を完全に懾服して、國政を左右し得る位置にまで達したのであつた。其れ故、キエフ太公國の代りとして機を同じくして現出した此れ等三つの新しい國家が各々相異つた個々別々の途をとつて發展し行き、また、後にまるで異つた運命を持つて終つたといふことは決して怪しに當らぬ事だらうと思ふ。我々が知つて居つたロマノフ王朝統治下のロシヤ、また我々が今日見る所の混亂狀態に陷れるロシヤ……其れ等の事情全ての淵源をなして居る此れ等上古のロシヤに特別に發達した國家社會制度を、自分は後段に於て更らに詳しく讀者と共に吟味し解剖して見たいつもりであるか、然し其れに先立ち、(多少順序が轉倒する嫌ひもあるけれども)同じく後年のロシヤといふものに多大の影響を與へた彼の蒙古人の襲來を片付けて置かう。

國の中心がキエフから前記三つの新しい首都に移つたと殆ど時を同じくして(十三世紀初葉)、ロシヤには、また新しい外敵が現れて來た。即ち其一つは何れも西ヨーロッパの民族で後に說く如く西北の方、バルト海沿岸から侵入して來たドイツ民族同じく其れとグルになつて西の國境を侵したリトヴア族、更らに北方フインランドの方から押せ寄せて來た瑞典人の勢力であつたが、然し其れ等全てのものにもまして、遙かに怖しかつたのは突然、南の方から(彼のボーロフツイの代りとして)ロシヤの國土を襲ふた別な遊牧的アジア民族即ち蒙古人であつて、彼れ等はロシヤの領土を侵略し、其所に殆ど二百五十年間の虐政を布いて極力國を崩壞せしめたのであつた。以下暫くの間、我々は東洋史の領域にはいつて行かねばならぬので、此の事はまた一方に於て如何に其の後のロシヤと云ふ國に、東洋的、アジア的の要素が、(國民の血統の方にも、また制度文物の方にも)入り込んで行つたかと云ふ事を證據立ててゐるわけである。

鐵木眞と云ふ男は西歷一一六二年に其當時アムールの上流に遊牧しゐた一蒙古種族の汗の子として生れたのであつたが幼少にして父を失ひ、四十に到る頃まで己れの部下を率ゐて轉戰し次第に其の周圍の種族を威壓し征服して勢を强め終ひに一二〇六年、即ち彼れが四十五歲の時、今もバイカル湖の東を東北に向つて流れる黑龍江の支流斡難河の上に即位式を擧げて自ら

成吉思汗と稱した。元の太祖が卽ち之である。其の時稀世の英傑、彼れ成吉思汗が天地を一と呑みにし口から虹を吐く樣な意氣込みではじめて帝位に登つた其の同じ場所が、今、アメリカ仕込みの猶太人である通稱「赤鄕夫」を頭に載く極東共和國、我が國の參謀本部流に云へば所謂「綏衛國」とかの首都であるチタの近くだつたことを想見し吾人また多少の感慨なきを得ない。一と度び位に卽くや成吉思汗は忽ちにして内外蒙古を征服し、西夏を亡ぼし、南は金を威迫し、西征して中亞アジアに畏兀兒を倒し、實に疾風迅雷の如き勢を以て、今日のトルキスタンに出で、黑契丹（西遼）及び花剌子模（卽ちボーロフツイの國）の二強國を征服し愈々ロシヤの東南に迫つたのであつた。

元來、我々が此所で云ふ蒙古人或ひは韃靼なるものは決して一つの民族ではない、彼れ等は今日の東部シベリヤ、内外蒙古から中央アジアの一部にかけての大草原の下に太古から水草を追ふて流浪して居つた幾多の異種族、小群族の總稱である。之れ等の「群族」は各々一人の汗を頭に戴いて獨立割據し、互ひに爭鬪のみを事として居たので、其の勢力たるや常には其の場に於て直ちに相殺減せられて殆ど顧慮するに足らぬものであつたのだが、一度び之れ等の群族の多數が一致團結して立ちたる場合には忽ちにして大河の決するが如き勢となつて之れを阻止す可き方法がなかつた、例へば既に一度第四世紀から八世紀の頃にも斯くの如く團結したる蒙古族の群れが次ぎから次ぎへとアジアの草原を出てヨーロッパを襲ひ、到る所に殺戮侵掠を逞しうして歐人を震駭せしめたのであつて所謂「グン族、アヴアル族、ウーグル（ハンガリア）族等の移動」といふのが之である。力は到る所に潜んで只、其れを一手に執り纏め得可き英傑の出るのを待つて居たのであつた――此の時の蒙古の事を想へば今の支那だとても、現在こそ、只ドングリの背較べ的内亂を事として居るが、いつ如何なる英傑が出て忽ち強大なる一つの力にあれを纏め上げぬものとも計られない。

成吉思汗麾下の二將哲伯及び速不台の軍が高架索を橫切り、カスピ海の岸を南に迂廻して、其の當時南ロシヤ一帶の草原を領しゐたるボーロフツイの軍を破つた時、敗走したるボーロフツイはロシヤ領に逃げ込んで伏して其の援助を乞ふた。其の時、蒙古軍の方からは彼れ等が決してロシヤに侵入する意志を有する者ではなく、却つてロシヤ多年の仇敵であるボーロフツイの「馬飼ひ野郎共」をやつつけに來たばかりだからと云つて懇ろに協力を申入れ來たのであつたが、之れまで夢にも蒙古人など云ふものを知らなかつたロシヤ南部の諸公等はガリツイア公ムスチスラウの意見に從つて兎も角もボーロフツイを援け、見ず識

らずの蒙古人の方を敵とする事にきめた。そして最初の會戰は今もアゾフ海に流れ入るカルカの岸で行はれたのであつたが不幸にしてロシヤ側は諸軍の間に行動の一致を缺き殊にはまた援けを乞ふて來たポーロフツイ自身が不埒にも戰ひ半に無斷撤退をやつた爲め結局總潰れとなつて六人の君公が枕を並べて討死するといふ樣な實にロシヤ始まつて以來未曾有の大敗北に終つた。退却するロシヤ軍を逐ひ途上到る所家を燒き人を殺し暴虐のあらん限りを盡して蒙古軍はキエフの方に進んで來たのであつたが、キエフの前方僅かに數十露里の邊りまでやつて來て、何故とも知れず突然、踵をかへして退却し、はじめ現れ出て來たカスピ海のあなたの、涯しもない草原の中に再び其の影を消してしまつた。

恐惶から鎭まり、壞たれた町や村に歸り、燒かれた家の跡を片付けながら、ロシヤ人は口々に論爭して、抑々「タタール」とは全體何者であるか？　何處から、そして何をしにやつて來たのであらうか？　と寄り〳〵大いに考へたのであつだが結局其の時のロシヤ人の多くは自ら次の樣に解決して安心したのであつた。「あの人間達が果して何者であつたかは唯一人の神樣ばかりが御承知のことたんだ、おれ達年來の罪をお咎めになる爲めにあんな恐ろしいものをお遣しになつたのだ、だから途中までで、また後へ呼び返してしまはれた、まう之だけでおれ達も必ず悔い改めるだらうと思はれたので。」此の第一回の來寇は一二二三乃至四年のことであつた。キリスト教に歸依し敬神的の念に滿ちた人民の方が勝手にこんな解釋をつけてまで自ら謹慎したのに反し不幸にして統治者側たる諸公の方は一向「後悔」の樣子などを見せたかつた。蒙古人が去つてしまうや否や彼れ等は亦た依然として舊の如く年來の內爭を續け、萬一再び彼の蒙古人なるものゝ押し寄せ來らむ時には……と、互ひに一致團結して豫め其の防禦策を講ずる樣な殊勝な心掛けに微塵も出さなかつた。其の當時のロシヤは要するに毛利元就の所謂「一本づゝになつた矢」の樣なものであつたのだ、もしみんなが一緒に、彼の聖ヴラヂーミルや賢ヤロスラヴ、治世の頃の樣に、全部一と束になつてゐたものとしたら、恐らく如何な蒙古の軍でもロシヤに勝つことは出來なかつたであらう。少くとも全ロシヤを征服し終はるなどと云ふ事は决して出來なかつたに違ひない。

斯くして早くも十二年の月日が過ぎた。其の間、一二二七年には流石の成吉思汗も七十三才で世を去り、其の翌々年第三子の窩濶台(元太宗)が其の後を嗣いだが、卽位すると同時に彼れは自分の甥なる拔都にカスピ海の北及び西に橫はる土地を「自分自ら征伐して取れ」と云つて「讓つた」のであつた。此の

の統率の下に、蒙古人が二度目にロシヤを襲ふて來た年に先立つて、ロシヤには多くの天變地異が起り「愈々世の終りではないか」と國中の人々を怯かさせた――天には彗星が現はれ、著しい日蝕が起り、或ひは全國土に亘つての地震があり、未だ曾て見られなかつた様な怖しい旱魃の結果森林は自然に火を發して燃え續き、天は其の煙りに蔽はれて白晝も日の光りが見えなかつた、そしてまたノヴゴロドとスモレンスクの地方には飢饉が起り、黑死病が流行つた。或ひは之れ等と同じ様な天災が其當時アジア大陸の方にも起り其れが蒙古民族をして大々的に西侵の師を起さしめた原因となつたのであつたかも知れない――少くも自分等が動物學的見地から考へた所では、恐らくそんな事があつたのではなからうかと察せられる。兎に角、紀元一二三六年になつて此の拔都といふ男を頭とし總勢實に三十萬の元軍がロシヤに向つて進み、然かも此の軍勢の後方からは更らに彼れ等の全家族なる女子供が一切の家畜の群を引連れて徹底的に移住して來たのだ。彼れ等は此の度びは遙かに北の方の途を取り、中央亞細亞から西北に進み、今日のトルガイ、ウラルスクを過ぎ、北に折れてウラル山脈の南をサマーラに出、先づカマ地方を領してゐたボルガリア種族を襲ふて血祭りをあげたが更らに南下し乍ら西進して其の翌一二三七年にはリヤザン公國の南端に達し、「住民及び家畜の十分の一だけを出せ」といふ條件で降服をすすめた。然るにリヤザン公國は「もしおれ達が一人殘らず倒れたら、其の時こそは何も彼もくれてやろ」とやり反したので、「然らば……」と云つて忽ちにして猛烈な戰ひとなり、終ひに此のリヤザン公國は言葉通りに燒野原と化せられてしまつた。外の諸公國は此のリヤザンにあげられたる「蒙古襲來」の烽火を見、阿鼻叫喚の聲をきいても誰れも力を協す可く自分から戰ひに馳せ加はるものもなく、また此のタタール軍を擊退せむが爲めに互ひに、一致共同して當らうと云ふ計畫を立てることもなかつた。實に悲しくもまた歎はしきは此の時の蒙古襲來に際して、ロシヤの諸公國が互ひに何等の聯合をも結ばずして各自孤立したるまゝに戰つたことである。たとひ個々の市町、別々の國々に於ては統治者たる君公も一般の國民もみなよく心を協せて死にもの狂ひに戰つたのであつたが、然し要するに「矢は一本づゝ次第に折られて行つた」のであつた。其の頃ロシヤの封建的領土の中で最も小さかつたリヤザン公國でもなほ北海道位の大いさはあつたが、此所などでは實際に國中の人間が女も子供も「一人殘らず」此の戰ひで殺された。エヴパチイコロヴラートといふ一人の勇士は故國に此の不幸が起つた時、丁度南の方に行つてたのだつたが、歸つて來て、其の荒廢した

る樣を見、自分部下の僅かばかりの手兵と共に旣に北方ヴラヂーミル公國に向つて進んでゐた蒙古人の軍中に飛び入つて鬼神の如くに暴れ狂つた。蒙古人ははじめはこれを討死したリヤザンの人間等の死靈であると思つて怖れ乍ら戰つたが、遂ひに之を倒し、少數の生き殘つた部下のものには、其の非常なる勇氣に敬服して、敢て手を觸れ樣としなかつた。

蒙古人はリヤザンの全土を荒野と化して後ち北上して所謂ロストヴオ、スズダル大公國に入りまだ小さな町だつた今日のモスクヴアを侵掠した上で愈々其の首都ヴラヂーミルを襲ふた。其の時ヴラヂーミルの太公ユーリイ二世は兵を募る可く他に行つて留守であつたが、家族のものはみな市に殘されてゐた。市民は最後まで町を死守して決して降らぬ決心をし、さうして實際彼れ等は全部枕をならべて死んだのであつた。市にゐた僧正のミトロフアーンは市民を勵まして叫んだ「子供等よ!!! 死ぬ事を怖がるまい。只、束の間にしてうつらう此の世のいのちは意とするに足りない。我々はたゞ、決して盡ることなき、天上のいのちのことだけを考へやう、天使(アンゲル)の如く生きむが爲めに。このミトロフアーン自身がお前方の保證者である、もしあの蠻人共が槍を以て市を奪ひ我々のいのちを奪つた場合には、我々は必ずあの世に於て神クリストから常盤なる勝利の榮冠を承けるといふことを」。市民は雄々しく町を守り戰つたけれども衆寡敵せず町は遂ひに敵の手に落ちたので、火をかけられたウスペンスキイ寺院の中に坐して、太公の一家族も、僧正も、また多くの市民等も從容として此の世を去つた。斯くして首都ヴラヂーミルを取つた蒙古人は支隊を分つてスズダル太公國の各地を襲ひ、例へば翌る一二三八年の二月には一ケ月の間に十四の市を取り徹底的に此の太公國を破壞した。太公ユーリイ二世はシチ河の岸で一戰を交へたが之れもはかなく敗れて自分自らも戰死した。

蒙古人は其れからまた方面を西南にとつてノヴゴロドの領域に侵入し先づトヴエリ、タルヂヨツクの二市を掠奪した後ち、當時ロシア第一の大都だつたノヴゴロドに向つて進んだのであつたが、町を去ること百露里ばかりのところまで來た時、旣に春が近づき河川には水が流れ初め、またあのまはりに非常に多い沼や湖にも氷が解けかけて來たので、最初の計畫を見かぎり、踵を東南にかへしてスモレンスク、チヨルニーゴフの二公國を荒し乍ら依然ポーロフツイの住んでゐた南ロシヤの草原(ステップ)に侵入して行つた。其の途上で彼れ等から襲はれたチヨルニーゴフ公國の首都コゼルスクでは市民すべてが、市と、其のまだ幼少だつた君公とを守護して英雄的に奮戰し、拔群の大軍に包圍せ

らるゝ事四十九日、遂ひに一人殘らず倒るゝまで決して敵に降らなかつた。メチヤクチヤにやられたポーロフツイの中から約四萬のものは逃れて西に走り遠くハンガリアまで落ち延びて此の時以來其處の人民となつた。斯くの如くロシア東南の草原を其の手に收めて後、拔都(アドイ)は更らに踵を廻らしてロシヤの領土に侵入し、(一二三九年)大體以前(一二二三—四年)智伯(チイエピエ)及び速不(スブタイ)等の取つたと同じ路をとつてキエフに向ひ進軍した。南ロシヤの諸公等は何れも勇敢に戰つたのであつたが彼れ等もまた不幸にして北部の諸公等と同じくいつも個々別々に行動した爲め、戰ひ利あらず、終ひに拔都をしてペレヤスラヴ、キエフ、チヨルニーゴフ、ヴオルインスク及びガリシア五公國の領域を馬蹄に蹂躙し殘毀に歸せしめたのだ。キエフの市の陷つたのは翌一二四〇年であつたが、市は思ふ存分に掠奪せられ、市民の大半は虐殺された。

此の時、蒙古軍の爲めに捕へられたドミトリイといふ貴族があつたが、此の上、ロシヤの土地が更らに烈しく蒙軍の爲めに荒されることを避け樣として拔都に向ひ言葉巧みにハンガリアに遠征せむ事をすゝめたところが、「成程よからう」と云ふ事になつて、更らに西征しバイタルを頭としたる別軍はポーランドに突入して(今日所屬問題でドイツ、ポーランド兩國が兵を出し、英佛二國の間までも揉めて居る)あのシレジア地方をも侵略し、有名なる「ヴアールシユタツトの激戰」では大いにポーランド、ドイツ二國の騎士軍を破り、到る處に放火、殺人掠奪を逞しうし、また、ブドイ自身の統率したる本軍はハンガリアに侵入し、行く〳〵其の別軍をも合併して、首府ペストを陷れ、更らに猛進して、東ローマ帝國の領内にも侵入したのであつたが、モラヴイアに於てチエヒ族の爲めに一撃を蒙り、且つ太宗ウゲデイ死して、自分とは仲の惡かつた其の子のガユーク(定宗)が位に即いたときいたので、其れ以上の遠征は思ひ止まり軍をかへしてロシヤ東南の草原に歸り、一二四三年カスピ海の北方、ヴオルガの河口に近きサライに都を定めて欽察(キプチアク)國を建設し、爾來、ロシヤの大半を支配下に置いて毎年過酷なる朝貢を出さしめた。其れより後、(固より此の欽察國にも盛衰消長があつたけれども、)兎に角約二世紀半に亙る蒙古人の征服がロシヤと云ふ國及び國民に如何なる變化、影響を與へたと云ふことは後段に述べることゝして、玆には先づ最初に、其れ以前に於けるロシヤの政治組織と國民生活とに就て書く。

太古、中央亞細亞から出て歐羅巴大陸に移つたアリアン人種は分れて五つの民族となる、即ちグレコ、イタリア族、ケルト族、ゲルマン族リトヴア族及びスラヴ族がこれだ。其の中で今、

我々の問題とするスラヴ族なるものが始めて腰を落ち付けた場處は彼のカルパット山脈に沿ふた一帶の地方であつたらしく、其れがまた後に三つに分れ、東に移つたのがロシヤ人となり、西に進んだのが今のチエホ、スラヴアツク及びポーランド等の祖先となり、また南に行つたのがボルガリア及びセルビア人種となつた。七世紀から九世紀に亘る頃には之れ等枝分れのしたスラヴ族は各々別々に(まだ根柢は固まらぬが)兎に角、國家を建てゝゐた、例へばチエツク、モラヴイア、ポーランド、ボルガリア、ロシア、其れから少し後れてセルビアが建つた。其の時代の彼れ等の國家制度は何れに於ても家長主義に基いてゐた、外の枝分れは省略して、玆には只ロシアの事だけを述べる。

ロシアのスラヴ族はまた幾つもの小さな種族("Plemya")に分れて、詳しい事は煩はしいから略すが、各々、ある地方(多くは河や湖の岸)を本據として一定の領域を占領してゐたのだ。之れ等小さなる種族の各々はまた若干數の互ひに獨立せる血族即ちロード("Rod")なるものから組み立てられてをり、之れ等の血族はまた各々自分等の好みによつて選定した一定の土地を占有して別々に離れて住んでゐた。また何分、人間の數は少ないのに國は恐ろしく廣かつたのだから土地だけはどうでも勝手にすることが出來たのだ。各血族の長は「スタリイエーシナ」(即ち最年長者)と稱して、自分の血族内の事に關しては、絶大なる權限を持つてゐ、また極めて古い時代には、其の血族に屬する不動産は全て此の最年長者の所有物であつたのだが、其の後、時が經過すると共に一つの血族に屬する「家族」("Semiya")といふ様な一段小さい單位も出來て來、また次第に其れ等の家族個々の所有權をも認める様になつて來た。(これに類似したる原始的の「大家族制度」は我が國に於ても現に今日地方の諸處にまだ維持されてをるさうで、更らに其れが今日一般に見られる「小家族制度」に移り變つて行くあいだのいろいろの階程は、我等が到る處に、日常親しく目撃してをる次第である。)種族全部にかゝはる様な問題が起された時、例へば敵が現れて、戰をはじめねばならぬと云ふ様な時には、其に屬する全ての血族はみんな一ケ處に會して總會議即ち「ヴイエチエ」に集まり、各スタリイエーシナは自分の血族を代表して互ひに相談し、事件を處決した。然し此の時代に於ける斯くの如き「ヴイエチエ」は後年に於ける之れとは異なり其の開かれる事が極めて稀だつたものである。

其の後、歲月が經ち、種族といふものもまた血族と云ふものも次第に其の領有地を擴げ、大きな面積の上に散ばる様になつては、只に同種族に屬する各血族間の連絡が粗弱になつて來た

ばかりでなく血族といふもの其れ自身すらもまた或る程度まで分れ〳〵に崩壞して、玆にはじめて一つ〳〵に獨立したる家族といふものになつた。

モンゴリア族などとは異ひ、スラヴ族はいつも定住的生活を送る人種であつた。森の傍らで川や沼を一方に控へた樣な安全な場所を選び、彼れ等は簡單な木造の屋を建てゝ土地を耕し、家畜を養ひ、また森林を伐採し、森に獵し、河や湖に漁つた外、既に其の頃から盛んに蜜蜂を飼つて蜜や蠟をも採つた。そして物々交換によつて隣接して居る人間の間には原始的の「商賣」が行はれてゐた。涯もない平野のあちらこちらに、斯くの如き一つ〳〵の家族なるものが各々區域を定めて自分自身の畠を持ち、草原を持ち（牧草の爲めの）、森林を持つてゐた、以前共產的に血族全てに屬した不動產がまう此の時分には、多くの家族の間に分割されてゐたのだ。同じ樣な理由によつて、血族統治者の權力にも變化があつた。廣く大きな面積の上に散らばつた同じ血族の異家族等を一人の「最年長者」が管理して行くことは事實不可能の事になつたので、自然、其の權力は減小して、其の代りに各家族の父親が、「戸主」（"Domovladyka"）として權力を得る樣になつた。

血族的の團結が崩れるに從つて、各家族の血統といふ事に對する感情も段々とより寬大になつて來、何か事件があつて集合し團結する場合にも、今はもう血族關係（"Rodstvo"）といふ事を標準とはせず、近住關係（"Sossedstvo"）といふ事のみを標準として寄り合ふ樣になつた。同じ一地方に住む家族は其れ等が同一血族たると否とを論ぜず、各々自分等の戸主を出して、其の地方に於ける「ヴイエチエ」を組織し、互ひに相談の上で（投票によらず）其の中から一人の統治者を、依然、「最年長者」と云ふ名をつけて選んだ。即ち此の時代に到り此の「ヴイエチエ」なる制度は家族を單位とし、其の戸主を代表者としたる、ロシヤ農村の自治的機官となり終つたのであつた。（上段四八頁參照）。彼れ等はみんなの利害關係が一致する場合にはオプシチーナ（"Obstchina"）と云ふ集團を組織した、之は「共有」といふ意味であるが、またザドルーガ（"Zadruga"）即ち「お互ひどつこ」と呼ぶ事もあり、或ひは「ヴイエルフイ」（"Vierfi"）即ち「繩」と云ふ名で呼ばれることもあつた、「結ばれ合つて」と云ふ意味なのである。之れを要するに以前各血族の間に共產的に所有されてゐた財產の一部は其れを組織してゐた家族の有に歸し、又其外の一部は、同血族或ひは異血族に屬する者から成り立つた一地方々々の共有財產、即ち各種のオプシチーナに段々と變つて行つたのである。之がまう少し程度の進んだ場合

には單に血族ばかりではなく種族まで異つた家族同志が寄り合つて此のオプシチーナを作る樣にまでになつたのであるがさう云ふ現象は二つ以上の異種族の領域が互ひに隣接してゐる樣な地方、或ひは二つ以上の種族が同時に殖民し移住しはじめた樣な場所に普通見られた。

さうしてゐるうちに、今迄は離れ／＼になつてゐた家が互ひに集まつて「村」だとか「町」だとか云ふ新しい社會團體を作る樣にもなつた。さういふ村や町の周圍には外敵の來襲に備へる爲めに壁や板圍ゐの作られるのが常だつた。けれども「都市」と名づけ得る樣な大きなまちの出來たのはロシヤに多少乍らも國内及び國外の商業が盛んになつてから後のことである。其の頃のロシヤの外國貿易に就ては前にも述べて置いたが、（四五頁參照）其の主たる相手の市場は北に於てはスカンヂナヴイア及びドイツであり、また南に於ては東ローマ帝國（即ちギリシヤ）及びロシヤの東南部から中央アジアにかけて存在した諸種族共の國（第九―一〇世紀に於てはハザール族の王國）であつたから自然ノヴゴロド・キエフとは其の北及び南の關門となり、また其の間を最短距離に聯絡する水路は國中で最も往來の繁かつた大道であつた。之れを其の頃「大水路」("Velikii Vodnyi Puti")と稱し、バルト海から今のペトログラード（其の頃はまだまちも何もなかつたけれども）に入港しニィエヴァの河流を遡つてラドガの湖に出で、それから更らにヴオルホフ河を遡つて南下すると其の頃イルメン、スラヴ族の都であつたノヴゴロドに着く、イルメン湖にはいり、其れから眞南にロヴト河を分水嶺まで上つて西ドヴナの上流に聯絡し、右にまわつて其のまゝ西ドヴイナを下れば、間もなくポロチヤネ族（スラヴの一種族）の都だつたポロツクに着くし、また途中からドニイエプルの上流に入つて行けば、すぐにラデイミチ族（同じくスラヴの一種族）の都スモレンスクがある、其れからあとはまうドニイエプルの流れのまゝに下つて自然と黒海に出、更らにギリシヤまでも行かれるのであつて、ポリヤネ族の都だつたキエフは丁度其のドニイエプルの岸に位置し、またセヴリヤネ族の都チヨルニーゴフは其少し北から東に支流デイエスナを遡つたところにあつた。之れ等及び之れに類似の他のまち／＼には、農業を棄て、自ら物を製産することを止め、只既に出來たものを交換する事ばかりを新たに專門とした人間の階級、即ち商人が次第に集まつて住み、貨物集散地といふ關係上、自然其の貯藏場（即ち倉庫）といふものなども澤山に出來てきた。またさう云ふ都市が出來て來ると益々いろ／＼な需要に迫られて、勿論、幼稚な程度乍らに、製造工業」といふ樣なことにも專門に從ふ人間がふえて來、茲に「

謂工人階級なるものの出現をも見た。外國の商人達(主としてヴアリヤギ)もやつて來て住んでゐた。取引が行はれ、船は貨物を積み込み、隊商は隊伍を整へて或ひはギリシヤへ、或ひは中央アジアへと旅立つて行つた。かうなつて來ると貨物を都會の倉庫に入れて貯藏して置く間にも、また其れを積出して何處かへ送る場合にも何分物騒極まる世の中であつただけになほ更ら充分に武裝して其れを守備する人間が必要となつて來、其の必要に應じて斯う云ふ樣な都會には「ドルヂンヌイ」("Druziny")と稱する特殊の軍隊が發生した。「ドルヂンヌイ」と云ふのは「守護武士團」とでも譯したらよからうか、元來、一種の傭兵制度の軍隊であつて、市民の中からの志願兵と、「騎士」とも稱す可き戰爭本職の人間とから組織され、主としてはヴアリヤギであつたが其の人種や素性は必ずしも一定せず極めて種々雜多であつた。之れ等の軍隊の頭棟としては普通ヴアリヤギの司令官がをり、これをノルマン語で"Konungi"(隊長)と云つたのが、後にスラヴ語となり終ひに轉じてロシヤ語の「クニヤズ」となつたので、語原から云へばロシヤ語の「王公」といふ字は英語の"King"獨逸の"Koenig"などゝ全然同じ事である。自分は「ドルヂンヌイ」を元來一種の傭兵であると、云つたが、然しほんと云ふと之れは果して正しいかどうかわからぬ。——彼れ等は或る場合には自分等自身、種々なる貨物をもつて、其れを自らの武器で安全に警護し乍ら商賣をした、(即ち此の場合には自ら武裝してゐた商人だつたに過ぎぬ、また或る場合には市に傭はれて其の都市を守護しまた其の都市に出入する隊商の守護にも當つた、(之れが即ち本則たる傭兵の場合である)、然るにまた第三の場合には、(之を年代的に云へば三者の中で最も晩いのだらうが)彼れ等の隊長たる「コンヌンギ」が種々なる機會に際し、自分等が守護を托されてゐた市で權力を握り、終ひに「君公」とし其の都市の主人公となりすましたのである。後段に到つてもう少しはつきりするが、元來、此の時代の都市なるものは、恰かも一國の首府の樣なもので、其れを圍繞してゐる或る廣さの土地は、其の中にある町や村の全てを含めて其の土地に從屬してをるのであつたから、既に一都市の主人となれば其れは即ち、大なり小なり、一つの「公國」の君主となつたわけである。斯くの如きヴアリヤグ系統の「君公」及び「公國」なるものは、實は彼の九世紀中に於けるリユーリツク一味の招致以前にも既にロシヤに見られたのであつたが、また其の時代には之れ等ヴアリヤグのコンヌンギとは別にスラヴ人自身の中から出た、各地方の「君公」もあつたので其の當時ロシヤの古語で之れを「マール」("Mal")と稱した。

元來純粹なるスラヴ民族といふものは自分の隣りにある異人種の國に對しては天性、極めて平和的の民族で、歴史を繙いて見ても決して彼れ等自身が自分の方からすき好んで積極的に異人種國を侵略しに行つたと云ふ例はないのであるが、然し其れと殆ど反比例的に自分等と同じスラヴに屬する他民族に對しては、(否、更らに之れよりも緣の近い自分等の仲間同志に對してさへ)彼れ等は何等の容赦も思ひやりもなく、直ちにムキになつて食つてかゝる缺點を持つてゐた。(註二參照)九世紀の半リユーリツク兄弟等のやつて來る前にはロシヤの各地に割據した諸種族間に內訌の絕え間がなかつたと既に述べたが、之れはスラヴ民族同志だつた爲めにだうしてもまるく納らなかつたのだ。自分達でもよく其の缺點を知つてゐて、「これには一つ他處から誰かを賴んで來て……」と各地のヴイエチエで決議した上でノヴゴロドの「最年長者(スタリイエーシナ)」からリユーリツク等に贈つた手紙の文句も(四一頁參照)やはりスラヴの第一特徵をよく表はしてゐる。

以上、リユーリツク等の一族がまだやつて來なかつた頃のロシヤの國民生活に就ては既に少しく記す所があつたが、愈々之れ等新來の新しい王族によつてはじめて國內が平定され、其の統一された狀態が(時に斷續はしたが)兎に角約二百年の間繼續し、聖ヴラヂーミルや賢ヤラスラヴの如き太公を唯一人の國王と仰ぎロシヤ全國に新しい文化の根が下され、或る意味に於ては其の花さへも既に咲きかけてゐた所謂「キエフ太公國時代」―然るにまた、子を思ふ親心でヤロスラヴの殘した遺言の「年長順(スタルシンストウオ)」を基礎とする王位繼承法が却つて仇となり、統一が崩れて全ロシヤが再び分裂し內亂の絕ゆるひまなきに到つた封建戰國の時代……更らにまた蒙古の拔都が約五十萬の同族を引率してロシヤの全土を荒廢に歸せしめ、其の全人口を約十分の一まで激減せしめたる程の殺戮を敢てしたる後に都をサライに定めて全露國に虐政をしきたる欽察國(キプチアク)の時代……其れ等の諸期間に於けるロシヤ國民の社會的生活を今一層具體的に說明して、後に我々が承知つて居つたあのロマノフ王朝の政治なるものが彼の蒙古人の虐政にもまして如何にロシヤの國民といふ者に取つては不自然なものであつたかと云ふことを明確ならしめ、またロシヤ國民間に於ける自由思想の淵源が如何に深遠であるかと云ふことを述べて、赤化せる今日のロシヤの將來をトする材料の一つともなさむが爲め、自分は供覽用標本のつもりで其の時代に於ける民主的共和國「ノヴゴロド領」を選んで以下少しく、其の社會及び政治組織の解剖を試み度く思ふ。(未完)

(お断り)

最初、少くもロマノフ家の初期までは此稿で片付けるつもりでゐたのだつたが、まるで別な事を本職とする身は、いろ〳〵の仕事に暇をとられて、またゾロ尻切れトンボの様な恰好に終つた、讀者の御寛容を乞ふ次第である。

(註一)「ロシヤといふ今日の國名の起原に關しては學者の間に數ケの異說があつて長い間、論爭せられ然かも未だに、解決がついてゐない様なわけで、從つて、其れが九世紀に移住して來たノルマン族中の一種族ルスの名に基くのだといふ說にも幾多の反對はある。またロシヤ語で「ヴアリヤギ」(Voryagi)と云ふのは "Varangus" "Varingus" 英語の "Varangian" などゝ同じ原語をスラヴ讀みにして出來た言葉で、通常、人種の名の樣に使ふけれども元來は「高貴の人に抱へられた武士の徒黨」即ちロシヤ語のドルジンニキ("Drujinniki")と云ふ意味である。其れ故九世紀にスラヴから招れてロシヤにやつて來たヴアリヤギが北方スカンヂナヴイアから入つて來たものとしても、其の全部が果して同じノルマン族の人間ばかりであつたかどうかは素よりわからない。

(註二)但し今日我々の所謂「大露西亞人(ヴエリッコルース)」なるものは決して純粹なるスラヴ族ではなく。彼れ等の祖先となつたスラヴの分枝は彼のノルマン族の血を受ける以前に早くも既に其の頃からヨーロッパに土着して居つたフイン族其の他のモンゴル種とも混じ其の後更らにまた二百五十年の長きに亘つて亞細亞蒙古の血を受け入れたのでスラヴ特有の此の第二の缺點の方は其の爲めに餘程薄らいだ樣であるが其の代りにはまた第一の長所の方も其の後頗る曖昧となつて、少くも政府當局者は歴代大いに帝國主義、侵略主義を發揮したわけであつた。之に反して同じくスラヴ系の民族でも例へば彼のポーランド人の如きは、比較的に他民族の血を受ける事が少なく、稍完全にスラヴの血統を維持してをる爲めに、其特徴たる第一の長所も保存されて、(同じスラヴ系以外の國家に對しては)侵略主義を發揮したことがなかつたけれども其の代り兄弟分たるロシヤなどゝは昔からいつも犬と猿の樣な關係であり、また國内に於てもいつも國政に與る王族貴族の間に烈しい内訌の絶ゆる暇がなかつた。ポーランドが誰れも知る如く露墺普三國から暴力を以て三度の分割を行はれ一時全く亡びてしまつたと云ふ悲慘な運命は素より大いに同情に價するけれども其の當時の歴史を讀んで見るとポーランド滅亡の主なる原因の一つは確かに國難をよそにし、ポーランド自身の王公貴族の多數が汲々として只私利のみを計り、また、瑣々たる感情に囚はれて内爭に熱中した結果であつた樣に見える。再び新たに生れ出た今日のポーランド共和國には、今後まら第一の樣な亡國的缺陷の勿論出ない事を信ずるけれども、第二の感情問題に到つては、果して其れが新興國の社會から大半影を消したかどうかと筆者の如きは今尚ほ多少の「杞憂」なき能はずである。

古美術の都奈良

笹川臨風

一

天平勝寶四年(西紀七百五十二年)夏四月九日、三笠山の草は緑に萌えて、春日の森の青葉若葉は目覺むるばかりに鮮かであつた頃、東大寺に大佛開眼の式が嚴かに營まれた。是日に天皇は文武百官を扈從して、親しく此に行幸あらせられる。儀式は一に元旦と同じく、五位以上は禮服を着け、六位以下は當色の服を着用して、綺羅星の如く居流れた。聚る所の僧侶は無慮一萬人と算せられ、雅樂寮及諸寺刹の音樂は咸く來集し、王臣諸氏の五節舞、久米舞、楯伏、踏歌、袍袴等の歌舞は春風の吹くが如く、又秋雨の到るが如く東西に聲を發し、庭を分ちて演奏せられた。金色の光眩ゆき迄に輝き渡れる五丈三尺五寸の大佛の巨像の御前に天花降り灑ぎ、迦陵頻伽の聲朗かに響ける光景は、極樂淨土をさながら今目の前に見るやうであつた。佛法東に歸してより以來、齋會の儀式盛なるは未だ曾て有らざるほどの壯觀であつたのである。

聖德太子が佛法興隆の御事業は聖武天皇の大佛建立に至つて、大成したのであつた。寺塔の造營は歷朝奉佛のしるしとして流行し、法興寺(後の元興寺)は崇峻推古の朝に渉りて建立せられ、四天王寺、蜂岡寺、(後の廣隆寺)法隆寺、中宮尼寺、橘尼寺(後の菩提寺)池後尼寺(後の法起寺)等は聖德太子の本願に依りて造營せられ、藥師寺は持統文武の二朝に創建せられ、大安寺は推古の朝に建てられたる熊凝寺にして、舒明、皇極の二朝に其工を成し、興福寺は藤原鎌足に依りて建てられ、弘福寺は齊明天皇の朝に創立せられた。世は元興・法隆・大安・興福・藥師の五寺と聖武天皇の御建立になつた東大寺・西大寺とを併せて南都七大寺と稱した。元興・大安・興福・藥師の四寺は、奈良奠都以後、いづれも新都に移轉せられたものであつたが、此他、新藥師寺は光明子の建立と稱せられ、唐招提寺は淳仁天皇の朝に建てられたるが如き、奈良の都を環りて、梵殿貝塔は、

立環列したのであつた。

聖德太子は、憲法十七條の第二條に於いて、「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり、則ち四生の終歸、萬國の極宗なり、何の世何の人か是の法を貴ばざる、人尤も惡しきは鮮し、能く教ふれば之に從ふ、それ三寶に歸せざれば何を以て枉れるを直うせん」と仰せられて、佛教を道德的基礎と定められた。しかも此道德的基礎は一轉し、個人より政治に及び、孝德天皇の大化改新以後次第に政治と佛教との接近を見、推古朝に於ける法興寺、齊明朝に於ける弘福寺、天武持統二朝に於ける大安寺、文武・元明・元正朝に於ける藥師寺の如く、朝廷には祈願所ありて中央の講經祈請を掌らしめ諸國に國分寺を置きて、地方の祈願所となさしめた。此の設も完備したりしは實に聖武の朝で、天平十三年に、國分二寺建營の勅を發せられ、僧寺を金光明四天王護國之寺といひ、尼寺を法華滅罪之寺と稱し、東大寺を總國分寺とし、法華寺を總國分尼寺とした。此總國分寺なる東大寺に巨大なる驚異すべき佛像を安置して、日本全國民信仰の對象となさんことは、聖武が政教一致の精神を具體化せんとする見地より出た大規模の御計畫であつた。「種々の法の中には佛の大御言し國家護るがたには勝れたりと聞し召して食國天下の諸國に最勝王經を坐せる盧舍那佛つくりまつるとして云々」とは天平二十一年四月一日、大佛前に於ける詔勅であつた。

大佛建立に就いては天平十五年の詔勅に、「粤に天平十五年歲癸未に次る十月十五日を以て、菩薩の大願を發し、盧舍那佛金銅像一軀を造り奉る、國銅を盡くし、象を鎔し、大山を削りて以て堂を構へ、廣く法界に及して、朕が智識となす、遂に同じく利益を蒙らしめて共に菩提を致さん、夫れ天下の富を有つ者は朕なり、天下の勢を有つものは朕なり、此の富勢を以て此の尊像を造る事の成り易くして、心の至り難し」と仰せられて發願の大趣旨を宣傳せられてゐるが、强制して民衆の累をなさんことに就いては、少からぬ憂慮を惱ませられて、「但し徒らに人を勞するありて、能く聖を感ずることなく、或は誹謗を生じて、反て罪辜に墮せんことを恐る、是の故に、智識に預る者は懇に至誠を發し、各々介福を招かん、宜しく每日盧舍那佛を三拜すべく、自ら當に念に存し、各々盧舍那佛を造るべきなり、如し更に人の一枝の草、一把の土を持ち、助けて像を造らんと情願するものあらば、恣に之を許せ、國郡等の司、此事に因りて百姓を侵擾し、强ゐて收斂せしむる勿れ」と、嚴に戒飭せられてゐる。

聖武天皇の大發願はさることながら、從來丈六の銅佛繡佛は少からず處々に建立されてゐた。推古の十三年四月には勅あり

て皇太子大臣諸王諸臣共に發願して丈六の巨像銅繡各一軀を作らしめ給はつた。孝德の大化元年藤原鎌足は丈六の釋迦像を造り、天智の二年三月には僧善安、遠江の白仙寺を開いて丈六の佛像を安置し、同七年には大安寺に丈六の釋迦像を造つた。笠置山の彌勒の石像の如きは自然石に彫刻したものであるから、巨大ではあつたが、佛像は丈六を以て其最大としてゐたのである。然るに聖武が一軀五丈三尺五寸の巨像を鑄造し給ふに至つたのは、總國分寺の本尊たるが故に殊に此壯擧に及んだのには相違なく、一面に天平時代の盛なるを語り、一面に聖武の豪華を示したものではあるが、之には必ずしも粉本のないではなからう。唐の中宗の嗣聖五年に明堂及天堂なる大建築を起してゐる。明堂は高さ二百九十四尺、方三百尺にして、すべて三層、下層は四時に法り、各々方に隨つて色を異にし、中層は十二辰に法り、上を圓蓋となし、九龍之を捧げ、上層は二十四氣に法り、亦圓蓋をなし、上に鐵鳳高さ一丈なるものを施し、飾るに黄金を以てし、號して萬象神宮と曰ふ又明堂の北に天堂五級を起し、大像を貯へた。僧懐義作る所の夾紵大像である。其三級に至れば俯して明堂を視るとあるから、此堂の高きことは推して知るべく、從つて此像の巨大なることも推察される。固より此像は銅でも石でもなく、布帛から造られたもので、恐くは夾紵の漆像であつたらう。しかもそれは平面の畫像でなくして、立體の巨像であつた。此大建築此巨像の話は渡唐の我が使節留學生僧侶等が親しく見聞して、之を聖武天皇の御耳に入れたことであらう。盛に絢爛なる唐代文化を取入れて、我が文化を作らんとするに鋭意であらせられた、天皇が之に刺戟され給はつたことは云ふまでもなからう。盧舍那佛像建立の御願は斯くして發したのであらうと臆測されるのである。

奈良朝の文化を唐代文化の模倣だと云ふ。しかし此模倣なるものを單に他人の後塵を拜すると云ふ義に解すれば、そこに少からぬ誤謬がある。唐代の文化を移植せんとしたのは、我が文化を建設せん爲めであつた。我が島帝國にも彼に劣らぬ文化を建設せんとの國家的抱負より出でて之が移植に鋭意であつた。唯に彼が文化の華美なるを羨んで、鵜の眞似する烏の類に倣はんとするのではなくして、少くとも唐代文化に劣らぬもの、或はそれ以上の文化を此に建設せんとする大抱負を以て、文化移植に努めたのであつた。盧舍那佛像の建立の如きは、此大抱負の發現に外ならぬ。夾紵の大像を造つた唐朝を凌駕して、金銅の巨像を佛教中心の信仰對象とせんとしたのは、我が島帝國の誇りであつたのである。

奈良の舊都を繞つて、今に其偉觀を保つてゐる所の古刹古佛

像は、いづれも島帝國の抱負を語るべきもので、古文化の名殘りである。模倣の二字に囚はれて、之を單なる唐代文化の追隨となすものは、未だ島帝國の抱負を知了せぬものである。聖德太子が朝鮮及隋唐の文化を輸入されてたのも、單に彼が文化を模倣しようなどと云ふ浮薄なる氣紛れから出たものではない。彼をも凌駕せんずる島帝國の文化を樹立しようと云ふ高遠なる理想を以て其一生の御事業となされたのである。日出處の天子書を日沒處の天子に致すと云へる對等的國交文書を送せられたのを見ても、其抱負の一端を諒知するに難くはあるまい。法隆寺四天王寺の伽藍は此見地からして、建立されたものである。法隆寺の建築佛像壁畫等が燦然たる古文化の光を今に發輝してゐるのは、決して偶然でない。聖武天皇が東大寺の建立、大佛の開眼をなされたのも、天平時代の藝術が絢爛の美觀を呈するのも、此抱負の表現に外ならぬ。此抱負は國史を通じて致る處に現はれてゐる。東山の文化も明治の文化も亦此抱負から將來され、建設されたのである。故に奈良朝の後を承けたる平安朝の文化も、東山時代についだ江戸時代の文化も、すべて日本化された新文化を樹立して、日本獨得のものを作り出してゐるではないか。

盧舍那佛像建立の御本願が天平十二年に發せられたことは、天平勝寶元年十二月八幡宮神前への勅に「いぬる辰の年河内の國大縣郡の智識寺にます盧舍那佛を禮み奉りて、則ち朕も造りまつらんと思へども」とありて、此辰年は天平十二年庚辰のことであれば御發願の既に久しき以前であつたことが分る。越えて三年、天平十五年十月十三日大佛鑄造の詔があつて、甲賀寺を以て其寺地と定められた。翌十六年十一月、始めて佛像の模像及骨柱を建て、天皇親臨して手づから其繩を引かせられた。しかし其工は成らずして、更に天平十七年八月二十三日、奈良に大佛の地壇を築かれ、翌十九年九月二十九日、其鑄造に着手したのであつた。而して其竣功は實に天平勝寶元年であつたのである。天平十二年よりして九年の歳月を經て此御本願は目たくも達せられたのであつた。

盧舍那佛を中心として天平の藝術は興起した。推古朝から始まり飛鳥朝を經て向上して來た我が藝術は殆ど一致の天平時代に入りて其絕頂に達つしたのである。東大寺を始め、法隆・元興・大安・與福・藥師・西大・唐招提寺の諸大刹を有したる奈良は、天平時代を中央にして、上は推古飛鳥より、下は平安鎌倉の各時代に於ける藝術の粹を鍾めて、燦然たる古藝術の寶庫である。元興寺は子院極樂院の外に舊跡の觀るべきものなく、大安寺も其舊觀をとゞめないが、法華法輪・法起・般若・不退・新藥師・白毫・

秋篠・喜光・海龍王等の諸寺は、猶臨氣に在りし昔の面影を偲ばせるに足りる。時代の黒風白雨は、容易なく南都を吹き捲くつたが、佛教藝術は其黒闇々裡に燗々たる光を放つて、今に千年内外の美觀を呈してゐる。

二

奈良の夏は暑い。水に乏しい所であるから、暑を避くべき好個の納涼地がない。春日の森の奥ならば緑蔭深い處もあらう。古刹の大廂裡ならば殿角微凉を生ずる處もあらう。しかし一體に苦熱甚しく、冬が寒いとともに夏は又凌ぎ難いほどに熱い。秋は山間の紅葉霜に染みて濃く、棹鹿の鳴く音もあはれに、銀杏の葉の黄ばんだあたりには、五層の寶塔が流れ行く秋の雲間に屹然と立つてゐるなど、蕭條たる古都の秋には棄て難い風情がある。殷々たる鐘の聲は今も昔も異らないが、亡び行く榮華の跡を弔ふ哀調は又なく淋しい。但し水とし云へば、猿澤の池、佐保川、月を宿すには餘りに便りがない。三笠の山の月影は千里の游子をして望郷の念に堪へさらしむるものがあつたが、南都の月には水に映ずる美しさがない。暗がり峠、龍田越、長谷越、奈良坂と、青垣繞れる大和の地は、四山環周して、他に出るに不便であつた。兒の手柏の奈良坂を越えると、木津の流が茫然として、沙白く水清く帶の如くに繞り行く。上手には笠置の山が聳立ち、神童子、鹿背山、海住山が眺瞬を展いたやうに起伏する。鬱蒼たる佳氣は其間にはかなく便りなく今に立迷うてゐるのである。宏謨深略であらせられた聖武天皇が紫香樂の都に慊らずして、恭仁の宮を思ひ、紫香樂の宮を思ひ、難波の宮を思うて、遷都の屢々あらせられたのも偶然ではあるまい。時雨がそぼ降り、雪が降り積む奈良は又なく寒い。萬葉詩人は或は「我袖に降りつむ雪も流れ行きて、妹が袂にいゆきふれぬか」と詠じ、或は「降る雪の空にけぬべく戀ふれども、逢ふよしをなみ、月ぞ經にける」と嘆じて、冷い雪に、熱烈な相思の情を寄せてゐるが、奈良の雪には東山に於ける置炬燵の雪見酒情調に比すべきものがない。四季の風景中、奈良が格段にすぐれてゐるのは春である。奈良の旅籠屋三輪の茶屋には、東風がそよくと暖簾を吹いてゐる。河内の山々には霞がたなびいて、麥秀づること五六寸、菜の花は限りなく黄金色の浪を打つて、其間には紫雲英の紅が交織に彩どられてゐる。昔天子の鈴は遠近に悠揚と響いて、行手の方には畝傍耳無香具山が朧に淡い。春の大和路はまことに長閑かである。大宮人は春日野の飛火の野守に若菜の摘み頃を尋ね、若草のつまと籠れる武藏野の燒かれんことを恐れた。咲く花の匂ふが如くと詠じたる奈良の都は、

々たる帝京の光景であつた。

猿澤の水が温んで、衣掛柳の芽が靑くふくらんだ時、奈良見物の旅人はぞろ／＼と奈良驛に下りる。春日から大佛へかけて土産物賣る店々の呼聲にも春風が吹いてゐる。紅に靑に金色に彩どられた奈良人形は春にふさはしく美しい。燧火打餅の皿の上にも落花の一片二片が飛んで來よう。芭蕉は「奈良七代七堂伽藍八重櫻」と吟じ、一茶は「大佛の鼻からぬける燕かな」と詠じ、其角は「菜の花の中に城あり郡山」とよみ、蓼太は「菜の花に長閑けき大和河內かな」と興じてゐる。奈良大和路は春の世界である。春日の巫女は、其名を聞くだに春らしい感じがする。二月堂と云ひ三月堂と云ひ、春の名を負うてゐるではないか。若草山は春を象徵し、佐保川佐保山は春を表現してゐる。二月堂の法會は二月朔日より十四日までに行はれ、興福寺南大門の薪能は二月七日よりつとめて十四日に終るを例とする。同じく武藏野であるが、關東の武藏野とし云へば、秋月を連想させ、若草山の麓なる武藏野は若葉摘を思はせる。二月堂の高欄に凭つて遙に故都を俯瞰する時、寧樂の春霞は閑にして、大杉の木の間に咲き亂れた花は風なきに散り、糸遊はちら／＼と古き礎のほとりから立ち舞うてゐる。一點二點搗き出した鐘の音は、大氣を旋動させて、やがて消えやらぬ餘韻は遠く春の浮雲の間に入るであらう。

更に春雨の糸よりも細く降りこぼれる日に、故帝都を訪うても見よ。藥師寺古塔の水煙は見え分たず、法隆寺は霞の中に隱れてゐる。其古への繁華の名殘りであつた一木一石も靉く雨に濕れて春愁の情は無言の裡に深い。大佛殿は寂寞として、八角鑄透しの金銅燈籠は淋しく立つてゐる。名工が鍛ひに鍛えた腕にて彫り上げた南大門の二王像は春雨が降らうと、秋風が吹かうと一切人界に超越して、永へに藝術の春を誇り顏である。薄闇き殿堂の奧深く、法の燈が微かに瞬たいてゐるところに崇高尊嚴な慈悲圓滿の御佛を仰いだとき、外には春雨が音もなく降つて、四邊に陰森な氣が滿つる。眼が冴えて微な光が次第に明るくなつて、我なく、執たく、現世を超越して、渾然として佛の懷にかき抱かれる心地がするであらう。此佛像が一千年の古へ、非凡の藝術家が信仰の强い熱い力を以て打下す鑿の痕每に自信の緊張を示した名作であるとき、藝術は信仰で、鑑賞も亦信仰である。

奈良の文化は春の文化で、奈良の古藝術も亦春の藝術であつた。我邦にて經典中最も多く講誦せられたるは金光明經にして、仁王經が之に次いだ。殊に飛鳥朝以後は宮中及諸寺に於いて盛に金光明經を講ぜしめ、之を以て國家平安の祈願に供せら

れた。持統天皇の八年よりは、諸國をして毎年正月金光明經を讀せしむるを以て常例とした。聖武天皇の御卽位ありて、義淨新譯の十卷本金光明最勝王經を以て舊來の金光明經に代へさせられ、神龜五年十二月には、之を寫して諸國に頒ち給つた。天平十三年國分二寺を造るの勅には「案ずるに經に云く、若し國土に講宣讀誦し、恭敬供養し、此經に流通する王あらば、我等四王常に來りて擁護し、一切の災障皆消殄せしめん、憂愁疾疫も亦除き差さしめ、所願心に遂げ、恒に歡喜を生ぜんと、宜しく天下の諸國をして各々敬んで七重の塔一區を造り並に金光明最勝王經、妙法蓮華經各十部を寫さしむべし、朕又別に擬して金字金光明最勝王經を寫して塔毎に各々一部を置かしめん、冀ふ所は聖法の盛なること、天地と永く流へ、擁護の恩幽明に被りて恒に滿たんことを」と仰せられてゐる。天平十五年正月十三日には大和の金光明寺(東大寺)に衆僧を請して、金光明最勝王經を讀ましむべき勅を發せられた。「故に今年正月十四日を以て海内の出家の衆を所住の處に勸請し、七々日を限り、大乘金光明最勝王經を轉讀せしめん、又天下をして七々日を限りて殺生を禁斷し及び雜食を斷ぜしむ、別に大養德の國金光明寺に於いて殊勝の會を設け奉りて、天下の爲めに諸德等の或は一時の名譽或は萬里の嘉賓を招ぜんと欲すと、僉日く、人の師たるもの咸に國寶に稱へり、冀ふ所は彼の高明に屈して茲の延請に隨ひ、始に慈悲の音を暢べて、終に微妙の力を諧へんことを、仰ぎ願くは梵宇威を增して、皇家慶を累ね、國土嚴淨、人民康樂廣く群方に及して、綿く廣類を該ね同じく菩薩の乘に乘じて並に如來の坐に坐せんことを、像法の中興實に今日に在り」とは當時の勅旨であつた。稱德天皇の天平神護二年正月八日には天皇親臨して、大極殿に於いて、晝は最勝王經を講じ、夜は吉祥悔過を行はしめ給はつた。是歲八月、神護景雲と改元あつた時の勅にも「また去にし正月に一七日の間、諸の大寺の大法師等を請まつらせて、最勝王經を講讀せしめまつれり。又吉祥天の悔過を仕へまつらしむるに諸の大法師たちが理の如く勤めていまさひ、又諸の臣等の天の下の政事を理に合ひて仕へまつるに依りて三寶も諸天も天地の神たちも共に現し給へる奇しく貴き大瑞の雲にあるらしなも念ほしめす」と仰せられてゐる。金光明最勝王經は護國平安の祈禱として頗る信仰せられたのであつた。四天王觀察人天品及四天王護國品は四天王の信仰崇拜を盛たらしめ、如意寶珠品に依りて、梵天帝釋の信仰を加へ、大辯才天女品に依りて辯才天の智辯を渴仰し、大吉祥天女品、大吉祥天女增長財物品に依りて、吉祥天、毘沙門天の冥助を祈願し王法正論品及諸天藥叉護持品に依りて諸天藥叉の守護を

た。

經に曰く、「爾時佛四天王に告げ給はく、善哉善哉、汝等四王、乃ち能く是くの如き經典を擁護す、我過去百千俱胝那庾多劫に於いて、諸の苦行を修し、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切智を證し、今この法を說く、若し人王ありて是經を受持し恭敬し供養するものは、爲に善惡を消して其れをして安穩ならしめん、亦復た城色聚落を擁護し、乃至怨賊悉く退散しまた一切贍部州內のあらゆる諸王をして永く衰惱鬪諍の事なからしめん。四王應に知るべし、此贍部州の八萬四千の城色聚落、八萬四千の諸の人王等、各々其國に於いて諸の快樂を受け皆自在を得、あらゆる財寶豐足し、相侵し奪はず、彼の宿因に隨ひて其報を受け、惡念を起し他國を貪求せず咸く少欲利樂の心を生じ、鬪戰繫縛等の苦あることとなし、其土の人民は自然に樂を受け、上下和穆すること猶水乳の如く、情相愛重し、歡喜遊戲し、慈悲謙讓にして善根を增長せん、是の因緣を以つて此贍部州は安穩豐樂に、人民熾盛に、大地沃壤し、寒暑調和し、時は序に乖かず、日月星宿常度虧くことなく、風雨時に隨ひて諸の災橫を離れ、資產財寶皆悉く豐盈し、心に慳鄙なく、常に惠施を行じ、十善業を具せん、若し人命終せば、多くは天上に生じて、天衆を增益せん。大王若し未來世に斯の人王ありて是の經を聽受し恭敬し供養し、並に經を受持せば、四部の衆尊重し稱讚せん、復汝等及諸の眷屬無量百千の諸の藥叉衆を安樂にし饒益せんと欲す。この故に彼王常に當に是の妙經王を聽受すべし、これを聞くことを得るに由り、正法の水甘露の上味汝等の身心の勢力を增益して、精進、勇猛、福德、威光悉く充滿せしめん、是の諸の人王、若し能く至心に、是の經を聽受せば、則ち廣大希有の供養もて我が釋迦牟尼應正等覺を供養すとなす、若し我を供養せば 則ち是れ過去未來現在の百千俱胝那庾多の佛を供養するなり、若し能く三世の諸佛を供養せば、則ち無量不可思議の功德の聚を得ん、是の因緣を以て、汝等當に彼王の后妃眷屬を擁護して、衰惱なからしむべし、及宮宅の神は常に安樂を受け、功德思ひ難し、是の諸の國土のあらゆる人民も亦種々の五欲の樂を受け、一切の惡事は皆消殄せん」(四天王護國品)と。此信仰は奈良朝に於いて具體的に闡明せられて、奈良朝佛敎の根本義となり、天平藝術を作り出した。金光明最勝王經の敎理は平和主義であつた。未來淨土に成佛せんことを希ふとともに現世の安樂を求めんことは、當時の佛敎に於ける實際的方面であつた。國分二寺の建立總國分寺の建立、盧舍那佛像の鑄造は其表現であつた。大佛の開眼供養は政敎一致の具體化であつて、最も善く時代精神を發

揮したものであつた。天平藝術のすべては、いづれも此時代精神の産物である。

三

話は古きに遡る。崇峻天皇の二年八月蘇我物部の二氏の葛藤は遂に最後の破裂をなして、蘇我馬子宿禰大臣は聖德太子其他の諸皇子群臣と物部守屋大連を襲うて、事を一擧に定めんと競ひかゝつた。武家の棟梁であつた守屋は其弟子奴等と稲城を築いて之に備へた。守屋の軍勢盛にして、射る箭は雨と降り注いでさしもの蘇我勢もたぢろいで進み兼ねて見えた。此時太子はまだ振分髮ともならぬ額に束髮するほどの少年にしてましましたが、斯くと見給ふより咄嗟の際に白膠木を斬り取り四天王の木像を刻みて之を頂髮の中に置き、誓言を發て給ひてのたまはく、今若し敵に勝たば必ず護世四王の御爲めに、寺塔を造立せんと、蘇我馬子も諸天玉大神王等我を助け衛り給はゞ、必ず諸天と大神王との爲めに寺塔を起し立てゝ、三寶を流通せんと。軍威頓に奮ひ、遂に守屋を殺して、物部氏を滅した、太子は後年其誓を踐み給ひ、攝津の國に四天王寺を建立して守屋の子孫從類二百七十三人を其寺の奴婢となし、河内攝津の領色十八萬六千八百九十代を收めて寺領となし給ひ、馬子も願のまに〳〵大和の飛鳥に法興寺を建立した。經に曰く、「爾時に多聞天王持國天王、增長天王、廣目天王倶に座より起ちて、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に着け、合掌して佛に向ひ、佛足を頂禮し已り、白して言はく、世尊是の金光明最勝王經は一切諸佛の常に念じ觀察する所、一切菩薩の恭敬する所、一切天龍の常に供養する所、及諸の天衆の常に歡喜を生ずる所、一切護世の稱揚讃嘆する所、聲聞獨覺の皆共に受持する所なり。悉く能く明に諸天の宮殿を照らし、能く一切の衆生に殊勝の安樂を與へ、地獄・餓鬼・傍生・諸趣の苦惱を止息し、一切の怖畏悉く能く除殄し、あらゆる怨敵尋で即ち退散し、饑饉の惡時は皆豐稔ならしめ、疾疫病苦皆蠲愈を得せしめ、一切の災變、百千の苦惱、咸悉く消滅せん、世尊、是の金光明最勝王經は、能く是くの如く我等を安穩にし、利樂し、饒益す。惟願はくは世尊廣くために宣說し、我等四王並に諸の眷屬此甘露無上の法味を聞いて、氣分充實し、威光を增益し精進勇猛神通倍々勝れん。世尊我等、四王正法を修行し、常に正法を說き法を以て世を化せん。我等彼の天・龍・藥・叉・健闥婆阿蘇羅・掲路茶・倶槃茶・緊那羅・莫呼羅伽及諸の人王をして常に正法を以て世を化せしめん、諸惡を遮去し、あらゆる鬼神、人の精氣を吸ふもの、慈悲なきもの、悉く遠く去らしめん。世尊我等四王、二十八部の藥叉大將、並に無量百千の藥叉と與に、[illegible]

眼の世間に過ぐるを以て、觀察し、此贍部洲を擁護せん、世尊此因緣を以て我等諸王を護世者と名づく」（四天王觀察人天品）と四天王像最古の影刻としては、法隆寺の金堂に山口費大口、木閇・藥師德保・鐵師手古の銘を持國增長二天の光背に誌したものがある。其刀法は寧ろ古拙で、四天王も、其の踏み蹂れる邪鬼も、作りつけたやうで、活躍の妙を缺いてゐるが、絕代の名作としては、東大寺戒壇院にある塑造の四天王を推すべきである。東大寺の戒壇院は下野の藥師寺、筑紫の觀世音寺とともに天下三戒壇の一で、唐僧鑒眞の創むる所、律宗弘布の大道場であつた。今日は其名のみで見る影もないが、戒壇の四隅に威容儼然として峙てる五尺四寸の色彩を施した四天王像は、天平藝術の粋で誰人か其雄偉の姿に嘆賞の眼を瞠らないものがあらう。大力勢あり大威德あり、國を護り法を護り怨敵をして自然に降伏せしむるが如き相好と態度とは春風秋雨千年の久しき今に渝らないのである。三月堂即ち法華堂の四天王乾漆像、興福寺北圓堂、同金堂、同東金堂にあるもの、般若寺、新藥師寺、弘仁寺、圓成寺、法隆寺の食堂等を初めとして、四天王像は到る所に安置された。

金光明最勝王經の教理は更に表現されて、法華堂に忿怒の相嚴めしき執金剛神像となり、端嚴の容朗かなる梵天帝釋像となつて、純なる信仰の心と強き藝術の力とに依りて、天平藝術家は其妙技を現はしてゐる。「世尊、我今陀羅尼呪の、名づけて無勝といふを說かん、諸の人民において大利益をなし、世間を哀愍し、一切を擁護し、大威力ありて、求むる所願の如くならん。世尊、我が此神呪を名けて無勝擁護といふ、若し男女ありて、一心に受持し、書寫し、讀誦し憶念して忘れざらば、我れ晝夜に於いて常にこの人を護り、一切の恐怖乃至橫死に於いて皆悉く遠離せん」（如意寶珠品）とは、執金剛神の宣言であつた。梵天王は神呪を說いて「世尊、我がこの神呪を名づけて梵治といふ、悉く能く擁護す、この呪を指するものは煩惱を離れしめ、及び諸の罪業乃至橫死悉く皆遠離せん。」（同上）といひ、帝釋天王は「世尊、我亦陀羅尼あり、跋折羅扇儞と名づく、この大神呪は能く一切の恐怖と危難とを除く、乃至橫死悉くみな遠離し、苦を拔き樂を與へ人天を利益せん」。（同上）といつてゐる。法華堂の執金剛神像は塑像で、古來祕佛として尊敬措かざるものである。曾ては數萬の蜂を口より吐き出して敵軍を驅逐したと云ふ傳說さへに存する。寬正六年九月足利將軍義政奈良遊覽の時に、「法花堂へは、三昧堂の前へ興明社前より御通有て、正面より內陣に御參有て、初の方御通有に・執金剛神の御前に御齋御在　是は何にて御座とぞ仰あり、寺務西室殿公恵御

運事に、執金剛神にて御座なりと御答其後日野殿、是には勅封は不ㇾ付、御代は一度の外は御開帳なし、法花堂執金剛神と申は此御事也、と御中あり、殊殊勝異他にしてしめしけるにや、日野殿左の御手士につきて御入有り、公方には心經一二誦程御座あり、安樂坊順賓云、公方自然御尋の事もやあるべき旨、法花堂延憲罷出て、傍に蹲踞して、可ㇾ候由異見に、よりて、執金剛神の東の方、白壁三分二程に首を付て候す云々」「執金剛神開帳堂司精進料一貫文事無希間、十月二日法花堂より催促す」「金剛神の御帳之内に格子あり、はづしたる事なし、然を助僧都經眞先に者はづしたる由物語あり、御帳は卷て上也」（東大寺雜集錄）など見え、猶同じ書に將軍參拜時に於ける執金剛神開帳料につきての先規を記し、永享元酉九月四日の開帳、明德二年九月十九日の開帳、應永二十四年十一月十四日の開帳并に「應永廿四（年）八月十九日、小河殿の爲に、執金剛神開帳、如意輪屋より出ㇾ之、色々亂事出來」の記事を載せてゐる。其の重ぜられたことは斯くの如きものがあつた。本尊不空羂索佛像の端莊なる、梵天の高雅なる、帝釋の嚴肅なる、二力士、四天王に至るまで一に精妙の至技でないものはない。梵天帝釋の像は法隆寺傳法院藏を初めとして諸處に少くなく、秋篠寺に帝釋の像あり、唐招提寺には其降臨の遺址と傳へるものがある。藥師寺の鎭守八幡宮にあつた吉祥天女の畫像に顯著なる技巧の粹に於いて、天平繪畫の標本であつた。山城國淨瑠璃寺にあるものは名高くあるが、法隆寺金堂、法輪寺等にも吉祥天像を藏する。經に曰く、「是より以後當に彼の人をして睡夢の中に於いて我を見るを得せしめん。求むる所の事に隨ひ、實を以て告知せば、若くは聚落空澤及僧の住處に、求むる所のものに隨ひて皆圓滿せしめ、金銀・財寶・牛羊・穀麥・飲食・衣服皆心に隨ひ、諸の快樂を受くべし。既に是くの如き勝妙の果報を得ば、當に上分を以て四寶に供養し及我に供養し、廣く法會を修し、諸の飲食を設け、香華を布列すべし、既に供養し已らば、あらゆる供養之を貨(ウ)して値(アタヒ)を取りまた我に供養せよ。我當に身を終はるまで、常に此に住して、是人を擁護し、闕乏なからしめん、希求する所に隨ひて悉く皆意に稱(カナ)はん、亦時々には貧乏を給濟すべし、慳惜にして獨り己が身の爲にすべからず、常にこの經を讀みて、供養して絕えざらしめよ。當に此福を以て普く一切に施し、菩提に回向し、願くは生死を出でて速に解脫を得べし」（大吉祥天女增長財物品）と。現世的快樂を希求してゐた奈良朝の士女が天女を憧憬したのは固より當然である。種々の妙德を以て身を嚴(カザ)り、目は修廣の靑蓮華の如く、福智と光明と名稱との滿たること譬へば無價(ムゲ)の摩尼珠の如く、端正にして觀るを樂(ネガ)ふこと滿月

の如く、言詞に滯るなく和音を出す妙辨智の大辨才天女は奈良の到る處に祀られ、東大寺に鏡池の祠あり、唐招提寺に辨天堂あり、法隆寺三經院前に辨朔祠あり、法華堂には其塑像があり、山城の國淨瑠璃寺の厨子板畫は名高い。勇猛にして、神通あり、設ひ怨敵の至るありても名を聞いて便ち退散すべく、兵戈を動するとを假らずして兩陣歡喜を生ずべき護法の善神、藥師經に其功德を述べたる、病を攘ひ苦患を除く藥師佛、觀音經に三十三身を說いた觀世音等は奈良の都に於て盛に合掌尊敬せられたものである。從つて藝術に現はれた此等の諸佛はいづれも人間に親みある慈悲恩愛ある、功德圓滿の、歸依隨喜すべきものであつた。平安朝に於ける密教諸佛の威猛くして容易に近づき難いものとは同じからぬ。彼に秋日烈々の威がありとすれば、此には春風駘蕩たる德がある。奈良の都はどうしても春の都であつた。政治の極致を慈悲と觀じ給へる聖武天皇は春の天子であつた。奈良の藝術は春の象徵である。よし其形像に於て今昔同じからず、僅に蓮座のみが當時の俤を偲ぶに足るとしても、盧舍那佛の巨像は此春の中心として、今に開眼供養の莊嚴を語つてゐる。

昔し大東國に三人の王子があつた。少子を摩訶薩埵と云ふ。三人出でゝ山林を遊觀するに、一虎の七子を生み、飢餓に逼られて身形羸瘦し將に死せんとするを見た。摩訶薩埵王子曰く、我が身命を捨つるは今正に此時である。我れ今日において當に此身をして廣大の業を修せしめ、生死海に於いて大舟航となり、輪迴を棄捨し出離することを得たり。爾かすれば無上の究竟涅槃を求め、永く憂患無常の苦惱を離れ、生死休息し、諸の塵累を斷ち、定慧の力を以て圓滿薰修して百福莊嚴し、一切智を成し、諸佛の讃する所の微妙法身を證得し、諸の衆生に無量の法樂を施すことが出來ようと。是時、王子は大勇猛心を起し、弘誓の願を發し、大悲の念を以て其身を餓虎の前に委ねた。しかし此慈悲の威勢を見ると、流石に猛き乳虎も害することが出來なかつた。王子所謂へらく、虎は瘦せ衰へて我を食することも能はずと、即ち乾竹を以て我と我が頸を刺すゝ血に灑々として下つた。是時、大地六種に震動して、風の水を激するが如く、日光暗く、天は名華及妙香木を雨らし、繽紛として亂れ落ちた。忽ち見る虛空に諸の天樂あり、之を見て、齊しく隨喜の心を起して、一同に讃して曰く、大士救護の悲心を運ぶに等しく衆生を視ること一子の如し、勇猛歡喜して情に悋むなく、身を捨てゝ苦を濟ひ、福感ひ難し、定んで眞常勝妙の處に至りて、永く生死の諸の纏縛を離れ、久しからずして當に菩提の果を證て、寂靜安樂にして無生を證すべきであらうと。是時

餓虎、王子の頸に血潮の流るゝを見て、便ち血を舐め、肉を啗み盡し、唯び餘骨を留めたのみであつた。

最勝王經の捨身品は之を叙べてゐる。世尊之を語り、阿難陀に告げ給はく「往時の薩埵は即ち我れ牟尼是なり、異念を生ずる勿れ、王は是れ父の淨飯なり、后は是れ母の摩耶なり、太子は慈氏と謂ひ、次は曼珠室利なり、虎は是れ大世主なり、五兒は五苾芻（ヒツシユ）なり、一は是れ大目連、一は是れ舍利子。我れ汝等の爲に說く、往昔の利他の緣、是くの如きの弘誓を發す、願はくば我が身の餘骨、來世に衆生を益せん、此れ是の捨身の處、七寶の窣堵波は以て無量の時を經て、遂に厚地に沈まんと。昔の本願力に由りて、緣に隨ひて濟度を興し、人天を利せんが爲に、地より涌出す」と。身を捨てゝ他を利し、衆生を益するほど大なる慈悲はあるまい。來世の成佛は固より疑ひもない。推古朝の繪畫として、最も正確なる標本である、法隆寺金堂内に安置する玉蟲厨子に描ける密陀畫のうち、右面には此捨身品を圖して慈悲忍辱の尊さを現はしてゐる。玉蟲厨子は古今目錄抄に、「次に東戶に厨子あり、推古天皇の御厨子なり、其形腰細なり、玉蟲の羽を以て、銅を以て、彫り透したる諸草の下に之を臥す、此れ橘寺減滅の時送る所なり、其内金銅阿彌陀三尊御す、其れを盜人取る、光一許所殘るたり」とありて、もと橘寺にあつた女帝推古の御厨子であつたのである。臺座須彌壇二段より成つた高さ七尺七寸のもので、建築上にも好個の參考品であるが、繪畫としては最も古きものゝ一つであらう、須彌壇の正面には舍利供養の圖、右面に金光明經捨身品、後面に須彌山の圖、左面に涅槃經四句偈を畫き、宮殿の正面には二天像、左右の扉には菩薩像背壁には多寶塔を圖してある。身を殺して仁を成す佛の理想は人與慈悲の大なるもので、現世安樂を願ふ佛教信仰者に教ふるに又來世成佛の好範を示してゐるではないか。之に依りて諸惡莫作衆善奉行を主義としてゐた佛教者を感化してゐた力は偉大であつた。山背大兄王は聖德太子の御子として、皇嗣を辭されたのも、蘇我氏の爲に一族滅亡の悲運に逢ひてしかも恬然願みさりし御心事も、此から出發してゐる。太子が「級（シナテ）立る片岡山に飯（イヒ）に飢（エ）て、臥在（コヤセ）るその旅人（タビト）あはれ、親無しに汝（ナレ）成りけめや、刺竹（サスタケ）の君はや無き、飯に飢てこやせる其旅人あはれ」と、片岡山に餓ゑてゐた窮人を憐まれた慈悲の御心情は佛教から得たる感化であつた。捨身品が教へてゐる慈悲の發現であつた。施藥院療病院の設置も之が爲めである。皇后光明子が施藥院悲田院を建て、廢疾の者を手づから看護し給ひたるも之が爲めである。聖武天皇が悲慈を以て政治の主義とすべく女帝孝謙に御せられたのも之が爲めである。悲慈は春日の怡々たるが如きもので

る。和風惠日が萬物を發ふ如きものである。天平の信仰は斯くあつた、天平の政治は斯くあつた、天平の藝術は其表現である。

四

七堂伽藍に輪奐の美を極めた、世界最古の木造建築である法隆寺と、天平の華麗を蒐めた正倉院の勅封倉とが、今日まで依然として千有餘年の壯觀を保つてゐることは、奇蹟と云はねばならぬ。藤原氏の氏寺で春日の神宮寺で、爾田二萬五千石、境內五萬七千六百坪を有し、七堂伽藍の宏壯を以て聞えゐた興福寺も僅に金堂、東金堂、南圓堂、北圓堂、五層塔、三層塔、龍華樹院堂、東室、寶庫、大湯屋、大御堂等、舊觀の一部を存するのみである。しかし奈良に入るものは、左側の小高い上に嵯峩たる老松を前にして巨人の如く峙つ五層の寶塔を仰ぐ時、奈良の故帝都に入りたる感を痛切に起すであらう。よし其五重の塔は寺傳に云ふ所の光明皇后創建のものに非ずして、應永二十八年の建立に成つたとは云へ、今の奈良に取りては美術郷としての關門である。更に進んで春日の一の鳥居を望み、左右に立ち列んだ松杉喑き木の間を遠見した時、人を恐れぬ藥鹿の悠遊するを見た時、石燈籠の行儀能く居列んだを見た時、もう奈良情調の旺然として遊子行旅の心胸に湧くであらう。白藤の龍、攝政藤原忠通寄進の柚形燈籠、春日の大杉、目も鮮かな丹塗の若宮・本社、白衣紅袴の淸々しい巫女の姿、唯わけもなく奈良は美しい樂園のやうな思がする。土産物賣る店々には、客呼ぶ聲も喧しく、此は三條小鍛冶宗近の子孫と名乘るものあれば、鹿の角切を看板にする所もある。若草山手向山から、法華堂二月堂四月堂、傳說ある良辨杉、巨大で名ある大佛鐘、大佛殿に盧舍那佛を仰いで南大門の杉並木を出づれば、それで初めて奈良公園を一周したと云ふ感じも起らう。

事新しく云ふまでもなく今の奈良は古帝都の一端に過ぎぬ。京都の古文化が多く寺院にあるより以上に奈良の古文化は全く寺院にある。佛教中心の文化が寺院に其跡を殘すは當然である。寺院は古文化の保存所で、藝術の春は寺院に其花と香とを留めてゐる。聖德太子が移殖せられ、建設せられた推古朝の文化は、法隆寺に依りて見るべきである。建築の美は論ずるまでもない。優秀なる藝術品に富みたるとは說くまでもない。千年の久しい間に甚しく毀損されなかつた壁畫は、近年に至りて著しく損傷して來た。二十餘年以前と近年との間にも非常な違ひが目立つ。日曜休日になると、烏打帽子に角帶しめた大阪あたりの巾偕丁稚が押すな／＼で金堂へ流込む。扉の開閉、人の足音、中には損所に指を突込む不埒な奴もある。壁土をハンケチに包み

込む似而非鑑賞家もないではない。壁畫保存法は硬化說などを唱へるよりも、もつと緊急な問題があらうと思はれる。保存委員が卓上で議論してゐるうちに、壁畫の龜裂や穴は次第〱に大きくなる。之では飛鳥朝の遺品として、アジャンタ窟殿の壁畫、若くは于闐庫車あたりより發掘せる壁畫と類似せる日東帝國隨一の至寶も聊か心細きを感ぜざるを得ない。七大寺日記には「法隆寺金堂、西壁佛淨土圖繪、中尊半丈六也、東壁藥師淨土圖繪、中尊同上、南北壁各佛菩薩の繪あり、繪像は皆恐く是れ鞍作部鳥の筆なり」と見え、法隆寺古今目錄抄にも「金堂は內壁に四佛淨土の繪あり、鳥と云ふ繪師之を書く、天王寺塔の扉を書く繪佛師之に同じ、字は鳥なり（是も一乘院の說なり）西壁に阿彌陀の淨土、東の壁に寶生の淨刹北浦の戶東の脇壁に藥師の刹土、同戶の西の脇壁に釋迦の圖と、此くの如く繪書けり、自餘の壁には菩薩の立像を繪がけり上の柱貫の上に深山の中に羅漢等住む所を書けり、皆住む所一間に左右各一體なり」とあるが、推古朝第一の彫刻名手であつた鞍作鳥の錐に成つたと云ふことは固より疑はしく、高麗の僧曇徵の筆に成つたと云ふ說も信ずるに足らぬ。のみならず推古朝よりはやゝ後れた時代の作であらう。假りに法隆寺非再建說に從ふとするとも、推古十五年の建築と同時に成つたものではあ

るまい。再建說に從へば、時代は遙に後れざるを得ない。又古今目錄抄に云へるが如く果して壁圖は四部の淨土であらうか。之を信ずべしとすれば、金光明最勝王經に云ふ所の阿閦尊（東方）寶相（南方）無量壽（西方）天鼓音（北方）四佛のまします佛土でなければならぬ。經に云ふ、「爾時薄伽梵、日の晡時に於いて定より起ち、大衆を觀察して、頌を說いてのたまはく、金光明の妙法、最勝諸經の王は甚深にして聞くを得べきこと難し、諸佛の境界なり、我常に大衆の爲めに是くの如きの經を宣說せんとし、並に四方の四佛、威神共に加護す、東方の阿閦尊、南方の寶相佛、西方の無量壽、北方の天鼓音。」（序品）と。又云ふ、「一時に彼の菩薩世尊の所に於いて、是の念をなす時、佛の威力を以て其室忽然として廣博嚴淨に、帝青、瑠璃、種々の衆寶、雜彩間り飾り佛の淨土の如し。妙香の氣ありて、諸天の香に過ぎ芬馥として充滿せり、其四面に於いて各上妙の師子の座あり、四寶もて成ずる所、天の寶衣を以て其上に敷く、復此座に於いて妙蓮華あり、種々の珍寶を嚴飾とす、量如來に等しく、自然に顯現せり、蓮華の上に於いて四の如來あり、東方に不動、南方に寶相、西方に無量壽、北方に天鼓音、此四の如來、各其座に於いて跏趺して坐し給へり、大光明を放ちて、王舍大城及此三千大千世界乃至十方恒沙等の諸佛の國土を周遍照曜し、諸の天華を雨らして

諸の天樂を奏しぬ。」（如來壽量品）と。奈良朝以前、飛鳥朝の頃は金光明經が盛に講ぜられたれば、之を四佛の淨土とすれば略々其時代を推定するに難からぬ。

夢殿の名は聞くだに幽玄である。夢殿は一に上宮院と云ひ、御繪舍利二殿の南、東院廻廊の中央にある八角堂である。太子入定して冥想に耽り幽明相通じ給ひし靈場である。太子傳曆には犬鹿鬪爭の夢見判斷をなされたことが見えてゐる。本尊は救世觀音、夢殿の秘佛として名高く、端嚴無比、敬虔措く能はざる絕品で、前立の觀音九面觀音、いづれも名作として聞えてゐる。法隆寺藏する所の諸作は推古飛鳥朝の精粹を鍾めたもので、鞍作鳥が五丁山を劈くの巨腕に鑄成された金堂內にある金銅の本尊藥師脇士、日光月光、釋迦の坐像、藥王藥上の立像、綱封藏の橘夫人念持佛なる阿彌陀三尊の佛像を初めとして當代文化の結晶は此に存してゐる。更に法隆寺に近き中宮寺は天壽國曼陀羅如意輪觀音の名作を藏し、法隆寺と相去ること眉目の間にある法輪寺は僅に三重の古塔を有し、法輪寺より僅々八町を隔つる法起寺にも三重の浮圖と本堂外二三の堂舍を存する。

元興寺の遺趾は奈良朝にある。寺は蘇我馬子が飛鳥の地に建てた法興寺であつて、和銅年間諸寺多く奈良の新都に遷されたる中に、此寺のみは、獨り飛鳥に留まつてゐた。其の奈良に遷移されたのは靈龜二年とも云ひ又は養老二年とも云はれてゐる。屢々回祿の災と震災とに累せられて、遂に荒廢し、全く其舊觀を失ふに至つた。離々たる草の間に殘れる五重の塔の斷礎を存するを見れば、ギボンならざるも南都衰亡の變に無限の感慨を起すであらう。子院極樂院は當初の建築と稱せられて、蒼然たる古色の浮動するあるを覺える。彌陀の坐像は天平の名佛工稽首勳の作と云ひ傳へられてゐる。新藥師寺も亦市內にありて、元正天皇の創建とも光明皇后の建立とも云ふ。本堂には極彩色の圓柱ありて、中央に楕圓形の土壇を築き、本尊藥師像日光月光の脇士、四天王十二神將の像を安置する。藥師金銅の像は涅槃講像ともに名高く、本堂及東南の二門は天平建築の標本とされてゐる。般若寺の樓門は天平七年の作と稱せられ、十三層の石浮圖とともに此寺の誇りである。市に近き佐保村法蓮にある不退寺は仁明帝の御宇在原業平の奉勅建立する所であるが、廢頹して見る影もなく、同村法華寺にある海龍王寺は西金堂に藏する所の小型な五層の塔で知られてゐる。同じ所にある法華寺は東大寺に對する總國分尼寺で、法華滅罪寺である。曾ては七堂伽藍の美を極めたものであるが、劫火の爲に禍せられて、其かみの佛はもう見るに由がない、現存する所の講堂は淀君の修

鑄する所、堂内に安ずる十一面觀世音立像は優秀なる傑作で、姿態の典雅と、慈悲圓滿の相好とは、同じ佛像中優に一頭地を抽いて、神々しいこと云はん方ない。其他に維摩居士像、彌陀勢至菩薩の三幅、横笛尼の張像など寺藏として世に聞えてゐる。東市村白毫寺にある白毫寺は白毫の光も失せて殆ど廢寺に近く、伏見村西大寺にある西大寺は七大寺の壯觀全く亡び、平城村秋篠にある秋篠寺は蜘蛛の網に鎖された講堂の姿がはかなく見える。獨り伎藝天女像の端麗なる相好が此寺の名を不朽に傳へるであらう。

此間に在りて建築の美と彫刻の秀とを以て古帝都の爲に光つてゐるのは西の京にある七大寺の一なる藥師寺と、其ほとりに近き五條にある同じ七大寺の一なる唐招提寺とである。藥師寺に裳階ある三層の寶塔を仰ぐとき、塔上の天人の水煙を望み、舍人親王の露盤の銘を思ふとき、金堂内の藥師三尊佛の精妙無比なるに感歎するとき、藝術の春の悠遠にして盡きざるに、時の過ぐるを忘れざるものはなからう。唐招提寺金堂の屋の棟には鴟尾が超然として浮世の春を餘所に見てゐる。金堂の毘盧舍那佛は唐の思託及曇靜の作で、藥師如來は思託及如寶の作る所、講堂の彌陀は唐の軍法刀の作と傳へられる。其他此寺に藏する所の藝術名品は限りもなく夥しい。蓋し藥師寺の濫觴に就いては諸説あるが、天武天皇に依りて創められ、持統天皇に依り繼がれ、文武天皇に依りて成りて、其即位の初年に藥師の開眼供養あり、即位二年に寺の造營略成り、元正天皇の養老二年高市郡から今の地に遷されたので、唐招提寺は淳仁の天平寶字元年、唐僧鑑眞の建立に成りて、國家鎭護の道場となり、受戒學律の處として、東大寺戒壇院は左京を管し、唐招提寺は右京を管することゝなつたのである。諸七大寺中唐招提寺は唐僧及唐の藝術家の手に成つてゐるから他に異つた特色を帶びてゐる。

奈良と地の隔つたところには、岡寺、橘寺、室生寺、壺坂寺、當麻寺の如き、春の大和路にふさはしい巡錫すべきものは多々ある。最後に奈良の關門たる興福寺には優秀なる名品世親無著の木像、法相六祖の木像、十二神將。四天王の木像、文珠、維摩居士の木像、康辨作の天燈鬼龍燈鬼木像、華嚴磬を初めとして名作少からぬことを附け加へねばならぬ。更に正倉院の御物が天平の文化を今目前に語つて、時代の榮華が盡く此裡に在ることは特り奈良の誇りのみでない。聖武天皇崩じて後七々の忌辰に當り、光明皇后は御遺愛の品を東大寺に入れて盧舍那佛を供養し給はつたのである。東大寺獻物帳の願文に「故に今先帝陛下のおほん爲に、國家の珍寶、種々の翫好、及御帶牙笏弓箭刀劍と書法藥器等を捨して東大寺に入れ、盧舍那佛及諸菩薩一切の〻

を供養し奉る。伏して願はくば玆の妙福を持て仙儀を翼け奉り、永く法輪を馭し速に花藏の寶刹に到り、恒に妙樂を受け、終に舍那の法筵に逢ひ奉り、普賢とともに笑つて宣遊し、文殊と共に化を演べ、上は百億を霑し、德は三千を被らしめ濕はんことを。又願はくば今帝陛下壽は法界に同じく、福は虚空に類し、劫石盡くれども盡きず、海水竭くれども竭ることなく、身心永く泰かに動息常に安く、復乃ち文成り地平に、時康く俗阜に、萬姓無爲の代を奉じ、百工有道の風に遊び、十方三界六道四生同じく此福に霑ひ、成妙果に登らんことを」とあるは、御物供養の御趣旨を述べられたもので、未來成佛の信仰と現世安樂の祈願とを兼ねたる當代精神を最も能く表明したものである。此精神は盧舍那佛像の造立に依りて大に發揮せられ、盧舍那佛像を中心として奈良の文化は向上し、奈良の藝術は發達し、盧舍那佛像を中心として其文化其藝術は今に遺存してゐるのである。偉なるかな盧舍那佛の德。天平の春は盧舍那佛像の建立となり、盧舍那佛の建立は、更に天平の春を粉飾して、花咲き鳥歌ひ、蝶舞ひ、異香紛々たるものとなさしめた。しかも其花は雨と降る天花であつた。其鳥の音は迦陵頻伽の聲であつた。其香は妙法の香であつた。疑はゞ奈良を繞れる藝術の春を訪へかし。

五

藝術の奈良は彫塑の奈良である。推古の朝に鞍作鳥あり、百濟御太あり、やゝ後れて山口費大口、藥師德保等あり、天平時代に國中連公麿、稽文會、稽主勳あり、良辨行基等の高僧も彫刻の技に勝れたと傳へられ、平安朝に入りて康尚、定朝、覺助の徒あり、鎌倉には康慶、運慶、快慶、湛慶、康辨、康勝等の名佛師がありて、奈良の舊都に多く其遺作を留めてゐる。此等の外に彫刻家として名の傳へられたものもないではないが、多くは其名を失するから名作は擧げ得るも作家の名を指すことは難い。殊に天平時代の優秀なる藝術に至ると、殆ど其作家を詳にしない。しかし此等の名人巨匠が心血を濺いだ製作の幸に今日に傳はるものありて、當代の文化を追想させることを祝福せねばならぬ。此等の藝術は單に我邦における藝術のみではない。之を希臘彫刻のクニダスのアフロダイトや、フオシオンや、ミロンの投盤者や、ハルモヂウスや、テシウスや、フイヂャス作のアテネ、パルテノスや、ミロのヴイナス神の諸彫に比し、プラキシテレス作のヘレメスや、アルテミス像や、ニオベ及其の娘や、歴山大王以後の希臘彫刻なる高格のゴールやラオコーン群像や、の諸名品に比し、以太利の文藝復興期におけるミケランジエロが絕妙の技

に成れる諸作に比して、優れるとも決して劣りはしない。此點に於いて彫刻の奈良は世界的である。

將來せられた唐代の文化は七堂伽藍となり、佛像となつたとき、日本文化の光は赫灼として輝いた。其影響其感化は固より受けたのであるが、藝術の日本は、藝術の唐に對して更に遜る所はなかつた。詩や文やに於いては我に李白なく、杜甫なく中唐の名家に比敵するものはないが、獨り彫塑の藝術に於いては却つて彼に凌駕する勢であつた。政教一致冥顯是一の聖武の經綸は推古孝德の佛法流行の勢を增長して、天平時代の信仰絕頂の世となつたから、信仰の對象なる佛教藝術が彫塑の技として前後に絕する盛運に向つたのは、決して偶然でなかつた。

浙石に五丈三尺有餘の大佛を建立するほどありて、奈良の藝術は規模が大きくあつた。一面に懺悔滅罪の淸淨を現はして高雅端嚴なるとともに、一面には信仰敬虔の熱烈を表はして雄偉魂麗なるものであつた。一切五濁惡世の無量無數無邊の衆生をして、皆金色三十二相を得て、寶蓮花に坐し、無量の樂を受け、天の妙華を雨らし、諸天の音樂は鼓たざるに自ら鳴り、一切の供養皆悉く具足せしめんことは其當然の歸趣であつた。されば藝術の巨匠が列えたる腕に打下す鑿の一刀〱には力あり、熱あり、心血俱に迸下して、藝術の香は繽紛として高くあつた。名なく利なく、欲なく我なく、藝術家の氣魄は其作品の裡に鼓吹せられて、渾然冥合したのであつた。其の作る所のものは直に佛たり、直に信仰の對象たり、直に福德を授け安樂を受けしむるものであつた。甚深微妙の藝術が渾成するは固より其由來ありと謂ふべきである。

天平時代に於ける奈良は佛地であり、淨土であり、淸淨勝妙の處であつた。しかし遷都とともに行幸の名殘をとゞめて、盡きやらぬ春愁は到る處に遺つてゐる。唯藝術の春のみは久遠不滅の壽を保つて、世界的古文化を誇り氣である。聖武天皇の御事業は此點に於いても尊重すべきものであつた。

白法隱沒(ビャクホウオンモツ)して鬪諍修羅の世が多いのに、此間に在りて、此世からなる極樂淨土を現じ、懺悔滅罪して平和の春を樂まうとなされた聖德太子聖武天皇の御理想は高遠で、其御德は洪大無量海の如きものであつた。人類の理想はそこにある。世界の終結はそこにある。佛は此理想を說き、かくあらねばならぬと敎へられたのである。其理想の現實化を試みられたのは聖德太子であつた。之を大成なされたのは聖武天皇の御事業であつた。天平時代は平和の世界、理想の天地を目前に現はしたのであつた。此意味に於いて奈良朝は我が文化史上に比類なかつた。否寧ろ世界に於いて稀有であつた。堯舜時代は理想の世で、理

の世界でなかつた。黄金時代は過去のものでなくして未來のものであつた。奈良の天平時代は獨り此理想境を現實にし、未來の世界を眼前のものとなしたのである。

國際聯盟と云ひ、太平洋會議と云ひ、其動機は如何にもあれ其目的は世界人類平和の春を樂まうとするのである。しかし我あり執ある以上は其目的を遂行するに於いて難くある。繰り返さるべき失敗は、常に此我執の見から來るのである。懺悔滅罪の信仰なくして何で我執の偏見を離れることが出來ようぞ。奈良に於いて、一たび平和の春を現じた日本も、我執の偏見からして久しからぬうちに其平和を破壞するに至つた。女帝孝謙の我執、道鏡の我執は其先驅であつた。平安朝に入りては藤原氏の我執があり、朝廷の我執があつて、其極、保元平治の淺ましい修羅道を現じた。天平の平和の春はもう長へに歸ることはなかつたのである。

聖武天皇の御理想御事業は高大のものであつたが、人間の我執を脫離させるとは容易でなかつた。既に天平の世でさへ玄昉の我執、廣嗣の我執があつて、いがみあつてゐたではないか。平和の中心で、理想の淨化で信仰の對象であつた盧舍那佛の巨像でさへ度々の劫火に燒かれたではないが。梵唄鐘聲に全都を揺かした七大寺の大伽藍も多く荒廢したではないか。藝術の春を誇つた諸佛の螺像さへに蜘蛛の網に鎖され、或は手足散離の憂目に逢はれたではないか。平和の春は久しくなかつた。一時の極樂淨土は永遠のものでなかつた。

よし其理想の實現は剎那の壯觀であつたとはいへ、人間歸趣の目的點は此に在る。世界を擧げて齊しく平和の春を樂むべき時が到來せねばならぬ。武裝の平和に一時を糊塗するが如き境涯から脫却せねばならぬ。人類は目覺て居りながら我執の偏見に囚はれる現狀から更に五十歩百歩を進めねばならぬ。奈良に遊んで、天平時代の平和を回顧する時、睚然として理想の現實化を思はざるを得ない。

斯く考へ到ると古藝術の都奈良は決して過去の奈良でない。徒らに古文化の奈良を詠嘆するだけでは物足らぬ。古名匠の腕の冴えを歎美するだけでは能事と云はれぬ。藝術の春に依りて平和の春の出現を希求せねばならぬ。奈良に於ける理想の現實化を、廣く深く強く永久に復活させねばならぬ。過去の華やかさにのみ憧憬するを已めよ。過去の華やかさを讃美するとともに、我等の眼前には現在があり未來が横はる。古文化の跡を鑑へるは我等に未來の道を訓へんとするが爲めである。古藝術の香に醉はんとするは玩物喪志の爲めでない。藝術の神は我等に多大の使命を與へる。

悠久なる平和の春よ、早く人間界に歸り來れ。古美術の都奈良は我等に斯くあれかしと敎ふるではないか。そこには藝術の春が永へに長閑である。藝術の春は、又平和の春を將來せねばならぬ。

秋の俳趣

田中貢太郎

都會の秋

『竹深樹密蟲鳴處、時有微涼不是風』支那の詩人は、甑の中にゐるやうな炎熱の夜にあつて、もう一味淸新の秋を感じてゐる。季節は爭はれないものだ。赤く爛れたやうな陽が照らしてゐても、空の藍色が研かれたやうに冴へて、軒下や塀隅には、底の冷たい冷冷する氣が動いてゐる。暑い晝飯を濟まして、中廊などに腰をかけてゐると、庭の方から蟬とも地蟲ともつかない聲で、じい、じい、じいと鳴く聲が聞えて來て、淋しいたよりない氣分にひたされる。

町を歩くと、街路樹の鈴懸の葉が乾からびたやうになつて、その幹の青い表皮は、皮膚病患者のやうに所々斑に剝げて、その根元に植ゑた朝顏に、小さな花が咲いて、萎れたその花びらには埃が白くかかつてゐる。西洋料理や洋服店の飾窓の中には、鉢物の芙蓉が咲いてゐる。蜻蛉の尻尾が長く、それが次第に滅入つて來て、眞夏のやうな物騷がしさがなくなる。山の手の屋敷町を歩いてゐると、柵の内の林の中から、金屬を擂り合はすやうな茅蜩の聲が聞えて來る。曇日のむせむせする日には晝中にもその聲が聞かれる。かうなると、晩酌の膳につける枝豆の莢が黃ろくなつて、蓼も辛味が強く、茄子も種が出來てまづくなるが、豆腐につける紫蘇の味に香が加はり、朝の味噌汁に入れる摘み菜に新鮮な匂がする。

晩夏初秋の夜は最も趣が深い。埃がかかつたやうに見えてゐた眞夏の夜の星は、初めて生れたもののやうに若若しい數瞬をする。暗い庭を歩くと、八手や無果花の葉に、その光が珠の色にちらちらしてゐる。電燈と瓦斯燈の光が白晝のやうな雜踏の場所では判らないが、山の手の名も知れない坂路をおりながら、見る星の光は、幽玄な趣がある。片側が草原になつてゐる所などは、その趣を添へるために、必ず蟲の聲を聞かする。靑い小さな月があれば、猶更面白い。

何時であつたか立秋の翌日であつた。芝の宮本町にゐる友人を訪ねたことがある。陽が暮れて薄暗くなつたばかりのことで神明の鳥居の前を通つてみると、右側の鳥居の柱に添ふて蟲賣の少年がゐる。甘酒賣の荷物位な葭簀張の蟲籠を据ゑて、籠にかけた弓張提灯にいくつもの短册の畫を書いて、短册の中へそれぞれ假名で赤く蟲の名を書いてあつたが、蟲は籠の中で小さな聲でつつましさうに鳴いてゐた。拜殿の方を見ると、燈火が綺麗に點いてゐる。

友人は下宿の二階にゐた。氣が付いてみると、鼠色の壁紙を貼つた机の傍の壁へ、一疋の蟋蟀が來てゐる。友人は塗骨の扇を持つて行つて、それに入れて窓から逃がしてやつた。前は直ぐ待合の二階で、靑い岐阜提灯が二つ點いて、その中から時折若い女の笑ふ聲がした。

歸りは九時頃であつた。陰曆七月十六日の月が出て、外には水のやうな空氣が流れてゐた。蟲賣の少年のことが頭にあるので、もとの所を通つてみると、少年は月を浴びてもとの所に立つてゐたが、蟲はもう何の遠慮もいらないと云ふやうに、大きな聲で鳴いてゐた。中でも轡蟲のがちや、がちや、と鳴く聲があたりの情調をこはしてゐるやうで煩さかつた。

月に立つ覇王樹の影、蟲の聲

朝の冷え地の透いた髮を解く

○

立秋の前後には、毎年のやうにあらし雲が飛んで、驟雨が日に幾回となく、恐しい勢をして降つて來る。庭に芭蕉のあつた時には、驟雨はその廣い葉へ降り注いだ。驟雨の空は時に暴風雨と變ずることがある。そして、暴風雨の空がからりと晴れると、空の藍色が濃くなつて、黑ずんでゐた木の葉の色があされて、光澤がなくなり、夜は蟋蟀が蚊帳の裾へ來て鳴く。

四五年前のことである。なんでも九月三十日。陰曆の八月十五日で、その夜は中秋名月の夜であつた。數日間降り續いてゐた雨が、夜になつて激しくなり、一時頃から暴風雨になつた。がうがうと物凄い音をして吹いて來る風は、家を搖かし、戸障子

をがたがたと鳴らしたが、風と風との間に、一二分の間があつて、その間は氣味惡くひつそりとする、するかと思ふと、またがうと來る。と、家は怒濤の上に浮んでゐる船のやうに、前後左右にぐらぐらと動く。

三時頃になつて、電燈が消えた。起きて窓掛けを捲いて硝子戸越に透して見ると、薄暗い雨と風の中に、崖の上の櫻の大木が狂婦の狂ふてゐるやうに、枝を八方に動かしてゐる。

夜が明けて來ると、風が次第に靜まつて、雨も止み、思ひ出したやうに吹く風が十時頃まで吹いてゐたが、それもぱつたり止んで、午頃から空がからりと晴れ、夜になると綺麗な月が出た。

私はその月の下を歩いて白山の方へ行き、其所から大學前へ出て、電車通を須田町の方へと歩いたが、月は昨夜の暴風雨を夢にも知らないと云ふやうな顏をして冴へてゐた。私は時時立ち止つて、その月を仰ぎながら月の句を考へた。須田町の電車の交叉點には、銅像が月の下に黑く立つてゐた。

明治四十三年であつたか四年であつたか、利根川と荒川が汎濫しく、東京市が、大洪水に脅かされたことがある。私は淺草公園にゐ合はせて、千束町方面から刻刻に浸入して來る水を避けて、公園へと逃げて來る人々を見た。黑い雲の漂ふてゐる空から強い陽の光が溢れて暑かつた。十一時頃のことで、もう公園の池の周圍は、膝以上に泥水が浸いてゐた。戸障子を重ねてこしらへた假造の筏へ、風呂敷包を抱へて乘つてゐる者、大きな行李や葛籠を肩にして、水に浸つてやつて來る者、子供を負ふて來る者、それは眼まぐろしい騷がしさであつた。その避難者の中に、白粉の斑はげになつた奥山の若い女が交つてゐたが、それは襦袢一枚に赤い湯卷と云ふだらしない風をして、首にはそれぞれ風呂敷包をしばりつけてゐた。

夕方になつて又雨がやつて來た。出水の爲めに戸を締め切つた活動寫眞館の前を、二三人の仲間と一所に水に浸つて彷徨ふてゐると、仲店の方から來たらしい筏に、若い男が竿を張り、傘をさした二人の女が蹲んでゐたが、それは電氣館の前を斜に折れて、向の方へと行つた。擦れ違ふ拍子に見ると、一人の女の手には、酒らしい硝子ピンを持つてゐた。雨は傘の縁を掠めて斜に白く見えてゐた。

あらし雲低し蟋蟀を壁に見る

○

『酒醒小立殘陽裏、閒數籬邊紫豆花、』と詩人留泰は云つてゐる。私は何時かいんげん豆を作つて、竹垣に這ふた其の花を、夕暮の庭先にぢつと見てゐたことがある。貧弱な私の家には、

芙蓉も、萩も、桔梗も、紫苑も、薄も、何も咲かない。咲くものは、朝顔と鳳仙花であるが、鳳仙花はをりをり厭はしくなつて作らないことがある。朝顔ももとは作らなかつたが、向ふ隣にゐた老人に苗を貰ふやうになつてから、七八年この方ずつと作つてゐる。

その老人は北國の生れで、早くから東京へ出て、下町の方で長いこと宿屋をやつてゐたらしい。一度中風をやつたことがあると云つて、言葉が捩れて判らない所があつた。でぶでぶと云ふ程ではないが、太つた澁紙色の顔をした老人で、家内は老婆と二人ぎりであつた。老婆の方は背の高い、垢拔けのした下町風の女で、老人から十歳位も若かつたが、その癖腰が屈んで、老人よりは年老つて見えた。二人の許へは、時たま赤坊を連れた女がやつて來たから、息子の嫁であらうと思つてゐると、それは店を讓つた者の細君で、二人の身寄と云つては、老人の甥になる者が一人品川にゐるきりだと、ある時老人が私に話したことがある。

老人には幾何か打算的な所がないでもなかつたが、しかし、一體に人の好い、世話好きな好好爺であつた。老婆の方は氣持の重重しい潔癖なところがあつて、子供などは好かなかつたが、老人の方は、その頃四つか五つであつた私の長男の相手になつてたまに菓子などを買つてくれた。

向ふ隣の家にも、私の家と同じやうに三坪位の裏庭があつて、私の家の庭と板塀一つ隔てて並んでゐた。老人は其所へ還つて來ると、貸間に便利の好いやうに、私の家と向き合つた二階の窓を取り拂つて、戸と障子を入れ、庭の隅へはトタン葺の小さな物置をこしらへ、それが出來ると、庭の中へも、家の周圍へも置き土をして、物を植ゑる畑をこしらへた。家の前に共同栓の傍になつた支那人の合宿所の軒下へは、南瓜を蒔いて其所から竹を立てて自分の家の屋根へ這はした長い長い莖には、大きな南瓜が蟇の背のやうな疣だらけの赤い姿を見せた。私の家の玄關の前になつた家の横手から庭の中へかけて、朝顔棚をこしらへて、まだ立秋にならない中から綺麗な花を咲かした。花が咲くと、老人は日課のやうにして、附近の朝起の者を呼んで來て見せた。

『やあ、これは、咲きました、なあ、』

老人に連れて來られた者の、お世辭ばかしでなしに本當に感心してゐる聲を、私は二階の床の中で好く聞かされた。

『好いことね、咲きました、ね、』

これは近くの米屋のお神さんの聲であつた。顋鬚のもじやもじやと生えた米屋の亭主も、好くやつて來て賞めたてた。

私の家はこの老人から鳳仙花の苗を貰つたり、朝顔の苗を貰つたりした。塀を越して這ひあがつて行く朝顔の蔓は、老人の家の朝顔の蔓と一緒になつた。老人の家では、庭からも屋根の方へ向けて竹の棚を渡してあつたので、蔓は屋根の方へと這つて行つた。私の家の朝顔は、最後に庭の隅に立てた電燈用の小さな柱に這ひあがつて行つた。

日中の暑さが無くなつて、長く續いてゐた雨の晴れる頃には朝顔の花は小さくなり、青黑かつた葉も黄ろくなつて、棚の蔓葉がげつそりと隙いて見える。『牽牛花瘦小於錢』。棚の上に見える空には、白い雲がふわふわと飛んでゐる。

朝顔の花莟が黑くなつて、薄ら寒い夕陽にはじける頃になると、老人はもう火鉢の傍に坐つてゐたが、暑い間は一日外へ出てゐて、朝顔の手入れをし、畑の土をいぢり、家の附近の地の窪みへ土を置き、汚い所は鋤でかきのけなどした。老人の家も私の家も、その周圍二三軒の家は、一廓になつてゐて、通に面した所に總門があつた。其所へは朝晩に長屋の子供が集つて來て騷いだ。老人は木切れや石ころを拾つて來て、門の中を荒しまはるその子供達を叱つてゐた。子供達は老人が怒るのが面白いので、猶ほからかふと、老人は憤氣になつて怒り、何時も手にしてゐる鋤を振りまはして追つ駈けた。

『ちちい、やーい、』

子供達の遠くから囃す聲と、老人の舌の硬ばつた口で怒る聲とが、私の書齋へ聞えて來る。

老人は二階の二室を人に貸して、その傍ら古道具を賣買して生計を立ててゐた。妻が老婆から聞いて來た話によると、店を讓つた者の所からも、月月些細な金が來るらしかつた。私はその老人から白龍と云ふ畫家の書いた、彩色した南畫のやうな畫を拾枚ばかり見せられたこともあれば、昔こしらへたフロックコウトを賣りたいが、誰か買ふ人はないかと聞かれたこともある。今思ふて見ると、その洋服も自分のこしらへた物でなしに何所からか仕入れて來たものであつたらしかつた。

朝顔の後では、老人は白菜を蒔いた。霜や雪にいぢけてゐた白菜は、春になつて花の莟を持つて來た。それを老人は毎朝三四本づつ拔いてから、私の家を始め、二三軒の家へ持つて來た。

『くださるなら、莖のたたない中にくだされると好いに、こんなになつちや食べられやしない、』

田舍で育つた妻は、こんなことを云つて笑ひながら、一二度そのまま塵箱の中へ入れたが、人の好意を破る仕方であるから、到頭白菜は私が食はないと云ふことにして斷つてしまつた。

老人は私達と四五年一緒に暮してゐて、大正六年になつて亡くなつた。朝顔はもう實になつて、乾からびた莢が風に鳴つてゐた。その五六日前、共同栓の傍で剃刀と鋏を研いでゐた老人は、中風が再發して倒れてしまつた。それでも倒れる際、心に餘裕があつたと見えて、入齒を除けて片手に握つてゐた。丁度三時頃のことで、買物に行つてゐた妻は、それを見付けて騒いでゐた隣の者に手を貸して、老人を家の中へ寢かして來た。

私はその老人の死骸を坂の上へまで見送つたが、老人が亡くなつたので、そのまゝになつてゐる朝顔の棚から、何時も枯れ落ちた葉が落ちて來て、玄關口を汚くするので、翌年の二月頃私はその棚をこはして、莖を掃き集めて燒いた。火は風の寒い夕闇の中に赤く燃へあがつた。

朝顔のかれがれの莖、夕風に

○

人家のごたごたと建ち並んだ市内に住む者は、夜店で買つて來て縁側へ置いた鉢植の朝顔や芙蓉や、赤く色ついたたんば鬼灯の實や、唐辛子の實に秋を知る。でなければ、日曜や夕飯後の散歩に出て、公園の秋に接する。何と云つても、市内の秋の色は公園にある。

森の公園の芝公園では、山内よりも山門前の松並木の下に植ゑた萩の花に趣がある。雨の日などは殊に好かつた。私は御成門からわざわざ電車を降りて、その松並木の下を步いたことがある。

日比谷公園は菊花壇に人を呼ぶが、埃の公園だ。しかし、菊花壇の時分、天氣の好い晩に起る牛乳のやうな霧は面白い。公園の樹木をぼかし、電燈の光をぼかして、町から町を流れる霧の中を、往つたり來たりする電車は、夢の世界を走るやうだ。その霧の中を往き來する人の顏が、近近と自分の眼の前に見えた時、その顏が昔知つてゐる女の顏に似てゐでもすると、新らしい心の動きた感じさせられる。

上野は櫻の落葉に閑寂な趣が見られるが、秋日和の好い晩を職工達に荒されるのに惜しい心地がする。淺草公園はごみごみしてゐて醜穢であるが、それだけ人の心を引くものがある。觀音堂の周圍や傳法院の境内には、銀杏の老樹が黄葉するが、それは公園を彷徨する者の眼には入らない。

淺草公園の秋は、秋雨の淋しさにある。びしよびしよと降る雨の幾日も續いてゐる時、觀音堂の廊下へあがつて見ると、汚い絆天に泥まみれのゲートルを付けた男達が、堂の壁を背にして、光のない眼をどんよりと開け、冷たい雨のからまつて見える朱塗の欄干の外を見ながら、何か小聲でつぶやいてゐたり、

腕組したなりに考へ込んでゐたりする。活動寫眞館の物音が聞えて來ても、それは耳に入らない。袢天著の男ばかりでなしに剝げちよろけた浴衣を著た男や女が、それに交つて、暗鬱な眼付で、傍にゐる人の顏を見たり、欄干の外の雨を見たりしてゐる。

觀音堂に近い水族館の裏手になつた藤棚の下も、陰慘な色彩の濃い所だ。私は朝から水つぽいやうにぼうと曇つてゐた秋の空が、二時頃から雨になつた時、その藤棚の下へ駈込んだことがある。藤の莢の黒くぶらさがつた棚の下のベンチには、其所に一人、此所に一人と云ふやうに、四五人の者が腰をかけてゐた。その時であつた。花屋敷の方から小走りに駈込んで來た乞食のやうな女があつた。女の背には赤坊がゐた。女は三十前後の面長な顏をしてゐた。其所にはベンチに腰をかけて、五ツか六ツ位に見えるおできだらけの男の子に、竹の皮の中から飯を出して食はしてゐる男があつた。女はその男の顏を一眼見ると、

『あなたは、』

と云つて驚いた。と、男の方でも、

『おお、お前か、』

と、云つて眼を見張つたなりで言葉がなかつた。私は二人の容子をもすこし傍で見てゐたいと思つたが、急いで行く所があつたし、すこし雨が小降りになつたので、そのまま藤棚の下を出て隨身門の方へと歩いて行つたが、今にその二人の顏を見合はした時の印象が殘つてゐる。

皂莢樹（さいかち）の實のはじけはじけ秋の行く

○

同じ都會の中でも、私の住んでゐる所は、山の手の谷合の町で、家の前を流れてゐる泥溝には、淸水が湧いてゐるので、季節によつて、水の色に變化があつた。秋が深くなつて來ると、水が澄んで來て、氣をつけて見ると、白雲の影が映つてゐる。夕陽の中には、赤蜻蛉が群をして飛ぶ。

その時分になると、私の家の裏崖へ百舌鳥が來て鳴く。それは三四年このかた、その崖にゐてつきになつてゐる鳥で、春の頃には梢の高い所へ止まらずに、下枝へ止まつて、鶯のやうに尻尾を振つてゐる。凄味を帶びた百舌鳥の聲を聞く頃には、その崖に生えた日向葵に似た草が、黃ろな菊のやうな花をつける。その崖には薊が生え、虎杖が生え、芒はもう穗に出て、夕風に動いてゐる。烏瓜は黃ろくなつて、その內に霜を浴びて眞赤にならうとしてゐる。

鮒の刺身が旨くなる。郊外の料理屋で栗飯に客を呼ぶのもこ

の時分だ。小學校では、芋掘の遠足をやる所がある。社頭の銀杏の葉の黄ばみかけた社では、芒の穂でこしらへた木兎を賣つてゐる。郊外の林から林を歩いて、芒の穂を摘むのも面白い。露の中では、螇蚸が飛ぶ。黄ばんだ櫟林の端に、思ひ懸けなく富士の姿を見付けて、喜びの聲をあげることがある。林の中では松蟲も鈴蟲も鳴く。農家の垣根には、柿が赤く熟しており、稻の熟した田の畦を通つてみると、田の小溝の端に濃紅い蓼の花が咲いて、水の中には白い藻の花も見える、藻の浮葉から浮葉に、佛蜻蛉と云ふ小さな羽蟲が飛んでゐる。その畦には鬼女の唇を思はすやうな曼珠沙華が氣味悪く見える。夕陽の中には蜻蛉。

夕方、芒の穂で圍まれた野社の前を通ると、狐が神官に化けて、青い衣を着、白い四手をさげて、默つて蹲んでゐると云ふのもこの時分だ。

普濟寺の六面塔を見て、日野の方へ行かふと思つて、多摩川の河原へ出た時は、もう十二時を過ぎてゐた。蟋蟀がチョン、キース、チョン、キース、と鳴いて、暑い秋の陽がまともに照り付け、蛇籠の上に咲いた河原撫子の花は萎れてゐた。

其所は多摩川の鐵橋の下手になつた所で、川の流が二ツになつて、中程を流れてゐる流には、渡船を置き前岸に迫つた流れには、假橋がかけてあつた。河原には砂利を採る人がゐた。皆竹子笠を着て、半裸體になり、砂利を篩に掻き込んで、それを揺り、小砂利を取つて、殘つた大砂利を捨ててゐる。

渡船を渡つてみると、向ふの岸に五六人の客が來て待つてゐた。客の三人の者は皆年老つた盲目女で、それぞれ布呂敷包を背負ふてゐた。盲目女の傍には、若い娘が月琴の包を持つて立つてゐたが、その娘の眼は開いてゐた。村から村を流れて行く旅藝人の群であらう。

假橋を渡つた所に小さな渡船小屋があつた。其所で幾許かの渡賃を拂つて、其所からあまり遠くない旅館へ行つて、晝飯を食ふことにした。鮎狩の時に客を呼ぶ料理兼業の家であつた。勝手を覗くと、釣した藁包に燒いた鮎の串を澤山さしてある。私達はそれを煮びたしにするやうに頼んで置いて、水へ浸りに行つた。

渡船小屋では、渡船賃を拂つた時にゐた男が、飯を食つてゐた。煙草の火を借りに行つてみると、黒い麥飯と南瓜の煮たのが眼に著いた。

假橋の下へをりて、赤濁のした水へ這入つた。水は冷たいが背や顔に照り付ける陽は燒くやうに暑い。歸つてみると、もう飯が出來てゐるので、椽側に腰をかけて、持つて行つた酒から

まづ飲んだ。

鼻の先は直ぐ往來で、ぽつぽつと人が通つて行く。ちやうさい屋が箱を鳴しながら通る。月琴引きが通る。自轉車を引ッ張つた店員のやうな小生意氣に見える若い男が、雪駄を履いた村の娘と話しながら、河原の方からあがつて來る。

道の向ふ側は、草の生えた畑地になつて、枯竹を立てた垣根の傍に、切口の新らしい大きな松杭を五ツ六ツ積んであつた。螽斯が暑くるしく鳴いてゐる。垣根には畑地から這ひあがつて來た烏瓜の蔓が絡んでゐて、それに二ツ三ツ黄ろい實が黄瓜のやうに見えてゐる。

　　行く秋の野社に鳴く鳥は何

海岸の秋

南の國の秋は、夾竹桃の花から芙蓉の花へと動いて行く。直射の激しい海岸の斜陽に、だらけて見える夾竹桃の花には、波の音がしみるやうに聞えて、火の中で呼吸をするやうに思ふのもちよつとの間で、直ぐ芙蓉の花が病みあがりの女の口紅のやうな色を眼立たして來る。

私は昨年、南の國の海岸で、初秋の聲を聞いたことがある。其所は公園地の松原に近い家で、柚を入れた魚の膾で、友人と二人で酒を飲んでゐた。今のさきまで鳴いてゐた蟋蟀の聲は、もう聞えなかつた。その家の庭には、葡萄棚があつて、取り殘された葡萄の實が、古くなつた房に二ツ三ツ獅嚙み付いて、その赤茶けた葉裏に、黄金蟲の這ふてゐるのも見えた。葡萄棚の下の花畑には、葉雞頭が眞赤になつて、鳳仙花は實になつてゐた。

それは靜かな夕暮であつた。爪の形をした銀色の月が松原の上に出て、ざーア、ざーア、ざーアと磯の砂にころがる風波の音が、輕く間遠うに聞えてゐた。その波の音の間に、よい、よいよい、と漁師の舟を漕ぐやうな懸け聲が聞えて來た。私は小さい時、その懸け聲は、海で死んだ人の幽鬼が、淋しい靜かな晩に陸近く來て遊ぶと云ふことを聞かされてゐた。

『舟幽靈の聲がしますね、』

と云ふと、無口な友人はちよいと笑つて見せながら盃をあげた。

　　砂を捲く捲き波の響、秋心

○

鰤と松魚の漁獲で縣下で知られてゐる魚村へと行つた。其所は山の麓にある小灣に臨んだ村で、漁期を過ぎた海際には、所所に漁船を引きあげてあつたが、その漁船の傍の砂の上には、

刈つたばかりの稻を干してあるのに、斜陽が黄ろく射してゐた。

瀞の右側には近頃新築した突堤があつた。私達は村の有志に案内せられて、漁船で瀞の潮を横切り、突堤の方へと行つた。突堤の根元には小さな入江があつたが、それはもと池であつたのを堀り割つたものであつた。其所には二三艘の帆船が船がかりしてゐたが、私達がその傍へ行つた時分、皆の船から持つて來たらしい三艘の傳馬船で、順順に漕ぎ出して、瀞の中程へ移してゐた。

突堤の上はセメントで固めて、一巾の平かな堤になつてゐた。入江の縁には、潮風に吹き撓められたタコの木や、イタビなどの短い木が生えてゐて、その下に、萩、濱牛蒡、水引草などがあつたが、萩と水引草は花をつけてゐた。滿潮に近い潮は、小さく沖から脹んで來て、どぶんと碎けては、飛沫をその邊に飛ばしてゐた。草の中には、鈴蟲が雨の降るやうに鳴いてゐる。石の上には油蟲のやうな船蟲が這ふてゐて、それが人の足音に驚いて石の間へと逃げ込む。

私達は突堤の上を歩きながら、土地の有志といろいろの話をした。春の頃漁の休日には、村の者が其所へ來て、酒を飲んで遊び暮すとも有志の一人が云つた。瀞の中に出た三艘の帆船がそれぞれ帆をあげはじめた。もう入りかけた陽が、瀞の潮の上に赤く流れて、それが帆船の帆にも赤くかかつてゐた。

吹殼の煙、船蟲、石に入る

磯山は鈴蟲時雨、波しぶき

晝飯に黑鯛の刺身、蟬鳴けり

浦しづか漁船に添ふて稻を干す

○

田圃の中にある小さな町に、五六日滯在したことがある。冷たい雨の降り續いてゐる時で、汚い木賃宿のやうな旅館の裏二階には、浪花節芝居の一座が泊り込んでゐて、朝も晩も騷いてゐた。二階の屋根瓦には、その人人の棄てたらしい梨や眞瓜の皮が散ばつて見えた。

私は襟垢の冷たい宿の浴衣を着て、裏二階の欄干に凭れて終日雨の脚を見てゐたことがある。雨の中には、もう歸りかけてゐる燕が、五羽三羽と飛んで、それが、淋しさうに、ぴ、ぴ、ぴと鳴いてゐた。風の具合で波の音も聞えて來た。

旅館の向ひは、馬車宿になつて、二時間置き位に馬車が東の村へ往つたり來たりした。雨の中にその馬車の笛が佗しさうに響く。私は涙ぐましい氣持でその笛の音を聞いてゐた。

浴衣の襟の冷めたさ雨斜め

雨の中に燕を點す馬車の笛

○

それは黄ろに熟した田の稻に、薄陽が射してゐる午後のことであつた。私と一緒に行つてゐた先輩が、隣の小學校で講演をやつてゐたが、旅疲れがある上に、眼に異狀のあつた私は、その席へ連ならずに、その學校に附屬した教員の住宅に寢そべつてゐた。

其所は紀貫之が土佐を去る時、船がかりしたと云ふ大港の傳說地であつた。その日は、先輩の講演の後で、市の中學から來てゐる教師が、大港に關する講話をやることになつてゐたので、聞きに行つて見たいと云ふ好奇心はあつたが、體を動かすのがおつくうであつたから、昔讀んだ土佐日記の朧氣な記憶をたどつて、海から月の出る所は、この海岸の何所にもないが、不思議なこともあるものだなどと考へてゐた。

それは蒸せ暑い日で、遠くの方からは、海鳴の音が重くるしく聞えてゐた。海の底をぐるりと掻きまはしてゐるやうな鳴り方で、靜かではあるが、その日の容合と云ひ、やがて來る暴風雨の前兆のやうな氣がして、頭を押しつけられるやうに苦しかつた。家の緣側へ蝗が飛んで來たりした。

狂ひのある海鳴稻穗、薄陽して

驟雨來るらし稻葉の露を蒸

あらし雲疾し蝉鳴く一頻り

山間の秋

暑い日で、午後から白い雲が波のやうに、あつちこつちの峯からもくもくと盛りあがつて出てゐたが、夕方になると黑雲も出て來て、それが一緒になつて空一ぱいになり今にも雨が落ちて來さうになつて來たので、妻は庭へ干してあつた浴衣を急いで取り込んだが、別に雨も降らなかつた。

自分の家のやうにして朝も晚も遊びに行つてゐる醫者の家に、湯が沸くと云ふので、陽の入りと思はれる頃、手拭を持つて貰ひ湯に出かけて行つた。村道の上段になつた家で、門の左側になつた便所にくつついて五衞門風呂の湯殿があつた。左側はちよとした花畑兼用の畑があつて、玉蜀黍を植ゑ、鷄頭を植ゑ、いんげん豆の蔓は垣根へ這ひあがつて、實になつた後の末花がぽつぽつ咲いてゐた。

私は醫師の細君に挨拶するつもりで、見付の藥局の方へと步いて行つた。藥局の右側の表座敷にもなれば診察室にもなる室に、取り込んだばかりの洗濯物がそのまゝにしてあるだけで、細君の姿も見えなければ何時も藥局の椅子に腰をかけ、特の

きな眼鏡をかけて、藥を調合してゐる醫師の姿も見えない。しかし、姿は見えないが、夕飯でも食つてゐると見えて、藥局の後の勝手の方で物の音がしてゐる。私が聲をかけると勝手の方から細君の大きな聲がする。

『家の者は、まだ這入れません、水を一ぱいくんで來て、先へ這入つてくだされ。』

私は細君の云ふままに、湯殿の前にある手桶を持つて、表座敷の前を横切り、隣の農家との庇合になつた所を通つて、裏の崖へあがつて行つた。背丈の高い桑畑の中を斜に行くと竹藪があつて、其所に筧で引いた清水が、松の木をえぐつてこしらへた水桶に溢れてゐた。清水は竹藪の傍の五六本の芭蕉の生えた所から出てゐた。その清水には朽葉が二三枚浮いてゐる。蚊の聲が微に何所かでしてゐる。清水を汲みながら、ふと空を見ると直ぐ傍にある漆の木の上に、闕みかけた月が薄つすらと出てゐる。

貰ひ湯が濟んで、家へ歸り、飯を食つてゐると、夜夜漢文を教はりに來る子供の一人がやつて來た。私はその子供を歸した後で、外へ出てみた。空は拭つたやうに晴れて、月が冴へて涼しかつた。私はその月の光に誘はれるやうに、蟲の聲にひたりながら醫者の家の前を通り、その先の荒物屋の傍から玉蜀黍畑に沿うて、川縁の方へとおりて行つた。其所は吉野川へ、支流になつた渓川の落ち込んでゐる所で、河原には巨岩が黒く立ち並んでゐる。川上には白い霧がかかつてゐた。私は崖の上の石へ腰をかけて瀨に碎けて行く水を見てゐた。瀨の石の上で鳴いてゐるらしい河鹿の聲が、瀨の音に交つて微に朗らかに聞えて來た。

玉蜀黍の坊子頭や月の下

○

いつものやうに朝飯の後で、ぶらりと醫師の家へ這入つて行つた。醫師は藥局で藥を調合してゐる。私は椽側に腰をかけて醫師と天氣のことを話す。二三日前まで大雨が降つてゐたが、都合よく大水も出ずに天氣になつてゐたので、私はそのことを云つてゐた。

『好い具合に水も出ずに濟みましたね。』

それを聞くと、醫者は私の傍へやつて來て、

『此所は降らいでも、東雲（こちくも）が行きますと、吉野川に水が出ますぜよ、それや……。』

醫師は前岸を蔽つてゐる草山の峯に指をさして、

『川筋を假ふて、西へ西へと、行きよりませう、あの雲が行くと、大雨でございますよ。』

て飛んでゐる。

『さうですか、此所が天氣でも、駄目ですか、』

『駄目ですとも、よく百姓が紙草を流しますよ、』

晝飯がすんだ所で、霧のやうな雨が降り出した。降るかと思ふと、直ぐ止み、止むかと思ふと、また降つて來た。私は醫師の云つた言葉を考へてみた。

夕方になつて雲切れがして、川上の山に落ちかけた夕陽の一筋が、路の上を群れ飛んでゐる赤蜻蛉の羽に明くぱつと光つたが、直ぐ消えてしまつた。とそれと一緒に、河原の方で人聲がしはじめた。

『水ぢやア、』

『水ぢやーア、』

『おーウい、水ぢやーアよーウ、』

私は庭先へ飛び出して、檜の生垣を押し分けるやうに顔を出して、川の方を見おろした。今のさきまで楮を白く晒してあつた落合の河原は、赤濁のした水の底になつて、その水は河原に犇え立つてゐた岩岩を呑みつくして、どうどうと物凄い音をさしてゐた。

夜になつて子供の一人に、日本外史を讀んでやつてゐた。順番を待つてゐた他の一人の子供が、ランプの笠に來てとまつた小さな羽蟲を指で摑んだ。

『せいたが來た、これが陸へあがると、水が出る、』

それは川の中の石の下にくツついてゐる小さな蛭のやうな蟲で、鮠や諸子を釣る餌にするものであつた。

めつきり黃ばみし桑の葉、洪水退いて
茱萸の實靑し茱萸の枝枝の藁屑

○

暴風雨模樣の怪しい空合であつた。朝飯の後で宵に讀み殘してあつた新聞を讀んでから學校の方へ出かけやうと思つて、椽側へおりると、軒下で腳を洗つてゐた妻が云つた。

『虹が、虹が、』

家の西側にある馬小屋の屋根越しに見ると大きな虹が出てゐて一方は山の中腹にある小學校の方に垂れ、一方は渡場の上にかかつてゐる。

空模樣と云ひ、虹と云ひ、子供の通つて來る道に溪川を控へてゐる學校では、とても生徒が來さうにもないので、また机の前へ引返して新聞を讀んでゐた。

『また、大きな虹ですよ、』

妻の聲がするので、私はまた椽側に出て見た。巾の廣い大き

た虹が、馬小屋の直ぐ向ふの桑畑の桑の枝から、川縁の胡桃の藪の上へかけてかかり、赤と紫とが非常に目立つて見える。

その後で、學校へ出かけて行つたけれども、附近の生徒が四五人來てゐるばかりで、他の者は來ないので、午前の内に歸つて來た、驟雨がもう降つてゐた。夕方になつて、ちよと雲切れがして、青空が見えてゐたが、直ぐまた降り出した。夕飯の時に庭へおりて見ると、雨が止んで、前岸の峯に小さな虹が出てゐる。

『また、虹が出たなあ、』

私の住んでゐる家は、直ぐ近くの農家の隱居所であつたもので、隣の室には、その農家の親族續きになつた一人者の老婆がゐた。老婆は私の聲を聞いて、

『夕虹は日和でございますよ。』

老婆の言葉が切れたか切れないのに、驟雨が、ざあ、ざあ、と降つて來た。

　　初秋のざあ降りの雨、虹の輪に
　　稻さらす縣道のへり赤蜻蛉

○

ヒチヤ河原で施餓鬼があると云つて、隣の嫁が知して來てくれたので、妻に殘たばかりの女の子を負はせて、その嫁と三人で出かけて行つた。その時分、私は學校の中に寢起してゐた。

それは舊暦のお盆の十四日の晩で、赤味の强い月が冴えて、山間のせいでもあるが、寒い程に涼しかつた。學校の門を出て坂路を渡場の方へ向いておりると、蟲が、騷がしく鳴き立てて路の兩側に植ゑた玉蜀黍の長い葉に、露がきらきらと光つてゐた。

ヒチヤ河原は渡場から四五丁川上にあつた。其所は暑い間、學校の子供を遊泳さする場所である。河原には村の若衆が集つて山のやうに集めて來た麥殼で施餓鬼舟をこしらへてゐた。大竹を心にして麥殼を一抱以上もあるやうに捲きつけた、四五十尺もある物をこしらへ、それを輪にして、中へ十文字に支柱を入　周圍に葉の著いた青竹を立てて、それに綱を張り、鬼灯提燈を釣したもので、私達の行つた時には、胴體に支柱を入れてゐるところであつた。かうして施餓鬼舟が出來あるがと、水の中へ押し出して、提灯に火を入れた。河原へ集つてゐた村の人は、眞黑に集つて來て、椀や瓦盃に入れてゐた洗米を、てんでに投りかけて念佛を稱へる。

施餓鬼舟は、その内に汀を離れてしまつた。七八人の若衆はもうその上に乘つてゐて、用意してゐた水竿を張つて、前岸に迫つて流れてゐる流へと出して行く。提灯の火は、目の下に赤くにじんだやうな色をして、ちらちらと動く。

若衆の好い聲で歌ふ唄が起つた。それは、施餓鬼の晩に、自分の好い咽喉を若い女に聞かすと云ふ、その土地の昔からの風習であつた。若衆の唄は、次から次へと違つた聲で歌はれた。

『あれは、——さんぢや、』

『あれは、——さんぢやないか、好い聲ぢや、』

『まあ、好い聲ぢやこと、』

こんな囁きが彼方此方から聞えて來る。

施餓鬼舟は下へ下へと流れる。その施餓鬼舟には、小舟が一艘繋いであつた。提灯の赤いにじんだやうな光は、絶えずゆらゆらと動いてゐる。

施餓鬼舟が下へ行きかけると、河原にゐた者は、上の路へあがつて、その舟と平行して追つて行く。私達もその中へ交つてゐた。

若衆の歌聲は、兩方の峯に木魂を返して、ほがらかに聞える。施餓鬼舟は、もう渡場を過ぎて、落合に近い大瀨の所へまで行つてゐた。大瀨では、施餓鬼舟が岩に當つて碎けることになつてゐる。

『ああ、もう、大瀨へ來たか、』

『大瀨になつた、』

施餓鬼舟が碎けるのを惜むやうにつぶやく者がある。私達は醫師の家の近くまで行つてゐた。

歌の聲がぴつたり止まつて、提灯が大揺れに揺れ出す、もう若衆達は、小舟へ乘り移つてゐるだらう。施餓鬼舟の火は、見る見る消えて行く。

『これで、來年まで、川流をする者もない、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、』

私の傍にゐた老人がかう云つた。もう十一時近くなつてゐて月は寒い程に冴えてゐた。

迎火高高と寄せかけた柿の樹、旅籠の夕

○

その晩は中秋名月の夜に當つてゐると云ふので、宿の内から月の出を見やうと思つてゐた。朝は霧が深かつたし、空も晴れて、陽氣も山間の陽氣にしては暑すぎる程であつたから、今晩こそ、思ふ存分に月を見やうと思つて、夕方淡文を教はりに來た二人の子供を、そこそこにして歸してから庭へおりた。陽が入つて、馬小屋の屋根越に見る西の空は、黄ろに夕映して、空はまだ青青と澄んでゐた。

月の出には、まだすこし時間があつたが、私はそはそはと庭を歩いた後に、通へ出て、通の上を歩いた。茅蜩の聲が、川縁の方から聞えてゐる。月の出る所は、落合の河原から下手になつた、

前岸の松や杉の黑く繁つた峯であつた。其所には、日浦ケ峯と云ふ名がある。私は日浦ケ峯の方を見たり、川上の夕映を見たりした。

ふと氣が付いて見ると、夕映は樺色にくすんで來て、空の色が濃い藍色になつて見える。前岸の草山の頂上にある三本杉の方を見ると、星が一つぽんやり出てゐる。いよいよ暗くなつたから、月が出るだらうと思つて、又日浦ケ峯の方へ眼をやる。しかし、月はまだ出てゐない。と、その時、子供のやうに月の出を待つてゐるのが、馬鹿馬鹿しくなつて來た。それと一緒に空腹を感じて來たので、月の出を見損つても好いから、飯を濟まさうと思ひ出した。で、急いで家へ歸つた。妻はとうに飯をかまへて、待ち疲れて小言を云つてゐた。

そこで飯を食ひはじめたが、やはり月の出を見ないのは殘念なやうに思はれる。で、急いで飯を掻き込んで庭に出た。星は三ツ五ツと光つてゐるが、月はまだ出てゐない。

その中に、醫師の家へ行きたいと思ひ出した。で、その家へ行つて椽側にゐた醫師と話しながら、日浦ケ峯の方を注意する。峯の背後の空は明くなつて、夜明けの空のやうになつてゐる。月がもう登りかけてゐるのだなと思つて、まじろぎもせずにゐると、その峯にある大きな松の木の根本が赤くなつた。月が出たなと思ふと、その赤い色は直ぐ消えてしまつた。不思議に思ふて見ると、その松の上に一抹の白い雲がかかつてゐて、それが黃色に染まつてゐる。

雲の邪魔があるから、月の出が遲いなと思つた。と、三分ばかりして、また松の根本が赤くなつた。續いて圓い月の形が松の向ふに登りかけた。その松の枝葉にかかつた容が、ちやうど提灯の骨のやうに見える。月は漸く登つて松の梢を離れかけた。と、それがまた扇のやうに見える。やがて月は扇の柄を下に落して、圓圓と登つて涼しい光を投げた。光の下になつた日浦ケ峯は眞黑くなつた。

月は間もなく、上にかかつてゐた雲の中へ這入つて、その光が朧になつたが、三十分ばかりすると、その雲も消えてしまつて、冴えた光が谷間の隅から隅を照らした。蟲の聲が瀨の音に交つて靜に聞えて來る。

芒の穗おぼろ蟋蟀月に鳴く、

○

晩秋の靜かな日の夕方、村の通を歩いてゐた。路の上段になつた農家には、どの家にも軒下に黃金色をした玉蜀黍を累累と懸け連ねてある。路の下の川縁の方へと急勾配になだれた畑には、實をもがれた玉蜀黍が長い枯葉をがさがさと動かして、引き殘

された里芋も、蓮のやうなその大きな葉を僅に顫付かせてゐた。其所には川上の遠山に入りかけた陽の光が薄赤く光つてゐた。

私は畑の夕陽の光を見てゐた眼をあげて、日浦ヶ峯の方へやつた。其所には、十日頃の月が白い雲のやうになつてかかつてゐた。私の足は何時の間にか止つてゐた。と、川の瀬の音が耳について來る。川上の方を見ると、夕陽がもう山に隱れかけてゐて、川の此方の岑の半から下は、蔭になつてゐる。私の眼は直ぐ自分の前になつた前岸の草山へと行く。榛や萱の山は、金茶色に染つてゐて、その頂上の三本杉の所に、鳥の聲がする。これから追追鳥が歸る時分だと思つて、仰向いて空を見た。墨汁を散らしたやうな黑點が、五つ七つと彼方此方に見える。

陽はもう入つてしまつて、夕映を見せ、そのあたりに流れてゐる雲を薄い紫の色にぼかしてゐる。日浦ヶ岑の方を見ると、雲のやうに白かつた月が、すこし水水して生氣が加はつたやうになつてゐた。足許の草の中から蟲の聲が聞える。

私はその翌日の夕方、落合の上の三角點に立つてゐた。日浦ヶ峯の上の月は銀色に光つて、川上の雲はくすんだ朱の色に燃えてゐた。溪川の向ふになつた畑には、麥を蒔いてゐる男が二人ゐて、それが燒火の傍で鋤を光らしてゐた。その燒火の煙が白白と空へ登つて、空の色に溶け込んでゐる。何時の間にか川上の夕映が消えて、川の水が灰色に光り出した。三本杉の方では鳥の聲が騷しくしてゐる。

ある日、私は、溪川の左岸に添ふて歩いてゐた。其所は前岸の山が象の鼻のやうに上手に向けて出つ張つてゐた。私はその懷のやうになつた凹凸の小路を歩いてゐた。三軒の萱葺屋根が崖の上にあつて、象の鼻の上にかかつてゐる夕陽に照らされてゐた。家の周圍には、麥を蒔いたらしい山畑があつて、畦の其所此所に眞赤な實の綴つた柿の木があつた。此方にはすこしの風もなかつたが、前岸には風があつて、赤く染まつた楓の葉や黃ろな楢の葉を吹き動かしてゐた。葛の葉も灰色の肌を見せ、芒の穗も白い澤山の手を動かしてゐた。

三時頃、醫師の家へ行つてみた。空には誰もゐないで、靜な陽の射した椽側に栗の實を干し、その傍に大きな飼猫の牝猫が圓くなつて寢てゐたが、その背筋の所に五六疋の蠅がとまつてゐた

だんだらの山畑の柿・鳥の鳴く

冬近し筧つくらふ竹切らん

武藏野論

藤澤衛彦

先住巨人論

數奇の運命を木鼠と雷鳥とに弄ばれて、パイカルを越え樺太を越えて、何時の頃ともなく日本の奧武藏に捨てられた松毬果の生長が、處女期の姿を秩父の山巓にしがみつけた時、原種人類がこれを見て、『おう南下せる植物の女王よ、偃松は、淺霧に迷ふらし。』などと感傷的な歌聲をあげやうなどとはてんで思はないが、われわれの已惚には、又、われわれの祖先が、まさか猿公の後胤だとは想像し得られなかつたので、あの生眞面目な進化論者に、『確にさうだ。』と立派な證據を敲きつけられる迄は、頑強に『否々』と掉頭を振つたものだ。かくて、永遠にして不斷な「時」の刻みが、地上人類の祖先に流れ初めた洪積期時代から、茲に幾十萬年を經過したかは未だ計算してみないがわれわれの美しいオリンポの夢は、その時からダウヰンに根底から覆へされた。渓谷にして牙を含み、渾沌たること鷄子の如く、陰陽分れず、天地剖れずあつた開闢時代を突破して、『おぎやア』と此世に生を受けた最初の人類が、男であつたにしても女であつたにしても、お尻の眞赤い種屬の系統者だと思ふと祖先崇拜が吹き出したくなる。禁園の果實を盗み食ふて樂園を追はれて行く物恥のアダムとイヴとの道行姿も、栽培の苦心を蟹から奪ふて猿蟹合戰の柿の實を食り喰ふ猿芝居の一幕に結びつけると、『あゝアダムさん、』『イヴさん、』流れ流れて果知らず、晝は旅して夜は夜で踊り、末はいづくで果てるやら、漂泊の旅がちやんちやらをかしい。人類の祖先が猿だつたといふ事は、造物主が勝手な自由意志で萬物の最後に人間を造つたといふ順序と、『神はおのれに象りて人を造り給へり。』といへる舊約創世紀の記録とに、如何に皮肉な對照を成してをる事であらう。

アダム、イヴは元より洪積期時代の人間ではあるまい。其他の動物にしても植物にしても、皆何等かの變化なしに洪積期時

代から現代に及んでをると斷定する事は出來まいが、少くも今日に樹系を繼げる例へば朝鮮五葉などが、烏蘇里シホタアリーン山脈から日本アルプスへ、滿鮮の山々から日本日光山彙へと、自然に分布されてをるのを見ると、其後の地殼に未だ大變動の來なかつた前、地質學者の所謂日鮮大陸が陸地の連絡を持つてをつた時代に南下した儘で、海を隔てるやうな後代にまで殘されたといふ閲歷にある事を認めてやらずばなるまい。

植物學者によると朝鮮五葉や偃松の南下は、洪積期時代の轉期に襲來した氷河の移動に分布されたのだと言はれてゐるが、その氷河の出現は、洪積期時代の生物にどのやうな大恐慌を惹起せしめた事であつたらう。原種人類は勿論、象、犀、馴鹿、羚羊、洞獅子、劍齒虎、狼、氷狐、洞熊、蟻熊、樹獺、犰狳 貂、鼬、川獺、雪兎その他ありとある動物は、大氷河の襲來から免れようと彼方此方逃げ廻つたけれど、最後に氷河は追縮つて、忽ちかれらを氾濫の渦中に捲込んだりした。氷河は歐米を中心として流動したが、その餘波や影響やは亞細亞にも及び、殊に極度の寒氣が全世界を席捲した爲、多くの生物は一旦地上から一掃された態にあつた。漸く其氷河と寒冷とから逃れ得た馴鹿や羚羊やの儕ばかりを除いて、マンモス象やメルク犀などは、恐らく此氷河時代に絶滅したものであつたらう。

先史考古學者達に、舊石器時代人類と呼ばるゝ洪積期時代の原種人類が、果して日本の國土に先住してをつて、それが氷河時代に滅絶したものかどうかといふ疑問は、なほ前世界研究者の懸案として殘して置くにしても、われわれは此處で巨人傳說について述べねばならぬ事がある。

その傳說巨人種は、現在の日本民族に、どのやうな根元的體型を認められてゐるか。更めていふまでもなく、そんな形迹は少しも無い。なら、其巨人種は、日本に於ける洪積期時代の幾分期かを劃せる舊石器時代人類が現世界の最初期を劃せる新石器時代人類に至る過渡期人類でゝもあつたか、そんな大それた保證も決して出來ない。最近に於ける日本全學者の努力でさへ、目下のところ、原種人類の研究には及んでゐない根元的體型を、大體二種或は四種の混成民族の分布として、沖積時期代初頭の日本の地上に認證したるにとゞまつてゐるではないか。

沖積期時代に入つた人類は、從來の原種人類に比して、大に其數を增加し、且、其骨格も、今種人種(ホモ・サピエンス)に漸同してゐるが、日本に於ては、これが考察にも、段々と學問上の異說があつて、歷史家、考古學者、解剖學者に各別種の主張を成さしめてゐる例へば、汎アイヌ人種群と、北亞細亞人種群とが、既に新石器時代から日本の國土に住んでをつたといふ推定の同一歸着點にも

住人類研究者間に見出さるゝ論結にしても、北亜細亜人種系の體型を示すべき古人骨の發見を正確にし得ないでゐる解剖學者は、原日本人を汎アイヌ人種群の一部に置き、アイヌ式土器と彌生式土器との上に明かな様式の差別を認めてをる考古學者は、土器よりしてアイヌ對原日本人の民族的種別を立てやうとしてゐる。

然らば、武藏野に於て、先史人類の分布はどうであつたか。こゝでも、行はれべくば、解剖學者のアイヌ型及び現代日本人類型の推定が成立せられないでもあるまいが、考古學者はアイヌの二大部族先住、固有日本人の後期侵入を論じてゐる。その先住二大部族とは、海岸アイヌと移住アイヌとの使用土器の薄手厚手の上から、殊さら命名されたもので、人種的相違のあるものでは勿論無い。

兎に角アイヌは、先づ海濱に居住して漁人的生活を營んだ。渺茫とした時を貫いて、彼等が其漁つては喰ふ貝の貝殼を捨てた遺跡が、頻りなしに發掘さるゝ貝塚の分布であつた。北武藏野の入間郡も、曾て海濱であつたといふ貝塚分布の一點に加はつてから、大古武藏野の領域は頗る狭められたやうに感ぜられるが、さうした其頃の遺跡にわが傳說巨人種は根を下してゐる。文献では「常陸風土記」に、『平津驛家、西一二里有レ岡、名曰二大櫛一、上古有レ人、體極長大、身居二丘壟之上一、採レ蜃食レ之、其所レ食貝、積聚成レ岡、時人取二大朽之義一、今謂二大櫛之岡一、其大人踐跡、長三十餘步、廣二十餘步、尿穴跡、可二二十餘步許一、云云』とあるが、貝塚人種と傳說巨人種との交渉の最初である。大櫛岡は、今の茨城郡大串村で、水戸より鹿島への往還、東鹽崎に隣つてゐる。西は東前村、そこに池があるもの即ち巨人が踐跡で、現に土人も云ひ傳へて大人の足跡傳說を成してゐる。

降つて、「仙臺風土記」に、『伊具郡金山鄕大内村鹿狼山大山也、舊說言、往昔有二神仙一、常愛二老鹿一馴二白狼一、山中相伴、其長臂不レ可レ量、爲下跪二此山頭一遊觀上、亦不レ知レ年、又好レ食二貝子一、仍展二伸長手於山東一、而捉二貝子于海濱一、嚼二其子一而棄二殼于宇太郡新地邑一、落處積累之不啻殼朽貝堆如レ丘、鄕里呼レ神稱二手長明神一、號レ丘曰二貝塚一、今爲二農家一、曰二之貝塚宅一、作處高山名二之鹿狼山一云云』と見えるものも、傳說巨人種が、臺地に移住して半漁半獵の姿に傾向する時代の暗示ではあるまいか。

一體、日本の巨人傳說は、(一)先住巨人種傳說、(二)大太法師百合若傳說の二時代に劃すべきもので、之に(三)大入道傳說が附隨される。更に之に比較說話學上の分類を下すと、(一)巨人足跡傳說、(二)雙兒山式傳說、(三)背競傳說を主體とすべきもので、總稱して巨人傳說と名ける。

百合若は賤しい者であつたが、大人で大力あり、强弓を引きよく礫を打つた。礫もただの礫ではない、百合若とも言はれただけに、何百何十貫もの大岩を礫にした。九州の產で、大人の故に百合若大人（大臣と誤る）とも大太ぼつちとも呼ばれた。ぼつちは礫の事で、肥後國八代郡に百合若塚の遺跡を存してゐる。或時彼は自分の腕試しに、鐵の弓に鐵の矢を番へ、碓氷嶺から妙義山に向つて一矢を放つた、その矢は見事に妙義山の峯の一つを射貫いた。今でも汽車の中からその穴が見える。碓氷嶺の麓には、彼がふんばつた足跡といふものを五六町相隔てゝ存してゐる。

その頃、尾張阿育知郡片輪の里の農夫は、雷から子を授けられた。これが「靈異記」の道場法師出現因縁であるが、法師は出生の時頭に蛇を纏ひ付けて居た。其後、力王との力比べに足跡を深さ三寸に踏み入れた。彼は敏達天皇の御宇にて元興寺の名僧であつた。

かうした傳說は何時の頃ともなしに接觸融合し、之に武家時代の戰大太や辨慶を加へ、後代には又其地方によつて、例へば筑紫の味噌五郎や出雲の閑太や、讃岐の大智坊の大力譚を錯綜せしめて、巨人傳說は頗る變化し、或は「帝王編年記」養老七年風土記の文を引くところの、夷服嶽と淺井嶽とが高さを競つたところ、淺井嶽が一夜の中に高さを增したので、夷服嶽が拔劍して淺井嶽の頸を斬落したといふ形式の說話から、首劔モチーフとして、「曾呂利話」の新左衛門が太閤の廻國を諫めて大入道を喰ふ民譚などが起因せしめられてゐる。武藏國西多摩郡青梅の天寧寺裏に現はれたといふだいだらぼつちは、夕方出會はした時はさうでもないが見上げるとどんどん高くなつて行くといふ口碑は、後世の化物怪譚に巨人傳說が取入れられたので、此方では常に狸貉の變化が其代表となつてゐる。

「松屋筆記」には、武藏相模などの國人が、常に、だいらぼつちと言つて、形體の大きな鬼神のやうに恐れられるものがあつて、偉大といふ事と呪咀といふ事を敎へてゐる。相模の大沼といふ沼は、其だいらぼつちが富士山を背負はうとした時、足を踏み込んだ遺跡で、此原に藤の無いのは其折背負繩が切れたので、だいらぼつちは藤蔓を求めたけれど無かつたからであると言ひ傳へてゐるといふ事が擧つてゐるが、類似の傳說は諸國に段々あつて枚擧に暇が無い。武藏方面ばかりだけでも、彼の足跡は有に二拾ケ所に及んでゐる。そのうち、十方庵の「遊歷雜記」に見える豐島村大道法師塚の條『武州豐島郡沼田村へ渡り越さんといふ豐島の渡しの手前、西側畑の中に大道法師の塚あり、世上の流布話に大道法師と稱するは是なり。土人の說に、大道法

師の草鞋につきし土砂落ちたりしが塚になりしと言ひ傳ふ。里俗はこれを稻荷塚とも稱し、或はこのあたりを小名に呼びて代田ともいへり。これ昔の通ふを以て土人認め傳へしにや。又、此側に、小さき塚一つ、中古迄ありしを、畑主破壞して、圃に引きならしけるに、馬骨とも覺しき物夥しく出でしが、その祟りにや、畑主は、年久しく煩ひければ、恐れて、大道法師の塚へは鋤さへも入れずとなん。大道法師といふもの、如何なる人にや怪しき巷談ながら、見聞せしまゝを記す。周圍凡そ三間餘りあらん。云云』とあるもの（その塚の圖をも入れてをる）は、斷言は出來ないが、或は貝塚交渉巨人種の遺跡ではあるまいか。

平安朝時代に、道場足跡傳説が近江國まで傳播してをつた事は、「台記」の石山詣での條、道場が爪で掻き出したといふ閼伽井及び履跡と稱するものがある事を記してをるのでも知れるが、先住巨人傳説はそれより古く貝塚交渉傳説として成立してゐる。

巨人の足跡であると言はれる凹みの形式にも段々あつて、常に調査が遂げられたらおもしろからうが、そのうちには石器時代の竪穴などで、後代にだいたらぼつちを關係せしめられたものもあらう。

殊に、變兒山式巨人傳説に於て、だいだらぼつちが畚で土を運ぶ途中、天秤が折れて畚の土が兩方に別れて落ちた。それが變兒山の出現由來であると説く傳説は、土地によつて、れいらぼつち（甲斐國東山梨郡加納岩村地方）、でいらぼつち（信濃國上諏訪地方）、だつたいぼう（常陸國椎塚地方）、でいでんぼめ（下野國宇都宮地方）、だいほし（近江地方）などいふ巨人の上に傳承してゐるが、其大太法師と同一形式巨人種を意味するのは勿論である。尤も、變形として、此説話が、天狗や天邪鬼やの上に結びつけられた地方もないではないが其何れにしても。かうした説話には、聖と屎の日本神話が影響してゐるらしく思はれるのである。昔昔の太古、少彦名命は大己貴命に向はれて、『聖の荷を擔いで遠くへ行くのと其處まで屎を堪へて行くのと、どつちが難しいか驗して見ないか。』と相談をかけられた。大己貴命は、早速に贊成されて、『よし、やつて見よう、だが、己は屎を堪へて行く方にする。』『さうか、ぢやあ、己は、聖の荷を擔いで行かう。』二人の神樣は、お互ひに堪へつくらをして歩み續けた。一日二日まではよかつたが、三日四日となると、少彦名命の肩は、毎日の荷の重みで堪らなくなつてくる。大己貴命は屎を堪へる苦しさに、『はあ、はあ。』と歎息つく體たらくであつた。それでも、二人の神樣は堪へ忍んで、猶五日六日と歩み續けて、今の播磨國神崎郡粟賀村まで來た時、大己貴命は、ど

うにも堪へ切れなくなり、『あゝ、わしはもう堪へられない。』と言ふ言葉の末だ終るか終らぬかに、ジヤアと尿を垂れはじめた。丁度其時、同じやうに肩の荷の重さに堪へられなくなつてゐた少彦名命も、『はゝはゝ』と笑ひながら埴の荷を擲り出して、『然し、ほんとに苦しかつた。』と、これも太息をつかれた。其時、少彦名命が擲り出された埴の荷が崩れて一塊の岡となつたものが今の埴岡里だといふのであるが、北里の大部分は大巳貴命の溺尿のために、自然に捏られて直に岩となつたといふのである。此神話は、「播磨風土記」の記錄するところで、それには、『下レ尿之時、小竹彈二上其尿一汚二於衣一、故號二波自賀村一、其埴與レ尿成レ石干レ今不レ亡、云云』の附記がある。そして、これらの神話傳說から更に一歩考へを進めると、雙子山式巨人傳說は、其內容的要素から言つて、山岳方面に發達してをる傾向にある。『昔秩父の山の神樣が、何處かに山を造らうと、山を擔いで瀧ケ久保まで來ると、躓んだところへ足を踏み入れた拍子に山を落してしまつた。それで同じやうな山が二つ出來た。それが今の秩父の二子山だといふことだ。瀧ケ久保を、昔は足が躓と言つてゐた。』(「日本傳說北武藏の卷」)などの說話は、足跡ブラス雙子山混成の傳說で、さうした傳說の形式も多いのであるが、此巨人足跡と貝塚巨人蹤跡と同一民族の傳へたところのものであらうか否かは疑はしい。

これを要するに、先住巨人種の類型は人種學上なほ永遠に認められまいが、說話學上、汎アイヌ人種の上に認められる。貝塚と交渉せる古代文獻によると純アイヌ式說話のやうでもありそれが例へば足長とか手長とかいふ形式に出ると諏訪明神に從屬した大人との類型から混成說話のやうでもあり、雙子山式に孤立すると原日本人式說話のやうにも思はれる。その何れにしても、大太法師百合若式巨人傳說以前に屬する傳說巨人種は、石器時代先住の傳說であるべく思はれる。そして其傳說は、日本歷史開けて以來の千八九百年よりも遙かに長い年月を上に遡つて、其處に闡明せらるべき傳說であるべく思はれる。

有史以前の武藏野に於て、果して此傳說巨人種の先住が完全に假定し得られるとすれば、今の原種人類を拔下して、猿の進化の夢を根本から覆してやれるのだが、先住汎アイヌ人種群が實は暗色歐洲人種群と同一の系統に屬し、それが、亞細亞、印度、南洋を經て、夙くに日本に渡來したものであつたとすると、案外どこでどんな傳說に紛れ込まれたかわかるものでない。

原史時代論

北武藏入間の海濱で、貝を漁り食ひ、食つて其貝殼を捨て

先住アイヌが、かくて幾千年かを其處に經過した後であつたか、武藏方面にも亞細亞人種群が其姿を現した。彼等は彼等の遺物の分布が示してゐるやうに、先住アイヌと接觸を保つて遷移を完うし、追々に彼等を征服して行つた。はじめ、遙々朝鮮半島から渡つて來た特種民族は、先住人の眼を驚かした。社會を成す事を知らなかつた、どちらかと言へば慓悍な野蠻人と視られた多くの先住人種は、時に石器を取つて侵入者を脅したが却つてより精巧な遷移者の石器に平げられた。

北武藏の比企吉見地方にこんな傳説がある。

昔昔、其又昔の太昔、まだ此土地に皇化の及ばなかつた時分に、地獄谷から鬼澤へかけて、多くの鬼が住んでゐて、絶えず里の人達を惱ました。或夏のこと、村の老若男女が、市の川の川縁の楡か何かの木蔭に集つて、どうかして鬼の惱みから免れたいといふ事を相談してをつた時、其前を、女神のやうに美しい少女が通つた。少女は、木蔭の流を見て、急に渇を覺えたものか、つと流の方に歩み寄つた。丁度其時、二十ばかりの青年が汀に立つて流るゝ水を怨めしげに瞻めてゐた。少女は、『其水を一掬ひして下され。』と其青年に頼んだ。青年は、驚き顏に飮みて、『どうしてどうして、此水には惡魔の毒が混つてゐます。今も今、私共は其多くの惱みから免れたいと、相談してをる最中です。』と答へた。すると、少女は悲しげに青年を見て、『私の咽喉は火がつくやうでも堪へなければなりませんが、村の人の難儀を聞いて此儘には行き兼ねます。宜しうございます、私は、村の人に替つて、一日も無くてはならない此川の水の毒を消してあげませう。貴郎は、又此劍で、村人の敵を平げて下さい。』かう言つて青年に劍を渡すと、少女は直に流の中に身を躍らしてしまつた。青年が驚いて流を見やると、流の中から不思議な石が湧出し、其石から出る靈氣で、今まで濁つてゐた流の水は、忽ち澄んで行つた。青年は、此不思議を里の人達に話し、少女から讓り受けた劍で、鬼を平げる事が出來た。今市の川に懸つてゐる鐵橋と岩室橋との間にある俚俗龍の枕石といふのが其靈氣を吐いた石、少女は即ち岩室の觀音樣の御化身、其時の青年は高負彦根命であつたといふ。

かうした口碑傳説は、元より原形の儘で遺されてあるものではないので、青年が神話時代の味耜高彦根神であるに對して、少女が佛教傳來時代の觀音であるといふ矛盾を示してゐるが、内容を嚙みわけて見ると、其處に固有日本人が先住者の間に割込んで來て、彼等と接觸衝突してゐる物語のやうにも思はるゝではないか。

何れにしても、固有日本人は、異人種に勝を制した。さうし

てそれが鐵器使用の時代に入ると、忽ち彼等は立派なアイヌ征服者として覇を稱へ、其後に來つた原史時代のわれわれの祖先に讓渡した傾向にある。

原史時代出雲族の發展は、武藏野では、先づ山岳に據る知々夫から初められ、わが原史時代の勢力を支配する語部(かたりべ)の國津神(くにつかみ)はかくて南へ南へと進んだ。後年、日本武尊などが比較的容易に東夷征討の實果を擧げられたに就ては、與つて此國津神等の後援に俟つたもの丶多くがあるらしい。今の秩父の國神村地方は、かれら語部の國津神が、知々夫に於ける最初の割據地で、思ふに彼等は、其頃の武藏野先住人種に對して生々たる接觸を保つて進んだものであらう。

然らば其頃の武藏野の狀態はどうであつたか。考古學者は、時に其處に埋れた椎葉の化石の一塊を目付けたりして、有史以前に濶葉樹の大森林時代を展開してゐるが、われわれは此驚嘆すべき木乃伊に推論して、直ぐ目前に妖怪の盡くが如くに見られるあの吉見の百穴が物語る、先住人種の遺蹟が何事を意味するかを忘れてはならない。

海濱に生活して、その長汀曲浦に先住したアイヌが、何時の頃か入間の浦和に貝塚を築いた時代、百穴に遺蹟した人類は何處に如何なる方向を取つてをつたか、それも興味ある問題ではあるが、それよりも、それらは、何時代に、何人の手に成つたものであるかが大問題だ。人類學者は、或は貝塚積成時代の土蜘蛛の手に成つたものだと言ひ、或は鐵器時代の穴居の遺蹟だと疑つた。そして、今は、葬穴といふ事に考古學者の意見が一致してをるさうだが、それによつて、百穴――實に二百數十ある――の問題が總て解決されたのではない。百穴は、實に數十年前の幼稚な研究の儘で押込められてゐる。然も彼等の文化的闡明が、武藏野に於ける諸民族接觸の上に頗る重大らしい結果を齎すもの丶やうに思はれる。武藏野研究は、多摩や入間の入口でまごつくべきでない。野の詩人の細膩や武藏野の歌枕にあこがれてのみをるべきものでない。もつと深く深く喰入つて、其野の文化史を研むべきであらう。

採銅論と羊太夫傳說

最初知々夫に於て、國津神に一致した天孫派の民族は、どのやうにして新しい村落を開いて行つたか、落ちつく爲の開墾事業がどのやうな情態に進んでをつたか。古代農耕の事業は、最も彼等にふさはしい共同的の仕事ではあつたが、いくばくもなくして、彼等は、その農耕の手段に於て歸化人の文化を學んだ態にある。歸化の移民は、史に見えるよりもずつと古く武藏國

にも入込んでをつた形跡があり、それが啻に農耕方面ばかりでなく、處女地の豐かさに見られた武藏の利源を漁つた。當時日本民族は一方又何を措いても己が踏める地より種々の金屬を得ん事に熱望してをつたので、其要求に於ても韓族の文化的智識を利用する事を忘れなかつた。かくて、かれらは、元明天皇の御代に於て初めて其土に自然銅を得る事に成功した。それが、一早く朝廷に献上になると、持統・文武以來、國産によつて通貨を鑄ん事の必要に迫られてをつた朝廷の喜びは之に過ぐるものが無かつた。之によつて年號は和銅と改正される。銅の發見者であるところの金上无と日下部老と津島堅石とは、皆從五位下といふ、當時に於ては國司以上の者のみの受くべき位階を賜つた。のみならず、其年の武藏の庸と秩父の調とは免ぜられて、採銅の事業は大規模に企劃されたらしいのである。文化を取り入るゝ事に急であつた日本は、何物を措いても、其事業を成功せしめねば止まないといふ慨を見せたのであつた。

其頃、知々父に於て威をなしてをつたのは、多治比眞人家(「姓氏錄」左京皇別に、『多治比眞人、宣化天皇之皇子賀美惠波王之後也。』又、「天武紀」に、『十三年丹比公賜姓曰眞人。』など見えてゐる。)で、彼は朝廷の命に應じて其採銅事業のために盡瘁した。銅の發見者である金上无(新羅人の裔だと言はれる。)を重用した事實は明瞭でないが、彼が殊に羊太夫といふ傳説的人物を採用して、其事業の顧問としたらしい事は隱れもない事で羊氏は其麾下の部族を從へて知々父の採銅事業に携つた。

鑛脈の立派なものであることは、先づ羊太夫を喜ばした。勿論、鑛石より銅を採製する事にはなかなかの苦心と努力とを要したが、羊太夫は度々の失敗にへこたれるやうな人物でなかつた。彼は先づ出原(?)に別舍を營み、彼が最も信頼せる部下の技術者を監督して、着々として其効果を擧げて行つた。秩父大瀧地方の口碑に、『銅は笛の音で採り始められた。』とあるものゝ根據はわからないが、何れにしても羊太夫の採銅、製銅の事業が所切に惠まれた事は事實で、「續紀」に所謂元明天皇の元年正月十一日乙巳、武藏秩父郡銅を献じてよりこのかた、和銅開珎を鑄るに致る經途には、此韓人の力が籠められてあつた事を記臆すべきである。

その後、公の催鑄錢司の官制が設けられた時、多治比眞人三宅麿は其長官となり、羊太夫は採銅所の技術長に任ぜられたらしいが、實際に於ける此事業の實權にかれ羊太夫の肩に擔はれてゐたやうな形跡がある。

當時の知々父の採銅所は、今の秩父郡金澤村(今、和銅山といふ地がある。)にあり、鑄錢司は、同じく里谷村(今も此地方

に鑄錢坊などといふ地名が殘つてゐる。）に設かれた。それまではかの舶載の銀錢ならざれば、持統朝の銀錢であつたものが、茲に始めて熟銅を以て錢貨を鑄造する事が始められたのである。これが有名なる和銅開珍の由來である。傳說に所謂羊太夫が、奈良朝に日勤したといふのは、即ち此採銅所、鑄錢司に出勤したのであつて、和銅六年五月、上野、武藏外三箇國より絁布を獻じ、又金青を獻じたといはれる金青なるものは、此採銅に就ての副産物を獻じたに過ぎない。そして、その折の絁布に就ても、傳說は、羊の太夫の蔡倫より出たやうに言つてゐるが、これに就ては別に論がある。

要するに、羊氏が後に表彰せられた功績といへるものは、この採銅鑄錢についての功績であつたので、この成功の名譽は、藤原の不比等が前に「大寶律令」を頒布した事よりも、その後太安麿が「古事記」を撰上した事よりも、より一層名譽の事として當時に評判せられたものらしい。そして、和銅三年大和平城に遷都の盛儀が行はられた後、遂に多治比眞人家の奏請に依つて、和銅四年三月九日、新たに上野國に多胡郡が設かれ、又其推擧に依り、同日、羊氏は其郡領に補するに至つた。現に群馬縣多野郡吉井町大字池村に存在する多胡碑は、實に其時の事蹟を、羊氏がその子孫のために記念すべく建設したもので、今の、多野郡は即ち古の多胡郡、緑野郡、南甘樂郡を合併して、明治二十九年に改稱したものである。

多胡の碑文を見るに、「辨官符、上野國、片岡郡、緑野郡、甘良郡、並三郡内三百戶ニ郡成、給羊、成多胡郡」とあるが、歷史と傳說を綜合して按ずるに、羊氏が、多治比眞人家の推擧によつて、郡を給ひて多胡郡に移住する迄、今の入間郡方面高麗川の沿岸に居つたらしく、和銅四年に至つて、部屬の韓人を率ゐて其處に遷つたもの、多胡の郡名も、多き胡の郡といふ意味を以て名けられたものであるらしい。そして、「續紀」に、天平神護二年五月壬戌、上野國にある新羅人子午足（羊午足の誤りであらうとも言はれてゐる。）等、一百九十三人、姓を吉井連と賜ふ由見ゆるものは、即ち此多胡の里に羊氏に從つて移住せし韓人の重立ちたるものであらう。

例の高句麗の亡命者高麗若光等の爲に、高麗郡が設かれたのは越えて五年の後であるが、此五年間のうちに、秩父地方の大和民族の思想は大分に變化して來てゐた。羊氏が秩父の採銅所に關係ある事は以前の通りであつたが、其事業の點より羊氏が屈辱を感ずる事が段々に多くなつた。韓人と大和人とは漸く乖離を感じ始めた。羊氏が多胡郡に遷された事も、實は採銅事業以外此頃頗る有利な發見が韓人の手によつて成された事が、多治

比眞人家側の猜視と敬遠とを買つた事よりの鑛界に出たのだなどと噂さるゝに至つた。羊氏は、彼が部下と共に多胡郡に移住の跡へ、例の高麗若光の替住を希望して、其推薦方を多治比眞人家に依賴したにかゝはらず、幾年かの間放つてをかれた事に私に憤慨してゐた。かうした抜くべからざる感情上の行掛りから、羊氏は、早晩多治比眞人家と衝突の起るべきを豫知したので、彼も私に或行動を取に至つてゐた。彼の其折の隱れたる行動といふのは、鑛山事業より得るところの或特產物を、內密に隱匿する事であつたらしく想像される。今も秩父大瀧地方の傳說に、『武藏に底無しの寶庫あり。』と言つてをるのは、昔羊太夫が隱匿した物を指してをるのだといふ事であるが、後に致つて、これを知つた多治比眞人三宅麿は、頗る彼の行動を憤つた。實を言へは、多治比眞人三宅麿ヵ羊氏に怨みを買つたと言はれる高麗若光推薦の件は、全く寃罪であつたので、その證據には、彼の兄弟の多治比縣守が、吉備眞備、阿部仲麿、僧玄昉等を從へて唐に使する以前に、若光は武藏に封ぜらるゝに至つたのであつて、三宅麿は、彼が眞意を誤解して、公物を掠めた事を心から遺憾としたらしい。よつて、三宅麿は、先づ個人の格を以て之を羊太夫に切諫したけれども、一旦築かれた溝は遂に如何ともする事が出來なかつた。然し、寛量なる彼は、再び高麗王若光を介して羊太夫を誡めたらしいのだが、彼は遂に掠物を返さうとしなかつたので、據ろよく三宅麿は之を官に訴へた。傳說に、所謂羊の太夫が、勅勘を蒙るに至り、追討使をも差向けらるゝに至つたといふのは、かうした傳說事情の誤傳を述べてをるものらしい。「神道集」に、『羊の太夫と申す人、上野國多胡の庄を立ちて上りけるが、末の時の御物沙汰に合せて、中の時には國へ下り付ける云云。』の由見え、「八束軍記」に、『羊の太夫、駿馬に乘り、日々參內す、八束小脛といふ童を供とす小脛兩の脇下に羽あり、熟寢せし時、羊見て怪羽を拔く、依つて供叶はず、參內怠るといへり、翅なくても早道なるべきをや、不參內は叛けるなりとて、官軍下り、羊の太夫討死す、首飛んで池村に至る、其所に碑を建て、云云』の由見え、多野郡美土里村大字上落合七與山宗永禪寺の「緣起」には、『羊、年月を經て日勤すること能はず、時に、帝羊に叛心ありと思ひ、追討使を遣はして之を責む、辭無し、乃ち兵を進めてこれを伐つ、羊竊かに走つて武州秩父の山中に遁る、實に養老五年秋八月朔日なり』云云』の由を記せるのは、羊氏が沒落時の記錄を傳へたもので、その他多くの羊の太夫傳說、皆大同小異を傳へてゐる。

たゞ殘念なは、羊氏が隱匿せる公物の實否の不明なる事と、沒後羊氏の居住したる地の不明なる事であるが、これらは、そ

の何れか一所明らかに至つたなら、他の一所は、容易に明瞭になるべきものと思はれる。

此處におもしろいのは、武藏國比企郡平村の都幾山慈光寺に傳へらるゝ羊太夫の傳說で、此寺に傳へらるゝ羊の大般若といふものを誦すと、此地の近く鐘が岡の見えざる鐘が鳴り出すといふのである。寺傳によると、その經卷は、貞觀年中、羊の太夫の書寫といふ事で、奥書に、『上野大目正六位安閉於水丸書』と記してある。をかしい事に羊太夫は、和銅前後の人物であるから、貞觀とは百五十年も時代に相違がある。從つて、此寺の大般若なるものは、後世の附會にかゝるものであることがわかる。

これより以外に、羊太夫の傳說は判り兼ねるが、羊氏夫人の最後に就いては、今少しく明瞭な傳說を、かの七輿山宗永禪寺の緣起に傳へてゐる。

養老五年秋八月朔日、羊太夫が、竊かに秩父に走つた後、羊氏夫人は、其侍女等七人と共に、輿に乘じて神保村の館を遁れ落合宗永に依らんとした。然るに、既に宗永戰死すと聞き、忽ち輿の內にて自刄し終つた。六人の侍女も之に殉じた。村民七輿を收めて一處に葬り、墓上に松を植ゑたところ、長ずるに及んで一幹七枝を生じた。即ち之を七輿の松と呼び、永く其奇を稱へてゐるといふのであるが、島見正忠の「上毛野國名跡考」には、神保村八束山に今も殘れる東權現の祠こそ、羊太夫の廢墟の地であると言ひ傳へてゐる。

「古碑集說」によると、碓氷郡下里見村大字神山（當時上山）小字眞野には、多胡神社といふがあつて羊太夫の髏を祀り、その神主及び下秋間村に於て多胡氏を名乘れる者は、今に羊の太夫の忌日を祭るといふことであるが、これら又羊氏の臣族の系統であるかもわからない。

羊氏が千有餘年前に於ける史乘を詳悉すべき多胡碑は、實に人皇四十三代元明天皇の御宇の一事實を錄せるもので、下野那須國造碑に後るゝこと十二年、陸前多賀城碑に先つこと五十二年の古碑である。或史家は、字體の上から此碑を後世の僞物としてゐるが、書家は、戈法の大變におもしろい六朝風の眞物であると言つてゐる。文章の上からも、昔からやかましい議論があるが、私は此處で碑論を成すものではないのであるから、そんな七めんだう臭い事はすつかり拔きにして、終に臨んで、その碑の全文と、碑碣の境域を紹介して稿を終らうと思ふ。

多胡の碑文は、八十字より成り、之が次の句點で示すやうな六行に認められてある。

辨官符上野國片岡郡緑野郡甘、良郡幷三郡內三百戶郡成

羊、成多胡郡和銅四年三月九日甲寅、宣左中辨正五位下多比眞人、太政官二品穗積親王左太臣正二、位石上尊右太臣正二位藤原尊

その碑石正面の縦は四尺一寸五分、横は上狹くして一尺八九寸、下は濶くして二尺餘り一寸强に及び、四方殆んど同寸であるが、正面右方石上尊の上部少しく缺損し、他より更に一二寸の狹小を見るといふ。形は眞角といはれず、やゝ歪んでをり、厚さ六寸弱平面の蓋石は、左方の側面から後方にかけて龜裂してゐるといふ。石質は、碑も蓋も同質の八束石で、共に多年風雨に曝されし痕跡、はなはだ歴然たるものがあるといふ。碑脚は、又厚さ六寸ばかりの二重の切石を以て固め、方六尺、高さ九尺ばかりの碑亭これを覆ひ、方三間の木柵を廻らし、三四尺の高さの石垣の上に之が置かれてあるといふ。

境内は東西十七間。南北四十間、面積五百六十七歩、それを去ること數十歩に鏑川がある。

碑背北東に渉る大小十數株の老樫の下に、大小圓石の累推するものは、昔、地方の男女が、痣を患ふの時、羊氏の碑に祈り、驗ありたる後、禮心に、川瀬の丸石を取つて廟前に獻じ、以て成就の效としたものゝ名殘であるといふ。

上野多野地方の方俗は、こればかりでなく、古昔より、羊の太夫の事蹟を口碑に傳へ、今なほ、多胡碑を羊様または多胡大神と稱へて、毎月三月九日、その祭祀を行つてをるといふことである。

武藏野開墾論附高麗若光の傳説

於毛思路伎、野乎婆奈夜吉曾、布流久左爾、仁比久佐麻自利、於非波於布流我爾(萬葉集第十四雜歌)

野をばな燒きそ、――千年の昔、その野の男か女かは、古草に新草まじるおもしろの風情に直情を披して、そゞろに歌つた。便宜上勝手に此歌を武藏野に採つて、野を燒いた證歌とした者もあるが、「萬葉」はその野を何處とも指定してゐない。唯春其野を偲ぶ歌の上に、其頃地方の農耕が自然的にか傳來的にか火田の法を利用した事がおぼろげに察せられるまでである。灌漑の法も夙くに開け、開拓方法も數段と進歩して、應神仁德二朝以後、開墾事業は諸國に起り、武藏野に於ても史錄以前、夙く其手が擧げられてゐたやうに思はれる。「仁德紀」に、大溝を感玖に掘る。乃ち石河の水を引いて、上つ鈴鹿、下つ鈴鹿、上豐浦、下豐浦四處の郊原に潤け、以て之を墾りて四萬頃の田を得た。爲に其の地の百姓寛饒して凶年の患ひなしなど見える開墾上の改革は、三韓文化の漸入に從つて各地に行はれ、太古

稻作の傳説を持つ國民も、一層垂穗の恩惠に浴するを得た。

武藏野に於ては、夙く韓人の遷移があつて、武藏野開墾の當初に交渉してゐるが、其野に際立つて活躍したのは高麗族の一派であつた。

史によると、紀元千三百四十五年五月、百濟僧尼及び俗人男女合せて二十三人が武藏國に置かれ、翌年四月、又、新羅僧尼及び俗人男女二十二人が武藏國に地を賜はり、その翌々年二月にも亦、歸化の新羅人等十二人を武藏國に居らしめたとあるのが段々の順序であるが、一人二人の移住は恐らく隨時に行はれてをつたやうにも思はれる。

羊太夫が武藏野出現は、何れの俗人に混つて來たものであるか、隨時移住の方法によつたものか明らかでないが、彼の居住は、比企或は高麗川の地方に部落的勢力を有し、一面に於ては秩父の大和民族等の指導を以て任じた時代があつたやうにも思はれる。武藏の韓族の大部族が移住したのは、羊氏が秩父の採銅に携てから九年も後の事で、傳説によると、彼は多年其高麗族の武藏移住に盡力してをつたともいふ。「續紀」によると、此大部族の酋長(?)を高麗若光と言ひ、元正元皇の靈龜二年夏五月、武藏國に高麗郡を賜り、同族一千七百九十九人と共に、武藏野の一廓に移住して來たやうに見えてゐる。此高麗若光と、羊太夫とがどういふ關係にあつたかは文献に證左がないが、口碑によると、彼が若光の武藏移住を運動した形跡が充分にある。

傳説によると、高麗若光は高勾驪(高麗)亡命の客で、文武天皇の大寶三年前に、海路東海を指し、相模灘から大磯に上陸したもので、三年四月乙未從五位下に敍し、王姓を日本朝廷より賜はるものといふ。

傳説は少しく其時代を遡る。昔物語によると、曾て東明王と呼ぶ王が朝鮮にあつた。此王は、高勾麗の君主であつて、當時の征服者としては誰一人として彼に肩を並べ得る者が世界に無かつた。彼は、長白山麓扶餘國より起り、豐かなる多くの國土を切り從へ、遂に、遼東を併せ、韓半島を蠶食して、高勾麗に君臨した。彼は又、隋の煬帝の來寇を撃退した。隋の後、唐の太宗の來寇をも、その智と勇とを以て防退する事が出來た。そして彼は再度都に凱歌を擧げしめる事を得たが、私は此疑い王と、武裝して軍に從つた多くの彼の軍勢が、どのやうにして首尾千餘里に亙る煬帝の大軍を敗つたか、將又、唐の貞觀十九年、世界征服の夢想を抱いて親ら馬を進めた剛腹なる太宗に、『魏徴若し在らば、我をして此行あらしめじ。』との悔恨をなさしたかなどいふ武勇譚は先を急ぐので此際一切抜きにする。で

要するに、さしもに强盛を極めた高勾麗も、史によると再度の外冦から頗る財政には困迫してゐた。幸にして英眞なる嬰陽王在世中は事無きを得たが、次代凡凡の王に致ると、忽ち內亂相次いで、國努は一層疲弊する。加ふるに、新羅の內通、百濟の羸弱から孤立した高勾麗の勢威は漸く地に墜んとした。之に援助を與へた日本軍が䟽留城の堅守も、遂に頽勢を挽回するに由なく、曾ては煬帝を苦しめ、太宗を惱した高勾麗も、唐の高宗の總章元年、其將李世勣の爲に滅ぼされた。唐史は之を記して『李世勣高麗を滅ぼす、高藏王降る。』と言つてゐる。王は降つたが、義兵は諸方に起つて、亡國再興を策した裏面に、日本帝國の隱然たる後勁の力ありと睨んだ李唐政府は、彼復自ら高麗王國を再興せしめて、其人民の敵愾忠憤の心を慰撫すべきの上策なるを悟つて、わが天武天皇の五年、高麗王國の再造を許した。『高勾麗本紀』に、『儀鳳二年丁丑の春二月、以二降王二(寶藏王)爲二遼東州都督一、封二朝鮮王一、遣歸二遼東一、安輯二餘衆一、東人先在二諸州一者、皆遣二與レ王俱歸一、仍移二安東都護府於新城一、以統レ之、云云』と見えるが其經過であるが、朝鮮王は名のみにして李唐政府の折衝迫脅甚だしいのを怨んだ高勾麗愛國の志士は、茲に再び義兵獨立軍を企圖したのであつた。時、李唐政府は、朝鮮王の行動を怪しみ、謀叛と認めて召還し　王孫寶元をして之に代らしめた。これより子孫微々存續せるも振はざるの態に致つたものであるが、當時敗殘の義兵は諸方に亡命した。大寶三年日本に王姓を賜はるところの高麗若光も恐らく其一人で、彼は某年某月東海を指し、海路飄々日本相摸の大磯に漂着したのであつた。

其頃の日本は、政治上では、巧妙深遠な對韓政策を以て稱はるゝ藤原鎌足の子、不比等が勢力を振つてをつた時代で、彼は高勾麗を以て唐の折衝國たらしむるの上から必然高勾麗に同情を寄せてをつた。天武天皇の十一年、高麗義兵の滯屬朝貢の絕えるや、彼は、翌々十三年遣高麗使を發して、其舊土を檢察し、遺民名族を收容したらしい。其頃恐らく羊太夫も來朝して一旦朝に登用された事たどあつたかして、武藏野に移住しても要路の吏や地方の豪族に重視されてをつたらしい。例へさういふ位置の人物であつたにしても、故なく彼が大磯に漂滯の高麗若光を訪づれる筈もないから、果して若光を勵めて彼の武藏野移住を慫慂し盡力した原因も相變らず不明だ。が、兎に角羊太夫は若光が大磯の寓居を訪れた。時に若光は何をしてをつたか、若光と羊太夫とは何を語つたか、そんな事のわかる筈も無い。のみならず、其折の若光の遺蹟さへ漸く異統の傳承を生じてゐる。變らないのは其時二人の懐中に流れた相模灘の月光ばかり

であらう。

相模大磯に於ける高麗氏の遺蹟は、化粧坂から花水橋に至るの間、今大磯村高麗の地にあつたと言はれゝが、一旦は又、花水川に添へる海邊から平塚川の海邊に亘る唐が原にあつたとも思はれる。菅原孝標の女が後一條天皇の寛仁四年に此地を過ぎた折の「更科日記」に、『もろこしが原といふ所も、すなごのいみじう白きを、二三日ゆく、夏は大和撫子のこくうすく、錦を引けるやうになん咲きたる、これは、秋の末なれば、見えぬといふに、なほ所々に打ちこぼれつゝ、あはれげに咲きわたれりもろこしが原に、やまとなでしこも咲きけんこそなと、人々をかしがる。』と見えるところは、其後開いて圃地とされた。大磯高麗の方には、又、其名に殘る高麗山が、西北大磯と山背村高根の界から外數村に其山脈が亙してゐる。三峯の中央稍高うして五百尺、甚だ高からずといへども海濱平濶の地にある故、眺觀最も廣く、景勝を賞せられる。中峯の巓に高來神社の上宮がある。下宮は山麓にある。大磯および高麗の鎭守で、祭禮は大祭七月十八日、（舊は六月）、小祭は四月十七日（舊は三月）、隔年の大祭には飾船二艘（大磯南下町持明神丸、北下町持權現丸）を出し、幟數本を立て、舟子は單衣の袖を紅靑の布で二重にしたものを着、長五尺の黑木綿を冠り、一艘に神社鳥居前から、一艘は大磯山王町境に行つて神輿と共に照ヶ崎の祭場に着いて舟子等祝歌を唱ふ。權現丸の船歌は、へ抑々權現丸の由來を忝く尋ぬれば、應神天皇の十六代の御時より、俄に海上騷しく、浦の者共怪しみて、遙に沖を見てあれば、唐船いそぎ八の帆をあげ、大磯の方へ梶をとり、走り寄るよと見るうちに、程なく汀に船は着き、浦の漁船漕ぎ寄せて、かの船の中よりも、翁一人立ちいでて、檣に登り聲をあげ、汝等それにて能く聞けよ、われは日本の者にあらず、諸越の高麗國の守護なるが、邪慳な國を逃れ來て、大日本に志し、汝等歸依する者なれば、大磯浦の守護となり、子孫繁昌と守るべし。あらありがたやと拜すればやがて漁師の船に乘りうつり上らせ給ふ。御代よりも權現樣を載せ奉りし船なれば、權現丸とは是をいふなれよ。ソフリヤヤンヤイヤン。』と歌ひ、鳥居前にも、高麗大神を伏拜み云云の歌があつて、歌ひ終ると祭典が始まる。採鮑を業とする者、前日より齋戒し、海中より鰒を取り、船の中で之を調理して神前に供へるのを舊式とするといふが、其折の歌の文句にも見える通り、此祭を、神功皇后征韓歸帆の儀に象るとは、縁起（建文三年七月別當行實記す）よりの誤傳であつて、祀るところの異朝大神といふもの、即ち高麗大神和光といふのも恐らく若光を指すのであらう。四月十八日の例祭には、又、農具市と稱へ、菜蔬の種子

より鍬鎌の農具を道路に齎ぎ、これより農業に從事するのを舊慣とするといふが、高麗大神の實は農耕の神であつたこと、高麗氏開墾と偶然な一致ばかりであつたのでもあるまい。

かうした記錄は、すべて高麗氏の舊記に見えず、事件は大寶より二十年ばかりを經越して、若光武藏野入りとなるのであるが、反對に羊太夫は其頃沒落の運命に沈淪してゐた。顧れば天智天皇の七年十月、高句麗亡びてより玆に四十七年、羊太夫とのゆくりなき會合から二十年、若光も大分の高齢で、漸く永遠安定の土地を武藏野に得た態に見えたが、然も、これから韓族と日本民族との接觸は、北武藏に於て漸次困難な傾向に進むのである。

西は知々父根、東は海、北は夕映、南は時雨、實に尨大な武藏野は、浩々乎として草又草、行けども秋の果のない、廣漠な沃野を眺めて、若光が先づどのやうな感慨に耽つたかは知らぬが、移住の人の第一條件として、彼には、大部屬の爲に、鳥に巣あり獸に穴あるが如く其住居を急設する必要があつた。木を伐つたり斫つたり、間柱や桁を組合せる事は部下に委したとしても、河流その他の利便のために地形を相し家を相する事の相談には與つたであらう。そして、文明人の多くが、其生涯の大部分を擧げて、單なる日常普通の生活資料と慰樂とを得るために費消したやうに、かれらも亦適當の其生活資料と慰樂とを欲求するために、耕作勞働に努力しなければならなかつたであらう。かくて其始め、其土に馴れ親しむまでの困難に忍んで、出來得る限りの簡易生活に甘んじ、除々と武藏野に開墾の手を下して行つた、經營事情には、少からず同情に價する節があらう。

高麗氏の記錄によると、高麗族は、移住の初めから民族的孤立を餘儀なくされてをつたさうで、彼等の子孫の漸く他の日本民族の子孫等に互して、僅ばかりでも社會的勢力を持つに至つたのは武家時代の事だとある。すれば、彼等は、移住より纔て五百年弱にして同化の圓滿を贏得た傾向にあるが、それまでの彼等は、ただ只管に武藏野の開墾に奮鬪しなければならなかつたのであつた。

最初かれらは耕地を得んが爲に、茫々たる武藏野の草を刈らねばならなかつた。で、彼等は教へられてをつた火田の法を利して、草を燒き雜木を打倒した、秋過ぎて野の雜草の枯れ盡すを待ち火を放つてそれを燒き耕地を得たのだ。かくて孝謙天皇天平寶字二年八月、歸化新羅僧三十二人、尼二人、男十九人、女二十一人を武藏國の閑地に移して新羅郡(其後新座郡といひ、今北足立郡に併す。)といふやうな鮮やかな分界が出來なかつた

迄、高麗族は、野に勝手な境界を築いて火を放つた。若し野火を燒ける儘に委して置いたら、大原野を一朝にして際限もなく燒いてしまひ、其地を棲所とする鹿や兎やの獵の獲物をも共に失ふ恐れがあつたので、彼等は、豫め、野火を、人力を以て消し止める方法を講じたのであつたが、殊に隣り部落の分界が略定るやうになつては、一層お互ひに其方法を嚴にするやうにした。さうした頃の遺蹟が、今も武藏野に名殘をとゞめてゐる野火止塚の由來であつて、其地は、實にまた彼等の開發の歷史と方面とを物語る記念でもある。

高麗族が武藏野遷移の翌年、即ち元正天皇養老元年十一月甲辰の詔に、『高麗百濟二國士卒、遭二本國亂一、投二於聖化一、朝廷憐二其絕域一、給レ復終身、云云』と下されたといふ史の記錄は、國亂に際し、亡命し、歸化した異國人へのわが優詔の披瀝であつて、前年、駿河、甲斐、相模、上總、下總、常陸、下野七國の高麗人を合せて武藏野に一郡を賜はつたといふ事も、蓋し彼等の便宜を考察されての下命であつたであらう。高句麗が如何に強健剛壯な武人の群であつても、性格剽悍な騎射の人であつても、忽ちにして劍を解き槍を捨てて一意新しき農業に就いた事に於ては、其生活の手慣ひの多く困難する場合があらう。たとへ矛や楯の代りに用ゆる農具のいかに輕く、かつ、戰爭の激鬪に比するに、耕作勞働のいかに容易にして苦痛無きかにしても、戰爭の勞れに馴れた彼等にあつては、漁獵の嗜好に對するに土穰の征服は頗る勝手違ひの嫌ひがあつたであらう。此時にあたり、曾て祖國の戰亂を厭ふて日本に走り、諸國に分布してをつた高麗部族の集合された事は、如何に彼等お互ひの氣強い便宜さであつたかわからない。射るに能き者は野を馳けれ、機に能き者は衣を織れ、大工の經驗ある者、耕農に經驗ある者、お互ひは其得意の部署の定めに熱心であればよい。當初彼等は無一物であつたであらうとも、廣濶なる沃野の資源は無限である。幸にして又彼等には、現代人の如き人間數十人の生を託すべき土穰を數人して耕作せねばならぬといふやう不幸がなかつた。かれらは彼等の收穫のみを食ひ、彼等の收穫のみを衣とすればそれで足りた。餘儀なき民族的の孤立から、彼等の物品を他の物品に換へるといふ機會から永く絕たれてもゐた。

野に於ての民族的孤立（高麗氏記錄による）の原因が何にあつたかと疑問する時、思ひ浮ぶのは羊太夫の此野に於ける沒落と秩父民族との因緣事情であるが、それにもかゝはらず例の優詔は彼等に幸してゐる。

一體、わが朝の韓人に及べる此種の仁政は、「日本書紀」の『天武天皇十年八月、詔二三韓諸人一曰、先日復二十年調稅一既訖、

且加以二歸化初年倶來之子孫一、並課役悉免焉、云云』と見えるものや、其後、『十四年二月庚辰、唐人百濟人高麗人並百四十七人賜二爵位一、同年九月庚午、化來高麗人等、賜レ祿各有レ差云云』と見ゆるものなどが文獻に見える最初で、大體の方針はそれによつて窺はれる。そして此頃から歸化人の漸く多數に上つた事も知られるが、殊に、齊明天皇の六年（唐高宗の顯慶五年）に百濟亡び、天智天皇の七年高勾麗滅びて以來は愈々數を增し、例へば、持統天皇即位の年、『閏十二月、筑紫大宰獻二三國高麗百濟新羅百姓男女幷僧尼六十二人一、元年三月己卯、以二投化高麗五十六人、居二于常陸國一、賦レ田受レ稟使レ安二生業一、云云』などの順序となり、それらのうちから、又、高麗族は靈龜に武藏野に遷されたりしたのであつた。

靈龜に遷された七國高麗人中に武藏高麗人の事の見えないのは、遷された地が武藏であつた故特に掲げなかつたもので、當時武藏野には他に移住高麗族の土着があつたらしく思はれる。羊太夫が其部族の一人である證左は擧げられぬので之を例外とするも、「續紀」延曆八年の條に見える高倉朝臣福信の記事などはその一證の如くに思はれる。『冬十月乙酉。散位從三位高倉朝臣福信薨、福信武藏國高麗郡人也、本姓背奈（せな）、其祖福德、屬二唐李勣拔二平壤城一、來二歸國家（みかど）一、居二武藏一焉、福信即福德之孫也小年隨二伯父背奈行文一入レ都、時與二同輩一、晩頭往二石上衢一、遊戲相撲、巧用二其力一勝二其敵一、遂聞二內裏一召令レ待二內竪所一、自レ是著レ名、初任二右衞士大志（さくわん）、稍遷、天平中授二外從五位下一任二春宮亮一、聖武皇帝、甚加二恩幸一、勝寶初、至二從四位紫微少弼一、改二本姓一賜二高麗朝臣一、遷二信部大輔一、神護元年、授二從三位一、拜二造宮卿一兼歷二武藏近江守一、寶龜十年、上書言、臣自レ投二聖化一、年歲已深、但雖二新姓之榮、朝臣過分一、而舊俗之號、高麗未レ除、伏乞改二高麗一、爲二高倉一、詔許レ之、天應元年遷二彈正尹兼武藏守一、延曆四年、上レ表乞レ身、以二借位一歸レ第焉、薨時年八十一、云云』延曆八年に八拾一歲である事は、彼が我朝和銅二年の出生である事を意味する。そして、その高麗郡の人也といふ文意が、眞實武藏出生の意味であるなら、彼は彼の親族たちと共に高麗大部族の武藏野遷住以前に此土に移住してをつた事になる。すれば、高倉福信は、高麗若光よりも野に古く、由緒も正しい背奈の王族で、隨て位階も若光より高いのであるが、それは或機會に彼が傑出したるの證左であるのであつて。野に於ける勢威は元より若光に比すべくもなかつたらしい。それは、若光が飽く迄も野の高麗若光で終つたに反し、彼は夙く京に上つて恩幸を賜つた身柄の相違にもよらうが、實をいふと、若光は武藏野に於て團結勢力の代表として隣鄉の日本民族と接觸して果てた偉

人であつたにかゝはらず、彼は高麗朝臣たる肩書さへも嫌つて自ら高倉の改稱を願ふた程、當世的に時代と融合する事を目標とした人物であつた。此相違は、軈て若光を高麗明神と永く部族に崇め祀られしめ、福信を唯三位の名譽を得せしめた所以でもあらう。彼は徳望ある人格の人、これは名利の人。實にや、福信の後、仕官して要路に上つた者は、天平寶字五年十月に武藏介に任じた高麗大山と、寶龜九年二月に武藏介に任じた高麗石麻呂位のもので、それも遂に福信の高位なるに及ばない。

福信の前にも、高麗五部の土民の歴代投化の例は多からう。「日本後紀」延暦十八年十二月の項に、『又、信濃國人、外從六位下卦婁眞老、後部黑麻呂、前部佐根人、下部奈弖麻呂、前部秋足、小縣郡人、無位上部豐人、下部文代、高麗家繼、高麗繼楯前部貞麻呂、上部色布知等言、己等先高麗人也、小治田、飛鳥二朝庭時節、歸化來朝、云云』など見えて、其族は諸國に於ても分別し易からぬものがあつたであらう。されば、武藏國に於ても、啻にかの福信のみならず、或は猶幾多の生移高麗族があつたかもわからない。其間に於て若光の後入にして威望を負つたのは、彼の由緒の外に、其慈愛心に富み、よく部下を懷撫したといふ傳説によるものでなくて何であつたらう。

以上、いかにも長々と高麗若光の位置を述べたてたやうであるが、其若光を論ずる事は即ち武藏野高麗族開拓の當初を論ずる事でもあるから據ろない。「高麗氏系圖」に、『因之從來貴賤、相集、埋屍城外、且依神國例、建靈廟御殿後山、崇高麗明神、郡中有凶則祈之也、長子家重繼也、天平勝寶三辛卯、僧勝樂寂、弘仁與其弟子聖雲、同納遺骨、一宇草創之、聖雲若光三子也、云云』と見える中の靈廟といふものは、今、武藏川越の西、約四里、高麗村字新堀なる大宮山の麓にある高麗神社社殿のある處がそれで、若光の墓は、別に大宮山西方の聖天院にある。寺門の左側、古池に面した多重塔が即ちそれである。高麗神社の事は、國史並に延喜式にも見えないが、高麗氏の系圖十四代一豐の代に『高麗明神大宮號御免許從是奉號高麗大宮明神稱大宮司』と見えてゐて、地方的には相當重んぜられてゐたやうである。口碑に、其祭神は頗る白髯、鬚の飽くまでも白くあつたので、高麗明神を一に白鬚明神とも稱へ奉るといふが、白髭はシラヒゲに非ずして、實は韓音クダラ即ち百濟人祀る處の神で、高麗明神とは別であるとの説もある。

要するに、高麗族が、若光の一大部隊として、武藏野に繰込んだ當時、幸に仕官して上達したものゝ外は、其野に隣郡の民族と接觸を保ちながら、なほ同化融合し得ずして、耕作に盡力すべきであつたが、朝廷の仁慈に限りなく及んだので、例へば

「續紀」に、『養老三年太政官奏す。比來百姓例乏少し。公私辨ぜざるに致るもの多し、若矜み量らずんば家道存し難し、望み請ふらくは、比年の間、諸國をして、毎年春初稅を出して百姓に貸與し、その產業を繼がしめん。』とか、『又、無智の百姓、條章を閑はず、徭役を規避して、多く逃亡するものあり、他鄉を涉歷し、歲を積みて歸ることを忘る、其中、縱ひ過を悔いて本貫に歸る者あるも、其家業散失せるに緣つて、存濟に由なし、望み請ふらくは、逃れて六年以上を經、能く過を悔いて歸らん者には、復一年を給ふて其產業を繼がしめんと。之を奏可す。』などいふやうな新狀は、高麗移民の爲に起らずに濟んだ。然しさうした間にも、かれらの苦心と努力とがどのやうに働いてをつたかは想像の限りでない。今も見る高麗神社の遺物のうちの古武具の幾斷片かは、かの高句麗滅亡の歷史より、引いて彼等が、それを捨てゝ農具に換へたといふ感慨深き記念の品ではある。

武藏野の開發は、群雄割據時代、北條氏管轄の下に最も盛んに行はれて今日に至つた事は知られてゐるが、然も猶二千年も以前に、高麗王家を中心とする多數韓人が、既に武藏野に開墾の手を下してをつたといふ事は、武藏野を云云する者の忘れてはならない事である。

武藏野文化論

武藏野乃、久佐波母呂武吉、可毛可久母、伎美我麻爾末爾、吾者余利爾思乎(「萬葉集」十四、武藏國歌九首のうち。)

武藏野の萬葉謠臨く處女地は、人によつて鋤きかへされ、野の曠大無邊には限りある巣の通ひ路がうねうねと引かれた。それが武藏野に、獸の路を補ぎつて敢利に部落から部落へ跡づけられた地上の線である。和銅三年、平城京の建設以來、條坊の制が確立し、尋で漸次近國に其制度は應用せられて行つたが、道を四方の開拓にまで、自然をなみする通路が設けらるゝ皆もたかつた。夙く大化の改新の時、田制も規定し、班田收授のための均一田地區分さへ、武藏野に行はれたは漸く其和銅の後であらう。中央文化の普及の割合に早く行はれ得べき歸化人が、出來得べくは之をそれからの開墾に應じて則つた事は確かであらうが、其遺蹟の、例へば普通の道路に、田畝間の小道に、水田の間に殘存するものには甚だ稀である。稀ではあるが、この僻遠の地に於て、その土地制度の施行されてゐる遺蹟の認めらるゝ事は、上古如何に夙くから、此野に文化の影響があつたかの貴重な證左で、その面影殘す細流の一筋など、いにし高麗歸入の人文の外に、根強い中央文化の認めらるゝ嬉しさでもあ

る。

人は、團結的な、そして箇人としての强みある後代武士の新興を、武藏野の開拓に貢獻した、剽悍騎射の名手であつた高麗族の全部的影響のやうに言ふが、さうした樂觀から言つたら、此野に原日本人的文化といふものゝ何物があるであらう。われわれ日本民族は、元來此國土にすぐり集められた混成民族の脱化ではなかつたか。各種の原日本人或は先住移民の間に、渾然として成り出でた生々の民族ではなかつたか。從來知々父地方に蟠居した天孫民族が、何等の性氣をも其後の武人に跡づけぬといふ法は決してない。其文化に於てもさうである。其衣服とするところの織物は、獸皮だとか木皮だとか故古を限る時代にあつたものが、やがて纖維を發見し、紡いで絲と、織つて絹布とする時代に進む。養蠶の事は早くから知られ、從つて絹布も用ゐられてたには違ひないし、楮を以て作るゆふもあるが、衣服の料としては先づ麻を主とし、製した布帛をたへと稱へ、植物や粘土を染料とする事も知つてゐた。麻穀は夙く天太玉命の孫天富命が、神武天皇の勅を奉じて、阿波國から、命の麻族である齋部の人々を率ゐて房總の地に移り、荒蕪を拓いて民の生業を勸められた折に、東土の沃壤地にも播殖せしめられた。好麻を生ずることより總國の名も生れたのだと言はるゝ程當時其の事業は盛んで、その繁殖は武藏野にも及んだであらう。天羽槌雄神の文布を織る事も原始織布工業として、其の神の坐した常陸國より發達した。そして垂仁天皇の御代には、皇族五十瓊敷命が倭文布部の統率者として、部下に漸次歸化工人を編入した。これによつて、自然異國風の技法も傳へられ、こゝに初期の發達を遂げた事は論を俟たない。雄略天皇に於ては、殊に心を工藝方面に傾けられて、先づ百濟より陶工錦工等を召し、呉からは呉織漢織の名手召寄せられ、諸國には桑を植ゑしめ、秦の酒の公を棟梁として絹織物を獎勵せしめられた。これより絹の使用益々廣く、倭文布漸く省みられず、絹織の事は愈々發達し、孝徳天皇の頃には、大伯仙錦錦綾錦等の製作を見るに至つた。和銅六年五月には、上野國外三國から絹布を調貢したが、それには三韓同化人の勢力が少からずあつた。そして、さうした諸種の織物は勿論武藏にも傳はれ、殊に例の羊太夫を中心とする歸化韓人の上には殊に機業についての發展に交渉ある傳説を存せしめてゐる。で、計布志都とか之付都野加毛志加とかいふものは、毛の國特産のものであつたとするも、其他の織布工業に於ては武藏に於ても發展を認める事が出來る。ただ武藏野地方は飽くまでも農耕を主とし、兩毛地方に於ては殊に其專門的發達を進めたまでである。

これ總て桐生や足利が機業地たるの原因でもある。
建築に於て、みあらか、みやの風は明治頃迄秩父浦山地方に見られたところであるが、北武藏に於ては高麗風の影響あるところもあつた。殊に寺塔の建築に於ては大に進步し、欽明天皇の六年に造寺工、崇峻天皇の元年に瓦博士も渡來して寺堂の外の一形式を輸入した以來、佛教傳來に伴ふ寺工瓦工鑪工佛工等の歸化する者多く、天平十三年には國分寺創立の詔勅發布となつた。武藏の國分寺の瓦に郡名文字を表はしてをる事は下野國分寺と共に國分寺中の異彩とさるゝところであるが、これらは、當時の文化に於て、武野交渉の深きものあるを暗示してをるものであるかもわからない。
鑄法に於ては、崇峻天皇の時に鑪盤博士の貢あり、和銅に至つては催鑄司制定、羊太夫の知々夫採銅製銅の事業が傳へられてゐる。
此他、鍛冶、玉作、石作、甲作、弓削、矢作、鞆緒、楯縫、陶器、土師なども相當の歩みを以てその工藝上の進歩を示し、銅鐸、銅劍、銅製品、銅製の武器などは、知々夫の製銅事業と共に相當技術上の研究を成され、其製作品もあらうかと思はるゝのである。
銅の他に、知々夫からは副産物として金青を出し、これが献上の事も史に見えてゐる。銅礦に就て要であつた武藏は、採銅に就ても其後幾多の傳説を有してゐるが、羊太夫にかかるものが其代表的のものである。前々項に於て、私は、羊太夫が奈良朝へ日勤したといふ傳説を、實は秩父に設けられた採銅所即ち朝廷の出張所ともいふべき役所へ出勤したのであらうと言つたが、その頃から漸く頻繁になつてゐた武藏の首都との往來にも、羊太夫は時々上つた形跡がある。
その頃の府廳は、多摩郡出羽の官道要樞なる小野縣（今の府中）の地にあつた。成務天皇の五年、武藏國造に任じて下つた兄多毛比命は、初め足立郡に國府を開いて民政を行つたが、その頃から足立埼玉二郡は開け、秩父の文明は先づ此方面に移り、漸次人民蕃庶して、國土の東南に拓殖するによつて、府廳は多摩川の流域小野縣に遷され、其處に新しい組織の下に中央政府から赴任せられて來た地方官が置かれた。國守當時櫻井、大和狛麻呂の頃から新施政方針も定まり、不便であつた官道も改正されて、總て、『武藏國乘潴豐島二驛、承二山海兩路一使命繁多、乞准二中路一置二馬十匹一』といつた時代も來た。

武藏野歌謠

武藏野を謠つた歌謠は、先づ其野の民衆からはじめられた。

その歌詠に、野の内から呼び出された自然の所産でもあつた。「萬葉集」の歌がそれである。

多麻河伯爾、左良須氐豆久利、佐良佐良爾、奈仁曾許乃兒乃、己許太可奈之伎。

古非思家波、素氐毛布良武乎、牟射志野乃、宇家良我波奈乃、伊呂爾豆奈由米。

その他みな純な感情の披瀝であるのに、平安朝以後に於ての歌詠はさうでない。題詠的趣味性の共鳴でなければ、客觀的感興の表現に外ならない。

紫の一もとゆゑにむさし野の草はみなからあはれとぞ見る、(古今)

武藏野は行けども秋のはてぞなきいかなる風の末に吹くらむ。(新古今)

行末は空も一つの武藏野に草の原より出づる月影。(新古今)

武藏野は袖ひづばかりわけしかど若紫はたづねわびにき。(後撰)

玉にぬく露はこぼれて武藏野の草の葉結ぶ秋の初風。(新勅)

あふ人にとへばかはらぬおなじ名の幾日になりぬ武藏野の原。(續古今)

[illegible]

を感じ、秋は風に靡く旗薄の穂の上に淋しき趣味を求めた王朝時代人の思想に合致した。わけて秋の野の淋しき有様は、高原よりも平原に適し、その夕暮の悲しい情緒は、一層、東夷の住む國に配流の人たちなどを想像するにふさはしい吾妻の大平原に於て、最も當代の人々が共鳴したからであつた。かうした趣味性の上から、武藏野といふ語は漸く人々の感興を引き、春秋の題詠にも上つた。武藏野といふ名が、富士と相並んで、由來文雅の氣の乏しくあつた、東夷の住家とばかり思ひなされてゐた東國に、少からぬ詩的感興を保たせるやうになつたのは、かくて彼が際涯もない大原野であつたといふ爲ばかりではなかつたのである。それからの歌詠には、殊更武藏野の實景を歌つて其野にことよせて直情を披瀝するやうな其野の所産といふものが無くなつて、ついで歌はれた武藏野に、月とか、夕霧とか、雲とか、風とか、乃至四季就中秋の可憐な野の花や薄の穂が其主なる題材とされたのであつた。殊に、紫の一本は、澤山の歌枕としては、あらぬ東國の谷野を飾る、唯一可憐の花としてゆかしがられたのであつた。

武藏野は武藏野はと、かくて王朝時代文學の偶像崇拜、古[illegible]藹然たる歌枕讃美のうちに、擬古的技巧を濫用した徳川時代の[illegible]

古的文學打つて付けの歌枕の轉つてゐるのに目を付けて、やれ多摩川の入間野の掘兼の井の逃水のと、一も二もなく武藏野を持つて廻し、今にしては兒戲に過ぎない例の「北條氏康武藏野紀行」などいふ僞物を擔ぎ上げて大騷ぎをやつた事であるが、そのお蔭で、武藏野といふ名も大分に鼻を高くし、明治大正に入つてまでも、やれ武藏野旅行の武藏野會の武藏野と諸のと、甚だ結構な事ではある。

武藏野騎馬武者論

鎌倉時代の武藏野に、何とか威の色鮮やかな鎧着て、生々の力に充つる騎馬武者を躍らし、その聯想をなつかしめば、平山武者所が名乘り出て、遠き者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。見れば見るほどあつぱれな、武藏野を根據地のやうに思はれてゐる坂東騎馬武者は非常に多い。岡部、榛澤、畠山、熊谷、秩父、吉見、比企、毛呂、川越、金子、江戸、澁谷、豐島、仙波、三田、村岡、一として此野を代表するにふさはしくない豪族でないものはない。日本武尊御東征の御時は知らず、あるは前九、後三、あるは保元、平治、若くは宇治、瀬々などの合戰に、所謂武藏七黨(横山、西、野與、村山、兒玉、猪俣、丹)其他のうちから出て、軍の花と稱はれたものは非常に多かつた。歴史の事實からも、口碑傳說からも、彼等は、或は勇ましく或は懷しく、戰記上の好奇心を滿足させ、且は、武藏國に傳說の何物かを殘してをらぬものはない。

武藏野國箕田村(今の北足立郡のうち)に住つて、武威を四方に鳴らしてをつた箕田源二源宛は、或時、村岡(今の大里郡のうち)の豪傑村岡五郎平良文といふ者から、一人と一人との力競べ(決鬪)を挑まれた。相撲、太刀打、騎射、槍術、何れの術にも勝れてゐると噂されてゐた村岡五郎は、武術なにくれとなく優れてゐた箕田源二に取つて、全く不足のない相手であつたので、箕田源二は、日を定めて、廣野で勝負せんといふ挑書を與へた。よし、其日こそ箕田の鼻をあかして、大に自分の勢を張つてやらうと、村岡五郎も心ひそかに喜んでゐたやうに、箕田源二も亦、よし、其日こそ村岡の勢力を此邊から追拂ふのであると、これも心から其日の來るや遲しと待ち詫びてゐた。間もなく二人の勝負する日が迫つた。近郷近在の者共は、聞き傳へ、言ひ傳へて、此勝負どうあらうかと、安からぬやうな氣持を以て此勝負決定の日を數へてをつたが、若しか其日の勝負から源平兩豪の間に不和を釀し、あたら平和の此土地を、いまいましい戰爭の衢に化しはしないかと、土地の百姓等は內々心配したいでもなかつた。遂に約束の期日は來た。雙方共に人數

五六百人ばかりを従へて所定の野原へ到着した。兩陣の間隔は一町ばかり、鳴を鎭めて陣所をば固め、いざといふ時の準備をさをさ怠りなかつた。二人は、相談の上唯一騎陣所を離れて乘出し、雁股の矢を番へて突立つた。そして騎射を爭つた。一本二本はお互ひに中らない。三本目は、箕田宛の矢は村岡の腰宛に、村岡良文のは箕田の腰當に共に中つたけれど、お互ひは無事であつた。そこで村岡が聲高く、『此決闘は、別に意趣遺恨といふでやつたでない、一時の意地張りからであれば、お互に殺し合ふに及ばない事、決闘はこれで止めやうではないか。』と叫んだ。箕田も、『引き返さう。』と贊成して決闘を了へた。これを見た軍卒は太息々吐きながら、互ひに『馳せ組んで射合ふたところを見ては、今射落されるかされるかとひやひやして、氣も心も顛倒し、自分が決闘して生死を賭するよりも却つて恐ろしかつた。』と胸なで下して語り合つた。此決闘の後、互角の箕田と村岡とは、お互ひ非常に近隣の好みを厚くし、お互その武勇を畏敬し合つたといふ。

これを要するに、此決闘は實に堂々たるものであつて、男らしい立派さがあつた。――やがて武藏の土の匂ひに醸された特有の武士道といふものは、かうしたところに進化の歴史を持つてをつたのでもあらう。

このやうな美しい心の武人、さうした幾多の人々がこゝに生を寄せた武藏野。これらは此野に於ても、曰く小手差原、曰く分倍河原、曰く何、曰く何と、寄せては返さじの力を爭ふたが、出でては又各所の大小戰爭に參加してゐる。

このやうな武士の新興の英氣勃々たる力がすぐり集められて、承久に武家政治の基礎が固められるのであるが、かくて政治史が鎌倉に幾變化した後にも、その野　傳統する運命の上には、幾多の武人が興廢されてゐるのである。

武藏野の四邊に於ける人間社會では、生活狀態でも、經濟事業でも、時代を經る毎に皆着々と變化して、その變遷は武藏野にも及び、野はさて大江戸と開け行くのであつた。（をはり）

早大選手 米大陸野球轉戰記

早大野球部監督　飛田穂洲

早稻田大學野球部が率先して米國に選手を送つたのは、今から恰度十七年前の明治三十八年であつた。當時日本の野球熱は多少高潮の氣勢を示しつゝあつたが、しかも尙一野球團が太平洋を橫斷し一野球武者修業に出掛けるなどは人々の夢想だも及ばぬところであつた。然し此の壯擧を敢行した同大學教授安部磯雄氏の胸中には充分の成算があつた事は云ふまでもない。同教授は嘗つて英京倫敦にあり、英米兩國水上競技の間に行はれたる國際競技を見物せられたが、其の如何にも華々しく愉快に進行する競技は、國民元氣の伸張に資するは勿論、國民の親善を圖るに如何程の機會を與へ、進んでは此等の競技運動が血河屍山の慘事を生む戰爭に代はるべき將來を想ふて深き意味のあるを感得された。歸朝後先生は同志社より早稻田大學に移り、運動部長を兼ぬるや學生スポートに對して特に周到なる注意を拂はれた。適々明治三十七年新興の早大野球團は東都に於て全勝の榮冠を荷つたので、國際競技は直ちに實行に移るべきチャンスが到來したのであつた。先生最初の希望からするならば、其の目的地は歐洲にあつたらしいが、日本の戶外運動中、先づ野球が代表さるゝに至つて米國を選ぶの適當なるを思はれたに相違ない。

世は種々の批評の中に此の遠征團は橫濱を船出した、小波山人は早大遠征歌を作つて此壯圖を送つた。桑港に上陸して太平洋沿岸に轉戰し、中西部に進まんとの計畫であつたが、何にがさて經驗に乏しきマネージメントは種々の故障を生じて之れを斷念せねばならなかつた。第一回の遠征は成績上から云ふならば決して大成功ではなかつたかも知れぬ、けれども其の日本野球界を啓發した功勞に至つては眞に莫大の土產を齎して歸へつたのであつた。明治三十八年は實に我が野球界に一新紀元を劃し、野球團の今日を形成した礎石となつたのである。

早大が第二回に渡米したのは明治四十四年で、此の時から市俄古大學との間に、五年に一度づゝ、交換招聘をなす約が成

り、大正四年には第三回の渡米軍を送つた。今回の渡米は第四回目に相當し、前三回に比して最も多くの都市を訪問し、旅程二萬哩四ヶ月間を費したのであつた。

私は今野球戰の概畧を語り、更に印象やら感想やらを摘記(つまみ)した渡米記を成して見やうと思ふ。

私共一行十五名が安部教授に引率されて横濱を解纜したのは三月二十七日で、歸着したのは七月二十九日であるから、此の旅行は正味四ヶ月間を費したのであるが、布哇滞在の三週間と船中の往復一ヶ月とを控除すれば、米國々地にあつた日子は約七十一日に過ぎない、此の單時日に中西部から東部、東部から太平洋沿岸と、目星しい都市を訪問して二十九回に亘る試合をなしたのであるから汽車中にあつた多くの時間を差引くならば優に二日間に一回强の試合を闘はした割合となるのである。然して其の一日弱の時間に於ては出來得るだけの努力を拂つて見學やら招待　應じ只管米國の事情に通ぜんとした選手達には全く寧日がなかつた、若しも平常運動によつて鍛錬(きたへ)されたる靑年にあらざれば到底望み得ない程の多忙さであつた。しかも試合の上に於てこそ勢力を殺ぐ負傷者を出したが、幸に一人の落伍者を出す事なく、大旅行を完成したのは望外の幸であつた事を思はねばならない。

試合は布哇の九回を加へて總數三十八回となり、十五勝二十三敗の成績であるから、甚だ不滿足と云はねばならぬが、これは決して米國諸大學野球團に對する日本大學チームの劣勢を裏書するものでない事を斷はつて置かねばならない。敗因の重なるものは頭腦や技術の上ではなくして、試合を行ふ迄に至る條件に於て大なる不利を招いでゐたからであつた。最も影響したものは試合日割であつた。中西部にあつても東部にあつても殆んど連日の試合が私共を待つてゐた。殊に甚だしかつたのはシヤトル於ける華盛頓大學の日割であつて、七月五日から十日迄の六日間に七回のゲームを强請されたのであるから、選手僅かに十二人の負擔としては餘りに重過ぎたのであつた。次に主投手を備へた早大が不幸にして松本・山田の兩投手を共に投手腕(ピツチングアーム)から失つた事であつた。松本有川谷口の三投手は伎倆殆んど伯仲していづれをいづれと定め兼ねる程の間にあつた、早大の强味と云はゞ勿論打撃力にあつたけれども、三投手が揃つてゐた事も多くの試合をなす上に於ては可成の力强さを感ぜねばならなかつた。殊に松本の老功は今回の渡米にあつて最も期待された一つであつたに拘はらず、コレア丸の船暈(シーシツク)からすつかり健康

を害し、布哇に上陸した時には全く投球不能となり、中西部に入つてはイリノイ大學に一回、東部に於てはハーバート大學に三インニングスを投球したのみで、六月十二日のデトロイト大學戰には僅か二球目に肩を脫臼して全く退沖の姿となつた。有田は布哇から病の萠があり天洋丸の船中で發病し久しく腸を病んで元氣を失つたから、早軍の投手板は若年の谷口が一人で重任を負はねばならぬ悲慘な破目に落ちたのであつた。更らに强打手富永が五月十四日にインデアポリスのバツトラーカレーヂ戰に右腿に死球をうけて一ケ月餘出場不能となつてからは種々の困難が生じ、或る時は無理に有田を二壘に据え、或は慈や永野をやりくりせねばならず、谷口が疲勞困憊しては久保田大下永野等投手に無經驗の者まで、引き出さねばならなかつた。此の人事の支障は遠征軍をして三割も四割も攻備を輕減させ、勝ち得べき敵にすら勝ち得なかつた事が度々あつた。第三には何んと云つても地の利を失つた事が遠征軍を二割方不利に導いてゐたであらう。

以上の理由は私共を豫期以上に苦しめて實力を有しながら敵に名をなさしめた大なる原因となつたのである。若しも松本有田谷口の三投手の内二人だけ健在に試合を行ふ事が出來たならば尙一割の勝率を昂め得たであらうと思はれる。谷口が疲れを見せても之れに代はるべき投手がなかつた爲め、無理と知りながら强いて投球させねばならなかつた。此れは其の試合に不結果をきたすのみならず、次に行はるべき試合に禍根を殘すのであるから容易の事ではないのである。しかもそれを知りつゝ忍ばねばならぬ苦痛は想像に餘りあらう。五月十八日の市俄古大學戰は前日の敵インデアン大學と戰つた後ちで、谷口は大分肩の具合を損じてゐて第三回目頃から苦痛を訴へてゐたが、前述の樣な無人の場合、殊には第一回に敗れてゐるのであるから是非共勝たねばならぬと云ふので、私は彼れを激勵し、或はすかしつだましつ最後の奮鬪を續けさせてゐたが、形勢は漸く非にして谷口は益々其の苦痛を訴へほと〳〵私も困じ果て、如何せんと思案してゐると、同じベンチにあつた安部教授から『此んなに苦痛を訴へてゐる者を飽まで投球させると云ふのは殘酷ではないか』と叱責され、試合に夢中になつてゐた私もハツと氣がついて投手を代へやうとしたが、さて之れに代はるべき者がない、大下か高松かと物色した末、窮餘の一策として久保田を選んだ。幸に此の仕合は九回と十回に敵投手を亂打して勝利を得たが、この位行詰つた事はなかつた。此れは一例に過ぎないが、かうした苦しい試合が毎日のやうに續いたので選手は何時も綿の如く疲れてゐた。只此の不幸中にあつて一行を

扶けて完全に仕合を遂行させたのは羽冠谷口で、彼れは三十八回の仕合中三十一回の投球をなした、若しも此の健気な若武者が花と散る意氣を以て此孤軍奮闘をしなかつたならば、早軍は中西部に於て全滅の悲境に陥つたかも知れない、此の點に於いて私は心から彼れの努力に感謝せねばならぬと思ふ。

一行が三月二十七日桑港ラインをとつて布哇に上陸したのは、こゝで米本土に入る準備練習をするのが第一の目的であつたが、勿論試合にありても相當の成績を收むる意氣込もあつた事は云ふ迄もない。しかもゲームに於ては全然失敗に終り九回の試合中四勝五敗は殆んど目星しい敵を逸して少なからず失望した。少し練習の目的からするならば此の布哇三週間の滯在はやがて米本土に入つて各地の強チームと轉戰した素因をなしたのであるから十分に其の目的を遂げ得たとも云へ得るであらう。唯試合本位からするならば、最初に布哇を選んだ事は非常な間違ひであつた。それは日本の冬季に思ふ様な練習の出來なかつた我々が、進級試驗に疲れて、未だ時ならぬ雪が降る東京の氣候を後に僅々十日間の船から上陸すると布哇の温度は七八十度から九十度にも及ばうとする暑熱である。如何に頑健を誇る選手共でも此の氣候の激變には頭腦から身體の調子から全く別人の如き感を呈し、技術は云ふまでもなくチームワークなどてんで問題とならぬ有樣、丸で中學チームを見る樣であつた。しかも布哇のチームは半商賣人の其れの如く力倆に於て秀ぐれてゐるのであるから最初の二週間と云ふものは、支那人、ワイキー、朝日、ブレブスと連戰連敗の憂目を見たのである。相當練習にも身を入れ氣候にも一日も早く馴れんと努力はしたのであるが、夜分になると殆んど熟睡が出來ず、三十分か一時間も眠つたかと思ふと全身汗に濡れて目が醒めると云ふのであるから、誰れも彼れも翌日はぼんやりして筋肉と云ふ筋肉が緩んで了まう。此れでは滿足な試合が出來ぬわけで敗戰を重ねたのは無理からぬ事であらうと思ふ。唯嬉しかつたのは布哇の諸チームが遠來の客に對して異常の厚意を垂れ、殊に仇敵視した支那人チームの選手達までが私共の勝利を願つて何にかと注意を與へて來れた。ワイキーの頁ハウイリアムは曾つてデトロイトチームに投手をした選手であるが、私共の練習毎に世話を燒いて與れた。此等は布哇滯在中に私共に最もよき印象を與させた。布哇にはあだかも野球の大通は乃公一人と云ふやうな鼻持ちのならぬ連中も居る。が反面にはかくの如き親切な人々もあつた。

試合本位の目的を遂せんとするならば、米本土の試合を終へ

て歸途布哇に立寄る方法に出なくてはならぬ。それは米國の野球期が四月初旬から開けるのであるから最初シャトルに上陸して漸次中部から東部に進めば練習の條件が相等しく、米國大學チームも其れ程の準備が出來てゐないから、若しも試合日割に注意さへすれば互格の條件の下に試合が出來るし、布哇に入りては米國の暑氣に馴れ殊に布哇の七月頃は可成り氣持ちのよい日が續くから條件に於ては少しも劣らぬ事になり、伎倆さへ疲勞がなければ、米國に於て仕合馴れをした伎倆を十分に揮ふ事が出來るのである。今後の遠征軍は必ず此の方法に出るのが得策であらう。

四月卅日桑港に上陸して五月二日の夕市俄古行の大陸横斷急行列車に搭じ、五月五日中部の都市俄古市に到着した。そして五月十日から愈中西部の諸大學と戰ふことになつた。第一回戰は市俄古大學であつた。もう此の時は谷口一人となつてゐたに試合日割は十日の市俄古、十一日のノウスウエスタン、十三日のパーデュー、十四日のパツトラー、十六日のインデアナ、十八日の市俄古二回戰、二十一日のイリノイ、二十二日のサンガモと云ふ連續仕合で、即ち十三日間に八回の仕合を行はねばならぬのであるから非常な健鬪の覺悟でなければならない。

市俄古の第一回戰に大事なゲームで選手一同も大に自重して戰つたが、安打の割にスコアなく第四回守備の失策から三點を奪はれたが敗因となつて四對二平凡裡に敗北を招いた。十一日のノウスウエスタン大學は市俄古から三時間ばかり電車で送られて、エバンストンと云ふ同大學の運動場で戰つたのであるが、此の仕合は安打を連發し十七對一の大捷を博した。十三日には汽車で五時間ばかりのパーデュー大學に乘込んで五對三に敗れた。此の大學には我々の仕合した翌日市俄古大學も二對一で破られたさうであるが、伎倆は決して私共やシカゴ以上のものではなかつたのである。早軍は立派な安打を飛ばしながら試合運がなく、敵の貧弱なヒットに却つて得點を奪はれ惜しい仕合を失つたのであつた。

十四日のパツトラーカレーヂは往年シカゴ大學の投手として兩度迄も日本のチームを苦しめたパツトペーヂがコーチとして聘され、其の上昨春シカゴ大學の投手として來朝したヒンクルがアツシスタントコーチをしてゐたが、二對一の接戰をなして早軍の勝利に歸した。

十六日のインデアナ大學はビツクテン（中西部の大學リーグと稱す）の最强チーム、ミシガン、イリノイと相匹敵して下らざるの秀たる大學チームで、丸で早軍を子供扱にせんとした。有田の投手で第二回までに三點を奪はれた早軍が五回から、谷

ロを代はらせて敵の猛打を封じ第六回まで三對零のスコアにあつたのを第七回に入つて、小笠若石井が右翼に安打せるを手始めに、鐵桶の如き敵の守備を滑亂して一擧五點を占めてから形勢は全く一變した。殊には終回に近かき條に敵の狼狽一方ならず、第八回には四個の安打を飛ばしながら僅かに一點を回復したるのみ、胸のすく様な仕合をなして五對四の捷利は早稻田選手の胸に輝いた。此の仕合は日本人の一人も居らぬブルーミングトンと云ふ町で行はれたので、町の者も日本人を解する事少なく、試合開始前から矮小なる日本人チームに輕侮の言語を放ち、安部教授は非常な不愉快を感じてゐた矢先、美事に記錄を引返したので一同の喜びは並大抵ではなかつた。實際敵の守備はプロフエツショナルを彷彿する程の巧みさで、正面にかゝつては到底勝利は覺束なかつたのであるが、敵が三點を先取して意を安じてゐた隙を七回まで持ち堪へて、最後の一擧を加へたのが思はぬ勝因を成したのである。

、同夜十二時半發の汽車で市俄古に歸へつたのは十七日の朝であつたが、休養の間もなく十八日にはシカゴの第二回戰に臨んだのである。此の仕合は前述した様に谷口が疲勞して、第七回に經驗の全くなき久保田を投手に代はらしたが、スコアは五對二で殆んど回復を望まれぬ程の苦境に落ちてゐた。茲に於て十四日の仕合に負傷して松本が二壘を埋め、谷口が退くと再擧に穴が明いて陣形を全部變更せねばならぬ。私自身老骨を提げて二壘に立たんかと思つた位であつたが、安部教授に拒まれたゝめ、久慈を一壘に廻はし、永野を捕手となし、高松は左翼に代はり、石井遊擊、加藤三壘と云ふ陣備へとなつた、最早ゲームは絶望と思はねばならない、遂に五對二の記錄は變化なく九回の終りを迎へた。田中が三振して一死となり久慈石井が續いて遊擊に安打したが大下の二壘ゴロに石井が二壘で封殺され二死となつた、萬事休すと思はれた一刹那、永野の一打は遠く左翼の頭上を飛び去つて久慈大下生還者は一點となつた。加藤の一打が神頼みとなつて殘つたが、運の向いて來た試合は何處までも運がよく加藤の打棒に當り損ねた球は三壘の線上にとまり駿足の加藤が生きると永野が生還して同點となつた。スタンドは一時に賑やかになる、早軍は元氣を恢復して第十回に進んだ。ところが不馴れな久保田は四球と三壘打と犧牲球に二點を與へたから今度こそ回復は到底及びもつかぬ事と思ふ矢先松本は遊擊に飛球を擧げて退いた。打順はよいが二點の差は此の際容易の事ではない。高松は安打を遊擊三壘間に放ち、二壘を盜んだ。田中の安打は三壘線上を強く轉じて高松が生還すると久慈が續いて遊擊に安打して走者は二壘と一壘

あり一死にして石井が呼ばれた。石井は如何にもして生きなくてはならない。敵は投手をクライスラーに代へて阻止せんとしたが、石井の二壘ゴロは敵手の失策するところとなり、更らに三壘を陷れた田中の離壘を刺さんとして悪投し、田中本壘に走れば三壘手再び悪投する亂軍の中に久慈の生還を見、氣息喘々の試合をなしながら八對七の結果を殘して早軍の勝利となつた。

早軍シカゴに招かるゝ前後三回、未だ一回の勝利を得た事がなかつたのであるから在留邦人の歡喜は云ふ迄もなく、米國人すら續々スタンドから下り來つて喜の握手を需めた。市俄古大學の運動部長プロフエッサー、スタッグ氏迄が、變化ある此の仕合を喜び態々各選手に握手を與へられた。

九回に同點となり、十回に點を奪はれて其の裏に美事打棄りを喰はした仕合は、私の二十年間の野球に於て初めて見たところであつて、早大野球部としても珍重せねばならぬスコアである。此等は伎倆や頭腦と云よりは試合運とでも云ふべきもので造らうとしては造れぬ記錄である。粘りある試合が必ず勝敗を左右し、根よく戰ふところに生命があると云ふ點からすれば、かうした試合は絶大の愉快を感ずる。八日間に六回の仕合をなし四回の勝利を得た一行は旅の疲れも忘れて、中西部に嶄然として頭角を現はして總ては米國唯一の運動大學を以て誇らうとするシャンペンのイリノイ大學に向つた。五月二十一日である。イリノイ大學に對するシカゴ大學は常に十點以上の差を示してゐるので私共の事も痛く心配して種々の注意を與へて吳れた。インデアナやシカゴに勝つた餘勢を驅つて死物狂ひに當らうと一同は勇を鼓して戰つた。暑い日で疲れた身體はとろけさうであつたがあはよくば此の强敵を屠らうとの野心が選手の眉宇に現はれてゐた。谷口の疲勞はとても今日の仕合には使はれないので休養させる事となる、痩身松本が米國一の健棒揃を以て鳴るイリノイ軍に對したのである。試合は一對零で敗れた、松本の大きなモーションから繰り出されるスローボールに手古摺つて流石の强打手連、いづれも飛球を打ち上げ、大きな球をあつたが中堅田中の非凡な活躍に一歩も進み得ず、第二回一死後安打に出たランナーが二壘を盜み、次の打者は飛球に倒れ二死となつた時、ミイーと云ふ商賣人に約束のあつた遊擊手が遊擊の左に小さな安打をした、其れを〃保田が逸し加藤は間に合はず二壘のランナーをホームに生かした切り、其後は兩軍共得點の機會なく投手戰を以て終つたのである。早軍此の日殊の外打棒振はず、敵の投手は格別優ぐれてはゐなかつたにも拘はらず久保田の安打を殘したのみ、守り得たと云ふだけで少しの勝

味がなかつた、若しも打ちさへ物になつたらイリノイを死地に追込んでゐたかも知れない。

中西部(ミッドルウェスト)の試合は此れを以て一先づ打切り、イリノイ州の首府スプリングフイルドから二晝夜の汽車旅行を續けて東部に進發し、ボスドンに着いたのは五月の二十四日であつた。東部諸大學と日本の大學チームが戰ふのは今度が初めてで、ハーバート、エールの有名な大學の伎倆はどの程度のものであるか少しもわからない、中西部の大學などで聞いて見ても或は恐るべき强さである樣に云ふものもあり、又は名前ほどではないと云ふものもあつた。兎に角東部のエール、ハーバートと云へば米國の代表的大學であるから、此等と試合をする事は私共にとつて特に愉快に感ぜられたのである。ハーバートとの仕合は二十五日の日割であつたが生憎其の日が雨で、翌二十六日に延期された。此の一日の雨が私共には可成大きな影響をしたと云ふのは、エールのゲームを二十七日に、紐育大學戰を二十八日、ペンシルヴアニアを卅日にせねばならぬ樣な苦しい立場に置かれたからである。當日雨が降れば其の試合は流れるが當然であつた、他の大學なら私共も直ちに諦めて次の仕合地に發足して了まうのであつたが、ハーバートとの仕合を中止する事は如何にも苦痛であつた。それでエールとの仕合の間に二十六日と云ふ日があつたので、無理とは知りつゝ、一日延期したわけであつた。

ハーバートはシーズンの終り、エールと三回の定期戰をなさんとする前で、彼等は充分に練習が出來てゐた、私共も中西部に苦戰した後ちで相當試合度胸も慣れてゐた。仕合はケンブリツヂにある、ハ大學の宏大なグラウンドに於て開かれた。谷口をエールに向はせる爲めに松本を起て、久慈を二壘に備へて應戰し、早軍三個の安打を連發して敵膽を寒からしめたが、敵の巧妙な守備に阻まれて得點なく、ハ大學は單打と失策と二壘打によつて二點を占め、第三回には四球と犧牲球と安　に一點を收めて早くも三點を得れたが、第四回永野の二壘打に一點を回復してから、投手を谷口に代へた。ハ軍は是非共打破らんとして已むなく谷口を出したのである。果せるかなハ軍は四回より六回まで谷口の猛球に翻弄され無安打を續ける間に味方は、第五回に久保田が三壘打を飛ばし、大下の安打に生還して一點を返へし殘り一點となつた。第七回敵は四球とバンドに生き二壘打があつて二點を入れたから差は再び三點となつたが、第八回には高松四球を利し田中三壘打を放ち久慈安打に續いて二點を奪ひ、第九回には大下四球高松犧牲田中左翼飛球、久慈の中堅安球に大下生還して茲に兩軍同點となつた。最早勝利に疑な

思はれたが、第十回に延びた仕合は、谷口が四球を出し、走者は順次送られて二死後三壘に入り、窮餘の一策、本壘盗(ホームスチール)を企て谷口が投球を誤まつて之れを生かし、敵を死地に追込みながら六對五の惜しき失敗戰を帶びた。

此の仕合は敗れたが其の奮鬪振りは少しく東部大學に遜色なき伎倆を示し、紐育タイムスやウオルド紙は筆を揃へて早軍の伎倆を賞讃した、彼等は最も尊敬する大學に向つて奮戰殆んど首をかゝんとした矮小日本人の野球に少なからず驚いたらしい。タイムスは云ふ迄もなく米國第一の大新聞であるが其の權威ある運動記者はかう云つてゐる。『彼等の守備は宛もメイヂアリーグ（米國野球商賣人の第一流）のそれの如く水際立つてゐる、打擊もハーバートの七本に對して十本の安打を放ち、殊に四球の點にあつては米國第一流大學に優るとも劣るところはない、最も珍らしく感ぜられたのは、其のサインを用ゐる事なくして日用に其の國語を使用し合圖をなすチームプレーである』勿論此れは過獎の辭で私共の守備が米國商賣人の其れと比せらるべくもないのであるけれども、餘りに美事な守備や打擊を示したので、彼等は意外とも意外に感じた結果、思はずかゝる形容をなしたに相違ない。けれども其れは彼等米人が日本の野球を低級拙劣たるものと見縊つてゐたからで、私共からすればハーバートは當然左將の敵としか思はれなかつた。條件が惡かつたからこそ破れたので、若しも私共に試合に時日を貸し、グラウンドに馴れしめ、休養を與へて三回戰をなすならば必ず二回の勝利は逃さなかつたであらう。私共はタイムスに褒められたよりは戰に敗れたのが何によりも遺憾であつた。

翌二十七日はニユーヘブン市に入つてエール大學と鬪(たゝか)つた。エールは後日ハーバートと三回戰をなし、立續けて二回の大敗を招いたチームであるから、伎倆の點から云ふならばハーバート以下にあつたのであらうが、谷口を前日使つて疲れの勝つてゐるのを無理にプレートに送つて戰はねばならぬ遠征軍の不利は五對一の敗北を餘儀なくされた。第四回まで谷口の猛球は敵を翻弄し、味方も第二回に敵失と安打に一死滿壘となつたが、一息と云ふところで續かず、第五回まで兩軍得點なく、エールは四球と谷口の失三壘の野選擇に無死滿壘となり、左翼飛球を加藤が本壘に好投して併殺を行つて二死となつたから危機を逃れたりと思はれたが三壘のゴロを石井が一壘に暴投して二點を與へ、谷口は此れですつかり力を落して下半の緊張さを失つて了まつた。

此の日遊擊久保田の守備は鬼神の如く、觀衆の稱讃の的となつた、田中の打擊と共に東部戰評に殘らねばならない。翌二十八

日及び三十日の紐育大學、ペンシルヴアニア大學の仕合は共に私共よりも以下の敵であつたに拘はらず、餘りにエール、とハーバートに全力を竭いだ爲め疲勞に疲勞を重ねて几戰の末、紐育には六對四、ペンには五對三で敗れた。

北後私共は市俄古との二回戰をなし、デトロイト大學、アルビオン、オベリン等の大學やウエルパーホウス大學等と戰つた末、ミツドルウエストに於ける最後の仕合として、ビツクテン一方の大關たるミシガン大學と決戰を試みた。六月二十八九の兩日であつた。

ミシガンは私共と戰ふ前にイリノイを十對四の大スコアで破つて居り、昨年まで二年續けてビツクテンの優勝(ペナント)を獲たテームであるから、勿論私共が物の數とも思つてゐなかつた。然し私共は國の土産に如何にもして此の大敵を斃さうと選手一同は結束して起つたのである。

二十八日の仕合には、有田を投手とし敵は第一投手たるデクソンを以て私共に對した。第一回は偵察的の仕合で私共は第二日に勝たうとしたのであるが有田の出來がよく、敵は第二回と第四回にヴエクと云ふ今年からデトロイトの商賈人に貰はれて行く捕手の安打で各一點づゝを得、早大は第四回に田中の安打と久慈の中堅越三壘打に一點を得たので、巧みに攻むれば勝ち得る見込みがついたので第七回から谷口が代はつた。案の定谷口はミシガンの打撃を封じたが、味方も一點なり得點をなす事が出來ず、二對一で第一回戰に敗れた。之れで略ミシガンの技倆も推し量られたので第二回目は是非共捷たんとの意氣を以て相對した。どうもイリノイ程強いとは思はれない。

第二回は谷口を投手とし、味方は飽までも勝たんとの元氣であつたが、敵また早軍の侮り難きを知つて守備を嚴にした。第二回早軍は大下中堅越の猛打に一壘三壘に進んだが、石井の打つたヒツト性の球を敵の二壘手に得られて得點なく第八回まで兩軍得點をなす機會を失ひ、谷口は縱横無盡にミ軍の打撃を封じ、敵軍をして舌を捲かしめ、敵の投手リバランス又早軍を進ましめず、美事な投手戰と守備戰を演出して第九回に入り、早軍・保田三壘安打を飛ばしたが後援なく、敵は主將パンホベンが打者として迎へられた。第一球を邪球となし、谷口が第二球を肩の邊に釣らんとした、それを無茶苦茶に振つたのが幸運にも左翼線上の安打となり、加藤が其の快走を利して相隔け球は加藤の掌中に納められたと思はれたが體勢が崩れて逸し去つたから、廣野の如き運動場を去る球は如何ともし難く途にホームランとなつて一對零、恨を吞んで早軍に敗退した。

極めて殘り惜しいゲームではあつたが、ヒツトが散發

點のチヤンスを掴む事が出來なかつた早軍は確かに善闘をしながらも此の結果を諦めねばならなかつた。安打は早軍に四、ミ軍に五で、走者を出すもの兩軍各五、兩軍無失策、四球はリバランスが一個の四球を出したのみで、谷口は一個の四球を出さず、打撃を誇るミシガンの選手を六回まで三振に屠つてゐる。此の出來榮は恐らく彼れの球生涯を通じて最大の記録の一つであらうと思はれる。今回の遠征中敗れたれど早軍の善戰は此の一回を以て確かに誇る事が出來る。

六月二十九日の夜ミシガン大學の所在地アナーバを出發して鐵路シヤトルに向ひ、七月五日からワシントン大學と五回戰を試みた。しかも連日の仕合で手不足な早軍は甚だしい苦戰に陷つたが、五回の内二回を勝ち三回を敗れた。ワシントンは野球部創設以來の強チームと稱され、攻守共に燦然たるものあり、殊に三人の投手は投術相似たるものがあつて、投手力(ピツチングスタツフ)に於ても堅固たるものがあつた。然し投術は早軍と相匹敵して谷口が投手をなせば早軍稍勝味に出る事が出來た。此のチームは九月初旬に早大の招聘で來朝するから、早慶兩軍と美事なゲームを見せて東都の野球家を喜ばす事であらう。私共は最終の試合として翌日、美香登と七月十日に二試合をなし、こゝで三十八回の仕合を完了したのであつた。

以上は大學戰の重なるものゝみを拔き取つて其の概況を記したに過ぎないが、此の他商賣人とも半商賣人とも數試合を試みたが、ナイヤガラ、パハロウの仕合を除いては常に感心せぬものがあつて今後の遠征には出來得る限り、此等半商賣人チームとに戰はぬ様に注意せねばならぬと思ふ。

中西部から東部、太平洋沿岸と米國の名ある大學と仕合をなして私の感じた事は、日本の大學チームが少しも米國の一流大學チームに伍して遜色のないと云ふ事である。此れは私が二三年前から考てゐた事であつたが、昨春のシカゴ大學に對して其の感を深くし、今回更らに渡米して各大學と交戰せる結果、私は一二の大學を除けば却つて早慶兩大學に優れるところあるを痛感したのである。最も早慶兩大學にも年によつて强弱の度があると同じく米國の大學にもそれがあるから、今年强かつた大學が、明年はチーム力の減退を來るやうな事はあらうが、大體に於て日本の大學チームは米國第一流の大學に對し　互格の仕合の出來る程度に進んだ事は疑ふ餘地がない。更らに五年十年と此の狀態を以て進むならば、米國第一流大學を壓倒する事は決して難事ではないかも知れない。唯今のところでは彼等には

天恵的力があつて、打撃の率から云ふならば決して劣らぬ我々も、球の力にあつて時に大きな穴を明けられそれが敗因を深めるやうな事になる。頭腦から云ふならば、確かに日本のチームの方が進んで居り、チームプレーとしても日本の大學チームは米國の商賣人と相並ぶ程の精密さを有つてゐるが、彼等は力だけの仕合をなしてゐる。惡く云へば日本のは頭だけ大きくて尻がつぼまつてゐる感を呈してゐるかも知れない。私共は今度の遠征に於て少しも新らしい事に出合はなかつた。成程商賣人の選手個人のプレーには人間業とは思はれぬ程の巧味を感ずる事にあつたが、此れとて力の上の野球で新しさに驚倒する樣なものは一囘も見る事が出來なかつた。

米國で最も有名な大學チームは、中西部のイリノイ、ミシガン、インデアナ、シカゴ、ウエスコンシンであつて、イリノイ、ミシガンが兩大關である。私共は此の兩大學に對して好記錄を殘したが、正直の處勝ち得ない。それはよし條件をよくしても勝ち得ないかも知れない。東部のハーバート、エール、プリンストン、ペンシルヴアニアも強チームに相違なく、第一流たるべきは云ふまでもないが、イリノイ、ミシガンに比しては稍々劣りがするから、此れはシヤトルのワシントンを加へて三役格であらう。此の三役には條件さへ相等しくすれば早慶は互格のゲームが出來得るから、日本の大學チームは世界に於て三役には入れる譯けである。

私は今囘の旅行に豫期以上の成績を收むる事が出來なかつたのを甚だ心外とするが、せめて米國一流の各大學に對する日本大學チームの地位の向上を野球兒と共に喜びたいと思ふ。今囘の經驗から次囘の遠征には條件をよりよくして好成績を收め得る事が出來るであらう。

野球の技術其の他に於ては以上の如く日本チームの進歩を十分に認むる事が出來た私共も、一度其の運動設備に對して、彼我を檢較するならば雲泥萬里の差を思はねばならなかつた。米國は運動國であつて國民全體が運動を理解し日々の新聞紙などは如何なる田舍新聞と雖も、必ず一頁を費してゐる有樣であるから、到底日本の貧弱な今日の狀態が太刀打ちの出來る譯ではないけれども、其の餘りに完備せる有樣には一々喫驚させるを得なかつた。エール、ハーバートには野球場が三ケ所もあり、テニスコートは三四十を數ふべく、蹴球場は鐵筋コンクリートの觀覽席が優に五六萬を收容し得ると云ふのであるから、日本のそれに較ぶるならば話にもなんにもなつたものではな

い。最も運動は正科となつてゐて學生は必ず何等かの運動を修めねばならない。授業料は特に二弗乃至三弗を徴收する。そして四十五點のマークが此れに附されるので成績の上から云つても無視するわけには行かぬのである。

イリノイ大學にはテニスコートが百有餘あり、此の大學は近くスタデアム（蹴球競技場）を新しく建設するために二百萬弗の寄附金を集めたが、在學生の寄附金豫算五十萬弗に僅かに一週間を出でざるに七十餘萬弗に達したとふ勢である。二百萬弗と云へば日本金の四百萬圓以上であるが、其の巨額の寄附金が茶飯事に考えられてゐるは、金力の國とは云へ運動に非常の注意を拂つてゐる事を思はねばならない。イリノイは確かに運動の盛衰が大學そのものゝ盛衰を左右すると云ふ事を信じてゐる大學で、イリノイの抱負は學力に於ても運動に於ても大米國隨一たらんとするにあるらしい。

米國の大學には立派なグラウンドがあると同時に必ず體育館（ヂムナジアム）がある。此の體育館内では冬季の練習やバスケットボール、水泳等の練習や競技が行はれるのであるが、此れに附隨して整頓した更衣所があり、運動部選手の集りをなしたり、食事をしたりするクラブハウスがある。體育館も[illegible]を[illegible]たらしめた一つではあつた位か。是非とも更衣所の設備[illegible]の命日の悲惨な境遇から推して羨望の的となつた。更衣所は各部選手や其の他運動をする學生が、此處で通常服を脱いで運動衣に着換えるので、一人々々鍵を掛けて衣類を納める樣に出來てゐる。運動をとつた學生が汗に泥にまみれて歸へれば、其處には湯や水が自由に調節される樣なシャワーの設備があつて、すつかり疲れを癒す事が出來、野球や蹴球の選手が肩や脚に故障が起きればトレーナーと云ふ者がついてゐて、常に療治をして與れると云ふのであるから、如何に運動嫌な學生でも汗を出した後ちにシャワーにかゝる快感を思ふと何にをさて措いても一汗かきたくなるのは當然の事と云はねばならない。

私共は贅澤をして運動をしようとは決して思つてはゐない。けれども何等の設備もないグラウンドで學生に運動を強いたとて其れは少しも甲斐がないのはわかり切つてゐる。早慶兩大學は東京に於て否日本の大學中にあつて殊に學生運動に留意して居る大學であるが、其の代表的大學にすら更衣所らしい更衣所がないではないか、私は約十五年間早大のグラウンドに或は選手として或は校友として出入してゐるが、練習が濟んでから汗を流し、手足を清めるのに十年一日の如くあの古井戸の水で、小砂利を石鹸の代用として辛らくも用を足してゐる。此の哀れな當今の發達せる衛生思想で米國大學の設備を思ふた時、その餘り

に後れ・るを惧まねばならなかつた。選手と云ふ肩書や責任觀念に誘はれ、彼等は少しも不自由を訴へずに苦痛の多い練習を續けてゐるのであるが、一般の學生が運動の效果を知りつゝ此れを進んでとらぬのは眼前の不自由に遮られてゐるために相違ない。日本の大學は此の一點だけでも米國に學んで欲しいと思ふ。

更らに其の體育館であり、更衣所であり、其の他の設備がいづれも某々氏の寄附に成つてゐるのも羨むべき事で、米國の體育觀念、社會的である事を明らかに窺はれる。日本の富豪にもかうした美しい心を植付けたく思ふ。

次に是非共云はねばならぬ事は運動選手の人格に就いてゞある。日本でも此の點は可成八ケ間敷なつては來たが、米國は特に此の點に注意を拂つてゐる。最も米國の教育方針が形式學問にあらずして人格教育に重きを置くと云ふところから當然運動部選手の人格が尊重されるのでもあらうが、兎に角運動部の選手たるものは、一廉の模範生でなくてはならない。私は諸大學に於て野球部選手のみならず、各部の選手と食卓を圍んで話し合つたが、力を誇る拳闘(ボクシング)や西洋角力(レスリング)の選手が一見處女の如く、如何にも温和な風采が人を魅するもののあるのに深く感動させられた。

エールとハーバートの兩大學には古くから、オノラブル、エキザミネーション、システムと云ふ制度が設けられてあつて、此れは監督者なしの試驗が行はれるのである。學生の人格を尊重して教授は問題を渡すと其のまゝ教室から出て了まうのである。然して此の受驗生間に不正なものが出れば當人は放校になり、一般は責任を負ふて停學となる。若し不正者の行爲を知りつゝ此れを申告する事を怠つたものも同時に退學を命ぜらると云ふ規定となつてゐる。而して此の委員には必ず運動部選手が舉げられて各責任を負はねばならない。

人間が人間を試驗する事が既に大きな間違である以上、其れをまた不正行爲を爲すものとして試驗監督と云ふやうな厄介なものを附けて看守が囚人に對する樣な態度に出る事は誠に苦々しき事であるが、事實カンニングと云ふ不思議なものが學生間に行はれてゐるのであるから、學校側の態度としてからが、非難するわけには行かない。私は一日も早くかうした制度が日本の大學にも採用され、教授連も手數をはぶき、學生の人格も疑はれず氣持よく試驗を受け得るやうになりたいと思ふ。倘慾を云ふならば、オノラブル、エキザミネーション、システムの

と共に運動部選手が委員に舉げられる程の向上を見たいと思ふ。此れは決して大難事ではない。各自學生の心掛け一つで出來得る事であるのだから、寧ろ採用されないのを恥辱とせねばならない。

米國の野球ファンに就いて格別語るべきものがないが、シカゴからイリノイ、ハーバートからエールなどの諸大學と戰つて非常に愉快を感じたのは、無論彼等は自校の選手の勝利を願ふ聲援をするけれども、敵に惡罵嘲笑を與へるなどの事は少しもない。敵と雖も快技を示す事なればスタンドの板を蹈み、手を振つてそれを賞讃する。其の間些の厭味もない。殊にハーバートの觀衆の如きは流石に米國文明の源泉地だけ洗錬されたもので、遠來の客に對して充分の敬意を表し、スコアが九回で同點(タイ)になるも其の態度に紊れる事なく、一點私共が後れて敗戰となるや、續々スタンドから下り來つた觀客はあらゆる世辭を振り蒔き『我々は大學同志の試合に此んな面白い力の入つたゲームを見た事がない、それを非常に感謝にする』などゝ云ふものがあつた。

ナイヤガラとバハロウでは半商賣人と仕合をして、ナイヤガラに敗れバハロウに勝つたのであるが、此の兩仕合とも觀客の多くは私共に徹頭徹尾聲援し、心から其の勝利を祈つて呉れた。バハロウの仕合には敵に一點を先取されたが、三回目には三點を入れ、仕合の中途には六對三のスコアで我々が優勢であつたに拘はらず、數千の觀客は我々の爲めに始終態度を改めずアンパイアまでに喰つてかゝつて只管に我勝利を希つた。此れなどは異例であるが、米國の觀客が飽までも偏頗でない事は七月二日、米國のデンプシーと佛國のカーペンテアとの拳闘仕合に多くの米人觀客が遠征の士カーペンテアに同情を持つた事でも明である。私は此等の態度を喜ぶべきか否かに就いては未だ熟慮して居らぬが、確かに遠征戰士に對して快感を與ふる事は事實である。

商賣人のゲームには隨分激しいものがあつて、老幼婦女に至るまで熱狂するが、大學チームの仕合にあつては可成秩序があつて少しも醜體がない、勿論彌次馬同志の喧嘩などは薬にしたくもない樣である。

渡米中米人の歡待は實に想像以上で排日の風などは何處に吹いてゐるかと思はゝる程であつた。此れは一に競技の御蔭であつて兩國の親交を温める上に於ても大なる影響を爲すに相違ない。

以上述べたところによつて大體米國大學の野球に就いて知る事が出來るであらうと思ふ。野球以外に就いて私は多少觀察したものがあるけれども、それはまたの機會に讓る事にするが、競技觀念と運動選手の品性向上とは我々が特に注意して立派な運動選手を造る事に腐心せねばならない。技倆に於て米國大學と對等の力を示し得る樣になつた日本の野球界は、一層競技精神の向上を計り、選手の品性や學力にあつても彼等以上にならねばならない。

外國の旅行は云ふまでもなく内地の旅行などにあつても地方の人々に後指をさゝれる樣な事をなして恥じない樣なチームがあるとすれば又はかゝるチームにさへ[illegible]ないと思ふ。個人としてもさうであるが殊に團體として行動する時には尚更に注意を拂はねばならない。かゝる事は一チームがけ[illegible]しても他のチームがこれを恥にしなければ野球團の品位に決して向上したとは云はれない。中學などのチームになつても勝敗の如何を云ふ前に、深く此の點を考る必要があらう。そして此の效果を收め得ざるならば野球部は存在する意義のないものであるから、須らく野球部を廢止するがいゝ。寧ろ害あつて益のないものを存在させて置く價値は何所の世にもない筈である。

月光の下に

——不平家と厭世家と樂天家との對話——

生方敏郎

A……不平家
B……厭世家
C……樂天家

C　いや、A君、よく來てくれたね。君と會ふのは、もう何年目だらう。實に久しぶりだ。まあ、お互ひに無事で、こんな仕合せな事はない。

A　さうさ。お互に無事といへば、無事だが、沈香もたかず屁もひらず、といつた樣なわけぢやないか。僕等の仲間から、あまり豪い人間も出なかつた樣だね。

C　さうさね。格別、今日までのところでは、まだ英雄豪傑で候といふ資格の赤札の附いた者も無いが、要するに、人は棺を蓋うて後定まる、で、今のところは、まだ未知數さ。後世から見て、何んな偉い英雄も天才者も、生きてる間は寧ろ碌々たる凡人だつたものさ。死んでから、皆なで寄つてたかつて、豪い者にしてくれるのだよ。

A　なあに、そんな事はない。孔子も、四十五十にして聞こえざるは、爲すあるに足らざる也、と謂つてるぢやあないか？我々の仲間を見玉へ、もう皆四十を越してゐる。中には五十に手の屆いたものもある。それで、今まで、何をした。仕事も出來さず、富も積まず、名も成さず、殖ゑたものは借金と子供ばかりといふ始末だ。もう、この邊で、大抵人間の相場は極つてしまつた。この先き何年生きたところで、何事が出來るものか？皺がふゑて腰が曲つて、頭が白く成るばかりよ。考へてみりやあ、人間の生涯なんて、實に馬鹿げきつたものさ。實際、孔子の言ふ通りよ。四十五十にして聞こえない我々は、共に語るに足らざるものなんだ。

C　君は、さう思ふかねえ。仕事も出來さず、富も積まず、名も成さず、殖ゑたものは借金と子供ばかり……

A　その通りだ。

C　だが、それほど結構な話はなからうぢやないか？、富とか名とか厄介な重荷が無く、子寶と借金とが殖えるとは、こんな巧い話はないねえ。

A　バカ、バカな事を！借金が殖ゑて何が結構だ。いかに、君が、詭辯を好めばとて、借金が殖ゑて結構とは、そもそも、何處を押せば、そんな音が出るのかね。萬一、それが正氣で眞面目で言つたものとすれば、君は、恐らく、借金の經驗をもたないか、然らざれば、債務に對する責任感が缺けてゐるんだ。借金は、借金しに出かける時、既にさんざん厭な思ひをして、萬一成功してもその次ぎには、返濟しなければならぬといふ苦痛がある。昔から、借りる時の地藏顏、濟す時の閻魔顏、といふ諺があるが、僕思ふに、借りる時も閻魔面、濟す時も閻魔面だ、といふに誤りはないよ。君は何う思ふ。

C　成程、借金の殖ゑるを結構といつたのは、過言だつたね。いや、僕も、あえてその經驗がないのではない。如何にも、君のいふ通り、借金に借りる時も、借りてる間も、返す時もいつも厭だつたよ。しかし最後に、運よく金が這入つて、古い不義理

の借金が返された後の心持は、何うだい。實にいゝ心持ちやないか？まるで、船に乘つてる間溜りきつて苦しんでゐた小便を、上陸して早速シヤア／＼出し拂つたやうな快感がある。その快感があるだけでも、僕に借金することを讃美する。

A　よくも、こじ付けたね。そりやあ、借金が拂へる人の話さ。由來、返せるやうな借金は、素より仕ても仕なくてもいゝ性質の借金なんだ。何うでも拂つても返せない借金をするのでなけりやあ、本當に借金したとは言はれない。

C　うん、その返さない借金で思ひ出したが、Mの奴、先にはよく返さない借金ばかりして歩いた男だつたが、このごろは仲々堅くなつて、何處か斯う世帶じみて來たよ。前のやうな風來坊でなく、信用の置ける人間に成つた。

A　少しは、金でも出來たのだらう。

C　さうでもないらしい。相變らず貧乏相だが、それに、もう長く田舍にゐるせいか、何處となく田舍紳士らしく成つて、爺むさい臭ひがして來たが、それも亦た信用の附く一つの資格だよ。細君が、しつかり者と見えるよ。

A　そいつは、奴も好い籤を引き當てたものだ。およそ細君の惡いのばかりは、萬年筆の惡いのと同じことで、初め手に入れた時に、いけなかつたのは、何う修繕しても良くは成らない。萬年筆と細君とは、教育の効果を尤も雄辯に否認するものだ。和製の萬年筆が頗る善良でないと同樣に、この頃の若い細君の惡質なことは、とても沙汰の限りだよ。

C　細君の惡質は、近代に成つて始まつたことではないのさ、太古から、女子と小人養ひ難しと、チヤーンと相場が極つてゐた。さうかといつて、一家の中に、細君が無くつてみたまへ。火鉢に火が無く、冷藏器に氷を絶やした様なもので、淋しくもあり、極りがつかず、魂の拔けたやうなものさ。だから、昔からいふぢやないか？風呂桶の蓋と女房とは、無くては困るが、有れば邪魔に成る、つてね。

A　風呂桶の蓋にも、新らしくて輕くつて、使ひ心地の良いものと、古くつて重くつて、使ふ時に一々癪に觸るのと、二タ通りあるだらう。我々の女房は、その後の口なんだ。

C　でも、初めは滿更でもなかつたらう。新しい中はさ？

A　なあに、初から出來が惡かつたんだね。だから、直ぐ傷が付いちやつた、先刻も云ふ通り、萬年筆と同じだ。買ふ時、買ひはまると、後は、何うにも成らない。百年の不作を嘆じるより他はないんだ。

C　僕は、何事にも、匙を投げてしまはない質だ。何んな不幸な事の裏にも、またそれを償うに足るほどの幸福の種子が

でゐると考へる。それを探しだして來て、不幸の埋め合せをするのが智者の行く可き道であらう。所謂、禍を轉じて福と爲すのさ。そこで、そのやくざな萬年筆の利用法は無い物だらうか？

A　とても、その利用法は見つからないね。屑屋だつて、役に立たない萬年筆に、價は付けやしない。引き出しに入れて置いても邪魔に成るばかりだし、さうかと云つて火箸の代りにも成りやしない。これと同じことだ。

C　だが、ソクラテスは、あの惡妻に對つて、おかげで、大に心の修養が出來た、といつたぜ。孔子の細君も、彼をして女子と小人養ひ難し、の嘆を發せしめたところから推すと、可也の惡妻であつたに違ひない。孔子もずいぶん修養させられた事だらう。いや、冗談ごとぢやあない。人間の本當の修養は、本を讀んだり、お說教を聽いたりすることではない。惡い父母に仕へ、惡い妻と同棲し、惡い子供を育てることだ。世の中に、惡人が無かつた日には、迚も善人に磨きがかゝりはしない。文覺上人が那智の瀧へかゝつたやうな覺悟で、惡い女房の愚痴を征服するんだね。さうすれば、そこに君の人格に、奥行と深みが出來て來やうと云ふものさ。

A　僕は、さう迄して、精神修養がしたくない。女房に依つて精神修養するとは、あんまり馬鹿々々しい、情ない話だ。

C　人生は、その馬鹿々々しい事と、情ない目に逢ふのが、修業さ。それを外にして修養も、苦行もあるものかね。そこに味があるのさ。

A　僕にはそんな、呑氣な事は云つてゐられない。やくざな女房は叩き出して、家庭を改造するのが、自分に對する義務だと思ふ。永くもない一生を、不愉快に送つて、堪るものか。

C　それもさうさね。場合に依つては、その方がよからう。萬年筆も、どうしても、修繕が利かない様なら、新しいのを買ひ直すより外はないからね。僕は決して、總ての離婚に對して、不贊成を唱える者ではない。惡妻に依つて、人格の修養をするのも、一つの方法だ。併し、誰も、必ずさうしろ、とは云はない。離婚して、新しい道を開くのも、亦一つの方法だ。絕對的に離婚を否認する事は、離婚以上の罪惡だ。

A　僕は子供さへ無ければ、勿論、ずつと昔に別れてゐる。

C　さうさう子供が可愛さうだからね。夫婦間に問題となつて、しまひまで殘るものは、唯、その問題さ。然し場合に依つては、惡い繼母の手によつて育つより、良い後妻に世話された方が、却つて子供の爲に、幸福な事もある。第一、子供も親父も、何時も緊張して居ます。それ丈、子供も偉くなる。そして、

家庭が平和に行けば、これに越した事はない。然し、さう云ふ場合は、若し、その悪妻が、病死してしまへば、これが一番運がいゝのさ。死ねば總ての事が清められる。死んだ人の事を追憶すると、殆どいゝ事ばかりだ。悪い記憶は残らない。偶々いものがあつても、それは大抵美化されてしまふ。だから見給へ、細君と死別れた者で、その亡妻を、惜み歎かないものはないから。Bを見給へ。何時でも、めそ〳〵して、死んだ細君の事を云つてゐるよ。そして、自分程、不幸な男はないと、思つてゐるよ。實際を云へば、あんな幸福な男はないんだ。全く知らない女と結婚したのだから、初戀と同時に、結婚した様なものさ。さうして、やうやく、鼻に付いて來た時分には、細君が死んでくれた。親族も、朋友も、皆、氣の毒がつて、誠心から同情して立派な葬式を出した。自分も頻に悲んで、花が咲くにつけ、月が照るにつけ、あの細君が生きてゐたならばと、惜み歎く。どうだい、生きてゐて、夫婦喧嘩をするのと較べると、全く、雲泥の差だね。實に美しいもんぢやないか。だから僕は、Bの様な幸福者は、滅多にないと、思つてゐるのだ。

A　成程、さう云はれて見れば、さうに違ひない。あいつは僕よりも、幸福者だ。實に巧い事をしやがつた。細君が死ぬとは御誂へ向だ。

C　そんなに羨しがらなくもいゝよ。B君も、細君が死んだ時に自分も一緒に死んでしまへば、一層幸福だつたんだが、まだそれでも、自分の生きてる丈が幾分か不仕合さ。然し先刻も云ふ通り、その生きてゐるといふ不仕合せの外に、何時かは、どうせ死んで行けると云ふ、淋しい希望が残つてゐる。その希望がある以上は、何もそんなに、悲観しなくもいゝんだ。それだのに、あの男は、何時も愚痴をこぼしてゐる。

A　一體、あいつは我儘なんだ。それだから何でも、自分の思ふ様にならないと、直に悲觀する。そして、自分ほど哀れな者はない様にいふ。

C　實際、Bはさう思つてゐるのだ。彼は少しも自分を欺いてはゐない。

A　自分は欺かないかも知れないが、他人を欺く位は、常に平氣だ。今夜だつて、さうだらう。夕方五時から、此處へ集まらうといふ約束なのに、まだ姿さへ見せない。電報を打つなり端書を出すなり、或は電話で斷りをいふもよし、使をよこすも差支へないぢやないか。我々が、こゝで彼を待ちはじめてからもう何時になると思ふ。あんまり人をバカにしてゐる。

C　まあ、〳〵、さう憤慨し玉ふな。先生だつて、決して、我我を侮辱しやうとして、遅參してゐるわけではあるまい。何

の都合でおくれたのにきまつてゐる。今夜は、何のみち、夜更けまで、語り明すつもりなのだから、まあ、悠くりでよからうぢやないか。

A　いや、さうでない。名月の夜に、例年我々は會合することに成つてゐて、それはBだつてよく承知の筈だ。たとへ何んな用が突發しやうとも、それが公用たると私用たるとを問はず、萬障繰り合はせて、來會しなければならんところだ。Bめ、近頃、多忙とか何とか、月並な逃辭を設けて、ずるけやうとするのかも知れないが、そんな舊友を踏み付けた話があるか。

C　まさか、Bにそんな怖ろしい不人情なところはない。實は彼なんかは、もう少々冷淡で、不人情に成つてくれて、丁度いゝ位なのだ。人情が有り餘るから、あんなに毎も悲觀してばかりゐる結果に成るのさ。愛があれば、そこに涙があるわけさ。オヤ、なんだ。噂をすれば影だ。あすこへBがやつて來たよ。相變らず、下を向いて、物探し相にやつて來るよ。あゝ、那々を見た。何うだ。あのメランコリツクな眼は！

A　やあ、來たな。バカにおそいなあ、何したんだ。

B　やあ、失敬。今日は出やうとすると、いろ／＼の客が來てねえ。平氣な、田舎から東京見物に出て來た人もあるのだから、ふり[illegible]よ。[illegible]から、今度、電車に乘らうとすると、何れも是れも滿員で、いくつか待つて漸く乘つて、少し出ると、前の車が脫線したのだ。それで長く待たされたところが、電車の中は蒸し暑し、おまけに蚊が居て足を刺す、實にひどい目に會つたのさ。

C　そりやあ、大變だつたね。君の來るのがあんまり遲いものだから、今A君が大に憤慨してゐたところなんだよ。

A　電車の故障とは思はなかつたからね。君がズボラでおくれるのだと容せないと、考へたからさ。實際、このごろの電車には困つたものだ、毎日、電車に乘つて、快い氣持のしたことがない。電車はのろいし、車掌は行き屆かないし、規則はやゝこしいし、客は野蠻で粗雜極まる。

B　今日なんぞ、自分の乘つてる電車の故障なら、まだしも致方ないと、諦めるけれど、前の電車の脫線のおかげで、こつちは何等の故障も無いのに、いつ迄も發車出來ないのだからねえ。

A　前の電車と、後の電車とは、連帶責任だからなあ。人間の社會でもさうだ。一人惡い奴がゐれば、その周圍の者は皆迷惑する。一人貧乏人があれば、その周圍の人々は、皆損をする。お互ひに連帶責任だからね。いゝかね。だから、社會に貧乏人[illegible]くなる。社會に貧乏人があるといふことは、丁度家庭

に病人があるやうなものだ。その爲めに、社會全體が不活潑になり、不愉快に成る。然るに、今の社會の成り立ちでは、貧乏人を成るべく數多く作つて、そして成るべく貧乏人を虐待して、そして成るべく貧乏人が富まうとする邪魔をやいてゐるやうに仕組んである。皆で富んで、皆で滿ち足りて、皆で樂まうとは、少しも心懸けてゐない。

B　それは、こと〳〵く、人間の根本的性格から來てゐるのだから、今更ら救ひがたいのだよ、皆が、自分だけを富ませ、自分だけを樂ませようと、考へてゐる。その結果、極めて少數の人が多少の滿足を得て、大多數の人が大に苦しむのさ。その少數の人だつて、決して心から滿足してゐるわけぢやあないのだ。皆、それ〴〵苦痛を持つてゐるんだ。人間は經濟的にさへ幸運ならば、それで上首尾といふものではないからなあ。人間は、誰も皆苦しんで生き、苦しんで死ぬのさ。それが人間の運命だ。呪はれたる運命なんだよ。

A　いや、同じ苦しむにしても、金があつて苦しむのと、無くつて苦しむのとは、大違ひだ。君は、貧乏人の本當の苦しみを知らない。貧乏人は、生物一般の受ける苦痛の上に、更に虐待せられた生物の受ける不當な苦痛までも負はされてゐるのだ。

B　だが、金持には、また貧乏人の夢にも知らない苦痛があるよ。寶は貴ければ貴いほど、多ければ多いほど、之を失ひ易い。寶を賊がねらふことは、蠅が砂糖を慕ふのと同様だ。一寸一分の油斷をさへも許さない。金持は、いつだつて、枕を高くして寢ることは出來ない。金が有れば、朋友も叛き易く、親族からも怨みを買ふ。たゞ、表面、金があると見られた丈けでも、人の憎みを受ける場合が多い。或者は、之が爲めに妬み、或者はニコ〳〵して無心を申し込み、斷はられては深く怒る。だから、景氣の好さ相な顏なぞは、怪我にも決してするものではない。賊は内にも外にもある。

A　では、不景氣な顏をしてゐれば、いゝのか?、

C　不景氣な面かい。はハハハ、不景氣な顏は、景氣のいゝ顏よりも、更に一層よくないね。所謂、笑ふ門には福來り、泣き面を蜂がさす、とやらで、まあ、一概に然うも言はれないかも知れないが、景氣のいゝ顏をしてゐれば金持と誤解されて、借金を申し込まれたり、一人者と間違へられて、娘を持つた役からバカに深切にされたり、旅行中なら特等室へ通されて、お茶代の心配くらゐするのが、心配の關の山だらうが、泣き面をして、貧乏人と思はれてみたまへ。それこそ、家を貸す人もなし、こつちから「お早う」と挨拶しても、先方は避けて通る。こつちで、深切にしてやつても、「貧乏人の深切は後が怖い」と皆

つて、逃げる。まして、何か頼みにでも行つてみ玉へ、先は必ず、態よく斷るから。

B さうさ。さうに極つてゐる。人は、富んでも不幸だし、貧しくても不幸なんだ。人間は到底不幸の鎖を斷ち切ることは、出來ないのだ。それが人間の運命だ。

C いや、さう考へては違ふ。人は、貧しい隣人を輕蔑してはならないと同樣に、富める隣人をも憎んではいけない。何となれば、君自身、富んだとして考へてみ玉へ。必ずや貧しい隣人の近づくのを、幾分警戒する必要を感じるだらう。隴を得て蜀を望むは、人の情だ。貧しい隣人に一の好意を示して見玉へ、彼はその次には五の好意を要求する。五の好意を示してみ玉へ、彼は、その次には十の好意を要求する。さうして、遂にそれが滿たされなく成つた時、貧人は富者を羨み憎むのだ。これが貧乏人根性といふものである。そんな根性に取りつかれると、一生涯、他人の幸福ばかり嫉んで、自分の世間を狹くし、世に出る道を短かくする。貧乏人に、恁ういふ人間が多い限りは、貧乏人が世間から嫌がられるのに、不思議はない。この近所でも、資本家の工場からに、毎日毎夜、安い石炭の烟が濛々と登つて、近所八方に煤い玉を散らし、周圍の人々を憫ませてゐるが、又川向ふの貧乏人は、おあい屋に汲み賃を出すのを惜しんで、深夜密かに、糞便を川の中へ汲み捨て、爲めに晝夜中の川岸は臭氣紛々たりだ、また、ごみ箱も造らずに、それも川へ捨てるから、川は何時でも塵芥の島が出來てゐる。まつたく衞生も何もあつたものではない。そして曰く「こちとら貧乏人に、金を出して糞子を汲ませることが出來るものか」と。

A そりやあ、確にさうだ。貧乏人に金を出させて糞子を汲み取らせる法はない。なるほど、近所の迷惑も、衞生をも構はずごみや糞子を川の中へ投げ込むことは、よくあるまい。併し、さうさせるのは誰だ。一日いくらにも成らない勞働賃銀の中から、何うして、糞子の汲み賃まで出し得るものか。東京市に住めば一所糞子するにも金がいる、といふのでは、あまりと云へば世智辛すぎるよ。そんなことをさせて置くのは爲政者の罪惡だ。糞子やごみを東京市自身で、始末つけないのが間違ひの本だ。無教育の細民をしてごみや糞子を捨てる可く餘儀なくしてゐるんだ。さうして置いて若し之を罰するならば、これ民を網する者だ。

C まあ、君、そんなに怒らないでもいゝ。東京市では、決して民を網しはしないから、安心し玉へ。此川の畔へは

塵埃を川へ捨つる者は、八十圓以下の科料に處す可し

と制札を建てたが、まだ一度も科料に處せられたものがない。

毎日、毎夜、その制札の周圍に、人々がごみを捨に行く。まして、糞子を捨てる者の方には、科料とも何ともお斷りが無いのだから、大方當局の方では許可したつもりなのだらう。人々は、制札を案山子のやうに小バカにしてゐる。

A　いよ〳〵以て怪からん。之は、民を網する以上の不德である。あゝ、世は何處まで腐敗して行くかしらん。

B　糞子の間斷位で、そんなに憤るには當らない。それ以上悲しむべき事が、山の樣にあるやないか。毎日の新聞を見給へ。東京市疑獄の豫審調書やら、郵便局の詐欺取財やら、官吏公吏の惡事ばかりで、紙面の大部分が塞がれてゐるではないか。それがみんな、肩書のある、位置のある、財産のある、世の儀表となるべき人達なんだ。紳士紳商なんだ。それが、毎日あの樣に罪惡を指摘されてゐる。初めの内こそ、人は驚きもし、憎みもし、恥ぢもしたであらうが、あゝ毎日、連載されると、人は當り前の事の樣に思つてしまう。此の間も或る處へ、通信社の男が、廣告を取りに來てゐた。此處の主人が、

「君の處の社長も、引つ張られたな。何を惡い事をしたんだい、」

と、冷かすと、その冷かされた通信社員は、案外、平氣なもので、

「裁判所へ、引つぱられるのは、現代紳士の第一の資格ですよ。少し働きのある樣な人間は、みんな惡い事をしてゐまさあ」

と、蛙の顔に水をかけた樣な樣子でゐた。そして尚ほ曰く

「あの社長も、未決にゐて、選をして代議士に成つた男ですからねえ。兎に角、豪い男ですよ」

と。その通信社員の良心から考へると、善い事をしてゐて、代議士に成るのは當り前の話だが、惡いことをしながら、代議士に成るのだから豪い、と飛んでもないところへ、人物評價の力點を置いてゐる。

A　さあ、惡い事をし乍ら代議士に成る方が、善い事をし乍ら代議士に成る人間よりも、豪いか豪くないか、それは問題にはならないが、要するに、今の政治家は、上に代議士より下町村會議員に至る迄、同樣に堕落し切つてゐる。そして人民の信望をことごとく失つてゐる。代議士は惡いが、町村會議員はマジメかと云へば、さうはいかない。僕の國元には、こんな町會議員があるよ。筍醫者で、讀書もせず、金も無し、唯色が生白い幇間野であつたが、或家の持參金附の細君と姦通したものだ。その持參金といふのも唯の持參金ではなく、そこへ嫁づく前に嫁入りした或金持の家から、良人に死別れて出戻りする時に得た慰藉料なのだ。その慰藉料は先方から與れたのではなく、永い

裁判をして奪ひ取つた金だ。對手の家は實は姉聟の叔母の家で、田舍によくある親類つゞきの縁なのだ。その中で裁判して慰謝料を取る位な女だから、姦通位は朝飯前だらう。男の方は、もう一層したゝか者で、育つ時分は貧乏で、學校へも出られなかつたのを、或る人が氣の毒に思ひ、醫學校へ出して醫者にした。そして娘の聟にした。夫婦の間には、四人の子供が生れてゐた。それだのに、女の持參金に目を付けて、それと一緒に成る爲めに四人子供のある、義理ある本妻を離別した。一方の女は又、再縁した家を出て、持參金を持ちその醫者の處へ來て、後釜に据つた。さうしてゐる中に、先妻の産んだ、長女が死んだ。その女がいぢめ殺したのだと、誰も皆云つてゐる。狭い町では、これが大變な評判で、新聞にも出れば、「蝮のお蝶」といふ外題で芝居にも仕組まれ、そして、その當座は、殆ど交際する人も無つたが、暫く勿れ、その細君が例の持參金を高利で貸した金の力で六七年後の今年はその醫者が、町會議員に選擧されてゐる。これで見ても、日本は都會が政治的に墮落したばかりでなく、地方も亦、それに劣らず、墮落してゐる事が分る。この醫者の樣な、人の風上にも置けない男を、町會議員に選擧すれば、將來、賄賂を取らうし、どんな惡い事でもするだらう。さう云ふ、分りきつた事を平氣でやるのだから、地方の町村にも、良心が麻痺してゐる事は明白だ。だが、これも一つは、現在の選擧法が産み出した、身から出た錆と云ふものだ。

C　さう云ふ罪惡は、制度にもあり、人民の心からも出て來て居る。若し、制度が惡い爲に、さう云ふ惡議員を選擧するのだとすれば、もうその制度は、腐つて倒れて、軈て廢れる前兆と見るべきであつて、寧ろ、芽出度い話だよ、倒れた後からは、新しい、活々した芽が出るからだ。

B　實際、世の中が社會主義者の考へる樣に、制度の改善丈けに依つて、良くする事が出來るものなら、こんな嬉しい事はないけれども、その制度の下にある、人間の根性が良くないのだから悲しい事さ。制度の改善が、より良き狀態に社會を引き揚げるものであるならば、吾人は、社會主義的論者となる事を辭するものではない。然し、悲しい哉、惡い奴等は、如何なる法律の網でも、制度の垣根でも、越えるから困る。惡い人間は泥棒にもなり、掏兒にもなり、商人にもなり、議員にもなり、請負師にもなり、相場師にもなり、そして、時には又、官吏にも、辯護士にも、醫者にも、勞働運動のデモクラ屋にもなりして、さまざまな形で、さまざまな方面から、惡事を働く。石川や濱の眞砂は盡くるとも、世に盜人の種は盡きまじ、

と云ふ五右衛門の述懐は、何時の世にでも、適用し得るのだ。あゝ、情ない事だ。人間の心を、根本から變へるのでなければ、人生に救ひはない。然し、古來、如何なる聖人が道を說いても、人間は、善に遷らなかつた。惡人は決して、如何なる方法を以つてしても、善人に變化するものではない。迫害者であつたパウロが、ダマスコの郭門に近づくや、「爾、棘ある鞭を蹴るは難し」と云ふ、天よりの聲を聞き、心機一轉して、キリストの使徒となつた。然し、これは惡人が變化して、善人になつたのではない。パウロはキリスト教を、邪宗門と心得て、正義の爲に迫害したのだ。唯、彼は、この時、キリスト教の、邪宗門に非ざる所以を悟つた迄の話だ。聖書は惡人の爲に書かれたものであるにも拘らず、善人のみがこれを讀み、有難涙を溢してゐる。惡人も、屢ばこれを讀む、然し、彼は先づ、これを他人に利用する事を考へる。近頃、惡事働いて、監獄へぶち込まれ、出獄すると、假聖人になつて、宗教を振り廻す事が流行してゐる樣だが、聖人は監獄の中で打ちのめされて、出來るものでもなければ、差し入れ物の佛教雜誌や、教誨師のお說法位で、さうお手輕に製造出來るものでもない。假聖人は常に、附け燒刄の僞物と決つてゐる。善人が、牢屋に這入る事は屢々ある事だけれども、善人が、惡事を働く事は、一回もない。惡人が勳章を貰ふ事は、極めて屢々あるけれども、惡人が善行をなす事は、一度もない。若し、牢屋から出て來て善人になつた者があるとするならば、その人は、既に入牢する以前から、善人なのだ。教へを聞いて、善人になつた者があるとするならば、その人は、教へを聞く以前から善人であつたのだ。少くとも、彼等は、善人になるべき素質を持つてゐたのである。誰も、貧乏すべき貧乏人を、金持にする事が出來ない樣に、惡人たるべき惡人を、善人にする事は出來ない。さう考へたのは、古の聖人の己惚れだ。宗教家や、教育家の、迷妄だ

A　そして、善人は常に虐げられ、惡人は常に榮えるだらう。

B　僕等には、兎角、さう見えてならないが、無論、極めて少しは、その反對の場合もあるだらう。

C　勿論、その反對の場合が、原則でなければならない。善人は榮え、惡人は亡びるのだ。

B　違ふ〳〵、善人榮えて、惡人亡ぶと云ふ筋書きは、勸善懲惡小說家の迷夢に過ぎない。恰度、昔の脚本作家が、例へば啀みの權太の樣だ、惡人が變じて善人となる奇妙な性格を作つたのと同樣だ。大向ふの見物の、喝采を博する爲に、興業人に頼まれて、仕組んだ芝居に過ぎないのだ。出獄後の假聖人は、その事

本作家の名聲と共に、その興業人の儲けをも、取り込まうと云ふのだ。だが、世の中の實相は、さうお誂へ向きには出來てゐないよ。

C　さうさ。勿論、善人のお誂へ向きには出來てゐなからう。然し、此の世は、惡人のお誂へ向きにも、出來てはゐない。僕は、因果應報の理を信じる。薊を植える者は薊を得、無花果を蒔く者は、無花果を得る。惠心僧都の往生要集は、決して、愚男愚女を欺く爲に書かれた、虚構の談ではない。主人に叛いた僕には、必ず、滅亡の報ひが來る。友を賣つた卑劣漢には、必ず墮落の報ひが來る。良人を裏切つた姦婦には、必ず、破滅の報ひが來る。時には、毒に依つて毒が制せられる場合もある。惡人を借り來つて、惡人を亡すのも、天の心だ。惡をなして、猶、榮える場合があるならば、その惡の被害者が、同じ惡人であるからだ。善人に仇をなして、亡びないものは、一人もない。

B　然し、終局へ行けば、善人も亡びるし、善人に對して善をなした者も、亡びるだらう。

C　さうさ、善惡邪正、盡く亡びるのさ。それが、君、何で悲しいのだ。亡びと云ふ事のみが、生物の爲に與へられた、唯一つの救ひなんだ。聖人の教へは、救ひとして、役立たぬ場合があるだらう。そして終には、滅びるだらう。

A　では、君、善人も、惡人も、同じことではないか。結局同じとすれば、善をして苦しんでは詰らないね。惡をして樂しんだ方が宜さ相だ。

C　惡をして樂しむ。君には、そんな好都合な眞似が出來るかい。口先ばかりでなしに、君に、そんな重寶な藝當が出來たら、宜しく實行してみ玉へ。ヴオルガアな人間は、高利を貸しても、貨殖して樂しむよ。下劣な男は、收賄して藝者でも買つて樂しむよ。野卑な人間は、友人を賣つて、名を獲て位置を得て悅ぶよ。併し、君に、そんな眞似をして悅び樂しむことが出來るかい。

A　成程、さう云はれてみりやあ、さうだ。僕には、高利貸をして快樂を得ることは、出來まいよ。

C　收賄して樂しむことも、出來なからう。未決にゐて代議士に成つた事を自慢する勇氣も無いだらう。

A　さうだ。してみると、君、世の中では、卑劣漢と馬鹿者が、つまり得をする勘定だねえ。我々は人をすれば苦しむのに、奴等は惡をして尚ほ且つ樂しみ得るんだものねえ。

C　ところが、彼等は、その代り、善を爲して樂しむことを知らないから、同じやうなものさ。後漢の東平王に、善を爲すこ

と最も楽し、と云つた相だが、之こそ善人の心持さ。悪人やバカ者共の、全く知らない境地なんだ。

B　しかし、古來、善人は皆善行の爲めに苦しめられた。キリストは十字架を負ひ、ソクラテスは毒盃を仰ぎ、代々の殉教者は、何れも悲慘な最後を遂げた。

C　けれど、そりやあ、敵の方で苦しめようとたくらんだ丈けのものさ。善人の方では、その間に却つて樂しまされてゐる。熊の膽は、苦い後に甘みが殘るよ。總て善人の受ける苦しみの後には、必ず甘い快樂が來るんだね。キリストは、十字架の上から、「我、世に勝てり」と叫んだではないか。ソクラテスは、毒杯を仰いで後に、「明日また起きて働く爲めに、これから安けき眠に入るのだ」と遺言したらう。こんな氣の利いた、死の前の快感は、迚も小人共の味ひ得ない味なんだ。同じく亡びるにしても、悪人は煮物の饐ゑる如くに腐り、善人は芥子の花の散る樣に終るのさ。誰か、之を同一に見るものかね。

B　しかし、人間の壽命は短かいなあ。

C　その嘆きは、昔からあつた。恐らく、アダムの昔からあつたらう。朝に生れて夕に死ぬものを蜉蝣の一生といふが、蟬の命は四日位のものだ。夏の蠅も大方その位だ。虫の命は大抵短かい。獸も犬や猫は、長生をしない。魚も長命ではない。鳥も恐らく短命だらう。象や鯨を除いたら、人間なぞは、先づ長命の方なのだ。樹木は概ね長く生きる。莊子は大椿といふ樹を假設して、命の長短に悟入してゐる。大椿は一萬歳を以て春と爲す、といふのだ。しかし、その樹も、枯れた後から考へれば、また一刹那の假睡に等しい。矢張、槿花一朝の榮だ。長い短いは心の迷だ。何時まで生きても、後に成つてみれば、同じことだよ。

B　そりやあ、分つてゐる。たゞ、さう考へてみても、矢張、淋しいことは、同じだなあ。

C　そりやあ、同じことさ。併し、君が、さう云つて、人生の短かく果敢ないことを、嘆息するところから考へても、如何に君が、この人生を愛着してゐるかゞ分る。そして如何に、君が幸福なる生涯を送つて來たかゞ分る。之に反して、若し君の一生が、君の平生悲む如き、詰らないものであるならば、君はさう迄、人生の短かいのを、嘆息する理由がない。

B　今夜のやうな閑かに照り渡る月を見ると、僕は坐ろに悲しく成る。あの澄み切つた大空へ、青く投げ渡した光、この蒼白く、さやかに照らし出されてゐる地上を見ると、何といふ理由なしに浦悲しく、譯の分らぬ涙が頬を傳ふのだ。僕は、守の背に負はれた子供の時分から、さうだつた。

A　オヤ、君は、その癖、何よりも、月を觀ることが好きぢやあないか。

B　うん。僕は月が何よりも好きだ。そのくせ、何時も月には泣かされる。

C　あの虫の音は、何うだい。誰の爲めに、草叢の裡にすだくのだらう。生物學者は自分達の生殖の爲め、と教へるだらうけれど、僕等は、たゞそれ而已と解釋して、甘んずることは出來ないね。そこに神秘的な意味がある。あの月と同じやうに、虫の音は、我々を泣かせるぢやないか。

B　同感だ。虫の音ほど悲しいものはないが、あの音も、僕は大好きだ。

C　さうさ。虫の音は、我々を悲かせて、而かも我々を樂しませるのだ。月も同じことだ。泣かせる。そして樂しませる。僕等は、同じ物に對つて、悲しみ且つ悅ぶのだ。自分を悲しませる妻は、自分を悅ばせる妻なんだ。自分の慰めに成つてくれる子供達の爲めに、我々は心配したり悲しんだりするのだ。我々の心に、一喜一憂の波を立たせる物こそは、我々に取つて、價値あるものなんだ。B君、君が亡くなられた奥さんのことを悲しむのを見る毎に、如何に多く君は奥さんから樂まされたかを思ふよ。

B　あれが生きてゐてくれれば、共にお月見が出來るのだが、と、今もその事を考へてゐたよ。あれが存命中、幸福であつた丈け、それだけ、今の僕は不幸なんだ。塙保己一は、盲人だけれども夫婦して揃つて月見をしたといふではないか。檢校が

　花ならば探りても見む今日の月

と、吟じると、直、その妻なる人が

　十五夜は座頭の妻の泣く夜かな

と、唱和したといふ。何といふ良人思ひの妻だらう。誰もこの句を讀めば、泣かされない者はあるまい。僕は、盲人の塙保己一が、羨ましい。

A　本當にさうだ。さういふ良妻を持つた男は羨ましいなあ。僕なんか、眼玉と取り換へつこしても、欲しい位だ。

C　それは、君が滿足な眼を持つてゐるからの事さ。檢校にしてみたら、恐らく、命に代へても、眼が欲しかつたに、相違ない。

B　さうさ。あの精力家に、若し眼があつたら、それこそ、何れ丈のことをやり遂げたか分らない。これも、所謂、天、二物を與へずといふところだらう。

C　いや、或人には、二物も三物も、天は與へてゐる。つまりこの人の不幸といへば、不幸さ。幸福といへば幸福さ。盲人だ

からこそ、發憤してあれ迄の人間に成つたけれども、若し眼明きであつたら、凡人に終つたかも知れない。盲人は、一口に座頭と云つて輕蔑されるから、それを憤つて、勉強したのさ。才智だけでは、何んな才子でも名聲を竹帛に垂れる迄には、成れない。人格の奥底に、何か强いものが無ければね。

A　僕には、世人が片輪者を愚弄する理由が、毫しも分らない。矢張、弱者を蹂躪して見たい卑怯者の根性なのだらう。

B　卑怯者と弱者との持つ、殘忍性の發現だらう。大津繪にも按摩が頻にたん瘤なんか拵へてゐるのがある。芝居にも、三人片輪といふ滑稽物がある。芝居は殊に、美人や才子には常に涙を濺ぐ可く作つてあるが、片輪や水呑百姓などは、愚弄すべく滑稽の材料としてのみ、取扱つてゐる。

A　何うせ、芝居なんぞ見に行く人間に、ロクな者は無いからなあ。その位で、恰度いゝところさ。芝居では、遊蕩兒の戀愛悲劇とか、惡の讃美とか、淺薄な人情ばかり寫したものが、悦ばれてゐるのだからなあ。

C　實際、輕薄な人間ばかり多い世の中に、保己一の妻のやうな婦人は、珍らしい。僕等は名月を賞する毎に、彼女の頌德表を朗讀す可しだ、と思ふ。

B　保己一の精力主義と、この良妻の內助の功と相俟つて、眼明きも及ばぬ大事業をさせたのだ。

C　さうさ。世の細君には、第一、內助の功を爲す女と、第二、良人の毒にも、藥にも成らない女と、第三、良人の仕事の妨害をする女と、この三通りある。

A　僕の女房なぞは、不幸にして、その第三の種類に屬するものなのだらうな。家庭を不愉快にすることと、不潔にすることと、不經濟にすることゝが、彼女の三大特色だ。

C　駿馬、痴漢を乘せて走り、好妻多くは醜夫に伴ふて眠る。昔から、恁う大よその相場は極つてゐる。良い細君は、良い夫のところへは、滅多にさづからないものさ。さうは問屋が卸さない、といふのは、こゝのことだよ。惡妻を得たのは、君が良夫たるの証據と思ひ、あきらめ玉へ。今の三大特色以外に、何か取柄があるだらう。

A　取柄と言つては、何も無い。附錄としては、先刻話した蝮のお蝶の樣な、兇惡無智の惡親戚が周圍から智慧を付け、油を懸け、有ること無いこと炊き付けて、家庭に風波を絕えず起すのさ。

C　そりやあ、君に取つては、一層有り難い話だらう。何んな惡妻でも、平穩無事なら別れる機會は無いが、周圍から內訌のお手つだひをして呉れるなら、これ誠に渡りに舟だ。その中に

はいやな女房と別れる機會が、與へられるよ。バカな敵の加へる害は忠實な味方の加勢と似たやうな結果に成る。その兇惡無智な惡親戚ばらに、宜しくお禮を言ひ玉へ。

A ところが、仲々、さうは行かないのだ。惡親戚ばらの御加勢があるにも拘らず、本人は梃子でも動かない。

B 動かぬも、動くもない。三下り半ですむことだか、君、教育して改善することが出來るものなら、そんなことは子供達の爲めに、やらない方がいゝよ。

C そんなに、仲が惡くても、矢張未練があるのかねえ。

A 僕に未練は無い相だ。たゞ、子供が可愛いからだとさ。

C 下手な言分だなあ。それは、嘘に極つてる。

B 嘘さ。君に未練の無いことは本當かも知れないが、子供が可愛いといふのは、嘘さ。眞實子供が可愛くば、子供の父たる君の顏に泥は塗るまい。

C 女の云ふことは、皆な嘘さ。しかし、嘘の中に本當があるのだよ。そのいふ言葉は、嘘でもあるし、本當でもある。奧さんに、若し行く先きの宛が、有りさへすりやあ、疾つくに出て行くに極つてゐる。女は行く先の道さへ付けてやれば、金殿玉樓をさへも捨てゝ、詰らぬ運轉手のやうな男とだつても、驅落でも何でもするものだ。體の引き受け手が無いものだから、君の家にぐづ／＼してゐるのさ。

A さうだらう。それでばつかり、彼女の所謂「豚小屋」たる僕の茅屋に、小さく成つて辛棒してゐる次第なんだ。併しそんな事で、僕は好い氣で治つてゐられるものか。僕はC君みたいに、今更、惡妻に依つて、精神修養がし度くはない。何うか、一日も早く、この細ヶ難から遁れたい。

B しかし、傷ましい事だなあ。子供のあるのに、家庭を破壞するとは！君、奧さんは、君のそれだけの決心を見ても、眼が覺めないのか。

C 惡い女と、和製の萬年筆とは、修繕しても、餘り 込みはないものだ。不幸にして、之を一旦手に入れたものは、たゞ、その破れてしまふのを待つばかりだ。しかし、何んなヤクザな道具でも、上手に使ひ込めば、手慣れても來やうし、また長く使つた道具には、多少の愛着は起るだらう。

A 萬年筆は、役に立たないでも、主人に叛逆は企てないけれど、惡妻は、屢ば叛逆を謀るからね。僕は、惡妻と別れない限り、枕を高くして眠ることは出來ない。外の賊は、閉りをして防ぎ得るけれど、内の敵は防ぐ手段が無いからねえ。

C 氣の毒な話を聞くものだ。併し、全く、七人の子は生すとも、女に心を許し玉ふなよ。上には上があり、下には下がある

ことだが、八木節でよくやる小幡小平治を見たまへ。女房に博徒と姦通して、姦婦姦夫諜し合せて日頃釣好きな小平治を、釣と詐り浅香の沼へ誘ひ出した上、何も知らない小平治を泥の深みへ突き落して惨殺する、といふ筋だ。本當にあつたことか、何うか知らないが、バカな女は一つ狂へば、何をやるか分らない。まづ、朝起きて息が通つてゐるやうだつたら、お互ひに、良妻を持つた事を、上帝に感謝するんだね。何んな取柄の無い女にもしろ、小幡小平治の女房や、君の話の蛽のお蝶ほどでなかつたら、まあ〳〵我慢するんだね。女房運が悪ければ、他に何處かで埋め合せの付くことがあるさ。本當に、そんな事で、男が事業が出來ないやうでは困るからね。人間萬事、塞翁が馬、禍福は糾へる縄の如し、といふよ。女は三界に家無し、考へて見れば憐れなものだ。君がムキに成つて對手にする程の力は持つてゐない。たゞ、油斷して、鼻毛を讀まれさへしなければいゝ。

B　いや、僕が、自分のグチ交りに、塙保己一の妻の話を持ち出したばかりで、話が妙な方へ外れてしまつた。だが、僕等がこの觀月會を始めてから、もう何年目だらう。

A　二十二年に成るよ。寄宿舎の僕の部屋でやつた月見が、第一回だ。あれから、一度も中絶したことはない。よく、毎年集つたね。

B　しかし、あの時は、八人だつたらう。それが、一人減り二人減り、今この土地にゐるものは、君とC君だけだ。淋しい秋が、一年一年淋しく成るばかりだなあ。

C　それでも、まだ一人も死んだものはない。この先きへ寄ると、一人づゝ缺けて行くのだ。その時は、一層淋しいだらうよ。まだ、經驗の無い僕等には、その淋しみは、本當には分つてゐないのだけれど。

B　いやだなあ、何う考へて見ても。木の實が、枝から落ちるやうに、一つ〳〵落ちつくすとは！

C　さあ、一等先きへ、永久の眠に入る幸福者は、誰だらう。

A　君、その時は、君も、奥さんから、解放されるよ。そして、安らかな、いゝ眠りに、枕を高くして就けるんだ。

B　月も大分傾いたねえ。

（終り）

藝術の學術的考察・科學の趣味的說話

壺の話

工學博士　佐藤功一

一

壺は私の道樂です、私はこれから一種の法悅が得られゝばよいので、未だ一回と雖も壺に對して研究をして見ようと考へた事がありません。もとより、たゞ鑑賞する上にも、これに對する多少の知識は必要でせう。併し私に取つては其知識は、時代の概念とか、樣式とか、作者の名位の所で充分です。私は鑑賞に對して、澤山の知識を必要としません。必要としないのみならず、寧ろそれが美の幻想を傷ける樣に思はれてなりません。そういふ次第ですから、私の壺に對する研究は甚だ貧弱です。實は進んでお話するやうな事もないのです。併し任に當つたその光榮を思ふて、一つ話を進めて見ませう。順序がどんな事になるか、方向がどんな方へ飛んで行くかは、今私の豫知せぬ所です。

私の壺に對する鑑賞は、單に古き珍らしきを貴ぶといふ骨董的態度ではないのです、それは珍らしいといふ事は、感興を更に深からしむる基因となるものに相違ありません。勿論靑年者と老年者との間には、一方は新奇を追ひ、他方は古稀を尙ぶといふ相違こそあれ、總ての人間は此の珍しきを喜ぶといふ感情に支配されがちであります。

私は新しい道にある藝術も好きですが、また、古い藝術も好きたのです。線も強く色も鮮明て、潑剌たる氣分に充ちたもの

もよいと同時に、色褪せ角も取れ、古色蒼然たるものも美しく感ぜられます。併し單に新しいだけ或は單に古いだけでよいといふのではありません。そこには相當の藝術的價値を要する事勿論です。奈良朝時代の彫刻であるからとて悉くこれを國寶にし、現代佛蘭西作家の繪畫であるからとて口を極めて賞贊するといふやうな事は私の執らぬ所です。

　併し、今若し玆に二つの同程度の美しさを持つものがあるとするならば――假りに斯ういふ事が許されるとして――それは珍らしい方により多く心が惹かれ勝ちになるでせう。そして、それが繪畫彫刻のやうな純鑑賞を目的とするものでなく、壺のやうな或る用途を伴ふものにあつては、此の場合古くして稀なのがよいといふ事になるのは當然です。其の理由は、用途そのものが繪畫や彫刻の内容と同じ意味を持つのであつて、現在を隔つる事遠い程、其用途に關聯する連想が、現世間と絶縁せられる度が多く、從て現實に對する關心を惹起さしむる事少く、純藝術的價値を持ち得るからではありますまいか。

　私の好きな壺は新しいものよりは寧ろ古いものにあるのです、これは單に骨董的意味からでない事は既に諒解せられた事と思ひます。

二

今太塀を以て取り圍んだ庭の中に、春の光が麗かに漂つて居ります。樹々の梢に花が咲いて、柔かい風がそよそよと清香を送つて居ります。萌え出た若草の上に、五ツ許りの子供が玩具を弄ぶに餘念がない。茶の間の椽には母親が洗物の最中です。子供は無心の狀態に見える。單に玩具が子供の心の全體を支配して居る譯ではないのです、それは四邊の平和な有樣と、僅かな距離に母親が居るといふ賴みと、玩具と、是等の凡てに依つて、子供の心が眞に平和な狀態にあるのです。突然、空に鷲が現はれました、輪を描いて子供の上に摑み掛らうとして居ります。何氣たく梢を見上げた子供は、此有樣に驚いて、聲も得立てず逃込んで母の胸に顏を埋めて了ひました。子供の心の平和は鷲に依つて甚だしく亂されたのです。併し子供は、その心の亂れを直ちに母親の温い胸に依つて統一する事が出來たのです。子供の心はいつも、彼に取つては何物よりも尊い母親の胸に、安住の地を見出し得るのではありますまいか。

　私は此の子供に於ける母親の胸の如き安住の地を壺によつて得られると信じて居るのです。

　勿論、壺といつても其所には色々の形があります、併し私の

いふ壺はそんなに變化のある形のものではないのです。それは、口の窄んだ、肩から胴にかけてふつくりと丸く張つた、ちよつと見には或は簡單な形ともいひ得ませう、が併し譬へやうもなく不思議な含蓄を見せて居るものです。それは支那詩人の言葉を借りれば、「之に對しておのづから天地無韻の聲を聞く」とでもいひませうか。こういふ壺を見るときは、何とも說明し難い氣持になるのです。壺から發する愛の雰圍氣なるものがあつて、それに包まれるのではないかと疑はれる程です。壺に對して斯ういふ感を懷くのは獨り私ばかりではありますまい、自然の事物に深い感受性を有つ人は、きつと同樣な考を持つに相違ないでせう。固より私の壺に對する特殊の情緒の個人的體驗と、ものゝ大小こそあれ、壺が、私の製作の對象なる建築と全く同じ性質を持つて居るといふ、此の二つの點が、更に其根底を強めて居る事は勿論です。

口の窄んだ丸壺ならば、どれでもそうだといふ譯ではありません。それは甚だ稀ではあるが、時々斯ういふ良い作品を見掛けるといふのです。大さも餘り小さくてはいけません。また大き過ぎるのも困ります。丁度頃合なのは、口邊へ左手を掛け、胴の下方を右手で支へて、膝の上へ抱き上げる、といふ位の大きさのものです。そして色も光澤も、肌觸りもよくなければならぬ事は勿論ですが、やはり形が第一です。餘りに曲折の多い形や、巧み過ぎた姿のものはいけません。又餘りに華かな模樣の描いてあるものなどは、寧ろ幻想の自由を傷けます。

三

私は子供の時分の私と壺との關係を少し話して見たいと思ひます。

私は十四歲の時に母をなくしました。裏の井戶傍に徑一寸程の實のなる大きな梅の木がありました。夏の初めに其實が四斗樽に漬けられます、そして土用になるとそれが簀の上に擴げられて天日に晒されます。そして秋の初めになると、徑一尺一二寸許りもある瀨戶燒の赤い銹砂釉の壺、それには口の邊に黑い流れ釉がかゝつて居りました、今でも其壺の樣子をシツかりと思浮べる事が出來ます。其壺が母の手に依つて低い板間の上に持出されます。そして充分に天日に晒された梅漬が大きな盆に盛り上げられて、其側に置かれます。母は極めて熟練した手付きで庖丁を以て梅の實を縱に四つに割ります。そして、たねを去つて蓮瓣のやうになつた其肉が紫蘇の葉で包まれて壺の中に並べられ、一段毎に鹽がふられるのでした。斯ういふやうにして壺が梅漬でいつぱいになると、口にはピツタリと丸い板を

てられ、其上が礎紙で包まれて口元が細紐で結へられます。出來上つた時に母親の口邊に會心の笑が浮んだ事でしたらう。壺は軈て其の低い床の下に土を堀つて深さ一尺五寸ほどに作られた窖の中に納められます。

私が物心づいてから母親のなくなるまで、毎年きつと見られる年中行事のやうなものでした。

紫蘇卷の梅が其中に入れられて、これが密封される其の密封といふ事。それからそれが人目に觸れない冷たい窖の内に置かれる其の窖といふ事。そして永い時日其儘そこに放置せられる其の時日が待つといふ心持ち。さうすると段々に壺中の紫蘇卷にうまい味の出て來るといふその不思議さ。是等の事項は結局、母の手に依つて處理される魔法の壺、といふやうに、キット幼心に玄妙な併し乍ら温い親しみを以て迎へられたものでせう。今でも母を思浮べる時は必ず此の壺が其れに伴つて思出されます。

いたづら盛りの年齢には、よく此の壺の藏してある窖の上の低い板間で、メンコ遊びをしたものでした。鉛のメンコが揚げ板の隙間から床下に落ちこんだ時、板をあげて體を倒にして床下に首を突きこんで搜し求めたものでした、そういふ時でも此の壺にはソツトして觸れることを避けたものです、それに懼れをもつてではなく、丁度眠つて居る赤子に對する時のやうな温かい心をもつてです。

四

何歳の時の事でしたか、東京みやげに金山寺味噌を貰つた事があります。それが巾着のやうに首のくゝれた徑四寸程の壺に入つてありました。そして丁度釜の蓋のやうな形の蓋で被はれて、其上が紙で包まれてありました。私は其壺が欲しくつて〳〵たまらなかつたものです、そこでコツソリと内の味噌を別の器物に移して、綺麗にそれを洗ひ上げました。酷く母に見つかつて大いに叱られたものでしたが、併し壺は自分のものとなつて如何に處理しても差支ないといふ事が許されました。嬉しさに壺を持つて座敷の中をおどり歩きましたが、思はずも柱に打ち當ててヒヤリと息のつまるやうな氣がしたのでやめました。金山寺味噌の壺には幸に何等の疵も付きませんでした。大切に布に包んで抽出の中に入れたり、或は箱に納めて戸棚に入れて見たり、紫雲英(レンゲソウ)の花を插して佛壇に飾つたり、採つて來た鮒ドや鰲魚(メダカ)を泳がして椽先に置いて見たりしたものでした。遂には鉛のメンコや呼ぶこの笛など、容積の小さい金屬製の玩具を其中に納めて、土藏の傍の自分の庭、そこには裂の林から採つて來た小さい

階園だの白百合などが植ゑてあつた自分の庭に埋めました。そして其上に小さい山を築き前には池を掘つて、杉や松や楡などの芽生を植ゑました。なんでも近所の子供達を呼んで來て、何か儀式のやうな事をして、あとで物をたべたやうにも思はれます。

池と山との間には鳥居や幡などを建てたのですから、昔しの人の陵墓や祉などを築く心持ちと同じであつたのでせう、そういふ書物を讀んで居つたとか、人から話を聞いたとかいふ事はなかつたのですから、斯ういふ行爲は子供の頭に自然に發する思想に基くものなのでせうか。

斯ういふやうにして壺は地中に埋められました。そして日々其前に來て考へる事は、壺と其中に納められたものが、どんなふうになつて行くかといふ事でした。斯の考が段々高じて來て、遂にはどうしても堀出して見なければ氣が濟まなくなるのでした。そして壺は一ケ月とは土中に埋められてありませんでした。

其後此の壺がどうなりましたか、全く記憶に殘つて居りません。

兎に角金山寺味噌の壺が、幼年の私には何物にも代へ難い寶物であつたのです。

桃山期あたり茶の全盛時代に、舶來の雜器、それは口の惡い人から素性の知れないといふ蔑詞を以て呼ばれる雜器が、茶入や水指や抹茶茶碗などに用ゐられて頗る珍重され、遂には金襴や其他の名物切に包まれて、幾重かの箱に納められるやうになつた事なぞは、子供と大人との相違こそあれ、同様の心理に基くものでもありませうか。

五

これも子供の時でした、裏の畑の鐵道の土採場の跡で遊んで居つた時です、粘土を捏ねて種々の形を作つて居りました。夕方になつたので家へ歸つた時、唯一つ粘土を徑一寸二三分に丸めて、球形に作つたものを持つて來ました。そしてそれを臺所の土間の隅へ置いて遂に忘れてしまひました。大分時日が立つてからカン／＼に固まつた此の球を其所に發見しました。たいへんに愉快に感じて、これをもつと固くしやうと試みました。丁度夏の初めで製茶をして居る時でした、私は此の粘土の球を、其の製茶用の焙爐の中に焚かれる藁火の中で燒きました。燈火が付いてから餘程過ぎてゞなければ其の日の製茶の切りがつかぬものでしたから、さぞかし待たれた事でしたらう。作業が了てから、まだ眞赤に燒けて居る球を下男に取出して貰つたのでした。ほとぼりが冷めてから堅く燒き締まつた球を握つて成功

に喜んだ事でした。

これに經驗を得て、此度、壺を作らうと企てたのでした。壺といつても徑二寸程のものでした。併しどうして形を作つてよいか解りません、種々工夫をした結果、硝子のインキ壜を粘土で包んで見たのですが、こうすると乾かす時粘土に罅がいつてうまく行きません。それで結局指先きで撮んでどうにかこうにか拙い形のものを二つ作りました。火に入れましたが乾燥を急いだ爲めか、粘土が密でなかつた爲めか、割れてしまつて成功しませんでした。その内製茶もすんでしまつたから、それぎりになつてしまひました。

中學以後はなぜでしたか殆ど斯ういふ遊びをしませんでした。壺の製作は二十六歳の時に成功しました。それはM縣へ赴任した時です、丁度縣では陶器の試作場を縣廳の傍にたてました。係りの役人が知合の人でしたから、そこに行つて種々の試みをしました。尤もそれは陶工にやつて貰つたのですから、眞に私の製作だとはいへません。併し意匠の製作と監督とには私が當つたのですから、此の點から見て、それは私の藝術だといはれぬ事もないでせう。

建築物の製作が丁度此のやうな過程を執るのです。建築に綜合藝術といふやうな名を冠してよいかどうかは知りませんが、建築に限らず如何なるものでも、一人の手で何から何まで處理する事の出來ぬやうな物の製作は、皆斯ういふやうに意匠圖案と監督だけが主たる技術家の手に據てなされるのです。繪畫や彫刻にもこういふ場合がありませう。陶器に於ては、大量製産を目的とする雜器の製作を別として、鑑賞を主とするものだけに就て見ても、斯の如き方法に據て製作される事が多いでせう。

仁淸の作には、外形から肉の厚さ、釉から上繪（ウハヱ）に至るまで、總てが機能的に一體として纏つて、其間寸毫の反逆も妥協も見出されぬものが多い。これは確かに藝術家仁淸が全心を打込んで、轆轤から施釉、上繪から火加減まで、悉く自分でやつたものなのでせう。或は仁淸はよい轆轤師を持て居たともいはれますが、それにしても其轆轤師は徹底的に仁淸の心を諒解し、殆ど仁淸の分身といつてもよい位の人であつたのでせう。量の大きいもの、或は製作方法の複雜したものは、どうしても一人の手では出來兼ねるものです。それは多數の人の共同作業にまたねばなりません。此の際其の中心となる指導者は必要です。そして各自の意思の疏通と製作に對する熱誠と歡喜とがあれば、そこに立派な作品が出來上るのです。昔しはこういふ場合に共の作物には其指導者の名だけが冠せられたものでしたが、今日の時勢では最早段々と、そういふ事が許されないやうになつて

來て居ります。

六

壺はいろ／＼の材料で作られます、銅製のものもあれば鐵製のものもあり、なほ他の金屬を以ても作られます。併し今私の茲にいふ壺には、斯ういふ種類のものは入れないのです。それはどこ迄も陶製のものに限るのです。

金屬は到底固く冷たいといふ屬性を取去つて考へる事は出來ません、それ故どんなに良い形に作られた壺でも、それからふつくりと柔かな感じを得る事は出來ぬものです。

埃及や支那には蠟石を刳りぬいて作つた壺があります。是等蠟石の壺は肌觸りも柔く、特種の趣がないではありませんが、厚手にしか作る事が出來ず、表面に彫刻せられた模様なども、壺そのものとしつくり合致しません。

希臘や羅馬の大理石の壺には中々良いものがあります、が併し私の考ふる所では到底陶製のものには及びません。

和名抄には、木製を壺、瓦製を坩といふ、とあつて漆器で作つて飯を盛るものを壺といひ陶製のものを坩といふやうにしてありますが、なぜ斯んな事をいつたものか解りません。私の貧しい知識では支那の書物にそういふ事の書いてある事をまだ知りません。

說文の段氏の注に據りますと、文字「缶」の條下に「古者、昆吾作レ匋、壺者昆吾始爲レ之」とあります。要するに壺は初めは瓦陶製で、後に鑄作のものが出來たのです。支那では周秦漢の時代には銅の產出が著しかつた爲めに、陶業が全く廢止されたといふ譯ではなかつたのですが、貴人の用ゐた器物は壺の類に至るまで、悉く銅で鑄造されたものです。

陶製の壺には陶製特有の形があり、鑄造の壺には鑄造特有の形があります。壺類が一度鑄造に依つて或る形を採つて後は、陶製の壺も亦この銅器の形を模倣するやうになりました。そしてそれには中々精巧なものが出來て來ました、が併し私の好む壺の形は、寧ろ銅器の影響を受くると少なければ少ないほど良いのです。

七

要するに、陶器は壺である時に最も良い藝術品であり得、また壺は陶製のものが最も玄妙な趣を持つものです。

發生的に見て、陶器の起原が物を煮る爲めの壺(ポット)であつた事は、今や公知の事實です。今日知らるゝ所では、それは新石器時代からのものです。そして人間の最初の作物が、盤も、壺も、

小舍も、それが大自然の要素なる、日や、星や、露など、同じく。又本能に依つて作られる、海狸の棲家や、鳥や蜂の巣などと同じく皆丸いものであつた事は、決して偶然な事ではないのです。壺は轆轤で作られる以前から既に丸るかつたものです。

總ての藝術が功利的の起源を以て居るといふ事は、今日立派に説明せられる所であります。そして此の功利的の目的は、殆ど何のやうな場合に於ても宗教的か、或は寧ろ魔術的の目的と混合せられて居つたものなのです。原始時代に於て最初の壺作り達ちは、魔術師であつたといひ得るのです。埃及人やカルデア人、希臘人やシシア人などの神話の物語るところに據れば、壺は神々の中の一人が天からその寵愛する種族に齎したものだといふやうになつて居ります。

古い時代に於ては——現今原始的生活を營んで居る民族の間に於ても——壺作りは他の家庭工業と等しく女の手に據てなされたものです。

そこにこんな話があります。それは女が或時魚を採りに籃を携へて河へ出掛けました、偶然にも籃を河中の粘泥の中へ突込みました、そのために籃の外に泥がすつかり塗り付けられたやうに附着したのです。魚を入れて家へ持ち歸て中に水が殘て居るのに氣がつきました。斯ういふ度々の經驗から、遂には殊更に籃に粘泥を塗り付けるやうになつたのです。こうした籃を小舍の隅に放りばなしにして置きました。いつか泥が乾いてカチカチになつて居りました。何等かの拍子に此籃を火中に投じたのです、すると籃は燒けて灰となつてしまつて、後には立派た壺が殘りました。

これはほんのローマンスです。併し今でも日本に、斯ういふ壺、それは内部に籃目が立派に付いて居る壺で、古く南蠻から渡つたものとして珍重されて居るものがあります。恐らくは現在まだ此の製作方法が世界のどこかに殘つて居る事でせう。

人類は進化の極めて初步にあつた時代、瓢を發見してそれに水や其他の食物を容るゝ事を知つた、壺は瓢から進化したものである、と斯う說く人もありますが、また他方には、物を容れ得るやうな大きな瓢は其のやうな古い時代にはなかつたものだといふ學者もあります。

土で作られた壺が、それが火で燒かれるやうになる前、相當に永い期間、たゞ日で乾かして固くされただけで、穀類の貯藏の爲めに用ゐられて居つたものだらうともいはれて居ります。

八

陶器の製法が發見せられてから最初の間は、小さい雜器類は

たゞ指に依つて作られましたが、相當に立派な壺などの製作には、段々と斯ういふ方法が用ゐられるやうになりました。それは、草で編んだ圓座のやうなものが地上に置かれ、人は其前に腰を下ろして、足で緩やかに此の圓座を動かし乍ら、圓座の上に置かれ・陶土を指と篦とで處理して、壺を作るのです。粘土は初め掌の間でまろばされて細い紐のやうに長く延ばされます、そして此紐形の粘土が圓座の上へ圓く螺線形に重ねて行かれる事に依つて、壺の大體の形が出來るのであつて、それを更に指と篦とで處理するのですが、表面を平滑に仕上げるには、掌で輕く摩擦するのです。

斯のやうに圓板の上に陶土を置いて、足で緩やかに廻す方法は、現今でもアルゼリアのカビル人の女達に依つて行はれて居ります。勿論此の圓座を工夫する以前には、平たい玉石の如きものが用ゐられて居つたに相違ないと想像されます。此の圓座が軈て中心に心棒を持つ事になり、それから轆轤が出來たと見るのが至當でせう。

これで最初の形は出來上りました、次ぎに燒きかたはどうであつたか、初めは單に焚火の中で燒かれたもので、やがて極く原始的な形の窯が出來ました。そして燒きあがつて出來た壺の色は、褐色か赤色のものが普通で、しかも不完全な火加減に依つて燻ぶされて、灰色或は黒色になつて居ります。

是等の最初の階程が過ぎ去るまでには、これも亦相當の時代を要した事でせう。

勿論、原料たる粘土に付ても、其の選定、篩別け、捏上げ等に段々研究が積まれて行つた事でせう。

出來上つた壺は、最初の間は其面が餘りに平滑で把持しにくかつた筈です。そこで是等を握り易くし、取扱ひに便利にする爲めに、首の縊れや、表面の切刻みを付ける必要が起つて來ました。尤も、よく古代の壺に見られる首の所にいくつも輪を嵌めたやうに付けられた刻線は、携帶に便にする爲めに首を紐でぐる〳〵と結いた、其の紐にかたどつて出來たものであり、胴に縱や斜に付けられた線もまた、同樣の目的を以て底から胴にかけ一紐を掛けた、其の紐の模倣であるとの說をなす人もあります。說の眞僞は兎に角として、斯んな風にして段々模樣が付いて參りました。

或る製作物に對する技巧の習熟は、やがて此の因習的手法を他の材料の上にも繰返へすやうになつて行きます。これが藝術進化の過程です、斯樣にして陶壺に網細工模樣が施される事になりました、これは全く裝飾として附加されたもので、斯ういふ裝飾の根元は、もと原始人が自分を他の人々より立ち優

見させようために、其簡弱に施した粉飾にあるのです。壺の裝飾には次で動物の線刻、浮刻などが用ゐられるやうになつて來たのです。

又一方に於ては把持の必用から壺に把手の發達があります。把手は概して肩に付けられます。そしてそれは所謂斗の形であるか、或は茶壺によく付いて居るあの形です。中には天狗の假面の鼻のやうな握りになつて居るのもあります。

陶壺の色彩裝飾は、それは粘土を燒くときにその粘土の種類に依つて、或は白、或は赤、或は褐色になる事を經驗に依つて會得したのに初まるのです。そして或る粘土で形を作つたものゝ上に、他の粘土で模樣を描いて燒いたものです。

古いところでは王朝以前の埃及に此種の立派なものがあります。王朝以前といふと、ペトリイ教授の算出に據れば紀元前五五四六年以前です、尤も獨乙學者達の主張する所では紀元前三四〇〇年以前といふ事になるのですが、隨分古いものです。船や紅鶴などを描たもので中々よいのがあります。西亞細亞のカルデヤのものは少しスチップですが強い味のものが見られます。クリート島のものには百合の花や鮹の形を描たものでそれは柔か味のあるたまらないものがあります。希臘のものになると餘りに精巧で妙味がなくなります。

此種の製作は支那にもない事はないのですが、先にも述べた通り、順序として恰度此種のものが發達す可き時代にあたる周秦漢あたりには、銅器の製作が著しくあつて、世界的に銅器のよいものを出して居るだけ、それだけ此の種の陶壺のよいものを生じませんでした。

九

釉藥掛けは前者に次で初まるのです。其の起りはいつ頃であるかまだ確定して居りません。今日の智識では先づ此の時期を古代埃及としてあります。そして釉藥は陶器に應用される以前に、硝子として鎔かされて居つたものです。

支那の施釉陶器が獨特の發達をなし、世界に冠たる地位に進んだ事はいふまでもない話ですが、これとても其釉藥の最初のものは、漢末羅馬と交通した頃、西域地方から傳習を受けたものである事は、支那陶磁史の研究者ホブソン氏等の說く所です。

羅馬帝國沒落以來、歐洲では陶器は羅馬帝國の偉業と共に忘れられて、しかもなほ製陶術は極く簡單な狀態で命脈を保つて居りました。そして埃及や所謂近東地方は、彼等の榮光ある過去の壯麗なる陶器を、これよりも墮落した形で繼續し、釉藥や彩色の陶器はなほ傳來の方法で作られたのです。

此の暗黒時代にビザンチン文明と波斯人とは他の文化に於けると同様に陶器に於ても重要な役目を演じたものです。そして昔のカイロやアレキサンドリヤやダマスカスやアナトリア共他に於て多くの興味ある陶器を産出して居ります。回教徒が是等の地方を征服してサラセン文化が花咲くと共に此の事業は益々發展を見まして、共の進んだ製作法は西班牙と南佛蘭西からして歐洲にも入り込んだのですし、東の方は印度へ、恐くは支那迄も傳つたものでせう。

共の間に東洋に於ては世界最大の製陶種族たる支那が、静かに力を集めつゝあつたので、遂に彼等の釉薬掛けの堅焼の陶器から、中世紀の世界の驚異の一たる驚嘆す可き白色半透明の磁器を産出するに至つたものです。

日本に於ては喫茶の隆盛が特種の陶器の發達を促しはしましたが、磁器に至つては全く支那製の模倣といつてよいでせう。

私は壺の歴史を述べる積りで、餘りに陶磁器の發達史に沒頭してしまひました。

以上述べ來つたやうな理由に依つて、旋釉陶壺の良いものは、サラセン人や支那人の作にあるのです。

十

「つぼ」なる言葉は「つぶら」から出ておるらしく、口の窄んだ胴の圓く太い陶器を指すのがほんたうです。私の好む形こそ、ほんとうの壺です。一寸聞くと簡單な形ですが、共高さと徑との關係、口のつぼみ具合、底の太さ、それからもつと大切な事は共周邊の線如何にあるのです。言葉を換へていへば胴の張り方が大切な所です。

此の種の壺では日本のものに良い形のものは少い、殊に茶道の流行は、共基調をなして居る「わび」といふ精神から、殊更に歪ませる事をやつたものです。所謂、河濱の器皆苦窳ならずで、陶器は依然として形の纏つたものがよい筈です。然るに或茶趣味の人たちは、一見形の調はざる如くにして共間一種の趣あるのを良いといふ事にしたのです。共精神は確かに諒解出來ます。併しそれは偶然に窯の内で歪んだのであるか、或は名匠の眞の法悦の心境から「かんどころ」が捉へられたといふやうなのは暫く問はず、斯ういふ小利口な技巧は何事に於てもそう成功するものではありません。初めは良く見えるかも知れませんが、一寸見に良く見えれば見えるほど、軈てそれに比例して反動を惹起すものです。仁清あたりの作になると良い壺が見られぬ事もありません。併し彼の作は餘りに纏り過ぎて居ります。或人は殿堂を建るに際して、殊更に形を小さくして、これを

の隙もないやうに完全ならしめやうと努めました。仁清の藝術がまた此の行き方です。其所には貴公子のやうな洗練がありませう、が併し、おのづからなる綽々たる餘裕がありません、從て大きな味をこれに求むる事は出來ないのです。

日本に來て居るものでは、支那の古い所のものにどうしても良いのがあります。



(第一圖)

十一

話がだいぶ長くなりましたが、私は自分の持て居る壺について少し話をして見たいと思ひます。

第一圖に掲げました寫眞は、私の所有して居るものゝ内で最も好きな壺です。

其の地(チ)は赤味を帶びた石板色とでもいひませうか、肌理(きめ)は極めて細かに色こそ黒けれ磁器に近いものであります。肩の所に三本の帶があつて、各帶は三本宛の紐形になつて居り其の帶の間は上から二間(フタマ)だけに釘刻りの模様があり、第一第二の帶の間に把手が附いて居ります。上釉(ウハグスリ)は丁度第三の帶の所まで掛つてそれは鉛質の半透明の緑褐色ですが、永い年月のために變化を受けて光澤を失ふた部分が點のやうになつて現はれて居ります。高さ九寸三分、口徑二寸八分五厘、底徑四寸五分、

胴の最大徑は第三帶の下の所で、約一尺弱、日本の桝で丁度八升の液體を容れ得る大さです。そして頗る薄肉に出來て居ります。

これは勿論支那の古墳からの發掘物で、ホブソン氏に從へば明かに漢窯であります。これも亦支那陶器殊に漢窯通のラウファ氏の著書の一つなる「支那に於ける磁器の本原」といふ書物には、私の此の壺より少し小形ではあるが、これと殆ど同形のものを掲げて、「罍形の壺」と解說し、時代を西暦第三世紀としてあります。

罍とは雷文を描いた缶で、酒を容るゝもので一斛の量を盛る定めだそうです、今日支那から燒酎を入れて來る絲褐色の釉で、上に泥繪具を以て裝飾文樣を畫いたあの壺には、やはり罍字を當つべきものではないでせうか。

罍字の缶の上にある畾 雷と同意です。ラウファ氏の掲げた寫眞の壺には波形模樣しか附いて居らぬのですが、私のものには連續した雷文が附いて居るので一層面白い氣がします。

時代が素朴率直であれば、藝術にも其特質が表はれます。形を見ても如何にもそういふ時代の製作である事を思はせます。そして如何にも大樣でゆつたりした形であり乍ら、キチンと引き締つて居ります。圓滿具足の天平佛の體貌をしのばせぬこともないが、そう考へるよりは寧ろ、立派な體軀を示そうと——これは原始時代から男子の矜りであつた——體を反らして昂然と胸を張つた形と見るがよいでせう。壺の胴は上から第三帶のあたりを頂點とした双曲線を描いて居ります。其頂點に對する所が、恰度、筋肉豐かな勇者の胸を張つた、其の乳の所に當ります。如何にも沈重にして安全に、用心深い靜止の感を與へて居るではありませんか。しかも嚴格に流れず冷酷に失しないのは、口元に至つてずつと曲率を增して、ふつくりと柔かい肩を形作つて居るからです。又一面から觀察すれば、口から胴へ掛けて三節だけ强調に、そして胸から底へ掛けて曲率も緩漫に長く引延ばされた形は、音樂的に「リテヌト」を語て居るともいふ事が出來るでせう。

胸から上の凸部の三帶は、ちやうど廻轉して居る獨樂のやうな水平の旋動を暗示すると同時に、張り切れさうな胴の曲線を求心的に引締めて居るやうにも見へます。

また水平線は人類のあらゆる精力をゆるめる深い休息の線でもあつて、これが此の壺の樣に繰返へされる時は、ちやうど建築の蛇腹のやうな獨特の情調的景趣を與へると同時に、重さと荷重の印象を惹起させるもので、安定な、そしてどつしりと大まかな樣子を與へます。



(第二圖)

第一段第二段の雷文は、第二圖に示した通り、ちよつと見には昆虫の形のやうですが、その脚のやうになつて居る三本の線は、鐘鼎古文などの气或は雷を意味して居るのかも知れません、そして或は此のやうな動物の形で雲雷を一つの生物として象徴して居るのでもありませうか。

現に角第二圖の(a)にあるやうな模様は、左から右に進で行く波浪の大うねりのやうな感を起さすものであつて、前進的運動を意味する此のやうな線は、常に精力の旺盛な元氣を暗示するものであります。しかも此の音律的進行の線が、靜かな休息の水平線の間に置かれて、謂ふにいはれぬ佳調を奏でゝ居る事は、誰しも直ちに氣の付く事でせう。

是等の形式は孰れも、よく見せんが爲めに殊更に企てられたものではなく、それは根原に於て魔術的――宗教的？――意味のあるもので、それが陶工の無關心な手に據つて、歡喜を以て製作されたものであるが故に、此のやうな効果をおさめて居るものと見てよいでせう。

把手は、此時代の壺に特有な、獸面から成つて居ります。多くの場合、それは獅面でありますが、この壺のものは羊のやうであります。

横から眺めて口が見へずとも、内がうつろであるといふ共事が壺の面白味であつて、如何に外形が調つて、表面裝飾がしつくりと其の形に當嵌つて居るにしても、それが質量の充實したものであつては、決して私の要求に應ずる事は出來ないのです。

凡て物體の形に機能に依て作らるべきものであつて、一個の物體がそれに內在する自然的機能を認めさせる事の多い程、形と機能との一致を求むる人間自然の要求に、愈多く迎合するのであります。即ち、此の壺が內に酒を盛るといふ機能があつて、

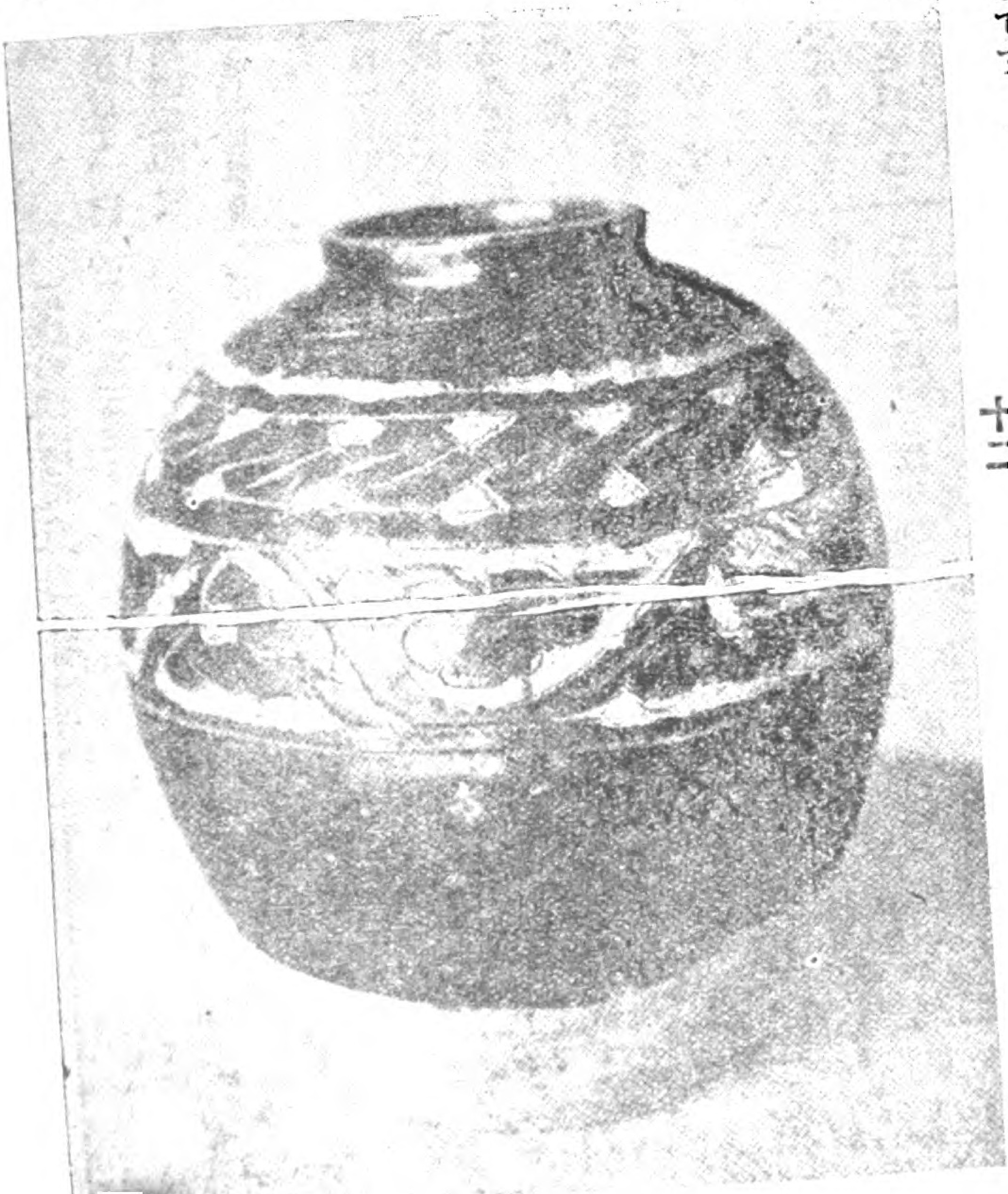
其の形式が丁度其の機能と一致して居るからよいのです。この酒を盛るといふ事は壺の內容です。其の形や線や色は壺の形式です。そして、その內容から來る連想に依つて生ずる媒介(メデ)的反動(エートリアクション)と、形式から來る連想に依つて生ずる自動的反動(オートマチックリアクション)とが、しつくりと一致した時に、法悅が得られるのです。

そしてこれが古代の壺であるときには、この媒介的反動が印象として吾々の心の內に現世間と全く絕緣して感ぜられるから、それが名畫や名彫刻などの所謂純藝術品と、全く同一の價値を生ずるのであるが、これが若し新しい壺であると、如何にその形式が整ふて居つても、用途其の他の關係から、現世間との絕緣の度がうすく、直ちに現實に對する關心を惹起しがちになるものです。それ故に純藝術としての價値を有せぬ事になるのであると、自分は斯う信するのです。

今玆に二つの壺があるとします、そして若し兩者が同じ程度の形式美を持て居るといふ事が出來るならば、兩者の內どちらか、時間的にも空間的にも現在から遠いもの丶方が比較的鑑賞的價値を持ち得る事になるのです。日本のものよりは外國のもの、新しいものよりは古いものがよく見へるのは當然です。

話しが餘り議論になりました。こんどは第二番目に私の好きた壺を話しませう、

十二



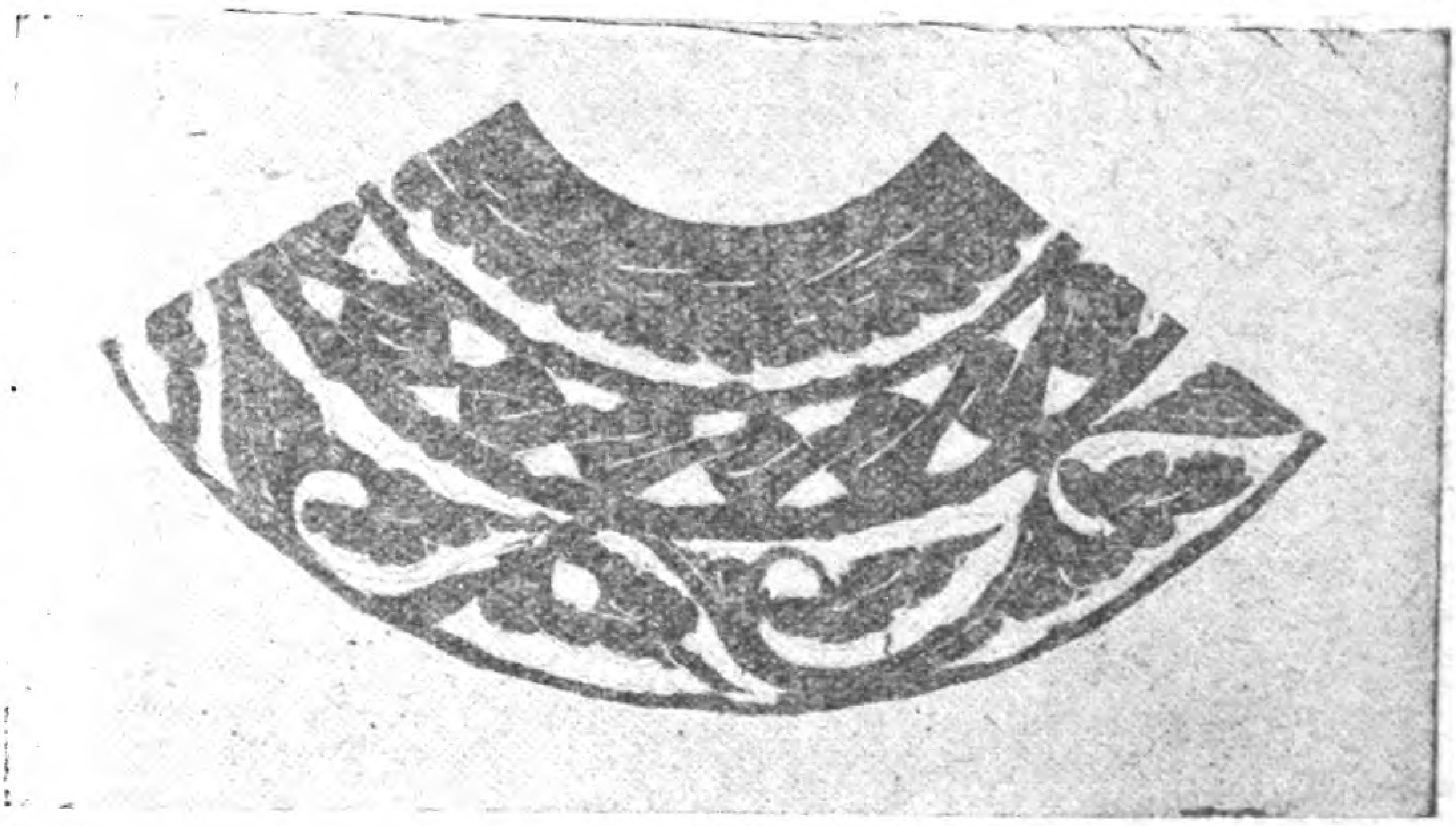
(第三圖)

第三圖に掲げたものが、私の第二に好きな壺です。

これは素燒の上へ黑釉（日本でいふ天目（テンモク）ぐすり）を掛けて、窯に入れぬ前に引つかいて模樣を現はしたものです。所謂宋窯の、定州産であるから黑定窯と呼ばれる、それでないかと思はれます。

特に說明を用ゐずとも、それが磐の形式である事は一見明瞭でせう。高さ八寸五分、口徑三寸、底徑三寸八分、胴の最大徑は七寸六分、容量は四升弱です。前の漢窯の壺から見れば形は劣つて居ります。胴から口に掛けて三つに別けられた、其の最上段が雲の形をなし。二段目が雷紋、といふよりは寧ろ電光形。三段目は波形の間（アイダ）に葉を入れて、唐草模樣になつて居るのです。この圖は別に第四圖に示して置きました。

これも第三帶の直下を頂點とした双曲線（ハイパボラ）で下半身が成り立ち上半身は寧ろ拋物線（パラボラ）をなして居ります。第一段は雲形とはいひ乍ら、表れて居る素地の部分が甚だ少く、第二第三の段に模樣があるから、其の行きかたが先に掲げた漢窯とは全く反對であります。そして此の模樣は第四圖に示したやうに、第二段目の電光形は、節距（ピッチ）の短いだけ、且つ折曲の度の多いだけ、強い潛勢的活力（ポテンシアル、エナージー）を有し、若し押へが取去られたら、ブンと押し伸びやうといふ活潑な行爲を暗示して居るではありませんか。此の第二段の强調に對して、第三段のたゞ山と谷からなる緩い波形は、柔い靜かな運動の享樂的滿足を表はし、これから移り行くなだらかな底に至る周邊の曲線は、これもまた音樂的に强く早い調子から緩漫に長く引延ばされて行く「リテヌト」を語て居ります。そして第三段のうねりの線の間の唐草は、うねりが餘りに滑かに行き過ぎるのを引き締め乍ら賑かさを附加へて居ります。



（第四圖）

第五圖に掲げたものは、これも私の第二に好きな壺です、この方は寧ろ前の黑定窯よりは私を喜ばしめるものです。それは前者より形に於て丸味が多く、ふつくりと、強く胴が張つて居



（第五圖）

る理由からでせう。高さは前者と同じく八寸五分ですが、口徑は前者の三寸に對して此の方は三寸四分で大きいのに、底徑は前者の三寸八分に對して三寸二分で小さい。卽ち前者は口徑よりも底徑が大きいのに此の方は逆になつて居ります。胴の最大徑は八寸です。此の數字を見ると容量は前者より多くありそうですが、底の窄んで居る爲めに前者と同樣約四升を容るゝだけです。

形式からいふと、前に擧げた兩者よりも新しい要素が多い、其重なる點は胴から底に掛けて双曲線は描かず、漸變曲線（インフレクション、カーブ）を以て居る點にあります。また胴の全面を被ふ唐草の裝飾的手法も、前者よりは餘程知的であります。卽ち全般として餘程技巧的になつて居ります。質は磁器に近く、模樣として大きな寶相華を三方に顯はし、模樣を浮出しにして地を篦でかき取つて、模樣を白く地を灰褐色にして、上には少し黄味を帶びた透明な彩がかかつて居ります。此の浮出模樣は繡花と稱へられるもので、本邦では此の形式を浮牡丹と呼んで居ります。

これは定窯か然らずんば磁州窯でありませう。時代はどうなりませうか、此種のものは古くて宋であります。此の壺も或はそんな所ではありますまいか。用途はやはり酒器であつたやうに思はれます。餘り詳くなりますから此の壺の說明は此の邊でやめませう。

十三

次ぎに氣に入つて居るものは、俗にいふ繪高麗の壺です。繪高麗といつても朝鮮のものではありません、もと高麗ものとして朝鮮から渡來したので斯らいふのでせう。それは純白な釉を施した上に、鐵釉を以て黑褐の線で模樣を描いたものです。始源は宋代の定窯にあるのでせう？ 其後各地で燒かれたやうです。滿洲にも朝鮮にもあります。朝鮮のものは其品質最も劣ります。私の今玆に擧げた繪高麗の壺は、高さ一尺程の口が比較的大きく、底のつぼんだ、歐米人のいふ眞珠(パール)形のもので、肩のところに捲莚の模樣があり、其の直下から底までを縱に二つのパネルに分け、一方のパネルには鳳、他のパネルには龍を描いたものです。その筆法によつて僅かに宋あたりのものだといふ事が想像されます。

次ぎに好きなのは、高さ六寸八分ほどの色繪柿右エ門の對の壺です。乳白色の釉を持つた磁器で、菊と梅と孔雀の紋樣が附いてゐます。日本陶磁器に明るい大河内君の說によれば初代柿右エ門の作だらうといふ事です。この對の壺には偶然別々に得たものであつて、此所には面白い遊戲的な物語があるのです。

次に好きなのは古九谷の壺です。これは高さ八寸許りのものを三個持つて居ります。惜しいかな二つには疵があつて、その最も良いものには最も大きな疵があります。疵が鑑賞的興味を傷けることは、致しかたの無いことです。これは單に感覺的の喜びを求める陶磁器に於て殊にそうでせう。

其の次に好きなのは和蘭のデルフトの壺です、デルフトとは陶器業者の多い市(マチ)の名です。十七世紀のデルフト產の染付（藍繪）陶器は、歐洲に於て頗る賞讃せられるものです。私の今玆に擧げたものは、高さ八寸五分程のものです。薄い、ムラの無い極めて平滑な純透明の釉の下に、コバルト色の模樣の浮び上つて見えるやうすは、到底デルフト窯でなければ見られない味です。

支那の古染付の磁器は、明代のものであつて、それはこのデルフト窯の模倣の中心となつたものであるだけ、實は一層立ち優つたものです。二三此の古染付の壺を所持して居らぬ事もないのですが、人に語る程のものではないのです。

このほかになほ、朝鮮とか南京赤繪とか若杉九谷とかの壺を持つて居りますが、形は殆ど一律です。大さも高さ六七寸以上一尺に至るもので、それは、左手を口に掛け、右手を底近き胴を支へ、膝の上に抱き上げるに都合のよいのを程度とします。

十四

閑靜な室の卓上に壺を置く。それも數多くてはいけません、唯一つだけに限ります。そして其の一個の壺を靜かな心でヂット見入る。此の場合光線が重要なる關係をなします。正面光線で眺めるのが、最も感情を平凡にしてしまひます。餘り强くない側光線か、そうでなければ寧ろ裏光線がよいでしやう。表面が平滑にてら／＼とした釉の掛つて居るやうなものは、此の裏明りで見る方が最もよいやうです。それは壺の肩のところから胴の兩周緣へかけて、細くハツキリと明るく、其の間に挾まれた廣い中央部は、一樣に淡暗く陰になつて、其の内に一點何かの反射の强く光つて居る時などの効果は、名狀し難い美しさを持つものです。如何なる表面を持つ壺にも良い明りは、二方光線です、勿論一方の窓を正面にして坐して其の間に壺を置き、一方の窓を左右孰れかに置き得るやうな室でなければいけません。此の場合左右兩側の内、窓のない方に當る壺の胴は細く强く輝いて、窓ある方の胴は廣く柔な光をあびます。そして其の兩者の間にそれほど暗くもなく、またさして明る過ぎるといふ程でもなく、壺は全體として最も丸味を帶びて見えます。

次は位置ですが、それは、餘りに見上げの形は全く口元を覗ひ隱くして、それが壺であるといふ事即ち中空であるといふ感を起さしめず、恰度窓なき建築を見るやうで、良い効果を得難いものです。又餘りに見下ろしの形は、壺の丸みを充分に顯はす事は出來ますが、上部のふくらみが當然足元を隱すことになつていけません。最も良い位置は、恰度口元が橫に細い楕圓に見えて、其間から僅かに内部の陰を覗き得る程度のところです。

支那人は巧みに壺の形に合つた紫檀の臺にのせるものですが、形の丸味を持つた壺には、所謂飾脚のものが最もよい効果を齎すものです。それは底を宙に浮かして――しかも何等安定の感を傷ることなく――益々含蓄を深からしめるものです。

私のいふやうな壺は普通の床飾にはむきません。日本座敷なら寧ろ琵琶床に置く可きものでせう。

しかしほんとうにこれを鑑賞する時は、先きにも述べたやうに閑靜な室の卓上に置いて、どの方面からも見られるやうにし、光線の最も良い場所に椅子を置きます。壺一つを總てのものから絶緣して眺めるのですから、距離が餘りに遠くてはいけません。そうすると壺は室の他の物と相關聯して、單に一裝飾物となりがちのものです。六尺以上を隔てぬ方がよいでせう。成る可くならば、體を前へ曲して腕を延ばせば手が壺の口邊に屆く位置に安樂椅子を置いて、椅子の背に倚りかゝる姿勢を

此の場合眼と壺との距離は四尺位になるでせう。そして靜かな心でヂツトそれに見入る。その折、壺の意味ある形から喚起せられる美的情緒は、看者を總ての現實から引離して、深い恍惚に誘はないでは置かぬものです。總て徐ろに身を起して、壺に手をかけ、其を膝の上に抱上げる、その觸覺と重みの感じ、それから來る齎へやうの無い喜びは、私のやうに壺を熱愛するものでなければ、或は想像も及ばぬ事かも知れません。

十五

よい壺を得た時の喜び、店の者がお宅へお屆けしませうと言ふて呉れても、到底その時間を待つことが出來ず、自分で携へて持ち歸る事があります。こんな場合には、車上に於てどうしても包紙を解いて中の寶物を出して見ねば、氣が濟まぬ事があり勝ちです、若し斯ういふ折に、傍に人があつて其容子を見て居つたなら、餘程不思議に其の人の目に映ずる事でせう。

歸るや否や、壺は直ちに書齋の卓上に置かれます。そして茶を飲み乍ら、家族と共に此の新しい壺を中心として暫く閑談を樂しみます。そして恰度、子供が新しい玩具を得たとき、それを枕元へ置いて、翌くる朝眼を醒した時、直ぐそれに見入る事の出來るのを樂しむと同樣の心理を以て、屢々これを床間の卓上に置く事があります。斯ういふ場合にはよく斯んな事が考へられます。それは、この壺は勿論製作者其人の藝術品だ。併し此の壺を選擇して此所に持來す迄の行爲は、私の全魂を打込んだ藝術だ。且つ蒐集した是等の壺全體部の綜合は、私の一つの藝術的作品だと。

併し乍ら、集められた壺は、たゞ全體が雜然と並べられただけでは、其所に起る感興は割合に薄いものです。それは飾棚の中に、色と形と、それから配置を工夫して置いたか。或は大きな室に廣く距離を隔てゝ、或は高い臺、或は低い臺に、非重な取扱ひを以て置かれたかする場合でなければ、鑑賞上の效果は得られぬものです。此の場合其所にはたしかに取り〳〵の形と色の綜合が美觀を惹起します。それは全體として私の一つの藝術的作品に相違ありません、然しそれは單なる裝飾藝術です、此の場合壺の各箇の個性は全く沒却されます、壺は形と色との「むくろ」として其所に存在する丈けです。

どうしても壺は、たゞ一つ〳〵を取出して、閑寂な室で、良い位置に置いて、良い光線のもとに、個別的に眺めたり、觸れて見たり、抱いたりすることに依つてのみ、眞の鑑賞が得られるものです。

附記、恰度此の稿を了つた時、先頃壺の話の材料にとて非伊

大老茶道談を貸與せられた藤原氏から、其の珍藏にかゝる呂宋の壺を送られた。形も釉も誠に申分のないものである。孰れ其の内種々の壺の物語を書いて見たいと思て居る。

（大正十年八月十五日午后一時）

船から觀た日本の人種と文化

西村眞次

一

（一）歷史と創造と船舶と

あれは何かと問へば、船であると答へる。そんならこれは何かと問へば、矢張船であると答へる。そこで更に、あの船と此船とはどう異つてゐるかと問へば、それは分らないと答へるのが、一般日本民衆の船についての智識を代表する問答である。これもあれも同じ船には異ひないけれど、これとあれとの間に異ひのある以上は、其差點を擧げて兩者を比較しなければならない。船、興味といふものはこれらの差點の間に横はつてゐる。

私は久しい間日本船舶の發達の歷史を調べてゐるが、初めの中はどれもこれも一つに見えて、それらの間に差別のあることなどは容易に分らなかつた。ところが長くやつてゐると、いつの間にか、細い、ちよつと目には見えないやうな差異も見えて來る。其の細い、氣づかぬほどの差異が、私達には大きな問題を解く鍵になる。私は決して道樂で船舶發達史を研究してゐはしない。また古物好きといふ一種の性癖の爲めにそれをやつてゐるのでもない。私はかうした調査研究によつて、「日本人とは何ぞや」といふ問題を解決する材料を得ようとしてゐる。

片上伸氏は、近頃、信濃の一地點で講演を試みて、「歷史を棄てよ、創造に活きよ」といふ意味のことを云つたさうだが、現在は孤立した現在であるのではなくて、過去から永續したところのものであり、また未來に向つて永續してゆくべきものである。他の言葉で云ひ現はせば、人類は歷史的動物であつて、今日突然に、また偶然に此世界に生れて來たものではない。

人類の祖先の過去に於ける努力の推積したものが、即ち今日の私達であるといふことを否定する譯には行かない。私達は歴史を棄てようとしても、歴史は私達を棄てないし、私達も歴史を棄てきる譯には行くまい。私達の仲間が今日「創造」の企てをすることの出來るのは、現在が過去の推積であり、私達が經驗の結果を理解巧用する動物であるが故である。

創造は自我の所産であり、自我は創造の酵母である。自我は全く獨立してゐるけれど、自我の形式は歴史的である。創造の天地に逍遙しようとするものは、最も明確に自我を認識することを要し、最も明確に自我を認識しようとするものは、自我の發達の歴史を知らなければならない。所詮、自我は人類によつて稍々完全に近い形式を具有することが出來たとすれば、其存在の直積義は人類の發達の歴史を知らなければ分るものでない。自己の屬する人種をさへ知らぬやうなものが、自己と共同生で ある自我の眞を捉へることが出來ようか。さうした人々からは、眞の創造は生れて來まいと思ふ。

これまでの歴史家は信據し難い文書やら傳說やらによつて、私達日本人の何者であるかを解かうとした。しかし、彼等は殆んど全く成功しなかつた。彼等は今や、考古學者、人類學者の前に冑を脫がうとしてゐる。これは獨り我邦ばかりでなく、世界史も亦たさうした狀態にある。けれど我邦の考古學者の試みてゐるやうな研究の樣式や態度は、既に過去の錬爐に投げ入れられた類例であつて、それからはどんな新しい事實も、系統も引き出されなかつた。單純な蒐物研究——骨董者が骨董品を取扱ふやうな工合で、石器だの、土器だのをいぢくつてゐては、とても人類發達の歴史や、民族展開の徑路などが分る筈がない。私達は新らしい意味の研究を過去の遺物(レリツクス)と殘物(サーリイワルズ)とに加へて、考古學、土俗學の立場からそれらを觀察しなければならない。私の船舶研究はさうした目的でなされてゐる。

(二) 日本海式船舶

私は此夏信濃に研究旅行を試みて、主として其湖沼に浮んでゐる船舶を調査したが、第一に私を驚かしたのは諏訪湖の西岸に繫がれてゐる「マルコ」或は「マルキ」と稱する小船であつた。詳しいことは抜きにして、此船は三枚の敷(底板)の兩側に側板がつけてあるが、それらの側板は實は丸太を二つ割りとなし、其の各個の內側を三日月形に割つたものである。此側板の上には更に緣が取られるが、これはあつてもなくつてもよいものである。敷と側板も縫釘で釘着せられ、コーキングはサハラの皮でなされる。

此船の構造は極めて簡單なものであるが、側板が丸太の二つ割りであることは、技術がいくら進んでも、丸太を刳つた時代の痕跡を全く脫却することが出來ないといふことを示すもので、或意味に於いては、どんなに外界の文化が浸潤して來ても、持つて生れた民衆それ自身の手法(テクニックス)といふものは容易に棄て去られないといふことをも示してゐた。

私達の區分に從へば、諏訪湖の「マルコ」は、刳舟式構造船ともいふべきもので、丹後の久美濱に殘存する「マルコ船」、出雲の中海に用ゐられる「メリコ」及び美保ケ關神社の祭祀に用ゐられる「諸手船(モロタ)」と同一形式のものである。そこで私はこれを日本海式船舶とも呼んでゐる。かうした日本海式船舶の分布を見ると、それらの地方は或時代——古い／＼、歴史のなかつた時代に、各地點間に交通があり、多分同一の人種が、同一の技巧を以て、同一の形式を持つた船を造つたといふことが知られて來る。

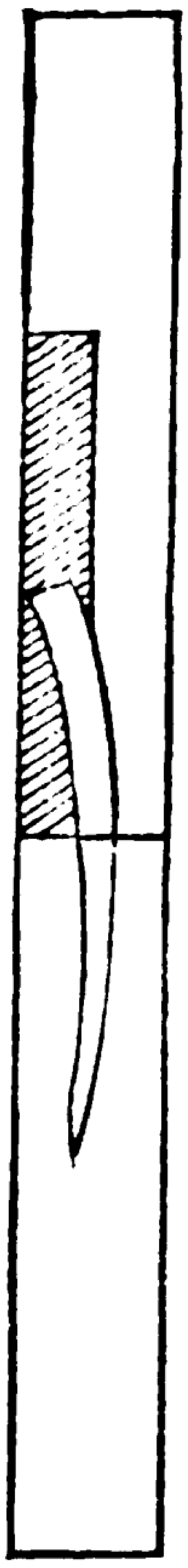
出雲と信濃との關係は、記紀の神話の示してゐる如く、建御名方命が出雲から諏訪に逃れて來たといふことで結びつけられてゐるやうに一般に信じられてゐる。此神話が事實であるかないかは、ちよつと考へれば直ぐ分ることであるが、かうした神話が生れるほどに、出雲と信濃との間に連結があつたといふことはたゞ一つの此の「マルコ」の形式によつても證明せられる。

諏訪湖から松本平に入つて、大町地方の石器時代の遺跡、古墳時代の遺跡を調査した後、木崎、中綱、青木の三湖に泛んでゐる船舶を調査し、更に進んで姫川溪谷を下り、中谷川溪谷を遡り、再び姫川溪谷に戻つて、それを糸魚川まで下つて來ると、そこの海岸には、現在では殆ど他方に見られない一種の操舵法の行はれてゐるのを見る。そしてその操舵法は信濃の諸湖沼に於いてもそれを見ることが出來るとしたならば、信濃の開發は必らず日本海側から行はれたものと見なければならない。信濃と越後とを綴つてゐる姫川は、古昔以來兩岸に若干の平地を造つて、そこを私達日本人の祖先が永い年月の間に溯つたものと思はれる。信越連絡線はまだ他にもあり得る、たとへば所謂「西頸城七溪谷」の如きはそれであるが、その外關川溪谷を溯つて野尻湖に達する線の如きも、重要な一つの交通の線であつたに相違ない。かうした複雜な關係が、船舶の研究の結果、色々の點から證明せられて來るのは、極めて興味の多いことである。土器や石器ばかりいぢつてゐても、かうした關係は容易に知られない。それら以上に、船舶の形式の研究は大事であるかも知れない。

(三) 日本固有の縫釘

少しく船舶の構造に注意してゐる人々は、船板の接合に二つの樣式のあることに氣注くであらう。西洋式の造船法に在つては鋲締法を用ひ、日本式の造船法に在つては縫釘を用ひる。日本の船は縫釘以外に他の釘をも用ひるが、其最も重要な釘着法は何かといへば縫釘のそれである。

縫釘は曲線を持つた鐵釘で、板と板とを小口で接合するものである。板を累ねることなしに接合するのは極めて困難のことであるが、日本式船舶は常にさうした接台の方式を採つてゐる。これを簡單に圖示すると、



の如く、甲の板に凹みをつけ、其點から縫釘を打ち込んで乙の板に達せしめ、甲の板の空虚(斜線を以て示す)には木又は石灰などを詰め込むものである。

此釘着法は極めて功果的で、かうして接合すれば決して漏水の恐れがない。此方法は餘程古い以前から行はれてゐたものと見え、先年大坂の今福から發掘された古船には、若干の縫釘が用ひられてゐた。『日本風土記』といふ支那書の中にも、日本の船は支那のものと異ひ、鐵板を連ねて板と接合するといつてあるが、それは恐らく鎹(カスガヒ)または縫釘を指したものであらう。

朝鮮全羅道の南部、多島海の上に泛んでゐる南海島の船所といふ所に用ひられてゐる漁船は、日本式釘着法を用ひて板を接合してゐるが、但し此處では鐵釘を用ひずに木釘(ペイピ)を用ひてゐる。パイモクは栗材などを用ひ、日本の縫釘のやうに三日月形の弧線を持つてゐるので、それが日本の縫釘と同一形式、同一系統のものであることが知られる。

寺野工學博士の談によると、此縫釘は日本固有のものであつて、支那とは全く連絡がない。ひとり稍々之に似たものは埃及の古船に於いて發見せらるるとのことである。其日本固有の釘着法が、今日も尙ほ朝鮮に用ひられてゐるといふことは、兩民族が同一文化、同一人種であることとの一傍證となる。釘だけで見ても、かうした一つの暗示を與へる。歷史が土俗學的研究、考古學的研究の結果を度外視することの出來ないことは、此一事でも明らかである。

(四) 朝鮮の三角船

朝鮮と日本とは、船舶工學の上から見れば、切つても切られぬ近緣の關係にある。筏に於いてもさうであり、構造船に於い

てもさうである。前述の諸手船、マルキ船は、たしかに咸鏡道城津の三角船と比較し得べきものである。三角船は日本人の稱呼で、土人はそれを「クメイ」と呼んでゐる。クメイの語意は詳しく分らないけれども、私の指導してゐる一鮮人の研究によれば、「刳る」「孔」といふ意を持つてゐる「クンモイ」の轉訛であらうといふことである。

此三角船は諏訪湖の「マルキ」船と同じく、二つ割の丸太をA字形に接合し、それに艫板と低板とを加へたもので、ちよつとスルメのやうな形狀を呈してゐる。これは重に漁業用に使はれてゐたが、近年は日本官憲の忠告で建造を廢し、城津附近に於いてもそれを認めることが出來なかつた。

出雲の諸手船に似た形式の船は、昔、黑龍江に於いて用ひられてゐた。其事は江戸時代の中頃上アムール地方を旅行したマークの旅行記に記され、圖も示されてゐるが、底板だけは首部に於いて突き出されてゐる。此底板の突出してゐるといふ點が私には極めて面白いことで、同書に圖示されてゐる渡船(ファーリー)にも矢張りさうした部分があるが、それは日本古代の石棺に於いて特に見られる形式で、さうした接合法が古代にあつたといふことを示してゐる。

日本海岸はそれらの日に、私達の祖先と同じ人種によつて住まれ、日本、朝鮮、滿州、シベリヤには、同一の文化が分布してゐたといふ事實が、これら船舶の研究によつて說明せられる。そこで私は、之に日本海式船舶の名を與へたのである。

私達日本人は今日では殆ど原型を失つてゐるほどの混血人種であるが、それらの日にはたゞ原型(プロトタイプ)を保つてゐた。それ故、私達はさうした他の血液を交へない日本人を「原日本人」と呼んで、近代日本人と區別してゐる。原日本人はツングーズの一派で、人種學者の所謂「南ツングーズ族」であり、滿州人、朝鮮人オロツコ、ギリヤーク、ゴルヂなどと同種族である。或一派の人種學者は"Koreo-Japanese"(「鮮日人」)といふ名稱をすら用ひてゐる、私も近頃其稱呼を採用してゐるが、さうした人種的關係が、船舶の上にも現はれてゐるといふことは極めて面白いではないか。

（五）竹や葦で造つた舟

「古事記」神話によると、蛭子命は葦船に入れて海中に放流されたとある。そこで古來の古典學者は頭腦を惱まし、竹や葦で船は造れないが、神々のことは幻怪測るべからずなどといつて不安心な安心をしてゐた。日本のみが世界であつた時には、さうした解釋で滿足が出來るけれども、今日のやうに諸國の水に

運搬具がよく知られて來ると、なか〳〵そんな解釋では滿足が出來なくなる。

讀者の中には既に知つてゐらるゝ諸君もあらうが、臺灣の打狗では、「竹排(テクパイ)」といふものが用ひられてゐる、それは竹材を縦に幾本も並べて其の兩端を上向せしめ、側面から觀ると半月形にせしめたもので、海の上をそれで走つてゐる。海水が容赦もなく筏の上に洩つて來るので、荷物や乘客は、筏の中央に設へた桶の中へ入れる。これは打狗の海岸には暗礁が多くて、吃水の深い普通の船は通ることが出來ないので、昔の儘の形式を踏襲して昔の儘に用ひられてゐるのである。

ところが或知人の談話によると、此種の竹筏は四川省邊に於いても用ひられ、今日もなほ盛んに貨客を搭載してゐるといふから、此竹筏形式は、臺灣特有のものでなく、南方支那に普行はれた形式のものであることが知られる。『後漢書』の西南夷傳を繙くと、哀牢夷の條に賢栗王が箄船(フア)に乘じたといふことが書いてある。此箄船は明らかに竹排のことであつて、今日四川省の一部に殘つてゐるものと同一形式のものであつた。そこで私はこれを苗族に固有の形式であると考へる。苗族は今日の印度支那人の祖先であつて、今でこそ支那の南部の山岳地方に跼蹐してゐるけれども、古代に於いては楊子江南に占據し、大に勢力を揮つてゐた民衆である。

其印度支那人が今日安南(アムナン)、東京(トンキン)あたりで使つてゐる水上運搬具に一種特別の形式のものがある。これは籠舟といつて、英國人が "basket-boat" と呼ぶもので、早い話が、日本の竹製の笊の大きなものである。笊では目があつて水が漏る、水が漏つては水上には浮ばない、そこで椰子油に牛糞を交へて其目を塡塞して漏水を防ぐ。大きなものになると、二十噸位の荷物を運ぶことも出來るといはれてゐる。此籠舟こそは、日本の神話に現られて來る「無目籠(マナシカタマ)」であつて、昔から古典の研究家が解釋に苦しんでゐたものである。

これらの諸點から推すと、日本の古代水上運搬具には、印度支那式のものが入つてゐたことに疑ひがない。私は日本に米を齎らしたものも此人種であらうと思ふが、人種學的研究の結果、鳥居博士は朝鮮多島海及び日本の一部には、此種族に類似の體格を持つた民衆があるから、多分印度支那種の血液も日本人の血管の中に通つてゐるであらうとの事である。私は船舶考古學の上から見て、日本と印度支那との人種的並びに文化的連絡を信じようとする一人である。

（六）　格子形腕木附の船

從來「大和型」と呼ばれてゐた日本式構造船に對して、西洋人は屢々 "The Japanese Junk" といふ稱呼を用ひる。それは明かに支那戎克(ジャンク)を日本船に應用したものである。けれど支那ジャンクと日本ジャンクとの間には非常な差異がある。船舶工學上から觀ると、彼れと此れとはまるで似もつかぬ他人同士で、その間には何らの關係を持つてゐない。若し强いて持つてゐるとしたら日本と支那との間に朝鮮船(ペイ)を置き、朝鮮船(ペイ)を仲介として僅かに兩者が連結せられるばかりである。朝鮮の船は元來日本式であつたものが、中世に支那樣式を取り入れたので、今日のやうな「ペイ」の形式を得たのである。それ故、朝鮮の船の大部分は、支那式ではなくて、寧ろ日本式のものが多いと云つてもよい。

極めて大まかに支那、日本の兩ジャンクを比較しようならば、支那ジャンクは箱形であつて、舳艫共に方形を呈し、しかもその板は横に接合せられてゐるに反し、日本ジャンクは舳部は三角形を呈し、艫部は外艫板によつて可動舵を保護し、板は縱に張られるのが常である。前者は肋骨を持たぬ代りに隔壁によつて横應力を造つてゐるのに、後者は全く肋骨を缺き、横梁(ビーム)によつて僅かに横の張力を支へてゐるばかりである。

支那ジャンクの外貌を形成してゐる外側板と舳艫兩部の板とには、割丸太の俤が殘つてゐて其發達の悠久を偲ばせるけれども、それらの板は皆併列式に並べられるだけで、十字式に置かれたものは全くない。之に反し日本ジャンクに於いては、若干の十字式部分を認めることが出來る。積荷多い場合などに船の吃水が深くなると、波を避ける爲めに上舷の緣に一種組(コレ)板が立てられる。これは格子式のもので、十字形に組まれた骨骼(ム)の內側に板を張つたものである。私は此形式は古代の印度船に類似してゐると思ふ。

印度のマイソール大學で印度の航海についての講座を持つてゐるムーカージ教授は、私と同じく船舶の發達に深い興味を感じてゐる人で、『印度の船舶』("Indian Shipping")といふ書物を著はしてゐるが、彼れの言ふ所に從ふと、紀元前一〇〇—二〇〇年頃の印度の航海船は格子式の腕木を持つたもので、それはジャヷのブルブヅールの石壁彫刻によつて證明せられるといふことである。ブルブヅールの石壁に刻まれた船には腕木がついて居り、外側は全部格子式になつてゐる。日本船舶には少許の格子式構造を迹づけるやうな分子の殘つてゐることは私の既に說いたところである。

一般に腕木(out-rigger)を持つた船は、南洋式のものと考へられてゐる。オセアニヤの土人は、殆んど總て腕木付のカヌーを操つてゐるが、それらは南洋式のものでなくて、實は印度の

周行形式である。それが漸々と南洋に及んで、今日では印度には北形式が亡んで、却つて南洋のみに殘つてゐると謂つてもよいほどの狀態に達した。――さうしたことは日本とは全く無關係のことのやうであるが、實は無關係ではなくて、此の舷外木(アウトリッガー)を持つた船が日本の八丈島まで延長し、同島では島人は盛んにそれを乘り廻してゐることである。かうした點から觀ても、いつかしら極めて古い〳〵、忘られた時代に、ブルブツール行壁の彫刻に見られるやうな印度式船舶の構造様式が日本に輸入せられ、今日の日本ジャンク、即ち「千石船」に其痕跡を止めてゐるといふことに疑ひはない。文化の流れは人種の流れと異つてゐるといふのが、普通の説であるが私は文化の流れは常に人種の流れに伴ふものであることを主張してゐる。日本人の文化と血液とに、印度支那式要素の混入してゐることは最早論議の餘地がない。

（七） 刳舟と「天磐櫲樟船」

ひとしく刳舟であつても、其形式と系統とは異つてゐる。其異同を辨へなければ、文化移動と人種移動との迹が分らない。複雑な人類發達の歴史は、簡單な辭書などの説明を見るだけでは分らない、秋田縣の八郎潟に殘つてゐるテン草採集の刳舟と今回私の發見した木崎湖の刳舟――一つは今尚は水面に浮び、他は既に半ば朽ちて洗ひ場の棧(はし)に充當せられてゐる――とは、形式に於いても同じやうに、系統に於いても同じものであらうが、北海道アイヌの用ひてゐる刳舟、福島縣で鰻漁に用ひられてゐるドンボ舟などゝは同一形式、同一系統であると見ることが出來まい。

古アイヌ（近代アイヌと區別する爲めに、先住民としてのアイヌに與へた假定名稱）の刳舟は、茨城縣の小谷沼に於いて發掘せられたものが示すが如く、鰹節型(Sus-ex type)であつて、アイヌの刳舟や、福島縣のドンボ舟に類似してゐるが、八郎潟の刳舟や、木崎湖のトツコは割竹、(German type)であつて、古アイヌ式とは全然異つた原日本人式のものである。前者を太平洋式とすれば、後者は日本海式とでも云はうか。

原日本人式の刳舟は、首尾共に尖形で、若干の平骨面が刳り殘されてゐる。たとへば私が千葉縣の姥し沼に於いて發見した先史時代の刳舟の如きは、原日本人式(割竹型)に近い要素を持つてゐるのに、安房の溶田、常陸の大寶に殘つてゐる古代刳舟の如きは、古アイヌ式(鰹節型)に近い要素を持つてゐる。これらから觀ると、古アイヌの刳舟は先尖りであり、原日本人のそれは圓材であつたと推想することが出來る。かうした船舶形式の

差異は日本人の血管中に古アイヌの血液の通つてゐることを示す一つの證據となる。

こゝに今一つ不思議の神話がある。それは、磐船(アメノイハフネ)或は天磐櫲樟船(アメノイハクスフネ)に關したもので、古代日本人の間に、楠材で造つた一種の刳舟のあつたことを想起せしめる。楠材から造られた刳舟の遺物は、今まで知られてゐるものが三通りある。一つは『尾張名所圖會』に載せられてゐるもので、江戸時代の末に尾張諸桑村で發掘せられたが、今は全く船體は失はれ、たゞ圖が殘つてゐるのみである。一つは明治十七八年の頃大阪難波(ナムバ)の鼬川で發掘せられ、一つは一昨々年大阪市外の今福で發掘せられたもので共に楠材から造られた大型の刳舟である。これらの三つは何れも單材から造つたものでなく、二個以上の材を接合して造つたものである。刳舟は嚴密に云へば單材刳舟と複材刳舟との二つに分けるが、前述三個の遺物は、いづれも複材刳舟の好標本で二個の楠材を接合したものである。尾張のは接合法が不明であるけれど、難波のは組合せ(楔合)によつて兩材を接合し、今福のは釘着によつて兩材を接合したとが明らかに知られてゐる。難波のは接合法が幼稚であるけれども技巧は非常に進んだもので、縱通力と横通力とについても彼等は多少の智識を持つてゐたことが分る。今福のは接合法は進歩してゐるが、技巧は極めて拙劣で殆ど縱通力が缺けてゐるやうに思はれる。

言ひ傳へによると、それらの楠船は最近まで、九州、四國、伊勢などで用ひられてゐたやうであるが、楠材の減少した今日では全く其姿を認めることが出來ない。然るに臺灣の日月潭では、蕃人が一種の楠船を操縱してゐる。此楠船は樹幹を刳り拔いて造つたもので、首部と尾部との區別がなく、從つて艫櫂もなければ、舳材もないから、少し浪立つと水がどし／＼と船内に入つて來る。節孔などから來る漏れは、苔や粘土を詰めてそれを塞ぐことが出來るけれども、舷部から入る水は防ぎ切れず遂に沈沒することがあるといはれる。これらは多少、大阪發掘の二船と似てゐて。神話に殘つた磐櫲樟船(イハクスノフネ)は、かうした種類のものであつたと想像せしめる。

日本人を南ツングーズ族の一派であるとすれば、彼等の故郷は常外大陸の寒い氣候の地帶であつたと見なければならぬ。寒冷な地帶には熱帶産である楠が生育する筈はないから、此神話并びに物體は、必らず南方のものであらねばならない。私は日本人の血管中にインドネシヤンの血潮が通つてゐるといふことを信じてゐるが、その一つの證據は此楠船神話と楠船遺物とである。勿論、大阪發掘の二つの刳舟は、日本人の造つたものに相違ないが、其原形はインドネシヤン種族――たといへば臺

潮生蒂の如きが持つてゐたものであらう。動物には適應といふことがあるが、其原則は品物にも應用せられ、船舶の如きは常に地方化して其行く先々で異つた材料を適當の方法で採擇利用する。原日本人がインドネジヤン型の楠船を造つたことは決して疑ひを容れる餘地がない。

(八) 筏の證明する文化移動

私はこゝ六七年かゝつて、やつと一篇の小論文を書き上げ、一二箇月後には出版することが出來る運びに至つた。それは『日本古代の筏』といふのであるが、其内容を極めて簡單に摑い摘まんで書かうならば、筏には草筏と木筏との二種あり、木筏には縦結式と縦横交結式と二種ある。日本の筏は縦に幾本も丸太を列ねてそれを一乘とし、少くとも二三乘以上を聯結して河を下す。日本の筏は材木を高地から平地に運ぶ目的を持つてゐるだけで、貨物や乘客を運搬する目的は更にない。

然るに西方諸國の筏は縦横交結式(即ち十字式)で、縦に木材を幾本か列ね、其上へ横に更に木材を幾本か列ねて十字形に組みは合すとになつてゐる。東はアムール河から、西はチグリス、ユーフラトに至るまで、皆殆ど此の形式である。日本の筏は筏流しとしては技巧が發達してゐるが、形式は原始的のものであつて、日本だけで獨立して發達したものである。かうした形式の差異は、日本の筏を單層に限らしめ 西方の筏を[illegible]層に發達せしめた。

古代の筏は屢々其下方に浮きをつけて浮力を増し、筏の河床に膠着するのを避けた。浮きは場所によつて材料が異つてゐるけれど、日本を始め東洋では瓢箪をぶらさげた。支那では獸皮をも用ひたらしい、瓢箪や獸皮はたゞに浮きに用ひられたばかりではなく、古代人はそれにぶら下つたり、その上に跨つたりして水上を渡つた。新羅の瓠公は日本から瓢箪を腰につけて海を過つた人であつた。朝鮮の濟州島では、今日でも倘ほ瓢箪を腰にして海中に浮んでゐる海士がある。獸皮といふのは水牛の腸を抜き取つて緊密にし、足から息を吹き込んで空洞を充たし、さて足を括つて外部から水の浸入しないやうにしたもので、英國人はそれを "Inflated Skin" と云つてゐる。これは今も盛んにチグリス河で用ひられ、或は筏の用をなし、或は筏にぶらさげられて浮きの用をなしてゐる。日本では古い時代には鹿の皮を用ひた、支那の楊子江上流では今日でも犁牛の皮を用ひてゐる。神功皇后の朝鮮征伐神話中には、筏に瓢箪をぶら下げたことが記されてゐる。これらから觀ると、たゞ一つの筏の土俗學的、考古學的研究によつても、日本とメソポタミヤあたりとが、文

化的人種的に個々に隔絶のついてゐることが知られるのである。

（九）日本の人種と文化

埴輪といふ唯だ一つの器具から觀ても日本人の人種學的位地が知られて來る。前述の如く、日本人は蒙古人種である原日本人(Proto-Japanese)を骨子として、それに印度人支那の血潮が交り、また更にこれに高加索人種である古アイヌとインドネジヤンとの血液が加はつたといふことに疑ひはない。此外、支那人の血液も混合して居り、またネグリトーの血液も混合してゐる。日本人は全く一種特別な、かうした人種ではなくて、島國であるイギリス人の如くに多數の血液を混へた混血民衆である。中には日本人を混血民衆だと信じ得る人は幾人あるであらう。中にはかうした私の假定を非常に亂暴な、大膽なことのやうに思ふものもあらうが、考古學や、人種學の上から觀ると、どうしてもかうした假定に陷つて行かねばならない。一部の學者は、日本人が非常に古くから日本群島に住まつてゐたことを主張するが。いくら古くても多寡は知れてゐる。歐羅巴邊では氷河期に既に人類が住まつてゐたけれど、日本では現世期の前期でなければ人類の棲息したことの痕跡はない。地質學的に云へば、日本が大陸の一部分であつた頃には、こゝにはどんな人類も住んでゐなかつたが、群島になつてから始めて人類が住み出したのである。

動物地理學上、孤島は種の避難所であり、保存地である。原日本人は日本群島に於いて比較的に其原型を保つことが出來たけれど、尚ほ前述の諸種族の血液が混へて、今日の如き混血人種となつた。

アメリカ大陸が今日諸種族の移住地となつて、そこに世界的な血液の混淆が行はれてゐる如く、日本群島は古代に於いて東方の樂園として、そこに盛大なる血液混淆、自然の人種改良が行はれたのであつた。かうした人種の混淆は、同時に諸種の文化の融合でもあつた。歷史家は、殆どすべて日本には何らの固有文化もなく、朝鮮を通して支那、印度の文化が入つて來たとのみ考へてゐるが、私の考へでは日本の文化にはもつと深い淵源を持つてゐる。

私の假定にして誤りがないならば、日本の文化には少くとも三つの大きな流れがある。一つは沙漠北路であつて、極めて古い時代に、ゴビ沙漠の北方、即ちシベリヤの南方を西から東に通つて日本に移動し、一つは沙漠南路で、ゴビ沙漠の南方を通して日本に移入した。所謂「三韓文化」「印度の文化」はこ

ある。他の一つは印度海路で、印度洋、支那海を通して、水上から日本に移入したものである。此の二つの陸線交通路と、一つの水線交通路とは、日本人に豊富なる血液を、日本文化に饒多なる要素を齎したものである。これらの三交通線は、一々これを船舶形式に當て嵌めて考へることが出來るほどに、私は日本人種　日本文化の移動の形迹がはつきりとばられる。

かうした歴史の概觀をも捉へ得ることなしに、日本民族の文化を論じ、人種を論じ、それらの改造を論ずることは餘りに大膽であり、無謀であり、無稽である。日本人は今日歴史を棄てるよりも、もつと拾はなければならぬ位地にある。日本にどれだけの歴史があり、日本人にどれだけの自分自身を理解する力があるか。悠久な自己自身の發祥せめては人類發達の成跡をなりとも多少窺つて見て始めて人類の群に口を挾む權利があり得る。それらを知ることなしに、たゞ現在のみを觀ようとするのは鍍金の時計を見て、それを金時計として取扱ふのに等しい。かうした時代はいくら日本が貧弱でも、もはや過ぎ去つてゐる。日本はもはや研究をより深くし、より細くする時代に入つてゐる。机の上の空論、頭の中の空想を棄てゝ、科學的な基礎の上に立つた考察、實行を云爲すべき時代に入つてゐる。私は船の發達の歴史が私達に與へるところの多いやうに、もろ〳〵の物の發達の歴史が若し闡明せられたならば、私達はそれによつて一層確實に私達の過去を知り、現在を知り、併せて將來をも知ることが出來ようと思ふ。歴史を棄てるものをして棄てしめよ。創造の力を得ようとするものは、先づ眞正の自己を知り純眞の自我を捉へる爲めに自分自身の今日を迎へた歴史を知らなければならない。

茶室の實用と趣味

岡田信一郎

況翁石黒子の言はれたのを聞いた事がある、子爵は始め專門の衞生學の立場から家庭の衞生を研究され、それには家庭生活

に著大な影響を與へて居る茶道を研究する必要があるので、茶道を取調べて居らるゝ中に、次第に興味を起し趣味を增し遂に茶道に沒頭さるゝに至つたと言ふ事である。私は日本建築にかなり強い愛着を感じて居るので、建築の教養を受けた專門の人達が多く西洋建築だけを研究して居らるゝ間に、在來日本風の住家建築を多少研究もし設計もした。近代の日本住宅に茶室建築の影響が多大であるのは言ふまでもない事であるので、勢ひ茶室の建築を研究する必要が起つて來る。茶席を知るには茶道を究めねばならない。斯うして來ると私も不肖ながら况翁の蹤を追ふて茶道へ沒頭せねばならない事にもなつて來る。然し私は其の方面では極めて未熟でもあるし充分の研究もして居らない。其故本誌から請はれて茶室に關する記事を執筆する事を約束した時にも、茶道に關する事又は茶室の法式に關する事は他に種々の著述もある事故、今更本誌に載せる事もあるまいと言ふて、玆に私は自分の茶室建築に關する感想を主として二三其の特徴を擧げる事とした。

私が茶室建築に對して持つ感銘の著しいものは、第一、茶室の合理的である事。第二、茶室が他の建築に比して設計者其者を反映する事が多い事。第三、實用と趣味とが具合よく調和されて居る事。第四、茶室が純日本趣味である事。第五、茶室建築では自然と建築との融合が行き屆いて居る事等である。

窮屈な約束に拘泥して居る茶道、從つて茶室の建築は今の自由な生活を基準として評したら不合理な變態の物である。薄暗い、コセ〳〵した、狹い茶室は、非衞生な不愉快な室として近代人の目に映つるのであらう。然し茶道が行ふ場所、茶儀の容れ物として茶室建築を見ると、其の極めて合理的であるのに驚かされる。茶室の殆ど總ての部分が皆各其存在の理由を持つて居て、少しも無駄な贅物のないのは驚く可き程である。何から何まで茶の湯の實儀用に基いて少しの無駄もない。四疊半とか三疊大目とか一疊半とか種々な間取り、爐の配置、中板、向板の入れ處、爐の切り方、通り口の位置等何から何まで、總て茶儀の實用を主要として合理的に處理されて居る。風呂先の窓、中脇の窓、其他の切り窓も各々其場所に必要な光線を供給するやうに設けられて在つて、其大さも必要な光線の過不足なき分量に基いて開けられて居る。大勢の知名な茶人の各々の好みによつて、間取りや大さや種々な點に樣々の變化はあるが、何れも茶儀の實用に基いて理詰にしかも獨創的に解決されて居る。釣棚の寸法や高さ、花釘の位置等微細な點まで皆理詰で設けられて居る。かく茶の湯の儀式と云ふ實儀用に準據して、之を細かな點まで理詰に合理的に處理して居るのは極めて科學的であると言ふ事が

出來やう。建築のやうな工藝美術と一列にあるものは、實需用の解決が其の第一生命である。近代の歐洲建築も時代の進步に伴ふ生活の變化、建築に對する實需用の變化につれて著しく變つて居るが、要するに生活の需用に具合よく適合させるやうに設計する所に近代建築の骨折が存する。住居に一例をとると近代の生活は著しく複雜になつたので、其生活の容れものたる住家は之れに適應するため極めて複雜に考案されて來る。昔は四角な室に椅子卓子を置いただけで滿足されたものが、近頃では其室の性質に應じて適當な椅子、卓子、飾棚、長椅子、安樂椅子等を配置して、其實用上の便宜が微細に亘つて考案される。而して其室の用途に過不足なき設備が要求される。机一つにしても其抽出しや棚は中に入れるものや整理の便宜に應じて細かに考案されなければならない。西洋の近代の臺所を見るとまるで化學者の實驗室か或は藥局のやうで、調理の實際に適應して竈や七輪水流し等は勿論棚の釣りかた、器物の置場などが一々適當に定められて、臺所の實用が極めて合理的に科學的に解決されて居る。少しの不足も僅かの餘剩もないまでに一々理詰に處理されて居る。斯う云ふ近代建築の內部の設備などに現はれる科學的精神と同じものを、茶室建築に明かに認める事が出來る。繁閑の差こそあれ茶席の水屋の棚の釣り所、釘の打ちかた等は近代の臺所の複雜な設備と同じ精神で解決されて居る。私はかゝる親切な合理的な科學的な精神があつたなら、今日やかましく言はれて居る住宅改善なども具合よく成就するのではなからうかと思ふ。西洋の例を直寫しにしたり、單に椅子や卓子を並べたり、襖を扉にしたりしただけで生活が改善されるとするのは人間を物質視する淺はかな觀かたであらう。現在存する要求を其本質に基いて合理的に解決するのでなくては眞の改善はむづかしい。近代の科學的精神と言つても宜しい、古くさい茶室精神と言つても同じである。之が新しい住居改善などには一番肝要なのではなからうか。一口に茶室建築と言つても創造的の面白味のある建築はやつぱり古い時代のものに多い。近い物には自覺なしに昔の模倣をしたり、又は實需用に基く創造でなく好奇心や、匠の道樂からわざとらしい事をして本質を逸したものが多い。こんな弊害が積り積つて茶室建築は馬鹿げた、無駄の多い、變態の贅物になつて仕舞つたのである。

第二の、作物に設計者其者の表はれる事は各種の藝術で特に珍重する點である。建築でも作者の人物が映て來る事は屢々認められる。然し一般の日本建築では時代の區別は明瞭に映出されても居る、又地方地　の特色も表はれて居るが、作者個人個人の色が強く表はれる事は少ない。茶室の建築を見ると著者

の人物心持が遺憾なくあらはれて居て、此點甚だ面白い。閑雅なもの、豁達なもの、細心なもの、典麗なもの、奇趣に富んだもの、大まかな味のあるもの、行き屆いたもの、取り〴〵其築者の性格を明示して感に堪えないものがある。利休と言ひ、宗旦と言ひ、遠州公と言ひ、茶席は建築により其人物を明かに窺ふ事が出來る。之は築者が微細な所まで全心を打込んで親切に立案した創作であるから自然斯うなるのであらう。特に初期知名の人の築になる茶室は無理な作爲が少なく、自然に茶儀の實用に基いて蟠りなく立案したものだけに、一層其の作者の人物が髣髴される。斯う云ふ作例は他の建築には充分に認められる事は稀である。よし多少作者の特徴を明示したとしても、其は多くの人の僻好とも稱すべき作爲の著しいものである。又多くは細部の技巧に亙つた事がらに流れて居るので、特徴として讚へるよりも、嫌味として排ぞけられべきものが多い。後期の茶室建築、現今のものなどは特に斯うした顯著を保つて居る。

第三に茶室建築では實用と趣味とが具合よく調和されて居る。此點は總ての美術工藝品に最も肝要な點であつて、實用の解決夫れ自身が直接美觀の素になる事を貴む。茶室建築では之れが可成り充分に到達されて居るやうに思はれる。前にも言つたが茶席では如何なる微細な個所でも各其存在の理由をもつて居て且無駄な個所もない。而して之が相倚つて綜合的に茶席の美觀を組成して居る。特に初期のものは形態の意匠だけ重きを措くと云ふ成心がないから、暢んびりしたものが出來て居る。後になると趣味とか考案とか言つて、わざ〴〵小細工をするため、或は實用を犧牲にしたり、要も無いむだのものを加へて、且外觀も具合が惡いやうな結果を起して來る。窓に例を採ると、始めは實際の必要のある場所に所要の光線を入れるだけの大さのものをとつた、其故無理のない大まかな氣持のよい物が出來上つて居るが、後には窓の取り合せ、格好やを主として、色々の窓をつける。又は古人の型だと言つて無批判に窓をあける。其結果むだの多い煩剰なコセ〴〵したものが出來て、且中に這入つて來ると光線も具合が惡くなつて仕舞う。茶人には洗練された趣味を持つた人が多く、中には利休や遠州公のやうに豐富な趣味を有つた人も居て、茶儀の實用を存厄介にせず、之により趣をもたせ、趣味のあるものを作り出した事は實に敬服する。露地の踏石など、各石總て足踏の具合から都合よく定められて居て、夫が同時に風情を添えて居る。斯かるが工藝の極致かと思はれる。

第四に茶席建築は殆と全く日本趣味ばかりで成り立つて居るのも注意す可き點である。日本の目ぼしい建築の中で日本趣味からばかり成立つて居るのは茶席の他には上代の神社建築など

へ得るだけで、其他は總て大陸のもの丶影響を受けて居る。茶が支那から渡來し、喫茶の風習が支那に基く事は申す迄もない。又茶儀で使用する種々の道具に支那朝鮮のもの、はては南支交趾印度邊のものまで珍重した事は周知の事であるが、茶室の建築には殆ど全く渡來の材料を使用して居らない。茶室の形式及意匠も全然日本趣味であつて同じ足利末桃山時代の楼閣建築が多少とも支那の影響を受けたのに對し、茶室は專ら佗を主として當時の庶民の家、山家の小屋の飾りのない風姿は面白味を求め全く日本趣味から成立つて居る。建築材はたども德川後期に流行した煎茶では支那印度等の木材竹類を使用して喜んだが、茶室建築では唐木其他渡來の材料は全く用ひない。茶碗茶入れ花瓶等は特に支那南蠻のものを珍重したが、紫檀や黑檀の唐木類は器物の箱又は挽家には使はれたが、建築には全く使用されなかつた。甲檀と鐵線が使用された例があるが、建築には全く唐木の混入を見ない、遠州公の作の御所の欄楣に種々の銘木唐木を取り合せて有名な欄を造られたが、やはり茶室には使用された例を見ない。而して茶室建築は意匠も全く日本風である。日本の庶民の家の面白味が洗練されて茶席となつたので、之が又容易く受け入れられて一般の住宅に影響を與へたのも當然である。

建築が自然と密接な關係を有つて居る事は一般に日本建築の特徴であるが、特に茶室では此の融合が強く認められる。西洋室と異り日本の座敷は庭と切り離して觀賞するわけには行かない。此の關係が茶式では一層密接である。露地庭と茶室とは二つのもの丶密接に連關して居ると言ふよりは切り離す事の出來ない一つの物として見る方が至當かも知れない。露地は茶室の延長である。而し露地は普通の庭園と異り、なる可く作爲なく自然のまゝに作られる事を可として居る。自然の儘を利用して人爲的の露地によらぬ事もあるし、又露地を作るにしても力めて自然に柔順にして人爲的なぼろの出ない事を努めて居る。茶室建築當體にしても其材料はあまり人工を加へない自然の儘若しくは夫に近い材料が多く使用される。丸太の柱とか櫨の柱とか、竹とか皮付の葦とか塗壁などでも泥土を水捏にしたものなどが用ひられる。自然と露地と茶室との間に移り替りの境が認められない程、なだらかに融合したものさへある。自然に對する愛好とか云ふ言葉も入らない程茶室は靜かに自然の懷に抱かれて居る。茶室が斯く自然と融合する事の出來るのは一は茶室建築の眞實性にもよる事であらう、茶室では、虛僞やまやかしは斥けられて居る。材料の用ひかたにしても構造にしても、正直に率直に出來上らなければならない。然るに古い物の型を模すとか、變つた意匠をするとかして中には隨分無理な細工をするものも

多い。特に茶室では一面奇嬌を喜ぶ傾向があるので、花瓶の名に誘はれ不自然な變態なものを作り上げて喜ぶものも尠くない。物質文明のはびこるに連れて人は時々自然の懐に歸る事を思ふ。樹の枝に架けられた鳥の巣のやうな[illegible]でも私の心を惹くものがある。

（大正十、八、一九）

鑄金雜談

香取秀眞

世の中には鑄金といふことを知らない人が往々ある。名士と云はれてゐる或る人から、鑄金とは一體何んであるかと訊ねられて驚いたと、友人が來て話したことがある。官立の東京美術學校には鑄造科といふものが立派に設けられてあるのだから、少し世人に知られて居つても可かりさうであるが、案外狹い範圍に止まつて居る爲に、餘り人の注意を惹かないのであらう。

鑄金といふのは、文字を解釋しても分る通り、金屬類を溶して型に入れ種々の器具や像などを鑄るのである。之れ丈けでは未だ十分に分らないが、私達の關係して居るのは美術的の鑄金である。何んな風の物があるかと云へば、古い所から云へば、銅鐸、銅劍、鉾などがある。次に佛像、佛具、それから鏡。それ以外に花瓶、香爐、文房具中の大部分、茶の湯に用ゆる釜、今では餘り使はれないが、昔は正月あたりに用ひた、酒を容れる銚子(燗鍋)などの類である。

元來鑄物は非常に古い時代から發達して居つたもので、古い時代の事を考へ、古い時代の製作品を見ると、其技術は今日格別に進歩して居るとは認められない。昔と同じ様な事を今日も引續いてやつて居るのであつて、其間に何等際立つた進歩發達を遂げてゐないやうに思はれる。よく考古學者の方で研究する銅鐸といふものがあるが、あれなどを見ても技術が非常に優れて

居る。銅鐸は多くは型から出したまゝ鐙も鏨も使はない鑄放しのものであるけれども、其形と云ひ其模様と云ひ、何れも精巧な出來榮えである。(尤も鑄放しと云ふ中に、後世多く賞美されるのは鐵の鑄物であつて、鑄放しの茶釜、鐵燈籠の如きは全く仕上げを加へないものである。けれども佛教關係の器具になると大概は仕上げを施されてある)。銅鐸の製出されたのは何れの時代であるか判明しないが、さまで智識の發達しなかつた時代に出來たものであるに相違ない。それでゐて今日の進歩した筈の技術では到底鑄出す事の出來ない巧さがある。人間の智識は限りあるものと見える。

佛像などは原型が一つあつて、其原型さへ巧ければ、金に移したもの巧いのではあるけれども、今の時代から云つて千年以前の物に非常に傑れたものがあつて、後世に於いてはそんな巧さのものは見る事も作る事も出來ない。佛具の如きも、信仰で作つたものであるから精神上の力も加はつて居るので上手なのであらうけれども、技術と云ひ意匠と云ひ實に精巧無比で、嘆賞に堪えないものがある。

佛教に關係の無い容飾具として鏡がある。昔の鏡は今日のやうに硝子製のものでなく、多くは銅で鑄たものである。近來鏡を鑄る方法も段々研究されて來て、私なども其方法丈けは分つて居るが、古い支那の鏡とか、日本に傳つて日本で眞似て作つた鏡とか、純粹な日本化した日本風の鏡などを取つて見ると、表は顏を映す爲めに平面であるが、裏には種々の意匠を凝らした模樣が彫まれてある。其模樣の造り具合は、一寸眞似もつかぬ事をやつて居る。中には今日吾々の仲間に傳はつて居ない技術を用いて居るのがある。而かも其等は非常に精巧である。然るに其後何百年かを經て上手になつて居る筈なのに拘らず、今の時代の技術では到底企て及ばないものが多い。要するに吾等の青銅鑄金などは、前世期時代即ち青銅期時代の技術であるから、盡くせる丈けの進歩發達は仕盡して了つたものであらう。昔は青銅で盛んに食器などを作つて居つた。青銅鋺、匙、飲酒の道具、鉢などが盛んに用ひられて居つたのに、今日では銅には毒があると云ふので殆ど用ひられない。昔に斯く日用品にまで銅が用ひられたから、それを材料とした製作法も上手になつたのである。

自分は古文書などにある鑄物の事を時々考へて見るが、不幸にして古い時代の技術が今日まで言傳へ書傳へられて居ない爲

め、技術についても亦材料についても、頗る詳細の出來違い事が往々ある。時には夫れ斯ういふ風な事も既にやつて居つたかと。自分達が今現にやつて居る方法を古文書中に見出して驚かされる事がある。反之如何の爲めにこんな材料を用ひたか毫しも分らなくなる事もある。大日本古文書中に、天平寳字六年東大寺で一尺の鏡四面を鑄た事が載つて居るが、それ等を見ると、材料とか人工(工手間)などは大體想像がつくが、何うしても分らぬ事が出て來る。鏡製作法は後世は土の型へ直ちに模様を突込んで其の模様を作るのであるけれども、古い時代には蜜蠟を用ひた。古文書にも蜜蠟一斤を用ひたと出て居る。此鏡が今殘つて居らぬから、其模様が何んな模様の具合か分らないが、他の個所を見ると、鏡の背文を捻る工七人といふ事があるので、土の型に箆で直ちに突込んだのではなく、蠟の模様を作つたやうに思はれる。此古文書は偶々奈良朝のものであるが、奈良朝に蠟型で出來たと思はれるものがないではない。然しそれは土型へ直ちに箆で突いて出來なくはないものがある。蜜蠟を果して何の程度まで用ひたか分らない。平安朝以來後決して鏡の製作に蜜蠟を用ひた事はない。

鏡の表面は人の顔を映し出す爲めに、研いてピカ〳〵光らせるが。之れには砥石又は錆粉を用ひて居る。錆料は後世では用ひない事もある。然しながら刀劍を研ぐ材料には[illegible]等を使ふ。錆粉は鍛冶屋が鐵を鍛へる場合に、赤熱した鐵を鎚で叩く際に出來る鐵の皮である。之を乳鉢で細く碎いて用ひるが、鏡面を研ぐに用ゆるのも似た事ではないかと思ふが、後世は全くこんな方法は取らないから實際の事は判らない。それから胡麻の油を用ゆるが、之も今日では行はれて居ない。併し刃物を研ぐには一張胡麻の油へ砥粉を混ぜて研ぐから、古い時代の鏡も同様な方法を行つたのかも知れない。

其外永年考へて居るに拘らず、今以つて判然しないのは、同古文書に鏡の製作に笶二十根とある事である。何の用に供したものとも分らないが、強いて想像して見ると、轆轤仕掛けて型を取るから、其彈機にでも用ひたものかと思ふ。も一つの像は、鏡の表を研ぐ時彈機仕掛けで砥石や鎚の用ひるから、其彈機にしたのでは、あるまいかとも思はれる。

正倉院の古文書のうちには、なか〳〵興味の多い事が澤山ある。その二三を云はうと思ふ。それは多く、造東大寺司[illegible]調の係に載つてゐる事である。

土に交る銅を洗ひ取る事八百四十一斤、功一百二人とあるなぞは、千年前にこんな事をしたのかとあやしまれる程の事作で

ある。これは普通人には了解し悪い事と思ふが、それは鑄物工場では、溶解した銅を鑄型に注ぐ場合や、仕上をする時にハツリ落した銅片が散らばつて土間の土の中に交るものである。それを碎折水の中でヨナゲして、土と銅とを分ち取る事をする。コス辛くなつた近代の事とのみ思つた工場土のヨナゲを、奈良朝時代にもして居たかと思ふと、多くの親しみを感ずる次第である。尤も人功ひとりで八斤餘のヨナゲをして居る具合を見ると、かなり多くの銅がこぼれて居る様に思はれる。此頃の銅一斤といふのは、今の百八十匁に相當して居る。

炭はいつも福智山から運んで居る、塔の露盤を鑄る型土は、西堀川から運んで居る。又大佛殿、東岡からも型土を運んで居るが、今どの邊であらうかなどゝ考へて見るのも興味がある。また露盤を作る型の料に、四十四荷の葛を採るのに、四十四人を要して居る。この葛は、くずかつらの事と思ふ。形の割れを妨ぐ爲に、用ゐた物と思ふ。今ならば鐵線で間に合ふ所である。

天平寶字六年の三四月の告朔解には、塔に關係した人功を澤山に揭げてある。恐しく大きな露盤と見える。想ふにこれは天平當時奈良東大寺の天空に聳え立つた東西の塔の事と思ふ。東大寺の東塔は、高さ二十三丈八寸、西塔が高さ二十三丈六尺七寸で、露盤の高さが各高さ八丈八尺二寸といふ事である。

この塔に附屬したものと思ふが、塔の基の打出佛五十軀、人功百十人、また九十軀百三人などゝあるのは、今法隆寺や、博物館などにある、所謂銅板の押出佛の様なものと思ふが、塔の基の内部に一面に貼付たもので、勿論鍍金の金ピカであつたであらう。

大日本古文書、家わけ第一の高野山文書之八に、高野山大湯屋釜を鑄たものがある。文安二年とあるから、足利義政頃である。釜の大きさが不明であるが、鐵七百七十七貫目を用ゐたとあるから、大分大きなものと見える。形にもよる事であるが、丹後の橋立の智恩寺即ち切戸の文珠堂に有る様な盥なりのものだと假定するならば、口徑壹丈、高さ三尺のもので厚さを大畧一寸とすると、鐵七百貫許を使ふ事になる。

この釜がもし、口の少しくすぼんだ茶釜にある様なもの即ち吉野山の様なものとすると、胴徑七尺位、高さ四尺五寸位となる。

鑄物大工は寺領山崎の、右衛門尉長總といふもの、脇大工が大和三輪の衛門次郎といふもの。型造りの假屋九間に四間のもの一宇、鎔解爐の假屋八宇、釜鑄立て所の上火氣が散亂して危

險のない樣に四間四方を圍つたものが一字、率行屋一字合せて十一字を造るとある。爐は想ふに夕、ラ八挺を立てゝ、一爐に壹百貫目づゝを鎔したものと見える。

臨時大般若三日、眞讀大般若三日、土公供、荒神供七ケ日など、五月六日から廿七日迄祈禱が行はれる。卯月十三日から、五月晦日迄四十七ケ日地天法が行はれる。

大工鑄師、及び脇大工等の外の多くの平傔鑄師等は、五月廿五日晚景に續々登山して、廿七日の辰の一天から八丁の爐で吹初めて、巳半に吹き畢る。今の時間にして、朝の八時から初めて、十一時に仕舞つた譯だ。殊に天氣は長閑に晴れて無異安穩に鑄たと書いてある。中一日置いて、五月廿七日の巾の刻に釜を掘り出して、翌廿八日申酉の時刻を要して、院內の大衆坊主鉢卷で、香車にのせて大湯屋の北戸口迄引いたと書いてある。

釜鑄に就て錢の出納を書いてある。

五百文　鑄師大工羅登時最初祝如先例

百廿文　鑄師折敷十枚

五百文　鑄師形作初祝小樽一荷肴等

五百文　鑄師大工奈良下向粮物、東大寺釜鑄ニ一見ニ遣レ之

澤山な御祝儀を貰つたり、酒や肴料を貰つて居る。此時代には勞働問題などは起らぬ筈だ。

新らしく湯釜を作るに就て、わざ〳〵吉野から奈良の東大寺迄鑄師を下して、釜の形を見せたもいと見へる。當時の東大寺大湯　釜に鎌倉時代の再建のもので、重源上人再建記によれば、建久八年夏に鑄たる二口の大釜が有る筈だ。

一貫文　安樂院奈良下向粮物、爲ニ東大寺釜一見ニ使節

鑄師の奈良行粮物か五百文で、安樂院さんは倍の一貫文であるが、勿論安樂院さんは御供を　れて行かれたのであらう。

國家安康の銘で、大坂の戰爭を引起した、京都大佛鐘を鑄る時にも、鑄師等は奈良大佛鐘を見に行つたり、三井寺の鐘を參考にしたりして居る。

三百文　鑄師來錢三度渡レ之

三百文　鑄師五月五日節供硯水

此時代に、上流の人たちは無論茶を飲んで居たであらうが、鑄師等も御茶代を貰つて居る。そうなると茶道具はどんな物を用ひて居たか知りたいものだ。

硯水（ケンスイ）、これは御茶うけの事だ。正しくは間炊と書くべきである。今は朝豊晚と三度食事をする樣に成つたが、此時代にはまだ二食であつたのである。そして二食の間に今の御茶うけめいたものを食ふ樣になつたので、そろ〳〵三食になりかゝりの時代であるのだ。當分日の永い春夏の候には、最も働く所の農家

どでは、八つに一度四つに一度硯水をやる。それが一寸した口をぬらす程度のものでなくて、飯をかきこむのである。

地方に依ては、今もケンズイと云つて茶をのみ茶うけを食つて居る處がある。

この笵鑄の時の錢は、泉州堺迄買ひに行つた。

手間賃や食費を計算して見ると、一日分の食物が五拾文、手間が五十文となる樣である、然し判然と云ひ切る事は出來ない。此頃の錢の値が不明であるが、重編應仁記によると將軍義政公、管領細川勝元の時、應仁亂後、文明年間は、米一石銀六匁三分とある。だが、銀と錢との關係が、どうなるか知らない。炭が一俵五十文、鹽が一升十文位である。

こんな事を考へ初めると、通貨と米との各時代の値を手早く知る爲の書物が必要になつて來るが、學者といはるゝ先生方は、ちつともそんな書物をこしらへて與れない。

自分等に一番早く分る樣にして貰ふには、物の値を米で記して與れる事である。米相場の高低があつた所で、米との比較ならば直ぐ分る。そ　例を一つ擧げて見る。

京都禁裏御用の鏡師で、靑といふ舊家が有る。その文書のうちに、天子樣が毎朝御拜をなさる鏡と、御撫物（ナデモノ）といふ合鏡二面都合三面を、御印版のある條に御用命を受けて鑄立てた文書がある。殊に明暦元年四月廿九日附のものに

新主樣　御拜之御鏡　壹面

代　米拾石

御撫物の御鏡　貳面

代　米貳拾石

とある、この御鏡は、多分後西院天皇の御用であつたらうと思ふ。世間に御拜の鏡が殘つて居る。これは徑七寸五分の圓形で、重さが五六百目位ある。

これなぞは、米拾石とあるので、明らかに今と比較して、代金にして見ても能く分る事である。昨今の米が一石四十圓内外であるから、徑七寸五分大の圓鏡が、壹面の代金四百圓となる。尤も靑家では維新頃までもこの種の御鏡は一面の代米拾石であつたさうだ。

鑄物の面白味は何處に在るかと問はれるが、それは矢張材料其物の味がよく出て居れば其れで可いと思ふ。例へば木彫のものには木の特徴があつて、小刀が能く切れるとか、鑿がよく走るとかいふ材料の扱ひ方に在る。象牙なども材料其物を生かして、それに相當する物を當て嵌めて作つたものが良い。支那の玉（ギョク）に

は玉其物の特色があるので、十分にこれを發揮するやうに作られて居れば良いと思ふ。漆器蒔繪の類も、漆に、種々の色があるが漆といふ事をよく表はし、蒔繪も金なり銀なり螺鈿なりの特色を能く出すやうに使つたのが可いと思ふ。尤も漆を使ふ場合に昔から佛像を作るに乾漆といふものがある。その乾漆で肖像などを作つたものが近年よくあつたが、折角漆を使ひながら、其本質を滅却して青銅の鑄物のやうに見させるものがある。之明かに間違つて居ると思ふ。然し物には段々發達の順序があつて、もとはさうであつたものが後發達してさうでなくなる事もある。陶磁器のやうに、初めは只土を燒いて長く持たせるといふに過ぎなかつたものが、釉藥の發明があつて以來陶磁器は玉の美しさを狙ひ、それと同じ美しさのものを作るやうになつた。それが段々進歩して模様をつけるやうになり、それに種々の色が發明され、其後は繪畫と同じ色合を出す事が出來るやうになつた爲め、玉を眞似た事が何處へか行つてしまつて、繪畫と同じ色合を出す事が、陶磁器本來の性質の如くになつて居る。絹や紙に描いたものと、材料や、釉藥の關係で、出來上つたものは、繪畫とは勿論趣味を異にしては居る。

斯うして外の工藝品から考へて、鑄金の面白味は材料例へば銅なら銅の持つて居る限りの性質を能く辨へ、光澤を出すとか、錆を出すとか、或は燒いて斑を出す事とか、或は鑄放しのまゝで砂肌のついた銅らしい色を出すと云ふ點に在る。鐵ならば鐵の持つ黑錆とか赭錆とかの錆色で十分な面白味を出すといふやうな事が必要なのである。一體鐵は捨てゝ置けば必ず黑錆赭錆を出すが、研けば銀色になる。鐵を研いで光つた銀色のものにしても惡くはないが、白い光つた色を出さうなら外に幾らもあるし、洋銀、白銅もあるから材料の意味を感じない。種々鐵を用ひてそんな色を出すには及ばない。鐵は何うしても錆色を見るべきものである。其他の材料には一番貴い黃金で之を用ゆるのは小さい物で、大きなものには用ひない。それも極めて稀な場合に限する。)、黃金と銅との合金である黑い色の赤銅とか、銀と銅との合金四分一などを使ひ、其黃金に似たのに眞鍮などもある。其他一般に金屬は大概材料とする事が出來る。材料によつて各々其味の異なる事は勿論であるけれども、それは專門家にして初めて鑑別し得る事であつて、普通一般にはさういふ細かい味は分るものではない。一般に分ると云ふ點から云へば黃金とか銀とかの貴金屬で作つた物であらうが、之れは只貴金屬であるが爲めに珍重されるのであつて、其出來榮えとか面白味とかは分つて居ないのである。材料丈けを珍重するのなら、寧ろ銀塊なり金塊なりを珍重した方が可からう。

永年取扱つた材料の中で味の深いのは矢張り青銅鑄物で、その次ぎには眞鍮であるけれども鐵などは鑄肌が如何にも面白い。之は其材料から來る面白味で、陶器でも彫刻でも、あとは形とか色とかの面白味になるが、此等の點になると多少の審美眼を有つ人なら、あの形は面白いとか、あの色はいゝとか分る。材料が異つての面白味は、格別其方に面白味を持つて行くまでもない。材料其物の持ち味を出す事だと思ふ。

我日本の青銅の、最も尊い所は、その色にあるので有る。それは緑青色でも群青色でもない、傳世色と云つて、永年人間の手に馴らされる事になると、黄金と銅との合金の赤銅までの黒味はないが、暗黑を持つた色が頗るよいのである。これは白目といふものを入れた爲である。

白目と云ふのには色々有つて、普通の人の知つて居るものはハンダと云ふのであるが、あれではない。銅鑛から銅を絞り取る時に出來る所の、アンチモニー、鉛、錫などの幾分を含んで砒素の多量にある所の白目である。豐後白目、小豆白目などと呼ばれて居るもので、つまり、他に使用の道のない廢物である。この白目を入れる爲に湯走りがよくなつて且つ黑味を持つのである。明治の初年に日本へ雇はれて來て居たガウランドと云ふ英國人が、そちこちの鑛山に居る内に、色々研究した結果を歸國の後發表したものゝ中に、日本銅の純良と白目の關係や、また日本青銅中砒素の存在を論述されてゐる。これ等には我國冶金術の世界に比類のない事などを述べて、殊に青銅中に砒素を入れる事の、傳色上有功な事を述べてゐる。兎に角日本と云ふ國は、外國人の知らなかつた文化を持つて居た國である。

この大切な白目が、西洋風の煉銅術を輸入した爲に、今は無くなつて仕舞つた。

自分等に取つては西洋の文明なんて云ふものは、藝術の益にもなつて居ない。

月光科學

石井重美

一、月と神話

南部阿弗利加の土人ホッテントット人の間では、月は氣候を支配する大事な神として崇拜されて居るので、何となく氣味の悪い暗夜の後に、小羊の角のやうな新月の光が、爽やかに晴れ渡つた夕暮の空の中に、くつきりと浮き出して來る頃になると、彼等は、多勢戸外に打ち集つて、東の空のほの〲と白けて見えるやうになるまで、てんでんに、奇妙な歌をうたひながら兩手を打ち、踊り狂つて月をたゝへる。

月に付ての神話は澤山にある。神話では、月はよく太陽と結び付けられてゐるが、兩者の關係は場合によつて、區々になつて居る。時としては、月が男であり、太陽が女である。また時としては、それが反對である。印度の土人間に行はれて居る神話によると、月は太陽の花嫁であるが、併しながら、此の花嫁はあまり貞淑な女でなかつたから、夫君なる太陽のために斬傷の制裁をうけた。それ故、月は、屢々、中央から切半されたやうな形を現はしたのである。

肉眼で月を見ると、白く、明るく、光つた所と、少し陰のやうに黒くなつた所とある。その黒い所が、見様によつては兎のやうにも見られるので、月と兎との話は、日本ばかりでなく、いろ〲の國にある。

二、西から出る月

吾々の地球には、たゞ一箇の月しかないが、地球以外の惑星には、二つ以上、時には澤山の月を有つて居る者がある。

太陽系中、地球の直ぐ外に位し、其處に一種の生物が住まつて居るといふやうなことを唱へる者があつたために、殊に名高くなつた火星には、「フォボス」(Phobos)及び「デイモス」(Deimos)といふ二つの月がある。之等の月は、何れも非常に小さいばかりでなく(「デイモス」は直徑僅かに十哩にも足らない。)また、その母星である光りの強い火星に著しく近く位置して居るから、それを發見するのには、度の强い望遠鏡を用ひ、餘程の注意を拂つて觀察しなければならない。「フォボス」は、火星の中心から五千八百五十哩の距離(火星の表面からは僅かに三千六百八十哩ばかりの所)に位置し、「デイモス」は、同じく一萬四千六百五十哩の距離に位置して居る。吾々の月と地球との距離は約二十四萬哩であるから、火星とその月との間の距離がどんなに近いものであるかといふことがほゞ推量できる。

また、「フォボス」は、七時間半といふ短時間で火星を一周するから、火星が一回轉をする間に、即ち、その一日中に、(一

間約二十四時間半)、三回以上その周圍を運行することになる。
それ故、火星の表面に立つて、此の愛すべき小さな「フォボス」を眺めて居ると、それは恰度、吾々の月とは反對に、西の山の端から出て東の山の端に沈むやうに見られるであらう。

三、逆轉をする月

火星の直ぐ外に位置する大きな木星には九つの月があるが、その中で一ばん外に位する二つは、それ〴〵、母星から一千四百萬哩、及び一千五百四十萬哩といふやうな遠い距離にある。さうして、その一回轉(公轉)の時間は、一方(八番目の者)は約七百四十日、他(最外の者)は約二ケ年といふ、非常に長いものである。尙ほ、吾が太陽系の惑星に附屬する衞星(即ち月)は、大抵母星の自轉と同じ方向(即ち西から東)に母星の周圍を運行することになつて居るが、上記木星の二衞星は、その關係が恰もそれと逆になつて居る。即ち此の場合では、之等の二つの月は、東から西へと回轉(逆行)するのである。

かういふやうに逆回轉をする月は土星にも一つあるが、此の事實は、衞星の成因、延いては太陽系の成因にも重大な關係を有すべき興味深い事柄である。

四、土星の環

木星の更に外方に位置せる土星には、矢張り九つの月があるが、此の星には、その外に、尙ほ、所謂「環」と稱する非常に面白い物が附屬して居る。之は望遠鏡で見ると、土星の周圍に、恰度縁の廣い帽子の鍔のやうに出て居る偏平な物體で、西暦千六百十年(今から三百二十一年前)、かの有名な、正直な、さうして眞理に忠實な伊太利の天文學者ガリレオによつて發見された。

土星の環は、一見したところでは、一枚の連續した輪のやうにも見えるが、實は三つの、同心圓的に並んだ別々の平たい輪から成り立つて居る。此の中、一ばん外にある輪は、幅約一萬一千哩、その直徑(外縁の)十七萬三千哩(地球の直徑は約八千哩)もある。それから、次に通稱「Cassini's Division」と呼ばれる二千二百哩の暗黑の間隙を置いて、この内側に、幅約一萬八千哩の明るい第二の輪がある。之は内へ行く程次第にその光りが増すので、一ばん光りの強い所では、殆んど土星の本體自身位の光度を有して居る。

中央の輪の内側には、更に一箇の、ぼんやりした、光氣の薄い第三輪(其幅は最外の者と同じ)がある。併し、此の輪は、直

接土星の體に附着して居るの　はなく、其の內緣と土星の體の表面との間には、尙ほ六千哩といふ大きな距離がある。つまり、土星の赤道の部分の周圍には、其表面から六千哩の距離を隔てて、全體の幅約十七萬二千六百哩（輪と輪との間隙をも入れ）の大きな平たい（厚さ約五十哩）輪があるのである。

此の環は、前記のやうに比較的に非常に薄いものであるから、吾々が、恰度、その輪を引き延ばした平面內に立つて、其の緣（へり）を眺めるやうな場合には、餘程度の多い望遠鏡を用ひても、それを認めることが困難である。十五年乃至十七年目毎に、僅時間土星の環の全く見えなくなることのあるのは、さういふ原因からである。さうして、來年あたり、また環の見えなくなる時が來る。それ以外の時には、地球は環の平面を外れて、その上か下に位置することになるから、吾々は、或る時には環の一面を、他の時にはその裏面を眺めることができるやうになる。從つて、言ふまでもなく、外觀上の環の幅は、時によつて、廣くなつたり狹くなつたりする。

五、環の本質

土星環の本質に付ては、昔は、それが一つの連續した固形體乃至流動體の板であるといふやうに考へられたが、後ち、ラプラス、カッシニ、マクスウエル、キーラー、バーナードなどといふ學者の研究によつて、次第に、それが、無數の微小な月の集合によつて成り立つて居るものであるといふことが知られるやうになつた。之等の月は、皆た別々に、土星の周圍を運行して居るものであつて、その速力は、土星に近い者程大きく、遠い者程小さい。キーラーの觀測したところによると、土星に最も近く位置した月は、僅かに五時間でそれを一周するのに、最も遠い者は百三十七時間を要する。何れにしても、隕石位の小さな形の月が、何萬となく小魚のやうに群れて、キラ〳〵と光り輝きながら、非常な勢で空間を疾走しつゝある光景は、到底吾々の想像することも困難なほど美しいものであるに相違ない。

上記の外に、なほ、吾々の太陽系の一ばん外に位する海王星には一つ、その直ぐ內側の天王星には四つの月があるが、地球よりも內側にある水星と金星とには月がない。

六、月の科學

之までは、主に地球以外の惑星の月のことを書いたが、之から少し、吾々自身の月のことを書いてみよう。

月は吾々の夜を照す（此處では寧ろ飾ると云つた方がいゝ

もしれない。)大事な天然のランプである。若し月の光りが無かつたならば、地球の表面が——或は、吾々の此の世に於ける生活が——どんなに淋しくなるであらう。月光は日光のやうに、必ずしも吾々の生命を保つ上に必要缺くべからざるものではないが、若し、夕涼を趁うて湖上に浮べたボートの上に、或はまた、一日の仕事を終へて遠く歸る山路の空に、囁くべき月が無かつたならば、さらでだに寛むることの難い人生の純眞な怡樂の一半は確かに失はれて了ふ。

そのやうに、月が吾々に及ぼす效果の主なものは、その審美的方面である。それ故、吾々があの銀盆のやうな閑やかな月に對する時、或は水のやうな靜かな月光の中に佇む時、吾々は何よりも先づ詩を想ふ。しかも、それと同時に、月の科學を學ぶことも決して惡くはない。いやそれによつて、始めて、月に親しむ眞の目的が充足されるやうに思ふ。月の科學は、決して架なる目の記載ではない。またさうあらせてはならない。

七、月世界の重力

月は、前にも記したやうに、地球から約二十四萬哩の距離にある直徑二千百六十哩(地球の直徑の四分の一よりは少し大きい。)の比較的に小さな天體である。望遠鏡を用ひれば、倍大度の低い者でも容易にそれを一千哩位の距離に近づけて眺めることができる。大きな望遠鏡では、六十哩位の近距離にまで近寄せられる。從がつて、高度の望遠鏡を用ひ、空のよく晴れた晩に、注意して觀察をすれば、一哩の四分の一位の大さをつ有た物體は、地球上から之を檢出することができる。それ故、若し其處に、東京のやうな大きな市街でも存在して居るならば、それは勿論容易に認め得られる。

それから、月の容積は、地球の容積の約五十分の一であるのに、月の質量(目方)は地球の質量の約八十分の一であるから、月の密度は地球の密度よりは餘程小さい。つまり、月を構成して居る物質は、平均して、地球を構成して居る物質より輕い。そんなやうな關係から、月の表面では、地球の表面に於てよりも重力が餘程小さく(約六分の一)なつて居る。從つて、同じ物體でも、月の世界で天秤にかけると、地球の上で測つたよりは餘程輕い。(勿論、測られる物だけに付て考へていふ。)それ故、砂糖でも、牛肉でも、總て目方で取引をする物を、月の世界で買ひ入れ、地球へ持つて來て賣り捌けば、儲かることは受合だ。それから、月の世界で砲彈を發射すれば、別に高空通過などの苦心をせずとも、容易に長距離射撃の目的を達することができるに相違ない。また、ポール・ジヤンプやハイ・ジヤンプのチヤ

ンピオンが、月まで出掛けて行つて競技をすれば、體がフワフワと風船玉のやうに輕くなつて、地球上では到底望まれないやうな愉快なレコードを得られることも確かであらう。

八、空氣を有たぬ月

今、月には空氣が無い。或は多少あつても、それは殆んど無いと云つても差支ない程稀薄なものであるから、其處には、吾々が普通考へるやうな生物は勿論棲息し得られない。月が空氣を有つて居ないといふことを證據立てる事實はいろ〳〵あるが、その中の一二を擧げてみると、先づ、或る星が月の背後に隱される場合を觀察するに、若し月に空氣があれば、星は、月に近くに從ひ、その空氣の爲めに次第々々にその光芒を奪はれて、漸次に薄らぎ、いよ〳〵月の本體によつて被はるゝに及び、始めて全く吾々の視界から沒すべきであるのに、實際はさうではなく、星は、月の表面に接觸するまでその光輝に何等の變化を示さず、それに觸れると共に忽然としてその姿を消す。また若し月に著しい空氣があるならば、月の表面は、その爲めに風化侵蝕をうけて、いろ〳〵の特徵を表はすべきであるが、事實斯樣な形跡は一つもない。

尚ほ、月には水も無い。若しそれがあれば、何れ蒸發して一種の氣層を作り、時には雲霧をも形成するであらうが、吾々地球の空にして晴れて居るかぎり、月の表面は、いつ眺めても、研ぎ澄ました鏡のやうに冴えて、その荒れた肌を裸のまゝに露出して居る。

そのやうに、月には、雰圍氣がないから、光線が散らかることがなく、物の陰は漆のやうに暗く、天空の星は、何時も眞黑に深い空の中で物凄いやうに强くギラ〳〵と輝き、吾々地球の上に住む者の眼には、仄かな霞のやうにしか見えぬ天の川も、其處からは、著しく明るい、鮮やかな光帶として、眺められるであらう。殊に、月よりは遙かに大きな(約四倍)直徑を有つた地球の姿は、喩ふべくもなく美しいものであるに相違ない。

九、空氣の散佚

どうして月は空氣を有つて居ないだらうか? かういふ疑問は自然に其處に起つて來る。此の問題の解決に付ては、月が最初から全く空氣を持つて居なかつたと觀るよりは、後にこれを亡失したものと觀る方がより多く自然であるやうに思はれる。然らばその空氣はどのやうにして亡失されたのであらうか。此點に付て注意すべきことは空氣の分子が空間に向つてだん〳〵に散逸して行つたといふことである。一般に瓦斯體の分子は、

からそれを拘束する力がなければ、互に遠く飛散しようとする傾向を有つて居るが、その拘束の主な役目を果すべき重力が月の場合には(前述したやうに)比較的に弱く、その上、月の一日は非常に長くて、吾々の計算の標準からいふと、約十四日間は連續して激しい日光の直射をうけるから、かたく\、如上の分子散亂の作用も著しく行はれる譯である。

恐らくは、そんなやうな事情から、火山作用その他の關係で一旦月の周圍に生成された空氣も、月が無限の空間の中を遍歷して居る間に、次第々々遠く離散して復た歸らなくなつたものであらう。

若し月が、その自然に出來た空氣や水を保つことができるくらゐの大きな體(從つて强い重力)を有つて居たら、或は、地球のやうに、其處に特殊な動物や植物が現はれたかもしれない。併しながら、さういふ空氣や水が無い爲め、今、月は、全く死んだ冷たい石の塊となつて居る。其處には、河もなければ、湖水もない。また海もない。勿論山を裝ふべき霧も雨もない。總てがたゞ荒れすさんだ石原である。

此の點から云へば、比較的に大きな體と重力とを有つて居る地球は、今のところまだ餘程幸福といふべきである。

十、月の温度

月は約二十七日にして一回轉(自轉)をするものであるから、その約十四日間は連續した晝であり、約十四日間は連續した夜である。此の最初の長い十四日間、月は、間斷なく熱い日光の直射をうける。而も、前掲の如く、月には何等の雰圍氣が無いから、月の表面は何時でも直接爛れるやうな强い日光に曝露して居る。それ故、其處では、日中温度の上昇すること甚だしく、殆んど華氏の二百度位にまでなると云はれて居る。

恰度それと反對に、夜はまた非常に寒くなる。空氣が無い爲めに、月の世界では、夕榮も何もない。日が西に沈むと共に、忽然として、墨のやうな夜の帷が四面を閉じて了ふ。さうして、晝間燒けるやうに熱くなつて居た土地は、急激にその熱を放散して、僅か一時間か二時間の後には、その温度がもう氷點以下になる。一二日の後には、零下百度位までも下る。そんなやうな、恐ろしく暗い、冷たい夜が、何日も何日も續く。さうして、終には、殆んど、天體と天體との宇宙の間の間に支配して居る所謂「絶對零」(攝氏の零下二百七十四度)といふ驚くべき低温度に近いまでに冷却する。

かういふ温度の關係からも、月には生物の存在(生存)が許さ

れない。

長い〳〵退屈な夜がやう〳〵過ぎて、日の出が近づいて來ても、月の世界では、あの美しい漲るやうな、薔薇色の曙の光りを見ることはできない。日光は、夜と同樣に、突如として其處に侵入して來る。

十一、月の海

月の表面は、前にも云つたやうに、空氣や水の侵蝕作用がないから、著しく粗鬆である。其處には、多くの孤立した山や、連續した山脈がある。また、何萬といふ深山の所謂「噴火口」("Craters")がある。それらの土地の隆起の間には、方々に、ガリレオ以來一般に「海」("maria")と呼ばれる比較的に平坦な大きい地域がある。之は、月の表面であの薄黑く見える部分であつて、ガリレオ及び初期の學者は、それが實際水を湛えた大海であるやうに信じて居たが、後來の研究によると、其處には勿論水も何もなく、たゞ荒涼なる石原の連續があるのみである。併し、海といふ呼稱は今尚ほその儘繼承されて、「靜けさの海」、「雲の海」、「死の海」、「夢の海」などといふ面白い名前が、それらの部分を表はす爲めに用ひられて居る。

十二、月の山

現在では月が、自分自身一回轉する時間と、地球の周圍を一回轉する時間とが、恰度一致して居る。之は實に不思議なやうな事實であつて、その爲め、吾々の眼に映る月の姿は、何時も、たゞ、大體、その同一の半面である。他の半面は全くそれを覗ふことができない。實際、何時見ても月の面は同じやうな相をして居る。月の中の　は、春でも、夏でも、秋でも、冬でも、何時も同じやうな形をして餅を搗いて居る。

最初から、月の自轉と公轉との速度がこのやうに一致して居つたかどうか、それは甚だ疑はしい。寧ろ、多くの學者は、初めはそれが互に相違して居たものであるが、地球から受ける引力(或は他の、尚ほ不明な力)の爲めに、次第に兩者の一致を見るやうになつたといふやうに推察して居る。

それは兎に角、そのやうに、月は何時も同一の半面のみを吾々の方に向けて居るが、その半面には、十の山脈がある。月の山は、一般に、非常に急峻であつて、且つ高い。その立つて居る周圍の平地から二萬呎以上も高く聳えて居るものもある。若し、地球に、之に相當する割合の高さを有つた山があれば、それは、實に、十五哩以上の標高を示すべきである。月の世界に、

さういふ險しい、高い山の多いのは、それは、恐らくは、月の表面に於ける重力が小さい爲めに、其處では總て物の目方が比較的に輕く、他から力が加へられると、著しく高く上て上る傾向のあるのと、それから、水や空氣の侵蝕作用が無いから、山や峰も崩されることがなく、一旦高く持ち上げられたものは、何時までもその高い形を保つて居ることなどに基因するであらう。

月の山には、「コペルニクス」、「プラトー」、「アリストートル」、「ケプレル」、「ニユートン」、「トレミー」、「アルプス」、「アツペナインス」などといふ、昔からの偉人や、地球上に於ける有名な山の名前がつけられて居る。また、月の南極には、佛國の名高い天文學フラマリオンから、「永久の光りの山」と呼ばれた大きな山脈がある。其山脈の峰には、日光が何時も沈むことなく耀いて居る。

十三、「噴火口」と其の成因

月の表面には、大小無數の圓い凹みがあつて、恰度疱瘡病者の皮膚のやうな觀を呈して居る。之が所謂月の「噴火口」であつて、これまで月圖の上に記されたゞけでも、その數が三萬以上ある。

月の噴火口は、非常に特異な物であつて、どんなに小さな望遠鏡でも、それが鮮やかに眺められる。月の南極に近い處に、位置してゐる「チヒヨー」といふ噴火口などは、特にその形が著しくて、肉眼でもそれが認められるくらゐである。此の噴火口は、直徑約五十哩、深さ約一萬七千呎を算し、その中央には、六千呎の峻峰が屹立して居る。その他、尚ほ、直徑百哩以上の大きな噴火口もある。

噴火口と云へば、直ぐにそれが火山的の産物であるやうに理解されるが、併しながら、此處では、たゞ形の上の大體の類似からさういふ名稱が用ひられて居るのみで、それが果してさういふ關係の物であるや否やといふことに付ては、學者の間にいろ〳〵の說がある。

若し、それが、火山活動の結果であるとすると、直徑何十哩、或は百哩といふやうな大きな噴火口を作るその活動は、吾々地球上に於て見られる類似の現象に比較して考へると、到底想像することも困難な程の大規模なものである。また、そんなに激しい火山的活動があつたならば、噴火口の形成と共に、それにつれて、一方に、矢張り莫大な鎔岩の流出がなければならない筈であるのに、實際は斯樣な形跡が見えない。そんなやうな事情から、月の「噴火口」の火山性に付ては、尚ほ多くの疑問を挾むべき餘地がある。

火山說に就て、月の噴火口の成因を說明する說に、瓦斯爆發說がある。此の說によると、月がまだ今のやうに全くの固塊とならず、多少軟かい物質から成り立つて居つた頃、その皮殼の下に多量の瓦斯が蓄積し、それが月の收縮の爲めに壓迫されて終に爆發し、噴火口を形成するに至つたのであるといふ。

單なる氣泡 爆發によつて、五十哩、六十哩といふやうた大きな噴火口の出來るといふことを想像するのは、火山的活動によつてそれが出來たといふことを想像するよりも更に一層困難なやうである。その上、此の說では、噴火口の中心に屢々存在する山岳の起源を說明することも難かしい。

十四、隕石說

終りに、ギルバートの隕石說がある。此の說では、大小種々なる隕石が月の表面に落下した爲めに、上のやうな噴火口が出來たのであるといふ。地球の表面へは、今でも、時々、何噸といふ重さをもつた大きな隕石が、恐ろしい音響と共に天空から墜落して來ることがある。それと同じやうに、月にも隕石は落下するに相違ない。而も、今から何百萬年といふ遠昔には、さういふ隕石の落下も今よりは餘程多かつたと思はれる理由がある。つまり、月が、曾て、（地球も同樣ではあるが、）非常に多數の、而も巨大な隕石の、凄まじい包圍攻擊をうけたものと想像するのは、それ程不合理なことではない。その上、隕石が地球の上に落下する時は、地球を包んで居るいろ〳〵の意味で大切な空氣の層が、此の場合にも恰度一種の安全辨のやうな作用をして、著しくその破壞力を減殺するのであるが、月にはさういふ空氣の層がないから、隕石の衝擊はその極度の威力を發揮する。それであるから、もし、直徑何哩といふやうな大きな隕石が、怖ろしい勢で落下して來たら、月の表面が假令非常に堅固な岩石から成り立つて居たとしても、それは、恰度、柔かい泥沙の上へ礫を投げ付けた時と同じやうに、容易くその邊の皮殼を破壞し、現在見られるやうな巨大な噴火口を作出することも強ち無理ではあるまい。

尙ほ、隕石との衝突に因つて生じた多量の熱の爲めに、その部分の皮殼が液化し、場合によつては、大きな爆發をも誘致する可能性がある。前にも述べたやうに、噴火口の中央には、往々、急峻な高い山が聳えて居るが、さういふ山は、隕石との衝突の反動として、或はその折に發生した夥しい熱の作用によつて、起生せしめられ得る。

更に又、以上の隕石說は、割合によく實驗の結果と一致する。即ち、砲丸のやうなものを地球に落下せしめて出來た窪み

ると、それは、屡々、月面にある噴火口と非常によく似て居る。また、此の說は、衛星や遊星が多數のプラネッテシマル（微小な惑星、卽ち巨大な隕石）の合着癒合によつて出來たといふ、現今有力な太陽系創造上の一說所謂プラネッテシマル說（微惑星說）とも恰度一致するので、一層多く有說上の便利がある。

隕石說に付て茲に一つ附記して置かねばならぬことは、月にのみそのやうに澤山の噴火口があつて、何故に地球にそれが無いかといふことである。地球にも勿論隕石は墜ちる。さうして、時には、かなり大きな、擂鉢のやうな形をした凹みを地面に造ることもある。併し、月に比較すれば、全くそれは無いと云つてもいゝ位に少ない。それ故、月から望遠鏡で地球を眺めても、其の表面は、（少數の眞の火山的噴火口はあるけれど、）決して、月に於けるが如く、痘痕ある者の皮膚のやうに、穴だらけには見えないであらう。

廣い天空から云へば、地球も月も極めて接近して太陽の周圍を運行して居るのであるから、若し月が多數の隕石の攻撃をうけるといふならば、地球も、矢張り、大體それと同じくらゐ激しい攻撃をうけなければならない。それであるのに、月にのみその結果多くの「噴火口」があつて、地球に無いのは何故であるか。此の疑問に付てはまた左のやうな辨說がある。卽ち、地球にも、勿論、往昔、無數の巨大な隕石が落下し、所謂「噴火を形成したのであるが、しかしながら、地球には月に見出されない空氣がある爲めに、風雨の侵蝕作用が激しく、曾て存在して居た多くの「噴火口」も、それによつて恐く削減消磨せしめられた。何百萬年といふ長年月は、斯樣な結果を齎らすに十分である――といふのである。

何れにしても、月の「噴火口」は、一面月に最も特異な外貌を與へるものであると共に、他面衛星（延いては他の一般天體）の成因乃至運命に付て一種の有力な暗示を與へるに非常に興味のある事柄である。

十五、月面の放射線と裂罅

月世界の比較的大きな噴火口（殊に、肉眼でも見える月の南極に近い處にある「チヒョー」、及び、月の中心より少しく北東方に寄つた所に位置して居る「コペルニクス」などといふ噴火口）には、其處から八方に射出した、恰度車の矢か線香花火の火花のやうな美しい筋が見える。此の放射線は、途中、山や谷などによつて遮斷せらるゝことなく、時には殆んど二千哩といふ遠方までも走つて居ることがある。滿月の時には殊に鮮やかにそれが見える。

放射線は、太陽の光りが斜にその部分を照らしても少しも影といふものを造らないから、それは周圍から隆起しても居なければ、陥落しても居ないものであることが判る。その成因に付ては、或は、それは、巨大な隕石が墜落衝突した刹那に、比較的淡色の物質が四方に散亂して出來たものであるといひ、或は、それは、火山から噴出した鎔岩の流れであるといひ、或はまた、それは、噴火口の生成と共に造られたその附近の皮殻の裂口に、下方から湧出した淡色の物質が填充して出來たものであるとも云はれるが、併しながら、それらは何れもたゞ一箇の想像であつて、此の月面の放射線の本質は、依然として今尚ほ解かれざる謎である。

月の表面には、其の外尚ほ多くの溝がある。之は、長さ百哩以上に及ぶものもあるが、通常著しく狹くて、幅僅かに一哩乃至半哩、深さは四分の一哩位に過ぎない。

地球上には此の月面の溝渠狀物に比すべきものがない。たゞ、形態の上からは、北米コロラドの大溪谷などがそれに似て居るが、しかしながら、月には水が無いから、之を、水流の侵蝕の結果生じたコロラドの溪谷と同一視すべきではない。そこで、此の溝渠狀物の起原に付ては、それが、激烈な火山活動の折に生じた裂罅であるか、或は、比較的小さな體積をもつた月が、急激な冷却と收縮とを行ふ際に得た龜裂であるといふやうな說が專ら行はれて居る。

兎に角、吾々に最も近く、且つ、吾々の地球に隷屬して居る天體である月に、既に、さういふ、地球上では見られないやうな異質の存在して居るといふことは、興味深いことである。

遊歩中の地質學

＝秩父鐵道長とろ案内＝

理學博士 神保小虎

地質學の如き野外の學問には暑氣、寒氣、風雨其他の害に會ふ事を少しとせず、然れども夏甚しく暑からず、冬甚しく寒からざる土地に東京より日返りの遊覽を試みて地質を見んとせば愉快の間に此學の大要を聊か覗ふことを得べし。

東京より約三時間にて達する秩父の長瀞附近は其一例なり、左に殆案內者を要せざる地質學遊覽の筋書き步行往復二里を試みん。

上野の停車場を朝の七時過ぎに發車して熊谷(中仙道)にて秩父鐵道に移れば十二時前に寶登山停車場に達す、此所より長瀞へ二丁にして遊覽地の入り口なり。

驛夫は病氣を知らぬ樣なる人にて快く遊覽者の問に答て行く先きを示す。此人誠に活潑にして之に雜問を浴せるも氣の毒の恐れ無し。

長瀞へは一と走りなれども先づ停車場を出でゝ寶登神社(五六丁)に參詣せよ、驛の休み茶屋多き所を通り過ぎれば茶店に介の化石などを賣る所多し。

名物のお土產とは云ひながら茶店の化石と繪葉書とを買ひて返れば、之を用て一寸人に向ひ一時間の素人講義に我が半日に學び得たる博識を人に示すに足らん。

倘ほ驛前の小店に實用の地質學、岩石標本などの看板ありて其物は既に永く賣り切れなるも可笑し、兎に角秩父は日本の地質調査の第一着の地にして、秩父古生層と呼ぶ一群の岩石は秩父の物なり、秩父を踏まざる斯學の人は論語を讀まざる漢學者と同じく肩身狹し。

寶登山の神社は山の麓に在りて狹き自然の谷を以て庭と爲せり、本堂は木蔭涼しき所に接し、社務所の二三の大室は前に洒落れたる庭ありて「御休憩御隨意」とあり。

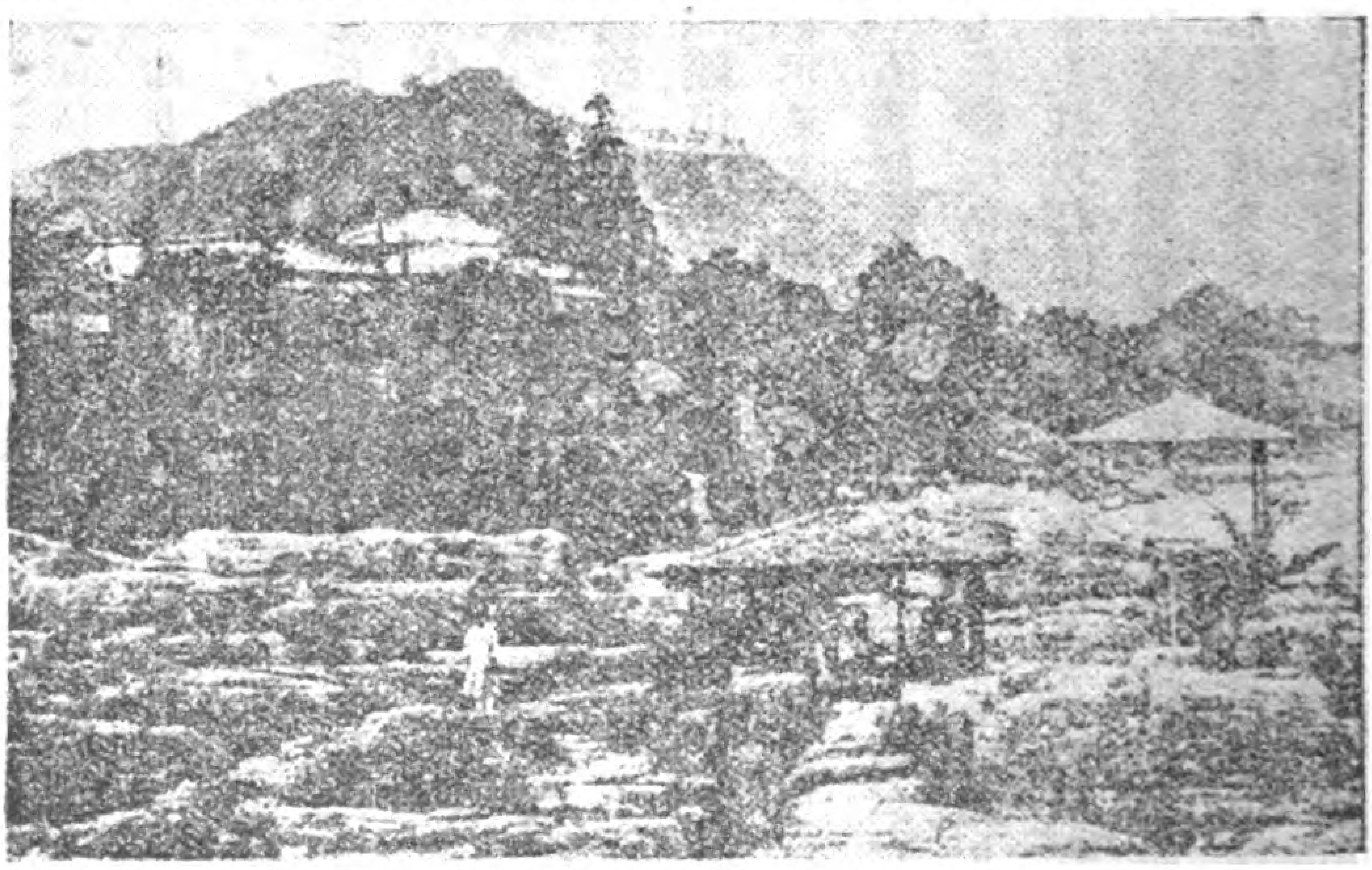
社の宮司鹽谷君は教育家にして教育上の會を此等の大廣間に

にて催すことあり、談論は痛快にして若々しく見ゆる人なり。
文官高等又た判検の試驗には此社務所の室を借りて勵るゝ人もあり、又た講中の大群に對しては別に大なる二階造りの家もあり、鹽谷君が其部下に號令する時は百餘の信者が突然投宿するも泰然自若たるものは此社なり。

社務所にも岩石露はれて、此山は此石にて成ると曰ふことを示す、但し苔むして其質明瞭ならずして、地質を見ること便ならず。

明瞭を岩石に求むれば社を辭して長瀞に行け、停車場より僅二丁の道は平坦なる土地にして、此平坦にも意味あるなり、今日の荒川(都島に名高かゝりし隅田川の上流)は此地を幾千年か或は一層長く流れ岩に掘りこみて今は低き河床を流れ此平地の上迄では汎濫せざるも昔しは汎濫して其土砂と礫とを以て此平地を築き作りしことは今の川床の土砂と小石が河原の平地を作すに同じ、彼の平坦なる地面を古き河床の段即ち河成段丘の一段なりとす。

既に河の掘り込みと曰ふ語を出したり、雨水が東京の赤土(固結せざる火山灰の分解して酸化鐵にて色附きたるもの)の上を流れて小さき川の如き溝を作ることは誰も常に見て其成因を疑はず、但し寶登神社の岩石、長瀞の岩石の如きものは赤土よりは堅し、一河が之を掘りて河床を低くせしことは水のみの働きと曰ふべからず、水が流す礫が河底を磨りて掘りしものなり、



(岩の上の茶亭と旅館)

長瀞に至れば、彼の平地より二十尺位低き處に下り、此所は岩石のみの天然の庭を爲す、此岩石は河に露れたるも停車場の段地には見へず、一般に土地の主なる岩石を見るには河の岸の底に露れたるものを尋ね又た道路の切り取り、嶮岨なる谷の岩等にて見るなり、此庭に四阿(アヅマヤ)作りの休憩所三四あり、又た停車場に近く荒川に臨みて長生館と曰ふ旅館あり、此

邊を鮎漁の場所と爲す、此天然の庭は長さ凡七丁幅凡一丁の間に一面岩石を示し、多少の起伏あり又た南北に走りたる平行の堀多く、其一は今日の荒川の本流にして、岩石の絕壁壯大の觀あり、又た他の一は白鳥島と呼ぶ一岩塊の背後に走りたる舊河床(洪水の時にのみ水流れ平常は砂地)なり。

彼の岩石が此所一面に擴がりたるを見るに其岩に南北に走りたるヒビの夥しきことは直ちに見へ、此等のヒビに礫が衝突すれば其所は最も多く削られて凹む所なり、故に自然に方向の南北なる堀が此所に夥しきことを示すなり、

尙ほ其岩石は全くが坦に層を積みたるが如き狀態に非ずして厚紙を何枚も相重ねて且つ輕く之を横より押して曲げたるが如き觀あり。

抑も岩石は總て堅きものなるが故に厚紙又たはゴム板又たはハンケチの如くに皺を生じて曲ることは一寸考へ難きものゝ如きも、元來此處の岩石は今日の如くに地表に露れたるものには非ず、地中の深き處にありて謂ゆる土地の變動又た川の壓力などの働きを被りて靜に氣を永く壓されたるが爲めに曲り且つ押し上げられて後其上の岩石が削り取られ今も地表に現れたるものとす。

岩石の曲り方を善く見れば種々ありて、少しく曲りたるものあり、一層曲りてヒビの入りたるもあり、又たヒビに沿て一方の岩石が落ち込みたるものあり、落ち込みの證據には元は白黑綠の岩石が正しく重なりて青綠白の菱餅の切り小口の如きものがヒビの兩側に同色のもの相接觸せず白と綠とが相接するが如き食ひ違ひを示す、斯の如きヒビに沿ひたる辷りを斷層と名く。

曲りに因て生じたるヒビは或は其儘に口を開きたるものあり、又た硅酸の水溶液が來り其中に硅酸の沈澱を生じて之を充たし石英脈を生じたるを見るべし。

此等の石英脈は時に金銀其他のものを含むことあれども、鐵銹の如きもの(酸化鐵)の多く存在して外見汚れたるもの程鑛山探檢家が注目して掘り込みを試むるものなり。

鑛山師が「燒け」と呼ぶは主として此酸化鐵のことにして、之を示さゞる純白の石英は多く鑛脈としては價値無きものなり。

石英脈の外に尙ほレンズ形の石英が岩層の間に多く介りたるも長瀞にあり、此岩のみの廣き庭に到り其上の茶亭に憩ひて風景を眺むれば東京近傍には珍らしき風景なるに感ずべし、(圖を見よ)秩父赤壁と曰ふは長瀞にあるが如き白、黑、綠の色の岩石にて成りたる大絕壁にして荒川の東岸に立ち、其對岸に長生館と呼ぶ清潔なる旅店あり、四時來觀に適すれども夏の鮎漁の時に最も客多し。


（秩父赤壁の景）

圖に示したる小茶亭は岩のみの庭に在り、岩面は年々洪水に沒するを以て此清淨の地に俗惡なる家屋を建つることを得ず、內務省の史蹟名勝天然紀念物保存事業と異りて人の手を要せず天然に名勝地の風致を良く保護するは此洪水の功なりとす。

長瀞の長生館に對する白鳥島は岩石の一塊にして其上の岩には丸き水風呂の如き大穴あり、此島へは長生館の前より小舟にて渡るべき設備あり、此穴は昔時荒川の水が此高所を流れし時水の渦にて礫を轉じ其礫にて磨り減らし穿ちたるものとす、木曾の寢覺其他に斯の如きもの多し、又た其傍には岩の割れを廣く創りて開きたる切り通しの如きものあり、又た斷層の面に於ける岩石が磨擦にて爬かれたる平行の線は其附近の岩石にて多く見るべし。

之にて水流が岩を削るといふ說明を終りたり、尙ほ游泳を長瀞に試むる人は水理に委しき人に聞きて岩崖の裾の深く削られて戶棚の如きもののあるを避けざるべからず、岩崖に衝突する流水中の礫は兎角に斯く岩の裾を深く切り込むものなり。

長瀞の岩石のみの庭を過ぎ少しく上流に赴けば、小き砂地に至る其砂の高き處と岩の庭に於ける林の樹に掛りたる枯れ草などは現時の洪水が流し來りたるものが其何程の高さに達するかを示すものにして洪水の恐ろしさを思はしむ、之より細き道を隨意に取りて尙ほ二三丁上流に赴けば松の大木が四五本立ちたる岩石の岬ありて岩の上には小き石の祠あり、此所に濃綠色と黑色の岩石と相重なりたるを見る、此綠色の石には黃色を帶びたる白點と金屬の樣に輝く黑き點とあり、白き點は圓くして結晶の形無きも黑きものは新に割りて見たる岩片には正しき八面體の形を示す、若き人は肉眼にて良く之を認むべし、之に反して彼の白きものは新に岩石を割りたる小口には殆ど目に留らず、卽ち岩石を見るに永く風雨に曝れたる面を見て明瞭なる粒と新に割りたる面にて明瞭なるものとあるなり、又た岩石中一

鑛物にして形の完全なるものと形の丸く生じたるもののあるを知るべし。

此岩石の岬より上流に向へば河原の水際に低くして大なる岩石が立ちたるを見るべし近づきて見れば黑き薄層と淡緑又は白の薄層と相重なりたる状態の極て亂雜なることを見るべし、之を著しき岩石の皺とす、恰もSの字を上下に押しつぼめたるが如し。

此所の河原にて見る所の礫に大なるもの徑一尺に過ぎ最も堅き質のもの程共大なるを見る是れ荒川に因つて上流より運ばれ來る間に軟きものは多く碎けて小さく成ることを示すなり。

之より河原を去りて畑地に登り隨意に小徑を取りて西に向ひ進めば鐵道を横りて縣道に出づ、縣道を之より少しく南(上流)に進めば脩文堂　曰ふ書物文房具店の前に至る此家に就くべき大看板を掲げて秩父地質絵葉書を賣り居たるが今は看板のみ殘りて其物は賣り切れたり、一時は秩父に地質學に志したる小學教員などの夥しきを此看板にて知るべし。

此繪葉書の一組は尚ほ之より十四五丁の上流なる國神村字金崎の角屋旅館の廊下に掲げありて地質學の講義に要する地層の變動圖、化石の圖、水蝕の圖其他を集めたるものなり。

尚ほ秩父鐵道會社は長瀞地質遊覽案内と稱する一枚刷のものを人に頒ち居れり、其れにて此地方の地質圖、地形圖、風穴の圖、化石圖等を見るべし、(脩文堂の背後に破れたる古墳の穴あり)脩文堂の前を經て上流南(へ)縣道を進めば四丁位にて右手に大なる碑文あり、山側の小高き所の岩の上に立てり、碑の石は陸前石の卷の附近の砂質粘板岩なり、縱てに黑き縞の模様あるは其地層沈澱の面を示し、此線を碑面に露したるは彫刻の便と模様の美を計りしものなり。

碑の立ちたる岩石は白と淡紅の薄板が相重なりたるものにして、其紅色なる部分には紅簾片岩と名くる鑛物あり、其爲めに色赤し、此岩石は世界に珍らしき岩石にして紅簾片岩と名く、此珍石を採ることは此所にて行ふべからず、此所は聊か庭の形に造りたればなり、碑の前より一丁にて親鼻橋とを渡りて荒川の右岸に至りて、洪水の見張り小屋に下だりて、橋の下に至れば彼の美しき岩石と同じもの夥しく現はる、此處にて之　採集すべし、洋行する人は其一片をポケットに入れて持ち行きて先方の地質學の人に其性質を説明すれば一寸博學の感あるべし、是れは兎に角西洋人の目に甚だ珍しき岩石なり。

此石の粒の粗らき所を打ちて粗粉となし、お醫者様及び生物學者が常用する顯微鏡下にて水に濡らして見れば赤黄紫の粒を夥く見るべし、此三色は唯一種の鑛物の色にして、顯微鏡の下

にある鏡の反射にて不完全ながら偏光となりたる光線に因りて謂ゆる鑛物の多色性を表はしたるものとす、又た種々の鑛物の粒を油に濡らし見る時は其輪廓の明不明によりて其粒の光線屈折率を比較することを得、又た謂ゆる累帶及び集片双晶をも見ることを得一層明かに岩石中の鑛物粒を見るには謂ゆる岩石顯微鏡を用ゆるを規則とすれども、通常の顯微鏡にて岩石を見ることも亦た有益なること多し、岩石顯微鏡は稍高價なるを以て教育縣の異名ある長野縣にすら全縣の學校に數臺あるや否や疑はし。

岩石を薄片に作りて顯微鏡にて見るには一枚約五十錢にて製造人に命ずべきも、唯岩石中の鑛物を見るのみにて其集合の狀態に注意せざる時には粉末と爲して水（又は餘りにガラスの上にて擴らぬ油類）にて濡らしガラス（通常の窓ガラスの破片にて可なり）の上に置きて顯微鏡下に見るも可なり。

ガラスの上に一滴の水を置く時は甚しく廣く延びざるも石油は然らずして四方に延びるなり、是れ石油はガラスに善く馴じみて之を廣く掩ふ所の性質あり、此性質を序に見るも面白し、鑛山にて鑛石の微粉を水と油とに混じ攪拌して油にて善く包まれたる鑛石粒が油と共に水に浮かみ之よりも遙に輕くして油に馴じざる石粒は水底に沈むことを以て謂ゆる鑛山の浮游選鑛と爲すなり。

親鼻橋を渡る前に南を眺むれば是れ迄の河畔の地勢が廣濶ならざりしと異りて土地俄に廣く開き、荒川に沿ひたる河成段丘は家の緣側の如く其背後には低き山が池の漣の如く見えたり、此の低き山は後に見物する所の罌澤に露れたる砂岩（砂の固まりたるもの）頁岩（粘土の固りたる岩石）等の如き軟き岩石にて成れり。

其背後には武甲山が高く聳へ、日の當り方にて其外皮を爲す所の石灰岩は白く且つ少々靑みがゝりて見ゆるなり、武甲山が全部石灰岩にて成るに非ず、其の外皮は厚き石灰岩にて成り、森林の間より石灰岩の露れて大なる斷崖をなすものを遠望すれば時とし、瀑とも見ゆるものあり。

武甲山より西と西北とに續きたる山地は武甲山に於けると同じく謂ゆる秩父古生層と曰ふ岩石にて成り、頗る山高くして險岨なり。

武甲山より東北に見ゆる山は其奥の方には高き險岨なる古生層の土地なれども、其西緣なる荒川沿の山は之に反して土地險險ならざること親鼻橋以北の地にて既に見物し了りたるが如し。

之を岩石に因りて地勢の差あることゝす。

親鼻橋を渡りて戻り荒川の左岸に出る、鐵道の支線の終點

て貨物のみを扱ふ荒川驛に向て縣道を進み、之を過ぎて少しく川より離れたる所に至り少しく上ぼれば縣道は山崩れの跡にて年々改修に忙しき所に至る、之を尾阪の山崩れ跡と爲す。

山崩れの特徴として馬蹄形の崖を現し、其線に浴て土地の陷落して辷りたることを示す、即ち馬蹄形の線の中に圍まれたる土地には不規則なる裂け目ありて所々に水溜りを生じ又は穴を作りあり、總て土地が破れて辷りたる形とす、勿論其上にある樹木には斜に傾きたるもの多し、此尾阪の山崩れは明治三十五年頃の大雨に因つて起り其後道路の改築を行ふこと屢なるも今日尙ほ土地が充分に固定せず、馬車の通ずる所が常に辷りて平地に棧道の如き橋を見るも奇なり又た此橋は常に陷落する形勢を示せり。

此所の道路より河迄では一町内外の斜面にして、崩れて辷る土砂が川に降る狀態は親鼻橋より遙に望むことを得べし、橋よりの眺望には此山崩れと列びて美麗なる蛇灰岩(蛇紋岩の一種)を採掘する大崖あり。

次に縣道を進むこと山崩れより約四丁にて郵便局に至り之より舊馬車道を一町餘下流へ進みて金崎の蛇紋石の所に至る、此處より出す大石は東京にて多く裝飾石材として用ひらる。

同樣なる石は尙ほ秩父鐵道黑谷の停車場の東半里乃至一二里の所に數個所の掘り場あり、然れども其最も運搬に便なる丁場は彼の山崩れの傍のものなりとす。

蛇灰岩の美觀は東京の丸の內の工業クラブに大なる石柱として大食堂に用ひられ又た京橋木挽町の商品陳列館の入口帝國劇場の入口、其他にも之を用ひたるを見て知るべし。金崎の郵便局の向ひ側にある角屋旅店の入り口の額に同岩の良く磨きたるもののあるを見る。

此美しき岩石はロシヤ國ペトログラードの大なる一寺院にも多く用ひられたるを見たり、其產地は恐らく地中海のギリシヤ國の一島ならん。

金崎の蛇紋岩は寶登山其他に於けるが如き漸く剝げたる岩石の層の間に挾りたる塊を爲せり、是れ元來は他の岩石なりしが後に質を變じて蛇紋岩と爲り、又た其蛇紋岩は無數のヒビにて網の如く貫かれ、其ヒビに沈澱せる白色の方解石其他のものは此岩石に美しき模樣を作りしなり。

再び郵便局に戻り之より角屋旅店の前を右に曲り約二丁にて小さき白壁の家より左に畑道を入り、蟹澤の水車に至れば川に大なる輪の如き曲りありて、同じ川の上流と下流とが僅に幅十尺程の陸を介みて將に相附着せんとする所あり、此所に長さ十尺計りのトンネルを切り水を落して瀑となし之を以て水車を廻轉

す。水力電氣工事に於ける水の落差を得るには之よりも遥に長きトンネルを穿ちて高所より水を落すなり、其規模は異れども要點は黑澤の水車の設計にて說明すべし。

水車の小屋の上に大なる岩石あり、砂の固りて成りたるもの(砂岩)にして中に小さき介化石を夥しく含みたるも完全なるものを得難し、此化石の如きは往々大學學生其他が來觀するが爲めに小屋の人が善く其存在を知れり、此等の化石は海の介なり、化石とは必ずしも石に化したるものに限らず介などが土砂其他に埋まり其土砂が硬化して岩石となるも其介などの形又たは物質が殘りたるを云ふ、砂岩の所は粘土の固結して成りたる岩石(頁岩)の間に介まりて二三尺の厚さあり、丁寧に觀察すれば數個に切られ、其切れ々々が少しづゝ辷りて喰ひ違ひを爲せり、此れ亦た斷層の例なりとす。

頁岩は此附近にて介の化石を含み雨後の崖崩れの時には其崩れの土砂中に介化石を見ることあり平常は殆之を見ず。

頁岩は灰色なれども亦ヒビ多くしてヒビに酸化鐵の沈澱あるを以て遠くより見れば殆褐色の岩石と誤るべし。

又た頁岩には緻密灰色なる團子の如き塊を包み其徑五六寸より一二尺のもの多し、是れは粘土と石灰の泥合にて成り、粘土の沈澱物より石灰質の溶液が凝集點を形づくりしものとす、此等の塊は塊球と呼び、其質に似て此所のものを泥灰球と名く、泥灰球の中にも時に介化石あり、川に落ちたる塊球の風化したる表面には介の斷面を見ることあつて之を割れば介化石を出すものあり。

水車の所より四方を眺むれば大なる岩石の崖ありて、之に近きて注意すれば小さき斷層の夥しきことを見るべし。

黑澤を去りて角屋に至り其邊にて南を望めば河の段丘の表層に殆水平なる礫層あることを見るべく、又た左に開き結晶片岩(寶登山等にある剝げ易き岩石)が甚しく屈曲したるに對して、右の方には屈曲少なくして左の方へ傾きたる岩石(褐色に見へたる黑澤の頁岩と同じものに砂岩を介む)を見る。

此れ即ち左右異りたる二群の岩石の境にして、其に水平ならざる層を示すは其生じたる時の元來の水平位置より動きたることを示し又た者を掩ひたる礫層の水平なるは其水底に殆水平に沈澱したる儘なることを示す。

斯の如く下の岩層と之を掩ひたるものと平行せざることを地質學にて不整合と呼ぶ。

以上の觀察にて東京より日返りの見學には充分なれども健康なる人物は尚ほ長瀞より約八丁下流にありて鐵道に接したる土地に於ける荒川河岸の銅山の跡を見るべし、長瀞の長生館より指をさして示され其大略の位置を聞きて行くべし、寶登山停車場と本野上(ホンノガミ)停車場の間にて河岸の畑地に岸に臨みたる一軒家(家今は機をりの小屋)より川に降り見るべし、降れば直に數個の淺き坑の口あるを見る其中の鑛石は伊豫の別子(ベッシ)、遠江の久根(くね)のものの如く、結晶片岩の間に介りたるものなり、蠟燭を點じて坑内に入れば夏も涼しくして爽快なれども多少衣服を汚

汚すべし、然れども少しく背を曲げて入れば頭を天井に打たず坑内の鑛石は薄くして善く見へざれども、坑外にて甚しく鐵錆色の汚されある岩に就きて其錆の出でたる元を見れば厚さ一二寸のリーカ(硫化鐵の意にして俗に黄鐵鑛を指したる名)を見るべし、鐵槌を携へたる地質學生は鎚を以て硫化鐵を肥き出し見るを可とす。

彼の鐵錆は此鑛石(多少の銅を混ず)の風化にて生じたる酸化物にして鑛山にてヤケと呼ぶものに同じ。

坑口の邊の岩石及び其小破片には赤き漆にて塗りたるが如き滑かなる面を示すものあり、是れは岩石が其割れ目に於て其割れの兩側が相摩擦して生じたるものにして謂ゆる磨れ肌なり。

此の坑を見る時は一軒家より降る道に短き棧道の如き橋あり其朽ちて居るや否やに注意して降らざれば甚だ危し。

以上の観察にて見る所の地質學の項目は左の如し。

一、地質調査材料の集め方、主なる観察に適する地點の求め方。
二、新古諸種の岩石狀態、固結の狀
三、岩石の種類(其成分組織)
四、岩石中の鑛物の狀態
五、岩石の割れ方
六、層を爲したる岩石の曲り其他の變動
七、流水が岩石を削る狀態、岩石と風景の關係
八、空氣が岩石及び鑛物を犯すこと
九、岩石中に化石あること
十、山崩れ其他の奇觀

尚ほ一泊の閑ある人は秩父鐵道の終點なる影森驛迄行きて是より約十町なる石灰石掘り場を見、又た之に接する石灰洞を見るべし、石灰洞とは炭酸を含みたる水の循環に因りて石灰岩が其割れ目に沿て溶けたるものなり。其洞は參観料を徴して案内するものなり、洞の中は梯子其他の設備安全にして約半時間を以て洞の内外の見物を終るべし、格別著るしき洞に非れども東京附近にては來観便利なる石灰洞なり。

但し其中の水より昔時沈澱せる鍾乳石及び石筍は殘酷に破壊し盡されたるもの多し、悪むべき暴漢の所爲なり。

鍾乳石などは五年十年に容易に生ずるものに非ず、故に之を成るべく保存して其美観を樂み、學校の教課の實物教授に用ひ、又た特に秀でたるものは土地の誇として名所とし遊覧者を引きて土地の開發に資するも可なり特に學術研究を終らざるものに至ては一層之を保護するの必要あるものなり。

謂ゆる天然紀念物の保護といふは此事にして、我が土地を愛する心(愛國心)を養ひ、天然に對する趣味を高むるものなり。

然れども石材、鑛石其他人類の利用すべきものを採るを妨ぐるの意には非ず唯珍らしきものを取りて徒らに棄つるが如き暴擧を戒め、土地の寶とも思ふべき珍物は絶滅せしめず又絶へんとする生物などを保護するを計るの意なり(終)

詩と歌

溪谷の哀愁

白鳥省吾

深い溪谷の曲折する路を溯れば
峙ち合ふ山々に密林は生ひ連なり
不斷に吐く樹々の香は新鮮にして濃く
その遠い奥より躍り出る流は涼しく反撥しゆく、
あゝ心いよいよ寂しく靜かに
現ともなき吾が痛みをわけゆく心地。

この淸らさは
人生の曙への路か
眞と善と美との源か
凡ては手に觸れがたき原始の恍惚を以て

私に逼る。

私は生の重き鎖を
影のごとく曳きずり
いま傷める一切の過去を髣髴す。
頭上に限られて輝く青空に
遠い戀しい愛人の幻を浮べ
泡だつ淵に岩魚と共に泳ぐ
茶黒き群童の裸體の光りに
失はれたる少年時の自由と健康を思ふ。

行き行けど求むる物に逢はず
優しき佳き魂に逢はず
あゝ寂しい人生の
吾が來し方よ、現在よ、
叢にほのかに咲いた薄紫の釣鐘草は
慰めなき私への哀れな捧げ物であるか。

眞夏の日は此處にしてなほ暗く

それぞれに笠被る百姓に連れられて
峠を下りくる汗くさき四匹の馬の
先だてる一匹はいち早く路傍の泉を見付けて
立ち止まり水の面に口づけて飽かず飲めば
後なるは草などを食み、百姓も氣永に待ち
隨き來れる虻共も暫しそのほとりに饗宴す。

馬は休息の悦びと水のうまさに
心内に獨語ちつつ飲むか、
この光景の前に
私は痴呆のごとく立ちて眺め
慰まぬ心も
呻めくごとく微かに笑ふ。

茲に孤獨なる私は
地上の果てもなき人々の生活を想ふ時、
常に新たなる溪流の
谷間に反撥する聲は踊りつつ咲きつつ
何處へゆくか遠く私を呼ぶ。

最初の齒

赤ん坊の柔かな可愛ゆい下齦に
ほのかに白い齒のたゞ一つ
芽ぐみそめたる不思議さよ。

微かではあるが
まことに新しい堅さに光り
齒てふものは心の目覺めのやうに
無心なその笑ひに
やや整へる美を添ふ。

思へば遠き
吾が來し方よ
ほのぼのと紫に煙る岬のやうに
消え行けるおもひでよ。

われは赤ん坊の口を眺む
衰頽の心身はその前に薄暗く蹲まり

美しきあどけなき龕に秘められたる
微小なる秘佛のごとき齒を眺む。

赤ん坊の笑ふたびに
ほのかなる齒の燦めけば
われも聲あげて笑ひ
禮拜す。

輝ける時

廢れた城趾の崖の上に
昔の唯一の紀念として殘る
塔形の太鼓堂は懷かしい。
寂色の大太鼓は頂上に藏はれて
嘗てお城の人達と町の人々に
『時』を報らせたといふ太鼓堂
いま深き『時』の底に沈む。

あらゆるものは『時』の表れであり

『時』はあらゆるものに麝香のごとく沁み入りて
あらゆるものは『時』に閃めきて顫ふゆゑ
刹那刹那の尊い鼓動は私の裡に流れ
また私の生命を漾はす美しさよ。

太陽は背空にためいきし
樹立は黑く鈍き影を地に印せば
あらゆゝものは光と影を鮮やかに描き
自然そのものは凡て燦として
生ける大いなる時計の歩みをつゞけ
蔦かづら赤く燃える崖に
山雀の啼く音も時を打つ金鈴か。

おゝ古き白堊も罅裂れて
過ぎし封建の夢に耽り
蒼白き『時』の幽靈のごとき太鼓堂
輝ける日に向ひ啜り泣く。

――伊達安藝の城趾にて――

途上の禮拜

この街道を行く旅人のうち
氣付いた人もおそらく
たゞ美しい泉ある寂しい樹蔭として
何の氣なしに眺めて通るであらう。

溪流は山塊を出て來て
ごとごとと絶え間ない水車を廻はし
目ざめるばかりの清さで路を横ぎる、
その岸には小さき十數基の古い地藏があり
老樹が靜けき緑陰を作り
滾々と湧く一つの泉があり
人々が掬するための椀を備へてゐる。

路傍なる其れ等の地藏は
作られたものといふよりも、
地と同化した心に寂びて
氣儘な向き向きに居り

仰向けに倒れたままのもある。

或者は鼻が缺けてユーモラスな様子となり
或者は薄地の青苔を纏つてゐる
或者は蔦蔓の葉の鮮やかな唐草模様を肩にかけてゐる
或者はその背に願主の名を刻み
或者は朽ちた麻糸を何本も身に卷いてゐる。

其處を通る村の人達は
野菜車などを置いて樹蔭に憩ふ時に
また一椀の水を飲む前に
先づ必らず幾椀かの水を
地藏のどれかに注ぎかけるのである。

泉の水を飲む感謝を『自然』に向つてするのであるか
涼しさの歡びを地藏にも頒つのであるか
自分の心そのものを洗ふのであるか
不幸なる見知らぬ世人への施しであるが、
この街道を往來する人達によつて

かはるがはる水をかけられた地藏は
いつも樂しく濡れてゐる、
素朴なる人の樂しい心のやうにいつも濡れてゐる。

私はまた傍ちかい丘の上の
廢れた地藏堂を見た。
扉は毀たれ内には何にもなく
板敷の上に莚が一枚敷いてあり
今まで誰かままごとをしてたらしい草の葉や
貝や玩具などが散らばり
奥には本尊であつたらしい木彫の地藏の
古朽ちた頭が壇の前に轉げて
こちら向きに泣き笑ひしてゐる、
後ろの板壁に誰かが白墨で
その代りの似顏を手際よく描いてある。

樹蔭の石の地藏たちも
おそらく始め地藏堂に置かれたのであるが
いつとなく自然の心そのもののやうに

村人の手によつて移されたものであらう。
この偶然ならぬ出來事に
私は限りなき微笑を感ずる。

かくて自分等の仕事の途上にも
おのづから禮拜し得る村人の喜びは
やがて地藏たちの悦びであり
いぶせき茅ぶきの御堂を出でて
日と月と星とで飾られ
雨や風に生氣づけられる青い露天の下に
埃たつ街道の傍なる綠蔭に
地藏たちは親しみ深く
此の土地と村人とに同化した心に寂びてる。

月光愁夜

日夏耿之介

一

ああ　凡百　疎懶なる存在だ！

月の光は青白く
堅牢い卓子の一角に煌と砕く
月の光に恐かれて
上代楽の顫音は最と朗明かに　最と奇古に
山林の黒き心臓をひびいて出る
月の光に舞ひ狂ふ萬物は
ひとむれの赤き辭典と
夢見心地に蹣跚する時圭の跫音と
長椅子と

闇を破いて嗤笑する
庭樹庭樹のたたずまひ
　　月の光は青白く
斑にも
燦として暗黒を描く

二

月の光はただ白く――
いと些細なる懸念の雲　北方にあれども
蝕める世界の秋季の夜に晴れ
おびただしき白霧のかげは森々と
蠱惑のやうに奇襲する　包囲する　荼毒する
その氾濫際の謎のまつただなかを
いとほそぼそと
　　音に泣く蟲に
晴夜の庭の秋景を　星飾る
落葉散り布くいまの素秋を

非情なるわが着物は　坐ろにも
蕭森と　洪水のやうに
ことごとく我が庭に溜つてゐる
暗示する　哄笑する
矗々と頬を緊める
微笑する
枉抑する
惨として　月光を諄く

三

一切有はわが仇敵だ
一切有わがために在る
わたくしにのみ溜つてゐる
狭める頭と狭める脳と狭める心と
唯一のいと脆き目印さして襲ひかゝる

その悩痛に得たえずして
たゞ茫然と邪心なく

夢をめさめし嬰兒のやうに彳む折柄
天黑く　夜風して
蕭々と降り頻く雨は
跫音を靜めてひそひそと
いと忍びかに
一千の同じ諧音を綴つてゐるが
復た倏忽と吹きくる風に
名もない花の雜草が押し仆かされて
何處ともなく流れてゆく
行潦のあひまあひまに靑光る
水沫の俤は　ただ一瞬に明滅する

ああ　凡百　疎懶なる存在だ！

四

再た卒然と　月魂のうつくしさ！
萬物銀に仄白く煙り煙つて
薰風の吹き入るなべに

蒼白い銀の光は影射して
纖く顫え
梢　梢に舞ひ狂ふ

かかる頃わが小窓をしかと閉鎖ち
密房幽暗のあはいに介在つて
いと微かなる呼吸するわたくし
月の光に惑かれて
庭の面に來てイめば
夜は黒く　風さえ騒ぎ
月ほそく雲間ににじみ
細心に神經質に　滿天の星青く光つた
夜の閑景は　寥廓と
冷かに　黒く　かぐろく
しかすがに便はなし！
ただ蕭殺と夜風がわたる林間より
ひびき出る上代樂の顫音は
己が心の裡に　ひと滴ひと滴
愁はしき泪の露をそつと落す

月のひかりに惑かれて……

五

わが心　年老けたれば
哀傷のこの泪らを忌み嫌ひ
恬として
さりげもなく　わが庭内を漫歩する
高歩する――心みだれて
ああ　つひに　凡百　疎懶なる存在だ！

――一九二一年夏――

山水人間蟲魚

齋藤茂吉

一 夜

甲斐がねを汽車は走れり曉のまにしらじらと川原の見えし寂しさ

しづかなる川原をもちてながれたる峽間の川をたまゆらに見し

山がひにをりをりしろく激ちつゝ寂しき川がながれけるかな

ふく風はすでにつめたし八ケ嶽のとほき裾野に汽車かかりけり

天づたふ日のかたむける信濃路や山の高原に小鴉なけり

高原に足をとどめてまもらむか飛驒のさかひの雲ひそむ山

澄みはてゝいろふかき空に相寄れる富士見高原ゆふぐれにけり

あかときはいまだ暗きに目さめゐる吾にひゞきて啼く鳥のこゑ

蚊帳つりてひとりねむりしあかときの冷たきみづは齒に沁みにけり

みすずかる信濃高原の朝めざめいそそぐみづに落葉しづめり

林中

山ふかき林のなかのしづけさに鳥に追はれて落つる蟬あり

桔梗のむらさきの色ふかくして富士見が原に吾は來にけり

松かぜのおともこそすれ松かぜは遠くかすかになりにけるかも

谷ぞこはひえびえとして木下やみわが口笛のこだまするなり

あまつ日に松の木原のひまもりてつひに寂しき蘚苔を照らせり

燈下（一）

ともしびのもとにさびしくわれ居りて腫みたる足のばしけるかな

ひとを愛しとおもふ心のきはまりて吾に言つげし友をぞおもふ

諏訪のみづうみの泥ふかく住みしとふ蜆を食ひぬ友がなさけに

みすずかる信濃の國に足たゆく燈のもとに糠を煮にけり

高はらのしづかに暮るゝよひごとにともしびに來て縋る蟲あり

燈下（二）

窓外は月のひかりに照らされぬともしびを消しいざひとり寢む

しづかなる山の高原とおもへども電流に觸れてひとは死にたり

月の光いまだてらさず白雲は谷べにふかく沈みたるらし

潮浴に安房の海べに行きたりしわがをさなごは眠りけむかも

夕飯をはやくしまひてこのよひは妻をおもへり何か知らねど

諏訪のうみの田螺を食へばみちのくに稚かりし日おもほゆるかも

よひとおもふにはや更けそめし山家なるこのともしびに死ぬる蟲あり

うつしみは現身ゆゑに歎かむに山がはのおともあはれなるかも

文身だらけの屍隅田川に浮きしとふ記事も身に沁む山の夜ふけに

やまふかきその谷川に住むといふやまめ岩魚を人はとり食む

高原

蓼科はかなしき山とおもひつゝ松はらなかに入りて來にけり

八ケ嶽の裾野のなびきはるかにて鴉かくろふ白樺の森

いまだ鳴きがてぬこほろぎ土のへにいでて遊べり黒きこほろぎ

秋づくといまだいはぬに生れいでて我が目のもとを逃ぐるこほろぎ

秋らしき夜空とおもふ目のまへを光はなちて行く螢あり

谷川のほとりに見ゆるふる道はたえだえにして山に入るなり

月夜

高原の月のひかりは隈なくて落葉がくれの水のおとすも
ながらふる月のひかりに照らされしわが足もとの秋ぐさのはな
月あかし谷ぞこふかくこもり鳴る釜無川のおとのさびしさ
秋の夜のくまなき月に似たれどもこほろぎ鳴かぬ芽生のつゆ原
飛騨の空に夕の光のこれるはあけぼののごとくしづかなるいろ
飛騨の空にあまつ日おちて夕映のしづかなるいろを月てらすなり
空すみて照りとほりたる月の夜に底ごもり鳴る山がはのおと
わがいのちをくやしまむとは思はねど月の光は身にしみにけり

あらゝぎの實

あららぎのくれなゐの實を食むときはちゝはゝ戀し信濃路にして
ゆふぐれの日に照らされし早稻の香をなつかしみつゝくだる山路
八千ぐさは朝よひに咲きそめにけり桔梗の花われもかうのはな
やまめの子あはれみにつゝゆふぐれて釜無川をわたりけるかな
山のべににほひし葛の房花は藤なみよりもあはれなりけり

くたびれて吾の息(いき)づく釜無(かまなし)の谷のくらがりに啼くほととぎす

【童馬山房雑歌正誤】

「きやういん」は「きやうゐん」の誤。

「人をぞをもふ」は「人をぞおもふ」の誤。

「龜井戸」は「龜戸」の誤。

東西集

島木赤彦

太平洋會議

國際聯盟を提唱して今關せず

久方のあめりか人(ひと)がいくさ船造りつつ白(まう)す言(こと)のよろしさ

たはやすく口にまうして昨日恥ぢ今日も白(まう)さく言のよろしさ

公の道を告(の)らさば靑雲の明かく空しき心あるべし

靑雲は已れ空しく澄みとほり明かにして底ひ知られず

ひむがしの亞細亞の民を否といひてその民の子と手を取るといふか

天照る日の下にして西の民東の民と今も分てり

西の民東の民と隔てたる心を去りて大き道を宣れ

綿津見(わたつみ)の神の御魂　默(もだ)にあるを默(もだ)にしありと思ふことなかれ

公の道を畏(かしこ)み思へらば直(ただ)に默して行くべかるらし

みんなみの海の上なる一つ島に砲音ひびく鯨捕るらし

今の時に言ひて憚る所なし天が下なる大き亞米利加

綿津見の鯨ら白さく己腹を己れ愛ひず人の腹を愛ふ

日のめぐり月のめぐりのいや果ての光思はば愼みて白せ

亞米利加に敢へて物申す己が船をいや斷に斷ち棄つる心ありや

人をして言はしむるをぞ引綱のもそろ言といふ英吉利はいかに

高木の家

朝づく日のぼれど涼し窓の上に茂れる桑の露しげくして

昨の夜の一と夜空晴れてたまりたる桑の葉の露滴りてをり

桑の葉のもろ葉の露の滴りのけはひ幽けきこの朝かも

桑畑の茂りにむかふわれの眼に光をひきて日は出でにけり

よべ一と夜桑の葉の露の落ちにけむ畑の土は上じめりせり

露ながら朝日さしたる桑の葉の一つひとつの光のすがしさ

このあしたしとどに置ける桑の露の乾くを待てり桑摘むわが妻

桑の葉の茂り小暗し人影の深くこもりて桑をつむ音

桑畑の桑摘む人ら炎天を喚び言ひて打疲れ居り

炎天に桑摘みとほす妻子らの額のいろ黄に日のあたり居り
桑の葉のいきれの中に妻子らは打ち疲れつつ言交はし居り
畑の中に汗をば搾りつくせりと戯れいふも悲しき子どもら
夕ぐれの涼しさ早し開け放つ家を吹きとほす桑畑の風
桑つみていたく凝りたる妻の肩をわれ揉みてやらむ心起れり
桑つみて桑かぶれせし子どもらの痒がりにつつ眠れるあはれ

秋

若山牧水

小泉村雑詠

脚ほそき鶺鴒鳥は物蔭にわが居る知らず岩端に啼く
水あげて瀬に立ちならぶ石ごとに糞して遊ぶいしたたき鳥
羽蟲待つ河鹿が背は痩せ痩せて黒み縮めり飛沫の蔭に
淵尻の岩端にゐて羽蟲とる河鹿しばしば水に落つるなり
岩のあひを練りて流るる山渓の荒瀬に水の玉湧き流る
籬木槿むらさきに咲く裾野の村石ころ路を日暮下れり
杉山の木叢がうへにかかりたるゆふぐれの月は十日ころの月
みそ萩の花咲く溝の草むらに寄せて迎火焚く子等の居り
みそ萩の花にほこりのほの見えて葉がくれにゆく水の聞ゆる
蜩の鳴くゆふぐれの旅籠屋に煙草ほろ苦く吸ひてをるなり

竹藪に鶏居りてものあさるけはひ久しき夏のたそがれ
日の光つゆけき朝の豆畑のなかみち行けば埃立つなり

溫泉宿の庭

更けぬればひびき冴えゆく築庭の奥なる瀧に聞き恍けてゐる
燈火のとどかぬ庭の瀨の音を獨り聞きつついねがてにをり
水口につどへる鮒のくろぐろと泳ぎて鮒も水も光れり
鶺鴒あきつ蛙子あそび恍け池にうつれる庭石の影
まひおりて石菖のなかにものあさる鶺鴒の咽喉の黄いろき見たり
庭石のひとつひとつに蜥蜴ゐて這ひあそぶ晝となりにけるかな

籠居

怠けゐて苦しき時は門に立ち仰ぎわびしむ富士の高嶺を
心憂く部屋に籠れば夏の日の光わびしく軒にかぎろふ
なまけつつ心くるしき夏の日の風は汗ばむ肌を吹くたり
門口を出で入る人の足音に心冷えつつ怠け籠れり
なまけをるわが耳底に浸みとほり鳴く蟬は見ゆ軒の端の松に

富士雑詠

雲まよふ梅雨明空のいぶせきに曉ばかり富士は見らるる
紫に澄みぬる富士はみじか夜の曉起きに見るべかりけり
たづね來て泊れる人をゆり起す今朝すがしきに起きて富士見よ
めづらしく今朝は晴れたる富士の嶺を藍色ふかき空に見るなり
陰ふくみ湧き立ち騒ぐ白雲のいぶせき空に富士は籠れり
叢雲にいただき見するが鷹の峰の奥ぞと富士を思へり
夏雲の垂りぬゝ蔭にうす靑し沼津より見ゆ富士の裾野は

雑詠

何はなく喰べむと思ふたべものも秋めくものか籠りてをるに
飯かしぐゆふべの煙庭に這ひてあきらけき夏の雨は降るなり
はちはちと降りはぢけつつ荒庭の穂草がうへに雨の降るなり
畑中の小路をゆくとゆくりなく見つつかなしき天の川かも
うるほふと思へる衣　裾かけて埃はあがる月夜の路に
野末なる三島の町の揚花火月夜の空に散りて消ゆなり

鴇色の緋桃のいろの耳朶の少女は泳ぐ邊浪がなかに
岸邊こそ浪は繁けれ沖邊さし泳ぎてゆけや耳あかき子よ
伸び過ぎて葉のみ茂れる蜀黍に紅の毛垂らす實をいまだ見ず
ひとの畑の蜀黍は痩せて實を持ちつわが畑はただに深み茂れり

想華

猫

木村荘八

(上) 渠(かれ)の生活

私の家には今猫が三匹ゐますが家の近所は大てい猫ぎらひばかりで、困ります。隣りの家は綺麗ずきなので猫が厭ひです。前の家には鷄がゐるので猫が厭ひです。只家から十五六軒離れたところに、靴屋がある。そこの夫婦が大猫ずきで犬が二匹、猫が一匹ゐます。そこはさすが好きでせうが一度、四年ばかり前に、家の豊楽と云ふ子猫が一週間以上見えなくなつて、心配したことがあります。するとはからず靴屋にゐたので、却つて好きも善し悪しのことがあります。

此の頃その靴屋の白猫が、夕方になると家の臺所へ來て鳴いてゐる。尤もよく方々その邊をいつも歩いてはゐるのですが、此の間一度、フト出來心で抱いたらおとなしいのでそのまゝ家に入れて飯を食はせたことがあるのです。それから二三度來て飯をやりましたが、それがくせになつて此度は毎日やつて來て鳴く。野良猫なら鳴きません。人間の愛情を知つてゐるので鳴くのです。靴屋でも充分飯は食ふのでせうが、又他の家の飯は變にうまいのか。人間にもそんなことがある。何しろ家のおかゝの飯を食ひに、催促しに來る。で悠々とコセ〳〵せずに——それが又可愛い——食事して、暫くその邊にねてゐたり、化粧したり、それから何時か返ります。然し又あくる日いゝかげんの頃來る。

それはいゝが、只之れが餘り毎日くせになると、自分の家よりこつちへばかり度々來る様では困ると思ひます。先の

豊榮もこんな事で靴屋へ行つてゐたのかも知れません。その時には、然してつきり取つたのだと思つて弟が半分怒つて取り返して來たのです。それ以來私も向ふも變で、靴の直しもついあすこへは賴まず買ひもしません。――――

その豊榮は非常に綺麗な猫でした。靴屋の白猫は目が惡く、極く平凡なよくある猫だが愛情は又別だ。靴屋と家とには、猫では一種前例があるから再びそれを（此度は逆に）くり返すのは困る。それで、今日はわざと彼を追ひ返して飯はやりませんでした。何だかいぢらしく、氣の毒だつたが、飼主の感じがあることなので。

私は先に、鳥毛と云ふ白猫を飼つてゐましたがその頃右隣りの家は、まだ若夫婦新婚の當時で今の子供がゐず、何と云ふことなく家の鳥毛を可愛がつてゐました。又猫がさうなるとのんきでねる他は大てい隣にゐて、夕方私達が家中外出するので戸〆めにすることなど時々あります。鳥毛がその時見えない。然し二階に切り穴があるからはいれるだらう、飯はいつもの所に作つてあるから、位ゐに思つて、家の横町を出やうとすると、つい隣りの家の內部が見えます。見ると若夫婦食事の膳のわきに、ちやんと鳥毛の奴が座り込んでゐる。「フム、すつかり間違へてやがる」。勝手にしやがれの氣が一瞬します。――みすみす人にその感を抱かせるのはよくないし、猫が可愛想だ。之れで半月ばかり靴屋の猫は毎日來てゐて、とう〱困りました。

家の猫は、その靴屋のタマとは多分外では前から知り合の筈です。が初めてタマが家へはいつた時のこと、タマがはいちやうへ上つて食器で飯を食べてゐると、家のは三匹そのそばへ遠まきに集まつてうろんに不快氣に見てゐます。それを尻をおしてタマのそばへ一寸近づけてやると、クワッと口を開き鼻に皺をよせ、畳にふん張つて險相に怒る。極く意地わるな同族にあるまじき感がします。之れが知り合で、探しても近所に十匹とはゐない同じ仲間とはとても思へない躊した邪險さです。然しそれも二三日するとあとは來ても平氣になつた樣でしたが、こいつは自分に生活上にも肉體

上にも害は與へぬと見極める迄は假令親子でも兄弟でも、初めは互ひに怪しむのです。これが生活の必要でせうが、必要以上に一體猫はさう出來てゐて、淺ましい氣がする。餘りに性格が濃くさう作られすぎてゐる。

人は十人に六人猫を厭ふが、ここ――少くも此の種の性格味から來るのだらうと思ひます。私は辯護をする。それは猫の出來で、玉なら玉、白なら白がするのではありません。個體は無邪氣なのだが總體が有邪氣的に、損に出來てゐます。その點極く露骨で、然し彼等は又ちつともそれを知らないのだから氣の毒です。彼等が自然彼等で厭はれる。彼等の生來がするのですからもしそれが憎ければ、彼等は哀れな動物です。さう淺ましく寂しく出來てゐる因果な性です。

釋迦のねはんに猫だけくやみに行かなかつたと云ひますが昔の人は、有り相な可哀想なことを考へると思ふ。犬なら早速出かけたでせう。否、出かけたと人に云はせたでせう。さう云ふ得な性格がある。

それが猫の方は、あいつだけは如何さま行かなかつたと云はれる方がどうしてもぴつたりし相に出來てゐます。行かないで後世に汚名を殘すことなどには平氣でのんきにねてゐたか、イヤ寧ろその時に限つて、折り惡しくうまいものにでも引かゝつてゐてみす〳〵汚名を殘す機に知らずにゐた。さうなる樣に一體宿命的に不運に出來てゐる……

然し又その「不名譽」を猫があとから氣が付いて知つたとしても、もしも之れが犬なら失聲を咲いて後れ走せにも釋迦の墓へ出かけて、揃つて遠吠へ位ゐしたかも知れない、それを猫の方は、別にしまつたとも思はなければ咲きもしない、世に不名譽もそれこそ名譽もなく自分の生身（いきみ）だけ有つて他には何にもなく、同族さへ若しなければないでよく、相變らず眞面目な陰氣な顏をしてゐるに違ひない。「妾はかう云ふ生物だ。イヤがられても仕方ない。何しろかうして生きてゐるのだから仕方ない。」――とも言はず、全く、そこ等が然し猫の身上で、一種善惡以上の寂しい愛情なり悲哀を與へる。

彼は中々人間の眼を正視しません。いかに馴れた猫でもその顏を引きよせてまともに見るとイヤ相に視線をよけ、そらして了ふ。そこに感じがある。素のメまつた眞面目な冷徹な彼の表情！　遠い星の樣な悲しい靜けさ。

猫には何か哲學の恐らくユニックな、狹いが深遠な一理があるかも知れません。生があると云ふ一番簡單な意識以上の事實が、その事實を最も有效に露骨に態度でも表情でも性格でも生活でも表示する彼獨得の演繹以上、直接法の道が。

彼は餘りに簡單なので却つて奧行きや何か秘密でも影にあり相に怪し氣に見られます。猫を女によく例へるが簡單な公明すぎて却つて變に不思議な點で、似てゐます。昔からよく化けたり祟つたり小判をくはへて來たり、そんな怪しい傳說が彼にはあるが、私には然し時に、考へられません。彼は死んで了へば只死んで了ふし生きてゐれば又只生きてゐる、極く淡々たる――故に神秘のものです。然しその感が往々餘りに公明で變に事實的、數理的なので稍もすると猫には詩がなくなつて、一所にゐても生活の交らぬ瞬間が度々あります。何だ、コイツゐたのか！　と云つた感じです。

私は度々夜ふかしをするので家中ねて了つて私一人だけ、二階に起きてゐることが屢々ある。そんな時には、猫も好んで二階へ來ます。足音もせず氣合もせずにフッとやつて來て、いきなり背中へ上られて驚くことなどある。然し「畜生！　來たな」と思ふと愛情が湧きます。で、抱いてやらうと思ふ。然しさう思ふ時分には、又足音も氣合ひもなくフツと何處かへ行つて了つて、影も形ちもありません。變に怖くなる、全く。あの足音のまるで無いのが何と特別の感じでせう。鼠をとるに必要と云へば說明は片付くが片付かないのは、そこから如何しても生れたがる怪談、傳說の色合ひの濃さです。闇で音もなく眼ばかり光らせてゐる時など、思はず突然見るとちかに魔性に思ふ。

ところがその暗闇から引き出して彼の正體をよく見ると、まるでエムプティーで、そのエゴイストなふてぶてしい樣は世に典型となる程です。こつちが暑くて仕方ない時など、ノサノサ膝へ乘り込んで來て下ろしても下ろしてもいつか

な退かない。ねぼけた無愛想な、空寂な眞劍な顏をしてからだをうねらせ、「君はうるさくても俺はねむいのだからまあねかせろよ」と云つた工合ひに又ものつそり上り込んで來る。その圖々しく權利主張氣な勁々物々の感じ。彼は私を信じてゐるからさうするのだが、信じたからには又日の當つた緣がはと人間と同じに扱ふ露骨さだから、やり切れない。こつちも遠慮なく退けて氣の毒でない權利氣を感じます。

が、結局退けられたとなると此度はそれを恨みも悲しみもせず、平然枯淡としてゐる。その無氣力な悲しい消極さ！まあ仕方ない、ここでねやうと云ひた私に、あきらめて、机のはじつこで丸くねたりする。可愛さうになるではないか。で親切に抱く氣になる。が、すると又素直には中々云ふことを聞かない。愛なけつまがり。おかしいが時々イヤになり、愛想がつきます。何と孤立に出來てゐやがる！

ツルゲネーフの詩に、犬と雷鳴の日一所にゐて思ひの融けるシーンがありますが、あの種の共存は猫だと少ないかも知れません。先きが先きならこつちもこつち、とよく云ふが、一體猫の方で自家一家主義ばかりかざして來るのでこつちも率かれて、自家一家主義になる。

さう云ふ動物はよくない。十二支にはさすが除けられるかも知れません。世に猫の年があつたら何も彼も偶然か利益同志かでなしには折り合はず、結婚など殊に變にまとまらず、弱るかも知れない。——然しそんな惡口をつい云つても、當の猫の方では一切平氣で全く自然に、サバサバしてゐるのだから、云はゞ張合なくなり、大人氣なくなる。かう云ふ生活もあるよ、と云ふ風です。成程ある。その味が又頗る獨自である。何と餘程不思議な頭の時の造物主の試作だ！それが又どうしても中々深く、進んで出來てゐるので、つい感心して猫黨になります。

私の家の猫は、女三毛の天弦とその子の男三毛のビイ、それと此の春生れたビイの弟の眞黑な名なしとゐるのです。

黒猫もそろ〳〵名をつけないといけない時分ですが何としたらいゝか、よくつけるチヤンは牡名には不向きだし、私の弟はピー天と呼ぶし妻は黒と云ひ。私はチビと云つてゐます。まだ名を聞きわけて返事をするには至らない。それでももう天弦のとつて來た鼠を二匹、食つた樣ですが。

諸君は猫の愛情を知つてゐますか。鳩に三枝の禮があれば猫にはこんな慈愛があります。母の天弦はよく鼠をとる、殊に子供がゐるとせつせと遠出をして、とつてくはへて來ます。トン、トン、とそれが二階の階段を外から返つて下りて來ると、下の室の子猫は待ちかまへて障子の切り穴から段下へ飛び出し、母を迎へる。でそこで母から鼠を貰ひます。然も子供の分相應にどうしてさがすか、小さい鼠を選つて持つて來ます。

母はその始終ゴロゴロのどを鳴らしてさも可愛げに鳴き、鼠をくはへてウーウーうなる子供をなめてやり、それから自分は別に食器に向つて飯を食ふのです。子供を教育するか、愛する意志としか無論見えません。さすが母性に尊敬心が湧きます。

一度殘らず生れた子猫を厄介故少しおいてすぐ、捨てたことがあります。すると或る晩のこと、その日は雨ふりで濕してビシヨビシヨしてゐましたか母猫がトン、トン、階段を下りて來た。濡れて寒さうに下りて來ました。そしてグルーンと云ふ一種の子を呼ぶ聲を出して、下の室へ來た。口に一寸位ゐの裸鼠(あかねずみ)をくはへて。

彼女は鼠を放してそこへ置き、まん丸な目をして、方々見てゐる。グルンニヤー、グルンニヤーと細く尻上りに、さもさも可愛げに呼ぶのです。子を。私はどうしやうかと思ひました。――しばらくさうして探してゐましたが、しまひにあきらめて、しよんぼり鼠を見てゐました。が、ムシヤリと殆んど一口か二口に、食べて了つた。

子供には大變な土産だが母には何でもない、噛む間もない鼠だ。それを何所からかせつせととつて來た。わざわざ持

つて來た。雨の中を。私は氣の毒なすまない氣がした。それ以來、子は一匹は必らず相當になるまで、とつておいてやります。――ところが、畜生のあさましさか、それが天性か、恐らく天性で寧ろ自然の情けでせうが、――彼等にさう長く母子の情があつたら猫はどれも之れも啖いて暮すほか無いわけですから。――子供が相當に大きくなると、一時甚だしく親が厭つてひどい目に合せます。

子の方は無邪氣にコロリと引くり返つてふざけて親の足にからみついりするのですが、見る〻〻親の方では爪をむき出して子を掻き飛ばすことなどある。本氣に。子猫は悲鳴を上げ、逃げてはじつこに小さく丸まり、驚き、がつかりしてゐる。それから大ていねて了ひます。可哀想に。猫は苦痛に出逢ふとねて癒すのです。餘程そんな時親の方では成長しかけた子が憎いらしい。

イヤ然し人間でも十六七の成人しかけた大人子供は滿更いゝ感じばかりではないかも知れぬ。

尤も、その一時期がすぎると、親子は又無事に和合しますが。然し元とは態度が違ひます。いつ離れてももういゝ愛情の仕度は、出來たらしい。哀別離苦の生きがせに外れたと云ふ形ちです。親猫子猫より大猫小猫になる。

で小猫の方の男は大猫の女（親）に、――暫く迄もなく、その時期が來ると矢庭に首筋へ食ひ付くことなどあります。

親子のけじめより生殖の方が猫の世界には大道で、親子、夫婦の情誼以上、猫は性慾爭鬪をします。勝てば誰とでも夫婦になる。異性と、婦になるのでその異性には、親も兄弟も曰くはない。それも、個性がやるより總體です。彼等は驅られて或る期間努力以上の努力をします。ぐた〳〵に疲れる。全く一事業です。猫に生れた定めの。――牡猫牝猫の情に憑かれた、輕な以きわめく毛ものが魂即性殖慾に奔鬪するのですから、變な月夜など、おめき叫んでガリガリトタン屋根から轉がり下ちたり、近所迷惑なことがある。

此の春の或る日のことです。私の妻が大三毛のピー助をしきりに叱つて、「イヤな猫だ、本當にイヤな猫だ」と云つてゐる。ピー助は閉口して片わきにうづくまり、耳を伏せてゐます。

「どうしたんだ？」

「このピーは馬鹿でねえ」とピーをころがして、「仕樣がない。イヤな猫だ！」

「何だ？何かとつたのか」

「いゝえ、さうぢやない。天弦さん（母）の首筋へ食ひ付いて今大變なさはぎ」

「仕樣のない奴だな」と私もさすが顰蹙しました。

ところが彼（ピー）は私の妻に叱れる先きに、散々挑んだ母の天弦に怒られて蹴られ、うなられた。そして天弦は家を飛び出して何所かへ今しがた出て行つたと云ふ。

一寸之れを聞くと、子息のピーだけ馬鹿猫で天弦はさすが道を辨へた樣な、淺ましながら母と子の感じが起ります。人には起る。只その裏の事實は、天弦は子を怒つたのではない。性慾故に異性を怒つた。その點この鬪場では女が古兵で、男が新兵だから、段ちがひに難なく逃げられたのです。

逃げもがく奴をガツキと嚙み捕まへ一怒るのを怒壓し、爭ひに克たなければ、自然の意志には添へないのです。彼等の「夫婦」は、殊に攻擊動の夫の方は遠征的だし、かなり出鱈目でも、婦の方は、二夫なり三夫なりあるその husbands の中に然しいつも決まつたのがあることはそれはたしかです。決めると云ふより決まると書く方が當る程度で、彼女はに少くも「夫」はあるにはあるのです。例へば家の天弦には筋向ふのF下宿館の椽の下にゐる赤猫は毎年たしかに亭主らしい。

鬪ひは烈しい。五年六年の古つはものゝ牝猫にやつと一年の牡猫など、とてもかなふものか。殊に質屋の牡猫を牝と思つて春中尾根でつけまはした樣な新參のピーに、どうして親猫がつかまるものか。夫は妻を容赦なく去年の、又は今年の異性に掠奪したければ、天意に添へない。それ故に親は或ひは中々子供とは、經驗がちがふから「淺ましく」夫婦になることはないかも知れません。さう自然にもおもひはあつて出來てゐるものだと獨斷にかきたい、さすが「人情」を感じるが然し、人情や觀念では成程世界がちがふと、露骨に思ふ場合があり、自然は屢々人間の道義より以上です。

時々親がからだが惡かつたりすると虛弱な子供が生れます。又さうでなくとも弱い子がある。死んで生れる子もある。子が死んで生れるとすぐ親はその子を食べて了ひます。猫は產婦で同時に自ら產婆ですから、死兒を食ふのはその時彼女は「產婆」で、むごい「親」ではなく、死產の始末を付けるのです。一物も所有せぬ猫が又一番自然に始末する法です。死骸をぼんやり投げやりにしておいて腐らすよりもせめて形ちを腹中へ入れて了ふのが、親の情か。又、生きては生れてもいつまでしても泣かない子だとか、首のぐつたりとして乳をのまぬ子、そんな、見るから虛弱な駄目な子供は、それがまだ生きてゐても親はガリガリ食つて了ふ。前途を見透してとても生きても駄目なので、自ら殺して、食つて了ふのです。それが親猫の慈悲かも知れない。

三四年前に、今の天弦が一匹赤猫を生みました。それは丈夫な子でかなり可愛く健かに育ち、四寸に近くなりました。目も開いた。がさうなつてからの或る日のこと、どうしたのか足をくぢいて、それ以來病氣になりました。そして日ましに頭ばかり大きく、くぢいた足はしなび、腰はフラフラになり、親の乳もうまく飲めなくなりました。

その時は他に三匹、都合四匹の子を生みましたが、他のはピンピンして日ましに大きくなる。毛も揃ひ釣合ひも猫らしくまとまつて押し合ひへし合ひ、乳にすがつてゐる。只不具になつた子だけは――何と露骨に適者生存を目擊した

う——不具になつた日のまゝで從つて小さく、とてもものになり相に思へない。從つて段々小さくばかりなる氣がします。

親猫は一視同仁です。一視同仁だから從つて不具の子だけには眼が屆かないと同じ結果になる。彼女はおなかの乳はころりとねて出してやるが子に一々のましてはやらない。のむには子の方から一にも二にも動作するのですが、不具の子は從つてのめないので口は開けど、聲も立たぬ姿になりました。又、私達がそれを氣にして人間の手で乳首をふくませてやつても、どうしてもうまく行かずに衰へる一方です。——時には他の子をみんな退けてその子にだけせつせと乳を當てがつたりマクリで牛乳をふくませて見たり、實に氣になつた。「オイ、お前の此の子は危ないよ」などゝ親猫に云ひきかす。親猫はゴロゴロのどをならして我々の顏を見、愛情を示してあほのけになる。子供がある時は飼主がたよりで、仕方ないらしい。いぢらしい。で、子を近づけるとしきりになめてやる。然しからだが不自由で乳がのめずにしびてゐるとはまるで氣付かない。「氣をつけないと死ぬよ」と云つてもその人間の聲を、何かしら自分に云はれる愛撫と思つてしきりに喜び、安んじてゐる。その顏は怖く、無情だが、それだけに表現不足で一層愛情が眞率です。こつちの想像へ訴へてかゝる。不具の子は、親になめられ、ぐつたりとして、乳の上にはゐながら矢張り吸ふ勇氣はなく、絕々としてゐる。

「困るね。之れは死ぬね。」

「死に相ねえ」天弦さん、お前本當にどうにかする法はないのかい、など、弱つたことがありました。

とうとうそれが猫箱で死にました。どうせ死ぬとは思つたが、朝見て彼の死骸だけ他の子達に踏まれて横たはり、他の子供はしきりにさはめいて元氣に乳をのんでゐる有樣を見ると、無慘な薄命な氣がしました。

親は知らない（らしい）。で私は、その死骸を持つて――埋めるのに箱へ入れてやる爲め――二階へ何氣なく上りました。二階に丁度いゝ繪の具の木箱がある筈だから。

ところが、思ひちがひで木箱は仕事場になく、もしかすると何時か捨てたかも知れぬ。何か箱が要るなら見つけないと今は無い。私は死骸は二階へおき、又下へおりて來て、「餘計なお世話で二階まで棺へ入れに行つたが、無くなつた。あの白木の繪の具箱は有ると丁度棺おけにいゝのだが。」妻とそんなことを話しました。まあ、棺がなければあのまゝ埋めてやればいゝ。庭の隅へ。――そこには墓標があつて、あいつの祖母と叔父やその他三匹、平和に埋めてある……

で、私は妻と「棺」の話をしてから下の茶の間でそのまゝ茶などのみ、ぢき飯になるので新聞を見て待つてゐると

トン、トン、と例の猫が階段を下りて來る音がする。妻が「オヤ？」と猫箱を見るとそこには子猫ばかりで親猫は見えない。「いつの間に天弦は、二階へ行つてゐたのだらう」

私も變に思つて、

「俺がさつき見た時にはここに子を抱いてねてゐたのだが、――いつの間にか俺のあとをついてあいつも二階へさつき上つたのかしらん」

「さうでせう」

「すると俺があの死骸を持つて行つたのを知つてゐたのかな」

「あなた死骸をどうして來たの？」

「机のはじへ置いて來た。」

そこへ天弦が現はれました。――彼は私がさつき子の死骸を持つて二階へ上ると、それをねながら、然し眼以た、

で見たにちがひない。何か親子のつながりでもあるのか。（あの子を人間は一體どうする氣だ？）彼は私のスグあとからつゞいて二階へ來たに相違ない。私が二階にゐる間彼も二階にゐたに相違ないし――その後ろから見てゐられた眼を變に感じる――それからも久しくゐたに相違ない。で今、いつも通路に開けてある障子の穴から下の室へ來ました。が、私は思はず見て「アッ」と思つた。それよりも妻が同じく彼を見て聲を擧げました。「何でせう。何でせう！　氣味が惡い。」

私は全くあはてゝ然し氣味無氣味より一種イラ立ち、天弦の口からあんぐりくはへたものをもぎ取りました。と云ふより毆ぐつてそこへおとさせ、それから有り合はす新聞にくるんでキリキリ丸めた。それをそのまゝ包んで家を出て、家の角から横町を曲がつて坂下のドンドン流れるドブ川へ行き、捨てゝ來た。そしてやつと安心して茶の間へ返り思はず妻と顏を見合つた。

「あゝイヤだつた！」

親猫は子猫の死首をくはへてゐた。突然見た時すぐぞつとして何を變なものを？と怪しく思つたが、よく見ると首の下に又首があるので寒氣がした。天弦の口には、死首が昨日までヒクヒクしてゐたあの不具の子の顏のまゝぶらさがり、眼を引吊らしてガックリ口をあき、のどのたころでブッツリ嚙み切られ眞赤に肉がたゞれて出てゐる。それをくはへて二階から來たのです。

この母猫は、恐らく二階で私がゐなくなるとすぐ机の上の子猫のそばへ飛び上り、いつも子をする様にくはへて下へおりやうとしたかも知れぬ。その時初めて子猫が冷たく、かたくこはばつて死んでゐるのを識つたかも知れず、イヤ初めから或ひは知つてゐた（？）――何しろ、そこで死體を食つたのです。尻尾ものこさず、あとで二階のその個所を見ると

血一滴たらさずモリモリ死兒を食つて了つて、首だけくはへて下へおりて來た。何故下りて來たのか、無氣味な他にはわかりませんが、死骸になつてまで親が子を始末するとは、思ひませんでした。

さうかと思ふと然しその親猫（天弦）はまた更にその親（チャン二世）が家にゐた頃には、カラ子供で、鼠も自分がとるよりは親がとつて來るのを待つてゐる。子供を産むことも自分一人ではうまく出來ませんでした。

或る時には全くワンをする樣にその邊へやたらに子を産んで歩いて、困つたことがある。それをチャンが始終つけ歩ないて泣き、心配しながら始末してやります。親が産婆で子が産婦の形ちです。ところが猫の子は體内を出切る迄うすく一重のカンテンの樣な皮をかぶつてゐます。産むにはその皮に蔽はれたまゝ一たん子供が外に出て、それから親がせつせとそのアマ皮を食ふ。それで初めて産聲を上げて中から濡れた鼠の樣な子が世に出ます。――それを、チャンが天弦の産の面倒を見た時には天弦が赤兒を生み出すと、まだ子が體内からすつかり出切らないのに産婆のチャンがどしどしアマ皮をはたからなめ取つて了ふ。恐らくアマ皮は外氣に當ると折りをうまく考へて自然嬰兒にかぶせてあると思ふ。それを然し一匹が半分産をする。すぐそばから又他の一匹が手傳つてグシヤグシヤアマ皮を食つて了ふので、嬰兒はやつと母體を離れて外界へ出るとその時には既でに、死んでゐました。無慘な「愛情」を感じました。

（下）猫三代

二年前でしたがその「産婆」のチャンが死んで、娘の天弦だけになつた。のみならずチャンはその時一匹烏毛（クロウゲ）と云ふ子猫を殘して死にました。彼女（チャン二世）はバカに氣の弱い、人間にもよくある勝氣なグズグズ出來ない、云はゞ亭主はそつちのけでせつせと工場へでも押し出し相な長屋のカミさん氣質のしつかり猫でしたが、それには生活が白

影響したと思ふ。私達は彼女を初め郊外大崎で飼ひました。そこは家のまはりがすぐ畑や川なので、自然チヤン猫も家から遠出をする。遠出をして草地で生きものを取つたり時には何所か農家から、ヒヨツ子などをせしめたことがある。何とうまかつたらう！身をふるはせて食つてゐた。

――あの鳥や鼠を食ふさまは別です。家畜ではない野獸で本能で、怖くなります。飼ふのはまちがつてゐる樣な、いつものチヤンは化の皮の樣なイヤに自信のある、實に餘りに人間ではない、不思議な傍觀するほか無い氣がします。――兎に角その經驗で、自由大膽に少女時代を過し、それから東京市内へ越して來たのでした。が、ビツシリとあたりに家の立て込んだ市内へ來ても、彼女には今迄のくせは止められず、非常に遠出をする。よく町筋を二曲り離れた西洋料理屋にゐるのを見ました。

「チヤンは？」

「洋食を食べに行つてゐるでせう」

さう云ふ獨立猫で元氣なものだつた。郊外でヒヨツ子やその他を外で食つた味をすつかり法式に心得てゐて、ボンヤリ家にゐておかゝなど待たず、洋食屋はおろかせまい天ぷら屋へも奥深いすし屋へもどしどし行つて、自在に「自活」をする。

そのよく行つた洋食屋に、大きな赤毛の犬がゐます。時々家のそばへその犬が來るとチヤンは怒つて飛び出して尻へ飛び付く。犬はノソノソ何の惡氣もなく臺所あたりへ覗きに來るのに、チヤンの方は家からウーウー怒つて毛も逆立て、いきなり飛んで行つて尻へ掻き上る。大きな赤犬が、その不意打ちに度ぎもを拔かれて悲鳴を上げつゝ逃げて行つたことが、屢々ある。――その能なき挑戰を、大方往來か洋食屋かでもチヤンからやつたのでせう。或る日のこと、洋食屋

の少し手前の道ばたにチャンは全身硬直して、死んでゐました。それを知らせてくれた近所の子に聞くと、大きな赤犬にのどぶへを嚙まれて振りつけられたと云ふ。勝氣に殉じてとう〳〵やられた。

犬は自ら好んで猫を食ふなど、そんな事はしません。尤も犬にもよるが、彼は猫には大てい悠々として、問題にしない態度をとつてゐる。只猫が之れは例外なく、犬を見ると何れも殺氣立ち、怒るのです。恐らく然し羊を見ても猿を見ても馬を見ても怒るでせう。世に「犬猫」が仲わるとは決まらず、猫はどの動物とも、極端に云ふと自己以外のものにはそれに出逢ふ、さそくの挨拶には、忽ち相手に惡意を持つて攻勢に出ます。

然しそれも彼女の性格ばかりからするのではなく、又自分の武器の出來に依る。天意と云ふことが出來ます。一體弱く出來てゐて、得意の一手は只素早く相手に第一印象のショックを與へ、ひるむ間に自分は木へでもかけ登る。彼にはそれしかありません。で、こいつは敵か味方かわからない、怪しい？と見ると、斥候も偵察も愚か矢庭に第一擊の爪(寶戰)を食はして、樣子を見る。日本海軍の戰術のやうです。

――然しすると猫と云ふものは斷へず平和なく、殺氣に充ちてゐる樣に見えるが、さうではなく、それが猫生活の自家防衛と延いては平和に對する前提らしい。何故なら出逢ふすぐ容赦なく惡意と拳を投げた結果、偶々相手が自分の生活身體に害を與へないと納得出來れば、此度は仲間とはおろかよくある樣に犬とも猿とも全く仲よくなる。仲よくなつたら又のほうずに仲よくなる。と云ふのは猫にとつては、自家一家主義を振へる交渉が仲とのあり得る唯一のつきあひなのですから。

彼はそれ故に孤獨で、戰意和意凡てに生活がエキセントリックです。一種諸動物中のけ者視される濃い所以でせう。

洋食屋の犬とも、も少しチャンが「猫」氣をおさへたら親しくなれる餘地は充分あつた。又チャンがあのチャンでなかつたら、よかつたかも知れぬ。その程度の性情の差は猫個々にあります。その頃天弦は洋食屋の犬が來ると背を高くして怒りましたが、その有様は假令犬の眼からもたしかに不快に、小しやくに觸つたと思はれる。然し、その犬は平氣で見すごしてゐました。天弦だつたら再三の中には敗けたかも知れぬ。それをチャンでは、いつも度外れにすぐ掻きかゝつた。とう／＼ガブリとのどをやられたのです。實力は云ふ迄もなく犬と、問題にならない。然も此の相手は又半間優にある牡犬だ。

チャンが横死してあとには生後一月にならぬ鳥毛が殘つたし、天弦は三年にはなつたがカラ子供だし、困つたと思つた。彼女はその半月程前、チャンに心配かけてまぬけな死産をしたばかりなのです。彼女の弟の小さな鳥毛は、まだチャンの乳から離れずにゐた。誰か育て手がなしには育つまい。それはチャン無き後は無資格な母――天弦には出來ない……

と思つたところが天弦は死産後で然し異狀なく乳が出た。その乳で、弟の鳥毛を育てました。自ら一人では今迄お産も出來なかつた奴が、母の遺兒の鳥毛（弟）を慈しみ、哺乳し、立派に育てました。彼女は母が死んでから自らいつか母らしくなり、顔付き態度まで大人びて月の出の様に實際「獨立」し、境遇をすぐに生かせる叡智が忍ぶと思へる。我々はその様に感心しました。――あまつさへ、今までチャンが自分にやつてくれた様に、それからは天弦が鼠をとつて來て弟の鳥毛にやつてゐた。學んだのです。その天意にはさすが、美しく感じた。尤も、天弦は近く不幸な死産で子を亡くしたから、たま／＼ゐた小さな鳥毛を弟と知らず、子とまちがへたか、その所は、恐らく天弦に聞いてもわからぬでせう。

彼女は今家の猫中での立派な元老です。元老と云つてもわからないでせうが、それは古くゐる猫にする待遇でそれ迄はチヤン二世がその位置にゐた。食事の時そばにゐることを許し、鳴く度びに飯をやり、それにやらない限りは他の猫に何かやらず、留守の時にはそれの分だけさしみでも牛でもピーや黒猫の貰つた位ゐだけ、とつておくのです。それにふさはしい又彼女には重みと格があつて、自然別だ。本屋の天弦堂へ行く筈だつたのが名だけ貰つて、彼女はゐ殘つた。

彼女についてはいろ／＼記憶がある、中にも一度。全く殺して了はうと思つた記憶が忘れられない。彼女を見る度びに、フツと寂しい顏などしてゐると思ひ起して今は又それ故に、一層親しい愛が湧きます。――が、一體この猫や犬への愛情は何だらう。小さな無力な、自分にたよられるもの、こつちがなければ向ふもないもの、少くもさう或る點で思へるものに、いつか年齢の中で感じる無垢な情だらうと思ひます。さう云ふ保育本能があるに相違ない。それは必らず我が子に對して一番よどみなく流露する。私達には子供がない。それも猫をいつも飼つてくつたくしてゐる一因と思ひます。可愛くて仕方ないかなり内部の心理があるのです。

筆がそれましたが、まだチヤンのゐる或る時のことでした。その頃天弦が多分條蟲でもわいたか、始終腹工合が惡く、斷へすそゝうして汚なくてたまらない。全く汚なくて堪へられない。家の者もみんな嫌ふし病氣は服藥させても猫つのるばかり、終始その邊を掃除してゐないとやり切れぬ始末です。天弦を思ふと家の中が陰氣に、不愉快で、捨てる考へも起りかけてゐる。殊にその最中のある夜のことでしたが、泊り客がありました。彼等下の室の者は、みんな客間へねましたが、「ホラ、天弦があつちへ行つた」「又此方へ來た」キヤア畜生！ 畜生！とわいわい騷いでゐる。夜十二時を過ぎた頃です。私は二階でものをかきかけてゐましたが、下の騷ぎが耳につき、泊り客の女は殊更仰山に邪險に叱する。その聲が耳につく。氣になつてイライラしてまるで何にも出來ず、落付くことが出來ない。

「叱！」「叱！」と何かァ猫を追ふ憎し氣な聲が又きこへます。全く天弦が汚ない事は汚ないのである。——その一瞬に、カッと名狀しがたく腹が立つて來て私は、ペンを叩きすて、粗暴に階段を下りて茶の間から襖越しに客間の妻へ、云ひました。

「天弦の奴何所に居る！つかまへろ。」

嚙み付ける樣に。その私の怒鳴り、且階段をかけ下りて來た見幕は一時あたりを靜かにしました。

妻がねまきで出て來て、

「どうしたのあなた、急に怒つて」

「猫は汚ないし人間はうるさいし何んにも出來ない。馬鹿野郎。殺しちまへ、あんなもの！」

私は親せきの者がどう思はうと、いゝと思つた。(貴樣も同類だ！)

「何所へ行つたんだ、猫をよこせ。」

妻はあつけにとられ、泊り客はひつそりと恐らく樣子をうかゞつて、かたずをのんでゐる。私は動悸ばかり變に感じた。そこへのつそり天弦が出て來た。私はいきなり彼をわしづかみにしてそこへ座り、妻が「殺すなんてあなた——。」

私は何くそとイヤと云ふ程猫をおさへて、疊へ力任せに鼻づらをこすりつけた。猫は悲鳴を上げてあばれ、私の腕を蹴りに蹴る。畜生！私は立つておろ／＼見てゐる妻に云つた。「ボンヤリ立つてゐるな。向ふへ行つてさつさとねてゐろ。騷ぐにや當らねえ。俺が片付ける。——その襖をしめとけ、」

私は此の猫を此所で殺して、ギャー／＼騷ぐ下の室の奴等に一種面當てしてやる氣があつた、たしかに。意識的に。

私は天弦をしつかりおさへ付けてゐました。

「何故いつまでも見てゐるんだ！」

妻はそれで隣りへ退きました。天弦はだら〳〵ねばる液汁を疊へ垂らして私におさへられ、然しおとなしくしてゐます。反抗せずにぢつとしてゐる。どうして殺してやらう？何かヒモでも卷いてメめてやらうかとその遣眼でさがした。私は猫を離して遠くへ力任せに一つ突きやりました。彼女はザラララと疊に爪を引かけて、辛くとゞまり、二三尺向ふにけし飛で、そのまゝぢつとぢゞまつた。チロリと眼を上げて私を見たが、更にちゞまつた。そのまゝ聲も立てず、逃げもしない。只何か投げ飛ばされた筋道に液汁の點々を汚なく飛ばしてそれはまだヂクヂク出てゐる樣である。そこにしよんぼりと背をすぼめ、下を向いてゐる。

私に殺意があらうとは、まさかにも思つてゐないに決まつてゐます。こぢられ、投げられたのは日頃のくせで、自分が惡いのだと思ひ、息さへ低くしてゐる。――病氣である。觀念してゐる樣に見える。あたりは靜かで、シンシンと夜氣と靜けさが心へ沁みて來る。この猫を殺さうとして、――どうしてそんなことが俺に出來るものか。それは初めからどつちにせよ實は心理の底では、わかり切つた話だ。私は此の猫にどうしても愛がある。その愛情を、この節この猫はひどく汚なくて全くホトホト愛想がつきるし今夜は家へ又他人がはいつて、殊に猫故に散々イヤがり、我鳴つたり騒いだり、私は何彼と阻害される。――凡てこぢれて愛情が出にくい。素直でない。それ故ムシヤクシヤして私は怒つたのだ。お前が強ちにくいわけではないのだ……私は「天弦、天弦」と彼を呼んで見た。ひくゝ。それから手をのばしてぢつと動かずにゐる彼女を引きよせ、背を撫で、のどをさすつてやりました。哀れなしみじみとした感がした。彼はだらだらからだを動かしたあとに液汁の糸を引きながら、まだぢゞとまり、然し次第にゴロゴロのどを鳴らして私のそばにかゝんでゐる。のどをさすると目を細く、首をさし出す。メめてもかまはないと云ふ位ゐ、私に身を提し、甘んじてゐ

る。

結局私は、又之れを下へおいてはダズダズ泊り客が騒ぐだらう、うるさい。いつそ俺が今夜は連れて行くと決心的に考へ直した。で、合の襖をかたくしめ切り、それから汚ないが一思ひに猫を抱き上げ、二階へ上つた。私は着物を汚された。然しどうせ汚れたらそれまでと思つて、毒ではないだらう、その晩は抱いて、ねてやつた。私は床も何も彼もシミだらけにされたがいつそ面倒でない愛情の方が汚ないよりはいゝと思つた。私は天弦を無垢に感じた。かくてできものだらけの子を世の母は此の種の萬倍の至情で抱くか。

彼女は元老で、今健康にその後の二匹の子ゝ共に、家にゐる。一番小さい今ゐる黒はやつと四月でじやれ盛りです。猫にも不運なのがあつてよく來る宿なしの赤は二三匹子猫と共にコソコソその邊のゴミ溜などをあさつてゐますが、親子ともやせて色つやが惡く、何れもコセコセしてガタリとするとすぐ逃げる。子猫もチョコ〳〵一所に逃げます。じやれるゆとりさへ無さ相に、不幸だ。

それに引きかへて家の黑チビは、鷹揚でのんきで、滑稽で、どこへでも長々とねるか、眼がさめれば騒いでゐる。母には鼠を貰ふし、人には飯を貰ふ。愛撫はあり餘るし、之れで苦勞なく何れ猫なみに成育するかと安穩に思ひますが、然し彼には彼で又今後難義も經驗もそれ相當に重なる。人間の留守には二階の戸の切り穴から出入りすることをおぼへなければならず、前の家の塀を傳はると竹竿で突き落される目に幾度かこりなければならない。洋食屋や靴屋の犬とも何れは出逢つて感情を不安にもまれなければなるまいし殊に危險なのは、鳥毛が曾て川逢つた樣な、猫イラズでやられた鼠を食つて床下で橫死する不運など、或ひはないとは云へません。又は魚の大骨をアゴに立てゝ了つて、ダラダラ唾液を流して長時間、人に氣が付いて、拔きとつて貰ふ迄辛苦しなければならないかも知れぬ。

猫さらひの危險もある。黒チビを見るとその天眞な可憐の影に、そんな思ひが消へずに立ち迷ふてさすが猫生活も、安閑ではないと思ふ。老天弦は凡て之等を識つて既に生活に程と賢しさを生じ、靜かに考へ深く、首が年功で細くかたくなり骨ばつたからだで、毎日過してゐます。平和に。――その中間のビー猫は又のんきで、仕たい放題、自家一家主義を試み、魚屋が來るとその聲でねてゐても飛び起きる。ガラリと隣りの戸が開くとKおばさんがいつものドブ板へ何か食ひ餘りを開けてくれたと心得て早速出かける。そんなことは凡て拔目なくおぼへ、我々には巧みに甘へて食餌をねだる。此の頃では太つて一貫三百匁からあります。悠々と、彼の青春を樂しんでゐる。私の猫共ですが、又猫にとつても此處は彼等の家なのですから、その生活はいろ〳〵、自主自由で相當に存外考へもあるでせう。水は手洗鉢のがのみいゝ、食事は一番あの二階の男がおかゝを澤山、飯を少なくくれるからあれにねだるのが利巧だし、晝間は下の八疊がねよく、朝は二階へ集まるに限る。ゆつくりねられる。呵々。私は彼等といつも親愛です。（大正十年八月記す）

附稿――思ひ出 （大正九年記す）

玉

私は十位ゐの時から、家に猫がゐたことをおぼへてゐます。その猫が私の親しくした初めての猫で名を玉と云ひ、女でした。白の多い三毛で、恐らく私の八つか九つ位ゐから家にゐた樣に思ひます。それを貰つて初めて「猫」を持つた時の感じも異樣に思ひ出だすが、朧ろです。何しろ九年間一所にゐて私とは特別親密にしました。が、私が中學を卒業する頃から、彼女はいつとなく健康な日が少くなり、間もなく死んだ。死んだ時には、私は家にゐず、畫かきに獨立して

小石川の方に離れてゐましたが、玉は家の向ふ側の煙草屋の屋根で死んで乾しかたまつてゐた相です。若しかすると餌りに思ふ私がゐなくなつたので力落ちして、死んだのではないか、と今も思ふ。私はその頃繪の仕事を思ふ一念に多忙で、つい玉のことは家を出てからは忘れる時も多かつたが――然し外で猫を見るときまつて玉は如何してゐるだらうとは斷へず思つた、――或る日家へ行つて玉の死のことを突然聞き、全く萬感のこみ上げる氣がしました。一つの自分の過去の一片――又は紀念――が、死んだ樣な氣がした。この間までゐたのにもう死んで了つたのか。私の小學中學ともずつと親しく一所に過したのにもうゐないのか。全く、互ひに一つしかない一生の氣がします。同時に一人しかない友の感です。玉は私の「少年」を誰よりもよく知つてゐる一つの生です。僕の膝へは、彼女はそこが巢のやうにきつと來たのだ。九年間斷へず。私は子供の時玉がゐないとねられなかつた。今でも私は彼女の擧つた顏もおぼへてゐるし、聲もおぼへてゐる。只形ちだけその後の猫と記憶が交つてはつきりしませんが、彼女の存在は只いつも私の記憶に鮮やかです。

私は玉に一つすまないことがある。――その時の彼女のつれなさ相な孤獨な影を思ひ出だすが、彼女が綺麗な三毛の子を生んだことがあります。その頃旣でに病身の初めでしたが、私はその子を玉と一所に育てゝゐるうち全く子の方が親の玉より好きになつて、玉が少しうるさくなつた。子を私が抱いてゐるとその膝の上へ又玉がわり込んで子を下にして、子は窮屈なので這ひ出して了ふ。私は心からこの子の方が貴樣より好きだ。と玉に對して思つたことがあります。如何したわけか、その時玉が悄然と私の膝を下りて、藏の戸前の黑塗りの上に立ち、寂し氣にあらぬ方を見て、それから外へ出て行つた。

私の膝へは、代りに子猫が乘つて來た。然し私は何だか氣が引けて、さすがあの玉とは全く僕が此の子猫位ゐの頃から仲よくしてゐる、この子猫はまあ可愛らしく面白いが然し淺い。とはつきり思ひ、それ以來、玉が厭ひと思へなくなつ

た。——あの時玉は寂しかつたかと思ふ。私が追ひ拂ひもどうもせず、只イヤだと胸に思つたゞけでフイと出て行つたのが氣にかゝる。

が、何と私をたよりにしてゐたでせう。私は時々玉を忘れたが、玉は始終私を忘れなかつたかに思ひます。夜中に暗中を手さぐりして便所へ行つたことがありましたが、神棚の下のところで矢庭に上から肩へ玉に乘られてひやつとしたことがある。思はず立ちすくんだが、その時玉はもう身をすりよせて肩のせまいところであつちこつち廻り、頰ずりをするし、ゴロゴロ云つてゐる。私は飯をこしらへて、それを食はせてから抱いてねた。玉はあの時うれしいと思つたか。

私は玉から惡意を感じたことをまるで思ひ出せない。彼女に對しては私が思ひ足りなかつた悔ひばかりです。殊に晩年に別れてゐたせいからさう思ふのでせう。彼女はコチコチに干しかたまつて煙草屋の屋根に死んでゐた。その時私はたしかに毛程も彼女のことは思はなかつた間。二人の間に、九年經つたのだ。私は子供ではなく、その時青年で畫かきになりかけてゐた。大人になるにつれて彼女には無情になつたでせう、本意ない氣がします。こつちは有意識、向ふは無意識なだけに。

彼女は澤山に子を產んだ。その度びにみんな鰹節一本づゝつけてお嫁やおむこさんにやりました。いつも私が仲人だつた。玉はそれには知らん顏してゐた。子供がゐなくなつて變な聲で夜泣いても、私が「玉、玉」と呼ぶとやつて來てゴロゴロ云つて安眠しました。

VIE

私は畫かきに獨立して小さな家を借り、二年ばかり過ぎた。此の二年と、記憶せぬ子供の頃の或る年月とが私

離れて住んだ時間です。で、異例です。恐らく今後へもさうかもしれません。私は猫が好きです。私の生活それ自身それを好む様に好きなのです。猫がゐないと一種物足りない。夜おそく起きてゐると家中で猫だけ御相伴に起きてゐて、向ふもこつちの起きてゐることに一種の喜びを感じてゐる——にちがひない。さう云ふ時には、その他の時には一度もゐたことのない私の机の一隅にゐる。彼も寂しいのできつと一つところにゐるのです。私は彼女がゐるので仕事が捗取る。イプセンはサソリを机の一端へおいて、彼が林檎へ毒を注す様を見ながら仕事することを好いたと聞きましたが、「好いた」と云ふ共通から私は机の上に猫にゐて貰ふことを好みます。彼女の夜の滿々とした巴の様な眼を見ると、何か氣がすんで無心になり、疲れてゐても元氣を取り戻す。

で、二十の頃私は獨立して赤阪一ッ木に猫と離れて生活しましたが、或る日その借家の裏手を散歩するとはからず石段の上に、捨てられた小さな黑猫とブチ猫を見た。私はそれをそのまゝ素通りするに堪へ得ませんでした。然しブチ猫はひどい眼くさりで汚なく、氣の毒だとは思つたが、强ひて連れ歸る程又氣の毒にも思へなかつたし、それに友達も一所で「ヨセ、ヨセ」と云ふ。私が捨猫に近づくことさへ既でにヨセと云ふ。それを一種口實に感じて、全くブチには氣の毒だつたが黑だけ拾つて歸つて來ました。

彼にはビイと名をつけました。私はその頃雜誌生活をやり生活社にゐたので、LA VIE のビイです。初めは女かと思つたが、段々時が經つと男と知れた。胸の一寸白いほかは全く黑のカラス猫でした。慓悍な顔をして見る々々優勢に大きくなり、ステッキの様に尾を振り立てゝのさばり歩く。面白い。私はすつかり彼が氣に入つた。

時々然し丈夫な元氣なビイを見るにつけその兄弟（?）のブチの成行を考へたが、多分誰かに拾はれたでせう。ビーを拾つた翌日又散歩に行つて見たが見えなかつたし、——然し、この事は間もなく忘れました。今久しぶりで珍らしく

思出した程度に。

矢張り「猫」を一體に好きは好きなのだが殊に「自分の猫」が段ちがひに好きなのです。どうも自然です。そこにはいつか生活的に記憶や背景がつき、離れられなくなる………

で、黒猫のピイは生長した。大きく、ノンキ坊主に面白く育つた。が結局彼とはそれだけのことで別れました。

彼は元氣で活快でトンキョで「おもちや猫」にはよかつたが、一體牡猫は情がなくくどくエゴイストすぎ「動物」すぎます。久しく家にゐないので心配してフト氣がつくと、なんだ！女をあさりに出て疲れて向ふの物干しにだらけてねてゐる。毛程もこつちを思つてゐることか。さかりがつくと、まるでそれ一方で飼ふにたよりない。人間の極道者が汚ないやうに汚ない。それが家にゐるだけ猶イヤらしく汚ない！

ピイはその感を私にくどく感じさせてゐた頃、丁度家から欲しがつて、來たので、やりました。鼠の番に。尤もそのやる時、「このバカめが――」とつくづく彼を見て思つて、寂しい人情以上憐む方が亂暴な氣はしましたが、一體私はその頃全きピユーリタンの氣持でゐて前に少し經驗したことのある性慾の不淨生活を心から厭はしく感じてゐた。それで假令猫からもその氣合ひを餘り無遠慮に見せられるのは、我慢出來ない、イヤな氣がしたのです。――それで彼とは別れました。

その後も私が實家へ行くと、ピイは相變らずのつしのつしと歩いてゐた。が、「ヘン、ろくなものも食はせやがらなかつたくせに」なんだと云つた横柄な顔をしてゐました。私も「とぼけた野郎だ」と思つた。時々抱いたが「自分の猫」の氣はしなくなつた。彼はその後、行方不明になつた。

チヤン

翌年、私は結婚しました。そして南品川へ家を持つた。妻は子供の頃から知つてゐた友達で、「結婚」が自然になり、生活を合したのです。

彼女は私と結婚するのでそれ迄飼ひ馴れてゐたコマ鼠を一家族連れて來る筈でしたが、その話のあつた頃はまだ私の家にはビイがゐたので、氣になつてゐた。――ビイは何しろ變な時私と識り合つて、實は此の件も一原因できよく別れたのかも知れません。が、心配の猫はゐなくなつたが、彼女（妻）の鼠は病氣にかゝつて、みんな死んで了つた。それで妻、イヤその頃×子は、廊下のスミで空箱を見つめて泣いたと云ふ。私はその知らせを丁度その頃行つてゐた兵營で聞いた。

私は可哀く思つた。鼠を？ 否、その死を泣いた方を。で、班から同情の長い手紙をかいたことを思出す。イヤハヤ！ 戀にかゝつては、猫も鼠も姿を正視されず、材料になります。愛情の。呵々

間もなく私は眼の爲めに兵營を出されて、寒い年の暮れに、郊外へ家を持ちました。來る筈の鼠が來なくなつたので、代りに一匹猫を飼ふことにしました。私は實家のそばからやつと乳ばなれした綺麗な三毛猫を貰ふことが出來て、或る日彼女を煙草箱に入れ、院線電車で南品川へ連れて來た。

私はその猫をパツと新居の疊の上へおいた時のシーンを思ひ出す。それが我が家の「チヤン」一世になつたのですが、彼女はピイピイ泣いておぼつかなく這ひ、それ迄鼠は知つてゐたが猫は初めての妻は珍らしがり、又氣味惡がつて白い前かけに兩手をくるみ、しきりにかゞんで熱心に見てゐる。それが私には今後にかけて面白く、樂しい。此度こそ

「俺の」飼ふ猫と云ふ氣がします。私と妻とが飼ふ。九年生きるかしらん？――うれしく、樂しみで、無上に愛を感じます。

小さなチャンは段々と育ち、美人になり、よくチヤれ、妻にも馴れ、我が家にてよなき愛猫(ペット)となりました。が、我々がその家から大崎へ越した日、引越しのどさくさに、とられたか迷兒になつたか、姿を消した。我々は荷が落付いてから一瞬フツとチャンの不在に氣が付いて、そのつい前に門のそばの石の上で妻は見たと云ふ。チャンはあんかにはいつて食器と一所に荷車にゆられて來たのです。――そのゐないと思つた一瞬が一時間になり、三時間になり、我々は段々眞劍に、方々探しました。夜まで探したが見えませんでした。我々は力落ちして、寂しく感じました。

變なくず屋がチロリと家を見て夕方通つた相です。きつとそいつに違ひない。可哀想に！　あんな無垢な思ひの猫は、又ゐません。

チャンを思ふとその背景が忍ばれる。生煮への米や、毎日同じおかず、それを又喜んで食べる二十一と二十二の我々の夕方、小さな三毛猫がチヨコンと二人のわきに座つて首をかしげて見てゐる。――さう云ふ不死の日の記念に、永久に美しく、チャンは神かくしに逢つたのかも知れません。私はその後も何匹も猫を持つが、その何れにも「チャン」がゐる樣に思ふ。チャンが猫天使で彼等を守る樣に思へます。それ故家の猫には、引きつゞき「チヤン」系統の名を付けます。

で、二代目のチャンの時から我々は市内へ越して來ました…………

廬山日誌

谷崎潤一郎

(大正七年)十一月十日　晴。

午前八時眼を覺ませば珍しくも空晴れたり。北京を發してより實に一週間目の青空なり。午前中は日記をつけ廬山誌を讀みなどする。今日は日曜の事とて向ふ側の天主教會へ參詣する支那人多し。敎會の鐘朗らかに空に鳴り渡る。

午後四時頃、田中氏、及び折柄來訪せる太田氏と共に相携へて九江(キユウキヤン)市の支那街に入る。租界より支那街に通ずる所に石のアーチ二つあり、くゞりて右折し、左の小路を曲りて龍池寺の前に出づ。此の寺、開山は晋の慧遠なりと云ふ。寺の前のアーチを入れば湖畔に碼頭ありて左側は五味溜なりと見え、夥しき塵埃堆積す。碼頭の石段の下には六七人の若き女等水にかゞみて頻りに洗濯す。煙水亭の滸に憩へる船頭を呼びて船に乗り湖上に出づ。亭の右には長堤の柳あり、右舷には九江城外の家々岸の石崖の上に並び、紅き柱廊あり、灰色煉瓦のバルコニーあり、又鋸の如くジグザグの線を弄びたる土塀あり、それ等の家々には水際に達する石階あり、ところどころに突き出でたる碼頭あり、左舷には九江の城壁、城外の教會、學校、丘陵が見え、その向うには能仁寺の七面六層の磚塔聳えたり。(傳へ云ふ、此の寺は梁武帝の時創建し、宋の仁宗の世白雲瑞師此處に住すと、)塔の少しく右より廬山の山脈青く淡く、ずつと右方の町の上にまで蔽ひかぶされり。船岸を離るゝに従ひて右舷の町の突角は次第に展け、更にその向うに長く長くつゞきたる人家現はる。

西洋造りの棲閣や白壁の家々は段々なくなりて、屋蓋の如くに造りたるアンペラや板圍ひの粗末なる陋屋となる。左舷には城内の市街の甍屠々累々として重なり、城壁の彼方なる學校のさまなど手に取る如し。振り返りて過ぎ來し方を見れば、例の天主教會のゴシックの屋根二つ、十字架を載せて空に秀でたり。

煙水亭に上りて寺院の本堂、客殿に到る。「鳶飛魚躍」の扁額あり。客殿は本堂の左右なるアーチを潜りて水に臨める所にあり。白壁の塀にも窓ありて水上を眺むるを得。塀には蔦かつらの葉からみつきたり。又向つて左の客殿よりは湖面の風景殊に美しく、最も廬山を眺むるに適す。「縱識廬山眞面目」の扁額ある所以也。

煙水亭を出でゝ再び船を浮べ長堤に向ふ。ほんのりと空に羅衣をかぶせたる雲間を破りて、日光強く二三本の柱になりて右舷の湖面を照らす。廬山はいつしか夕陽を浴びて色少しく變り、藍色の中にところどころ細かに柔かに茶褐色の皺を露はす。その後ろに一層高く、恰も前山が後ろの空へ影を落したらん如くに蜒蜿とうねれる蒼黒き山脈あり。太田氏の言に依れば、更にその後ろにも一脈ありて、山は三重になり居れりと云ふ。前山の右方の頂きより一二寸ほど低き所、茶褐色の窪みの中に微かに白く反射するものあり、此れ牯牛嶺の西洋館なりと云ふ。廬山の裾遠く延びて市の郊外に連なるあたりには黒き丘陵起伏し、その間よりほのじろき夕煙立ちのぼる。堤防の上を十數人の若き市民等、長衫の裾を夕風に吹かせつゝ右より左へゆる／＼と歩み行く。蓋し學生ならん、そのさま得も云はれず風雅也。左舷一帶の岸邊には雨上りの洗濯物を干したる竿非常に多し。

船は天花宮の側なる長堤に着く。堤には水に漬かりたる楊柳の大木、枝をこんもりと垂れて遙かに對岸につゞく。裏湖に波少しく荒くして水青く、一方の湖は水白くして波穩かなり。堤上を右に行けば漁夫の船を繕へるものあり、網を干せるあり、四つ手網をつるす道具を並べあり、鮒の如き魚を澤山ビクに入れて城内の方へ歸り來る人多し。裏湖の

對岸、左側の丘陵には松多く、畑のさまなど日本に近し。天花宮の外側には黄ばみたる――寧ろ紫蘇色、若しくは鐵府色に色褪せたる――銀杏數株あり、長堤の西に盡くる所より顧望すればその葉白壁を背景にし、水に枕みて美しさ云ん方なし。娘々粧椛亭の六面三層の塔らしき建物の甍、又その葉の間よりちらちらと見え隱れす。

再び船に乘りて歸路につく。城外左の方より、予等の進路と直角に一艘の畫舫漕ぎ出でたり、船中にはエビ色の服着けたる青年、水色の服着たる女と並び、その外にも二三人の客見ゆ。無數の鳥群空を飛びかひ、水上には小魚躍り、數十匹の燕船の行く手を掠めて舞ふ。日は雲に呑まれんとして一層赤く、左舷の水に一直線に映ず。ふと心付けば廬山の山色三度び變りて、中腹より以下全く淡き褐色の霞の底に沒したり。

船より上りて太田氏に別れ、田中氏に案内を乞つて西門より城内に入る。汽車の着きたる時刻と見え、狹き門内を城に入る者頗る夥しく、無數の輿、荷物を擔ぎたる苦力、兵士など織るが如し。舗面泥に塗れたれば一人の紳士を乘せたる擔夫、足すべらせて門内に轉ぶ。混雜の中をシユウマイ賣りの如き屋臺を擔ぎたる物賣り徘徊す。街には更紗の布や毛皮など吊り下げたる商店見ゆ。九江の名產なる陶器、紙など買ひ求めて六時過ぎ歸る。明日はいよいよ太田氏と共に廬山に登らんとす。

十月十一日　曇

午前八時半起床、十時朝飯を濟ませたる頃太田氏誘ひに來る。荷物を苦力に持たせて大元洋行に行き、隣りなる怡嶺公司の輿を仕立てゝ太田氏と共に廬山に出發す。時に午前十一時半也。

龍開河に架けたる橋の袂を左折して市中を行く。例に依りて狹き道路の雜沓夥しく、太田氏を乘せたる輿は少しく先に行きたる筈なれど、人通りに遮られて影だに見えず。暫くして右へ曲り市外に出づれば、左に甘棠湖、右に龍開河の流る

ゝ中を、路は一と筋の絲の如く縫む。煙水亭の柳は煙るが如く、能仁寺の塔、天花宮の白壁、[illegible]亭の二層樓など遙か彼方に名殘りを惜しむが如く見ゆ。裏湖の西岸の丘には墓石散點し、その間を牛の群徘徊す。路はやがてすゝきの生ひ茂りたる小山の間をうねり行く。時々向ふより僧侶の來るに會ふ。又一匹の羊を曳いて來る者あり。うすくどんよりと曇りたる空には、鳶、鵲など舞ひ、廬山は全體の山容を青く露はして行く手に連なれり。たゞ一面に蒼くして細かき峰や谷は見えねど、正面に最も高く、二つに割れて烏帽子形をなしたる峰あり、その左に二三寸低く、やゝなだらかなる一脈、又右の方には烏帽子形の峯と高さを競はんばかりに突兀と、屛風の如く天際を限れる削壁の一脈あり。此の脈の面積非常に廣く、更にその右に低き一峯ありて、そこにて急に削り取りたる如く山は終りとなつて居るなり。左端の小峰の上空に鴻雁の一列、遠く小ひさく、珠數の輪の如くになりて右より左へ流れ行く。そのさま恰も水中に藻のただよふ如く、繽紛れにいろいろの輪の形をなし、或る時はとあみを打ちたるやうにパッと圓くひろがり、或る時は花火の燃え殼の如く、いびつになりて早き速度にて天より落ち來らんとする如く見ゆ。又、蒼き峰の前にも雁の群あり、過ぎ來し方にも雁の群あり、鳥の多きこと非常なり。いつしか左右に田圃打ちひらけ、水田の水たまりには相變らず水牛が憩ひ、少しづゝ上りになり行く路上には、黒、白の小豚ころつき、行く手の方は廬山の裾野なる丘陵波打てり。ところどころに苦力の草鞋を買ひ、茶を飲みなどする小屋がけの休み茶屋あり。そこにて二度ばかり休むうちに早や大分高く登りたりと見え、右方にひろびろとしたる湖を望む。これ寒湖なり。顧れば寒湖の右には甘棠湖あり、その向うにやゝ黄ばみたる水の帶、渺々として右より左につゞき天際に入る。これ楊子江なり。江の對岸には又更に湖ありて、殆んで滿目水ばかりなり。ただ甘棠湖の前方に、今過ぎ來りし丘陵が牛の背の如く横はれるのみにして、天も水も同じやうに曇りたる鉛色につゝまる。廬山は少しく山容を明かにし、中央の烏帽子形より前方に、寶珠の玉の如くまるまると起伏せる一脈あらはる。

その下は三つの深き皺を刻みて、青き靄の底より茶色の肌を示しつゝあり。右方の側壁よりも前方に分れ出でたる一脈あり、これ大林峰にして、それより右に、瘤の如く突き出でたる一峰の頂きの、樹木少しばかり叢生せるが香爐峰なりと云ふ。

又輿に乘りてすゝむ。左にはすゝきの丘、右には寒湖に沿へる平地つゞく。樹木は楊柳少くなりて松、銀杏、唐櫨など遠き野原に散點し、既に紅葉したるもあり。程なく左側に小河を隔ててさゝやかなる三重の塔を見る。廉溪寺なり、周廉溪を祀りたる寺なれども、小さき塔と白壁の低き堂宇あるのみにて、廉溪橋これにかかれり。一面に蔦桂の絡みつきたる風雅なる鼓橋にて、影を水に浸したり。斯くて小村十里堡に入る。街道の上には槇の葉を屋根より屋根に渡して、日蔽ひの如きものを作る。こゝにて又休息す。烏帽子形の山は次第に予等の左に迫りて、漸く廬山の山ふところに抱かれんとす。午後二時いよいよ登り口なる蓮花洞に到る。此れまでは自働車の通ふ坦々たる道路也。

左側には樹木鬱蒼たる一峰あり、他の側壁を成せる山、幾つかに分れて右に展けたり。溪流の淙々として路のほとりに流るゝを聞く。山の麓なる牯嶺公司にて漸く太田氏に追ひ附き、二階にて茶を貰ひ辨當を食す。苦力等は向ふ側の茶店にて飯を喰ふ。九江より此處まで日本の四里也。この邊の溪には寒くなると往々虎出でゝ、人を害する事ありと聞く。豹なども多く棲めりと云ふ。

愈々山路に向ひて出發。殆んど急勾配の石段ばかりなり。予の顏は自然と天に向ひ、予の足は前なる苦力の腰を蹴らんとす。兩側には高き峰、小さき槇の木立ち並びたり。前なる太田氏の仰向きになりたる山高帽の様子、いと風流に見ゆ。鼠色の衣纏うたる僧侶、予等の後になり先になりして、左の肩に白き袋を擔ひつゝ、四角な頭巾を冠り、長き裾の下に靴を穿きて悠々と登り行く。石段つきて平地へ出づる毎に、苦力は休みて息を入れる。舁きながらも肩を換へるこ

と頻繁なり。白石渓の谷に沿ひつゝ登るに従ひて、長江、寒湖、そのほとりの田園のさま益々ひろく一眸の下に集まる。寒氣漸く强くして幾重にも重れるズッと奥の山頂には、遙かに雪の積れるを見る。やがて山道中最も險峻なりと云はるゝ石段にかゝる。苦力は中途にて又休み、遂に別の苦力に予等を賣りて行く。

成る程極めて險峻なる、而も殆んど一直線の石段なり。恰も箱根の舊道を想起せしむ。途中時々西洋人の老婦人や紳士の下山するに會ふ。この路を登り詰めたる左側に休み茶屋あり、右は大林峰に面して數千仭の溪谷に臨む。屹立せる峰の斜面には石炭の如き黑き岩石のところどころに露出せるを見る。峰の開けたる處、谷の向うには楊子江一抹の白雲の如く弓なりに撓みて天に沖す。上流の方は下流より少しくひろがり、全く空に向ひて走れるが如し。その上にも亦同じやうなる雲ながれたり。遠く山麓に西林寺の白塔を望む。塔より右の松林の間に隱見せるが東林寺なるべし。されどその側なる香爐峰は見るを得ず。

太田氏の迎ひの人々こゝに來れり。二三町徒歩にて進めば、峰一つ隔てたる谷間の墓地に始めて牯嶺の支那街を望む。まだこゝよりは一里ほどありと云ふ。又輿に乘りて行く。樹木漸く稀にして左右の山に奇岩怪石壘々と現はる。垂直に谷へ垂るゝあり、頭上に落ちかゝらんとするあり、路は三千尺の絶壁の間を此れ等の岩に沿うて崎嶇として折れ進み、或は上り或は下る、最も急峻にして最も危險なる部分らしく思はる。而も楊子江は山の突角に出づる毎に絶えず右手の空の一部を成せり。

間もなく支那街に着。太田氏は左に行き、予は右に曲りて支那街を離れ、まろき石だらけたる溪川を傳うて大元洋行支店に到る。こゝは兩側に峰ありて眺望なく、荒廢したる所なり。

十月十二日　曇

午前八時起床、空相變らずしろじろと曇りたり。寒氣頗る凛烈。十時過ぎより案内の婦人をつれ附近を見物に行く。旅館を出でて少しく行けば向ひの谷より一面に白き霧、綿の如くに這ひ上りつゝあり。路の左に奇岩の突出せる所あり、その下は所謂錦澗渓にて深さ幾丈なるを知らず。向う側には大林峰らしけれど、谷底より白霧淡々と上り出づれば見るべからず。大抵此の谷は霧を生ずるを常とし、夏は割合ひに晴れたれど、此の頃は早朝ならざれば展望には不便なりとぞ。今少しく早く出かけざりしを遺憾とす。渓を右に見てすゝめば平地に出づ。霧の中に支那人のホテルあり、路傍には丈低き銀杏、松、石楠花など生へたり。地面は多く岩石にして往々その間を淸水流れたり。進むにしたがひ霧いよいよ深く、眼前はたゞ海のやうに白し。やゝ降り坂になりたる時、ボンヤリと山の形現れ、その上に四角なる家の如きもの朦朧と浮かびたり。これ御碑亭なり。登りて石室の中に憩ふ。右にも左にも錦澗渓のつゞきの谷あるらしけれど、雲霧に遮られて見るべからず。晴れたる日には遙かに揚子江、寒湖を望み得べしと云ふ。

御碑亭の側より谷に沿うて降る道あり、一二町にて仙人洞にいたる。洞の岩壁に「洞天玉液」と刻したる大文字ありて、岩窟の中に關帝を祭る。窟の奥より滴り落つる淸水を集めたる水たまりあり。一滴泉と云ひ、此れを掬すれば子が生まれると傳ふ。既に御碑亭は霧にかくれて見えず、前の渓には、更に一層白く濃き霧のかたまり盛んに飛び走りて活動す。眞に仙人の住むらしき岩窟なり。こゝを出でて御碑亭の前に歸り、峰の背中を傳はりて天地に行く。風少しく強く、右より左へ峰を越え行く霧夥し。此の時谷少しく晴れ、峰の突角にあたりて天に沖する霧の形、恰も龍のあまかけるが如し。…………

（大正七年支那旅行記より）

時論

神戸勞働爭議の側面觀

法學博士 吉野作造

(一)

最近神戸に起つた勞働爭議は、川崎三菱といふ日本有數の金權を向ふに廻して、無資無産の勞働者が數旬の長きに亙つて交戰狀態を持怺へたといふ點だけでも、我が勞働運動史上に特筆するの値打ちはある。資本家側が頑として其要求を容れない以上、又官憲が不干渉を表面の口實として內實かなり辛辣な壓迫を試みた以上、結局勞働者の慘敗に歸すべきは當然の道行きである。それにしては案外に能く長い戰鬪を持怺へたものだ。之を喜ぶと喜ばざるとに拘らず、兎に角吾々は勞働者の團結力の最近に於ける著るしき發達を看取せねばならぬ。一二三者の煽動の結果だなどと嘯くのは、爲にする所あつての言說でない限り、甚だしく時勢に盲目なるを自白するものである。

川崎造船所では社長の不在を理由として、初めから勞働者の申出でを受付けて居ないから、今度の爭點について何ういふ見解を有つて居るかは分らない。が、併し大體の觀察から推測すれば、勞働者の要求に對しては殆と理解も同情も無いらしく思はるる。それが少しでも有るなら、何を苦んで社長の不在を拒絶の口實とする必要があるか。三菱の方は或る點まで勞働者の要求を容れるといふ態度を初めから示して居つたと聞いて居る。それも誠意に出たか、或は勢に押されての話かよくは分らない。が、兎に角勞働者の要求を相當の點まで認めて一日も早く平和の狀態に還らうといふ熱心は有つたやうだ。それにも拘らず、結局穩かな解決を見ずに濟んだのは、勞働資本の關係について根本的の一謬見に囚へられて居つた結果と見なければならぬやうに思はるゝ。尤も勞働者側にも全然責任が無いとは云はない。

今度の爭議に於いて勞働問題に關する無理解の筆頭に來るものは矢張官憲であらう。官憲は爭議の內容には干渉しない。當事者の爭ふが儘に任かせるといふ所謂不干渉の方針を取つた。之が第一誤りである。而して勞働者側が少しでも所謂不干渉の

動に出づると少しの會釋も無く壓迫を加へた。勞働運動に對する官憲の干涉壓迫は固より今に始まつた事ではないが、其辛烈なる事今度の如きはない。此點も亦當局の大いなる誤りだ。一言にして云へば當局は干涉すべき場合に不干涉の方針を取り、干涉すべからざる事柄に極度の干涉を試みたので、果り二重の誤りを重ねたのである。而して其誤りの基く所は專ら勞働問題に對する無理解に歸すると思ふのである。此點に關する予輩の所見を簡單に述べんか、勞働者は資本家に對しては、子供の大人に對するよりも力弱いものである。所謂勞働條件の內容を此兩者の自由決定に任して居つては、結局勞働者は一から十まで資本家の云ふが儘になるの恐れがあるから、其處で官憲が干涉するの必要があるのである。少しでも勞働者の立場を支持しようとて何處の國でも團結權を認めて居るが、それですら尙ほ勞働條件の決定に官憲の干涉するは、勞働者保護の爲めに必要なりといふ事に、議論も諸國の制度も一致して居る。況んや未だ十分に團結權を認めざる國に於いておや。然るに我が國の官憲は爭議の內容には干涉しないと云つて得々として居る。殆ど其の何の故たるかを想像する事が出來ない。更に進んで諸外國ではそれでも尙ほ勞働者の立場が資本家から壓倒され易いので、少しでも彼等の利益を保護せんが爲めに、例へば同盟罷業權の如きを認めて居る。さらでも勞働者は結束によつて辛じて資本家に對抗するの地位を占め得るものであるから、其團結を堅うするが爲めに取る所の手段方法にはかなり寬大な取扱ひをする事になつて居る。我が治安警察法第十七條の如き規定は初め諸國でも之を認めて居つたが、之が實行は結局勞働者の團結權を有名無實ならしむるものだとして廢止する事になつた。日本では未だ之を廢して居ないが、其處に矢釜しい問題があるが、それでも兎に角之はさう極端に實行すべきものではない。少くとも此規定の意味を更に擴張して勞働者の一擧一動を悉く不法行爲の名の下に取締るといふのは、餘りに甚だしい干涉と言はなければならない。一部の人の論ずが如く、現行法の解釋上辯解の餘地の無い程の越權的干涉であつたか何うかは問題であるが、兎に角勞働問題の適當な取扱ひといふ立場から觀て、當局が干涉すべからざる場合に過當の干涉を爲したといふ非難を免かれない。爲すべきを爲さず、爲すべからざるを爲すといふ點に當局の無理解は最も明白に暴露されて居る。

要するにかういふ事情の下に爭議が一段落を告げたのだから、此一時的解決は問題の根本的解決に更に一歩を進むるものでない事は言ふまでもない。從つて吾々はやがてまた遠からず同じ樣な騷動の勃發するを豫期せねばならぬ。今度の事件を機

令としてお互に反省はするだらうけれども、誤解は寧ろ資本家と官憲との側に在る。彼等は何れだけ今度の教訓を利用するやは吾々の刮目して見んと欲する所である。

（二）

吾々の聞く所に據れば、三菱の方では何時までも爭議の續くのは、其面目にかゝはるとでも考へたのか、一日も早く平和の克復を見んと欲し、密かに一つの提案を作つて、略ぼ勞働者側の諒解を得て居つたといふ事である。斯かる妥協案が出來たのに拘らず、尚ほ解決を告げざる事月餘に及び、結局あゝした結果に終つたのは何ういふ譯かと云へば、資本家側も勞働者側も各形式的體面を重んじて、虚心坦懐以つて事に處するの誠意を缺いたからであると思はるる。此點については兎角資本家側に誤解が強いやうだ。而して其誤解の基く所を吾々が局外から研究して見ると、彼等が工場は一家の如きものである、一家の事は他人を交へず解決すべきものであるといふ謬想に囚へられて居る爲めであるやうに思はれる。尤も其一家といふのも封建時代の考へ方によるので、資本家は何處までも産業の主人だ、勞働者は即ち番頭丁稚だといふ考で押通さうといふのである。主人は番頭丁稚の利益を適當に考へてやるもの、又彼等の生活の全體について責任を感じて居るもの、從つて勞働者は全腹の信用を主人に捧げればいゝ、其處に一種の人情も起る、なまなか他人の容喙などに動くから問題が起るので、もと／＼うち／＼な同士の事だから能く胸襟を披いて紛議の收まらない筈はないと云ふのである。併し封建時代のやうに主人と雇人との間に所謂主從の人格的關係が儼存して居つた時代なら此理窟も通るが、今日のやうに兩者の關係が一定の勞務の提供に對して一定の賃銀を貰ふと云ふだけの乾燥な契約關係に止まり、而かもそれだけの關係すら何時解除されて赤の他人になるか分らないといふ淺い關係に在る以上、一家の情誼を以つて之を律するのは無理だ。彼等の間に自らかゝる情誼の發生する事は無論望ましいに相違ない。只本來兩者の關係は斯くの如かるべきものと云ふのは誤りである。況んや勞働者に於いては資本家を以つて到底彼等と利害相一致せざる別箇の階級と看做し、階級鬪爭を主張する者もあるに於いておや。敵だと思つて逆ふて來るものを、一家内の如く情誼を以つて結ばれて居る仲だと信ぜしむるには資本家に於いてまだまだ澤山爲すべき事が殘されて居る。兎に角兩者は利害相反する別箇の階級である事だけは疑を容れない。從つて第三者が其中に入つて調停するといふ事は、少しも恥づべき事ではないのに、三菱が事實第三者の調停によつて解決の曙光を認めながら、表面斯く云はるる事を極端に避けんと

したのは甚だしき誤解であつたと云はなければならない。第三者を拔からうとしたればこそ資本家から頭を下げて來いの、いや勞働者から頭を下げて來いのと、下らない面目問題に跌いて、折角展開しかけた局面を逆戻りさせたのである。資本家は今日の勞資關係をも少し有りの儘に見るの聰明を持たなければならない。尤も資本家は此事に氣が着かないのではなからう。氣が着いては居るが、併し此事が偶々勞働爭議に第三者を容れたくないといふ希望を貫くに好都合な所から、態と之を利用するのかも知れない。第三者の介入を見る時は無論話が面倒になるだらう。併し公明正大に問題を取扱ふ誠意さへあらば、第三者が入つて來たとて何も之を遠慮する必要が無いではないか。

工場は一家の如しなどといふ議論は、如何にも舊式の日本人の頭には感じ好く響くものと見えて、官吏社會でも今日は無反省に此考を取入れつゝあるやうだ。勞働運動は必ず當該事業の直接の勞働者に限るべく、局外者の之に加はる者は皆煽動者と視て、之を不都合呼はりするのは何時もの爭議に通有の現象であるが、今度も此點が特に力説されたやうだ。會社も當局も今度の爭議に於ける友愛會の指導を極端に否認せんとせるが如きは、其の最も明なる證據だ。之を要するに政府でも資本家でも、所謂勞働爭議は其勞働者と其資本家との間のみの問題だ、局外の第三者を之に關係せしむべきではない、といふ立場を強く執つて居つた事は疑を容れない。

第三者を交へず、又團結力を以つて押して來る事を許さず、不平の有る勞働者が一人一人會社と議論を鬪はすればいゝではないかといふ事に極まれば、それは成る程資本家に取つて都合が好いに相違ない。世間も穩かで當局者も樂だらう。併し乍ら勞働者は箇別的に資本家に對抗しては全然無力であり、其結果勞働者は奴隷的境遇に沈淪するを甘んぜねばならないといふ所から、所謂勞働問題は起つて來るのではないか。箇別的對抗の事實上の不都合を取除く事が勞働者に取つて必要であり、又社會全體の調和的發達の爲めに缺くべからずといふ所から勞働問題が起つたのに、其取扱ひの任に當る當局者や又は資本家が結局勞働者をして箇別的對抗によるの外、他に途無きの結果に陷らしめようとするのは、之を無理解と云はずして何と云はう。資本家は當の利害關係者だから致し方が無いとして、勞資兩階級の上に超然たるべき官憲が、其謬想を脱する事が出來ないとは、實に慨歎に堪えない。我輩は一部の人の說に雷同して、官憲の横暴、不當の干渉といふやうな事を叫びたくない、寧ろ彼等が社會の爲めだと信じて誠意を以つてやつた事だらうと思ふ。只誤りの原は此勞働問題の無理解に在る。此點を十分に諒解しな

い間は官憲の所謂橫暴壓迫は今後幾度でも繰返さるゝ事であらう。

官憲の右のやうな無理解は、勞働問題の根本的研究を缺く所から來り、且つ在來の資本家的思想の傳統に囚へられて居る結果であらうが、中には臆面も無くかういふ事を云ふものがあつた。今日日本で最も急務とする所は對外貿易の振興である、此點から觀て日本の將來に最も憂ふべきは、賃銀の騰貴による生產費の上騰である、此際勞働者が不當に賃銀の値上げを要求するのは、日本の產業を滅亡せしむるものである、と。かういふ說は是れまで耳に蛸の凝るほど聞かされた、と云ふよりも今日の勞働者はかゝる說のとんでもない間違である事を散々に聞かされた。勞働者の地位を今日の如きに沈淪せしめて置く事は國力の永遠の涵養に大害がある。所謂產業の一時的振興の爲めに犧牲とすべきではない。況んや所謂產業の振興によつて最も利するものは獨り資本家なるに於いておや。こんな事は百も承知である所へ、今更ら勿體振つて前記のやうな事を云ふので、勞働者はつくづく愛想を盡かすのである。こんな次第で日本に於ける勞働問題の解決に對し最も阻礙を與へるものは、何と云つても官憲の無理解であると云はなければならないと思ふ。

(三)

勞働問題を今日のやうな狀態の儘に進行せしむる事に、我が國の將來に取つて非常に憂ふべき事である。何とかしてもう少し合理的の進路を取らしたいものだ。それには何よりもさきに資本家の迷夢を醒さねばならぬ。一部の社會主義者は始めから資本家の覺醒を期待しない、彼等は資本家といふ境遇の下にあゝした考へ方をするやうに運命づけられて居るものだから、資本主義を認むる以上、彼等の態度を改める事は不可能だと云ふて、所謂極端な階級鬪爭を主張するのであるが、是等の點を吾々は今事々しく論爭するの遑は無いが、疑の無い點は今日までの所資本家は斯く見られても仕方の無い程其獨特の立場に囚はれて居るといふ事だ。餘程思ひ切つた覺醒をして貰ふでなければ勞働問題の今後の進展は甚だ心許無いのである。次ぎには當局者を初め各方面の政治家にも勞働問題の正直な研究を希望せざるを得ない。日本の現狀の下に於いては已むを得ない事であるけれども、爲政者政治家は餘りに資本家階級と利害を一にし過ぎて居る。如何にして彼等に覺醒を求むべきやについては、いろいろ論ずべき點もあるが今は略する。現に今勞働問題は或る意味に於いて從來の產業經濟の方針に逆つて起つたものであるから、從來の產業政策の取扱ひとは全く違つた頭腦で之に接するを必要とする事だけを一言して置く。

併し我輩の知る限りに於いても、今日の官界に勞働問題に相當の理解を以つてした人も居ないではないが、それにも拘らず彼等が實地に臨むと何うしても勞働者の行動を寛大に認むるを欲せざる態度に出づるもの多きは、何ういふ譯であらうか。抽象的に勞働問題を語る時にはなか〳〵吾々の立場にも共鳴する、にも拘らず當局者となると反對の行動を取ると云ふのが我輩の友人にも多い。何ういふ譯かといふ事をいろ〳〵考へて見た。斯くて其處にいろ〳〵な原因を想像したが、一番根本的な原因は結局勞働者の不信といふ事に歸するのではないかと考へた。卽ち勞働者は至つて低級なものだ、時勢の流行に伴れて彼等もいろいろの要求はするが、考は極めて淺薄である、與へられた權利を果して能く善用するの能力あるかすら疑はれる、故にうつかり自由を與へても彼等は何をやるか分らない、而して多くは求むるを知つて爲すべき責任の自覺が薄い、斯くの如きものに一歩を讓歩するのは、卽ち飽く無きの欲望を促すやうなものだ、と。かういふ不安心の感情から彼等の言分は相當だと知りつゝ尚ほ危惧の念を抱いて思ひ切つた態度に出で得ないのである。要するに勞働者に信用を置かないのである。他の一面から云へば人を信ずる事が出來ないのである。畢り自分以外の他人を信ずる事が出來ないといふ悲しむべき人生觀に囚へられて居るのである。然し人間といふものは果してかういふ風に信用するに足らないものか。懸念すれば際限は無い。頑固な老人は生意氣になるのを恐れて、自分の子供を教育する事すら躊躇する。けれども本當に自分の子供に愛情のある者は、又自分の子供の發達の可能性を信じて居る者は、どん〳〵開發の機會を與へて危ぶまない。眞の人情が無いと例へば繼子の如く、形は親子となつて居つても自由潤達の教育を施し兼ねる事が多い。吾々は勞働者のやうな下級の同胞に對して何ういふ人生觀を以つて臨むべきであるか。此點が今後の勞働問題の處理の上に非常に大きな關係が有るやうに思ふ。細かい點は尙ほ他日詳論する事として、此處に簡單に一言して置きたいのは、今日我國の勞働者の內には非常に秀れた頭腦を有つて居る人が少くない。全體として官僚のなどの考へて居るやうな低級なものではない事と、も一つは人を馬鹿者扱ひにする事程不祥の結果を社會に持ち來たすものは無い、人生觀一變の必要が近來思想の根本的要求であるといふ事である。

（四）

今度の爭議の經過中、勞働者について特に感じた點は、彼等の間に案外によく訓練がついて居るといふ事である。只何分勞働組合其物が基礎甚だ薄弱なので、罷業をやるにしても殆ど何

等の準備が無いのだから、日を經るに從ひ段々苦痛を増すに從つて、足並みの動搖するのも致し方は無い。それでも彼等が數十日に亙つて兎も角もあれだけの結束を續けたのは吾々の驚嘆に値する所である。も一つ注意せねばならぬのは、財政的準備を缺く勞働組合が罷業をやると兎角最後の功を急いで過激な態度に出で勝ちなのであるのに、神戸の勞働者が徹頭徹尾莫大な資金を擁してゞなければ出來ないやうな持重の態度を執り續けた點である。警官との衝突に於いて一二流血の慘事を見たが、併し之は突發偶然の出來事で爭議全體の經過に頗る穩健なものであつた。

一體今度に限らず予輩の觀る所では、我國の勞働運動は其の說く所の議論はかなり極端であるけれども、其の取る所の實行手段は又頗る穩健過ぎると思ふ。彼等は動もすれば徹底的階級鬪爭を云ふ。飽くまで資本家階級を敵として戰ふといふ。かういふ議論を文字通りに解するものなら、所謂直接行動でどんどん目的に驀進すべきである。にも拘らず實際運動になると彼等は出來るだけ過激な手段を避け、社會の同情を失はざらんと努めて居る。社會を脅かす事によつて資本家に迫ると云ふよりも、寧ろ社會の同情を利用して、否、其力を藉りて共に資本家に迫らんとする態度のやうだ。理論と實行との此矛盾も將來の運動の發展を見る上に注意して置くの必要がある。

出來るだけ社會の同情を博し、其力を藉りて問題の解決を速かならしめんとするのが今日の勞働者の態度だとして見ると、此處に吾々の甚だ遺憾に思ふ點は、彼等が興奮の結果二つの最も大事な方面に於いて目的を裏切つて居る事である。第一は初めから巡査を敵にして強い反勞働者的感情を抱かしめる事である。下級の警官は上司の命によつて勞働者に敵對の地位には居るが、勞働運動の賢明なる方則としては、決して彼等を敵にすべきではない。況んや彼等の社會的境遇は寧ろ勞働者に近きものあるに於いておや。姿さへ見ると直ぐに敵呼ばりをするなどは、味方になりたい者でも怒つてしまふ。拔劍問題などで警官を責むる聲が高いが、法律上の責任問題は別として、我輩の冷靜なる判斷は寧ろ警官の方に同情したくなる。警官に罪は無い、只警官を壓迫に使つたものの責任は、初めから一片用捨するの餘地は無い。

第二に罷業の仲間入りしない勞働者を敵にする事である。罷業の勝敗は團結の大小によるのに、勞働者全體の爲めにする罷業の仲間に入らないといふ事は、此事自身運動の成功を遮ぐる事であり、從つて罷業勞働者が此等の輩を不信呼ばりするのも尤だけれども、併し人にはいろいろ云ひ難き內部の事情をあ

り、然らざるも意志の弱い優柔不斷の性質のものもあらう。善い事だからと云つて皆贊成し來るを期する譯には行かない。此場合に敢然として立つた勞働者は、一方には勞働者階級全體の爲めに一身の利害を犧牲にするの獻身的精神に燃えるの傍、いろいろの事情あつて傍觀の地位に立つ仲間に對しては寛容の精神を以つて對するの雅量がなければいけない。傍觀の地位に立つ勞働者は内心恐らく濟まぬ濟まぬと悶へて居るに違ひない。之に對するに寛容の精神を以つてするは、結局彼等を運動の内に羅致する所以である。が、其の反對に少しでも是等に對して同情無き態度を執ると、彼等は必ずや反對の方向に逃げて行く。此點に於いて神戸の勞働者は少しく聰明を缺きはしなかつたか。殊には資本家に對する要求條件のうちに、今度の罷業に參加しなかつた勞働者を解雇せられん事の一ヶ條を付け加へんとした者もあつたさうだ。かうなると吾々までが彼等に反感を表はしたくなる。何れにしても彼等が彼等に近い仲間の勞働者や又は下級警官を敵に廻したといふ事は非常な手落ちであつたと思ふ。大體の觀察をすると、今度の爭議は上流の資本家官憲からは非常に憎まれ、中流以下の連中からは相應の同情を受けたが、同列にあるべき下層の階級にかなり反感を表する者があつたといふ形になる。昂奮の際已むを得ない事ではあらうが、社會の同情を利用して最後の目的を達しようといふ戰略からすれば、決して賢い方法ではなかつたと思ふ。

勞働運動と所謂外部の煽動

八月廿一日の東京朝日新聞に、兵庫縣外事課長木村某氏が過般神戸市の勞働爭議に外國の金が入つて居るといふ風説の眞僞を確める爲めに、態々上海まで出張したが、何等の實證を捉へ得ずして歸つたといふやうな記事が出て居た。眞僞の程は確かでないが、併しボルシエヴィズムの宣傳費が朝鮮人の手を通して上海方面から日本へ入つた、而して金無しに容易にやりこうでないあの神戸のストライキには此度此金が入つて居るに相違ないといふ風に、一部の當局が疑つて居つたといふ噂は、早くから私共の耳にも傳はつて居つた。今度のストライキに官憲が未だ曾て見ざる程の激しい壓迫を加へたのは、(内相が殊更に不干渉の聲明をしたのは、極度の壓迫を粉飾する爲めに外ならないとすら云ふ者があつた。)其要求の適否如何に拘らず、今度の運動で勞働者を勝たしては其成功に乘じて ボルシエヴィキの金

かどんどん入つて來るに違ひないと恐れたからであるといふ時さへもあつた。之も何處まで本當の話か分らないが、前記朝日新聞の記事と對照すると、いささか思ひ當る節も無いではないやうに思ふ。

併し今日の勞働運動に、殊に賀川君の指導する神戸の勞働者の運動に第三者の金が働いて居る、殊に外國の金が働いて居るのと考へるのは途方も無い誤りだ。第三者の金でも働かねば自分獨りでは動くものでないといふ風に觀るのは、普段所謂壯士などを使つて居る俗惡な政治家の考へさうな事ではあるが、勞働者も之と同じ樣なものだと推定するやうでは時勢に通ぜざるもまた甚だしい。

少くとも今度の神戸のストライキに少しでも第三者の金が働いたといふのは全然跡形も無い。彼等の運動の資金は悉く皆是血の出るやうな金なのである。さればこそ彼等は遂に矢盡き刀折れて慘敗したのではないか。若し噂の如く當局者が本當にそんな考へで態々上海くんだりまで調べに行つたものとすれば、吾々は其愚かさ加減に呆れて物の云ひ樣も無い。

予輩は勞働運動に直接の交渉が無いから餘り詳しい事は知らないが、只之れだけは責任を以つて斷言して置く。此頃の勞働運動は決して外部よりの物質的援助による煽動は無いと。數年前にはあつた。壯士を使つて平地に波瀾を起す事に長じて居る一部の政治家が、勞働者が少し不穩の態度で動き初めるを見ると、直ぐに之に多額の運動費を供給して事柄を不當に大きくし、之を政界に利用するといふ事が屢々行はれたものだ。併し乍ら昨今は一つは勞働者の覺醒にもよるが、又一つには政治否認論――此說には私自身反對ではあるが、從つて又間違ひだとは信ずるが――の流行の結果、勞働者は所謂政治家などは寄せ付けべきものではないといふ確信を有つて居るから、昔のやうに政界策士の乘ずべき餘地が無いのでもある。中野正剛君のやうな勞働者の友を以つて任ずる人でさへ、招待を受けて演說をしに行つた或る勞働者の會合で、單に君が代議士であるといふだけの理由で、猛然な門前拂ひを食つたといふ事を同君の自ら書いたもので讀んだ事がある。甚だ亂暴な話だと思ふが、兎も角勞働者の政治家を嫌ふ事斯くの如くなるの結果、今日の勞働者は決して政治家の煽動によるといふやうな事は有り得ない。而して物好きな政治家を除いて態々煽動の爲めに金を使ふやうな者は無いから、當局者は之れから勞働運動については、金の出處などについて無益の詮索をせぬ方がよからうと思ふ。

工場委員會制度

　政府と資本家との共同壓迫に抗し切れず、勞働運動は勞働者の敗北で鳬がつく事が多いに拘らず、最近の我が國に於ける勞資の關係は結局に於いて勞働者の權利の伸張といふ方向を取つて進んで、一方に於いて神戸の勞働者が無條件降伏の慘敗を見たのに、他方に於いて彼等の要求せる工場委員會制度は既にダンロップ護謨會社並に住友で認められる事になつた。神戸の三菱造船所では勞働者の要求する以上の廣い地位を、其工場委員會に認めんとする腹案中だといふ説もある。斯くして勞資協調の一つの新しい主義として工場委員會制度は近き將來に於いて我が國の流行となるかも知れない。尤も今の所之れが巧く運用された所で、之によつて期待し得る利益は勞働者がより自由な發言權を得たる事、並に勞働者と資本家との接觸の機會を多くする事位に止まる。それでも雇主に之を善用するの誠意があれば、之れでもどれだけ無用の紛爭を避け得るか分らない。

　但しダンロップのにしても住友のにしても、其の發表せる工場委員會制度(兩者は其内容に於いて畧ぼ同じ樣なものである。)は、今日勞働運動に關する管理的研究が要求するものからは未だ甚だ遠いものだ。即ち近く認められんとする制度は、第一に討議事項を主として勞働者の利福に關する問題に限り、第二に單純な諮問機關に過ぎぬものとされて居る。であるから産業の諮詢は委員として獨り資本家のみであり、折角決議しても其採否は專ら企業家の自由といふ事にされて居る。其當然の結果として討議の範圍は産業全體に及ばない事は怪しむに足らない。故に企業家と勞働者との關係を封建的主從の關係と看做す傳統的根本謬見は依然として變らないから、勞働界の趨勢は、結局今云ふやうな工場委員會制度で安定せざるべきは論を須たない。畢り此制度では勞働者が僅かに局部的の自由發言權を與へられたに過ぎないのである。之れでもかなり大きな一進歩には相違ない。今日の所、或は此程度に止まるが相當かも知れない。併し若し資本家が忍び難きを忍んで之れだけを讓歩したから、之に滿足して之れ以上の慾を出すなとか、若し又他日之れ以上の要求をするなら、其は飽く事を知らざる貪婪の沙汰だなど、云ふならば、之れ亦とんでもない誤りである。今日一歩を讓つたのは、他日二步踏み進ましむる前提である、更に三步四步を切込んで來るのは、畢竟勞働者の開發を助け、從つて又社會の發達を促すのだ、資本家は其身を削る事によつて社會に大いなる奉仕をするのだといふ風に考へるようにならなくては駄目

だ。

兎に角ダンロップや住友の工場委員會制度は、無きには優るが併し甚だ不徹底のものだ。それでも資本家が主義に對する誠意と、別けて勞働者に對する同情と尊敬とを以つて之を利用するならば、必ずや多大の利益があらう。其實行が將來の産業界に幸するや否やは、制度其物にあらずして寧ろ運用の如何にある。運用宜しきを得ざらんか、勞働者の紛亂は更に一層甚だしくなる事、丁度末年の清朝が民論の要求に促されてやつと與へた各省の諮議局（謂はゞ地方議會の如きもの）が、却つて革命を誘致する端緒を開いたやうな事にならぬとも限らない。どうならうと制度の罪ではない、最後の責任は獨り企業家の誠意と同情との有無に在る事を見遁してはならない。

工場委員會制度は勞資協調の手段として米國に起つて、最近見事な成功を收めてから著るしく世上の注意を惹くやうになつた。尤も米國のは討議の範圍も廣く、企業主に對する權限も多い。それですら之を研究せる專門家の報告によると、企業家側に十二分の誠意が無ければ餘り成功するものではないと云はれて居る。又雇主に誠意がある限り、此制度は勞資兩者の關係を圓滿に發展せしめる上に殆ど何等の支障を見ないと云つて居る。米國多數の工場の經驗に據れば、勞働者も意外に公平で、一度も喧嘩分れになつたやうな事は無いと云つて居る。併し日本ではこんな風に行けるか何うか。認めるのは認めたが、出來るだけ勞働者を抑へようと云ふやうな、極端な官僚政治が議會に臨むやうな態度を取るのでは、却つて一層混亂を強むる事になるだらう。

終りに工場委員會制度と所謂産業管理との關係を一言して置かう。神戸の勞働爭議は初め工場管理を宣言した所から、産業管理といふ事も昨今問題になつて居るやうだ。西洋でも伊太利で此事はかなり矢釜しい問題になつて居る。神戸の工場管理は少しく趣が異ふやうだが、伊太利のやうなのになると、資本家の企業主としての獨專的地位を否認せんとする意味も含まれて居つて、資本家の地位を初めから承認してかゝる工場委員會制度とは其根據を異にするものである。若し昨今西洋で行はれて居るものの内に比倫を覓むるならば、伊太利の産業管理よりも獨逸新憲法の經濟會議の方が、我が工場委員會制度に近い。獨逸の制度に據れば、勞働協議會なる公認的團體をして、經濟會議に於いて對等に雇主の團體と折衝せしめんとするのであるから、其主義に於いて工場委員會制度と一致する。只之に在つては各工場に於いて資本と勞働とを折衝せしむるが、彼に在つては勞働者は勞働者、資本家は資本家と、別々に小を合せて

爲し、遂に全國的の團體となつて初めて相手方と折衝するといふ事になる。從つて實際上の結果から云へば、工場委員會制度とはかなり大きな隔りがあると觀てい〻と思ふ。何れにしても日本の工場委員會制度は、今の所未だ〱獨逸の經濟會議などに對照するまでに至つて居ない事は云ふまでも無い。」

太平洋會議に對する米國の正式招待

八月十三日附を以て米國から正式の招待狀が來た。新聞に發表せられたる所について見るに、六月以來內交涉に示された所と大差無いが、念の爲め簡單に其要領を撮むと次のやうなものになる。(一) 軍備制限問題並に之に關聯して太平洋及び極東問題を討議すべき會議を開催したい。(二) 一般の安定、社會的正義の保障並に平和の確保の爲めには軍備に對する過大な出費を制限する實行的協定を爲す事が急務だと思ふ。(三) 其の爲めには海軍方面の問題が第一の急務である。がまた他方面の軍備に關する問題をも除外してはならない。(四) 其の外人道的見地から戰爭の新式手段の使用を適當に抑制すべき案を作製する事が必要である。(五) 偖て平和に對する願望の熱烈なる事は以上の仕事の遂行に非常に必要であるが、其の爲めには先づ各國間に存する誤解の原因を除去する事が必要だ。此點において米國は太平洋及び極東問題に關し他の諸國と共通の諒解を見出し得ん事を希望する。(六) 太平洋及び極東に關する討議の範圍は、會議開始前に行はるべき意見交換の題目として殘すべく、豫め二三國の間に豫定する事を得策としない。大體において以上六項に盡きて居ると思ふ。

正式招待に表はれた米國の意圖につき、少くとも表面日本は何等之に異議を唱ふべき點は無い。恐らく近く發表せらるべき答辯の中にも、滿腹の誠意を以つて贊同の意を表するといふ事が述べられるであらうが、獨り此處に問題となるのは、日本側の豫ね〱希望して居つた討議範圍の限定、もつと具體的に云へば所謂特殊國間の問題並に既定の事實は如何に之を取扱ふべきかの點である。出來る事なら日本側は特殊國間の問題並に既定の事實には、今度の會議でも觸れないといふ風に云つて貰ひたかつたのであらう。所が米國は討議の範圍を豫め制限する事を欲せざるのみならず、共通の諒解を見出したいと希望せる太平洋及び極東の問題については「既に列國の利害に關聯し來り又現に關聯せる諸般の事項」と註釋して、日本の希望を容れる

のやら容れないのやら甚だ曖昧になつて居る。其處で此點については新聞紙上等に於いてもいろいろの意見が表はれて居るが、未だ明白に彼我の論據を明白にしたものが無いやうだ。之について少しく予輩の觀る所を述べて見よう。

第一に討議範圍の限定といふ事について昨今の考が從來と餘程變つて居る、といふ事に注意しなければならない。從來の國際會議では何と云つてもお互に利害の主張に熱中し、大局の平和を何うするといふ高い見地から物事を見るといふ譯には行かなかつた。從つて何んな問題でもなかなか協定を見るといふ事が困難であつた。さればと云つて折角の會合が何の效果をも奏せず物別れとなつたと云ふのも不面目だと云ふ所から、出來るだけ討議の範圍を切詰め、問題の數も少くしたのであつた。而かも難しい問題は皆後廻しにし、極く纏り易い點だけを取つたのである。だから討議決定された問題は些細の點に渡るのが多く、國際平和の大局に重要の關係あるものは、多く手を着けられず殘つたものである。兎に角昔は討議の範圍を制限した方がいゝといふ事になつて居つたので、古い頭の人は國際會議と云へば直ぐに範圍の制限、問題の限定を云々する。併し昨今は時代が一變した。畢り今までの世の中が一時の功を急いで肝腎な問題を殘したのが間違ひだといふ事に氣がついたので、難しい問題を而かもどんどん手を着けて行かう、殊に全局の平和を熱望して居るのだから、討議の範圍廣い事、問題の數多い事を厭はない。實際の政治家は或は此處までの決心を持ち兼ねて居るかも知れないが、今日世界の民衆の國際會議に對する衷心からの期待によつて見れば、將に右云が如くであると思はるる。討議範圍の限定は、少くとも今度の國際會議於いては、會議を成功せしむる所以の前提條件ではない。否、こんな考は舊時代の間違つた思想だといふやうな精神で會議を進めて行かう、といふのが當節の氣分である事を注意せなければならない。從つて特殊國間の問題並に既定の事實を除外しようといふやうな我が國の希望に對しては、此事自身が正いか何うかは暫く別問題として、概して甚だ興味を有たないといふ事實を隱す事は出來ない。

第二に、特殊國間の問題並に既定の事實を除外すべしといふ此原則の適用については、日本の主張と相容れざる思想が又かなり盛んに行はれて居る事を認めなければならない。それは何かと云ふに、日本の見て以つて既定の事實とするヤップ島の處分、又特殊國間の事件とする山東問題の如きを、亞米利加は純粹な既定の事實若しくは特殊國間の問題と認めざらんとして居る。

之と同じ立場を取る者が今日世界に甚だ優勢なのである。敵を知り己れを知るの筆法で、吾々は兎に角此違つた立場を精密に諒解して置くの必要がある。それは何かと云ふと、即ち予輩が前々號に於いても、詳しく說いたやうに、戰爭觀の一變に基く戰利品の觀念の一變である。當初は敵に對する吾々仲間の個々の戰爭の集合で、吾々の獨逸との交涉は他の仲間と獨立に決定する事を得たのを、半ば頃から此戰爭は共同の目的の爲めに多數の力を合せて戰ふ一つの戰爭といふ事になり、從來我國が獨逸に對する單獨の關係だと思つて居つたやうなものも、一緒に仲間となつて戰爭に努力した凡ての人のものといふ事になつたのであるから、ヤツプ島にしても、山東省にしても、之はもはや昔のやうに第三者の容喙を許さない特別の問題だといふ譯には行かない。戰勝の結果として得たるものには、共に手を携へて戰爭した凡ての國の容喙權の及ぶ所である。であるから山東問題にしてもヤツプ問題にしても、米國其他一般同盟國は皆平等の權利を有するもので、其範圍に於いて「既に列國の利害に關聯し來り、又現に關聯せる諸般の事項」といふ事が出來る。即ち山東問題もヤツプ問題も特殊國間の問題若しくは既定の事實といふ事は出來ないのである。之に關聯して序に一言すべきは、米國の山東問題やヤツプ問題を再び討議の範圍に入れようといふのは、例へば既定の事實も之を再議するを避けずとするの見地からするのではなく、ヤツプ問題を既定の事實と見ないから、最終の決定を與へる爲めに改めて討議しようと云ふのである。吾々の所謂既定の事實を彼等は既定の事實と見ないからである。米國が吾々の所謂既定の事實を再議に附せんと頑張つて居るからとて、直ちに朝鮮問題までも擔ぎ出すであらうなど〻誤解するのは、菽麥を辨ぜざるの愚論と云ばなければならない。

第三に、今度の會合に對して世界の民衆の擧つて期待するのは、軍備制限に附帶して、世界の平和と幸福とを事實上實現するやうな協定をして貰ひたいといふ事である。古い條約取極めに基いて各自の權利の範圍を法律的に定めるといふやうな事はまるで要求して居ない。從つて吾々は吾々の立場を主張するに當り、何時の條約では何うの、何時の密約では斯うのといふ樣な形式的議論で押通すのは餘り見好くない圖であらうと思ふ。之で押通しても形式上一旦の勝利を見る事はあらうが、併し之れで世界の道德的後援を繋ぐ事は斷じて出來ない。要するに昨今の世の中は密約其他形式上の取極めよりも、然うする事が果して世界の幸福と平和との爲めになるか何うかの標準一點張りでどん／＼進んで行かうとするのである。

第四に、日本の立場としては以上の論點を詳かに研究した上

で其主張を支持して貰ひたい。敵の立場を相當に理解せずして唯我が主張を押通さうとするのは、少くとも今日の新しいやり方ではない。尤も考へ樣によつては、米國の立場は之を支持するに餘る困難なものかも分らない。例へばヤツプ島問題にした所が、最高會議の決議にウヰルソンも署名した以上、今更ら之を無效なりと宣言する譯には行くまい。是等の點で正々堂々と彼等の論據に突進するだけの餘地が吾々に殘されて居ないではない。

終りに、一歩を讓つて米國の立場が正しいとしても、吾々は只漠然として彼等が爲す儘に盲從してはいけない。最高會議の決定をも否認せんとする米國の立場が正しいとすれば、吾々は潔く原との白紙狀態に還り、ヤツプ島に對する米國の容喙權を認むる。斯くて米國の希望を卒直に云はしむれば、海底電線の國際化といふに外ならないと云ふだらう、そんならそれを認めてやつてもいい、但し之は或は一つの抽象的原則を認むるので、ヤツプ島の處置は單に其原則の適用に過ぎない。他に同じ樣な場合があつたら、皆此の同じ原則の適用を受くるといふ形に取り極めたい。而して更に吾々はヤツプ島を國際的のものとする如何なる必要あつたかを訊ねて見る。さうすると彼は答へるであらう、海底電線のやうな國際交通の上に必要なものは、なるたけ國際的管理の下に置きたい、假りに全部を同一の組織の下に網羅する事が出來ない事情もあるから、先づ以つて共同の力で敵から取つた場所に限り、それより漸次他の方面にも及ぼして、國際化の事業を全般に押し擴めるつもりだ、と答へるであらう。然らば吾々は直ちに其趣意を捉へ、獨逸から取つた領土の上にあつては共同勝利者の全部に、完全に均等な機會を提供するといふ原則を立てよう、其原則の適用としてヤツプ島に關する米國の言分を立てゝやると云ふてやるべきだ。斯くしてヤツプ島に關して潔く讓歩すると共に、同時に何人も對抗し得べき「均等の機會」を承認せしむるといふ大綱はある。かういふ風に行けば吾々は勝利を犧牲に供して大いなる利益に浴する事が出來る。而かも其利益たるや實に世界の平和の進步と相伴ふものなる點に於いて、本問題の將來の解決は吾々の最も刮目を要する所である。

國際會議に於ける形式上の成功と道德的の成功

昔の本でこんな事を讀んだ。黑暗からいろいろ面倒な問題を

持ち込まれて困り切つた際、幕府方の外交事務を取扱つて居つたさる小役人が單身黒船に乗込み、無鐵砲な事を云つて、理が非でも自分の顔を立てて呉れなければ、君公に對して申譯が無いから君と差違へて死なうと、本氣になつて劍を拔いた、相手方は吃驚して、遂に其男の無理を通したといふのである。理窟の如何を問はず、之れだけの決心があれば大方の無理も通つたに相違ない。支那の外交家が外交談判が紛糾して來ると、「理窟は先方にあるが、俗衆からの對外軟の非難を恐れて無理を通す必要に迫まられる事が稀でなかつた」、私かに金を遣つてボイコットを起させる、こんな手段で外交上の懸け引に有利な形勢を作らうといふやうな事は袁世凱の好んでやつた慣用手段であるが、之も亦幕末外交家のやり方と異曲同工と云つていゝ。外交談判に只形式上勝さへすればいゝといふのなら、こんな方法でも勝てぬ事は無い。

子供の時大久保利通が支那に談判に往き、彼の國の容易に決せざるを見て憤然旗を卷いて歸り掛けたといふ話を聞いて非常に痛快に感じた事を覺えて居る。云ふ事を聞かないなら實力に愬へると啖呵を切るのは氣持が好い。外交談判は押が強いに限る。こんな風に、外交を腕兵の押賣り同様、目的を達しさへすればいゝといふ風に考へて居る人は今日でも多いやうだ。フューメ問題で伊太利の首相が、旗を卷いてヴェルサイユ會議を引揚げた時など、吾々日本人は大いに痛快がつたものだ。之は當時日本の山東問題について伊太利と同じ様な逆境に居つた許りではない。外交談判については此位の無理押しが必要だといふ考をかなり抱いて居るからであらう。

併し此頃は人間も段々利巧になつた。殊に外交官などは西洋の儀禮に嫻れて、子供らしい意地張りはやらないやうになつた。其代り彼等は昔の人が腕づくや意地張りで成功し得たものを、法律や條約の訓詁解釋で得んと心掛けて居る。此事についてはかういふ内[illegible]があつたの、條約の解釋から行けばかういふ事になるのと、形式的の理窟で自家の言分を通さうとする。之れでも相當に目的を達する事が出來たに相違ないが、併し時勢は段々進んで、こんな事だけで國家の重きを世界に成す事は出來ないやうになつた。

吾輩が屢々繰返して述べたやうに、今日は條約で何うなつて居るの、法律が何う定めて居るのといふ點に、それほど重きを置かない。法律や條約の定めが何うであ[illegible]が、事實何うする事が社會全體の平和と幸福との爲めにな[illegible]かを專ら考へる、從つて何事を主張するにも道德的根據より議論を立つべく、法律的根據では甚だ重きを成さないのである。

殊に今度の戰爭に關係する問題については、條約（殊に密約の中には、苦しい時に不本意ながら作つたといふやうなものがある。例へて云ふなら、青島陷落後も日本をして依然戰爭を繼續せしめる爲めに、將來斯く／＼の報酬をするといふやうな類ひの事もあつたらう。併し今となつては斯くする事が果して全體の平和幸福の爲めに善いか惡いか分らないといふやうな事もあらう。されぱと云つて密約などは全然顧みてはいけないと云ふのではない。只何事を主張するについても、主張の根據を條約等のみに置かず、更に斯くする事が世界の平和幸福の爲めになるといふ實質的道義論にも置く事が必要である。此處まで行かなければ、吾々は國際會議に於いて堂々たる成功を收め得たと云ふ事は出來ないのである。

從來の國際會議は、謂はゞ局部的の利害の調節を目的とするものであつた。甲の利己的要求と乙の利己的要求と、之を何う調節つけるかと云ふのだから、原被兩造が法廷に爭ふやうに、兎に角勝ちさへすればいゝ。併し今日の新しい時勢に於いては、世界の民衆はかかる淺薄な仕事を國際會議に期待して居ない。之に參列する政治家は何んな者で出て來るか知らないが、少くとも民衆は世界の平和幸福を實質的に進める爲めの議論と協定とを期待して居る。而して此期待に背かない態度を一貫するのが即ち眞の成功であつて、形の上で無理を通したゞけでは結局永く世界の民衆の道德的支持を受くる事が出來ない。勝負を唯一の目標とする相撲でも、汚ない勝を仕續けると人氣が無くなるやうに、吾々は國際談判に於いても形式上の成功許りでなく、道德上に於いても立派な成功を占むるやうに心掛けねばならない。今度の會議でも、參列する諸國の代表者は流石に時勢の影響を受けて、それ／＼氣が變つて居るやうだ。併し政治家は兎角餘りに現實に拘泥するの弊がある。直接の對手は是等の政治家だけれども、吾々は更に歐米諸國の民衆一般の要求といふものに通じて居なくてはならない。

法王廳と伊太利政府との接近

七月號の本誌に予は法王廳と佛蘭西政府との接近の事を論じた。佛蘭西と伊太利との親密なる關係に鑑み、此事はやがて法王廳と伊太利との接近を導き來るだらうといふ事は、誰しも想像する所であらう。

果せる哉、伊太利に於いても此事の可能並に利益に關する議

論がボツ／＼新聞雜誌等に表はれて居る。外國よりの報道に據れば、最近法王廳の機關紙たる「ロッセルヴァートーレ」までが斷えず之を歡迎する意味の議論を載せて居るといふ事である。總じて法王廳側ではこんな事を云つて居るさうだ、兩者の親善を恢復する爲めにいろいろ骨を折つて居るのは寧ろ教會の側だ、信徒に對する公事關與の禁令も解いた許りでなく、進んで政黨を造る事をも認めて居るし、又内閣に列する事すら奬勵して居る、殊に最近の選擧に於いては、穩健なる政治家の選出に骨折つてやつた、だから今の所親善恢復の實現は、只政府側の自發的行動を待つ許りである、と。何れにしても現法王ベネヂクト十五世の即位以來法王廳の態度が一變した事は疑を容れない。

併し乍ら法王廳と伊太利政府との親善恢復は、其の實佛蘭西の場合の如く容易ではない。何となれば此の二つの場合は本來の關係がまるで違ふからである。法王廳と伊太利政府との反目は、人も知る如く一朝一夕の事ではない。試みに法王廳の言分を尋ねんか。彼は云ふ、所謂伊太利王國なるものは一八六〇年から七〇年に至るの間、不法に法王國を併呑し其俗權を簒奪して出來上つたものだ、羅馬の市民が全體投票で併合を可決したと云ふけれども、それは表面を糊塗するの論辯に過ぎない、と。即ち一八六〇年代當時の狀態に復することを要求するのである。併し之は今日となつてはもはや出來ない相談だ。從つて法王廳は此處まで要求を固執するといふ考ではない事は勿論である。然らば最小限度の要求點を何處に置くかと云ふに、恐らく法王廳の俗權を名義上だけでもいゝから恢復して呉れろといふ點に在るだらう。法王は現にバチカンの宮殿の外ラテラン宮殿とカステル、ガンドルフオの別莊を有つて居るが、之れを改めて領土と認め、非常に小さい區域ではあるが其上に君主としての權力を認めるといふ事である。そして獨立國家の君主といふ位地を保障せられたなら、喜んで親善恢復の交渉に應ずるつもりなのであらう。

併し伊太利としては之れを認むるといふ事は困難だらう。現在の制度としては、伊太利は一八七一年五月十三日の特別法律を以て、羅馬法王の一身と其支配する土地建物に對して不可侵權を保障してゐる。從つて法王はまるで一國の君主の如く、法王の宮殿は一種の治外法權を認められて居るのであるが、それでも國法上の地位を矢釜しく云つたならば、伊太利政府の法權に服して居るものと云はなければならない。それを更に一歩進めて、一國内に更に其獨立國を作るといふ事は固より好ましい事ではない。況んや法王の道德的勢力は遙かに國王を凌いで居るに於いてをや。

かういふ關係になつて居るから、兩者の接近は出來さうにしてなか〳〵容易には出來ない。それらの問題を精密に研究して居る人は、伊太利政府の讓歩を見ずしては到底妥協の途はなからうと云ふ程であるから、佛蘭西の場合のやうにすら〳〵と捗び得ない事丈けは想像に餘りある。それでも何れ早晩何等かの形に於て兩者は相結ばなければならない運命にあるものと見える。

小題小言七則

◎西伯利派遣軍のパルチザン掃蕩計劃

八月十八日の時事新報にこんな記事が載つて居つた。過般三輪參謀長の遭難あつて以來、パルチザンの行動ます〳〵亂暴になつたとて十一師團は掃蕩戰を開始した、が、陸軍中央部がパルチザンの掃蕩は啻に至難の業たるのみならず、此際こんな事をやるのは露國民の怒りを買ふ事甚だしく、畢り多大の犧牲を拂つて而かも何等の實益が無いから止めさしたい考へである、兎角中央部と派遣軍との意思の疏通無きは遺憾の極みである、云々と。此報道の眞僞は其後之を確むるの機會を得ないが、併し出先きの軍隊が中央部の意向に背いて勝手な事をやるといふ事は、珍しい事でない。大隈内閣の時、二十一ケ條の要求が容れられないとて支那政府に最後通牒を送つた時、滿洲に居る或る軍人は、此際滿洲を併呑すのが千載一遇の好機會だとて、獨斷で部下の兵士に支那の兵隊と衝突しろと命じたものがあつたといふ噂を聞いた事がある。中央政府の意に反しても、國家の爲めになる事だから關はない、まかり間違へば腹を切つて申譯をする許りだといふ壯烈な決心を以つてやつたのださうだ。幸に何事も起らずして濟んだけれども、若し之れから何等の事變が起つたとすれば、局外の者は之を見て直ちに日本政府の意思だ、否、日本國民の意志に出たものと考ふるだらう。兎に角外に出て居る者は感情に驅られ易い。其見解を局部に限つて居る所から大局の打算に通じない癖に、自ら其地方の情勢に通ずるを自惚れて勝手な事をやりたがる。之が爲めに何れだけ國民が無用の誤解を蒙つて居るか分らない。主義として撤兵論の急務なるは之によつても明白であらう。

◎康有爲についての話

光緒戊戌の政變に康有爲は英國公使館に拾ひ上げられて、幸じて香港まで逃げた。香港からさる日本志士の好意によつて日本に亡命して來たのであるが、其際專ら彼を世話した人から次のやうな話を聞いた。

る。彼は支那政府で自分を非常に恐しいものと思ひ做して、非常な迫害を加へて居るとて、日本の船に乘つて香港を出發する前、附近を游弋する小船を悉く淸朝の密偵だと云ひ張り、何とかして彼等を追ひ退けて吳れろと請求して已まなかつた。日本へ來ても、淸朝では必ず澤山の刺客を放つて自分を付け狙つて居るに違ひないとて、隨分いろ／＼の注文を出して人を手古摺らしたさうだ。やがて支那の公使が變つた。すると彼は公使の更迭は卽ち自分を暗殺する目的を一刻も早く達せんが爲めで、新公使は卽ち刺客に外ならないから、日本政府は之を拒むやうに取計つて吳れ、否らずんば自分は一日も東京に滯在する事を欲しないなどと駄々を捏ねたさうだ。其他彼の誇大妄想と、小供らしい自惚れと、世間知らずの神經過敏とを證明すべき話は澤山あるが、要するにそれ程でも無い人物が自分を非常に偉いものと獨定めて、世間は皆自分を迫害して居るなどと見るのは餘り見つとも好い圖ではない。だから彼は間も無く多くの人から嫌はれ、遂に日本に居堪らずして新嘉坡に去つたのである、と。今度の太平洋會議で、日本の論客の或る者が、會議の目的を日本に對する英米の迫害などと頻りに論じ立てるものあるを見て、私は圖らず康有爲の昔咄を思ひ出した。大國民はもつと自重する點が無くてはならない。

◎所謂一流の人物

今度の國際會議には亞米利加は、論、英吉利でも佛蘭西でも總理大臣か若しくは之に匹敵する人物が揃つて簡派されるやうだ。日本でも大臣級の第一流の人物を出さなくてはならないといふ說がある。社會的階級の上層に居る者を一流と云ふのなら、英佛の大臣と同じ様に日本の大臣も一流に相違ない。只西洋の大臣は其實力に於いて最良の能力を具備するが故に、社會的に亦第一流の地位を與へられて居るのだが、日本では實力の點から云ふと、所謂一流は皆駄目だ。獨り政治家許りではない。學者にしても藝術家にしても、一流と云へば先づ老朽を意味し、眞に實力を尊敬せんとするものは悉く望を所謂新進の人物に繫ける。日本程社會的の一流と實力の一流と懸け離れて居る所は無い。此點に於いて我國は西洋と大いに事情を異にする。然り、一流者流の好んで云ふが如くに西洋と我が國とは大いに事情を異にするのである。事情を同じうするのは先づ相撲位のものであらう。

◎或る軍需工場管理官の話

此頃汽車の中で某軍需工場に勤めてをる友人と勞働者の能率の話をした。世間で八時間制度などといふ事を云ふので、之を實行しても現在の能率は保てるか何うかを研究しようといろ／＼調べた所が、意外な結果を見た、今まで不注意に看過して居つたが、段々調べて見

ると、或る仕事を早い時は三時間でやつた事もあるが遅い時には五日も懸つた事がある、仕事の輻輳して居る時はそれ相應に抄つて行くけれども、仕事の少い時は矢張早く完了して休みになるといふやうな事の無いやうに、だらり／＼とやつて行く、一體勞働者は一定の時間に何の位の仕事を爲し得るものかさつぱり分らない、と。此話を聞いて私は私の編輯せる「政治研究叢書」の山本君著「勞働三年」の記事を思ひ出した。之を見ると官設工場の弊害、職工頭の横暴、優良なる職工は概ね憤慨して去り、殘るものは阿諛と怠業とで其日を暮らして居る狀が能く分る。山本君は戰後經營として金を餘計使ふよりも、工場管理を嚴密にやる方が先決問題だと結論されて居つたが、私の考では工場の管理法を改めたなら、勞働時間を二三時間減らしても、現在よりも尙ほ幾割かの能率を增す事が出來ようと思ふ。要は監督者がもつとしつかりする事である。勞働者をして安心せしむる事である。安心とは單に地位の保障のみを云ふのではない。昇給其他待遇上偏頗な處置無く、毫末も不平の念なからしむる事である。今日の勞働者は責任を重んずるといふ觀念に於いて聊か缺くる所あるには相違ないが、兎に角之を使ふ者が大いに改まる所莫くんば、能率問題はいくら研究しても駄目だ。

◎浮浪罪に問はれんとした一勞働者の話

或る朝未明に、兼ねて顏馴染の一勞働者が訪ねて來て、急に相すまぬが二三圓の用立てをして欲しいと云ふ。何うしたのかと聞くと、今居る宿を斷られ、荷物を持つて出ろと拘留される事になる、宿を出る前に手金を打つて別に宿を定めて置く必要があるからといふ話である。段々譯を聞いて見ると、警察では危險人物として檢束したいのらしい。今居る家は大工の二階だが、主人は大變に同情して居るけれども、何人かに教唆されたらしい細君が釜しく云ふので、とうとう其家を出ねばならぬはめになつた。細君が矢釜しく云ふのは、食料の滯つた爲めなる事は云ふまでも無い。いよ／＼出よ、とすると主人の大工がこつそり耳打ちするには、此家を出ると巡査が君を捉まへる事になつて居る、此家を出ると早り外に宿が無いのだから、浮浪漢といふ譯になる、何處か別の宿を定めてから出ろ、と注意して呉れた。けれども別の宿を定めるには二三圓の金が要る。それが出來ないからとて何時までも細君の厭な顏を見るのも辛い、風呂敷包みを持つて出ると外に巡査が待つて居る、其處で今朝の二時頃にやつと見張りを破つて逃げ出して來たが、上野の山をぶらついて今此處へ來たのだ、と云ふ。後の事は後の事として、差當り別の宿を定める爲めに二三圓の金が要るのだといふ話であつた。平素正直な男であるから滿更ら嘘ではないらしい。何うしてそ

んなに危險人物視されるやうになつたと聞いたら、分らないと云ふ。何か思ひ當る事は無いかと云へば、是まで度々警察に喚ばれて說諭を受けたと云ふから、何をしたのかと聞いたら、今春の某重大事件に關し一二度山縣公と牧野宮內大臣に辭職勸告狀を出したのが原因だと云ふ。それから彼は昂然として云ふやう、警察では、君のやうな身分の人がかういふ方々に手紙をやるとは甚だ公安に害があると云ふのであるが、一人の臣民が一人の臣民に手紙をやるのが何んで公安の妨害になりませうか、と。此男の話許りを材料として輕率な斷定は出來ないが、兎に角何ういふ事をすれば危險人物の黑表に列せられるかの一つの例として、參考までに之を揭げて置く。

◎市疑獄の豫審調書を讀んで　昨今每日の新聞に出る豫審調書は、いろいろの意味に於いて私の愛讀して措かざる所である。之を讀んでいろいろの感想が浮ぶが、此處に一寸人の氣が着かざる點を一つ指摘して置きたい。それは書き振りが如何にも封建時代の役人臭味を帶びて居て、判事の問ひ方は「お前は斯く斯くの事をしたに相違あるまい」と出ると、答は「恐れ入りました、左樣致したに相違ありません」と丁寧な言葉で書かれて居る。之が當人の言つた通りの言葉を寫したものとするならば、未だ被告とも定まらない、而かも相當の地位ある人に對する言葉として、判事の態度は餘りに傲慢だと云はなければならない。私の知る限りに於いて、昨今判事は刑事被告人に對してすら——人にもよる事だらうが——かなり丁寧な言葉を遣ふ。相手の人柄に對しては相當に敬意を表して居るやうだ。それを態々傲慢な態度で物を云つて居るやうに書き直すのは變なものではないか。何故簡單な言葉で意味だけを表はすと云ふのなら、「汝は斯く斯くの事をせりや」「然り、予は斯く斯くの事をなせり」といふ風に、双方同じ樣な體裁に書いたらよからう。何れにしても豫審調書の書き振りは、實際の調べ振りが段々文明的になつて行くのを裏切る事夥しい。事情を知らぬ者は、之を讀んで判事に對する反感を起さないとも限らない、何とか改良の出來ぬものだらうか。

◎レーニンと無政府主義者　近着の外國雜誌で斯んな記事を見た。「レーニンとトロツキーは、外部に色々困難な問題に逢着して居るの外、內部にも有力な敵を有つて居る。此事は彼等の政府が無政府主義者に對して絕へず嚴重な處罰を强行してゐるに由て分る。露西亞の無政府主義者が、嚮きに合衆國から追放された夫のエムマ・ゴルドマン並にアレキサンダー・ベルクマンを筆頭として、獨逸のサンヂカリストにレーニン糺彈の書面を送り、嚴しくソヴィエット政府の暴狀を訴つて居る

のは、一種の深酷な皮肉と謂はねばならぬ。彼等は其中に同志の投獄せられたるもの既に數百に及べるを述べ、這の暴狀をばあらゆる無政府主義機關紙上に公表せられんことを求めて居る。之に署名してゐるものは、ゴルドマン、ベルクマン外一名を除いては、當時みな獄中にあつた。」ソヴィエット政府と無政府主義とを混同してゐる日本の政治家はこの記事を見て戸惑ひせずには居られまい。左ればと云つて之れからレーニンの右傾を推斷するのも誤りである。



洛陽堂圖書秋季大特賣

□□□□

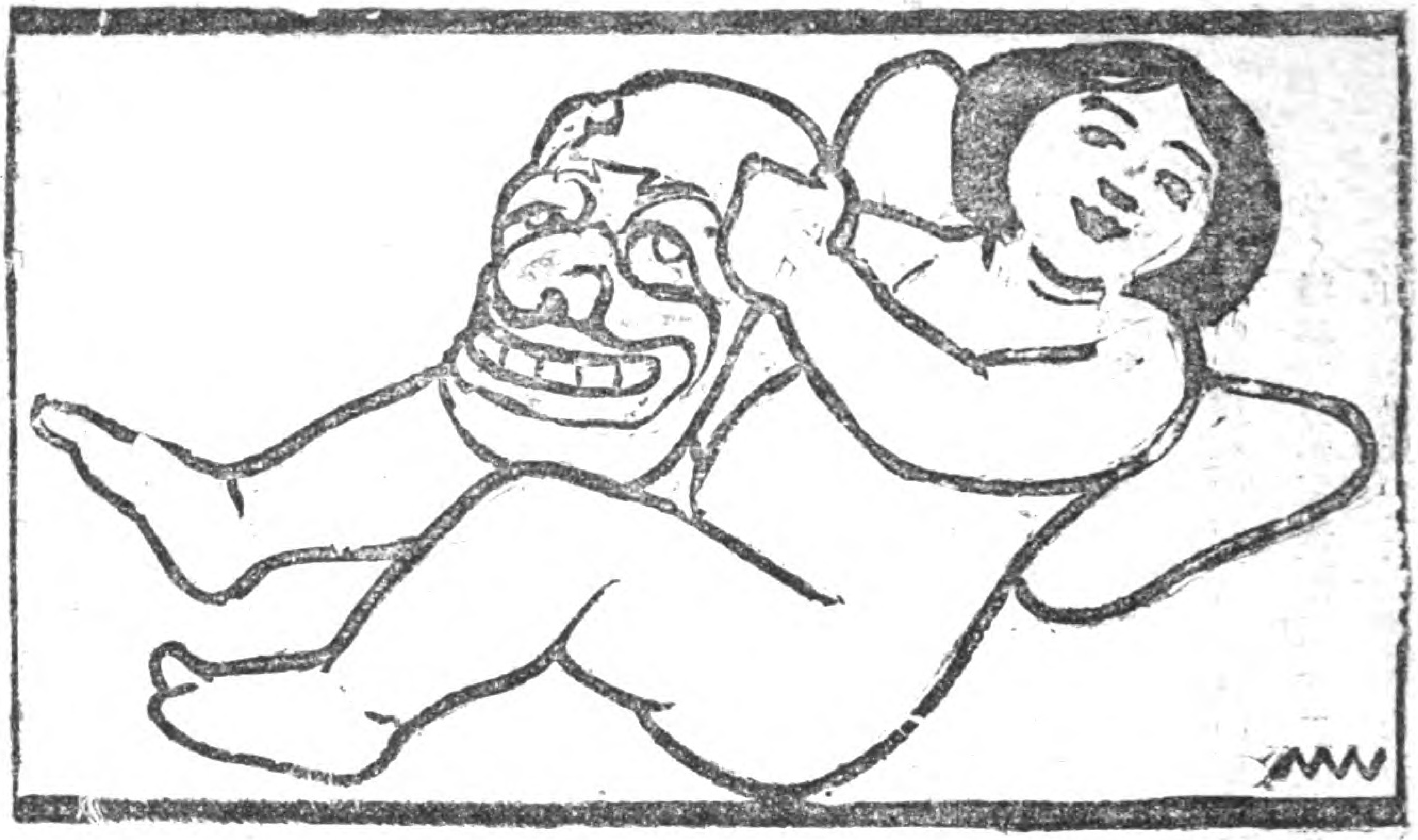
今回大方各位平素の御眷顧に酬ゆる爲め弊堂發兌書全部大割引特賣仕候間何卒御引立御買上の榮を蒙り度く伏して願上候
期限九月五日より十月卅一日迄、左は其一部にて詳細目録は御通知次第進呈可仕候期限以後は斷然正價に復し候

書名	著者	定價	特價	郵税
▲文學に現れたる我國民思想の研究（貴族文學の時代）	津田左右吉	五、〇〇	四、五〇	、二七
▲武士文學の時代	同	五、五〇	五、〇〇	、二七
▲平民文學の時代	同	六、〇〇	五、三〇	、二七
▲ドストイエフスキー	新城和一	二、五〇	[illegible]、一〇	、一〇
▲自然科學者としてのゲエテ	小川政修	一、三〇	一、〇〇	、〇八
▲ロダン藝術	木村荘八	四、五〇	[illegible]、一〇	、一八
▲後期印象派（上下）	同	各二、五	各[illegible]	、〇八
▲ボテイチエリー	同	一、五〇	一、三〇	、〇八
▲エルグレコ	同	一、三〇	一、一〇	、〇八
▲レオナルド・ダ・ギンチ	同	二、三〇	二、〇〇	、〇八
▲チオツト	同	二、三〇	二、〇〇	、〇八
▲デューラーの手記	同	二、八〇	二、[illegible]	、〇八
▲少年藝術史ニール河の草	同	三、五〇	三、四〇	、一八
▲ロダンの生涯と藝術	モークレール	二、五〇	二、二〇	、一二
▲痴人の懺悔	木村荘太	三、八〇	三、一〇	、一八
▲トルストイ一日一想	加藤一夫	一、八〇	一、六〇	、〇八
▲ある青年の夢	武者小路實篤	二、〇〇	一、七五	、一〇
▲美學汎論	稲垣末松	五、八〇	五、一〇	、二七
▲基督に倣ひて	アケンピス	三、〇〇	二、六〇	、一〇
▲ゲエテとシルレル	正富汪洋	五、〇	四、[illegible]〇	、一八
▲死の舞踏	山本有三	三、三〇	二、九〇	、一二
▲心と心	武者小路實篤	二、五〇	二、一五	、一二

書名	著者	定價	特價	郵税
▲泰西の繪畫及彫刻（全九冊）	洛陽堂編	目録參照		
▲哲理と人生	帆足理一郎	二、〇〇	一、七〇	、一〇
▲宗教と人生	同	二、五〇	二、二	、一二
▲國民生活の改造	同	三、三〇	三、〇	、二一
▲古事紀及日本書紀の新研究	津田左右吉	五、五〇	五、〇〇	、二[illegible]
▲生[illegible]神秘論	小汀井光次	三、五	三、〇	、一八
▲滅び行く宇宙及人類	兒玉昌	二、八〇	二、五〇	、一二
▲教育哲學概論	デューウイー	五、〇〇	四、[illegible]〇	、二七
▲吾等何を爲すべき乎	トルストイ	三、[illegible]〇	二、六〇	、一二
▲吾等何を信ずべき乎	同	二、五〇	二、一五	、一二
▲人生詩人ブラウニング	帆足理一郎	二、五	二、二〇	、一二
▲ボートレール惡の華	馬場睦夫	二、五〇	二、一〇	、一[illegible]
▲聖アウグスチヌス懺悔録	中山昌樹	二、八〇	二、五〇	、一二
▲ダンテ神曲（全三冊）	同	各三、五〇	各二、一〇	各、一[illegible]
▲アシジの聖フランチエスコ	同	四、五	三、九〇	、一八
▲ベエトフエンとミレエ	ロマン・ロラン	二、二〇	一、九〇	、一〇
▲ミケルアンジエロ	同	三、五〇	三、〇〇	、一八
▲悲哀より歡喜まで	畔上賢造	一、八〇	[illegible]、六〇	、一八
▲兒童宗教々育の基礎	伊藤堅逸	三、八〇	三、[illegible]〇	、二三
▲日本基督教史（上下）	山本秀煌	各二、二〇	各一、九〇	各、一二
▲生物學と哲學との境	永井潜	六、〇〇	五、五〇	、二七
▲生命[illegible]	同	六、〇〇	五、[illegible]〇	、二七
▲進化論者ダーヰン	岩崎重三	三、〇〇	二、五〇	、一二
▲詩聖ゲエテ	中山昌樹	二、〇〇	二、四〇	、一二
▲藝術の革命	木村荘八	五、〇〇	四、[illegible]〇	、一八
▲[illegible]花	正富汪洋	二、五〇	二、〇〇	、一〇
▲應用心理十四講	高島平三郎	四、五〇	四、一〇	、二七
▲傳説のライン	松山淳	二、六〇	二、二	、一〇
▲生物學上よりみたる心	本多辰靜	二、五〇	二、二〇	、一〇
▲勝つ民と負くる民	小川隆四郎	一、六〇	一、二〇	、〇六

東京市麹町區偉町廿番地
洛陽堂
電話九段九六六・三一一
振替東京二〇九一四

一



人さま〴〵

正宗白鳥

（一）

秋の末から春先きまで、眺望(ながめ)のいゝ貸別莊に住んでゐた高山夫婦は、借受けの期限の切れたのを機會に、一先づ大磯を引上げることにした。

立際(たちぎは)には、家主の狡猾と因業とをまざ〳〵見せつけられたので、大磯といふ土地全體について不快な感じを起させられた。天氣も惡いし、荷物の整理にも豫想以外に手間取るので、一日延ばして、翌朝緩くり出立したいと考直した私だちは、何の氣なしに家主に向つてさう云つて許しを乞うたのであつたが、家主は「それは困ります」と、頭から拒絶した。他の借手に契約をしてゐるので、その人が明日にも東京から來るかも知れないから、それまでに家の掃除をしたり、破損したところを修繕したりして置かなければならないと云ふのであつた。明日の一番で立つと云つても愚圖々々云つて聞入れなかつた。

「一日でも期限が延びれば半月分家賃を取るのが土地のきまりだと、此間家主が云つてゐました」と、まつ子が云つた。

さうなると、彼等は一刻もその家にゐるのがいやになつたので、とに角大急ぎで荷づくりをすることにして、偶然來合せた知合ひの土地の女にも手助けを頼んだ。運送屋の人夫をも雇つて來て、やうやく日暮前に停車場へ荷物を送り出した。後片付は手傳ひの女に頼んで、彼等は心當てにしてゐる發車時間に遲れぬやうに急いで出掛けてゐると、家主は手傳ひの女を通じて、まつ子に疊の修繕費を要求した。炬燵の火で燒焦がしたところがあるので、辨償しなければなるまいと、まつ子も思つて居たのであつたが、數日前家主に知らせた時には、「まあ仕方がありません」と、家主自身寛大な口を利いてゐたのであつた。

忙しい間際に爭つてはゐられないので、高山は要求された一枚分の疊代を拂つたが、あまりに忌々しかつたので、「そのかはり疊替えをしたら、今の疊は手傳ひの人にやつて下さい。それから、井戸の桶だの物干竿だの、私が買つた物は一切あの人にやることにしときますから」と云つて、手傳ひの女にも後で持つて行くやうに云つて置いて停車場へ急いだ。

食卓とか、洗ひ物の盥とか、その他大工に頼んでわざ／＼拵へさせた嵩張つた物は、打遣つて置くのも惜いし、預け場所を捜す暇もなかつたので、方法のつくまで假りに運送屋に置いて行くことにした。

汽車に乘ると、夫婦は一安心した。

「大磯の宿屋へ泊つて、明日の朝ゆつくり立つてもいゝんだが、大磯といふ土地はつく／＼いやになつたから、一刻も早く離れた方が氣持がいゝ。二度とこんな土地へは來ないよ」

高山はさう云つて、細雨のしめやかに降つてゐる窓外を眺めて、滯在中彼れの散歩の目あてになつてゐた小千疊や海

岸の松林に別れを告げた。まつ子は身心の疲勞でガッカリして殆んど口を利かなかつた。根を据ゑて落着ける家がなくつて、あちらこちらと轉々としてゐる浮草のやうな生活は、彼女には詰らなく思はれた。二人とも、朝に乳を飲んだばかりで、午餐も食べてゐないので汽車に乘ると、頻りに空腹を感じだして大船へ來るのを待ちかねて辨當を買つたが、さて箸を採ると、まつ子の方はむかづいて充分に腹を滿たすことが出來なかつた。

彼等はつまりは、東京へ出て、空家搜しをしなければならぬと思つてゐたが、今はとに角まつ子の故郷であるK市へ行つて、彼女の父母の家に寄寓することにしてゐた。彼等は近年其家を旅から旅を渡る際の中繼ぎのやうにしてゐて、雜多な書籍や衣類や世帶道具などを預けてゐるので、季節の移りかはりには、衣類の預けかへをして來なければならなかつた。で、まつ子は云ふまでもなく、高山も一年に一度くらゐは其家へ立寄つて、數日あるひは數週を過すのを例としてゐた。其家を根城として、近傍の山河溪谷を見て歩いたり、あるひは溫泉に浴したりすることもあつたが、海岸に生れながら（あるひはそのためにか）海の眺めよりも山の眺めを好んでゐる彼れは、甲信の山地に親むたびに清新な刺戟を受けて、懶い眠りから醒めるやうな氣持がした。輕井澤の高原に住んでゐた間に屢々そんな氣持がした。富士の晩秋の裾野を旅して、精進湖畔の見窄らしい宿に泊つて、雨中の半日、宿の窓から紅葉の山を見詰めてゐた時、寂寞の靈氣が周圍の山の底にも、彼自身の心の底にも動いて、瞋恚焦燥の煩惱も一時搔消されるやうな氣持がした。鰍澤から富士川を下つて身延の靈域に辿り着いて、獨り御草菴の遺跡に立つて、蓊鬱たる樹間から、暮れかゝる空を仰いだ時には、宗教心に乏しい、ことに日蓮宗の如き者を好まない彼れでも、宇宙に動いてゐる尊い者の前に跪きたいやうな氣持がした。（常住の住家である里へ下ると、直ぐに昏亂して、一日の安き心もなく、心に何の光をも見られないのが不斷の彼れの習ひではあるが）

彼れは、半年足らずの間定した大磯の住居に飽果てゝ、春の光の差す頃となつた山の色を見たくなつて、荷物の整理をかねて、K市へ向ふのを喜んでゐたのであつたが、今度はその外の俗用をも有つてゐた。それは、數年來行惱んでゐたまつ子の弟の縁談が纏つて、三月中には結婚式を擧げるといふ知らせに接してゐたので、彼等夫婦もその席に列しやうと志してゐたのであつた。高山は數年前止むを得ない譯で、妹の結婚のために柄にない世間的の斡旋をして、堅めの盃の席へも披露の席へも、親代りに出て行つたことがあつたが、その他には、幾人かの弟の結婚の時にも、親戚の結婚の時にも、顏を出したことは一度もなかつた。葬式にはたび〳〵列席しても婚禮の式場へ行くことを彼れは好まなかつた。しかし、まつ子の弟の良三には荷物の處分などについてたび〳〵面倒を掛けてゐるのであるし、世間並の習慣を何よりも大事に思つてゐる良三の父親は、嗣子の婚禮には、親戚一同の列席を切望してゐるらしくもあつたので、高山の豫定の日程には、良三結婚式出席と、大きく書記されてゐたのであつた。まつ子は先日東京へ日返りで行つて來た時に、三越へ寄つて、祝ひの品を買調へて來た。話の種の少い夫婦の間には、今度の縁談の決るまでのイキサツや、結婚後の青木家の變化の豫想などが屢々話題に上つてゐた。

「今度こそあなたともお別れ見たいなものだ。これから後は、今までのやうな詰らない戲談を書いた手紙の遣取りは出來なくなります」と、まつ子は感傷的な氣持で書いた葉書を良三に宛てゝ送つたりした。

「氣樂にN市へ遊びに行けるのも、これが最後見たいなものだぜ。今度も式の前は何日泊つてゐてもいゝが、式が濟んだら直ぐにお暇にしなければならないよ」と、高山が云ふと、

「さうですとも。私もこれからは今までのやうに浮かり親の家へ行けなくなりますよ。良三の家になつてしまふのですから」と、まつ子も云つた。

「おれだちの荷物だつて、何時までもあの家へ厄介を掛けとく譯には行くまい。第一書物なんかおれにはどうでもいゝんだからな。今度の機會にどうかして仕末をつけたいものだ」

「諸道具が邪魔なら、箪笥なんかはおれの方で買つてもいゝつて、お父さんは云つてゐるのだけれど、それもちよつと變ね」

「親爺さんがお前のために自分で撰擇して買つて呉れた物を、自分の方へ買取るといふのも變だが、おれが邪魔者あつかひして、いくらにでも賣飛ばすといふから、勿體ないと思つてゐるのだらう」

「世帶道具が邪魔だなんて、私の家にはいくらの道具があるものぢやない。大抵の家にはもつといろんな物がありますよ。あなたが女の身になつて、家の用を足してゐたら、道具のない不自由さが分るのだけど」

「おれは昔自炊してたことがあつたが箸と茶碗と土鍋と七輪とくらゐで簡單なものだつた。今でもどこかの山へ入つて自炊して見たいと思ふこともあるよ。こゝらが親に似てゐるのであらうが、おれは煎餅布團にくるまつて寢てゐようとそんなことは平氣だ。先日もAさんが訪た時に、行李の上に鞄を載せて机代りにしてるのを見て、どうも簡單なものですなあと、驚いてゐたつけが、おれには紫檀の机なんかは無用な長物だよ」

「そんなことは自慢になりやしないわ。生活は豐富に氣持よくしようと心掛けなければ働く張合ひがないぢやありませんか。文明の利器を利用して、無駄な勞力や費用ははぶいて、氣持ちよく暮すのが賢い人のすることなのよ」

「それはさうだが、おれはも一度生れかはつて、はじめからやり直さなければ生活を愉快にすることは出來ない。K市の親爺さんなぞには、古い因習だか何だかゞ、佛か鬼かのやうに頭の中に取付いてゐるのだが、おれにはそれと違つた佛か鬼かゞ、頭の底に巣をくんでるから、もうどうしやうもないよ」

「形容はどんなにもつけられるでせうけれど、生きてゐる間は今からでも生甲斐のあるやうに暮らさなければ損ですよ。……私だつて、もつと、いろんなことを知りたい。あなただつてまだ老い朽ちた歳ぢやなし、もつと世の中のいろんなことを知らなきや損ぢやありませんか。……私のお父さんはあんな風に、良三なんかのことばかり考へて、二十五にもなつた男が、ちよつと散歩に出るとか、活動寫眞を見に行くとかするのさへ、心配して、容易に許さないくらゐなのですけど、それが子供のための幸福だか何だか分りやしません。私だつて、女學校を卒業した時に、學校の成績もまあ〳〵悪い方ぢやなかつたから、先生にも勸められるし、自分ももつと學問したいつていふ氣になつて、女子高等師範へ――その時は、女子大學とか英學塾とかいふやうな學校はお友達の中で評判になつてゐなかつたの――入りたいと思つて、お母さんに頼んで、お父さんに云つて貰つたことがあつたの。さうすると、お父さんは私を呼寄せて、何といふ不量見だと血相變へて怒つたんです。親に逆らうつて氣は微塵も持つてゐなかつた時分だから、泣寢入に諦めて、裁縫でも習ふ氣になつたのだけれど、今になつて考へると、女だつて出來ることなら、學問をした方がよかつたの。今更後悔したつてはじまらないけど、女も獨立して生活して行けるだけの藝は、身にそなへてゐなければ、安心して世が渡れないとしみ〴〵思はれることがありますよ。親や兄弟の人情を手頼りにするのは心元ないことだと私も思ふやうになつたんです。良三だつてお嫁さんが出來たり、子供が出來たりすると、次第に人間が變つて來るでせうし、それがまた本當なんでせう」

「おれだつて何時死ぬるか分らないしね」と、高山は云つた。

子供の無い上に世間の狹い彼等は、ことにまつ子は、日常心を紛らすすべがなかつた。そして、睡眠時以外には、生きてゐる人間として絶えず動いてゐる彼女の心は、自然と夫の一言一行の上に注がれた。日に月にさうしてゐるうちに、

夫の人となりについて、彼女自身の解釋が、自からつくやうになつてゐた。世間の人は何と云つてゐようとも、當人が自分をどう吹聽してゐやうとも、夫は手頼りにならない人、詰らない人、お坊つちやんで利己的な人、何かしら祕密を持つてゐる人、こんな人、あんな人と、彼女の心では思はれるやうになつてゐた。夫が以前云つてゐたことゝこの頃云つたことゝ矛盾してゐるのに氣がついたり、夫が知つたか振りで豫言したこと――たとへば、××なんかは將來の見込みのない人間だと、夫がひとり極めにしてゐたことが外れて、その××なんかゞ盛んな人氣を取るやうになるのを見たりすると、夫の言葉にも信用が措けなかつた。夫がをり〱常識外れの不思議な事をするのも、彼女に取つては面白く感ぜられなかつた。

子供の無い上に世間の狹い彼等の心や目や耳は、互ひに探偵のやうに相手の上に注がれてゐた。

（二）

東神奈川から八王子行の汽車に乘替へると、その薄暗い粗末な列車にはスチームが通つてゐないので寒かつた。二等車には、彼等の外に色の白い若い官吏風の男と、古いトンビを着た膚は荒いが、眉の薄い、青肥り（あをぶと）のした田舍くさい老人とが入つて來た。汽車が動きだすと、老人は誰れに云ふともなく、此間中から寒氣がぶり返したことを歎息したり、不景氣がひどいのに旅費の減じないことを訴へたりしてゐたが、やがて若い男に向つて、

「あなたはどちらまでお出でになります」と、馴々しく訊ねた。

「八王子までゞす」と、若い男は簡單に答へた。

「八王子も生糸がいけなくなつたので、町を通つても、一二年前のやうな活氣は見えなくなりましたね」

「さうでせう」

「失禮ですがあなたは、横濱の會社へでもお勤めになつてゐらつしやるんですか」

老人があまりに馴々しいので、若い男は顏を曇らせて、「まあ、さうです」と答へたが、老人は相手の無愛相なんぞは氣にも留めない風で、

「私は悴が今度濱の××會社へ奉職することになりましたので、今日樣子を見てまゐりました。あなたも御存じでせうが、櫻木町の停留所の近くに新築されて、なか／＼立派な會社になりました。社長さんにもちよつとお目に掛りましたが、百萬といふ資本を運轉する人はちがつたものだ。自然と威嚴が具はつてゐますな。悴は昨年××大學を卒業してから暫く東京の辯護士の家に勤めてゐましたが、法律いじりはいやだつて當人が申しますから、昨年きりで暇を貰つて今度のところへ出ることにいたしました」と、話を續けたが、若い男はもう返事をもしなくなつた。老人は煙草を出して火を點けた。そして、相手欲しさに高山の方へ目を向けて、一二言問ひを掛けた。

高山は、煙草を持つた老人の左の指が曲つて自由な働きを缺いでゐるのに目をつけて、その顏付をも思合せて、癩病患者ぢやないかしらと疑ひだした。申譯だけの受答へをしながらよく見てゐると、薄明りに映つてゐるその皮膚の色は無氣味であつた。

「夜汽車ぢやお困りでせう。それに八王子からは込合つて居りますで、緩くりお休みなさる譯にやまゐりますまい」

「さうですとも」

高山は見延の深敬病院で見た患者の顏や、脊掛で草津行の患者の馬上の姿を、疲れた頭の中に思起した。紅葉のあざやかな山に圍まれた病院の廊下では、むくれた顏のくずれかけたやうな患者が嬉しく、聲を立てゝ互ひに笑ひ戯れてゐ

た。女の唄ふ聲も洩れてゐた。

「汽車には乘せて貰へないのです」と、人の話すのを聞いて、屈ひ馬に乘つてゐる醜い患者を見た時に、高山はその患者に同情するよりも先づ、どんな目に會つても生きられるだけ生きて行かなければならない人間のいたましさを感じた。呪いたいやうな氣がした。さうして、患者同士で笑ひ戲れてゐる病院の廊下こそ、人生の眞の姿であるやうに、彼れは感じてゐるのであつた。さまざまな人間の平素の饒舌も、病院の廊下の氣晴らしの戲れと同じやうに彼れには思はれてゐた。あれもこれもこの世の中の出來事であるのに關はらず、劇場の舞臺よりも饗宴の席よりも、あるひは花嫁花聟の相並んだ美しい姿よりも、痩馬に跨つた草津行の患者の狀態に、一層多くの人生の眞實が現はれてゐるやうに、どうかすると、彼れは思つてゐた。

「八王子から先きは景色がようがすが、この邊は昔間でも眺めの面白い所は御座いません」、老人は聞き手の無愛想に頓着しないで、何かしら口を利いてゐたが、町田といふ所で、皆んなに挨拶して汽車を下りた。

高山は向う側に腰を掛けてゐた老人から受ける不快な刺戟から免れたのに一安心して、大きな合財袋に寄掛つて目を閉ぢた。

八王子で乘替を待つ間は、待合室のストーブにあたつて、いろいろな男女のいろいろな話に耳を傾けてゐたが、久振りで異つた社會の話を聞くのは、彼れにも興味があつた。

「僕は此間東京へ行つた歸りに、上野の近所の洋食屋で、ひとりでウヰスキーを一本飲んで、新宿までの切符を買つて電車に乘つたら、どうにも溜らなくなつて眠込んぢやつて、上野から東京驛の間を三度行つたり來たりしたよ。車掌に起されて目を開けると、今度こそ失敗らないやうにと、一心になるのだが、どうにも頭が云ふことを聞かない。直ぐに

夢になつちまふんでね。しまひには車掌に大小言を喰つちやつた」

赭肥りのした中老の田舍紳士が、さう云つて大笑ひをすると、あたりの人もどつと笑つた。

「寒いと思つたら、雪になつた」と、ある男が云つたので、皆んなの目がガラス窓の外へ注がれた。

高山は外へ出て、闇の中に降頻る雪を見て來て、「一日延さなくつて却つてよかつたよ」と、まつ子に向つて囁いた。因業な家主に對する不快な感じも、自から消失せた。

やがて彼等は、かの酒好きの紳士と一緒に夜行列車に乘つた。窮屈な寢樣をしてゐる先客の中へ割込んだ彼等は、スチームの過度な温みや人いきれのために、疲れてゐる頭に痛みを覺えるほどであつたが、かの紳士は二三驛を過ぎる間に口を開けたまゝコクリ〳〵居睡りをしだした。山を登るにつれて雪はます〳〵繁くなつてゐた。をり〳〵息抜きに窓を開けると、雪を伴つた冷たい風が吹入つたが、それが高山には氣持がよかつた。

「これで向うへ着きさへすれば、安心して眠られる家があるからいゝやうなものゝ、こんな寒い時に、當にするところがなかつたら心細いだらうな。どんな窮屈なところでも、屈托しないで熟睡の出來るやうになつたらいゝのだが、おれはどうしても眠れない」、高山はだるい欠伸を漏らしながら、まつ子に囁いた。半ば眠りに落ちてゐるまつ子に云つたつて効のないことだつたが、一口でも術ない思ひを口に出して見なければ、退屈の遣り場がなかつた。

彼れは窮屈な寢樣をしてゐる一人々々の顏を見て夜を過してゐたが、室内の顏の一つから記憶を呼び起されたのか、ふと東京の尾越夫妻へ宛てゝ音信をすることにして、鞄の中から封緘葉書と萬年筆とを取出した。尾越夫婦とは去年の夏輕井澤で知合ひになつたので、年末に東京へ行つた次手に、その家を一度訪ねたこともあつた。

「お二人で大磯へお出でになるといふお話があつたので、心待ちにしてゐましたが、そのうち小生等は土地に飽いて來

ましたから、今日大磯を引上げて、今中央線の夜汽車に乘つて居ります。近日また東京へ出掛けますから、その際にはまたお邪魔に上るかも知れません。今雪が降つて居ます。離れ山の麓の我々の小さな家は、今時分凍つてゐるでせうが……」高山は不眠の退屈から、感慨を籠めた筆を運ばせかけたが、ふと自制して、少し詳しい轉居の報告だけにして、暫く滯在する筈のK市の住居を明かに書き添へて、葉書は車掌に賴んだ。

交友の乏しい彼れに取つては、尾越夫妻の如きは珍らしい知人になつてゐるので、輕井澤の生活を記憶から呼越すたびに、その夫妻のことを思出さないではゐられなかつた。秋風が吹き出して、避暑客は日に〳〵歸つて行つて、月見草の咲誇つてゐた高原も尾花の野となつた時分に、周圍の燈火の消えた闇の中に、尾越の家の一點の燈火のみが幽かに光つてゐるのを、彼れは懷しい思ひをして見てゐたのであつた。夫妻の間は睦じさうであつたが、あたり前の夫婦とは思はれないやうなところがあつた。第一、妻君が、派手なつくりをしてゐるのに關はらず、尾越と釣合はぬくらゐに歳を取過ぎてゐた。二人とも遊惰な生活をしてゐた。

高山は、尾越の單純な話振りや、遊惰であつても惡氣のなさゝうな人柄を好んでゐたが、それよりも妻君の色つぽい素振りに知らず〳〵心を惹かれてゐた。

十月に入るまで踏留つてゐた高山夫婦は、その少し前に歸京することになつた尾越夫妻に誘はれて、告別の散歩を共にした。

「どちらが先きに退却するかと思つてたら、私の方が負けましたね。しかし、あなたもいゝ加減でお歸りなさい。野中の一軒家は怖いですよ」と、尾越は云つた。

「僕も大分東京が戀しくはなつてゐるんですが、しかし、東京へ行つて見たつて、面白いこともなさゝうですからね—

「私にだつて、東京がいゝ事を持つて待つてゐてくれるのぢやありません。むしろ煩い思ひをしなきやならないでせうが、でも、東京はうまい物が食べられるだけでも有難いですね」

「尾越はこの頃食氣づいて、やれビステキが食べたいの、テンプラが食べたいのと、食物の事ばかり云つてゐるので御座いますよ」と、妻君は横から嘴を入れて、「辛抱氣がないつたらひどいんですからね。最初のうちは、私こんな淋しいところには十日ともゐられないだらうと思つてゐたのですけれど、住んで見ると、結句安心してゐられると、覺悟をいたましたの。それに尾越ははじめはこんな涼しい空氣のいゝところはないつて、夢中で喜んでゐたくせに、餘程前からしこの土地に厭いてしまつたらしいんです。男の方が女よりは物に厭きやすいんで御座いますかね」

「さあ、どうですかね。……人によつてさまぐでせうが、大體男の方が物事に執着が深いんじやないでせうか」

物事と云つても、富山は男女間の情事を念頭に置いて、さう云つたのであつた。それについて、尾越も妻君も頻りにめいぐの意見を述べた。四人は山腹の四阿に憩うて、暫く秋晴れの野を見廻した。此處で温かいコーヒーでも飲めたらいいと、誰れかゞ云つた。

その言葉を思出すとともに、富山は、續けざまの喫煙で荒らされた喉を潤して、だるい頭に力をつけるために、一杯の温かいコーヒーを飲みたくなつた。

（三）

夜明け前にK市に着いた時には、雪が可成り積つてゐた。湘南地方と打ち違つた底冷たい、殺氣を含んだ風が彼れの頬に觸れた。どちら向いても春は萠してゐなかつた。

市を取圍んだ遠近の山嶽の雪晴の景色は美しかつた。高山は市の眞中にある青木家の二階の窓から、富士を中心にした連山が、碧空の下に鮮明に聳えてゐるのを、新奇な思ひを寄せて、朝となく晩となく眺めてゐた。雪解道を荒川土手や古城のあたりまで散歩したりしたが、季節がまだ早いので、山奥を差して足を進めることは出來なかつた。

婚禮を前に控へた一家の人々の動靜をも彼れは、新奇な思ひを寄せて、日に夜に眺めてゐた。高山自身の婚禮も、彼れが斡旋した妹の婚禮も、極めて手輕に取運ばれたのであるし、從來冠婚葬祭の世間的の儀式に親しくたづさはつたことはなかつたのだから、純日本の傳統的慣例や、この地方の習慣を巨細に渡つて守らうとしてゐる今度の婚禮の手順を見てゐると、事々に興味があつた。外目には結婚する當人同士の事はそつちのけにして、儀式のための儀式をしてゐるやうに見えるのが、奇怪不思議にも思はれた。

「結納の日取りがまだ極まらないのです」と、青木家の老主人は牴牾しさうに云つて、いろ〳〵と臆測をしてゐた。去年の夏仲人の手を經て話が極ると、間もなく、相手の田村家へ此方から親子連れで出掛けて、酒が入つたので、その儀式は土地の風習として、結納の取交し以上に緣談の成立を保證するものであつたが、その後、先方からいろ〳〵な口實の下に、輿入れの期日を延し〳〵するので、青木家では心元なく思はれてゐた。氣拙い思ひをさせられるやうな噂も世間の口から時々傳へられました。

「良三さんは當世の若い者には珍らしい堅いおとなしい方だし、稼業は繁盛するし、あなたはお仕合せですよ」と、親戚の者に云はれると、

「いや、嫁を娶つてしまふまでは、安心して眠れませんよ。重い荷を脊負つてるやうでね」と、老主人はこぼした。

「お嫁さんの撰好みに苦勞するくらゐ、親として樂しみな苦勞ぢやありませんか。此方のお嫁さんになら候補者はいく

〔ど〕でもあるのでせうから」
「傍で思ふやうにやいかないものでさ」
老主人は、おれの苦勞はおれでなきや分らないのだと、これほどの一家の重大事を、傍の者が輕く見てゐるのを不平に思てゐた。四五年以來、時々持込まれる緣談を、一々根掘り葉掘り調べて、些少の瑕瑾をも嫌つて拒絕して、自分で市中を物色して早くから目星をつけてゐた一人にのみ拘泥してゐた彼れは、自分の胸に描かれてゐる良緣に傍から水をかけられるのを好まなかつた。故障が起つたのぢやないかと疑はれるたびに心が萎れた。
當人の良三はすべてを父に任せて冷然と構へてゐた。「お父さんのお好きな××さん」と、浮いた調子で座興に云つて笑ふ者もあつたが、さういふ時にも、老主人は眞面目な顏をして辨じた。
「おれは自分の道樂で勝手に嫁を極めるのぢやない。容色でも育ちでも、氣風でも、これなら靑木家の嫁として、世間へ出して耻かしくない、世帶をまかせて大丈夫だと思へばこそ、お前だちにも相談して、こゝまで話を運んで來たのだ。だからお前だちももつと眞劍になつてくれなきや困るよ。誰れでもいゝ、當人の氣に入つた者なら誰れでも連れて來いといふやうな手輕にや行かないぢやないか。藝者や女郞を引張つて來られても困るからね。相續者は何事も家のためといふことを第一に考へてゐなければならんのだ」
高山も老主人から屢々かういふことを聞かされて、それが世間の親の普通云ひさうなことだとは思ひながら、固定した家といふ者を持つて居ない彼れは、そんなことは身に染みて感ぜられなかつた。
「私は早く世を繼いで、若い時から今までしみ〴〵湯治や見物の旅をしたことがありませんよ。今度の事の片がついたら、後は若い者にお讓り申して、時候のいゝ時には十日なり二十日なり、緩くり何處かへ行つて見たいと樂しみにして

居ります」——

老人はたび〳〵から云つたが、ある時良三は、

「何時だつて行けたのぢやありませんか。今までに行けないやうなら、これからだつて駄目ですよ」と苦笑して云放つた。老人は笑つて默つてゐた。

若い健かな良三は、稼業の暇には、せめて市中の散歩でも存分にして見たかつたが、それさへ自由にならなかつた。で、湯に入つて來るのさへ、馬鹿にならない享樂の一つになつてゐた。自分が二十年來住んで來た町でありながら、この市中が何時も珍らしく彼れの目を惹いてゐた。

「今夜は久振りで活動を見て來たいんですが」と云つても、活動寫眞の見物さへ、快く許されない場合が多かつた。

「若い者はそんなに活動が見たいものかな」と、珈琲店だの活動小屋だのと、餘計な娯樂場の出來るのを、父親は歎息した。

「お父さんの若い時分には、何が樂みだつたのでせう」良三の言葉には不平が籠つてゐたが、父親は笑つて默つてゐた。

子供の外出を喜ばない老主人も、自分で終日家の中に蟄居してゐると、頭が欝陶しくなるので、何かに假托けてはちよつとでも外を歩いて來たがつた。暫く寄寓することになつた高山が、日々の散歩に出掛ける時に、道案内として一緒に出掛けることもあつた。さういふ時には、世事に暗い高山をも、時に取つての相談相手として、縁談に關はつた疑問やら意見やらを、隔意なく口に出した。

「祝儀事もこれからの時世では、成べく質素にした方がいゝんでせうな。當人同士の心掛けがよくつて、内輪が圓滿に收まりさへすればいゝので、肝心なことはそれ一つですからね。しかし、先方はなか〳〵手が込んでゐて、手輕に濟

さうぢやありませんよ。仲人も財産家で、私のために一はだ脱いで骨を折つてくれてるんですが、のつけに、今度は高木さんお氣張りなすつてと切込んで來る有様で、此間も先方の仕度は大變ですぜといふ觸込なんですよ。……弱つてしまふ」

「それは構はないぢやありませんか、先方は先方、此方は此方だから」

「それでいゝものでせうか。……私の方は昔からの家風で、家の中も御存じの通りに昔のまゝで何處にも飾りつ氣がないんですが、先方は一體に派手なやうです。……尤も私の家の生活もあんまり控へ目過ぎるやうですから、これからは若い者次第で、少しは人前のいゝやうに華やかにした方がいゝかもしれませんね」

「さうでせう。財産の餘裕があるのに、強いて質素に暮すのには及ばないでせう。自分の力で得られるだけの樂みは樂んで今日を愉快に暮したいと、當節は誰でも思つてるやうですから。」

「……ぢや、まあ、後々までの家の事なんかはどうでもいゝ、自分のしたいことを勝手にすればいゝつていふ譯なんですね」

「さう。……しかし、世の中はどう變つて、金持の財産も何時叩潰されるか分らないつていふ時代ですから、自由に費へる間に費つとくのが利口かも知れませんね。一寸先は闇の世ですからね」

「私どもは無理をしてまで儲けようといふ慾はなかつたものです。だから、お蔭で世間の信用も續いて來たし、親戚にも何かと云ふと、相談相手にされるつていふ風ですが、この先はどうなりますか」

「お嫁さんが來たら、家風も變つて來るでせう。何處の家でも、女房といふ者は隱然非常に勢力を持つてゐるやうですから」と云つて、高山は一二の例を擧げたりしたが、眞面目に聞かれるのをいゝことにして、年長者に向つて世態人情を解くのが、少し氣恥しくなつたので、「結婚の儀式も儀式だが、一つ新婚旅行をおさせになつちやどうです。」人間

の一生に一番樂しいことらしいですから。それに一度機會を取外したら、あとではしようたつて出來ないことなのですから」と、半ば座興に云ふと、

「え、それはいゝでせう。結婚當時は家の中がごたつきますから、旅行にでも出てくれゝば、家の者の手數が掛からなくつて、結句便利かも知れませんよ」

老主人が家の事、子供の事に、老いの心を碎いてゐるのを感じるにつけて、高山は自分の父親の事を思出した。自分の故郷の家と青木家との氣風の相違をも思比べた。親の側へ置いて親の稼業をそのまゝに繼がせて、わが子の一擧一動、日顏の晴れ曇りにも、言葉のはしぐにも心を配つてゐる一人の父親と、子供の勝手氣儘な行動を大抵は見過して、古い廣い家に獨りで產を守つてゐてあまり苦にも思つてゐない一人の父親との、二つの老いた姿を彼れは心の中に描いて、ぢつとそれを見てゐた。……高山は自分の妻を撰ぶに當つても、事後承諾と些少の費用を求むる以外に、父親の頭をも手足をも煩はさなかつた。彼の二三の弟の結婚もさうであつた。一人の妹でさへ自分で夫を撰んだ。

「どちらが子供のために幸福なのだらう?。どちらが親自身に取つても幸福なのであらう?」高山は、若し自分が良三の親のやうな親を有つてゐたなら、自分の生涯はどう變つてゐたであらうかと、想像をめぐらしたりしたが、それはとに角、一人の子供もない、將來生む望みもない彼れには、親心といふものは些とも分つてゐなかつた。生物學者の說くところから考慮したり、日常見聞してゐるところから推察したりして、親心の概念は心得てゐても、身に染みて生きぐと感ずることはどうしても出來なかつた。世界の親々の心は、彼れの力では味ひ知ることの出來ない神秘不可思議の何物かであつた。

「おれの親爺は、いくらやりつ放しであつても、大勢の子供を育てゝ來たのだから、隨分苦勞したのであらうが、親[illegible]

といふ不思議な物を味ひ知つてゐるのだから、おれよりは幸福だ」

彼れは、故郷の家の奥座敷の炬燵に當つて、算盤か帳簿かと睨めつくらをしてゐるか何かしてゐる今の父親を想像するにつれて、彼れが幼かつた時分の父親を追想した。……彼れが物覺えのいゝのを自慢してゐたらしい父親は、眞夏の休暇に、日本外史や、十八史略の素讀を授けようとしてゐたが、強いて學ばせられる彼に取つては、それが苦役のやうに感ぜられてゐた。滿汐時を見計らつて水遊びに出掛ける近所の遊び仲間から誘ひの聲を掛けられたりする時には、自己流の節をつけて朗々と讀立てゝゐる父親の聲が憎くなつた。で、時々は父が教へたがつてゐる時刻を豫感しては、そつと家を出て遊んで來ることがあつた。……あの時分の父親は、今のおれよりも若かつたのだと思つてゐると、自分の身のまはりが淋しいやうに、高山には思はれた。

（四）

仕度は略々出來上つたから、結納の日取りも式の日取りもそちらで極めて呉れと、先方から仲人を通じて云つて來たので、此方では俄かに勢ひづいて、暦を取出して吉日の穿鑿をはじめた。九星暦の外に日蓮宗の暦をも參考にしたのであつたが、二つの暦の所說が一致してゐないので迷はされた。

結納として送るために、京都へ染めにやつた花嫁の式服が着くと、家の者も寄寓者も目を欹てた。式服には孔雀が羽をひろげてゐた。

「成ほどよく染め上げてゐる」と、皆んなが云つた。まだ見ぬ女がこの式服を着けた華美な花嫁姿を高山は想像しながら、「先方のお好みださうですが、孔雀の模樣は奇拔なのでせうね」

「孔雀は虚榮の鳥だといふぢやありませんか」老主人はそれを氣にしてゐるやうだつた。
「孔雀は蛇を喰ふさうですよ。孔雀明王の有名な佛畫を見たことがありますが、昔は呪ひをかける時に、僧侶がその前で祈つたのださうです」

兩親や花聟の式服も、すでに新調されてゐたのであつたが、まつ子の式服は華美な場所に相應はしいのがなかつた。持合せの物は着る機會のないうちに自から世におくれて見窄らしくなつてゐた。老主婦は頻りにそれを氣にした。先方の親戚は富家ばかりで、誰れとかさんは一萬圓のダイヤの指輪を嵌めてゐるなんて、大袈裟な噂を聞いてゐるのに、さういふ人達の中へ、自分の娘をこんな身窄らしい物を着せて交はらせるのは、どうしても忍びられなかつた。
「これでいゝんですよ。どうせ一度お役目に着るきりなんですもの」と、まつ子は諦めてゐるやうに云つた。
「でも、年寄の私だちでさへ新調してゐるんだもの」
「着物のことなぞどうでもいゝの」まつ子は何となく哀れを感じて、「それよりもね。……私は子供はないし、落着くところがないやうな氣がしてならないの。高山に死なれでもしたら、私の行場所がないんですから、それを思ふと、淋しい野原を一人で歩いてゐるやうな氣がすることがよくあるんです」と、何時になくしみ〴〵と母親に訴へた。
「だつて、親もまだ生きてゐるのだし姉弟もあるのだから、あなた一人で心細い思ひをしてゐなくてもいゝぢやないか」

さう云つた母親の目には涙が浮かんだ。まつ子が何故淋しい野原を歩いてゐるやうに思つてゐるのやら母親にはよく呑込めなかつたが、雨露の凌げるだけの小やかな家でも、まつ子のために建てゝやつて置かなければ、安心してこの世を去ることが出來ないやうな氣がして、父親にその話をした。父親は笑つて聞いてゐた。

「お父さんは他所から來るお嫁さんのことばかり心配して、自分の娘のことは考へてくれないから仕樣がない」と、母親はこぼしたりした。

皆んなが忙しかつた。邪魔物の取片付や汚れ物の洗濯や、新しい調度家財の整理などにまつ子も母親を助けて働いてゐた。自分だちが旅で汚した衣類の仕末にも骨が折れた。仲人をはじめ、人の出入りも多かつた。

用事のないのは高山一人であつた。毎日御馳走になつて、市中から近郊へかけて散歩をして、午睡をして、時々は、婚禮の準備を傍觀してゐた。此處を立退いたら何處に住居を定めるかと考へて、まつ子などに相談することもあつたが、その場合が來たらどうにかならうと、輕く見做してゐた。

東京の知人との手紙の遣取りは殆んど絶えてゐたが、ある日計らずも、尾越の音信に接した。

「拜啓、小生先月末より郷里福島へ歸省いたし、昨夜上京仕候。お手紙の趣きによれば、最早大磯を御退拂相成りし由。御訪問致さゞりしを殘念に存じ候。小生は一身上の都合により、東京に住みがたく相成り候故、近々家を片付けて郷里へ隱退いたすことに決定いたし居候。他日拜眉の機會も之有候はんが、をり／＼の御音信願上候。輕井澤の閑寂なる風色夢の如く思出され候。奥樣へもよろしく」

高山はこの手紙を讀むと、九段の中坂のほとりにある尾越の今の住居を目に浮べた。小さな家であつたが、二階が一室あるし、日當りがよさゝうで、借家としては手奇麗に出來てゐた。空家の拂底してゐるこの頃、あのくらゐな家が借りられゝばいゝと、ふと思ひついたので、まつ子にさう話した。

「式の日まではまだ大分間があるから、ちよつと東京へ行つて來よう。尾越の後が借りられるかも知れないし、あれがいけなかつたら外を搜して見てもいゝよ」

「こんなゴタ〳〵した家にゐたつて詰らないでせうから、明日でも行つて入らつしゃい」

「東京で借家がうまく行かなかつたら、思切つて南九州の方へでも行つて見るんだね」

高山は退屈さましに二階で地圖を披いて、未見の土地を空想してゐた。人間や超人の事をいくら考へて見たつて、生れながら持つてゐる自分の智慧はとつくに行詰りになつてゐて、新しい心の世界の開展する望みのないことを熟知して來た彼れは、身邊の事がもつと自由になつたら、未見の土地を巡遊して殘生を送りたいとよく考へてゐた。海外の地圖をも屢々注視してゐた。長崎島原などを經て、薩南の湯の町排徊に暫く居を定めて見たいと思つたこともあつたし、日向の茶臼ケ原の孤兒院を訪ねて見たいと思つたこともあつた。その孤兒院には、少年時代の彼れを愛撫して、基督の道を單純平明な言葉で傳へた昔の田舍牧師が老後の生涯を送つてゐる筈なので、高山はお互ひがこの世に生きてゐる間に、一度その牧師に會ひたいと思つてゐた。

「二十何年先生にも御無沙汰をして世の中を渡つて來ましたが、肝心な事はつまり何も分らないで、分らないじまひで私も一生を終りさうです」と云ひたかつた。昔でさへ頭髪が薄くつて痩せさらばいてゐたかの牧師の今の有様はどんなであらうか。顔に似合はない鳩のやうな柔和な目付は、高山の記憶に今も懷かしみをもつてハツキリ殘つてゐる。……都會から隔絶した原野で薄倖な小兒の教養などに從事してゐるのこそ、人間としての最も尊い生活であつて、現世と天國とをつなぐ梯子はさういふ所にかゝつてゐるのかも知れないが、それでは彼自身かの牧師等の下に隨いて安んじて働き得られるかと考へて見ると、考へるさへ可笑かつた。

（人を殺して心が安んじてゐられないのなら、人を助けたつて、わが心は安んじられないのだ。どちらにしたつて同じことだ）

階下へ下りると、仲人が結納取かはしのために來てゐた。二三の親戚も座に加はつてゐた。緣喜を祝ふための茂久錄の用語も字配りも、人々に頭腦を絞らせて六ケ敷かつた。いくつかの進物臺に載せられた結納の品々は、翁の面や松に日の出などの模樣のある風呂敷をかけられて、仲人の宰領で持出された。同じ家の中も、不斷の夜とは違つて、奥床しく見られた。仲人が目出たく納めて歸つて來ると、祝ひの膳が並べられた。盃をやり取りしながら枝から枝へとうつゝて行く世間噺も、たえず歡喜の色に照つてゐた。

「良三さんも荷が重くなりなすつたから、これからまた一奮發なさるんですね」と、仲人が云ふと、

「これで身が極まると、働くにも張合がつきますよ」と、老主人が應じた。

（五）

高山は翌朝東京へ行つた。

飯田町の宿屋に着いて、茶を一杯飲むと直ぐに外へ出た。田舍から出て來るたびに、こんなに空氣の濁つた騷々しい所で、よく人は生きてゐられることだと感じるのであるが、それとゝもに、自分の故鄕へ歸つたやうな氣持もした。女の美しさも彼の目を惹いた。筋肉の引締つた赭い顏した、天眞の生氣が身體に漲つてゐる大磯などの女よりも、虛弱な肉體を脂粉で色取つてゐる都會の女の方が美しく見えるのを如何ともしがたかつた。

神保町あたりまで行つて、醫藥など二三の買物をした後で、中坂の尾越の家を訪ねるつもりで、九段下まで來ると、數人の若い男女が電信柱へ大きな紙を貼りつけてゐた。立留つて見ると、××會主催の婦人問題講演會の廣告であつた。講演者の中には高山の知人もあつた。知名な社會主義者もまじつてゐた。

て行く。

「これは届けてあるのかね」と訊ねた。

「いえ、別に届をしてはゐないです」と、髪を長く延した袴を着けた學生らしい男が答へた。

「ぢや、いけない。剝いで下さい」巡査は凜として迫つた。

「剝がなくともいゝと思ひます」

「いけない。剝ぎたまへ」

二人は顔を紅らめて二三の押問答をしてゐたが、やがて巡査は警察署までの同行を命じた。先つきから後の方に立つてゐた、髮を七分三分に分けて束ねてゐる仲間の女は、微笑しながら、

「警察署へ行くんだつて。行け〳〵」と、小聲で云つて隨いて行つた。

街上のさういふ光景は、高山には珍らしかつたので面白かつた。

尾越は家にゐたが、家を片付けてゐる樣子は見えなかつた。

「お移りになるのなら、後を讓つて頂きたいと思つてゐるのですが」と、高山は玄關へ上りながら云ふと、

「實は故鄕へ引込む日取りは、まだハツキリ極つてゐないのですよ」と、尾越は面倒さうに云つた。

二階へ通されてから、高山は成べく東京へ住みたくなつた自分の心持を話して、相手の鄕里隱退の理由をも訊ねたが、

尾越は暫くその答へに躊躇してゐた。

「どうも思はしい職業が見つかりませんから、一二年田舍で親爺の手傳ひをしようかなんて思つてるんですが、私の故鄕はちよつと歸つて見てもいゝ所ぢやありませんからね。……まだ當分は此方で遊んでゐたつて餓え死する心配はない

のですが、懐手をして暮すのは社會に對して濟まないやうに思はれますよ」

「しかしあせらないで、此方でゆつくり方針を立てたらいゝぢやありませんか。資産家の御子息が川合でブラ〳〵してゐるのは、尚更傍の者の目について遊惰な人間と思はれるでせう」

「いや、今度歸つたら、一生懸命に汗を出して働くつもりなのです。遊んで暮すのも傍で思ふほどに氣樂ぢやありませんからね」

尾越はふと興奮した口を利いたかと思ふと、相手の言葉も耳に入らぬやうな風で、落着かない目をしてゐた。これには何か譯があるのであらうと、高山は感付いたので、長座を遠慮して、間もなく暇を告げた。妻君の顏を見ないのが物足らなかつたが、この夫婦の間に何か變つたことでも出來てゐるのではないかと危まれたので、妻君のことは訊かなかつた。

去年の末に訪ねて來た時には、夫妻は他の中年増と三人で晝間からトランプを取つてゐた。輕井澤で退屈のあまり、はじめてこんな物を手にしたのだと、妻君は言譯をしてゐた。

「大晦日を目の前に控へてゐるのに、お宅は天下泰平ですね」と、高山は冷かして、「僕なぞは勝負事には興味がありませんよ。どちらが勝つても負けてもいゝつて思つてゐるから」と、悟つてゐるやうに云ふと、

「でも、詰らない遊び事にも負けるつてことはいやなものですわ。損得の關係がなくつても、負けるつてことは本當にいやなものだと、私思つてますの。」

「お前が今日は負けてばかりゐるからだらう」と、尾越が横から言葉を挾んだ。

「あんたことを。……まだはじめたばかりぢやありませんか。先の勝は莪勝ですよ。昨夕だつて御覽なさいな。あなた

が泣顏して燒芋買ひにいらつしやつたくせに」

「買つて來たのは僕だつたけど、食べたのは誰れだつたらう」

「私かも知れないわね。勝つた方が御馳走になるのは當り前ですもの」妻君は無邪氣にさう云つたが、ふと眞面目な顏を高山の方へ向けて「いゝ歳をして馬鹿なことを云つてるとお思ひになるでせう。……私どもも遊び次手に今年一杯は怠けて暮しても、年が明けたら、心を入替えて一働きしようと思つてゐますのです。尾越は氣に入つた職業がなければないで、語學の稽古にでも行つたらいゝだらうつて、私勸めてゐるのですけれど、相變らずの無精者で仕樣が御座いませんの」

「だけど尾越君は語學は一通り修業濟みなんでせう。輕井澤で外國人と何か話してゐたぢやありませんか。僕なぞは日常の挨拶も英語では云へないんですよ」

「毛唐と話したつて詰りませんね」尾越は氣取つた口調でさう云つて、「私の從弟は横濱のＳＮ商會へ出て、何時も外人を相手にしてゐるのですが、その從弟は學生時代から語學が特別によく出來て、英語の外に佛蘭語も相當に話せるんです。此間うち四五日横濱へ遊びに行つてた間に、家内は從弟の話振りを聞いて非常に感心して、それから、私を輕捷しだしたのですが、語學ばかりが學問ぢやありませんからね」

「學問のことはどうだか、私にはよく分りませんけど、英作さん(從弟)は働き者ぢやありませんか」と、妻君の言葉には棘を帶びてゐた。

が、高山の手前、話は外へ轉じた。妻君は部屋を出て客あしらひの準備に取掛つた。高山は尾越から芝居や寄席や活動寫眞などの事を聞かされたが、それ等についての彼れの批評や說明はすべて平凡であつた。

「暇だから、見に行つてるやうなものゝ、大分飽いて來ましたよ。それで從弟のゐる商館へ勤めようかと思つて、昨

話がついてゐたんですが、詰らないことから中止になつて惜しいことをしました。私は俸給の多少に關はらず働いて見たくなつてるのですけど、運が惡くつて私の決心の鼻先がいつも挫かれるんです。しかし、來年は京橋のある貿易商の會社へ出られるやうに昨今話がつきかゝつてゐるんです」と、尾越はしみ〴〵と云つた。

妻君は再び入つて來た時には、服裝を變へて顏をも飾つてゐた。

高山は二人の話相手として引留められるのを振切つて、夕餐の饗應は受けないで暇を告げたが、同じ夫妻だけの生活であつても、尾越の家には艶があつて、彼れの家のやうに、落寞としてゐないやうに思はれた。

「しかし、夫婦水入らずの生活も、はたの者の云ふほどに氣樂なものぢやないからな」と、彼れは簡單な批評を下した。

毎日、朝餐を濟ますと、直ぐに飯田町の宿を出て、就眠時刻まで何處かで遊び暮らすのを、彼れは例としてゐた。故郷へ歸つて來たやうな氣持と、獨りで旅へ出てゐるやうな氣持とを一しよに持つて、都會の人臭い臭ひに身體を浸して彼方此方を歩いた。一度は講釋場の聽席へ行つて、日本人の心にまだこびりついてゐる古風な犧牲獻身の殘影を見て、彼れの如きものゝ心にさへ、日本の國土に育つて來たゝめ、講釋の英雄に感動する分子が微かながらもあるのを感じて不思議に思つたりした。

知人に會ふたびに訊ねても、荅家は絶對になさゝうなので、結婚式にはまだ間があつたが、更に何K市へ後戻りすることにした。

ところが、出立の前夜に、尾越から電話が掛つて來た。一度お訊ねしたいのだが、時刻は何時頃がいゝのだらうと云ふのであつた。

「今からお出でになつても構ひません。………ぢや、待つてゐます」と、高山は返事をした。

女中に客の案内を賴んで置いて、風呂に入つて來ると、尾越はすでに火鉢の側に坐つて、珍らしくも葉卷を吸つてゐた。

「なか〳〵寒いですね」高山は褞袍のまゝ火鉢の側に坐つて、「先日のお話のヴエリタスといふ活動寫眞を見ましたよ。活動のうちでは見應へのある方なのでせうね。獨逸物だけあつて神秘的な理屈が映畫のうちに透徹つてゐるやうなところがありますね。三たび現はれ三たび消え、眞理は最後の勝利を占むと云つて、一時の情に負けて嘘を吐くなと云ふ全體の趣向は、近代劇や小說の中にはありさうなことで、いかにも西洋人の好きさうな理屈ですね」

「理屈に深みがあるし、指環が壁の中から出たり、漁夫の網にかつゝたりして、指環で筋が運ばれるのも面白いぢやありませんか。西洋人は思付がいゝんですね」

「そりや日本の講談なんかの趣向よりは巧い。……だけどあなた方はあんな活動や、イプセンの社會劇なぞを見て、眞實さへ云へば安心してゐられる氣になるんでせうか。……あの活動だつて、本當は、眞理が最後の勝利を占めたのぢやない、作者が眞理といふ世界の人氣者を持つて來て、お座興に勝たせるやうにしたのですね。……嘘と眞實だつて眞劍に取組せたら、どちらが勝つか分つたものぢやない」

「だけど、本で讀んでも、興業物で見ても、眞實が負けたでお仕舞ひになると、いゝ氣持はしないですからね。世の中の實際の事件についてもさういふ氣持がしますよ。あなたはさう思ひませんか」

「それはさうです……」

高山は、それから先きは、自分の智慧の行詰りで、考へたつて話したつて、果しがないので、さういふ茫漠たる疑ひ

の世界へ、尾越と一緒に進んで行く氣になれなかつた。

「空家は見つかりませんが、僕は明日あたりK市へ返らうかと思つてゐるんです。親類の婚禮に出席しなければなりませんから。……田舍の結婚式は舊弊でいやに仰々しいがあなたのお國の方だつてさうでせうね」

「私は田舍の結婚式にしみ〴〵出たことはないのですよ。姉の結婚の時には隨分大袈裟だつたやうですが、私は東京にゐて、身體の加減も少し惡い時だつたから出席しなかつたのです」

「あなたの御結婚の時には、此方で式をお擧げになつたのですか」と、高山は何の氣なしに訊ねたが、すると、尾越は苦しさうな顏をして、

「まあさうです」と、勢ひのない聲で答へた。そして、何か見てゐるやうに、上目を空間に据えてゐたが、やがて、

「私は當分あの家で獨り住ひをすることにしました」と云つて、その譯を高山が訊返すまでもなく、

「ワイフは私が福島へ歸つてゐる間に無斷で家出をして、行先を私に知らせないやうにしてゐたのです。いくら居所を晦ましたつて、略々見當はついてゐたのですが、出て行つたものを追掛ける氣にはなれませんから、私は打やつとくつもりにしたのです。今度故鄕へ歸るについちや、ワイフの事が問題になつてゐたのですが、——實はまだ正式に籍に入つてゐなかつたので——當人は私の兩親の許しを得る望みはないと堅く信じてゐたやうでした。それが家出の原因と云へば云へますので、遺書にもその點に重きを置いてゐるのですが、本當はさうぢやないのでせう。入籍するしないは我々の考へぢや第二第三の問題なのですからね。……一體私の方でも別れて、當分一人でゐた方が、自分のためにいゝんぢやないかと思つたこともたび〳〵あつたのでした。世間ぢや妻を娶ると生活に張合ひが出來て、仕事にも身が入ると云つてゐますが、私は例外な人間なのか、ワイフと一緒に住んでからは、生活の進路が止つてしまつたやうなのですよ。それ

で、獨りでゐたら、何か相當な職業が得られて人並に働けるだらうと思はれてならなかつたのでした。京橋の會社の口も、私が獨身だつたら、俸給は薄くつても取逃さないで勤めてゐたのでせうが、ワイフがゐたゝめに此方から駄目にしたのでした。故郷ぢや、はじめのうちは苦情を云つてゐましたが、この頃は默許の形で私たちが定職でも出來て眞面目に暮してゐたなら、早晩籍も入れて呉れるのでせうが、兩親に會つてその話をした時に 私の方でどうも熱心に頼む氣になれなかつたのです。當分アヤフヤにしといてもいゝつていふ氣で、ワイフに對する言譯を考へながら歸つて來たのですが、ワイフの奴、見透してゐるやうなのだから端書を見た時にはちよつと驚きましたよ。だけど、私の心ぢや、二三時間も立たぬうちに今後の方針が定つてしまつたから大丈夫だつたのです」

妻君が外に男をこしらへたのでもなければ、退屈醒ましに隱れんぼでもやつてるのだらうと思ひながら、高山はお座なりの受應へをして聞いてゐた。

「ワイフは、年末(くれ)にあなたがゐらつしやつた時にトランプの仲間になつてゐた女か、あるひはワイフの弟の家に多分隱れてるか、さうでなくつても、この二人は居所を知つてゐるに極つてると思つてゐましたが、私はわざとこの二人の所へは寄りつかないで、端書で訊合はすことさへ控へてゐたのです。無斷で出て行つた女を追驅けると思はれるのはいやですからね。……ところが、高山さん、聞いて下さい。妙なことがあるんですよ。あなたが年末(くれ)にお會ひになつたあの女が――石本さつと云つてワイフとは子供の時からの知合だつてことですが――あれが一昨日の午過ぎに、顏色を變へて不意に私んところへやつて來て、奥様は本當にお宅にゐらしやらないのですかと訊ねるのです。白ばくれてゐるんだらうと思つて、

あなたは家(うち)の奴のゐないことを誰れにお聞きゝになりました? と、私は荒つぽく訊返しました。

それであなたは奥様の今ゐらつしやる所を御存じなのですか。

知つてる筈もないし、强いて知りたいと思つてもゐません。

御存知ないんですつて？ よくそれで平氣でゐらつしやるのね。

あの女は呆れたやうに云つて、それから譯を話したのですが、ワイフは使に手紙を持たせてあの女の所へやつて、ある事情でかういふ所へ來て、今九死一生の場合なのだから、××圓くらゐの金を工面して屆けるやうにしてくれ、着換への衣服も何でもいゝから貸してくれつて賴んで來たと云ふのでした。九死一生と云つて何事が起つたのだらうと、私も吃驚しましたが、さう聞くと打遣つて置けませんから、あの女と相談して、必要な金と着物とを持つて、一緖に出掛けたのです、氣はあせつても大崎まで行くのだから途中が隨分手間取りました。大崎の家にワイフの掛り合ひがあることは、これまで聞いたことがないので、電車の中で二人していろ／＼に考へて見たのですが、新宿で乘換えを待つてる間に、あの女が不意に思ひついたやうに、これは自分だけ一先きへ行つて樣子を見た方がいゝと思はれるから、あなたは大崎の停車場か何處かで待つてゐてくれと、かう云ひだしたのです。九死一生といふ場合に安閑と待つてられる筈がないので、私は飽くまでも反對して、一しよに行くと言張つたのですが、

おくめさんは出拔けにあなたに來られちや、面目のない思ひをするかも知れませんよ。御主人のお留守に家を出たことを、今は良心が咎めてるでせうから、出拔けにあなたをお連れして脅かしたら、却つて穩かに事が濟まないだらうと、心配でなりません。ですから、私を信用なすつてお任せ下さいましな。おくめさんのためにもあなたのおためにも、決して惡いやうにはいたしませんと、あの女は、どうしても私を連れて行くまいとするのです。ワイフに後目たいことでもあるのなら、尙更早くその家へ行つて見なければ承知出來ない譯なのですが、

おや、直ぐに私があなたを迎へに來るか、使を寄越すかするから、十分か五分でも待つてゐてくれつて、ちつともいかにも當惑したやうな顏して云つて、先方の家の名も番地もハッキリ教へてくれましたので、私も散歩して、停車場で少しの間待つてゐることにしたのです。

ところが、十分立つても二十分立つてもあの女からの音信がない。三十分を過ぎると、私はもうぢつとしてゐられなくなつて、搜てゝその家を訪ねて行きました。番地が解りにくかつたので、大分手間取りましたが、家のあることは確かにあつたのです。宿屋でもなし料理屋でもなし、新築の普通の家でしたが、ひつそり閑として、人の聲は聞えないのです。入つて聲を掛けると、下女だか主婦だかハッキリしないやうな五十がらみの女が出て來ました。そして、私がかういふ女が今訪ねて來てる筈だから、その人に通じてくれと賴むと、さういふ方は先つき入らしつたけれど、お訪ねになる方が此家にゐらつしやらないので、家が間違つたのかも知れないから、外を搜して見ると仰有つてゐましたと、親切に教へてくれました。

私は仕樣事なしにまた停車場へ引返して、暫く待つてゐましたが、果てしがないので、三番町のあの女の家へ急いで行つて見たのですが、無論家へは歸つてゐませんでした。置手紙をして一先づ自分の家へ歸りましたが、どうも腑に落ちないので、悄氣てしまひました。があの女が詐僞をした譯ではあるまいが、一生にはじめて出くわした不思議な事なのですからね。私は手を組んで一心に考へて見ました」

尾越はこゝでちよつと話を切つて茶を飲んだ。話してゐるうちにも、胸に蟠まりのないやうな明るい顏をしてゐるので、高山は氣持よく聞くことが出來た。何よりも妻君の素性を詳しく聞きたかつたのであつたが、露骨にそれを訊ねるのは氣おくれがされたので、

「その石本何とかいふ女の人は、どういふ素性の人なのです？」と訊ねると、

「亭主は質屋の通ひ番頭ださうですが大した收入はなさゝうです。女の方は私のワイフなんかとはちがつて口數の少い落着いた女ですが、ワイフは誰れよりも懇意にしてるくせに、あんまりよく云つてはゐないのです。弄花が好きで、そのために方々へ不義理なことをしてるつて云つてたこともありました。……今度の事もさういふ勝負事に關係してあの女が、私から金を引出すために企んだのぢやないか、事によつたら、私の留守中にワイフまでも勝負事の仲間に捲込まれてゐるのぢやないかと、私も疑つて見ました。晩になつてあの女の家を訪ねて見ると、まだ歸つてゐない。いよ／＼私を騙したのにちがひないと思つて、復讎の手段を考へてゐたのですが、すると、昨日の夕方になつて、奧樣の居所をやうやく捜當てたから御安心なさい。それについてお話したいことがあるから私の家へ來てくれといふあの女の手紙が速達で來たのです。私は直ぐに仕度をして出掛けましたが、此處でいゝ氣になつて訪ねて行つたら、私はまた元の通りの生活を續けなければならんことになるだらうと、一生の別れ目のやうな氣がしましたから、道を變へて、他の方へ行つちやつたのです。停車場で待呆けを喰はされたかはりに、私は他所へ泊つて行衞を晦ましてゐるんです。先つきもある友人にこの話をすると、今時分妻君は君の家へ歸つて待つてるだらうつて、笑ひ事にするのですが、私は思切つて笑顔で歸つて行く氣にやなれないんです。……私は忍耐力のない人間なのでせうが、自分のワイフに、競馬馬扱ひされて、矢鱈に競走させられるやうにされちや溜りませんからね。いくら勝負事が好きだからつて、女つて者は自分の夫までも勝負の道具に使ひたいものですかね」

「あなたの奧さんはどうだか知りませんが、當世の女はみな負けん氣になつたんですね。今に我々は女のお差圖を受けて生きて行くやうになるんでせう」

高山は、世間の男女關係の常例から推して、尾越は今夜にでも妻君と妥協するだらうと堅く信じてゐて、彼れの强が**つてゐる一時の決心などには殆んど價値を置かなかつたが、妻君の家出や石本の企らみについては、尾越の打明話以外の隱れた眞相を知りたかつた。**

（六）

翌日、高山は前觸れはしないで、K市の青木家へ歸つて行つた。結婚式まではまだ數日の餘裕があつたが、家の人だ**ちは寸暇もないやうに忙しさうであつた。**

「東京では面白いことがありましたか」と、老主人に訊かれると、

「東京の宿屋へ泊ると、夜眠れなくつて困ります」と、高山は答へた。

「商人でも東京の人はやり口が烈しいですね。私なぞもたまに東京へ行つて見ると、勵みがついていゝやうです。しかし、この頃は店員がみな東京へ出たがるので、油斷がなりませんよ。先きへ行つてる者が、手紙を寄越して唆かしたり、たまに歸つて來ると、洒落れた服裝(なり)なんぞして見せびらかしに來るんだから仕末が惡い。東京へ行つたからつて、取つた給金は右から左へ消えて行くだけで、金を殘す者は、十人に一人もないのですが、若い者はみんな腹の中がうはついてゐるから、ちよつとしたうまい口にも直ぐに乘せられてしまうのですな」

「他所の子息の使ひにくいのは當り前でせう」

高山は人を使つて仕事をした經驗は殆んど無かつたので、空々しい返事をした。

「以前は十年の年季に五年のお禮奉公をするやうな者もあつて、店員が落着いて働いてくれましたが、これからはやり

れくなりますよ、商賣を止めて、小い家で内輪だけの生活をすりや、氣骨が折れなくて至極安穩に日が送れる譯ですが、何もしないで遊んで暮すといふのも、若い者のためによくないでせうかな」

「さあ。……何もしないで生きてるのも案外苦しいかも知れませんね。どつちにしてもいゝ事ばかりはないとすると、働けるだけ働いた方がいゝんでせうね」

高山は自分の身についてもふとさう思つた。自分が長い年月やつて來た仕事が、たとへ無意味の事であつたにしろ、手を拱いて茫然として生きてゐるよりは、働き得るかぎりは勢一杯働いた方が、まだしもましなのだと自から力をつけた。さう思ひついた時の彼れの氣持は、老主人の氣持とさして相違してゐなかつた。家財を讓るべき男子を持つてゐる老主人も、子供の無い彼も所有慾や世間慾に支配されて生命(いのち)を生きて行かうとするのに差別はなかつた。彼等の腦裡に差してゐる光や影は同じやうな色をして同じやうに動いてゐた。相手の話すことが互ひの耳によく順つた。

今日までに店を仕上げた苦心談や今日までに社會的地位を得た苦心談が、二人の口から出て、炬燵の側の一夕の話が榮えた。老主婦の見立てたお茶菓子が持込まれた。側で縫物をしてゐるまつ子も、世の家庭團欒の悅樂をこの晩にこそ感じてゐた。彼女の式服も間に合つてゐた。

まつ子は一日、良三や店員の助を借りて、預け物の整理をしたが、瀬戸物の食器が壞れてゐるのを見たり、桐の火鉢が紛失してゐるのに氣がついたりすると、住所不定の生活に氣を腐らせた。何時でも容易に運び出されるやうに荷造りをして、土藏の一隅へ積重ねてから、土藏の入口で埃を拂ひながら、良三と肩を並べて一休みした。狹い空地に置かれた石燈籠の側には、春らしい光が笑つてゐるやうに搖いでゐた。

「もう直きに櫻が咲くんだわね」まつ子は歸つてからも見たことのなかつた故郷の澄んだ青空を仰いで、「あなたは今

どんな氣持がしてゐて？」

「別に變つたこともないさ」

「だつて、あなたの一生の大切な時ぢやないの」

まつ子は揶揄つて見たい氣がしたが、十年前の自分の結婚前後の事を考へると、弟を揄揶ふ餘裕のないやうに、ある感じが胸に喰入つた。夫との關係や夫の身內との關係など、自分の十年の間に經驗させられて來たことが、棘をもつて一時に彼女の神經に觸つた。そして、男女の別はあつても、良三も今に知らないではゐられまいと、思はれた。

「お父さんはお嫁さんさへ來れば、家の中がいゝ事づくめになるやうに云つてゐるけれど、あなただつてこれから、痛い思ひをすることもあるわよ」

「そりや、何時までも獨身でゐる方が氣樂だらうね」良三は屋根の端で羽を光らせてゐる小鳥の輕快な運動に目を注いだ。

「あなたは責任が重いんだから、獨身でゐられるものかね。お父さんは家といふことばかり考へてるから、どの子供よりも相續者のあなたを重んじてるのだよ」

「家を大切にするのはいゝが、少しでも新奇なことをすると、危かしがつて御機嫌が惡いんだ。去年の暮れにも、×町の長家の井戸が壞れたから、この機會に水道を引いたら、借家人も喜ぶし、新奇に井戸を掘るよりや經費もずつと廉くて上ると云つたのだけど、昔から有つた井戸を潰すのは緣起が惡いと云つてお父さんは聞かないんだ。それで手數を掛けて掘直すと、いゝ水が溢れるほどに湧き出したものだから、お父さんいよ〳〵御自慢なのさ……萬事がさういふ風なのでね」

「しかし、商賣の方はいぢけてゐないで、勢一杯にやつて御覽よ。自分が見込をつけてはじめたことが失敗したつて、それは諦めがつくぢやないの」

「僕の家は不景氣の打擊は受けないからいゝやうなものゝ、商賣も傍で云ふほどにや儲らないものだよ。それに何だのかだのと出錢が多くつてね」

「さうだらうね。大所には大きな風が吹くつて云ふから」まつ子は戲談のやうに笑ひ〳〵云つたが、「でも、あなたは道樂をしないからいゝさ。今度の事には隨分無駄なお錢がかゝつてゐるやうだけれど、道樂をして使ふ人のことを思へば何でもないからね」

まつ子自身の昔は云ふまでもないのだが、良三の結婚までの身體も純潔に保たれてゐるのを、彼女は結構な事として考へた。……若い時は慌だしく過ぎてしまふ。良三も二十五歲の今までをこの鬱陶しい家の中で過してしまつた。……何が結構だか幸福だか分らないやうにも思はれた。

「あなたは丈夫だからいゝね。私はこれつぱかり身體を使つても、足腰が挫けるやうに疲れるのよ。昔はさうぢやなかつたのだけど、一度惡くなつた身體はどうしても元のやうにはならないものよ」

良三なぞに話したつて甲斐がないと思ひながら、ふと起きて來た體内の疼みを口に洩らした。それにつれて、自分と同年輩の近所の知人が病んでゐるといふ噂を思出して、病氣の經過を良三に訊ねてゐると、女のやうな聲をした男の唄が、塀越しに聞えて來た。「春は〳〵。春は花咲く向島。オール持つ手に花が散る。ヤートセー〳〵」

「どうしました？。荷物は片付きましたか」と、老主婦がニコ〳〵して寄つて來た。

「おちかさんの病氣はどうしても癒らないんですかねえ」と、まつ子が訊くと、

「寢てばかりゐるんだつて。暮々しく餘り日が見えないから、病人も癇が起るんだらうよ。若い人の長患ひは本當に氣の毒だよ」

「若い時を患つて暮らすのは因果ですよ。病氣なら激しくつても、癒るか癒らないか、早く極りがついた方がいゝのよ。嬲殺しにされるのはいやですからね」

母子が話をはじめた間に、良三は二人の間を通拔けて店の方へ行つた。

（七）

春雨が音のせぬほどに降つた晩、花嫁持參の品々が大勢の人夫によつて運込まれた。通りがゝりにふと立留つて傘を傾けて此方を見ては行過ぎる男女の樣子が、高山には面白く見られた。路傍に差してゐる潤んだ光の中に現はれて來る一人々々がこれ〲の目付を店の内へ注いでは、やがて闇の中へ消えた。

昔ながらの座敷の中に、簞笥や夜具戸棚や、いろ〲な調度が坐るところもないほどに收められて、新しい光を放つた。人夫をねぎらつてから、内輪の祝ひの酒宴が別席で開かれたが、一點の批難も打ちどころのない行屆いた仕度について、みんなの話が賑つた。價額の評價もされた。幾棹のかういふ簞笥の中へ收められてゐる衣類の美を盡してゐることも豫想されたが、かういふ品物によつて花嫁其者のねうちも數層の重みを加へたやうであつた。これぢや花嫁さんも家へ來て、家の中の汚らしいのに驚くかも知れないと、老主人は喜びのうちにも氣遣つたりした。

三十近い下女のおきくは、薄暗い臺所で店員の食事拵へなど、自分の受持の仕事にいそしみながらも、婚禮の話にはかねて耳を留めてゐたが、荷物が來てからは、彼女の神經も緊張した。簞笥や調度を覗き見して、驚いたり、平生は酒

の氣のないこの家に、毎日贅澤な料理の匂ひや酒の匂ひのするのに心を唆かされたりした。家の中に自然に漂つてゐる華やかな空氣は、臺所の片隅に蹲つてゐる彼女をも包むことを忘れなかつたのであつたが、彼女は店員よりも誰れよりも烈しい刺戟を受けてゐた。結婚といふものが、衣類や調度やさま〴〵な儀式に裝はれないで、「結婚その者」として、あるがまゝの正體を彼女の目前に鮮かに浮べてゐた。

「私だつて相手さへありや、まだ子供の一人や二人は生んで見せるよ」と、おきくは先日笑顔をして云つてゐたが、彼女は一度子供を生んだこともあるし、戸籍面でも認められてゐる夫と名のつく男をも有つてゐたのであつた。その男はノラクラして當り前の稼ぎをしない上に兇暴なところがあつたので、彼女自身もついに愛想を盡かして、屢々兩親の注意をも受けた揚句に、人を間に立てゝ、離別の話をつけたのであつた。別れてからは、農事をもすれば女中奉公をもした。何處でゞも働き者として通つて來た。夫と一緒にゐた間は、絶えず生活に苦しんでゐたが、獨り者になつてからは、立派に自分の口を糊した上に、兩親へも貢ぐことが出來た。「あの男にはもう會つちやならんぞ」と兩親に云はれるたびに「會ふものかな、恐ろしい」と答へてゐた。

口ばかりではなくつて、堅く決心して獨り稼ぎの氣樂さを喜んでゐたのだが、日に月に以前の苦しかつた記憶が薄らぐにつれて、懷かしい記憶のみが心の中に淀んで來た。ある時ある所で、ある店の若い人に戯談口を利いてゐると、戯に肩を叩かれたことがあつたが、それが何とも云へないいゝ氣持がした。もつと強くどやしてくれゝばいゝと思はれた。別れた夫にどやされた時には、もつと強い手答へがした。その夫にをり〴〵打れた時の、全身に響渡つた疼みが、今は怨み憎みの種になるどころか、戀しい懷しい思出になつてしまつた。

で、年末のある夜、風呂の歸りに、別れた夫に久振りで行會つた時にも、さして恐れなかつた。本氣ない素振りを

されないで、取合つて貰へるのが悦しかつた。そして、誘はれるまゝに木賃宿で一泊した。その後、外出の機會をつくつては二三度媾曳した。

おきくは周圍に渦卷いてゐる婚禮の潮に自分も浸されて、別れた夫の面影を頻りに思出してゐた。お金が殘つても人の家に奉公して人の家で寢起をしてゐるよりは、貧しい思ひをしても自分の家にあの夫と一しよに住んでゐた方がはるか仕合であるやうに思はれた。貧乏するといつても餓えるのでもないし凍えるのでもないのだもの、……

此方の思ひが先方へも通つたのか、別れた夫はふと店先へ姿を見せた。しかもそれが、結婚式の當日のことであつた。蓬頭垢面の男が、塵一つ留めてゐない土間へ泥下駄で入つて來るのを見ると、家の者は眉を顰めた。目出たい席へ不吉の影が差したやうであつた。

「おきくに會はせて下され。是非話さねばならん大事な用事があるんです」と、その男は頻りに首を垂れた。

「今日は忙しんだから困る」と、家の者は一度は斷はつたが、その男は動かなかつた。若し無理な拒絶をして、こんな男を怒らせて怨みを買つたら、今日の大事な日に傷のつくやうな不愉快なことが起らないとも限らないと、氣遣はれたので、とに角おきくに云つてその意志にまかせた。

おきくはニヤ〳〵笑ひながら、平然としてその男を自分の部屋へ連れて行つた。男は「お宅ぢや今夜目出たい式があるんだつてな。おら、此間の晩お嫁さんの荷が入るのを、電信柱の蔭に隱れて見とつた。豪勢なもんだな」と云つて、部屋の中に手足を伸した。

「私も忙しんだよ」

「だからセッセと働くがいゝや。おらあお前の邪魔をしに來たんぢやねえ。疲れたから一休みさせて貰ひさへすればいゝ

ゝんだ」

男はおきくが掛けてくれた夜具にくるまつて、いゝ氣持で眠りに就いた。おきくは臺所へ降りてセツセと働いたが、今までよりも仕事に張合ひがついて來た。そして、酒の殘りや肴の殘りを、寢てゐる男の枕許へ運んで行つた。家の者は混雜に取紛れて、その男のことは忘れてゐた。

女だちが化粧や着衣に手間取つてゐる間に、寄集つた親戚の男同士は、久振りで顏を合せたものもあるので、お互ひの近狀について賑かに話合つた。稼業がらで、經濟界の景氣不景氣や、金儲けのことが、何よりも興味のある問題になつてゐた。醫師の一人も、最近百日咳の注射藥の新發見をしたので、××製藥會社から廣く賣出すことにしたと云つて、その効果や莫大な年收の豫想の說明をした。

「この土地には、實業家が多いやうですが、學問や新發明をして有名になつた人はあまりないやうですね」と、富山が訊くと、

「この縣内には本當の實業家も少いんです。多いのは相場師と賭博者(ばくちうち)だけです」と、醫師は答へた。

前觸れによつて一同は店先へ列んで、兩親や親戚に護られて到着した花嫁を出迎へた。……下女部屋で殘肴冷酒に舌鼓を打つて、いゝ氣持で寢そべつてゐたかの男は、どよめいた家の樣子に耳を留めると、あたりが暗くなつて人もゐないのを幸に、障子の隙間から、顏を出して、狹長い土間の向うを見やつた。明るい光の中を、立派に着裝つた男女が、ごだ〳〵と入つて來てゐる。おきくも小奇麗なのに着替えて、片隅に立つて謹ましやかに出迎へてゐる。

「金持のすることはちがつたものだ。だけど、詰りは同じこつた」と呟いて、彼れはまたも安樂なごろ寢をした。

偕老同穴の堅めの盃や、兄弟親戚の盃事や、兩家の親戚引合せの式が型の如く運んだ後、自働車で新婚披露の式場へ

出掛けた時には、夜が可成り更けてゐた。

おきくは皆んなが出て行つたあとで、下女部屋へ入つて來た。

「お嫁さんは奇麗だつたらうな」と訊かれると、

「お前にも見せたかつたよ。だけど、花嫁さんは何處で見ても俯向いてゐるから變でねえかの」。

「お前だつてもおらと盃事した時にや俯向いとつたでねえか」

「空云ふでねえよ。」おきくは無邪氣な笑ひを洩して、「盃事といへば、今夜は何處かの女中さんが二人も三々九度のお酌をしに來てゐたよ」

「おらは手酌で頂戴した。……もうけへらざなるめいな。お蔭様で御馳走になつた」

（八）

披露の宴が首尾よく終つた時には、十二時が過ぎてゐた。高山夫妻は、まつ子の姉婿の注意でその家に一泊することになつた。離れの新しい座敷で絹夜具に包まれた。が、高山は夜更けての飲食のために胃腸を悩まされ、場馴れない窮屈な宴席で行儀を守つてゐたゝめに神經を疲らされてゐたので、快く眠られなかつた。まつ子も饗宴の席で絶え間なく受けてゐたいろ〳〵な印象や、青木家の今後の變化に關する想像などによつて刺戟されて、屢々熟睡を妨げられた。

彼岸は過ぎてゐたが山國の夜はまだ寒かつた。高山は屢々夜着を搔合せては腹匍ひになつて煙草を吸つた。氣を紛らす書物は傍にないのだから、雜念の虜になつてゐるより外はなかつた。平生稍々ともすると眠づらい夜を送つてゐる彼れには、今更珍らしいことではないが、深夜に連續して湧上る雜念ほど心を疲らせて、しかも何の役にも立たないもの

はなかつた。……何時どんな酷い病氣に罹るか、どんな酷い災難に會ふかして、苦しい死樣をするか分らないのだから、どうせ免れがたい死を偶然の運に任せきりにしてゐないで、自分の意志で、最も苦痛の尠い方法を採つて死を早めた方がいゝのぢやないか。人間の眞の幸福はつまりはこれ一つで、他の種々雜多な幸福は畢竟水の上の泡沫同樣なものではないかと、彼れは自分に取つての最大な眞理はそれであると思込むことがあつた。動脈を切つて滴る血汐を見ながら快く死に就いたといふ「クオ、ヴアヂス」の中のペトロニウスや、蝮に胸を吸はせて眠るが如くこの世を去つたといふクレオパトラの物語が思出された。さま／＼な自殺の方法が繪となり文字となつて闇中に浮んだ。……しかし、かういふ類の妄想や雜念は、明日の日になると、彼れの身に何等の效果をも與へないで、水上の泡沫同樣に消えてしまふのであつた。

「君は自殺の出來る人ぢやないよ」と、彼れは若い時分でさへ、ある友人に云はれたことがあつた。情熱が乏しくなつて理性に富んでゐる人には自殺は出來ないと云はれてゐた。

友人の許評の當否は兎に角、彼れは露國の文學に接觸しだしてから、情婦と心中したり主君のために切腹したりするやうな、彼自身の共鳴しがたいやうな自殺とは、根本の異つてゐる自殺がたまに書かれてゐるのを見て、大いに心を動かされた。……アルツイバーセフ（？）の「死」といふ短篇に書かれてゐる見習士官は、姑息な感情の支配を受けないで、理性のみによつて、自己の採るべき最良の方法は自殺であると確めて、その所説を實行した。

「しかし、小説の筋をそのまゝに信ずるのは間違つてゐるかも知れない。どんな作者だつて思付を誇張して書くやうだから」

彼れはたび／＼心を動かされた露國の文學からも、實際上の感化は受けることがなくつて今日に到つた。それ等の文

學は深夜の妄想雜念を助けるだけの力を彼れの上に揮ふに過ぎなかつた。

「今日歸つて見たら、様子がまるきり變つてゐるだらうな」と、高山は夜が明けてから云つた。

「私だちは明日のうちには立たなきやなりませんよ。お父さんもさうした方がいゝだらうつて云つてゐました。私だちに見られてゐちやお嫁さんが居づらいだらうからつて」と云つて、まつ子は今日からは自分の生れた家にも安んじて身を托する譯に行かなくなつたことを、痛切に感じた。

「東京へ行くと、差當り宿屋住ひをするんだが、厄介だな」

「普通の女で宿屋暮しなんかしてゐる人は滅多にないでせう」

「安い貸家でもあつたら買つて見るんだね」

先日、青木家と取引のある東京のある商店の店員が、芝に住みいゝ格安な貸家のあることをわざ〳〵知らせて呉れてゐるので、夫妻は東京へ行つたら、先づその家を見に行くことに話を極めた。

夫妻は家族と一しよに、炬燵の上でパンと牛乳の朝餐を饗ばれただけで、匆々に暇を告げた。青木家ではすでに朝の仕度を濟まして、珍らしく風呂も沸されてゐた。老主人や花嫁や、附添の老女などは、座敷に落着いて、茶器や菓子皿を前に於て、話してゐたが、老主婦のみは落着かぬ顔して、何となしに忙しさうにしてゐた。まつ子は昨日までのやうに、勝手にどの室へでも入る譯には行かなくなつたやうに思はれた。

老主人に招かれて、二人は座敷へ入つて話の中に加はつた。花嫁のたね子は、重くるしかつた昨夕の島田を崩して、輕快な束髪にしてゐた。その方がよく似合つた。

「昨夕は久振りでグツスリ眠りましたよ。これで重荷を卸して安心しました。花嫁さんとも、今朝家の氣風なんかを、

掛價なしにお話しゝたら、異存はない結構だといふことで、私は何よりも喜んでゐますよ。私の家も今までは殺風景でしたが、若い人が一人殖えたので、これからは陽氣になるでせう」老主人は、風呂の中で思出した古歌を例に引いて、寂しい庭の梅の木に來て留つた鶯を、花嫁に喩へたりして、自分の喜びを、高山夫婦にも配たうとした。

花嫁は愼みながらも、可成り快活に話をした。まつ子は明日の出立の準備をするために、奥の間へ入つて、荷造りには母の手や良三の手を借りた。

「明日はどうしても歸るの？。何だか急に追立てるやうでいけないねえ」と、母親は氣が濟まぬやうな顏をして囁いた。

明日の晩には、三ツ目とか云つて花嫁が實家へ歸つて泊つて來るのであるが、その時の慣例や親類廻りの方法などについて、みんなの意見が鬪はされた。花嫁も一つ所に坐つてゐるのは苦しかつたので、機會を見ては座を立つて、胸に溜つた欝氣を洩らした。濕つたものを乾かしに物干臺へ行つたまつ子の後を追つて、「姉さん」と、懐つこい聲を掛けたりした。まつ子ははじめてさう呼ばれたので、座敷の中で他所々々しい口を利いてゐた時とは違つた親しみを覺えて、「入らつしやいな」と招いた。そして、木蓮のはびこつてゐる隣家の中庭を見下したりしながら、打解けた話に耽つて笑ひ聲をも立てゝゐたが、その聲を聞きつけた附添の老女は、

「たね子樣、階下へゐらつしやいまし」と、階段の下から呼立てた。

島田は重くつて頭痛がするから、明日の里歸りには束髪に結つて行きたいと、花嫁は望んだが、老女は許さなかつた。明日の朝まつ子の出立の際には是非停車場まで見送つて行きたいといふ望みをも、老女は頑なに斥けた。花嫁さんは首尾よく里歸りを濟ますまでは一歩も外へ出るものではない。氣儘にさういふことをさせては、自分が側に隨いてゐ

る甲斐がないと云ふのであつた。

翌朝は雪がちらついてゐた。旅立には相應しい日ではなかつたが、高山夫妻は豫定通りに青木家に別れを告げた。何時ものやうに良三は停車場へ見送つて荷物の世話などをした。

汽車が出ると、高山は、平穏無事で終始した他家の婚禮の事などは念頭から遠ざけて、今後の自分の方針を考へたり窓外の雪景色を眺めたりした。隧道を潜るにつれて雪は薄くなつて、武藏の平野へ下つた時には、柔かい光があまねく照つてゐた。吉祥寺中野あたりに、粗雜な家が建ちかゝつてゐるのが、住宅のない彼等の目を惹いた。

（九）

芝の實家は早速見ることは見たが、問題にするに足らなかつた。彼等は、駿河臺の旅館から赤坂の宿へ、部屋は薄汚くつてゝ閑靜なのを取得にして移轉した。そして、四五日は市中の見物がてら、貸家を捜したり賣家の檢分をしたり、建築會社を訪ねたりした。面倒な思ひまでして家を持つには及ばないといふ腹があるので、住宅を求めるに熱心が足らなかつた。折角知人が知らせて呉れた二三の家をも、缺點を見つけては斥けた。まつ子にしても、汚い小さな不便な家を無理に求めてまで、東京住ひをする必要はないと考へるやうになつてゐた。

「あなたも洋行なさるのなら今のうちですね。あんまり歳を取過ぎたら行けなくなるでせう」と、ある日、思詰めたやうに云つた。

「そりや行つてもいゝ。日本の內地を見て歩くよりや異つてゝいゝに違ひない」

高山はかねてボンヤリ心に描いてゐたことを眞面目に考へた。しかし、それにも煩しさばかりが目先にちらついて熱

心が加はつて來なかつた。歐洲人をも歐米の文化をも今は崇拜して居ない彼れは、長い航海の苦痛を凌ぎ、言語の不自由を忍び、外人に媚び外人の生活と妥協するの累らひに耐へることを、想像してゐると、自から決心がひるんだ。歐米人に對等に親しく交合つて貰つたことを、この上もない光榮のやうに感じて、お茶に褒ばれたの、どういふ話があつたのと、自分が日本人以上になつたやうに傲りがに書いてゐる洋行者の記事文を讀むたびに、無自覺の標本のやうに感じてゐた彼れは、自分も洋行したら、あんな風になるのぢやないかと思ふと、可笑しかつた。

「自分が外國へ行つたからつて、えらくなる譯ぢやないが、異つた景色や異つた生活を見るのは面白いだらう。巴里や倫敦でなくつても、知らない土地なら何處だつていゝのだよ。おれは輕便に行ける方法があればペルシヤか土耳古見たいな所へ行つて見たい。それも、一年とか二年とか云ふのでなしに、ゐられさへすりや一生でも住通す氣で行つて見たい」と、彼れはまつ子に向つて述懷した。

まつ子は高山の空想が若しも實現される場合には、自分の身の振り方をどうつけていゝかと迷つて、日夜思煩ひだした。弟が結婚した後の實家へは最早安んじて身を寄せる譯に行かなかつた。女一人で東京の下宿屋に住む譯には行かなかつた。高山の故鄕へも自分一人だけでは手賴つて行かれなかつた。東京で知人の家に寄寓するとしても、相應しい家ひが思當らなかつた。

宿の近くの山王臺の櫻が咲きかけた。K市の家族は花時には、用事をかねて東京へ遊びに來るのを毎年の例としてゐるのだが、今年はどうだらうと、まつ子は結婚後の實家の樣子を知りたさに、誰れかゞ出て來るのを心待ちにして、誘の手紙を出したが、それと行違ひに、老主人から高山へ宛てた端書が屆いた。

「……御出立後拙宅にも種々の事あり候へども、ゆる〳〵晉後策を講じ居候」と、簡單に書かれてゐるのを見た高山は

ふと心に浮んだことがあつたが、不吉な憶測をするのを躊躇して、

「下女がゐなくなりでもしたのぢやないかな」と輕く見做した。そんなことぐらゐだらうと、まつ子も思つてゐた。

ところが、その次の郵便で、良三からまつ子に宛てた手紙が屆いたが、何氣なくそれを讀みかけたまつ子は、中途からおびえた顏して、一字一句を穴のあくほど見詰めた。

「お嫁さんは三ツ目に里歸りをしたつきり戻つて來ないんですつて」と云つて、重苦しい息を吐いた。

「どういふ譯で、……」高山は、緣談のはじまつてからの長い間の老主人の容易ならぬ心遣ひや、結婚前後の煩瑣な動搖を、親しく耳目に觸れてゐるために、世間に有りがちのことゝして見過すことが出來なかつた。

「理由がハツキリ分らないから困ると、手紙に書いてあるのです。里歸りの晩には兩親も招かれて、大變御馳走になつて、田村家の内輪の人もみんな揃つて打解けて話をして來たのに、そのあくる朝になつて、たね子さんが頭痛がすると云つて、寢たつきりで、人に口も利かなくなつたのださうです。一日二日と歸りが延びるので、先方の心が分らないから、お父さんも行くし、良三も樣子を見に行つたのだけれど、良三にもお嫁さんを會はさないんですつて。……多分駄目らしいつて良三が書いて來てゐますよ」

「家で可愛がられ過ぎてゐた女が、急に境遇が變つたので神經を痛めたのだらう。おみき（高山の妹）のやうな女でさへ、結婚したあくる朝、家へ驅込んで來て、上へ上らないうちから、聲を出して泣いて、一日寢てゐたぢやないか。處女から人の妻になるのは、一生の大事件なんだらうからね。……多分そのうちには收まるだらう。先方の親だつて、あんな立派な仕度をして寄越したものを輕卒に引取るつてことはあるまい」

高山は女の心の底を察してゐるやうに云つた。可憐な處女の心が年を取るにつれて次第に太々しくなることにまで思

ひを進めた。

「だけど、お父さんはどんなに心配してゐるでせう。何よりも先きに世間體を氣にしてゐる人が、世間體の悪い目に會つたのですもの。良三だつて、この結果が圓く行かなかつたら、人間が變つてしまひますよ」

今度の結婚は世間の注意を惹いてゐたために却つて仕末が悪いと、二人は話合つてゐた。

引續いて葉書や手紙で情報が來た。どれも良三からまつ子に宛てたものばかりであつた。良三が例になく興奮して筆を執つた有様が文字の上に現はれてゐた。事件の經過は、高山が樂觀してゐるやうなものではないらしかつた。

「仲人を煩はしても要領を得ない。……當人は以前から病氣してゐるので、從來靜養をつとめてゐたのだが、結婚のためにまた氣分が惡くなつたやうだから、今後引續いて養生をさせたいと云つてゐる。……云ふことに腑に落ちない點があるから、此方から押して訪ねて行くと、先方の父親は、お宅へは申譯がないと云つて兩眼に涙をためてゐる。……結果は覺悟してゐるが、考へてゐると頭が痛んで來てならぬ。往來の人が變な日付で店の方を覗いて通るので、帳場へ坐つてゐると、曝し物になつてゐるやうだ」

二人は良三の手紙の文句を種にして布衍して、青木家の昨今の鬱陶しい狀態を互ひの心に描いてゐた。まつ子は慰めの手紙をなが〳〵と書いて良三へ贈つた。

「あまり立入過ぎたことは書かない方がいゝぜ。かういふ問題で迂濶に差出たことを云ふと、後で怨まれることがないとも限らないから……男女關係になると、兄弟にだつて遠慮のない意見なぞしない方がいゝよ」と、高山は注意した。

他に心を許して交つてゐる人のないまつ子は、良三とだけは何時までも、親しみを續けて、何か事があつた時には力になつて貰つた方がいゝと、高山は彼女のために思つてゐたのであつた。

「私が行つてお嫁さんに會つて、よく事情を訊いたらどうでせう。女同士だから、こちらの出樣によつちや、案外打解けた話をするかも知れませんよ」

まつ子は手紙の遣取りだけでは、痒いところへ手の屆かぬやうな牴牾しさを感じてゐた。そこへ、季節の變り目で、衣類を取りに行く必要もあつたので、急に思ひ立つてK市へ出掛けることにした。

高山は電車の停車場まで一緒に行つた。まつ子に別れた後で、赤阪見附から三宅坂あたりまで散歩して、滿開の櫻を見て、宿の方へ歸りかけたが、ふと、見附の側で、橋田といふ知人に會つた。橋田は高山の故郷の隣村の生れで、時々來訪してゐたので、高山の住宅についても氣をつけてゐたのであつた。

「今お訪ねしたのですよ。お家はまだ極らないのですか。……瀧の川に賣地があるんですが、一度見にお出でになりませんか。××建築會社の所有(もの)で、建築も便利な方法で引受けることになつてゐるのです」と云つて、橋田はポツケツトから圖面を出して說明した。

高山は氣乘りがしなかつたが、暇な折だつたから、遊びのつもりで見に行くことにして、橋田が案内に立つた。途中で故郷の話が互ひの口から出た。

「さういへば、此間故郷(くに)へ歸つた時に、私を乘せた車夫があなたの噂をしてゐました。あのくらゐな人物になつても、東京で生活(くらし)を立てるのは六ケ敷いと見えて、毎月お家(うち)から仕送りをしてゐるんだと云つてゐましたよ。まさか、さうぢやあるまいと私は云つときましたが、本當ですか」と、橋田は訊ねた。

「それは無根の事でもないよ。仕送りで生きてるつていふ譯ではないがね」と、高山は立入つた話は避けて、「昔僕の名前が出掛つた時分には、僕が月々二百圓づゝ故郷(くに)へ送つてゐるといふ噂があつたさうだよ。……この頃は僕の信用に

鄕の方ぢや形無しだらう」

「私も今度は、死んだ親爺の跡始末をして、持物は一切競賣にして來ましたが、これで私にはもう故鄕といふ者がなくなつたやうなものです」

「せい〱していゝだらう。氣樂に喰へる道さへありや、君のやうな一人ぽつちの寺住ひがいゝのかも知れないね」

「しかし三度々々辨當飯を喰つて生きてるのはあき〱しますよ」と云つて、橋田はふと思出したやうに、「財產が殖ゑれば殖ゑるで、それだけでは滿足出來ないと見えて、星野の銀助さんが東京へ學問しに來てるさうです」

「へえ、今から學問しようと云ふのかね」高山は奇異な感じに打たれた。星野は小學時代の彼れの同級生で、首席を占めた時が多かつた。さして學才があつたのでも學問が好きなのでもなく、一番になりたいために全力を盡くしてゐたので、一度その地位から落ちた時には、興奮して、首席の男を目の敵にしてゐた。小學卒業後間もなく結婚して、利殖の途に進んで、浮沈の多かつた數十年を過して、最近では早くから買占めてゐた朝鮮の土地の價格が暴騰したゝめに、百萬長者になつたと噂されてゐる。

「神田の法律學校へ入つてゐるんださうですが、住所は秘密にして、知人には誰れにも會はないんださうです」、

「金が出來たから、代議士にでもなりたくなつたんぢやないかね。今の政黨は頻りに地方の金持を誘惑してゐるらしいから」

「さあ。……しかし銀助さんは甘い口にうつかり乘りさうな人ぢやありませんからね。……朝鮮なぞで土地を持つてると、いろんな面倒な法律問題が起つて來るらしいから、辯護士まかせにしとくのが不安心なので、自分で法律を心得て置かうと思つたのぢやないでせうか」

「成程、星野の性分から見て、あるひはさうかも知れないね。財産家になると、氣骨が折れるものだね」

二人は駒込橋で降りて、程近いところにある賣地を見た。二三軒新築が落成しかけてゐた。地所の賣買などにはまるで經驗のない高山は、ところどころに杭を打つて區切つてある地面を見てゐると、こんな土地に莫大な價格があるといふのが不思議でならなかつた。そして、其處に居合せてゐた肥滿した會社員が、鼻聲でこの地所の價値の說明をするのを、空々しい受答へをして聞流してゐた。

「偶然の力で人間は左右されるんだね。僕の故鄕の家に、茶園や貸小屋や物干場なんかを合せると、持つてる地所が隨分廣い。邊鄙な土地だから、地代なんか無代價同樣らしいが、あれくらいな地面を都會の近くに持つてゐたら、莫大なものだね。僕の親爺に手腕がなくつて、ここの土地の地主が理財の手腕の傑れてゐた譯ぢやない。偶然なんだよ」と云つて、彼れは莫大な價値を持つてゐるといふ空地の彼方此方を踏んで見た。

（十）

高山は橋田に別れて、獨りで上野へ出た。埃の立たない靜かな日だつたので、公園の花を見て、それから馴染の深い江戸川の花を久振りで見に行つた。電車が敷設されてからは其處は蕪雜な騷々しい所となつてゐた。

次手だつたから、中坂の尾越の家へ寄つて見たが、尾越は不在であつた。下女に向つて、奥樣はゐるのかと訊ねると、

「ゐらつしやいません。旦那樣お一人です」と下女は答へた。

「旦那樣は毎日お勤めにでも行つてゐるのですか」

「いかゞですか。毎日外へお出掛けにはなりますけれど」

高山は自分の今の住所を書置いた。尾越の妻君が今まで歸つて來てゐないことが、彼れには不思議であつた。女の方で、尾越のやうな資產家の子息と輕々しく緣を切る筈はないだらうし、男の方でも、あのくらゐな容色のいゝ女とたやすく離別しよう筈はないと思はれてゐた。

彼れは銀座へ出て食事をして宿へ歸つたが、朝から働き通しに働いてゐたゝめ、足が邪魔になるほどに疲れてゐた。身體が孱弱であるとはいへ、まだ五官が人並の役目をしてゐて、手足も自由に動いて、自分の始末は自分でして出來ないことがないのだからいゝやうなものゝ、もう幾年かしたら人手を煩はさなければ生きてゐられなくなるであらうが、われも人の如く、壽命するまでも餘生を貪つてゐる外はないのかと思ふと、心底に捕捉しがたい不安が感ぜられた。

彼れは自分で寢床を延べて、疲れてゐる足を伸した。

が、まだ本當の眠りに落ちないでゐるところへ、電話が掛つて來たので、寢衣のまゝで出て行つた。掛けたのは尾越で、近日下宿へ移轉する筈だから、お望みなら家を讓つてもいゝと云ふのであつた。

高山は即答しかねた。一兩日中に御返事すると答へて置いて、「相變らずおひとりなのですか」と訊くと、

「えゝさうです。ちよつと面倒なこともありましたが、當分一人でゐることにしました。元の下宿暮しが私にはいゝやうですよ。四五日前から鍛治橋の側の××會社へ出勤してゐるんです」と、尾越は快活な音聲で答へた。

その音聲は、斷じて胸に惱みをもつてゐる人の聲ではなかつた。歳が若くつて氣象も大人しさうなのに、あの奇麗な妻君に未練を殘さないで離れることが出來たのかと、高山はいゝ氣持がした。人といふ人の殆んどすべてが（高山自身もあるひはその一人として）何事につけても執念臭いのを常としてゐる世の中に愛人との離別をさへ雜作なくやつてゐ

る人が假りにも存在してゐると思ふのはいゝ氣持であつた。

一日花見をしたゞけで、翌朝からは、當分部屋に閉籠つて、机に向ふことにした。世人を喜ばせるやうな材料をも手腕をも持つてゐない彼れも、十數年筆の上の修練を積んで來てゐるために、書きかければ何とか線索を合せて相當な物が書けないことはなかつたが、心と筆とピツタリ合つたものゝ書けたことは、これまでに殆んど一度もなかつたと云つていゝ。そして、自分の技術の不足も感ぜられたが、それよりも、文字によつて自分の心が存分に現はされるものであらうかと疑はれることが多かつた。

「あなたがもつと〱眞實のことをお書きになると、お作が面白く拜見出來るんですがね」と、批評家でない老夫人にある時云はれると、

「眞實の事を大切にするのなら、書かないのが一番いゝのかも知れません」と、彼れは答へた。

虛僞か眞實か、彼れは三四日の間、机の前に坐つて筆にのみ親しんで暮した。そして、住宅の事は忘れたやうに、尾越に對する返事さへ出さないでゐたが、すると、頭腦の倦怠した日暮頃に、ふと尾越の來訪に接した。部屋へ入つて來ると、尾越はあたりの穢るしくつて陰氣なのに驚いたやうであつた。高山は仕立卸しらしい新しい背廣を着けた珍らし尾越の洋服姿に、意味ありげな目を注ぎながら、

「この頃は家内がゐませんから、まだ御返事をしなかつたのです」と言譯した。

「かういふ所でよく御勉强が出來ますね」と云つて、尾越は珍らしい物を見付けたやうに、机の上の書き物に目を注いだ。

「僕の仕事は何處にゐたつて捗取らないのですが、あなたの方はどうです？」

「二三日前から受持が極つて、正式に出勤してゐるんですが、生活が規則的になつて身體のためにもいゝやうです」

「さうでせうね。僕なぞもある時間から時間までの間を、いやでも働かなければならんやうにした方が却つて自分のためにいゝのぢやないかと思ふこともありますよ」と云つて高山は會社の仕事の有様をも訊ねて、「それで、あの石本とかいふ人の事はどうなりました？。いけない魂膽があつたのですか」

「大した企らみはなかつたのでせう。あの金はちやんとワイフの手に渡つてるんですから」と云つて、尾越はあの話の續きを話すのが義務であるやうに話しだしたが、言葉に熱心は添はなかつた。

「あれから石本に會ひましたが、あの女は笑ひ事で濟まして、ワイフを私の家へ收めて元の通りしようと極めてかゝつてるんです。亭主の留守に勝手に遊び歩くくらゐは、私だちのこれまでの生活から云へば何でもないことなので、書置きまでして出たのも、一時の氣紛れに過ぎないと云へば云はれるので、私も世間の習慣を楯に取つて、いきり立つて爭ふ氣はなくなつてゐたのですが、この先何時までも彼奴と一しよにゐるのぢや、私の精神が死んでしまひさうに思はれましたから、今が天の與へた時機だと思つて頑張つて見たのですよ。無論私がいくら頑張つて見たつても、ワイフがヅカ／＼歸つて來ようなら、私が負けてへこ垂れてしまふでせうが、彼奴意地つ張りな上に、私を離れたつて廢れ者になる女ぢやないですから、石本の手を經て私に拘つて來るばかりで、直接に私に打突かつて來ないから、私も助かつてゐるんです。ワイフには親戚が二三人東京にあるんですが、そんな所へは寄りつかないで、石本の家に同居してるやうです。……特別に憎み合ふ事情があつた譯ぢやないから、會社の歸り途なんかには、ふつと會つて見ようかつて氣になることがありますが、見てゐて下さい。私がワイフに會つて愚圖々々で一しよになるやうだつたら、私といふ人間はそれでもうおしまひなのですから」

「だけど、一度妻君を持つたことのある男が、獨身で下宿住ひなんかしてゐられるものでせうか」

「私は女が嫌ひになつて、一生女を絶たうと思つてるんぢやありませんよ。……それに、私のことだから、外の女にでも關係すると、ぢきにまた捲込まれるかも知れないんですがね」

臆面のない尾越の言葉に、高山は不快な反感を起した。妻君の素性の卑しくないことや怜悧なことや、遊び事にかけても敏捷なことなどを、尾越は平然と話してゐたが、やがて「御飯前へなら、晩餐を突合つて下さいませんか。この頃は晩餐は大抵友人と一しよに食べることにしてゐるんです」と云つて、高山を誘ひ出した。

尾越は有名な飲食店の所在を可成りよく知つてゐた。そして、一二度來たことがあるといつて、お座敷天ぷらの出來る山王下のある家へ入つて行つた。料理の支度の出來る間に電話で、ある友人を呼び出して、明晩の會食の約束をした。

（十一）

まつ子が、宿屋では思ふやうに出來ない汚れ物の洗濯をしたり、差迫つて入用な衣服を取出したりして、K市から歸つて來た時には、高山の取掛つてゐた机上の小さな仕事が終りに近づいてゐた。

「もう一日か二日でこれが片付くんだから、それまでは面倒な話は聞かないことにしよう」と云つて、彼れは筆の運びの妨げられるのを恐れた。神經の少しの動搖でも直ぐに筆の上に影響して、書きかけた物を引裂いたり反古にしたりすることが、たび〳〵あつたが、彼れのさういふ癖がまつ子には可笑しかつた。そして、時々は、裂かれた物を貼合せたり、捨てられた物を拾集めたりして机の上に載せておくこともあつた。そんな廢物も何時か高山の手で利用された。

「私も汽車で疲れて、話をするのも大儀だわ」と云つて、まつ子は横になつて休息したが、こんないゝ季節に、埃つぽい宿で徒らに日を過してゐるのが、腹立たしいほど詰らなく思はれた。

「あなたが早く方針を極めなければ、私の方針も極りませんよ」まつ子は焦燥の感じに堪へられなくつて口走つた。今度見て來た實家の内情よりも、自分だちの境涯が一層痛切に胸に迫つて來たのであつた。

「まあ、も少し待つてろ」

高山は、今の仕事が終りさへしたら、自分だちの身の處分について、いゝ考へが浮んで來さうに思はれてゐた。（自分が工夫して書いてゐる拵へ事から、却つて反射的に刺戟を受けて、鈍つてゐる心が磨かれて、自分の實生活についてもいゝ分別が出て來さうに思はれてゐた）

いよ／＼筆を擱いて一息吐く間もなく、意外にも青木家の老主人が訪ねて來た。顔や態度には心の屈托が少しも現はれてゐなかつたので、高山もさして、いた／＼しい思ひをしないで、その後の經過を訊ねることが出來た。

「とに角親類廻りだけはさせて、祝つて呉れた家へ、返禮をすましましたから一安心です。身體が惡いと云ふのだから、先方の氣儘にさせて、當分養生をさせることにして置きました」と、老主人は答へた。

「しかし、急に身體が惡くなつたていふのも變ですね」

「私の方でも、はじめのうちは先方の仕打がいかにも誠意がないと思つてゐましたが、先方の兩親の腹が多少分つて見ると、強いことは云へなくなりますよ」

機嫌よく實家へ行つた花嫁が、歸つて來るべき時に歸つて來ないので青木家の人々は寢耳に水のやうに驚いた。口ではあゝ云つてゐたもゝの、家の中が穢るしくて舊式なのが、若い女の氣に入らなかつたのであらうと、老主人はかねて

氣遣つてゐたことを思寄せて獨り極めにした。仲人が先方の意を通じて來るのも空々しかつたし、譯を糺しに良三を先方へやつても、當人には會はれなかつた。花嫁持參の華美な調度を絶えず見せつけられながら、親子で善後の方法を講じてゐるのは苦しかつたが、何かにつけて出入する親戚や知人に返答のしようのないのが尚更苦しかつた。老主人はかつて經驗しなかつた世間の狹い思ひに惱まされなければならなかつた。

「いつそ、道具を一切送返した方が奇麗サツパリになつていゝかも知れないのだが」と、老主人は歎息してその氣になつたが、此處まで運んで來た結婚の道筋や、そのために消費した勞力や金の事を考へると、纒められるものなら平穩に收めたかつた。

「どうせいけないのなら、早く見切をつけた方がいゝぢやありませんか。長引かすだけ此方が馬鹿を見るんですからね」と、親戚の一人で冷靜な差出口を利くものもあつた。

鬱陶しい日が何日か續いた後、先方の父親が訪ねて來た時には、老主人もわれ知らず、昂奮した。

「あなたの仰有ることには誠意がない。仲人からいろ／＼承つてはゐますが、どれがあなたの本心やら分らないのだから困るぢやありませんか。お預りしてる物を何時お引取りになつてもいゝやうに、私の方では覺悟はして居ります」

「誠意がないとお腹立ちになつても、私の方では一言も御座いません。自分の注意が行屆かなかつたことをお詫びする外はないのですが」と云つて、田村の老人は目を伏せたが、一二滴の雫が膝の上に落ちた。「しかし、青木さん、私は一人の娘を戯談に結婚させたのぢやないですから、私の心もお察しを願ひたい。長い目で見てゐて下されば分りになることですが、此方との御縁に不平のあらう筈がないぢやありませんか」

「それでどうなさるおつもりなんです」老主人は相手の涙を見ると、强いことは云はれなかつた。

「何しろ身體が弱いのですから、閑靜な所へやつてみつしり養生させたいと思つてゐますのです。子供の持つてゐる壽命を見すく縮めさせるのは、私も親として忍ばれませんので、申上げにくいことも申上げる次第なのです。世間體の惡いことも萬々承知しては居りますが、子供の壽命には替へられません」

田村の老人は、一二年前からの娘の健康狀態について話して、そのために此方との緣談を喜びながらも延ばしくして來たことを打明けた。

さう云はれて見ると、老主人は誰れを相手に爭ふことも憤ることも出來なかつた。せめて重なる家へだけでも花嫁に顏出しゝて貰つて、あとは向うまかせにする外に、執るべき手段はなかつた。

老主人の話振が概括的なので、高山はこまかい陰影を知ることは出來なかつた。かういふ場合の處置について意見を訊かれても、確信のある返答をすることが出來なかつた。

老主人が用足しに出てゐる間に、まつ子は高山に向つて、

「私が行つてる時に、たね子さんは一度お父さんに連れられて話しに來ましたよ。その時良三に、お腹の中をよく打明けて話したのでせう。……そのまゝ落着くのかと思つたら、お父さんが急立てゝ連れて歸つたんですがね。金紗に櫻の花を散らした衣服を着て帶を高々と結んだ花嫁さんが、店員が差掛けた薄綠の派手な模様のついた雨傘を持つて店先を出て行つた時には、誰れの目にも奇麗な花嫁さんに見えましたよ。良三には倘更さう思はれたのにちがひありませんよ……だからこれからはお父さんの一存では行けなくなるでせう。良三も此間までの良三とは違ひますからね」

まつ子は田村の老人のやうな父親を有つた花嫁の心强さに思及んで、「世間體よりも娘の生命を大事にするんですもの」と、ある感じを籠めて云つた。

その夜、高山は老主人を誘つて、有樂座の名人會へ出掛けた。寺子屋を語つた呂昇の聲はまだ昔ながらの艶を有つてゐた。演藝には多少の興味をもつてゐる老人は、久振りで聽く名手の音曲に感歎しながらも、此間うちの心勞が出て來たやうに、屢々目を閉ぢては假睡の寢息を洩らした。一仕事終つた後で心の弛んでゐる高山も、呂昇の聲に誘はれて、をり〳〵首を垂れては昏睡の夢心地になりかけた。淨瑠璃の中の喜怒哀樂の聲々が、遠い浮世の騷ぎのやうに幽かに彼れの耳に響いた。そして、

"Anywhere, anywhere, out of the world" といつた誰れかの聲が、彼れの力のない心の底で聞かれた。

いろはおくりの半ば頃にふと目を見開いた二人は、座を立つて歸りを急いだが、その夜は、古人が美くしと見た朧月が春の都會の空を照らしてゐた。

宿へ歸へつて、狹い部屋に三人が枕を並べて寢床に就く前に、

「私の家も當分二階がみんな空いて居りますから、御都合で何時でもいらつしやい」と、老主人は云つた。



四月盡

久保田萬太郎

宇兵衛。　お伊勢の父。　（六十一二）
おつね。　同　母。　（五十五六）
お伊勢。　近江屋の妾。　（三十一二）
おえい。　お伊勢の妹。　（二十三四）
新　一。　近江屋の息子。　（八つか九つ）
正太郎。　おえいのところへ出入る近所のもの。（二十七八）
お　久。　髪結。　（四十一二）

（淺草廣小路の附近。——大通りとは稍離れた新みち。）

其の一

宇兵衛の住居。
四月の末の曇つた午後。——おえいの仕事をしてゐるそば

で、新一が、正太郎を相手に行軍將棋をして遊んでゐる。

間。

正太郎　さあ。(考へて)——そんなら、一つ、かうしてやれ。(駒を動かす。)

新　一　(無言。——駒を動かす。)

正太郎　此奴、逃げたな。——逃げたら、よし。——そんな逃げるやうな奴には構はないで、此奴に、一つ、衝突つてやれ。(駒を動かす。)

新　一　(おえいに)姉さん、みて。

おえい　(針の手を、そのまゝ、盤のうへを覗くやうにして、兩方の駒をみくらべる。——微笑、手を出して正太郎の駒を盤のうへから除く。)

正太郎　(思はず)失策つた、引つかゝつたか。

おえい　(微笑)間者よ。

正太郎　(うなるやうに)さうか。——さういふ手があつたのか。(盤のうへをみ据える。)

おえい　あんまり深入をしたから。

正太郎　いゝえ、此方の量見ぢや、間者は疾うにもうゐないものと思つてゐたんだ。——まんまと敵の術中に陷つた奴さ。

新　一　小父さん、やつていゝ?

正太郎　駄目〱。——大將を取られちやア、もう、此方は手も足も出ない。——綺麗にもう負けたよ。——この始末

だもの。(盤のうへに残つた駒を崩してみせる。)

新一　何が強いの？

正太郎　中佐が一枚あるつきり、あとは、少尉に、騎兵に、工兵に、地雷だけだ。」

おえい　新ちやんの方は？――(みて)大將もゐれば、まだ、少將もゐるわ。

正太郎　それだもの。――歯の立ちつこがない。

新一　もう止す？

正太郎　もう止さう。――とても今日は駄目だ……――三番立投だ。(何といふこともなくおえいのはうをみて笑ふ。――おえいもそれに應へてわらふ。)

新一、駒を箱のなかに入れる。

正太郎(思ひ出したやうに)何時だらうね、もう。

おえい　まだ二時ぐらゐなものでせう。

正太郎　そんな事たらうね。(いひながら、うしろの、柱にかゝつてゐる時計のはうに身體を捻ぢ向けて)戯談ぢやアない、三時だよ。

おえい　三時？(おなじく時計のはうをみて)まア、ほんたうだ。

正太郎　當つて、今日は、世間がしづかなもんだから、時間の經つのがちつとも分らない。

おえい　全くね。――もう少しで、お父つあんに、粉藥を飲ませはぐるところだつたわ。(針を針さしにさす。)

正太郎　今日は(奥のはうへ思入をして)どんな工合？

おえい　相變らず。――たゞ、この二三日、何だか知らないけれど、うと〳〵眠つてばかりゐるの。（正太郎の顏をみる。――憂惧なやうに。）

正太郎　矢つ張、心がつかれてゐるんだね。

おえい（しみ〴〵と）無理をしましたものね。――幾ら、おつ母さんやあたしが心配しても、なアに大丈夫だ、見世へ行つて動いてゐれば何の事もない。――さういつて、みす〳〵太儀なのが分つてゐるのに、お醫者へも行かなければ、藥も飲まないで。――強情を張つてゐたんですもの。

正太郎　惡い顏のいろをしてゐると思つたよ。

おえい　さうでせう。――お見世でも、お帳場さんたちが見兼ねて、休んで、少し、養生をしたらといつてくれたんですよ。――でも、矢つ張いふことを聽かないで、毎日――それも、朝、何もさうしなくてもいゝとになつてゐるのを、頑にかけて、外の人と同じやうに、時間通りに出て行くんですもの。

正太郎（無言。――うなづく。）

おえい　お父つさんにすると、姉さんのことがあるだけに。――姉さんの身内だからと、何かにつけていはれるのが厭なんでせう。――それは、あたしにしても厭だけれど。

正太郎　遠慮深い寄合だからね。（半ば感心するやうに、半ば救ひ難いのを嘆ずるやうに。）

おえい　そのうちに、誰かゞ姉さんにさういつたとみえて、姉さんが、わざ〳〵、夜、うちへ來て、無理をしないやうに、年が年だから氣をつけるやうに。――よくお父つさんにいつてくれて。――それで、漸くのこと、納得して、あくる日からお醫者にかゝつたの。（寂しい笑）

正太郎　さうだつてね。――この間、おつ母さんもさういつてゐた。
おえい　おつ母さんやあたしのいふことは聽かなくつても、姉さんのいふことなら何でも聽くんでせう。――だから、ときどき、おつ母さんがおこるの。(なほ寂しい笑。――さういひながら、縫ひかけのものを膝のそばから退けて、しづかに立ちあがる。)
正太郎　それは仕方がないやな。(笑つてうける。)
　二人の應酬のうち、新一は、簞笥のうへから子供の雜誌を持つて來て讀みはじめる。
おえい　(茶簞笥のまへに立つて)新ちやん、お菓子あがらない？
新　一　(無言。――雜誌から眼を離しておえいのはうをみる。)
おえい　生憎、今日は、何にもなくつて。――こんなものよ。(紙づゝみを新一にわたす。)
正太郎　(側からみて)有平とは、豪儀、時代だな。
おえい　おつ母さんが何處かで貰つて來たのよ。――一寸御免なさい。(そのまゝ奥のはうへ行きかける。)
正太郎　(機をえたやうに)さ、俺は歸らう。
おえい　あら、どうして？
正太郎　夕方から、今日は、藥研堀まで行かなければならない。
おえい　藥研堀？
正太郎　(笑つて)風むきが變つてね。――ことによると、正太郎さん、うちへ歸參がかなふかも知れなくなつてね。
おえい　(無言。――腑に落ちないやうに正太郎の顏をみる。)

正太郎　藥研堀の伯父貴が、この間、どう思つたか不意に遣つて來て、いゝ加減に、もう、我を折つたらどうだといふのさ。——藪から棒に何をいふかと思ふと、少しは、お前も、性がついて、世間の恰好も分つたらう。——二度と、もう、莫迦もしないだらう。——強いことはいつても、抑父も、とる年だから、汐先をみて、大抵なところで折合つたらどうだ。——折合ふ氣はないか。——かういふのさ。——さう出られると、此奴、困らアね。——何も、親父に、意趣意恨があつてやつた事ちやなし。——うちにゐるのが厭で飛出してゐるわけぢやなし。——つひした、まア、時の表裏でいまのやうな破滅になつたんだ。——先方が理屈をいふから此方もいふやうなものゝ、いつてみれば、雨方がつまりは揚底だ。——折合ふも折合はないもない。——正直にその通りをいふと、まア、もう少し待へて置け、さういつて伯父貴はかへつて行つたが、昨夜になつて、また、使を寄越して、明日、夕方から出て來い。——多分には親父のはうの話がついたんだらうと思つてね。(どこまでも虚心に、恬憺に、ゐつかぬやうにいふこと。)

おえい　それは何ね。(心もちの寂しく動くものがある。)

正太郎　思へば可笑しなわけさ。——五人も六人もの人間が、手をかへ、品を替へ、いろ〳〵骨を折つてくれてもとかなかつた話が。——とても駄目だ、話のつけようがないと、あぐねて、誰も、引下つた話が、こんなことで、もし、纏りがつくとすると、此奴、世の中のことは何もやき〳〵思ふがものはない。

おえい　時節が來たんですわね。

正太郎　(笑つて) 尤も、今夜行つて、何うまた話が引つくり返るか分らない。——大きに、此奴、うか〳〵誘き出されの、この間はあゝいつたものゝ、世間の手前、右から左へすぐお前をうちへ入れるといふわけには矢つ張行かない。——どうだ、二三年上方へでも行つて來たら。——お前にしても、少しはホトボリをさまして來たはうが萬事に都合

がいゝだらうぐらゐなところで、體よく江戸を構はれるのかも知れない。――さうだとすると、此奴、慘めな話さ。
おえい　（親身に）そんなことはないでせう。
正太郎　鐵札か金札か、さ。（笑つて立ちかけながら）離れてゐるといつても日本橋と淺草だ。――偶にはうちの知つてゐる奴と往來であふこともある。――そんな奴が、うちへ行つて、何のかの、親父やおふくろにいふらしい。――いくぢがないとか、甲斐性がないとかいつてゐるさうだ。――もとよりそれに違ひないが。
おえい　（無言。――微笑。）
新　一　………………（何かいふのだけれど聞きとれない。）
おえい　（急いで新一のはうへ眼を向ける。）何かいつて？
新　一　………………僕もかへるの。
おえい　あら、新ちやんも？
新　一　（無言。――うなづく。）
おえい　どうして？
新　一　（無言）
おえい　新ちやんはまだいゝでせう。――（笑つて）御用がないんだから。――すぐよ、おぢいさんに、いま、お藥をあげればそれでいゝの。――だから、もう少し遊んでいらつしやいよ。
新　一　（無言。――寂しく笑ふだけ。）
おえい　歸りたいの？（顏を覗きこむやうにする。）

新一　（無言。――うなづく。）

おえい　新ちやんが歸ると、姉さん、さびしくなるわ。

新一　（おえいの心もちを兼ねるやうに。）…………明日、また。

おえい　さう。――ぢやア、明日（あした）、また。――さうなさいね。

新一　（無言。――うなづく。）

おえい　だけど、困つたわね。――おばアちやんがゐないから、あたしが送つて行くわけに行かないし…………。

正太郎　（側から）よオし、小父さんが送つて遣らう。

おえい　だつて、寅小路へ出ちやア廻りでせう。

正太郎　廻りつていふほどの事（こと）ちやないだらう。――たか〴〵違つて半町だ。

おえい　ぢやア、お願ひしますわ。

正太郎　だけど、見世の前までゞいゝんだらう。

おえい　電車みちさへ越せば。――あとは、もう、一人で大丈夫。――（新一に）ねえ。

新一　（うなづく）

正太郎、さきに上り口のはうへ行く。――あとから新一も行きかける。

おえい　新ちやん、本を持つて？

新一　（おえいのはうを向いて手に持つた雑誌をみせる）

おえい　お菓子は？（いひかけて、そこの、針箱のうへに載つてゐる有平（あるへい）の包みを出す。）こゝにあつた。――こんなもの

でも持つてらつしやいな。(とり上げて新一にわたす。)

正太郎と新一、土間に下りて下駄を履く。——おえい、障子のところに立つ。

正太郎　あとでお父つあんによろしくね。

おえい　えゝ、有難う。

正太郎　おつ母さんにもね。

おえい　えゝ。

そのまゝ正太郎と新一は格子をあけて出て行く。——おえいは、その、二人の出て行くのをみ送る。

間。

どこかで飴屋のチャルメラをふくのが漂ふやうに聞えて來る。——おえいは障子のところを離れて、奥の、唐紙のなかに入る。

舞臺空虚。——チャルメラは段々遠くなる。

格子のそとに俥が來てとまる。——間もなくお伊勢が入つて來る。

お伊勢　(落着いた擧止で) 御免なさいよ。(構はず、さういひながら上にあがる。——コオトの紐を解きながら座敷のなかをみ廻して) あら、誰もゐないの。

おえい、その、誰かの來たらしいけはひに奥から出て來る。

おえい　(お伊勢の立つてゐるのをみて) まア、姉さん。

お伊勢　おつ母さんは?

おえい　先刻、新藤さんへ行くといつて出て、まだかへつて來ないの。
お伊勢　さう。(コオトを脱いで火鉢のそばに來る。)――お父つあんの工合は何う？(覗ふやうにおえいの顔をみる。)
おえい　(縫ひかけのものを脇へ寄せながら)よくないわ。
お伊勢　(無言。――自分の密に思つてゐたことの悲しい裏書をされたやうに。――帶の間から煙草入を出しかける。)
おえい　どこが何うつていふことはないんですから、變りがない、相變らずだとはいつてますけれど。――この四五日、眼にみえて、何だか、身體が弱つて來たやうにあたしには思はれるんですけれど。
お伊勢　(無言。――うなづく)
おえい　それはあたしばかりぢやアなくつて、おつ母さんでも、内々。――あたしにはいひませんけれど、内々、さう思つてゐるんぢやないかと思ひます。――今日はあたしが藥をとつて來る、さういつて新藤さんへ行つたのは、先生にあつて、何か聞いて來るつもりぢやアないかと思ふんですけれど。
お伊勢　さうかも知れない。(しづかに烟管をはたく。)
おえい　困つてしまひますわ。
お伊勢　(氣を替へて)で、いまは？(奥へ思入をする。)
おえい　眠つてます。
お伊勢　あゝ。眠つてるの。
おえい　三時に飲む藥があるから、いま、起さうと思つたところ。――そこへ、ちやうど、姉さんがみえて……。
お伊勢　あゝ、さう。――あたしに構はないで、上げたら？

おえい　でも、あんまり、よく、眠つてだから、もう少しあとにしますわ。——無理にまた起しても何だから。
お伊勢　そのはうがいゝかも知れない。
おえい　(話を替へて)今日は何處へ？
お伊勢　あたし？
おえい　えゝ。
お伊勢　本郷まで。
おえい　行つてらしたの？
お伊勢　あゝ。
おえい　ちやア、逢はなかつたかも知れない。
お伊勢　誰に？
おえい　新ちやんに。——今までうちにゐたんですよ。
お伊勢　あゝ、さう。——今日は、あたし、朝から出たもんだから。
おえい　ほんたうの入違ひ。——一足でしたわ。
お伊勢　さう。
おえい　ちやうど、正太郎さんが來てゐて、正太郎さんを相手に、暫く行軍將棋をして遊んでゐたんですけれど、正太郎さんがかへりかけたら、急に新ちやんもうちが戀しくなつたとみえてね。(微笑)——でも、あたし一人でせう、あたしが送つて行くわけに行かないから、困つて、正太郎さんに廣小路まで一しよに行つて貰ひましたわ。

お伊勢　それは濟みません。——(笑つて)あたしが、もう、かへつて來る時分だと思つたのかも知れない。

おえい　さうですよ、きつと。——さうでなければ、あんなに、急に里ごゝろのつきやうがない。

お伊勢　(無言)

おえい　だけど、何ですわね。——一ころからみて、また新ちやんは音無しく——音無しいつていふよりも、何だか、かう、沈んだやうになりましたわね。

お伊勢　こゝへ來てゐるときはまだいゝの。——うちにゐたら、あたしの外には誰とも口をきかない。——學校からかへると、あたしのそばに來て、本をみたり、繪を描いたり。——一人で、いつまでも、默つて遊んでゐるわ。

おえい　まア。

お伊勢　何といつても、あゝいふ身體の弱い子だから……(思ひに堪へ兼ねるものがあるやうに、急に、手巾を眼に押しあてる。)

おえい　(驚いたやうに)姉さん、どうかして？

お伊勢　(無言。——微に頭をふる。——なほ手巾を眼に押しあてたまゝ。)

おえい　(無言。——憂欝なやうにお伊勢をみ守る。)

お伊勢　(手巾を眼から離して)……あの子のことばかりが心殘りでね。

おえい　何をいふの、姉さん。

お伊勢　えいちやん。

おえい　えゝ？(聞きとれないほどに)

お伊勢　あたし、もう少しいはないでゐようと思つたんだけれど。――あたし、近江屋のうちを出ることにしたわ

おえい　(自分の耳をうたがふやうに)だつて、姉さん、その話は。――その話は、もう、濟んだんぢやアありませんか。

お伊勢　濟んだわ。――濟んだのは、去年、あゝやつて、辯護士までなかへ入つて、後腐れのないやうにいろ〳〵話は定つたわ。――だけど、どんな證文だつて、破いてしまへば反古よ。

おえい　また、何か、いひ出した人でもあるんですか。

お伊勢　(無言。――うなづく)

おえい　何だつていふんです?

お伊勢　いふことはいつも定つてゐる。――あたしといふものは妾だから。

おえい　だつて、姉さん。――それはあんまりぢやアありませんか。

お伊勢　でも、さういふんだもの。――さういへば世間も通るんだもの。

おえい　でも、お妾つたつて。――世間の、そんな――世間でいふやうな、そんなんぢやないぢやアありませんか。

お伊勢　(無言)

おえい　誰がそんな分らないことをいふんでせう。

お伊勢　(これには答へず)あたしが惡いんだわ。――旦那の死んだあと、かうなるのは、もう、分つてゐるんだから、誰が何といつても、ふり切つて、うちへかへつて來てしまへば好かつたのよ。

おえい　(無言)

お伊勢　(そつと眼を拭く)なまじつかの人情に捌んで。――あたしのやうな姿もない人間のいつまでもゐるのが間違ひなの。――あたしは人はつらまない。
おえい　でも……(辛うじて聞きとれるほどに。)
お伊勢　それで、實は、辯護士のところへいま行つて來たの。
おえい　(無言。――心もち眼をふせる。)
　　間
お伊勢　(ふと何か聞きつけたやうに)お父つあんが呼んでやアしない?
おえい　あ、さう?
　　おえい、すぐに立つて唐紙のそばへ行く。
お伊勢　どう?
おえい　(お伊勢のはうを向いて)眼が覺めたやうよ。(さういつて奥へ行かうとする。)
お伊勢　待つて頂戴。――藥、あたしが上げるわ。(立つ。)
おえい　枕許にある粉藥よ。
　　お伊勢　うなづいて、そのまゝ奥へ行く。――おえいはもとのところへ返る。火鉢の鐵瓶をとつて湯吞につぎかける。
　　間
お伊勢　(唐紙のところへ出て來て)えいちやん。お湯を……

おえい　いま、持つて行かうと思つて。（湯呑をわたす。）

お伊勢　（うけとる。――低い聲で）隨分やつれたわね。

おえい　え〻。

おのづと二人の眼に泪が滲んで來る心もち。

間。

二人ともそつと眼をふく。

其の二

「その一」の一日二日あと。――舞臺「その一」に同じ。

おえいは矢つ張仕事をしてゐる。――仕事をしながら正太郎と話をしてゐる。

朝のうち晴れてゐたのが曇りかけた午後。一時ごろ。――火鉢のそばに布巾をかけた膳の出てゐることがおつねの、まだ、用達からかへつて來ないことを語つてゐる。

正太郎　そんなつて奴があるものか。――それはおつ母さんのいふはうが、尤もだ。」

おえい　さうでせう。

正太郎　とにかくさういふ遺言まであるのを。――それぢやア、まるで、佛の心もちを踏みつけにするやうなものぢやないか。

おえい　（無言。──うなづく。）

正太郎　だけど、姉さんも、また、何だつてそんなことをいふんだらう。

おえい　斷念めてゐるんですよ。──いつても仕樣がない。──自分さへゐなければ濟むことだ。──姉さんは、もう、さう思つて斷念めてゐるんです。

正太郎　だつて、その、ぐすぐ〵いふのばかりが親類でもあるまい。──祝儀不祝儀に、紋のついた羽織を引つ張つて現れる役者が外にだつてゐるんだらう。

おえい　それなのよ。──旦那のゐる時分には、お伊勢さんは感心だ、あゝもよく氣のつくものか、おしまさん──死んだお内儀さんよ。──がゐなくなつても、あゝいふ人がゐれば近江屋のうちも安心だ。──親類の間の評判だつたんです。──それが嵩じて、中には、お伊勢さんなら間違ひがないから、いつそ後妻に直したらといふ人さへ出て來て、旦那も、すつかり、そのつもりになつたのを。──だけど、お父つあん（奧へ思入をして）がそれを承知しなかつたの。

正太郎　はアてね。

おえい　そんなことをしちやア死んだお内儀さんに濟まない。──さうなつて、もし、子供でも出來たら、何よりも新ちやんのためにならない。──幾ら、おつ母さんが、そんなことはない、そんなことをいつたら切がないといつても、そんな間違つたことは出來ないと、頭をふつて、どうしてもうんといはなかつたんでせう。──後にもさきにも、あたし、お父つあんがあんなに强いことをいつたのをみたことがありませんわ。

正太郎　何か、そんな、死んだお内儀さんに義理を立てなければならないことでもあるのかね。

おえい　お父つあんにすると、姉さんが藝妓になるところをならないで濟んだのをお內儀さんのお蔭と思つてゐるんで

せう。――どうしてもお金の入ることがあつて、姉さんを藝妓にしようとしたとき、お内儀さんがそれを聞いて、あんな音無しい子を藝妓にするのは可哀相だ、少しのことならあたしが何うかするから、藝妓にする代りに、あたしにお伊勢さんをくれないか。――さういふことで、姉さんは、近江屋へ行くことになつたんです。――忘れもしない、あたしの十五のときですわ。

正太郎　ざつと十年か。

おえい　えゝ。

正太郎　で、お内儀さんの、その、死んだのは？

おえい　一昨年――一昨々年ですわ。

正太郎　と、新ちやんの――？

おえい　六つのとき。

正太郎　あゝ、さうか。

おえい　（しみ〴〵と）あのときお父つあんが承知をすれば、こんないさくさの、今ごろ、はじまるわけがなかつたんですわ。（半ば一人言のやうに）

正太郎　話が横へ外れた。――それで、外の親類どもは何をしてゐるんだ？（話をもとへ返す。）

おえい　駄目ですわ。

正太郎　（無言）

おえい　味方と思つてゐた辯護士までが、いつのまにか、先方へ行つてゐるつていふんですものね。（そつと眼をふく）

正太郎　（間）其奴は可笑しいな。
おえい　（無言。）
正太郎　これは、何だな。――お内儀さんのはうの身内から出たこつたな。
おえい　えゝ、さう。
正太郎　（寂しく笑つて）よくある奴だ。
おえい　新ちやんがだん〳〵大きくなるのに。――いつまで姉さんのやうな人が側にゐると新ちやんの末のためによくないから。――さういふこともいふんですつて。
正太郎　いひさうな事た。
おえい　でも、新ちやんは。――姉さんがゐなかつたら、新ちやんは、何うにだつてなりやアしませんわ。（ふたゝび眼をふく）
正太郎　（無言。――うなづく）
おえい　姉さんがゐなくなれば。――ゐなくなるとすれば、あとで、きつと新ちやんは煩ひつきます。――さうなるに定つてゐます。――何だか、あたしに、その樣子がはつきりみえるやうな氣がします。
正太郎　ほんたうの親子つてもない。――どうしたら、あゝ、兩方に人情が出たものか。
おえい　新ちやんばかりぢやアありません。――さうなれば、姉さんだつて、あたりまへぢやアゐやアしません。
正太郎　（幾分話を外らすやうに）だけど、おつ母さんは、――姉さんのところへ行つたにしちやア遲いね。
おえい　いろ〳〵姉さんに口說いてゐるんでせう。

正太郎　無理もないけれど。――姉さんの身になつたら、此奴、辛いだらう。

おえい　姉さんはお父つあんに聞かしたくないといふのを、おつ母さんの方は、逆に、お父つあんに話して、お父つあんにも考へて貰はう。――おつ母さんのかういふのは、何かしら、旦那が、姉さんのことについて、前にお父つあんと約束したことがあるに違ひない。――ことによつたら書いたものぐらゐ持つてるかも知れない。――さういふものがあれば、それを楯にこつちの言條を立てよう。――おつ母さんのお腹の中は分つてゐます。

正太郎　おつ母さんだつて、だが、お父つあんにそんな心配をさせていゝか悪いか。――そのくらゐなみとめはついてゐるだらうにね。

おえい　そのくせ、おつ母さんは、あたしよりも心配をして、おみくじを取つたり、占ひをみて貰つたり。――一昨日も一昨日で、新藤さんへ行つたかへりに、わざ〳〵山谷へ廻つて、よくあたる墨色判斷をみて貰つて來たんでせう。――長びくかも知れないけれど、九分まではむづかしい。――さういはれたといつてガッカリしてかへつて來たくらゐです。

正太郎（間）さうだらうね。

おえい　病人に。――だん〳〵よくない病人に、何も、悪い耳を聞かせることもありませんものね。――あたし、悪いと思つたけれど、昨夜、姉さんの代りにおつ母さんにさういひましたわ。（三たび眼をふく。）

正太郎（無言。）

間

格子があく。馴々しく「御免下さい。」といふのが聞える。――おえい、泪をかくし、返事をして立つ。

おえい　（上り口の障子をあけて）あら、お久さん。

お　久　（土間で）どなたかお客さまですか。

おえい　いゝえ。

正太郎　お久さん、知らない人だからお上んなさい。」

お　久　あゝ、正太郎さん。――どなたかと思ひましたわ、（さういひながら上つて來る。）

おえい。こつちへ入らつしやい。（もとのところに返る。）

お久　遠慮なくづか／＼。――御免下さい。（愛嬌よく笑ひながら）

正太郎　さア、どうぞ。

お久、火鉢の近くにすわる。――正太郎、側に散亂つた新聞を取つて讀みにかゝる。

お　久　（間。――おえいに）如何でございます、その後？

おえい　えゝ、有難う。――何ですか、矢つ張り……

お　久　（眉を顰めるやうにして）御心配でございますわね。

おえい　何にしても、もう、年で。――身體も、それだけ、弱つて來てゐますから。

お　久　（深くうなづいて）大きに。――それには、毎日、こんな、因循した陽氣で、わたくしどもでさへはつきりいたしませんから……

おえい　（思ひ出したやうに）あゝ、この間は、また、御親切に有難うございました。」

お　久　何でございましたつけ。

おえい　あの、煎じて頂くお薬を。

お　久　あゝ、あれでございますか。――あれは、どこかの漢法のお醫者が拵へるんださうでございますが、矢つ張り、わたくしどものお得意さまの御親戚で、大學の博士方にもみ離され、どこへ行つても、もう、いけないといはれた御病人が、ふとしたことであの薬を手に入れましてね。どうせ效くはずもあるまいがと、飲んでみると、あなた、それからだん〳〵、日にまし、うす紙を剝がすやうに快くなつたのでございますの。――そのお宅でも不思議だと被仰いましてね、それからといふもの、心臓の悪い方があると、どなたにもあれを勸めておいでゞございますの。――どうかと思ひましたけれど、また、あがつて御覧になるのも何だと思ひまして……

おえい　すぐに頂きましたわ。

お　久　さうでございますか。――もし、續けてあがるやうなら、あと、また、お屆けいたしますから。

おえい　えゝ、有難うございます。

この間に、おえい、茶を淹れるやうにする。――急須に鐵瓶の湯を注ぐ。

お　久　お内儀さんは？

おえい　いま、廣小路まで。

お　久　あゝ、さうでございますか。――わたくしも、近江屋さんへ、昨日上るはずの日を、つひ上り損ひましたから、今朝、妹を早く出しましたら、御新造さん、どこかお加減が悪いとかで。

おえい　あら、さうですか。

お　久　御存じありませんの。

おえい　いゝえ。(顔のうへに、ふと、お久の氣のつかないほどに寂しいかげがさす。)

間。——おえい、お久と正太郎とに茶をついで出す。

お久　どうぞ、もう、お構ひなく。(さういひながら、自分のをとるまへに、正太郎の分を取つてそのまへに置く。)

正太郎　(新聞から眼を離して) 有難う。

お久　(思ひ出したやうに) あゝ、正太郎さん。

正太郎　(無言。——お久のはうへ眼を向ける。)

お久　お芽出度うございます。

正太郎　何が?

お久　近いうちにお宅へおかりだといふぢやアございませんか。

正太郎　(笑って) どこから聞きました?

お久　(矢つ張笑つて) それは、もう、あなた。——でも、結構でございますわね。

正太郎　(少し皮肉に) さうでせうか。

お久　だつて、あなた、お宅へおかへりになるとが出來れば。——こんな結構なことはないぢやアございませんか。

——(おえいに) ねえ。

おえい　(無言。——寂しく笑ふ)

お久　油町の大きなお見世の若旦那で、何御不自由のない方が。——いまゝでの御苦労は、皆、お心からですわ。

正太郎　心がらなる身のうさは。——ほんに辛いぢやないかいな。——俄獅子の文句にあります。

お　久　でも、(おえいに) 蔦屋のお内儀さんは感心でございますわ。――娘が、以前、いろ〱お世話になつたからといつて、それは、もう、親身にこちらのことを心配して。――今度でも、お詫の出來たことが分ると、すぐにわたくしどもへ來て、お久さん、まア、聞いておくれ、正太郞さんも、いよ〱お宅へかへれることになつたから。――自分のことのやうに喜んでゐるんでございますよ。

おえい　(しみ〲と) いゝ方ですものね。

お　久　だけど、お宅へおかりになつたからといつて、わたくしども、途中でお目にかゝつても知らない顔なんかなすつたら……

正太郞　飛んだこと。――うちへかへつたつて、とき〲は地みちになつたところをみせに出て來ますよよ。」

お　久　でも、ほんたうに、今度は御辛抱なさいましよ。

正太郞　(笑つて) 厭になつたら、また、すぐに出て來いと、なぜいつてくれません。

お　久　まア。(わさと呆れたやうにいつておえいのはうをみる。)

おえい　隨分ですわね。(强ひて笑ふ)

　間。――正太郞は、また、新聞をとり上げる。

お　久　よけいなお饒舌ばかりいたして。――實は、今日は、御無心があつて上つたんでございます

おえい　何でせう。

お　久　明日。――三味線を一日御拜借ねがへますまいか。

おえい　三味線？

お　久　實は、明日、お得意さまからお花見のおさそひを頂きましてね。——わたくしに三味線を持つて來いといふ御註文なんでございます。けれど、わたくしどもの——大した三味線でございますけれど、生憎、この間、張替にやつて手許にないんでございますの。——ちやア、姉さん、こなたへ上つてお侍り申して來たら。——妹にから申されて……

おえい　（遮ぎるやうに）あゝ、さう。——お安い御用ですわ。

お　久　濟みませんけれど、どうぞ。

おえい　あなたがお持ちになります?

お　久　何でしたら……

おえい　えゝ。（うなづいて立つ。——そのまゝ奥（といつても病人のゐるはうでない）へ行く。

間

正太郎　（新聞を折返しながら）どこへ出かけますね。

お　久　明日でございますか。（正太郎のはうへ眼を向ける）

正太郎　えゝ、明日。

お　久　船で荒川まで行くとか。——行つたつて、もう、花はろくにあるまいと思ふんでございますけれど。（微笑）

正太郎　でも、なかなか、よく、方々で出かけますね。——この工合だと今度の日曜ぐらゐまで續くかも知れない。

お　久　たゞ、お天氣がどうかと思ひましてね。——いゝ鹽梅に、先刻、久しぶりの青い空が見えたかと思ひましたら、また、何だか曇つて來たやうな……

正太郎　大丈夫。——いまゝで降らなかつたんだから、まだ二三日は大丈夫ですよ。

お　久　おえい、袋に入つたまゝの三味線を持つてかへつて來る。

おえい　（みて）あゝ、そんな。――お惡いので結構なんでございますよ。

お　久　（微笑）だいなしなんですわ。――姉さんの時分からの、もう、古い……（さういひかけながらお久の側へすわる。）

おえい　まア。（何の意味もなく）

お　久　隨分しばらく。――お正月に出したつきりですから。

おえい　ちつともお彈きになりませんの。

お　久　えゝ、まるで。（微笑。――袋の紐を解いて出す。――急に、顏のうへに、暗い、寂しいかげがさす。）駄目ですわ。

おえい　えゝ？

お　久　（顏を上げて來るある悲しさを抑へて）皮が剝れてゐます。（三味線を下に置く）

戸外のはらに遠くかんかち囃子の柝の音が聞える。

其の三

舞臺「その一」「その二」に同じ。――「その二」の二三日あと。

「その一」「その二」と同じく曇つた午後。――だが、「その一」「その二」とは違つて座敷のなかゞ片附いてゐる。

――幕のあいたとき誰もそこにゐない。

長き間。

唐紙があく。――醫者をさきに、おつね、お伊勢、醫者を送り出すところで出て來る。誰も無言。――お伊勢は手に持つた金盥を置きに行くところで臺所のはうへ入る。

間

上り口のところで醫者が立ちどまる。おつねに病人のことの注意を二言三言いふ。――おつね、無言。――頸(うな)を垂れて聽く。

間

醫者、障子をあけて土間に下りる。――お伊勢、臺所から出て來る。――おつねと一しよに醫者を送り出す。

間

醫者は格子のそとに出る。――あと、障子を閉めて、おつね、力(ちから)なげに病人のはうへかへりかける。――人知れず襦袢の袖を眼にあてる。

お伊勢　(うしろから)おつ母さん。

おつね　(無言。――お伊勢のはうを向く。)

お伊勢　どうですつて?

おつね　(微かに頭をふる。——やるせなく眼をふせる。)

お伊勢　(無言。——泪をふく。)

間

おつね　それよりも、お前、うちへ行つてみなくつてもいゝかえ?

お伊勢　えゝ。——構ひません。

おつね　でも、何だつたら、——昨夜のやうな工合がみえたら、すぐに、また、迎へを上げるから。

お伊勢　(無言)

おつね　何事もないとさへならゐても貰ふけれど。——さうでないんだから。

お伊勢　そのことなら。——そのことなら、おつ母さん。——ちつとも心配は入りませんわ。

おつね　なぜ。

お伊勢　外の事ぢやアないの。——親の、あなた……

おつね　でも、人はさうは取らない。——さうでなくつても、みんな、何かお前の落度を探したくつてゐるところなんだから。——たとへ、何でも、うちの束ねをするお前が……

お伊勢　いひたい人には何とでもいはせます。——どうせ、あのうちを出れば。——あのうちを出ればいろ／＼いはれる身體なんです。(泪をふく)

おつね　(無言)

唐紙をあけておえいが出て來る。

おえい　（お伊勢に）姉さん、お父つあんが……

お伊勢　（泪を隠して）あゝ、いま行くわ。

そのまゝ、お伊勢、奥へ行く。

間

おえい　姉さん……？（おつねの顔をみる。）

おつね　昨夜出たつきりだからね。――返したはうがいゝだらうと思つてさういつたんだけれど……

おえい　（ふと無言。）

おつね　（あきらめ兼ねるやうに）「前の晩出たつきりであくる日もかへらない。」――「さういふ、しだらだから」――いゝことにして、必と、また、是を何とかいふに違ひないもの。

おえい　（無言）

おつね　お前もいへば、お伊勢もいろ〳〵いふから止したんだけれど。――でも、考へると、わたしは。――ほんたうに、わたしは、一言これをお父つあんにいひたいよ。

おえい　おつ母さん、それだけは。――後生ですから……

おつね　いはないよ。――いふなといふからいはないよ。（泪をふく）――たゞ、お父つあんの身体でもあたりまへなら、少しはこつちの言分も立つだらうと思ふと……。

おえい　（無言。――泪をふく。）

間

格子のそとに誰か來たらしいけはひがする。――それを機に、おえいは、おつねの側を離れる。障子をあける。――眠つた新一を背中にのせた近江屋の小間使がそこに立つてゐる。

おえい　あゝ、

小間使　御新造さん、此方にまだおいでゞございませうか。

おえい　居りますわ。

小間使　幾らおだまし申しても、坊ちやま、お聽入がございません。――まだお歸りにならないでございませうか。

おえい　さア。

小間使　昨晩は、御新造さんのおかへりをお待ち遊ばして、とう／＼お寢らずにおしまひになりました。

おえい　（惨しいやうに）まア。

小間使　いつになく、今日は、學校もお休み遊ばして。――御飯もあがらずに、お一人で、しく／＼泣いておいでなんでございます。

おえい　（無言。うなづく。）

小間使　御病人のお惡いところをと存じましたけれど。――あんまり何でございますから、お迎へのつもりで、お連れ申すことにいたしました。――さういたしたら、御安心なすつたとみえて、こゝまでまゐるうちに、いつのまにかお寢つてしまつて……（背中の新一をかへりみる。）

おえい　大へんでしたわね。――好うございますわ、置いていらつしやいまし。

小間使　左樣でございますか。

おえい　べつに手のかゝるわけぢやアなし。――構ひませんわ。
小間使　さう願へますれば……
おえい　こつちへ取りませう。(小間使の背中から新一を抱きとる。)――まア、他愛なく……
小間使　(捨臺詞のやうに)矢つ張、昨晩お寢りになりませんから。
おえい　(無言。――抱き直す。)
小間使　では、どうぞ。――相濟みませんが……
おえい　たしかにお預りしましたわ。
　小間使、かへつて行く。
　間
　おえい、新一を抱いたまゝ火鉢のはうへ來る。――おつねは、そのまへ、おえいと小間使との應酬のはじまるまへに奥へ入つてそこにゐない。唐紙をあけてお伊勢が影のやうに出て來る。
おえい　(みて)姉さん……
お伊勢　(無言。――おえいの――眠つてゐる新一のそばへ來る。)
　間

その四

宇兵衛の住居の格子外。――「その三」より一時間とたゝないうち。

雨のふり出したところ。——雨幌をかけた俥が一臺格子のまへに轅を下ろしてゐる。

間

格子をあけて、新一を抱いたお伊勢をさきにおえいが出て來る。

おえい　(空をみて)大したことはなさゝうですけれど。

お伊勢　さうね。——だけど、降り出しがわるいから。

おえい　(新一を見て)よく寢てゐますわね。

お伊勢　何にも知らないで……(それとなしの寂しき微笑。)

おえい　(無言)

車夫　(幌の工合をよくして)へえ、お待遠さま。

お伊勢　御苦勞さま。(新一を抱いたまゝ俥に乘る。)

車夫　お宅へ？

お伊勢　えゝ。

間

車夫　轅をあげる、――そのまゝ曳いてさる。

おえい、ぼんやり立つてそのあとをみ送る。――眼のなかに泪が滲んで來る。

間

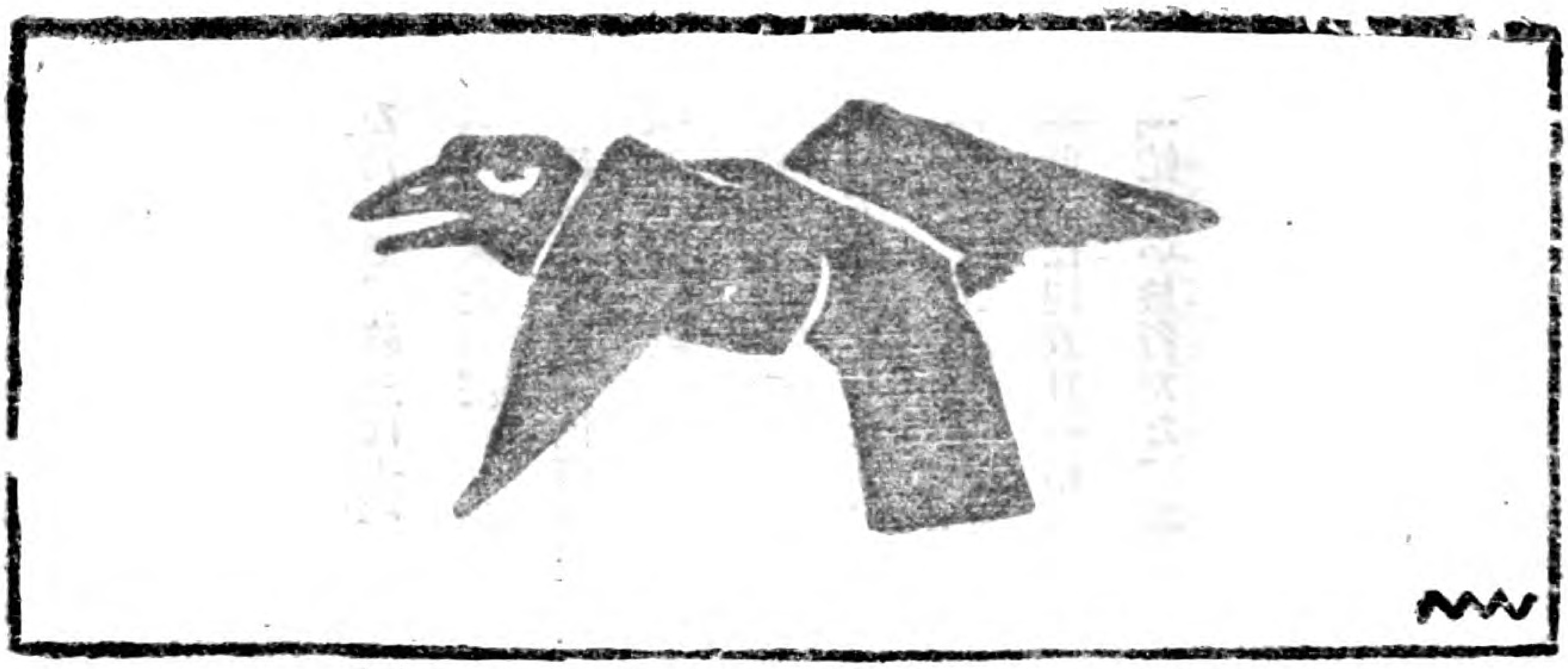
おえいは斷念(あきら)めたやうに格子の中へ入る。

間。――軒さきの電燈が灯る。

贈金の手拭を首に卷いたり、櫻の簪を髮にさしたりした花見がへりの男たち女たちが、どこか途中で借りたらしい傘の中に二三人づゝ固(かた)まつて通りすぎる。

だん／＼雨は强くなる。

（十年八月）



或る男の旅

野上彌生子

三月の初、×××省技師新村眞三は役所の用事で滿洲地方及び支那の一部を視察するために出發した時、自分の胸のどこかに隱されてゐる一つの秘密な感情をかすかに感じないではなかつた。けれどもその感情が彼の心の底にどの程度に根深く働いてゐたかと云ふことに就いては決して自分でも氣がつかなかつた。現在の地位から云へば大した名譽でもない今度の殖民地地方の旅行を何故さう乘氣になつて待つてゐたか、反對にまた或る時にはひどく陰欝な氣持になつて、屬官たちに何か尋ねられても一寸と返事の出ないほどぼんやりと考へ込んでゐたか。どうしてあゝ贅澤なシャツを買つたり、澤山なカラを買つたりしたのか。珍しくネクタイの選り好みまで何故したのか。靴や鞄まで何故新調しなければならなかつたのか。細君の藤子がそれ等の大げさな支度に驚いて、

『――また洋行でもなさる程の騷ぎね。』

と遠慮のない聲で冷かした時、何故頸の根まで赤くなつたか。それからまた家を離れる間際まで何故平生以上に細君に優しくしてやつたか。優しくしてやらなければ

ないやうな氣が何故したのか。それでゐて彼女の顏や動作の缺點が腹立しく目についたのは何故か。彼には分らなかつた。

T市に着くと彼は一番にM會社をさして行つた。彼の視察の主なる目的は、要するにこの半官營の會社が北滿地方に經營しつゝある多くの事業の中の二三を見て廻ることに外ならなかつた。丁度その會社の課長の一人には友達の田村がゐたので、眞三は先づ彼に逢はうとした。

『やあ來たね。』

田村は旅行で色づいた眞三の元氣らしい顏を應接室に見出すや否や快活に叫んだ。

『この間手紙だつたから、もうやつて來さうなものだと思つてゐたところだ。』

彼からは中央政府から派遣された官吏のやうに出迎へられなかつた。眞三は幾日ぶりかで打ち寛いだ氣分になつて東京の方の噂をしたり、土地の話を聞いたりした。

『ゆつくり出來るのかい。』

『此處は四五日の積りだ。それから天津と青島にちよつと行つて來なければならない。』

『忙しい旅行だな。暇が出來たら一度皆んな寄つて飯でも食はうか。君の知つた奴が大分來てゐるぜ。』

田村は同じ頃に大學を出たり、又科は違つても高等學校で一緒であつたりした仲間の三四人の名前をあげた。

『皆んなに久しぶりに逢へるな。どちらにしても用事から先に片附けておかう。』

この會社にも公吏としての資格で早く逢つて置かなければならない人々があつた。彼がそれ等の面會をすました後に、田村は一人の社員を連れて入つて來た。

『植田……君。』

田村は斯う云つて紹介すると共に、その社員が彼の滯在中視察の案內者並びに接伴者の役を受持つと云ふ意味を述べた。

『植田……君、』

眞三には初めは苗字しか分らなかつた、が、或る閃めきが頭を射た。名刺を貰つた。肩書で植田健とはつきり刷つてあつた。地位は秘書であつた。その名前を讀んで、而して自分の前に丁寧に頭を下げた一人の男の姿を見た時、眞三は息が詰まつたやうな氣がした。

『これが貞子さんの夫だ。』

一つの聲が彼の耳許にはつきり囁いて聞かせた。

『お前の靑年時代の最初の夢であつた女は、この人の妻なのだ。』

彼はこの聲をふり落さうとするかのやうに無意識に首を振つた。それからハンケチを取り出して額を拭いてから漸く口を開いた。それは視察の順序とか時間とか、どの地方へ行つても彼とその相手との間に一番に取り交はされる平凡な問答に過ぎなかつたけれども、彼は何かひどく違つたことを話し合つてゐるやうな氣がした。併し彼は勉めて冷靜を粧つてゐた。それに成功してゐると信じてゐた。けれども暫くすると彼が餘り相手の容貌や、態度や、服裝に注意し過ぎてゐたことに氣がついた。自分の目が嶮くなりはしなかつたかと怖れた。

彼は停車場からまつすぐに會社へ來たのでまだ宿を取つてゐなかつた。田村は自分の家に泊めようとした。眞三には彼の好意も眞情もよく分つてゐた。その上會社に訪ねるまでには世話になつてもいゝと云ふやうな氣でゐたにも拘はら

ずその時になると斷はり度くなつた。彼は宿屋の方が勝手だと云つてホテルに泊ることにした。

長い汽車で疲れてゐたので彼は部屋が極まるとベットを造らした。その間に湯に入つた。而して身輕な着物になつて床の上にぢつと横になつた時、彼は今度の旅行に關して何が自分を支配してゐたかを初めて確かめた。巧みに隱されながら、自分のあらゆる行動に裏づけて居た一つの强い誘惑に比べれば、新興の殖民地の盛んな光景に接しようとする興味や、課せられた仕事に對して、自分の優れた頭腦を示めさうとする野心などは、何んでもなかつたことが分つた。彼はたゞ十五年前に失つた一人の婦人が住まつてゐる土地を見たかつたに過ぎなかつた。貞子が住まつてゐると云ふ一つのことに引きつけられたに過ぎなかつた。――運がよかつたらどんな機會で、何處かで、偶然出逢はないとも限らない……

けれどもその町に足を下ろすと共に第一に彼女の夫に逢ひ、引き續いて自分が其處にゐる間は、その人に案内され、毎日最も近い地面を蹈み合つて町を歩き廻り、共に用事を分ち、同じ箱のマッチで煙草を吸ひ合はうとは思ひもかけないことであつた。彼は運命から不意打ちを喰はされたやうな氣がした。自分がもう少し若かつたならば、この後の數日をこの儘では到底過せないだらうと思つた。けれども彼は年齡を賴んでゐた。四十に近い男が人生から學んだ經驗は、そんな種類の惑亂に捲き込まれるには堅過ぎる鎧を與へられてゐると信じてゐた。貞子に對する當時の心持だつて、云つて見れば誰の胸の中にも或時期に於て一頁や二頁は挾まれて、長い月日の間には跡方もなく朽ち果てゝ行く平凡な詩的空想に外ならなかつたのだ。彼は斯う思はうとした。而してすべてを過去の一些事として極めて冷淡に看過さうとした。

併し斯う思はうとすることゝ、實際今彼の心の底に湧き上りつゝある新たな激しい感情とは反對であつた。最も彼を

驚かしたことは、その一つの事に就いてのみは、彼が頻みに思ふ年を何んにも取つてゐないことであつた。すべてが昨日のことのやうに思ひ出された。彼女に關することで忘れてゐるものは何一つなかつた。生々しい程はつきり意識の表に浮き上つて來た。その上旅の宿で、鍵のかかつた部屋に寢てゐる彼の思ひ出は外界の何物からも邪魔されなかつた。

彼は一筋の白い埃りの立つ田舍道を歩いてゐた。道の兩方は皆んな林檎畑であつた。優しい葉の群がりの蔭には、もう大きな綠色の玉が輝いてゐた。或る畑の實は袋をかぶつてゐた。

『林の家から毎年送つて來る林檎はこれなのだな。』

彼は斯んなことを思ひながら歩いた。行手の白い雲の散ばつた空には、山々が續いてゐた。その間に富士山形の山が一つ拔んでゝ美しく聳えてゐた。岩手山であつた。

高等學校の二年になつた夏、彼は暑中休暇になると海岸に行く家の人たちと別れて、一人で北の方の旅に出た。何處と云ふ當てはなかつた。氣に向いた先々で足を留めながら、その地方に歸つてゐる二三人の親しい友達の家を訪ねて見ようと思つてゐた。常盤線に添うた淋しい海岸の町に留まつてゐた時、彼は盛岡の田舍の家に歸つてゐる林に手紙を書いて、二三日中に訪ねて行くから、一緒に青森の方へ行つて見ないかと云つてやつた。彼は今この約束を果たすためにその道を歩いてゐるのであつた。八月も半に近づいて、蒸暑い日であつた。路ばたの樹ではどの樹でも蟬がないてゐた。彼はもう町から一里ばかり歩いてゐたが、友達の村に行き着くまでには、まだ半里近く歩かなければならないことを知つてゐた。午後二時頃であつた。歩いてゐるうちに今まで彼のまわりを輝き溢れてゐた光がいつとなしに消えて行くのが感じられた。山の色が黑ずんで來た。而して白い雲がだん／＼と濁つて、それが非常な廣さにひろがつたと見てゐる

うちに、太陽はすつかりその中に蔽ひ隠された。あたりが急にまつ暗になつた。天地がしーんとして來た。

『夕立が來るぞ。』

彼は足を早めた、行き着くまでどうか降らなければよいがと念じながら。五六町步いた。その內に空の一角が俄かにもの騷がしくなつた。雨が足踏みをして群がつて追軍して來るやうな氣がした。と思ふ間もなく明かにざあーつと云ふ音が響いて大きな雨粒が落ち出した。彼は駈け出した。涼しい風が出て彼を追つかけた。同時に兩側の林檎の樹の葉がみんなゆすれて、さゞめき立つた。雨はこの時にはもう雨粒ではなかつた。すつかり驟雨の形に出來上つて、盛んに、もの凄い勢で降り注いで來た。ずつと遠くの路ばたにあつた一本の榛の樹まで一生懸命に駈けつけるまでには、彼はひどく濡れて仕舞つた。栗色の鉢卷をした麥藁帽子からは雫が垂れた。服もびつしよりになつてゐた。彼は海岸の宿に置忘れて來た洋傘のことを口惜しがりながら大きな樹の幹によりかかるやうにして立つて雨の晴れるのを待つてゐた。丁度その時であつた。榛の樹の直ぐ右手から、彼が通つて來た村の本道に對して、丁字形になつてゐる狹い枝道の上を一人の小さい娘が彼と同じやうに濡れながら駈けて來るのが目に入つた。娘は急場の凌ぎに風呂敷をかぶつてゐた。被衣のやうにして、さしあげた左右の手で風呂敷の端を握つてゐるらしかつた。それからまだ風呂敷の上に妙なものをかぶつてゐると思つて、近づいて來るのをよく見たら、それは圓い籠であつた。これが彼を笑はした。氣の毒だと思ひながらおかしさがこみあげて來た。娘はそんな風に深く風呂敷で顏を蔽つてゐたのと、夢中で駈けてゐたのとで、その榛の樹の向ふ側の下に彼が立つて笑つてゐるとは思ひもかけなかつたであらう。樹のところまで來ると叫び聲をあげて飛び込んで來た。彼女は大きな息をついてびしよ濡れになつた籠と風呂敷を頭から取つた。而して何心なく向側の彼の立つてゐる方へ顏を向けた時は可哀相であつた。彼女はまつ赤に燃え上つた。身の置き場がないやうにうろたへてゐた。實際彼

女はもう其處にゐようとはしなかつた。また直ぐ雨の中を出掛けた。今度は笳も風呂敷もかぶらないで。——それでも彼女は又一つの失策をした。急いで樹の下を離れた拍子にふくれてゐた袖の中から大きな青い林檎を一つ落した。彼女は知らん顔をしてその一つの林檎を雨の中に殘したまゝ行つてしまつた。全身びしよ濡れになりながら。彼は笑つたことをすまないやうな氣がした。而してまたこの雨の中を出掛けるのは無謀だと忠告してやりたかつた。けれども若い女と口をきく方法を全く知らないやうな年頃であつた彼には、自分の思ふ事を口輕く話しかけることが出來なかつた。彼はたゞ默つて赤い帶が雨の中を濡れて遠くなつて行くのを見送つてゐた。

雨が小降りになると彼も出掛けた。頓て村の人家が見え出した。彼は取つつきの百姓家で友達の家の位置を委しく聞いて置いたので迷はなかつた。二三十軒の藁葺屋根を見て過ぎた頃右に折れた。が、手入れの屆いた一つの阪道は小山の中腹に在る大きな白壁の家に自然に彼を導いた。阪が盡きると門があつた。門を入るとゝ廣い坪庭があつた。坪庭を横ぎると彼は一寸と考へた。廣い土間のやうになつた入口と玄關のやうになつたところと二つあつたから。彼は初めに土間の方を覗いて見た。廣くてがらんとして、まつ暗であつた。人影がなかつた。彼は今度は玄關の方へ廻つて高い聲で案內を乞うた。遠い奧で返事の聲がした。足音が近づいて來て正面の障子が靜かに開いた。若い娘が手をついてゐた。顏を見合せると二人ながら喫驚した。

これが林の妹の貞子を彼が見た最初であつた。——いゝえ、二度目であつた。彼等は半時間前に雨の中の榛の樹の下で出逢つてゐたのであつたから。

彼の來訪は林が寄宿舍から持つて歸つた家族や、故鄉の風物に對しての愛と飢を完全に癒やして、今度はそろ〳〵友情の飢を感じかけてゐたところであつたから、丁度よい時機であつた。彼はうんと歡迎された。林の母親や兄夫婦からも

優しく迎へられた。（彼はもう父親を失つてゐた。）晩飯には彼のために大きな鳥が一羽つぶされたり、近所の湖に養殖してゐるのだと云ふ紅鱒がフライになつたり、味噌燒になつたりして現はれた。彼は遠慮しなかつた。林と競爭して食べた。それが質朴な田舍の人たちを悅ばせた。けれども食事のあとで林の妹が青い林檎を盆に載せて持つて來た時には、彼は途中の雨の中での出來事を思ひ出して微笑まないではゐられなかつた。貞子がすまし込んで何事もなかつたやうな顏をしてゐるのが一層おかしかつた。

　全く彼と彼女とは變な工合で向ひ合つてゐた。玄關で彼を見た時には彼女は喫驚したにも拘はらず、その後はずつとすまし込んで知らん顏をしてゐた。挨拶の時も頭を下げただけで口をきかなかつた。勿論もう叢の間に彼に逢つたと云ふやうなことは誰にも話さなかつたに相違なかつた。誰からもその話が話し出されないのを見ても分かつた。考へて見れば隨分滑稽な出逢ひであつたから、それで默つてゐるのだと彼は思つた。且つ彼女は自分が話さないばかりでなく、彼からも話されることを警戒してゐるらしかつた。よそ〳〵しい眞面目な態度を持ち續けてゐるのもそのために外ならないのだと思ふと、彼はすつぱ抜いて困らせて見度いやうないたづら氣を制することが出來なかつた。その晩林の部屋で一つ蚊帳の中で一緒に寢た時、彼はとうと秘密を發きかけた。

『なんだ。道であつたのか、――妹の奴なんだつて默つてゐるんだらう。』

　林は初めは驚くと共に不思議がつたが、眞三が籠と風呂敷の話をし出すのを聞くと笑ひ出した。

『はゝあ、それで分つた。』

　眞三にもその時のおかしさが甦返つて來た。彼は榛の樹の下で實際それを目の前に見て笑つた通りに今また笑つた。彼女は今日岡を一つ越した向ふにある分家の家へ何か使ひにやらされた。その歸りに一籠の林檎をもぎ取つて來るこ

とを兄に約束して行つた。雨がふつて來たので林檎を兩袖に詰め込んで、風呂敷と綱とで應急の雨具を發明したに相違なかつた。

『馬鹿な奴だな。』

彼は罵つた。その惡口で眞三は林がどんなにその一人の妹を愛してゐるかと云ふことを知つた。

明けの日になるとそれは家内中の笑ひ話になつた。彼女は吃驚してゐた。恥しがつてゐた。而して怒つてすねてゐた。殊に眞三に對しては明白に敵意を見せては近よるのを避けてゐた。やむを得ず傍に來たり、口を利いたりしなければならない時には、しかつめらしく厳格な顔をしてゐた。それが又兄を面白がらせた。けれども眞三はもう彼と共に面白がることは出來なかつた。彼はひどく氣が咎めた。その一つの小さい滑稽な秘密を、彼女がどんなに恥ぢてをり、またどんなに隠したがつてゐたのだらうと思ひやつた時、彼は取り返しのつかない惡いことをしたと思つた。彼は謝罪し度いと思つた。けれども四五日の後林と連れ立つて目的の青森をさして出立した日まで、その機會がなかつた。

普通に逢つて、普通に別れて來たのなら何んにも心に殘らなかつたかも知れない一人の田舎の娘の存在が、この奇妙な繋がりのために彼の心に強く印象されてゐた。それは元より戀ではなかつた。さう云ふ種類の感情とはすつかり違つたものだと彼は信じてゐた。その上彼女はまだ男の子のやうな堅さを脱しきれないでゐて、痩せて、黒くつて、ちつとも美しくはなかつたから。而して美しい娘ならば他の友達の家に乏しくなかつたから。にも拘はらず彼はその時以來決して彼女を忘れなかつた。日に焼けた顔の下半面を怒りのためにまつ赤にして、憎んだ目つきを大膽に彼の上に注ぎかけた瞬間を忘れなかつた。丁度少年時代の喧嘩友達を思ひ出す時の心持に似てゐた。而してこの心持には懐かしみと滑稽と餘り苦しくない程度の自責の念が常に伴はれてゐた。

彼等はそれつきりで、彼が大學の法科の三年になつた春まで逢ふ機會はなかつた。その春町の高等女學校を卒業した貞子は母親に伴はれて東京の叔父の家へ出て來た。工科をやつてゐた林も同じ叔父の家から學校へ通つてゐたので、貞三は其處で五年目にまた彼女に出逢つた。逢つて見て彼は喫驚した。それは決して彼女ではあり得なかつた。顏から、身體つきから、もの云ひ方から、身につけてゐる着物の撰び方から、着方から、何から何まで違つた別な、完成した一人の婦人であつた。五年前の日に燒けた珈琲色の皮膚や、引きつめの束髮に結つて、色も艷もなかつた髮毛は何處に行つたのか、また着物の下からいつも二寸位は出てゐて、土がついたり、雜草の穗がくつついたりしてゐても平氣でゐた、竿のやうな痩せた手足は。たゞ彼女を見た者が誰でも一番に氣のつく魚の鰓のやうに長くきれた黑眼のみは、變らなかつた。けれどもその眼も元のやうに露骨に人の顏を見据えたり、悪戯兒らしく瞬いたりはしなかつた。靜かな二つの池のやうにいつもぢつと澄んでゐた。伏目になると絡み合ふ上下の長い睫毛がその目を一層黑くしてゐた。而してそれがぱあつと石竹色をした顏の上に重々しい威嚴を添へてゐた。彼は氣壓されてゐた。その前に出ると自分が如何にも粗野な書生つ坊で、何の値打もないもののやうな氣がした。彼等の地位はすつかり顚倒したのであつた。もし五年前のおかしな出來事が二人の間に横はつてゐなかつたならば、彼は近づく勇氣をさへ持たなかつたかも知れなかつた。その笑話が僅かに彼を救つてゐた。

『僕はあなたにあやまらなければならないことがあります。』

二三度逢つた後で彼が思ひきつてこの話をし出すと、彼女は不思議さうな顏を彼の方へ向けた。

『何をでございますか。』

『五年前の餘計なおしやべりの一件です。僕はあの時あなたに非常に恨まれてゐたことを知つてゐます。一度あやまり

たかつたのですが機會がなかつたのです。今改めてあやります。』

それが何を意味するかは云ふまでもなかつた。林は笑つた。彼自身も初めて氣輕に笑つた。彼の女は極まりの惡さうな顏をしながらも矢張り一緒に笑つた。而して

『私ほんとうにお轉婆でございましたから。』

とあやまるやうに云つた。二人は五年ぶりで仲直りをしたわけであつた。この後では彼はずつと樂な氣持になることが出來た。彼女の美の著しい成長にも、最初程は眩惑されないですんだ。氣壓されもしなくなつた。而してそれに代つたものは無限の親しみの情であつた。彼は初めて自分の心をはつきり見た。——どんなに自分が彼女を愛してゐたかを知つた。今の美しい彼女でなしに、却つて四年前の黑い、小さい田舍娘の彼女を。それはたゞ現はれなかつたまでゝあつた。彼女の現在の輝やかしい美がその時はまだ未成熟の身體の中に隱されて眠つてゐたと丁度同じに。彼は今一度ふり返つて見た。——あの夏自分は何故なんな北國の田舍へなんぞ行く氣になつたか。何故道の途中で雨が降り出したか。その日に限つてきた何故彼女は出掛けたか。何故あんなおかしな風體をして彼のゐる木蔭に飛び込んで來なければならなかつたか。それをまた何故自分がわざ〳〵發き立てゝ彼女を怒らせたか。——運命は最初から計畫を持つてゐたかのやうに彼には感じられ出した。彼が彼女を怒らしたことだつて、何んにもしなかつたよりは、強い接觸でなければならなかつた。

彼は林を訪ねることに氣が咎め出した。訪問の目的が違つたのが恥かしい氣もすれば、すまなくも思はれた。また林からすべてを見拔かれはしまいかと云ふ怖れもあつた。この怖れには、自分で告白しないで自然に彼から悟られ度い狡さも交つてゐた。どちらにしても、彼にこの心持が通じさへすれば、それを冷やかに見過されるほど自分は無力ではな

い筈だと彼は信じてゐた。彼はまた自分の兩親が息子の望む結婚に反對しないことも知つてゐた。學校も後一年きりのことだ。すべてはその時に護つてもおそくはない。彼は前途の光明を疑はなかつたから落着いでゐた。自然の發展以上に働きかけようとはしなかつた。

二月たつた。その間に彼は自分が非常な手拔かりをしてゐたことを發見した。彼は彼女に取つて自分のみが唯一の異性ではないことを忘れてゐたのであつた。彼が彼女を見るやうに、他にも彼女を見る多くの男のあることに氣がつかなかつた。彼が彼女の美と優しさに打たれると同じやうに、多くの男も彼女の美と優しさに打たれてゐることを思はなかつた。それ故その最も有力な競爭者を直ぐ手近かに見出した時には、彼はあはてた。それはＨ――と呼ぶ林と同級の者であつた。高等學校が違つてゐたから彼はその男をよくは知らなかつた。けれども林とは中學校時代からの親しい友達だと云つて時々來てゐることがあつたから、知らない顏ではなかつた。途中で出逢つても帽子位は取り合つた。が、本統を云ふと彼はその男を好かなかつた。何故好かなかつたのか、それは彼にも分らなかつた。Ｈ――は誰からも嫌はれさうな男ではなかつた。額と口許に特長のある悧巧らしい顏をした靑年であつた。彼の頭のいいことを何かの機會に林がひどく褒めてゐたのを眞三は記憶してゐた。その一つだけから考へても十分尊敬に價する人物に相違なかつたにも拘はらず、また眞三は決して人嫌ひをする方の性質ではなかつたにも拘はらず、彼だけは好きになれなかつた。親しみ難い氣がしてゐた。恐らくＨ――自身でも同じやうな感情を抱いてゐるのではないかと思はれた。彼からも決して近づかうとはしなかつたから。それで彼等が林の部屋で落ち合つた時は變な工合であつた。二人ともめいめい林を相手にして話しかけるのみで、お互同士では何んにも聞かうとも話さうともしなかつた。自然であるがためにはさうするのが一番よい方法であつた。Ｈ――の方でもそれを破らうとはしなかつたから、眞三は胡魔化しのない正直な男だと彼を判斷し

ない譯には行かなかつた。同時にまた自分自身も彼から正當に批判されてゐることを疑はなかつた。これまでに近く向ひ合つてゐながら、また同じ年頃の青年同士の間でなら、容易に醸される筈の友情が、彼等のだけにはどうして生じなかつたか。何が二人を妨げたか。眞三は今になるとはつきりそれに答へることが出來ると思つた。

H――は林の母親のことを伯母さんと呼んでゐた。それが極く自然に聞ゆる位彼はその老女に馴れてゐた。でも妹の方には彼は母親程馴々しい態度は見せなかつた。若い娘に對する愼みからであつたか、それともそれ程の親しみがないのか、どちらかは分らなかつたけれども、眞三は救はれるやうな氣がした。而して後の方の原因からであつてくれることを望んでゐた。實際貞子は彼等のどちらに對しても同じ位の親しみしか現はさなかつた。特別な親しみを現はすやうな場合が殆んどなくなつたと云つた方が正しかつた。彼女は少し落付くと毎日のやうに種々な稽古事を始めて留守勝になつたのがその主な原因であつた。たゞ兄の部屋の用事だけは彼女の手に任されてゐると見えて、家にゐさへすればお茶を持つて來たり、菓子を運んだりした。彼が彼女を手近かに見る機會はたゞその時より外にはなかつた。若しその時に何か一言か二言言葉を交へることが出來るだけも非常な幸運であつた。H――にしてもそれ以上の機會を持つことを得てゐるとは眞三には信じられなかつた。訪問の度數から云つても彼よりは少いらしかつた。にも拘はらず彼は貞子に注がれてゐるH――の激しい愛を直覺した。彼は段々痩せて青くなつて行つた。眞三は彼が眞面目に苦しんでゐることを知つた。同時にまたH――の眼が非常に注意深く自分の上に落ちてゐる瞬間の多くなつたのを見遁さなかつた。勘づかれてゐるなと思つた。彼等は二人の神經でのみ感じられる感じ方で、お互ひに見拔き合つてゐたのであつた。

或る晩二人は落合つた。その時は珍しく林の母親が息子の部屋にゐた。年寄は近いうちに國へ歸るからと云つてH――に家の方へ傳言はないかと聞いたり、眞三へはまたあんな山の中も時には面白からうから來てくれと云つたりした。

『貞子さんも歸り度くなりはしませんか。』

眞三は母親と並んで部屋の入口に座つてゐる彼女に話かけた。

『こいつは林檎の丸つかじりの味を思ひ出す時だけちよと歸り度い氣がするのださうだ。』

林が出鱈目を云ふのを貞子は落着いた顏で笑つてゐた。

『例の林檎だな。』

貞子は矢張り默つたまゝで、けれども非常に可愛らしい笑顏で笑つた。眞三は一瞬間我を忘れた。全身が樂しさに浸されてゐた。その時一つの眼がぎらつと彼の顏を射た。眞三はH――からずつと見守られてゐることを感じた。H――の方は見なかつたにも拘はらず、またH――自身は林と何か話しをはじめてゐたにも拘はらず。H――の眼はH――を離れて働いてゐた。大きな濃い茶の、稍血走つた憂鬱な目つきが絶えず彼の前にぎらつとした。

次ぎの間の時計が十時を打つた時、眞三は思ひきつて暇を告げた。而して林と貞子に送られて玄關で靴をはいてゐると、坐に殘つてゐたH――が續いて出て來た。

『なんだ、君も歸るのか。』

『うん、失敬しよう。』

H――は洋服ではなかつから、眞三が靴の紐をしめてしまつた時には、もう土間に立つてゐた。二人は連れ立つて外へ出た。

斯んなことは彼等の間には今まで决してなかつたことであつた。一人が座を立つ時には一人は殘つた。歸らう思つてゐる矢先でも相手が歸りかけると十分か十五分後にした。長い間にそれが極く自然に出來てゐた。この頃は殊に氣をつ

けた。彼等は避け合つてゐたのであつた。それ故歸りかけた相手に追ひついて一緒に歸らうとする程のことには、何か異常な意味が含まれてない譯はなかつた。眞三は並んで門を出た時から期待を持つてゐた。

『貞子さんのことについて何か云はうとしてゐるのだ。』

と彼は考へた。それは怖れでもあり、苦痛でもあつたと共に、幾らか冒瀆に似た感情を伴つてゐた。二人の武將が美しい捕虜の女について話し合ふやうなことでも話さうと云ふのか。思つたゞけでも不快なことであつた。眞三はH——の出樣一つでは毆りつけるかも知れないと云ふ氣さへした。にも拘はらず幽かな、執拗な一つの好奇心は絕えず彼を誘惑してゐた。それは彼の現在の足場はH——の眼にはどう映じてゐるか勝つてゐるのか、負けてゐるのか、——自信を持ちながらも常に彼を苦しめ惱ましてゐる焦慮が今夜のH——の態度で解決されるかも知れないと云ふことであつた。

梅雨があけたばかりで、黑く澄んだ空には星が低く無數に散ばつてゐた。餘り暑くもなく氣持のよい夜であつた。殊に森とした生垣つゞきの屋敷町の通りは、公園の中の小路でも步いてゐるやうな快感を與へた。H——は眞三の左側を稍下を向いて步いた。考へ込んで遲く步いてゐた。眞三も無意識に彼の步調に合せてゐた。而して胸をふくらませて待ち構へてゐた。けれどもH——は容易に口を開らかなかつた。彼等は默つたまゝ十分近く步いた。或る邸の大きな庭についで折れる一つの曲り角に出た時、眞三は彼に呼びかけられたやうな氣がした。ふり向くと彼は立ち留まつてゐた。が何んとも云はないで再び步き出した。眞三も聞かうとはしなかつた。二人はまた並んで默つて步いた。そのうちに沈默が段々苦しくなつて來た。眞三はいら立つた。

『——一體この男は何のためにおれについて來てゐるのだ。』

彼はH——に愚弄されてゐるやうな氣がし出した。でなければ探られてゐるのだ。探偵があとをつけるやうにつけて

來てゐるのだ。

『何を知るために。』

斯う考へてると彼は震へた。要するにH——も彼自身が知らうとしたものを知りたがつてゐるに外ならないであらう。——勝つて居るか、負けてゐるか。貞子の聲を立てない可愛らしい笑顔がふと暗い目の前に浮んだ。眞三は彼女から嫌はれてゐるとは決して信じられなかつた。けれどもどの程度までの親しみを持たれてゐるか——愛されてゐるかを思ふと餘りに頼りなかつた。その瞬間に於て殊にその不安が彼を脅かした。彼は今までにもつと大膽に踏み込んでおかなかつたことを後悔した。彼女を愛してゐることに氣がついた時、何故飛びかからなかつたか、何故その足下に身を投げ出さなかつたか。彼は唇をかんだ。自分の愛を告白してさへおいたならば、十人のH——が現はれたとしても、今ほどの不安は生じなかつたであらう。併しながら若し貞子の選擇が初めから自分でなかつたとしたら。——眞三は強い怖れと共に激しい敵對の念に燃えた。初めて意識してH——を嫉妬した。憎んだ。強情に默りつゞけて歩いてゐる彼が甚太く見えた。無言に威嚇されてゐる氣がした。眞三は反抗するやうに右の肩をあげた。而して前よりもずつと足早に歩いた。小さい四つ角に出た。まつ直ぐに行けば大通りであつた。電車から歸るとすれば眞三はその方へ行かなければならなかつた。けれども彼は林を訪ねた時にはいつもその角から暗い道を左へ曲つて、家まで三十分以上かかる淋しい山の手の夜道を樂しい空想に浸りながら歸つて行くのが常であつた。たゞ今宵だけはわざと電車を選んだ。彼は一刻も早くその途伴れから遁れたかつたのであつた。H——の下宿へ歸るには右の道を行けばよかつた。

『ぢや失敬。』

彼は帽子に手をかけて云つた。H——は驚いたやうに顔をあげた。それから幾らか震へた聲で、

『電車ですか。』

と聞いた。眞三の身體の向け方でそれを知つたらしかつた。同時に彼は何かを云はうとして躊躇してゐた。それから思ひきつて哀願するやうに云つた。

『もつと歩きませんか。』

『何か用事でもあるのですか。』

『さうです。』

彼はきつぱりした調子で答へた。二人は向き合つて立つてゐた。大通の方から流れ込んだかすかな光で、眞三はH――の燃えてゐる眼を見た。顏が引き吊つてゐた。眞三は落着かうとあせりながら矢張り引き込まれた。胸がどき〳〵打つた。彼は知らず〳〵H――の顏を睨みつめてゐた。

『新村君。』

H――はしやがれた聲で續けかけて、言葉をきつた。そのまゝ數秒間ぢつと眞三の顏を見つめてゐた。それから行きなり手を延ばして眞三の右手を引つたくつた。力一杯握りしめた。

『矢張りお別れしませう。――左樣なら。』

彼は手を放して、靜かに去つて行つた。この瞬間の彼の動作と言葉は非常に純眞で、熱情に溢れてゐた。眞三の胸は鋭くそれを感じた。彼はH――の全身から迸り出たものに打たれた。而して彼が行つてしまふと不思議な淋しさを感じた。彼はH――が何を自分に話さうとしたかゞ今初めて本統に分つたやうな氣がした。而して現在の自分の心持もどうかすると同じ願望に捕へられさうな氣がした。彼が追ひすがつて來たやうに、今度は彼の方がH――の後を追ふかも知れ

なかつた。——が、やつと踏み留つた。

眞三は深く感動しながら歩いた。この心持は彼がこれまでH——に對して抱いてゐた感情を根底から覆すに足るものであつた。彼は初めて偏見なしにH——を見た。誰よりかも彼の眞價を信じ得るとさへ思つた。けれどもこの新たな好感も今の場合に於てはたゞ彼等の苦しい爭ひを二重にするものに過ぎなかつた。彼の嫉妬と苦惱はそのために一層强まつた。

彼が林にまですべてを告白しようと云ふ決心を固めたのはその夜であつた。——併しそれ程の思ひをしながらも彼は直接貞子に訴へる勇氣はなかつた。臆病からではなかつた。それは寧ろ潔癖に近い謹愼であつた。

明けの日の午後彼は林を訪ねた。けれども林は留守であつた。引き返さうとして門を出ると貞子に行き逢つた。花の稽古の歸りだと見えて、らつぱ形の花の包みをさげてゐた。而して水色の洋傘をさして、少しうつ向き加減にして、何か一心に考へ事でもしてゐやうな顔つきをして、道の向側を歩いて來た。彼女は彼が思ひきつて近づいて聲をかけるまで氣がつかないらしかつた。吃驚して顔をあげた。彼であつたのを見るとあはてゝ、ちよつと顔を赤くして、優しい會釋をした。けれどもその後ではまた直ぐと變つて顔は先刻と同じ表情になつた。それはどんな感情を表はしてゐるとははつきり云ふことは出來なかつたが、一つの異常な嚴肅な陰影であることは疑へなかつた。何が彼女に斯んな顔つきをさせてゐるか、二人だけでもう少し打ちとけてものを云ふ辯がついてゐたならば、彼はどうかしたのかと聞かないではゐられなかつたであらう。それ程彼女のその時の顔は彼の注意を引いたのであつた。が、彼はさう云ふ風に話しかけることは出來なかつた。それで、今訪ねたけれども林は留守であつたと云ふことだけを云つた。彼女はいつものはつきりした落着いた調子で、

『兄は今日は叔父の用事で芝の方へ參りました。――それでも頓て歸つて來る頃でございますよ。』

と云つた。この返事が彼の胸を躍らした。引き返して待てと云つてくれさへしたら――彼はその言葉に運命を賭けた。が彼女はさうは云はなかつた。彼は落膽して、思ひきり惡くもぢ〳〵立つてゐた後で、別れた。

その夜林が訪ねて來た。彼はいつも程快活でなかつた。眞三もどうにかして今夜の機會に云ひ出し惡い話を云ひ出して仕舞はうとあせつてゐたので、いつになく二人の言葉はとぎれ勝ちであつた。或る瞬間彼は決心して話出さうとした。丁度その時林の方が一秒早く口を開いた。

『新村、君はH――をどう思ふ。』

『どう思ふつて。』

これ以上を云ふことは出來なかつた。眞三は或る豫感に激しく襲はれた。而して林の顏を見て怖れた。午後彼が貞子の顏の上に見たものは、今彼女の兄の顏に表はれてゐる表情に外ならなかつたから。彼はやつと續けた。

『H――がどうかしたのか。』

『妹に手紙を寄越したのだ。而して僕にも同じ意味のことを訴へて來た。』

彼は語り出した。H――は今日貞子が挿花の師匠の家を出て來るのを呼びかけて一つの手紙を渡した。

『林君へも別に郵便で出しましたが、あなたがそれをお讀みになつた上で林君に見せようと思へば見せても構ひません。』

と云つたのださうであつた。眞三が彼女に出逢つた時は、恐らくその出來事から十五分とはたつてゐなかつたであらう。彼は貞子が彼に呼びかけられてひどく驚いた樣子や、その顏に浮んでゐた特殊な表情に就いて悉く思ひ當つた。二

度目に呼びかけた者も、手紙を渡した者以上の思ひに震へながら近づいたのだと云ふことを、若し彼女があの時知つてゐたら――同時にまた彼はあの時の彼女の帯の間か、内懐かに此H――の手紙が隠されてゐたのだと云ふことに堪えきれない妬ましさを感じた。

『貞子さんは君にその手紙を見せたのかい。』

彼は妬ましいだけ、苦しいだけその話に深入りをしないではゐられなかつた。

『見てもよいと云つたけれども僕は見なかつた。見る必要がないから。――H――の心持を知るためなら、僕へ來た手紙で澤山だ。H――は愛を告白すると共に結婚の許しを乞ふて來たのだ。はつきりは云つてゐないが、何かの不安が彼をひどく性急にしてゐるらしく見える。』

眞三は震へた。彼はH――に一歩を先んじられたのであつた。今となつては彼はたゞ一つのことを尋ねて見るより外に仕方はなかつた。同時にまたその返事は運命からの返事であつた。彼は一番聞き度いことを聞くことが怖ろしかつた。

幸ひに林は話し續けた。

『打ちあけて云ふとこの話は母親が一番悦ぶだらうと思ふ。併し僕は何處までも傍觀主義を取る積りだ。斯う云ふ問題では本人の意志以外に決定法はないのだからね。』

『それは勿論だとも。』

眞三はその言葉に力をこめて云つた。同時にどうしても聞かないではゐられなかつた。本人はその申込を悦んでゐるのかどうかと云ふことを。

『さあ。それが僕にははつきり分らない――まだよく聞いても見ないのだが。たゞ非常に考へ込んでしまつたことだけ

は事實だ。」

一つの光がさし込んで來た。まだ不安な、かすかな光に相違なかつたとは云へ、それは彼のまつ暗になつてゐた胸を幾分明るくするに役立つた。眞三は前よりは元氣を取り返して云つた。

『――併しその話と僕がH――をどう見てゐると云ふことゝ何かの關係でもあるのかねえ。』

『關係なんてそんな大げさなことはありはしない。たゞ君のH――觀が聞いて見度いだけなのだ。と云ふのは、妹にさへ異存がなければ僕はこの結婚に反對する理由は持たない。H――がそれ程に妹を愛してゐるのなら彼の望みを滿足さしてやり度くもゐるし、さう不釣合な組み合せだとも思はないのだ。併し僕は餘りH――を甘やかし過ぎてはゐないかと云ふ氣が一方にある。詰まり、天性の感情のやうになつた二人の長い友情が、僕にH――の缺點を感ずる目を鈍くさしてやしないかを怖れる。その點で君の正しい批判を待ち度いのだ。――君は可なりH――を冷靜に見てゐると僕は信じてゐる。君には僕には感じられないものをH――から感じてやしないかと思ふ。露骨に云へば、君は何處か氣に食はぬところをH――に見出してやしないか。嫌な奴だと思つてやしないか。――若し間違つてゐたら許してくれ。機會がなかつたから今まで話さなかつたが、僕は久しい以前から君がH――を好いてゐないことを知つてゐた。同時にこの際君に依つて僕が知り度いと思ふのはそのことだ。忌憚のない批評を聞かしてくれ。それは僕のためではない。妹のために知ることが義務だと感じてゐる。』

林の言葉は眞三の心を突いた。たゞ一つの核を除いては、すべて彼から感じられてゐたことが分つた。而してその核を説明することは、――彼が聞かうとしてゐるものに答へることは、すべてを彼に告白することであつた。その機會が與へられたのだと彼は感じた。たゞ、はつきり云ひ表はされてないとしても、貞子の心が母親と共に初めからH――に傾

いてゐたとしたら――この怖れは彼を脅かせるに十分であつた。その場合に彼の愛を告白することは、彼女を混亂させ、友達には苦痛を與へ、愛する娘の上に開けかけた人生の曙を樂しまうとしてゐる善い年寄をば驚かせるだけに過ぎないであらう。必要はたゞ暫く默つてゐることではないか。今さし出されてゐる手を彼女が取るか、斥けるか、それを見極めることではないが。一歩をH――に先んじられた以上、彼は待つことが至當ではないか。――あらゆる考へが彼の胸の中を渦卷いた。が、如何なる怖れも、如何なる推理も、如何なる反省も、せめて自分の愛を彼女に傳へ度いと云ふ願望以上に强くはなかつた。運が惡ければ、これが殘された最後の機會であるかも知れないと思ふ恐怖は、彼に絕望的の決心を與へた。

『安心し玉へ。僕は今では君の感じてゐるやうにH――を見てはゐない。寧ろ彼のよい點を誰よりも多く認め得ると信じてゐる。僕はそれを斷言する。併しこれまで僕が彼を好きになれなかつたのは運命なのだ。二人は並んで立つだけで進みよつて和合することは許されなかつた。この意味を分つてくれ玉へ。――一羽の小鳥を中にした我々は爭ふ者だつたのだ。鷲と鷹だつたのだ。』

激しい驚きの色が友達の顏を蔽ふのを見ながら、眞三は押つかぶせて云つた。

『――僕が今日午後君を訪ねたのは、H――が手紙で云つたことを、直接君に訴へるためだつた。』

明けの日眞三は林から長い手紙を受取つた。それには林の心持がよく表はされてゐた。彼は妹(あんな田舍者と書いてあつた)に對する眞三の愛は夢想以上のものであつたと云てゐた。たゞ今少し早く彼がそれを知ることが出來さへしたら――、彼は何等の苦痛なしに純粹に悅べた筈だ、自から進んでも妹を說いたらう。たゞ今の場合となつてはそれ

は控えなければならないと思ふ。これが決してH――に對する僕の偏愛を意味するものでないことは分つて貰ひ度い。僕はたゞ二つの手がさし出されてゐる以上、選擇の權利は妹のものだと信じるのみである。同時にそれが僕に取つてどんなに苦しい傍觀であるかは君にも想像されないと思ふとあつた。而して明日の夜妹に、(母にも)話すと書いてあつた。それから、結果は多分手紙で知らせるとあつた。――その手紙を受取るまでには、早くても明日の朝までは待たければならないであらう。眞三はその一日の暮らし方を知らなかつた。日が入るとやつと夜になつたと思つた。夜が明けるとやつと朝になつたと思つた。併し第一便は彼を失望さした。而して漸く晝頃になつて屆いた手紙も話をしたと云ふことゝ、返事は手紙でするよりも逢つて云つた方がよいと思ふと云ふことゝ、來るのは困るだらうから午後訪ねて行くと云ふこと以外には何んにも書いてはなかつた。

二時頃に來た。

『あいつは餘程變つた奴だ。』

彼はまつ先に斯んな批評を下しておいて直ぐ話に入つた。

『君のことを話しても僕ほどけ驚かなかつた。――感じてゐたのかもしれない。併し自分には選擇は出來ないと云ふのだ。――』

『それが本統なら貞子さんには愛がないのだ。多分。H――に對しても、僕に對しても。』

『僕も最初はさうかと思つたが、よく聞いて見ると妹の心持は決してさうではないらしい。あれはそれを云ひ表はす言葉を持たないで惑つてゐるらしいが、もつと僕等の想像する以上の根本的な或る考へがあれを苦しめてゐるやうに思はれる。僕は妹が君を何んにも愛してゐないとは信じない。』

『H――をもか。』

『さう云へるだらう。』

眞三は續けて聞くことが苦しかつた。それで向きを變へた。

『母は。』

『母の方は單純な代りにはつきりしてゐる、母は不相應な結婚はしない方がよい。苦勞をするばかりだと云ふ意見だ。H――の家なら君の家ほど金はない代りに呑氣だと思つてゐるらしい。地道な母親としてはこれも無理のない考へだと思ふ。しかしそれだつて單に意見に過ぎない。妹の決心さへつけば故障にもなりはしない。』

『貞子さんに僕を逢はしてくれないか。』

眞三は強い決心を以つて終に云つた。林はちよつと考へてから答へた。

『妹が逢ふと云ひさへしたら。』

『逢ふやうに賴んで見てくれ。』

『――逢へるだらう。あれはしつかりしてゐるから。何處で逢ふ。』

『何處へでも來いと云ふところへ行く。』

『家でもいゝかい。』

『構はない。』

それでも母親に逢つたらと思ふと彼は顏が熱くなるのを感じた。

『それなら電話でゝも打ち合せをしよう。』

頓て彼が立ち上りさうにした時、眞三は躊躇しながら思ひきつて聞いた。

『あれからH――に逢つたか、』

『うん。』

林はわざと後を續けないらしかつた。

『若しH――が僕と同じことを頼んだら矢張り許されるのだね。』

『――妹さへ逢ふと云へば僕は留めない。』

それが正しい態度であることを知りながら、眞三は林が餘り自分に冷淡過ぎると思つた。彼は初めて林を恨んだ。

それから二日おいた明けの日の朝、林から今夜の七時に訪ねて來てくれと云ふ電話がかかつた。眞三は晝過ぎまでは辛抱して家にゐた。けれども夕方近くなるともう落着いてはゐられなくなつた。彼は横に射しつける暑い日の中を外に出た。足に任せて歩いた。最後には林の叔父の家に近い或る大きな神社の境内に來て、其處のベンチで日の暮れるのを待つた。その境内から向ふまで彼は十分で行けることを知つてゐた。約束の時間に餘りかつきり過ぎるのは極りが惡かつたので、彼は七時五分前にそのベンチを離れた。

取次にはいつも出る小さい女中が出た。而し通された林の部屋には貞子がたゞ一人でゐた。豫期したことではあつたけれども彼の胸は波打つた。

『皆さんお留守なのですか。』

彼は不必要なことを聞くと想ひながら、默つてゐるのが苦しかつたので聞いて見た。

『今晩は叔父の家で、花火を見ると申しまして、兄も母と一緒に出掛けました。』

と貞子は答へた。今日が川開きであつたのかと思つた。彼はすべてのことをこの頃は忘れてゐた。同時に彼のためにこの最も自然な機會を利用することに心を配つてくれた林の好意を輕く思つてはならないと考へた。昨日林を恨んだことを後悔した。

暗い庭を前にして、二人はそれから一時間以上其處に座つてゐた。眞三は何を云つたか殆んど夢中であつた。彼は感情の迫まるまゝに順序もなく一切を告白した。訴へた。彼女なしには生きられないと云つた。自分を救つて與れと願つた。貞子は極めて靜かな態度ですべてを聞いてゐた。顏色が赤くなつて、薄い口許を噛むやうに堅く結んでゐた以外には何等の動搖をも表はさなかつた。努力して表はすまいとしてゐるらしかつた。けれども彼がH――のことを云ひ出して、若し最初から彼女の愛がH――にあつたのならば、自分はどんなに苦しくとも默つて退かなければならない。併し兩方に對してはつきりした選擇を與へないことはH――をも、また彼をも、二人ながら滅ぼすことに外ならないと云つた時、彼女は身を震はせた。而して兩手で顏を蔽うて泣き出した。

『私は本統にいけない女です。本統にいけない女です。』

貞子は斯う繰り返しながらさも悲しさうに、むせびあげて泣いた。

『私を愛してはいけません、忘れて下さい。』

『H――に對してもあなたはたゞさう云ふだけですか。』

『それより外に返事の仕方はございませんもの。』

『さう云へばH――でも僕でもあなたを愛しなくなつて、忘れて仕舞へると思ふのですか。』

『忘れて下さい。』

『それよりかいつそはつきり愛してゐないと云つてくれた方がいいのです。』

『それ位なら何んにも苦しみはいたしませんわ。――私がどんなに切ない思ひをしてゐるか――あなたが優しく云つて下されば下さるほど、どんなに悲しいか、それが分つてさへ下さいましたら――。』

『それなら何故その譯を云つてくれないのです。』

『申せません。』

『ぢや云へないと云ふその譯だけでも聞かせて下さい。』

『――云へば愛想をつかされるばかりですから、』

それつきりで彼等は再び逢はなかつた。貞子が急に母親と共に歸り度がつて一緒に行つたと云ふ話を林から彼が聞いた時は、もう立つた後であつた。間もなく彼は田舍の彼女から一つの手紙を受け取つた。この手紙は彼が貞子から貰つたたゞ一つの手紙であつた。

『――すべてをお打ち明けいたすことが矢張り本統だと思ひますからこの手紙を書きます。例へ私があの時すべてをお話する決心がついたといたしましても、手紙で申すほどよくは云へなかつたにきまつてゐますから、今日まで待つて頂いたのが無駄ではなかつたと信じてゐます。それでもこの手紙はまだ隨分苦しい手紙でございます。決心をするまでには勇氣が要りました。何遍もやめにしかけました。でもやつと打ち勝ちました。――私はこれまでになりながら――あなたをあれ程苦しめておきながら、矢張り愛想をつかされることを怖れるのでございます。愛してはいけません、忘れて下さいと願ひながら、矢張り愛されて、忘れられないでゐ度いのでございます。私を嘲笑つて下さい。――

これ程に思つてゐて何故私はあなたの愛を受け入れることが出來ないのでせう。若し受け入れることが出來さへしたら、あなたよりは私の方がずつと嬉しいと思ひます。けれども今の私にはそれは六かしうございます。してはならないことでございます。――もし私が今無造作な心であなたの愛を受け入れ、あなたと結婚した後で、若しH――を思ひ出すやうなことがあつたら――反對にH――の愛を受け入れて、H――と結婚した後であなたの夢を見るやうなことがあつたら――この怖れが私を脅やかします。そんなことはあり得ないと信じ度うございます。けれども信ずることが出來ません。お氣を惡くなさらないで下さいませ。私はあなたとHとどちらを多く愛してゐたかと云ふことさへ、はつきり分らない場合がございます。或る瞬間はどちらかに片附けられさうに思へます。けれども他の瞬間を信ずることは出來ません。あなたをも、H――をもはつきり選ぶ勇氣が私にない譯をお分かり下さいますか。――斯んな女をあなたはまだ愛することがお出來になりますか。

それにしても、運命は何故あなたのみを私の前に現はしてはくれなかつたのでせう。何故私は二人の人を同時に見なければならなかつたのでせう。――母は佛教信者でございますから、私の前世の罪が深いのだと云つて歎きました。私はまた違つた意味で罰を受けたのだと信じております。私の餘りに迷い易く、感じ易い、而して脆い心に對して。人間は一日と一夜の時間を過す間に八億四千の誘惑を受けると云ふあの印度の言葉は本統に私のことだと思はれます。私には目に見えるもの、耳に入るもの、手に觸れるもの、すべてが羨やましいか、欲しいか、でなければ憎みか、悲しみでございます。金や地位のことはそれほどまだ自分自身の問題として考へて見る機會がございませんから痛切には感じませんけれども、その時になれば決して呑氣にはなれないだらうと思ひます。優れた才能、智慧、立派な性格、善い仕事、美しい容貌、勇氣、手腕、成功、これ等は同性の場合では悉く強い羨望であり、異性の場合では悉く激しい魅力でございます。

私は餘り引きつけられ過ぎ、心を奪はれ過ぎます。感じ過ぎます。お笑ひにならないで下さい。二年前ナポレオンは私の大事な戀人でございました。ルネを讀んでゐた間は私は毎晩シヤトオブリアンの夢ばかり見ました。運命は私のこの弱點を鞭打つために、あなたとH――とを同時に選べと命じたのでございませう。私が決して選び得ないことを知つてゐて。選んだ後の怖れに震へることを知つてゐて。――

私にお教へ下さい。結婚する多くの女たちは(又男たちは)斯んな苦しみを何んにも知らないですむのでせうか。私のやうな醜い惱みも持たず、怖ろしい不安にも脅かされることなしに、皆んな平和に愛を受け入れ、幸福に結婚し、安らかに夫の傍に、(男に就いて云へば妻の傍に)、眠ることが出來るのでせうか。――いゝえ、私は今は殿方のことは餘り考へ度くはございません。それは私の苦痛と疑惑を一層强くするばかりでございます。

實際、すべての人の結婚生活は私には常に神祕に見えます。

私はまた怖れます。人間は結婚前に一人で顔を赤くして來たやうな感情を、結婚後にも決して感じないと云ひきることが出來るものでせうか。その一つの事がその人の心をも身體をも以前とはすつかり別な物に變化さして仕舞へるのでせうか。それとも感じても皆んな默つてゐるのでせうか。直ぐ傍に寢てゐる夫に。――正直にすべてを話したら――あなただつても屹度その妻をお打ちになるに極まつてゐます。稀れにすべてを愛に包んで許してくれる寛大な夫があるかも知れません。でもそれが何になりませう。許して貰ふことは、眞實であり度い心のおぎなひには決してなりませんもの。少くとも私には許されるよりも、許されることの起り得ない境地を見出さなければ安心出來ないと思ひます。私見たいな迷の多い心がいつ其處まで行きつけるでせう。頭に灰をかぶつて砂漠の中へ遁げて行つたと云ふ人たちの心が今少し分るやうな氣がいたします。私は誰の顔を見ることもない國の果の果に行つて住み度いと思ふことが時々ござい

ます。

これで私がどんなにいけない、醜い心をもつた女であるか、お分かり下さることゝ存じます。斯んな女を愛することは一番不幸なことでございます。あなたは二度と私のことをお思ひ出しになつてはいけません。私はあなたに愛される價を決して〳〵持つてゐないものでございます。

私のこの手紙が若しあなたに新たな苦痛を與へるやうなことがあるならば、お許し下さい。――或は私は默つてゐた方がよかつたのかも知れません。例へあなたが聞くことを望まれたとしても、斯んなことを聞かされようとは夢にも思ひはなさらなかつたでせうから。でも私といたしましてはこれで漸く氣が休まりました。あなたの考へてゐらつしやる私は眞實の私とは非常に異なつたものだと信じますから。私はその儘にして置くことに堪えられません。どうかこの手紙でその私を引き裂いて下さい。

それにしても何んと云ふ苦しい目を見たことでございませう。斯んな時に素直にすぐ死ぬことの出來た昔の人が羨しうございます。死ねさへしたら――でも私にはまだ死ぬことは出來ません。生きてゐ度うございます。これから先きの生活を思ふとまつ黑です。どうして生きて行けるか分かりません。それでも矢張り生き度いと思ひます。併しどうしても死ぬより外に仕方のない時が來れば、案外落着いて死ねるだらうと思ひます。運命がもし私を憐んでくれるならば、自然に死が來るだらうと信じてゐます。

どうか私をお許し下さいませ。お忘れになつて下さいませ。でも憎まないで下さいませ。いゝえ、憎んでも構ひませんからお忘れにならないで下さいませ。覺えてゐて下さいませ。憐んで下さいませ。

いつまでも御丈夫でゐらつしやいませ。

御返事は下さいますな。このお願ひをあなたはきつときいて下さると信じます。』

時がすべてを押し出して行つた。學校を出た後では眞三も林も別々な世界に住んで殆んど逢ふことがなかつた。H――とは尙更であつた。何かの機會に眞三は、今銀行に入つてゐるH――がひどく遊んだ後で、その女と同棲してゐるといふ噂を耳にした。けれどもその時分には彼自身にも既に貰つたばかりの妻があつた。

貞子は母親が亡くなつて、また東京に來てゐたが、最近に叔父の懇意にする植田家の息子と結婚したと云ふ話を、或時久しぶりに出逢つた林の口から聞いたのは、あの苦しい一と夏から丁度四年目であつた。その時には彼はもう平氣に等しい心持で聞いた。林も餘り遠慮しないで話した。その息子は慶應出で、M社の社員であること、彼女は結婚すると共に夫に連れられて滿洲へ行つたことなどを。眞三のその時の心持に比べれば、その場でたつた一度聞いたゞけの彼女の夫の名前を、今日まで忘れもせずにはつきりと覺えてゐたのは、寧ろ不思議な位であつた。

次の朝、彼は疲勞の去つた後の快い氣分で目を覺ました。天氣がよかつたので一層愉快であつた。彼は暫く昨日の不安な思ひ出を忘れてゐた。事務的な、責任感の强い官吏風の心持以外に、彼の思ひを亂すものは何んにもなかつた。朝飯の食堂から歸ると、彼は東京で役所の机に向つてゐると變らない態度で、途中視察したものに就いての記錄を整理したり、また繪葉書を取り寄せてそれぞれの向へあてゝ書いたりした。妻の藤子には朝鮮銀行を右にして撮つた大連の大廣場の繪葉書に、――中々立派だらう。子供たちを注意せよ、と書いて出した。その子供は十一の娘の外に八つの男の子が一人あつた。娘には彼は滿洲の少女の繪葉書を、男の子には支那人町の繪葉書を送つた。彼は子煩惱であつ

た。

併し九時過に植田が自動車で迎に來た時から、彼の心持はまた一變した。平生の彼の胸には殆んど存在する餘地のないやうな思ひが湧き起つた。而して氣がついた度に彼は昨日と同じやうに非常に鋭くその同伴者を見詰めてゐたり、觀察したりしてゐた。彼は三十をまだ幾つも出ないだらうと思はれた。中肉の脊の高い男で、決して見苦しい顏つきでもなく、服裝も立派であつたけれども、何んとなしに引き立たない、愚圖らしいところがあつた。頸が不釣合に長くて、咽喉骨が飛び出してゐた。それが彼を大きな鳥かなぞのやうに見せた。而して彼は幾らかどもつた。

眞三は輕い失望に似た腹立たしさを禁ずることが出來なかつた。彼れはこれをあの貞子の夫だとは肯じ度くなかつた。餘りにかけ離れたものの如く感じられた。併し同時にそれは一つの安心でないこともなかつた。若しその男があらゆる點で彼自身を威壓するに足る條件を具へて現はれたとしたならば、もつと惡い苦しみ方をさせられたであらうから。――彼はまた貞子の結婚が決して幸福ではないと本能的に豫感した。

併し二人で乘つた自動車をその日午前に視察しようとしてゐた或る大きな製油會社の入口に捨てた後は、彼はまた平生の几帳面な、役人風の心を取返した。突然芽を吹き返して彼の心を奪ふやうに見えた昔の夢も、大豆から搾取するその油の特殊な製法や、機械や、用途や、それ等に關する面倒な統計上の數字以上に彼を引きつけることは出來なかつた。午後も同種類の會社を今一つ見た。而して夜は會社が彼のためにホテルで開いた晩餐會に出た。植田はその席には出て來なかつた。彼はそれに注意するつもりはなかつた。けれども矢張り見逃してはゐなかつた。

明けの日も彼は昨日と同じ日程で二三の工場や會社を見て廻つた。彼の後にはまた常に植田があつた。たまに十分か十五分二人ぎりになる場合があつた。彼は餘り口をきかないやうにした。植田にしても中央政府から來た地位の低くな

い官吏にどう對すべきかと云ふことはよく心得てゐたから、自分から話しかけるやうなことはしなかつた。それで二人は默り合つてゐた。

その晩眞三は田村のところに夕飯に呼ばれて行つた。もとロシヤの將官が住まつてゐたのだと云ふその家は、客間でも食堂でもがしりしてゐて立派であつた。而して內地からの客が珍しがつて、子供たちまで現はれて一緒に食卓についた。その食事は、彼が東京を出て以來の家庭的な晩餐であつた。子供たちの名前を聞いたり、年を尋ねたりしてゐる間に、彼の心はちよつと麴町の家へ歸つた。その時ひそかに彼を捕へてゐた或る目論見がなかつたならば、彼は妻や子供が急に戀しくなつたかも知れなかつた。

食事がすんで二人きりになつて煙草を吹かしてゐた時、彼は何氣ない風で尋ねて見た。

『あの植田と云ふ男はどうなのだ、利れる方かね。』

『いや、無能だ。たゞ社長の知つた人の息子だとか云ふので入れたに過ぎないのだらう。』

『東京のものか。』

『あゝ。家に金があると見えて、どうしてたりなんぞ僕等も叶はない風をしてゐるよ。』

『無論細君や子供はあるんだらうね。』

『いや、子供はないらしい、よくは知らないが何んでも細君が弱いと云ふ話だ。』

何が彼女をさう弱くしたか。あんなに若く、あんなに健康さうに見えてゐたのに。――其處へ子供たちを寢床へ連れて行つた細君の絹子が、熱い茶を支那風の入れ方にして持つて來た。而して

『どなたのお話。』

と聞きながらその傴夫の隣の椅子にかけた。彼女の方は夫よりは植田の妻のことを幾らか多く知つてゐた。貞子のことを非常に美しいけれども内氣な人だと云ふ評判だと云つた。婦人會などにも殆んど出ないし、また誰と云つて特別に親しくしてゐる人もないらしいと云つた。それから植田がかなり遊ぶと云ふ話も出た。

『あれで踊りがうまいんでございますつてね。』

絹子は笑ひながら夫の方を向いて云つた。

『そんな藝があるのか。ちつとも知らない。』

『ではあなた方との宴會の時には愼しんでゐるのですわ。A——さんのお話しでしたから嘘ではございますまい。』

『あの鳥が踊るかと思ふと滑稽だな。』

夫婦はおかしさうに笑つた。植田が彼等の間に有する地位はこの話ぶりでよく分つた。眞三は貞子が侮辱されてゐるやうな不快を感じた。にも拘はらず彼はもつと色々なことを聞きたかつた。

『併し夫婦仲はいいんでせうね。』

別に惡いと云ふ噂も聞かないと答へながら、その悧發らしい小柄な細君は彼の顔をちつと見た。彼はもう怪しまれないでそれ以上聞くことは出來ないことを知つた。

彼はその夜遲く、淋しい心持でホテルに歸つた。

貞子の結婚が幸福でないと云ふ豫覺は今ます〳〵强くなつて彼の心をかき亂した。それにしても何故あんな男と結婚したか、結婚についてあれ程の純眞を望んでゐたあの貞子が、何等の迷ひも怖れもなくあの男を選ぶことがどうして出來たのか。あの男の何が彼女を引きつけたか。——彼には想像されなかつた。たゞ僅かに殘されてゐる解釋の道は、母親

の亡くなつたことや叔父の勢力やを考への中に入れて見ることであつた。若しこれ等の事情からその結婚が彼女の意志の外で極められたものだとしたならば、——何と云ふ氣の毒なことであらう。彼はまた貞子が決して自分のことを忘れてゐないと思ひたかつた。而して彼がこの土地に來たことは恐らく、植田から聞いたかも知れない。それでなくとも新聞紙はそれを数へてゐるであらう。それならば、これ程に自分の心を揺り動かしてゐる昔の夢が彼女には何等の幻影をも起させないでゐるであらうか。彼を案内し、彼と共に居るために毎日出て行く夫を送つて一人で淋しい部屋に引歸した後で、彼女は何事をも思ふことなしに平靜にしてゐられるであらうか。——

併し彼は直ぐ氣がついた。自分が餘りに小說的な考へ方をし過ぎたことに。彼は自分自身を嘲笑した。——彼女なしには生きられぬと感じてゐた自分でさへ、二年たゝないうちに藤子と結婚することが出來たではないか。H——にしても同じではなかつたか。——彼女だけがどうして植田と結婚されない理由があらう。それが人生だ。運命の配置だ。その上の問題はたゞ共處にめい〳〵が如何に善き生活を築くべきかに外ならない——彼は斯う思はうとした。併し苦しかつた。

その後彼は尙ほ二日間T——市にゐた。一日は旅順に行つて來た。その間に一つづゝの午餐會と晩餐會と、それから試驗所で一度演說をした。豫定以外に見なければならない事業や製造所もあつた。彼は非常に忙しかつた。けれどもその土地に留まつてゐる時間が縮まつて行くと共に、立つまでに一度彼女を見度いと云ふ望みは、激しい力を以つて彼を襲つた。彼はそれを抑制することが出來ないやうに感じた。その方法と口實は無意識に常に彼に考へられつゝあつた。

『君の家は遠いのですか。』

彼は或る時植田に斯んなことを聞いた。ホテルにゐる時であつた。植田は半道以上あると答へた。併しそれ以上に町の名前や番地に亘つて聞くことは變であつた。彼はたゞそれ等の官舍もロシヤ人の殘した建物かとか、廣いかとか聞く

より外に仕方はなかつた。時々彼は苛立たしくなつた。彼は何故直截に斯う云ふことが出來なかつたか。

『君の奥さんは僕の知つてる方です。』

とか、または

『昨日偶然×——君に聞いたのですが、林君の妹さんださうですね、君の奥さんは。それなら僕はよく知つてゐるのでした。』

とか。戀をしたと云つても手をさへ觸れなかつた婦人である。その人を知つてゐると云ふだけのことに何の憚りがあらう。——また貞子にしても、彼が彼女の兄の親しい友達であり、自分の知人であることを何故夫に話し得ないのか、——植田がそれについて何んにも云はないのを見れば、彼女は默つてゐるに相違なかつた。——彼女は隱す必要はないのである。二人は彼女の夫の面前で笑つて久しぶりの挨拶をしてよい筈である。彼は斯う思はうとした。自分にしてもそれ以上のことを夢にも思つて居るのではないと。彼は自分の心に云ひ譯をした。併しそれを承認させることは出來なかつた。何が彼女の口を閉ぢさせてゐるか。——それを考へただけでも彼の平靜は失はれた。彼は惱み、苦しんだ。

彼女を見るために殘されてゐる方法は今はたゞ一つしかないことが、彼にははつきり分つた。それは彼が石のやうに冷靜になりきることであつた。でなければ、彼女が彼を見て洩らすかも知れない溜息のためには、妻も、子供も、家も社會的の地位も悉く捨て得て惜しまないかであつた。

この土地に着いて初めて植田に逢つた後で、彼が賴まうとして賴み得なかつた年齢は、此處でも役に立たなかつた。前のことを決心するには彼はまだ若過ぎた。後のことを決心するには年を取り過ぎた。

彼はその儘で天津に向つて去つた。

奉天から乘り換えた京奉線の頭等車では彼が唯一の日本人であつた。外には數名の支那の武官と文官と、二人の金持らしい年寄つた支那人と、若い西洋人の夫婦が乘つてゐた。滿洲では決して感じられなかつた、他國に來たと云ふ感じが初めて此處で起つた。彼は疲れて、元氣もなくなつてゐた。毎日無理をして睡眠が足りなかつた爲だと思つて彼は眠らうとした。けれども頭が冴えて眠れなかつた。それで食車に行つて早い晝飯を食べた時に、珍しく支那酒を一杯注がした。併しその強い酒の力も彼の憂鬱を取り去ることは出來なかつた。汽車が地平線の高くなつて見える直隷省の廣い野の中央を過ぎる頃には、彼は怖ろしく空虚な感情に悩まされてゐた。無限に續いてゐる窓の外の曠野は、その儘彼の心の姿であつた。淋しく、希望なく、陰暗で、且つ餘りに深い虚無であつた。而して彼はそれを充たすべき何物をも今は失つてゐた。彼はまた自分の乘つた汽車がその地上の廣い空間を無造作に走せ去つてゐることが、彼の現在の狀態によく似てゐると考へた。今度の旅行に依つて彼は自分の生涯の或る重大な線に近づいた。併しそれを突破する勇氣を持たないで、節関に迂廻し過ぎた。而して彼の人生には廣漠とした野が殘された。無限に廣く、無限に淋しい灰色の延長のみである。

何故思ひきつて貞子に逢つて來なかつたか、この後悔が新しく彼を苦しめ出した。彼は餘り怖れ過ぎたと思つた。そのことはもつと高い感情から考へてもよかつたことであつたと思つた。要するに彼等はこの地上に於て最も近い列に並べられた一と群れに外ならなかつた。幾億の人中の僅かな三四人であつた。不幸な運命が彼等を愛のみで繋ぎ合はせる代りに、憎みや、怒りや、嫉みや、悲しみを投げかけたとしても、それに預らない人々の群れに比べれば、遙か親しいきづなに依つて結ばれたものであつた。彼等は如何なる感情の中でもこれを忘れてはならない。而してその群れの一人がとれに氣がついて一層近く仲間に歩みより、初めて聲をかけて手をさし伸ばし、または久しぶりで再び逢ふ悦びを容

さうとする時に――それが彼等がこの地上で歩み寄り得る最も近い距離であり、漸く手を觸れ得る唯一の場合であるかも知れない時に、過去のたつた一つの出來事がそれを妨げ得る力を持つてゐるであらうか。――彼は彼女とその夫の上に祝福を祈り、その家庭生活がいつも樂しく平和であるやうに願ふであらう。而して自分の妻の名前や、子供たちの名前や、それから彼等の小さい年を彼女に知らせるであらう。彼等が丈夫な善い子供であることを悅んで貰ふであらう。而して一杯のお茶でも飮んで一時間か四十分、彼女やその夫と共に其處の客間に座はり度いと云ふだけの願がそれほど許され難いものであらうか。――この時の彼にはさうは思へなかつた。若しそれさへ出來たら――彼のこの苦しい惱みは容易に明るい透明な悅びに一變するであらう。而していつ思ひ出して見ても彼等の記憶は常に樂しい親密な存在として彼の胸に殘るであらう。――藤子に打ちあけて聞かせてもよい。さうすれば一層さつぱりとなれるであらう。――彼等のやうな關係に於てこの地上に住む運命を擔つたものはこれより外に救はれる方法はないと彼は思つた。これが最も光明に近い道だと思つた。

　これ等の空想は汽車に乘つてゐるうち彼を樂しませた。幾らか自分の感情に甘へ過ぎた考へ方で、實行には多くの困難があることに氣がつかなくはなかつたが、最上の理想である點には少しも疑ひを持たなかつたから考へてゐる間に彼の重い胸はだん／＼柔げられて行つた。而して十五年前のあのH――の力強い握手の意味が、今また新たな暗示を以つて心に迫つて來るやうな氣がした。辰三は彼が若しこの意見をH――に打ち明けるならば、H――はあの時の手をもう一度、誰よりも先きにさし出すに相違ないと信じた。彼はこの運命の悲しい道伴れのことをこれまでにない程のなつかしさで思ひ出した。同時にまた間の拔けた鳥のやうな、それで踊ををどると云ふ楠田に對して輕蔑を失つた。愛に似た强い親しみがそれに代つた。そればかりではなかつた、次の日の朝汽車が天津の停車場についてその客車を離れる時が

來た時、彼はその客車の若い支那人のボオイにさへ或る暖い感情を感じてゐた。彼は一枚の銀貨を餘分にその掌に殘して去つた。

天津と北京と、而して山東鐵道の沿線で見なければならない二三の事業を見て彼が青島に出たのはT──市を立つてから十日目であつた。而して彼の用事は其處で終つた。

彼は其處から眞直ぐに內地に向つてさしつかへなかつた。それを妨げる職務上の障碍は何んにもなかつた。而して五日目に出帆する凝北丸は丁度都合のよい時にその姿を棧橋に橫たへてゐた。內地をさして歸りを急いでゐる人たちは、爭うてそれに乘り込まうとしてゐた。その上五ケ月目毎にしか船の出ないことに對して不平を云つてゐた。民政署の若い官吏で彼のよく知つた男も丁度その船から歸ることにしてゐて彼を誘つた。──一緒にその船に乘りさへすれば、二日目には彼はもう下の關に着いてゐられるであらう。──けれども今一度T──市に行かうと云ふ望みは、いつの間にか強く彼を捕へて、この時には打ち勝つことの出來ない激しい力となつて彼を引きずつてゐた。何の用事が其處に殘されてゐたか──それは誰にも云へなかつた。彼はたゞ凝北丸の代りに榊丸に乘つた。

船を見捨てゝT──市の大棧橋に一步を下ろした時、彼は終にまたこの土地に來たと思つた。丁度豆類と木材の出盛りで、波止場やその構內に寄せ集められた、驚くべきそれ等の貨物の堆積は、その半島の尖端から放出されてゐる北滿洲の富の、最も目覺ましい光景であつた。汚いぼろを着た苦力(クウリイ)の群はその間を、驅け廻つたり、喚いたり、打ち合つたり、賭博をしたりしてゐた。併しこれ等の有樣も今は彼の興味を引くことは出來なかつた。實際彼は何物をも見なかつた。また何事をも考へなかつた、──これから何處へ行つたものか──どうして彼の待ち望んで來た機會を捕ふべきかと云ふこと以外には。兎に角彼はもう一度M社を訪ねなければならないと思つた。運がよければすべては其處で都合よ

く自然に開けて行くであらう。——併しＳ銀行にも用事があつたので彼はその方から先きにする積りで電車に乘つて銀行へ行つた。町の勝手も最初よりはよく分つた。

銀行では十五分とはかゝらなかつた。彼は受け取つたものを小鞄に入れて其處のがつしりした厚い石の段々を下りると廣場へ出て、また電車を待つた。彼は電車の來る方を見てゐた。すると反對の側から名前を呼びかけられた。

『新村先生。』

彼は何氣なく振り返つて見て、はつとした。植田が立つてゐた。

『こちらへはいつお歸りでございましたか。』

彼は丁寧に聞いた。而して眞三が再びその土地へ來たことを最初からの豫定であつたかの如く考へてゐるやうに見えた。それが何よりこの瞬間の眞三を氣安くさせた。彼は今着いたばかりでこれから社に行くところだと答へた。

『君は。』

『私はこの頃は社を休んでをります。』

『病氣でも惡いのですか。』

實際彼は前よりは幾らか痩せて、顏にも疲れた色が出てゐた。併し彼は病氣だとも何んとも云はなかつた。

『先生はいつ頃お立ちでございますか。』

『用事がすみ次第歸ります。』

何といふ返事だ、と彼は心の中で叫んだ。その用事が何の用事であるかを彼が若し知つたならば——眞三は荒馬の手綱をきゆつと引きしめるやうな氣持で胸を押へつけた。でなくとも斯うして今此處で植田に出逢つたことは決して彼の

考へてゐた順序ではなかつた。彼は先づM社に田村を訪ねた上で、間接な、成るべくわざとらしくない方法で植田にも逢ひ、自然に最後の目的の開けるのを待たうとしたのであつた。けれどもその廣場に立つて以上の立ち話をしてゐるうちに、あのことを話し出すなら今だと云ふ氣がした。植田が突然其處に現はれたのも、その最も自然な機會を彼に與へるためではなかつたか。――彼の胸はまた彼自身の抑制に反抗して急に騒ぎ立つた。彼はどちらとも決し兼ねた。

『少し歩きませんか。――社へ行つても田村はまだかも知れない。』

この言葉が云ひ譯のやうに出たのを心で恥ぢながら彼は先に立つて並木の方へ動きかけた。――話さうと思へば歩きながらでも出來る。――却つて、歩いてゐるうちにより良いきつかけが得られるかも知れない――植田は從順について來た。二人は廣い立派な道路の左側の並木の下を肩を並べて歩いた。京奉線の汽車の中で眞三を樂しませた空想が、この時また彼の心に甦つて來た。而してそれはもう空想ではなかつた。彼は自分の右側を歩いてゐるこの一人の男は、自分がこの地上で觸れ合つた最も親しい人間なのだと思はうとした。思はれないことはなかつた。眞三はそれとなしに彼に氣をつけた。而して彼に對する自分の以前の評價は餘り殘酷に過ぎてゐたと思つた。間拔けらしく見えたところは今は善良さうに感じ直された。才走つた氣障な點がなくていゝとさへ思はれた。實際彼は何處となしに變化して見えた。

『私も一兩日中に東京へ歸つて參ります。』

つぎ穂のない四五分の沈默の後で彼は出し拔けに斯う云つた。

『さうですか。』

眞三は併しそれだけでは止まり得なかつた。彼は粧はれる限りの冷靜で續けて聞いた。

『一人ですか。』

『はい。』

それならば彼の妻は――貞子は一緒ではないのか――たつた一人きりでこの土地に留まつてゐると云ふのか――而して彼はいつ立つと云つたらう――一兩日と云へば植田の出立の後に殘ることは貞三には決して六かしいことではなかつた。彼は極めて自然に手易くそれをすることが出來るであらう。――併し結句何をそれが意味するか。――

最も怖ろしい、同時に最も甘美な想像の颶風が彼を壓し包んだ。而して砂塵が目や耳や口を蔽ひ隱すやうに、その想像は彼の正しい判斷とその智惠と善い性情を昏迷させようとした。或る砂粒は大きな岩のやうに彼を打つた。併し或る一と吹きは黃金の霧のやうに快く感じられた。而して彼はどちらをも避けることが出來なかつた。斯うして彼はたゞ兩顏を蔽ふたまゝ、身體をすくめて心の四辻に佇んでゐた。最後に僅かな理性が塞いだ目を瞠した時、其處に見た乎でものは彼の平常の判斷や、汽車の中で得て先刻また彼に思ひ出させてゐた美しい空想などとは非常に違つた、一つの露骨な慾望のみであつた。――たゞ一人でゐる彼女を見ようと云ふ强い誘惑であつた。彼は何と云ふ譯はしても、自分の最初からの願ひは、若し得られさへしたらその機會を得ようとしてゐたのだと考へない譯には行かなかつた。併し彼は尙爭ふ力を持つてゐた。打ち負けてはならないと思つた。彼は矢張り今其處で植田に話し出して、彼が立つ前に彼等が三人で逢ふのが一番よいのだと思つた。それより外に自分を救ふ方法はないと信じた。でなければ彼は默つて植田と共に立つか、或はその前にこの土地を去るべきだと思つた。彼は話さうと決心した。――これまで何度も考へたあの通りの順序で。彼は口を開いた。――が、口から出た出た言葉は丸で違つてゐた。

『社用ですか。』

『左樣ではございません。――少し不幸がございまして。』

『それはいけない。誰か東京で亡くなつたのですか。』

『いや、家内が一週間ばかり前に急病でなくなりまして、遺骨を持つて歸ります。』

その日の午後、T――灣の大棧橋を離れた下の關行の汽船の一室には、この地上での今最も淋しい旅人として貞三が乘つてゐた。彼に自分の失つた二十代を再び持つことが出來ないと同樣に、決して再び持つことの出來ない大事な道伴れの一人を見失つた者であつた。とは云へ彼の悲しみも、その時不意に彼の心を打つた激しい恐怖に比べれば何んでもなかつた。――若し強ひて自分が逢はうとさへしなければ、彼女は死にはしなかつたのではなかつたらうか――これがその恐怖であつた。



紙幣を煮る鍋

上司小剣

一

『春田君！デスサンスウル！』

萬年町ハイカラと仲間に呼ばれてゐる一機關夫は、いつもの通り頭髮を逆立たせるやうに撫で上げて、原料香水で汚點(しみ)を拵へた白い手巾(はんけち)で額の汗を拭き〳〵、春田影彦の背後から、かう聲をかけた。春田はきよとんとして、デスサンスウルの意味を解しかねた。

春田たちの毎日〳〵汗水流して働いてゐる中央銀行の地下室へは、二三日前から新たに大きな、釜と言つてよいか、鍋と言つてよいか分らぬ、直徑一丈、高さ七尺ほどもあらうといふ鐵製の怪物が到着して、臨時に雇はれて來た四五人の職工が其の据ゑ附けにかゝつてゐる。

これまで機關夫監督の室になつてゐた物置を兼ねた場所は、新たに其の怪物の占領するところとなつて、監督は、豫備の發電機や、蓄電用のモーターや、電話信號

のモーターや、蓄電池や、配電盤の並んでゐる隣室へ追はれて來て、春田機關夫と汚い卓子を並べることになつた。

隣室に据ゑ附けられる怪物は職工の手で周圍を鋲でかしめられて、其の吼え立てるやうな聲が、がんがんがんがんと、引ツ切りなしに響いてゐる。大きな猛獸を捉へて來て、四肢の自由を失はせ、それをば人間が寄つて集つて苛責してゐるとでも言はふか、鐵の怪物は苦痛を訴へるやうに唸りつゞけてゐる。其のやかましさに、春田等はこの地下室から逃れ出る仕事をもがなと、電鈴の響いて來るのを待ち構へてゐるけれど、今日に限つて、まだ何處からも電器用具の故障を知らせて來ない。

鐵製の大怪物。――春田等の電氣機關夫は、それをば紙幣を煮る鍋と呼んでゐる。これまでは損傷紙幣や、古債券をば總べて燒き棄てることにしてゐて、今がんがんと凄まじい響きを立てつゝ大鍋を据ゑ附けてゐる室の隣りが、丁度紙幣や債券の火葬場になつてゐる。現に昨夜の十時に火をかけて、明日の十一時頃に灰を掻く筈で、紙幣に附いた人間の脂肪なぞが、鑛物のやうに凝固つてゐる一かけを、春田は郊外の森の中の暑い家へ、亡き愛人の父親の土産に持つて歸るのを樂みにしてゐるのである。其の紙幣や債券の火葬も、今据ゑ附けてゐる大鍋の工事が終れば、長年やつて來た燒却の仕事は、大鍋の方へ移つて、ぐつ〳〵煮立てた紙幣や債券が、うまく滓を棄てられ、どろ〳〵になつた紙の分子は、製紙場に廻はされて、元の紙に還り、かくして二度も三度も同じ勤めをするのである。

古い紙幣や債券を燒き場に入れる時は、地上の室々からえらい人が大勢下りて來て、立會の上で竈へ入れ、鐵の扉を締めて錠を下ろすのであるが、春田はこの物々しい光景をば、芝居を見るやうな心で、遠くの方から眺めつゝ、眇たる一機關夫の自分が死んだとて、迚もこんな丁寧な扱ひかたはしてくれないであらうと思ふと、何んだか寂しく寂しい氣持ちがしてならないのである。世に在る時は、多くの人々を喜ばせ、悲しませ、踊らせ、泣かせ、狂はせたての紙、

——人間の愚かな生活組織が自然に造り出したこの反古。—— 彼れはもう、丸い刻印を同く打ち抜かれて、一枚毎に窓を開けてゐるから、よしやそれが愚かな人間の手に渡つたとて、米にも砂糖にも換らない死物になつてゐるのに、まだかうやつて嚴かに、一種類づゝ別々の袋に納められ、打ち抜いた圓い刻印は刻印でまた別の袋に納め、丁重な上にも丁重にして、箱へ入れ、大高源吾の大槌でも到底破り切れないらしい鐵の扉に錠を下ろして、地上の室々から來たえらい人たちや、△△省の役人や、皆立會の役目を濟ませて、引き揚げるのは大抵午前十一時頃。それから夜の十時になると機關夫の略將は、遠くからスヰッチを切つて、鐵の扉の内部に電流を送る。其の刹那、春田はいつも胸がドキッとするのを覺える。鐵の扉は死の門とでも言ひたげな冷い姿をして、黒く閉ざゝれてゐる。内部に送られた電流は、忽ち發火して、豫め用意されてあつた備石に移り、それから紙幣や債券が燃えるといふ順序であるが、ひとしきり世に時めいたものゝ最後は、黒い扉の内部に包まれて、外からは一條の烟さへ見せない。

今日もまた昨夜入れた紙幣や債券が燃えつゞけてゐて、華氏八十九度の夏の地下室は、九十度以上に昇りさうである。

「春田君！デスサンスウル！」

萬年町ハイカラは、また春田に向つて、かう叫んだ。

二

小うるさく思つた春田は、睨むやうに萬年町ハイカラを振りかへつて、

「君、僕は日本人だから、日本語で言つてくれたまへ。イギリス人なら英語でいゝけれど。………」と、新米ながらも

もうこれくらゐのことは言へるやうになつてゐた。萬年町ハイカラは、面白さうに、ニヤ〳〵笑ひながら、チツと春田を見て、

『君もこの銀行始まつてから、學校の卒業證書を持つた機關夫の最初だといふ話だが、まだフランス語と英語の區別を知らんかね。』と言ひつゝ、春田の持つてゐたニツパを取りあげて、其の柄の先きで壁へ、Elevator と疵を附けて書き

『君デスサンスウルといふのはこのことだぜ、フランス語だよ。』と言ひ〳〵、また Descenseur とも書いて、二つとも横文字に唾液を附けて、ごし〳〵と指の先きで拭き消しながら、得意氣に鼻を蠢めかした。春田は飛永といふ變な苗字をもつてゐるこの機關夫が、どうしてこんな外國語なんぞを知つてゐるかと怪みつゝ、

『さうか、エレヴエターのことか、其のデスサン……何んとか言ふのは。』と、うち頷いて、感心した顏をすると、飛永はいよ〳〵得意になつて、ニツパを春田に返してから、『君、見て來たまへよ。デスサンスウルを、また綺麗なのに變つてるぜ。』と、春田の肩に手をかけて、地下室から押し上げるやうにした。

『さうか、それぢや見て來よう。』と言つて、春田は鐵の大鍋をかしめてゐるやかましい音の中から、暫らくでも離れようとして、石段を駈け上つた。

エレヴエターでは、仕事がないので、係りの男が、退屈さうに蹲踞んで、猫背を見せつゝ、煙草の烟りをうしろに流してゐた。

『二階へ。………一つ頼みますよ。』と言つて、春田は渡し舟にでも乘るやうに、ぽんと箱の中へ飛び込んだ。係りの男は、喫驚した顏をこつちに向けて、

『あゝア、御苦勞さま。屋根裏ですか。』と欠伸とゝもに言つた。

『えゝ。』と春田は曖昧に答へて、隅の方を見ると、細い鐵の枠へ結び着けた青い一輪挿しに、名の知れぬ白い花が、大きくポカリと咲いてゐた。

『綺麗ですね、君。』と春田は其の白い花を見詰めながら言つた。ふはりと霙の中にでも浮んだやうな氣持ちで、花も人も静かに上へあがりかゝつてゐた。

『えゝ、綺麗ですね。』と、エレヴエターの係りは無頓着らしい口振りで言つて、花なんかは見なかつた。

『いつもこゝには、綺麗な花が挿してありますね。』

『えゝ萬年町ハイカラの道樂ですよ。三日か二日おきぐらゐには、きツと持つて來て、挿すんです。頼まれもしないことを、厭やだね、僕等は。………毎日此處へ花を挿してたつて、一日休むと矢ツ張り日給を引かれますさね。』と、係りの男がほくそ笑ひをしながら言つてゐるうちに、元來が低い館の三階は、もう春田の足許にあつた。

『御苦勞さま。』

さう言つて春田は、三階の床を踏んだが別に用事はなくて、萬年町ハイカラの挿した草花を見に來ただけであつたから、其のまゝぼんやりと佇んでゐた。

『屋根裏の仕事は厭やですね。彼處は君、今日あたり百度を越してますぜ。』と言つて、エレヴエターの男は、ヂツと上の方を眺めた。春田はもう義理にも一度は屋根裏へ上らないわけに行かなくなつた。それで、すらくとエレヴエターの鐵枠を傳つて、屋根裏へ入ると、幾十年間に積り積つた塵埃のにほひが、古くさくぷうんと鼻を衝いて、雪の中でも歩くやうに、抜き足をしなければならなかつた。まんなかの高いところでやつと立つて歩くことが出來るくらゐで、軒の方へ近寄ると、殆んど四ツ這ひにならなければならなかつた。其處には室内電話の線が九十六條も絡み合つて、大蛇

かのたくつてゐるやうに見えた。暑いこと、暑いこと、確かに百五六度はあると思はれた。

三

そこ〳〵にしてまたエレヴエターに油を差すところから下りて來ると、先刻の男は白い花とゝもに、まだ三階に停まつてゐた。

『御苦勞さま。』

今度は向ふから春田にさう言つた。白い花もともに頷いて春田を迎へてくれるやうであつた。

『君、この花を持つて來る飛永君といふ人は、萬年町といふところに居るんですか。』と、春田はエレヴエターの男に問ふた。

『いゝえ君。』と、彼れは笑つて、『萬年町といふのは、貧乏人の住む町のことですよ。今はあんまり言ひませんが、元は下谷の萬年町に貧民窟があつたものですからね、萬年町と言へや、貧乏人といふことなんです。あの人は州橋でせう。隨分遠いところから通つてるんですが、あんなところへでも行かなけや、なか〳〵貧乏人にや花なんか作る地面がありませんや。何んでも朝四時に起きて銀行へ出て來るんですが、もつと近いところへ引ッ越すと、朝晩に二時間や三時間は助かるのに、それでは花が作れないと言つて、昔しなら泊りがけでなければ行かれなかつた板橋の奥の畑の中に住んでるんですよ。隨分變り者さね。』なぞと、エレヴエターの男の言つてゐるうちに、もう一階は足許にあつた。

『どうも有り難う。また直ぐ來ますから頼みますよ。』と言つて、春田は其の男よりも、白い花の方に向つて會釋した後に、エレヴエターの枠を出た。白い花は青い袴を穿いたやうにして、ガラスの一輪挿しに莖を浸してゐた。ほんの

滴か四滴ほどしかないと思はるゝ水を吸ひつゝにこ〳〵として麗はしく生きてゐる其の姿が、いぢらしかつた。

春田は亡き愛人濱江が、いろ〳〵の花を愛して、自身と美しさを競ふやうにしてゐたことを懷ひ出すと、俄に胸の塞がるのを覺えた。彼女の臨終の床の枕頭には當代一流の女流作家岩村小夜子から贈られた美しい大きな花束があつた。

濱江の死を限界として、すつかり中流社會を見棄てゝしまふことに、濱江の父濱野三郎とゝもに固く決心した春田は手先きで小器用に硯箱やペンやインキや算盤をいぢつて生活の種にすることを止め、全身の筋肉で働いて、手から口へ汗脊と共に食物を運ぶ群れに入らうとして、自ら進んでこの中央銀行の地下室に機關夫となつたのであるが、かうやつて働きつゞけて見ると、これまで住んでゐた中流の社會が、崩れかゝつた土臺の上に危い營みをやつてゐる姿を、まざまざと眼に映すことが出來るので、もう自分の元の生活が懷かしいとも戀はしいとも思ふ心は更らにないけれど、かうしたほんたうな生活を知らずに、死んでしまつた濱江のいぢらしさは一汐加はつて來るのである。

折柄月給の全部を、洋服や其の附屬品として、殘らず身に着けた上、まだ月賦の拂ひ滯つてゐさうな若い行員が、細い鎖を胸に輝かしつゝ、大跨に歩いて來て、長い顎の光つたのを一つしやくると、物も言はずにエレヴエターへ乘り移つた。係りの男はさも〳〵恐れ入つたといふ風で、ペコ〳〵して、エレヴエターを昇らせた。其の若い行員に眺められながら、だん〳〵に高く離れて行く白い花に、春田は名殘が惜しまれた。丁度自分の見棄てた中流社會が自分から離れて行くやうに、エレヴエターはもう自分の見上げなければならないところに底の裏を見せてゐた。何んとはなしに立ち去りにくいこの場の情景である。

全力を洋服に注いでゐるやうな若い行員の顏に、死相が現はれてゐたといふ氣がしてならなかつた。それは二三日前に北陸のある都會で變死したこの銀行の調査係のことを思ひ出したからであつた。其の行員はもう中年を過ぎてゐたが

出張先きで遊興中、妓樓の三階の欄干に凭れて、面白く騷いでゐるうちに、腰が滑つて眞ツ逆さまに轉がり落ち、綺麗に櫛目を入れた稍薄くなりかゝつてゐる刈り立ての散髪頭を堅い大道に打ち付けて、腦震盪の爲めに死んだのであつた。春田はもとより身分ちがひの其の調査係を見たこともないのであるが、同僚たちの噂さによつて、ほゞ其の風采を想像し、香奠集めの廻狀が地下室へまでも舞ひ下つて來たのを見て、一層其の人の變死に感慨を催すとゝもに、如何にも其の死にざまが當世中流紳士の典型であるかのやうに考へられてならないのであつた。それから後春田は、此處の銀行員が、自分たち機關夫どもを睥睨して、えらさうな顏をするのを見ると、「あゝア、あの人も今に高いところから落ちて死ぬよ。」と思ふとゝもに、其の額に死相の浮ぶのを見るのであつた。

四

蛙が池へ歸るやうにして、自分たちの地下室へ戻つて來ると、紙幣を煮る大鍋の鋲をかしめる音が、矢張りがん／＼と響いてゐる。春田は用もないのに、ふら／＼と三階の屋根裏へまでも舞ひ上つて來たことを監督に知られて小言を受けやしないかと氣づかつたが、監督はそんなことに頓着しない樣子で、汗の浮んだ顏を大鍋に向けて、外部から來た職工が、ヅボン一つの半裸體になつて、逞ましい筋肉に力瘤を現はしつゝ、二三人で大鍋を取り卷いて、頻りにハンマーを揮つてゐるのを見てゐた。春田も監督の背後に立つて、大鍋の唸る音に耳の破れさうな心地をしながら、もう見たくもないものをぢつと見てゐた。

其のうちに、立つてやつてゐた職工のハンマーが、ガアンと一つ鋲の頭に當ると、どうしたことか横へ滑つて、大鍋の太ツ腹を掠めた上、跪いて小さな鋲をかしめてゐた職工の額に當り、餘力がなほ小鬢をも打つて漸く止つた。

ハンマーに額をやられた職工は『アツ』と叫ぶなり、忽ち後へひツくりかへり、身體を硬くして、動かなかつたので過ちを仕出かした職工が、ハンマーを投げ棄てゝ馳け寄ると同時に『やられた。やられた。』と叫ぶ聲が方々に起つて、居合はせた人間は、皆倒れた職工の周圍に集つた。

『××君、しツかりしろよ。』

『怪我はしてゐないよ。』

『大丈夫。大丈夫。』

『喫驚の方が大きいんだ。』

ぴたりと止んだ大鍋の唸りの代りに、がや／＼と口々に叫ぶ聲の中から、かういふ意味が聞き取れた。倒れた職工の額のあたりを覗いて見ると、成るほど怪我はなかつた。あの大きなハンマーが當つたのに、疵がないとは不思議だと疑つて、春田は外部に疵の現はれないのは、内部の損傷の甚だしいのを示してゐるのではあるまいかと考へて、九十度に近い暑さも、急に氷點まで下つたやうに、全身が冷りとした。

よく見てゐると、それでも額の薄皮が剝げて、さう赤くもない血が少しにじみ出してゐた。小指のところにもそれと同じほどの疵が出來て、これは高く瘤になりかゝつてゐた。妓樓の三階から轉がり落ちた調布係の死にくらべて、同じ職務殺でも、これは實に立派な最後だと、春田は痛ましい感激に胸を抱いてゐた。

がや／＼騷いでばかりゐて、誰れも醫者の許へ馳け付けようとするものゝなかつたのを、春田も實は後で氣がついたので、この時はぼんやりしてゐたのであつた。

昏倒したと思はれた其の男が、突然むく／＼と起き上つた時は、取り巻いてゐた人々が皆あツと驚いて八方へ散ると

でも言はなければならぬ風に後退りした。起き上つた彼れは、今頃になつて『あッ痛ッ』と叫びつゝ、額と小鬢とを押さへたが、何を思つたか、また其處を離して、自分の取り落した小さなハンマーを拾ひ上げた。蹲つてこの職工の額へ大きなハンマーを當てた職工は、復讐のハンマーが自分の頭へ向つて來るのだと思つたらしく、逃げ出しさうな腰つきをしたが、傷ついた職工は、くるりと大鍋の方に向ふと、元の姿勢に跪いて、またがんがんと小さな鋲をかしめる仕事を始め出した。

一同は驚きの顔を見交はした。春田は彼の職工がきッと腦をやられて、精神に異狀を來たしたのだと思つた。すると彼れは、がん／＼と十回ばかりも小さな鋲をかしめると、忽ちハンマーを棄てゝ、浴室の方へ走り出した。一同はもうどうしても、この職工の正氣でないことを信じないではゐられなかつた。

浴室へ驅け込んだ彼れの後から、一同がぞろ／＼と蹤いて行くと、彼れは水道の栓から水をじやア／＼と出して、額と小鬢とを洗つてゐた。其の樣子は氣が狂れたものとばかりも見えないので、一同は彼れの背後に半圓形を作つて、水藝でも見るやうにそれを眺めてゐた。

五

傷を洗つた上、さう汚れてもゐない手拭で鉢卷きをした職工は、大勢の立つてゐるのを不審さうに見て、大鍋の間へ立ち戻つた。彼れの仲間の三四人は、彼れの傍に摺り寄つて、『君ッ、どうしたい。』なぞと、頓狂なことを問ふた。中にも彼れの額へハンマーを當てた職工は、

『君ッ、ほんとに濟まないことをしたよ、痛いだらう。休んで養生をしたまへな。』と、心配氣な顔をして、謝るや

ちに言つた。

『いや、何んともないよ。眞向からそいつが來ちや、たまらないがね。このタンクの横ツ腹へ一つぶつかつてから、こいつへ來やがつたんだから、すツかり力が拔けてたよ。だけど驚いたね、其の大きなやつがこいつへ來たんだから。』と彼れは左の手で鉢卷きの上から額を押さへて、右の手で、自分の額を掠めた大きなハンマーがコンクリートの床の上に横たはつてゐるのを指さした。

『御免よ。』

もう大丈夫と思つたのであらう、過ちをした職工の顔に漸く微笑が浮んで、砕けた言葉でかう言つた。

『あいよ。』と傷ついた男も、戯れて答ふるまでに元氣付いた。

『さうたいしたことでもないのに、どうしてまたあんなに大袈裟なひツくりかへりやうをしたんだい。ほんとに膽ツ玉が消ぶへしたぜ。』と、彼等の仲間の一人は、稍苦情らしくさう言ふまでに、すツかり安心してゐた。

職工は皆ハンマーを取り上げて、彼等にはタンクと呼ばれてゐる大鍋が、また、がんがんとやかましく唸り始めた。大きな鋲も小さな鋲も一時にかしめられて行つた。春田は監督とゝもに、時々鉢卷きをした職工の様子に氣を附けてゐたが、彼れには何んの異狀も見せずに、一人前の仕事をがん／＼とやつてゐた。ハンマーを揮ふ腕には高く力瘤が現はれてゐた。

『えらいもんだね君。……』と、監督は感心の眼を瞠つて、ヂツと春田を見た。

『さうですね。』と、春田も感心した風をして言つたが、監督の感心と、春田の感心とは、並行線のやうにして二條に並んでゐながら、それが決して、先き／＼で一つに合する性質のものでなかつた。

監督は鍛冶工の出身で、機關夫全體の監督に當つてはゐるものゝ、森田と今一人の同僚鈴木と二人でかゝつてゐる電氣のことなんか、どちらかと言へば、贅澤な勞働のやうに思つてゐる。

一體、人間の生活に便利と安易とを與へるものを、贅澤な沙汰だと考へるのは、未開の社會に有り勝ちのことで、便利品即ち贅澤品となつてゐる傾向は、まだ〳〵なか〳〵拔け切らない。電燈や電車を贅澤品扱ひにするものは、漸くなくなつたけれど、同じ電氣關係の品物でも、それが電話となると、どうもこの未開の都市で、動もすれば贅澤品に見られやうとするのは、それの架設權が法外の市價を有してゐるといふ滑稽な事實によつて證明されてゐる。加入者一人の増加は全加入者にそれだけの便利を加ふるもので、社會の全員に行き渡つて、初めて便利の完成を見るのであるが、それをば僅少な數に停滯させて、高價で賣買する人間どもの愚かさを、この國のこの都市に於いて見るのである。太陽が若し金を出したものゝ上をのみ明るく照らして、高價の支拂に堪へ得ないものゝ足元は、常に暗黑だといふ事實が、若しあつたとすれば、どうであらう。それから考へると、人間が電氣を利用することは、まだどうも太陽の光と熱とに恵まるゝほど公平に行つてゐないで、便利な電氣は贅澤品として扱はれやうとする。電話や電氣ストーブや電氣鍋や煽風機のたぐゐを、贅澤品と見ることが、いつになつたら全く拔け去ることであらう。

人間の勞力を省くべく發明され、改良されたもろ〳〵の機械が、資本家といふもやしのやうな、贅澤な人間に濫用されて、たとへばこゝに三人の機關夫でやつてゐた仕事を、一人の機關夫で間に合ふやうな機械が出來たとすると、其の機械は大きな人道の上から見て、恐らくは三人の機關夫の勞力を三分の一に減じさせて彼等にそれだけの安樂を與へるのを當然としなければならぬ。けれども資本家といふものは、さういふ場合に大抵、機械の與ふる便利を自分の方ばかりに奪ひ取つて、三人の機關夫を一人に減じ、其の一人からは矢張り前の通りの勞力を絞り出させてゐる。科學の力を

人間全體に與へた精巧な便利な機械も、勞働者には全く棚の上の牡丹餅で、それがひとりでに落ちて來て口へ入るのを待つには、餘ほどの根氣を要する。さりとて其の牡丹餅を突き落しにかゝるのも生命がけの仕事だ。

あゝア、勞働者に取つては、どこまでも、便利なものが贅澤なものだ。——さういふ腹が、始終監督の方にある。それだから、同じ機關夫でも、電氣の方にかゝつてゐるものは、兎角贅澤な仕事をしてゐるやうに思はれ、がんがんと大鍋の鋲をかしめてゐるものゝ、ほんとうに働いてゐるやうに見られる。鍛冶工が本業の監督には、殊にさういふ腹がある。

『えらいもんだね君。……』

監督は再三再四、この言葉を繰り返した。たとへ、外れて掠つたのだとは言へ、機みのついたあの大きなハンマーで額から小鬢をやられてぶつ倒れながら、むく〳〵と起き上ると、冷水で傷を洗つて、手拭で鉢卷きをした姿で、また働くといふ其の勇敢な動作。

監督の感心するのは其處であらう。

『さうですね。』

さう監督に答へて、首を傾けてゐる春田の感心は、また別にあるのだ。

六

がんがんと鋲をかしめられる大鍋の唸りのなかへ、合ひの手を入れたようにして、電氣機關夫専用の電話のベルが、チリリリリンと、斑だらけの卓上に鳴り響いた。監督が出て、電話を受けてゐたが、『はい、はい、はい。』と返辭を

したゞけで、受話器を置いて、手拭で鼻の上の汗を拭いてから、

『春田君、御苦労だが、三階の屋根裏へ上つてくれたまへ。分つてゐるかね。エレヴエターの油を差すところから這ひ込むんだが、大變だよ。』と、だいぶ氣の毒さうにして言つた。春田は先刻一寸した出來心で上つてみた屋根裏の塵埃の積つたところが、いよ〳〵ほんとうの仕事場として、自分の上にやつて來たかと、少し恐れをなしながら、

『えゝ知つてます。相木君によく教はつておきましたから。……しかし、何をしに行くんですか、あの屋根裏へ。』と、悄氣がゝりな顔をして、眉を八の字に寄せつゝ訊いた。

『また一本殖やすんだとよ、室内電話をさ、……始終減したり殖やしたりしてゐるから面倒だよ。……君ツ、氣の毒だが、三階の屋根裏に、室内線が百本ばかりのたくツてゐるからね、其のうちであいてるのを探して、繫いでやつてくれたまへ、あいてるのがなかつたら、新らしく引かなけやならないが、きツとあいてるのがあるよ。一時の氣まぐれで、此處にも一つ電話が欲しい、あゝよからうぐらゐで、茶飲み話の餘りが、こちとらの方へいんけんの仕事になつてやつて來やがるんだから、やり切れねえや。』と、監督は、がんがんがんと耳の破れさうに、大鍋が唸つて、地下室の空氣を波立たせてゐるなかで、漸く不平を漂はせながら言つた。しかし其の不平は、彼れの咽の底から出たものでなくて、この若い日傭りに、春田を此三階の屋根裏へ上らせる爲めの、口先きだけの御機嫌取りらしかつた。

『あゝさうですか。ぢや行つて來ます。』とだけ言つて、春田はニッパの柄で、ごし〳〵と[illegible]を落したから、がんがんと大鍋の唸つてゐる地下室を出ようとした。大門石の階段をば、猫と爪先きを立てゝ昇つて行くと、上から來た萬年町ハイカラの雅永が、春田の變な顔付きを怪しむ風で、ヂッと見詰めつゝ、

『どうかしましたか。』と、黄色い聲をして問ふた。

『いゝえ、どうもしませんo』と、春田も黄色い聲の口眞似をして答へたが、飛永には眞似をされたことに氣づかない樣子であつた。

『何處へ？』

『三階へ。』

『屋根裏？』と、飛永は高く上を指さして、『ヴエリー、コール。』と、にやり笑つた。

春田は、氣障な男の態度から言葉に、蚰蜒の走るのを覺えながら、さツさと青い作業服に風を切つて行き過ぎると、飛永は飛ぶやうに追つかけて來た。靑い服が靑い服を捉へて、言ふことは、

『君ツ、僕の花、見てくれましたか？　エレヴエターに挿してある。……』と、其の聲は一層黄色くなつた。

『えゝ、見ました。白い花ですね。』と、春田は靑い袖を振り切つて、逃げ出した。

『あの白い花の名、知つてますか。』と言つた飛永の聲は、辛ふじて春田の背中に屆いたが、春田はもうそれに答へないで、エレヴエターに向つて突進した。

七

また白い花とゝもに、エレヴエターで三階へ上つた。この花を育てた飛永は、厭やな男であるけれど、この花は幾度見てもいゝ花である。濱江の精の一部分が、花となつて地上に咲き出でたかと思はるゝほどに、可愛い花である。春田はたまらなくなつて、其の花に口づけをした。花は冷めたかつたけれど、温かい濱江の唇が懷ひ出された、今にもこの白い花が、赤い唇のやうな色に變りさうな氣がしてならなかつた。

高く屋根裏へ飛び上つても、白い花はまだエレヴエターの枠に掛けられた青い一輪挿しの中から、仰向いて自分を見送つてくれるやうであつた。

『行つていらつしやい、氣をつけてね。』と、さう言つてゐるのだと思はれた。

一度首を引ツ込めて、またもう一度殘り惜し氣に覗いた時は、エレヴエターが、でツぷり肥つた身體を純白な背廣に包んだ紳士を乘せてゐるところであつた。係りの男はペコ〱してゐるし、白い花までが、媚を含んで肥つた紳士を迎へてゐるやうであつた。春田は何んとなく腹立たしかつた。亡き濱江が世にある頃、青樹といふ詩人で文學者を兼ねた中年の男に誘惑されかゝつた折りの不快と不安とが、胸の中に甦つて來たのを感じた。

濱江は重い病に罹るとゝもに、青樹に動かされたことを悔いて、すッかり懺悔をした。さうして、其の靈魂の全部を自分に捧げると誓つて死んで行つた。けれども、彼女が、――誘惑され易い彼女――が、若し生きてゐたら、自分は絶えず不快と不安とに襲はれて、嫉妬のうちに、自分の方が死ぬことになつたかも知れない。濱江の死は濱江といふものゝ全部を自分のものにする唯一の途であつた。屋根裏の住所を移つた歸りには、あの白い花を窃と抜き取つて、揉みくちやにしてしまつてやらう。何んだか濱江の精の一部分のやうに思はるゝあの白い花をばあゝして多くの男に眺めさせておくのは厭やだ。

春田はさういふ妙な、不可解な氣持ちになつて、うツとりと、一階へ下りて行くエレヴエターを見下ろしてゐると、何んのことだ、白い洋服の肥えた紳士が、一輪挿しの白い花を抜き取つて、頻りに匂ひを嗅いでゐるのが、豆のやうに小さく眺められた。春田はハツとして、屋根裏から轉がり落ちさうになつた。

漸くに足を踏みしめて、井戸を覗くやうに、一階の底を見下ろすと、肥つた紳士の白い影は見えないで、白い花かも

との青い瓶に挿されたのを、微かにそれと覗ふことが出來た。春田はほッと安心したい氣持ちになつて、青い作業服の塵を拂ひつゝ、更に塵埃の中に進み入つた。

屋根裏の室内電話線は、九十六本あると、同僚の相木から聞いてゐたが、ほんとうに長い蛇の縺れ合つてのたくつたのを見るやうな、其の線の集合の中から、使つてゐない分を拾ひ出すといふ仕事は、なか／＼容易でなかつた。春田はニッパの柄で、こじるやうにして、一つ／＼細い線を調べた。近寄つてよく見てゐると、蛇にしては細過ぎるし、蚯蚓にしては太過ぎるといふやうな、其の塵埃まみれの長いものゝ手さはりは、可なり氣味がわるかつた。細いけれども長い、それを傳つて塵埃の中に足を運ぶ辛らさは、兎ても地上に働いてゐる人間の想像も及ばないことであつた。午後二時頃の太陽は、屋根の銅板に火の雨を注ぎかけて、積つた塵埃をも氣體に化しさうな熱を屋根裏に滲み透して來る。塵埃とゝもに溶けさうになる苦熱に、汗はもう兎ても拭き切れない勢ひで、額から鼻から、ぽた／＼と塵埃の中へ落ちる。動もすれば眩暈を起しさうになるのを、チッと堪へて、春田は幼い頃父から聽いた長い／＼蛇の話を思ひ出しつゝ、長い電話線を手繰つて行つた。

八

長い／＼蛇は、廣い／＼太洋の中に棲んでゐる。彼れは腹の方の鱗の間に脂肪がたまつて痒くてたまらなくなると、航海中の船を目がけて其の綫脊を載せ、する／＼と横さまに船を滑べつて、左右の舷で腹を掻いて行く。それが其の長い蛇に取つては、非常の快味なのであるが、さうしてたゞ船で腹部を掻いて行くといふ動作のほかに、決して害を人間に加へないから、慣れた船員は少しも驚かないで、船の上を通つて行く蛇の身體を見てゐる。近づいて其のゴム製の太く

長いホースのやうたものを捏でつゝ、する〱と滑つて行く奇怪な海蛇の蜿蜒を潤つたりする。何んでもこの地球上にこれほど長いものがよく棲まれるものだと呆れてしまふ長さで、三日三夜もつゞいて船の上を滑つて行くが、それでまだ尻尾はやつて來ない。頭は遙かに水天髣髴の彼方に去つて、望遠鏡を出しても見ることは出來ないから、今船の上に載つてゐる部分を突いたとて切つたとて、尻尾でしばくことも、口で噛むこともならない。そこを見すました船員は、鋭い刃物を持ち出して、右舷のところで頭の方に向つた部分を、スパリと胴切りにすると、赤い切り口が其のまゝする〱と船から落ちて、海に浮びつゝ、前半身とゝもに遠く泳ぎ去つてしまふ。船員は急いで右舷のところで、尻尾の附いた部分を同じやうにスパリと胴切りにすると、後半身は海の上に殘つて、長い丸太を流したやうに漂つてゐる。さうして船には丁度筒切りにされた蛇の胴がぴつたりと据ゑ付けたやうになつてゐるのを、多くの船員が集つて、皮を剥ぎ骨を抜き、美しく白い肉を料理して、さしみにもすれば、煮物にもするし、また蒲焼にもして、各舌鼓を打つ。――

さういふ夢のやうな幼い頃の話を、うツとりと思ひ出して、春田は長い電話線の束に捉まりながら、太陽直下の砂漠にも似た熱い屋根裏に立つてゐた。華氏の百十度を越えてゐる暑氣も、この長い〱蛇の話を思ひ出した春田には、さして苦痛を感じなくなつたのである。

暑さが一變して涼しさに變つた。腋の下には氷を挾んでゐるやうな冷たさがやつて來た。脚もとがぐら〱と船のやうに動き出した。やつて來た、やつて來た。長い蛇がやつて來た。すら〱ぬら〱して、眼の前を通る。船だ、船だ。自分は船に乗つてゐるのだ。蛇だ、蛇だ。長い蛇だ、長い〱蛇だ。矢ツ張りほんたうだ、ほんたうだ。亡き父に嘘を言はなかつた。うまいだらう、この蛇の肉は。……美しく白い肉だらう。さしみにもなる、煮付けにもなる、焼いてもいゝ。誰れか早く來て、筒切りにしないか。此頃はこの中央銀行の經營困難で、一同に出る晝飯のお菜が、油揚げばかりにな

つた。『此處で銀行の上の空に鳶がドッサリやつて來ては、油揚げを狙つて、幾つも〳〵輪をかいてゐる。屋根の銅板は鳶の糞だらけだ。』と誰れかゞうまい惡口を言つた。來た、來た、來た。到頭賄ひかたがやつて來た。大きな庖丁を持つてやつて來た。あんな大きな庖丁は、何んのために拵へてあつたのだらう。矢ツ張りこの長い〳〵蛇を切る爲めに備へてあつたのか。明日から毎夜のお菜は當分蛇の油燒だらう、上は總裁より下は機關夫に至るまで、蛇の肉でお腹がいツぱいになる。──

『おうい、おうい。……』

誰れかゞ遠いところで呼んでゐるやうだ。この骨を戻せといふのだらう。蛇はどうした、もう切つたか。切り口は赤かつたか、白かつたか。おう冷たい、冷たい。誰れだ、誰れだ、僕の頭へ水を浴せたのは。──

『春田君、春田君、氣がついたか。しツかりしたまへ。』

さう言つたのは、監督の聲だ。何んだか大勢の人がたかつてゐるぞ。守衛長の背の高い姿と、營養不良らしい蒼ざめた顔とが見える。おや〳〵門衛の兒島爺さんも來てゐるな。──

『どうしたんです君。此處は何處です。僕は船に乗つてゐる夢を見てゐましたよ。長い蛇が出て來てね。そいつを賄ひかたが大きな庖丁で、……』

『何を言つてゐるんだ春田君、しツかりしたまへ。』と、監督は叱るやうに言つた。

『何處です、此處は？ あゝ宿直室ですね。』と、春田はきよろ〳〵四邊を見廻はした。此處の電鈴(ベル)がわるくて、夜の九時頃までかゝつてなほしたのを覺えてゐる。線が被覆の中で切れてゐて、それを發見するまでに二時間を費したのだ。ある時は暑かつた、辛かつた。……暑かつた、辛かつたと言へば、今日は三階の屋根裏へ仕事に上つた筈だ。あゝさう

だ、それをどうして此處へ下りて來たらう。……

さう考へると、春田はまた塵埃臭い屋根裏の、燒け付くやうないきれいが、此處まで自分を追つかけて來てゐるやうな氣がして、再びぐら〳〵と眩暈のするのを覺えた。

九

二度目にハッキリと我れに返つた時は、守衞長の榮養不良らしい顏だけが枕頭にあつた。宿直室のさう柔かくもない蓐蓙で、濡れ手拭を額にして、仰向けになつてゐる自分を發見した時、春田は言ひ知れぬ心細さに打たれた。額へ手をやつてみると、濡れ手拭は湯で絞つたやうに暖くなつてゐた。

『どうですね、君。ほんとに危いところだつたよ。三階の屋根裏で君は電話線に捉まつて白眼を剝いたまゝ絶息してたさうですよ。あの花好きの萬年町ハイカラがさう言はなかつたら、醫者もうツかり忘れてたやうだし、エレヴエターの男は、全くエレヴエターと同じで、機械みたいな人間だから、御苦勞さまとか、お早うございますとか、いろ〳〵お世辭は言ふが、其のお世辭も、蓄音機みたいなものでね、誰か昇つたやら降りたやら、ちツとも覺えてやしないんです。今夜一晩あのまゝ、君が屋根裏で放つとかれたら、幾ら騷いだつて、もう助からないね。ほんとに危いところだツたよ。』と、守衞長は外してゐた制服の釦を、一つ〳〵丁寧にかけながら、痛ましさうな顏をして言つた。

『新聞に出るところでしたね。僕のやうなものは、そんな、鼠みたいな、悲慘といふよりは、滑稽な死にかたでもしなけれや、新聞に名の出ることもありますまいよ。』と、春田は寂しく笑つた。

『ところが君、新聞には出ないね、銀行の方でうまく揉み消して、屋根裏から死骸の出たことなんか、世間へパツとさ

せないからね。」

『さうでせうか。でも屋根裏の電話線を探しに行つて、炎熱にあたつて死んだのは、電氣機關夫としては職務に殉したもので、言はゞ名譽の戰死でせう。』と、春田は少しづゝ痛み出して來た頭を押さへて、稍興奮しかけた。

『機關夫としては名譽の戰死でも、銀行としては不名譽の頓死だからね。世間に發表することを好まないよ。』

『田舍女郎屋の三階から轉がり落ちて死んだのよりも、銀行の三階の屋根裏で暑さにあたつて死んだ方が不名譽なんでせうか。』と、春田はいよ〳〵興奮しかけた。

『理窟を言つても仕樣がないよ。此處は理窟の通らないところだからね。上から下へは理窟も通るが、下から上へは理窟が通らないからね。エレヴエターのやうに上へも下へも自由自在といふわけには行かないんだ。總裁や理事が三階の屋根裏へ視察に行つて、暑さにあたつて死んだと言や、それや大變な名譽で、國の歷史に殘るかも知れないが、機關夫が屋根裏で死んだんぢや、全く鼠の死骸が出たくらゐのものだ。其の鼠にペスト菌があるといけないから、成るだけ表沙汰にしないで濟ませようといふところだ。あはゝゝゝ。』

守衞長の營養不良の蒼ざめた顏にも、些か赤味が潮して來た。さうして、『まア君死なゝくてよかつたよ。こんなところで死んだツて、全く犬死にだからね。』と言ひ足して、また大きな聲で笑つた。

『鼠になつたり犬になつたり、どうせ、人間としては死なれないんですね。』と、春田も共に聲を立てゝ笑つた。

『それにしても、君はあの萬年町ハイカラに禮を言はなけやいけないぜ、全くあの男のお蔭で助かつたんだから。……』と、守衞長は急に言葉の調子を改めて言つた。

『どうしてゞす。どうして、………』と、春田は言ひかけたが、眞逆萬年町ハイカラとも言へないやうな氣がするし、

あの花の好きな男の苗字をスッカリ忘れたので、言葉が行き詰まつてしまつた。

『尾張町ハイカラの飛永が、エレヴエターに挿してゐたあの白い花をね、あれを春田君に與つて、花の話をするんだ、この銀行で花の話の出來るやつなんか、一人も居やしないと言つて、君を探し歩いたのが、三階の屋根裏で君の眼を廻はしてゐるのを助け出すもとになつたんだよ。まア飛永は君の命の親さ。』と、守衛長はにつこりした。

飛永よりも、あの白い花を、春田は自分の命の親にしたかつた。

十

釣り臺に載せようか、車にしようかと、春田の枕頭で、守衛長と醫者との話が始まつてゐた。同僚の相木が休んでゐるのに、自分がまた倒れたら、電氣機關夫が一人もゐないことになつて、この大きな銀行が困るであらう。自分のやうた居るかゐないか分らないものにも この銀行全體に影響を與へる力があるのかと思ふと 春田は心のうちに一種の愉快を感じたいでゐられなかつた。曾つて濱江の父に聽いた經濟學の原則といふことが、こんなところまで考へ出された。

『この銀行では君、使用人の休むといふことが一番嫌ひなんだからね。』と、醫者は春田が此度の機關夫になつた第一日にさう言つた。其の聲がまだ耳の底へこびり付いたやうになつて殘つてゐる。轆轤にでもかけて、くる／＼と廻はしたら、其の聲が其のまゝ耳の底から出て來さうにさへ思はれるのである。

『なアに休むもんか、休むもんか。』と、春田は口の裡で獨り言をした。

『どうかしたか君。』と、醫者は春田が譫言でもやり出したやうに思つたのであらう、もぐ／＼と口を動かした春田の顏を、氣づかはしさうに見詰めて、寢臺に摺り寄つた。

『いえ、どうもしやしません。もう大丈夫ですよ。』と言つて、春田はむく／＼と寢臺から起き上つた。

『いけない、いけない。無理をしちやいけない。』と言ひ／＼抱き止めようとした守衞長の細い手を拂つて、春田はまだふら／＼と眩暈のしさうなのを堪えつゝ、宿直から出た。

『若い者はこれでなけれやいけないよ。』

『えらいもんだな。』

監督と守衞長とは、感心した風で、こんなことを言ひながら春田の後から跟いて來た。先刻ハンマーで、額から小鬢をやられて、ぶッ倒れながら、ひるまずに、むく／＼と起きた職工の勇氣に感心したやうに、今春田がかうして歩きかゝつたのを、監督は『えらいもんだな』と感心して見てゐるやうであつた。身體を粗末にして苦痛をさへ忍べば、この人たちは直ぐ感心するのである。……さう思ひながら、春田はもう自分に取つては故鄕のやうな氣がする地下室へ下りて、使ひ馴れた水道の栓へかゝると、頭からぢやア／＼と水を注ぎかけた。先刻かうしてあの職工がハンマーにやられた額の傷を洗つてゐたので、自分もそれと同樣の姿勢に腰を曲げて、じやア／＼といつまでも頭へ水をかけてゐた。

『君ツ、あんまりやつてもわるいでせう。』と、監督が背後から聲をかけて、肩のところを叩いてくれなかつたら、またうツとりと夢心地になつた春田は、水道の栓の前へ倒れたか知れなかつた。

頭が急に自分の頭として、ハツキリと頸の上へ囘復して來るまで、春田は纔に兩脚で身體を支へてゐるといふだけであつた。自分の足は脚榻の足のやうに、突ツ張つて冷たかつた。

『まだ君、わるいんだよ。無理をしちやいけない。もう一度宿直室へ行つて寢てゐたまへ。』と、守衞長は息子を勞はる風にして、春田をば其の痩せた兩手で抱へ込むやうにした。

『ほんとに鞴の火をかけて鍛へた身體でねえからな。』と、監督は如何にも鍛冶工らしいことを言つた。

『だから今日、屋根裏の鞴で燒きを入れたんだ。堅炭やコークスの火と違つて、あの鞴は天道樣の火だから空氣なもんだ。燒きが入つたら、よく切れるだらう。』と、守衛長の重くるしい口からも、かうした冗談の出るのが不思議であつた。

『僕は歸らして貰ひます。』

地下室の鐵板の床に立つて、春田は大儀さうに首を曲げながら、かう言つた。がんがんがんがんと鐵をかしめられてゐた紙幣を煮る大鍋も、今はスッカリ鳴りを靜めて、でッかい姿を、ぼんやりと落ち着かぬさまで、放り出されたやうに地庭へ据ゑられてゐる。職工たちはもう一人もゐないで、周圍はすッかり片付いてゐた。この工事が出來上つて、活動を始めたら、隣りに威張つてゐる紙幣を燒く鍋は、秋の扇と棄てられるであらう。秋の扇はまた來年といふこともあるが、この鍋は新しい鍋に、永久の地位を奪はれて、廢物となるのであらう。英雄の末路といふやうな、哀はれた最後の近づいたことも知らずに、彼れはなほ傲然として、嚴めしくおろされた鐵網の中に、幾百千萬圓の紙幣や債券を燗りに化してゐる。――

春田はヂッと、封印の嚴重な一室を眺めて哀しく痛ましい氣持ちになつた。

『そりやもう、時間過ぎだから、歸るのは君の隨意だが、大丈夫かね。』と、監督はさも心配さうにしながら言つた。

十一

土用前の午後七時は、まだ太陽が西の空に輝いてゐた。あの火の玉の爲めに、自分は今日三階の屋根裏で燒き殺され

かゝつたのだ。……とも思はないで、春田は夏の夕陽の美しさを古代の城樁の栄えた青葉の丘の彼方に、快く眺めながら、矢張り電車まで歩いて歸ることになつた。

釣り臺にしようとか、車を呼ばうとか言ふものはあつても自動車に載せようとするものゝないのを、春田は別に怨みとも思はなかつたけれど、考へてみると、あれだけの騒ぎをしながら、醫者にもかゝらず、氷も用ゐず、水で濡らした手拭を額にあてただけで濟んだ自分の身體の健康と幸運とを祝ひたかつた。それに就けても釣臺に載せられたり、氷嚢で殆んど全身を包まれたりして、終にいけなかつた濟江の不幸が哀れであつた。あの時、人間を載せる釣り臺がすツかり出拂つてゐて、荷物用の小さな釣り臺に大熱の身體を屈めつゝ、濟江は郊外の病院へ送られて行つた。其の釣り臺には、嫁入りの荷物のやうな青地に白で唐草を現はした油箪が掛けてあつた。あんな風にして、自分も一度は釣り臺に載せられてみたい。さうしてあの時の濟江の心持ちを味はつてみたい。……とそんなことをも、きり〳〵と痛む春田の頭は考へた。

それでも、銀行からは、同僚が一人、郊外の森の中の家へまで送つて來てくれることになつた。其の人選が、萬年町ハイカラの飛永に當つたのを、春田は可笑しくも思へば、嬉しくもあり、また馬鹿らしく、苦々しくも考へた。何かにつけて自分をば飛永と一對にして揶ひかける人々の淺はかな心は解つてゐるが、それをば少し迷惑に感じないでもなかつた。

二人とも青い作業服を脱ぎ棄てると、紺飛白の單衣に麥稈帽で、輕々と通用門から出ようとした。春田の兵兒帶は黑く、飛永のは薄鼠色であつた。春田は卷き帶で、飛永はだらりと後で結んでゐた。

『ヤア、もう歩けるやうになりましたか。お芽出たう。』

門衛の兒島爺さんが後から駈けて來て、から言つた。

『まだ顏の色がわるいや、氣をおつけなさいよ。飛永さん、御苦勞です。何分よろしく願ひます。』と、兒島爺さんは、いつもの佛頂面を崩しつゝ、默つて振り返へつた二人に、こんな言葉を浴せかけた。

『有り難う。………』とだけ言つて、春田はさツさと通用門を出てしまつた。飛永も目禮しただけで、春田におくれなかつた。

『あの兒島老人は、もうスツカリ君を馘にしたつもりでゐるさうですね。今日も君を三階の屋根裏から下ろす時にね、一人で世話を燒いてましたよ。』と、飛永は春田の步調に自身の足を合はせながら、こんなことを言つた。

『眞逆？』と、春田は顏の色が赧くなるのを覺えた。急ぎ足に出て來たものゝ、平常の通りに步くのは、矢張り苦しかつたので、門衛の爺さんに後姿を見られないところまで來ると、急にぐツたり身體を引き摺るやうにして行くのであつた。

『大丈夫ですか君ツ、俥に乘りませうか。步けなかつたら俥に乘れと言つて、君ツ、大まい五圓預つて來てますぜ。』と言ひ〳〵、飛永は袂から白い手巾(はんけち)に包んだ重さうなものを取り出した。それには貨幣の見本かと思はるゝやうに一圓紙幣が二枚と五十錢紙幣が二枚と、十錢紙幣が十枚と穴のあいた五錢白銅貨が十個と、一錢銅貨が五十個とで、紙幣は皆手の切れるほど新らしく、銅貨はキラ〳〵と眩しく光つてゐた

『出來たてのほや〳〵だから、倍に使へるといゝが、こんなに新らしく光つてゝも、矢ツ張り一錢は一錢だから詰まらないね。』と言つた途端、飛永は銅貨と白銅貨とを、さら〳〵路傍の馬糞の傍にこぼした。新らしい黄白の面を、赤い西日が一層鮮かに輝かした。通行人は皆不思議さうに、贋金使ひでも發見したやうにして見てゐた。

飛永は周章てゝ、落ちた貨幣を拾ひ集めやうとして、別の袂からまた或る物を轉がり落した。どうも兩方の袂の恰好が變だとは春田も思つてゐたのだが、こんなにいろ〳〵の物を忍ばせてゐようとは、想像もつかなかつた。別の袂から落ちたのは、銀行のエレヴエターにあつた一輪挿しと、白い花とであつた。

『それは君の一輪挿しに君の花でせう。なにもさう袂の中へ隱して來ることはないぢやありませんか。』と、春田はどうも、飛永がちよい〳〵見せる泥棒猫のやうな動作が、氣に食はなかつた。

『そんなことを言つてますがね君、君だつて、あの銀行に半年と一年勤めてると、きツと僕みたいになりますよ。妙に人間がいぢけツちまつてね、隱さないでいゝものまで、つひ隱したくなるんですよ。監督のやうな、頭のない人間なら、そんなこともありますまいが、人間並みの神經を具へてると、妙にいぢけるんですね、家から物を持ち込むのはさうでもありませんが、銀行から物を持ち出す時は、どうも氣が引けてね……君ツ勞働者は矢ツ張り、腹からの勞働者でなくちや駄目です。中年坊主が駄目のやうに、勞働者も中年ぢやいけませんよ。仕方がないからやつてるやうなものゝ、これで僕はほんたうの勞働者かしらと、突然思ふことがありますものね。』と、飛永は萬年町ハイカラと呼ばるゝ輕佻さに似ず、しんみりとした落ちつきを見せて言つた。この男の口からも矢張りかうした涙で溶かしたやうな言葉が聽かれるのかと、春田は不系に思ふほど深く感慨に打たれて、チツと考へ込みながら、重い足を運んでゐた。身體に力がなくて、足と頭とは鉛を詰めたやうに重かつた。

春田は飛永から默つて渡された白い花を、一輪挿しの小瓶とゝもに受け取つて、頻りに葩へ鼻をあてゝゐたが、飛永の隙を覗つて、窃とそれに口つけをした。濱江の唇に觸れた折りの甘い感じが、遠く夢のやうに涌き出して來た。彼女の世に在りし夜のキスの味。………

十二

『其の花を君に上げやうと思つて、先刻君を探し廻はつたんですよ。』と、飛永はにツこりした。

『さうですツてね、有り難う。……それで僕が三階で氣絶してるのを發見されたわけなんですツてね。君は僕の恩人ですが、この花も僕の命の親ですね。この花がなかつたら、僕はあの三階の塵埃の積つた中で、木伊乃になつたか知れませんでしたね。』と言つて、春田はもう大びらに、飛永の眼の前で、白い葩にキスをした。飛永はまたにツこりと笑つた。

『水がありませんね。』と言つて、春田は、青い小瓶を透かし見た。

『なあに、水氣が少しあれば、一時間ぐらゐ生きてゐますよ。』と、飛永は事もなげに言つた。しかし春田はどうも、青い小瓶の底に一滴の水も動かないのが氣になつて仕樣がなかつた。濟江が郊外の病院でこち〳〵と叩けば音のしさうに、乾枯びて硬張つた唇を動かして、頻りに水を求めた折りのことが想ひ出された。番茶に氷の破片を浮かしたのを鵜の形をした吸ひ呑みに入れて、口の端へ持つて行くと、病苦に力が拔けてゐても、この時ばかりは飛び付きさうにして吸ひ呑みを含んだ。さうして飲むことを許される液體の分量の餘りに少いのに失望して、大熱に黑ずんだ舌を打ちつゝ、ベソを掻くのであつた。どうせ助からないものなら、水でも氷でも、思ふ存分、欲しがるだけを與へて、今生の滿足を其の窶れた顏、好きな白粉氣のまるでなくなつた面上に見てやりたかつた。さうやつて、氷のやうな冷水をば、したゝかに彼女の病體の中に注ぎ込んでやつたならば、萎れかゝつた花園に夕立が降つた如く、彼女は忽ち勢ひづいて、病毒を退治し得たかも知れなかつた。なぞと春田はいまだに非科學的、超科學的の考へに一縷の信念を挾んで、思ふさま

濱江に水を與へなかつた醫員や看護婦を怨んでゐる。濱江の死んだことが、永久に且つ確實に、濱江を自分のものにすることが出來た唯一の途だとは考へながらも、濱江を亡つたことは、矢張り彼れの終生の恨みと悩みとにならうとしてゐる。

亡き濱江の靈代でも捧げるやうにして、春田は白い花の萎れるのを氣づかひつゝ、青い小瓶をば、大事さうに持つて西日のあたらぬ日蔭を撰つて歩いた。不圖路傍に眼を配ると、滅多に見かけない上水道の共用栓があつた。春田は嬉しさうにして、其の共用栓の側に駈け寄つたが、もとより鍵がなければ水を出すことの出來ない因業な仕掛けであつたけれど、ヂッと見詰めてゐると、一分間おきぐらいにぽたりと栓の口から落ちる雫があつた。

『君ッ、水が飲みたいんなら、何處かでソーダ水でもやりませう。中央銀行から出來たてのほや〳〵の大金を預つてゐる身體ぢやありませんか。』と、飛永は懐中を叩いて力み返つた。彼れはあの見本のやうな紙幣や白銅貨や銅貨のいろいろを、袂から懐中に移したものらしかつた。

『いや僕が飲むんぢやないんです。』と微笑みながら言つて、春田は一輪挿しの青い瓶の口を、共用水道栓の口に向けて根氣よく、雫の滴り落ちるのを待つてゐた。

『はゝゝゝ。水もさうなると貴重品ですね。』と、飛永は覗き込むやうにして、春田の手元を見詰めた。三分間ほどに三雫の水が、青い小瓶の中に落ちると、もう白い花を枯らせないだけの分量はあると思はれた。花の莖へ袴を穿かせるやうにして、青い小瓶に挿し込むと、今受けた雫の水が、口へまで溢れさうになつた。病める濱江にはこんなに口まで溢れるほど水を飲ませることが出來なかつた。それを考へれば考へるほど、殘り惜しさがしみ〳〵と身に滲みて來る。小瓶の口を耳に近く持つて行くと、白い花が喜んで水を吸ひ上げるらしく、しゆう〳〵いふ音が微かに聞えさうである。

それが滋江の健康な折りの細い息づかひにも似てゐる。

十三

今日は病氣の春田をば、銀行が優遇する意味で、郊外電車に載せて歸へすのださうで、其のお陰で春田は、中央驛の高架線まで、だいぶ遠い路を歩かせられた。釣り臺よ、俥よと騒いだのが、結局高架電車といふことになつたのである。

路々飛永は話した。

「君はあの日中の暑い盛りに、どうして三階の屋根裏なんかへ上つたんですか。彼處は君、朝のうちでなけりや、夏は誰れも上るものなんかないんですよ。それも三十分を限度にして、一度下りて息んでから、また上ることにしてゐるんです。君のやうに一時間からもつゞけて、あんなところに居ちや、たまりませんや。」

それを聞いて、春田は今更にぞつとするほど恐怖を感じた。思ひ出しても、あの塵埃の臭ひが鼻について、忽ちぐら〳〵と眩暈のするのを覺えた。郷里の學校に居た時、修學旅行で或る發電所へ行つて、其の頃から好きであつた電氣の機械に引き付けられ、一人離れていろ〳〵のものを視て廻はつてゐるうちに、太い銅線が被覆もなしに、下から上へずうツと通つてゐるのを、覗くやうにして見てゐると、髮の毛がぴり〳〵と動いて、其の銅線の方へ靡くやうな氣がした。其の途端、誰れとも知らず背後から、自分の肩に手をかけて、力まかせに引き倒したものがある。何を亂暴するかと、驚き且つ怒つて起き上る自分を其の者はまたしたゝかに突き飛ばした。この亂暴者は、今現に自分のやつてゐる電氣機關夫のやうな一職工であつたが、それは自分をひどい目に遭はせる爲めでなくて、自分の生命を救つてくれたのであつた。其の銅線の太い[illegible]て、被覆をかけても、焼けてしまふから、裸にしてあつたの

で、自分がもう一寸近寄れば、命のないところを、通り合はせた其の職工が助けてくれたのであつた。――其の時のことを考へ出すと、今でも身體がぶる〳〵慄へるが、其の第一の恐怖に次ぐべき第二の恐怖を、自分は今日、中央銀行の三階の屋根裏で實驗した。今に第三の恐怖がやつて來る時、自分の生命は終るのであらうか。――さう思ふと、春田はまた、ふら〳〵と眩暈がしさうになつた。

『實はね、昨日の夕方、五十燭の電球を三つも毀してしまつたんです。馬鹿な話でね、エレヴエターは君、二百ヴオルトでせう、其處へ百ヴオルトの電球を持つて行つて篏めたんだから、たまりませんよ。白熱になつたかと思ふと、ぷつツと切れツちまふんです。それで監督に厭やな顏をされたから、今日は其の雪辱のつもりで、三階の屋根裏へ上つたんです。』

郊外の停車場へ下りた時、春田は漸く清々しい氣持ちを囘復して、こんなことを飛永に話した。

急な坂を、森の方へ下りかゝると、足柄か秩父あたりかと思はるゝ、薄墨色の連山に沈んだ夕陽の名殘りが、西の空を茜色に染めて、雪のない富士の姿は、くツきりと、今出來たてのやうに、美しく浮んでゐた。

『あゝツ。……』と、二人は覺えず歡喜の聲を立てた。

美しき東京よ！

春田は久し振りで、それをよく鳴る口笛の譜に移して吹き鳴らした。濱江が死んでからもう決して吹くまいと思つてゐた口笛が、うツかりと、美しい富士の姿におびき出されたのであつた。

『よく鳴りますね。ローレライを一つ吹いてくれませんか、僕はあれが好きでね。……』と飛永は漸く萬年町ハイカラの本色を現はしかけて來た。

坂を下りて、小川を渡り、木下闇を抜けつゝ小徑を登ると、森の奥にバラツク同樣の長屋を並べた細民窟が開けて、其の中の二軒長屋に、春田と濱江の父親海野三郎との住居はあつた。

十四

『早かつたね、今日は。……神田へ廻るかと思つてた。』と、濱江の父親は、胡麻鹽の鹽が勝つたやうな後頭部を向けたまゝで、春田の足音に言葉をかけた。近頃急に嚙みかけた煙草に、煙管を詰らして、脂の惡臭を立てつゝ、煙管の掃除をしてゐるところであつた。

『御免下さいまし。』と言つた飛永の變つた聲に驚いた父親は、くるりと振り向いて、瞬きをしたが、見事な八字髭を剃り落した痕が青くて、顏の相が違つて見えた。

『おや、お父さん、髭がなくなりましたね。』と、春田は自分の死にはぐつた次第を話すのも忘れて、父親の髭のことを問ふた。

『濱江の菩提を弔ふために。……昔しなら髮を剃りこぼつところだが、二十世紀だから、髭だけで御免を蒙つとくのさ。』と、父親は重い口をもぐ〳〵動かしつゝ、柄にない戯れを言つた。面長のガツしりした肌理(きめ)のあらい顏が、八字髭を失つて、いよ〳〵亡き濱江の顏を思ひ出させる顏になつた。濱江が男親の方ばかりに似てゐて、氣質までそツくりであつたことを、春田は父親の顏を見詰めながら、哀し氣に考へ込んだ。

『そんなに變かなア、僕の顏は。……』と言つて、父親は傍から小さな女持ちの懷中鏡を取つて、髭のなくなつた其の面長の顏を寫しつゝ言つた。

『あらツ。……』と、春田は覺えず大きな聲を立てた。亡き愛人は鏡が好きであつた。懷中鏡も三つばかり持つてゐた。其のうちの一つを、神田で駄菓子屋兼荒物屋のさゝやかな、薄汚ない店を出してゐる母親のところから貰つて來よう、歸りに神田へ寄つてみようと、今朝も出がけに春田はさう父親に言つてゐたのであつたが、それどころではなく、三階の屋根裏で死にはぐつて、漸く歸つて來てみると、其の懷しい鏡が、ちやんと父親の手にあつて、自分を待つてゐてくれたやうに思はれた。

『あらツ、お父さん。其の鏡をどうしたんです。』と、春田は急き込んだ風で問ふた。

『神田から與尾が來てね、幾ら男世帶でも、鏡が一つもなくツちや不自由だらうと言つて、これを置いて行つてくれたんだよ。』と言ひ〳〵、父親は其の小さな懷中鏡を春田に渡した。鏡はいそ〳〵と飛び付くやうにして、春田の手に乘り移つたといふ氣がした。この懷中鏡は濱江の手摺れの痕の一番餘計についてゐるもので、金唐革ともいふべきサツクに美しく包まれてゐて、埃及模様の月桂樹に似た青い葉の間に、赤い實が三つ見えてゐる。平常は大抵この懷中鏡が、濱江の帶の間にあつた。

去年の夏大坂で、暑い夏を塵埃の都市に越すのも、今年限りだ。――それは濱江の父が或る郷土史の編纂を頼まれて、一家が東京から移住した仕事も、其の冬には終るので、半歳のうちに東京へ引き揚げることゝなつてゐたから――赤い提灯を點けた小舟の入り亂れて漕ぎ廻はる大坂の夏の川を、よく見ておかうと、母親が濱江と春田と三人で道頓堀の方へ、夕方から出かけて行つたことがあつた。生粹の東京ツ兒の母親は、大坂の生活が、帶の締めかたから、下駄の穿ちやうから、瓜の皮の剝きやうまで、一々氣に入らなかつたけれど、夏の川の黑い水に、赤い提灯が浮んで、それが一つ殖え、二つ殖えて、くる〳〵と廻はつてゐるのを、唯一つ東京にない趣きだとして喜んで見てゐた。

『影彦さんも、東京へ來るといゝわね。』

『ほんたうにいらツしやいな。』

母親と濱江とは橋の欄干に凭れて、右左から春田にさう言つた。郷土史を出版する本屋に雇はれてゐたといふ關係から、濱江の父親に識られて、どうやら濱江の許嫁とまでなりかゝつてゐるのに、今更『東京へ來るといゝわね。』も水くさいと思ひながら、春川は幼い頃から憧憬れてゐた東京が、自分の前に一歩づゝ近づいて來るやうな氣がして嬉しかつた。

其の時のことである、濱江は金唐革の鏡入を遺失して、『いゝのよ、どうせ古いのだから。……』と言ひながらも、手擦れのした親しみの深い持ち物には、單價以外に愛着の念の强さうなのを見て取つた春川は、戀人への心中立てに、夜おそくまで、一人で足を棒にして、道頓堀から東横堀に添ひつゝ、河岸の町々を探し廻つたけれど、兎ても駄目であつた。スルと其の翌々日警察から呼び出しがあつて、金唐革の鏡入れは、些かの瑕もなく濱江の手に、白服帶劍の人の手から渡された。鏡入れの中に、父親の名刺が入つてゐたのを手がゝりにして、警察は拾ひ主から預つた品を直ぐ遺失主に渡すことが出來たのであつた。拾ひ主の名は、北區堂山町の何某と警察の帳面に載つてゐた。

品の價は知れたものだが、其の好意に對して、默つてはゐられないと言つて、義理固い母親が、十個ばかりの梨子を盆に載せたのをば濱江に持たせて、堂山町へ禮にやる時、春田は先方の名前がどうやら若い男のやうに思はれ、鏡を緣に濱江との交際が始まりはしないか、事によつたら、拾つた鏡を囮に濱江を引き寄せやうとするのではあるまいかと、持つて廻はつた取越苦勞に、嫉妬と不安とを起して、胸さわぎをしたが、汗みづくになつて濱江の探し廻はつた堂山町の狹い路地のやうな其の番地には、似寄りの名前もなかつたさうで、濱江は空しく、靑い風呂敷に包んだ梨子の盆を抱

へつゝ、白粉を剝がして歸つて來た。僅かなことで禮になんぞ來られるのを厭ふて、警察へ僞名をしたと思はるゝ、拾ひ主の床しさを感ずるとゝもに、春田はあらぬことに氣を採んだ自分の心の卑しさを愧ぢたのであつた。

『大坂にだつて、いゝ氣象の人もあるにはあるんだね。東京から來てる人かも知れないよ。』と、母親は其の時、つく〴〵感心したのであつた。——

其の折りの記憶が、頭の奧から滲み出るやうに沸き出して來て、それが淚となつて、頰を傳ふまで、春田はヂツと金唐革の鏡入れを握つてゐた。其の鏡に自分の顏を寫すのが怖いやうでもあつた。

やがて春田は、其の懷中鏡と、飛永に貰つた白い花の一輪挿しとを、机の上の濱江の寫眞の左右に、並べて置いた。

飛永は手持ち無沙汰に、上り口の二疊でもじ〳〵してゐた。

十五

濱江の父親は漸く春田から、銀行の三階の天井裏で死にはぐつた話を聞き、送つて來てくれた飛永にも禮を言つたが、直ぐ話を自分の方のことに戾して、

『神田の店もなか〳〵賣れるさうだ。此頃は學校が休みになつたものだから、近所の子供が一日店へ來て騷いでるさうだ。……繁尾はまるで幼稚園の保姆にでもなつた氣で、惡太郞の世話をしてゐるらしいんだよ。一度行つて見て來ようかね。僕や君には騷がしくて、半日だつて居られやしないと、婆さん大氣焰さ。……佃煮をドツサリ持つて來てくれたから、二三日お菜には困らないよ。』と、無口の父親は、どうしたことか、今宵は實によく喋舌つた。日はもう今宵と言つてもいゝほどに、だん〳〵暮れかゝつて、夕暗は妖魔の如く森の中の家に迫つた。

老いても幼兒のやうに、よく人見知りをして、母親が戯れに雜巾で面長の顏を撫でる眞似をしたことのある父親だけれど、今宵は、初めて見た飛永にも臆する色なく喋舌りつゞけた。それは皆神田の方の話で、今日久々に夫婦がこの森の中の家で相逢つて、森と町とに別居してからの積る話を交はした揚句、髮まで剃つてしまつことが、餘ほど嬉しかつたのであらう。掌中の珠のやうな一人娘を失つてから、其の悲みを忘れる爲めと、一つは老後の生活を確實にしたいからとで、別れ〳〵て、一段下層の社會に飛び込んだ亡き愛人の兩親の心が、春田は今更痛ましくなつて來て、またふら〳〵と眩暈を起しさうな感じを覺えた。

『それぢや、僕はお暇します。まア君、二三日休んで、ゆツくり養生したまへ。』と言つて、飛永は腰をよぢらせた。

『まアいゝぢやないか君、晩飯をやつて行きたまへ。……晩飯と言つても、僕んとこは此頃飯がないんだ。男ばかりで炊くのが面倒だから、パンにしてるんだ。……鮓でも取らうかね。』と、春田は早く歸つてもらひたい男にも、こんなことを言ふほど、だいぶ世間摺れがしてゐた。

『いや、もうそれには及ばないよ。別に腹も空かないから。…………』と言ひ〳〵、飛永はまた腰を落ちつけてしまつた。さうして、上り口の二疊を除いては、六疊一間きりの、ヘナ〳〵した鴨居や、節だらけで隙の多い天井や、床下の土を採つて其のまゝ塗つたやうな壁を見廻して、何んの裝飾もない室の、柱の丸釘に並べてかけてある二つの麥稈帽子をヂツと眺めた。

『君、上等の麥稈を持つてますね。』と言ひ〳〵、飛永は立つて行つて其の麥稈帽子を取つた。

『これは贅澤な帽子だ。銀行でもこれだけの麥稈を被つてる人は、あんまりありませんよ。總裁は大抵夏でも山高か、それでなけれやパナマだが、時々麥稈も被りますよ、それだつて、これくらゐか、事によつたら、これよりわるいか知

れない。春田君がこれを被つて來れや、銀行第一の麥稈帽子が地下室にあるわけになつて、背服組の鼻が高いが、どうして君、これを被らないんですか。機關夫があんまり上等の帽子を被つちやわるいといふ遠慮ですか。』と、飛永は一心に其の麥稈を撫でゝゐた。

春田は巧みに口笛を吹くといふ隱し藝から、當代一流の女流作家岩村小夜子に可愛がられて、この麥稈帽子を貰つたのであつたが、それほど上等の品とも思はないでゐた。たゞそれを被らないで、わざ／＼安いのを買つた理由は、濱江が女流文學者の贈り物を春田の頭に載せることをばひどく嫌つたからであつた。濱江の生きてゐるうちは、嘲弄半分にわざ／＼其の上等の麥稈を見せびらかすこともあつたけれど、亡くなつてからはもう、それを手にすることさへ憚るやうになつた。

『上等のを被ると汚れるから、大事にして取つてあるんです。』と、春田は何氣なく飛永に言つて微笑んだが、濱江が怨めしさうに、この麥稈帽子を睨んだ折りのことを思ひ出して、また涙が込み上げて來た。

『御覽なさい君、この通り、上等の帽子は麥稈の表ばかりが出てますし、かゞつてある絲がチツとも見えませんものね。裏だつて、安い方は革の下が、檜を薄く殺いだやつですが、上等のになると、この通り下の、見えないところまで、ちやんと同じ麥稈ですからね。これんばかり檜にしたつて、幾ら違ふものでもないでせうが、商人といふやつはかういふことをするんですね。』と、飛永は頻りに麥稈帽子の比較研究をして、春田と父親とに見せた。

『檜より麥稈の方が位の高いのも妙な話ですね。家を建てるとなると、麥稈と檜ちや比べものになりますまいがね。』と、春田は少し考へながら言つた。

『檜笠と言つて、昔しは乞食坊主なんぞが被つたんでせう。被り物になると、檜は藁より下等なんですね。』なぞと言ひ

〳〵、飛永はいつまでも、其の麥稈帽子をいぢつたり、頭へ載せたりして、欲しさうな顏までした。

十六

どうも頭の具合がわるいので、春田は四五日銀行を休んでしまつた。

休んでも日給をくれるだらうか。……といふことが、幾度か父親との話題に上つた。

『休んでも給料を拂ふのが、勞働法の原則だ。年中摺り餌を食つて、海に近い別莊に寢ころんでゐても、名前だけで、勤めない官職の俸給だけは、ちやん〳〵と取つてゐる人さへあるぢやないか。』と、父親は木像に魂魄が入つたやうに、おとなしい顏へ、興奮の色を浮べつゝ言つた。

六日目に漸く、二時間の遲刻で銀行へ出勤してみると、例の紙幣を煮る大鍋には二寸おきぐらいに打ち込まれた鋲の數が、だいぶ殖えて、春田はがし〳〵と掻きむしりたいやうな痒みを全身に感じた。鐵の釣り橋なぞを渡る時、かうしたイボ〳〵を見ると、それに膿でももつたやうなものが、自分の身體一面に出來たことを想像して、ぶる〳〵と慄へるのである。春田はづツと進み寄つて、大鍋のイボ〳〵を掻いてみたが、もとより爪も立たぬ堅さに、此方の指頭から血が流れさうであつた。やがて四五人の職工によつて、またがんがんと鋲をかしめにかゝつたが、其の中にはもう、平頭ハンマーで額から小鬢をやられた男は見えなかつた。

『あの人はどうしましたかね。』と、監督に問ふても、監督は『あの人？』と、空とぼけて、其の事を語りたくない樣子であつた。

心から春田に見舞ひを言つてくれたのは、門衞の兒島爺さんと、萬年町ハイカラの飛永ぐらゐのもので、他は皆春田

が三階の屋根裏での危難なんぞは、忘れてしまつてゐる樣子であつた。三階へ上らうとして、エレヴエターにかゝると今日は赤い花が、矢張り青い一輪挿しに、稍水を揚げ兼ねてゐた。

屋根裏の仕事は同僚相木の手で、もうスツカリ片付いてゐたから、春田はまた地下室へ下りて來た。紙幣を燒く竈には、今×國の公債が五千萬圓入つたのださうで、普通の時には來ない總裁までが、幾年振りかで地下室の空氣を吸つてゐた。△△省の高級官吏も來れば、×國大使館員までがやつて來て、迚も春田なんぞの寄り付けない光景が、地下室に張つてゐた。大鍋の鋲をかしめる音も、ひつそり靜まりかへつた。

やがて、どや／＼と、えらい人たちの靴の音が、花崗石の階段から上に消えて行くと、多分もう一ケ月ぐらゐは工事に手間取れさうな大鍋は、今に見ろ、隣りの竈の晴れがましい仕事を此方へ奪つてやるぞ、とでもほざいてゐるやうに、またがんがんと鳴り始めた。堅く錠前の下ろされた燒却室の鐵の扉へ、電氣の通じ具合を見る爲めに開けてある一寸四方ぐらゐの穴の蓋をまくり上げて、春田は内部を覗いたが、煉瓦で卷いた、人を燒くやうな竈の口には、いつもの錠前と封印とのほかに、西洋風の封蠟までも附いてゐた。

『君ツ、この國債を皆盜まれたら、銀行は潰れるよ。詰まり我々の死活問題だからね。』と、監督は背後から突然春田の肩を叩いて言つた。しかし春田はそんな下らないことが、別に自分の死活問題にならうとも思はなかつた。

『君ツ、門衞の兒島爺さんが、今夜は是非自宅へ來てくれと言ふぜ。』と、監督はニヤリ笑つて、また春田の肩を叩いた。

春田は七人居る交換手の顏でも見ようと思つて、二階の電話交換室に急いだ。

――長編『東京』第二部『勞働篇』の第三節及第四節――

母

芥川龍之介

一

部屋の隅に据ゑた姿見には、西洋風に壁を塗つた、しかも日本風の疊がある、――上海特有の旅館の二階が、一部分はつきり映つてゐる。まづつきあたりに空色の壁、それから眞新しい何疊かの疊、最後にこちらへ後を見せた、西洋髮の女が一人、――それが皆冷かな光の中に、切ない程はつきり映つてゐる。女は其處にさつきから、縫物か何かしてゐるらしい。

尤も後は向いたと云ふ條、地味な銘仙の羽織の肩には、崩れかかつた前髮のはづれに、蒼白い横顏が少し見える。勿論肉の薄い耳に、ほんのり光が透いたのも見える。やや長めな揉み上げの毛が、かすかに耳の根をぼかしたのも見える。

この姿見のある部屋には、隣室の赤児の啼き聲の外に、何一つ沈默を破るものはない。未に降り止まない雨の音さへ、此處では一層その沈默に、單調な氣もちを添へるだけである。

「あなた。」

さう云ふ何分かが過ぎ去つた後、女は仕事を續けながら、突然、しかし覺束なささうに、かう誰かへ聲をかけた。

誰か、――部屋の中には女の外にも、丹前を羽織つた男が一人、ずつと離れた疊の上に、英字新聞をひろげた儘、長々と腹這ひになつてゐる。が、その聲が聞えないのか、男は手近の灰皿へ、卷煙草の灰を落したぎり、新聞から眼さへ擧げようとしない。

「あなた。」

女はもう一度聲をかけた。その癖女自身の眼も、ぢつと針の上に止まつてゐる。

「何だい。」

男は幾分うるささうに、丸々と肥つた、口髭の短い、活動家らしい顏を擡げた。

「この部屋ね、――この部屋は變へちやいけなくつて？」

「部屋を變へる？　だつて此處へはやつと昨夜、引つ越して來たばかりぢやないか？」

男の顏はけげんさうだつた。

「引つ越して來たばかりでも。――前の部屋ならば明いてゐるでせう？」

男は彼是二週間ばかり、彼等が窮屈な思ひをして來た、日當りの惡い三階の部屋が、一瞬間眼の前に見えるやうな氣がした。――塗りの剝げた窓側の壁には、色の變つた疊みの上に、更紗の窓掛けが垂れ下つてゐる。その窓には何時水をやつたか、花の乏しい天竺葵(ゼラニアム)が、薄い埃をかぶつてゐる。おまけに窓の外を見ると、始終ごみごみした横町に、麥藁帽をかぶつた支那の車夫が、所在なささうにうろついてゐる。……………

「だがお前はあの部屋にゐるのは、嫌だ嫌だと云つてゐたぢやないか？」
「ええ。それでも此處へ來て見たら、急に又この部屋が嫌になつたんですもの。」
女は針の手をやめると、もの憂さうに顏を擧げて見せた。眉の迫つた、眼の切れの長い、感じの鋭さうな顏だちである。が、眼のまはりの暈を見ても、何か苦勞を堪へてゐる事は、多少の想像が出來ないでもない。さう云へば病的な氣がする位、米噛みにも靜脈が浮き出してゐる。
「ね、好いでせう。――いけなくて？」
「しかし前の部屋よりは、廣くもあるし居心も好いし、不足を云ふ理由はないんだから、――それとも何か嫌な事があるかい？」
「何つて事はないんですけれど、………」
女はちよいとためらつたものの、それ以上立ち入つては答へなかつた。が、もう一度念を押すやうに、同じ言葉を繰り返した。
「いけなくつて、どうしても？」
今度は男が新聞の上へ、煙草の煙を吹きかけたぎり、好いとも惡いとも答へなかつた。
部屋の中は又ひつそりなつた。唯外では不相變、休みのない雨の音がしてゐる。
「春雨やか、――」
男は少時たつた後、ごろりと仰向きに寢轉ぶと、獨り言のやうにかう云つた。
「蕪湖住みをするやうになつたら、發句でも一つ始めるかな。」

女は何とも返事をせずに、織物の手を動かしてゐる。

「蕪湖もそんなに悪い所ぢやないぜ。第一社宅は大きいし、庭も相當に廣いしするから、草花など作るには持つて來いだ。何でも元は陶家花園とか云つてね、――」

男は突然口を噤んだ。何時か森とした部屋の中には、かすかに人の泣くけはひがしてゐる。

「おい。」

泣き聲は急に聞えなくなつた。と思ふとすぐに又、途切れ途切れに續き出した。

「おい。敏子」

半ば體を起した男は、床に片肘靠せた儘、當惑らしい眼つきを見せた。

「お前は己と約束したぢやないか？　もう愚痴はこぼすまい。もう涙は見せない事にしよう。もう、――」

男はちよいと瞼を擧げた。

「それとも何かあの事以外に、悲しい事でもあるのかい？　たとへば日本へ歸りたいとか、支那でも田舍へは行きたくないとか――」

「いいえ。――いいえ。そんな事ぢやなくつてよ。」

敏子は涙を落し落し、意外な程烈しい打消し方をした。

「私はあなたのいらしやる所なら、何處へでも行く氣でゐるんです。ですけれども、――」

敏子は伏眼になつたなり、溢れて來る涙を抑へようとするのか、ちつと薄い下唇を噛んだ。見れば蒼白い頬の底にも、眼に見えない焔のやうな、切迫した何物かゞ燃え立つてゐる。震へる肩、濡れた睫毛、――男はそれらを見守りなが

ら、現在の氣もちとは沒交渉に、一瞬間妻の美しさを感じた。

「ですけれども、――この部屋は嫌なんですもの。」

「だからさ、だからさつきもさう云つたぢやないか？　何故この部屋がそんなに嫌だか、それさへはつきり云つてくれれば、――」

男は此處まで云ひかけると、敏子の眼がぢつと彼の顔へ、注がれてゐるのに氣がついた。その眼には涙の漂つた底に、殆敵意にも紛ひ兼ねない、悲しさうな光が閃いてゐる。何故この部屋が嫌になつたか？――それは獨り男自身の疑問だつたばかりではない。同時に又敏子が無言の内に、男へ突きつけた反問である。男は敏子と眼を合せながら、二の句を次ぐのに躊躇した。

しかし言葉が途切れたのは、ほんの數秒の間である。男の顔には見る見る内に、了解の色が漲つて來た。

「あれか？」

男は感動を蔽ふやうに、妙に素つ氣のない聲を出した。

「あれは己も氣になつてゐたんだ。」

敏子は男にかう云はれると、ぽろぽろ膝の上へ涙を落した。

窓の外には何時の間にか、日の暮が雨を煙らせてゐる。その雨の音を撥ねのけるやうに、空色の壁の向ふでは、今も亦赤兒が泣き續けてゐる。……

二

二階の出窓には鮮かに、朝日の光が當つてゐる。その向うには三階建の、赤煉瓦にかすかな苔の生へた、逆光線の家が聳えてゐる。薄暗いこちらの廊下にゐると、出窓はこの家を背景にした、大きな一枚の畫のやうに見える。嚴丈な欄の窓枠が、丁度額縁を嵌めたやうに見える。その畫のまん中には一人の女が、こちらへ横顔を向けながら、小さな靴足袋を編んでゐる。

女は敏子よりも若いらしい。雨に洗はれた朝日の光は、その肉附きの豐かな肩へ、——派手な大島の羽織の肩へ、はつきり大幅に流れてゐる。それがやや俯向きになつた、血色の好い頬に反射してゐる。心もち厚い唇の上の、かすかな、生ぶ毛にも反射してゐる。

午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番靜かな時刻である。商賣に來たのも、見物に來たのも、泊り客は大抵外出してしまふ。下宿してゐる勤め人たちも、勿論午まで歸つて來ない。その跡には唯長い廊下に、時々上草履を響かせる、女中の足音だけが殘つてゐる。

この時もそれが遠くから、だんだんこちらへ近づいて來ると、出窓に面した廊下には、四十恰好の女中が一人、紅茶の道具を運びながら、影畫のやうに通りかかつた。女中は何とも言はれなかつたら、女のゐる事も氣がつかずに、その儘通りすぎてしまつたかも知れない。が、女は女中の姿を見ると、心安さうに聲をかけた。

「お清さん。」

女中はちよいと會釋してから、出窓の方へ歩み寄つた。

「まあ、御精が出ますこと。——坊ちやんはどうなさいました?」

「うちの坊や?　坊やは今寢てゐるわ。」

女は編針を休めた儘、子供のやうに微笑した。

「時にね、お清さん。」

「何でございます？　眞面目さうに。」

女中も出窓の日の光に、前掛だけくつきり照らさせながら、淺黒い眼もとに微笑を見せた。

「御隣の野村さん、――野村さんでせう、あの奥さんは？」

「ええ、野村敏子さん。」

「敏子さん？　ぢや私と同じ名だわね。あの方はもう御立ちになつたの？」

「いいえ。まだ五六日は御滞在でございませう。それから何でも蕪湖とかへ、――」

「だつてさつき前を通つたら、御隣にはどなたもいらつしやらなかつたわよ。」

「ええ。昨晩急に又、三階へ御部屋が變りましたから、――」

「さう。」

女は何か考へるやうに、丸丸した顔を傾けて見せた。

「あの方でせう？　此處へ御出でになると、その日に御子さんをなくなしたのは？」

「ええ。御氣の毒でございますわね。すぐに病院へも御入れになつたんですけれど。」

「ぢや病院で御なくなりなすつたの？　道理で何にも知らなかつた。」

女は前髪を割つた額に、かすかな憂鬱の色を浮べた。が、すぐに又元の通り、快活な微笑を取り戻すと、悪戯さうな眼つきになつた。

「もうそれで御用ずみ。どうかあちらへいらしつて下さい。」

「まあ、隨分でございますね。」

女中は思はず笑ひ出した。

「そんな邪慳な事を仰有ると、蔦の家から電話がかかつて來ても、內證で旦那樣へ取次ぎますよ。」

「好いわよ。早くいらつしやいつてば。紅茶がさめてしまふぢやないの？」

女中が出窓にゐなくなると、女は又編物を取り上げながら、小聲に歌をうたひ出した。

午前十時と十一時との間、――旅館では今が一日中でも、一番靜かな時刻である。部屋毎の花瓶に素枯れた花は、この間に女中が取り捨ててしまふ。二階三階の眞鍮の手すりも、この間に下男が磨くらしい。さう云ふ沈默が擴がつた中には、唯往來のさわめきだけが、硝子戸を開け放した諸方の窓から、日の光と一しよにはひつて來る。

その內にふと女の膝から、毛糸の球が轉げ落ちた。球はとんと彈むが早いか、一筋の赤を引きずりながら、ころころ廊下へ出ようとする、――と思ふと誰か一人、丁度其處へ來かかつたのが、靜かにそれを拾ひ上げた。

「どうも有難うございました。」

女は籐椅子を離れながら、恥しさうに會釋をした。見れば球を拾つたのは、今し方女中と噂をした、痩せぎすな隣室の夫人である。

「いいえ。」

毛糸の球は細い指から、脂よりも白い括り指へ移つた。

「此處は暖かで御座いますね。」

敏子は関室へ歩み出ると、眩しさうにやや眼を細めた。

「ええ。かうやつて居りましても、居睡りが出る位でございますわ。」

二人の母は佇んだ儘、幸福さうに微笑し合つた。

「まあ、御可愛いたあたですこと。」

敏子の聲はさりげなかつた。が、女はその言葉に、思はずそつと眼を外らせた。

「二年ぶりに編針を持つて見ましたの。——あんまり暇なものですから。」

「私なぞはいくら暇でも、怠けてばかり居りますわ。」

女は籐椅子へ編物を捨てると、仕方がなささうに微笑した。敏子の言葉は無心の内に、もう一度女を打つたのである。

「お宅の坊ちやんは、——坊ちやんでございましたね？——何時御生まれになりましたの？」

敏子は髮へ手をやりながら、ちらりと女の顔を眺めた。昨日は泣き聲を聞いてゐるのも、堪へられない氣がした隣室の赤兒、——それが今では何物よりも、敏子の興味を動かすのである。しかもその興味を滿足させれば、反つて苦しみを新たにするも、はつきりわかつてはゐるのである。これは小さな動物が、コブラの前では動けないやうに、敏子の心も何時の間にか、苦しみそのものの催眠作用に捉はれてしまつた結果であらうか？それとも又手傷を負つた兵士が、わざわざ傷口を開いてまでも、一時の快を貪るやうに、いやが上にも苦しまねばやまない、病的な心理の一例であらうか？

「この御正月でございました。」

女はかう答へてから、ちよいとためらふ氣色を見せた。しかしすぐに眼を擧げると、氣の毒さうにつけ加へた。

「御宅ではとんだ事でございましたつてねえ。」

敏子は沾んだ眼の中に、無理な微笑を漂はせた。

「ええ。肺炎になりましたものですから、——ほんたうに夢のやうでございました。」

「それも御出で匆匆にねえ。何と申し上げて好いかわかりませんわ。」

女の眼には何時の間にか、かすかに涙が光つてゐる。

「私なぞはそんな目にあつたら、まあ、どうするでございませう？」

「一時は随分悲しうございましたけれども、——もうあきらめてしまひましたわ。」

二人の母は佇んだ儘、寂しさうに朝日の光を眺めた。

「こちらは悪い風が流行りますの。」

女は考へ深さうに、途切れてゐた話を續け出した。

「内地はよろしうございますわね。氣候もこちら程不順ではなし、——」

「參りたてでよくはわかりませんけれども、大へん雨の多い所でございますね。」

「今年は餘計——あら、泣いて居りますわ。」

女は耳を傾けた儘、別人のやうな微笑を浮べた。

「ちよいと御免下さいまし。」

しかしその言葉が終らない内に、もう此處へはさつきの女中が、ばたばた上草履を鳴らせながら、泣き立てる赤兒を抱きそやして來た。赤兒を、——美しいメリンスの着物の中に、しかめた顔ばかり出した赤兒を、——敏子が内心見まいとしてゐた、丈夫さうに顔の括れた赤兒を。

「私が窓を拭きに参りますとね、すぐにもう眼を御覽ましなすつて。
「どうも憚り樣。」
女はまだ慣れなさうに、そつと赤兒を胸に取つた。
敏子は顏を寄せながら、銳い乳の臭ひを感じた。
「まあ、御可愛い。」
「おお、おお、よく肥つていらつしやる。」
やや上氣した女の顏には、絕え間ない微笑が滿ち渡つた。女は敏子の心もちに、同情が出來ない譯ではない。しかし、――その乳房の下から、――張り切つた母の乳房の下から、汪然と湧いて來る得意の情は、どうする事も出來なかつたのである。

三

窓掛けを絞つた二階の窓は、庭木の梢と向ひ合つてゐる。ぼんやり固まつた綠の中に、節高た枝がさし出つた、槐の梢と向ひ合つてゐる。敏子は其處に佇みながら、もう暮色が動き出した、木の多い庭を眺めてゐる。その仄かな襟足が、後れ毛も戰がせない所を見ると、何時の間にか微風は吹きやんだらしい。が、その中形の湯帷子の肩が、かすかな、――殆有無さへ疑はしい程、かすかな薔薇色に煙つてゐるのは、どう云ふ外光の加減であらうか？
庭木の梢を隔てた空には、支那では洗濯をする時に使ふ、砧のやうな棒の音が、寂しい谺を響かせてゐる。その音の起る所へ行けば、きつと水際の芦の中に、耳環を下げた女が一人、蹲つてゐるのに相違ない。

「おい、御前にも手紙が來てゐるぜ。」

敏子は靜かに振り返つた。

男は紅木（ホンムウ）の机の前に、楽々とあぐらをかいた儘、長さうな手紙を披いてゐる。その後（うしろ）の白壁には、表裝もしない石刷の聯が、無造作に鋲で貼りつけてある。

「さう。――これ？」

敏子は机の側に坐ると、其處にあつた手紙を取り上げて見た。手紙は水色の封筒の上に、拙（つたな）いペンの字を走らせてゐる。

「誰だい、平尾敏子と云ふのは？」

男は手紙を讀み續けながら、どうでも好いやうな尋ね方をした。

「御隣の奥さん。あの上海の宿屋にゐた、――」

何分かの沈黙が過ぎ去つた後、敏子は手紙を擴げたなり、妙に震へてゐる聲をかけた。

「あなた。」

「え？」

「あの方の赤ちやんもなくなつたんですつて。」

男は手紙を卷き返しながら、前よりも日に燒けた顏を向けた。

「なくなつた？　何で？」

「風邪ですつて。あんなに丈夫さうな赤ちやんでも。」

敏子は憂欝な眼をした儘、ぢつと手紙に見入つてゐる。

「始は寐冷え位の事と思ひ居り候――ですつて。」

「そりや氣の毒だな。」

男はちよいと頭を振ると、机の上の罐の中から、卷煙草へ一本火をつけた。

「病院へ入れ候時は、もはや手遅れと相成り、――ね、好く似てゐるでせう？ 注射を致すやら、酸素吸入を致すやら、いろいろ手を盡し候へども、――」

敏子は熱心に讀み續けた。

「手を盡し候へども、――それから何と讀むのかしら？ 泣き聲だわ。泣き聲も次第に細るばかり、その夜の十一時五分程前には遂に息を引き取り、――」

敏子はかすかな身震ひをした。

「息を引き取り候。その時の私の悲しさ、重重御察し下され度、――さぞねえ。」

男は何とも口を入れずに、壁に貼つた聯を眺めてゐる。蒼茫海水溶江水、羅列他山助我山。――さう云ふ大字の並んだ側には、板橋鄭燮と云ふ落款がある。

「それにつけても、何時ぞや御許様に御眼にかかりし事なぞ思ひ出され、あの頃は御許様にもさぞかし、――ああ、いや、いや。」

敏子は手紙を投げ捨てると、神經的に濃い眉をひそめた。

「ほんたうに世の中はいやになつてしまふ。」

「いやになつたつても仕方がない。どうせ生者必滅なんだ。」

男は煙を吐き出しながら、寧ろ冷かにかう云つた。

「それでもあんまりひどすぎるわ。赤ん坊に罪でもありはしまいし。」

敏子は力が抜けたやうに、疊へ片手ついたなり、其處に落ちてゐる手紙の上へ、もう一度暗い眼を落した。と思ふとその眼から、突然涙が膝へ垂れた。

男はちらりと敏子を見た。が、それには何とも云はずに、やはり煙草を吹かしてゐる。

「あなた。」

又何分かの沈默の後、かう云ふ聲が聞えた時にも、敏子はまだ拗ねたやうに、蒼ざめた横顏をそむけながら、容間の何處かを眺めてゐた。

「何だい？」

「私は、――私は惡いんでせうか？ 平尾さんの赤ちゃんのなくなつたのが、――」

男は火のついた煙草の先から、女の横顏へ眼を移した。

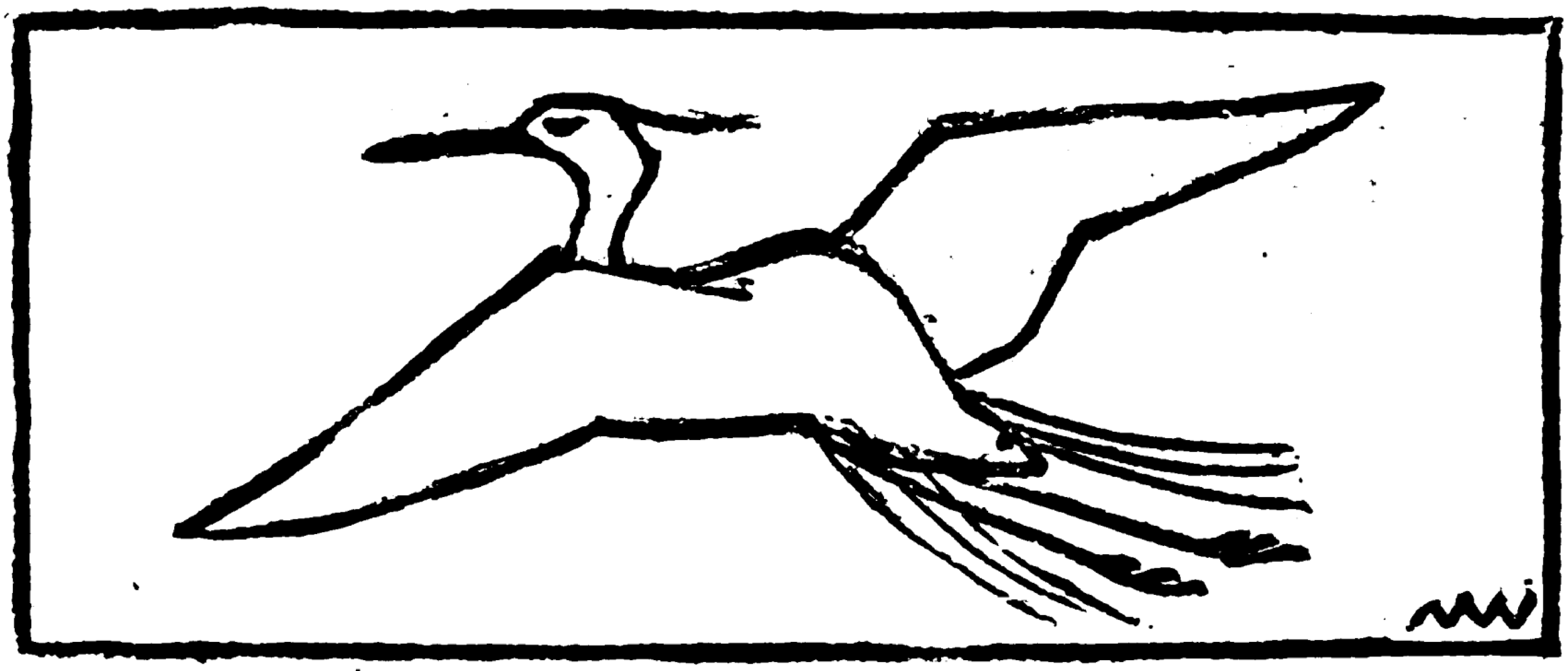
敏子の聲には今までにない、荒々しい力がこもつてゐる。

「なくなつたのが嬉しいんです。」

「御氣の毒だと思ふんですけれども、――それでも私は嬉しいんです。嬉しくつては惡いんでせうか？ あなた。惡いんでせうか、私は？」

男は煙草を啣へた儘、もう一度何とも答へなかつた。何か人力に及ばない物が、儼然と前へでも塞がつたやうに。

庭木の梢が暮れかかつた空には、鈷に紛ひさうな樺の音が、寂しい谺を響かせてゐる。その音の起る所へ行けば、きつと家族の嘆の中に、耳環を下げた女が一人、慌しいまだ痩せた胸を打ち續けてゐるのに相違ない、……



孔雀と痴人

室生犀星

一

河合夫妻は床の間の方へ、織田夫妻は庭の見える障子ぎわに寝ることにした。あとから來る筈になつてゐる木幕の細君が、とうたう姿を見せなかつたので、木幕は、その二夫婦の床と床との間にねむることにした。

障子を開け放した十疊の坐敷に、青い布切でつつまれた電燈のひかりが、河合の細君と織田のそれとを蒼白く浮き立たせ、それが女らしいくすくす微笑ひをはじめた。わけて大阪生れの河合の細君は、きいきい燥いで、織田の細君もそれに負けずくすくす微笑ひ出したのである。

「奥さん。スキッチをひねりませうか。」

肥つた織田は、大柄な顔を擡げ、河合の細君の方へ向いた。微笑ひながらゐた顔がそのとき不意に微笑ひを停めた。きれ長な細みな目は色つぽくしんとしたが、また、きふにわらひ出した。

「ええ、ひねつてもよござんすわ。でも奥さんが默つてゐらつしやりはしませんよ。」
「いや、家内も承知なんですよ。」
織田は、續いてさういふと、大きな聲で笑ひ出した。
「奥さん、ほんとでございますか。」
織田の細君は、さういふ河合の細君の方へ顏を振ちあげた。黑味で、夜目にもたらりと光つた瞳をしてゐた。
「え、よござんすわ。たくは、あなたでなければならないやうに申しますから。」
「そりやよかつた、あなたでなければならないのはよかつた。」
一と頻り笑ひがつづくと、河合は、肺のわるい、蒼い顏をもちあげ、スヰッチを捻ることを氣に病んでゐるらしい、絡んだ聲を出した。
「さうなると木森が默つてゐはしないよ。な木森。」
「さうさ、まんなかに居るから、わたしをつけてくれなくちや……。」
木森は、河合の勢力の足りない顏のうしろから、目高のやうによく動く色つぽい目をちよいと眺めた。
「まんなかが一番可哀想ですわ。でも奥さんもするいわ。來ないなんて――。」
木森は、話しかける河合の細君を見つめてゐたが、こんどは、織田がうしろから大きな聲を出した。
「木森にするいよ。細君がするいんでないんだ。つまり前以つて打合せて細君を來させなかつたのかも知れないよ」
木森は、すぐ打消しかかつたが織田の細君がそれを又さへぎつた。
「木森さんが、いけないんですわ。お前今夜來ちやいけないとでもお言ひになつたのかも知れないわ。」

「さうさ、それに決つてゐる。」

織田も、すぐ賛成した。木幕は、唇の端で微笑つて見せ、織田の細君の目を強く眺めこんだ。

「そんな計畫なんぞするものか。奥さんもさう氣を廻しちやいけないな。」

眞面目な聲なので、織田の細君は笑ひ出した。

「あいつは中々ずるいからな。」

そのとき、そつと織田は、細君に耳打ちをした。細君も、ひつそりした聲で

「はじめから來ないことにしてあつたのかも知れないわ。」

「さうとも。」

こちらで河合は、スヰツチのことを、その妻に、輕卒だといふ風に注意した。

「だつてその方がおもしろいんですもの。でも戯談ですわ。」

「それでも本氣で云つたぢやないか。」

二人は、ひそひそ聲をした。木幕は、まんなかで、すぐ河合と織田とが隣り合せてゐたので、咳拂ひをした。それで又、みんな笑つた。

「鶏頭が見えますわ。夜明けのやうにあかるいんですね。」

織田の細君がかうひとり言のやうに言ひ出したときは、もう織田は寝込んでゐた。思ひがけない木幕が、すぐ答へて織田の細君を驚かせた。

「え、見えますね。どうも寝苦しくて——。」

木幕は、床のなかで、暑さうに寢がへりを打つた。河合夫妻も、寢込んで、すうすうと自ら夫妻べつべつにわかる呼吸づかひをしてゐた。

「信時さんが結婚なさるんですつてね。」

「え、間もなくでせうよ。例の、戸塚の方からですよ。」

「きれいな方。」

「ぱつとしない目立たない女ですが、じみで、きれいな方です。」

「嬉んでゐらしつて――。」

木幕は、細君の方をちらりと見た。冴え返つた瞳の黑味が、夜よりも一層の黑みで、こちら向きに光つてゐた。どう返事しようかと考へたが、微笑つて、いつそ言つて了へといふやうな突き出しな冷たい聲音をした。

「かなり興味があるらしいんですよ。もう家まで借りたらしいんですから。」

「何處に。」

「お店の近くだつて言ふんだけれど、まだ見ないんです。」

「さうですか。」

それきり話聲が斷えた。が、木幕も、織田の細君も寢苦しく幾度も枕の音をさせた。半枚づつ開けた雨戸のそとは、露が下りたらしく、篠竹のそよぎもしなくなつた。河合の細君の顏が、弱々しい河合のうしろで、蒼白くぼやつとふくれてみえた。織田は、大きな獸のやうな圖體をすこし歪め、荒い鼾を立ててゐた。

幾つも通りを越えた街路の方でときをり自働車の馳驅するけはひが、荒い風のやうに起つて來た。

「どうも眠れない。すつかり目冴えがしてしまつた。」

木幕は、ひとり言をいつて、からだを起した。河合のいくらか、喉につかへるやうな涼れた呼吸づかひが氣になつて仕方がなかつた。

「わたしも寢つかれなくて――起きやうかしら。」

「いゝ風ですよ。」

株の長椅子の上に、木幕は、熱のあるやうな身體を音のしないやうに恁らせた。すつぽりと浴衣がけの、織田の細君は、皮膚のやうにへばりつく着物を、夜目ゆゑ冴えゐる脂肪ぶとりのした指さきで掻き合せた。

「みんなよくおよつていらつしやるのね。あんなに良くねむれるものか知ら。」

「織田君もよくねてゐますね。」

木幕は、それとなく、その體臭に顏をそむけるやうにした。細君も、そのからだの上に目をとどまらせた。

「大きな人？」

細君は、目で微笑つて、木幕の目をながめこんだ。木幕は、それをわざと見かへした。

枇杷のぐらい繁りに、ほんのりと石燈籠が立つて、あたりは篠竹で一杯だつた。その高い枇杷の頂の葉が、空に模様のやうに浮き、しかもその影はクッキリと黑ずんでゐた。

「幾時ですかしら。」

木幕は、浮足で、河合の枕もとにある時計を執りあげた。冷たい金屬を掌にして、河合の細君を見るともなく見過した。

「二時。」
「もうそんなになるんですかね。」
「とても睡られさうもないな。かう目が冴えてしまつては――。」
木暮は、また時計をもとのところに返したときだつた。ほそい河合の細君の目が、こころもち、ほんのすこし、開いたやうに思はれたのが、氣のせいだつたか……と、あとでさう思ひながら見詰めたのである。顫えるやうにぴりと、左う考へられた。
「夜明けまでわたしも起きてゐますわ。あと二時間くらゐで明けるんですから。」
「おつきあひならいいんですよ。」
「いえ、そんな……。」
木暮は、その睨みを微笑みで食ひとめた。そこで、織田の細君は、歯をあらはにして頬笑んだ。
「にくらしい人。」
濕り氣で、椽板にぺたりと素足がつめたく見え、冴えて、白かつた。木暮は、その伏せてゐた目をあげた時、座敷の内で、黒いものがむんずり動いた。織田が目をまぶしさうにあけた。
「時子もまだ睡なかつたのかい。やあ、木暮も起きてゐたのか。」
「うん。ちつとも睡かないんだ。朝まで起きてゐようと思ふんだ。本箱をさがすかも知れないぜ。」
「いいとも……。」
織田は、左ういふうちに最う睡はじめた。が、慌しく目をあけて

「時子、お前ねむつたらいいぜ。」

と、うつつになつて言つた。

「わたしすこしもねむかあないんですの。目がさえちやつて――。」

「さうか。」

織田は、いが栗頭をこちらへ向けると、もう酔をかけても起きなかつた。

「いつでもね。朝まで一度だつて目をさましたことがないんですの。からだがいいんですのね。」

木森は、その大きなからだを乗り出して寝込んだ織田を見て、ちよいと眉をしかめ、それをすぐ微笑にまぎらせた。

「健康過ぎるんですね。」

時子は、その言葉をあてこすりのやうに感じたのか、目を見張つて、じつと、いくらか粗野に近い荒い色をたたへた。

「お氣にさわつたら御免なさい。僕はさういふ氣で言つたんじやなかつたんですから。」

木森は、にこにこしながら、平氣で、時子の方に視線を、ながく、板の間に沁みる影まで、辷りおとした。

「いいえ、わたしだつて別にさういふ咎め立てなどしたわけぢやございません。」

時子は、故意と白氣立つてさういふと、桜下駄を引かけて庭へ出た。どこかで鶏鳴がした。

「信時さんは何時結婚なさいますの。もう直ぐですの。」

「二三日中とかいふんですよ。途中で昨日逢つたら色々ものを買つて歩いてゐましたつけ。」

時子は、長椅子のそばへきて、目またきしながら、しつこく信時のことを聞き糺した。

「世帯道具なんですの。」

「え、何だかパケッだの提灼だのを風呂敷に包んで重さうに、しかし元氣よく持つてゆきましたよ。」

間を置いて、時子は、つい口をすべらしたやうに、ぽつんと言ひ出した。

「いやね。とのがたが、そんな細々したものを買つてあるいたりなぞして――。」

「それが面白ければ仕方がないぢやありませんか。はじめは誰だつてそんなもんですよ。」

「織田なぞそんなことはしませんでしたわ。」

「織田君はべつだが……。」

時子は、ぷいと又庭さきを歩き出した。十六の聲がかかると、すぐに織田のところへ嫁入らされた時子は、殆ど、何の用意もなかつた。からだまで、それの用意を缺いてゐたばかりでなく、その當時ひどくからだをこはしたりした。同じ銀行に出てゐた父親の頑固から、二三度の顏馴染で、すぐ、學校出たての織田のところへ遣らされた。

いまになると、時子は自分で自分の顏を覆ふやうな汚はしいことが多かつた。からだの〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、それがそのまま目の前に何時も浮んでくることが耐らなかつた。

「莫迦に信時のことを氣にかけますね。先刻から。」

木暮は、そら明りで、ほの白い、庭さきの時子を寢そべりながら長椅子の上からながめた。ひとりでゐる信時のところへ、よく出かけてゐたことをうすうす知つてゐた夫の織田は、れいの大きなからだを揺ぶりながら微笑つては木暮に云つてゐた。

「處女のときにラヴをしない女は、細君になると危ないんだよ。その反對で、處女時代にそれを經驗した女は、そりや

固くなるから。あれはやつと芽が出かかつたんだ。どうせ一度は出なければならない芽なんだから。」

木暮は、それを思ひ出すと、それにも首背けるやうな氣がした。時子は、そのとき大膽な聲音になつて言つた。

「そりや氣になりますのよ。氣にしたつてよござい ませう。」

時子は、石燈籠の黙灯石の上にうづくまつて、深い柔らかい微笑を、につと齒と齒との間にはさんだやうに、むしろ艶透にほほえんで見せた。いつの間にか匪う催しかけた夜明けがたのうすあかりが、風のない、樹の、表べに立ちはじめてゐた。それゆえ、病的に冴えた時子の皮膚の生白さは、却つて、木暮のかほに反射してくるやうな氣がしたのである。それほど、明るさをかれは自分の皮膚にかんじた。

「まア、いいことにしてをきませうね。」

木暮は、さう言ひかけて、身をおこした。長椅子がぎいいときしんだ。誰か目をさましはしなかつたかと、注意してみると、皆しづかに睡つてゐた。——床の間には、昨夜おそくまでしたトランプや花札なぞが投げ出されてあつた。

木暮は、永い間、時子の顔を見戌つてゐたが、ふいに、織田の寢息を氣にしながら、聲をかけた。

「○○○○○○○○。」

時子は、その眼底を讀みわけると、そのまま、枇杷の葉ツパに手をさわらせて動かうとしなかつた。

「○○○○。」

「どうしてです。」

「どうしてもいけません。」

「やはり信時がいいんですか。それでさう云ふんですか。」

木暮は、そのとき先刻からの落着いた顔が眞青になつてゐる時子を見た。木暮自身も、夜明けがたの凉しさで、そればかりでない別な震えを心内に感じた。

「さういふふうに物を仰有るものぢやございません。わたし、すこし厭な氣がいたしますから。」

時子は、目を上げたまま、木暮の視界の眞中に立つてゐた。

「さうですか。ぢや御勝手に――。」

木暮は、再た長倚子にからだを沈めた。時子は、素氣ない木暮の言葉が、やはりからだにひびいて、氣の弱りを加へられた。冷然と倚子にもたれた横顔が、冷たい一片の瓦石のやうな粗いさわりを目のうちに感じさせた。わけのわからない恐怖がこの男の前に立つときに、いつも襲ふた。なるべく遠退いて互ひに觸れないやうに心がけてゐて、首尾よくそれが一年近くも續いた今夜だつた。ひよつとすると、夜通し起きてゐたのにも、睡れないといふ口實のうちにも、時子は自分が加へられてゐはしなかつたかと云ふことを考へて見た。そして慄然とした。

時子は、自分を近づけるために、默つて苦心してゐる木暮の卑劣さを露き立てるため、それの表はしかたを頭の内で模索してみたけれど、つい思ひ浮べられなかつた。それが哀然と心をしづまらせた。

長倚子の脚を透かして、河合夫妻の黒い頭が見えた。わけても黒々した細君の頭髪と、白い横顔のちらつくのを目におさめたとき、時子は、一時に、あたまへ掻きあがるやうな上氣を感じた。木暮が入れぴつたりに河合の家へ行つてゐることや、默つて微笑んでみせてゐるだけの木暮を、細君と關聯させずに時子には考へられなかつた。内へ内へと計劃する木暮は、ふれるものを其儘にしては置かなかつた。

倚子の上で、木暮は、王者のやうに長い身體をゆつくりと伸してゐた。顔を仰向け、とかげのやうな黒い艶のある頭

が、白い籐椅子の地を透いて見えた。時子はすこし頭のふらつくこと、關節に不足した睡眠の倦るさが完きまでに行き亘つてゐること、それが一時にひどく疲れになつてゐることを感じた。長い木幕の足が、籐椅子を食み出して、足さきを空向きにしてゐるのも目に入つた。

時子は、夫の方をながめた。次いで河合夫妻をも。——しぜんに、倚子の方へあるいて行つた。頭に熱が乾きかけた日南の地面をかんじるやうに、ふうとさわりかかつてゐた。そつと、足をつかんだ。心は、悄悲と、異體の知れない上氣に責めあげられ、蛆のやうにじくじく湧いてゐた。

木幕は、顏を上げ、時子はきふに倚子を離れた。眞蒼で、頭だけが依然かつとしてゐた。木幕は、ただ微笑んで何もいはなかつた。

「どうなすつたのです。」

木幕は、起直つて左う言つただけ、なほ時子には白々しい氣がした。自分のしたこと、それが殆ど夢のうちでやつたことのやうに口惜しかつた。

「いえ。なんでもないんですの。」

「ひどく醉いでゐますね。お這入りなさい。夜露がいけないんだ。」

時子は、あちら向きに、枇杷の木の方を向いた。木幕は、目敏く、その時子の濕つた目いろを覗き見た。

木幕は、まだ仄暗い露の匂ひのする庭へおりやうと、倚子をきしらせると、氣がついてふいにふりかへつた。ふりかへつたときに、うつすりと目あをいた河合の細君が、硬ばつたやうな顏をこちらへ向けてゐるのと、くだものを切つたナイフのやうにかちりと出會した。目はすぐ閉ぢられた。ぞつとした。ずつと起きてゐはしなかつたかと、咄嗟にさう

疑はれた。
夜はしだいに明けかかつて、時子の、浴衣が氣のせいかしつとりとして、折れ目がながれてゐるため、なほ、ほつそりとして見えた。最后にこちら向きになつた時子は赤い腫れた目をしてゐた。

二

皆が食卓についてから、信時がたづねて來た。小柄で、きりつとした顏立ちをしたかれは、まだ獨りだつた。
「まあ、よく入らしつたのね。昨夜おまちしてゐましたの。」
昨夜睡らなかつたので疲れて青白くなつてゐた時子は、一どきに、冴え返つて、信時を迎えた。河合夫妻も木幕も、みな信時をとりかこんだ。
「出がけにちよいと人が來たもんですから……。河合の奥さんもゐらしつたんですか。」
信時は、ときどき恁ういふ會合になれてゐるので、河合の細君にあいさつをした。朝化粧をした細君は、それにも拘はらず青白いたるんだ皮膚をしてゐた。
「昨夜いらつしやればいいのに——ご結婚なさるんですつてね。」
細君は、一本突き込んで、對手のたぢらふのを見澄してゐた。
「こんどはお仲間入りをしますよ。木幕君のマダムは？」
織田は、朝の食事を貪りたべたあとの、疲れた顏を振つた。
「れいに依つて素つぽかしさ。實際ずるいんだから。」

木暮は、默つてじりじり苦笑してゐた。信時は、ちよいと木暮をみると、思はず時子をちらりと見た。それが時子にもわかつたらしく、すぐ目をそらせた。

「木暮は、あれでなかなか細君おもひなんだからね。」

河合は、れいの掠れた聲で、木暮にそつとあたりをつけた。が、當の木暮は、腕を組んで、默つてにやにやしてゐた。」

「何とでもいふさ。冒讀したつてダメなんだから。」

木暮は、やつと、これだけをいふと、こんどは、信時の顔を見た。

「結婚なんかしない方がいいよ。獨りでゐるほど樂なことがないよ。」

「さうかなあ。」

「さうとも、何を苦しんで結婚なんかするんだ。君らしくもない――。」

微笑ひながらゐる木暮は、細君連の前ですばすば云つて、生眞面な顔をした。信時の方からは、それが横顔だつたので悲しさうに歪んで見えた。

「まあ、ずいぶんな木暮さんだ。自分で結婚してゐて、人ののを邪魔するんですもの。ずるい人だ。」

河合の細君は、すぐやや感情的になつて言つて、憎らしさうに木暮を見つめた。

「僕はひとりでも結婚させたくないやうな氣がしますよ。奥さんの前ですがね。」

木暮は、河合の細君をまじまじ見入つて言つて、織田に同意を求めた。

「それよりか君、一人でも餘計に結婚させて、れいの窮屈な民にかけてやりたいやうな氣がするぢやないか。ずるずる

引き込んでき。」

織田は、からからと嗤つたあとで、皆は、一時に默りこんだ。時子がやつと、低いこゑで、信時の方へ向いた。

「どつちがいいとお思ひになりますの。やはり結婚なさいます方がいいの。」

信時は、はじめて家をもつこと、さまざまな道具を買ひあつめること、それから何よりもかれが永い間苦しんだ女性の内部へ斬り込んでゆくことなど、潑溂として心内に踴つてゐる矢先だ。

「僕はしますよ。いいにしろ惡いにしろ、どうしたつて結婚しますよ。」

時子は、さういふ目をじいつとながめた。信時は、からだに疼きをかんじた。何處かで、觸られた生ぬるさを、搔きまされた。目をなるべく、倉はさずにゐた。

「お美しい方だからよござんすわ。ぢあなさいましな。」

時子は、もう一度、微笑ひかけて、商を恐いた。そのとき木葉の視線がはすかひになだれた。

「信時さんはきつと可愛がりなさいますから、奥さまになる方はお仕合せですわ。」

河合の細君が、色つぽく、まだ少年のやうな顏立ちの信時を見ながら言つた。

「そんなことは分りませんよ。けれども興味はありますよ。」

信時のその興味は、みんなを笑はせた。信時だけ正直さうに笑はないで、あちこちの顏を見くらべ、すこし困つたやうな顏をした。

「しかし結婚前の氣持ちはちよつといいな。實際、あの氣持は一生に一度しか味へないからね。信時、ゆつくりそれを味はうんだね。」

肺の悪い河合は、消耗と衰弱の、さびしい冴えた唇の色をさせ、信時を羨しさうにながめた。

「だつてあなただつて味つたんぢやないの。でせう。」

細君は、顔いろを不快さうにくもらせ、いくらか戯談のやうに、なぢつた。人の善い河合は、みんなの前だつたのでちよつと赤くなつた。

「誰も味はないといはないよ。」

さういふと、皆が吹き出した。織田はそこらぢゆうを転がつて笑ひぬいてゐた。河合夫妻は、笑つてみたものの、白けて、紛れたやうな顔をした。信時は、黙つて木暮をみた。木暮は、沈んだいろをして、苦笑を噛みころしてゐた。

食後、みんなは織田の庭へ出た。時子の實家の所有になつてゐるこの家の庭は、雛形になつた樹立ちにつつまれ、古びた鞦韆、白いベンチなぞがあり、沈丁ばかりを繞らせた小徑などがあつた。

日曜の、初秋のそらは晴れて、時子、河合の信子の、どちらもが派手にきらついてみえた。

時子は、あきらかに苛ついて、ひとり離れてゐたが、信時と木暮と話してゐるそばへ遣つてきた。ふたりの話が、そのとき、ぷつつりと止んだ。

「お話しなさいましな。」

時子は、ふたりの顔を等分に見くらべた。ふたりは暗い陰気なかほをして、不機嫌になつてゐるらしかつた。

「話すことがないんですよ。かうして居るのさへ退屈なんです。」

木暮は、木賊の青く圍んだ紅色をした佐渡の菱石に腰かけて、ぼんやりした目をしてゐた。

「信時さんは退屈ぢやないんでせう。心ではずゐぶん忙しいんでせう。」

「え、何だか用事がたまつてゐて落着かないんです。」

信時は、正直にさう答へた。木幕の方へ向いて、時子は、皮肉にわらつてみせ、輕蔑するやうな顏をした。

「憎らしい人。」

「あ、わるかつた、つい口を辷してしまつて——。」

信時は、顏をあかめた。それが時子には、うひうひしく、木幕には、冷淡にそつぽを向かせるほど、ばかばかしかつた。時子は、信時のすこしの疲勞のない（必竟夫の連中のなかでの）新鮮な顏容をまんじりと見つめた。皮膚からはじき出てゐる内部の鬱然とした元氣が潔よかつた。——木幕は、その時子の目付をにが笑ひしながら諷刺的な目色で、瞬きもせず見つめた。上から見下ろすやうな放埒な目色だつた。

木幕は、默つて立ちあがつて、歩いてゆかうとした。

「いいぢやありませんの。お逃げにならなくともよござんすわ。」

「いや。」と微笑つて「ちよいと向ふに用事があるんです。まあ寛くりお話しなさい。」

信時は、木幕の背後姿を見つめた。なりの高いかれは、がつしりした骨組みの肩をそびやかして歩いて行つた。

「やつと二人きりになりましたのね。」

「ええ。」

信時は、さう答へたきり、河合の信子を中心にして騷いでゐる織田の、燥いだ顏を見つめてゐた。織田は、信子のあとばかりを趁ふてゐたのである。

「いよ——素的。」

織田の高い肩の下から、信子は、袂から二本の腕を露き出しにして、吊紐につかまつた。ぎいい、ぎいいと軋む古鎖の音が、ふしぎな調子をそろへ、信子のからだは空中を切り泳いでゐた。あぶらのついてない前髪が風にくしけぞられ、白い、つるつるした、むしろ、なまなました額が、こちらからも光つてみえた。

時子も、信時も、なんにも話をしずに、茫然とそれに目を停めてゐた。半圓を引いて大揺れをしてゐる信子は、見てゐても、涼しくいさましかつた。あたりの樹立の葉並が、風にあふられてざわついてゐた。

「大丈夫。僕が引きとめるから、もう一と揺れだ。」

織田は、すぐ鞦韆の吊紐を、追ひ揺れのしづかな手つきでおさへた。信子は、少女のやうに華麗にはしやいで、あらい息をつき、それゆゑなほ紅照りのした顔を、みんなの正面に向け、織田の、大きな手によつて抱きおろされた。織田の肩の上に、信子の、微笑んだ顔があつた。その目は、木暮の、目とぶち合ひ、夫（をつと）の、青ざめた不愉快げな顔色をもすつと掠めた。

織田の手をはなれると、皆は、ほづと一と呼吸をした。

「木暮、乘らないか。」

織田は、片足をかけ、さう聲をかけた。

「おれは嫌ひなんだ。空にからだが浮くやうな氣がして厭なんだ。」

「それがいい氣持ちなんですわ。すうつと氣がしづんで……やつてごらんなさい。そりやいい心持ちなんですから。」

信子は、木暮を乘せたがつた。木暮は、不快な、先刻から引續いてゐるその目付を、信子に、ちかに射りつけ、その表べは靜かに微笑ませてゐた。

「僕はその氣もちがいやなんです。」

「さう――。」

信子は、對手の目を興味さうにながめ、くるつと、聰明にうしろを向いた。そこに、織田の大きな肥つたからだが既う歡麪の上に踊つてゐた。信子は、異常な體軀を熟視しながらゐた。河合は、ほそい腕をさすつて、やはりぼんやり呆れたやうに織田の姿を見てゐた。

時子は、さつきから變に苛々して、節拔けのする靑い木賊をポツンと引拔いではゐた。信時は、しまひに信子が織田が下りやうとするとき、わざわざ傍へよつて、吊紐を停めた、織田の嬉しさうにする大きな顏をみにくくながめた。

「あなたもああいふふうにおなりでせうね。結婚なさいますとね。」

低い、優しげな毒を含んだ聲音だつた。信時は、その意味がわからなかつた。なぜ左ういふ時子だかと云ふことをも、かれにわかり兼ねた。ただ不愉快な氣がした。

「さうお考へですか。僕は反對ですよ。僕はああいふ醜いことをようしませんよ。」

「わかりませんわ。ずつと後にならなければ……が、わたしには何故かさう考へられますの。」

信時は、そつと立たうとした。時子は、ほほ笑んで（多少おもしろさうに。）目をあげた。

「お氣にさわりましたの。わたし、あまりなことを申しましたのね。」

時子は、さつきから、粗くなつてゐる自分を、ハッキリ感じた。

「え、いやな氣がしたんです。」

正直に、信時はさうこたへた。

「ぢや、ごめんなさいまし。ね。」

時子は、その目にちからを込め、Rの感じをあらはした艶を、上目で、信時にそそぎ、信時の視線を伏せさせた。いつも、かれは、その目にあふと、こちらが見返すことができなかつた。これは羞恥ではない。強制だ。だが、かれは目を伏せた。

「さういはれると困ります。何とも思つてゐはしません。」

信時は、またあたりを不安な氣で感じ出した。時子とふたりきりになると、それが毎時かんじられた。

「ご結婚なさいますと、わたしなぞ、對手になさいはしませんわね。わたし、なぜか其那氣がしてなりませんの。」

立ちかけ、歩き兼ねた信時は、れいの、惑然とした不安のおそふてくることを、肉體的に感じた。

「そんなことがありますものか。僕はさういふ人間ぢやありませんよ。」

時子は、その困りぬいた拙い表方に、おもはず微笑を漏らした。それをちらと見た信時は、自分ながら劣いことを言つたものだと、顔をあからめた。

「誰でもみんなさうお仰有りますけれど、そりや變化りますのよ。」

「僕はかはらないつもりです。」

そのとき、彼方で皆は高い笑聲を出した。信時は、棗石をはなれた。みんな此方を向いてゐた。かれは、眩しげに皆のかほを見た。木幕だけが、れいの、靜かな微笑をたたへ、腹底を抉るやうな目をしてゐた。——時子もあるき出した。

「わたし最うすこしお話ししたかつたのでございましたけれど。」

信時は、頸首のところで、低い、しつこい時子の聲を聞いた。

「どんなことです。」
「どんなことでもないんですけれど……。」
口のうちで、よく聞えなかつた。
織田は、すぐ時子に聲をかけた。づかづか近寄つた。
「お前乘つてごらん。そりや面白いんだから。」
時子は、あたまを振つた。
「わたし目まひがしますの。ぐいぐい動くんで……。」
それでも乘れと織田はきかなかつた。信子もその夫の河合まで口をそろへた。先刻、信子が乘つてゐたとき苦しさうに眺めてゐた河合は、疳高な、掠れごゑで執拗くすすめた。
「何んでもないんですよ。ぜひ、お乘りなさい。」
時子は、ふいに今まで躊つてゐたのが、きふに或る想念に引き立てられ、乘つてみる氣になつた。
「あんまり動かしちや厭ですよ。でなきや私乘らない。」
皆は、頭をふつて見せた。時子は、すうゐと乘りうつると、足をくの字に拍子をとつて、ぎいいと軋うその軟柔やかなからだを、ななめに、尾のやうにハね、また、水馬のやうに澄み泳いだ。みんなは手を叩いた。河合は、瘠せたからだをあちこちに歩かし、時子の、肢體を目路よろしきところから眺めやうとした。
「もつと高くよ。時子さん。」
信子は、自分よりからだの浮きを採ることの巧みな時子に、さう下から聲をかけた。時子は、ちらと、信子を偸み見

た。暴風のやうな氣持ちが起りはじめ、鞦韆の、元木と、すれすれに、むしろその黒い艶のある髪が、さかさまに背の頭の上に匂ひながら揺られ過ぎた。

「大丈夫か。」

織田は、呼吸を詰め、さう聲をかけた。やはり肥つてゐるだけ人の善い顔付が、止むなく表情づけられ、危なかつた。

「ええ。」

時子は、胸の内部から出たやうな初初しい聲でこたへた。木森は、快よげにほほ笑んでゐた。あたりは森と、鎖の軋む音が、あるひは空からもして來た。——河合は、ぐるぐる鞦韆を廻つて落付のない眺め方をした。木森は、冷笑を雜へて、その長細い瘠せた姿を見てゐた。

「よし來た、つかまつた。然うだ。」

織田は、顚狂な大聲でさういふと、時子を抱きおろさうとした。

「一人でおりられますわ。」

織田は、さし出した手を惹いたとき、ぽんと地上に、につこりした時子は、生白い手のひらを揉りながら立つてゐた。——仲間をはずれた勝手の方で女中が珍らしさうにながめてゐた。

午砲が鳴つた。木森と信時とがかへりかかつた。河合夫妻も、一緒に座を立つた。

「みんな歸つちやさびしくなる。誰かが居なきや。」

さういふ織田も、疲れて一人でゐたがつた。時子は、何か言ひたさうに、ぐずりぐずりしてゐた。信時をうしろから、木森が、ぐいと押した。

河合夫妻と街角でわかれると、木暮は、自家とは反對の道路を行からうとした。
「どうするんだ。道が違う。」
信時も、足を停めた。そして直ぐかれは別れようとした。
「寄り道をするんだ。それで君がちよいと僕の家へ行つて貰ひたいのだ。晩方までにはかへるつてね。」
信時は、悲しさうに木暮の目を覗き見た。疲れてゐるが、底にはきらりとした、一點、野獸のやうな茶目が澄んでゐた。信時は、すぐ承知をした。
「ぢや又。」
「よろしく。」
信時は、街をまがらうとする木暮をみると、鳥子が目に浮んだ。きまつて鳥子と逢ひに出かけたのだ。睫毛の深い、たらりとした鳥子の目が、かれの視覺をおそふた。どこか毛深いやうな顏が、まつすぐに浮んだ。
根岸お行の松から、程近い裏小路に、木暮の家があつた。信時は、古びた格子先きから、內側へ聲をかけた。
細君は、信時をみると、ちよいと寄つてゆくやうに言つたが、辭退して、用談だけ話した。
「それでは何處かお友だちのところへでも廻つたのでせうか。」
細君は瘠せて尖がりを見せた顏を、すこし傾きかけ、信時の、目いろと、口つきを見た。かれは鳥渡慌てて、暧昧にやつと答へた。
「多分さうだらうと思ひますが、よく聞かなかつたものですから。」
「はあ、どうもお使ひ立てして濟みませんでした。」

七つになる長男の稻一と、四つの次女とが、母親の出てきた茶の間に、陰つた室のあんばいでもあらうが、うすら悲さうに、きちんと座つてゐた。母親似の、蒼白く煤けた顔を、格子先きから射す明りのなかに浮かしてゐた。そこらは取散らされ障子襖も、つくろはずにあつた。

「失禮でございますが、あなたも織田さんのところでおとまりでございましたの。」

「いえ、僕だけ用事がございましたものですから……。」

信時は、睡眠の不足してゐるらしい細君を、そのきつい日いろのなかに讀んだ。小鼻も尖つてゐた。

格子をあけて出ようとすると、菜の束くずれが二三本散らかつて、信時は、あやふく辷らうとした。細君と顏を合せて笑つた。そとへ出ても、その葵ツパと、寂しい細君の微笑とがかれの目から永くはなれずにゐた。

三

その日、夕方近くなつて、河合の書齋にゐる木森を、鳥子がたづねた。細君の信子が不贊成だつたに拘はらず、河合は自分の書齋を木森に貸し與へたのである。信子は、極力それに反對したが、河合の止みがたい好奇心は、當の鳥子のそれを一瞥することによつてでも、容易に滿足されたのである。

鳥子を、内玄關へ迎えに出た信子は、殆ど最初の一瞥から慄然とした或る不思議な、抵抗しがたい印象を受けた。靜かで對手に沁みいるやうな慇懃な微笑は、信子の最初の瞬間の矜をたたき壊はした。

「木森さんは先刻からいらしつてお待ちでございますの。どうぞ。」

實際、信子は、聲に慄えのまじるほど、壓倒された窮屈な身動きのならない氣分を感じた。自分でもこれまでに

經驗したことのない不思議な冷たい汗を、そのあとで、脇の下に感じた。

「飛んだことをお願ひいたしまして濟みません。」

鳥子は、すぐ信子のあとから階段をあがつて行つた。痩身な河合は甲州の持畑からあがる月々の金で、十疊をすつかり敷物でたたみ込んで、洋風に拵へあげてゐた。音樂學校を卒ると、何一つしないで、黑漆なピアノにもうつすりと何時も埃がかつてゐた。

「やあ、よくこそ。」

木暮は、倚子をあたへると、微笑んで、親密さうに目であいさつをした。木暮は、河合を紹介し、信子にもちかづけやうとした。

最初、階段を上つてきたときから、河合はその數分間にすつかり顏いろを變化へてしまふほど、鳥子の、大がらな、大き過ぎる瞳と、垂り頰の、うすひげの生えた顏を異常な慌て方でながめた。

「どうか寛くりなすつて下さい。」

河合は、さういふと信子に茶を命じた。信子は、夫の顏色を見ることによつて馴れてゐたため、すぐ不快な色をたたへた。慌てて正面に對手の女をみないで、螺線形をえがいて宙に迷はせてゐる目つきが、何よりも醜かつた。それを面と向つて罵りたいほど、心憎い商痒さに爪立たれてゐた。

「鳥子さんは、いま外國へ行つてゐる間秀畫家があるね。あの人のお弟子だつたんだ。」

木暮は、河合に向つてさういふと、思ひ掛けなく顏を赧らめた。河合は、その羞恥をかんじるに敏感な皮膚を、こころで、妻の信子と比較してゐた。

「いえ、しばらくでございましたのよ。お弟子ぢやないんですの。」

「それぢやお稚兒さんかな。」

「まア、いやな。」

はじめて鳥子は、眉に皺を刻んだ。木暮は微笑つて、河合の、いつの間にか昂奮してゐるやうな目付を、むしろ病熱的にがちがち襞へてゐるやうな目を、ちらと眺めた。

「その閨秀畫家といふのは、ふしぎな特異な性をもつてゐたものらしいんだ。變體でその上……。」

木暮は、氣がついて、高笑ひをして止めてしまつた。鳥子は、いやな顔をした。河合は、やや鳥子にも時間的になれてきたので、鳥子の顔の上に、ずるずる、病的な目付をなめくぢのやうに這はしてゐた。

「それで……どうしたんだ。半分云ひかけるのはいけない。」

「それきりなんだよ。つまり變體だといふに過ぎないんだ。多くの夫婦間が皆それのやうにね。ただその女作家先生はすこし違ふんだがね。」

木暮は、それきり默つてしまつた。興味なささうに、煩さい口で、河合の、たるんだ褪せた顔をながめた。

「どういふ風に――。」

河合は、しつこく尋ねやうとした。

「も止さう。面倒だ。」

木暮は、それきり口をきかなかつた。

河合は、きちんと膝の上に手を置き、たへずほほ笑んでゐる鳥子を、初々しい感じでながめた。派手な扮裝だつたが、そ

れが又ふしぎに質樸なつくりにも見えた。顔もパつとしたところがあるかとおもふと、笑ひかたなぞ内側へ潜ませるやうなそれで、カラリとしなかつた。それゆえ、ヨ程ウブに、處女のやうにも感じた。ただ、かうして落着きはらつてゐるのが、疑ふ餘地があるけれど、顏をあかめたりするところは、やはり處女のやゝなしほらしい感じだつた。

信子が茶をもつて上つてきた。

「奥さん、どうもすみません。」

木森は、さう言つて、信子をながめたとき、信子は内側で背ついてゐる氣持ちが、隠しきれないで皮膚のいろを黒くしてゐた。

「いいえ。」

さう言つて鳥子に、茶をすすめ、木森には、あまり口をきかなかつた。

河合は、空いた鳥子の正面の椅子を指した。

「お前もそこに腰かけたらどう。」

「わたしさうして居られないです。」

河合は、ちよつと、いやな顏をした。木森もすすめた。最後に鳥子が、優美な口つきで言つた。

「女つてわたし一人でございますから、奥さまもお話しなさいまじな。」

信子は、烈しく寂しさうに眉と目との間をひろげ、辭退した。

「ほんとにわたしすこし用事がございますの。失禮いたしますわ。」

「用事ならあとでもいいちやないか。いまでなくとも。」

「でも……。」

頑固に、うしろ退さりした。河合は、怒り瞬を彩せた頬にうかべ、左の足を、椅子に抱きあげた。

間もなく信子は、しづかに階段を下り、その音は、木幕のあたまに残つた。

「頑固でこまりますよ。わが儘でしようがないんです。」

河合は、話の穂がないので、鳥子にさう話しかけた。

「いえ、わたしこそ飛んだ失禮ばかりいたして居ります。」

三人は、默つてゐた。折を見て、河合は立ちかけ、鳥子にゆつくりして行つてくれるやうに言つた。木幕に、むしろ冷然と、引止めずにゐた。

「用事があつたら呼んでくれたまへ。女中を寄越すから。」

河合は、あきらかに苛立たしくなつてゐるのを、木幕は、素知らぬふりで見過し、頭をふつてみせた。

「あ、よろしく。」

鳥子も、木幕と一しよに、あたまを鳥渡下げた。

河合は、さつきした信子と同じい足音を、木幕のあたまのなかで、操り返させ、思ひおこさせた。

河合が行つてしまふと、鳥子は、嫣然として、木幕と顔を合せた。その瞬間の鳥子の表情にあつた窮屈な温和さと、優美な緊張とが、忽ちに勢然とくずされてしまつた。露き出しな微笑は、すこし上目してゐるため、瞳孔外の白目は、きらりと光つてゐた。

「いい?」

木暮は、うなづいて見せた。鳥子は、指の股にはさんだ紙卷を、先刻から我慢してゐたせいか、甘美さうにゆつくりと燻らせた。

「此處はいいところね。けれども奥さんにはちよいと困つたわ。」

「どうして。」

「女同士ですもの」

○○○、○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○、○○○、○○○○○○○○○○○○○、○○○、○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○、○○○○○○○○○○○○。○○○、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○。

「しまひに頭まで變になつて病的になつて了つたの。」

鳥子は、しまひに木暮に、大森まで走らせた夜晩い自働車のなかで、さう言つて、豹のやうな黒い目をまたたいた。木暮は、鳥子と一時間同席してゐると、烈しい疲勞をかんじた。鳥子は、つかれることがなかつた。うるみと恍惚とをたたへた瞳のうちは、蜻蛉のやうな靑みをふくみ、うつとりと、決して烈しくない靜かな光をたたへ、それが時間的に、たとへば最初の一分間から五分間まで、さまざまな數奇な微笑を、つぎからつぎへと浮ばせ、木暮の全身に滲み徹らせるのであつた。木暮は、そのたびに見す見す憔悴と困憊との豫期に脅しめられながらも、鷲のやうに白い長い腕に、あだかも打ちひしがれ、嬰兒のやうに抱きすくめられてゐた。

同時に、不思議にも木暮の相貌は、河合のゐた數分間前に於て認められた靜平な、いくらか諷刺的で冷淡に近い表情

が、全く陰影をひそめてゐるばかりでなく、ほとんど白痴者に近い恐怖をまぢへた曖昧的な、悴々した表情に約變つて了つた。わけても、鳥子の一つの動きにも、狙ひをつけられたやうに、かれの眼は、そのまま吸ひ寄せられ、動かずにゐた。木暮にしても、絶えず異常な鳥子によつて、その心肉の疲勞することは、快樂以上の苦痛を負されることで、それゆゑ、なほ阿片のやうな甘美な鳥子の何者かに、休むひまない笞に惱まされるに近かつた。

「信時さんにお會ひになつて——。」

「昨日會つた。明後日あたり結婚するさうだ。」

「明後日。」

鳥子は、なにものか胸に痞へるやうに、ぶつつり言葉を切つた。

「どんな方なんですの。」

「戸塚の方にゐる女ださうだ。だが、何んでもない女に違ひない。」

「さう。」

木暮は、昨日、織田のところで信時と小ぜり合ひをしたことを思ひ出した。それに、いま鳥子の調子が、信時の話がでたときから、目にとまらぬ程度で、なみなみならぬ苦心をしながら、つとめて平氣をよそほふてゐる鳥子を、かれは熟視した。

そのとき鳥子は、唐突に思ひ出したやうに云つた。

「あの人を思ふさま撲つてみたいの。にくらしい白鼠さん。」

木暮は、はじめて、にたりと分厚な冷笑を耳の下から抉り出したやうに、鋭く浮べ、射りつけた。

「僕ぢや駄目かね。あんな小さい奴よりか撲ち甲斐があるやうな氣がしますが……。」

「あなたですか。」

鳥子は、おなじい微笑みを、冷たく疊みこんだ。

「あなたには最う倦いたやうな氣がするわ。わたし、あの白鼠を打ちたいんです。思ふさま。」

「へえ。思ふさま。」

木暮は、組んだ手をぱちりと放した。「だが向ふで打たせはしないかも知れない。あと二日だから。」さういふと、わざと、聲を少し出して笑つた。

「二日間あれば大丈夫よ。きゆう！　と、右の手で握り潰されさうよ。小ちやくて、蝗のやうに骨が柔かいんですもの。」

鳥子は、きらきら雲母のやうな光をもつ目を、次第にいきらせた。いきらせると、ふしぎな艶透さがむら立つて、すうつと、生々しい鼻すぢが透つて、鼻翼が、なめらかに研かれてみえた。木暮は、病熱的にその鳥子の顏を凝視めた。

「ところが存外手應へがあるかも知れないと思ふがね。」

木暮は、かちりと小さい信時が、昨日、鳥子の話がでたとき

「僕はああいふ女を見ると、から張り飛したいやうな氣がするね。妙に王女振つてゐて、それで王女ぢやないんだからね。君は手玉に取つてゐられるんだよ。」

さう云つて皮肉にわらつたことを思ひ出した。偶然に、いま鳥子が撲りたいと云ひ出したことと一致してゐるのが、二人に或る共通された氣持のあることを覗き見られ、いやな氣がした。

木暮は、あつちでも、鳥子を張り飛ばしたいと言つてゐたことを、つい話した。鳥子はすぐ顏色を變へた。が、そ

れは何處までも或る感情の高揚を蔽しきれない嬉しさで輝いた顏であつた、

「まあ！　おもしろい。あの人が其那ことを言つたの。」

鳥子は、も一度、瞠つてたらりと目をひからせ、何かを考へあてるやうな顏をした。木暮は、輕蔑的にむしろ茶化すやうな空な顏をしてみせた。

「それがね。憎惡かそれとも輕蔑からの原因かもしれませんよ。あいつはよく憎惡するから。」

「憎惡！　澤山だわ。しまひには憎めなくなるわ。きつとよ。」

鳥子は、自信に茹であがつたてらてらした頰を、木暮の前にさし出した。木暮は、唇をさし出さうとした。その瞬間木暮は、口に手をあて、張りつけられた唇を痛がつた。鳥子は、すこし聲を出して冷笑つた。木暮の目は、怒りと妬みとで、れいの、茶つぽい動物的な光を、鳥子の額に投げかけた。が、默つて何にもいはなかつた。

「痛むの。」

「いや、さう大したことはない。」

木暮は、苦笑ひしながら、口を覆ふた手のひらを離したとき、皓い齒の間に赤いものが滲んでみえた。鳥子は、ちらとそれを見ると寂しい卑しむやうな表情をした。次第に抵抗力を失ひかけた木暮は、泣き笑ひのやうな妙な顏を、窓から迫つてくる薄暮の、うそ寒い明りのなかに浮かせてゐた。

階下で河合は永い間、信子と對ひ合つてゐたが、すこしも落ちつかなかつた。信子も、その焦々した氣分を受け繼いで、殆、色のないほど眞靑な顏をして、女中を叱り飛ばしたり、河合に當りちらしたりしてゐた。時間が經てば經つほど、兩方で睨み合ふやうな縺れた氣持ちが、極度に沈靜な空氣をつくればつくるほど逼迫してゐた。二階はひつそりし

て途切れ途切れな話し聲がするばかりで、それ以外の物音がなかつた。しまひに信子は苦しさうな喘息するやうな氣もちになつて、いきなり河合に食つてかかつた。

「いつそ木暮さんのおたくへ知らしてあげやうか知ら。妻のあるものが嫉妬するなんてなんて酷い人でせう。」

これ以上一分間も耐らなさうな語調で、もう立ちかけやうとした。河合は反對にむやみに落着き（表面には。）反對に心の中では、じりじり燒きあげられるやうな思ひに責め苛なまれてゐた。

「お前が木暮の家へ飛び込めば、あとで吾吾が怨まれるわけだ。すくなくとも二階を使はせたりなぞしたことを、細君としてみればよく思はないに決つてゐる。」

「そりやあなたが惡いんですよ。わたしは承知しなかつたけれど、あなたお一人で引受けてしまひなすつたんです。」

信子は、ともすると癇癪をふりあげやうとするので、河合は、それを手をもつて押しとどめた。

「二階へ聞える。見つともない。」

「聞えたつて關ふもんか。わたし最う我慢がならなくなつた。」

さういふ信子は、顏ぢゆうを痙攣らせた上、半分はヒステリックな泣き顏になつてゐた。

「ぢやどうすんだ。今になつて馬鹿な眞似をして呉れては困るぜ。」

「いいえ、わたしどうしても木暮さんに歸つて貰はなくちや氣がすまない。」

河合は、信子の前に立ち塞がつた。そして弱い心臟を波うたせ、眞青になつた。

「何處へゆくんだ。ばかも宜い加減にしないか。」

「そこを退いて下さい。何處へゆこうとわたしの勝手なんですから打棄つて置いて下さい。」

河合は、妻の肩に手をかけ、うしろへ、ぐいと押しもどした。そのため、信子はよろついて、真赤になつて怒り出した。

「何をなさるんです。亂暴な。」

彼女は、突かれた肩に手をあてながら、なほ前へ進もうとした。病熱に憑かれたやうに矢鱈に兩手を振つて、河合が、突然に摸ぐりでもしかねないための、その警戒に顫え上つてゐた。

「どうしても行かうといふ氣か。」

苦しさうな呼吸づかひをしながら、するつと河合の手をぬけ、階段の下へ立つた信子のぎらぎら燃えた目をみつめた。信子は、あたりの薄暗がりに、がちがち凄艶な皮膚をふるはせ、つッ立つてゐた。

そのとき河合は、苦しさうな聲音で、きふに憮めるやうに云つた。

「頼むからそんな見つともないことをしてくれるな。頼むから。」

信子は、階段へ上らうとしないで、ただの身構へをしながら、ひらりと冷笑を口の尖きにうかべた。

「鳥子さんに工合がわるいからでせう。わたし最うちやんと分つてゐるんです。」

河合は、圖星をえぐり抜かれ、一度蒼くなつた顔を、こんどは颯と赤くした。

「何とでも言へ。が二階へは一歩だつて上げはしないから。」

河合は、突然階段の下につッ立つた信子を逆に突き飛ばした。そこに立てかけてあつた女持ちの蝙蝠傘が、ばたりと、板の間に乾いた硬い音を立てた。それが階段の天井にひびいた。河合は、呼吸の切れさうな喘ぎを全身にかんじながら立塞がつたまま動かうとしなかつた。

「わたしどうしても上つて見せるわ。」

信子は、半ば熱病と極度の昂奮とに、頭を燃しながら、無やみに河合の瘠せたからだをぐいぐい押した。

二階で、木暮は先刻から耳を欹立ててゐたが、そつと、鳥子の目に合圖をした。そして階段の方を指さした。

「どうしたの。」

鳥子も、そのとき耳を立てた。冷笑と混濁とを交へた木暮は、灰だみた惡い色つやをしながら、疲れた目を階段の方へやつた。そこから信子らしい比斯歇利的な啜り泣きが、地蟲のやうに起つてきた。

鳥子は、目を木暮にあはせた。期せずして二人は耐え難い冷笑を示し合せた。

「かへらなくては惡いやうね。ああなつては——。」

木暮は、組んだ足を倚子から下ろし、立ちあがつた。

「かへりませう。」

あたりは、スヰツチを捻つてあつたため、窓だけ方形に暗さから浮き、空に透いてゐた。鳥子は、その僅かばかりの空明りに、懷中鏡を出し、髮にぴんとハネた指を乘せ、つくろひをした。

木暮は、階段の上から聲をかけた。河合はすぐ上つて來た。

「大へん濟まなかつた。遲くまで邪魔をしてしまつて——。」

河合は、素早く鳥子の目をみた。そこには先刻みたとほりの、温良な目いろで、につとしてみせ、河合の心をとらへる美しさが、すこしあぶらじみ、しつとりと重みをふくんで微笑つてゐた。河合は、からだの近くで、何かのうすかゆい疼きをかんじた。

「はじめて出まして本當にすみません。」

鳥子は、すうと立つた長い襟足を、白く覗かせ、しとやかに挨拶をした。

「また入らしつて下さい。おかまひしませんが――。」

木幕は、一ト足さきへ下りながら、河合に聲をかけた。

「信時の結婚式に出るかい。」

「うん。出るつもりだ。」

河合は、さう答へた。すぐあとに鳥子がつづいた。信子は、二人が玄關へ立つたときも、姿をみせなかつた。河合が呼びに行つたが、やはり出なかつた。

「奥さまによろしくおしやつて下さいまし。」

鳥子は、強く河合の目の中でわらつて、また目をひらいた。木幕と、ふたり、夕やみのなかに沈んでゆくのを眺めながら、河合は、ある寂しい悪寒をかんじた。

河合は、階下の坐敷へゆかずに、すぐ二階へあがつた。かれは彼方此方と歩きながら、倚子に手をふれ、目を閉ぢ、いらいらして、その上悲しげに倚子に腰をおろした。

信子があがつてきた。顔を洗ひ、きものも變つてゐた。が、何もいはずに、階下の間へ、いつもの通りに食事の用意をしたと言ひ、目をあはさずにゐた。――二人は、食卓に向つても、お互ひだんまりを續け、口を動かすだけだつた。が、時間が經つごとに、相互に何か話し出さねばならぬものを感じ、それが直ぐ言へないため、いくらかづつ表情にゆるみが出來てゐた。

「まだ考へてゐらしやる？」

さういふ信子は、河合をさし覗き、鋭い目を動かした。河合は默つてゐた。仕方なささうに信子も何もいはないでゐた。あとで、信子は、木暮を批評した。

「あの人はまるで狼よ。誰にでも食ひつくんですもの。」

河合は、そのとき全で別ないらいらした顔になつて云つた。

「お前にもかい。」

「何を言つてゐらつしやるの。ばかな。」

信子は、さう言つて對手にならなかつた。が、河合は、燒綿のやうに焦げついた表情で、じりじり信子を凝視しつづけた。

坂本三丁目の停留場まで、木暮は、鳥子を送つて行つたが、そこで偶然に織田夫妻が電車から下りてきたのに出會した。派手づくりな鳥子と、なりの高い木暮とは、兩側の街燈にぼかし出され、夜目にも極立つた。

「やあ、此間は失敬。」

織田は、大きなからだを木暮の方へ近づけた。木暮は、眉をしかめた。が、すぐ微笑つて帽子を取つた。

「何處へゆくんだ――。」木暮はさう言つて、時子に「先日は失禮しました。」と、目禮をした。今まで華々しい食事をしたあとのやうに、すつきりした時子が目にうつつた。

「いいえ、すこしもお關ひしませんでした。」

時子に、さう不意にいひかけ、ちよいと躓いたやうな顔して、鳥子をちらと見た。木幕は織田と話した。

「さうかい。河合のところにゐたのかい。僕らも出かけるんだ。もう一度行かないか。」

織田は、絶えず鳥子に氣を奪られ、奪られたために、なほ持前の快活な大きな聲を出した。

「いや妓ら澤山だ。──この方は鳥子さん。いつか話した……。」

鳥子は、織田を靜かに見入つて、につとして、あたまを下げた。

「お話はきいてゐたんです。──これは家内で、時子といふんです。」

時子は、默つて、あまりに明るすぎるやうな顔をそつと偷みながら、赤くなつて、あいさつをした。

「はじめまして──。」

鳥子は、しとやかに柔らかく腰をまげた。織田は、動かうとしなかつた。

「四人で何處へか行から。河合の方へは行つても行かなくともいいんだ。夜はいいから──。」

木幕は、へいぜいとは冷淡に、手をふつてみせた。

「僕は關はないが鳥子さんは少し急ぐんだ。それとも關はないんですか。」

木幕は鳥子をかへすことに急いだ。鳥子は、もぢもぢと曖昧な返事をした。

「ええ、すこし急ぐものでございますから。」

「又にしよう。」

木幕は、吻として、一と足さきへ歩き出して云つた。

「さうか、殘念だな。ぢあ私の方へも是非あそびにゐらしつて下さい。時子もゐますから。」

鳥子は、できるだけ嫣然と羽根のあるやうな美しい微笑を含んで、織田と時子にあいさつをした。

「きつとお伺ひいたしますわ。」

その間に、木暮は、鳥子の肩越しに射してくる、時子のうはべは平靜だが、何だかチクチク痛みをかんじるやうな視線の矢表に立つことを苦しくかんじた。

「ぢや又。」

木暮はもう歩き出した。織田夫妻は、根岸の方へ歩き出した――木暮も鳥子も、しばらく默つてゐた。何かきふに言ひかねるやうな氣がした。

「織田さんて健康な方ね。」

鳥子は、さう言つて、木暮をいくらか揶揄ふやうな顏をした。

「さう、健康すぎて、それが有害になるやうな傾向の人ですね。」

「有害！」鳥子は聲を出して笑つた「立派よ。押し出しがあつて――。」

「氣に入つたんですか。」

木暮は、いくらかの冷笑に、やや不安を加味した面持で、ふりかへつた。

「ええ、それに近いの。」

鳥子は、そのとき前に停つた電車に、片足かけたと思ふ間に、ひらりと飛び乘つた。木暮は、呆氣にとられながら、何か言はうとすると、電車は、もう動きはじめた。すつきり立つた鳥子は、ちよいと一笑して、車體のなかへ這入つて行つた。

ひ深かつた。

四

坂本から下入谷の、積善寺境内の離れの信時の室に、突然、鳥子が訪ねてきた。本堂裏の離れは稚やもつこくの樹立にかこまれた靜かな部屋であつた。信時は、鼓村鳥子の姿を寺院の長い敷石の上に見たとき、奇異感をかんじるほど驚かされた。それは木暮厚平に紹介されてから、まだ四度くらゐしか會つてゐなかつた。鼓村に會つたとき鳥子は、毅然として信時清之助を眼下に見下したのである。實際、信時にとつてこれまで蒼白い絶えず威嚇するやうな病的に近いまで纖細な皮膚を有つた女を見たことがなかつた。かれは事實に於て或る得體の判らない脅威と恐怖とに慴えながら、數分間鳥子を凝視しつづけたのであつた。恐らく鳥子はその熱心で、而も極めて初々しい信時の目をみたとき、また信時がどれだけも肉體的疲勞や、れいのラムネ瓶のやうな憔悴した色合をもつてゐないことを味覺したのであつた。

「いつか貴方にゆつくりお逢ひすることがあるやうな氣がしますわ。わたし、毎時も鼓村にお目にかかつたとき左う感じると、いつか不思議にさういふ日があるやうな氣がしますの。わたし物好きな性分なんでございますから」

木暮の前で、さういふ彼女は「明日にでもお目にかかりたければ直ぐにお伺ひしますわ。したつていいんでせう。」信時は、そのすらりとした口調の滑らかな事や、存外、一氣で正直なところのある鳥子を寧ろ呆氣にとられて眺めてゐた。

「え、僕もおあひ出來さうな氣がします。僕は大抵はじめて會ふと、きつと二度は會ふやうな氣がするんです。」

かれが然う答へたときに、烏子は明らかに可笑しさうに口をすぼめ、木暮をかへり見た。木暮は、苦々しく併し最後に「信時は極端な利己主義者ですよ。自分ばかり考へてゐる。」さう云つて、信時が顔をあからめるのを興味さうにながめた。

「ぢや君は何だ。誰にでも刺して歩く毒蟲かね。」

木暮は「さう毒蟲かもしれない。併し存外毒のない方だ。」さう急所を衝かれ、白笑ひした。

「いいえ、この人はやはり正直よ。唯、對手次第で變化る狡猾な正直をもつてゐるのだけなんですの。」

烏子は、さう言つて、れいの沁み入るやうに微笑つてみせた。「きつとお伴ひすることがございますのよ。」さう念を押して再度も言つたのである。

その烏子がかれの前に現はれたのである。かれは危惧に近い、或る豫測しがたい事件のなかに潜涵してゆくやうな自分を感じた。それと同時に、非常に明るい活潑な快感が、かれの全身を刺戟し盡したことも實際であつた。烏子の扮裝は質實であつたが、明色な立縞の黑にうすい臙脂が、かへつて彼女のせいを高くし、すこし顔立をきびしくして見せた。

「でもわたし何時かお訪ねすることがあるつて、さう申しましたわね。ふいにお訪ねしたくなつて參りましたの。」

烏子は、坐敷へあがりながらさう言つた。有るかないかの香料の匂ひが、佗しいこの住居をながれた。

「まさか入らつしやりはしないと然う思つてゐただけ、ちよいと吃驚りしました。」

信時は、そこらを片け、きちんと座つてゐた。

「わたしいつも此麼風な女なんでございますの。お厭。」

信時は、そのお辰と言つて、鳥子がちよいと首を傾げ、目を動かしたとき、吃驚りするほど魅惑されやすい美しさに襲はれた。

「僕も一向そんなことは係はない方なんです。却つてその方がいいかも知れません。併し木暮はあなたが、此方へ入らしつたことを知つてゐるんですか。」

「いいえ。」と微笑つた。「そんなことはどうでもいいぢやありませんか。」

「さうですか。」

信時は、吃りながらさう答へると、鳥子は爽快りした聲で

「わたし木暮さんのことなぞ、さう何時も考へてないんでございますの。木暮さんは怒らないかも知れませんが。」

と言つて、青いあたりの植込みを賞めそやした。巧みに取り圍んだ植木が、こんもりと離れを包んでゐた。

鳥子は、立つてあちこち見てあるき、次の間の、さまざまな新しい買物の包みや、熨斗紙なぞを見た。それを自分で這入つて、手にとつて一々ながめた。

「そんなものを見ちやいけません。詰らないものですから。」

當惑した信時を、鳥子は、微笑んで見かへした。

「明日ですの、御結婚は？」

「ええ。」

鳥子は、尠なからぬ好奇心と、やや小憎しげな目いろで、手にとつた包みをぽんと投げ出しながら言つた。

「嬉しいんですか。」

信時は、その言葉が十年も近づいてゐたやうな冷さをもつてゐるのと、あまり突然だつたので、すぐ返話ができなかつた。この女は何かを計劃してゐはしないかといふ疑惑が突然かれの胸裡を壓した。

「わくわくして居らつしやるんでせう。きつとね。」

「そんなことがあるもんですか。何だか面倒で仕様がないんです。母方の親類に迫られたやうなものですよ。」

信時は、そのとき昨夜おそくまでゐた稍子が、酷く感情的になつて、とうたう泣き出したことや、その流涙の痕が新らしい聲に、けさ氣をつけて見ると鱗のやうに光つたあとをのこしてゐたことを思ひ出した。

「でもあなたのお顔は嬉しさうですよ。」

「ばかな。」

信時は、赤くなつた。鳥子は、いきなり立ち上ると、鋭い聲でいつた。

「わたしお邪魔ならかへりますわ。居なければならないことはございませんし、わたし歸へりますの。」

さういふ鳥子は、激しく突然に蒼くなつて、異常な目いろをきらきらさせた。信時は、驚いて止めた。この隙間に信時はふしぎに鳥子が指のさきまで打顫はせてゐるのを、むしろ駭然とながめた。

「何かお氣にいらなかつたんですか。何も邪魔なことはないんです。どうか坐つてゐて下さい。」

「いえ、わたし歸へります。」

信時は、無理に鳥子を坐らせうとすると、ほとんど突唐に鳥子は泣き出した。何が何やら解らぬまま、信時は逆上せ上つて、鳥子の肩に手をやり、慰めた。手巾を透いた鳥子の蒼白い皮膚が、練り絹のやうに、かれの觸覺を新しい頁を操るやうにすつと遮つた。肩にも波うたせてゐた。

「どうしたんです。僕は何か失禮なことでも言つたんですか。」

かれは、自分にもなく心が亂れた。當惑と驚きが交る交るかれを周章てさせた。

「いいえ。」

「ぢやどうしたんです。僕はわけがわからないんです。」

鳥子は、泪をおさめ、そつと手巾から目を放した。目のふちが貝のやうにうす紅くぼつと腫れ、つやに、いちぢるしく加へられてゐた。

「わたし時々こんな風になりますの。きふに變になつてしまんですわ。ごめんなさいまし。」

信時は、やつと胸に小康を得て、すつかり豹變したやうな濡れた美しい顏容をながめた。實際にかの女の皮膚に何かに刺戟され上氣しながら、蒸された蝦色にかがやいてゐた。

「僕、ほんとに驚きました。實際。」

「わたし我儘ばかり申してすみません。」

うつとり上げた目は、ぼんやり、信時の全身を魅惑しながら、しづかにしつとりと注がれた。何て變な女だらう、さうかれが考へる間もなく鳥子は、いままでの自分を羞恥に耐へない面持ちをした。

「わたしああいふ風になりますと、もう何も考へられなくなりますの。でも、すつとしましたわ。」

信時は、氣がついて、鳥子のそばをはなれた。鳥子は、ちよいと顏色を變えた。

「お美しい方?。」

鳥子は、暗示的な目でわらつて、又たづねた。信時は、ためらつた。

「いや、むしろわるい方です。」

「おいくつ。」

「二くらゐです。」

ふたりとも默つてゐた。信時は、そのとき不意に、いつかおたづねするときがありますと言つた鳥子を、だんだんに解るやうな氣がした。かれは何故か慄然とした。あまりに惱ましい美しさだつた。かれは恐怖に近いものを、明日の結婚式にさへ感じた。

「おひとりで居らしやるのも今夜きりでございますのね。なんともお考へなさらないんですの。」

「そりや何だか哀愁に似たものを感じますけれど……。」

鳥子は、冷笑つて、信時が次第に卑劣に、びくびくし出すのを、目尻でながめ出した。

このとき折あしく表で、誰かの靴音がした。離れの入口へは、信時以外に用事のあるものが來る筈はなかつた。ふたりは、目を合せた。信時はなぜか眞青な顏をした。ききなれた靴音だつた。鳥子は、低いこゑで、信時にささやいた。

「木暮？。」

「らしいんです。」

信時は、棒立ちになつて、格子の開くのを待つた。がたりと開いた。かれはその音にもやられて冷たくなつた。皺嗄れた、疲れた聲がした。

「信時、ゐるかい。」

「あ。」

かれは、すぐ玄關へ出た。うすぐらい土間に、千切つて棄てた花のやうな明るい雪駄の紫緒を見つめながら、木暮は蒼褪めた顏をしてつッ立つてゐた。信時は、顏を合せると我知らず赤くなつた。

「來てゐるのかい。」

木暮は、すうと、人さしゆびを雪駄につきつけ、蒼白い、疲れた顏をあげた。硬ばつてかつとしてゐた。

「うん。突然だ。」

「突然だと。」

「ほんとだ。這入りたまへ。」

木暮が室へはいると、鳥子は、非常な冷酷に近い寧ろ五月蠅さうな目で一瞥したきり、何ともいはなかつた。

「今たづねに行つてきたところです。お宅の方へ。」

木暮は、すこし慄え聲で坐りながら言つた。鳥子は、素氣ない調子で

「婆や一人きりだつたでせう。」

さういふと、木暮は、なほかつと上逆せたやうな顏をした。信時は、この場合、どう言つていいか判らなかつたので、默然して一人をながめた、ときをり木暮の目に出會して苦しかつた

「あなたはわたしの跡ばかり追つて歩いてゐらしやるのね。わたしこまるわ。窮屈な氣がして――。」

「いや、別に追つかけてゐるわけぢやないんだ。そんな氣がするんでせう。」

「よう仰有いますね。おぼへてゐらしやい。」

鳥子は、鼻さきであしらつた。木暮は、默つて目をきらきらさせた上、つとめて冷然としやうとしてゐた。鳥子は、

その様子を吐き出すやうな顔つきで眺めてゐたが、耐り兼ねたやうに叫んだ。

「ぢやわたしをたづねないなら、今のうちに歸つて頂戴。」

木暮は、口のさきで、にたりと遣つた。鳥子には答へないで、信時の顏をじろりと見つめた。

「信時。おれは最つと居ていいんだろうな。それともわるいか。」

眞蒼になつて膝頭まで震はせた。

「かまはない……。」

鳥子は、信時のかほをちらと見た。かれは、ぴくとした。

「信時があゝ言ひますからね。こゝは信時のうちですから……」

木暮は、低い、抉るやうな聲で、鳥子を見返した。信時は、すまぬやうな顏で二人を見つめた。

「ぢやゐらつしやい。が、わたしあなたと話さないから。信時さんこちらへ入らつしやい。」

「ご勝手に――。」

木暮は、素直に立つて鳥子のそばへ行つた信時を、憎悪にかがやいた目で睨んだ。そして自分は、抱き膝をした。が

居苦しく焦々して、しまひには耐らなくなつて立ち上つてかへりかけた。

「歸へるか。」

「うん。」

信時は、仕方なしに立ちあがつて引止めやうとしたが、きかなかつた。

「わるく思はないで頂戴。」

鳥子の、さういふ様をもきかないで、玄關へ立つて、木幕は、信時の顔を凝然と見つめた。ちか目になつて瘠せた木幕の兩頰には暗い陰影があつた。信時は激しい寂しさに揺り立てられ眉毛の見えないやうな木幕を悲しさうに見た。

「どうしても歸へるかい。」

「あ、又會はう。」

それだけいふと、靴音を植込みの方へしづませて行つた。信時は、どうしていいか分らなかつた。が、その瞬間に或る鋭い想念が、かれの全身を馳り過ぎた。木幕がゐないといふことが、邪魔物のない、ひろびろとした感じをあたへた。それと同時に、木幕と自分とが、ハッキリと區別された隔離に置かされたことをも感じた。

「おかへんなすつて――。」

「ええ。」

鳥子は、そのとき妙に哀しさうな目で、信時の目をみた。友だちに悪いことをした氣と、それを止めもしなかつた自分の心の襞をみたやうで寂しかつた。ことに、鳥子はいつもああいふ性分でありながら、妙なかほをしてゐるのも氣になつた。それに不思議なのは、鳥子とはじめて膝をつき合したに拘はらず、永い間鳥子とつき合つてゐるやうな氣がしてくることだつた。

二人は永い間默つて坐つたままでゐた。鳥子は、紙卷を燻らしながらゐたが、それが信時にはなほ何かを衿らしてゐるやうに思はれた。

「灰皿がないの。」

信時は、立たうとした。が、そのとき例の鋭い或る想念が、殆、狙ひをつけられたやうなかれの全身に湧き立つた。

どうしても逃れることができず、そのまま混濁されなければ済まない彼れでもあつた。

「ここへ。」

かれは、掌を出して見せた。白い、弱々しい手であつた。鳥子は、さつと顔いろを變へたが、みるみるうち慘酷に近い鋭い表情に渇きながら、それを、押しつけた。火はすぐ消え、焦げるやうな芳はしい匂ひが、あたりに漂よふた。

「熱い？。」

「いや。」

信時の、額に汗とあぶらとが滲んでゐた。鳥子は、その手を自分の胸にあて、比斯丁里的にさめざめと泣き出した。弱い正直な女のやうで、信時は、その肩に手を置いた。が、いままで凝乎としてゐた鳥子は、その手を拂つて微笑ひ出した。

「あなたは私を氣の弱い女などと考へてゐらしやるんでせうね。一人よがりにね。きつと。」

信時は、憐れむやうな目付を、ほとんど即坐に突きもどされた。鳥子は又つづけさまに喋り立てた。

「それなら間違ひですよ。私よりかョ程あなたが可哀想ですよ。ああいふ物を買ひあつめたりなんぞしてね。」

次の二疊には、結婚に用ゐられる樣々な紙包みが、果然と、ところ狭いまでに積み重ねられてあつた。火鉢とか、コーヒ道具とか、布團類とか、さういふものが、鳥子の目のうちに、むしろ苛々しく映り出した。

「あれを皆あなたが買ひあつめたんですか。」

信時は仕方なしに答へた。

「さうです。」

「あなたは空想家ね。男らしくもない、詰らない空想家ね。」

信時は、心のうちで實際空想家であることも感じた。が、何故、鳥子が、怨念にたぎつてゐるやうな目で、あれらの物品をながめるかが判りかねた。嫉妬か、さう考へても、それには餘りに原因がなさ過ぎた。

「でも實際に必要な物しか買はなかつたのですよ。それ以外のものは……。」

「お止しなさい、白鼠さん。もう澤山なんですよ。」

信時は、この並でない女を、或ひは氣狂ひでないかとさへ疑はれるほど、氣分の轉換の烈しいのに驚かされた。かれは、微笑んだまま、美しいよぎない贓物のやうな鳥子を、うつとりして眺めた。

「わたしがね、あなたのおたくへ來たのは、あなたをどうしようと云ふ氣が動機だつたのぢやありませんからね。よく覺えてゐて頂戴。それから又、あなたに何かされたさにも來たのぢやありません。ただあなたといふ空想家を嗤ひに來ただけですよ!。」

鳥子は、口惜しさうに左ういふと、すうと立ち上つて歸り支度をしかかつた。信時は、手で止めるやうにした。と、また鳥子は、饒舌りつづけた。

「それから最う一つ言つて置きますがね。あなたの前で啼いたりなぞしたのは……（實際鳥子はその時或る不思議な諷刺的な、それでゐて負け目な顏をした。）然うです。それはあなたの爲めぢやないでございますからね。本統にこれだけはよく覺えて下さいまし。」

さういふと鳥子は、突然泣き出し兼ねない顏をした。「ほんとに、これだけは覺えてゐて下さいまし。」と繰り返していふと、もう玄關のところへ飛び出した。

「どうしたんです。僕はあなたを最後までどうしようなぞと考へたことはありませんよ。あなたは誤解してゐるんです。」

信時は、あまりの奇怪な鳥子を、眞青な顔で辯解しながら言つた。さういへば云ふほど鳥子は躍り上つて、

「あ、誰かこの小僧さんを打つものがゐないでせうか。」

囈言のやうにさういふと、からからと嗤ひあがつて、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇、〇〇〇と、格子のそとへ出て行つた。信時は、ぼんやりと〇〇〇〇〇〇〇かんじながら暫らく衝つ立つてゐた。

晩方、信時の離れの前に、忍び歩きするやうな足音がして、それが歇んだり續いたりした。信時は、そつと雨戸をくると、そこに木幕の細君が佇つてゐた。さつと射す燭光に露き出されたかの女は、けはしい纎い輪廓で、すつと切つたやうな顔をしてゐた。信時は、何よりも眞蒼な顔色と、突然の訪問にたいする驚きに物もいへないで、暫らく凝視しつづけた。

「どうなすつたんです。お這入りになつたらどう。」

信時は、へらへらに肌にへばりつくやうな着衣と、一と衝きで倒れさうな弱り方をしてゐるのを見た。

「夜分にあがつて申譯がありません。じつは此方に木幕がきてゐはしないかとお伺ひにあがつたのでございますの。」

「木幕君は、晝間きましたがすぐかへりましたよ。」

「何時ころでせうか。」

「四時ころでしたよ。おやまだかへらないんですね。」

信時は、憔悴と焦燥とに、ひどく顔色を惡くした木琴を、すぐ玄關のところに突つ立つてゐたのを思ひ出した。

「いつか貴方がお出下さいましてから、まだかへらないんでございます。わたし全く困りまして――。」

織田の會合から二日經つてゐるのに、一體何處で泊つたのだらうと考へると、すぐ鳥子のことが頭にうかんだ。が、信時は、どう言つていいか分らなかつた。

「どうもお世話さまでした。じつは織田さんや河合さんのところへもお伺ひしたのでございますけれど……。」

「やはり居なかつたのですか。」

「ええ。」

細君は、間もなくからうしてゐられないからと、木戸口からかへつて行つた。信時は、その痛々しく痩せた姿が、街燈にぼかされてゆくのを見送つてゐた。

五

その翌日、信時清之助の結婚式が、京橋の或る二階の西洋料理店の階上で開かれた。信時の郷里からはその母親が上京し、花嫁の稲子は、父の僧侶とその弟とともに列席した。客側としては河合夫妻、織田隆一夫婦、それに木琴と（例によつて彼れは妻を携帶しなかつた。）

織田の論辯に據ると、結納がすむと、すぐ當の稲子が手紙によつて、信時に處女を式前に既にささげたい希望を明らかにしたことなど言はれた。正否は不明である。併し乍ら明らかに稲子は、二重瞼に並々ならぬ大きな瞳孔をもち、綺倆もかなり秀れてゐた。すくなくともその父親の貧弱に痩せてゐる顔容とはくらべものにはならなかつた。信時は、明

によつて空想が實現された昂奮を面にあらはしながら、もう制服を着込んでゐた。そして皆に愛想をふりまいてゐるのが、いかにも彼らしい所謂白鼠さんに見えたのである。

織田は、窓ぎはで、痩せた河合とつッ立ちながら、何より花嫁の明色な瞳孔をほめそやした。それには一種の滑稽な批評さへなされたのである。

木暮厚平は、殆ど、顏色といふものがなかつた。かれは窓際の倚子に、退屈さうに坐りながら折目のわからぬ足を組んで、時々、皆の方を一瞥し、さて又目を落しながら沈欝に凝りかたまつてゐた。信時が近よつて、細君が訪ねてきたことを話したとき、かれは苦痛に破れたやうに微笑つて、それには答へずに、却つてあれから鳥子がどうしたかと云ふ消息のことをたづねた。信時は、聲を低め、あたりに氣を配りながら言つた。

「ほとんど一時間もゐなかつた程だ。君には大へん済まない氣がした。」

さういふ信時を、木暮は冷笑に近い諷刺的な薄笑を漏らしながら眺めた。信時は、打解けない木暮の、むしろ灰ばんだ白濁りしたやうな目を、なるべく避けるやうにした。

「それで君はあの女を好きになつたのかい。」

「好きもきらひもないさ。が魅惑はある。たしかに。」

「ふう！　魅惑がかい。」

木暮は、歯の隙間から、又、ふう！と薄笑ひをした。が、木暮は改まつたやうに顏をさしつけながら囁いた。

「けふ式場へ來るかも知れないぜ。あの女は共那ことくらゐは何とも思つてないんだから。」

信時は、全身に汗とあぶらとを同時にかんじるほど驚いた。

「案内はしてない筈だ。あの女が來るといふ筈はない。」

「いや—。」

木暮は、對手の周章てるのを見下しながら、燐寸をすつて、意地わるげに紙卷をすつて見せた。それの暗示がすぐ信時に或る想念を呼起した。かれは、知らず知らず顏をあかめた。木暮は、それを殆正面からばちりと見詰めてゐたのである。

「つまり彼の女の比斯丁里的な面白味は、ほとんど臨時に出てくるのさ。あの女が今日やつてきても、君は斷れまいと思ふんだ。どうだい、それとも君は斷る氣でゐるかい。」

信時の、空想的平和は、瞬時にしてブチ毀されたも同様だつた。かれは、顏色を變え、そんなことはないと力說した。が心には昨日鳥子がかへつてから何處かで木暮と會見したらしく、鳥子が、逐一を話したもののやうにも考へられた。

「場合に依つては斷るさ。」

「ふう！　昨日のやうな會見があつての、けふ斷はれると思はれるかい。」

木暮は、ポツケットから時計を出して眺めた。食堂の開く時間が迫つてゐた。遅れた客は、追々集まつて來た。花嫁の倚子をとりかこんだ不調和な金屛風のまはりは、煙草のけむりと雜談とで朦々としてゐた。

「仕方がなければ客の内へいれるさ。まさか僕らの式をブチ毀す意志はなからうし、さういふ必要はあの女にはない筈だ。」

木暮は、倚子を立つてあたりを歩き出した。そのときから信時は不安と懸念とに交る交る惱まされ、ドアの開くごとに胸を愕然とさせた。

信子も時子も、見ちがへるほど盛裝してゐた。が、信子は、一と目木暮をみると汚はしいものに觸れることを厭ふやうな險しい目付をしてゐた。が、絶えず氣にかかるらしく、木暮の身邊にその瞳を逍よはしてゐた。

木暮は、時子のきちんとした目が、ともすると信時の上にあること、また自分にもそそがれてゐることを感じた。かれは蒼白い顏に微笑をうかべながら近づいて來た。が、時子は、その目いろに曾つてない冷淡な餘處餘處しさをたたへて、わざと作り微笑ひをした。木暮は、坂本三丁目で鳥子と連れ立つた晩、織田夫婦に會ひ、時子があのとき卑しむやうな目づかひをしてゐたことを不圖想ひ起した。

「大へん顏いろが不良いぢやないか。殆ど血色がない。」

織田は、さういふと「れいの女のためかね。」と苦笑してみせた。時子も、そのときいやな顏をした。

「ほんとに惡うございますわ。それから昨日奥さまがいらしやいました。」

木暮は、絡ひかかるやうに憂鬱な調子で、時子の言葉を斷ち切つた。

「それは知つてゐますよ。」さう言つて「どうも皆が僕の顏色を氣にしてこまりますよ。」

木暮は、自分の頬をなでてて見せた。そして織田自身も非常に冷淡になつてゐることを朧ろに感じた。河合が傍へやつて來た。木暮は昨日の禮をいつた。

「ああいふ女をあまり見たことがない。あの蒼白い皮膚は一體何んてんだらうね。」

河合は、さう言つて、木暮の疲れた顏を偸み見た。そして

「こんどは信時を狙つてゐるといふんじやないか。」

木暮は、默つたまま、絶えず神經質になつてゐる信時の目が、ドアの方や、突然の跫音にさへぴくぴくしてゐるのを

快よげに眺めてゐた。ト―誰も、河合には答へないで、やや退屈さうに歩きはじめた。

信子は、そつと時子に囁いて、木森の、ひよろ長いからだを惡ぎれにながめた。

「わたし此頃あの方の顏をみると慄然としますの。なんだか汚ないものを一杯からだに詰め込んでゐる方のやうに思はれますの。」

信子は、實際みるも厭はしいやうな氣になつてゐた。いらいらした鳥子との二階での會見が、いまも目の前に起つてゐるやうで耐らなかつた。

「でもお氣の毒よ。自分でなすつたことだけれど、誰も對手にしなくなつてゐるので本統に寂しさうですね。」

時子のさういふのを、信子は、いくらか齒がゆさうに見た。かの女らしい疑惑がまた信子のあたまに湧いた。

「木森さんのことになると、妙にあなたは辯護なさるわね。おかしい時子さん。」

時子は、思はず赤くなつた。それをなほ信子は、からかふやうな目付でながめた。

「そんな辯護なんぞしませんわ。けれどああいふ方は、ああいふ生活をするより仕方がないやうに思はれますわ。」

「だつて結婚までなすつて他の女と關係するのをいいツつて仰有るんですか。」

「いいえ、でも、仕方がないわ。あの方の性なんですから。」

信子は、冷たい笑味を、すつと脣はにうかべた。

「ああいふ性分がお好きなんでございますの時子さん。」

時子は、絶えず揶揄されてゐるやうで、不快な感がした。信子こそ一ト頻り木森にのぼせてゐた癖にといふ氣が起つた。それと同時にどこまでも對手をやり込めて遣りたいむら氣が、毒蟲のやうに針をつツ立てた。

「ええ、わたしああいふ方がすきなんでございますのよ。」

さういふと、時子は、對手にきこえるやうに、ふふと聲を出して笑つた。それが窮屈な笑ひだつたので、信子は、頭からカッとして了つた。何か出來るだけ辛辣なことを言つてやらうと計らんだが、ちよいと浮んでこなかつた。

「さう仰有ればさういふ氣がしたときもありましたわ。」

信子は、また白笑ひをした。

「けれどね信子さん、あなたも木森さんに夢中になつてゐらしつたこともございますわね。お忘れになつて——。」

時子の、かういふ言葉は、烈しく信子の怒りを燃えさせた。かの女は、實際眞蒼になつてゐた。

「何んとでも仰しやいまし、あなたこそ、いつかお宅で泊つた晩にね……木森さんが長椅子の上にゐらしつて、あなたはお庭にゐらつしやいましたわね。わたし、ちやんと目覺めてゐましたの。」

時子は、ヒヤリとした。やはり長椅子の脚から透いてみえた信子の閉ぢられた目が、すつと動いたやうな氣が、實際幾どもしたが、やはり起きてゐたのであつた。卑劣な、女らしくもないと考へた。

「まあ、ずいぶん邪推がお深くいらつしやいますのね。何んとでもせいぜい仰有いまし。」

時子は、信子のそばを離れやうとした。そこへ織田が信子に近づこうとすると、顔色が異つてゐるので、ぎくりとして棒立ちになつた。

「どうしたの、時子。」

夫にさういはれると、氣の弱い時子は、すぐ涙ぐんで、なんでもないと、頭を振つてみせた。

「信子さん、あれが何か言つたんですか。失禮なことでも。」

「いいえ。」

信子は、それだけいふと窓の方へ向いた。そこから街路と燈影とが見えた。その灯のかげが五光をひいて、やはり信子も涙ぐんでゐた。

織田は、それきり女連のそばを離れた。ふしぎな寂しい或る感慨めいたものが、人のよいかれを刺戟した。かれは、思ひかへして、妻のそばへよつた。

「時子、どうしたんだ。」

「なんでもないんですの。」

織田は、默つて歩き出した。何か自分の上に起りかかつてゐるやうな不安が、その跫音を忍ばせた。

木暮は、壁ぎわの目立たない卓によりそふて立つてゐた。目は、時子と信子のそれを、それが自分の上にある豫感におそはれてゐた。そのとき時子は、立つてゐる木暮の見窄らしい姿を目にいれると、しらずしらず微笑んでみせた。木暮も、同じい微笑をうかべ、すつきりした時子をながめた。

信子は、まだ窓の方に向いてゐた。

食堂が開かれ皆が思ひ思ひの席につかうとしたとき、ドアから殆ど誰も氣のつかない程度の靜かさで、すうと、話題の主人公である本野鳥子が辷り込むやうに這入つてきたのである。それは先づ誰よりも最初に、正面の花束の山を前にしてゐる信時の視覺を振撼させた。信時は、食堂開始と同時に胸を撫で下ろした。それは鳥子の姿が見えなかつたばかりでなく、必然と來ないだらうといふ氣がしたからである。が、その平和は突然に破られた。同時に皆鳥子の方を向いた。彼女の服裝は言ふまでもなく質實で、態度は總て猫のやうに物靜かで且つ典雅を極めたものであつた。が不思議に

も織田をはじめ河合、木暮までが、いきなり目前に孔雀の羽毛を逆光に透かし見せられたやうな、眼底に一種の眩ゆさを感じ、次の瞬間には呆然として豫期の的中した驚きに目を瞠つたのである。

「わたし心からお祝ひにあがりましたの。遅れましたけれど。」

彼女は、誰人にも目を呉れず、信時を正面に眺め、れいのなだらかな調子でさう言ひ、稍子並みに一同を見下ろした。信時は、鳥子が這入つてきた瞬間から、興奮に次いで不思議な落着きを感じてゐた。

「よくこそ、どうぞおかけ下さい。」

快よい微笑で信時がかう言つたとき、鳥子は、先づ婦人達に挨拶をした。それに先立つて稍子は、ぼんやり見上げてゐる時子に囁いた。

「何て圖々しい女でせう。あの澄し返つてゐるところに一體何て女でせう。」

時子も、明らかに不快な面持ちで、王女のやうな彼女の悪びれない大膽な目つきをながめた。

「何か起りさうですね。信時さんにはお氣の毒ね。」

實際、信時は蒼くなつてしまつてゐた。花嫁である稍子は、鳥子を一目みると、それきり脇向き、ただならぬ動悸を感じてゐるらしかつた。信時の母親が上京しなかつたので、凡て客は花嫁側ばかりだつた。皆は、鳥子を物色しはじめた。

何よりも木暮の驚愕は、豫言を裏切つてかれの全身をおそふた。まさかと思つた鳥子が、此處まで出掛けて來ようとは、自分でさう信時に話してゐたに拘はらず、信じられなかつたのである。かれは、事件がどういふ風に展開されてゆくかを見詰めてゐた。

「何か一騒動持ち上るに異ひない。」

さう織田は、手巾をひろげながら、悄然と鳥子を見つめてゐる河合に囁いた。ともあれ一種の緊張された空氣は、あるひは不吉の豫感を、何かが起りさうな不安を皆の胸に考へさせた。

鳥子は、一人一人に挨拶をし、最後に木森を見た。木森は殆ど平靜に近い眼ざしをしてゐたのを、譯のわからぬ微笑をもつて鳥子に挨拶をした。例に依つて織田の簡單な祝辭に信晴が答へ、式は殆ど滯りなく進んだ。花嫁は雅かで尠からぬ好感をあたへた。たんに優柔過ぎるそれではなく、充分な落着きを見せ、且つ何よりも絶えず處女らしいおどおどしさに、頬を染め、柔かい微笑をもつて塗られたやうな面ざしは、晴子や信子の氣にも入つてゐた。

食堂がハネると、信晴は花嫁と同列で玄關先きに乘りつけてゐる自動車で歸つた。關係者もかへつた。

鳥子は、自動車を見送つた瞬間から、明らかに例の激しい光に潤いた目付で、河合をながめ、織田を引つけた。織田の發企で、少し外を歩くことが持ち出された。が晴子も信子も不贊成だつた。

「あなた方はどうか入らしつて下さい。わたしどもは歸へりますから。」

さう言つて聞かなかつた。河合は、幾度も信子を呼び、一緒に散歩するやうに言つたが、强情にハネられた。織田も同樣であつた。しまひに婦人達は反對の方へどんどん歩き出して了つた。

鳥子は、ほとんど當然のことのやうに、とある建物の角にもたれながら、皆の來るのを待つてゐた。木森は、陰氣に三四間離れたうす暗い潮ぎわに立つてゐたが、かれの顏は夜目にも蒼白く引釣つて絶えず心内の苦しみによつて表情づけられてゐた。結局、河合も織田も、妻君達と歸へることになつたのである。鳥子は、噛みつくやうに織田と河合を見下しながら、鼻先きで冷笑つた。

「木暮さん、あなたは何處へゆくつもりなんですの。」

木暮は、目をあげ、默つて鳥子の顏をみつめた。

「いつたい誰と歩くつもりなの。誰と。」

さういふ鳥子は、先刻からのむしやくしやした顏を、ところどころぴくぴくさせ、神經質になつてゐた。

「あなたとです。外に誰も居ませんから。」

低い、澁い聲でさういふと、暗みでも光る目を瞬かせた。

「さう。」と氣に懸けないやうに言つて「でも貴方だけ殘つたのね。」

「信時が居れば彼奴も一しよに行くでせうが……。」

木暮は、にたりと笑つた。けふの温和しかつた鳥子が、みんなの期待をはずして何らの騷動を起さなかつたのまで珍らしく考へられた。

「あなたも然う思ふの。」

「あいつは自分の空想で尼いて步くんですよ。居ればね。」

二人は歩き出した。鳥子は、ふらふらと背の高い木暮が、ともすると呼吸切れがしてゐるほど、からだの弱りを見せてゐるのに氣附いた。

「わたしね。あなたに食ツついて步かれるのに倦いてしまつたの。いつかも言つたやうにね。」

木暮は、突然步調を停めた。鳥子は、そばに木暮のゐることを問題にしてゐないらしかつた。

「それで僕は歸るわけなんですか。」

「え、さうよ。さうして下さると大變いいのよ。」

鳥子の蒼白い顏には、倦怠の色が生ぬるく漂ひあるいてゐた。木森は、それきり動かないで、黙然と、打沈んで、踵をかへさうとした。

「ぢや、かへらう。」

木森は、ぶつきら棒にさういふと、再びみることのできない、例の、悩んでゐるやうな美しい蒼白い皮膚を目に入れた。かれの饑えるやうな願望は淺猿しく、なほ、鳥子の、つるつとした皮膚の上にあつた。眺めれば見るほど彼はそこに何ものもいらなかつた。陶醉と瀕死と魔睡と冷罵との重なりさへ、かれによつて唯よぎない織手で撫でさすられるやうな感じがするだけだつた。

鳥子は、微笑つて、木森の目にみいつて、じいいと木森の氣をあふり立て、ますます蒼白く棒立ちになる彼れを、慘酷なまで快よい涼しげな目付でながめた。木森は、干からびた唉をいくどもひりつかせ、ただ、ぽつんと、敷石の上に影をおとしながら立つてゐた。

「ぢやおかへりなさい。」

木森は、鳥子にうしろを見せ、のつそりと歩き出した。かれは不死身のやうな痺れを、心と頭とにかんじた。もう殘るものがないやうな氣がした。ふり向くと、鳥子は、向ふ側の停留場に立つてゐた。かれは、そこへ走つて行かうとした。が、冷たい鳥子の皮膚が、かれをヒヤリと濡手拭のやうに胸のところを寒げた。

かれは坂本の停留場から、根岸の方へ自家へ向つて歩いてゐた。瓜のやうな二人の子供の顏と乳房のたるんだ妻とが、小路のくらやみを出ると、すぐ目についた。かれは踵を返へさうとした。が、思ひ切つて小路の奥へはいつて行つた。

格子雨戸を開け、玄關に立つと、家のなかはスヰッチを捻つてあるためか、暗く、黴くさい匂ひがふうと鼻をおほふた。かれは、くらやみに二分間ばかり立つて耳を立ててゐたが、何の音もなかつた。森とした靜かさが暗ともつれあつて、布のやうにだらりと重かつた。

「稻一。」

かれは、長男の名を呼んだ。返事がなかつた。

「おい。」

その聲にも誰も答へなかつた。かれは、靴を脫いでから、燐寸を取り出した。パッと明るくなつた。二人の子供は靜かに床をならべ睡つてゐた。母親の姿はしかしそこになかつた。すウと寒さがかれの肌をつたひ、えり首にぞつと打水の冷たさをかんじた。

かれは手さぐりで電燈を點した。室は何ごともなかつた。荒れたままだつた。木葉は、子供の寢顏をながめてゐるうち、久しぶりで自分の家へかへつた氣と、そとにゐた自分とがはつきり區別されながら浮んだ。それにしても妻のゐないことは、はげしくかれを不安にした。

かれは、勝手の間へ、襖をあけ、もし厠にでもゐはしないかと何氣なく這入りかかつた瞬間に、重いものにどんよりと、比較的柔らかく打つかつた。その突嗟の間にかれの全身に激しい戰慄と冷汗と、心臟を一ト抉りやられたやうに、息詰まるやうな氣がした。かれは殆ど夢中になつて、そつと兩手を伸し、その柔らかいものの本體が何であるかといふことを確めようとした。それは非常に周到に落着いた、ものの底にでも次第に落下してゆくやうな眩惑を感じながら**それに觸れようとしたのだつた。**

が、その次の瞬間に、カチリと電燈を、その額のところに打ちあてた。かれは初めてそこに電燈のあることを思ひあてた。そしてそのスヰッチを捻つたとき、木幕は、叫びを立てるほどの深い驚きに、全身を逆流する激しい自分の鼓動に身うごきもせずに直立てゐた。

かれは、そこに倒された踏臺をつかへ、その黒い影に手をふれたとき、その重い影は聲を立てて落ちくずれた。髑髏に塗られた椿油がにちりと掌に滲みついた。かれはそれを沁々ながめると、自分の着物にこすりつけた。その顔も手も最う冷たくなつてゐた。木幕のその表情を顔面から根抜きにしたやうな呆然とした、むしろ白痴にちかい顔は、その數分間に完膚なきまでにだらけ切り、目もとは劇しくわななないてゐた。

木幕は、ほとんど、そのとき夢とも疲勞ともつかない驚愕のうちから、その死せる皮膚が極度の蒼白さにうづまいてゐるのを目にいれた。曾つて何處かで見たことのある美しい皮膚の光澤が、思ひ出された。さうかれの思念がそこにまで辿りついたとき、孔雀のやうなれいの鳥子の嫣然としたほほえみが、その妻の皮膚の上にちらちら映り出し、全く二重に累り合ふた。と、かれはその疲れ切つたやうな相貌のうちから、だらけた伸しながら嬉しさうな子供のやうな晴々しい色をうかべた。かれは、懐かしさうに手を伸しながら、その髪を撫でさすり、永い間物言はずにゐた。ただ、ときをり上る平和で且つなだらかな微笑が、波のやうに上へ上へとあがり、しまひに不思議に額だけが笑つて、目はだらりと開いたきりだつた。

かれは、その妻の皮膚をていねいに撫でさするごとに、朦朧としたかれの目の内は、だんだんに輝きを増しては行つたが、それが自然に元のままに色を失ひかかつてゐた。かれは自分の意識をハッキリ感じるといふより、何か宙に足を停めてゐるやうなふらふらした氣持ちで、妻の顔をうち眺め、閉ぢられた目をなでさすつてゐた。

そのとき反對の、茶の間に、かれは或る動く影を見つめた。それは紛ふ方もない莞爾とした濃い鳥子の、明るい華麗な肉顏であつた。かれは今まで抱いてゐた顏を、兩手から、バタリと離した。やつれ果てたかれの妻は、蒼ざめた眼のふちに暗いかげをやどし、あらはに醜い死體となつてゐた。木森は、鳥子が何時の間に自分の家へ這入つてきたのか分らなかつたが、みるみるうち彼れは歡喜に塗りつけられただらりとした顏つきで立ちあがつて行かうとした。そのとき鳥子は、疊の上に投げ出された冷たいかれの妻のそばへ寄らうとした。

「寄つてはいけない。あれは死んでゐるんだ。」

木森は、さういふと鳥子の前を遮ぎつた。手も足も、ちからなく、目はその瞳孔をぼんやりと浮きあがらせてゐた。が、鳥子は、その手元を滑りぬけ、かれの妻の顏の上に、自分の顏をさしつけたとき小さい呼び聲をあげた。木森は、その喫驚りした鳥子の顏をながめると、弛んだ顏ぢゆうにげたげた締りのない笑ひを浮かべた。そして鳥子に、自分のそばへ來るやうに手招きをした。鳥子は、ぞつとしたやうに身慄ひをしたが、いつもにも似ず、かれのそばへ寄ると、音もなく座つて見せた。

「あの傍へ行つてはいけない。」

かれは再びさういふと、鳥子の美しいぞくぞくするやうな顏面に、思ふさま指をふれることができた。かれは、それを抱き、それを力一杯凝視した。いつになく鳥子はぐつたりと柔らかい長い肢體を、かれの爲すまま自由にさせてゐた。かれはその眞紅の皮膚のそこがばらのやうに燃えてゐること、その燃えたいろが再び白色のヴエールをかむつて、きちんと締つてすこしの弛みのないのを見詰めながら、何やらわからぬことを口走りながら、戀しげに自分の顏をそれにこすりつけた。かれの頬は蒼白く燃え、かれの目はれいの茶褐色にどろどろした底から、にぶいながら太いかがやき

をあらはした。鳥子は何もいはず、最後に泣きはじめた。そのさめざめした泣ごゑは、かれの魂をむしるやうな美しい囁きを聞くやうに、かれを有頂天にしてしまつた。〇、〇、〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、電燈にうすく濡れたいろをかがやかしてゐた。

子供らは起きずにゐた。何にも知らずにゐた。木森は、硫黄色のほのぼのしい夜明け方のひかりと一しよに抱いた妻を、恍然と見とれてゐた。もはや、その眼には古いくされた力ないひかりさへなかつた。どろんと夢寐の間を迎ふてゐたのである。

靈界の偉人 綱島梁川全集

逝いて十五年　出づべくして出でざりし　全集　初めて刊行さる

梁川會編輯

（序）坪内逍遙

（顧問）中桐確太郎　（顧問）五十嵐力

（擔當者）安倍能成　（擔當者）望月世教　綱島政治

豫約會員募集（申込切〆十月五日）

内容見本　申込次第進呈

申込規定　詳細は内容見本に就いて見らるべし

▽玲瓏たる哲人の心と、敬虔なる聖者の信と、幽寂なる隠士の風とを併せ有し、此れを貫くに一片熾烈なる意志を以てせるは、わが綱島梁川氏也。若し夫れ、假りに西操山をして理智を代表せしめ、高山樗牛をして情熱を代表せしむれば、即ち信仰を代表し得べきは梁川氏なるべく、氏を目して明治大正の思想史上、最高位を占むる人と謂ず、又異なからん。▽西洋の思想史を顧るに、經濟問題の討議盛んなる後を承けては、必ず宗教的傾向の一世を掩ふものあり。蓋し魂を物質の奴隷となれる地位より解放し、人間を機械化の犠牲たらしめんとする危機より救濟し得べきもの、宗教を外に絶無なればなり。これカアライル、エマアソンの蹶然として百世に卓出する所以。夙に出づべくして出でざりし梁川全集の、今にして漸く刊行の運びに到れる、豈に重至大の意義なからんや。▽本全集は、梁川氏の全著作を網羅す、未だ嘗つて纏めて書册の形となりし事なき倫理學説研究の如き大著作あり、文藝雜纂、書簡集亦新材料を加へて面目を一新し、日記は今回初めて世に公にせらるゝもの、氏が幼少の頃小學教師を務められし時に初まり、晩年宗教的信仰の漸く深からんとする時に到りて止む。これ一個貴重なる靈的自覺史たると共に、又文學變遷の跡を偲ぶに好個の資料を供するを疑はず。論述の的確を以て聞ゆる倫理學の諸書、所謂「見神の實驗」を中心として信熱一世を風靡せし病間錄「回光錄」等の價値に就ては、茲に贅説を須ゐざるべし。▽坪内逍遙博士は梁川氏の恩師也。第一卷の卷頭に序文の感想一篇を寄せらる。全集之がために一層の光彩を添へん。各卷の解説は安倍能成氏の執筆にかゝる、精到の識見、必らず讀者を啓發する事多かるべく、梁川氏の年譜は中桐安倍二氏の協力になる。必ず故人の風丰を傳へて遺憾なきものあらん。▽梁川全集全九卷、元よりこれ新奇を追ひ、流行を迎えて狂奔する輕佻浮薄の出版物にあらず。只求めて未だ與へられざりし眞摯の求道者、叩きて未だ開かれざりし篤實なる研學の士は、ここに初めて心膓の慰あるを發見せん。本全集が本邦文化史上に一大貢獻をなし得べきは、出版者の窃かに期する所也。

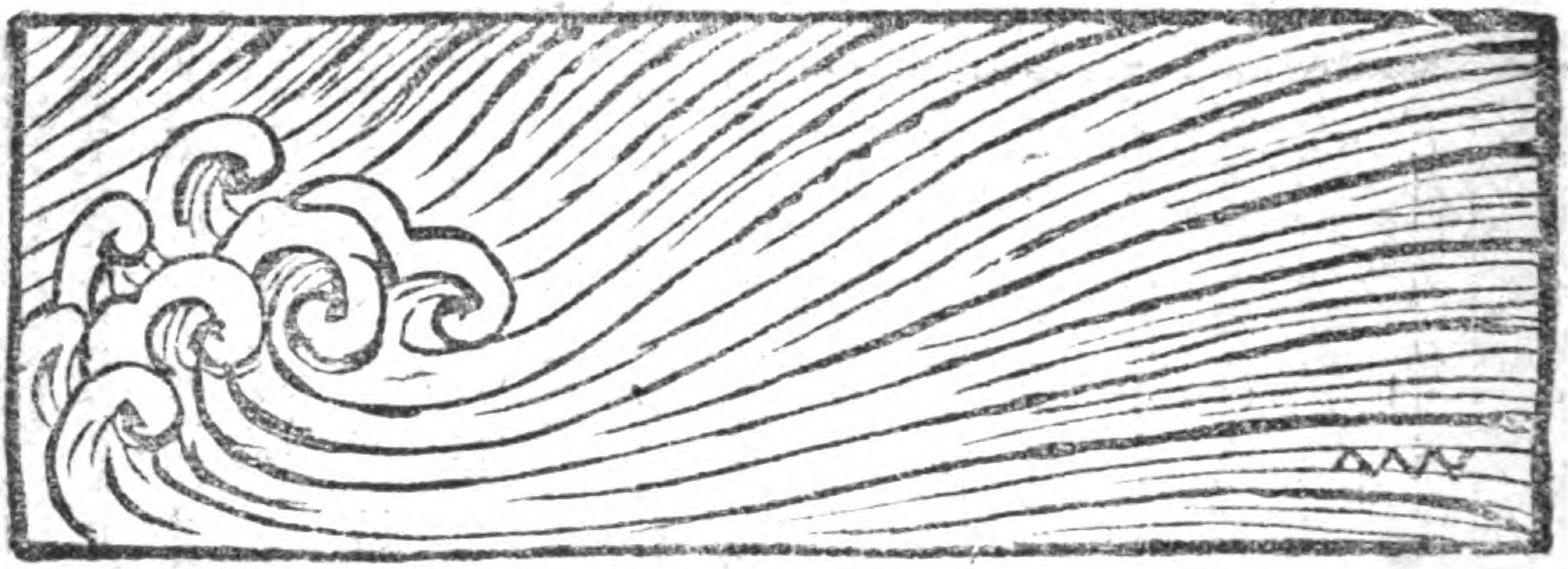
第一卷	東西倫理思想史
第二卷	西洋倫理學史
第三卷	倫理教育論集
第四卷	倫理學説研究
第五卷	病間錄・回光錄・病床雜筆
第六卷	我觀錄・寸光錄・其他手記
第七卷	文藝雜纂
第八卷	書簡・日記
第九卷	ルナン著耶蘇傳・病間錄批評・早稻田論評

豫約申込所

東京市神田區表神保町

春秋社（梁川全集刊行會）

電話神田二一三八　振替東京四八六一



死の執着

徳田秋聲

淳吉が初めて廣太郎を見舞つたとき、彼は可也衰弱してゐるやうに見えた。勿論十年ぶりで顔を合はしたので、廣太郎の昔しの面影がすつかり亡せてしまつてゐるのに不思議はなかつたが、あの下脹れの、ふつくらした肉が見る影もなく削けおちて、ねつとりした潤澤をもつてゐた厚い頰が、ひどくぱさついてゐた。その上まだ其れほどの年でもないのに、マニラ麻のやうな白毛さへ交つて、髮のところ／＼が灰色に見えるのであつた。

それよりも淳吉がちよつと意想外に感じたことは、彼の妻の絹子が、すつかり顔變りしてゐることであつた。彼女も彼是もう三十二三といふ年なので、これも變つてゐるのに不思議はなかつたが、其の變り方が淳吉には何だか滑稽にさへ感ぜられてならなかつた。後で幾度も訪ねて、見慣れてくれるにつれては、それはそんなに可笑しいことでも、不自然なことでもなささうに思へて來て、親しく話を交へたり、色々の場合の表情などに注意する度に、そこに昔しながらの絹子の面影が、やつぱり何處かに發見されるやうな氣がしたのではあつたが、初めて顔を合はした刹那には、今まで

朧ろげにも目に描いてゐた幻象と、まるで違つた醜いものを突きつけられたやうに感じた。

淳吉はその晩絹子の兄の、竹村に案内されて、郊外にある絹子夫婦の家を訪れた。ちよつとした門を入ると、二坪ばかりの空地に、よく肥つたコスモスなどが垣根ぎわに茂つてゐて、何となく荒れてゐた。そして竹村が格子戸を開けると、すぐ絹子が出て來たらしく、彼縁で何か話してゐたが、間もなく竹村が外へ顏を出して、「では何うぞ………」と目配せをするので、彼は不安の思ひを抱きながら入つて行つた。竹村は彼を應接室らしい體裁を具へた六疊ばかりの一室へ案内したまゝ、病室に充てゝある隣室の樣子に、暫らく耳を澄してゐた。家のなかは何となく閑寂してゐた。

すると其處へ十歲ばかりの女の子が、つかつかと出て來て、竹村の傍へ寄つて來た。色の白い一重眼瞼の腫れぼつたいやうな、母の絹子そつくりの顏をしてゐたが、思ひなしか表情が何となく寂しかつた。

「これだな」と、淳吉は心にさう思つたが、子供は見馴れない彼の顏を見ても、別に人見知りをする風もなく、優しい目元に微笑を浮べながら、やゝ顏を紅くしながら、甘えるやうに竹村に絡はりついた。

淳吉は何か土產でも持つてくるのだつたにと、そんなことを考へながら、廣太郎の面影が何處かにあるのだらうかと、皮肉らしい目を見すゑてゐたが、そんな分子はどこにも發見されないやうに思はれた。

「もうこんなですかね」淳吉は愛相らしく言つた。

「さうなんだよ」と、竹村も寂しい微笑を浮べたが、

「つひ此の頃まで僕の手元においたんだがね。絹も一時は學校の先生なぞしてゐたものだからね。」

「これ誰方、伯父さん！」などゝ子供はおしやまさんに出來てゐると見えて、指頭で目尻にかゝる毛を搔拂ひながら訊いた。

「うむ、これ？これはね、すみちやんのお父さ　のお友達の方。」竹村は言つて聞かせながら、「お母さまにちよつと此方へ入らつしやいつて、彼方へ行つて呼んでおいでなさい。」

「お母さま！お母さまはね、今お化粧してゐるの。」子供は正直に應へた。

竹村は眞面目くさつた顔をして默つてゐた。

淳吉はさうした子供の樣子など見てゐるうちに、妙に氣分が壓しつけられて來るのを感じた。その前後の細かい事實や心持などは、時がたつに從つて、いつとはなし記憶から遠ざかつて、單に抽象的な一つの感じとして、時々憶出せるくらゐに過ぎないのであつたが、今この、疑ひもなく廣太郎と絹子とのあひだに產れたに違ひないすみ子の存在を見ると、否定することも打消すこともできない現實其物に面接するやうな氣がした。絹子が淳吉から贈られた戀文を、本の間へ挿んでおいた、それを思ひがけなく廣太郎に見つけられて脅迫されたことは、その當時絹子の兄の竹村から辯解的に聞かされたことであつたが、それをさうなつてからの絹子に責めて見たところで爲方のないことであつたし、絹子を監視してゐた兄の竹村に、不足を言つて見たところで、追着かなかつた。絹子が淳吉と顔を合すのを厭がつたと同時に、兄の竹村と淳吉とのなかも其れ以來妙に氣拙くなかつたことも、爭へなかつた。勿論淳吉がその事實を知つたのは其から大分たつてからであつた。彼は絹子の氣持が妙に臆病らしく憂鬱になつてゐるのを不思議に感じながらも、それは青春期の處女にありがちな肉體の變調か何から來てゐるのだらうと推察してゐた。後で氣のついたことであつたが、事實彼女の目や皮膚の色が不思議な水々しさをもつてゐたことも事實であつた。氣分が妙にいらついてゐたことも、明らかであつた。

「わたし心配なことがあるの。」絹子はどうかすると愁はしげな表情で、そんなことを呟いてゐた。

絹子兄妹は、その頃父を失つたばかりで、郷里の遺産や自分たちの前途などに就いて、竹村自身も、心を苦しめてゐた。父は田舍醫師であつた。そして小さい病院を經營してゐたが、負債も澤山あるやうに淳吉は聞いてゐた。淳吉も廣太郎も同じ竹村の郷里で、村こそ違つてゐたけれど、中學時代からの友人であつた。その中でも竹村が一番年上であつた。淳吉は家が貧しかつたうへに、年も若くて、氣質が素直だつたので、時々竹村の同情や保護をさへ受けてゐた。そしてそんな關係から、その頃父と氣の合はない母と妹の絹子と三人で、東京で一世帶もつてゐた竹村との友情がその親密さを加へて行くと同時に、淳吉はいつか絹子と深い戀に陷ちてゐた。若い同士のその戀が淡い紫色の若草の軟かい芽か何ぞのやうに、彼等の胸に燃えたつてゐることは勿論であつたが、兄の竹村によつても、それが默許されてゐるらしいことも事實であつた。そんな口吻をさへ彼、淳吉に洩したほどであつた。淳吉は顏を赧めながら、それを否定するほど臆病であつた。

淳吉は絹子が「心配がある」と云ふ其の心配も、どうせ郷里の財産のことか、母子三人の生活上のことだらうと想像してゐた。でなければ二人の戀が、母の意志によつて否定されでもする傾向が見えるのであらうなどと　つてゐた。

「何か心配なことができたんですか。」淳吉は訊いてみたが、絹子は顏を紅くして、につと笑つたきりで、何にも言はなかつた。押返して訊くと、彼女は、「何でもないことなの」と言つて、打消してゐた。

そして其から間もなく、騷ぎが彼等母子の家庭に起つた。淳吉はいつ行つても、絹子の姿を見ることができないのを、不安に感じてゐた矢先、竹村の口から、それらの事實を殘らず聞取ることができた。

「君には誠に面目ないが……」竹村は躊躇がちに事實を報告するのであつた。

淳吉は勝手口などに、偶に絹子の姿をちらと見ることはあつたが、自分の聲を聞いても顏を見せないのに、不安と疑

惧とは次第に深くなるばかりであつたが、それらの現實を突きつけられたときに、初めて彼女のさうした態度を辨することができた。

それは或日の夕方下の絹子の部屋で、起つた事實であつたらしかつたが、廣太郎は身にその時酒に醉つてゐたと云ふことも確かであつた。

「君にはわざと、はずにおいたが、その頃から絹子は片岡に誘き出されて、一緒に觀月橋などを歩いてゐたことがあつたらしいので、僕はそれとなく警戒してゐたんだがね、その時はもう遲かつたんだ。」竹村はさう言つて、暗い顏をしてゐた。

勿論廣太郎はそれより竹村から絶交されてしまつたが、絹子自身は双方で自殺しようとした形迹などを、母や兄に感づかれて、嚴しい監視のもとに、殆んど一歩も外へ出ることを聽されなかつた。

淳吉は今それらの新しい噂を聞かされてゐただけ、すみ子の愛らしい顏など見てゐると、女の肉體が自然の意志によつて、何んな風に支配されるかを、まざまざと見せつけられるやうな氣がした。

そして其の絹子が、コーヒなぞ盆にのせて持つて、ためらひがちに入つて來た。淳吉はその姿を見たとき、自分の目を疑ひたいくらゐであつた。

「まあ、よう久しぶりでございました。」絹子は心持顏を赧めながらお辭儀をした。隨分辛いのだらうと思はれたが、內氣な淳吉もちよつとこちつたやうな風で、

「どうも暫く」と挨拶した。

それきり、言葉が途切れたところで、竹村が痛いやうな目眩いやうな目をぱちつかせて、淳吉が久しぶりで東京詰になつたことなどを説明した。

「それで片岡君とも心持よく握手してもらふつもりでね。片岡君は無論感謝するに極つてゐる。お互にもう年を取つたからね。すみ子が十歳だもの。」竹村はさう言つて押しつけたやうな笑聲を立てた。

「ほんとうですわね」と、絹子も白々しげに言つたが、目が何となし潤ひをもつて來たやうに見えた。

淳吉の目にも何といふことなし涙がにじんだ。

「廣太郎も悦ぶでせうよ。」絹子はさう言つて、三人の顔を不思議さうに見比べてゐるすみ子の毛を指先で輕く弄つてゐた。

「しかし何うですか、反つて片岡君を興奮させるやうなことがあつても……。」淳吉は氣づかはしげに言つた。

「私からちよつと話して見ませう。其の方がいゝかも知れませんわ。」絹子は言つた。

「さうね。」竹村は呟くやうに答へた。

それから田舎の話などが暫く續いた。絹子たちの母が四年前に死んだことも、淳吉は先刻竹村の家で知つたのであつたが、彼は絹子にその弔みも言つた。彼等はお互に新春の賀状の遣取をしてゐたほか、長いあいだ消息が全く絶えてゐたのであつた。

「あなたお子供さんがおありなんでございませう。」絹子は淳吉に訊いた。

「二人あります。」淳吉はいくらか此場合の息苦しさから脱れるやうな氣持で答へた。

「あゝ、それぢやもう好いお父さまですわ。」絹子は吻としたと云ふ風で言つた。

淳吉はその子供について、又少しく說明を加へたが、それと同時に結婚生活の幸福を仄めかすことを忘れなかつた。左に右ちやうど好い時機だつたと云ふことを、三人に思はせた。

淳吉はやがて廣太郎の病床を見舞つた。

淳吉はそれから二三度廣太郎を見舞つた。初めてのとき、妙に氣の弱くなつてゐた彼が、ひどく淳吉の來訪に感激して、淚を流して握手をしたりなどしたので、あんな男がこんなにも弱くなるものかと、淳吉は少し狼狽氣味になつて、痩せ細つた彼の手を強く握りかへしたのであつたが、寂莫を感じてゐるらしく、人懷こい樣子だつたので、時々行つてやることにしたのであつた。

「よく來てくれたね。」廣太郎はさう言つた調子で、淳吉の顏を凝視めたのであつた。アメリカに於ける長いあひだの勞働生活が、彼の氣質と肉體のうへにさういふ風な變化を來したのだとは想像されたが、彼はその事については、何にも語らなかつた。

「あちらに何年ゐたことになるのかね。」淳吉は尋ねた。

「さう、あれから君たちに別れて、一年目に日本を去つた譯だがね、歸朝したのが一昨年だから、足掛七年になるね。何だかそつちこつち放浪してゐるうちに、ひどく健康を害してしまつたもんだから、急に歸りたくなつてしまつてね、少しはやりかけた仕事もあつたんだけれど、とにかく一旦引揚げることにした。」廣太郎はその內容に觸れない程度で答へてゐた。餘り社交界へも出る機會がなかつたとみえて、誰に逢つたとか、誰が何處に何をしてゐるといつた噂も出なかつた。

「でも君なんか成功の方なんぢやないか。」

「いや」と、廣太郎は苦笑してゐた。そして、

「おれにはならんよ。僕に限らず、誰でもさうなんだがね。あつちで生活するくらゐのことは、それあ誰でもやつてゐるんだけれど、成功してゐるなんてのは絶無だよ。」

そんな話をしてゐるうちに、熱が出て來たので、淳吉はやがて病室を出て來たのであつた。そして應接室で絹子と少し話をしてから、竹村と一緒にそこを辭した。

途々竹村の語つたところによると、彼は歸朝以來京濱の方の友人がやつてゐる貿易會社の仕事に關係してゐるらしかつたが、少しは貯金もあるらしいので、先づ當分の保養には差閊はないと云ふことであつた。

「しかし絹子も不幸な奴さ。」竹村は嘆息しながら、「片岡が是非くれと言ふものだからね。これにはみ子といふ子供もあるし、強ち片岡の歸朝を待つてゐた譯でもなかつたんだらうけれど、歸朝の一年ほど前に突然手紙をよこして、などく謝罪まつてゐたり何かしたものだからね。まあ爲方がないね。あの男も疑つてやつたがみ子の寫眞など見て、堪らなくなつたものらしいんだ。それからせつせと手紙の往復があつて、歸ると間もなく長いあいだ粟々ぼかされてあつた問題が、一時に解決されてしまつた譯さ。」

淳吉もその事は始終氣になつてゐた。勿論地方詰のあひだにも、偶には東京へ出て來たこともあつたが、竹村とも喧嘩面で別れたきりで、碌に年始狀の取遣りをしてゐたほか、手紙の往復もなかつたので、その儘に長い月日が流れてしまつたのであつた。

二度目に訪ねたのは、或る秋晴れの、それはもう空の色などに初冬の感じに近い清涼な日の午後であつた。彼は田舍

でもらつた細君の芳子をつれて、切花などもつて更めて彼を見舞つたのであつた。その頃は體溫もほゞ落着いて、事務上の手紙を書いたり、少しの散歩ぐらゐは出來るといふので、應接室へ出て一時間ばかり話を交へた。

淳吉はやゝ沈み氣味な絹子に比べて、自分の妻の芳子の方が陽氣に戯れついてゐるので、何だか連れて行つた方がいゝやうな氣がした。絹子も一切のことを忘れて、彼と無關心な話ができるだらうし、廣太郎自身も、何んなに氣易く感ずるであらうと思はれた。

しかし最初の會見では、反應は餘り面白い方ではなかつた。淳吉が豫想したほどには、總てが好都合に行かなかつた。といふのはほんとうに彼等の生活を知らない芳子が、自分の好意を少し過重視してゐた點があつたからでもあつたが、絹子にも何時もの彼女には似合はず、それを正當に受容れるだけの素直さを缺いでゐたためであつた。

「我々三人は書生時代には、みんな兄弟のやうな仲だつたんだよ。」淳吉は芳子を彼等に紹介してから彼女に言ふのであつた。

「さうですつてね。」芳子は晴々しい目元に微笑をたゝへながら、

「御主人は長くアメリカの方に行つていらつしやいましたんださうでございますね。隨分お寂しくていらしたでせうね。それに折角お歸りになつて、また日も淺いのにこんな御病氣ではね。」と絹子の方へ親密ぶりを示さうとして、言ふのであつた。

絹子は何となし壓迫を感ずるやうな風で、勿論芳子自身の實家の身分が、土地で相當な財産家だといふことも、普通の女としては考慮に入れない譯には行かなかつたので、――それに芳子が良人と崇めてゐる淳吉に關しては、妻としての彼女よりも、戀人としての自分の方が、より多く何彼を知つてゐると云ふ意識もあつたので、それを面に表さないと

するだけ悲しいだけ、探ぐるやうな感じがするのではないかと想像されるのであつた。

その絹子は、自分と淳吉と廣太郎との關係について、芳子が何れだけの程度の知識をもつてゐるかといふことも、ちよつと見當がつかなかつた。多分淳吉が何も話してはゐる筈はないであらうと思はれたが、しかし案外にも總てを暴露してゐるかも知れないといふ疑ひもあつた。そして其の場合には、絹子自身と廣太郎との夫婦關係が、芳子の目に何んなにやくざなものに映るか知れないと云ふことも、感じないではゐられないに極つてゐた。

とにかく思つたより晴々しい如才のない芳子の調子が、絹子夫婦に餘り好い感じを與へないらしかつた。絹子が自分たち夫婦の問題に觸れることを好んでゐないことも明かであつた。

「漸くあちらから歸つて、これからと云ふときに、こんな病氣になつたんでございますの。」絹子は少し顏を顰めながら、心寂しさうにいふのであつた。

「本當にお氣毒でございますわ。淳吉もさう申してゐるんでございますの。」

「でも此の分なら、ずん／＼好くなりさうぢやないか。」淳吉に芳子の氣分が明るいながらに、少し調子を取はづして、感傷的になりさうになつたところで、さう言つて廣太郎を見た。

「お陰でね……この分なら今少ししたら、轉地ができさうだから、さうしたら何處か海岸へ行てみようと思つてゐる。」

すると絹子も男同士の話の尾について、

「先日貴方がお見舞ひ下すつてから、大變氣分が快くなつてまゐつたんでございますよ。」

「さうですか。それなら大變好かつたです。僕はまた反つて神經を刺戟しやしないかと思つて…………。」

「いゝえ、そんなことございませんの。やつぱり昔しの池内だなんて、大變悦んでゐたんでございますの。」

芳子は絹子が、自分よりも淳吉の方へ氣易い感情の流露を示すのを、少し怪訝に思ひながら、媚びるやうな微笑を浮べてゐた。

「私もこれからちよく〳〵寄せていたゞきますわ。此方へは此頃參つたばかりで、親しいお友達と云ふやうな方もございませんの。」

「さうですか。失禮ですが、奧さまは學校はどちらでいらつしやいました。」

「××市の縣立女學校でございますの。父が頑固な人でございますので、東京へは出してくれませんでしたけれど、二度ばかり遊びに參つたことはございます。」

其から二軒ばかりある親類の話だの、女中の拂底なことだの、家を搜すのに骨の折れたことだの、そんな世帶じみた話が暫く續いてゐたが、そのあひだに淳吉と廣太郎の間に、古い友人の消息だの、アメリカに於ける廣太郎の生活の斷片的な話などが取交されてゐた。病人の顏に較々疲勞の影が浮んでゐるのに氣がついたので、淳吉はやがて芳子を促して彼等と別れた。

「いづれまた來ますけれど、轉地でもするやうだつたらちよつと知らしてくれたまへ。」淳吉は言つた。

廣太郎はしばらく話のつゞいたあとで、遽に氣が沈んで來たらしく、懶さうに籐椅子の肱掛に兩手を垂らしてゐたが、「有りがたう！」と應へたきり、寂しさうな目をして二人を見送つてゐた。

淳吉は會社の仕事が忙しいのと、廣太郎が追々快方に向ひつゝあることと信じてゐたのとで、其のち暫く無沙汰をしてゐたが、冬になつても廣太郎から轉地の通知もなかつた。勿論彼は竹村に逢ふ機會もなかつた。

「大井の病人は何うしたかな』などゝ彼は折にふれて氣遣はしげに芳子に言つた都會生活に於ける新しい家庭の幸福を追求するに忙しかつた芳子は、絹子たちの暗い生活を振顧るのを、餘り愉快には思はなかつた。彼女は東京に移つてから、二人の愛の生活が、遙かに一轉機を劃したやうな悦びを感じてゐた。都會に於ける若い夫婦の生活は、總ての點に於て田舍のそれよりも遙かに自由で享樂的分子が豐富であつた。それに彼女の第二回目の姙娠に、母親としての新しい期待をもつてゐた。田舍にゐる時分最初の出産で彼女の愛兒はこの世の風にあたると、間もなく死んでしまつたのであつた。

「何うしたんですかね、轉地するなんて言つてゐましたけれど……。」芳子は偶には氣の無い返辭をするのであつたが、あの不遇な厄難が自分達の身のうへでなくて好つたとでも思つて、一層自分たちの幸福を感謝してゐるらしかつた。

「あいつあんな男ぢやなかつたんだけれど、アメリカで苦勞して來たお陰で、すつかり好くなつたよ。だから一層可哀さうなのさ。」淳吉は言ふのであつた。

「さう！悪い人だつたの？」芳子は目を丸くした。

「決して悪い人間ぢやない。極端純な正直ものなんだけれど、あれではなか〳〵狂熱的なこともやつたのさ。」

「さう！何だかさう云ふやうな人ね。隨分可怖い目をしてゐるわ。それに神經質だと思ひましたわ。」芳子は無邪氣に言つて、

「あの人迚も癒りさうな見込がないぢやないの。私ちよつと見た瞬間にさう思つてよ。」芳子は見切をつけたやうに言ふのであつた。

淳吉は輕い驚きの目を瞬つて彼女の顏を見たが、彼自身も實はさう感じてゐることは爭へなかつた。そして長いあひ

だの酸苦を嘗めた果に、まだ漸う三十四五にしかならない若い生命を、そのために穢られるのかと思ふと、憐愍を感じない譯にはいかなかつたけれど……そして共に絹子のうへにも同じく感じたことではあつたけれど、見切をつけてゐる點では、今更ら芳子の言葉に控く必要はなかつた。

「どうせあゝ男も永くは生きまい。一時好くなつても、それは糠悦びに過ぎない。若い死は刻々に彼の方へ近づきつゝあるのだ。そして絹子は十年目に漸とすみ子のために一緒になることができた良人に死残されて、永久孤獨の人となるのだ。」彼はそれほど確かな事實にないと知りつゝ、それを靜かに見届けるために、彼等夫婦に同情の眼をかけてゐるところに、寧ろ慘酷な皮肉を感じた。

するとその日曜の午后、何うしたことか絹子が突然訪ねて來たのであつた。

その日は夫婦で、懐かしい冬の町を散歩するつもりであつた。姙娠といつても、まださう目に立つ方でもなかつたし、歩くのに困難を感ずるやうな月でもなかつた。

「今のうち私せつせと其處いら見てあるくわ。今に出られなくなるから。」芳子はさう言つて、その日も其處か散步場へつれて行つてもらふつもりで、午前のうち髪結に來てもらつたり、顏を作つたりしてゐた。そして輕い裝飾を調べてから、そろ／＼支度をしようとしてゐる處へ、思ひがけなく絹子がやつて來たのであつた。

取次ぎの女中に、それと聞くと、芳子は顏を顰めて、目をぱち／＼させたが、しかし愛想らしい笑顏で出て行つた。

「おや、よくお判りになりましたわね。さあ、どうぞ。」

絹子はそこに躊躇してゐた。

「は、有難うございます。病人をおいて來たものですから……ちよつとお目にかゝつて、直ぐ歸るつもりで……。」彼

女は身裝も餘り好くないので、いくらか氣も引けるらしかつた

「まあ可いぢやございませんか。折角遠いところを來ていたゞいたのに。」芳子は賑やかな調子で言つて、

「御病人は如何でございますか。」

絹子は顏を顰めて、寂しい微笑を痩せた頰に浮べてゐた。

「え、また少し惡いんでございますの。」

「さう、それは可けませんわね。」

そこへ淳吉も顏を出して、上ることを勸めた。

「私今日は急ぎますんですけれど、それではちよつとお邪魔いたしませうか知ら。」絹子は漸うのことで遠慮がちに上つた。

淳吉たちの家は、四谷の靜かなところにあつた。手廣くはなかつたけれど、綺麗に出來た勤め人向きの新建の二階家であつた。年增の女中を一人使つて、勝手元なども明くできてゐて、きちようめんに片着いてゐるらしかつた。絹子の通された下の八疊の座敷には敷物が敷かつて、椅子卓子などもおかれてあつた。

「ほんとに結構なお住居ですこと。」絹子は庭の植込などに目をやりながら呟いた。冬の日光が、硝子戸に漉されて室内にまで差込んでゐた。

「私ちよつとお禮旁伺はう／＼と思ひながら、病人にかまけてつひ御無沙汰して、申譯ございませんの。」絹子は細そりした澄んだ調子で言ふのであつた。

芳子は傍にゐなかつた。

「いゝえ、それどころぢやない。私も氣になつてゐるんですけれど……。」

「私まだ御結婚のお祝ひすら申上げないんですもの。」

「飛んだことです。お互ひさまぢやありませんか。」

「でも、私の心持としまして……。」

そこへ芳子がまた戻つて來たので、絹子はその方へ目を配りながら、思出して持參のお土産をそこへ出したりなどした。

絹子の話によると、つひ二週間ほど前に、廣太郎は暫くぶりで大井町の床屋へ行つた。すると途中からぶる／＼顫えて歸つて、それきりどつと床に就いてしまつて、此頃少し恢復はしたけれど、それ以來喀血が止まらないから、醫師からも警戒するやうに言はれたといふのであつた。彼女は目をうるませて、おど／＼した調子でそんな話をしながら、俛いてゐた。涙が睫毛をこぼれた。

淳吉も芳子も返事ができなかつた。

「それは御心配ですな。」淳吉は絹子の調子にひどく惹着けられながら、しかし同情を享樂するやうな氣分を感じつゝ、溜息をついた。そして同時に、今までそんな病人を閑却してゐた疎遠を悔いながら、今にも行つて現狀を目撃したいやうな氣がした。

しかし考へてみると、それは矢張苦しい仕事であつた、廣太郎自身は、別にそれを感じてゐないかも知れないのであつたが、病苦に惱みながら、友人の同情を心からは受容れてゐないやうな、ぎろりとした彼の目が、心の底まで見透してゐるやうに思はれてならなかつた。それは此前に訪問したときの、彼の暗い目で十分想像することができるので、

た。

「醫師は何と言つてゐるんですか。」淳吉は判りきつたやうな事を、又尋ねた。

「兄が詳しく話しつたやうでしたけれど、どうせ駄目なんでございます。」

そして絹子は目を拭いて、顔をあげた。

「私はまた今頃は何處か海岸へ轉地したこととばかり思つてゐたのです。」

絹子はそれには答へないで、

「それに此頃大變氣むづかしくなつて、傍にゐるのが實に困るんでございますの。」

「どんな風にです。」

「それこそお話にもならないやうな事を口にしますんですの。古い私の心へに溯つて、色々のことを掘返したり、アメリカへ行つてゐたあひだの私の生活だの。」さう言つて、絹子は芳子を憚るやうに、其處には何にも語らなかつた。

淳吉は何だか擽つたいやうな氣がしたが、芳子に氣取られる虞があつたので、わざと脇を向いてしまつた。

「死ぬ病人に限つて、皮肉になるものださうぢやありませんか。」芳子はつかつか言つた。

「やつぱり愛人を殘して行くのが辛いんだらうね。」淳吉も呟いた。

「何ですか、やつぱり私を信じないんでございませうね。私あの人がアメリカで苦勞したことを知つてゐますから、其に免じて何もかも赦してゐるつもりなんでございます。それで可けないまでもあの人が私を信じて、滿足するやうにと思つて、出來るだけのことはしてゐる積りなんでございますけれど……それはあの人にも十分解つてゐる筈なんで

ございます。實際また氣分の好いときは、それを言つて悦んでくれてゐるんですけれど、何うかした拍子に興奮して來ますと、まるで想像もつかないやうなことを言出して、私を苦しめますの。」

「竹村君にでも少し言つてもらつたら何うですか。それでは病勢を昂進させるばかりでせう。」淳吉に不滿さうに言ふのであつた。

「は」と、絹子は答へたきりであつた。

話がまた途切れた。その間も芳子は落着きなく部屋を出たり入つたりしてゐたが、やがて絹子はふと三時を打つたのに氣づいて、あわてゝ椅子を離れた。

「今日はちよつと銀座まで買ひものに出たものですから、ちよつとお玄關までと存じまして……。」

「そのうち行きます。どうぞお大事に……。」淳吉も椅子を立つた。

「ではお止めいたしませんわ。眞實にお愛相がございませんで……。」と芳子も言ふのであつた。

しかし廣太郎は比較的長く保つことができた。

淳吉が最後に逢つたのは、二月の初めであつたが、彼は極度の衰弱に陥りながら、まだ此の世に執着してゐた。田舍から姉が出て來てゐたが、絹子の側がたまらないので、病人の承諾を得たうへで、看護婦もつけてゐた。勿論彼の生命も、餘すところ幾許もないらしく思はれた。幸ひなことには心臟が强かつたのと、消化機能の衰へないことであつたが、その胃腸もこの頃では滅切り鈍らされてゐた。

絹子は幾度となく壁際まで押しつけられてゐたので、今では却つて氣分が明みへ將いて來てゐるやうに見えた。

「何んなですか」と言つて、淳吉が應接間で彼女を捉えて訊くと、絹子は反つて平氣らしく微笑を浮べてゐた。

「相變らずですの。」

「さうですか」と淳吉もいくらかうんざりしたやうに應へたが、しかし靜かな病室の悲痛な氣分は感じない譯にいかなかつた。

暖爐で温められた其の部屋では、彼は姉や看護婦に守られつゝ、眠つてゐるらしかつた。何の物音も聞えなかつた。

絹子はすつかり看護疲れのした顏に、上氣したやうな紅味をもつて、目が睡眠不足と涙とで爛れてゐた。髮も無造作に束ねたきりであつた。

「やつぱり氣むづかしいんですか。それでも幾等か鎭つたんですか。」

「この二三日は、大變におとなしくなりましたの。それに兄も大概來てゐますから。今日も來てゐたんですが、今し方歸りました。」絹子はさう人の顏色など見てゐられないと云ふ風で、ちよつと調子がかはつてゐた。

「おとなしくなつたのは危險ですね。」

「えゝ、もうそんなに長くは生きられまいと思ひますけれど、最後まで判りませんわ。」絹子は寂しく笑つた。そして、

「今朝から貴方を待つてゐたやうです。」

「やつぱり然うですか。それは貴女を試すんぢやないんですか。何だかそんな氣がしてならないんです。」淳吉は彼女の目を凝視めた。

「さうでもないでせうけれど、隨分氣味のわるいこともございましたわ。」絹子は苦笑した。

「餘りせつせと來ちや可けないんだらうと思つて、四五日遠慮したんですが……。」

「それあ然う云ふこともございますわ。あの男は忙しいのに、何のためにあんなに足を運ふんだなんて、眞山に失禮つたらないんですもの。先に典さんの來て下すつたときだつて然うですわ、さう〱己のところへ幸福を見せ衒かしに來たんだらうなんて、眞實に惘れてしまひました。」

淳吉はちよつと不快　感じたが、深く憎む氣にもなれなかつた。

「默つてゐて、そんな事を享樂してゐるんですかね。羨ましいな。」淳吉はわざとらしく笑つた。

「あんなぢやなかつたんですわ。以前は極さつぱりした男らしい氣質でしたのに、そんな憎まれ口だつて、考へてみれば罪はないんですけれど。だから私何でも默つて聽いてゐましたの。すると後からきつと謝罪りますの。昨晩なぞ、疲れて私が居眠をしてゐますと、お前は能くさう眠れたもんだつて、そんな事を言つて笑つてゐますの。それから私が大變肥つて來たとか、血色が好くなつたとかね、そんな事ばかり氣にしてゐますの。」絹子は口元にくすりと笑つた。淳吉も爲方なし笑つてゐた。

淳吉はその時病人を悦ばせようと思つて、草苺をどこからか探しだして、持つて來てゐた。勿論そんな苺は、町では滅多に見られなかつたが、絹子たちの骨折で、時々病床に持來されてゐた。彼はそれを悦んで食べた。淳吉はそれを二箱買つて來たのであつた。

「あなた池内さんが、苺をこんなに澤山もつて來て下すつたの。」絹子はうと〱してゐる病人の口の先にそれを並べて言ふのであつた。

淳吉も傍にゐた。

「どうかね、今日は。」淳吉は彼を凝視めながら優しい言葉をかけた。

廣太郎はじろりと彼を見た

「有りがとう！」彼は力のない聲で言つて、目に涙を入染ませた。そして皿に盛られた苺の方へ、その目を移しながら細い呻吟聲をたてた。

「召食りますか、直ぐ。」絹子は訊いた。

「さうさな」と、廣太郎は微聲で應へた。

「召食つたら可いでせう、どつさり。貴方の大好きなもの。拵へて來ませうね。」絹子は彼の食慾を唆るやうに言つた。

「まあ待つてくれ。そんな物を濫みと食つたら、また腹下しだ。」廣太郎は寂しく笑つた。

絹子は默つてその顔を見てゐた。

「おれの腸のわるいことは、お前も知つてゐるだらう。」

「え、だけれど貴方の好物だから。」

廣太郎は口元を歪めながら、餘程我慢してゐるらしかつたが、持切れなくなつた。

「いくら好物だつて、時と場合を忘れちや困るよ。お前は何でも好きなものは、せつせと食はせて、死ぬものは早く死せた方がいゝと思つてゐるんだらう。」廣太郎は凄い目をした。

「そんな譯ぢやありまんわ。」絹子も腹立しげに言つた。

「さうなんだよ。」

「だつて折角池内さんが御親切に持つて來て下すつたのに……。」

の親切がなくちやあ駄目ぢやないか。お前は無礼で困るよ。ね、池内君。」廣太郎はぢろりと淳吉を見た。

「さうだとも。淳吉は笑ひながら頷いてみせて、「しかし絹子さんも、そんな積りで言つた譯ぢやないだらう。まあ可いさ、今急いで食ふ必要はないさ。」

絹子は辛さうに泣出した。

「あゝ」と、廣太郎は腹の底から出るやうな呻吟聲を立てながら、細い首を後ろへ捻向けてしまつた。

淳吉はやがてそつと病床を離れて、應接室の方へ來ようとした。すると同時に、廣太郎は遽かに又こつちへ向直つて、さも忌々しさうに痩せ細つた手を延べ一莓を一顆二顆摘むと、泣いてゐる絹子の顏に力まかせに打ちつけた。

紅い莓の一つが、絹子の額にぺちやり當つた。絹子は急いで、そこにあつた紙を取つて拭取り拭取りした。

「おれの生命より、自分のまづい顏の　が大切なんだらう。」廣太郎はひねこびれた子供のやうな顏をして、けろりと天井を凝視めてゐた。

立ちかけたまゝ見てゐた淳吉も、絹子も、看護婦も、目に涙をにじませて微笑した。

廣太郎はそれから物の五日と生きてはゐなかつた。

小說及び小說家

宇野浩二

こゝに三人の職業小說家が約束の雜誌の原稿の締切期日に迫られてゐた。彼等はその職業の者のみが知るところの、何とも言へない不安な、苛々した、そして疲れた氣持に惱でゐた。今、偶然、彼等は同じ雜誌の同じ月の小說を執筆する約束を持つて、而もそれを果たす爲に、東京の郊外の或同じ旅館に滯在してゐたのである。で、或時は、自分だけは出來なくても、どうか他の二人が書き上げてくれゝば、それで多少雜誌社の迷惑の度が減じるだらう、どうか首尾よく書き上げてくれ、と思つた。が、又或時は、他の二人が書き上げたのに、自分だけが到頭書けなかつたとすると、自分はこの前にも同じ迷惑をかけておいたから、どんなに編輯者が怒るだらう、と心配になつた。

世に「亭主持つなら船頭は止しやれ」といふ言葉があるが、船頭どころか、今に職業小說家といふものがもう少し數が多くなつて、世の中にその存在を認められて來たら、忽ち世界の娘たちから亭主として持つことを排斥されるものに違ひない。現にこの三人の小說家は、東京市内にそれぞれ相當な家庭を控えてゐながら、家にゐたら

迚も書けないといふ理由から、わざ〳〵郊外のそんな宿屋に滞在に出かけて、ペンを握つて苦しんでゐるのである、そして船頭には休みがあるが、雜誌と新聞とによつて存在してゐる彼等には何の休みもないのである。最近の統計表に依ると、昔からもさうであらうが、職業小說家はあらゆる職業人の中で、最も短命だといふのも、誠に無理からぬ次第である。

さて、この三人の小說家は、もう約束の締切期日を一週間過ぎた今日になつて、三人が三人ともまだ書き潰しの外は一枚も書いてゐない。夜、三人で一つの部屋に集まつて夕飯を認めた後、

「どうだ、書けるかい？」と一人が言つた。

「どうも困つた」、と他の一人が言ふには、「もう今日になつて見ると、とても豫定してゐた脚本は書けさうにない。今から大急ぎでやつても、少し長いものだから、この締切には間に合はない。仕樣がないから此間旅行した時の見聞の中で、一つ小說になりさうなものがあるから、それで間に合はさうと思つてるんだ。」

「それやいゝな」、と前の一人が、「僕は材料はずつと前からこれ〳〵とぼんやりと當りがついてゐたので、安心してゐたところが、元々寄せ集めて一つのものに組立てるつもりだつたんだ、それが昨夜から頭の中で纏めに掛つたところが、見事に、らないのを發見して、ひどく悄氣てゐるんだ。誰か材料をくれないかね……君は？」

そこで、第三人目が口を開いて、「僕は材料だけはちやんとしてゐるんだ。が、それが書けないんだ。僕はまだ外にも材料ならあるよ。一つやらうか？」

「欲しいね、是非。」

「纏まらないと言へば」、と二番目の男が言ふには、「僕だつて、その旅行中の見聞記だが、一寸纏り兼ねて困つてゐるん

「成程、それは面白いね。……」

――第三者が聞いてゐると、如何にも不眞面目らしくて、一寸呆れる外はないが、さて、順々に彼等が話し出したのである。」

その一

――僕は二人の姦通された男の話を書いて見ようと思つてゐたんだ。――と一人が話し出した。

その一人は僕の友達で、金持の息子で、未だ友達仲間の外は無名ではあつたが、可成り有望な素質を持つてゐた未來の小說家で、外國文學通で、勉强家で、そして智者で、そして秀麗な容貌の持主であつた。名前を假に葛見久市としておかう。或年彼は或避暑地で一人の藝者と馴染になつたのである。それは彼の學生時代を終つた次の年かで、兩親と一緒に行つてゐた時であつた、而も愈よ一週間程のうちに歸らうといふ時分に、偶然彼女と會つて、そして先づ戀に陷つた譯であつた。が、それから五日後に彼は一先づ兩親と歸京しなければならなかつた。彼のつもりでは、一度歸つて、改めて何か口實を設けて、一人で引返して來ようと考へてゐた。ところが、歸京してから三日目にも五日目にも、一週間目にも、彼は彼女に手紙を出したところが、あんなに堅く約束しておきながら、何の返事も寄遣さないのである。やがて、彼は彼女が何處かへ行つてしまつたと言ふことを聞いた。彼は、しかし、その簡單な出來事に就いては、どの友達にも話さなかつた、

だが、それから三年後の、やはり夏のことで、彼は友達と一緒に二三週間の豫定で、別に目的のない旅に出て、(その時の友達といふのは僕のことだ)或日或町で彼と僕とは別れることになつた。それは旅の終に近い日のことで、僕は怱

に思ひついて、その町から分れて走つてゐる汽車に二時間餘り乘ると、僕の國の町があるので、一寸歸つて見たくなつたのだ。で、別れる前に少し賑かに御飯を食べやうと言ふので、二人で或料理屋に上つて、ふと土地の藝者を呼んで見る氣になつて、二三人招待したところが、その中に彼が三年前に或避暑地で馴染になつた藝者がゐたのである。そこで色々あつて、僕はその晩彼等と別れて國へ歸つたのであるが……。

さて、彼等は變なめぐり合ひでもあるし、二人とも別々にだが、旅の身の上だし、言ふ迄もなく二人は中々好き合つてゐたに違ひないのだ、が、その時にそんな約束をしたのか、その後にさういふ事になつたのか、それは知らないが、彼は東京に歸つてから、一ケ月のうちに二三度も汽車で出かけて行つたりした後、到頭彼等の間に結婚話が持上つたのであつた。前にも言つたやうに、彼の家は舊家で、金持で、そして、兩親がそろつてゐた、彼はその一人息子であつた。だから、さういふ家でよくあるやうに、その緣談は容易に兩親に聞きとゞけられなかつた。が、彼は子供の時分から、決して兩親の言葉に逆らつたことがないと言はれてゐる程、温厚な性質であつた。元々文學を志望する程の人であつたから、十分情熱的な傾向はあつたが、又それを抑へることの出來る人であつた。さういふ彼が、珍らしく幾度も主張したことなので、到頭その結婚が實現される運びになつたのである。無論、相手は藝者のことであるから、相當の身代金などを出してもらつて、彼女（きの子）は汽車に乘つて東京に來たのである。彼女は當時十七歳であつた。

彼の家は東京市内ではあつたが、可成り大きな屋敷であつた。母家から長い廊下によつて、二階建の離家があつた。そこに新婚の彼等夫婦は住むことになつたのである。彼は先づ彼女に出來るだけの教養を與へようと思つて、或女學校に通はした。それから數人の友達に頼んで、語學とか、文學とか、國語とか、少し可笑しいのは哲學とか、さうい文學の百科を道樂に敎へてもらふことにした。多くの友達の中で、彼は年齢は變らなかつたが、その温厚な性質から、與

識から、尊敬の中心になつてゐたので、別にこれといふ定つた用事のない友達の文學青年たちは、喜んでそれに應じたのである。僕も實は英語の手ほどきを受持つた。

「あの、お茶を持つて來て下さい。」と夫の久市が言ふと、

「私でなくてもいゝでせう、女中でもいゝ？」と細君が言つた。

「えゝ、よござんす。」と久市は靜の、いつも半分微笑むやうな表情で言つた。

「久市さん、私に今度洋服買つてくれない？」

「洋服ですか、」と彼は微笑を浮べながら、「似合ふ自信がありますか？」

「あつてよ。」

「結構ですね。早速注文したらいゝでせう。……」

と、大體こんな調子であつた。無論、友達と彼とが話す時は、彼は普通の友達附き合ひの言葉を使つた。のみならず、なるべく親みを見せる爲に、新しい友達に對しても、出來るだけ彼の方から書生らしい言葉を使つて行くやうにさへしてゐるやうに見えた。だが無論この會話でも分るやうに、所謂彼は細君の尻に敷かれて、何事もはい〳〵と言つて居ゐるのとは、形式は同じだが、何處か違ふやうに見えるのである。或友達はそれを、彼は極端な女性尊重者であるからだと許してゐたが、僕にはどうも、犬猫か赤ン坊に對してゐるやうな態度としか見えなかつた。が、兎に角、さういふ譯だから、彼女が避暑に行きたいと言へば避暑に行き、旅に出たいと言へば旅に出た。或時、僕は二三人の友達と、どういふ場合だつたか、それに莉見夫人を合はして、一緒に電車に乘つてゐた。電車の中は丁度座席が滿員で、吊革にぶら下つてゐる客は一人もなかつたといふ程度の賑さであつた。その時、私の一つ置いて隣に坐つてゐたきの子夫人

は、突然立上つて、向ふ側の席の上に掛つてゐる化粧品か何かの廣告を指差して、

「ねえ、××さん、あのOといふ字に尻尾の附いたのはQでせう。キユなの、キユウなの?」と僕に向つて聞いた。無論電車中の人は、中學生でも、一齊に僕たちの方を振り向いた。彼女は見たところ中々ハイカラ味のある美人でもあつた。

僕は赤くなつて、小聲で「えゝ、キユウです、」と答へたが、

「さう、」と彼女ははつきりした言葉で、「ぢや、英語で何と讀むの? キユウア……私讀めないわ。」――多分それにはQue-ryといふ字だつたかと思ふ。

ところが、半年程後のことに、或時彼女は夫に向つて女優になりたいと言ひ出したのである。そんな大きな家の中で、殊に離れ家に住居してゐて、掛り切りの女中が一人置いてあつて、その上母家との間に電話で物を言ふやうな仕掛までしてあつた。そして彼の兩親は息子と同じく物分りのいゝ人たちであつたから、決して息子夫婦の離れ家にやつて來ないやうにしてゐた。そして肝腎の夫は又前に言つたやうな溫厚な人物であつた。だから、彼女は餘り滿足すぎて、餘り平和過ぎたのに違ひない。人はこの世の苦勞の波を渡るよりも、平和の波を泳ぐ方が二倍は辛いのである。僕の考では、だから、滿足で、安易で、從つて退屈に堪え得る人は、一番この世で豪い人間であると思ふ。さういふ境遇にあつて、彼女が堪え兼ねて、女優になりたいと言ひ出したのは、誠に無理からぬことである。

それを聞くと、夫の久市は一度は型のやうに止めたが、直に「そんなになりたいのなら、早速骨折つて見せませう、」と言つて、その方に便手のある友達に頼んで、或る素人に近い新劇團に彼女を紹介したのであつた。

その話と何の關係もないが、僕はふと思ひ出したことがある、それはまだ僕たちがまだ學生時代のことであつた、僕は

友達からも輕蔑され排斥される程、一時遊蕩に沒頭した事がある、その時分の或時、二十圓の金がどうしても急に入用になつて、どうしても外に出所がなかつたので、外の友達 持つてゐてもその時の僕に貸してくれる代りに唾を吐きかける位のものであつた 僕は葛見久市を訪問して それを申込んだことがあつた。すると、彼はいつもの癖の、にこ〳〵した微笑を浮べてィ「三十圓、二十圓、と口の中で二度ばかり呟くやうにくり返してゐたが、「それ位なら何とかなるだらう、」と言つた。そして暫く何氣ない樣子で僕と雜談をしてから、女中に茶を命じたり何かしてゐるうちに、時々席を立つては、どうするのか、本棚にぎつしり詰つてゐる洋書を三四冊拔き出しては、階下に下りて行つた、そして又戻つて來て僕と暫く話しながら、女中に菓子を命じる暇に 立つて行つて別の本棚から三四冊の洋書を拔き出しては、階下に下りて行つた、さういふ事を三四度くり返した。が、僕はそれが何を意味するのか考が付かなかつたし、又そんなに注意をしなかつた。考へて見ると、注意を引かないやうに、彼はそれをしてゐたのである。

が、暫くしてから、二三冊の雜誌を卓子の上に持つて來て、「一寸五分か十分程失敬するよ、」と彼は僕に言つた。「これでも讀んでてくれ給へ、直に來るから。」そして彼は部屋を出て居つた。僕は金の心配や何かで、妙に落付かないので、卓子の上の雜誌はぱら〳〵と二三度繰つた切りで、立上つて窓の方に歩いて行つた。その時、ふと彼の家の廣い庭を越して、木と木との間から半分ばかり見える入口の門を、彼が可成り大きな、四角 風呂敷包を肩にして、出て行く姿をちらりと認めた。僕は何とも言へぬ不思議な氣がした。そして次の瞬間にはツと思つた。彼は男には少し不體裁な程か細で、色の白い、そして優し過ぎる程奇麗な顏をした男であつた。だから、始めての人には少し氣取り屋に見える程、ハイカラで、文學的の纖細趣味を好む男であつた。恐らく四角な、大きな風呂敷包を肩にかけて町を歩いた事など、死ぬまでに三度以上彼はしたことがないに違ひないのである。

やがて、十分ほどして彼は歸つて來て、「どうも失禮、」と何氣ない顏に、例のにこ〳〵した微笑を浮べて、僕と差向ひに坐ると、何事もなかつたやうな雜談を二十分以上つゞけた。それから、ふと思ひついたやうな調子で、「さう〳〵、肝腎の君の用事を忘れてゐたね、」と言つて、机の前に立つて行つて、向ふ向きに引出しを開けて何かごそ〳〵してゐたが、歸つて來ると、出來るだけ小さく紙屑のやうに折つた三枚の十圓札を僕の前に置いたのである。彼は自分の小遣に合はして、三十圓に足りないだけを、古本屋に行つて足して來たのである、そして僕はそれを遊蕩の一部に使つたのである、だが、聰明な彼はその事も察してゐたに違ひないのである。

さて、きの子は女優になると共に、そのずつと前から學校も、夫の友達に教はる諸學課もすつかり止してゐたので、彼女は毎日午前から出かけて、夜遲くまで、芝居の始まつてゐない唯の稽古の日でも、通つてゐたが、二ヶ月としないうちに、間違ひを起した。彼女はその劇團の中の或男役者と出來たのである。それを最も早く氣が付いたのは夫の久雨であつた。注意力の足りない彼女は、どんなうつかりした夫にもそれと氣が付くやうな言葉を言つたり、電話をかけたり、手紙をそこらに放り散らかしておいたりしたのである。で、彼は或時、やつぱりいつものやうににこ〳〵した微笑を顏に浮べながら、「どうです、もう芝居の方は飽きはしませんか？ この夏から秋にかけて、少し大仕掛の旅行をしたいと思ふんですが、どうです？」と彼は言つた。

「厭だわ、私。まだ芝居を飽きはしないことよ。」と彼女は言つた。「それに、そんな事をしたら芝居の方で迷惑をするわ。そんなに行きたかつたら、あなた一人で行つて來たらどう？」

「いや、ぢやあ止しませう。別にさう屹度行かなくてはならないと言ふんぢやないんですから……」と彼は微笑を顏から消さずに言つた。

――『君、その女は僕も知つてるよ。』とその時話手の小説家の連が叫んだ。『山路木葉といふ名で出てゐた女だらう？』

『ああ、何といふ名で出てゐたか僕は知らないが、色の白い、目のぱつちりした、背のすらりとした女だよ。』

『それ〳〵、僕のところへも二三度遊びに來たことがあるよ、芝居の關係でだ。さうか、驚いたね、あの女は葛見君の細君だつたのか？　僕はその男の方も知つてゐるよ、感じの惡い奴だ。』

『僕たち、友達の方では長い間知らなかつたのだ、その事件を』と話手はつゞけた。

――ところで、彼が最も苦心したのは、その事を友達から殊に兩親たちから隠さうと努めたことであつた。そして彼は到頭隠し了せたのである。ところが、次の事件が起つた、といふのは、彼女が第二の男をこしらへたのである。それは多少金廻りのいゝ不良青年で、よくある女優などと特別の關係を結ばうと要求する粋客の一人であつた。彼女は前の情夫である役者を捨てゝ、その男に忽ち乗り換へたのであつた。が、その事件も、間もなく久吉は知つたのであつた。そして、その頃になつて、漸く前の役者との關係が彼の友達の間に、何處からともなしに傳はつて來たので、その一人が、思ひ切つて、斯う斯ういふ噂があるが、まさか嘘だと思ふ、けれども念の爲に君の耳に入れておく、と彼に言ふと、

「あゝ、どうも少しお轉婆過ぎてね。」と彼は例の如くにこ〳〵した微笑を浮べて、「實は少し前から聞いてゐたが、幸ひこの頃では止まつたやうだから喜んでゐるんだが、ハハハハ。」と靜かに笑つて、「どうも夫が甘いと困るねえ。」

が、その時は實は彼は腹の中で、第二の心配に惱まされてゐたのであつた。と言ふのは彼女と第二の男との事が、彼の耳に聞えてゐたのであつた。それは彼女の第一の男である役者が、彼女に反かれたのを恨んで、手紙や電話で屢々彼

女を々迫に來たからである。

「どうも少し困つたね。相手が少し悪いからね、」と彼は微笑しながら言つた。

「かまはないわ、あんな奴、放つといてやる方がいゝわ、」と彼女はしやあ〳〵して言ふのである。

が、到頭そこに彼が最も恐れたことが起つたと言ふのは、そのごた〳〵が彼の兩親の耳に這入つたのである。兩親は始めから彼女に不賛成であつたのを、息子の人格に敬意を表して、實際彼等さへも子の久市の人格に敬意を表してゐたのである。そして止むを得ず嫁として迎へたのであるから、今斯ういふ事件に遭ふと、忽ち彼等はそれを口實にして、彼に離縁することを迫つたのであつた。彼等はいつの間にかそれが彼女の二度目であることさへ聞いてゐたので、彼もそれに抵抗することが出來なくて、愈よ彼女は離縁になつたのであつた。

彼は彼女が離縁して行くに就いて、彼女の行先であるところの、第二の夫の身元を聞いて見たところが、それは決して彼女を家に入れるやうなものではなかつた。それに細君も子供もあるのだつた。彼女は、だから、親の家に歸ると言つた。そこには彼女の、何處かの料理屋の料理人をしてゐる兄と、母親とがゐるのである、無論餘裕のある暮しではなささうだつた。そこで、彼は兩親には勿論、友達にも内所で、月々彼女に五十圓づゝ送つてやることにしたのである。が、彼等は到頭そのまゝ會はなかつた、何故と言つて、家に歸つて間もなく、彼女は又兄の友達の料理人と出來合つたので、彼と月に一度の隠れて會ふ暇さへ持たなかつた。そしてさういふ月日が半年ほどつゞいた後の或日、彼女は突然彼の友達の一人を尋ねて、離縁になつてから彼に月々金を送つてもらつてゐたことを打明けて、その上こんな無理なことを言へた義理ではないが、今度もう一度藝者に出たい、それに就いてはこれ迄のやうに田舍で出るのと違つて、色々入費が掛るので、どうか五年位の期限で五百圓ほど後見から金を用立てゝくれるやうに、藝者屋の主人に借りたつ

もりで屹度返すから、賴んでくれないか、と相談した。その友達といふのが僕なのである。彼女は見返らす程、汚れた裝をして、痩せて疲れた顔をしてゐた。

彼のような人に、僕は今更そんな事を言ふのは、人のことながら心苦しかつたが、仕様がないので、引受けて、彼に會ひに行つてその事を話すと、彼はにこ〳〵と微笑を浮かべて、「さうか、何とかしよう。無論、貸すとか何とか言はなくて、進呈することにするよ。ハハハハハ。……が、君、非常に迷惑かも知れないが、二三日中に金をこしらへて君のところ迄持つて行くから、君の手からやつてくれないか。いや、金は僕からといふことでいゝが、會はない方がいゝと思ふから」と言つた。そして直後ではもう別の話に移つて行つた。樂しさうに文學の話をした。彼にさういふ性格のある兩親の家に育つた男だけに、普通の文學志望者のやうに、雜誌に名を出すことに少しも焦らなかつた。だから、殆ど毎日朝から晩まで文學の本を讀んでゐた。そして讀んだことを、青年が女の話でもするやうに、熱心に、嬉しさうに友達に話すのが常であつた。實際、彼は孔子の所謂「色を好むがやうに」文學を好む人であつた。

それから一週間後のこと、僕等、彼の友達が四五人で、彼はその日差支があると言つて來なかつた、女の子が藝者に出るといふ送別會を開いたものである。この送別會は不思議な光景であつた。送別する者は悉く年こそ皆一人前の男の年になつてゐたが、文學などといふものをやる因果で、今だに親の仕送りを受けて、下宿屋で着物の襟に垢をつけて暮してゐる者ばかりであつた。そして皆が皆文學書生一流の屈托ありさうな、陰氣な顔をしてゐた。その中へ送られる者は明後日に迫つた藝者のお披露目の時の晴着を着て、不斷からさうであるが、殊にその日は多少興奮してゐたせゐもあらうが、雲雀のやうに快活に喋つたり飛び廻つたりした。

――『その場面だけでも小説になるね。』と聞手が言葉を狹んだ。

『うむ、なるね。』と話手は言つた、『この話はまだ細目を述べると、幾らも盡きないよ。それにそれだけで終ちやないんだが、長くなるから、この邊で切り上げやう……』

――それから、兎に角、葛見久市が流行性感冒で不意に死んだのは三ヶ月程後のことだつたが、死ぬ半月ほど前に、相當に長いものだよ、珍しく彼が詩を書いてゐるんだ。僕は讀んだがね何の懸値もなしにそれは正に絶唱だよ。別れた女のことが書いてあつた、それは確にあのきの子夫人のことだらうと思ふが、彼はやつぱり怒つてゐたかつた。そして愛は永遠のものだと書いてあつたよ。

――長くなるから、その話はそれで切り上げて、今一人の男といふのは斯うだ。僕がひどく貧乏して困つてゐた時分のことだが、下谷の藝者町の近くの、變な路次の長屋で二階借をしたことがあるんだ。そして飯は晝と晩だけ、近所の天ぷら屋から、辨當に近いやうなものだが、そこから運んでもらつてゐたんだが、その二階が二間になつてゐて、入口は別々になつてゐたが、椽側は共通になつてゐたのである。そこに『笹野屋權三』といふ太鼓持がゐた。

その太鼓持もやはり間貸りをして、食べ物は僕と同じやうに、階下の家で教へられたのであらう。同じ天ぷら屋からの辨當を食つてゐた。夏の終りのことで、僕はなるべく隣室の彼と顏を合はさないやうに、椽に向つた障子は開け放しておいたが、なるべく椽側には出ないやうにしてゐた。が、それでも夕方になつて、風が少なくて、暑くて、而も氣持が退屈でたまらなくなると、椽側に出て彼の方を見ないやうにして欄干にもたれることがあつた。けれども、そこに彼の姿が明らかに見えない時は、僕は安心して、思ふ様彼の方を見るのが常であつた。先づ最も目につくのは彼の側の軒に吊るした、御神燈めいた大きな提灯であつた。それには彼の紋所と見えて、丸に桔梗の紋があつて、その下に『笹野屋權三』といふ藝名が勘亭流で黑々と認めてあるのである。彼はそれに毎日夕方、火を入れる時、カチ〱と縁起を祝ふ

石を打つらしかつた。その時間は大抵定つてゐた。そして僕もその時分には大抵定つて机に向つて讀書に疲れる頃であつた。僕はその時このカチ〳〵といふ音が聞えると、どういふ譯かひどく腹が立つて、屹度アーアと大きな欠伸が出るのである。僕は幾度その『篠野屋權三』の提灯を叩き破つてやらうかといふ癇癪の衝動に襲はれたか知れなかつた。が、後で思ひ合はして見ると、僕自身がさうであるやうに、彼も到頭僕に物を言ひかけなかつたのは、太鼓持としては變つた性質の人物に違ひなかつたのである。

その提灯の下に、彼は籐の寢椅子を置いてゐた。そして彼は家にゐる時の殆どその七八割までの時間をそこに寢轉んで暮してゐた。而も彼は太鼓持の癖に、さうしてゐて、鼻唄一つ口ずさんでゐるのを僕は聞いたことがなかつた。その代りに彼はいつも片手に扇子を持つてゐた。そして絶えずパチ〳〵音はしながらそれを開けたり閉めたりしてゐるのである。僕はその唄一つ口ずさまぬことも、扇子をパチ〳〵鳴らすことも、悉く氣に入らなかつた。それに、いつとなしに見覺えた彼の體格の、でつぷりと太つてゐて、太鼓持流の厭味はないが、隨分まづい顏をした、恐らく額に少し位あばたがあつたかと思ふ、印象は益々何といふ譯もなしに、彼を憎悪させる材料にばかりなつた。どんな風に厭だつたのか、それは言へない、が、恐らく陰險な印象を與へる男には違ひなかつた。

さて、前後の事情から察しると、彼は僕たちのところへ始終食事の辨當を運んで來る、お島といふ天ぷら屋の女中に大分好意を寄せてゐるらしかつた。隨分物言はずの方で、稀に階下のお上などと話をしてゐるのを聞くと、支配人か官吏のやうな妙に重々しい口の聞き方をする男だつたが、このお島に物言ふ時だけは變に四十男のやに下つたやうな口調に聞えた。そして、妙に聲音を顫へるやうな、ぼそ〳〵した低聲で言ふのである。が、お島の「まあ、うまい事を、」とか「お人が違ひますよ、」とか、「私、あなたのことはようく存じて居りますよ、」とか、「又あんな御冗談を……」といふ

やうな客に徴しても、略々彼の話してゐることが想像がつくのであつた。

ところが、その時分の僕と來たら、その太鼓持の樣三の又二倍も物言はずだつた。お島が飯を運んで來てくれると、「有難う」とか、それから客になつたのを取りに來てくれる時には「御馳走樣」とか、その外には暑い寒いの挨拶さへしたことはなかつた。が、段々お島が馴れて來ると、彼女の方からは「今日は隨分暑うございましたね、」とか「もう大分秋らしい時候になりましたね、」とか言ふやうになつた。が、僕はそれにも、唯「えゝ、」とか、「さうです、」とか答へ月る切りであつた。

すると、これは何も僕の自惚れぢやないんだ。もつとも惚れたとか何とか言ふんぢやないんだらう、ね、そのお島が半月もするうちに次第に僕に好意を寄せ出したんだ。お島といふのはもう二十五六歲だつたかね、恐らく出戻りの女だらうと思へるが、少し鼻が低かつたが決して惡い縹緻ぢやなかつたよ。それで別にあばずれた女かと言ふと、さうでもなささうなのである。が、よく世間にある、片方が少し音無し過ぎる男だから、實際は可成り擦れつからし者だつたのに、その男に對する時には擦れつからし以前の態度に無意識に戻る、といふやうなものだつたかも知れない。さて、彼女は今迄のやうに、家から辨當を運んで來ても、直に歸らないで、お給仕して行つて上げませう、お一人では不自由でせう、私の御給仕ではお氣に入らないでせうが、是非させて下さい、と言つたやうな調子で坐り込んで、色々雜談をして行くんだ、又持つて來た時には何かの都合で直歸つてしまふと、取りに來た時に坐り込んで行くんだ。

まあ、それに僕はそんなに厭でもなかつたが、監獄の差入物見たいに、辨當を持つて來て、取りに來て、而も彼の方が古い馴染であるのに、「暑いね今日は、」「えゝ、」「少し位坐つて行つても罰は當るまい、」「忙しいわ、」といふやうな調子はまだいゝとして、その相手の女に新來の書生坊の僕のやうな者のところで、遠慮もなくべちや〳〵喋つて行かれ

ては、如何に無野單權三でも不愉快に思つたに違ひない。

「あんまり、」と僕はそつと隣室を指差して、「惡いぢやないですか？」と彼女に小聲で注意すると、

「いゝんですよ、」とお鳥は小聲だが、可成り鋭い調子で、「あんないけ好かない人！……人氣のない太鼓持！」と叫んだ。

その頃から、明らかに彼は今迄の無口の外に、不機嫌な樣子を見せ出した。だが、彼は決してそれを言葉では發表しなかつた。彼は僕のところにお鳥が坐り込んでゐると、屢々大きな音を發する、不機嫌らしい咳拂ひをしたり、例の椽側の籐椅子に、これ迄は一度寢轉んだら、それ切り一時間でも二時間でも動かなかつたのに、幾度も幾度も激しい音を立てゝ起き上つたり、又寢轉んだり、めき〳〵と疊の上を音さして步き廻つたり、提灯に火を入れる時、氣狂のやうにいつ迄もカチ〳〵カチ〳〵と火打石を鳴らしたりするのである。

彼に就いて、もう一つ僕の氣がついたことは、さうして彼と僕とが隣同志に住居してゐた間に、彼を尋ねて客といふ者が殆ど來たことがないことであつた。唯二度ばかり女の客が來たことがあつた。その女に就いて、僕は後でお鳥から聞いたのであるが……。

兎に角、一ケ月程して、彼は僕の隣から引越して行つた。言ふ迄もなく、それは隣室にゐる僕が氣に入らないのと、更にお鳥が僕の部屋に來て仲よささうに話して行くことと、要するに僕が彼を何の理由もなしにひどく嫌つたやうに、彼も亦僕を甚だ蟲の好かない奴だと思つてゐたのに違ひない、その上に、彼の場合では僕を嫌ふ理由が後から後からと出來て來たので、彼の方から逃げ出して行つたのである。彼の引越して行く荷物と入れ違ひに天ぷら屋のお鳥がやつて來たので、少々氣の毒にも思ひ、何となく彼に對して氣が咎めてゐた僕は、

「權三さん、何處へ引越したんだらう？」と彼女に聞いて見た。

「あんな奴、何處へ行くもんですか、」とお島は少しも辟易する様子はなく、「どうせこの色街から離れることは出來ないでせうから、この近くですよ。」

そして、僕が彼の身の上を聞いたのはその翌日のことであつた。やはりお島からである。お島はそれを男の中の滓のやうに、出來るだけの輕蔑の言葉をもつて話したのであつた。言ふには――笹野屋權三は前身は或酒問屋の支配人であつた。その問屋の主人が嫁をもらつたところが、一年程して彼女が嫁入つて來る前に男を知つてゐたといふことが分つたのである。そこで、それ迄は少し他人に遠慮がなさ過ぎると非難された程可愛がつてゐた主人は、それを聞くとがらりと變つて、忽ち鬼のやうに新妻を虐待し始めた、ところが、そのうちに店の番頭とその新妻とがどうとかしたといふ噂が立つたので、主人は堪らなくなつて、彼女を里に歸す代りに、もつと虐めるつもりで、當時彼の家の通ひ番頭で、つまり支配人の位置にあつた四十歳の權三の家に、殆ど半分座敷牢のやうなものを作らして、預けたのであつた。ところが、彼女が主人の家に嫁に來た時から、年中妻もなく最も彼女に魅せられたのは、權三なのであつた。が、無論、權三はそんな事は誰にも言はなかつた、彼は蓄財家で、三十歳の時妻をもらつたことがあつたが、もらつて間もなく病氣になられて、二年餘りの間病院に奉公して、そして亡くなられたので、その後、人にすゝめられる毎に、家内なんてもらつたら乞食になります、と口癖のやうに言つて應じなかつた、だから、當時彼は一人者だつたのである。

主人は權三に不貞な妻を預けて、月々ほんの食扶持の外、小遣などはわざと遣らなかつた。が、權三の家に預けられてゐる彼女はそれを知らなかつた程、月々相當な小遣錢を主人からとして權三から受取つてゐた、その上、人目に付かない範圍では、時々外出さへしてゐた。それが後で分つたのであるが、悉く權三が獨斷で、而も小遣錢などは彼が自腹を

切つて、主人からとして彼女に渡してゐたのである。

さういふことが二年程つゞいてゐたが、それが誰からとなしに主人の耳に這入つたのである。無論、權三とその預けられた主人の妻との間には何の關係などはなかつた。寧ろ人の噂では、權三に許されて彼女は時々外出した時、色々な男と接觸したといふことであつた。さて、主人は權三に、お前はそんなにあの女が好きか、と尋ねた。「はい、」と權三は答へた。「では、俺がやると言つたら、お前は細君に貰ふか？」「いたゞきます、」と權三は答へた。そして彼は主人から彼女をもらつて結婚したのである。

それから六年とかの月日が經つたのである。その間に、彼は先づ細君から脅迫されて、親の代から勤めて來た酒屋の支配人の職を辭した。或時は又、彼女は突然藝者になりたいと言ひ出して、彼女が藝者になつてゐる間、彼はそれも彼女の提議で郊外に半年ばかり婆やを置いて一人住居してゐたこともあつた。それから又彼女はカフエーを始めたいと言ひ出した。その時は、彼はそのカフエーの主人でありながら、表から出入することを許されなかつた、又店の間に顏を出すことも許されなかつた。彼女は出來るだけ年若く化粧して、置いた女給仕などと交つて客の席に出た。「私、亭主なんかあるもんですか、そんなものがあつたら、どうしてこんな事をさしておくもんですか？　私、××××でもしてよ。」とか、「今度の日曜にみんなで行きませうか。えゝ、土曜からでもいゝわ、そして一晩泊つて來るのも面白いわね、」とか或ひは彼女に眞劍に惚れてゐるらしい二三人の客が、一人づゝ成るべく客の少ない頃を見計らつてやつて來た時など、彼女は客を店の隅の方の、然し奥の間に最も近い所に腰かけさして、ひそ〳〵聲で、「えゝ、行つてもいゝわ、」とか、「夜十一時過なら行くわ、」とか――さういふ話を夫の笹野屋權三は咳拂ひ一つしないで、壁一重奥の間で聞いてゐなければならぬのである。そして或日、到頭彼女は少なからぬ金を持出して、大學生と駈落をしてしまつたのである。

彼は仕樣がないので、カフェーの後を始末して、以前彼女が藝者をしてゐて、彼が一人で暮した時に使つた婆やを探し出して、郊外の小さな借家に細々と暮してゐると、半年ほど後、何處からともなく驅落して逃げた女がふらりと歸つて來た。「よく歸つて來たね、」と彼は言つた。「私、これから半年ほど寢て暮すわ。あなた、養つてくれて？」と彼女は言つた。「その位の金はまだあるよ、」と彼は言つた。「いやよ、」と彼女は少女のやうなもの言ひ方をして、「あなた、自分で働いたお金で私を食べさしてくれるんでなければいや！」それから色々あつて、「あなた、」と彼女が言ふには、「あなたは藝事は何でも出來るわね、三味線でも、踊でも、そして上手だわ。あなた、太鼓持にならない？　私、あの商賣が好きで好きで仕樣がないの。あなた、是非太鼓持になつてくれない、そして私を養つてくれない？」「まさか、」と彼は言つた。「まさか、ぢやなくつてよ。屹度よ。私、あなたが太鼓持になつてくれないんだつたら、つまんないから何處かへ行つちまほう。女一人ぐらゐ、何處へ行つたつて養つてくれる人はあつてよ。」等、等、等。

そして、結局彼が負けて、郊外の家に女と婆やとを殘して、彼だけがそんな長家の二階を借りて、太鼓持になつた譯であつた。彼は僕が會つた時分は、もう太鼓持になつてから一年以上になるといふのであつた。彼はその郊外の自分の家に、月に一度以上歸ることを許されなかつた。その代り女の方からは二三度彼を尋ねるといふ約束になつてゐたのであつた。だが、僕は別に立ち聞きした譯ではないが、（その女だよ、僕と隣同志にゐた時、二度程尋ねて來た女といふのは）、彼女がやつて來ても、決して隣の獨身者を羨ませるやうな會話をしてゐなかつたやうに思ふ。もつともさういふ彼の身の上を聞いたのは、彼が引越して行つてからのことだつたからだが、もし前から聞いてゐたのだつたら、女が尋ねて來た時にもう少し注意して、聞耳ぐらゐ立てゝゐたかも知れない。

が、兎に角、僕はその話を、お島の口から男の中の一番滓のやうに、出來るだけ輕蔑した口調で聞かされたのだが、

それ以來急に彼に對して今迄と反對の感じを持つやうになつた。僕は妙にセンチメンタルになつて、もし彼の居所が分つたら、彼を尋ねて、そして今迄彼の氣持を悪くしたことをあやまりに行きたい、といふやうな氣にさへなつた。と、彼が引越してから四五日後の或夕方のことであつた、僕は今はもう誰に遠慮もなく、而もその日町に出た時に古道具屋から買つて來た一脚の椅子を椽側に持出して、秋の夕方を樂んでゐたのであつた。前にも言つたやうに僕の住んでゐたのは或長家の一隅であつた、ところが、僕たちの長家と背中合せの位置に、並行して又別の長家があつた、その長家と長家との間は、各々の長家が持つてゐる深さ半間に足りない庭――といふよりも空地を隔てゝゐる切りであつた。だから、僕の椽側に立つと、向ふ側の長家の椽側は左右に五軒以上のそれが見透かせるのである、

そして、その時、僕は僕の部屋の前から、向つて右の方の四軒程向ふの家の二階の椽側に、圖らずも僕の目を引いたものに出會つたのである。一瞬間、僕はおや、見たものだな、と心の中で思つて、一瞬間後に直氣が付いたのである、それは笹野屋權三の御神燈めいた提灯なのである。見ると、その時權三はカチ〳〵と緣喜の火打石を打つて、さて、提灯に向つて一寸合掌する姿勢を取つてゐた。彼は僕が此方から見てゐるのを知らないらしかつた。カチ〳〵と石を打つことは知つてゐるが、提灯に向つて彼が合掌することは、隣にゐた時には僕の知らなかつた光景である。そして、それは彼の身の上話を聞いた後のことであつたから、今迄の正反對に一層彼に好意を感じさせた、僕はぢつと彼の方を見てゐた。例の籐椅子も置いてあるのである。

が、次の瞬間、彼はふと僕の方を見た、そして二人の目が突き當つたのである。すると、僕は無意識にその方に向つてお辭儀をした。と、それは本當に瞬間の瞬間の感じであるが、彼は僕と目が合ふと、忽ち敵意を持つてつと顔を反らしさうにした。が、その時僕がお辭儀をしたのであつた。彼はあわてゝ、僕の三倍も叮嚀にお辭儀を返したのである。

——『いゝな、』と聞手の小說家は叫んだ。

『が、少しお話見たいだな、』と第二の聞手が言つた

『いや、本當だよ、本當の話だよ、』と話手は狼狽したやうに言つた。

——まあ、大體こんな話だがね。それから又もう五年も經つが、何でも人の傳へるところに依ると、それは又思はぬ人間から僕はその男と女との話を聞いたのだが、あれから半年程して、女は又誰かと駈落してしまつたんださうだ。で、權三はそれ切り太鼓持の業を止めて、何でも甲州とかど鄕里ださうだが、國に歸つて毎日寢てゐたさうだよ。ところが、去年ださうだが、女が又東京に姿を現したさうだが、今度は流石に權三の行方は分つても歸つて行けなかつたんださうだ、それを或男が仲に這入つて、女を連れて遙々甲州まであやまりに出かけて行つたさうだ。

ところが、權三は大喜びで無條件で女を入れて、今では甲府の町で酒屋をやつてゐるさうだ、そして女も落着いて一生懸命に働いてゐるさうだ。その話を傳へた男の話に、今度こそ本當に落着いたらしい、もうその女の樣子を見ても、以前にそんな不しだらな事をした女だとは、幾ら聞いてゐても、信用が出來ない位だと言つた。權三もひどく滿足してゐる樣子だ。

——『僕の始の考では、』と最後に話手は言つた『前の葛見久市の話と、この笹野屋權三の話とを一緒にしてしまふつもりだつたんだ。つまり久市が細君に逃げられて、憂さ晴らしに二階借りをすることになつて、そしてその隣室に笹野屋權三を配合しようと思つたのだ。いつその事、權三の細君と、久市の細君とを同じ女にして、そしてこの二人を結び付けようかとも計畫したんだ。一ケ月もそればかり工夫したら、何とかなるだらうが、斯う締切期日が迫つてしまつては、氣ばかり苛々して、どうにも仕樣がないよ。何かいゝ智惠はないかね？……まあ、しかし、それは後の相談にして、今度

は君のを話してくれ給へ。……』

その二

『僕のはたゞの旅行話だよ。』と第二の小說家が始めた。——

四五人の連中で長崎まで行つて、それからぶら〳〵と方々に立寄りながら東京に歸つて來ようといふ豫定だつたのだ。ところが、中に講演好きのO——がゐたので、旅行の前に大阪の新聞社に講演をしたいから、宜しく賴むといふやうな手紙を出してあつたものだから、仕樣がないから長崎と、熊本と、福岡といふ風に、講演といふと少し恥かしいが、まあお話のやうなことを三四人で三四十分づゝ受持つて、お茶を濁したといふやうな譯だつた。もつとも、僕は去年昔の同人雜誌關係の人たちと一緒に、場所は違ふが、同じ九州地方を講演旅行と稱して廻つたことはあるがね。ところが、最後に一つだけ、去年行つたのと同じ場所で講演することになつたのだ、それは小倉でだ。

あそこには黎明會と言つて、地方によくある靑年會といつたやうなものゝ、少し高尙な團體があるんだ、その中に運動部とか、辯論部とか、文藝部とかいふものがあつて、それで文藝講演會などといふと、必ずその會が主催者になつて、色々の世話をするといふ仕掛になつてゐるらしいのだ。丁度僕たちの一行が、福岡にゐた時に、その黎明會の幹事と名乘る男がやつて來て、是非やつてくれといふ事で、では何日の何時に何處で、といふやうな事を打合してから、さて、講演會の方はそんな風にお願ひする事としまして、これは又別のお願ひだが、こゝに森崎といふ非常に文藝好きな實業家があるが、その人が小倉の郊外の海濱の別莊に、どうか一日でも半日でもお招きしたいが、來ていたゞけないだらうか、と言ふのである。

元々氣輕な連中のことだし、旅のことだし、別段はつきりした豫定がある譯ではなかつたが、何といふ譯もなく、みんながその招待を受けることに氣が乘らない樣子だつた。もつとも、その前の日に定めた一行の豫定としては、福岡から下關に行つて、そこに僕たちが去年來た時に馴染になつた宿屋があるので、そこを二三日の根據地にして、小倉の講演會にもそこから出かけることになつてゐたのだ。それに講演會は午後一時から四時過までだといふし、それが濟むと會の人たちと夕飯を食べることになつてゐたし、だから、その森崎實業家の招待を受けるとすると、午前十時頃に出かけてそこで昼飯の御馳走になるといふことになるのである。とすると、下關に泊ることになつてゐる僕たちは、下關を遲くとも八時迄に出なければならない、朝のうちに毎日の新聞の小説を書かねばならぬ者もあるし、又大體朝寢坊ぞろひのことでもあるし、要するに、その招待には、折角の好意は有難いが、受け兼ねると斷つたのである。

その黎明會の幹事と交渉する役が僕に當つたのであるが、彼は僕たちが福岡を立つて下關に向ふ汽車の中でも、小倉へ歸るからと言つて一緒だつた。そして、そこでも僕をつかまへて、何とか、御都合がつかないだらうかと追求するのである。僕は無論一同の意見として、一度斷つたのであるから、それ以上話のしようもなかつたのであるが、話のついでに、「その森崎といふ實業家は、一體幾歳ぐらゐになる人ですか?」と聞いて見た。「その人はつまり本當の實業家の息子に當る人で、もつともお父さんといふ方は大阪に居られて、こちらにはその人の家族が住んで居られるだけですが、多分今年三十歳です。」と黎明會は答へた。

三十歳といふと、――と僕はゴロ〳〵走つてゐる汽車の中でぼんやりと考へた。僕たちの仲間の人でいふと、佐藤春夫、芥川龍之介などといふ小説家と同じ年で、辰の九紫である。春夫や龍之介は僕も多少の交際はあつて知つてゐるが、中々ハイカラ型の人たちである、小説家であり、友達であるところの辰の九紫の星の男は中々賴もしくて、嬉しいが、

實業家なんかの同年の男は、少しハイカラ過ぎて、初對面なんかの時に、殊にさういふ突然の招待など受けて會つた時には、少々閉口者ぢやないかな？——などとつまらないことを考へた。

ところが、その翌日、下關から出かけて行つて、小倉の公會堂で講演會の開かれてゐた時、昨日の黎明會の幹事に連れられて、背の高い、鼻の高い一人のハイカラ紳士が講師室に現れたのである。それが森崎實業家であつた。そこで僕たちは一人づゝ紹介されたが、思ひの外、すつきりした、感じの惡くない人物であつた。さて、黎明會が代表して云ふには、今日講演會は多分四時過に終るかと思ひます、すると夕餐の時間を七時としまして、さつと三時間程時間がありますので、その間にお繰り合はせ下さいまして、決して御飯をさし上げるとか、何にとか、さういふ御迷惑はかけませんから、森崎さんの別莊までほんのお茶でも飲みに入らしつていたゞけませんでせうか、と云ふのである。今度は、しかし、その本尊の森崎といふ人をも見てゐるし、さう感じも惡くなかつたので、快く受けることにしたのである。

で、講演會が濟むと、僕たちは森崎氏に連れられて、小倉の町を橫斷してゐる電車に二十分ばかり搖られたところで、こゝです、と言はれて下りた。十町程小倉の町を出外れたところで直右手に海岸が迫つてゐて、松の木が澤山植はつてゐた。「私の家はあれです、あの赤い屋根の家です、」と森崎氏が電車の中から指差して敎へてくれた家は、電車を下りたところからは見えなかつた。が、下りて一二町行つた邊のとある道の角に『森崎何某所有地』といふ立札が立つてゐたあたりから、歩いてゐる小路にしても、小路の兩側の並木の有様にしても、兩側の野原の景色にしても、成る程赤い屋根の家の持主の土地だけに、中々ハイカラな風景であつた。

「家ですか。なアに、何から何までみんな手製でして、私が道樂に繪圖を引いて、無茶苦茶にこしらへて見たんです、」と森崎氏はよく似合ふ洋服姿で、右手で洋傘を振り振り言ふのである。そして大分行つたところで、その奥に住居があ

るらしい感じのする、山道にさしかゝつた。果して、幾曲りかうねつた山路を歩いた突當りに、石造の中々工夫を凝らした門があつた。門の前には一ぱい砂利が敷いてあつて、言ひ忘れたが、その門に行く道の兩側には、どの邊からだつたか、人造石の欄干がつゞいてゐた。言ふ迄もなく、門の中はそれに匹敵するだけの、又一層工夫を凝らしたものであつた。赤い屋根の家は門を這入つた直左手に建つてゐた。

「さあ、ずつと奥へ、」と主人は先に立つて歩いて行くのである、人造の池があつて、そこから流れる川があつて、川には石の橋もかゝつてゐるのである、そこで又別の日本式の門をくゞると、正面に手の込んだ四阿のやうなものがあつて、その前の一寸した廣場には大きな卓子が二つ並べてあつた、卓子の前後左右には十脚に近い椅子も配置されてあつた。「さあ、どうぞお掛け下さい。さあ、御遠慮なく上衣を、羽織をお取り下さい、」といふ主人の言葉の下に、いつの間に來たのか、二人の女中が僕たちの上着や羽織を脱がしてくれるのである。そこへ又、いつの間に現れたのか、四歳位の赤ン坊の手を引いた、二十二三歳の素的に美しい夫人が現れて、「皆さん、よく入らしつて下さいました、」「私の家内でございます。坊や、先生方ですよ、お辭儀をなさい、」「坊や、をぢ樣方に御挨拶なさい。どうぞ皆樣、何にもお愛想はございませんけど、お樂になすつて下さいまし。」

それは丁度後が山になつてゐて、前が切岸で、切岸の下は海になつてゐた、海は關門海峽なのである。そして前にも後にも大小の松の木が林のやうに立つてゐるのである。その松の木の一本にもたれて、

「この間僕たちの船は、直この前を通つた譯だね、」と誰かゞ言つた。

「さういへばこの家の赤い屋根が、船の中から見えたやうに思ふね、」と第二の誰かゞ言つた。

「いや、午後になると光線の具合で見えませんが、午前だと船の中からはつきりこちらが見える筈です、」と主人が説明

した。「この間も實は從兄弟が佛蘭西に行くので、その船がこゝを通る時に、送別の間にこの山の上に旗や手巾を洗濯屋のやうに立てゝやつたのですが、うつかりしてゐまして、それが午後だつたものですから、無駄になつてしまひました。……これは內所ですが、こゝから少しいゝ眼鏡で見てゐますと、船の中で人が食堂でフォークを使つてゐるの迄見えますよ。」

その時、又いつの間に現れたのが、僕たちの卓子の傍に、羽織袴で、眞白な髯を胸まで生やした一人の老人が、現れたのである。

「畑山先生です、」と彼は僕たちを老人に紹介した。老人は立上つて、膝の上まで手を　ろして、僕たちにお辭儀をした。

「畑山先生は、」と更に主人が紹介して言ふには、「今日殘つて居られる舊小倉藩士の、唯一人の方です。今日先生方に折角來ていたゞきましても、私はまだ此邊のことを十分よく知りませんし、例へばこの向ふに見える島は何といふ島かとか、あそこには漁師が何人住んでゐるかとか、あの島には人間が住んでゐるかゐないかとか、さういふ御質問に接しましても十分のお答が出來ないことを恐れまして、畑山先生に來ていたゞいたのです。先生は明治維新の時には、鐵砲や刀を持つて、この邊を駈け廻られた方です。先生、あそこの大きな島の影に見えるのは、何とか言ふ島でしたつけね？」

「あれですか、」と畑山先生は、七十八歲にしては耳も目も少しも若者と變らない達者さで、「あれは斧島と申しまして、この小倉藩の者が最後にはあそこに逃げ込んで、そして飽く迄奮戰するつもりに定めてゐたところです。あの島はこゝから海上三里と申しますが、潮に乘つて、上手に漕ぎ出しましたら、半時間と掛らないで行けるところです。」

「この向ふの岬は何とか言ひましたね？」

「あれですか、あれは鶴の崎と言ひます。日清戰爭の時でも、日露戰爭の時でも、あそこの灣は小さい灣ですが、水が深いものですから、隨分役に立つたところです。あそこでは……」

その時、主人は美しい夫人の方をかへり見て、「おい、あの畑山先生に書いていたゞいたものを持つて來たか？」と聞いた。

「えゝ、」と彼女は答へて、懐から半紙一帖ほどを綴ぢたものに、墨と朱とで何か認めたものを夫の主人に渡した。それを彼は僕たちの方に、卓子の上に置いて言ふには、

「これは畑山先生にお頼みして、この邊の地理と歴史とを調べて、書いていたゞいたのです。ひよつとすると、今日先生はお差支へがあつて、お出でになられなかつたかも知れませんでしたので、その時の爲に書いていたゞいておいたのです。」

僕たちは卓子の上に山のやうに積み上げられた西洋菓子や、菓物や、お茶や珈琲をすゝりながら、その畑山先生の文章を順々に見ながら廻した。が、誰もそれを二頁以上讀みつゞけないで、後は少しゆつくりした繰り方で、一應頁だけを最後まで繰つて、「はあ、はあ、」と意味のない感嘆詞と共に、次から次に廻し合つた。(もつとも、何かの參考にと、僕はそれを貰つて來てあるがね。無論、明治初年の文章だよ。それで、主にその森崎家の所有の山なり、土地なりの地理上歴史上の沿革といつたやうなものを綴つてあるのだ。)畑山先生は、その邊の地理や歴史を話す時の外は、殆ど無駄口一つきかずに、もう年代物らしい、しかし折目のついた袴の上に手を置いて、默つて腰かけてゐた。僕たちの中の大部分のものは、あちらこちらを散歩したり、勝手な冗談を云ひ合つたり、結局餘り畑山先生の話に耳を傾けようとはしないのである。」

その内に、いつの間にか姿の見えなかつた、例の美しい夫人が、着物を着更へて、恐らく化粧をし直して、僕たちのところへやつて來て、主人に向つて「あの彼方に仕度が出來ましたから。どうぞ入らしつて下さいますように、」と言つた。

「さうか、」と主人に言つた。「いや、一寸待つてくれ。その前に一寸山の上に先生方を御案内して、それから行くから。……あの、この山の上の方に御案内いたします。」と僕たちに向つて言つた。「斯ういふ所で立話で誠に失禮ですが、」と彼は何を思つたのか、ふと山に上る路の傍に立止まつて、僕たちのまん中に這入つて言ふには、「私が今日先生方に御無理を申して、わざ／＼來ていたゞきましたのは、別に何の譯があるのではございませんが、元私は建築業者でございまして、もつとも今でもさうでございますが、私はこれ迄三十何年の間、唯營利といふこと一方に生きて來た人間でございます。私は至つて無教育者で、學校なども一つとして卒業したものはございません。私の親父は變な嚴格な男で、私は子供の時分人の家に小僧奉公にやられたことさへあります。が、その時分から、私は外のことは何にも考へたことがありませんが、私は車に乘つて走つてゐる人を見ると、私も早く車に乘りたいと思ひました、私は葉卷を吸ひたいと思ひました、私は自働車に乘りたいと思ひました。そして私は二十幾歳の時までぶら／＼してゐましたが、商業の普通の智識位は是非得ておかねばならぬと思ひまして、夜學の商業學校に這入りました、それからせめて英語だけは知つておかなければならぬと思ひまして、これも夜學の英語學校に這入りました、それから私は建築師になるにしても、西洋の智識を得ておかねばならぬと思つて、外國へも行つて來ました。……

「私は大阿黎明會の人とは、今度始めて會つたやうな譯なのです、」と森崎氏の話はつゞくのである。「去年やはり小倉の町に先生方の講演會がありました時、私は是非伺ひたいと思つてゐたんですが、どうしても拔けられない用事がありましたので、家内をやつたのです、そして家内に先生方がどんなお話をなさるか、よく聽いて覺えて來い、と言つたんで

すが、女なんか直に忘れてしまひましてね。ところが今年です、又先生方の講演のことが新聞に出てゐましたので、それが黎明會の主催といふことですから、私は黎明會といふのはどんなものか、先生方に講演などをお頼み出來るやうな勢力のあるものか、と思ひまして、それで實は私が三四日前に出かけて行きまして、そして色々話を聞いて、それでは是非おついでに先生方に私の方にお立寄り願へないか、と斯ういふことになつたのでございます。……

「私は今も申し上げました通り、仕事としては營利一方のことをして居りますけれども、それと共に、全然利害を離れたことをして見たくてたまらないのでございます。それは文學に限りません、音樂でも、演藝でも、何でもかまはないのです。が、私のやうなものがそんな事を考へましても、唯考へるだけのことで、何の傳手もないのですから、これは今度のやうな機會に、先生方にお目に掛つて、是非先生方に私の考のあるところを聞いていたゞいて、どうかして五年後でも宜しい、或ひは十年後でも宜しい、せめて希望の一端をでも實現したいと思つてゐるのでございます。……いや、變なところで、立話をして失禮しました。さあ、どうぞ……」と言つて、彼は僕たちの先に立つてどん〳〵歩き出した。道は段々上りになつて、山を上るのである、畑山老人は一行の一番後から、よち〳〵と上つて來るのである。

「私はこの山の上に、ほんのいたづらですが、野外劇場を計畫してゐるのです。で、是非御迷惑でも先生方に見ていたゞいて、お教へを乞ひたいと思つて、これから御案内申し上げるのですが……」と主人は言ひながら、山の中頃に來たところで、變な半圓形の石造の腰掛のやうなものゝ前に出た。「これはまだ未成品ですが、これもその一端で、この上に傘を立てかけて、」と立つて、くど〳〵と說明を始めた。

こんな風に話してゐると、餘り長くなるから、詳しいことは、それを小說に書きたいと思つてゐるんだが、さて、山の上は可成りの廣場になつてゐて、そこには白ペンキ塗りの木造だが、何か西洋の雜誌の口繪でも見て、根が建築師だ

もんだから、器用にこしらへたんだね、一寸した樂屋もあれば、物置には二三百の輕便腰掛もあれば、そしそれ等の建物は言ふに及ばず、見物席に當る芝生の要所要所にも、スヰツチを一つひねりさへすれば、立所に電燈がつくやうな仕掛になつてゐるんだ。野外劇場としては、隨分色々な缺點を數へることも出來ようが、兎に角、あゝいふものは廣い日本中を探しても唯一のものだらうと思ふ。彼は屢々「まだほんの未成品ですが、どうぞ先生方の御指導をえて、悪い所は段々に直して行きたいと思ひますし、そして、いつでも、たとへ五年後でも、十年後でも、お役に立ちさへすれば使つていたゞきたいと思ひまして……」と言ふのである。

實際、それは誰かゞ使はなければ、その森崎一家の人たちでは、主人から女中まで總出でやつても、無論やれない事はないだらうが、殆ど無用のものに違ひなかつた。僕たちには、彼がどういふつもりで、そんなものを建てたのか、殆ど解することが出來ないとさへ思へるのである。然し、彼は本當に誰かに、五年後でも、十年後でも使つてくれる人があつたら、大いに使つてもらひたいと思つて建てたのだらうが、何にしてもその道樂の計畫の遠大なことに、僕たちは一寸呆然としたね。

「あの、アイスクリームが溶けてしまひますので……」とその時美しい夫人が山の上り口のところから半分姿を現して、新派の女役者のやうな聲で夫に言つた。

「さうか、ぢや、あそこの卓子のところへ持つて來てくれ。」と主人は言つた。「さあ、皆さん、どうぞあの芝生のまん中の卓子のところへ！」

それは先にも言つたやうに、山の頂のことなので、松の木越しに、右手に海、左手に畑、森、山などが、一望の下に見渡かせた。僕たちはそこで、成る程、大方溶けかゝつたアイスクリームの御馳走になつた。海の方から誠に涼しい風

が吹いて來るのである。

「いゝ所ですな。」と誰かゞ言つた。

「いゝえ、つまらない所ですが。」と主人は言つた。「唯、涼しいだけが取柄でして……」――段々氣が付いたのであるが、未成品とか、取柄とか言ふ言葉が癖と見えて、この人はそれを前後十數度使つた。

「寫眞を寫したいな。」と誰かゞ言つた。

「おい、寫眞屋を呼んで來い！」と主人はそこに立つてゐた女中に叫んだ。

「いや、冗談ですよ、それには及びません。」と誰かゞあわてゝ取消すと、

「いゝえ、寫眞師は私の家に使つて居りますので。」と主人は言つた。「機械も三つ四つ備へてございますから、どうぞお使ひ下さいませ。直に現象もさせますから。いゝえ、さういふものは、皆様に、來ていたゞいた方に、御自由に、使つていたゞきたいと思ひまして置いてあるのでございますから……」

やがて、寫眞屋がやつて來て、そこで紀念の撮影をしてから、一同は山を下りて、始めて赤い屋根の家の中に案内された。

「この家も、家は粗末ですが、愈よ建てます前に、私は一年間テントを張つて暮して居りました。そして四季の日當りと、風の吹き具合を研究してから建てましたもので、まあそれだけが取柄でございます。」と主人は言つた。

流石に家の中は卓子から椅子から、敷物から置物から、暖爐、扇風器、本箱、ピアノ、悉く備はつてゐた。

「どうです、先生方、お湯が丁度沸きましたやうですから。」と主人は言つた。「いや、またお約束の時間まで一時間程あるやうですから、いえ、御飯に遠慮して差上げませんけど、どうかお湯にお這入り下さいませ。汚い湯殿ですが、汗だ

けは流せますのが取柄で……」

そして、僕たちは何度も辭退したが、到頭順々に二三人づゝでお湯に這入ることになつた。湯から上つて來ると、宿屋のやうに浴衣が一人一人の爲にそろへてあつて、「どうか、お召し下さい。」とここでも主人が來て言つた。「惡いものですが、洗濯だけは十分にさしてございますから、えゝ、惡いんですが、それが取柄で……。」

僕が湯から上つて來た時、客間ではピアノがベエトオベンの『月光曲』を奏してゐた。來て見ると、森崎夫人が、ピアノの前に腰かけて、兩手で叩く代りに鍵板の下の方にある止まり木のやうなものを確かり摑んで、美しい顏にだく／＼汗を掻きながら足踏みをしてゐた。「これはどういふんです？」と僕が傍にゐた主人に聞くと、

「いえ、これは」と彼はそこらにあつた大きな卷紙のやうなものを見せて、「自動ピアノなんです。これを機械の中に仕掛けて、唯あゝして踏んでゐると、月光の曲であらうが、第九シムフオニーであらうが、何でもやり出すんです。しかし、これは兩方に使へるやうになつてゐまして、普通に叩いてもやれるんです。いや、私たちの家では誰も出來ないのですが、これも誰か先生方がお出で下すつた時に、存分にお慰みに使つていただきませうと思ひまして……」

そのうちにも、卷紙に仕込まれたベエトオベンは、美しい夫人の足踏に依つて進行しつゝあつた。そこへ、後から湯に這つた連中も、それ／＼浴衣を着て出て來た。そして、『月光曲』が終るのを待つて、

「いえ、決してもう、先生方のお言葉がありましたから、御飯をさし上げるのぢやありません。さあどうぞ、」と主人に案内されて、隣の部屋に行くと、そこには長い卓子の上に、サンドヰッチと、洋酒との用意がされてあつた。そして、席に着いた時、僕はふと氣が付いて、

「畑山先生はどうなすつたのです？」と主人に聞くと、

「えゝ、さつきお歸りになりました。」と彼は言つた。「さあ、何にもございませんが、酒だけは明治屋に此間參りました時、あそこの店にあるだけの種類を、見本のやうに悉く取つて來たのです。」

「さあ、どうぞ、」と夫人も夫に負けずに、客たちの間を、御馳走の斡旋に廻つた。

そのうちに黎明會との約束の七時も過ぎてしまつたので、僕たちは別れて歸ることになつた。すると、主人は何と思つたのか、「御迷惑でせうが、どうか、此方からお歸り下さい、御案内いたしますから、」と言つて、再び僕たちを野外劇場の山の方に連れて行つた。もう八時に近かつたので、海も山も大抵暮れ切つてゐた。その中に、野外劇場の建物と、この周圍の廣場の、或ひは松の木の枝や、或ひは特別に立てた柱の尖は、そのありたけ電燈を輝かしてゐるのである。

「成る程、これは中々立派ですな、」と誰かゞ感心したやうに言ふと、「いえ、まだほんの未成品でございます、」と主人は先に立つて歩きながら言つた。「ですが、先生、この舞臺のところの光線はこんな風で貧しいでせうか？」「これはやつぱり隱し電燈にした方がいゝでせうな。これでは少し見物の目を疲れさすだらうと思ひます。」「成る程、成る程、」そして僕たちは赤い屋根の家の方へではない、別の小さな門のところに來た。「これが此方の入口になつてゐるのです。さうです、つまり住宅の方と何の關係もなしに、どん／＼人が這入つて來られるやうに設計したんですが。……いえ、電車のところ迄お送りしませう。」

そこで、僕たちは來た時とは違つた道に依つて山を下りた。來た時には、そんな色々な仕掛のある山とは思はなかつたから、何の氣にも止めなかつたが、今は屢々その山の方を振り返つた。すると、山の上には今何事かが開かれてゐるやうに、きら／＼と滿艦飾のやうに電燈が光つてゐるのである。「あれはいつでも點けて置かれるんですか？」と僕が聞くと、「いえ、さうでもないんです、」と主人は答へた、「この邊は電燈代が不法に高いもんですから。」そして僕たちは電車

の停留所の方に歩いて行つた。

停留所の邊から見ると、大分離れてゐるので、山は大變小さく見えた、そして電燈の光もひどく孤獨に寂しさうに見えるのである。すると、鼻の高い、脊の高い、そのハイカラな洋服姿の主人公も、話し疲れたせゐか、暗い、明りも何もない停留所に僕たちを送つて來て立つてゐる姿が、ひどく悄然として見えた。しかし又、彼は山の方を振り返りながら言つた、「あの山は先の畑山先生の書かれたものにもあります通り、魯山といふんですが、それから私の家を魯山莊といふ名前にしてあるのでございます。私はこれを同じ響の英語に直したいと思つてゐるんですが、是非今度先生方がいらしつて下さつた紀念に、適當な名前を附けていたゞきたいと思ひます。私はRoseといふ字を一字思ひついてるんですが、ローザンですから、ローズ・アンといふアンといふ何かいゝ字がないでせうか？」「なる程、ローズ・アンですか？……」と誰かゞ笑ひながら言つた。「ぢや、いつそ、ことゝ、low-Sun ローサン、低い太陽と付けたらどうです？」「なる程、low-sun 低い太陽……」「それとも Lo sun ロー・サン、見よ太陽……か、」「なる程、Lo sun 見よ太陽……」

その時、どちらを見ても眞暗な野と山との景色の中を、明るい、ランプのやうに見える電車が走つて來た。そして「さよなら、」と僕たちが電車に乘りながら言つた。「さよなら、」と電車の外で彼は帽子をとつて、「next summer には又是非入らしつて下さい、」と言つた。電車の中は可成り明るいのであるが、彼の立つて居るところ迄は洩れた明りが半分しかとゞかないので、彼の顔、姿が活動寫眞の中の人物のやうに見えた。

――『話はこれだけなんだ、が、これを、君、』と話手は最後に言つた。『これを僕たちの方からではなしに、彼等の方から、彼等夫妻の家を中心にして、僕たち數人の客を迎へる一場を小說に書いたら、一寸露西亞の小說めいて、面白いだらうと思ふんだ。……』

その三

『僕のはほんの樂屋落だよ。』と第三の小說家が始めた。

――或小說家があるんだ。彼は小說を書くことを職業にして、それで生活してゐるんだが、それが多分の例に洩れず、中々機械のやうに書けないんだね。毎晩、夜更かしをして、屢々机の前で夜を明かすことさへあるのだが、容易に一箇の小說が出來上らないのだ。自然、起きるのは晝頃になる、客が來る、頭が痛い、苛々する、さて夕方になるのである。彼は堪らなくなつて、籠の小鳥が飛び出すやうに、ステツキを持つて外へ出るのが常であつた。

それで、彼は毎晩ほど行きつけのカフエーに出かけて行くのである。別に遊んだり、樂んだりする氣はないのであるから、藝者遊びに出かけることなどは殆どない。つまり、彼は殆ど何の意志をも持たないやうな狀態に屢々陷るのである、すると、人間は藝者遊びに行くことさへ、最早や大儀に屬するのである。だから、彼は唯ぶら〳〵と町へ出かけるのである、そして行きつけの、餘り給仕女などが客の傍に出て來ないカフエーに這入つて、そこでぼんやりと一時間か二時間か座つて、そして家に歸つて來るのが常であつた、彼は實際、物臭太郎の一つ手前位の狀態にあつたのである。

家庭といふやうなものに對しても、彼は又退屈といふ眼鏡をかけて見る外、何の考も興味も持つことが出來なかつた。いつも同じ顏をして細君が火鉢の向ふ側に坐つてゐて、いつも同じやうな不滿を口に出したり、表情に表はしたり、そして三百六十五日何の變化もないのである。だから、彼は彼女と喧嘩する興味さへ持たなかつた、終には、然しあんまり退屈なので、小說を書くといふ口實に依つて、旅行したり、同じ東京の中で下宿住居をしたり、色々な方法で家庭と離れて見るのであつた。だが、彼の心持は少しも快活にならないのである。そして彼は相變らず徹夜したり、朝寢をし

たり、さて散歩に出たり、カフェーに坐つたり、その外何の變つたこともないのであつた。カフェーの若い給仕女にしても、毎日見馴れて居ると、色氣も、興味も、快さも、何と感じやうがないのであつた。

が、或日のことであつた。ふと彼が例のカフェーの卓子に一人でちよこなんと腰かけて、先頃から三四杯の珈琲でだぶ〳〵になつた腹に、更に流し込むやうに厭な顔して珈琲を飲んでゐると、一人の若い見なれない女が這入つて來て、一杯の珈琲を命じて、それから給仕女の一人と頻りに何か話してゐる樣子が、どうも普通の客らしく見えない、これは屹度このカフェーに勤める爲に相談かた〴〵來たものに違ひないと察した。見ると、背の高い、色の白い、中々樣子のいゝ女である。この女、一寸面白いな、と彼はふと微かな好奇心を起したのである。

果してそれから三四日後に、その女が女給仕の一人となつて、そのカフェーに現れたのであつた。そして、それから又三四日後の或晩のことであつた、彼はこれで二度目にその女の持番に當つたのである。「君、今夜どこかで會はないか？」と彼は言つて見たのであつた。すると、思ひの外、「會ひませう、」と女はにつこり笑ひながら低い聲で言つた。「私、今日は十時に歸る番ですから、××橋の袂で、その時分に待つてゝ下さいね。」

彼はひどく驚いた。が、それと共に世の中がほんの少しばかり動いて見えて來た、或ひは、さういふよりも退屈を一寸忘れさせられた。彼は約束の時間に××橋の袂で女と會つたのである。が、別に言ふことも、何處へ行かうといふ考も、餘りはつきりとは浮んで來なかつた。女は「あなた、お家はどこ？」と聞くので、「家はどこそこだが、俺は今、斯う斯ういふところに一人で下宿住居をしてゐるんだよ、」と答へた。「さう、おや、明日でも遊びに行つてもいゝ？」と女が聞いた。「下宿へ來てくれちや困るよ。」「どうして……？」「ぢや、斯うしよう、明日の一時に新橋の停車場の待合室で待合はさう。」

別れて彼は下宿に歸つて來る途々、彼は少し變な、餘り愉快でない氣がして來た。と言つて、全く不愉快だから、明日の約束を取消してしまはうといふ氣にもなり兼ねるのである。だから、その翌日、約束の時間に停車場に行つて見た。そして女と會つて、そこから、郊外のとある料理屋に出かけて、二人で飯を食つたのである。「私はあなたの御身分を知つて居ります、奥さんがおありになることも。しかし、私は決して無理な、困らせるやうな事は言はないつもりで居ります、私の家は元より貧乏ですが、今は兄一人妹一人の身分で、兄は薄給ながら銀行に勤めて居ます、そして私は今兄の家に居るのです。私は出戻りです、夫に死に別れたのです。……」と女は言ふのである。要するに、彼女は一切の迷惑を彼に掛けない、そして唯戀人として附合つてほしいと言ふのである。彼は女の性質の甘さと善良さとに驚かされた、が、それは又この世のつまらなさの裏書きとも見えるのであつた。

そして、彼は妙に物事が大儀で、又、それに對して臆病な氣持になつた。だから彼はその時は、さういふ料理屋の普通の習慣であるやうに、二人で別室に這入るやうなことには及ばないで、彼女と別れたのであつた。そのうちに彼は病氣になつて、十日ばかり寢てしまつたのである。

さて、彼の友達にやはり小說家で、やはり自分の家に尻が落着かないで、どうも家では仕事が出來ない、出來ないと口癖のやうに言つてゐる男があつた。

――『止せよ、止せよ、もう分つたよ、その話は。』とその時第一の男が何故か躍鬼になつて。遮つて言つた。

『まあ、つゞけろよ。』と第二の男が面白さうに勸めた。――

まあ、二人とも似たやうな男だから、別に說明しないが、だから、彼も亦同じやうに夕方になると、そのカフェーに出て來るんだ。そこで二人は落合ふ、つまり言ひ換へると、二人はそこで落合つて、互ひの無聊を消し會ふ無言の約束

のやうな狀態になつてゐた。そして、驚くべきことには、二人はもう四五年もそんなことをつゞけてゐたのである。ところで、その第二の方の小說家は、第一の方よりは、考へ方なり狀態なりは殆ど同じだつたが、少し消極的の方だつたんだね。丁度第一の男が新來の女給仕と出會ひをした時分に、彼も亦、これは新來ではなく、二三年前から見知つてゐた女なんだが、それがつい好きになつたんだ。そこで、第一の男が兩方を煽動して、それに、自分が隱れて會つてゐる女にも應援さしたものだから、この一組も大分接近して來たんだ。

「どうだい？」

「いや、どうも……。」

「君は事件をもう少し進行させるつもりはないのかい？」

「さしてもいゝね。」

「君がさうするなら、僕もさうするよ。」

「僕は、君が進行させるなら、僕もさしてもいゝよ。」

ところが、或日から、つまりそれは第一の男が病氣で、第二の男が旅行をしてゐた留守のうちのことだが、前者が隱れて會つた女といふのが、急にカフェーに出て來なくなつたんだ。出て來なくなると、實際は、いつか彼等が會つた時には、彼の方が多少逡巡した位だのに、急に彼が女を、まあ言はゞ、多少懷しく思ひ出したといふ次第だ。と言つて、そんなら探し出す方法はいくらでもあるし、又第二の男の女を煩はしたら、無論その女の家も知れるのであるから、どうにでもなるのだが、さてさう沱するといふことは少し大儀に感じられるのである。

「どうだい、一つ、」と第二の男が言ふには、「會ふことは二の次にして、帶でも買つて突然送つてやつたら……？」

「それも面白いね。が、今、一寸持合せの金がないね。」

「それには、君、」と第二の男が、「或新しい雜誌に小説を書いてやる氣はないか、君のも欲しがつてゐたから。そしたらそんな金位前貸しするよ。」

「いつ何日と約束することは少し困るが、一二ケ月以内といふ位の約束なら、してもいゝね。」

「それでもいゝよ。」

「ぢや、賴まう。」

そこで、第二の男から、その新しい雜誌社に電話をかけたのである。そして、いつ幾日に此方から雜誌社の方へ行くから、用意しておいてくれ、といふ約束にしたのであつた。ところが、そのいつ幾日といふ日に、彼は久しぶりで自分の家に歸つて、それからぼつ〳〵雜誌社へ出かけようかな、と思つてゐるところへ、どういふ話の間違ひだか、雜誌社の方から彼の家にやつて來て、彼の細君の前に金百圓置いて行つたのである。

「まあ、よかつたわね、」と彼の細君は久しぶりで愁眉を開いて言つた。何故と言つて、夫の彼は始終家にゐないところから彼女と女中とを家に殘しておいて、一週間も二週間も同じ東京の中の下宿屋に引こもつて、而もそんなに仕事の方の成績も上らず、從つて金錢上からも彼女に餘り晴れた思ひをさせない勝なのであつた。それが、何としたことか、今日は久しぶりで顏を見せたかと思ふと、そこへ雜誌社から金をとゞけて來たのである。「あなた、みんな置いて行かなくてもいゝわ。二十圓位お小遣に持つていらつしやいな。」……

その晩、彼はいつものカフェーで友達の小説家に會つた時、その日のしくじり話をして、「惡いことは出來ないね、徒勞といふのは全く斯ういふことかね、アハハハ、」と言ひながら、空虛のやうな笑ひ聲を立てた。すると友達の小説家

が、

「ところが、君、僕にも實はそれに似た話があるんだよ、」と言ふには、「此間、仕事をしに奈良の方へ行つてたらう、その時、歸りに京都に寄つて、あの女への土産に帶を一本買つて來たんだ。」

「何だい、だから、俺にも帶をやれなんてすゝめたんだな？」と第一の小說家がひやかした。

「まあ、言ふな、言ふな、」と第二が話しつゞけるには、「ところで、持つて歸つたは歸つたものゝ、女の自宅を知つてゐる譯ではなし、又よしそれは調べたところで、うつかりそんなものを送つて、女に亭主でもあつて騷動でも引起しては大變だと思ふので、さあ、それをどういふ風にしてやつたものか、と實際肝膽をくだいたよ。ところが、僕の癖で、特別に大きな荷物がない限り、家から停車場まで直近くだものだから、大抵一時預けに預けて、後で家から切符と引換へに車屋に取りにやるんだ。それから、僕はふと妙案を思ひついたといふのは、女にやる帶もその一時預けに預けて、つまり一枚の切符にしたら、それを女にカフェーでやつたつて、人の目にも付かないし、實際又人に物をやるといふことは、斯ういふ場合に限らず、そのやる瞬間が一番極りの惡いものだからね、實に妙案ぢやないか？……ところが、どうしたといふだらう、僕は生れてそんな馬鹿々々しい失敗をしたことはないつもりなんだが、家に歸つて、さて停車場に預けてある荷物を車屋に取りにやる時に、うつかりその切符も一緒に渡してしまつたんだ。そして、車屋の手で荷物が家にとゞいて、一つ一つ調べた時にはつと氣が付いて、全くあの位狼狽したことはないね、無論、その場に細君もゐたんだからね。そこで、僕は度胸を定めたよ。そして細君に向つて帶を土產に買つて來てやつたよ、と宣言すると、『まあ、お天氣が變らなければいゝが、』などと細君はひやかしながら、それでも女のことだから嬉しかつたと見えて、何よりも先にその箱を開いたね。そして、『まあ、いゝわね、』と叫んだが、直ぐ次に、『だけど、何ぼ何でも、折角ですけど、

これは私にはあまり派手過ぎますわ！』と言つたね。『さうかね、成る程ね、買ふ時にはそんな事にちつとも気が付かずに買つたが、成る程、少し派手過ぎるかね。ぢや、そのうち何處かに遣ひ物にでもしようか、惜しいけど……』どうだ、君。アハハハ……』

そこで二人は聲を合はして笑つた。

――『止せ、止せ！』とその時聞き手の第二の小説家が多少苦い顔をして言つた。『つまらない、そんな話止せよ。』

『面白いね、その第二の方は君か？　アハハハハ、』と聞手の第三の小説家は如何にも愉快さうに笑つた。『實に呆れた夫どもだね。實に君たちは小説家の風上に置けない男どもだね。……しかし、そんな事をうつかり書くと、やつつけられるよ、正に新游蕩文學だからね。』

『だから、僕は困つてゐるんだ。』と話手は眞面目に辯解するやうに言つた。『だから、僕はその主人公たちを小説家でない、何か外の職業の者にしようと思つて、色々考へて見るんだがね。結局、斯ういふ話は、この世智辛い世の中に、小説家の外には一寸あり得ない話だからね。』

『だから、止せと言ふんだ。』と第二の小説家が眞面目な顔をして言つた。『今時、そんな題材を書いたら、どんなに作者が眞面目な態度で書いたつて、唯題材の點だけで早呑込をされて、撲滅されるよ。』

『しかし、作者が眞面目な態度でさへ扱へばいゝだらう。僕たちはお互に小説家だよ。自分の少し位都合の悪いこと位、それが題材としてよければ遠慮なく書いていゝと思ふがな。どうしてこの題材がいけないんだ？』

『だつて、君、所謂ペーソスがないもの、そしてもつと、さう何といふかな、さうだ、所謂の心持がもつと露骨に出るやうなものでなければいけないんだよ。』

『ぢや、僕は小說なんて書くことを止すよ、』と話手は多少憤然とした形で言つた。

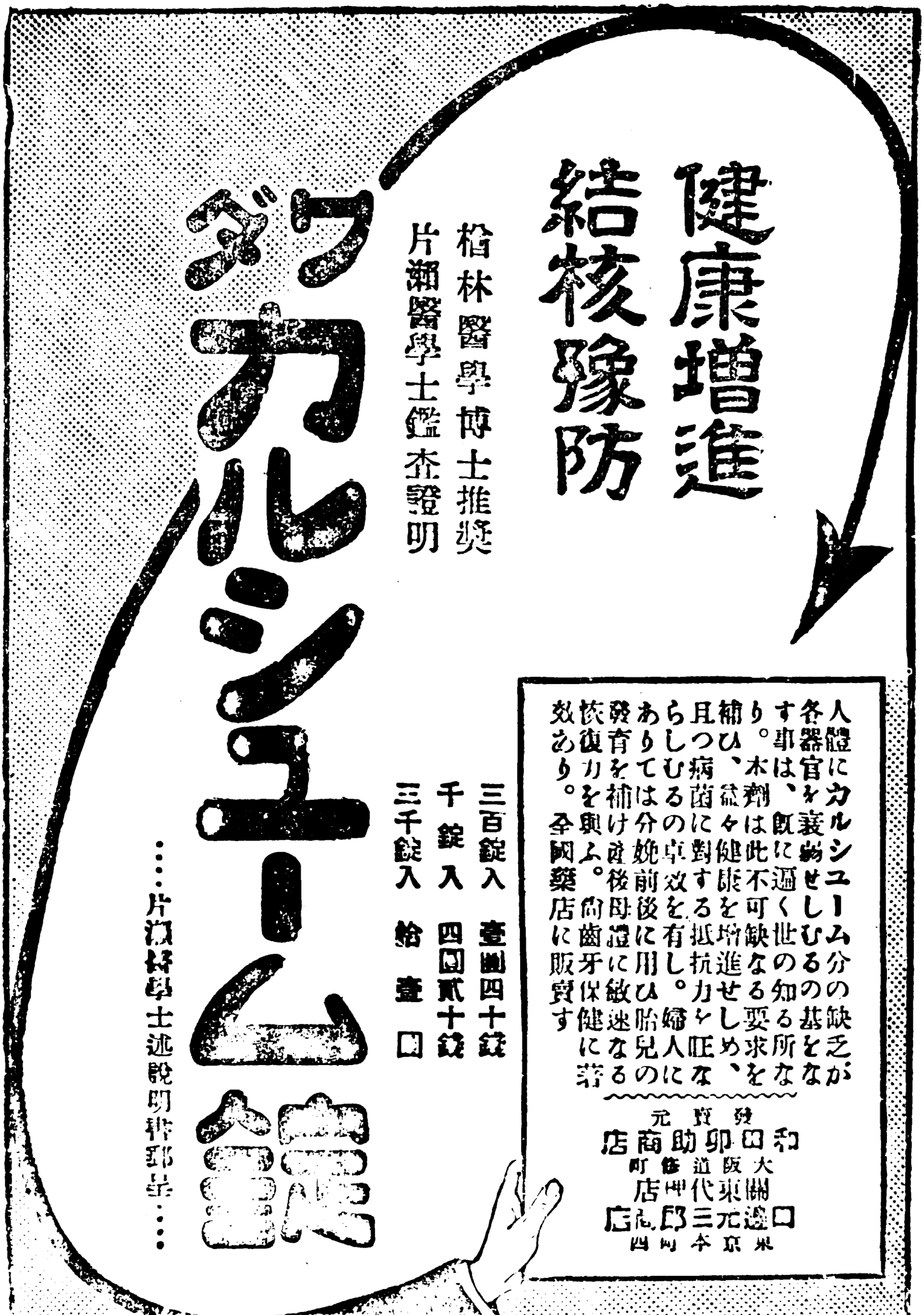
『さう怒るなよ、それは無論僕の意見ぢやないんだよ。……もつとも僕ももう斯う締切が迫つちや、苛々するばかりで書けさうにないから、今月は止すつもりだが。』

『僕ももう迚も時日がないから、纏まりさうにないから、編輯者には惡いけど、斷るつもりだ。それに僕のは餘程うまく書かないと、題材が題材だから、下手をすると感じが古くなりさうでね。』

『さういへば、』と話手は機嫌を直して言つた。『小倉旅行の話が、一番新味があるぢやないか？』

『もう止さう、止さう。そして編輯者へ電報を打たう！』

（十・八・二七）


健康増進
結核豫防
稻林醫學博士推奨
片瀬醫學士鑑査證明
ワダカルシユーム錠
三百錠入 壹圓四十錢
千錠入 四圓貳十錢
三千錠入 拾壹圓
人體にカルシユーム分の缺乏が各器官を衰弱せしむるの基をなす事は、既に遍く世の知る所なり。本劑は此不可缺なる要求を補ひ、益々健康を増進せしめ、且つ病菌に對する抵抗力を旺ならしむるの卓效を有し。婦人にありては分娩前後に用ひ胎兒の發育を補け産後母體に敏速なる恢復力を與ふ。尚齒牙保健に特效あり。全國藥店に販賣す
發賣元
大阪道修町
和田卯助商店
關東代理店
東京本町四
口邊元三郎商店
……片瀬醫學士述說明書郵呈……

中央公論大賣捌所

同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區本富士町	誠春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◎定價　金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし。即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

◎本號特價　金貳圓　郵稅金五錢

一　誌代郵稅は一切前金さす、前金切の場合は發送を止むべし
一　替振貯金口座は東京三十四番なり
一　郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一　代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一　集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一　中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割て金額御指定を乞ふ
一　受領證請求は必ず返信料を要す

大正十年八月三十一日印刷納本
大正十年九月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

東京市本郷區本郷三丁目六番地
發行所　中央公論社
電話　長小石川一四四
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11.90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.